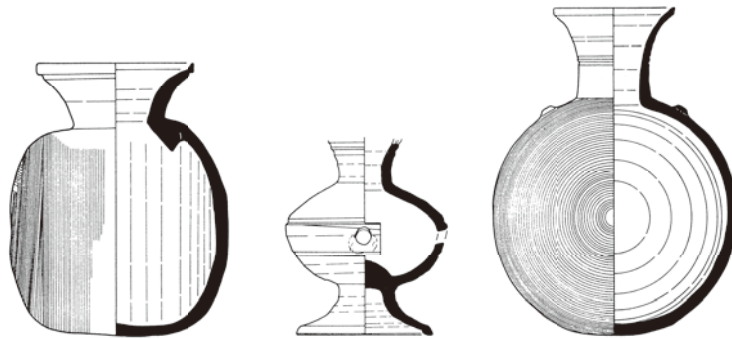


阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告 2

高木・北ノ脇遺跡
[第1分冊]



2002年11月

福島県教育委員会
財団法人 福島県文化振興事業団
国土交通省東北地方整備局福島工事事務所

阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告 2

たかぎ きたのわき
高木・北ノ脇遺跡



口絵1 平成11年度発掘調査区遠景（山王川原遺跡～高木遺跡）



口絵2 平成10年度豪雨水害（高木・百目木遺跡付近）



口絵 3 高木遺跡142号住居跡出土遺物



口絵 4 高木遺跡144号住居跡出土遺物

序 文

「阿武隈川平成の大改修」は、阿武隈川の河川整備率を向上させ、洪水に対して安全な地域をつくるために、総合的な河川改修と改良型災害復旧事業を短期間で集中的に実施する国土交通省の事業です。

この事業実施区間には、先人が残した数多くの文化遺産が埋蔵されており、本宮町内では山王川原遺跡・北ノ脇遺跡・高木遺跡・百目木遺跡・原遺跡の5遺跡が確認されています。これら貴重な文化財を後世に伝えることは、今日に生きる私たちの大きな責務であります。

福島県教育委員会では、東北地方整備局福島工事事務所と埋蔵文化財の保護について協議を重ね、平成10年度から現状保存が困難な遺跡について記録保存のための発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成11年度に行った高木・北ノ脇遺跡上層の調査の成果をまとめたものです。

今後、この報告書が県民の皆様にご理解を深めていただき、さらに地域の歴史を解明するための資料や、生涯学習等におきましても広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、この調査に御協力いただいた東北地方整備局福島工事事務所をはじめとして、本宮町教育委員会及び地元の方々に感謝の意を表しますとともに、調査を行った財団法人福島県文化振興事業団のご尽力に心から感謝いたします。

平成14年11月

福島県教育委員会

教育長 高 城 俊 春

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、昭和52年より福島県教育委員会の委託を受け、大規模開発に関連する埋蔵文化財の調査を行い、貴重な文化遺産の記録保存に努めてまいりました。阿武隈川平成の大改修工事にかかる本宮町の阿武隈川右岸築堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査につきましては、平成11年から平成12年度にかけ実施し、多くの成果をあげることができました。

阿武隈川右岸築堤関連遺跡の発掘調査報告書は、平成12年度に「Ⅱ期工区」に所在する山王川原遺跡について刊行を終え、平成14年度には「Ⅰ・Ⅲ期工区」に所在する高木・北ノ脇遺跡上下二層の文化層について『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告2・3』として、刊行することになっております。

本報告書はその第2冊目として、「Ⅰ・Ⅲ期工区」に所在する高木・北ノ脇遺跡上層の調査成果について『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告2』としてまとめたものです。高木・北ノ脇遺跡の上層では、古墳時代終末期を中心とする集落跡が発見され、大溝に区画された竪穴住居跡や柱列などの遺構群と土師器・須恵器を主体とする貴重な遺物も数多く出土し、当時の河川に隣接した集落のあり方や、人々の生活の実態を考える上で貴重な資料を得ることができました。本書を、県民の皆様が地域を知る上での参考資料として、また、歴史研究の資料としても活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行まで御指導・御協力いただきました、関係諸機関ならびに地元の方々に心より感謝申し上げます。

平成14年11月

財団法人 福島県文化振興事業団
理事長 佐藤 栄 佐 久

緒 言

1. 本書は、平成11年度に実施した阿武隈川右岸築堤Ⅰ・Ⅲ期工区関連遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書には、福島県安達郡本宮町に所在する、高木（たかぎ）遺跡9区・北ノ脇（きたのわき）遺跡4区の調査成果を収録した。
3. 本事業は、福島県教育委員会が建設省東北地方建設局福島工事事務所（当時）の委託により実施し、調査は財団法人福島県文化センター（当時）に委託した。
4. 財団法人福島県文化センターでは、事業第二部遺跡調査課の次の職員を配し調査を実施した。
文化財主査 松本 茂 文化財主査 安田 稔 文化財主査 高久田富裕
文化財主査 佐藤あかり 文化財副主査 成田 有策 文化財副主査 菅原 祥夫
文化財主事 小暮 伸之 文化財主事 大河原 勉 文化財主事 堀川 雄二
文化財主事 大波 紀子
ほかに、臨時的に文化財副主査木村直之の協力を得た。
5. 本書の執筆は、調査を担当した調査員が分担して行い、各原稿の文末に文責を明記した。
6. 本書掲載の自然科学的な分析・考察は、次の機関に協力いただいた。
植物遺存体（木材）の同定…パリノ・サーヴェイ株式会社
動物遺存体（骨）の鑑定……パリノ・サーヴェイ株式会社
石質鑑定……………パリノ・サーヴェイ株式会社
鉄滓の成分分析……………川鉄テクノロジー株式会社埋蔵文化財調査研究室
土器の胎土分析……………三辻 利一
金属製品の保存処理……………東北芸術工科大学
7. 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製使用した。
〔承認番号〕平14東複第139号
8. 引用・参考文献は、巻末に敬称を略して掲載した。
9. 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
10. 発掘調査から本書作成まで、次の機関からご指導・ご助言をいただいた。
本宮町教育委員会 本宮町町立歴史民俗資料館

用 例

1. 本文中、もしくは挿図中で使用した略号は次の通りである。

MM；本宮町 TK；高木遺跡 KW；北ノ脇遺跡 L；遺構外の堆積土
ℓ；遺構内の堆積土 SI；竪穴住居跡 SK；土坑 SG；焼土遺構
SS；集石遺構 SD；溝跡 SA；柱列跡 SX；特殊遺構 SH；遺物包含層
P；柱穴・ピット（小穴） T；トレンチ

2. 本書の遺構図の用例は次の通りである。

(1) 挿図中の北は、真北を示す。遺構図で北の表示の無いものは、図上が真北である。

(2) 水系レベルは海拔標高を表す。

(3) 縮尺率は、以下のように決定し、スケールの脇に表示した。

竪穴住居跡…………… 1/50・1/60

土坑…………… 1/25・1/50

焼土遺構…………… 1/25・1/50


集石遺構…………… 1/80

溝跡…………… 1/400

柱列跡…………… 1/100

特殊遺構…………… 1/40・1/50

(4) 遺構内の傾斜部は、で表示したが、相対的に緩傾斜の部分はで表示している。

また、後世の攪乱については、で表示している。

(5) 挿図中の網かけ等については、その用例を同図中に表示した。ただし、使用頻度の高い焼土化範囲について特に断っていない。網かけは下記の通りである。

焼土化範囲：

3. 遺物実測図の用例は次の通りである。

(1) 縮尺率は、以下のように決定し、スケールの脇に表示した。

土師器・須恵器・陶器…………… 1/3・1/4

土製品・石製品・金属製品…………… 1/2・1/3・1/4

(2) 土師器・須恵器 a. 土師器の黒色処理は実測図に網点で表示した。

b. 須恵器の断面は墨染とした。

c. 粘土紐の積み上げ痕は、断面に一点鎖線を入れて表示した。

d. その他の網かけ等については、その用例を同図中に表示した。

4. 文章中の遺物の点数は破片点数である。しかし、復元資料は1点として数えている。

5. 挿図中の遺物番号は、「写真」図版中の個々の遺物に付けた番号と一致する。

目 次

[第1分冊]

序 章

第1節 事業の概要と調査経過	1
第2節 位置と地形	5
第3節 歴史的環境	7
第4節 調査成果の概要	13

第1編 高木遺跡

第1章 調査の経過と方法	19		
第1節 調査経過	19		
第2節 調査と整理の方法	22		
第3節 微地形と基本土層	25		
第2章 遺構と遺物	29		
第1節 竪穴住居跡	29		
1号住居跡 (33)	2号住居跡 (41)	3号住居跡 (43)	4号住居跡 (45)
5号住居跡 (48)	6号住居跡 (50)	7号住居跡 (53)	8号住居跡 (56)
9号住居跡 (57)	10号住居跡 (61)	11号住居跡 (62)	12号住居跡 (67)
13号住居跡 (70)	14号住居跡 (72)	15号住居跡 (73)	16号住居跡 (76)
17A号住居跡 (85)	17B号住居跡 (88)	18号住居跡 (90)	19号住居跡 (95)
20号住居跡 (96)	22号住居跡 (98)	23号住居跡 (99)	24号住居跡 (103)
25号住居跡 (106)	26号住居跡 (109)	27号住居跡 (113)	28号住居跡 (119)
29号住居跡 (120)	30号住居跡 (121)	31号住居跡 (127)	32号住居跡 (131)
33号住居跡 (132)	34号住居跡 (134)	35号住居跡 (138)	36号住居跡 (139)
37号住居跡 (146)	38号住居跡 (148)	39号住居跡 (150)	40号住居跡 (152)
41号住居跡 (155)	42号住居跡 (156)	43号住居跡 (159)	44号住居跡 (164)
45号住居跡 (167)	46号住居跡 (169)	47号住居跡 (171)	48号住居跡 (173)
49号住居跡 (179)	50号住居跡 (184)	51号住居跡 (187)	52号住居跡 (189)
53号住居跡 (191)	54号住居跡 (193)	55号住居跡 (193)	56号住居跡 (194)
57号住居跡 (196)	58号住居跡 (196)	59号住居跡 (198)	60号住居跡 (200)
61号住居跡 (208)	62号住居跡 (209)	63号住居跡 (211)	64号住居跡 (213)

65号住居跡 (217)	66号住居跡 (219)	68号住居跡 (223)	69号住居跡 (225)
70号住居跡 (226)	71号住居跡 (228)	72号住居跡 (229)	73号住居跡 (230)
74号住居跡 (232)	75号住居跡 (233)	76号住居跡 (239)	77号住居跡 (241)
78号住居跡 (242)	79号住居跡 (244)	80号住居跡・4号特殊遺構 (245)	
81号住居跡 (252)	82号住居跡 (256)	83号住居跡 (261)	84号住居跡 (263)
85号住居跡 (266)	86号住居跡 (269)	87号住居跡 (271)	88号住居跡 (273)
89号住居跡 (279)	90号住居跡 (280)	91号住居跡 (282)	92号住居跡 (287)
93号住居跡 (289)	94号住居跡 (290)	95号住居跡 (295)	96号住居跡 (297)
97号住居跡 (299)	98号住居跡 (301)	99号住居跡 (307)	100号住居跡 (310)
101号住居跡 (314)	102号住居跡 (318)	103号住居跡 (322)	104号住居跡 (328)
105号住居跡 (331)	106号住居跡 (333)	107号住居跡 (335)	108号住居跡 (337)
109号住居跡 (343)	110号住居跡 (347)	111号住居跡 (350)	112号住居跡 (353)
113号住居跡 (356)	114号住居跡 (357)	118号住居跡 (359)	119号住居跡 (364)
120号住居跡 (365)	121号住居跡 (369)	122号住居跡 (372)	123号住居跡 (375)
124号住居跡 (378)	125号住居跡 (379)	126号住居跡 (381)	127号住居跡 (383)
128号住居跡 (384)	129号住居跡 (385)	130号住居跡 (388)	131号住居跡 (389)
134号住居跡 (391)	135号住居跡 (392)	136号住居跡 (393)	137号住居跡 (398)
138号住居跡 (400)	139号住居跡 (404)	140号住居跡 (405)	141号住居跡 (406)
142号住居跡 (407)	143号住居跡 (415)	144号住居跡 (425)	145号住居跡 (437)
146号住居跡 (439)	147号住居跡 (440)	148号住居跡 (443)	149号住居跡 (445)
151号住居跡 (446)	153号住居跡 (448)	154号住居跡 (450)	155号住居跡 (451)
156号住居跡 (453)	157号住居跡 (454)	158号住居跡 (458)	159号住居跡 (460)
160号住居跡 (464)	161号住居跡 (466)	162号住居跡 (469)	164号住居跡 (471)
165号住居跡 (473)	166号住居跡 (475)	167号住居跡 (476)	169号住居跡 (477)
170号住居跡 (480)	173号住居跡 (482)	174号住居跡 (484)	178号住居跡 (487)
180号住居跡 (489)	181号住居跡 (490)	185号住居跡 (492)	187号住居跡 (492)
191号住居跡 (493)	192号住居跡 (496)	193号住居跡 (497)	194号住居跡 (499)
195号住居跡 (500)	196号住居跡 (503)	199号住居跡 (505)	200号住居跡 (508)
214号住居跡 (509)			

第2節 土 坑511

1号土坑 (514)	2号土坑 (514)	3号土坑 (515)	4号土坑 (516)
5号土坑 (516)	6号土坑 (518)	7号土坑 (518)	8号土坑 (519)
9号土坑 (519)	12号土坑 (520)	13号土坑 (520)	14号土坑 (522)
15号土坑 (522)	16号土坑 (523)	17号土坑 (523)	18号土坑 (525)

19号土坑 (526)	21号土坑 (526)	22号土坑 (528)	23号土坑 (528)
24号土坑 (528)	26号土坑 (529)	29号土坑 (529)	30号土坑 (530)
31号土坑 (530)	32号土坑 (530)	35号土坑 (531)	41号土坑 (531)
43号土坑 (531)	54号土坑 (533)	55号土坑 (533)	56号土坑 (534)
57号土坑 (536)	58号土坑 (536)		
第3節 焼土遺構536			
1号焼土遺構 (537)	2号焼土遺構 (538)	3号焼土遺構 (539)	
第4節 溝 跡540			
1号溝跡・13号特殊遺構・6号特殊遺構 (540)	2号溝跡 (557)		
3号溝跡 (588)	4号溝跡 (589)	5号溝跡 (590)	
第5節 特殊遺構592			
1号特殊遺構 (592)	2号特殊遺構 (593)	3号特殊遺構 (595)	
5号特殊遺構 (596)	7号特殊遺構 (597)		
第6節 遺物包含層598			
第7節 遺構外出土遺物616			

挿図・表目次

序 章

[挿 図]

図1 阿武隈川右岸築堤事業位置図..... 1	図7 周辺の遺跡..... 8
図2 工事計画図..... 2	図8 上原遺跡出土縄文土器.....11
図3 周辺地形図..... 5	図9 陣場遺跡出土弥生土器.....11
図4 地形区分図..... 5	図10 天王壇古墳出土埴輪.....12
図5 阿武隈川右岸地区遺跡位置図..... 6	図11 高木・北ノ脇遺跡の新聞報道と説明会資料.....14
図6 阿武隈川・調査区横断模式図..... 7	図12 高木遺跡9区・北ノ脇遺跡4区全体図.....16

[表]

表1 周辺の遺跡一覧(1) 9	表2 周辺の遺跡一覧(2)10
-----------------------	-----------------------

第1編 高木遺跡

[挿 図]

図1 基本土層.....25	図15 3号住居跡.....43
図2 遺構掘り込み層序模式図.....27	図16 3号住居跡カマド.....44
図3 ラミナと遺構内堆積土の関係.....27	図17 3号住居跡出土遺物.....45
図4 高木遺跡9区遺構配置図.....28	図18 4号住居跡.....46
図5 竪穴住居跡の新旧関係(部分)29	図19 4号住居跡出土遺物.....47
図6 1号住居跡.....34	図20 5号住居跡.....49
図7 1号住居跡カマド.....35	図21 5号住居跡出土遺物.....50
図8 1号住居跡遺物出土状況.....36	図22 6号住居跡.....51
図9 1号住居跡出土遺物(1)37	図23 6号住居跡カマド.....52
図10 1号住居跡出土遺物(2)38	図24 6号住居跡出土遺物.....53
図11 1号住居跡出土遺物(3)39	図25 7号住居跡.....54
図12 1号住居跡出土遺物(4)40	図26 7号住居跡出土遺物.....55
図13 2号住居跡.....41	図27 8号住居跡.....56
図14 2号住居跡出土遺物.....42	図28 8号住居跡出土遺物.....57

図29	9号住居跡	58	図85	30号住居跡出土遺物(1)	124
図30	9号住居跡カマド	59	図86	30号住居跡出土遺物(2)	125
図31	9号住居跡出土遺物	60	図87	30号住居跡出土遺物(3)	126
図32	10号住居跡・出土遺物	61	図88	31号住居跡	128
図33	11号住居跡	63	図89	31号住居跡カマド	129
図34	11号住居跡遺物出土状況	64	図90	31号住居跡出土遺物(1)	130
図35	11号住居跡出土遺物(1)	66	図91	31号住居跡出土遺物(2)	131
図36	11号住居跡出土遺物(2)	67	図92	32号住居跡・出土遺物	132
図37	12号住居跡	68	図93	33号住居跡	133
図38	12号住居跡出土遺物	70	図94	34号住居跡	135
図39	13号住居跡	71	図95	34号住居跡遺物出土状況	136
図40	13号住居跡出土遺物	71	図96	34号住居跡出土遺物(1)	137
図41	14号住居跡	72	図97	34号住居跡出土遺物(2)	138
図42	14号住居跡出土遺物	73	図98	35号住居跡	139
図43	15号住居跡	74	図99	36号住居跡(1)	140
図44	15号住居跡出土遺物	75	図100	36号住居跡(2)	141
図45	16号住居跡	77	図101	36号住居跡出土遺物(1)	143
図46	16号住居跡遺物出土状況	78	図102	36号住居跡出土遺物(2)	144
図47	16号住居跡カマド	79	図103	36号住居跡出土遺物(3)	145
図48	16号住居跡出土遺物(1)	81	図104	37号住居跡	146
図49	16号住居跡出土遺物(2)	82	図105	37号住居跡カマド	147
図50	16号住居跡出土遺物(3)	83	図106	37号住居跡出土遺物	148
図51	16号住居跡出土遺物(4)	84	図107	38号住居跡	149
図52	17A号住居跡	86	図108	38号住居跡出土遺物	150
図53	17A号住居跡カマド	87	図109	39号住居跡・出土遺物	151
図54	17A号住居跡出土遺物	88	図110	40号住居跡	153
図55	17B号住居跡・出土遺物	89	図111	40号住居跡出土遺物(1)	154
図56	18号住居跡(1)	91	図112	40号住居跡出土遺物(2)	155
図57	18号住居跡(2)	92	図113	41号住居跡	155
図58	18号住居跡出土遺物	94	図114	41号住居跡出土遺物	156
図59	19号住居跡	95	図115	42号住居跡	157
図60	19号住居跡出土遺物	96	図116	42号住居跡カマド・出土遺物	158
図61	20号住居跡・出土遺物	97	図117	43号住居跡	159
図62	22号住居跡・出土遺物	98	図118	43号住居跡カマド	160
図63	23号住居跡	100	図119	43号住居跡出土遺物(1)	162
図64	23号住居跡カマド	101	図120	43号住居跡出土遺物(2)	163
図65	23号住居跡出土遺物(1)	102	図121	44号住居跡	165
図66	23号住居跡出土遺物(2)	103	図122	44号住居跡カマド	166
図67	24号住居跡	104	図123	44号住居跡出土遺物	167
図68	24号住居跡カマド	105	図124	45号住居跡・出土遺物	168
図69	24号住居跡出土遺物	106	図125	46号住居跡	169
図70	25号住居跡	107	図126	46号住居跡カマド	170
図71	25号住居跡出土遺物	108	図127	46号住居跡出土遺物	171
図72	26号住居跡	110	図128	47号住居跡	172
図73	26号住居跡カマド	111	図129	47号住居跡出土遺物	173
図74	26号住居跡出土遺物(1)	112	図130	48号住居跡	174
図75	26号住居跡出土遺物(2)	113	図131	48号住居跡カマド	175
図76	27号住居跡	114	図132	48号住居跡遺物出土状況	176
図77	27号住居跡カマド	115	図133	48号住居跡出土遺物(1)	177
図78	27号住居跡遺物出土状況	116	図134	48号住居跡出土遺物(2)	178
図79	27号住居跡出土遺物(1)	117	図135	49号住居跡	180
図80	27号住居跡出土遺物(2)	118	図136	49号住居跡遺物出土状況	181
図81	28号住居跡・出土遺物	119	図137	49号住居跡出土遺物(1)	182
図82	29号住居跡	120	図138	49号住居跡出土遺物(2)	183
図83	30号住居跡	122	図139	49号住居跡出土遺物(3)	184
図84	30号住居跡遺物出土状況	123	図140	50号住居跡	185

図141	50号住居跡出土遺物	186	図197	78号住居跡	243
図142	51号住居跡・出土遺物	188	図198	78号住居跡出土遺物	244
図143	52号住居跡	189	図199	79号住居跡	244
図144	52号住居跡カマド	190	図200	79号住居跡出土遺物	245
図145	52号住居跡出土遺物	190	図201	80号住居跡・4号特殊遺構	246
図146	53号住居跡	191	図202	80号住居跡カマドB遺物出土状況	247
図147	53号住居跡カマド	192	図203	80号住居跡出土遺物(1)	248
図148	54号住居跡・出土遺物	193	図204	80号住居跡出土遺物(2)	249
図149	55号住居跡	194	図205	80号住居跡出土遺物(3)	250
図150	55号住居跡出土遺物	194	図206	80号住居跡出土遺物(4)	251
図151	56号住居跡・出土遺物	195	図207	81号住居跡	253
図152	57号住居跡	196	図208	81号住居跡カマド	254
図153	58号住居跡	197	図209	81号住居跡出土遺物	255
図154	58号住居跡出土遺物	198	図210	82号住居跡	256
図155	59号住居跡	199	図211	82号住居跡遺物出土状況	257
図156	59号住居跡出土遺物	200	図212	82号住居跡出土遺物(1)	259
図157	60号住居跡	201	図213	82号住居跡出土遺物(2)	260
図158	60号住居跡カマド	203	図214	82号住居跡出土遺物(3)	261
図159	60号住居跡遺物出土状況	204	図215	83号住居跡	262
図160	60号住居跡出土遺物(1)	205	図216	83号住居跡出土遺物	263
図161	60号住居跡出土遺物(2)	206	図217	84号住居跡	264
図162	60号住居跡出土遺物(3)	207	図218	84号住居跡カマド遺物出土状況	265
図163	61号住居跡	208	図219	84号住居跡出土遺物	266
図164	61号住居跡出土遺物	209	図220	85号住居跡	267
図165	62号住居跡	210	図221	85号住居跡出土遺物	269
図166	62号住居跡出土遺物	211	図222	86号住居跡	270
図167	63号住居跡	212	図223	87号住居跡	271
図168	63号住居跡出土遺物	212	図224	87号住居跡カマド	272
図169	64号住居跡	214	図225	87号住居跡出土遺物	272
図170	64号住居跡カマド	215	図226	88号住居跡	274
図171	64号住居跡出土遺物(1)	215	図227	88号住居跡遺物出土状況	275
図172	64号住居跡出土遺物(2)	216	図228	88号住居跡出土遺物(1)	276
図173	65号住居跡	217	図229	88号住居跡出土遺物(2)	277
図174	65号住居跡出土遺物	218	図230	88号住居跡出土遺物(3)	278
図175	66号住居跡	219	図231	89号住居跡・出土遺物	280
図176	66号住居跡遺物出土状況	221	図232	90号住居跡	281
図177	66号住居跡出土遺物	222	図233	90号住居跡出土遺物	282
図178	68号住居跡	223	図234	91号住居跡	283
図179	68号住居跡カマド・出土遺物	224	図235	91号住居跡カマド遺物出土状況	284
図180	69号住居跡	226	図236	91号住居跡出土遺物(1)	285
図181	70号住居跡・出土遺物	227	図237	91号住居跡出土遺物(2)	286
図182	71号住居跡	228	図238	92号住居跡	287
図183	71号住居跡出土遺物	229	図239	92号住居跡出土遺物	288
図184	72号住居跡・出土遺物	230	図240	93号住居跡	289
図185	73号住居跡	231	図241	93号住居跡出土遺物	289
図186	73号住居跡出土遺物	232	図242	94号住居跡	291
図187	74号住居跡	233	図243	94号住居跡遺物出土状況	292
図188	75号住居跡	234	図244	94号住居跡出土遺物(1)	293
図189	75号住居跡カマド	235	図245	94号住居跡出土遺物(2)	294
図190	75号住居跡遺物出土状況	236	図246	94号住居跡出土遺物(3)	295
図191	75号住居跡出土遺物(1)	237	図247	95号住居跡	296
図192	75号住居跡出土遺物(2)	238	図248	95号住居跡出土遺物	296
図193	76号住居跡	240	図249	96号住居跡	298
図194	76号住居跡出土遺物	240	図250	96号住居跡出土遺物	299
図195	77号住居跡	241	図251	97号住居跡	300
図196	77号住居跡出土遺物	242	図252	97号住居跡出土遺物	301

図253	98号住居跡	302	図309	118号住居跡出土遺物(2)	363
図254	98号住居跡カマド	303	図310	119号住居跡・出土遺物	365
図255	98号住居跡カマド遺物出土状況	304	図311	120号住居跡	366
図256	98号住居跡出土遺物(1)	305	図312	120号住居跡出土遺物	368
図257	98号住居跡出土遺物(2)	306	図313	121号住居跡	370
図258	98号住居跡出土遺物(3)	307	図314	121号住居跡出土遺物	371
図259	99号住居跡	308	図315	122号住居跡	373
図260	99号住居跡カマド・出土遺物	309	図316	122号住居跡出土遺物	374
図261	100号住居跡	310	図317	123号住居跡	375
図262	100号住居跡カマド	311	図318	123号住居跡出土遺物	377
図263	100号住居跡出土遺物(1)	312	図319	124号住居跡	378
図264	100号住居跡出土遺物(2)	313	図320	124号住居跡出土遺物	379
図265	101号住居跡	315	図321	125号住居跡	380
図266	101号住居跡カマド	316	図322	125号住居跡カマド・出土遺物	381
図267	101号住居跡出土遺物(1)	317	図323	126号住居跡	381
図268	101号住居跡出土遺物(2)	318	図324	126号住居跡出土遺物	382
図269	102号住居跡	319	図325	127号住居跡・出土遺物	383
図270	102号住居跡カマド・遺物出土状況	320	図326	128号住居跡	384
図271	102号住居跡出土遺物	321	図327	129号住居跡	386
図272	103号住居跡	323	図328	129号住居跡出土遺物	387
図273	103号住居跡遺物出土状況	324	図329	130号住居跡	388
図274	103号住居跡カマド	325	図330	130号住居跡出土遺物	388
図275	103号住居跡出土遺物(1)	327	図331	131号住居跡・出土遺物	390
図276	103号住居跡出土遺物(2)	328	図332	134号住居跡	391
図277	104号住居跡	329	図333	134号住居跡出土遺物	392
図278	104号住居跡出土遺物	330	図334	135号住居跡	393
図279	105号住居跡	331	図335	136号住居跡	394
図280	105号住居跡出土遺物	332	図336	136号住居跡出土遺物(1)	396
図281	106号住居跡	333	図337	136号住居跡出土遺物(2)	397
図282	106号住居跡カマド	334	図338	136号住居跡出土遺物(3)	398
図283	106号住居跡出土遺物	335	図339	137号住居跡	399
図284	107号住居跡	336	図340	137号住居跡出土遺物	400
図285	107号住居跡出土遺物	337	図341	138号住居跡	401
図286	108号住居跡	338	図342	138号住居跡カマド	402
図287	108号住居跡カマド	339	図343	138号住居跡出土遺物	403
図288	108号住居跡出土遺物(1)	341	図344	139号住居跡	404
図289	108号住居跡出土遺物(2)	342	図345	139号住居跡出土遺物	405
図290	108号住居跡出土遺物(3)	343	図346	140号住居跡	405
図291	109号住居跡	344	図347	140号住居跡出土遺物	406
図292	109号住居跡カマド	345	図348	141号住居跡	406
図293	109号住居跡出土遺物	346	図349	142号住居跡	408
図294	110号住居跡	347	図350	142号住居跡カマド	409
図295	110号住居跡カマド	348	図351	142号住居跡遺物出土状況	410
図296	110号住居跡出土遺物	349	図352	142号住居跡出土遺物(1)	411
図297	111号住居跡	351	図353	142号住居跡出土遺物(2)	413
図298	111号住居跡カマド・出土遺物	352	図354	142号住居跡出土遺物(3)	414
図299	112号住居跡	353	図355	142号住居跡出土遺物(4)	415
図300	112号住居跡カマド・遺物出土状況	354	図356	143号住居跡	416
図301	112号住居跡出土遺物	355	図357	143号住居跡カマド	417
図302	113号住居跡	356	図358	143号住居跡遺物出土状況	418
図303	113号住居跡出土遺物	357	図359	143号住居跡出土遺物(1)	420
図304	114号住居跡	358	図360	143号住居跡出土遺物(2)	421
図305	114号住居跡出土遺物	359	図361	143号住居跡出土遺物(3)	422
図306	118号住居跡	360	図362	143号住居跡出土遺物(4)	423
図307	118号住居跡遺物出土状況	361	図363	143号住居跡出土遺物(5)	424
図308	118号住居跡出土遺物(1)	362	図364	143号住居跡出土遺物(6)	425

図365	144号住居跡	426	図421	173号住居跡・出土遺物	483
図366	144号住居跡カマド	427	図422	174号住居跡	485
図367	144号住居跡床面遺物出土状況	428	図423	174号住居跡出土遺物(1)	486
図368	144号住居跡ℓ3遺物出土状況	429	図424	174号住居跡出土遺物(2)	487
図369	144号住居跡出土遺物(1)	430	図425	178号住居跡	488
図370	144号住居跡出土遺物(2)	432	図426	180号住居跡	489
図371	144号住居跡出土遺物(3)	433	図427	180号住居跡出土遺物	490
図372	144号住居跡出土遺物(4)	434	図428	181号住居跡	491
図373	144号住居跡出土遺物(5)	435	図429	185号住居跡	492
図374	144号住居跡出土遺物(6)	436	図430	187号住居跡	493
図375	145号住居跡・出土遺物	438	図431	191号住居跡	494
図376	145号住居跡カマド	439	図432	191号住居跡カマド・出土遺物	495
図377	146号住居跡	440	図433	192号住居跡	496
図378	147号住居跡	441	図434	193号住居跡	497
図379	147号住居跡出土遺物	442	図435	193号住居跡出土遺物	498
図380	148号住居跡	444	図436	194号住居跡	499
図381	148号住居跡出土遺物	445	図437	194号住居跡出土遺物	500
図382	149号住居跡	446	図438	195号住居跡	501
図383	151号住居跡	447	図439	195号住居跡出土遺物(1)	502
図384	151号住居跡出土遺物	447	図440	195号住居跡出土遺物(2)	503
図385	151号住居跡カマド	448	図441	196号住居跡	504
図386	153号住居跡	449	図442	196号住居跡出土遺物	504
図387	153号住居跡出土遺物	450	図443	199号住居跡	506
図388	154号住居跡	450	図444	199号住居跡出土遺物(1)	507
図389	154号住居跡出土遺物	451	図445	199号住居跡出土遺物(2)	508
図390	155号住居跡・出土遺物	452	図446	200号住居跡・出土遺物	509
図391	156号住居跡	453	図447	214号住居跡	510
図392	156号住居跡出土遺物	454	図448	214号住居跡出土遺物	511
図393	157号住居跡	455	図449	土坑分布図	513
図394	157号住居跡カマド	456	図450	1～8号土坑	517
図395	157号住居跡出土遺物(1)	457	図451	9・12～18号土坑	521
図396	157号住居跡出土遺物(2)	458	図452	2・5・8・12・14・17号土坑出土遺物	524
図397	158号住居跡・出土遺物	459	図453	19・21～24・26・29号土坑	527
図398	159号住居跡	461	図454	30～32・35・41・43・54号土坑	532
図399	159号住居跡カマド	462	図455	55～58号土坑	534
図400	159号住居跡出土遺物	463	図456	18・22・35・43・57号土坑出土遺物	535
図401	160号住居跡	465	図457	1・2号焼土遺構	537
図402	160号住居跡出土遺物	466	図458	1号焼土遺構出土遺物	538
図403	161号住居跡	467	図459	3号焼土遺構	539
図404	161号住居跡カマド	468	図460	3号焼土遺構出土遺物	539
図405	161号住居跡出土遺物	469	図461	1・5号溝跡	541
図406	162号住居跡	470	図462	1号溝跡・6号特殊遺構遺物出土状況	542
図407	162号住居跡出土遺物	470	図463	13号集石遺構	543
図408	164号住居跡	471	図464	6号特殊遺構	543
図409	164号住居跡出土遺物	472	図465	1号溝跡出土遺物(1)	545
図410	165号住居跡	473	図466	1号溝跡出土遺物(2)	546
図411	165号住居跡出土遺物(1)	474	図467	1号溝跡出土遺物(3)	548
図412	165号住居跡出土遺物(2)	475	図468	1号溝跡出土遺物(4)	549
図413	166号住居跡	476	図469	1号溝跡出土遺物(5)	550
図414	166号住居跡出土遺物	476	図470	1号溝跡出土遺物(6)	551
図415	167号住居跡・出土遺物	477	図471	1号溝跡出土遺物(7)	553
図416	169号住居跡	478	図472	1号溝跡出土遺物(8)	554
図417	169号住居跡カマド	479	図473	6号特殊遺構出土遺物(1)	555
図418	169号住居跡出土遺物	480	図474	6号特殊遺構出土遺物(2)	556
図419	170号住居跡	481	図475	2号溝跡	558
図420	170号住居跡出土遺物	482	図476	2号溝跡A・E・F群遺物出土状況	560

図477	2号溝跡B～I群遺物出土状況	561	図513	1号遺物包含層出土遺物(3)	604
図478	2号溝跡出土遺物(1)	563	図514	1号遺物包含層出土遺物(4)	605
図479	2号溝跡出土遺物(2)	564	図515	1号遺物包含層出土遺物(5)	606
図480	2号溝跡出土遺物(3)	566	図516	1号遺物包含層出土遺物(6)	607
図481	2号溝跡出土遺物(4)	567	図517	1号遺物包含層出土遺物(7)	609
図482	2号溝跡出土遺物(5)	568	図518	1号遺物包含層出土遺物(8)	610
図483	2号溝跡出土遺物(6)	569	図519	1号遺物包含層出土遺物(9)	611
図484	2号溝跡出土遺物(7)	570	図520	1号遺物包含層出土遺物(10)	612
図485	2号溝跡出土遺物(8)	571	図521	1号遺物包含層出土遺物(11)	613
図486	2号溝跡出土遺物(9)	572	図522	1号遺物包含層出土遺物(12)	614
図487	2号溝跡出土遺物(10)	573	図523	1号遺物包含層出土遺物(13)	615
図488	2号溝跡出土遺物(11)	574	図524	遺構外出土遺物(1)	617
図489	2号溝跡出土遺物(12)	575	図525	遺構外出土遺物(2)	618
図490	2号溝跡出土遺物(13)	577	図526	遺構外出土遺物(3)	620
図491	2号溝跡出土遺物(14)	578	図527	遺構外出土遺物(4)	621
図492	2号溝跡出土遺物(15)	579	図528	遺構外出土遺物(5)	622
図493	2号溝跡出土遺物(16)	581	図529	遺構外出土遺物(6)	623
図494	2号溝跡出土遺物(17)	582	図530	遺構外出土遺物(7)	624
図495	2号溝跡出土遺物(18)	583	図531	遺構外出土遺物(8)	625
図496	2号溝跡出土遺物(19)	585	図532	遺構外出土遺物(9)	626
図497	2号溝跡出土遺物(20)	586	図533	遺構外出土遺物(10)	627
図498	2号溝跡出土遺物(21)	587	図534	遺構外出土遺物(11)	628
図499	2号溝跡出土遺物(22)	588	図535	遺構外出土遺物(12)	629
図500	3号溝跡	589	図536	遺構外出土遺物(13)	630
図501	4号溝跡・出土遺物	590	図537	遺構外出土遺物(14)	631
図502	5号溝跡出土遺物	591	図538	遺構外出土遺物(15)	632
図503	1号特殊遺構	593	図539	遺構外出土遺物(16)	635
図504	2号特殊遺構	594	図540	遺構外出土遺物(17)	636
図505	2号特殊遺構出土遺物	595	図541	遺構外出土遺物(18)	637
図506	3号特殊遺構	596	図542	遺構外出土遺物(19)	638
図507	5号特殊遺構	597	図543	遺構外出土遺物(20)	639
図508	7号特殊遺構・出土遺物	598	図544	遺構外出土遺物(21)	641
図509	1号遺物包含層	600	図545	遺構外出土遺物(22)	642
図510	1号遺物包含層遺物出土状況	601	図546	遺構外出土遺物(23)	643
図511	1号遺物包含層出土遺物(1)	602	図547	遺構外出土遺物(24)	644
図512	1号遺物包含層出土遺物(2)	603	図548	遺構外出土遺物(25)	645

[表]

表1	住居跡一覧(1)	30	表18	土器観察表(13)	658
表2	住居跡一覧(2)	31	表19	土器観察表(14)	659
表3	住居跡一覧(3)	32	表20	土器観察表(15)	660
表4	住居跡一覧(4)	33	表21	土器観察表(16)	661
表5	土坑一覧	512	表22	土器観察表(17)	662
表6	土器観察表(1)	646	表23	土器観察表(18)	663
表7	土器観察表(2)	647	表24	土器観察表(19)	664
表8	土器観察表(3)	648	表25	土器観察表(20)	665
表9	土器観察表(4)	649	表26	土器観察表(21)	666
表10	土器観察表(5)	650	表27	土器観察表(22)	667
表11	土器観察表(6)	651	表28	土器観察表(23)	668
表12	土器観察表(7)	652	表29	土器観察表(24)	669
表13	土器観察表(8)	653	表30	土器観察表(25)	670
表14	土器観察表(9)	654	表31	土・石・金属製品の遺物観察表(1)	671
表15	土器観察表(10)	655	表32	土・石・金属製品の遺物観察表(2)	672
表16	土器観察表(11)	656	表33	土・石・金属製品の遺物観察表(3)	673
表17	土器観察表(12)	657			

序 章

第1節 事業の概要と調査経過

1 本宮町阿武隈川右岸築堤事業の概要

阿武隈川は福島県中通り地方を南から北へと貫流する一級河川であり、福島県にとっては欠くことのできない水資源である。しかし河川整備率の低さから、たびたび洪水による被害を引き起こしており、近年の昭和61年8月5日洪水、平成10年8月末洪水などでも広範な地域で甚大な浸水被害に見舞われている。それらにより水害に対する安全な地域づくりは被災地住民の強い願望の一つとなっている。本宮町阿武隈川右岸築堤事業はそのことを受けた建設省直轄の治水事業であり、「一級河川阿武隈川上流改修本宮右岸築堤事業」として昭和61年度からの用地買収を端緒に事業がすすめられている。築堤工事については、本宮町内の右岸全長2.8kmについて4つの工事区に区分し、阿武隈川下流より築堤するという計画で、平成8年度までに第Ⅰ期工事区の100mほどについて施工した。

平成10年の洪水で右岸地区は17.4haが浸水した。このため建設省は阿武隈川について総合的な河川改修と改良型災害普及事業を短期的に集中的に行う「阿武隈川平成の大改修」を計画し、本宮町についても強い要請である右岸築堤事業をその一環として早期完成を目指すこととなったのである。

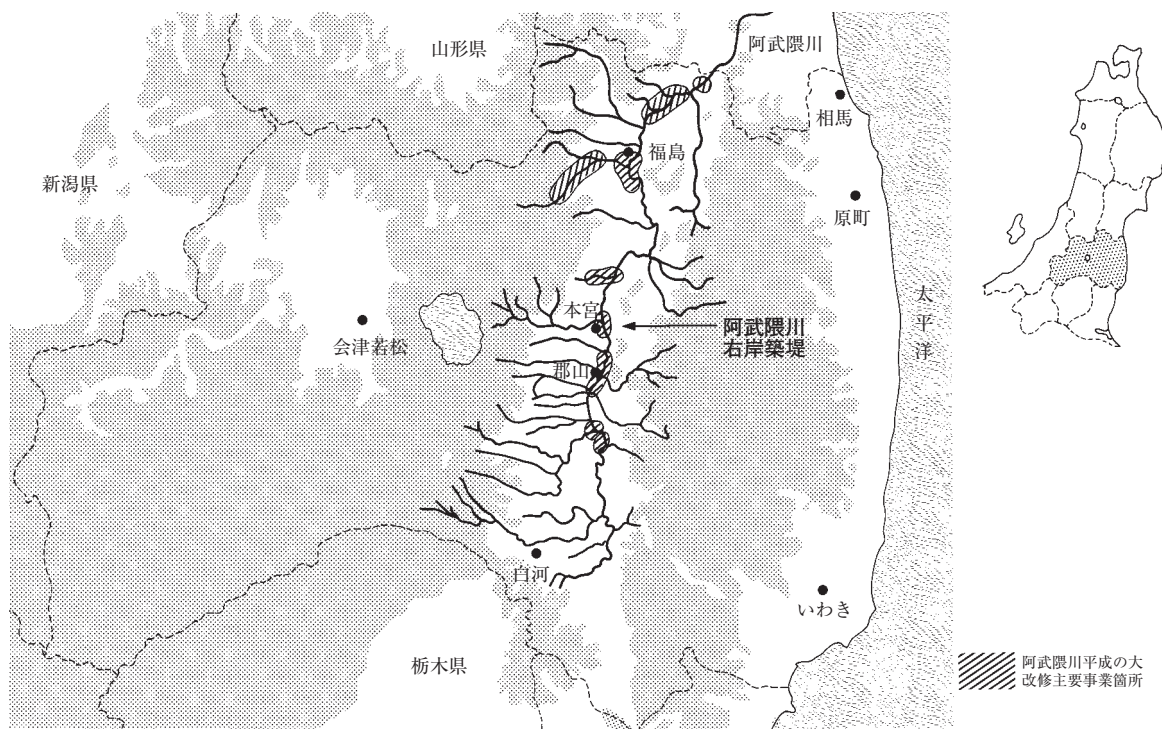


図1 阿武隈川右岸築堤事業位置図

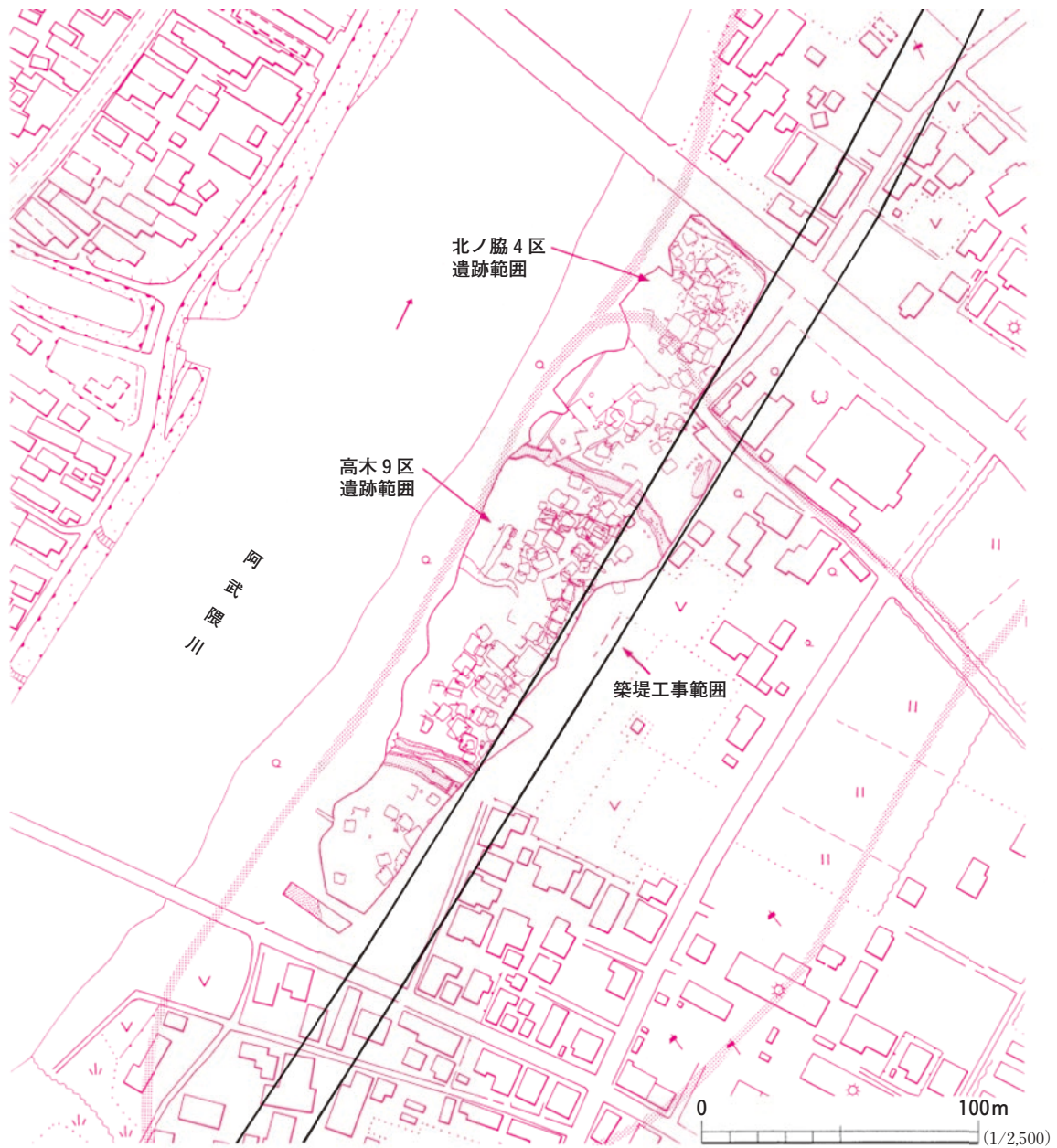


図2 工事計画図

なお、「阿武隈川平成の大改修」は、南は須賀川市から北は梁川町にかけての要所に、築堤・堤防強化・護岸強化などを施工するもので、全体事業費約800億円を見込み、平成12年度末概成を目標とするものである。

2 平成11年度調査に至る経過

本宮町阿武隈川右岸築堤事業における埋蔵文化財の取り扱い、昭和61・62年度に渡って実施された遺跡詳細分布調査（試掘調査）に始まっている。この調査は本宮町教育委員会が保存協議の資料を得るために、国の補助を受けてなされたもので、限られた調査範囲ではあったが原遺跡・渡場

遺跡（百目木遺跡）・高木遺跡・北ノ脇遺跡・山王川原遺跡の5遺跡についてトレンチ調査を実施している。その結果、右岸地区の自然堤防上のほとんどが遺跡範囲であり、その総面積は約104,000㎡、文化層が複数存在することが確認されている。

本宮町教育委員会は分布調査の結果を基に63年度から築堤事業の施工に先立ち順次発掘調査を実施していくのであるが、当初は予算の関係もあり散発的で小規模の調査に止まっていた。そこで平成3年度には建設省・福島県教育庁文化課・本宮町の三者協議が持たれ、第Ⅰ期工区の堤防敷部分の調査を先行することで調整がなされ、平成4年度から平成10年度の発掘調査はその計画に基づいて継続実施されている。ただ、広範な調査面積なため今後も多くの調査期間が必要であり、そのことが緊急性を要する事業としては懸念される部分であった。

そのような推移の中で「阿武隈川平成の大改修」計画が持ち上がり、緊急的な埋蔵文化財への対応が必要となった。そこで東北地方建設局福島工事事務所と福島県教育委員会の間で、平成10年12月に最初の埋蔵文化財の取扱い協議が行われた。この協議での工事事務所の提示内容は急を要するもので、迅速かつ多様な対応が想定されることから、以後継続協議によって対応策を検討する認識を得た。

この事業が災害復旧にかかる重要で緊急性の高いものであることを重視し、問題が生じた場合はその都度協議することとして調整を計り、福島県と本宮町の教育委員会が特別の調査体制を敷いて調査にあたることとした。この大規模で緊急を要する発掘調査事業は一般の市町村が単独で実施するには適当とみなされないものと判断され、福島県教育委員会はその一部を支援し、そして調査を進める上では建設省と文化財保護側の間で、調整・協議の場として「阿武隈川右岸築堤連絡調整会」が設置された。

3 平成11年度の調査経過

平成11年度県調査分の高木・北ノ脇遺跡は、築堤工事計画によりⅠ・Ⅲ期工区に区分された昭代橋と安達橋間の調査面積21,000㎡相当である。今回の調査範囲については、これまで実施された発掘調査の経過から、高木遺跡は9区・北ノ脇遺跡は4区と呼び、他と区分することとした。高木・北ノ脇遺跡は昭和61・62年度に試掘調査、平成2年度以降は発掘調査が実施され、縄文時代や古墳時代から平安時代にかけての遺構や遺物が確認されている。

本年度の発掘調査は、平成11年4月13日から開始した。表土は耕作土で、厚さは40cmほどである。調査当初はすべての表土を置ききれだけの排土置き場が確保できず、一部を調査区東端に積み上げることでとりあえず対応した。排土についてはその後、南に約300m離れた百目木遺跡の調査終了部分に仮置きしていたが、さらに事業者側で適宜工区外に排出する事となり、排土処理の問題は解決された。調査開始時には調査区内の家屋等は既に撤去され、一部に道路や電柱・水位観測所は残るものの、調査の着手に大きな問題はなかった。

4月21日からは、作業員による遺構の検出・精査作業を開始した。作業当初は部分的に堆積して

いる黒褐色土の上面では、住居跡などの多くの遺構を確認することができるものの、遺跡の大半に堆積する褐色砂では、遺構の検出はきわめて難しかった。後日、これらの土はすべて、複雑に重なり合った遺構の堆積土であることが判明したが、遺構検出にかかる手間は、調査全期間を通じて軽減されることなく推移した。

5月以降は検出遺構の精査は順調に進むものの、検出される遺構数があまりに多く、調査効率の進展が図られなかった。一方で調査が進展するに従って、予測をはるかに越えた多数の遺構や遺物が出土し、高木・北ノ脇遺跡が7世紀を中心に営まれた大集落であることが確認された。集落内を区画する大きな溝や後背湿地の渚線付近から多量の遺物が出土したのもこの時期である。さらに、60cmほど下層には縄文時代の遺構・遺物が高密度に存在することが判明し、当初の対応では難しくなり、調査計画の見直しが必要となった。これについては関係機関で協議を積み重ね、8月には下層の調査を実施すること、調査範囲を掘削が及ぶ範囲に限ること、堤防自体は暫定的なもので、盛土も100cmほどであることから、現状保存という観点から築堤部分は原則として発掘調査範囲から除外することが合意された。このため、調査面積が変更され、最終的に調査を要する面積は、高木遺跡上・下層（古墳～平安時代・縄文時代）が20,850㎡、北ノ脇遺跡上・下層が2,600㎡の合計23,450㎡となる。

6・7月にはまとまった雨が2度ほどあり、遺跡の1m下まで水位が上がったりしたものの、調査期間中に大きな災害を被ることもなく、調査は進展していった。8月には山王川原遺跡の調査に目途が立ったため、調査員の一部が高木・北ノ脇遺跡の調査に加わった。9月には山王川原遺跡の調査がほぼ終了し、すべての調査員が高木・北ノ脇遺跡の調査に合流した。9月以降は高木遺跡上層（古墳～平安時代）の調査終了に伴い、逐次下層（縄文時代）の調査に着手していった。また、北ノ脇遺跡の調査も開始し、10～12月は検出遺構の精査に専念した。年末には高木遺跡上層と下層の一部、北ノ脇遺跡の上層の調査が終了した。

通常年明けの1～3月に関しては、当該年度の発掘調査による整理期間であり、また降雪や凍結により調査精度が確保できないことから、本来は調査を行わないこととしている。しかし、本事業については、河川改修であることの緊急性を踏まえ、開発者の工事工程に協力するため、この期間中も特例として発掘調査を実施することとした。基本的には北ノ脇遺跡の下層（1,300㎡）の調査を終了させることとし、高木遺跡の残りの部分（5,400㎡）については平成12年度にあらためて発掘調査を実施することが合意された。北ノ脇遺跡下層の調査は1月中にほぼ終了し、当初予定していた期間・予算に余力があったため、平成12年度調査部分についても一部調査を進め、3月17日に平成11年度の調査をすべて終了した。この間工事工程との兼ね合いから、調査終了部について逐次引渡を行った。

また、発掘成果の公開の要望も多く寄せられ、一般市民や小学生を対象に、遺跡説明会・見学会を実施している。平成11年11月6日の現地説明会では約400名の見学者が訪れ、この他に16件、約600人ほどの方々に遺跡を公開することができた。

第2節 位置と地形

高木・北ノ脇遺跡は、福島県安達郡本宮町大字高木字高木・北ノ脇に所在している。本宮町は福島県中通り地方のほぼ中央部、北緯37度31分、東経140度23分に位置する。

周囲は郡山市、大玉村、白沢村と接しており、面積は39.5 km²で福島県の中では中規模の町である。気候は温帯夏高温気候区に区分されており、年間平均気温は11.4度、年間平均降水量は1,028.5mmである。

遺跡はJR東北本線本宮駅から本宮市街地を抜け、北東方向に約1 km離れた地点にある。

遺跡の2 km程西には国道4号が南北方向に走っている。

遺跡が所在する本宮町周辺は、奥羽山脈と阿武隈高地に挟まれ

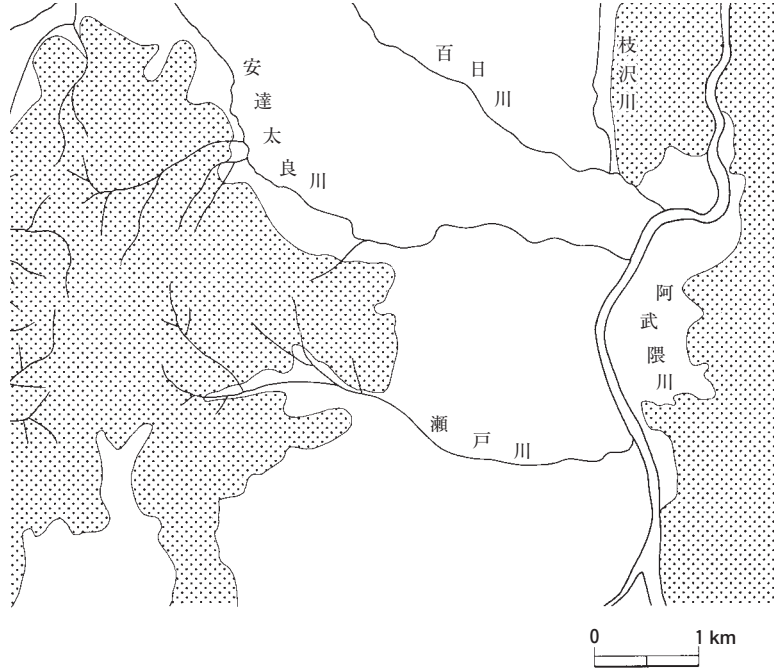


図3 周辺地形図

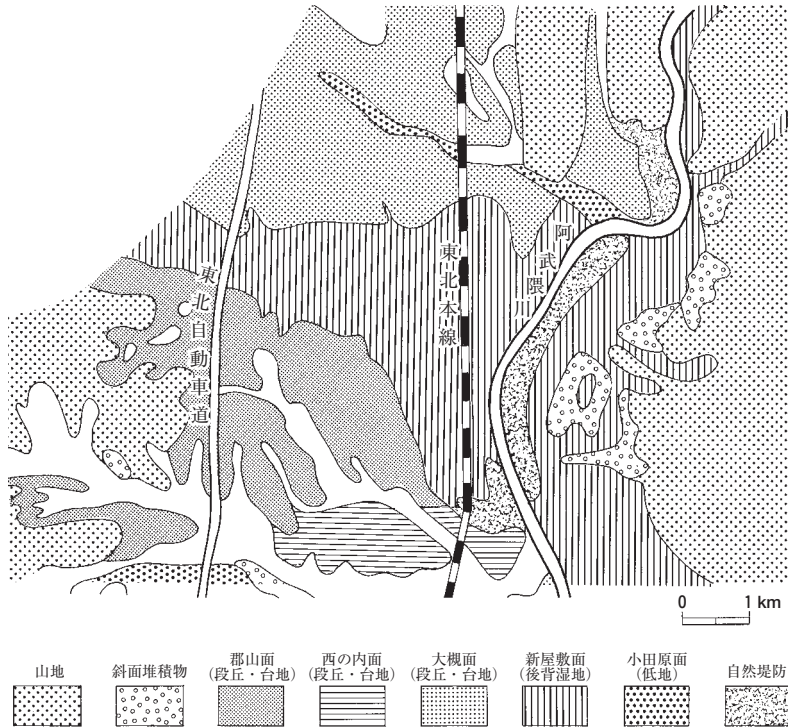


図4 地形区分図

た郡山盆地の北端にあたっており、町の東端を阿武隈川が北流する。それに西方の奥羽山脈から東流する瀬戸川、安達太良川、百日川が合流している（図3）。そのため、河川の浸食や堆積作用によって形成された台地、扇状地、谷底平野がよく見られる。

阿武隈川の右岸には、こうした河川の運搬作用によって形成された自然堤防がよく発達している（図4）。

この自然堤防は、阿武隈川に平行して2.1kmに渡って続いており、高木・北ノ脇遺跡もこの一

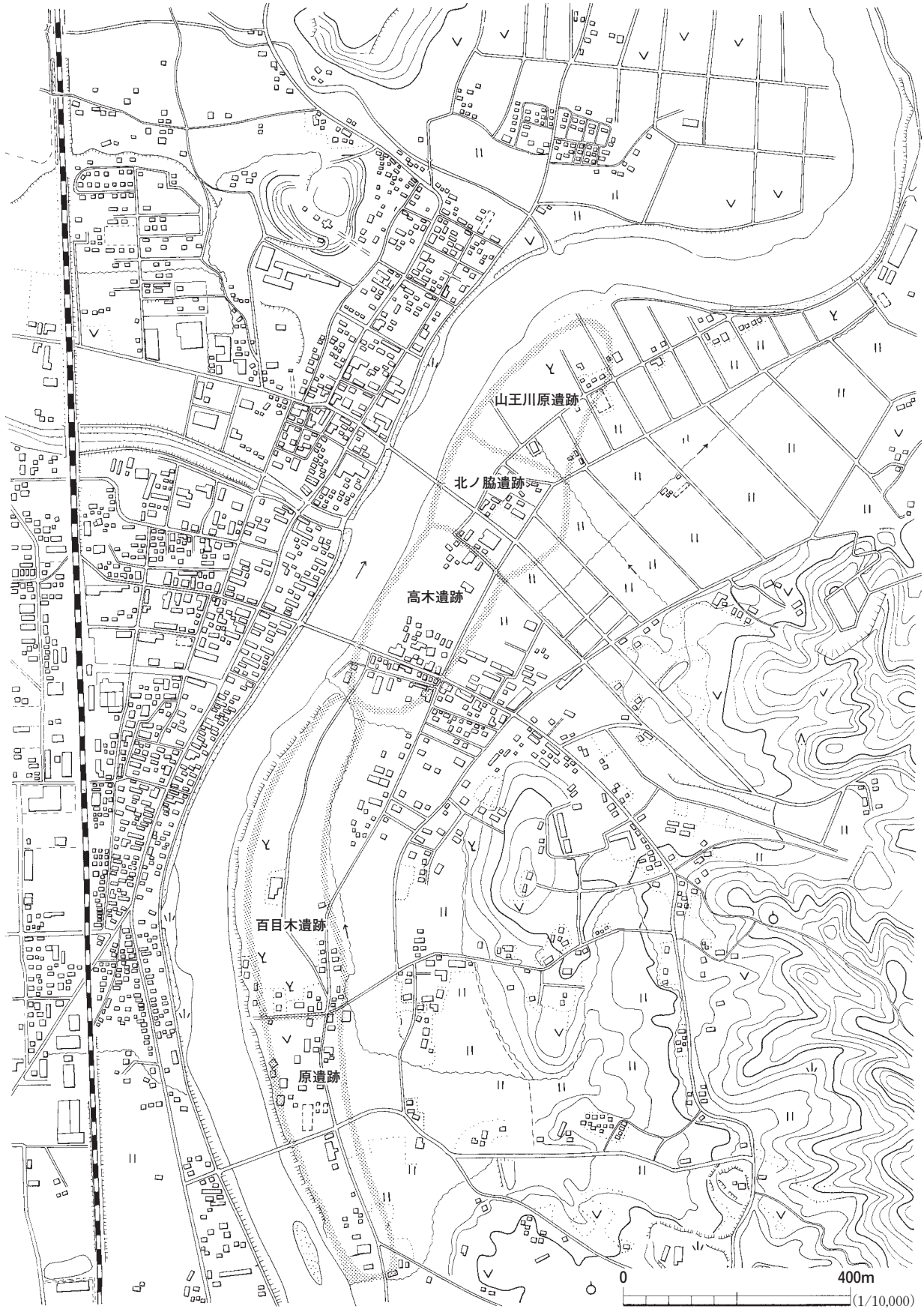


図5 阿武隈川右岸地区遺跡位置図

角を占めている。

実は、この自然堤防上全体が一続きの遺跡であることが判明している。現在の小字名で区切って、北から、山王川原遺跡、北ノ脇遺跡、高木遺跡、百目木遺跡、原遺跡と登録されている（図5）。

したがって、この遺跡名の違いは、便宜的なものである。

ただ、微細にみると、高木遺跡と百目木遺跡の境には河道が走っており、これを境に南北に2分することが可能である。

また、浅い沢地形が行く筋も自然堤防上を横断している。

対象の2遺跡は、この自然堤防の中央からやや北寄りの位置に所在している。調査前の現状は、宅地と畑に利用されていた。阿武隈川との比高差は、模式図（図6）に示したように、7～8mを測る。（菅原）

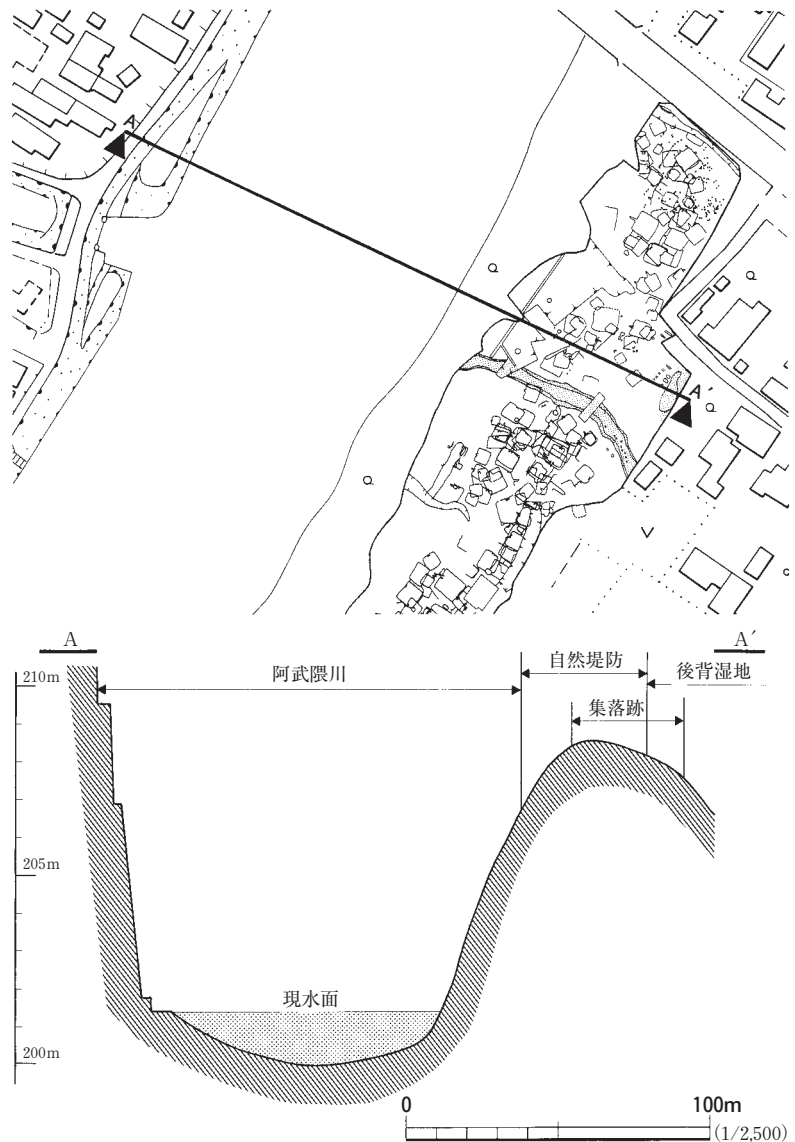


図6 阿武隈川・調査区横断模式図

第3節 歴史的環境

高木・北ノ脇遺跡の所在する本宮町では、『本宮町史』編纂や『福島県遺跡地図』作成のための表面調査等により遺跡台帳が整備され、遺跡の分布状況が把握されている。以下、当地域の歴史的な環境について、遺跡分布を中心に概要を述べたい。

『福島県遺跡地図』には本宮町内で99か所の遺跡が登録されている。その内訳は、縄文時代の散布地2か所、弥生時代の散布地3か所、古墳時代の散布地1か所、古墳8か所、奈良・平安時代の散布地14か所、中世の城館跡17か所、中世の石造物33か所、中・近世の石造物1か所、奈良・平安時代から近世の塚5か所、時期不明の窯跡1か所、その他には時代が2時期以上に渡る複合遺跡である。時期別及び種別では、古墳を含めた古墳・奈良・平安時代の散布地の分布が多く、安達太良

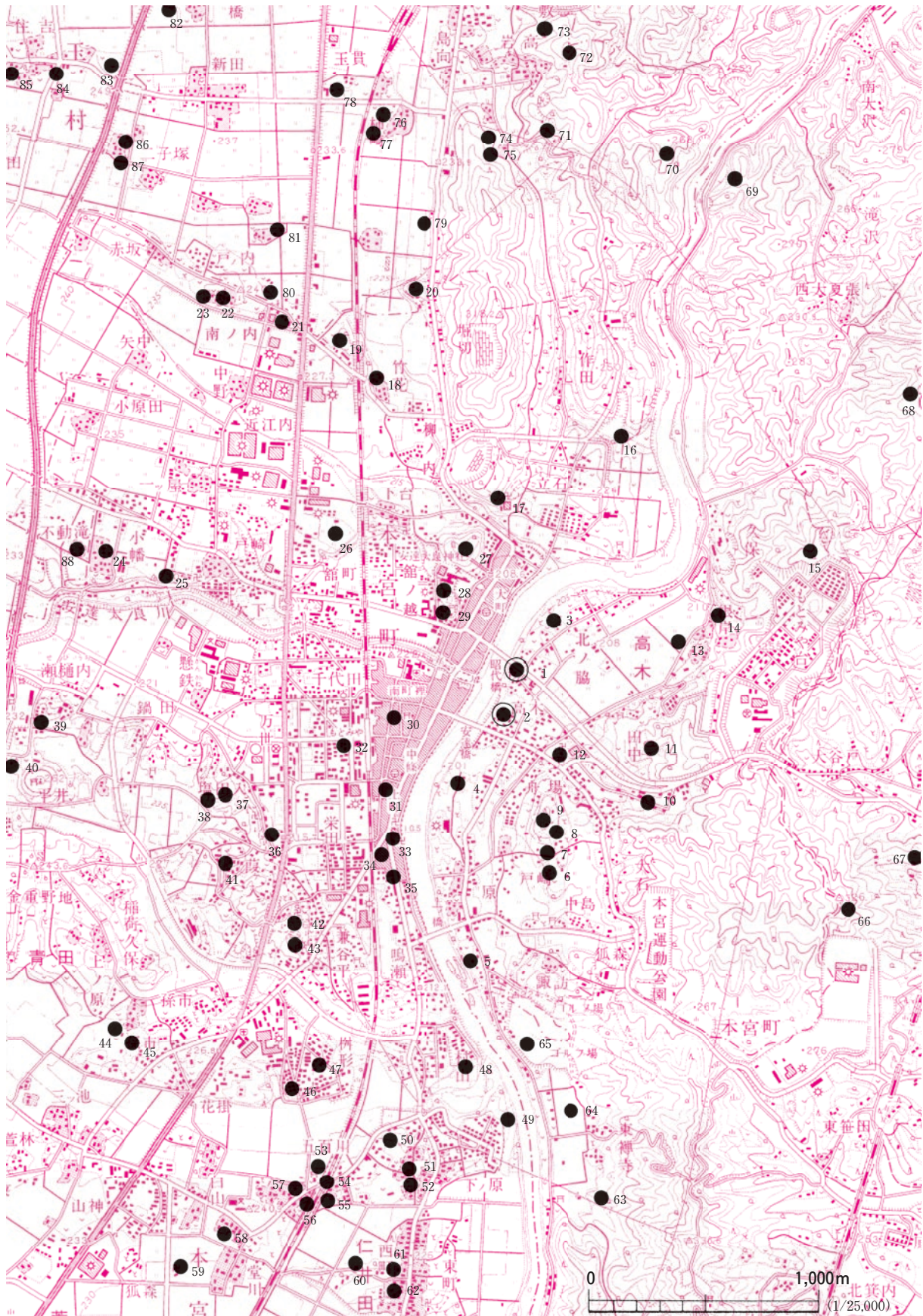


図7 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧(1)

No.	遺跡名	所在地	遺跡の概要
1	北ノ脇遺跡	本宮町大字高木字北ノ脇	縄文～近世の散布地・集落跡・本報告
2	高木遺跡	高木字高木・舟場	縄文～近世の散布地・集落跡・本報告
3	山王川原遺跡	高木字山王川原	縄文～近世の散布地・集落跡
4	百目木遺跡	高木字百目木・長瀬	縄文～近世の散布地・集落跡
5	原遺跡	高木字原	古墳～近世の散布地
6	戸崎供養塔	高木字戸崎	中世の石造物
7	辻向供養塔群	高木字辻向	中世の石造物
8	大学遺跡	高木字大学・辻向	弥生時代の散布地
9	大学館跡	高木字大学・辻向	中世の城館跡
10	上人壇遺跡	高木字滝ノ入	中世・近世の塚
11	高木田中館跡	高木字縦・田中	中世の城館跡
12	高木寺供養塔	高木字舟場	中世の石造物
13	長畑古墳群	高木字長畑	古墳
14	根岸古墳群	高木字久保	古墳
15	問答山古墳群	高木字問答	古墳
16	大榎遺跡	字大榎	奈良・平安時代の散布地
17	石雲寺供養塔	字坊屋敷	中世の石造物
18	名郷館跡	字竹ノ花	中世の城館跡
19	庚申壇古墳	字竹ノ花	古墳
20	掘切遺跡	字掘切	中世・近世の塚
21	地藏堂遺跡	字地藏堂	古墳
22	天王壇古墳	字南ノ内	古墳
23	南ノ内遺跡	字南ノ内	古墳時代の散布地
24	小幡供養塔	字小幡	中世の石造物
25	小幡遺跡	字小幡	奈良・平安時代の散布地
26	中台遺跡	字中台	弥生・奈良・平安時代の散布地
27	菅森館跡	字館ノ越	中世の城館跡
28	愛宕館跡	字館ノ越	中世の城館跡
29	愛宕山古墳	字館ノ越	古墳
30	南町裡供養塔	字南町裡	中世・近世の石造物
31	九縄供養塔	字上町下	中世の石造物
32	本宮田中館跡	字万世・千代田	中世の城館跡
33	太郎丸観音堂供養塔群	字太郎丸	中世の石造物
34	太郎丸供養塔	字太郎丸	中世の石造物
35	太郎丸掃部館跡	字太郎丸	中世の城館跡
36	栄田遺跡	字栄田	縄文・奈良・平安時代の散布地
37	塩田遺跡	字塩田入	弥生・平安時代の散布地
38	塩田館跡	字塩田入	中世の城館跡
39	天ヶ遺跡	字天ヶ	弥生時代の散布地
40	平井供養塔	字平井	中世の石造物
41	葎ヶ入供養塔	字葎ヶ入	中世の石造物
42	日輪寺供養塔	字山田	中世の石造物
43	山田遺跡	字山田	奈良・安時代の散布地
44	東万風遺跡	字東万風	奈良・平安時代の散布地
45	孫市遺跡	大字青田字孫市	奈良・平安時代の散布地
46	榊形遺跡	仁井田字榊形	中世・近世の塚
47	瀬戸川館遺跡	仁井田字榊形	中世の城館跡
49	吹上遺跡	仁井田字村山	近世の塚
49	下ノ原遺跡	仁井田字下ノ原	奈良・平安時代の散布地
50	申供養塔群C	仁井田字申	中世の石造物

表2 周辺の遺跡一覧(2)

No.	遺跡名	所在地	遺跡の概要
51	申 供 養 塔 群 B	本宮町大字仁井田字申	中世の石造物
52	申 供 養 塔 群 A	仁井田字申	中世の石造物
53	小 坂 供 養 塔 群	仁井田字一本	中世の石造物
54	八 雲 神 社 供 養 塔	仁井田字一本	中世の石造物
55	五 百 川 供 養 塔 C	仁井田字五百川	中世の石造物
56	五 百 川 供 養 塔 A	仁井田字五百川	中世の石造物
57	五 百 川 供 養 塔 B	仁井田字五百川	中世の石造物
58	白 山 供 養 塔 群	荒井字白山	中世の石造物
59	荒川観音堂供養塔群	荒井字五百川	中世の石造物
60	下 四 合 田 供 養 塔	仁井田字下四合田	中世の石造物
61	西 町 供 養 塔 A	仁井田字西町	中世の石造物
62	西 町 供 養 塔 B	仁井田字西町	中世の石造物
63	東 禪 寺 赤 木 遺 跡	白沢村大字糠沢字赤木・東禪寺	古墳～平安時代の散布地
64	東 禪 寺 古 墳	糠沢字赤木・東禪寺	古墳
65	東 禪 寺 館 跡	糠沢字赤木	中世の城館跡
66	経 塚 山 経 塚	糠沢字礼堂	塚
67	礼 堂 館 跡	糠沢字礼堂	中世の城館跡
68	和 田 十 三 仏 古 墳 群	和田字大夏張	古墳
69	古 館 跡	和田字滝ノ沢・古館	中世・近世の城館跡
70	大 川 端 遺 跡	大玉村大字大山字大川端	縄文～古墳時代の散布地
71	前 山 小 作 田 山	大山字山王	縄文・弥生時代の散布地
72	傾 城 壇 古 墳	大山字愛宕	古墳
73	堂ヶ久保古墳群	大山字鬼松	古墳
74	鍛 冶 内 遺 跡	大山字鍛冶内	中世の城館跡
75	向 山 古 墳 群	大山字向山	古墳
76	昆 沙 門 天 王 遺 跡	大山字柿崎	弥生・古墳時代の散布地
77	勘 解 由 館 跡	大山字諸別	中世の城館跡
78	玉 貫 遺 跡	大山字玉貫	弥生・古墳時代の散布地
79	諸 田 向 古 墳	大山字諸田向	古墳
80	金 山 古 墳	大山字宮ノ下	古墳
81	弓 矢 地 館 跡	大山字弓矢地	中世の城館跡
82	下 高 野 遺 跡	大山字下高野	弥生・古墳時代の散布地
83	上 高 野 遺 跡	大山字上高野	古墳・奈良時代の散布地
84	住 吉 B 遺 跡	大山字住吉	古墳～平安時代の散布地
85	住 吉 遺 跡	大山字住吉	古墳・奈良時代の散布地
86	二 子 塚 遺 跡	大山字小次郎内	古墳時代の散布地
87	二 子 塚 古 墳	大山字小次郎内	古墳
88	袋 内 遺 跡	玉井字袋内	奈良時代の散布地

山南麓から伸びる丘陵地帯や五百川・阿武隈川・安達太良川流域の丘陵・台地・自然堤防上に立地している。また、中世の石造物が仁井田・荒井地区を中心に数多く分布している。

旧石器時代：本宮町では旧石器時代の遺跡は現在まで確認されていないが、近隣の郡山市熱海町中ノ沢遺跡でスクレイパーやチョッピングツールが出土し、大玉村中皿久保遺跡からは彫刻刀形石器・石刃などが出土している。なお、青田原台地や阿武隈川右岸の高木大学付近等では洪積台地が広がっており、当地域にも旧石器時代の遺跡が残されている可能性は高い。

縄文時代：縄文時代になると、五百川・阿武隈川・安達太良川の流域に人々が生活を営んだ痕跡

がみられるようになる。山王川原遺跡（図7-3）では、前期の大木1~2式の土器片が少量出土しており、高木遺跡（同図2；本書第1編）からは早期中葉の田戸下層式と思われる資料が出土している。中期になると上原遺跡、恵畑遺跡、寺下遺跡等と遺跡の数も増加してくる。中でも、五百川北岸の河岸段丘上にある上原遺跡は、花積下層式・大木2b式の土器片や石組炉・複式炉をもつ住居跡が検出され、本宮町を代表する遺跡となっている（図8）。晩期の資料

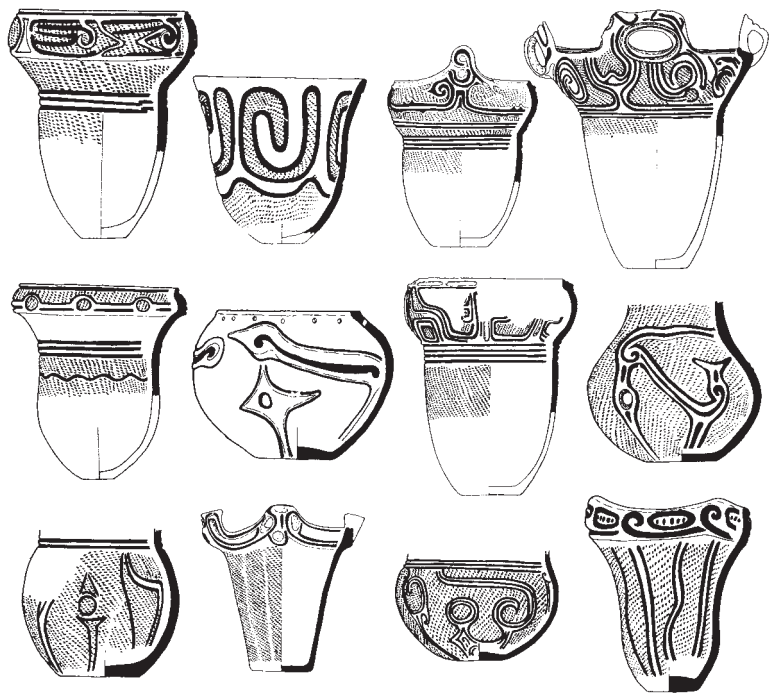


図8 上原遺跡出土縄文土器

はほとんどないが、北ノ脇遺跡（図7-1；本書第2編）からは大洞B-C式に比定される注口土器が1点出土している。

弥生時代：弥生時代の遺跡としては、天ヶ遺跡（図7-39）、陣場遺跡が知られている。両遺跡は、弥生中期に位置づけられており、天ヶ遺跡では桜井式の土器が、陣場遺跡では土坑墓群とともに陣場式の土器が出土している（図9）。また、高木遺跡の3次調査では弥生時代初頭の資料が出土している。塩田遺跡（図7-37）、中台遺跡（同図26）、関畑遺跡、新介遺跡などからも、弥生時代中期の土器片が出土しており、低地を臨む段丘・台地上に当時の遺構が存在すると推定できる。



図9 陣場遺跡出土弥生土器

古墳時代：古墳時代になると、当地域においても数多くの古墳が築造されるようになり、地方豪族の出現をうかがい知ることができる。特に、本宮町北端から大玉村にかけて広がる南ノ内丘陵地帯に所在する天王壇古墳（図7-22）、二子塚古墳（同図87）を含む「七ツ坦古墳群」が著名である。天王壇古墳は5世紀後半に築造された直径38mの造り出しつき円墳で、動物埴輪

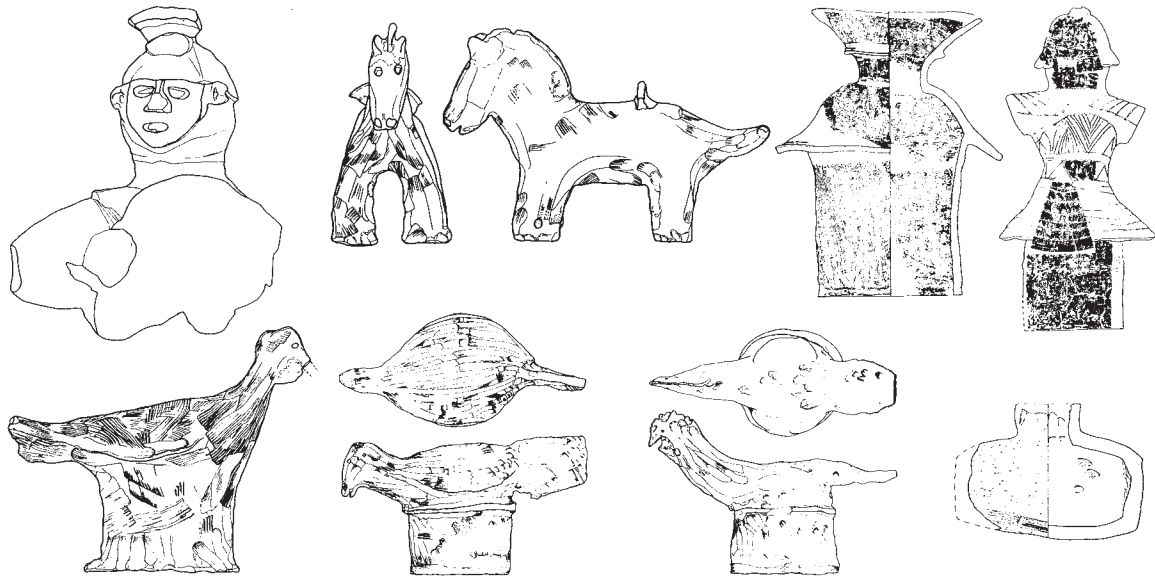


図10 天王壇古墳出土埴輪

・巫女埴輪・甲冑形埴輪・円筒埴輪等数多くの埴輪が出土しており、東北地方の古墳時代中期文化を解明する上で注目されている（図10）。他に、庚申壇古墳（図7-19）、愛后山古墳（同図29）、傾城壇古墳（同図72）、金山古墳（同図80）などがあり、根岸古墳群（同図14）からは圭頭大刀や多くの装身具が出土している。また、このころになると、本遺跡を含め、阿武隈川右岸の自然堤防上に継続的に集落が営まれるようになる。

奈良・平安時代：奈良・平安時代になると遺跡の数は飛躍的に増大する。『延喜式』によると、「安達郡」は、延喜6（906）年に安積郡から「安達、入野、佐戸」の3郷を分離して建郡したと記されている。その「安達郷」の中心が現在の本宮町・大玉村と考えられており、この時期の遺跡数の増加はこの記述と期を一にしている。本遺跡の北々西約4.6kmの二本松市杉田には、安達郡の郡衙の擬定地として知られる郡山台遺跡が所在する。郡山台遺跡では、安達郡建郡以前に遡る建物跡群も確認されており、奈良時代の段階から官衙的な機能を有していた可能性が指摘されている。また、郡山台遺跡より出土した九葉素弁蓮華文軒丸瓦に近似した素弁蓮華文軒丸瓦が本宮町内の小幡遺跡（図7-25）で表採されており、律令時代における当地との関係も推測される。この時期の代表的な遺跡としては、他に関畑遺跡、中台遺跡、長者ヶ峰遺跡、高木遺跡、金重谷地遺跡などがあげられ、集落遺跡の性格も、律令制的な色彩の強いもの、山間の尾根部に小規模で営まれるもの、多数の住居跡から構成されるもの、といった具合に多様化してくる。

中世：中世の遺跡としては館跡が17か所確認され、瀬戸川館跡（図7-47）、塩田館跡（同図38）、高木田中館跡（同図11）などが調査されている。なお、瀬戸川館跡は瀬戸川氏（国分氏）の居館であったが、天正13年（1585）に佐竹氏などの連合軍と伊達政宗軍とが戦った時に伊達成実が布陣したことで知られる。館跡の他に、供養塔などの石造物が仁井田、荒井地区を中心に多数確認されている。本宮町周辺には安達太良神社をはじめとして、大山の神原田神社、長屋の長屋神社、稲沢の

春日神社，五百川の帳付神社などの古い神社が多く，信仰を集めてきた。また，この地域には阿弥陀三尊供養塔が多く見られることから浄土真宗が広まっていたと考えられる。

近世：天正13年11月16日，会津街道の人取橋付近で芦名・佐竹連合軍2万人と伊達政宗軍5千人とが激突した。翌年，摺上原の戦いで芦名氏が滅ぶことにより本宮地方は伊達領となる。その後，蒲生，上杉，加藤氏の支配を受け，江戸期になってからは二本松丹羽氏の支配が幕末まで続くこととなる。慶長8年（1603）江戸に幕府が開府され，江戸を中心に五街道を幹線として，その他の脇街道も逐次整備されていった。奥州街道も全面的に改修されて，現在の県道須賀川・二本松線の道筋になった。18世紀に入ると，本宮は奥州街道と会津街道との分岐点に位置するため宿場町として繁栄し，旅館30軒，茶屋12軒，湯屋6軒が立ち並び，文政7年（1824）には本宮は郡山とともに御城下格の格式を与えられた。南町・北町にはそれぞれ40匹の伝馬と人足が置かれ賑わった。また，本宮は火事の多い宿場町でもあったようで，町の大半を消失するほどの大火が延享1年（1744）・安永9年（1780）・文化3年（1806）・文化7年（1810）の計4回発生している。また，水害も度々発生する地域で，明治23年（1890）・大正2年（1913）・昭和16年（1941）には増水が8～10mにも及ぶ大洪水が発生している。

（成 田）

第4節 調査成果の概要

今回の2つの調査区は，長さ約2.1kmの自然堤防上で，最も標高の高い一角を占地している。遺跡名は違っても，実際には両者はつながっており，遺構はまたがって検出されている（図12）。

調査で検出された遺構は，以下のとおりである。

竪穴住居跡……………218軒
柱列……………3か所
土坑……………36基
焼土遺構……………3基
集石遺構……………1基
溝跡……………5条
特殊遺構……………7基
ピット群
遺物包含層



区画大溝跡断面 6/17

これらの帰属時期は，舞台式期～表杉ノ入式期の幅で捉えられる。その中でも，とくに栗圀式期の内容が充実しており，これまでの調査成果と同様の結果を示した。改めて，自然堤防上に営まれた集落群が，古墳時代終末期に膨脹し，発展したことを裏付けたといえる。出土遺物や検出遺構には，関東・会津地方との関連を示す資料が認められ，こうした集落膨脹の背景に他地域の人々が強

「川との共生」今に訴え

発掘中の阿武隈川右岸遺跡群



発掘調査中の阿武隈川右岸遺跡群。阿武隈川右岸の阿武隈川沿いに、縄文時代から江戸時代にかけての遺跡が連続して発見されている。この遺跡群は、阿武隈川と人間の共生の歴史を物語る貴重な資料となっている。

河川改修で消える運命に

本誌の阿武隈川右岸遺跡群は、阿武隈川改修事業に伴って、河川改修で消える運命に直面している。阿武隈川は、古くから阿武隈川右岸に遺跡が連続して発見されている。この遺跡群は、阿武隈川と人間の共生の歴史を物語る貴重な資料となっている。

本宮町の高木遺跡

3つ目の堀を発見

調査がすすむにつれて、堀約三つ目、三つ目の堀(手前)が新たに見つかった。本宮町の高木遺跡は、縄文時代から江戸時代にかけての遺跡が連続して発見されている。この遺跡群は、阿武隈川と人間の共生の歴史を物語る貴重な資料となっている。

福島民友 平成 11年 10月 9日

高い文化を示す 7の世紀の硯

本宮 高木北ノ脇遺跡説明会

本宮 高木北ノ脇遺跡説明会。この硯は、縄文時代から江戸時代にかけての遺跡が連続して発見されている。この遺跡群は、阿武隈川と人間の共生の歴史を物語る貴重な資料となっている。

福島民友 平成 11年 11月 7日

注目浴びる本宮の高木遺跡

大集落を囲む大堀

大集落を囲む大堀。この遺跡群は、阿武隈川と人間の共生の歴史を物語る貴重な資料となっている。

福島民友 平成 11年 8月 31日

阿武隈川右岸遺跡群説明会資料

高木・北ノ脇遺跡現地説明会資料

高木・北ノ脇遺跡現地説明会資料。この遺跡群は、阿武隈川と人間の共生の歴史を物語る貴重な資料となっている。

阿武隈川右岸遺跡群説明会資料

高木・北ノ脇遺跡現地説明会資料

高木・北ノ脇遺跡現地説明会資料。この遺跡群は、阿武隈川と人間の共生の歴史を物語る貴重な資料となっている。

阿武隈川右岸遺跡群説明会資料

高木・北ノ脇遺跡現地説明会資料

高木・北ノ脇遺跡現地説明会資料。この遺跡群は、阿武隈川と人間の共生の歴史を物語る貴重な資料となっている。

図11 高木・北ノ脇遺跡の新聞報道と説明会資料

く関与していたことが想定される。

今回の最大の調査成果は、当該期の大規模な区画溝跡と水辺の祭祀跡の発見である。前者は、自然堤防を横断する幅6～8mの大溝跡で、110～115mの間隔をあげ、高木遺跡9区の北と南で検出された。内部に営まれたのは竪穴住居跡であり、いわゆる豪族居館に比定される要素は認められなかった。

水辺の祭祀跡は、この大溝跡と後背湿地の落ちぎわで検出されている。集石と祭祀遺物を伴う単位がいくつも検出され、そこで火の焚かれた痕跡が確認された。祭祀遺物の中には、須恵器提瓶・横瓶、銅釧、鉄刀のような特殊器物が含まれており、それが首長の執行するものであったことを示している。

その後の集落変遷は、本格的な律令体制の確立する8世紀前半に画期が認められる。北ノ脇遺跡4区側に竪穴住居跡の分布が集中し、高木遺跡9区は、ほとんど遺構の空白地帯となる。また、当該期には、住居跡の須恵器保有量が急増し、カマドが大型化するなどの変化も指摘される。ちなみに、北ノ脇遺跡4区では、丸瓦片や蓮華文をかたどった座金が出土しており、通常の居住域と違った性格を一部に備えていた可能性が指摘される。

(菅原)



表土剥ぎ



住居跡精査



遺構検出



小学生体験発掘

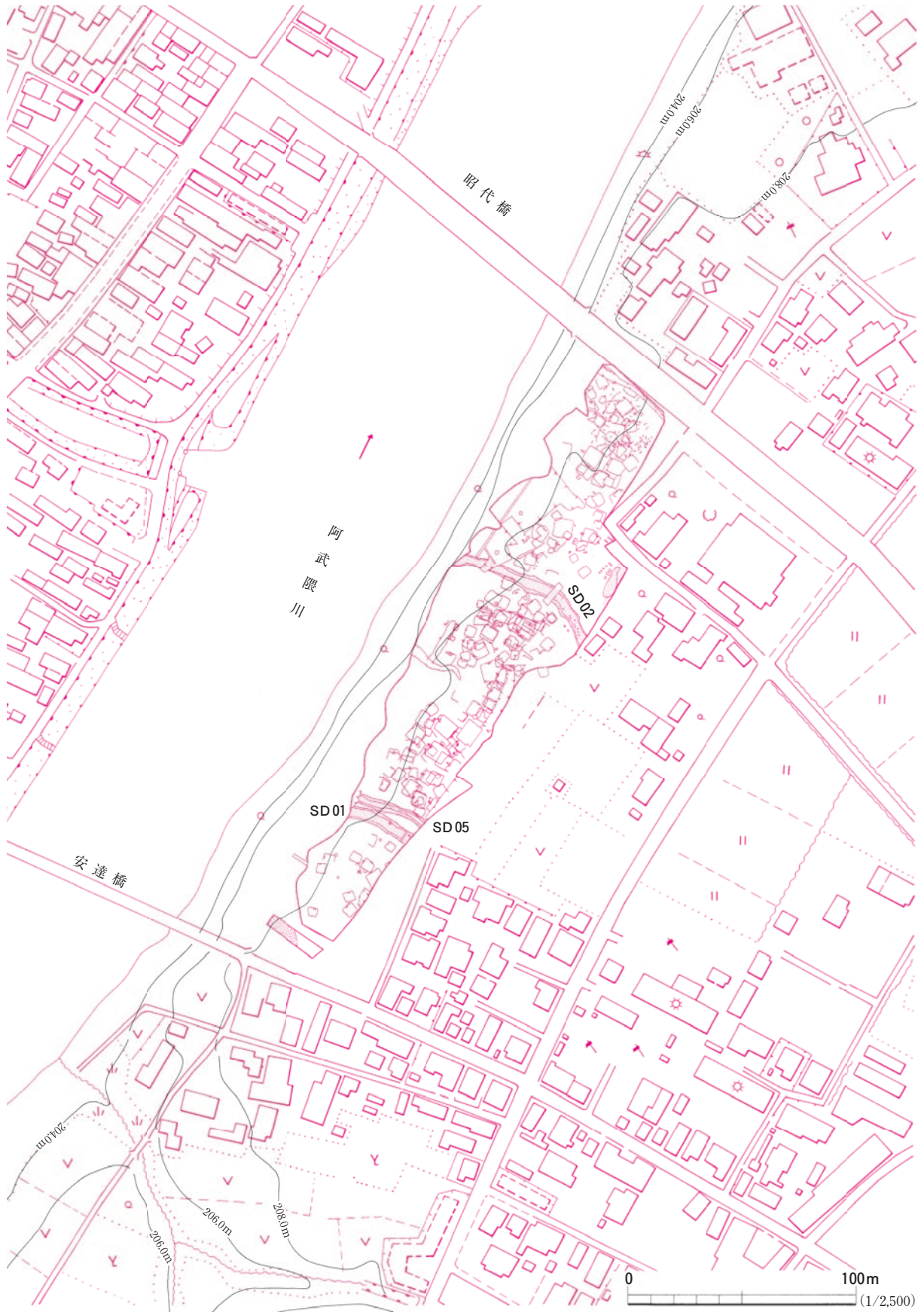


図12 高木遺跡9区・北ノ脇遺跡4区全体図

第1編 高木遺跡

遺跡記号 MM-TK

所在地 安達郡本宮町高木字高木

調査期間 平成11年4月12日～12月23日

調査員 松本 茂・安田 稔・高久田富裕
佐藤あかり・成田有策・菅原祥夫
小暮伸之・大河原勉・堀川雄二
大波紀子

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査経過

高木遺跡9区の発掘調査は、平成11年4月12日から開始された。このうち、本書で扱う古墳～奈良・平安時代の調査は、同年12月23日まで行われている。

以下では、日程を追って調査経過を記述していく。

4月12日～4月16日 調査第1週。初日は、プレハブ用地と表土剥ぎ予定地の縄張りを行う。また、第1回の連絡調整会議を開催。これは、建設省・県文化課・本宮町・県文化センターの4者で行われたもので、以後、月1回のペースで実施されている。4月14日に重機を搬入し、翌15日から表土剥ぎを開始する。これと併行して、プレハブ・トイレの設置工事が始まり、調査区進入路の立ち入り禁止の立て看板設置を行う。

4月19日～4月28日 調査第2・3週。19・20日にプレハブ内装工事・器材搬入。発掘準備がほぼ整う。21日に作業員雇用。調書作成と安全教育を行ったのち、本宮町と合同で発掘調査事業開始式を行う。その後、遺構検出作業を開始。早くも、遺物が出土し始める。22日、1号住居跡が検出され、掘り込みを開始する。また、調査区進入路に単管パイプを打ち、ロープで頑丈に縄張りをする。25日、2号住居跡を検出。同日、5か所のベンチマークを設置する。

4月29日～5月5日 ゴールデンウィーク。

5月6・7日 調査第5週。ゴールデンウィークの合間をぬって調査を実施。M23グリッドで、東西方向の大溝跡らしきものが検出される。さらに、3号住居跡・1号土坑を検出。深掘り箇所、下層に縄文時代の文化層が確認される。

5月10日～5月14日 調査第6週。10日、第2回連絡調整会開催。排土置き場の確保、水位観測所の移設時期などについて話し合われる。また、下層文化層の発見が報告される。調査区南側では、M23グリッドの大溝跡を1号溝跡と命名。底面近くで、古墳時代の土器類が大量出土する。一方、調査区北側で、O20グリッド周辺を表土剥ぎを11日から開始。ここは、後背湿地の落ちぎわになることが判明し、14日には、手づくね土器と土製勾玉の集中箇所が検出される。

5月17日～5月21日 調査第7週。調査は二手に分かれ、調査区南側では、1号溝跡から北に向かって、反対に、調査区北側では、O20グリッドから南に向かって遺構検出を進める。18日、(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団一行来跡。20日、作業員17名を追加雇用。21日、L23・24グリッドの阿武隈川岸に、2本のトレンチを入れる。遺構の無いことを確認。同日、原点移動・地区杭設定を開始する。

5月24日～6月4日 調査第8・9週。排土運搬のため、クローラキャリア4台導入。26日、5～7号土坑検出。本宮町と結団式を27日行う。28日、5号住居跡検出。6月1日、8号住居跡検出。



小学生体験発掘 6/11

2日、2号特殊遺構検出。3日から、排土山の移動をダンプカーで始める。砂ぼこりがひどいため、散水車を使う。3日、9・10号住居跡、4日、11・12号住居跡検出。

6月7日～6月11日 調査第10週。7日、雨。8日、O20グリッドの後背湿地落ちぎわで、完形品の須恵器横瓶出土。他にも、多量の土器・土製玉類・土製模造鏡などが次々と姿を現し、1号遺物包含層と命名する。翌9日には、その南で東西の大溝跡が検出される。1号溝と対になると考えられた。2号溝跡とする。11日、郡山市高倉小学校45名来跡。遺跡見学と体験発掘を行う。これを皮切りに、見学者が急増する。同日、17号住居跡・10号土坑検出。

6月14日～6月18日 調査第11週。14日、第3回連絡調整会議。同日、18・19号住居跡検出。15日、2号溝跡から多量の土器が出土しはじめる。1号遺物包含層は、遺物出土状態の写真撮影・実測に入る。15日から、基本土層ベルト実測・水位観測所撤去作業開始。また、14日に文化センター新入職員研修の一行が現地見学に訪れたのに続き、15日には、本宮町まゆみ小学校6年70名、翌16日には、本宮町五百川小学校6年87名が来跡する。18日、雨。

6月21日～7月2日 調査第12・13週。21日、本宮町本宮小学校6年111名現地見学。同日、17号住居跡から良好な一括遺物が出土。翌22日に写真撮影・出土状況図の作成を行う。同日、本宮町議会総務文教委員11名現地見学。23日、2号溝跡東半部の写真撮影、1号遺物包含層の遺物取り上げ開始。24日、雨。25日、20号住居跡検出。28日、本宮町岩根小学校20名現地見学。同日、1号遺物包含層周辺の埋め戻しを開始。新規のプレハブ用地となる。29日、2号溝跡平板測量、22・23号住居跡検出。30日、雨。プレハブで図面整理を行う。7月2日、17・22号住居跡の調査終了。

7月5日～7月9日 調査第14週。5日、24・25号住居跡検出。6日、27・28号住居跡検出。同日、本宮町の町民遺跡見学会一行45名現地見学に訪れる。調査区南端にあたる安達橋沿いを、8日に深掘りする。旧河道が検出され、写真撮影・平板測量を行う。9日、30・31号住居跡検出。同日、2号溝跡の残りの遺物を取り上げる。

7月12日～7月23日 調査第15・16週。12～14日雨。梅雨の本格的な影響があらわれる。調査区は水浸しになり、多くの遺構の壁が崩落してしまった。16日、1号遺物包含層を埋め戻した地点にプレハ



住居跡掘り込み 7/6

ブを設置する。21日，雨。22日，旧河道検出の安達橋沿い765㎡の引き渡し。同日，38～40号住居跡，翌23日，41・42号住居跡を検出する。同日，東北大学藤沢敦助手が現地見学のため来跡。

7月26日～8月6日 調査第17・18週。26日，第4回連絡調整会議。同日から翌27日の2日間，公立小・中学校経験者の「社会貢献活動体験研修」が行われる。参加者20名。28日，大玉村大玉中学校2年10名が現地見学・体験発掘。8月2日，写真撮影のためローリングタワーを設営する。第2回目の「社会貢献活動体験研修」が，3～4日に行われる。参加者27名。5日は，本宮町の町民遺跡見学会の一行25名が現地見学。同日，文化センター館長視察。6日，臨時の連絡調整会議開催。

8月7日～8月16日 盆休み

8月17日～8月20日 調査第20週。17日の盆明け初日から，山王川原遺跡の調査員2名合流。18日，郡山市第五中学校8名が現地見学。同日，縄文時代中期の複式炉をもつ住居跡が検出される。67号住居跡と命名。以後，縄文時代の調査が併行して行われるようになる。なお，遺構番号は時代に関係なく，連番で付けることにした。19日，70～72号住居跡，20日，75号住居跡，23日，78・80号住居跡が検出される。24日，60号住居跡が火災住居跡と判明。27日は，雨。

8月30日～9月10日 調査第21・22週。東北学院大学辻秀人教授が30日に現地見学。31日，88号住居跡まで検出。同日，87号住居跡の床面から完形の円面硯が出土。遺構は栗囲式に比定され，貴重な資料となった。調査員1名が9月1日から合流。2日，94～96号住居跡検出。6日に，本宮町の町民遺跡見学会一行45名が現地見学。7日，105・107・108号住居跡検出，8日，111号住居跡検出。第5回の連絡調整会議が10日に開催される。同日，本宮町議会総務文教委員10名現地見学。

9月13日～9月22日 調査第23・24週。13日，残暑が厳しい。15日，敬老の日で現場休み。120～123・126号住居跡が相次いで検出される。17日は雨。20日，9月後半になったのにまだ残暑が厳しい。同日に，134号住居跡を検出。翌21日は，137～139号住居跡を検出。22日，雨。

9月27日～9月30日 調査第25週。28日，142・143号住居跡検出。どちらの住居跡も規模が大きく，多量の遺物が床面やカマドに残されていた。142号住居跡では，間仕切り溝が検出される。30日，144・147・151・153号住居跡検出。

10月4日～10月15日 調査第26・27週。4日，147号住居跡で鉄刀出土。9～10日，144号住居跡のカマド両脇で多量の土器出土。どちらも現地説明会まで，遺物を残すことに決定する。6日は，第6回連絡調整協議会。7日，本宮町の町史学習講座受講生32名が現地見学のため来跡。

12日，テレビ取材。同日から，下層の縄文時代の調査のため，2号溝跡周辺を掘り下げ始める。この頃，高木遺跡9区は古墳～奈良・平安時代の調査がピーク



遺構実測 10/6



現地説明会 11/6

を過ぎ、主力は縄文時代の調査へ移行する。一方、北ノ脇遺跡4区では、古墳～奈良・平安時代の調査が本格化し始める。

10月18日～10月29日 調査第28・29週。18日、朝方がめっきり寒くなる。21日、180・181号住居跡検出。本宮高校文化祭のため、遺物を22日に貸し出す。25

日は、本宮町の祭りのため、作業員が集まらず、現場休み。28日、読売新聞取材。29日、191～193号住居跡検出。

11月1日～11月6日 調査第30週。1日、雨。2日、193・194号住居跡検出。3日は休日。現地説明会の準備のため、4・5日は調査区内の清掃・看板設営などを行う。6日、現地説明会を開催する。見学者約400名が来跡し、盛会であった。

11月8日～11月12日 調査第31週。8日、195・196号住居跡検出。また、手付かずだった1号溝跡東半部の調査に入る。同日、本宮町まゆみ小学校5年80名現地見学。翌10日には、まゆみ小学校4年83名が現地見学。11日、第7回の連絡調整協議会が開催される。同日、200号住居跡検出。12日は雨のため、野外調査が休み。プレハブで遺物の水洗いを行う。

11月15日～12月17日 調査第32週～第35週。ダメ押し主体の調査となり、古墳～奈良・平安時代の調査は、北ノ脇遺跡に移る。12月9日に214号住居跡が検出され、同日中に終了する。その間、11月25日に本宮町3年95名が現地見学のため来跡。11月30日には、第8回連絡調整会議が開かれる。

12月20日～12月23日 調査第36週。20日から器材撤収とプレハブの片付け開始。23日終了。

(菅原)

第2節 調査と整理の方法

阿武隈川右岸築堤事業に係る発掘調査は、これまで本宮町教育委員会で実施してきた経緯がある。今回も、同町教育委員会と共に調査を実施することになったため、基本的な調査・整理の方法は、お互いに同一歩調をとることにした。

調査方法

グリッドの設定：グリッドは、大グリッドと小グリッドに分け、大グリッドは40m×40m、小グリッドは、4m×4mで設定した。大グリッドの測量原点は、X：+168,800、Y：+49,800とし、西から東にA、B、C……、北から南に1、2、3……と番号を付けた。1つのグリッドはこれを

組み合わせてA1, A2, A3というふうと呼称している。小グリッドは、大グリッドを4mの包含で区切ったもので、北西角から北東角に向けて1, 2, 3……10, その下段を11, 12, 13……20とし、全部で100までの数として表した。つまり、1つの小グリッドは、A1-1, A1-2などのように表記される。本調査区は、東西がL~O, 南北が18~25の中にカバーされている。

遺構登録：検出遺構の登録は、本調査区独自で1から番号を付けていった。これは、山王川原遺跡で町と県が調査区を分けて発掘を実施することになり、県は独自に遺構番号を付けることになったことに合わせたものである。本来なら、これまで登録された高木遺跡の遺構番号に連続させるべきであったが、こうした理由からできなかった。

なお、今回の調査では、縄文時代の遺構も多数検出され、時代の違いに関わり無く、検出順に番号を付けている。本書で扱う遺構は、以下のとおりである。

[竪穴住居跡] 176軒 1~17A・17B~20, 22~66, 68~114, 118~131, 134~149,
151, 153~162, 164~170, 172~174, 178, 180, 181, 185
187, 191~196, 199, 200, 214号住居跡

[土坑] 35基 1~9, 12~19, 21~24, 26, 29~32, 34, 35, 41, 43, 54~58号土坑

[溝跡] 5条 1~5号溝跡

[焼土遺構] 3基 1~3号焼土遺構

[特殊遺構] 7基 1~7号特殊遺構

[遺物包含層] 1層 1号遺物包含層

表土剥ぎ：表土剥ぎは、機械力を導入して行った。調査面積が広いため、条件整備の整った部分から随時進めていった。この作業がピークを迎えた5・6月は強風が吹き荒れ、排土山の砂が周囲に飛散して、周辺住民から苦情が出てしまった。このため、散水車を導入し、人力でも噴霧器で水を撒くようにして、改善を図った。

遺構検出・精査：遺構の検出・精査は、すべて人力で行っている。精査は、土層観察用ベルトを残して、順次層位的に掘り下げ、底面・床面を検出していった。竪穴住居跡に関しては、カマドやピットのような細部施設に、単独の土層観察用ベルトを設定して調査を行っている。

実測：実測図は、遺構単位に平面図・土層断面図を作成した。さらに、必要に応じて、遺物出土状況図も作成している。この他に、基本土層図、地形図を作成した。縮尺は、以下のようになる。

[竪穴住居跡] 平面図・土層断面図…… 1/20

遺物出土状況図…… 1/10

[土坑] 平面図・土層断面図…… 1/10・1/20

[溝跡] 平面図(平板測量)…… 1/100

土層断面図…… 1/20

遺物出土状況図…… 1/10

[焼土遺構] 平面図・土層断面図…… 1/10・1/20

- [特殊遺構] 平面図・土層断面図…… 1/10・ 1/20
遺物出土状況図…… 1/10
- [遺物包含層] 遺物出土状況図…… 1/10
- [基本土層] 土層断面図…… 1/20
- [地形図] 平面図（平板測量）…… 1/200

写真撮影：写真撮影は、35mmと6×4.5cm版のカメラを併用した。同一アングルを3コマずつカラーフィルムとモノクロームフィルムで撮影している。遺構は、検出状況・土層断面・完掘全景・細部・断ち割りの写真を撮影した。また、調査全体の進捗状況を随時記録するため、作業風景写真のようなスナップも意識的に撮影するよう心掛けた。

分析試料の採取：自然化学分析のため、下記の遺構から試料を採取した。

- [鉄滓] 17B・30・88・100・101・142号住居跡，2・6号特殊遺構
- [骨片] 11B・80・106・129・142号住居跡，2号溝跡F・I群

整理方法

整理作業は、県文化センター分室で、現地調査と同時に開始した。調査終了後は、一切の遺物・図面類を持ち込んで、集中的に作業を行い、足掛け3か年を費やした。ただし、3年目は、縄文時代の整理に主眼を置いている。

遺物洗浄：この作業だけは、現場プレハブ前の空き地を利用して、発掘調査と併行で現地で行った。この段階で、実測遺物と非実測遺物に分類してしまい、室内作業の負担を軽減している。

遺物復元・実測：本編収録の図示遺物は、1,800点近くに及ぶ。これらは、洗浄した後、出土遺構・グリッド、層位などを注記し、接合・復元を行った。石膏の充填は、実測できる程度にとどめ、写真撮影する遺物だけを後で補強した。

土器類の実測は、口径の4分の1以上遺存するものを対象にした。また、たとえ小破片でも特徴的な資料については、破片実測している。例えば、関東系土師器がそれである。土師器甕・甌のハケメ調整痕は、今回思い切って拓本にしてみた。予想外にきれいに仕上がりに、また、作業時間の短縮につながったと考えている。その他の遺物は、遺存状態の良いものを選抜して実測した。

遺構・基本土層・地形図の整理：遺構図は、まず平面図と土層断面図で、座標位置とレベルに矛盾が無いが相互にチェックした。そして、土層注記の内容を確認した後、トレースに回している。基本土層図は、今回4か所で作成した。本編では、遺存状態の良好だった2か所の図面を掲載している（図1）。地形図は、すべての遺構を合成し、1枚の第2原図（遺構配置図）を1/200のスケールで作成した。

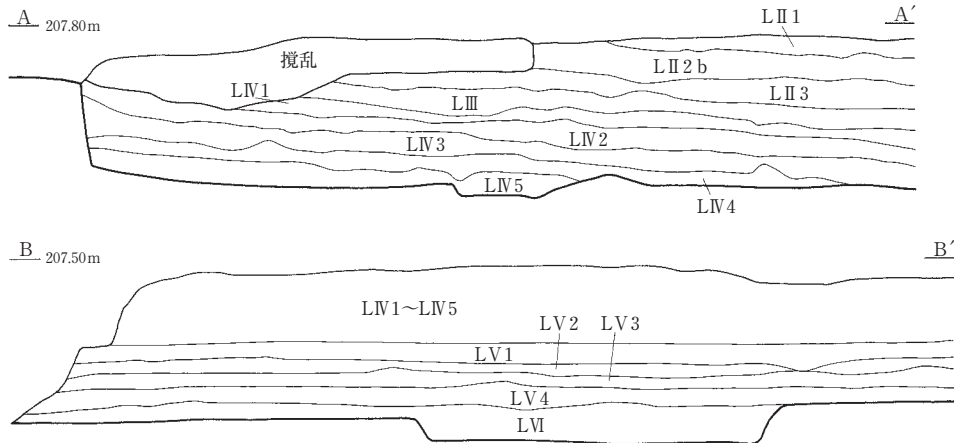
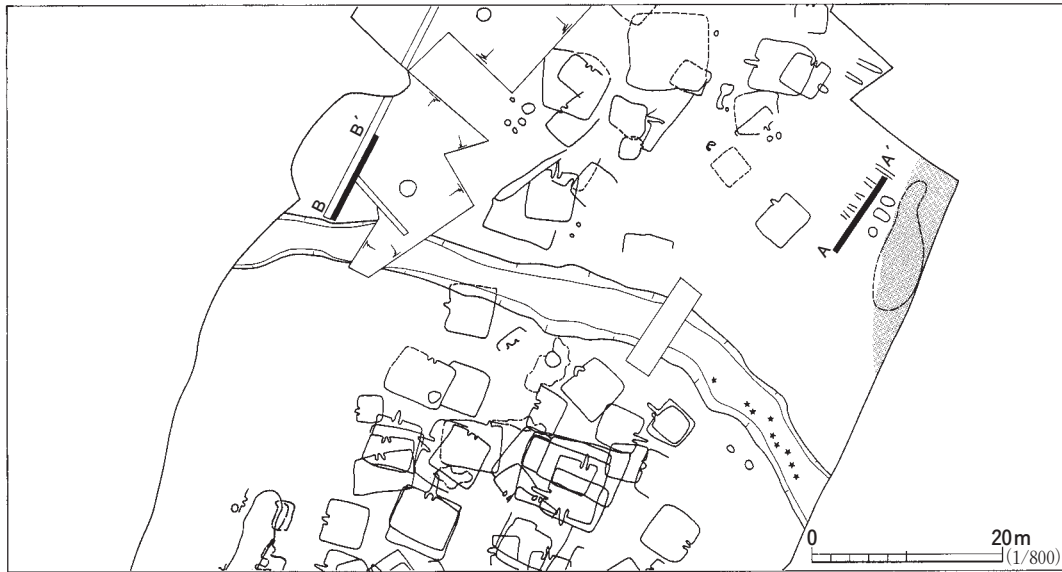
原稿執筆：事実報告の原稿執筆は遺構担当者を原則としたが、内部移動により、そのできないものが多数生じてしまった。それらについては、遺構カードの記録をもとに他の調査員が執筆した。

（菅原）

第3節 微地形と基本土層

微地形と検出遺構の関係

事業対象の自然堤防上で最も標高の高いのが、本調査区から北ノ脇遺跡4区にかけての一带である。調査開始前の地形図を見ると、最高所では、海拔213mの等高線が回っている。平成10年8月27日の洪水の際にも、ここだけは冠水を免れた（口絵2）。



基本土層

L II 1	10Y R3/2	黒褐色砂質土 (明黄褐色砂質土含む)	L IV 5	10Y R5/3	にぶい黄褐色砂質土
L II 2 a	10Y R5/3	にぶい黄褐色砂質土	L V 1	7.5Y R4/3	褐色砂質土 (焼土・炭化物・骨片・土器片を含む)
L II 2 b	10Y R6/4	にぶい黄橙色土	L V 2	10Y R2/3	黒褐色砂質土 (焼土粒・炭化物・土器片を微量含む)
L II 3	10Y R7/4	にぶい黄橙色土 (SH01を形成する)	L V 3	10Y R3/4	暗褐色砂質土 (焼土粒・炭化物を微量含む)
L III	10Y R3/3	暗褐色砂質土	L V 4	10Y R2/2	黒褐色砂質土 (焼土粒微量含む)
L IV 1	10Y R7/4	にぶい黄橙色土	L VI	10Y R3/3	暗褐色砂質土 (焼土粒微量含む)
L IV 2	10Y R5/2	灰黄褐色砂質土			
L IV 3	10Y R6/3	にぶい黄橙色砂質土			
L IV 4	10Y R6/2	灰黄褐色砂質土			

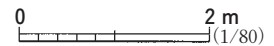


図1 基本土層

長さ約2 kmに及ぶ古墳時代集落の中で、次章で報告するような、水辺の祭祀跡や大溝跡が検出されたのは、本調査区だけである。このことは、当時の人々にとって、この一帯が特別な意味を持っていたことを示していると考えられる。

基本土層の概要

自然堤防は、締まりの無い砂質土で形成されている。基本的には、にぶい黄橙色系と黒色系の土層が交互に堆積を繰り返しており、地表下約8 mで基盤に達している。

今回の調査では、基本土層をL I～Vに大別し、さらに、必要に応じて細分を行った(図1)。このうち、古墳～奈良・平安時代に関わるのは、L IIIないしL IVまでである。この2層が当該期の基底層になっており、L IIが文化層になる。

以下に、概要を記述する。

L I……………表土・耕作土

L II……………古墳～奈良・平安時代の文化層(色調：にぶい黄橙色系)

L III……………無遺物層(色調：黒色系)

L IV……………縄文時代の文化層(色調：にぶい黄橙色系)

L V……………縄文時代の文化層(色調：黒色系)

L IIの細分と遺構掘り込み面の関係

基本土層の堆積状況は、地表面の傾斜と同じように、東向きに下がっており、阿武隈川縁では1層でしか捉えられない土層が、後背湿地側に向かうに従って枝分かれする。古墳～奈良・平安時代の文化層=L IIも、同じ状況であった。図1に示したように、後背湿地の落ちぎわに設定したA-A'の土層断面では、L IIが3つに細分されている。

最初の頃、竪穴住居跡は阿武隈川に近い地点で、L III上面から検出された(1・2号住居跡)。このため、当該層の上面を追いかけて東側に遺構検出作業を展開して行ったが、次第にL IIIは下に潜り込んで行き、浮いてくる遺構が現れ始めた。この時点で、本来の遺構掘り込み面はL II上面であることに気付き、さらに、同層内部にも複数の安定した面(遺構掘り込み面)のあることが判明した。

図2は、基本土層と遺構掘り込み面の関係を模式化したものである。概念的に示すと、竪穴住居跡は、次の5つのパターンで検出されている。

住居跡A：表土直下のL IV上面で検出される住居跡。

住居跡B：表土直下のL III上面で検出される住居跡。

住居跡C：遺物包含層L II 1直下で、L III上面から検出される住居跡。

住居跡D：遺物包含層L II 1直下で、L II 2上面から検出される住居跡

住居跡E：遺物包含層L II 2直下で、L III上面から検出される住居跡。

しかし、実際には、遺構の重複密度があまりにも高いため、本来の掘り込み面でうまく検出できた住居跡は少ない。ただ、切り合いでは最も古い舞台～栗圀式期古段階の住居跡が、「住居跡E」に

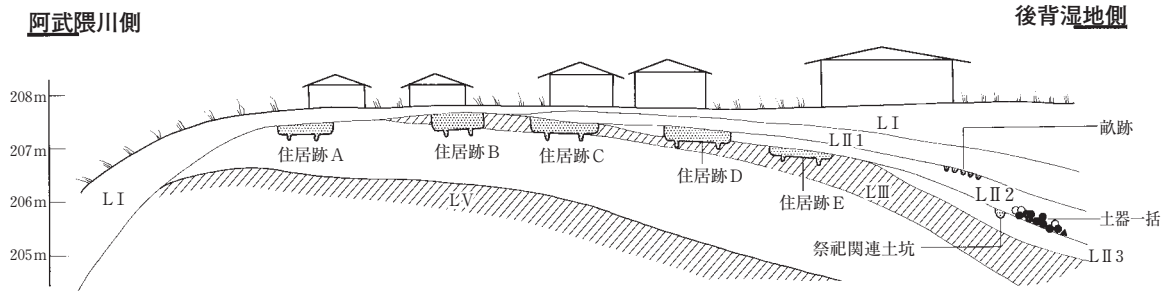


図2 遺構掘り込み層序模式図

該当する事例の多かったことは、確実に指摘できると思われる。

この他には、後背湿地の隣接地点に営まれた遺構で、L II 内部の掘り込み面の違いが確認されている。

図2右端で示したように、畝跡の1・5号特殊遺構がL II 2 上面から、祭祀関連土坑の5～7号土坑がL II 3 上面から検出された。5～7号土坑の斜面下では、祭祀道具が多量に廃棄され、L II 3 上面に1号遺物包含層を形成している。

なお、時期的には、上層の畝跡が表杉ノ入式期～栗圀式期、下層の祭祀関連遺構が栗圀式期に位置付けられる。

遺構内堆積土とラミナの関係について

今回の調査では、遺構プランの確認が非常に難しかった。その要因の1つに、ラミナがある。これは、本来の土層堆積とは無関係な水的作用によるもので、粘土粒子が縞状に形成され、場合によっては、それが厚さ数cmになり、まるで1つの土層のように堅く締まっているケースがあった。整理段階で、改めて土層断面の写真を見直すと、明らかにこのラミナを線引きしてしまった遺構がある。

図3に、ラミナと遺構内堆積土の関係を模式化してみた。

Aパターンでは、ラミナが基本土層と遺構内堆積土を直線的に横断している。これは、両者の間に、堅さや締まりの差が小さい場合に認められる。

多かったのはこのパターンである。

Bパターンでは、遺構内堆積土のラミナが基本土層のラミナより下がっている。しかも、床面付近では厚くなり、まるで貼床のようにもなっていることもあった。ただし、やはり土層の堆積とは無関係な現象であることに変わりはない。

このパターンは、基本土層に対して、遺構内堆積土が柔らかい場合に認められる。ラミナを土層の単位と誤認した事例は、このパターンが大半である。

(菅原)

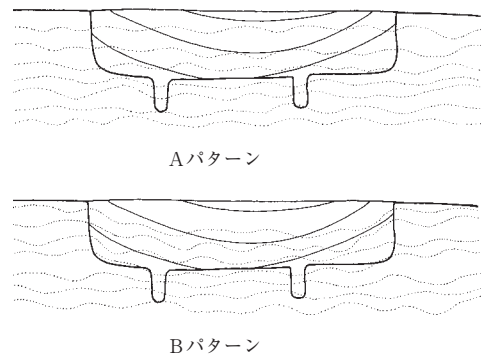


図3 ラミナと遺構内堆積土の関係



図4 高木遺跡9区遺構配置図

第2章 遺構と遺物

今回の調査では、竪穴住居跡176軒、土坑35基、溝跡5条、焼土遺構3基、集石遺構1基、特殊遺構7基、遺物包含層1か所が検出された。

また、それに伴って、土師器1,451点、須恵器190点、土製品109点、石製品48点、金属製品37点の図示遺物、さらに鉄滓53点、骨片多数が遺構内から出土した。

以下、順を追って事実報告していく。

第1節 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、176軒が検出された。遺構配置図(図4)に示したように、阿武隈川右岸の自然堤防上に密集した状態で分布している。切り合い関係は、東の後背湿地側に向かうほど新しくなる傾向が認められ、この点に、住居占地の変遷を読み取ることが可能である(図5)。

所属時期については、舞台式期～表杉ノ入式期の幅がみられ、その中でも古墳時代終末期の栗田式期に主体がある。具体的内容については、第3編で詳述するが、全体の9割以上を占めている。したがって、高木遺跡9区の集落は、当該期に盛期があったと考えられる。

なお、表1～4に遺構の概要を、表6～26に遺物の属性を一覧化した。



図5 竪穴住居跡の新旧関係(部分)

表1 住居跡一覧(1)

No.	グリッド	平面形	主軸方位	規模(m)	カマド	貯蔵穴	ピット	備考
S I 01	M22	正方形	N44° E	4.9×4.8	西周壁			最上層に土器一括廃棄
S I 02	M22	長方形	N23° E	6.1×4.5				
S I 03	N20	長方形	N46° E	残4.4×3.6	西周壁	カマド右脇	1個	
S I 04	M23	方形	N17° E	4.7×残4.1	東周壁		2個	西側削平
S I 05	O20	長方形	N45° E	4.9×3.8	西周壁			カマド右脇に浅い窪み
S I 06	N20	正方形	N12° E	5.0×4.6	西周壁	カマド右脇	4個	S D02に切られる
S I 07	N21	長方形	N13° E	4.7×3.4	北周壁			
S I 08	O20	方形	N21° E	残3.3×3.0	北周壁			太刀鞘尻?出土
S I 09	N20・N21	長方形	N18° E	6.1×4.9	北周壁	カマド左脇	1個	床面がほとんど露呈
S I 10	N20・N21	方形	N22° E	4.7×残4.0			1個	床面がほとんど露呈
S I 11	N29	略正方形	N17° E	6.7×6.4	北周壁		7個	
S I 12	N20・O20	不整形	N22° E	3.8×3.0			1個	検出プランが乱れている
S I 13	N20	方形	N47° E	3.5×残2.7				東側削平
S I 14	N20			残6.1×残3.2	南周壁			削平著しく、周壁残りなし
S I 15	N20							カマド燃焼部残存、天井部堯補強
S I 16	N20	略正方形	N38° E	5.5×4.9	西周壁			カマド内・周辺で土器一括出土
S I 17A	O20・O21	略正方形	N41° E	4.1×4.1	西周壁			カマド周囲に一括土器、銀環
S I 17B	O21	略正方形	N41° E	3.4×3.3	西周壁			S I 17B建て替え前の住居跡
S I 18	N19・20, O19・20	長方形	N8° E	8.3×7.5	北周壁		8個	土製管玉・丸玉床面で出土
S I 19	N19・O19	正方形	N40° E	3.6×3.4				東側削平
S I 20	N20	長方形	N42° E	残3.8×3.3	北周壁			土製勾玉片床面で出土
S I 22	N21			残5.6×残2.3	西周壁			削平著しく、周壁残りなし
S I 23	N21	長方形	N10° E	6.3×5.1	北周壁	カマド右脇	3個	墨書土器堯床面で出土
S I 24	N21	長方形	N25° E	6.4×4.8	西周壁			
S I 25	N21・O21	略正方形	N13° E	3.9×3.8	東周壁		1個	木炭充填の長方形ピット
S I 26	O21	正方形	N36° E	5.2×4.9	東周壁		4個	4本柱穴、多孔式甕、土製玉
S I 27	N22	長方形	N20° E	6.4×4.9	北周壁			南西部床面で土器一括出土
S I 28	N22	方形	N30° E	3.7×残2.8				西側削平、竪穴中央礫廃棄
S I 29	N21・N22	方形	N17° E	残3.9×残4.2	西周壁			削平著しく、周壁残りなし
S I 30	N21	方形	N55° E	4.0×残3.2	西周壁			カマド周辺で土器一括出土
S I 31	N21	方形	N17° E	7.0×6.2	西周壁			東側削平、カマド左脇土器一括
S I 32	N21	長方形	N55° E	4.6×3.5				南側削平、検出プラン少し歪み
S I 33	N21			残3.3×残2.4	西周壁			平著しく、周壁残りなし
S I 34	N21	正方形	N16° E	4.6×4.6	西周壁			カマド・床面土器一括
S I 35	N20・N21	正方形	N0° E	2.8×2.5	西周壁			小型住居跡
S I 36	N21	方形		8.5×残8.0	西周壁		2個	西・東辺傾き不一致、土器一括
S I 37	N21	方形	N30° E	3.3×残1.9	西周壁	カマド右脇	2個	小型住居跡
S I 38	N21	正方形	N28° E	4.9×5.2	北周壁	カマド右脇	1個	カマド右脇で土器一括出土
S I 39	N21	略正方形	N70° E	3.9×3.7				
S I 40	N21	正方形	N74° E	4.1×4.0	南周壁			床下で関東産搬入土器器杯
S I 41	N21				北周壁			カマドだけ残存
S I 42	N20・O20	方形	N25° E	残3.8×残1.9	東周壁			東周壁付近だけ残存
S I 43	N21	方形	N20° E	残5.0×4.6	北周壁	カマド左脇	1個	カマド天井部平石使用、鉄鎌
S I 44	N21	方形	N19° E	残4.0×4.2	西周壁			カマド支脚2個、片口土器、土製丸玉
S I 45	N21	略正方形	N10° E	3.8×3.4	北周壁			平面プラン台形状、小型土器器杯
S I 46	N21	長方形	N20° E	6.4×5.1	北周壁			カマド左脇に土器器長胴堯
S I 47	O20			残2.3×残0.8	西周壁			カマド周辺だけ残存
S I 48	N21	方形	N13° E	残3.7×5.3	北周壁	カマド右脇	6個	カマド筒型土製品、模造鏡、粘土溜
S I 49	N21	長方形	N25° E	8.8×5.8				南側床面で土器一括出土

表2 住居跡一覧(2)

No	グリッド	平面形	主軸方位	規模(m)	カマド	貯蔵穴	ピット	備考
S150	N20・O20	正方形	N13°E	2.1×残1.9	東周壁			小型住居跡
S151	N21	方形	N21°E	4.1×残3.5	西周壁			残り悪い
S152	N21	長方形	N80°E	6.1×3.9	北周壁			周壁残り悪い, 土製丸玉
S153	N21	方形	N23°E	残4.2×7.1	西周壁			東側削平
S154	N21	方形	N13°E	5.5×1.8				土製丸玉
S155	N21	方形	N72°E	残3.3×残2.5				残り悪い
S156	O20				西周壁			カマドだけ残存
S157	N21							カマド焼土面だけ残存
S158	N20	方形	N45°E	残4.6×4.2	北周壁			東側削平
S159	N20	方形	N28°E	残5.0×残5.4	南周壁			
S160	N21	正方形	N21°E	6.6×6.3	北周壁	カマド右脇	6個	火災住居跡, 4本柱穴, 土器一括
S161	O20	方形	N45°E	4.2×残1.2	西周壁?			西周壁付近だけ残存
S162	O20	正方形	N85°E	4.5×4.5	北周壁		1個	
S163	N21	方形	N65°E	残2.1×残5.0	北周壁			残りが悪い
S164	N21	正方形	N11°E	5.0×5.0	北周壁	床南西隅	1個	貯蔵穴で土器一括
S165	O20				西周壁?			平面プラン捉えられなかった
S166	L24・M24	方形	N80°E	3.7×残4.0	西周壁	カマド右脇	5個	カマド右脇土器一括, 粘土溜
S168	N21・N22	方形	N23°E	5.1×残4.1	西周壁			北東隅床に焼土面
S169	O20	方形	N32°E	7.7×残1.2				東周壁付近だけ残存
S170	N20・N21	長方形	N20°E	4.4×3.1	西周壁			
S171	N21	方形	N30°E	2.8×0.8				東周壁付近の一部だけ残存
S172	M21							カマド焼土面だけ残存
S173	N21	方形	N28°E	4.6×4.0				
S174	N21	略正方形	N70°E	3.4×3.4	東周壁			
S175	N21	略正方形	N58°E	6.5×5.9	西周壁	カマド右脇	2個	土器一括, 粗製土師器杯多
S176	M24	方形	N63°E	4.7×4.1	西周壁		1個	カマド右脇床下ピット
S177	L24・M24	方形	N0°E	4.0×3.7	北周壁			南周壁より北周壁が長い
S178	N21	方形	N0°E	残3.2×2.9	西周壁			
S179	N21	方形	N83°E	3.6×残2.5				西側削平
S180	N21	方形	N32°E	6.5×残5.4	西周壁			カマド内・周辺で土器一括
S181	O20	略正方形	N16°E	5.9×5.4	西周壁		2個	カマド煙道部掘形あり
S182	M23	長方形	N21°E	4.6×4.0				北西隅床面で土器一括,
S183	M24	正方形	N36°E	5.0×4.8	西周壁		4個	4本柱穴
S184	M23・M24	略正方形	N21°E	4.8×4.4	西周壁		1個	カマド内で土器一括
S185	L23・M23	方形	N0°E	5.1×残3.1	西周壁		1個	土器一括, 碗形土師器杯
S186	M23	方形	N26°E	3.9×3.4	西周壁		2個	カマド対面に2本柱穴
S187	N20・O20	方形	N7°E	5.1×残2.4	西周壁		3個	カマド右脇で円面硯出土
S188	M22	正方形	N25°E	3.6×3.5				鍛冶工房跡, 羽口・鉄滓
S189	N21	方形	N34°E	4.8×残2.0	北周壁			北側半分だけ残存
S190	N21	長方形	N55°E	4.1×3.2	南周壁			周壁なし, 床面だけ残存
S191	N21	方形	N40°E	6.5×残4.0	北周壁			カマド内・周辺で土器一括
S192	N21	方形		残2.4×残1.3	南周壁			カマド左袖周辺だけ残存
S193	N21	方形	N22°E	3.7×残1.9				西半分だけ残存
S194	M22	方形	N0°E	5.4×残3.8	北周壁			カマド内・東側床面で土器一括
S195	M22	正方形	N32°E	6.5×6.5	西周壁			覆土ほとんどなく, 床面露呈
S196	M22	正方形	N22°E	5.4×5.2	北周壁			
S197	N23	正方形	N53°E	5.1×5.0	西周壁		2個	北東隅調査区外
S198	N23	方形	N29°E	6.0×残2.3	西周壁		3個	カマド天井部土師器甕補強
S199	M23・N23	正方形?	N11°E	6.1×残5.5	西周壁		2個	東周壁削平

表3 住居跡一覧(3)

No.	グリッド	平面形	主軸方位	規模(m)	カマド	貯蔵穴	ピット	備考
S I 100	M23	正方形	N27° E	7.2×7.0	南周壁			
S I 101	M22・M23	正方形	N40° E	6.4×5.9	西周壁			竪穴南西部ℓ4で土器一括
S I 102	M22・23, N22・23	正方形	N18° E	6.2×6.0	南周壁		8個	4本柱穴?, 筒型土製品
S I 103	N20	正方形?	N8° E	5.3×残4.8	北周壁		3個	カマド前面で土器一括
S I 104	N20	方形	N15° E	7.5×残3.5	西周壁			北側削平
S I 105	N22	方形	N23° E	残5.0×残4.9	西周壁			東側調査区外
S I 106	N21	長方形	N19° E	4.1×3.3	北周壁			
S I 107	N22	方形	N43° E	残4.9×残3.1				東側調査区外
S I 108	N22	方形	N35° E	6.2×残3.5	西周壁			カマド内土器一括, 土製勾玉
S I 109	M23	長方形	N20° E	4.5×3.3	西周壁		1個	カマド土器一括, 平面プラン釜み
S I 110	M23		N26° E	5.7×5.4	北周壁			西周壁削平
S I 111	M22	長方形	N24° E	6.5×5.0	西周壁			竪穴中央に廃棄土坑S K18
S I 112	N21・O21	正方形	N29° E	4.4×4.2	東周壁			土器一括, 南側床面露呈
S I 113	N21	方形	N0° E	3.8×3.3				
S I 114	N22	方形	N33° E	4.5×残3.6	西周壁			東・北周壁削平
S I 118	O20	正方形	N30° E	4.1×3.9	北周壁		1個	カマド内・周辺土器一括
S I 119	M21	方形	N18° E	残3.0×残1.4	西周壁		1個	カマド周辺だけ残存
S I 120	N22	方形	N36° E	5.5×残3.7	西周壁			東側削平
S I 121	N21	方形	N14° E	4.2×残3.4	北周壁	カマド右脇	1個	南周壁削平
S I 122	M22	方形	N0° E	5.4×残4.0	北周壁	カマド右脇	1個	貯蔵穴から土器一括
S I 123	M22	方形	N0° E	4.1×残1.7		東周壁北寄	1個	貯蔵穴から土器一括
S I 124	N22	方形	N28° E	3.8×残3.1				西周壁削平
S I 125	M22・M23	長方形	N30° E	5.6×4.3	南周壁		6個	
S I 126	M22	方形	N67° E	残3.5×残2.2				北東部だけ残存, 筒型土製品
S I 127	M23・M24	方形	N60° E	4.0×残1.8				南西側削平
S I 128	N21	方形	N19° E	残3.2×残2.1				北東部だけ残存
S I 129	N22	方形	N20° E	9.5×残3.2				南東部に焼土面, 土器一括
S I 130	M21・N21	方形	N18° E	残3.5×残2.8				南東部だけ残存
S I 131	N21	方形	N25° E	残6.9×残4.3	西周壁		1個	東側削平
S I 134	N21・O21	方形	N26° E	4.4×残2.3	南周壁			東側削平
S I 135	N21			残5.5×残3.5				周壁残りなし
S I 136	N22	長方形	N13° E	残4.4×3.8				土器一括, 丸玉・平玉・水晶
S I 137	O21	方形	N40° E	残2.6×残1.0				笠型須恵器蓋
S I 138	M22・N22	方形	N20° E	8.3×7.0	西周壁			大型住居跡, 住居掘形, 丸玉
S I 139	N22	方形	N36° E	5.4×残3.1				東側削平
S I 140	N21			残4.4×残2.6				周壁残りなし
S I 141	M23	方形	N42° E	残2.6×残1.3	西周壁			南西隅の他調査区外
S I 142	N21	長方形	N20° E	8.8×7.0	西周壁	カマド左脇	7個	間仕切り溝, カマド天井筒型土製品
S I 143	M22・N22	方形	N30° E	8.9×7.4	西周壁	カマド右脇	1個	土器一括, 太刀鏝
S I 144	M22・23, N22・23	正方形	N22° E	5.7×5.6	西周壁			土器一括廃棄,
S I 145	M22・M23	略正方形	N31° E	4.7×4.4	北周壁			
S I 146	N22			残2.8×残0.7				西周壁側一部の他調査区外
S I 147	N22	方形	N35° E	残4.0×残2.1				太刀刀身
S I 148	M24	方形	N33° E	7.0×残7.3	西周壁		4個	4本柱穴?
S I 149	M23・M24	方形	N39° E	残5.2×残2.1				
S I 151	M22・N22	方形	N30° E	7.5×残5.4	西周壁			カマド2基並列, 前後不明
S I 153	M22	方形	N28° E	6.4×残4.7	西周壁			
S I 154	M22	方形	N15° E	3.7×残3.3				北側削平
S I 155	N21	方形	N15° E	8.4×残2.2				北周壁付近だけ残存

表4 住居跡一覧(4)

No	グリッド	平面形	主軸方位	規模(m)	カマド	貯蔵穴	ピット	備考
S I 156	N21	方形	N27° E	6.2×残5.7	北周壁 [?]			北周壁削平, 土製丸玉
S I 157	M22・M23	正方形	N14° W	5.6×5.6	西周壁			南側削平
S I 158	M23・N23	長方形	N21° E	4.4×4.0	南周壁			S D05覆土上面に構築
S I 159	M22	方形	N30° E	残4.6×残4.0	西周壁			カマド燃焼部一括土器
S I 160	N22	方形	N26° E	6.3×残6.2	北周壁			東周壁削平, 石製平玉
S I 161	M23・N23	略正方形	N0° E	6.3×6.0	西周壁		4個	平面プラン歪み, 4本柱穴
S I 162	N21	方形	N21° E	残3.0×残2.6			2個	土製丸玉
S I 164	N22	方形	N15° E	4.1×残2.2	西周壁			東側削平
S I 165	N21	方形	N25° E	残5.6×残4.7				残り悪い
S I 166	N22			残1.7×残1.0				カマド燃焼部付近だけ残存
S I 167	M22	方形	N10° E	残3.2×残1.7				北西部だけ残存
S I 169	N21・N22	方形	N23° E	12.0×残5.5	西周壁			本遺跡で最大規模?
S I 170	N22	方形	N30° E	4.9×残4.2				カマド対面張出ピット?あり
S I 173	N22	正方形	N32° E	3.2×3.0	東周壁			小型住居跡
S I 174	M22・N22	正方形	N29° E	3.5×3.4	西周壁			小型住居跡, 周壁なし, 土器一括
S I 178	M23	方形	N5° W	3.1×2.7	北周壁		2個	小型住居跡
S I 180	O19	略正方形	N22° E	4.5×4.5	西周壁			平面プラン歪み
S I 181	O19	長方形	N28° E	残4.8×3.8	西周壁			北ノ脇遺跡と接する
S I 185	N21	方形	N23° E	残3.5×残2.5				周壁残りなし, 壁溝
S I 187	N19・O19	方形	N5° E	残7.1×残4.5				周壁残りなし, 壁溝
S I 191	O19	長方形	N45° E	4.9×4.2				カマド燃焼部カクラン
S I 192	O19	略正方形	N28° E	4.1×3.7				
S I 193	O19	方形	N13° E	残5.5×残2.9				北東部だけ残存
S I 194	O19	正方形	N32° E	5.1×5.0				西周壁削平, 土製丸玉
S I 195	N21・O21			3.8	西周壁			調査区法面で検出
S I 196	O19・O20	正方形	N4° E	3.4×3.3	北周壁			カマド対面周壁際に平石列
S I 199	M22	方形	N17° E	残6.5×残6.5				北周壁削平, 土器一括
S I 200	O19	方形	N20° E	残3.8×3.6				南周壁削平
S I 214	N22	方形	N26° E	残2.8×残1.8	西周壁	カマド左脇	2個	南西部だけ残存

1号住居跡 S I 01

遺 構 (図6~8, 写真10・11)

本遺構は、調査区中央部のM22グリッドで検出された竪穴住居跡である。阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部に営まれており、高木遺跡における遺構分布の西限の1つをなしている。

本住居跡は、今回の調査で最初に着手した遺構である。黒色の堅く締まったLⅢ上面に、明るい色調のやわらかい砂質土の輪郭がみられ、プランが比較的識別しやすかったことが理由である。ただ、南東隅は2号住居跡と重複しており、平面だけで両者の切り合いを決めるのは難しかった。そこで、サブトレンチを入れ、本住居跡の方が新しいことを確認した。

本住居跡の堆積土は、3層に分層された。土層断面図が示すように、典型的なレンズ状堆積であり、遺構は自然埋没したと考えている。このうち、最上層のℓ1には、多量の土器が廃棄されており、廃絶後の窪みが捨て場に利用されていたことが窺えた。

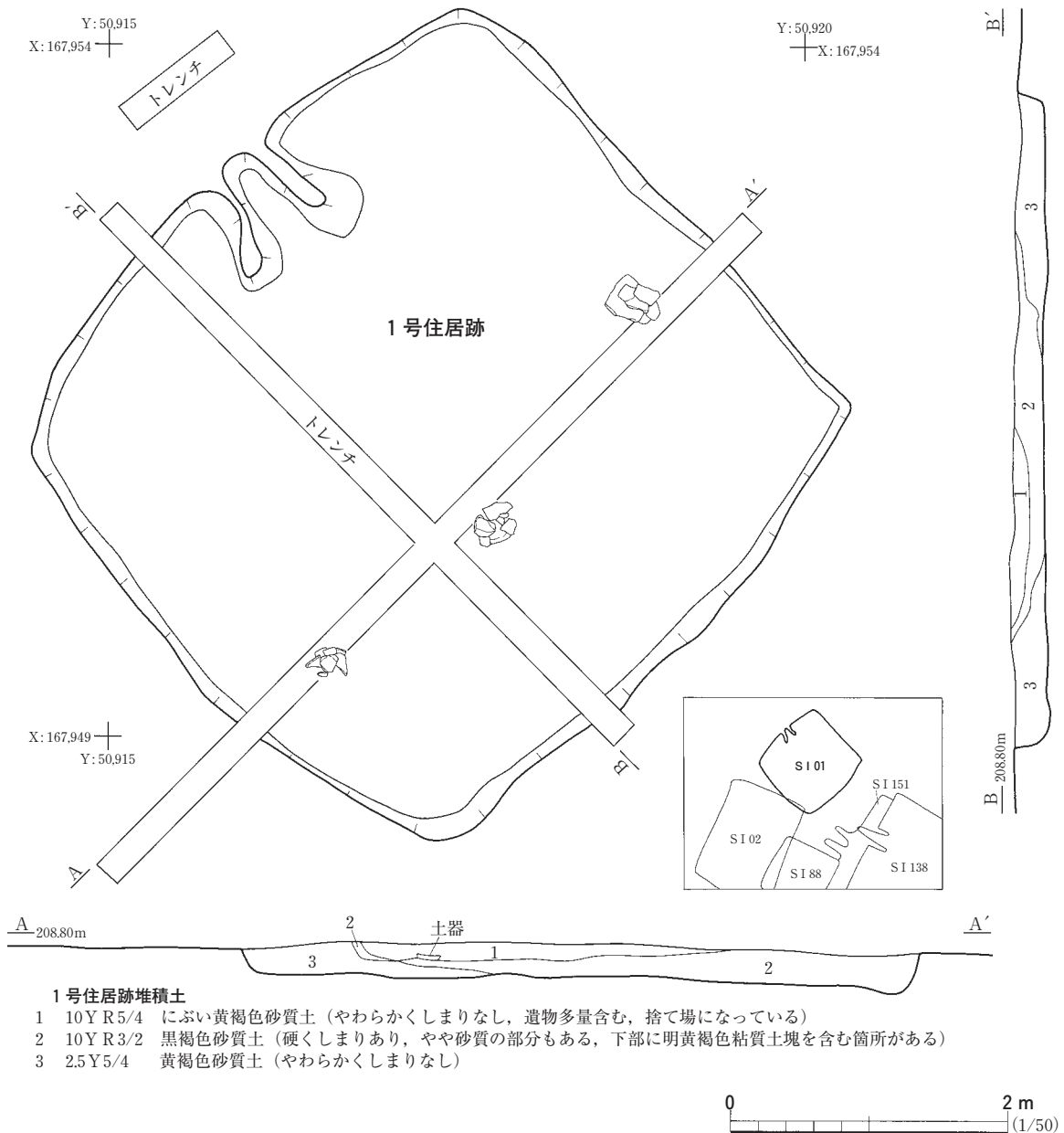


図6 1号住居跡

本住居跡の平面形は、正方形基調を呈している。ただ、西周壁と南周壁は、外側へ緩くカーブを描いている。規模は、東西4.9m、南北4.8mを測り、高木遺跡の中では中形の部類に属する。方向は、発掘基準線北に対して東に44°振れている。

床面は全面が堅く締まり、部分的に貼床土が認められた。L IVと明黄褐色粘質土粒の混合土で、移植ベラで表面を削ると、強い締まりが感じられた。ただ、ベルト設定位置にうまく掛からず、土層断面図には図示できていない。床面と検出面の比高差は、20cm前後で平均している。

本住居跡のカマドは、西周壁中央で検出された。煙道部は失われており、燃焼部だけ残っていた。燃焼部は、袖長84cmを測り、真上からみた状態は「ハ」の字状を呈する。袖は、3回以上の工程を踏んで構築されたことを断面観察で確認している。

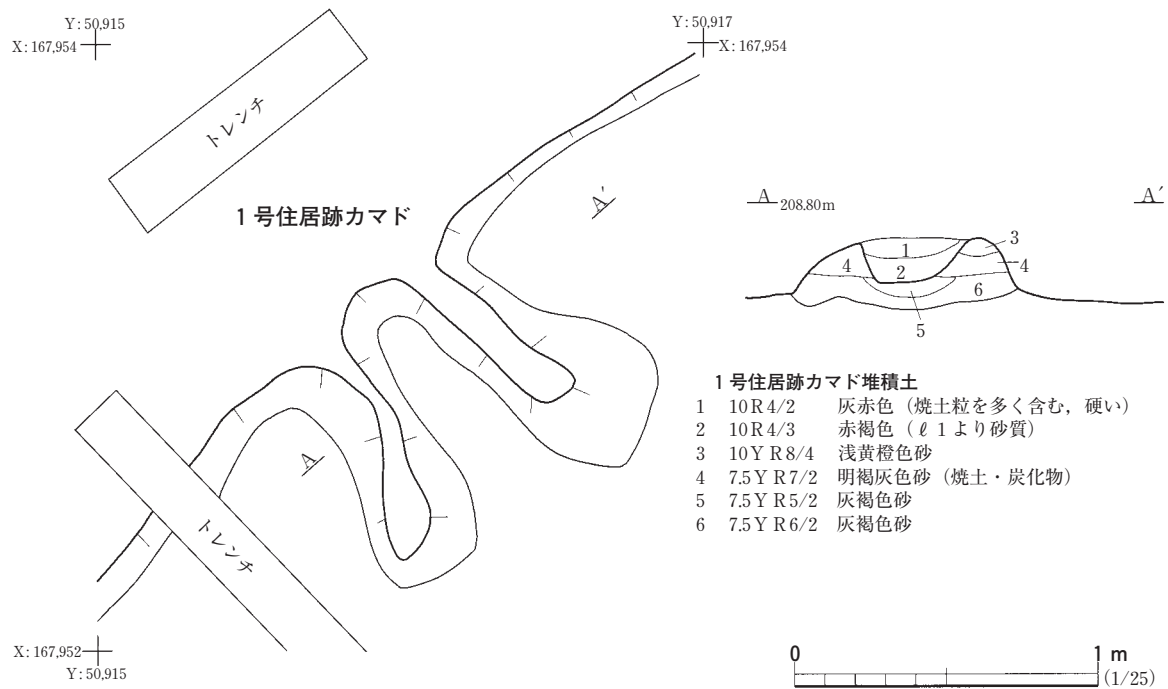


図7 1号住居跡カマド

焚口幅は、内側で計測すると、40cmを計測する。底面は、ほとんど焼けておらず、長期間使用された様子はみられなかった。

遺物 (図9～12, 写真494～496)

遺物量は多く、破片点数で、土師器964点、須恵器7点、土製品1点が出土した。それらは、出土状況の違いで2分できる。

1つは、最上層のℓ 1から出土した一群である。浅い窪みに大型の土器片がひしめき合った状態で出土しており、接合した結果、図8下段に示した14点を図示することができた。土師器煮炊具が主体をなし、器形全体を復元できるものが9点含まれる。これらは、住居廃絶後の窪みに一括廃棄された土器群と考えている。

もう1つは、床面に残された1群である。内訳は、煮炊具が4点だけで、本来この住居跡で使用されていたはずの数量を大きく下回っている。しかも、それらが出土したのは、厨房から離れた位置であり (図8上段)、廃絶時に多くが外へ持ち出されたと考えられる。

では、図示遺物を個別解説して行く。

図9-3・4は、土師器高杯である。どちらも杯部を欠いている。脚部は、裾が大きく反り返り、内側は水平に接地している。外面調整は、縦位のヘラケズリである。4は、脚部に2方向からの透かしが入る。

図9-5～7, 図10-1は、土師器小型甕である。図9-6・7, 図10-1は、口縁部の立ち上がり方に違いが認められるが、外面が、下半部中心にボロボロになっており、内面に煤がリング状に巡る点で一致する。このことから、明らかに煮炊具であることが分かる。また、底部には、木葉

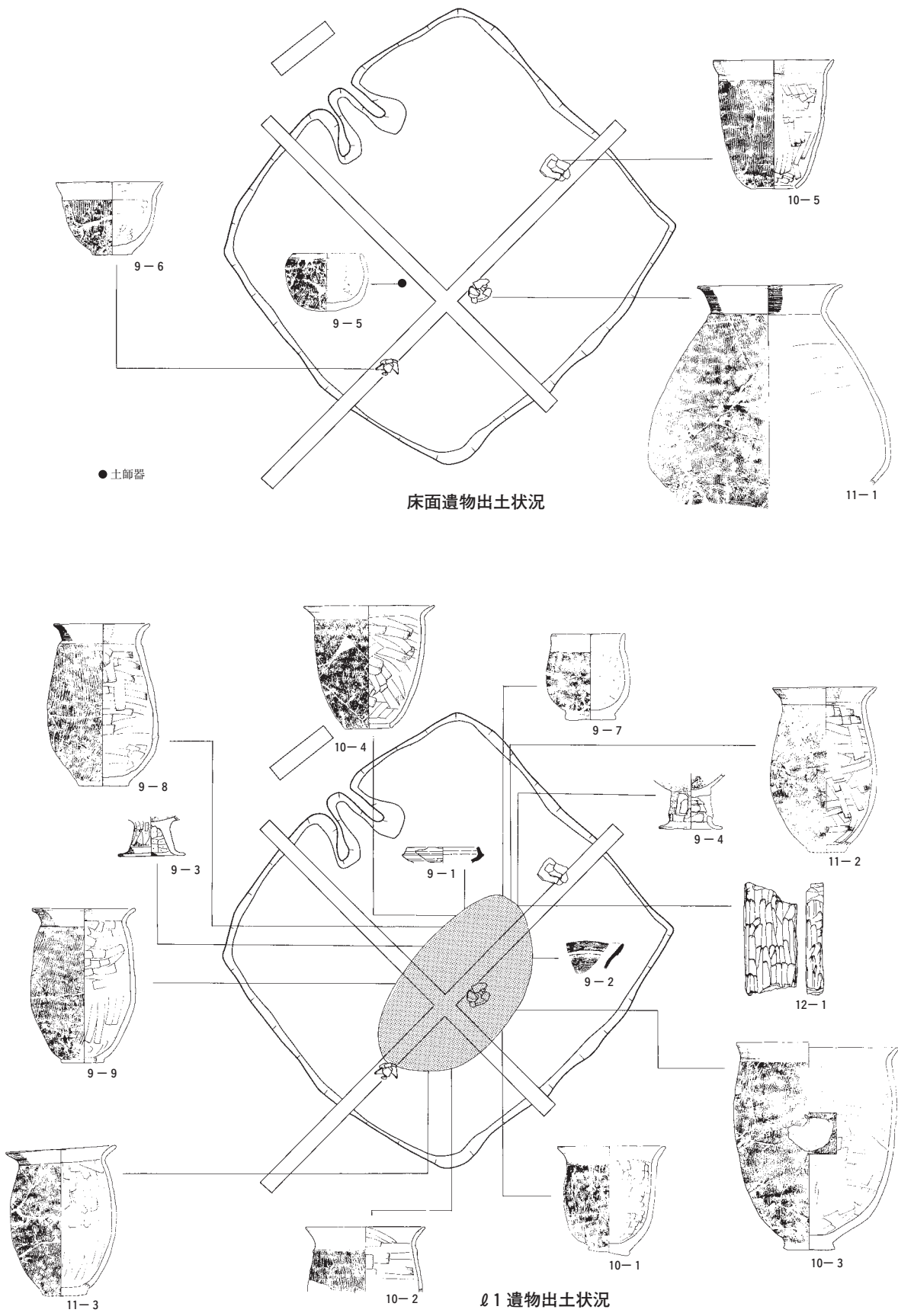


図8 1号住居跡遺物出土状況

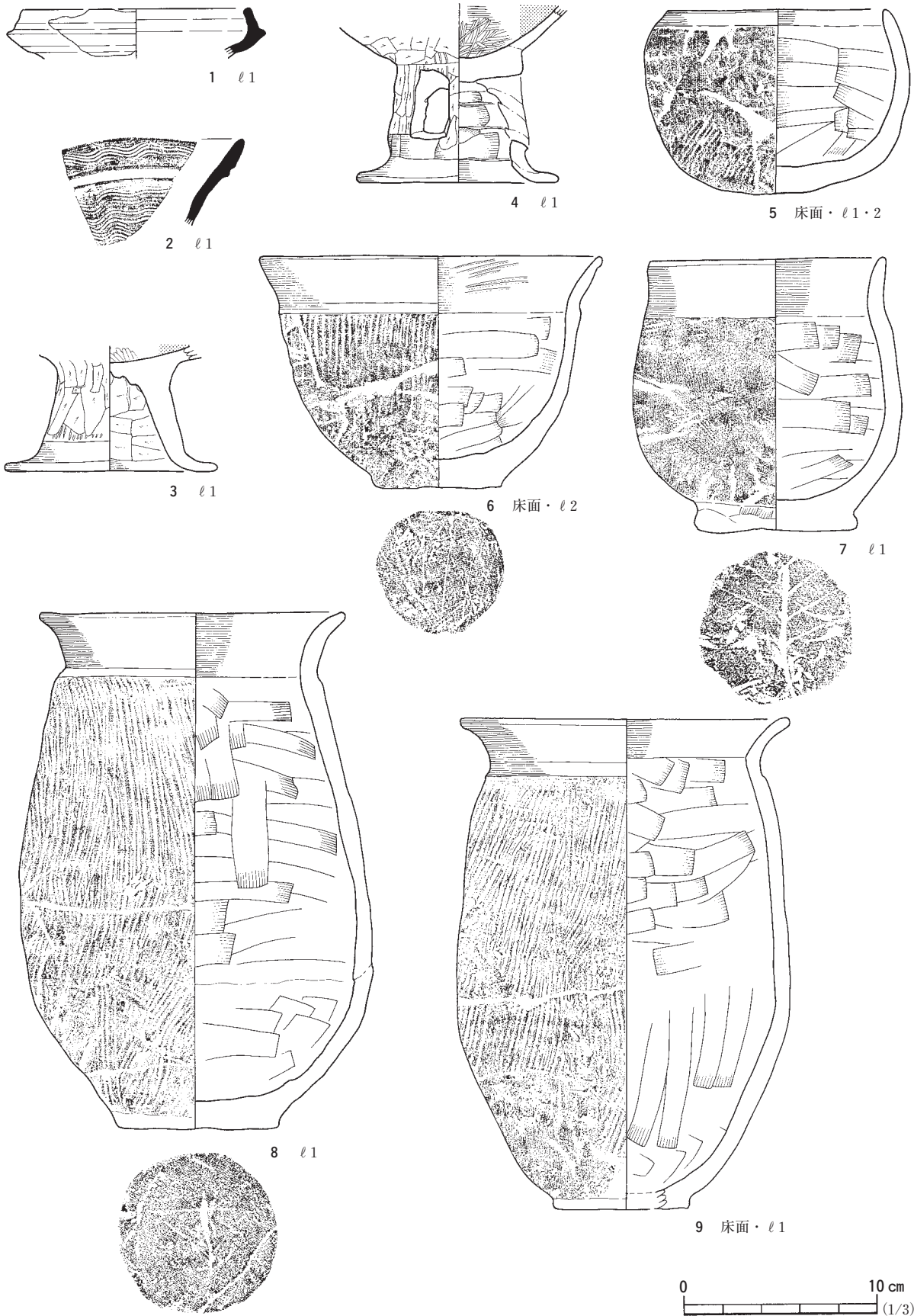


図9 1号住居跡出土遺物 (1)

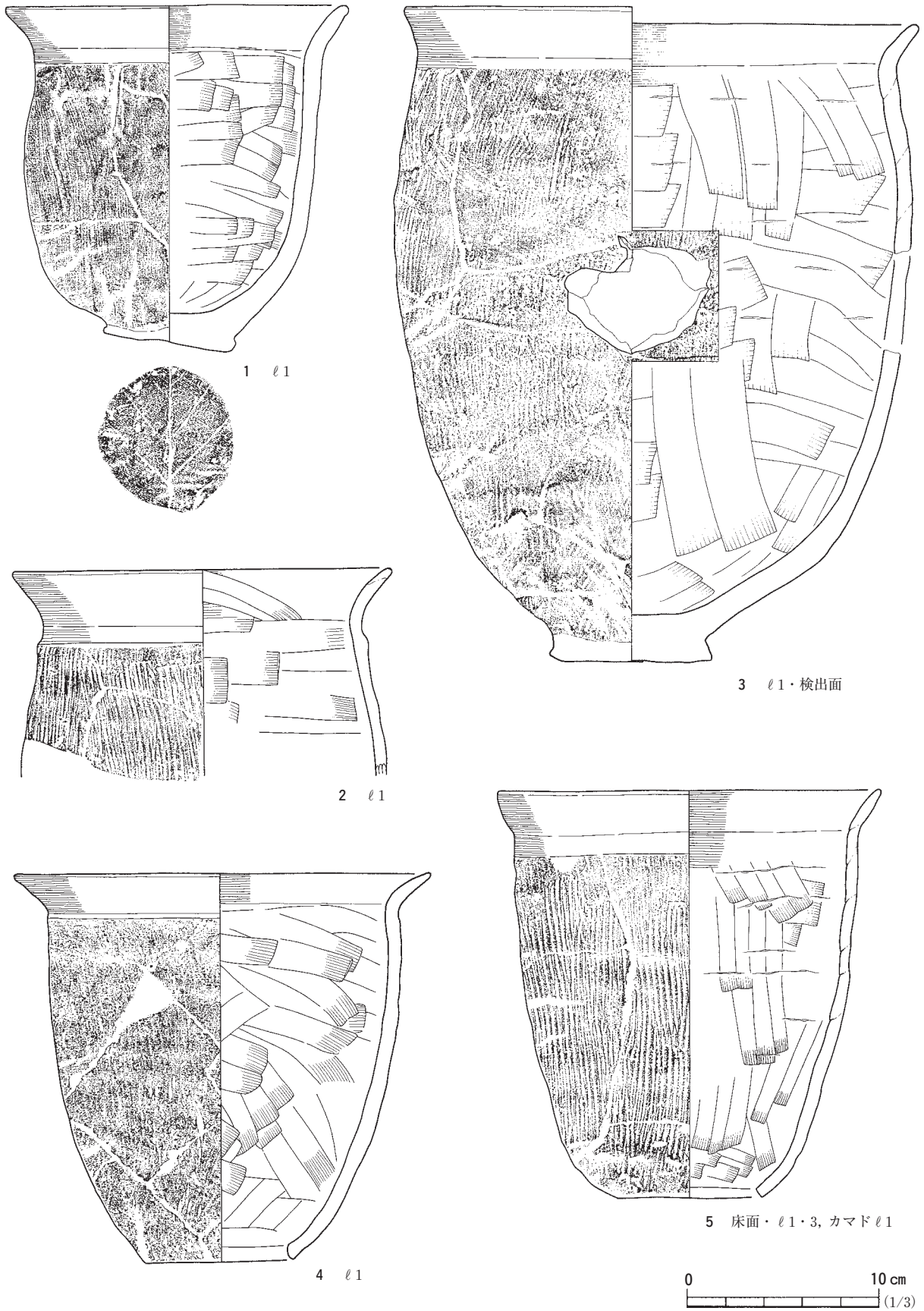


図10 1号住居跡出土遺物(2)

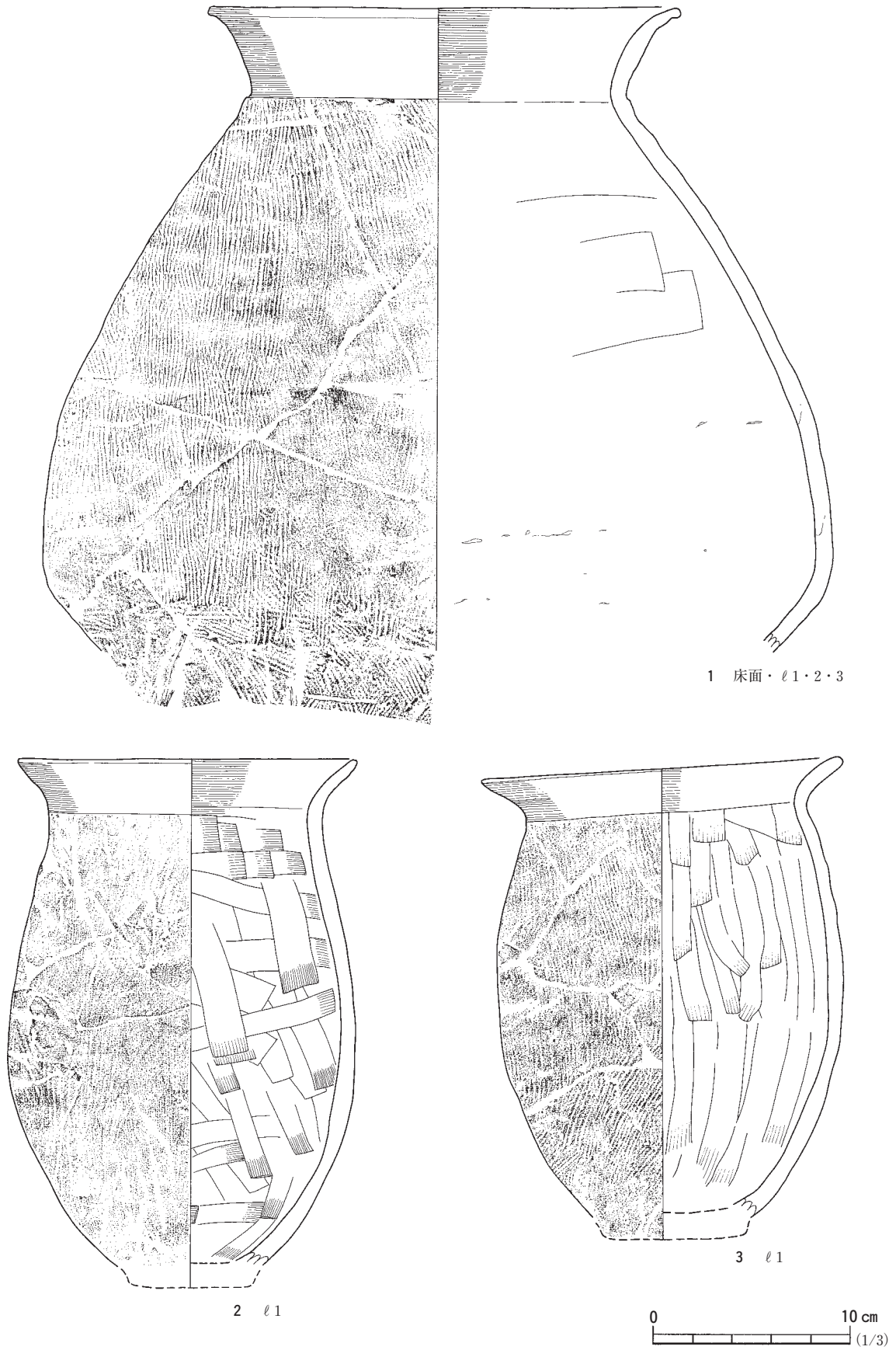


図11 1号住居跡出土遺物 (3)

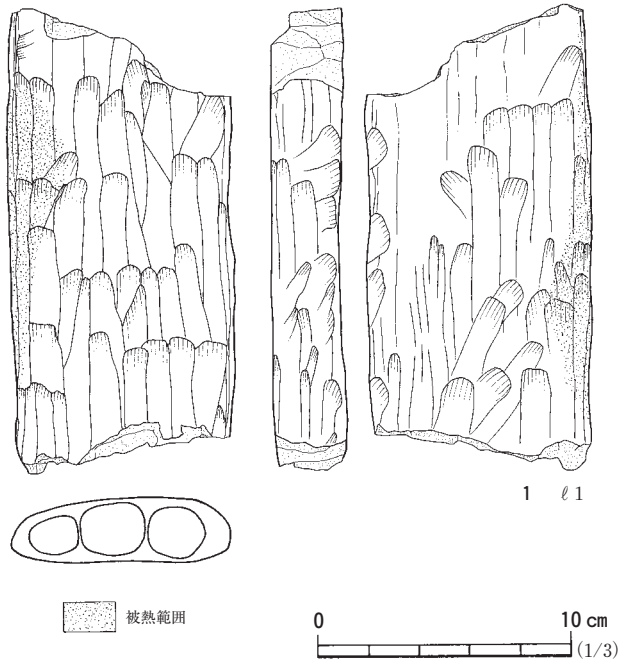


図12 1号住居跡出土遺物（4）

図11-1は、大型の球胴甕で、撫で肩・下膨れの胴部形態をなす。外面は、ハケメ調整されている。胴部下半を欠くが、器高40cmを越える大きさになると推定される。

次に須恵器を記述する。

図9-1は、須恵器杯身片である。口縁部が短く立ち上がっており、端は丸く収められている。口径は、12cm前後であろうか。陶邑編年に当てはめると、TK209~TK217の過渡期あたりに位置付けることが可能と思われる。

図9-2は、須恵器甕の口縁部~頸部片である。口縁部下端は、凸帯で区画され、その上下に波状文が描かれている。焼成は良好・堅緻で、胎土に白色砂粒が認められる。色調は、表面が青灰色をなし、内部は赤褐色を呈する。

図12-1は、板状土製品である。粘土紐を3本束にしたものを、表面ナデ調整で仕上げている。他の住居跡の所見から、カマド天井部構築材の可能性が指摘される。

ま と め

本遺構は、今回の調査で最初に手掛けた竪穴住居跡である。カマドの他に細部施設は検出されなかったが、遺存状態には比較的恵まれていた。

遺物の出土状況から、住居廃絶時に土器の多くが持ち出されたことが窺えた。また、埋没がかなり進んだ段階で、土器が一括廃棄されている状況が捉えられた。とくに後者は、狭い範囲の中で多量の土器が出土しており、堆積土出土とはいえ、一括資料に準ずる扱いができる土器群であると考えている。

なお、遺物の時期は、床面出土、l1出土の違いにかかわらず、栗圀式の範疇に収まる。

本住居跡が営まれたのは、栗圀式期と考えている。 (菅原)

痕が確認される。

図9-5は、器面に煮炊痕跡が認められず、他の3点とは違った使用方法が考えられる。

図9-8・9, 図10-2・3, 図11-2・3は、中~大型の土師器長胴甕である。外面は、ハケメ調整で統一され、強い規則性が感じ取れる。形態的にみると、図10-3だけは、最大径が口縁部にあり、他と違った特徴を有している。また、この甕は、胴部中央が焼成後に穿孔されている。他のものは、器高25cm前後で、胴部中央から下位に最大径のある通有の長胴甕の特徴を有している。

2号住居跡 S I 02

遺 構 (図13, 写真12)

本遺構は、M22グリッドのLⅢ・Ⅳ上面で検出された竪穴住居跡である。営まれた場所は、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部にあたり、高木遺跡における遺構分布の西限の1つをなしている。

本住居跡は、今回の調査で最初に手掛けた1号住居跡と北東隅で重複している。サブトレンチを入れた結果、本住居跡の方が古い遺構であることを確認した。本住居跡は、この他にも、東側に鍛冶施設を伴った88号住居跡、南側に153号住居跡が重複している。どちらも本住居跡より新しく位置付けられるものである。

堆積土は、2層に分層された。土層断面図が示すように、典型的なレンズ状堆積であり、遺構は

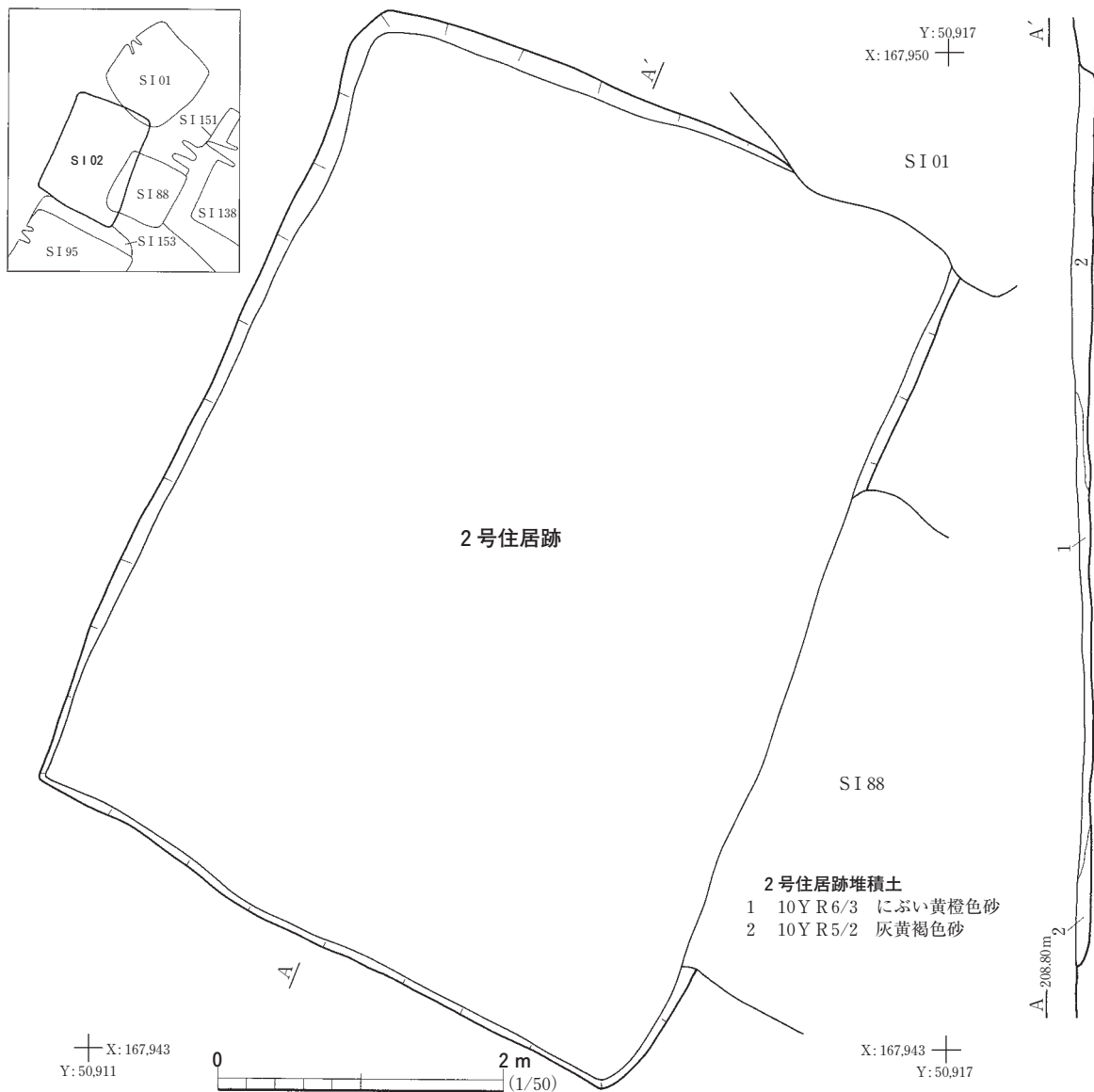


図13 2号住居跡

自然埋没したと考えられる。床面は貼床が認められず、踏み締まりも無かった。検出面と床面の比高差は、8～12cmを測る。

本住居跡の平面プランは、南北に長い長方形を呈している。この点が本住居跡の特徴であるといえる。規模は、南北6.1m、東西4.5mの大きさを測り、中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して東に23°偏している。

細部施設は検出されなかった。カマドに関しては、周壁が失われた東壁中央に付設されていた可能性が考えられる。

遺物 (図14, 写真497)

遺物は、比較的少なく、土師器片95点、石製品1点が出土した。それでも、図示した土師器杯3点から、住居跡の所属時期をある程度把握することが可能である。

図14-1～3は、有段丸底の土師器杯である。すべて床面から出土した。法量は、大中小に分かれている。最も小さな3は、口径10cmを大きく下回り、内面はヘラミガキ・黒色処理が行われていない。1には、底部外面に焼成前に施された十字の線刻がある。これらは、口縁部が強く外反する形態の特徴から、舞台式に位置付けられる。

図14-4は、 $\ell 1$ 出土の砥石である。使用痕跡が顕著に残る。断面は方形をなす。

まとめ

本遺構は、阿武隈川に面した自然堤防の西縁に営まれた竪穴住居跡の1つである。平面プランは南北に長い。

営まれた時期は、床面出土の土師器杯が舞台式に比定されることから、6世紀代に位置付けておきたい。

(菅原)

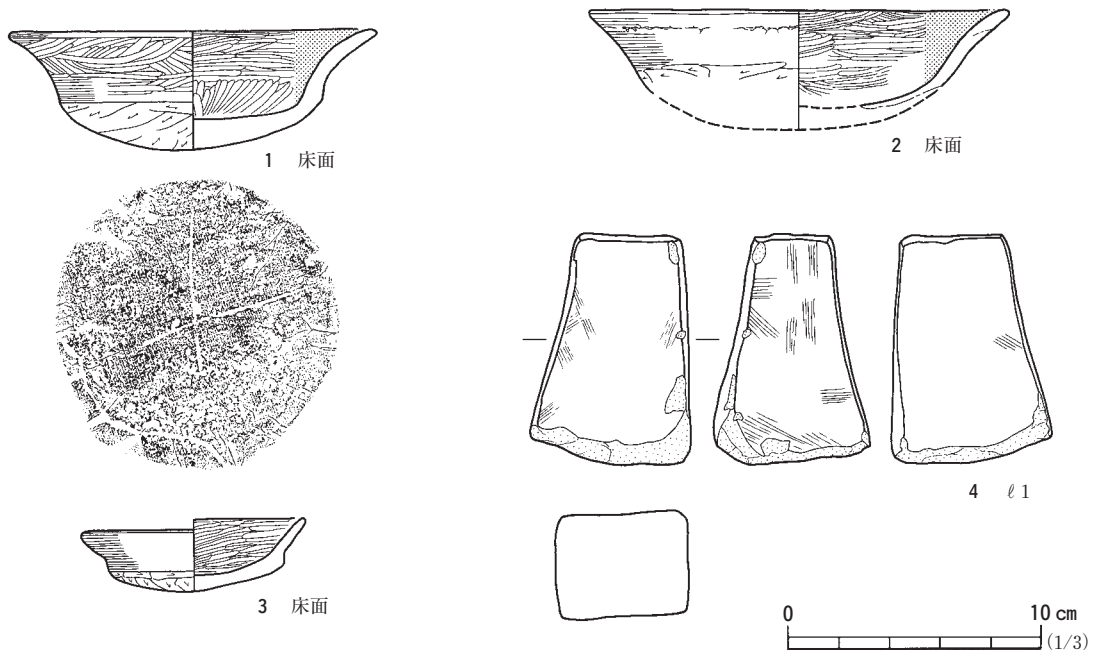


図14 2号住居跡出土遺物

3号住居跡 S I 03

遺 構 (図15・16, 写真13~15)

本遺構は調査区北部のN20グリッドで検出された竪穴住居跡である。重複する住居跡との関係は20号住居跡→11号住居跡→3号住居跡となり、その中では最も新しい。

本住居跡が位置する一帯は、阿武隈川が運んできた土砂が幾重にも複雑に堆積しており、本住居跡を含めてL II中からの遺構の検出は極めて困難であった。そのため本住居跡もL II中よりカマドラしき焼土の範囲は確認していたものの、全体的なプランの検出は困難で、東側はL III上面まで掘り下げている。住居跡の西側を断ち割るように土層観察用のトレンチを設定し、その断面から西壁の立ち上がり部分を確認したことから竪穴住居跡と判断して掘り込みを開始した。住居跡の西側は比較的検出がしやすかったが、住居跡の東側では攪乱も多く、北周壁、東周壁の立ち上がりは確認

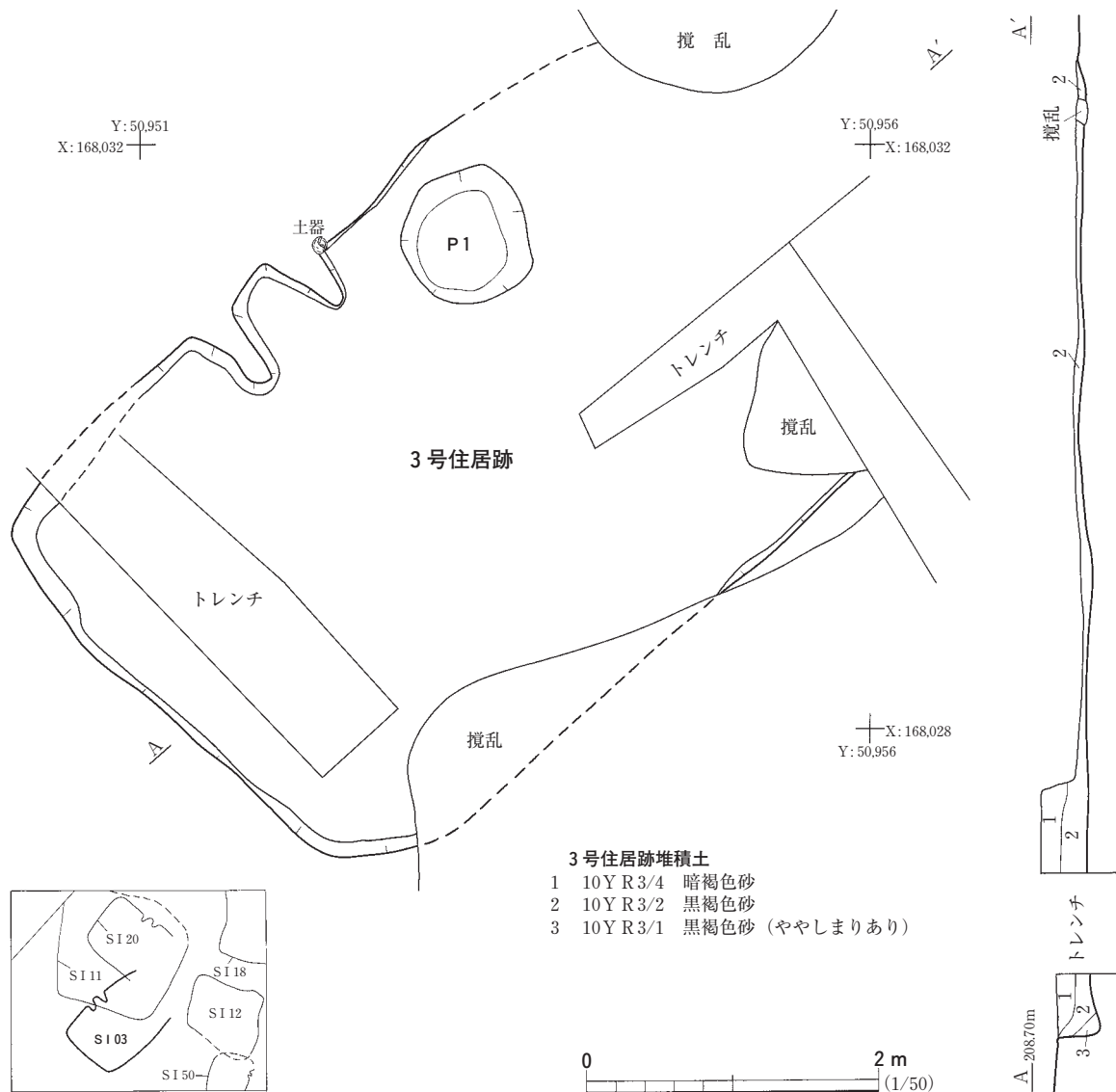


図15 3号住居跡

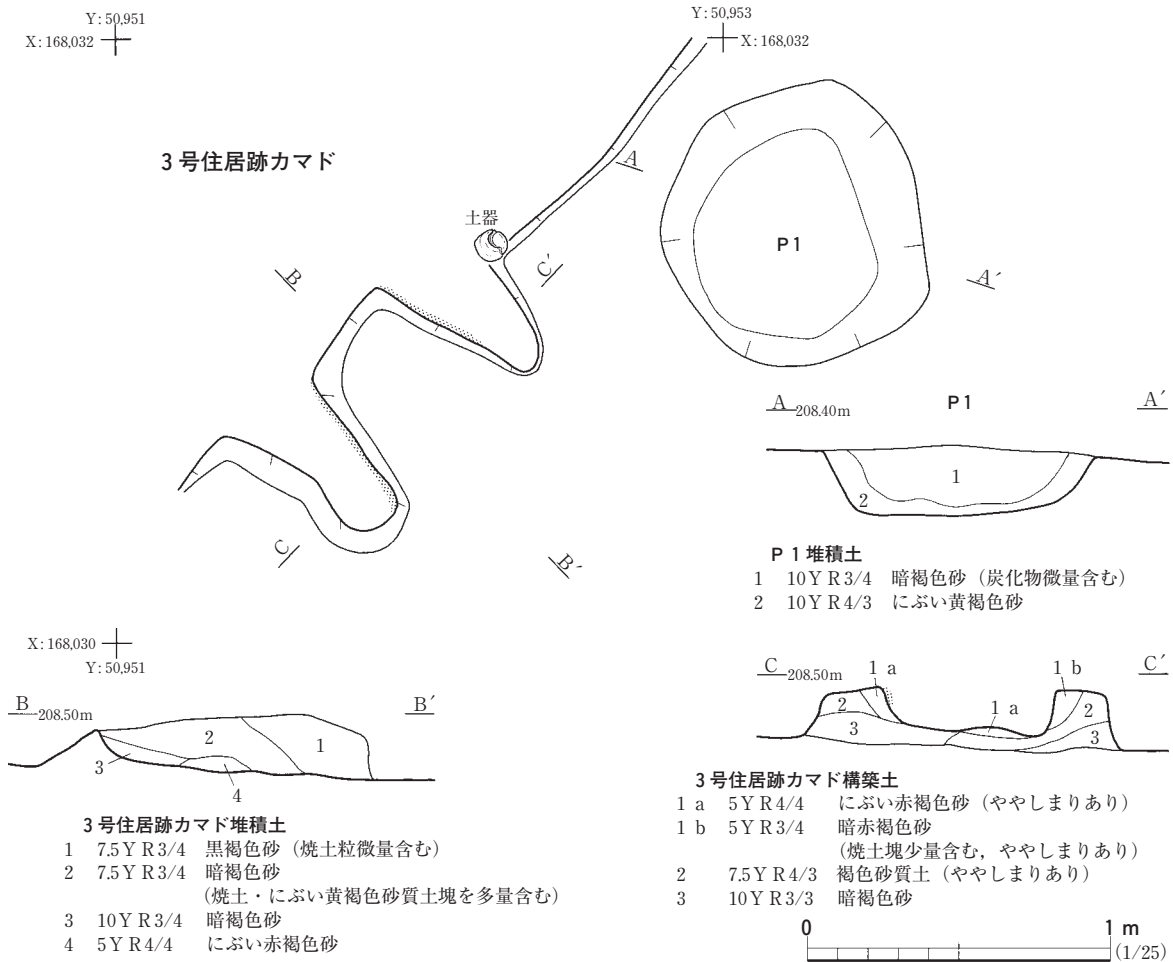


図16 3号住居跡カマド

できず、住居範囲は確定できなかった。

本住居跡の堆積土は3層で、南周壁際からは壁の崩落土と考えられるややしまりのある砂層の三角堆積を確認できたことから自然堆積と考えられる。しかし、住居跡の床面上に堆積する黒褐色砂層はL IIIとほとんど識別できず、北周壁の立ち上がりや床面の踏み締まりは認められなかった。

本住居跡の大きさは南周壁が3.6m、カマドが付設する西周壁の残存する部分で4.4mを測る。カマド位置を西周壁のほぼ中央と想定すると、住居跡の平面形が長軸約5mの南北に長い長方形と考えられる。検出面から床面までの深さは遺存状態の良い南周壁で約30cmを測り、南周壁はほぼ直立して立ち上がる。床面は攪乱等で乱れているがほぼ平坦に造られていたようである。住居跡の主軸方位はN46°Eで、河川の流路方向にあわせて造られている。

住居跡の付属施設は、カマドとカマド脇の1号ピットを検出したが、他は柱穴等も含めて確認できなかった。ピットはカマド右袖側の西周壁近くから検出し、堆積土には炭化物を僅かに含んでいる。大きさは一辺が約35cmの不整形とも不整形ともいえる形をしており、深さは床面から約80cmほどで、壁は緩やかに立ち、底面は平坦である。ピットの性格を判断できるような出土遺物等は認められなかったが、その形態とカマドとの位置関係から本住居跡の貯蔵穴と考えられる。

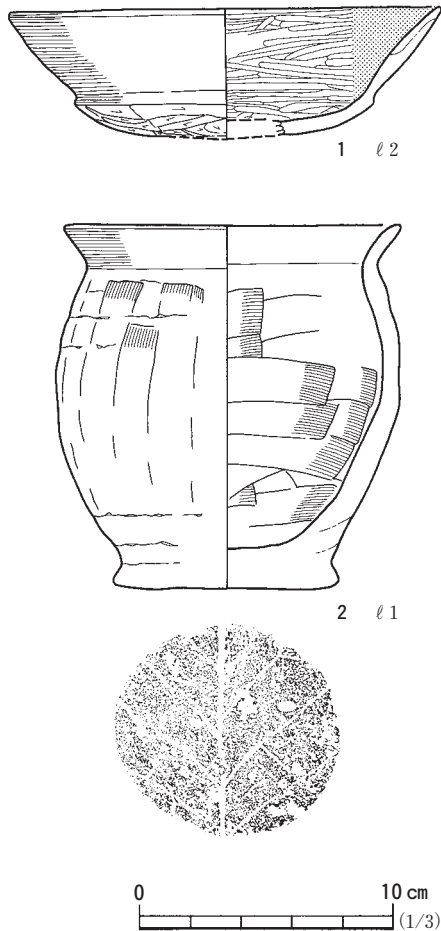


図17 3号住居跡出土遺物

部分的に輪積み痕が認められる。また、底部からは約10粒ほどの粉痕らしいものも確認されている。

まとめ

出土遺物と重複する住居跡との関係から、本住居跡は栗圀式期に営まれたようである。

本住居跡は調査区北部で検出された竪穴住居跡で、一番最初に調査を行ったものである。遺存状態はよくないが、西側に流れる阿武隈川を意識して造られており、流路方向に主軸が傾き、河川側の西周壁にカマドが付設される。大きさも約5m前後であり、本遺跡内で検出された一般的な住居跡といえる。

(大波)

4号住居跡 S I 04

遺構 (図18, 写真16)

本遺構は、M23グリッドのL IV上面で検出された竪穴住居跡である。営まれた場所は、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部にあたり、高木遺跡における遺構分布の西限の1つをなしている。また、1号溝跡の南側に位置しており、大溝で囲まれた集落域の外側に営まれている。

本住居跡は、他の遺構と重複関係を有していない。ただ、残りは不良で、西周壁は削平され、他にも、南側に向かって壁高が次第に低くなっている。さらに、北周壁・東周壁の一部に攪乱が及んで

カマドは西周壁の南西隅から約2.5mのところ付設されている。燃焼部は検出できたが、煙道や煙出しは確認できなかった。燃焼部の堆積土からは煙道方向から土砂が流入して堆積した状況が認められる。カマド袖は両袖とも西周壁から住居内に約50~60cmほど張り出し、床面からは約15cm前後の高さしか遺存しない。燃焼部底面の奥行きは約50cm、幅は約45cmで、焚口から奥壁にかけて緩やかに傾斜している。カマド袖の側壁は赤く熱硬化しているが、底面はそれほど焼けていない。カマドの断ち割りからは、はじめ底面を造り、その後で両袖から天井部にかけてややしまりのある砂質土で覆っていたようである。

また、その構築土には焼土塊が含まれていた。

遺物 (図17, 写真497)

本住居跡から出土した遺物のうち、図示できたものは土師器2点である。図17-1は内黒の有段丸底の杯で、体部と口縁部の境に明瞭な段が認められ、口縁部は大きく外反している。同図-2は小型の球胴甕で、底部が張り出し、木葉痕が認められる。この甕は煮炊具として利用されていたらしく、器面は熱を受けて剥離が著しい。そのため、部

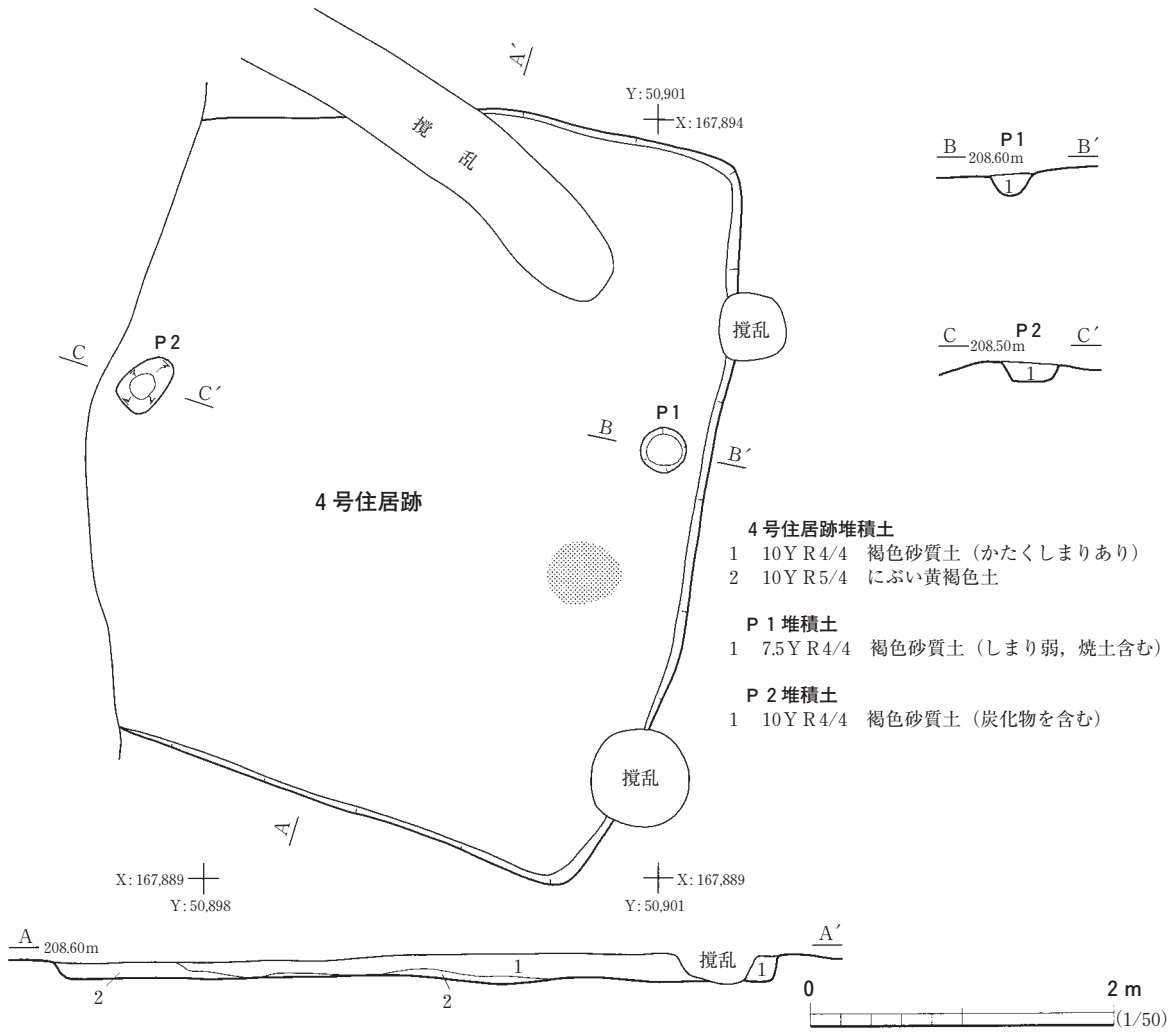


図18 4号住居跡

いる。

堆積土は、2層に分層された。土層断面図が示すように、レンズ状堆積であり、遺構は自然埋没したと考えている。床面は貼床が認められず、踏み締まりも無かった。検出面と床面の比高差は、10～17cmを測る。

平面プランは、検出状況でみると、台形状の歪んだ方形を呈している。これは、攪乱が随所に及んでいたことが、影響していると思われる。規模は、南北4.7m、東西4.1m以上の大きさを測り、高木遺跡では、中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に17°偏している。

カマドは、東周壁側の床面に、焼土面だけが残っていた。位置は、少し右に偏っている。

他に、細部施設は、ピットが2個検出されている。P 1は、カマド左脇に位置するもので、30cm×29cmの円形をなす。床面からの深さは、15cmを測る。位置としては、貯蔵穴になる可能性もあるが、規模が小さすぎるので、否定的に考えている。P 2は、カマド対面にあり、推定される西周壁中央の位置に掘られている。43cm×28cmの楕円形で、床面から12cmの深さがある。入り口に関わる

施設の可能性が指摘できようか。

遺物 (図19, 写真497・498)

遺物は、土師器片166点、須恵器片5点が出土した。遺構の残りが不良であった割に、図示遺物に恵まれた。図19-1・4・6が、確実な共伴資料となる。

1は、床面から出土した有段丸底の土師器杯である。丸みのある底部から、口縁部が内湾して立ち上がる。ℓ1出土の2も、法量が少し小さいだけで、これに類似した形態をなす。

3は、ℓ1出土の土師器高杯である。杯部の形態は、1・2と比べると、口縁部が直線的に外傾している。また、内面がヘラミガキ・黒色処理されていない点が、特徴として指摘できる。脚部は短かく、透かしが入らない。

4は、土師器球胴甕の口縁部片である。床面から出土した。口径19.0cmを測る大型品であるが、

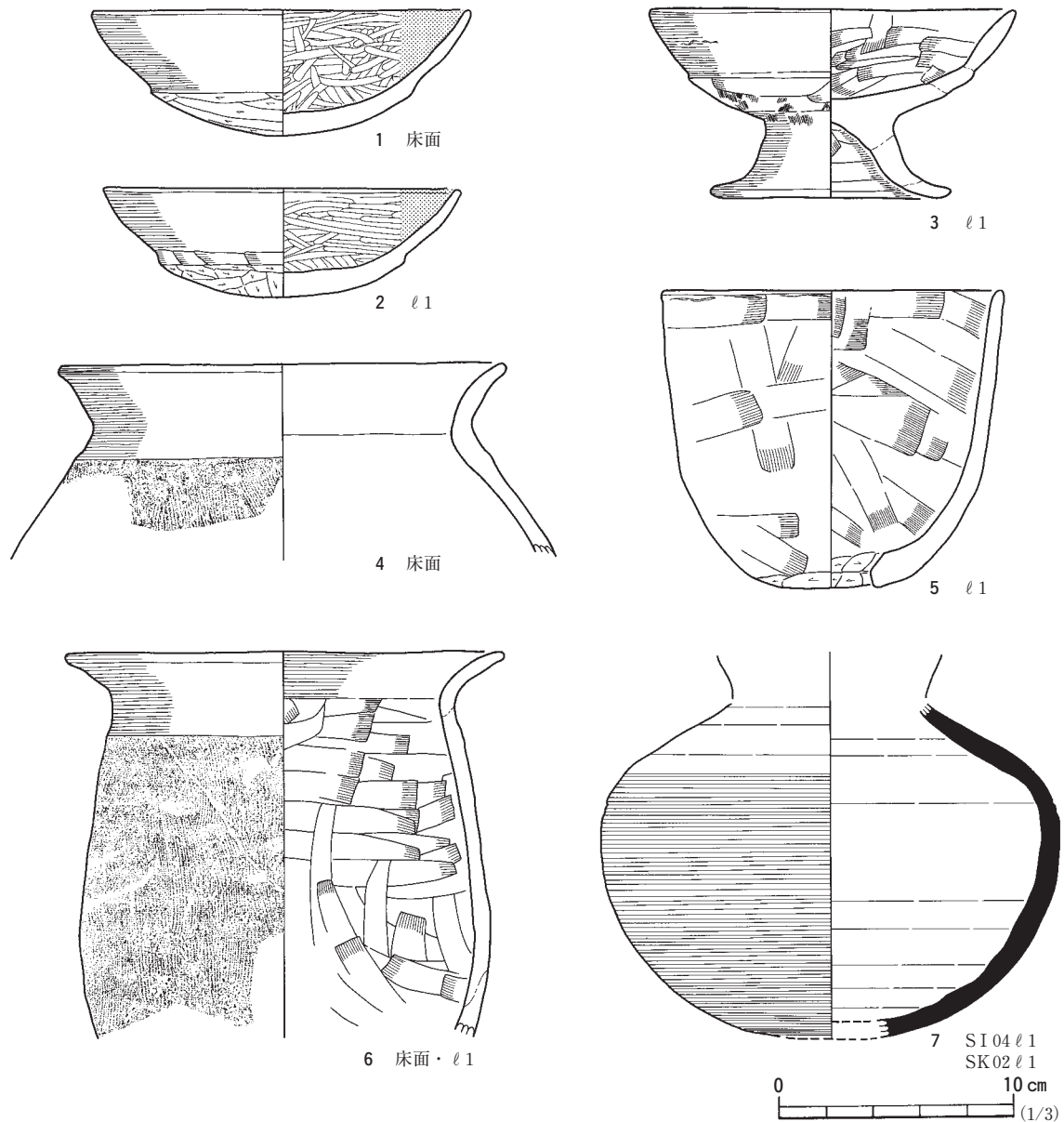


図19 4号住居跡出土遺物

欠落部が大きいので詳細は分からない。外面は、ハケメ調整されている。

6は、床面出土の土師器長胴甕である。胴部最大径は、中位にあるとみられ、下半部が欠落する。外面は、ハケメ調整されている。

5は、 ℓ 1出土の土師器甑である。単孔式で、丸みを帯びた体部から、口縁部が少し外に開き気味に立ち上がる。外面は、ナデ調整である。

7は、唯一の須恵器である。遺構検出時に ℓ 1から出土した。広口甕の胴部片とみられる。肩は、沈線状に窪んで、装飾的效果を上げている。また、胴部肩から底部にかけて、入念なカキメ調整が施されている。この須恵器は、胎土の粒子が均一で、焼成が良く、一見して在地製品ではないと考えられた。そこで、資料を持参し、静岡県湖西窯跡の製品と相互比較したところ、西笠子64号窯跡の製品と酷似するのが判明した。

ま と め

本遺構は、大溝に囲まれた集落域の外側に営まれた住居跡の1つである。カマドは残りが悪く、遺構全体にも随所に攪乱がみられた。

時期に関しては、床面の出土遺物が栗罌式の特徴を備えていることから、7世紀代中心と考えておきたい。また、堆積土中から湖西窯跡の須恵器が出土したことは、当時の物流を考える上で、注目される。

(菅原)

5号住居跡 S I 05

遺 構 (図20, 写真17~19)

本遺構は、O20グリッドでLIV上面から検出された竪穴住居跡である。後背湿地に面した自然堤防の東斜面に営まれている。

本住居跡の残存状態は、比較的良好である。検出面と床面の比高差は、平均して約20cmを測り、周壁の立上がりも、しっかりしていた。堆積土は2層に分層され、土層断面の状態は、レンズ状堆積の様相を示している。したがって、遺構は自然埋没したと考えている。

平面形態は、整った南北に長い長方形を呈している。規模は、南北4.9m、東西3.8mの大きさを測る。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に45°偏している。

カマドは、西周壁中央の北寄りに設置されていた。煙道部が短いのが特徴的で、周壁から72cm外側の位置で、先端が立ち上がる。燃焼部との境には、明確な段が設けられておらず、両者の区別は、底面の傾斜が急角度に変換することでなされている。

燃焼部は、底面と側壁内面の焼土化が顕著であり、長期間使用されたことが窺われた。ただ、袖は、ほとんど残っておらず、住居廃絶時に取り壊されたとみられる。燃焼部右脇の浅い窪みに、焼土・炭化物が詰まっており、ここに残骸が捨てられたと考えている。

床面は、ほぼ平坦に整えられていた。貼床が、カマド側中心に施されていたが、厚さ0.5~1.0cmとごく薄いため、断面図に表すことはできなかった。この部分の上面は、堅く締まっており、カマ

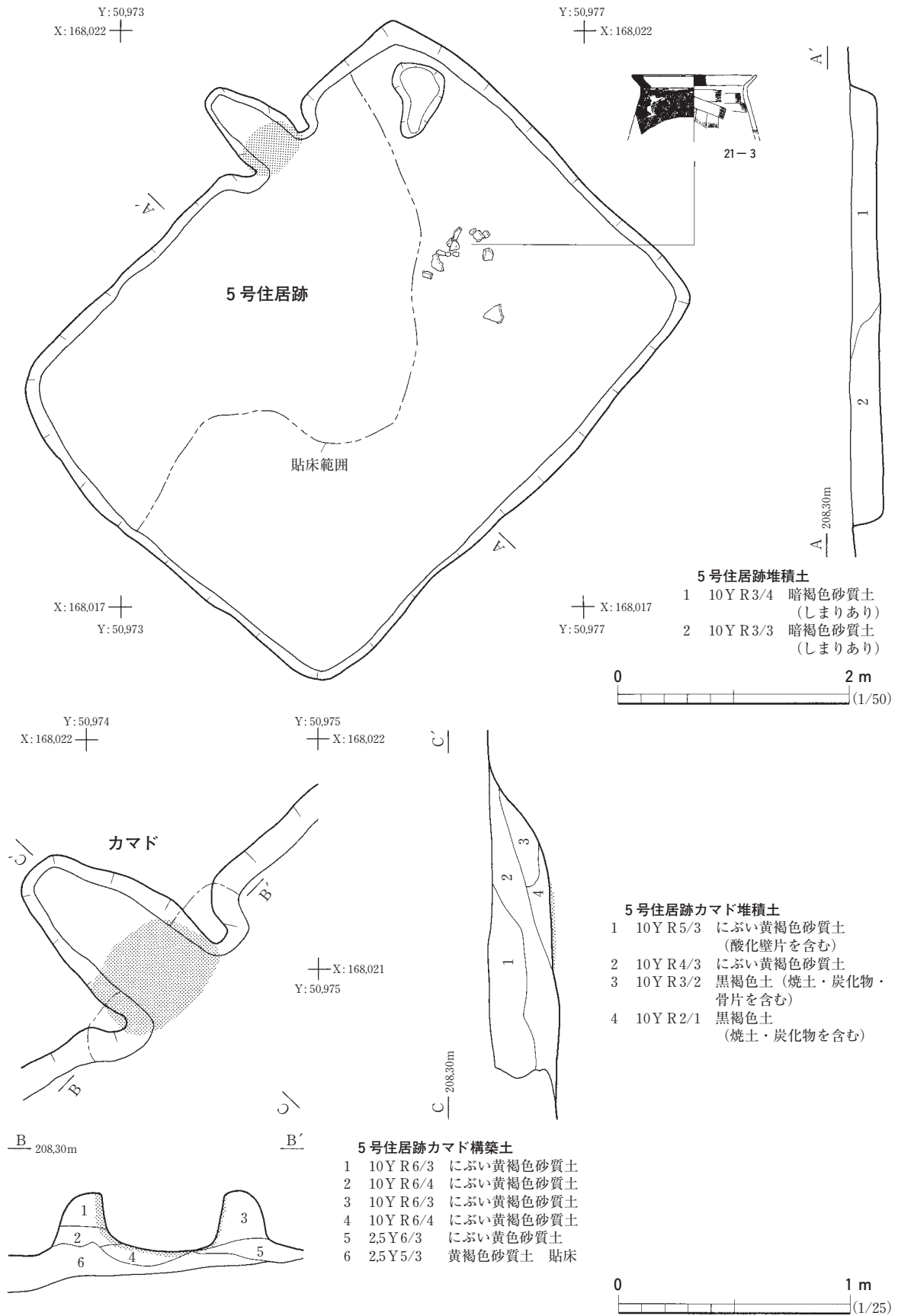


図20 5号住居跡

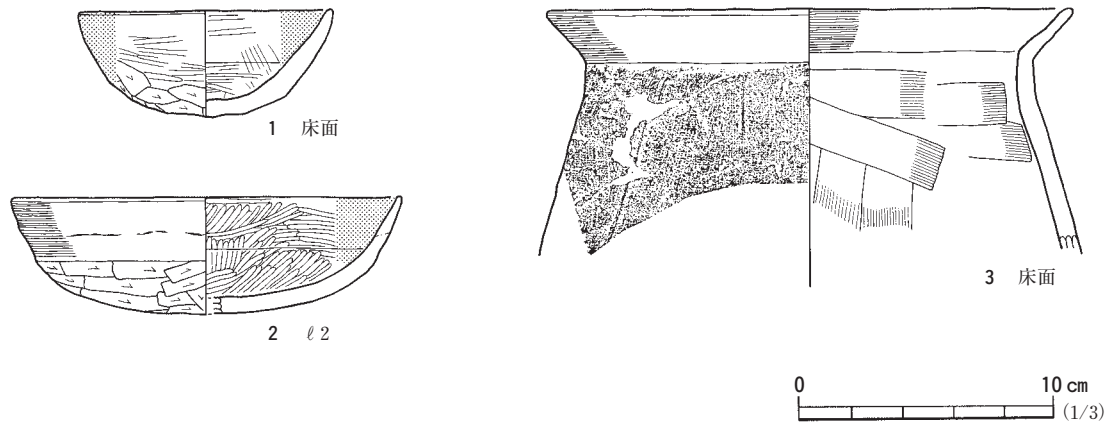


図21 5号住居跡出土遺物

下の被熱状態と併せ、本住居跡の居住期間の長さを窺わせた。

遺物 (図21, 写真498・499)

本住居跡の遺物は少ない。土師器片142点が出土した。

図21-1は、床面から出土した小型の土師器杯である。底部は、粗くヘラケズリされ、内湾気味に口縁部が立ち上がる。2は、 $\ell 2$ から出土した土師器杯で、法量が大きい。口縁部は、やはり内湾気味に立ち上がっている。

3は、土師器甕である。床面から出土した。口頸部は「く」の字状に開いており、胴部中央から下を欠いている。外面はハケメ調整されている。

まとめ

本住居跡は、平面形態が、南北に細長い長方形を呈しているのが特徴的である。また、カマド煙道部が短い点も注目される。営まれた時期は、床面出土の土師器が栗圀式に比定され、7世紀代中心の枠の中で捉えられる。(菅原)

6号住居跡 S I 06

遺構 (図22・23, 写真20~23)

本遺構はN20グリッドに位置し、LⅢ上面において検出された。また、本遺構は調査区中央を東西に横切る2号溝跡の南側に接しており、調査区中央の最も住居跡の集中する区域の北端に位置している。本遺構は2号溝跡と重複しており、それより古く位置付けられる。北周壁の大半は、2号溝跡により失われ、検出できなかった。

残存する周壁から、平面形は正方形と考えている。住居跡の規模は、東西5.0m、南北4.6mを測り、高木遺跡の中では中形の部類に属する。住居跡と方位との関係は、発掘基準線北に対して、東に12°振れている。周壁は急角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは、住居跡の南西隅付近で最大36cmである。床面は平坦である。

住居跡堆積土は $\ell 1 \sim 4$ に分類される。 $\ell 1 \cdot 2$ は土層断面図が示すように、典型的なレンズ状

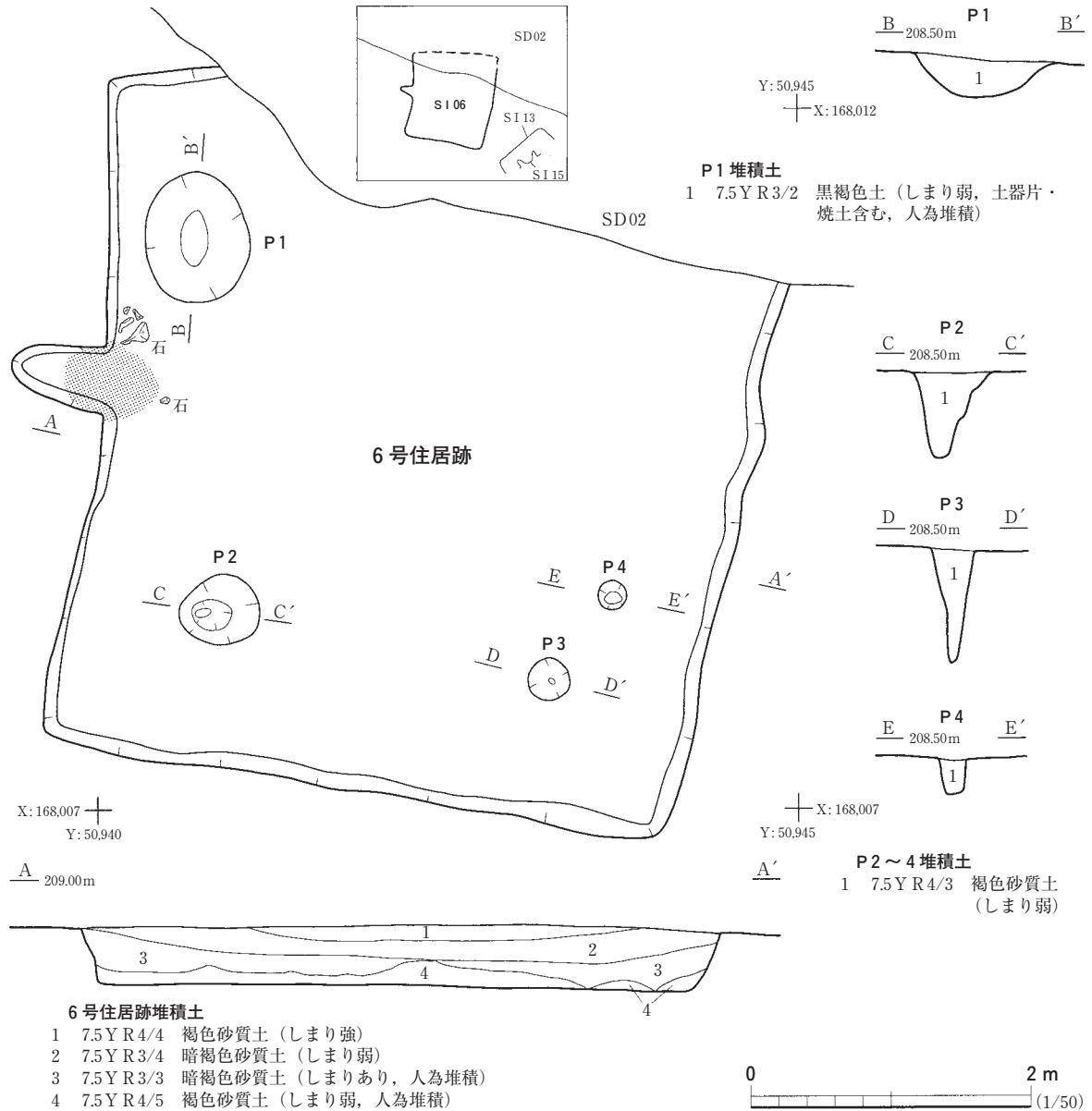


図22 6号住居跡

堆積であることから、自然堆積土と判断した。ℓ 3・4は堆積土の性状より人為堆積土と考えた。

住居跡内施設は、カマド1基とピット4個を検出した。ピット4個のうち、1基は貯蔵穴、他3基は柱穴と考えている。

カマドは、西周壁中央に取り付いている。袖の遺存状態は悪く、右肩部分が一部残っているだけである。燃焼部の規模は、奥行き90cm以上、幅30cmで、燃焼部底面は80cm×30cm、深さ7cmほどの凹みとなっている。表面は、焼土化していた。煙道は遺存状態で、長さ80cm、幅40cm、検出面からの深さ18cmを測る。

カマドの堆積土は3層に分層される。ℓ 1・2は自然堆積土で、ℓ 3は、カマドを廃棄したときに散らばった土が固まったものと考えている。黒褐色土で、焼土を含んでいた。

住居上屋構造にかかわると考えられる柱穴は、P2~4の3個である。P2・3は住居跡の周壁

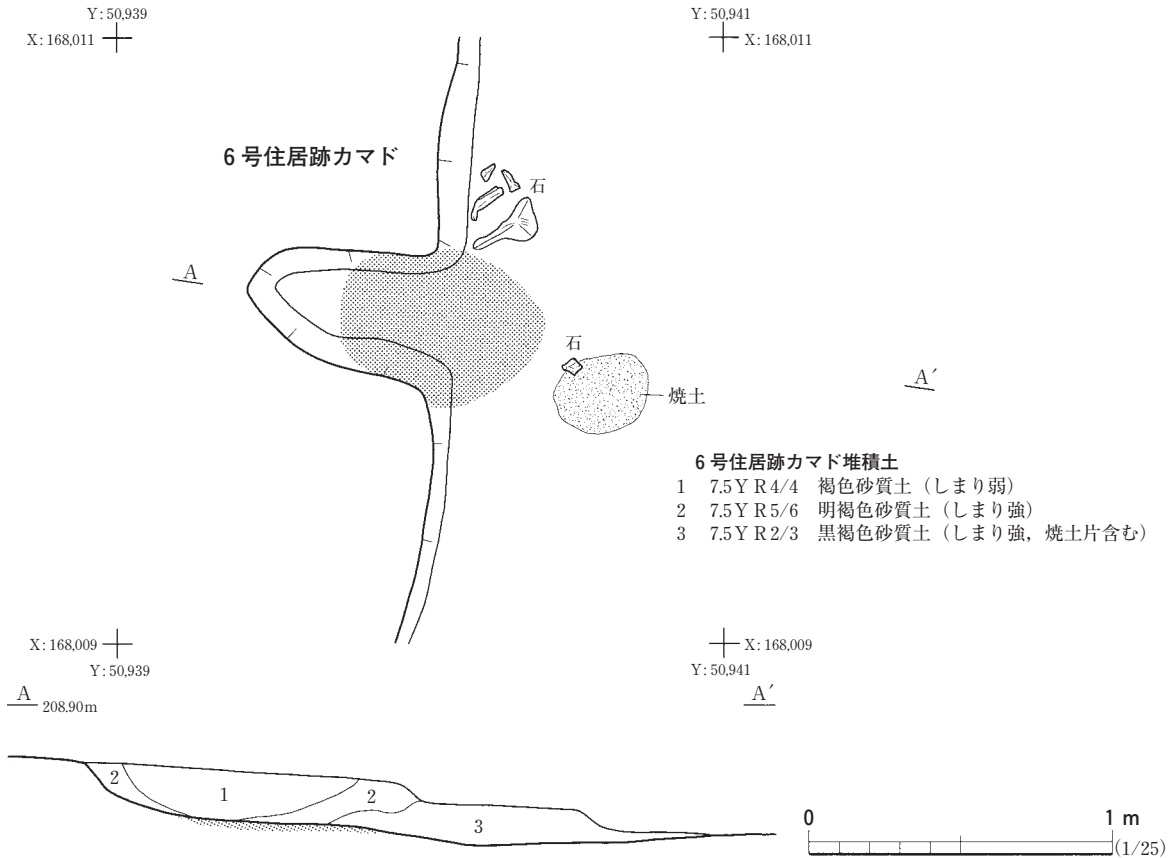


図23 6号住居跡カマド

と平行するように、配置されている。P 2は長径60cmの不整円形で、深さ60cm、P 3は径30cmの円形で、深さ80cmである。P 3の北50cmに位置するP 4は、径20cmの円形で、深さ25cmである。P 2～4の堆積土は、締まりの弱い褐色の砂質土である。各ピット間の距離は、P 2 - 3間が約2 m、P 3 - 4間が約0.5mである。

住居跡北西端に位置するP 1は、長径1 mの不整円形で、床面からの深さは29cmである。位置的にみて、貯蔵穴と判断している。堆積土は、土器片及び焼土を含む締まりの弱い黒褐色土である。

遺物 (図24, 写真499・500)

遺物は、土師器片263点、石製品1点が出土した。図示遺物は6点あり、このうち4点が遺構に伴っている。

図24-1～4は、土師器杯である。1は、有段丸底杯に分類される。内面が、ナデ調整だけで仕上げられている。2は、須恵器杯蓋の模倣杯で、器高の高い椀状をなす。3は、底部平底風の有段丸底杯に分類される。4は、底部を粗いヘラケズリで平底風に仕上げたものである。口縁部が大きく開いている。

図24-5は、土師器小型甕である。口縁部が短く外傾し、胴部はあまり膨らみを持たない。器面に煮炊痕跡が観察される。

図24-6は、砥石である。柱状を呈しており、断面は方形をなす。

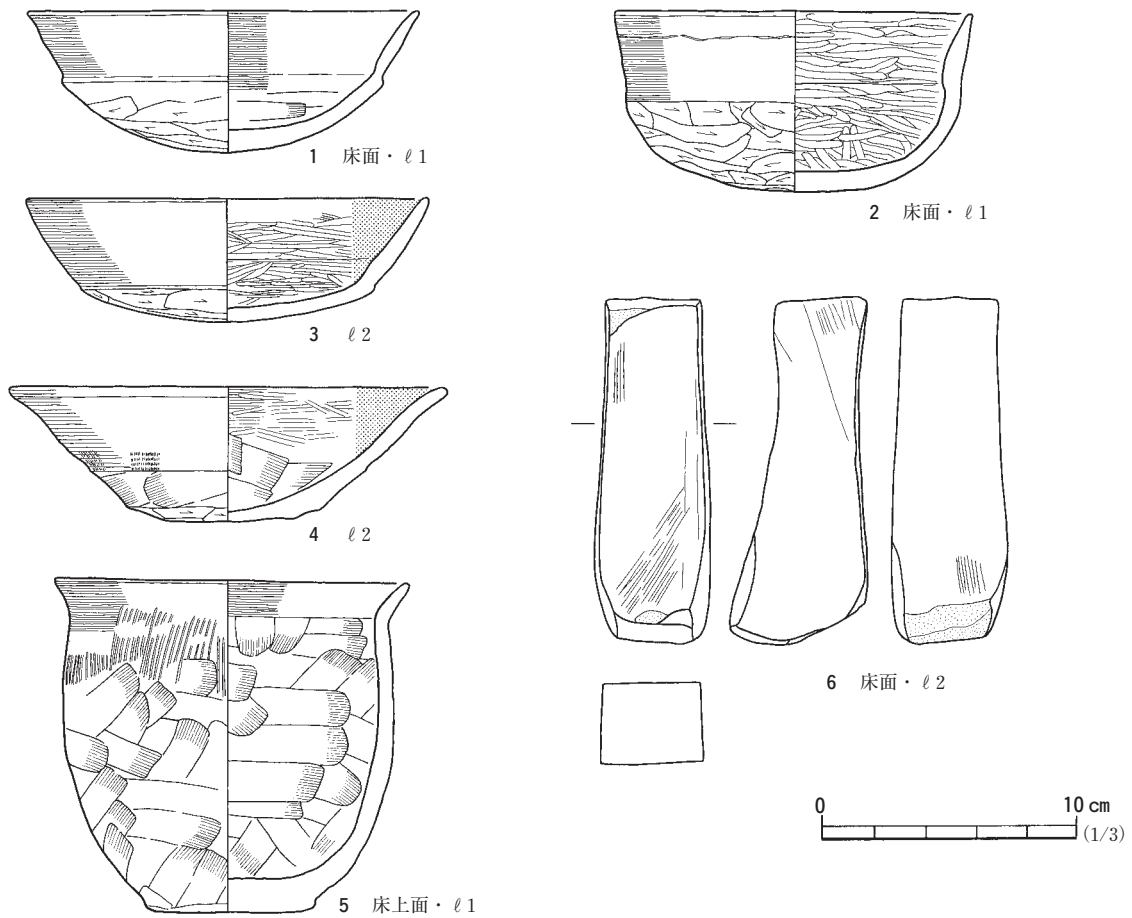


図24 6号住居跡出土遺物

まとめ

本住居跡は2号溝跡によって、北周壁のほとんどを失っている。2号溝跡を構築するために立ち退いたのか、既に、その前に立ち退いていたのかは明らかではない。ただ、いずれにせよ、2号溝跡より古い時期のものであることは、確かである。

遺物は、床面から栗罎式の土師器が出土している。このことから、本住居跡が営まれたのは、当該型式期と考えられる。(高久田)

7号住居跡 S I 07

遺 構 (図25, 写真24)

本遺構は、N21グリッドでL IV上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部で、高木遺跡における住居跡分布の西限の1つをなしている。

本住居跡は、同規模の2軒の竪穴住居跡(54・64号住居跡)と軸線を揃えて重複している。そのなかで、切り合いは最も新しい。また、52号住居跡とも重複しており、それより新しことが判明している。

本住居跡は、全体に削平が著しかった。検出面と床面の比高差は、残りの良い北周壁でも約5 cm

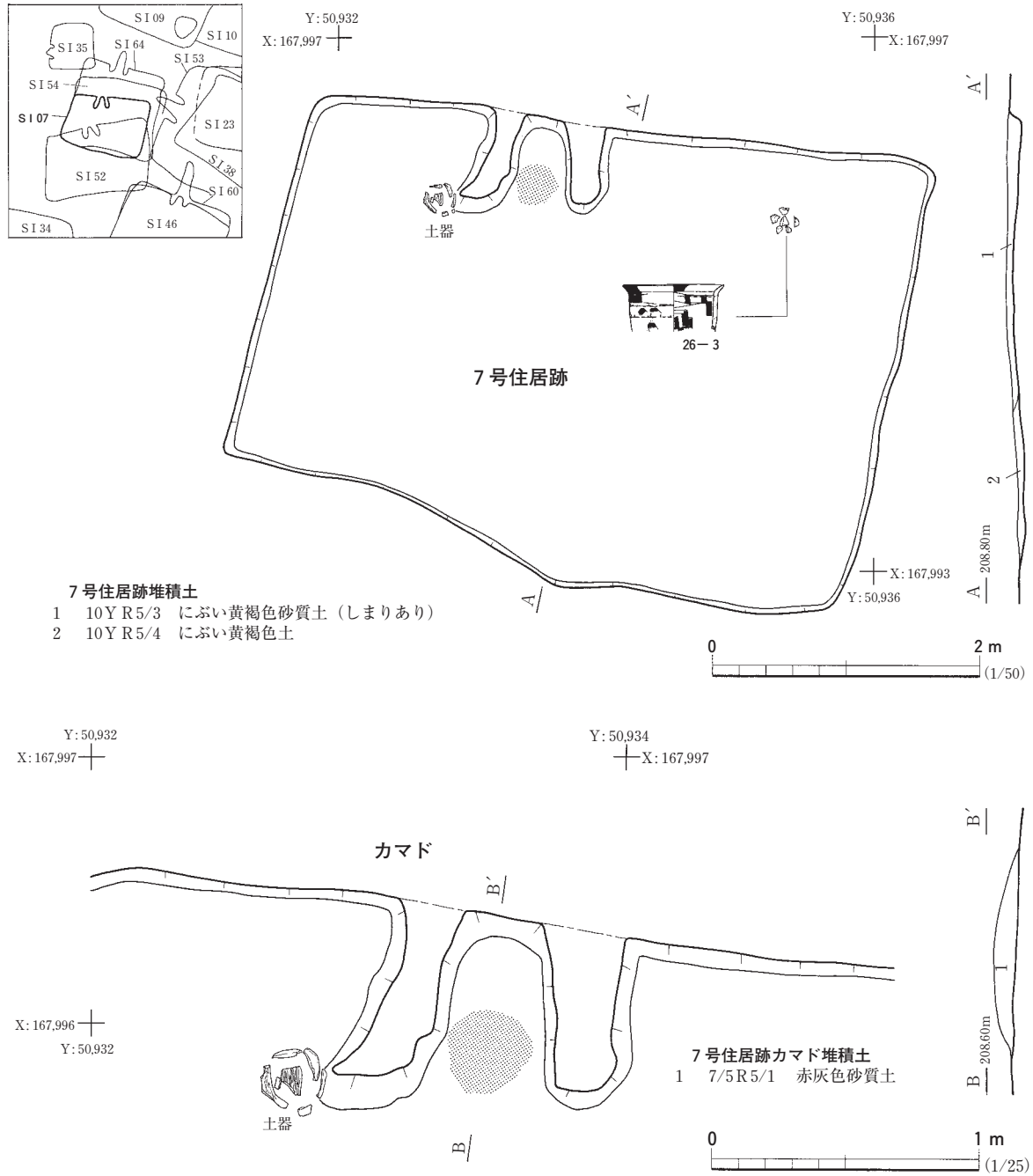


図25 7号住居跡

しか無く、随所に攪乱が及んでいた。このため、堆積土は2層確認されたが、人為堆積か自然堆積かは不明である。

平面形態は、東西に長い長方形を呈している。ただ、攪乱の影響で、南周壁ラインは歪んだ掘り上げ状態になっている。規模は、南北3.4m、東西4.7mの大きさを測り、高木遺跡では中型の部類に属する。住居方向は、発掘基準線北に対して、東に13°偏している。

床面は、ほぼ平坦に整えられていた。貼床は認められず、上面は攪乱のためボソボソしていた。ただ、部分的に明黄褐色粘土粒が散らばっている箇所もみられ、簡単に凹凸をならす程度の作業は

行われていたのかもしれない。

カマドは北周壁に設置されており、燃焼部の痕跡が確認できた。袖が「ハ」の字状に開き、底面が酸化していた。また、左袖先端には、補強材として土師器甕が据えられていた。しかし、煙道部は失われており、全体の形状は不明である。計測値は、燃焼部焚口幅45cm、袖長65cmを測る。

遺物 (図26, 写真500)

遺物は、土師器349片、須恵器2片、石製品1点が出土した。出土状態に、とくに規則性は認められない。

図示遺物で、確実に遺構に伴うのは、図26-3の土師器小型甕である。口頸部が、「く」の字状に外反する形態を呈し、外面は軽くナデ調整されている。なお、カマド左袖先端の土師器甕は、実測に耐え得る状態に復元できなかった。

1は、 $\ell 2$ 出土の土師器杯で、器高中位の段から、口縁部が強く屈曲する形態を呈している。佐平林式～舞台式古段階に比定される。

2は、須恵器杯身である。 $\ell 2$ から出土した。口径13.7cmに復元される比較的大型のもので、底部は回転ヘラケズリ調整されている。陶邑編年に当てはめると、TK43～209に比定されると思われる。

4は、砥石とみられる。ただ、方形を呈さず、片側の腹縁は窪んでいる。

まとめ

本遺構は、軸線を揃えて重複する3軒の住居跡のなかで、最も新しいものである。時期は、共伴遺物にほとんど恵まれず、特定するのは難しい。ただ、重複する住居跡の状況を勘案すると、栗田式期の所産である可能性が高いと考えられる。

(菅原)

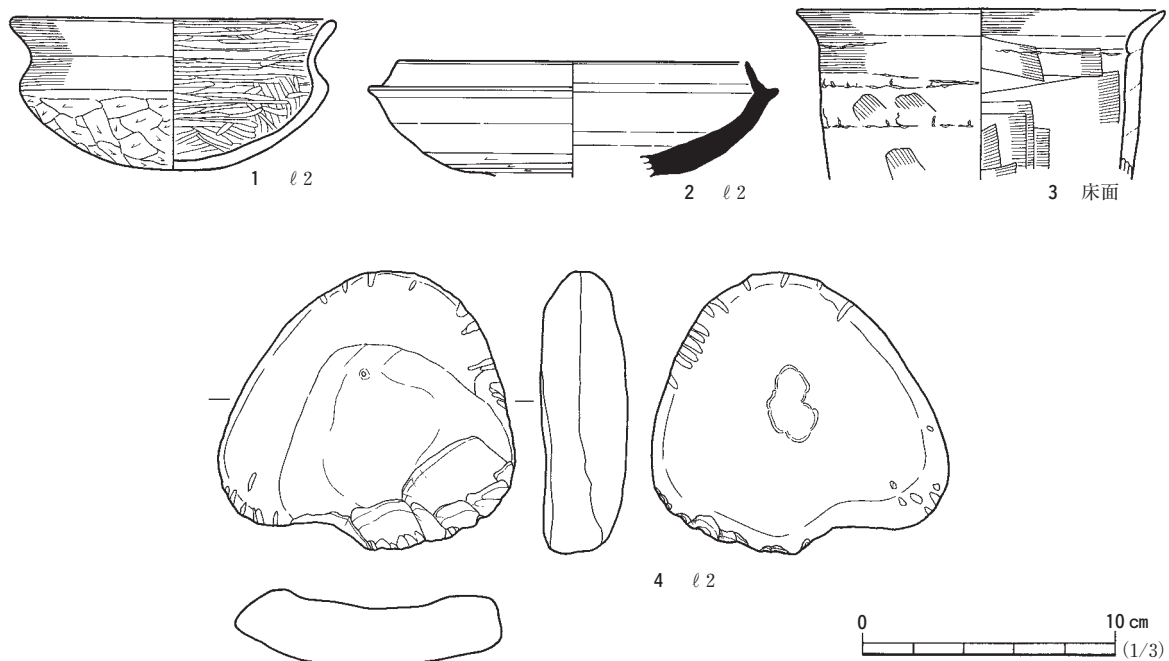


図26 7号住居跡出土遺物

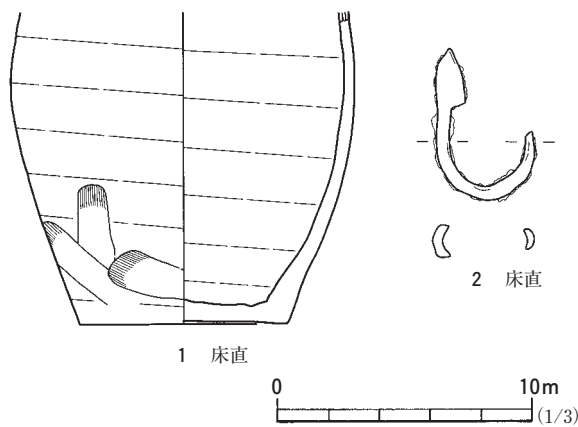


図28 8号住居跡出土遺物

されている。同図-2は鉄刀の鞘尻と考えられる鉄製品で、南周壁中央の壁際から出土した。

まとめ

本住居跡は出土遺物から表杉ノ入式期のものである。同じく平安時代ごろに営まれた12号住居跡は、本住居跡の南西方向に約3mほど離れて位置し、同規模で主軸方位も一致し、住居跡内堆積土には同様な洪水砂が厚く堆積している。そのようなことから2軒の竪穴住居跡は同一集落内に営まれ、ほぼ同時期に廃絶したものと推測する。(大波)

9号住居跡 S I 09

遺構 (図29・30, 写真28・29)

本遺構は、N20・N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部であり、高木遺跡における住居跡分布の西限の1つをなしている。

本住居跡は、今回の調査で、最初に検出されたものである。ただ、掘り込みに着手するまでに、1か月以上が空き、その間に周壁際の攪乱穴から遺構が崩れて行ってしまった。さらに、遺構内にたまった雨水を取り除く度に堆積土が失われ、最終的な遺構確認時点では、ほとんど床面が露呈してしまう状態だった。

このため、図29には、硬化した床面の範囲を住居跡プランとして示している。

本住居跡は、9号土坑と10号住居跡の2つの遺構と重複関係を有している。どちらも、前後関係は不明である。平面プランは、東西に少し長い長方形を呈しており、方向は、発掘基準線北に対して、東に18°振れている。規模は、東西6.1m、南北4.9mを測り、高木遺跡では中形の部類に属する。

床面は、堅く締まっていた。とくに、カマドのある南北中軸線上はそれが顕著であり、晴天が続くと、移植ベラで上面を掘り下げるのが困難なほどであった。貼床は施されてなく、掘形底面がそのまま床面にされている。

を部分的に残すのみで、煙道や煙出しは確認できなかった。カマド袖は北周壁から約70cmほど張り出し、側壁部分は赤く焼けているが、燃烧部底面は攪乱のためほとんど遺存しない。カマド袖を断ち割ったところ、粘土塊を含んだ褐色土で構築していた。

遺物 (図28, 写真500)

本住居跡から出土した遺物のうち、図示したのは2点で、床面から少し浮いた状態で出土している。図28-1は土師器の甕で、ロクロ調整

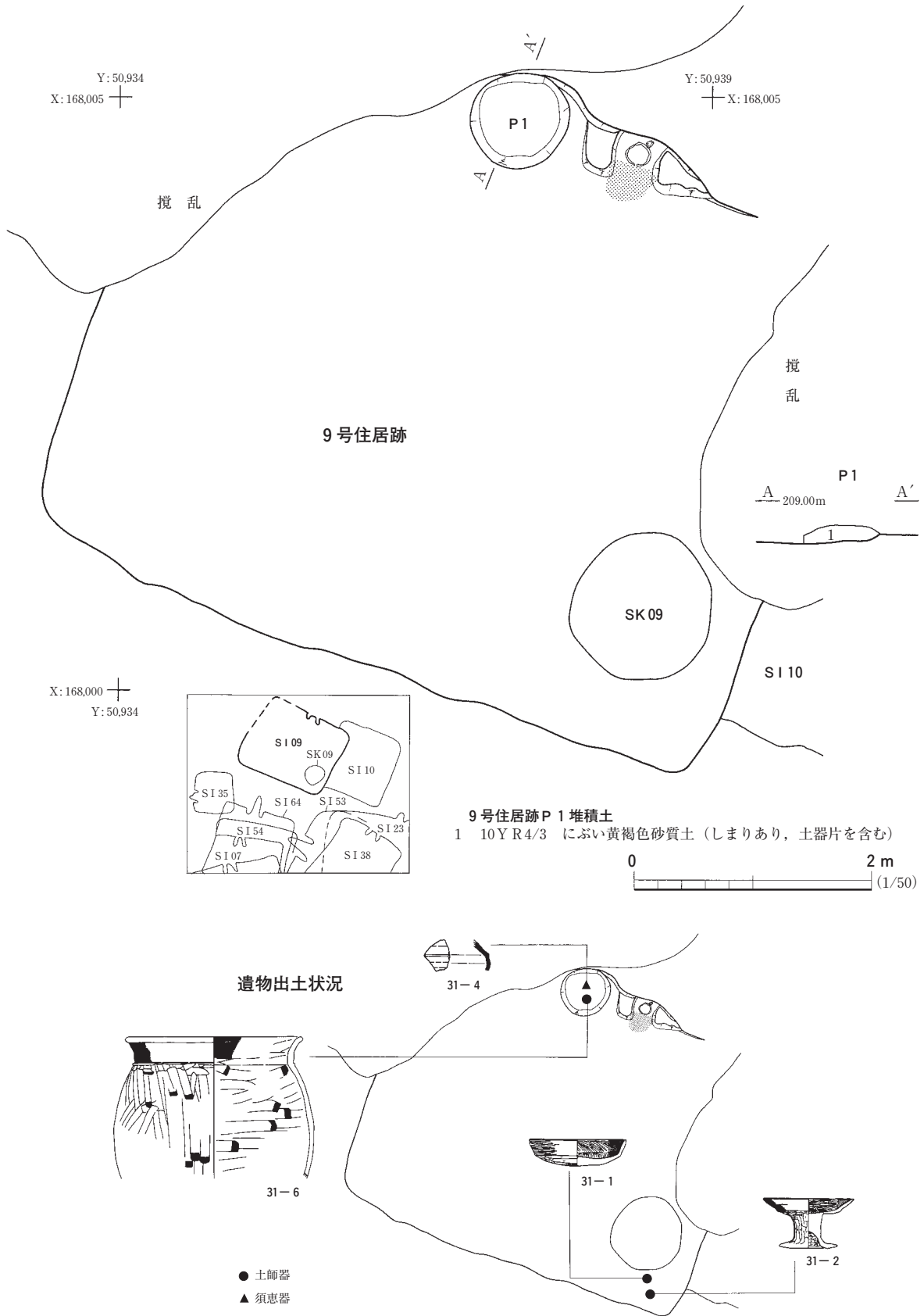


図29 9号住居跡

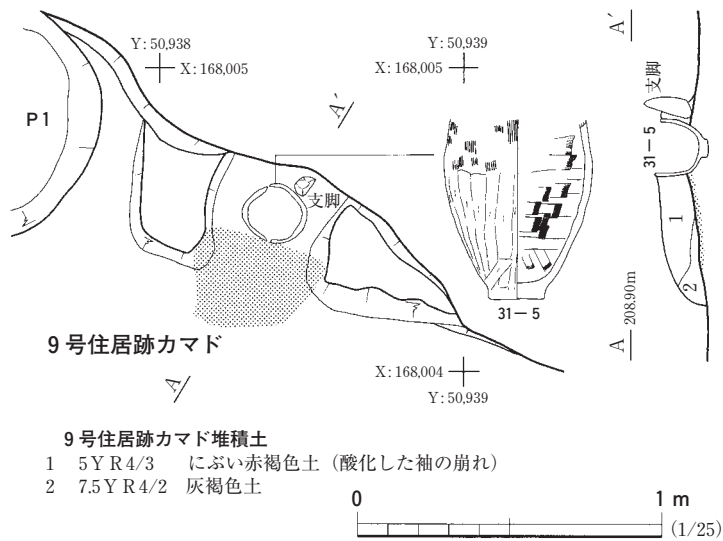


図30 9号住居跡カマド

1点が出土した。

図示遺物は、6点ある。図31-3を除いて、床面もしくは細部施設底面から出土している。ただ、4は、小破片のため、共伴と見なせるかどうか疑問である。出土地点の明らかな4点に関しては、図29にドットを落とした。

1は、床面から出土した土師器杯である。底径：口径比が大きいのが特徴的で、口縁部外面はヘラミガキされている。底部外面に、焼成後施された十字の線刻がみられる。

2は、床面から出土した土師器高杯である。低平な杯部で、口縁部が外反気味に立ち上がる。脚部は短めであり、透かしは入っていない。3は、 ℓ 1出土の土師器高杯で、杯部は内湾気味に立ち上がる。脚部は、2よりさらに短く、杯部との境から「ハ」の字状に開いている。

5は、カマドの支脚手前に正立していた土師器甕である。上半部は失われている。外面はハケメ調整され、さらに、胴部下半に縦位のヘラケズリ調整が加えられている。

6は、広口の土師器球胴甕である。P1底面に密着した状態で出土した。外面はナデ調整され、表面が黒色を呈している。この特徴から、破片の状態でも出土した時点では外来系のものかとも思われたが、接合・復元を行ったところ、通有の球胴甕で理解できる器形となった。

4は、P1底面でも出土した。須恵器杯蓋の小破片である。口縁部と天井部の境は、稜を形成している。

まとめ

本遺構は、自然堤防の西斜面肩部に営まれた堅穴住居跡である。検出状況が悪く、重複遺構との前後関係は分からなかった。ただ、10号住居跡とは連続的に営まれた可能性がある。カマドは北周壁に設置され、左脇に貯蔵穴が設けられている。

時期については、共伴遺物が栗圀式に比定される。したがって、住居跡が営まれた時期は、当該型式期に求められると思われる。

(菅原)

本住居跡のカマドは、北周壁中央で検出された。燃焼部中央に自然石の支脚が据えられ、その手前で正立した土師器甕が出土した。底面は焼けており、断面で厚さ1cmほど酸化しているのが確認された。

カマド左脇で、貯蔵穴とみられるP1が検出されている。85cm×82cmの円形プランをなし、床面から10cmの深さを測る。

遺物 (図31, 写真501)

遺物は、土師器片300点、須恵器片

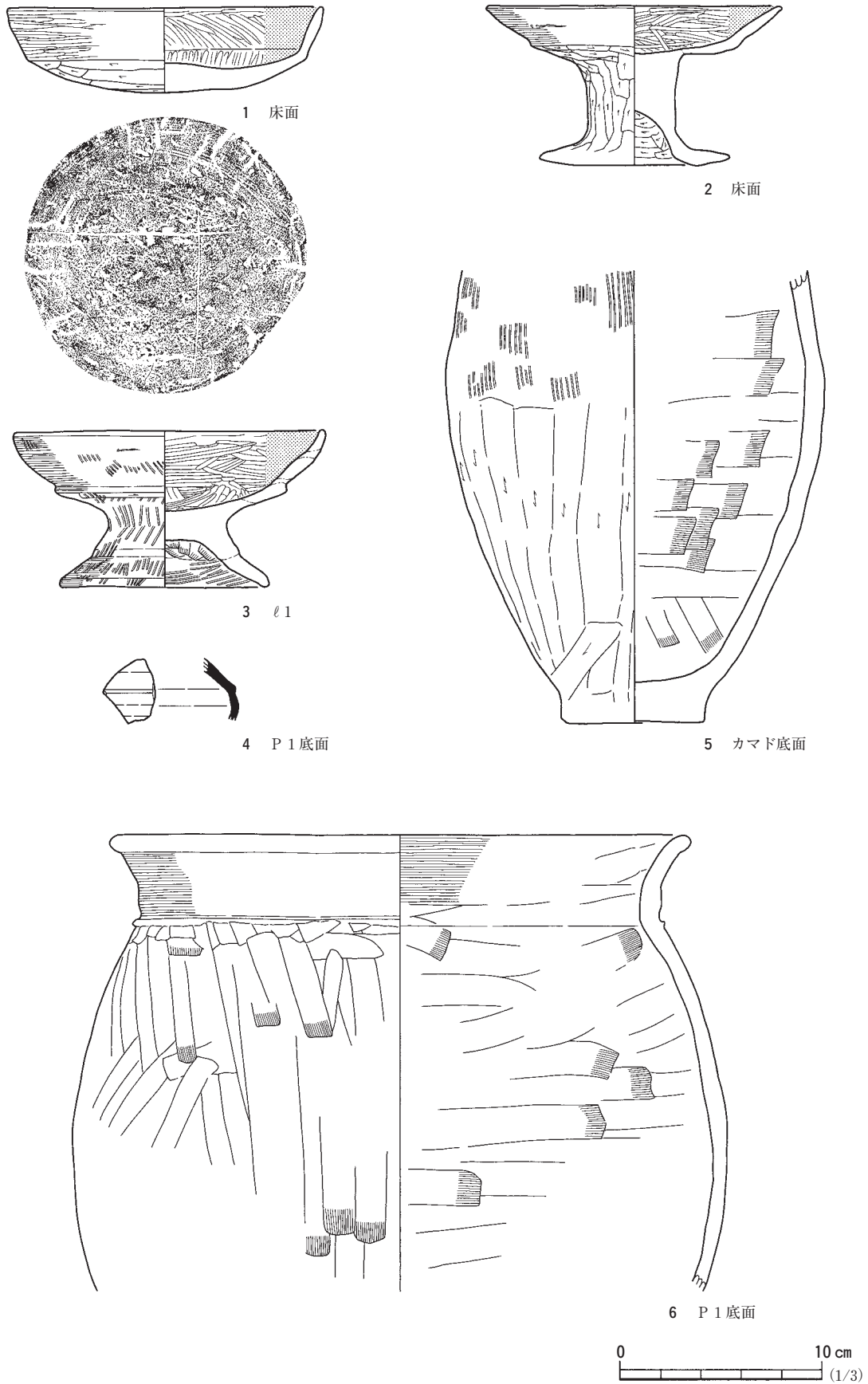


図31 9号住居跡出土遺物

色砂質土が1層みられ、遺構は自然埋没したと考えている。

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。規模は、南北4.7m、東西4.0m以上の大きさを測り、高木遺跡の中では、中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に22°振れている。

床面は全面が堅く締まっていたが、貼床は認められなかった。

細部施設は、南東隅付近の床面から、P1が検出されている。平面プランは、直径40cmの円形を呈し、床面からの深さは20cmを測る。柱穴と考え、想定される他の位置を精査したが、該当施設は検出されなかった。

本住居跡では、カマドが検出されていない。床面の遺存状態から、少なくとも、東周壁に設置されていなかったことは確かである。

遺物 (図32, 写真501)

遺物は、土師器片32点が出土した。

図32-1は、床面出土の土師器杯である。口縁部が内湾気味に開いて立ち上がる。内面は、ヘラミガキ・黒色処理され、底部と口縁部の境がはっきりしている。

2は、土師器小甕である。床面から出土した。口縁部外面が肥厚する器形の特徴的がみられる。外面はハケメ調整され、胴部下半は縦位にヘラケズリされている。

まとめ

本遺構は、自然堤防の西斜面肩部に営まれた堅穴住居跡である。重複する9号住居跡とは、連続的に営まれたとみられる。しかし、遺存状態が悪く、前後関係は分からなかった。

時期は、床面の遺物が栗圀式に比定され、7世紀代に中心を置くことができると考えられる。

(菅原)

11号住居跡 S I 11

遺構 (図33・34, 写真32~35)

本遺構は調査区北部のN20に位置した、一辺約6mほどの堅穴住居跡である。2軒の住居跡と重複し、それぞれとの関係は20号住居跡→11号住居跡→3号住居跡となる。

本遺構の西側にあたる河川側約20mは、調査区内でも特に河川の土砂の運搬と浸食作用によって複雑な堆積状況を示し、他の地点で確認されている基本土層のあり方とは必ずしも一致しない。また本遺構の西側では出土遺物はあるものの遺構としては捉えられておらず、本住居跡はその地区で検出された最も河川側の遺構のひとつである。LⅢ上面ないしLⅣ上面で検出している。

本遺構は3号住居跡の床下から南壁の一部を検出したことから住居跡として調査を開始したが、北周壁側は攪乱が多く、西北側のプランを確認できなかった。西側に入れたサブトレンチで緩やかな立ち上がりを確認したことから、はじめ南北に長い長方形の堅穴住居跡として調査を行っている。しかし壁の立ち上がりは直線的に迫るものの、北周壁約4.5m、南周壁約5.5mで南西隅が鋭角と

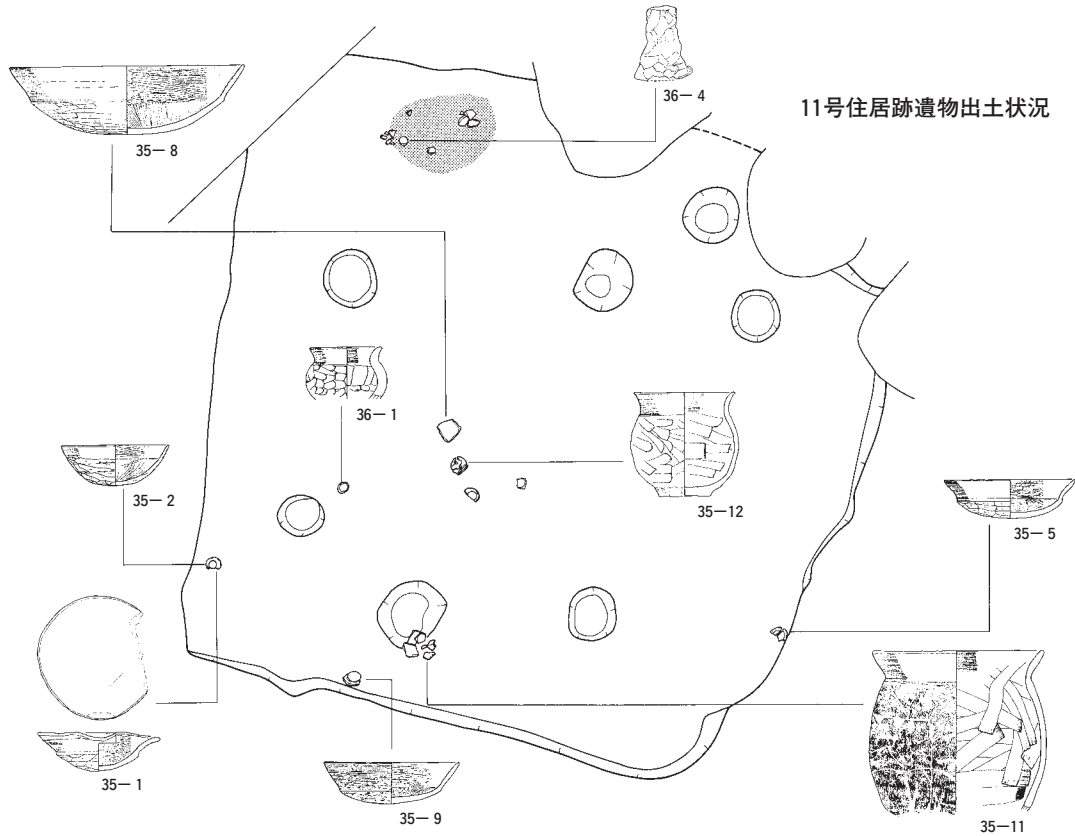


図34 11号住居跡遺物出土状況

なる不整形で、カマドラしきものも確認できなかった。そのため西側部分を拡張して駄目押しを行ったところ、西・北周壁に対応するような直線的なプランを検出したため、本報告では後から検出したプランを生かしてひとつの住居跡として報告することとする。

住居跡内堆積土は5層に分層したが、若干の色調の違いと含有物によるもので、住居跡全体が黒褐色の砂で満たされている。堆積土の厚さは約10cm程度しか残っておらず、住居跡の埋没過程を考えられる上での良好な判断材料とはならなかった。本住居跡の大きさは南北約6.7m、東西約6.4mのほぼ正方形であるが、東周壁がやや崩れているため東西幅が約5.5mの南北にやや長い長方形であったものと推測する。主軸方位はN17°Eで、ほぼ南北に軸をあわせている。深さは遺存状態の良い南周壁で約10cmを測るが、周壁の立ち上がりは東・南周壁の一部以外ではほとんど認められない。床面はほぼ平坦で、南周壁部分の断ち割りからは壁際をやや深く掘り込んで、その部分を黒褐色砂で埋めたことが分かる。駄目押しの段階で、西周壁と北周壁の一部が検出できたのもそのためと考えられる。

住居跡内の付属施設としては、北周壁際の西寄りからカマド跡とみられる焼土範囲と、ピット7基を検出した。ピットは長軸が約40~60cmの楕円形で、上層には掘形に埋められていたような黒褐色砂が堆積している。そのうち柱穴と考えられるものは4~7号ピットの4基で、ほぼ対角線上の四方に配置されている。柱穴の深さは4~6号ピットが約30~40cmを測り、堆積土からは柱を抜き取った後に同じように埋没していったものとみられ、レンズ状に堆積した黒褐色砂の下層にやや明

るい暗褐色砂が堆積している。7号ピットは他のものよりやや深く、床面から約50cmを測り、暗褐色砂層のみで充たされていた。柱穴以外のピットの用途は不明であるが、1・2号ピットは深さが約10cm程度の浅い窪み状のもので、住居跡の北東隅に並んでいることから同じような機能を持っていたものと考えられる。3号ピットは南周壁際のほぼ中央に位置し、長軸約68cm、短軸約46cmの隅丸方形で、堆積土にもぶい黄褐色砂と他のピットとは異なっている。深さは床面から約20cmほど掘り込まれ、底面は碗状に窪み、付近からは土師器の甕の細片が出土した。

北周壁際の焼土跡からはカマドの支脚とみられる土製品が出土しており、北周壁西寄りに付設されたカマドの痕跡と考えられる。その範囲は北周壁に沿って長軸約1m、短軸約80cmの楕円状に赤く熱変して、土師器の細片や炭化物が散らばっている。柱穴の配置としては、5号ピットが北周壁からやや内側に位置していたが、そのことはカマドとの位置関係によるものかもしれない。

遺物 (図35・36, 写真502・503)

本住居跡から出土した遺物のうち、図示したものは16点で、図36-4を除いた他は土師器である。そのうち遺存状態の良いものは、床面から数cmほど浮いた状態で出土しており、本住居跡に伴うものとみられる。しかし、本住居跡は複数の住居跡と重複するため、時期の異なる遺物も混入している。

図35-1~10は杯で、多くが内面にも対応する段ないし稜の認められる有段丸底のもので、口縁部は大きく外反ないし外傾する。1は底部の丸みが強く、外面の口縁部と体部の境の段は明瞭であるが、内面に対応するものは認められない。この杯の口縁部の一端は片口のように仕上げられており、正面と真上からの図で表現している。

また内面の黒色処理の半分は火を受けて飛んでいる。2は底部のケズリが上半部分まで施され、半球状で、口縁部と体部の境に稜を持たないものである。3は口縁部が直立して口唇部が僅かに内湾しており、その器形から須恵器の杯蓋を模倣したものと考えられる。9は外面全体にもヘラミガキが施されていて、底部には「×」のヘラ記号が付けられている。

本遺跡からは、他にも同様なヘラ記号の付くものが数例ほど出土している。8は径が約30cmもある大型品である。

図35-11・12、図36-1・2は甕である。図35-11は体部外面がハケメ調整されている。煮炊具として使用されていたようで、内外面に煤が付着している。他の3点は小型の甕で、器面の残りが良くないが、内外面ともナデが認められる。図35-12も小型ながら煮炊具として使用されていたようで、内面の底部から約3cmのところには、リング状に付着する煤が観察できる。図36-1は平たい小型の球胴甕である。

図36-3は甑の下半部で、体部外面はハケメ調整される。無底式で、内面にはヘラミガキが認められる。

図36-4は支脚とみられる土製品で、焼土範囲から出土した。あらかじめ円柱状に作られていたものに、粗雑に粘土を貼って裾を広くしており、指押さえの凹凸が全体にみられる。

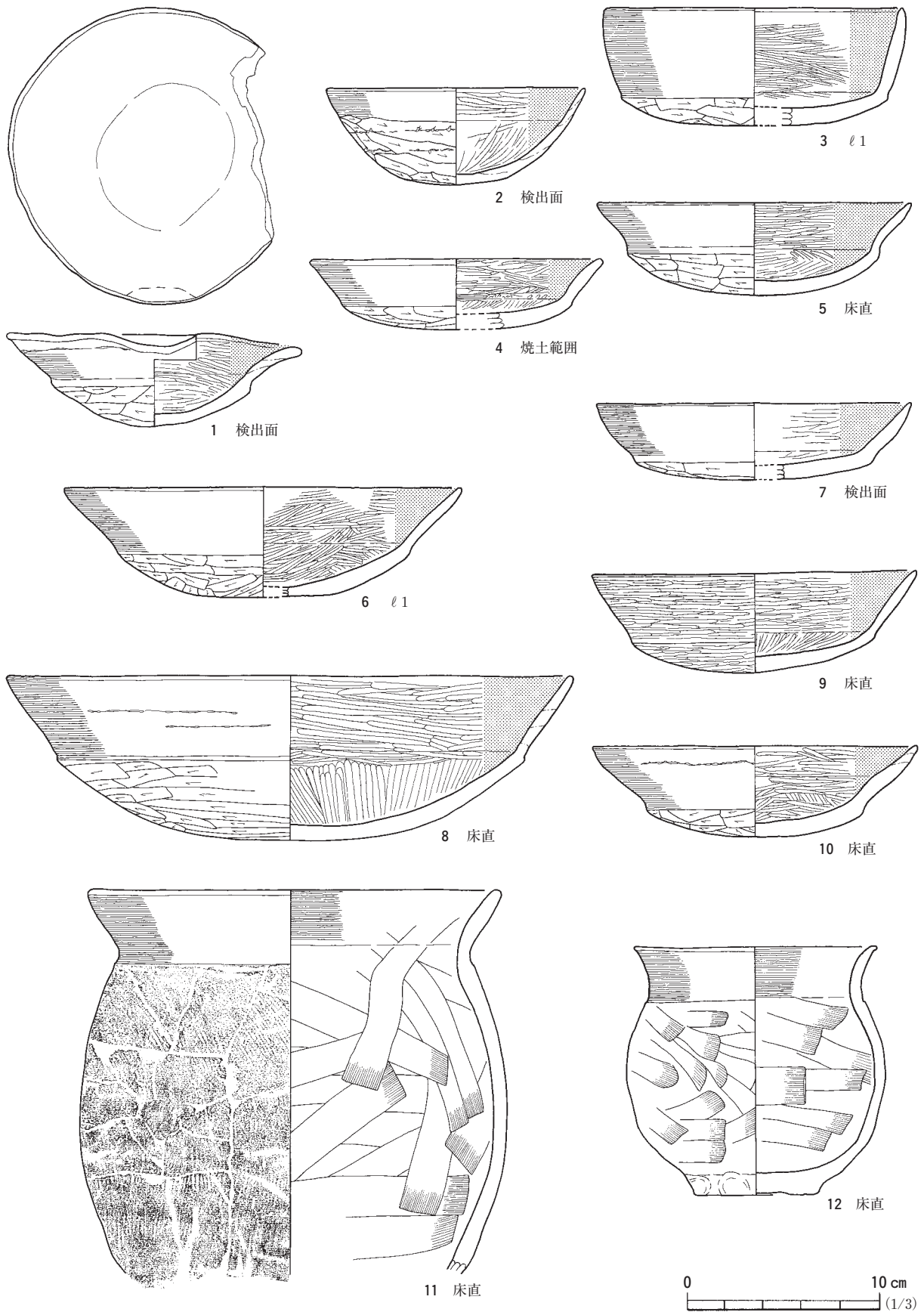


図35 11号住居跡出土遺物 (1)

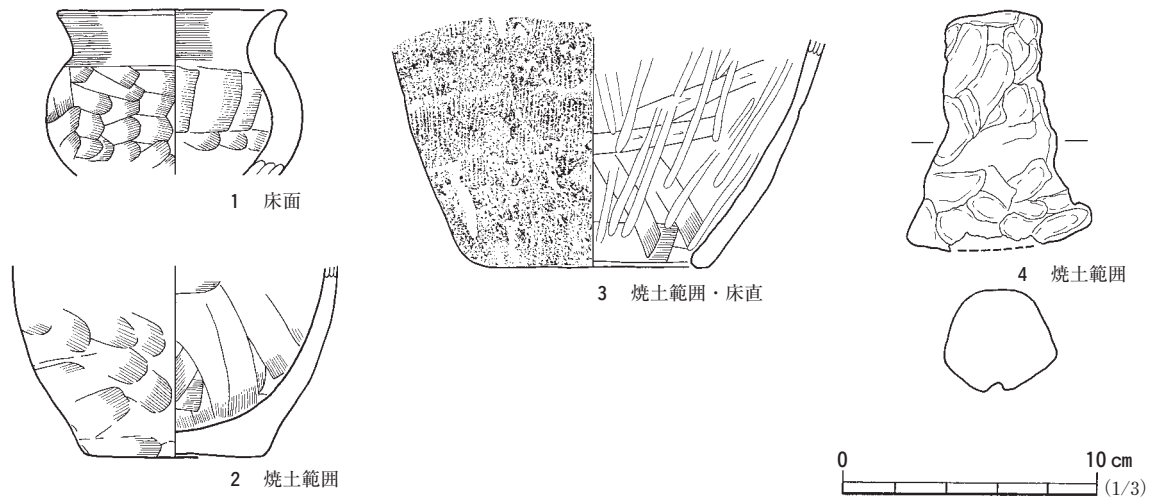


図36 11号住居跡出土遺物（2）

ま と め

本住居跡は出土遺物と重複する住居跡との関係から栗圀式期のものと考えられる。出土遺物には新しい段階のものもみられるが、比較的古い形態のものや須恵器の杯蓋を模倣したものがみられることから、7世紀代でも前半ごろのものと考えている。また、本住居跡の南東方向に約5mほど離れて位置する50号住居跡は、一辺約2mの小型の住居跡であるが、図35-9にみられたヘラ記号の付く杯が出土しており、本住居跡と併行して営まれたものと考えられる。（大波）

12号住居跡 S I 12

遺 構（図37，写真36・37）

本遺構は、調査区北部の河川側にあたるN20，O20グリッドにわたって位置する竪穴住居跡である。

本住居跡は複数の住居跡と重複しており、それぞれとの関係は69号住居跡→42号住居跡→50号住居跡→12号住居跡となり、本住居跡が最も新しい。他の住居跡がほぼ同時期であるのに対し、時期がやや下って平安時代初めの小型の竪穴住居跡である。

本住居跡は調査区内を縦断する旧道路に東周壁部分がかかっていたため、西側部分を先行して発掘調査を行っている。西側部分をLⅢ上面で検出したため、旧道路下の土層断面を利用して観察したところLⅡ中より壁の立ち上がりを確認できた。住居跡内堆積土は3層に分層したが、そのうちのℓ1の黄褐色砂が厚く堆積している。壁の立ち上がりは確認したものの、ℓ1と基本土層のLⅡはほとんど見分けがつかず、ℓ1がやや明るいという程度である。その下層の北周壁から流れ込んでいるℓ2は暗褐色のややしまりのある砂質土で、床面から約10cmの厚さで住居跡内全体に堆積している。本住居跡は廃絶後のある程度経過した段階で、洪水砂によって一気に埋まってしまったものと考えられる。

住居跡の平面形は、LⅢの掘り込みから検出できた西側部分では西周壁3.0m，北周壁3.8mを測

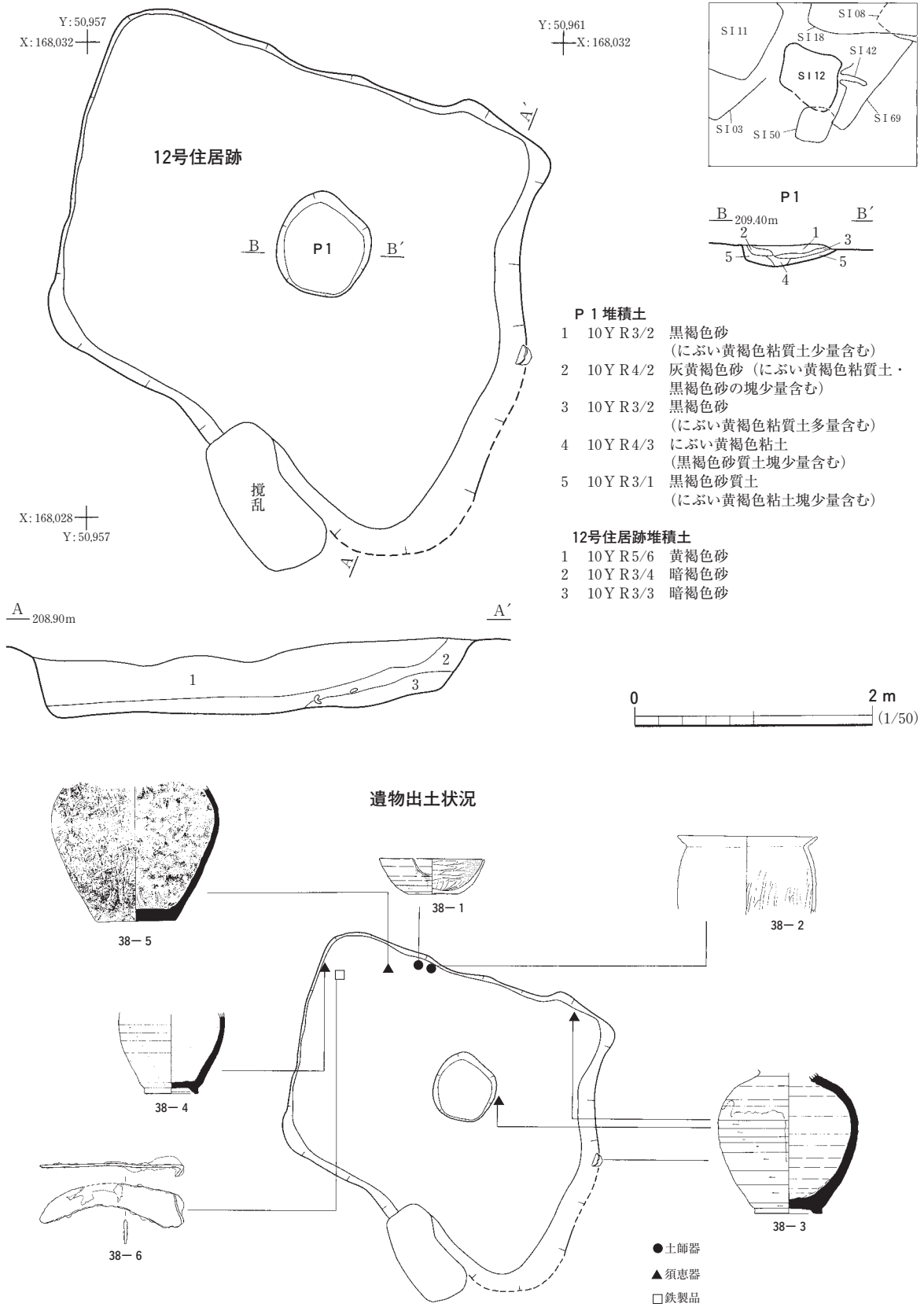


図37 12号住居跡

り、東西にやや長い長方形であったものと考えられる。東周壁は複数の住居跡と重複するためかLⅢへの掘り込みが判然とせず、土層断面での南周壁の立ち上がりはℓ1の洪水砂が流れ込んだ際のもので、南東周壁は大きく崩れてしまっているようである。主軸方位はN22°Eでやや東に振れている。

深さは土層断面を確認した北周壁で約60cmを測る。床面に貼床は認められず、LⅡの砂層を掘り込んでLⅢの砂質土を床面として利用していたものと考えられる。

住居跡内の付属施設としては1号ピットを検出したのみで、カマドや柱穴等は確認できなかった。P1は住居跡の中央やや東寄りにあり、長軸約90cm、短軸約80cmの楕円形のピットである。深さは中心部で約20cmを測り、椀状に窪んでいる。P1内堆積土は5層に細分でき、ℓ4は付近の層位には認められない黄褐色の粘土層で他の層にも塊状に含んでいた。

遺物 (図38, 写真503・504)

本住居跡から出土した遺物のうち図示した6点は、平面図に出土位置を示してあるように住居跡の北周壁に沿うように出土している。

出土層位はℓ1としたが、ほとんどℓ2上面といえる床面から僅かに浮いた状態であった。出土状況は倒立であったり、数か所の地点のものが接合したりするが、それほど使用時に置かれた場所から移動していないものと考えられる。

図38-1・2は土師器で、ロクロ調整されている。同図-1は内黒の杯で、底部は回転ヘラケズリで再調整されているため、切り離しは不明である。この杯は口縁部の一部を故意に欠いており、その部分の外面には油煙が認められることから、灯明皿として利用されていたものと考えられる。同図-2は甕で、体部内面の下半部は縦方向にヘラナデされているようである。

3～5は須恵器である。3・4は高台が付く長頸瓶とみられ、同じような大きさで高台部径も約8.4cmと一致する。どちらも焼成が良くガラス質となり、胎土は精選され白色粒子が認められることから、大戸窯産と考えられる。本遺跡では、杯にも大戸窯の製品がみられ、当該窯の広域流通圏に組み込まれていたことが知られる。また、3には自然釉が認められる。5は甕である。

6は鉄製品で、鎌の刃の部分である。曲刃鎌で、刃先が湾曲し、基部を折り曲げて柄に装着していたものとみられる。

まとめ

本住居跡は出土遺物から、本遺跡では検出例の少ない9世紀初めごろのものである。同時期と考えられる8号住居跡のようにカマドは付設されてはいないが、本住居跡と8号住居跡は同規模で主軸方向も一致する。

また、本住居跡の特徴としては出土遺物に貯蔵具が多いことであり、42号住居跡から出土した内黒の土師器の甕も本住居跡に伴うものとみられる。

以上のようなことから、本住居跡は8号住居跡と同時期に営まれ、8号住居跡の付随的な家屋として機能していた可能性も考えられよう。

(大波)

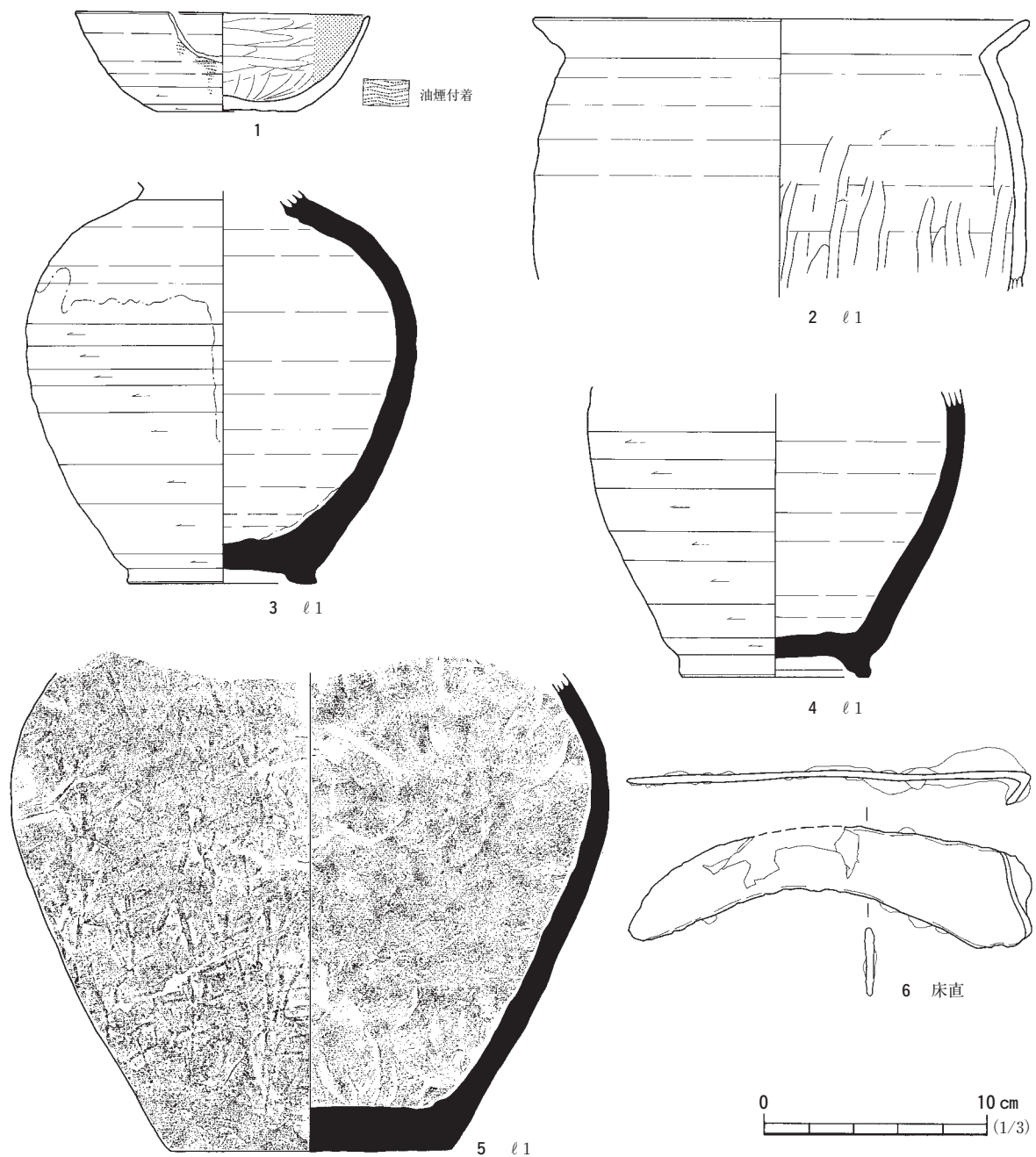


図38 12号住居跡出土遺物

13号住居跡 S I 13

遺 構 (図39, 写真38・39)

本遺構は、N20グリッドでL II上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面で、2号溝跡のすぐ南側にあたる。両遺構の直線距離は、本住居跡の北東隅と2号溝跡の南肩の間で、1.2mしか離れていない。

本住居跡は、真上に営まれた15号住居跡のカマドを断ち割った際に、プランが検出された。遺存

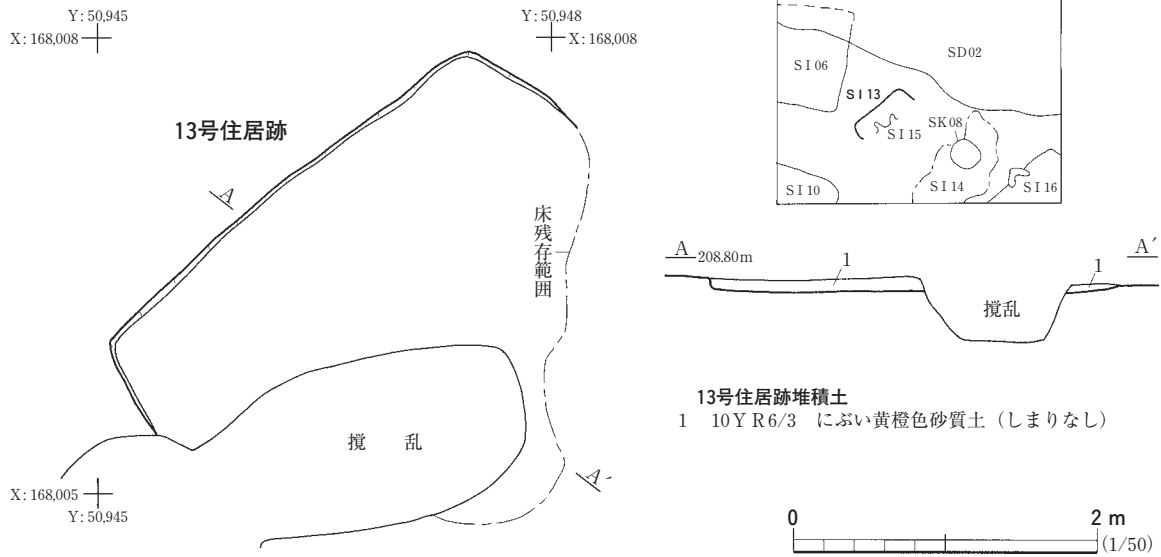


図39 13号住居跡

状態に恵まれておらず、南半部は周壁・床面が欠損している。おそらく、15号住居跡の構築の際に、削り取られてしまったと考えられる。床面と検出面の比高差は、残りの良い西壁で、8～10cmを測る。また南周壁側から床中央に、大きな攪乱を受けている。

本住居跡の堆積土は、1層である。締まりの無いにぶい黄橙色砂質土で、L IIの再堆積層と考えている。

本住居跡の平面プランは、方形を呈する。規模は、南北3.5m、東西2.7m以上で、高木遺跡では小型の部類に属する。方向は、発掘基準線北に対して、東に47°振れている。

床面は、平坦に整えられており、貼床は認められない。また、踏み締まりも認められなかった。

カマドは、遺存状態から判断して、西周壁には付設されていなかったとみられるが、具体的な場所は特定できない。また、他の細部施設も検出されなかった。

遺物 (図40, 写真504)

遺物は少ない。土師器片37点が出土した。

図40-1は、床面から出土した土師器甑である。単孔式の大型品で、口縁部と胴部の境に、段を形成する。胴部外面は、ハケメ調整のあと、全体が縦位にヘラケズリ調整されている。

まとめ

本遺構は、2号溝跡の南至近距離に営まれた竪穴住居跡である。同溝跡との同時性については、資料不足ではっきりしない。ただ、床面出

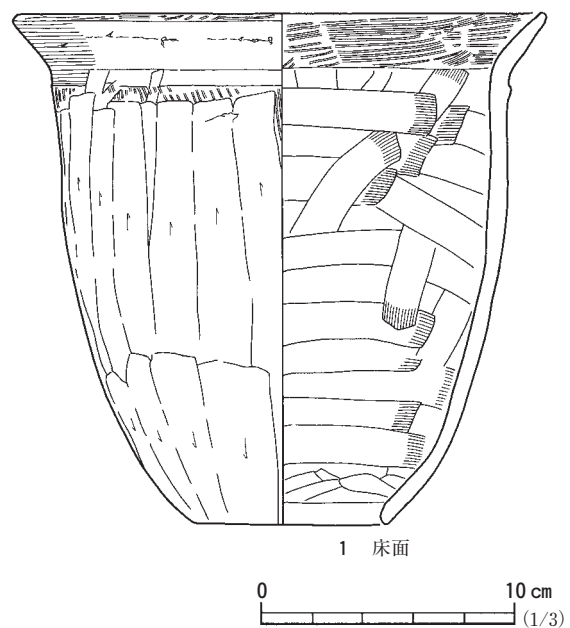


図40 13号住居跡出土遺物

土の土師器甕が栗罎式に比定されるので、比較的近い時期に営まれていたことは確かであろう。

遺構自体は、残りが悪く、規模が小さいという点を除くと、詳しいことは分からなかった。15号住居跡とは、建て替えの関係にあると考えている。(菅原)

14号住居跡 S I 14

遺 構 (図41, 写真40)

本遺構は、N20グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面で、2号溝跡の南側にあたる。本住居跡の北端は、2号溝跡の南肩とほとんど接しており、両者が同時存在したとは考えられない。

本住居跡は、残りが悪い。周壁が残っていたところは一か所も無く、一点鎖線で囲んだ南北6.1m以上、東西3.2m以上の範囲に硬化した床面が残っているだけだった。したがって、平面プランと規模は、不明である。また、70号住居跡・8号土坑と重複関係を有しているが、これらとの新旧関係も不明である。カマドは、焼土面の位置から、南周壁に設置されていたと推定される。

遺 物 (図42, 写真504)

遺物は、カマド痕跡の焼土面周辺で、土師器片60点が出土した。

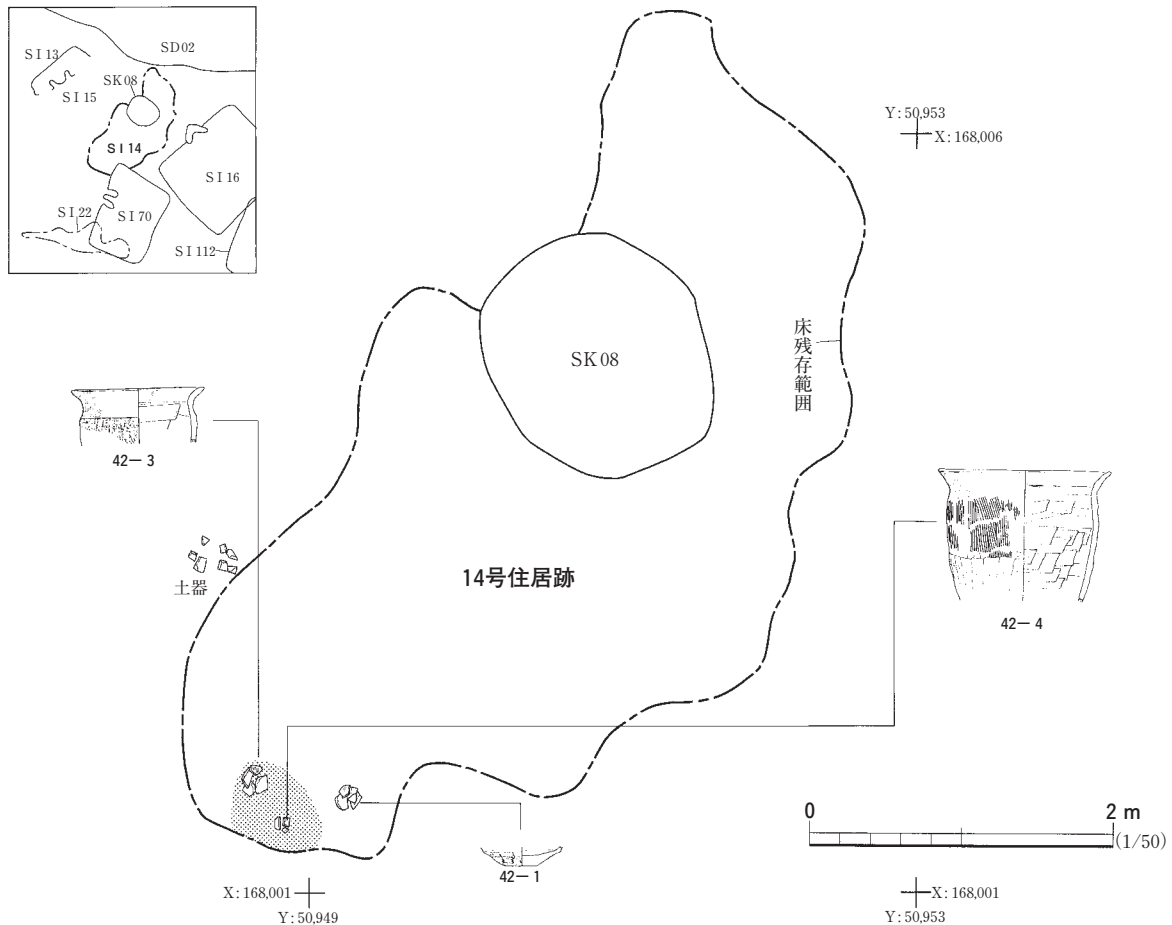


図41 14号住居跡

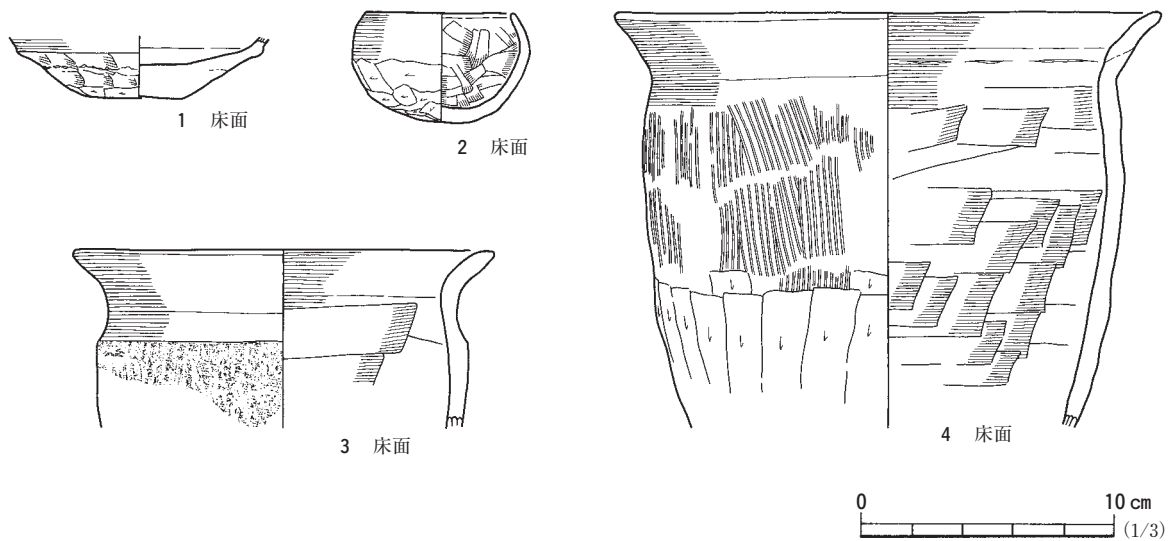


図42 14号住居跡出土遺物

図42-1は、異形の土師器杯である。底部が、丸底に仕上げられておらず、内面はナデ調整で、ヘラミガキ・黒色処理されていない。2は、半球形の小型土師器杯である。器高が高く、口縁部は、内傾して立ち上がる。これも、内面は1と同じように、ヘラミガキ・黒色処理が行われていない。

3は、土師器甕の上半部である。口縁部と胴部の境に、明瞭な段を形成している。胴部外面はハケメ調整で、典型的な栗囀式甕と見なせる。4は、大型の土師器甕で、胴部外面にハケメ調整のあと、縦位のヘラケズリ調整が加えられている。

まとめ

本遺構は、2号溝跡の南至近距離で検出された竪穴住居跡である。両者の同時存在はあり得ないが、共伴遺物が栗囀式に比定されることから、さほど年代的には隔たらないとみられる。

遺構自体は、残りが非常に悪く、詳しいことはほとんど知ることができなかった。（菅原）

15号住居跡 S I 15

遺 構 (図43, 写真41・42)

本遺構は、N20グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面で、2号溝跡のすぐ南側にあたる。

本住居跡は、検出作業を繰返すうちに、周壁・床面が消失してしまった。検出されたのは、結果的に周囲より一段高く残ってしまったカマド燃焼部だけである。

なお、本住居跡の直下では、既述した13号住居跡が検出されており、住居跡方向の展開からすると、両者は、建て替えの関係である可能性が想定される。

検出されたカマド燃焼部は、小型の土師器甕を伏せて支脚にしていた(図44-2)。位置は、底面の左寄りで、外山政子の復元案(外山:1991)に従うと、土師器甕の2つ掛け構造となる。また、両袖の補強材に、土師器甕を1個体ずつ倒立させており(同図1・6)、天井部にも、土師器甕3個

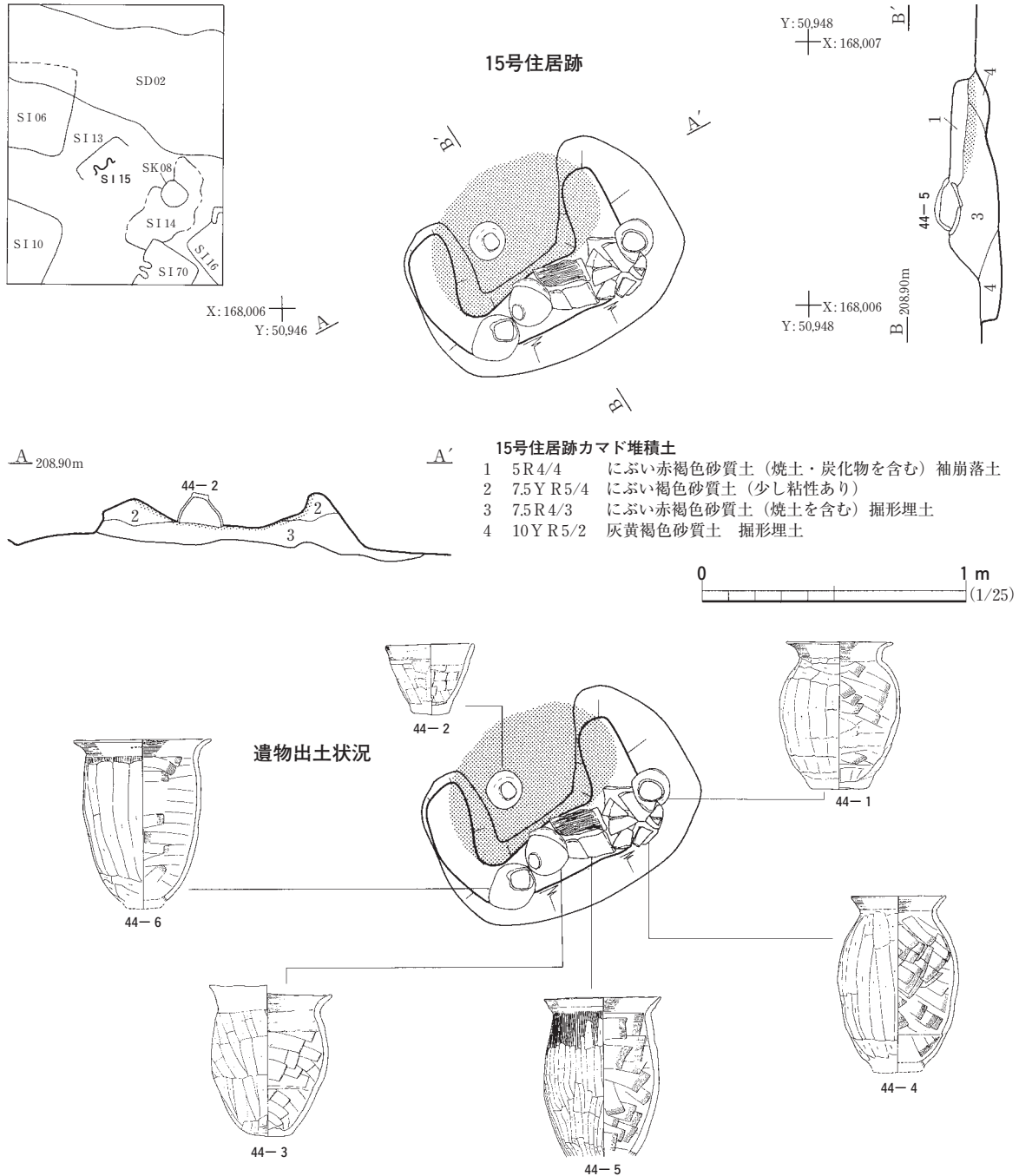


図43 15号住居跡

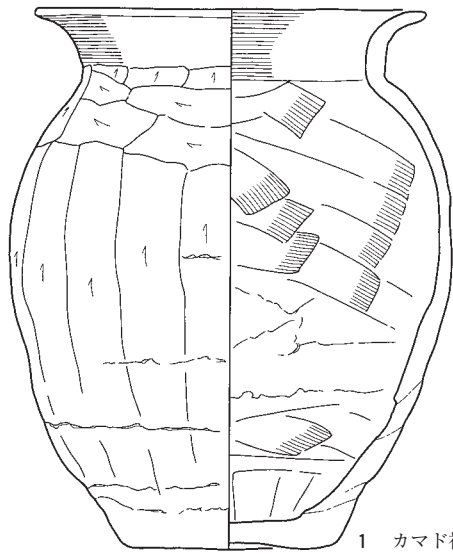
体を横方向に連結して補強材としている (同図3~5)。

このような、天井部の補強方法は、関東地方に多く類例が知られている。居住者の性格を考える上で、示唆的であるかも知れない。

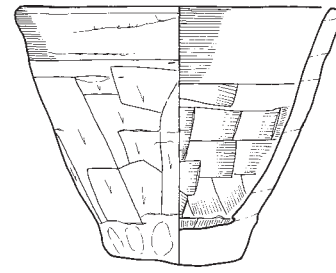
焚口幅は、袖先端の内側で計測すると、48cmを測る。

遺物 (図44, 写真504・505)

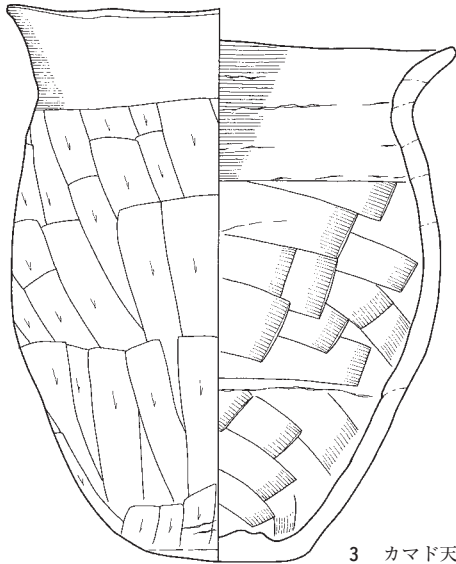
遺物には、カマド構築材に転用された土師器6点がある。これらは破片の状態、66点を数え、接合により完形に近い状態に復元された。具体的には、支脚の土師器甕1点、袖補強材の土師器甕



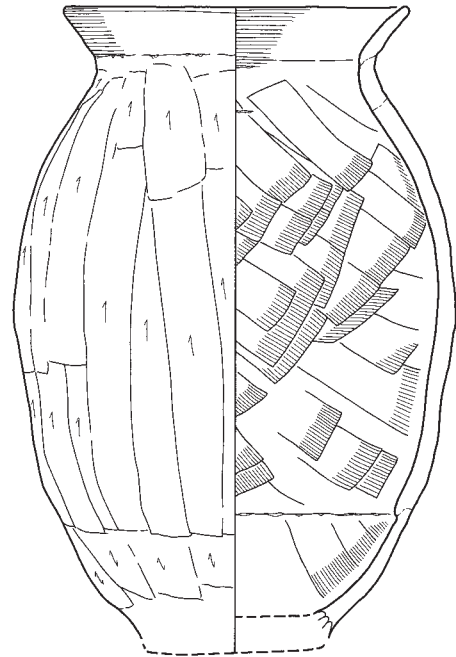
1 カマド袖構築材



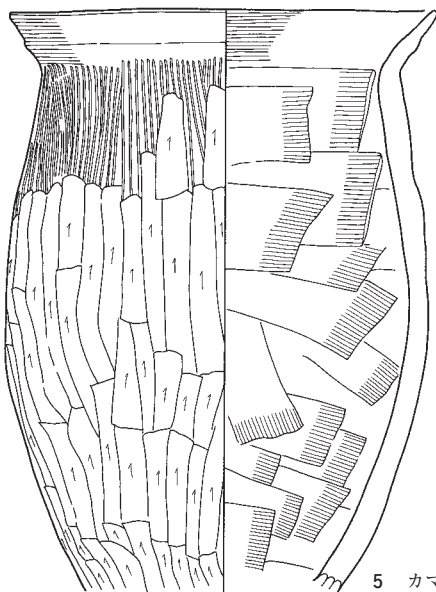
2 カマド支脚



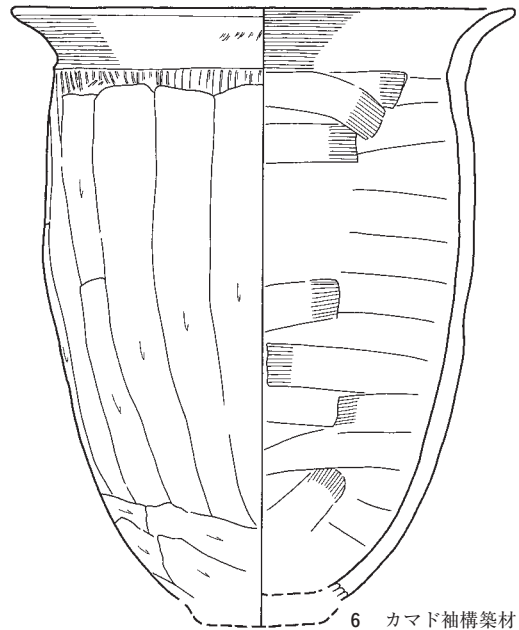
3 カマド天井部構築材



4 カマド天井部構築材



5 カマド天井部構築材



6 カマド袖構築材



図44 15号住居跡出土遺物

2点、それに天井部補強材の土師器甕3点である。支脚の1点を除くと、他はすべて長胴甕に分類される。

図44-1は、右袖補強材の土師器甕である。器形は、胴部上位に最大径があり、肩が強く張る。また、胴部最大径：器高比が小さく、長胴甕としては、寸詰まりのプロポーシオンを呈している。頸部は直立し、口縁部が外反する。器面調整は、力強いヘラケズリで、面取りされた単位がはっきりと分かる。

2は、支脚に転用された土師器甕である。やや不安定な底部から、体部・口縁部が直線的に外傾している。口縁部は、横ナデされており、頸部はほとんど括れない。この土器も、外面調整はヘラケズリである。

3は、天井部構築材左端の土師器甕である。1と同じで寸詰まりのプロポーシオンをなしており、外面はヘラケズリ調整されている。ただ頸部の括れが弱く、口縁部径と胴部最大径がほぼ等しい。

4は、天井部構築材右端の土師器甕である。胴部は、やや細長で、中央に最大径のあるラグビーボール状を呈する。これも、やはり外面がヘラケズリ調整されている。

5は、天井部構築材中央の土師器甕である。胴部形態は、4と同じように、細長く、最大径が中位にある。ただ、口径と胴部最大径がほぼ等しく、頸部の括れは弱い。胴部外面はハケメ調整されており、その後、下半部がヘラケズリ調整されている。

6も、胴部外面は、ハケメ調整の後にヘラケズリ調整が施されている。この甕は、口径が胴部最大径を大きく上回り、形態的には、甌に一般的にみられるものに近い様相を呈している。しかし、内面には、甌固有の縦位のミガキ・ナデ調整がみられず、明らかに甕と意識されて製作された土器であることが分かる。

以上のように、本住居跡の土師器甕は、外面がヘラケズリ調整される点で、強い斉一性を示している。

ま と め

本遺構は、2号溝跡のすぐ南側に営まれた竪穴住居跡である。13号住居跡が建て替えられたものと考えた。残りは非常に悪く、カマドだけ検出された。

本住居跡のカマド燃焼部は、土師器甕で天井部が補強されており、類例は関東地方に多く認められる。この点で、出自がどこにあるかが問題となろう。

時期については、伴出土器に舞台式・栗圀式の要素が混在していた。このため、詳細については第3編で検討を加えたのち、結論付けたい。 (菅原)

16号住居跡 S I 16

遺 構 (図45~47, 写真43~47)

本遺構は、N20グリッドでL II上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面で、2号溝跡のすぐ南側にあたる。両遺構の距離は、最短で1.8mを測る。

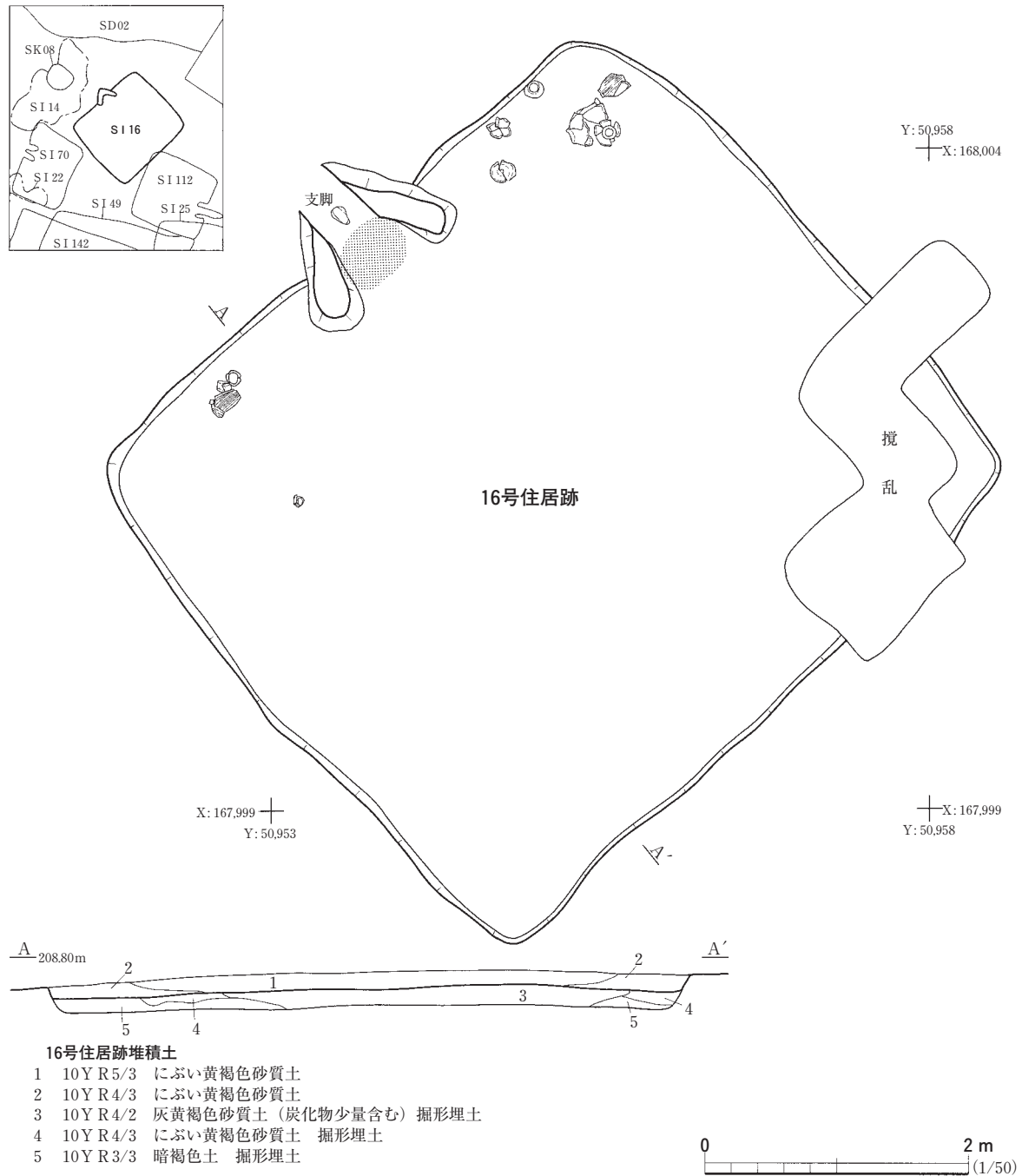


図45 16号住居跡

プランは、堅く締まったL II 上面に、やわらかい砂質土が方形に広がって、分かりやすく捉えられた。ただ、南東部は、攪乱の影響でコーナーを見つけるのが難しく、この部分だけ、検出作業を繰り返している。そのため、周壁はほとんど削平されてしまった。

本住居跡は、112号住居跡と重複しており、これより新しいと考えている。重複部分が少ないため、遺構相互の切り合いとしては微妙であったが、後述する出土遺物にも、この理解に矛盾する要素は認められない。

本住居跡の遺存状態は、良好である。北東隅に攪乱がみられるが、全体のプランが捉えられた。

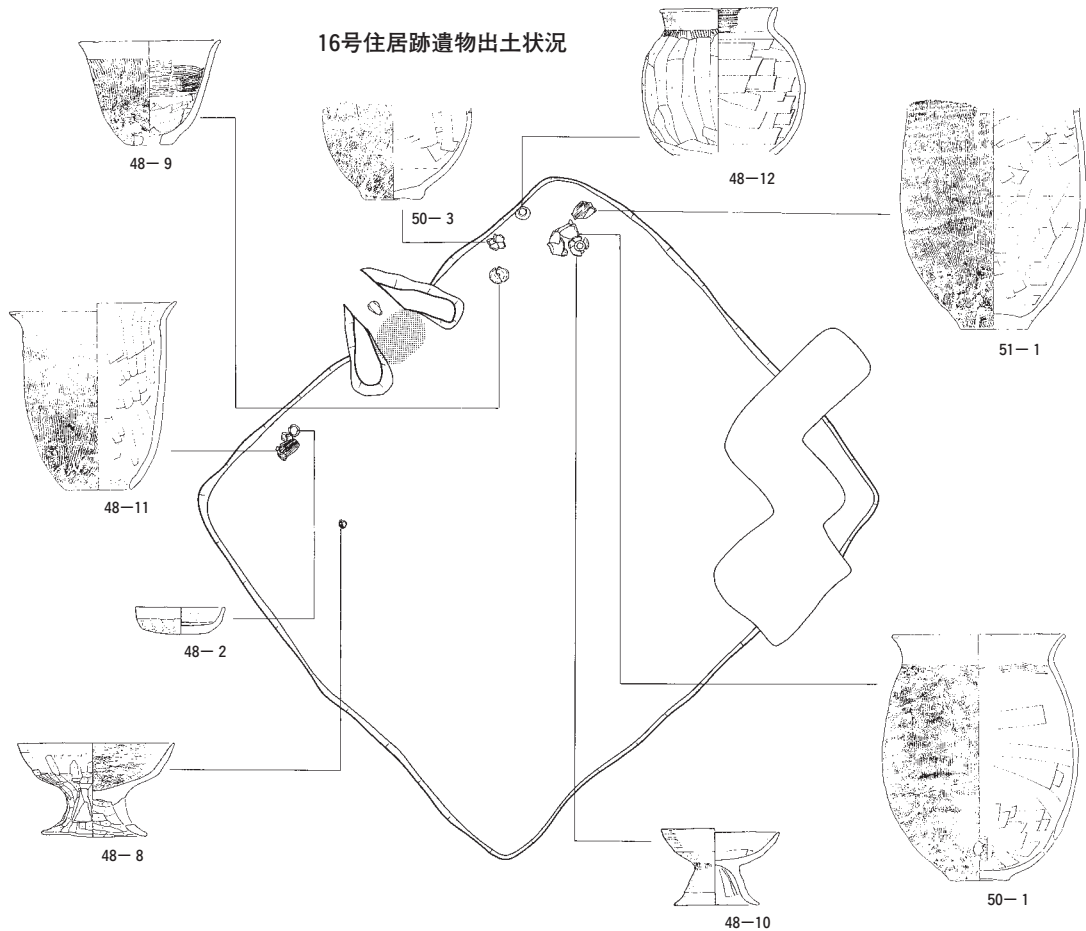


図46 16号住居跡遺物出土状況

また、出土遺物にも恵まれている。

廃絶後に堆積した土層は、2層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は自然埋没したと考えている。床は、掘形内部に3回の工程で埋土を行い、10cmほどかさ上げして、平坦に整えられたことが断面観察で判明している。上面は踏み締まりが認められず、軟弱な印象を受けた。検出面と床面の比高差は、平均で20cmあまりを測る。

本住居跡の平面プランは、整っている。東西に少し長いが、概ね、正方形に近い形態を呈している。規模は、東西5.5m、南北4.9mで、高木遺跡では中型の部類に属する。方向は、発掘基準線北に対して東38°偏している。

カマドは、北周壁中央に設置されていた。煙道部は、検出作業を繰り返すうちに無くなってしまったが、燃烧部は遺存状態が良い。袖は、「ハ」の字状に開いて、周壁から48cm伸びており、倒立させた土師器甕を先端の補強材にしている(図49-1・3)。さらに、本住居跡は、北西に近接する15号住居跡のように、焚口天井部を土師器甕で補強していた可能性が考えられる。図49-4・図50-2が、これにあたる。

なお、図49-4は、出土地点が少しずれているが、これは、奥壁側に倒れた支脚に引きずられたのが理由と考えている。

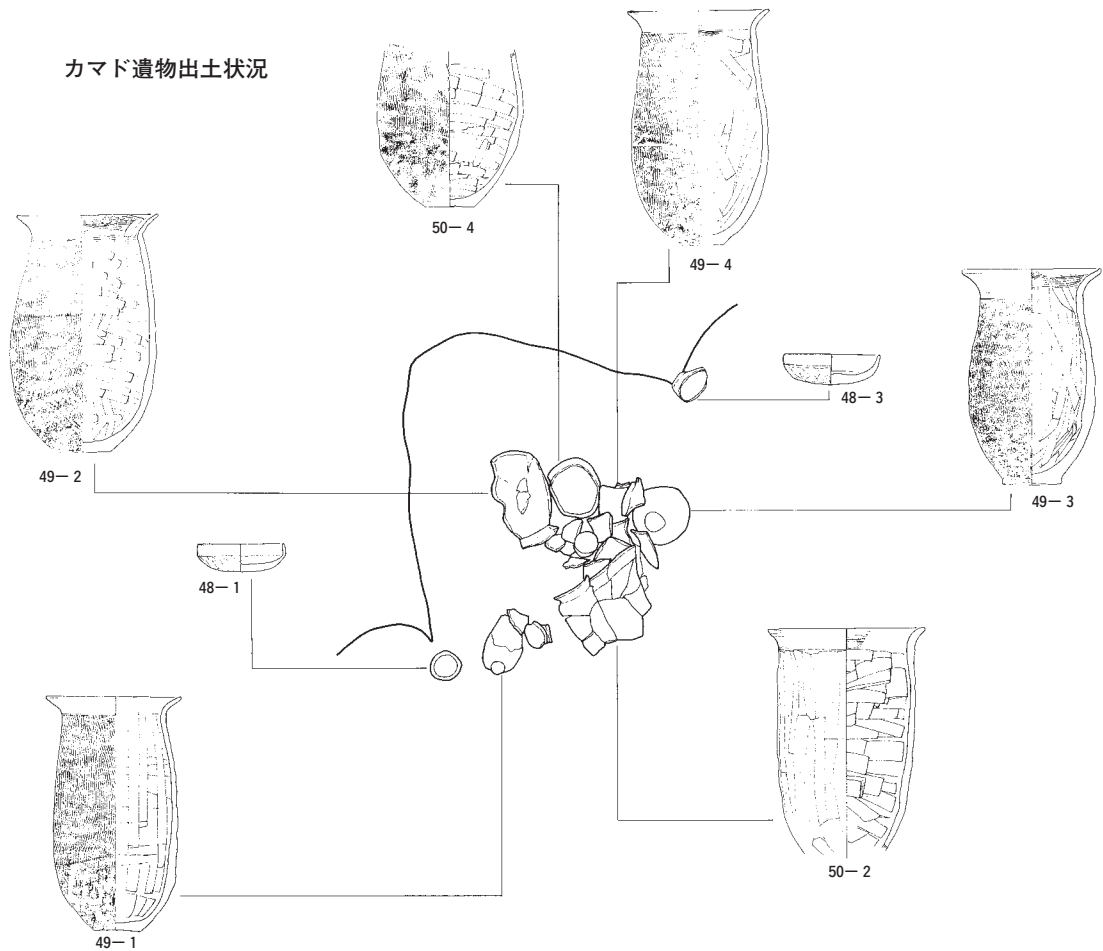
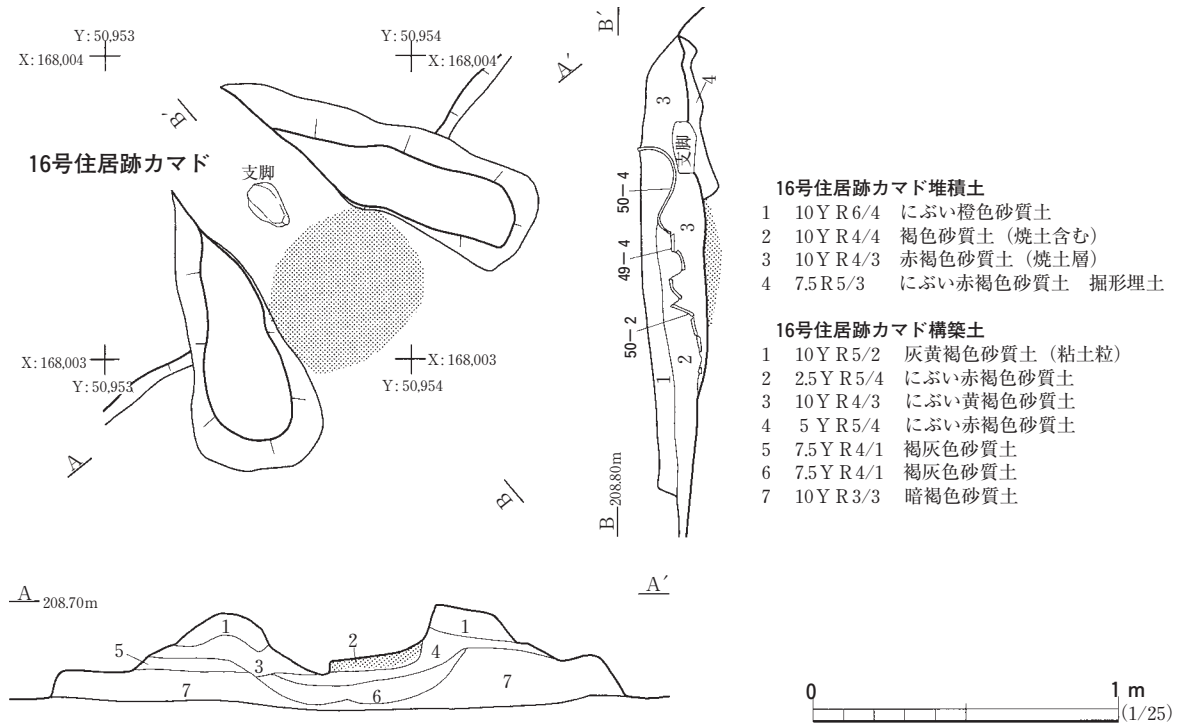


図47 16号住居跡カマド

実際に、このカマドで煮炊に使用されたのは、図49-2・図50-4の2つと考えられる。出土状況から判断すると、外山政子分類の2つ掛け横並びとなろう。

遺物 (図48~51, 写真506~509)

遺物は、破片で土師器片472点が出土した。そのほとんどが遺構に伴うもので、図48~51の提示資料に復元された。出土状況には、規則性がみられる。また、この住居跡で使用された組成のすべてが揃っていると推定される。

カマドでは、上述した燃烧部補強材や、懸け口に固定された土師器甕が出土している。また、袖の付け根部分に、法量・形態の近似した土師器杯(図48-1・3)が据えられていた。

さらに、周囲を見回すと、カマド右脇の床面で、土師器甕4点、高杯1点が、カマド左脇の床面で、杯1点、高杯1点、甌1点が伴った。出土状況は、図48-2・9・12・図50-3が正立しており、図48-8は伏せられていた。また、図48-11・図50-1・図51-1は横転していたが、本来は、正立していたか伏せられていたと考えられる。したがって、本住居跡では、土器類が一括で置き去りにされたとみられる。

なお、図50-3は上半部が、図48-12は底部が割り揃えられており、周壁ぎわに正立していた。何かの置き台に転用されていた可能性が考えられる。

図48-1~4は、関東系土師器杯である。どれも遺構に伴う。4を除く3点は、明らかに同一工人の製作と分かる製品である。法量・形態が近似するばかりでなく、胎土・焼成・色調が実に良く似ている。さらに、内面がナデ調整されるという技術上の特徴が、一致する。これに対し、4はやや大ぶりで、内面がヘラミガキ・黒色処理される点で異なっている。

図48-5は、 $\ell 2$ から出土した土師器杯の口縁部片である。有段丸底の器形になると思われる。

図48-6は、床面出土の土師器杯である。有段丸底の器形を呈しており、器面調整の点からも、問題なく栗罎式に比定される。

図48-7は、掘形埋土出土の大型土師器杯である。この大きさに比例してか、器面調整は粗雑で、外面にはナデ調整前に施されたハケメ痕が残っている。また、内面はヘラミガキ・黒色処理されておらず、ナデ調整だけで仕上げられている。

図48-8・10は床面出土の土師器高杯である。8は、器高12.8cmを測る大型品で、脚部に3方透かしがみられる。10は法量が小さく、脚部に透かしは入らない。

図48-9・11は、土師器甌である。前者はカマド右脇の床面、後者はカマド左脇の床面から出土した。どちらも単孔式で、胴部外面がハケメ調整される。大小に法量分化している。

図48-12は、北周壁ぎわで出土した土師器球胴甕である。置き台に転用されたとみられる。器高20cmほどの小型品で、頸部の括れが弱い。この土器は、外面がハケメ調整のあと、縦位にヘラケズリ調整されている。15号住居跡のカマド補強材と共通した特徴であり、図48-1~4の関東系土器の存在とも併せて、注目される。

図49-1・3は、カマド袖の補強材に転用された土師器甕である。胴部は下膨らみ気味で、外面

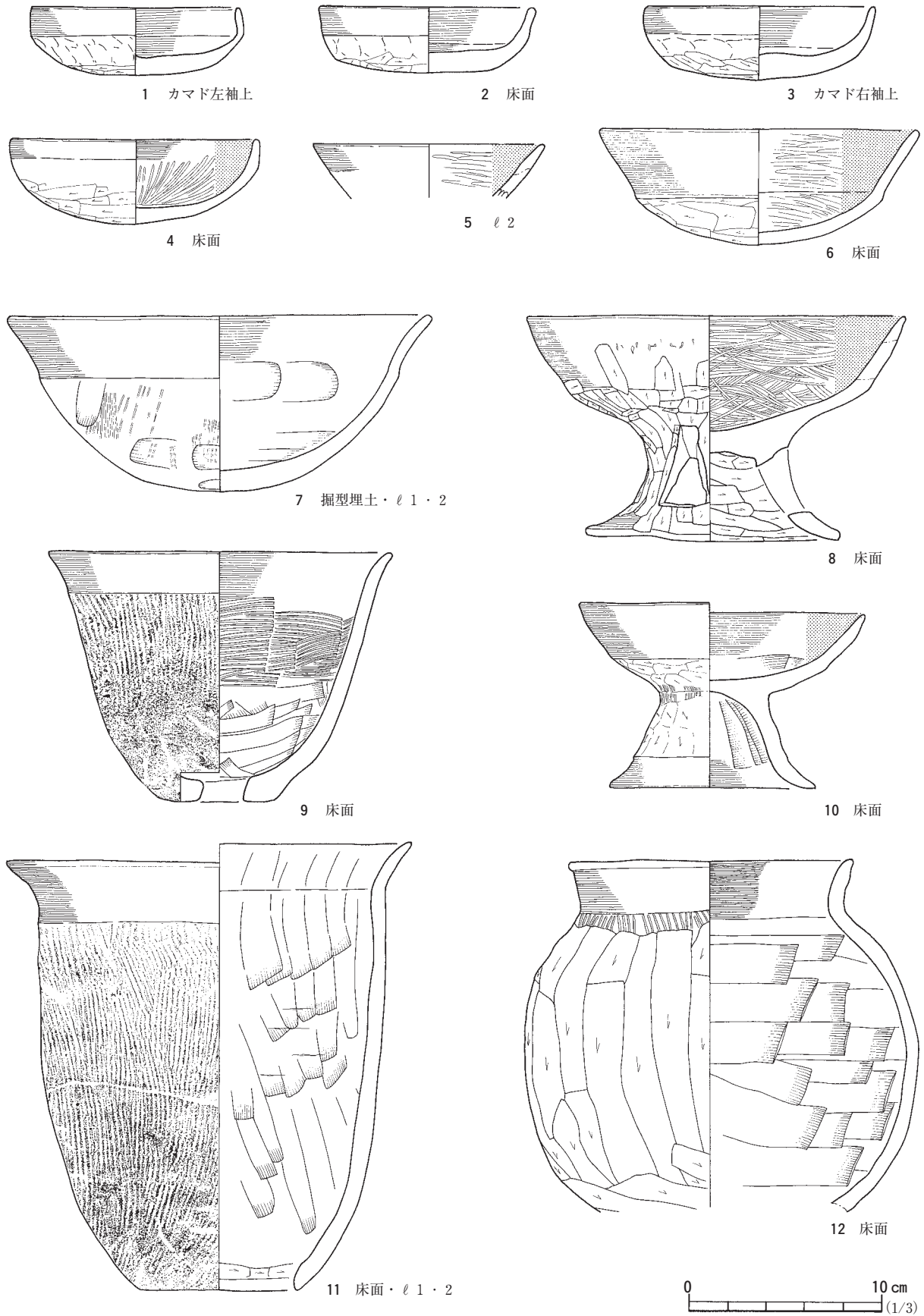
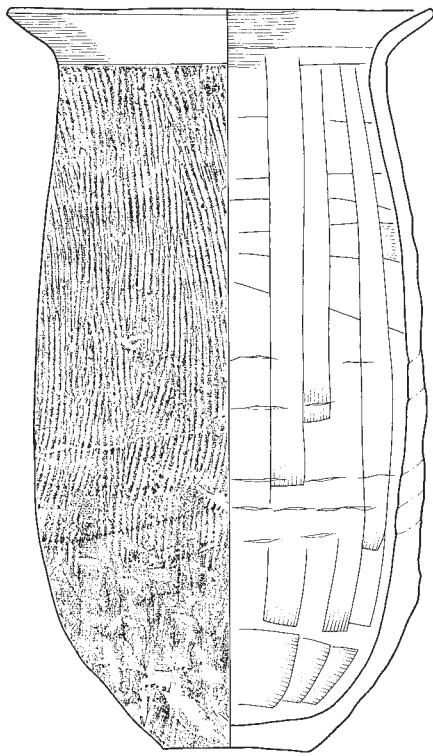
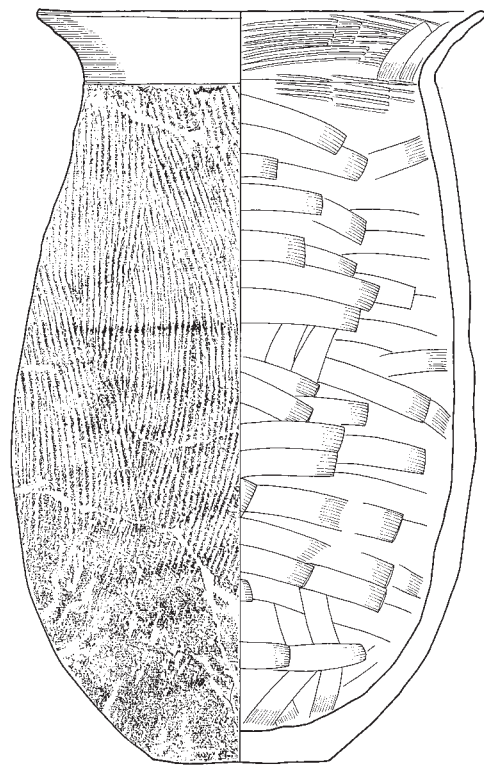


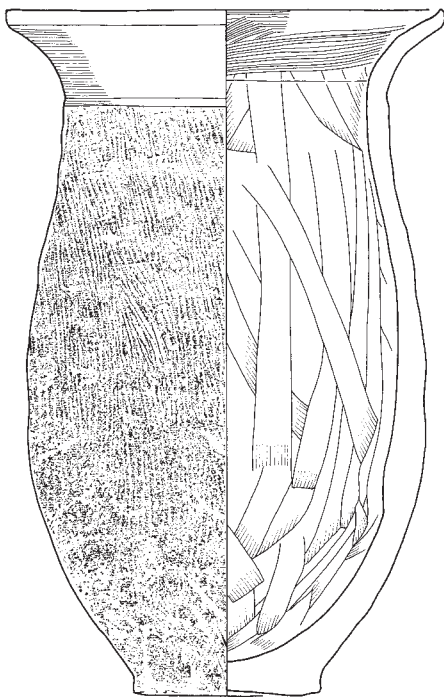
図48 16号住居跡出土遺物 (1)



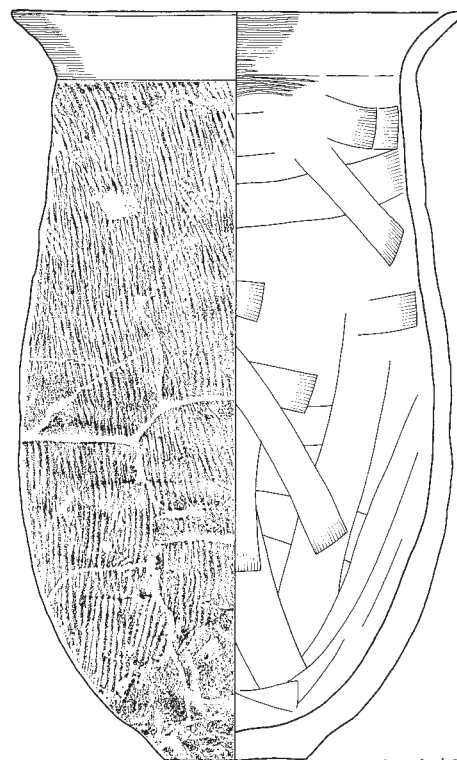
1 カマド左袖構築材



2 カマド底面



3 カマド右袖構築材



4 カマド底面

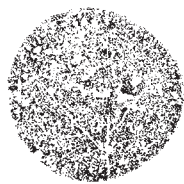


図49 16号住居跡出土遺物 (2)

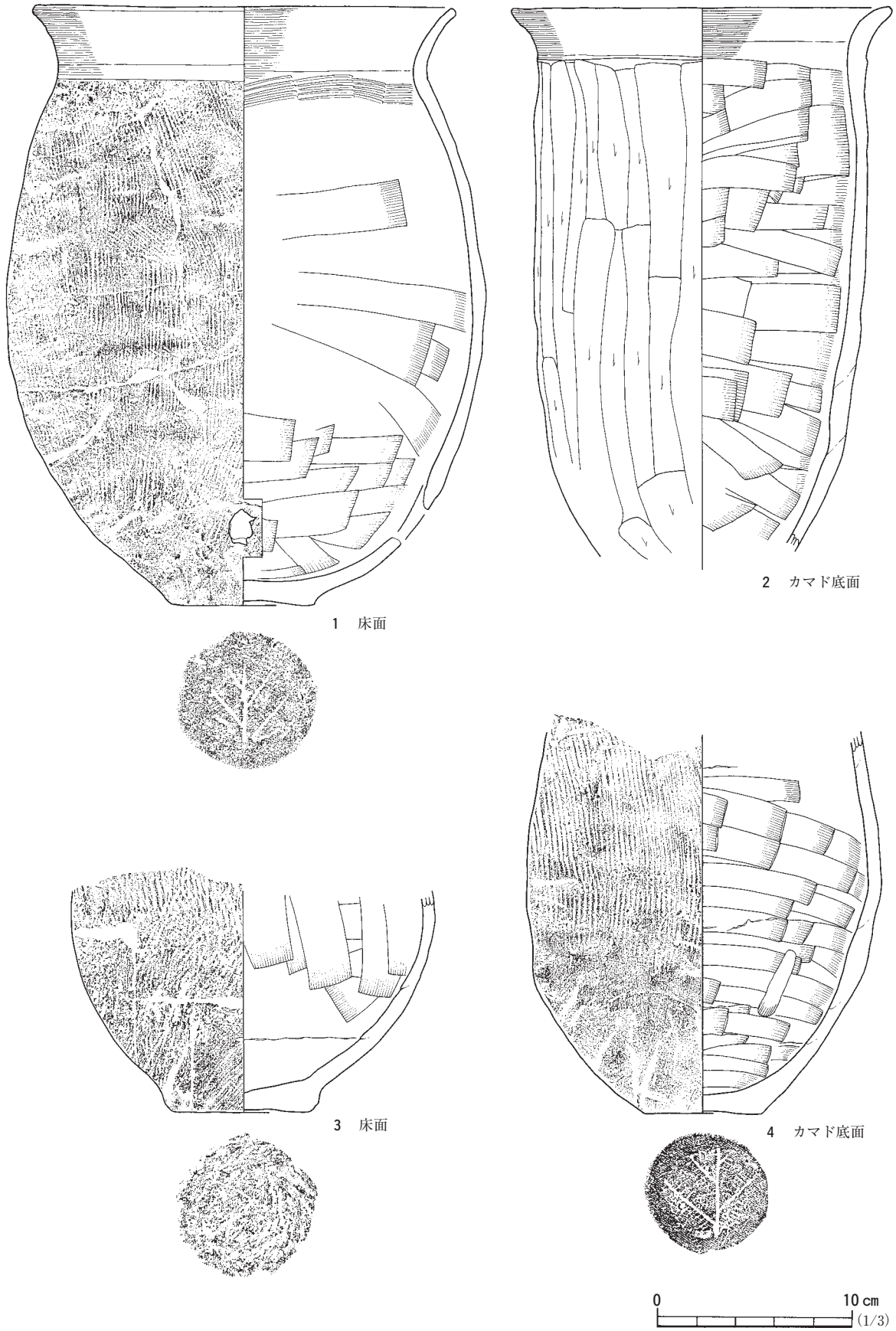


図50 16号住居跡出土遺物 (3)

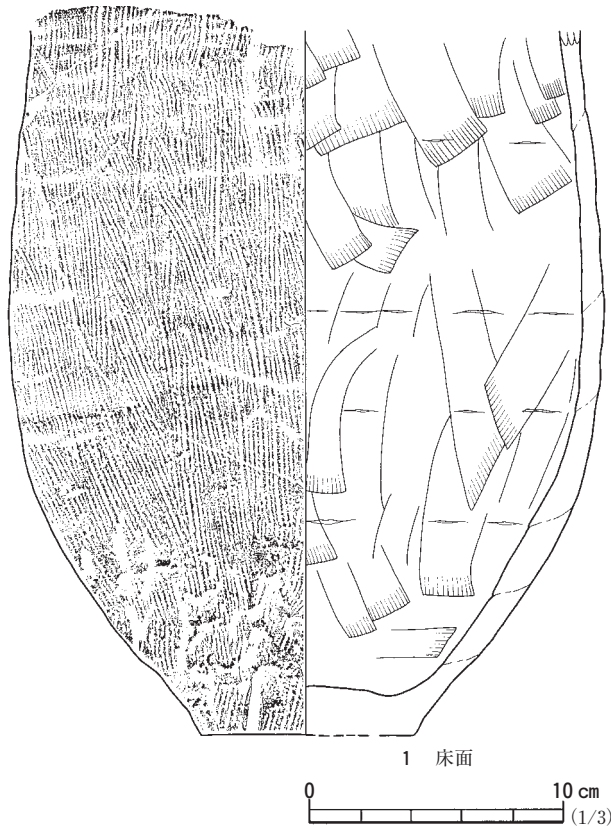


図51 16号住居跡出土遺物(4)

胴部下部は、焼成後に穿孔されている。

図50-2は、カマド焚口で前倒しになっていた土師器甕である。口径が胴部径を上回り、胴部は膨らみを持たない。また、外面がヘラケズリ調整されている。このような点は、他の甕と明らかに別系譜であることを示している。

図50-3は、周壁際で置き台に転用された土師器甕である。底部付近だけ残っている。図50-4は、上半部を欠いた土師器甕で、カマド燃焼部から出土した。

図50-4は、カマド燃焼部に正立していた土師器甕である。懸け口に固定されていたものと推定される。胴部上半を欠いているが、これは意図的に割られた可能性がある。

図51-1は、北東隅床面に潰れていた土師器甕である。上半部を欠いている。胴部外面は、ハケメ調整されている。

ま と め

本遺構は、2号溝跡のすぐ南側に営まれた竪穴住居跡である。今回の調査で検出された住居跡の中でも、残りが良く、出土遺物に恵まれたものの1つである。

遺物には、在地に無い要素を備えたものがみられ、注目される。具体的には、関東地方との関連が土師器杯・甕に窺われる。

時期は、栗圀式期の範疇で捉えて差支えなかろう。したがって、7世紀代と考えておく。詳細については、第3編で検討したい。

(菅原)

がハケメ調整される。器高30cmを下回る。

図49-2は、カマド燃焼部内から出土した土師器甕である。懸け口に固定されていたものだろう。やや太めで、下膨れ気味の胴部を有しており、口頸部は「く」の字状に屈曲する。胴部外面と口縁部内面に、ハケメ調整痕が観察される。

図49-4は、カマド燃焼部に潰れていた土師器甕である。上述したように、天井部構築材に転用されていたと推定している。器形は、胴部が下膨らみ気味で、口頸部が「く」の字状に屈曲している。外面はハケメ調整である。

図50-1は、カマド右脇床面の土師器甕である。形態は、長胴甕と球胴甕の中間的な様相を呈している。図48-10の土師器高杯が、もたれかかっていた。外面はハケメ調整されている。

17A号住居跡 S I 17A

遺 構 (図52・53, 写真48~51)

本遺構はO20, O21グリッドに位置し, LⅢ上面において検出された。また, 本遺構は調査区中央部の2号溝跡の南側に位置している。

本住居跡は, 17B号住居跡と建て替えの関係にある。本住居跡の床面下で17B号住居跡が検出されており, 本住居跡の方が新しい。建て替えに際しては, カマド構築位置を右側にずらし, 全体の規模を大きくしている。

住居跡の平面形は, 不整の方形を呈している。規模は, 東西4.1m, 南北4.1mである。住居跡と方位との関係は, 発掘基準線北に対して東に41°振れている。周壁は急角度で立上がり, 検出面から床面までの深さは, 住居跡の北西隅で最大6cmを測る。

床面は, 南側の4分の1を除いて確認することができた。床は, LⅢを掘り込んだままの直床である。住居跡堆積土は2層に分層される。いずれもにぶい橙色の砂質土であり, その性状より自然堆積土と判断した。

住居跡内施設はカマド1基を検出した。西周壁の中央に取り付き, 遺存状態は良好であった。燃烧部は, 奥行き60cm以上, 焚口幅50cmの規模を有している。袖は, 右袖長50cm, 左袖長37cmを測り, 床面から, 最大で20cmの高さが残っていた。煙道は長大で, 長さ1.5m, 幅25cmを測る。検出面からの深さは, 根元付近で最大5cmである。

カマドの堆積土は5層に分層される。ℓ1は灰褐色の砂質土, ℓ2・3は, にぶい赤褐色の砂質土で, 炭化物や焼土を含んでいる。このことから, カマド崩落土と考えている。ℓ4は灰褐色の砂質土, ℓ5は暗赤褐色の砂質土で, 掘形埋土と考えている。

袖の構築土は4層に分層できる。ℓ1は灰褐色の砂質土, ℓ2・3は, にぶい赤褐色の砂質土で, 炭化物や焼土を含んでいる。ℓ4は灰褐色の砂質土で, 掘形埋土と考えている。

なお, 燃烧部に土師器の甕1個体と支脚に使われた石が据えられていた。甕は, 左袖先端に倒立しており, 補強材に使用されていたと考えられる。おそらく, 右袖にも何かの補強が行われていたと推定されるが, 痕跡は残されていなかった。

遺 物 (図54, 写真509・510)

遺物は, 土師器片217点, 金属製品1点が出土した。図示遺物は8点あり, 図54-4を除く7点が遺構に相伴している。なかでも, カマド右脇では, 土師器杯4点が集中しており, 置き去りにされた様子を示していた。図54-1・3・5は伏せられており, 2は正立していた。

また, これらと一緒に大きな礫が出土している。あるいは, これが右袖の補強材に使用されていたのかも知れない。

図54-1~7は, 土師器杯である。1は, 須恵器杯蓋の模倣で, 口縁部は直立気味に立ち上がる。底部外面にハケメ調整痕が残っている。2~6は, 有段丸底杯に分類されるもので, 口縁部は外反

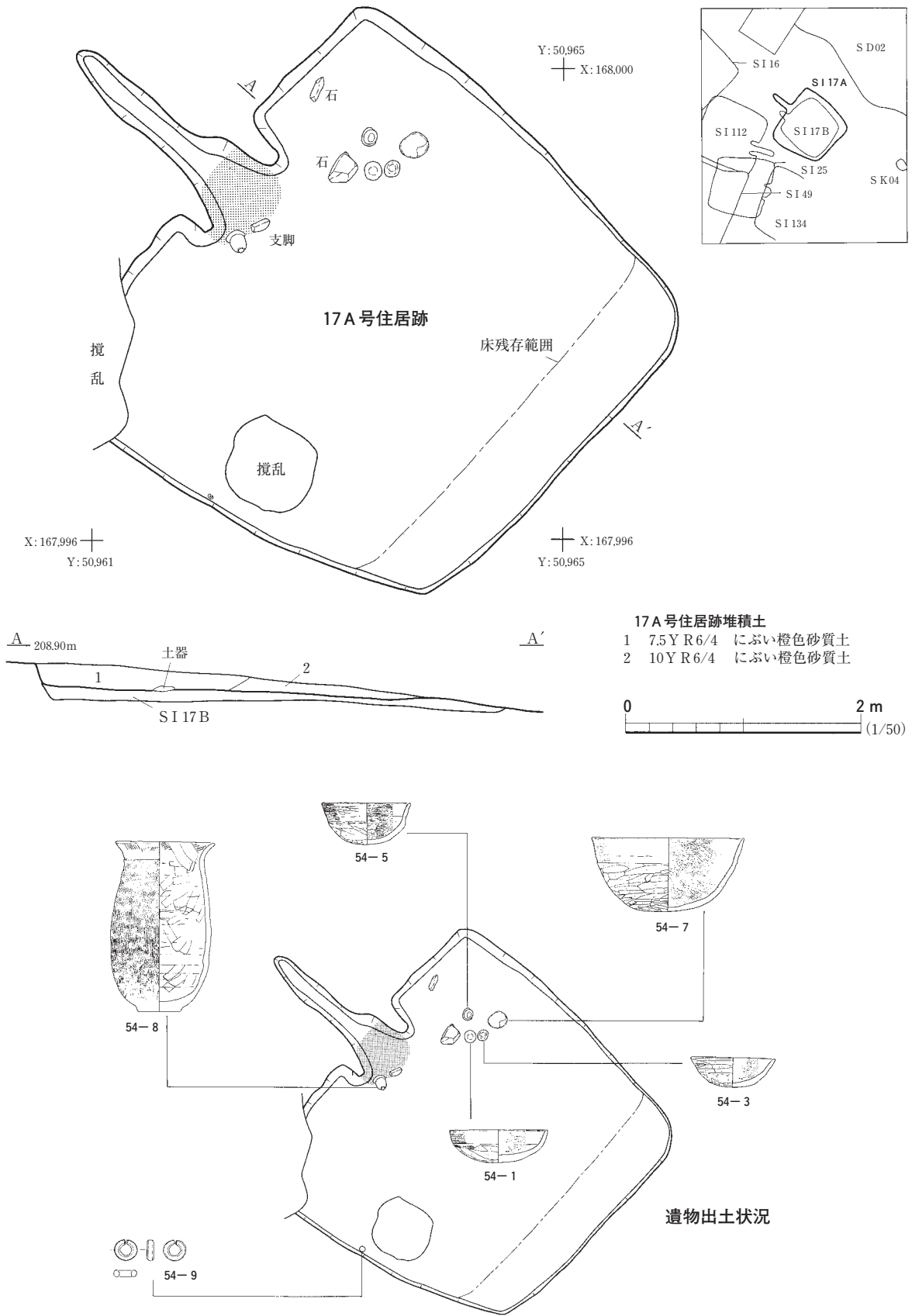


図52 17A号住居跡

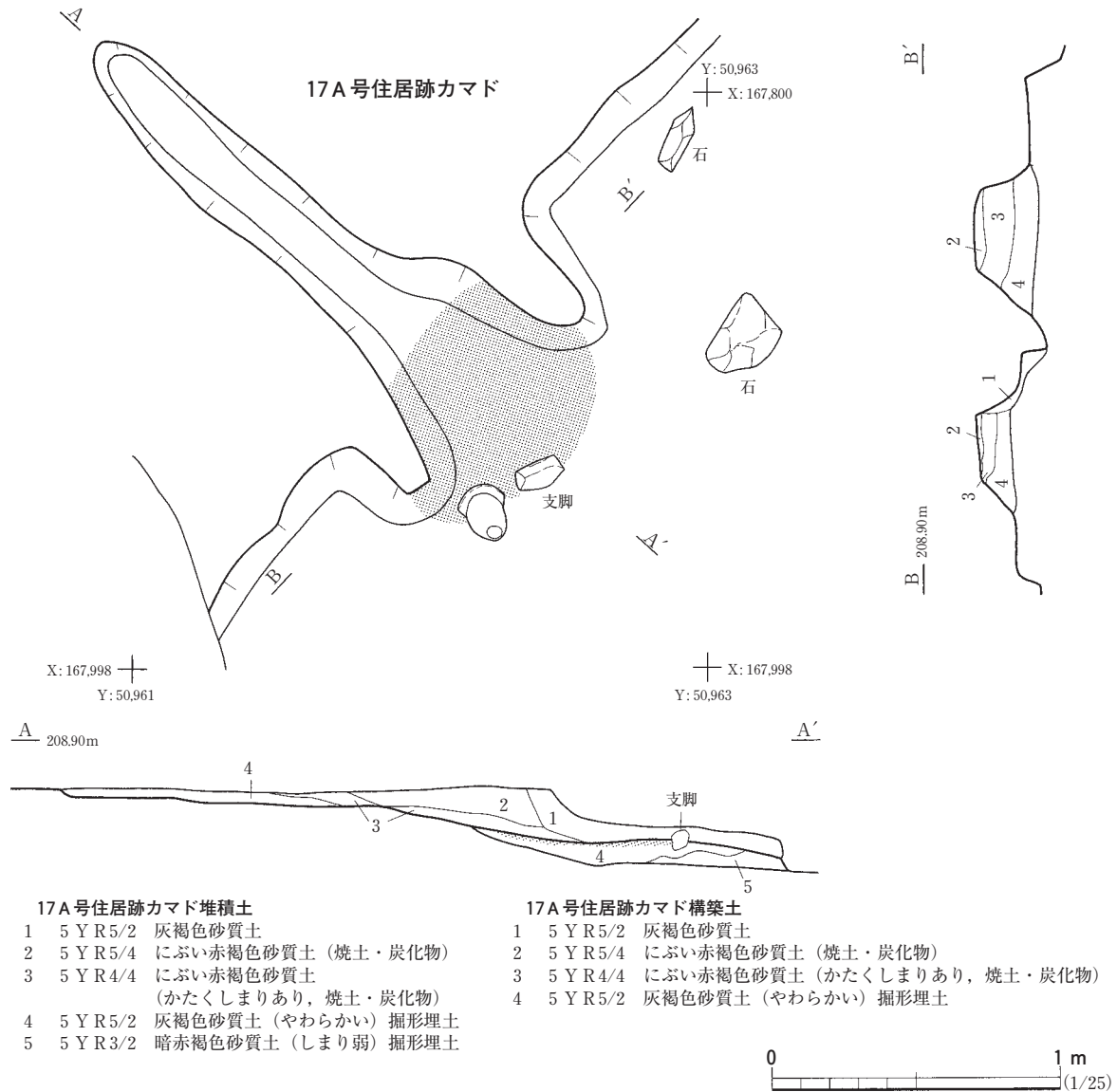


図53 17A号住居跡カマド

傾向にある。このうち、5は椀状を呈しており、須恵器杯蓋模倣とみることも可能である。3・5は、口縁部外面にヘラケズリが及んでいる。7は、口径24.3cmを測る大型品である。椀状の深い器形を呈しており、半球形状をなす。

8は、土師器長胴甕である。胴部は下膨れ気味で、口縁部が外反している。胴部外面は、ハケメ調整されている。

9は、銀環である。

まとめ

本住居跡は、17B号住居跡が建て替えられたものである。その際に、規模は大型化している。

遺物は、床面からまとまりのある資料が得られ、編年作業の好材料となった。注目されるものとしては、銀メッキの施された耳環がある。

本住居跡の所属時期は、栗圀式期と考えられる。

(高久田)

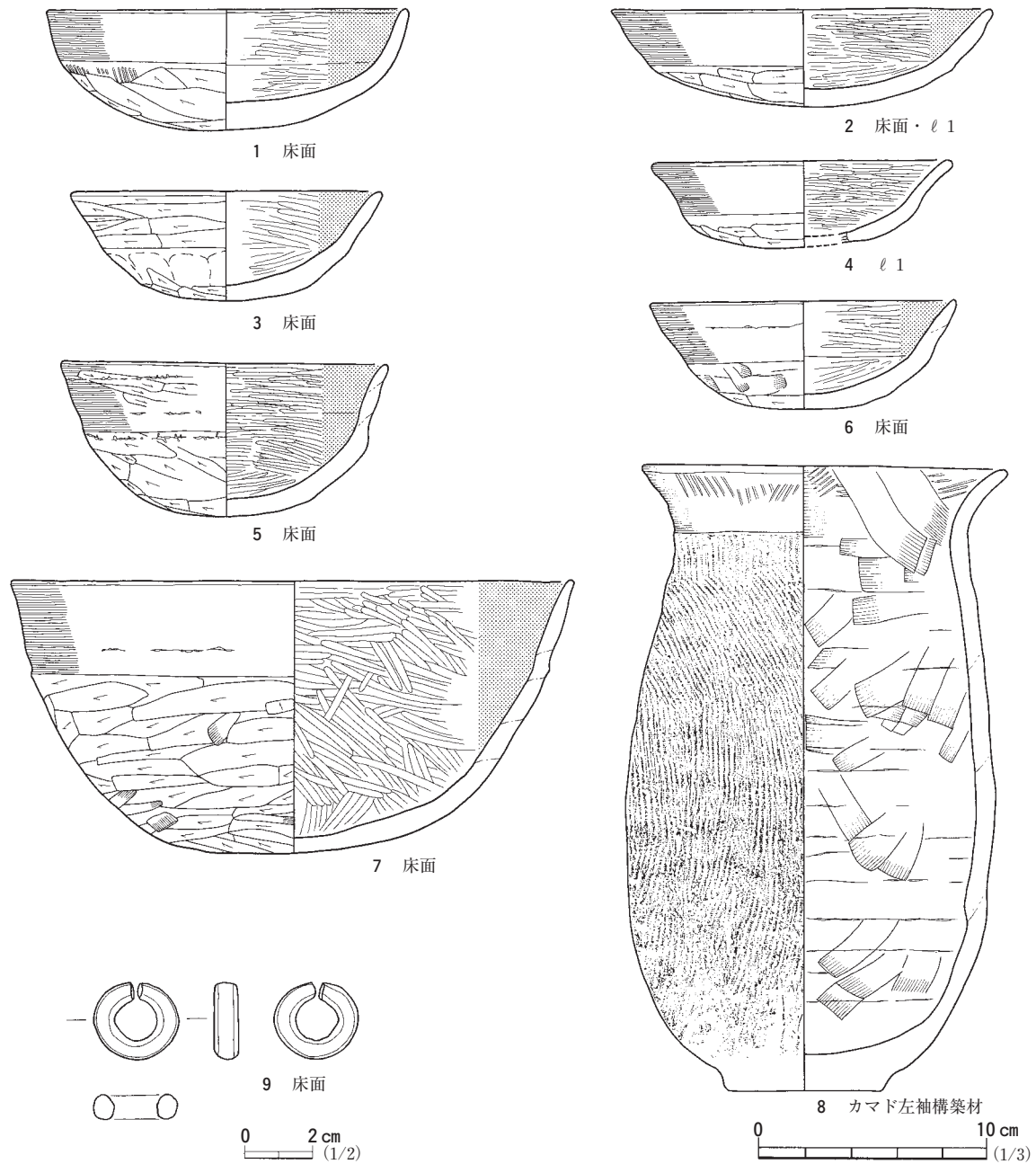


図54 17A号住居跡出土遺物

17B号住居跡 S I 17B

遺 構 (図55, 写真52~55)

本遺構は、17A号住居跡と建て替え関係にある。本遺構の方が古く、建て替え前に営まれていたものである。

O21グリッドに位置しており、調査区中央を東西に分断する2号溝跡の南側で検出された。

本住居跡の遺存状態は悪く、周壁は南隅周辺のみで確認できた。推測される平面形は、方形を呈していたと考えられる。規模は、東西3.4m、南北3.3mほどである。住居跡と方位との関係は、発

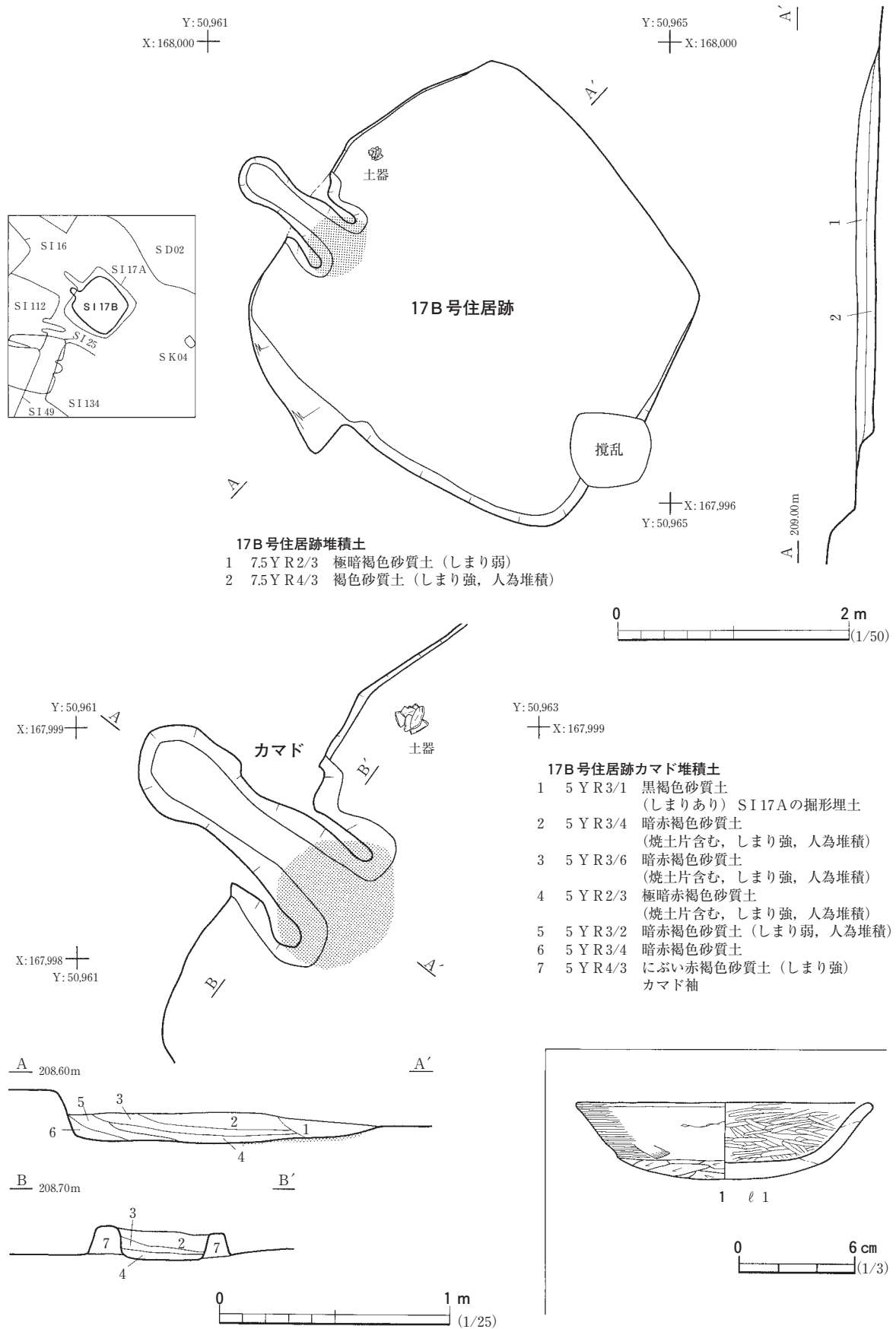


図55 17B号住居跡・出土遺物

掘基準線北に対して、41°東に傾く。残っている周壁は、急角度で立上がり、検出面から床面までの深さは、西周壁中央で最大12cmである。床は直床である。

堆積土は2層に分層される。いずれも、17A号住居跡構築時に埋められた人為堆積土と考えている。ℓ1は極暗褐色の砂質土で、ℓ2は褐色の砂質土である。

住居跡内施設は、カマド1基を検出した。カマドは西周壁に取り付き、遺存状態は比較的良好である。燃烧部は、奥行き50cm以上、焚口幅25cmの規模を有している。袖は、右袖長45cm、左袖長50cmを測り、床面から最大で11cmの高さが残っていた。煙道は長さ0.7m、幅20cmを測る。検出面からの深さは、先端付近で最大15cmである。

カマドの堆積土は6層に分層される。ℓ1は黒褐色の砂質土で、17A号住居跡の掘形埋土と考えている。ℓ2・3は暗赤褐色の砂質土で、炭化物を含んでいる。ℓ4は極暗赤褐色の砂質土で、炭化物を含んでいる。ℓ2～4とも、焼土片を含んでいる。ℓ5は暗赤褐色の砂質土で、燃烧部底面を覆っている。

袖の構築土は1層で、にぶい赤褐色の砂質土である。

遺物 (図55, 写真510)

遺物は、土師器片57点が出土した。図示遺物は1点ある。

図55-1は、有段丸底の土師器杯である。底部は平底風で、口縁端部が外反する。

まとめ

本住居跡は、17A号住居跡の建て替え前に営まれていたものである。周壁は、大半が失われていた。規模は、一辺3.5mを下回っており、小型の部類に属する。

本住居跡の所属時期は、下限を栗圀式期に求めることができると思われる。 (高久田)

18号住居跡 S I 18

遺構 (図56・57, 写真56～58)

本遺構は調査区北部のN20・O20グリッドにかけて検出した、一辺が約8mの大型の竪穴住居跡である。

本住居跡は、北西隅で19号住居跡、南東隅で8・69号住居跡と重複している。出土遺物から本住居跡よりも8号住居跡のほうが新しいが、他の住居跡との新旧関係は遺構の調査では判断できなかった。

本住居跡はLⅡ中よりカマドの範囲は検出していたものの、周囲に攪乱が多かったことと、住居跡が予想よりも大きかったことなどから、なかなか住居跡全体を把握できなかった。カマドの調査を先行させながら、カマド位置と対応するような南・西周壁が確認できたため、1軒の大型の竪穴住居跡と認識して調査を行っている。

南・西周壁の検出面はLⅢあるいはLⅣ上面である。住居跡内堆積土は大きく上下2層に分けられ、ℓ1の暗褐色砂は住居跡全体に認められる。その下層にはℓ4に相当する締まりのある黒褐色

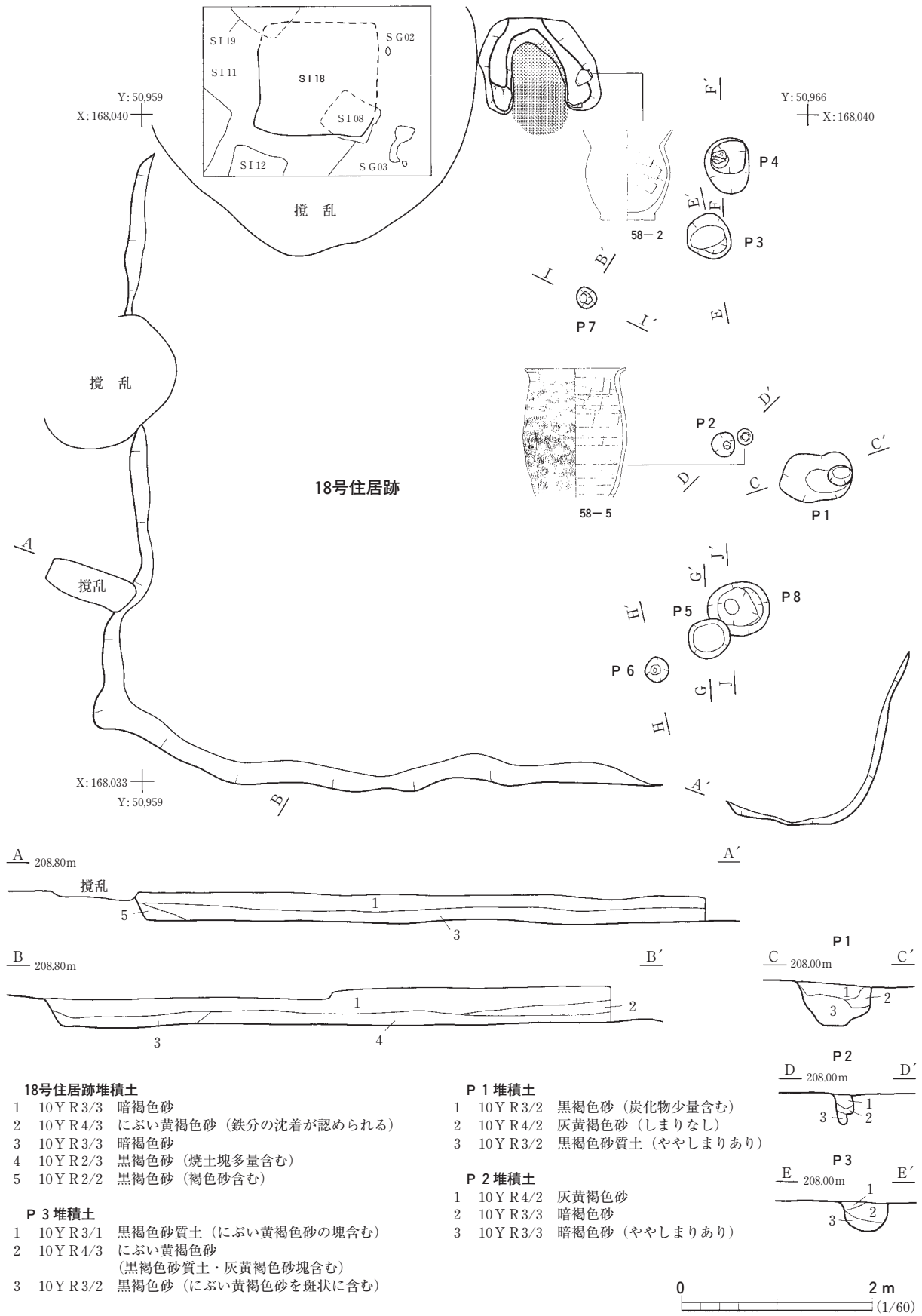


図56 18号住居跡 (1)

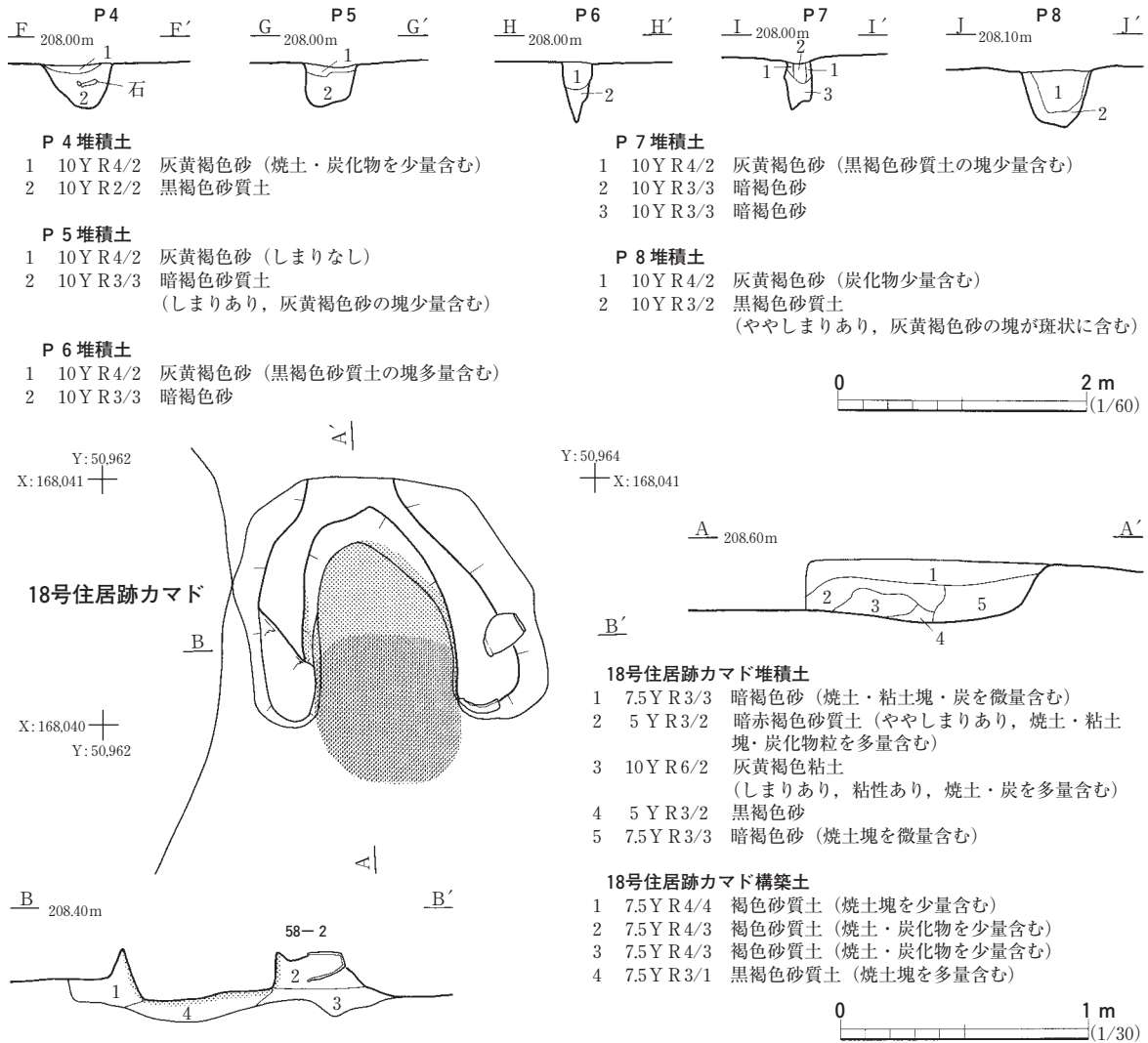


図57 18号住居跡 (2)

砂が広がっていた。

住居跡の大きさは遺存する部分で西周壁が約6.1m, 南周壁が約8.2mを測る。遺存する周壁とカマドの位置関係から, およそ一辺約8mの大型の正方形の住居跡と推測できる。

また, その場合の主軸方位はN 8° Eとなり, ほぼ真北を指している。深さは検出面から床面まで約30cmほどで, 南・西周壁とも緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ平坦で, 踏み締まりが認められ, 中央付近には部分的に焼土塊が散っていた。

カマド以外の付属施設は確認できず, 大型住居を支えられるような堅固な支柱穴を期待していたが, 検出できたものは8基の不規則な配置の小ピットだけであった。これらの小ピットは床面の駄目押し後のLⅢ中から検出したもので, 5号ピットは8号ピットより新しいというように, 中には新旧関係が確認されるものもあり, すべてが本住居跡に伴うものではないかもしれない。小ピットは住居跡の東側3分の1の範囲から検出され, それらの大きさは径約20cm前後のもの, 長軸約40~60cmの楕円形のものがあった。

北周壁は確認できなかったが、カマドは北周壁の中央に付設されていたようである。カマドは燃焼部しか残っておらず、煙道や煙出しは確認できなかった。カマド袖は北周壁の想定ラインから約1mほど張り出しており、両袖間は約80cmほどである。燃焼部は底面からカマド袖にかけて赤変しており、焚口周辺が特に強く火を受けている。

燃焼部内の堆積土は、5層に分層できた。カマドの天井は崩落していて、含有物に焼土・粘土塊や炭化物のみられる層が堆積していた。特に、 $\ell 4$ は焼土や炭化物を多く含んだ黒褐色砂で、天井崩落土と考えられる。しかし、カマド袖の構築土からは堆積土中にみられたような粘土は認められなかった。

カマドは浅く掘り込んで底面の形を整え、その後に褐色の砂質土でカマド袖を構築しているようである。東袖の芯材として土師器の甕が転用されていた。

遺物 (図58, 写真510・511)

本住居跡から出土した遺物のうち図示したものは、土師器5点、土製品3点、鉄製品1点である。

図58-1は土師器の杯で、口縁部の直径が約25.8cmと大型である。この大型杯は内黒の有段丸底のもので、内面にも対応する稜が認められる。口縁部が外反し、口唇部の周囲はケズリで再調整が加えられている。

図58-2～5は土師器の甕である。甕の多くは、口縁部が「く」の字状に屈曲し、体部外面がハケメ調整されるものである。2は小型の球胴甕で、カマドの芯材として利用されていた。熱を受けて器面が著しく剥離しているため、はじめ煮炊具として使用していたものを転用したと考えられる。3は胴部が張り、体部外面の調整はヘラナデである。5は長胴の甕であるが、他の甕と異なり、口縁部が緩やかに外反していて頸部に明瞭な段や稜が認められない。底部は欠損しているが、それ以外は完全な形で残っており、床面からやや浮いたところに直立した状態で出土した。端部がほぼ揃っているため、故意に切断された可能性も考えられる。4は口縁部が最大径になるもので、底部に認められた木葉痕は周縁に粘土を貼った後に付いたものである。

図58-7～9は土製の玉類である。7・8は丸玉で、上端面と下端面が平坦に整えられている。表面は、黒色処理されている。9は、管玉である。両端を欠損しており、全長を知ることができない。これも、表面が黒色処理されている。

図58-6は形状から刀子と考えられる。

まとめ

本住居跡は、出土遺物から栗圀式期のものと考えられる。重複する19号住居跡や69号住居跡と前後する時期に営まれていたようである。

本住居跡は、周囲の住居跡に比べて大型で、軸を真北にとっている。このことから、ある時期の中心的な住居であった可能性が考えられる。ただ、遺存状態にあまり恵まれておらず、細部内容を検討できなかったことは残念であった。

(大波)

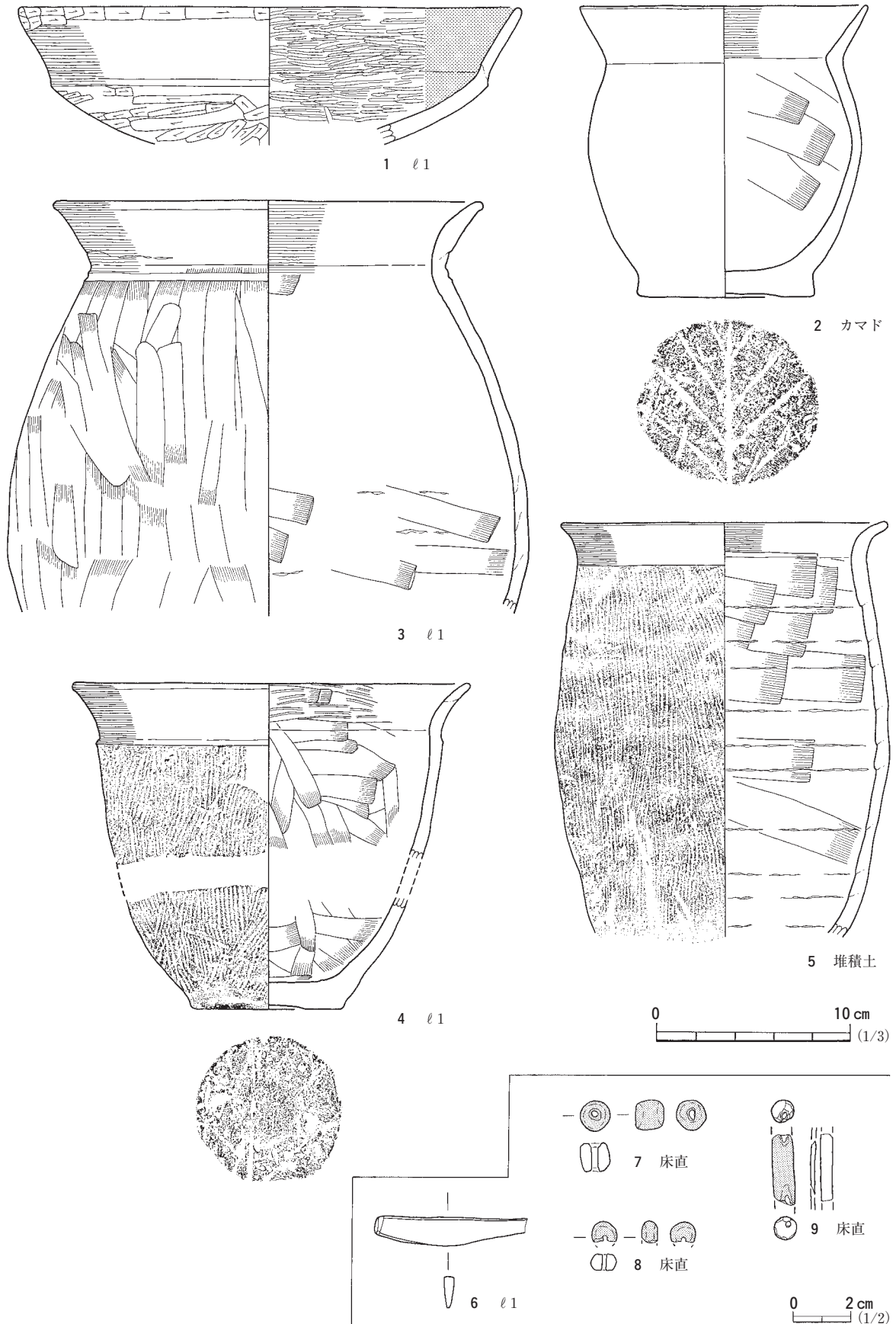


図58 18号住居跡出土遺物

19号住居跡 S I 19

遺 構 (図59, 写真58・59)

本遺構は、調査区北部のN19・O19グリッドで検出された竪穴住居跡である。一辺が約8mの大型の竪穴住居跡である18号住居跡の北西隅と重複している。しかし、重複する部分は近代以降の井戸と思われる攪乱で破壊されており、その部分からの新旧関係はわからなかった。

本住居跡は、LⅢ下部からLⅣまで掘り込まれており、LⅢから北周壁を、LⅣから西・南周壁を検出した。

住居跡内には、堆積土が1層認められた。均質な褐色砂で、酸化鉄とみられる焦茶色斑が多量に観察される。

住居跡の大きさは北周壁が約3.6m、西周壁が約3.3mで、東西にやや長い方形で、主軸方位はN40°Eである。深さは約10cmほどしか確認できず、周壁のほとんどは崩れてしまって緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ平坦であるが、踏み締まり等は認められなかった。

南周壁のやや西寄りには、長軸が南周壁に直交するように楕円形のピットが認められる。このピットの大きさは長軸約60cm、短軸約40cm、深さ約15cmほどである。堆積土中には焼土塊が含まれており、周壁際に位置することからカマドの掘形と考えられる。

掘形内堆積土は2層に分層したが、下層の②は焼土塊を少量含んだ暗褐色砂で、住居跡内堆積

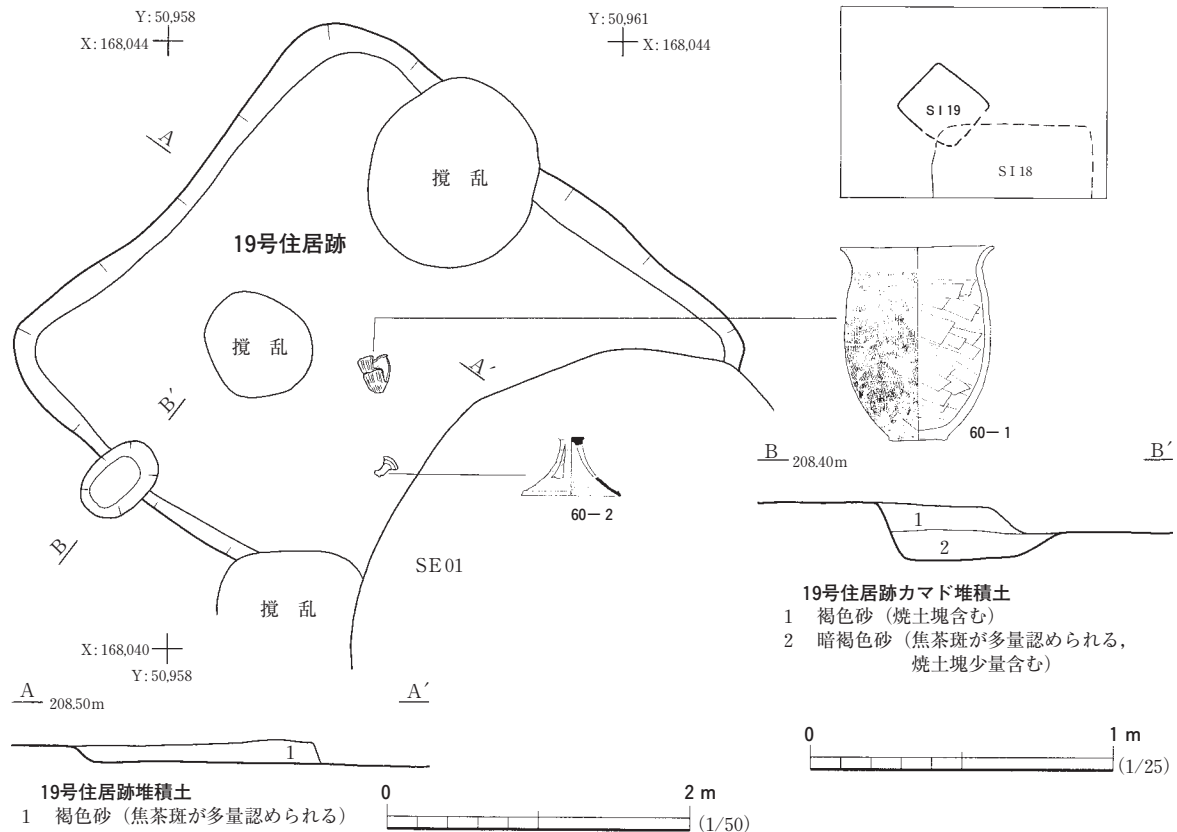


図59 19号住居跡

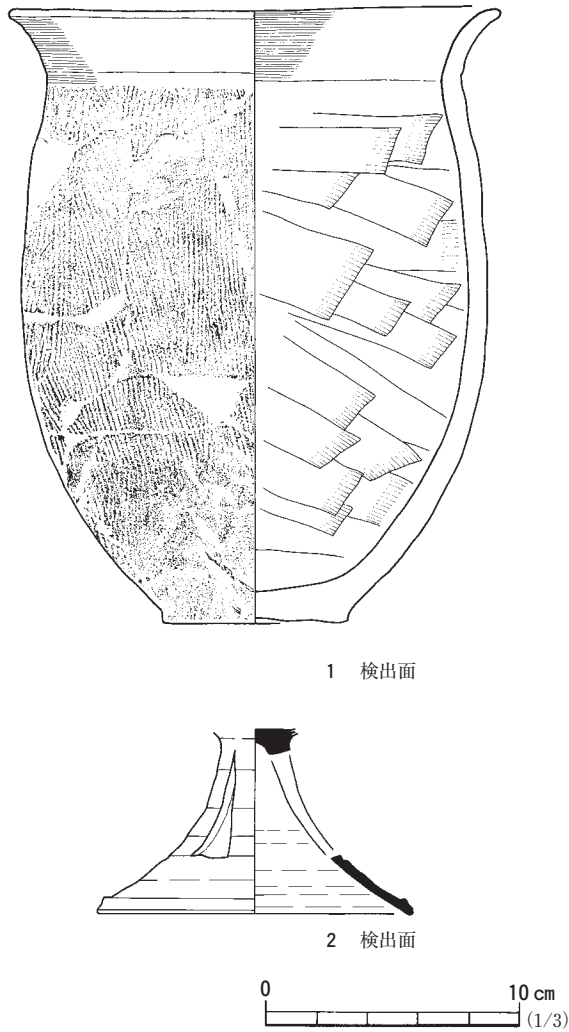


図60 19号住居跡出土遺物

20号住居跡 S I 20

遺 構 (図61, 写真60・61)

本遺構は調査区北部のN20グリッドに位置する竪穴住居跡である。重複する住居跡との関係は20号住居跡→11号住居跡→3号住居跡となり、本住居跡が最も古い。本住居跡全体は11号住居跡と北側部分が重複するため、11号住居跡の掘形底面から検出した。本住居跡全体が11号住居跡の北側部分と重複していたが、本住居跡のほうが深く掘り込まれていたため、11号住居跡の貼床をはずした段階で確認できた。しかし、11号住居跡の調査中には本住居跡を認識できず、本住居跡の東側部分は11号住居跡を駄目押しして東側約1/3を掘り飛ばしてしまっている。そのため東周壁と南・北周壁の一部は確認できず、住居跡の東側の範囲は確定できていない。

住居跡内堆積土は3層に分層した。壁の崩落土とみられる暗褐色砂質土が北周壁際で三角堆積し、その上層にℓ1・2の砂層が堆積していることから自然堆積と考えられる。住居跡の大きさは南北約3.2m、東西は遺存する部分で約3.9mである。カマドの位置を北周壁の中央と想定すれば、東西

土のような焦茶色斑が認められた。その上層のℓ1はほとんど住居跡内堆積土と変わらないが、焼土塊を含んでいる。住居跡の施設として確認できたのはカマドの掘形のみで、他に柱穴等は認められなかった。

遺 物 (図60, 写真511)

本住居跡から出土した遺物として図示できたのは2点で、平面図上に位置を示した。

図60-1は土師器の甕で、口縁部は緩やかに外反する。体部外面はハケメ調整で、底部は粗く削られている。

図60-2は須恵器の高杯の脚部で、遺存する部分には三角形の透かし穴が1か所残るだけであるが、割れ口から判断すると3方に透かしがあったようである。

ま と め

本住居跡は周辺の住居跡と同じく栗圀式期のもつとみられる。出土した遺物のうち、須恵器の高杯の脚部には透かし穴が認められることから、本住居跡は7世紀の前半ごろに営まれたものと考えている。 (大波)

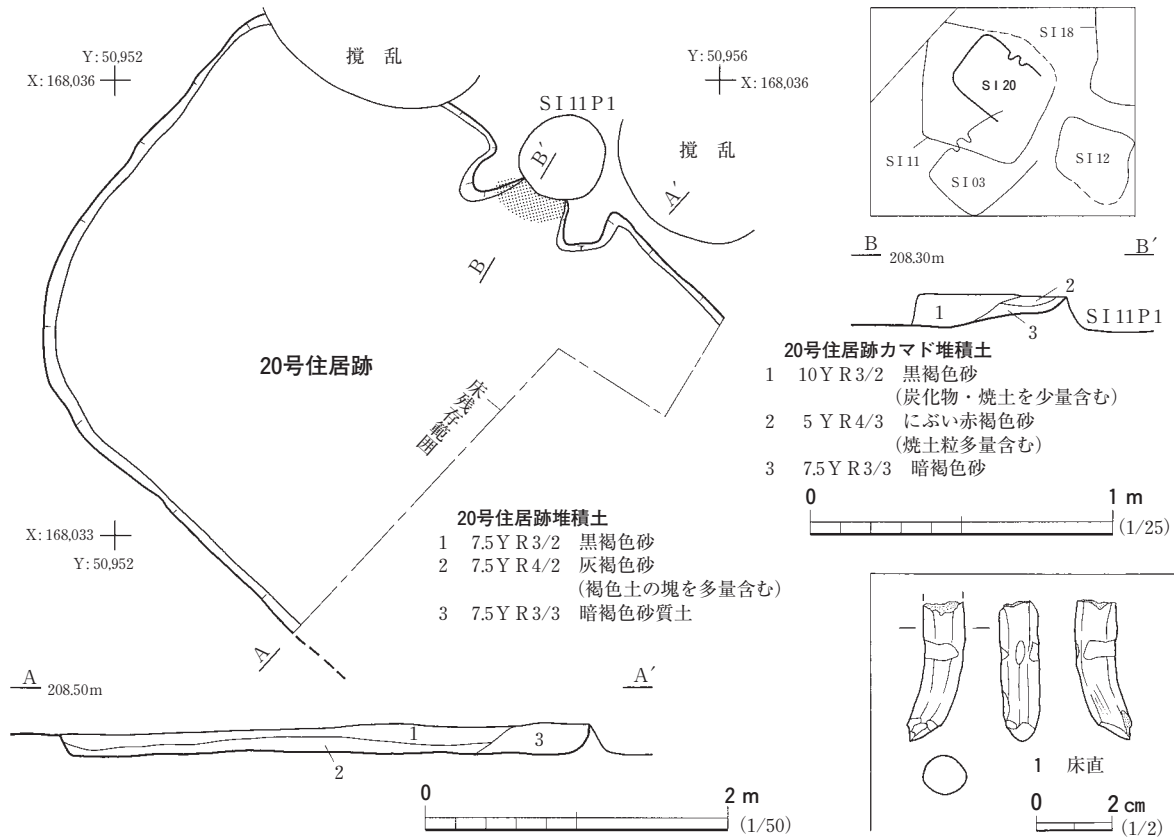


図61 20号住居跡・出土遺物

に長い長軸約4.4mの長方形のものと考えられる。深さは12~14cmほどしか残らないが、周壁はほぼ直立して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、貼床等は認められなかった。また、主軸方位はN42°Eで、阿武隈川の流路方向にあわせて造られている。

住居跡内の付属施設はカマド以外は確認されていない。カマドは北周壁に付設されるが、燃焼部の奥壁部分は11号住居跡の1号ピットで破壊されており、煙道部も攪乱が著しく確認できなかった。僅かに焚口付近とカマド袖の一部が残るのみである。カマド内の堆積土には炭化物や焼土粒子が含まれ、煙道側から流れ込んだ様子が確認できた。カマド袖は北周壁から「ハ」の字状に約40cmほど張り出しており、両袖間は約60cmを測り、赤く焼けていた。カマド袖は床面から約10cm程度しか残っていないが、締まりのない暗褐色砂質土で構築されていた。

遺物 (図61, 写真511)

本住居跡の出土遺物は少なく、図示できたものは土製品1点である。図61-1は欠損して元々の形はよくわからないが、断面が円形で、先端が細く、僅かに屈曲している。勾玉の一部とも考えられるが、本遺跡内から出土したものの多くは弧状に強く湾曲するため、形状が異なっている。土製品の大きさは、断面径が約1cm、遺存する部分の長さが約3.7cmほどである。

まとめ

本住居跡からの出土遺物は少ないが、他の住居跡との重複関係から栗圀式期のものと考えられる。

(大波)

22号住居跡 S I 22

遺 構 (図62, 写真62・63)

本遺構は、N21グリッドでL II上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面で、周辺に数多くの住居跡が密集している。本住居跡は、23・70・91号住居跡と重複している。新旧関係は、70・91号住居跡を切っており、23号住居跡に切られている。

本住居跡は、何度検出作業を繰り返してもプランが確定できず、最終的にカマドとその中軸線上

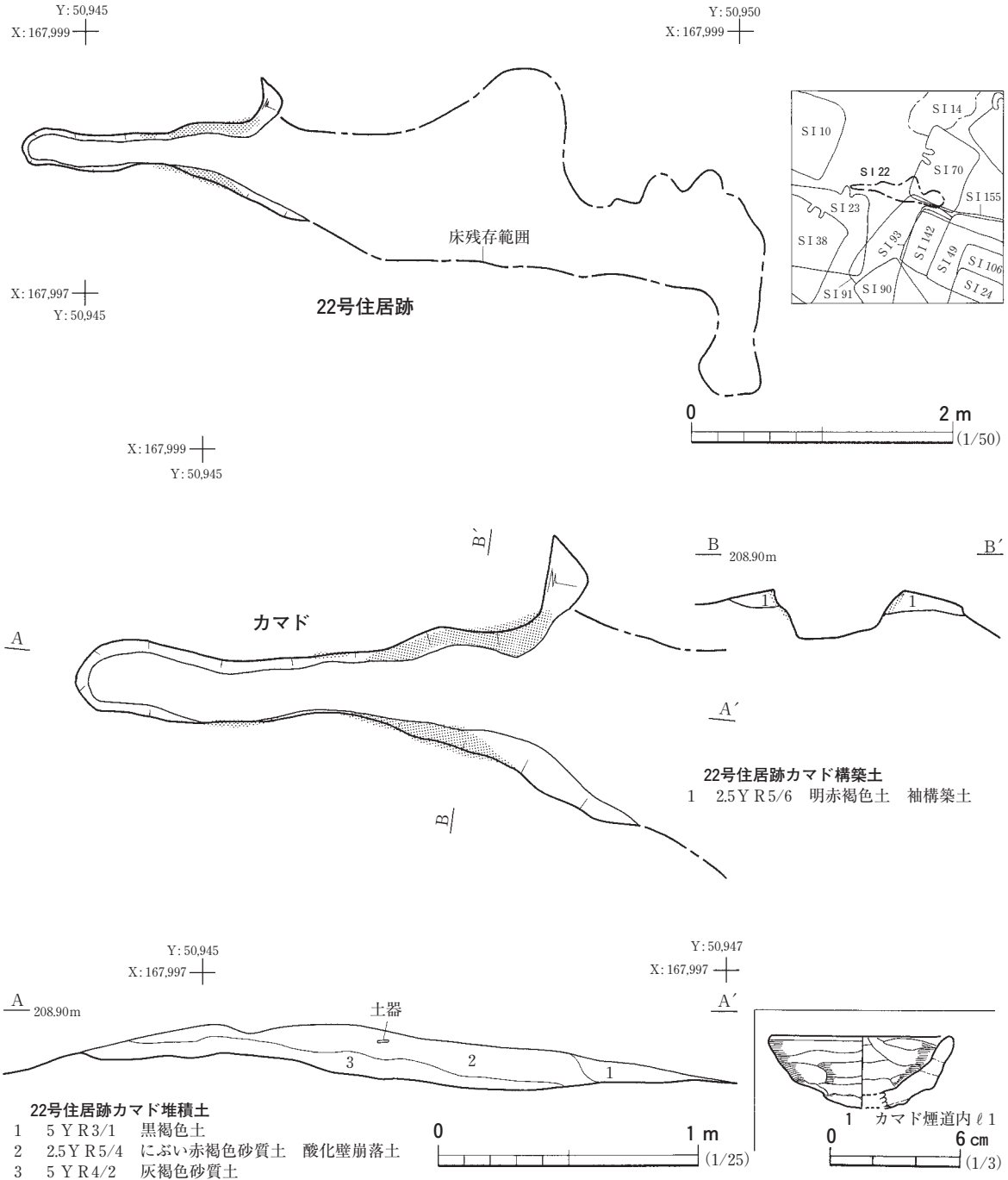


図62 22号住居跡・出土遺物

の床を残した他は、無くなってしまった。この部分が残ったのは、明黄褐色粘質土の貼床がなされ、上面が踏み締まっていたためである。

検出範囲でみると、本住居跡の規模は、東西5.6m、南北2.3m以上であり、中規模以上のクラスに属していたと考えられる。

カマドは大型で、側壁の焼土化が著しい点が特徴として指摘できる。全長は、190cmを測る。側壁の焼土面を参考にすると、煙道部は長さ110cmとなり、それより内側の80cmが燃焼部になると推定される。ただ、断面の状態では、両者の区別は判然としなかった。あるいは、軟弱な砂に構築されているため、間を区画する段が崩れてしまったのかも知れない。焚口は、内側で計測すると、幅46cmを測る。

遺物 (図62)

遺物は、土師器片81点が出土した。

図62-1は、カマド煙道部から出土した土師器手づくね土器である。祭祀に伴うものかもしれない。底部を欠いている。

まとめ

本住居跡は検出状態が悪いため、詳細を知ることができなかった。カマドは大型で、全体の規模は、中規模以上のクラスに属していたと考えられる。

所属時期は、表杉ノ入式前半期の23号住居跡に切られており、カマド煙道部の資料を勘案すると、8世紀以前に位置付けられる可能性が高いと思われる。(菅原)

23号住居跡 S I 23

遺構 (図63・64, 写真64~67)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された堅穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面である。本住居跡は、22・38・53・91号住居跡の4軒と重複し、これらのすべてを切っている。また、北西隅は攪乱で周壁と床面が壊されている。

堆積土は、2層に分層された。土層断面図が示すように、典型的なレンズ状堆積であり、遺構は自然埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面のLⅢがそのまま利用されている。平坦に整えられており、カマド前面は硬化していた。床面と検出面の比高差は、15cm前後を測る。

本住居跡の平面プランは、長方形を呈する。東西に長く、規模は、東西6.3m、南北5.1mを測る。この大きさは、高木遺跡では比較的大型の部類に属する。方向は、発掘基準線北に対して、東に10°振れている。

カマドは、北周壁で検出された。位置が右に大きく偏っており、この点が特徴的である。燃焼部は、住居廃絶時に取り壊されたとみられ、袖は残っておらず、底面に土師器甕の破片が散乱していた(図64)。煙道部は、周壁を少し掘り込んだだけで、すぐ真上へ立ち上がる構造であったらしい。ℓ1・2の堆積状況からは、そのことがはっきり読み取れる(図64)。支脚は土製品が使用され、据

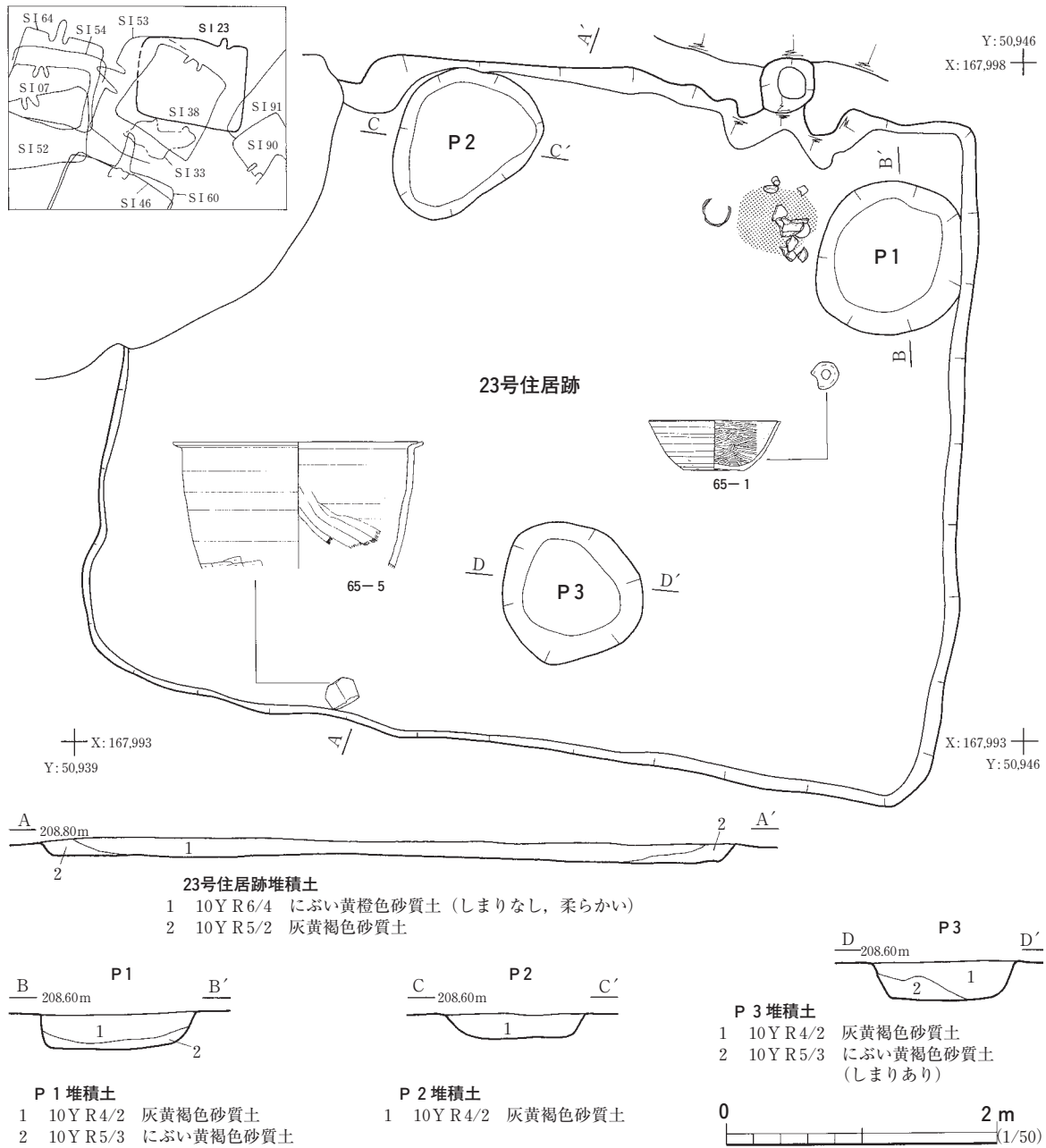


図63 23号住居跡

えられたままの状態で見出された。その手前の底面は、焼土化しており、断ち割ったところ、最大12cmの厚さを測った。このことから、カマドの使用が長期間であったことが窺えた。

ピットは、3基検出されている。どれも径1m前後の円形基調をなし、深さ20~30cmの範囲にまとまる。P1は、カマド燃焼部の右脇にあり、貯蔵穴の可能性が高いと考えられる。他は、性格が分からず、住居跡機能時に開口していたかどうかとも判明していない。

遺物 (図65・66, 写真511・512)

遺物は、土師器片406点、石製品1点が出土した。出土状況は、カマド燃焼部底面に土師器甕の破片が集中していたほか、カマドから離れた床面にも図示遺物の散在がみられた。

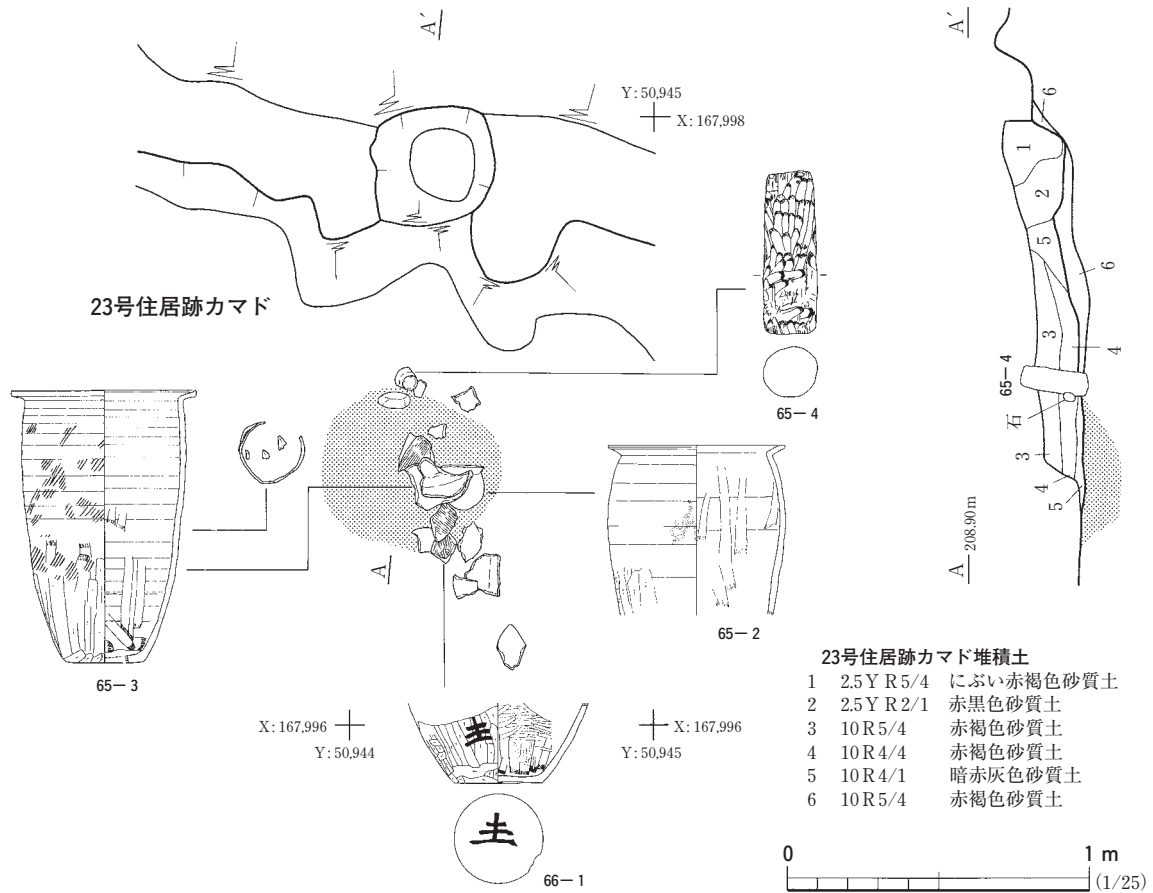


図64 23号住居跡カマド

図65-1は、床面出土の土師器杯である。ロクロ調整で、底部全面～体部下端に回転ヘラケズリ調整が施されている。器形は、体部下端の腰が張ったのち、体部が直線的に外傾して、口縁部端部で外反する。全体につくりが薄く、整形・調整は丁寧に行われている。

図65-2は、カマド燃烧部底面に散乱していた土師器甕の1つである。破片の状態出土したが、接合の結果、口縁部～胴部まで復元された。器面全体はロクロ調整され、口頸部は短く、「く」の字状に強く屈曲する。胴部中位から下には、縦位の手持ちヘラケズリ調整が施されている。

図66-1は、これと同一個体の可能性がある底部付近の破片である。底部と胴部の外面に、同一の墨書が施されている。仮に、その2つが、後述する図65-3のように、カマド補強材であったとすると、住居廃絶時のカマド取り壊しに伴って、儀礼が行われたと考えることができる。

図65-3は、燃烧部底面に散乱していたもう1つの土師器甕である。これは、左袖先端の想定位置で倒立していた口縁部と接合し、ほぼ完形の状態に復元された。したがって、袖の補強材であった可能性が高いと考えている。器面全体は、ロクロ調整されており、胴部下半は縦位に手持ちヘラケズリ調整されている。図65-2に比べると、胴部の張りが無く、なだらかに底部にいたる。口縁端部は、摘み上げられている。また、胴部外面に、ロクロ調整前の平行タタキメ痕が残っており、細部での違いが指摘される。

図65-4は、土製支脚である。表面は、ナデ調整されている。

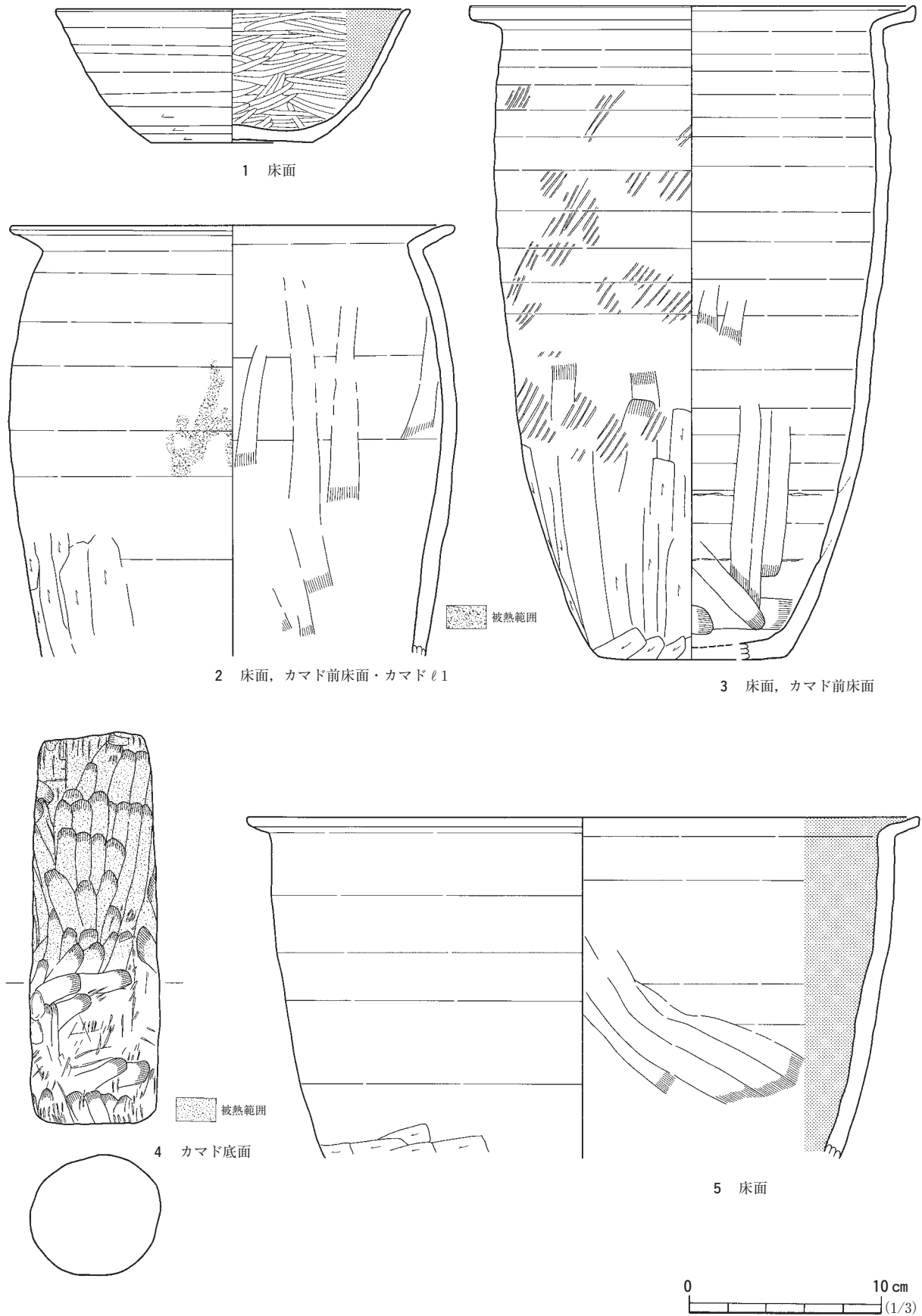


図65 23号住居跡出土遺物 (1)

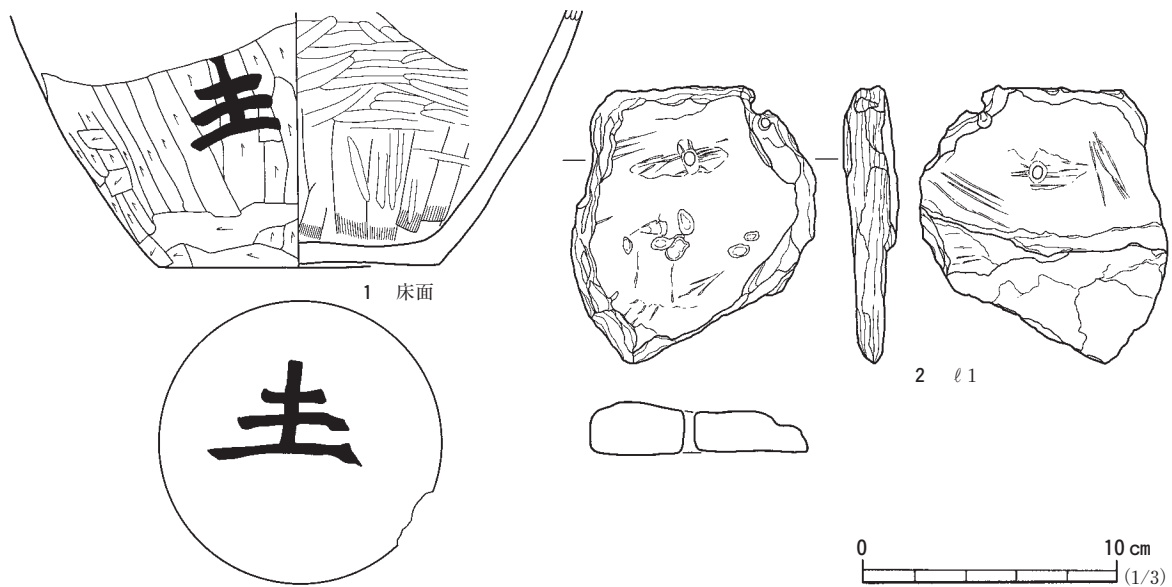


図66 23号住居跡出土遺物（2）

図65-5は、南周壁直下の床面から出土した土師器甕である。底部を欠いている。他と違って、口径が大きく、器高の低い器形になると推定される。内面は黒色処理されおり、煮炊具でないことが知られる。

図66-2は、石製紡錘車の未成品である。土1から出土しており、類例の年代観からいっても、この住居跡に伴うものではないと考えられる。

まとめ

本遺構は、自然堤防の中央平坦面に営まれた竪穴住居跡である。出土遺物の特徴から、表杉ノ入式期に比定され、具体的には、9世紀前半～中頃の年代が与えられる。

当該期の住居跡としては、大型の部類に属し、プランが横長であること、カマドが取り壊され、儀礼が行われている点に、特徴が指摘できる。

(菅原)

24号住居跡 S I 24

遺構 (図67・68, 写真68)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。周囲には、数多くの住居跡が密集している。

本住居跡は、49・89・90・106・142・156号住居跡、14・17号土坑と重複しており、それらのどれよりも新しい。図67右上には、代表的な遺構との関係だけを掲載した。

本住居跡は、検出が非常に難しかった。カマドは比較的簡単に周囲と識別できたが、竪穴の方はどうしてもプランが分からず、カマド軸線方向に合わせて十字に断ち割りを入れ、断面で周壁の立上りを押さえた。そして、これをもとに、掘り下げを進め、最終的に図示した掘りあげ状態となっている。このような調査状況のため、形態と規模には、若干の誤差を含んでいる可能性があると思

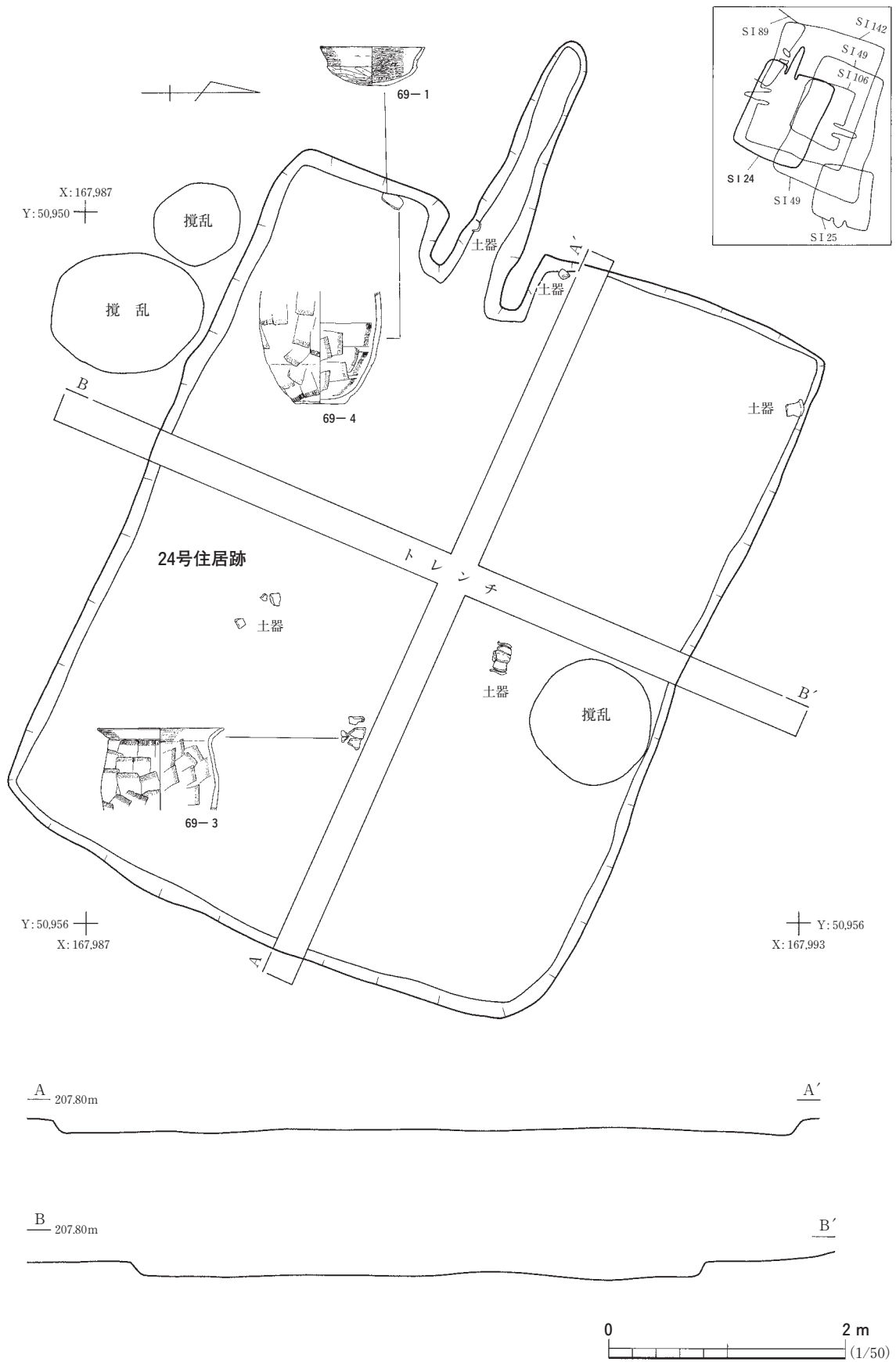


図67 24号住居跡

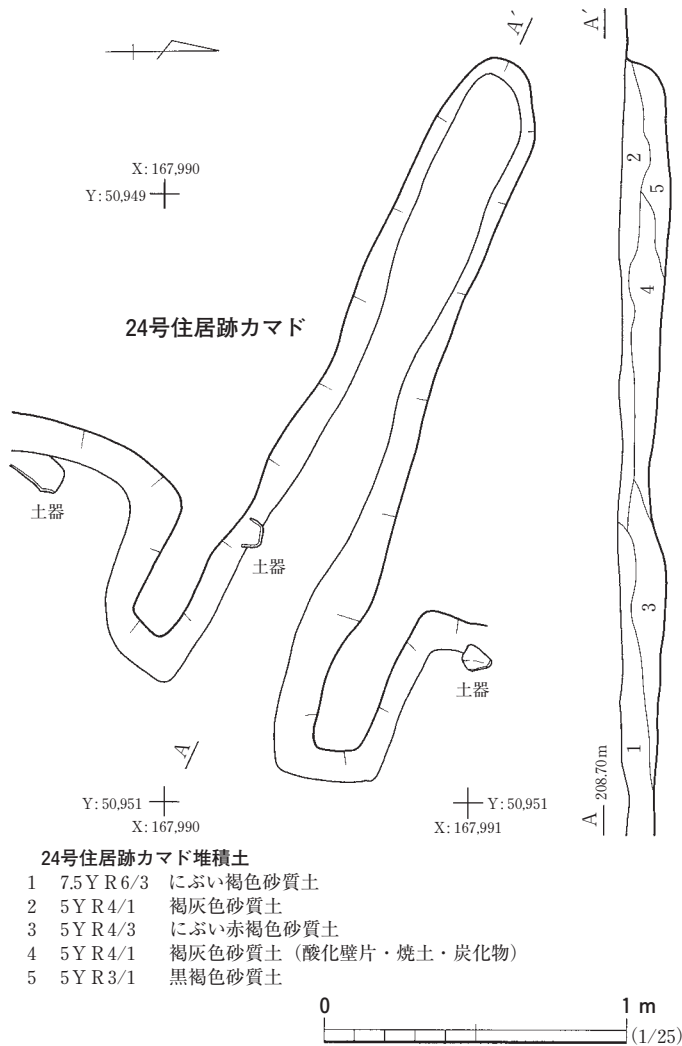


図68 24号住居跡カマド

カマドは、西周壁の左寄り位置で検出された。煙道部は、周壁から1.75m細長く伸びており、燃烧部は、袖が「ハ」の字状に開いている。袖の長さは、周壁から60cmあり、焚口幅は43cmを測る。

遺物 (図69, 写真512・513)

遺物は、土師器片893点、須恵器片3点が出土したが、本来は、もっと多くの遺物が床面や堆積土中に残されていたと推定される。上述した流入土砂の処理の際に、失われてしまった。

図69-1の土師器杯は、カマド左脇の周壁直下で出土した。しかし、調査時作成の遺構カードに記録されているのは、4の土師器甕だけである。このように、遺物カードの記録との間に混乱がみられ、出土状況には不安が残る。器形は、比較的高い位置に口縁部と体部の境がある、有段丸底を呈している。舞台式～栗圀式古段階に比定される。

3～5は、床面出土の土師器甕である。この3点は、確実に遺構に伴っている。非ロクロ調整で、胴部がナデ調整されている。ただし、5の胴部下端には、ナデ調整前のハケメ痕跡が残っている。

2は、須恵器返り蓋の破片である。ℓ1から出土した。口径10.1cmに復元される。

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。プラン検出が難しかったうえ、

われる。

さらに、本住居跡は、断面図作成前に降雨で土層観察用ベルトが崩れてしまっている。このため、堆積土は3層に分層されたが、ここに図示することはできない。典型的なレンズ状堆積で、自然埋没したと考えている。床面は平坦で貼床は認められず、重複する下層住居跡の堆積土上面が床となっている。床面と検出面の比高差は、30cmあまりを測る。

本住居跡の平面プランは、長方形を呈する。東西に長く、規模は、東西6.4m、南北4.8mを測る。この大きさは、高木遺跡では比較的大型の部類に属するものといえる。また、方向は発掘基準線北に対して東に25°振れている。

カマドは、西周壁の左寄り位置で検出された。煙道部は、周壁から1.75m細長く伸びており、燃烧部は、袖が「ハ」の字状に開いている。袖の長さは、周壁から60cmあり、焚口幅は43cmを測る。

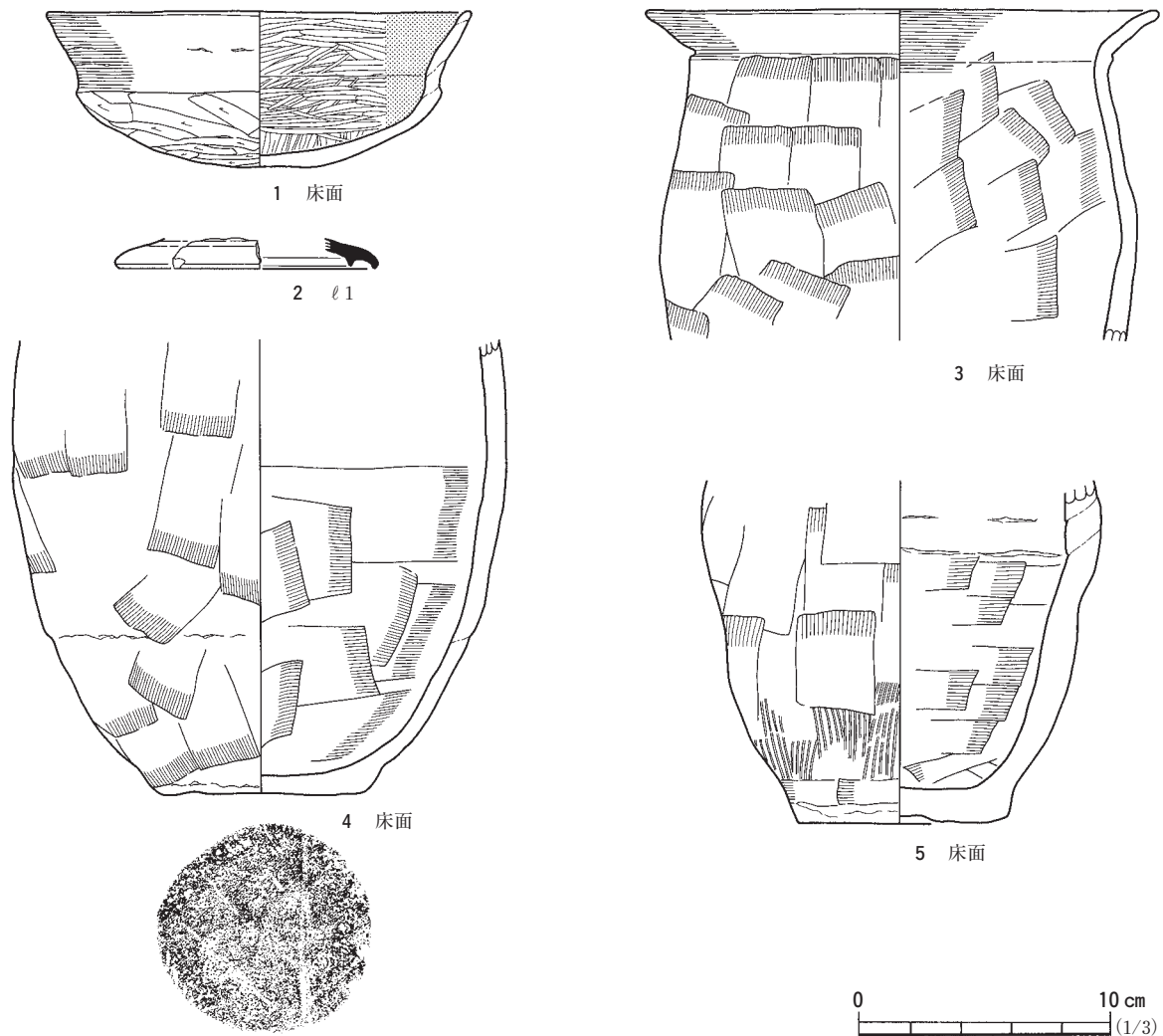


図69 24号住居跡出土遺物

調査途中で土層観察用ベルトが崩れてしまい、調査条件に恵まれなかった。

所属時期については、本住居跡に切られる住居跡がどれも栗圀式に比定され、伴出した土師器甕3点が非ロクロ調整であることから、7～8世紀代の大枠で捉えておきたい。(菅原)

25号住居跡 S I 25

遺 構 (図70, 写真69～71)

本遺構は、O21・N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部にあたる。49・112・134・142・155号住居跡と重複しており、新旧関係は、そのどれよりも新しい。

堆積土は、にぶい黄褐色砂質土の1層で、自然堆積したものと考えている。しまりが無い。床面は貼床が施されず、下層住居跡の堆積土上面が直接床となっている。床面と検出面の比高差は、10cmあまりを測る。

本住居跡の平面プランは、歪んだ正方形基調を呈している。向かい合う南周壁と北周壁では、長さが揃わない。規模は、中軸で計測すると、東西3.8m、南北3.9mとなり、高木遺跡では小型の部類に属する。住居跡方向は、振れが小さく、発掘基準線北に対して東に13°偏している。

カマドは、東周壁中央で検出された。燃焼部は、袖が住居廃棄時に壊されたと推定され、ほとんど残っていない。底面の焼土化した範囲の方が、手前に広がっている。断ち割ったところ、焼土化は厚さ14cmにも及んでおり、このカマドがかなり長期間使用されたことが窺われた。

細部施設では、北周壁に沿って、P1が検出された。162cm×52cmの整った長方形を呈するもので、

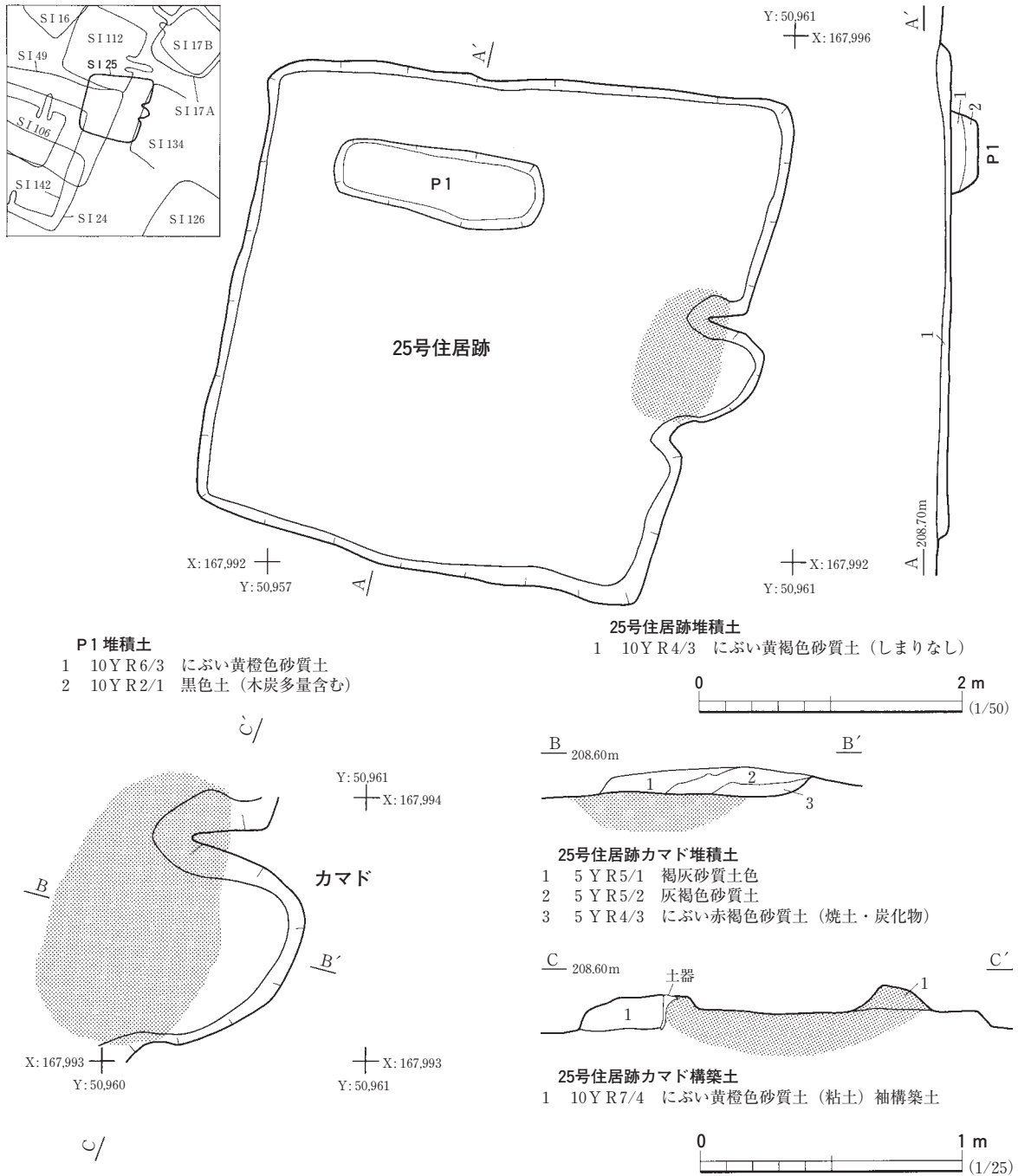


図70 25号住居跡

底面は平坦に整えられている。床面からの深さは、20cmを測る。内部に、形状をとどめない木炭がぎっしり詰まっていた。鍛冶作業に伴う炭溜を性格比定の候補に想定できる。しかし、羽口・鉄滓は周囲から検出されていない。

遺物 (図71, 写真513)

遺物は、土師器片469点、須恵器片6点、鉄製品1点が出土した。図示遺物は、遺構に共伴する。

図71-1は、須恵器高台杯である。口縁部を欠いており、器形全体の特徴を知ることができない。P1 ℓ2から出土した。高台部は、短く、断面は方形を呈している。底部外面に、静止糸切り痕が観察される。

2・3は、カマド燃焼部 ℓ2 から出土した土師器甕である。ロクロ調整で、器形は長胴のタイプに属する。2は、口頸部が「く」の字状に外傾し、胴部に張りが認められない。器面調整は、胴部下位に、縦位の手持ちヘラケズリ調整が加えられている。3は、口頸部が強く屈曲しており、胴部上半に膨らみを持つ。4は、床上出土の鉄製刀子である。先端を欠いている。

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。表杉ノ入式期に所属する。小型で、木炭の充満した長方形のピットが設けられている点に、特徴が指摘される。工房機能を備えていた可能性を考えておきたい。

また、住居跡方向は発掘基準線北に対する振れが小さく、周辺の該期住居跡と同様の特徴を示している。カマドは、廃絶時に燃焼部が壊されていた。 (菅 原)

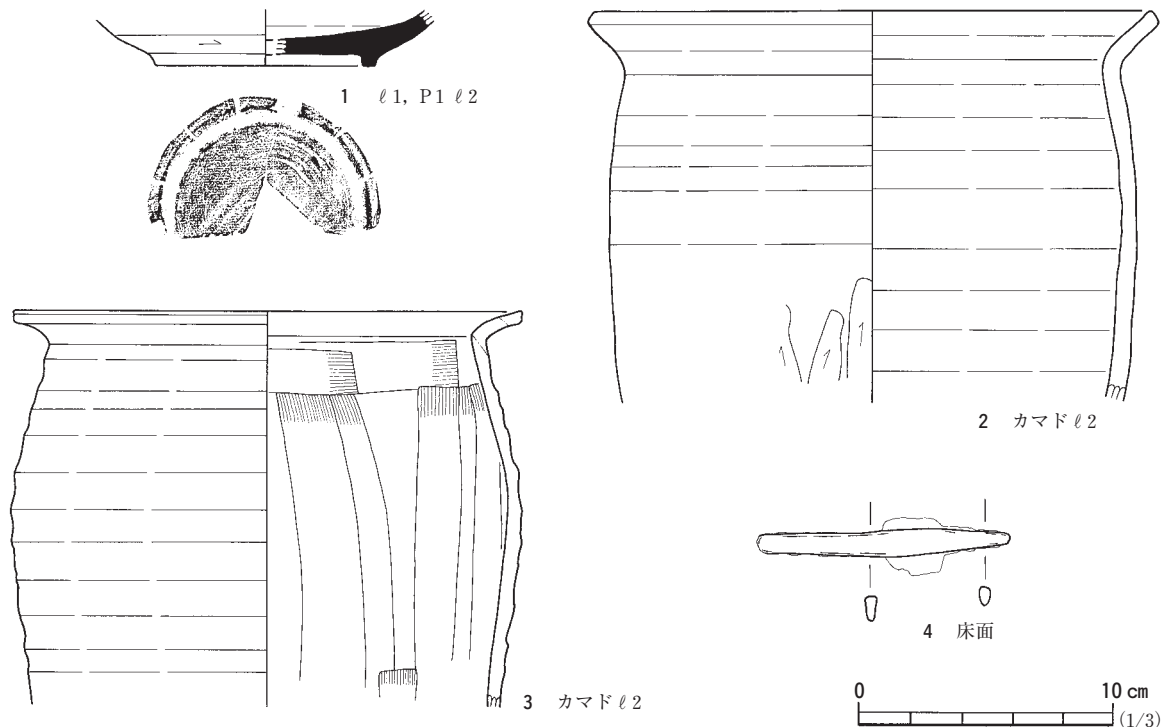


図71 25号住居跡出土遺物

26号住居跡 S I 26

遺 構 (図72・73, 写真72~77)

本遺構はO21グリッドに位置し、LⅢ上面において検出された。北西隅は、攪乱により失われ、南東隅も検出できなかった。

残存する周壁から、本住居跡の平面形は正方形を呈し、四隅は角張っていたと思われる。規模は、東西5.2m、南北4.9mである。住居跡と方位との関係は、発掘基準線北に対して、東に36°振れている。周壁は急角度で立上がり、検出面から床面までの深さは、南周壁付近で最大30cmである。

床面は、LⅢを掘り込んだままの直床である。カマド周辺に踏み締まりが認められた。上面のレベルを追っていくと、微地形の傾斜に併せて、南東側に緩やかに傾斜しているのが読み取れる。したがって、カマド周辺が最も低い。

住居跡堆積土は、 $\ell 1 a \cdot 1 b \cdot 2 \cdot 3$ の4層に分層される。このうち、 $\ell 1 a \cdot 1 b \cdot 2$ は、レンズ状の堆積状況を示すことから、時間をかけて埋まっていった自然堆積土と考えている。これに対して、 $\ell 3$ は他と様相が違っている。北周壁付近に局所的に堆積しており、面的なひろがりをも有していない。締まりの強い褐色の砂質土で、LⅡに類似することから、急激に埋まった周壁の崩落土と考えている。

住居跡内施設は、カマド1基とピット4個を検出した。カマドは、東周壁中央に取り付いており、遺存状態が悪い。煙道部は完全に失われていた。燃焼部は、奥行き50cm以上、焚口幅30cmの規模を有している。袖は、右袖長60cm、左袖長60cmを測り、床面から最大で8cmの高さが残っていた。燃焼部底面は焼土化していた。カマドの堆積土は、赤褐色砂質土の1層で、炭化物粒と焼土を含んでいる。人為的に埋められたものと考えている。

検出された4個のピット(P1~4)は、住居上屋構造に関わる施設と考えられる。周壁と平行するように、方形に配置されている。降雨で壁が崩れてしまい、輪郭が広がっており、以下に示す計測値は、若干の誤差を含んでいる。

P1は長径80cmの不整形円で、深さ28cmである。P2は長径95cmの不整形円で、深さ45cmである。P3は径60cmの円形で、深さ30cmである。P4は径50cmの円形で、深さ30cmである。

それぞれのピットの間隔は、P1-P2の間で約1.6m、P3-P4の間で約2.4m、P1-P4の間で約2.3m、P2-P3の間で約1.6mを測る。

P1・2の堆積土は、レンズ状の堆積で、土器片・炭化物を含む褐色の砂質土と、締まりのある灰褐色の砂質土の、2層からなる。P3・4の堆積土は、締まりのある灰褐色の砂質土である。柱痕跡は、識別できなかった。

遺 物 (図74・75, 写真513・514)

遺物は、土師器片749点、須恵器片2点、土製品3点、石製品3点が出土した。

図74-1は、土師器高杯である。杯部は、有段丸底の器形を呈している。脚部は、粘土紐接合部

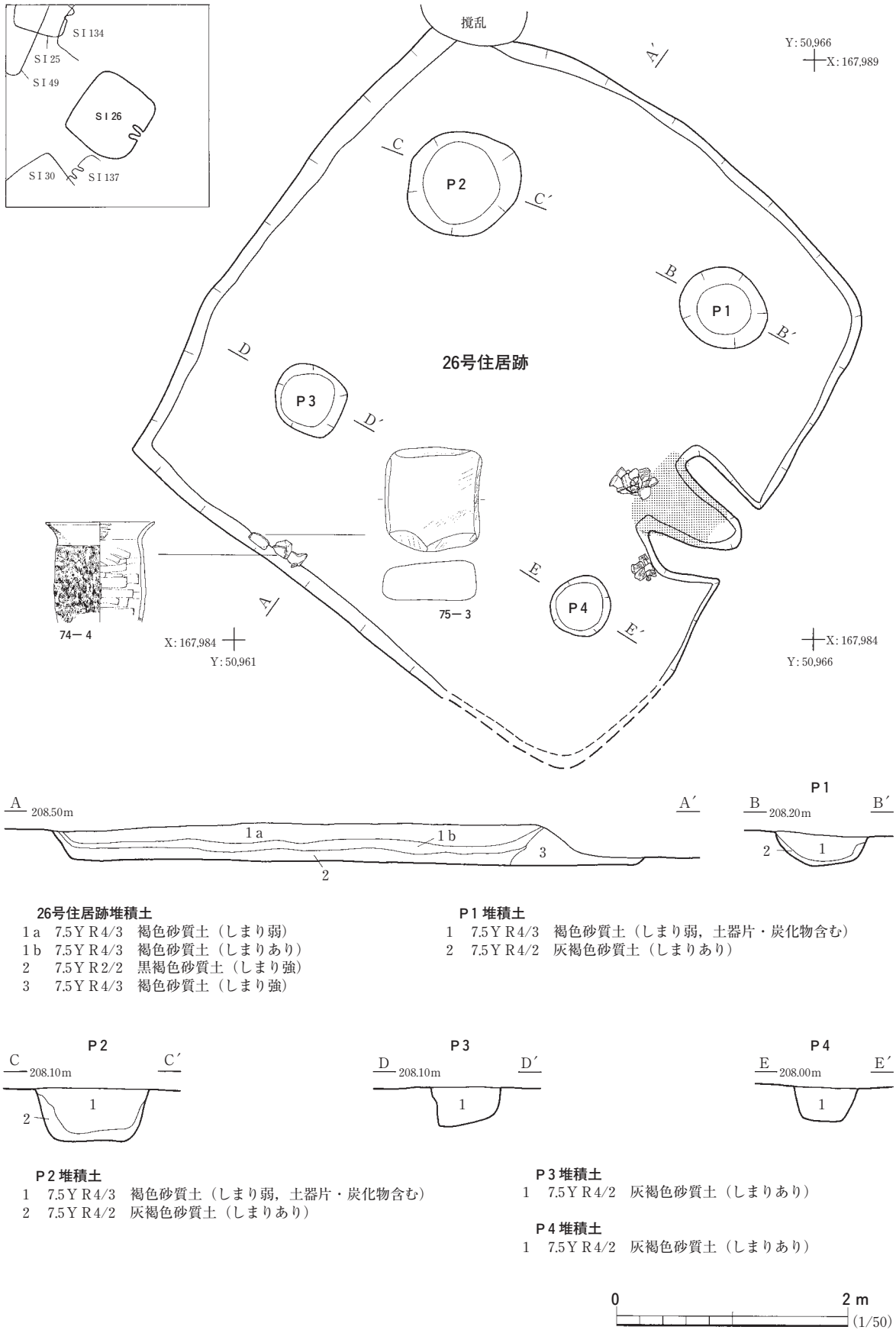


図72 26号住居跡

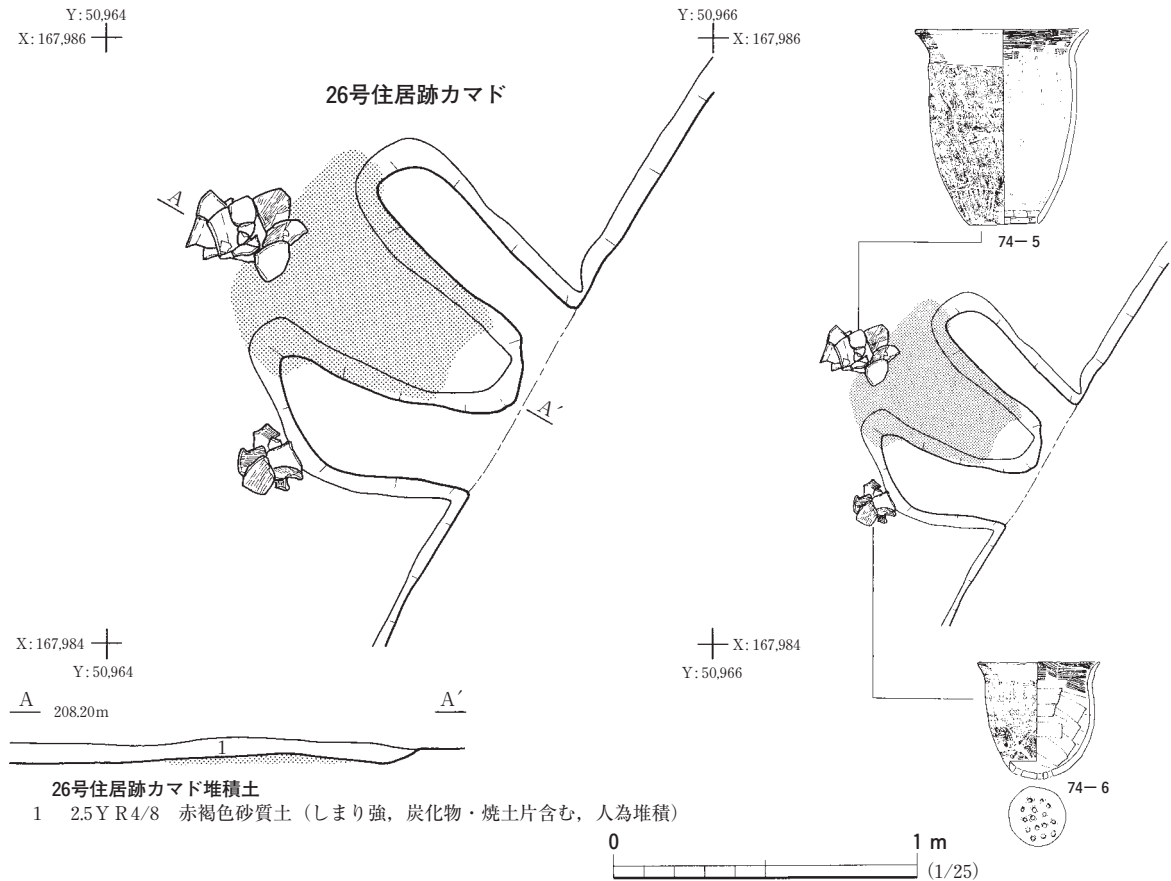


図73 26号住居跡カマド

できれいに割り揃えられ、外面は、ハケメ調整されている。遺構に伴う状態で出土していないが、置き台に転用されていたと考えられる。

図74-2は、須恵質に焼成された土製品である。指で簡単に成形しただけのもので、板状をなしている。用途は不明である。欠損部が多く、全体の形状・大きさは判明しない。土師質に焼成された焼粘土塊と同じようなものなのだろうか。近隣に、須恵器窯が操業していたことを示唆する可能性が考えられる。

図74-3は、須恵器壺の口縁部片と推定される。

図74-4は、土師器長胴甕になる。胴部にあまり膨らみは無く、口頸部は「く」の字状に外傾する。胴部外面はハケメ調整されている。

図74-5は、大型の土師器甑である。外面ハケメ調整の無底式で、胴部上位が少し膨らみ、口縁部は、「く」の字状に外傾する。器面調整は、内面に縦位の丁寧なヘラミガキが施されており、この点が特徴的である。また、口縁部内面と胴部外面には、ハケメ調整が施されている。

図74-6は、小型の土師器甑である。多孔式に分類される。孔は、中央に5個、その周辺に倍数の10個が同心円状に配置されている。器形は、底部が丸底状を呈しており、口頸部が緩やかに外反する。器面調整は、胴部外面にハケメ、胴部内面にヘラナデが施されている。また、口縁部内面には、ハケメ調整痕が観察される。

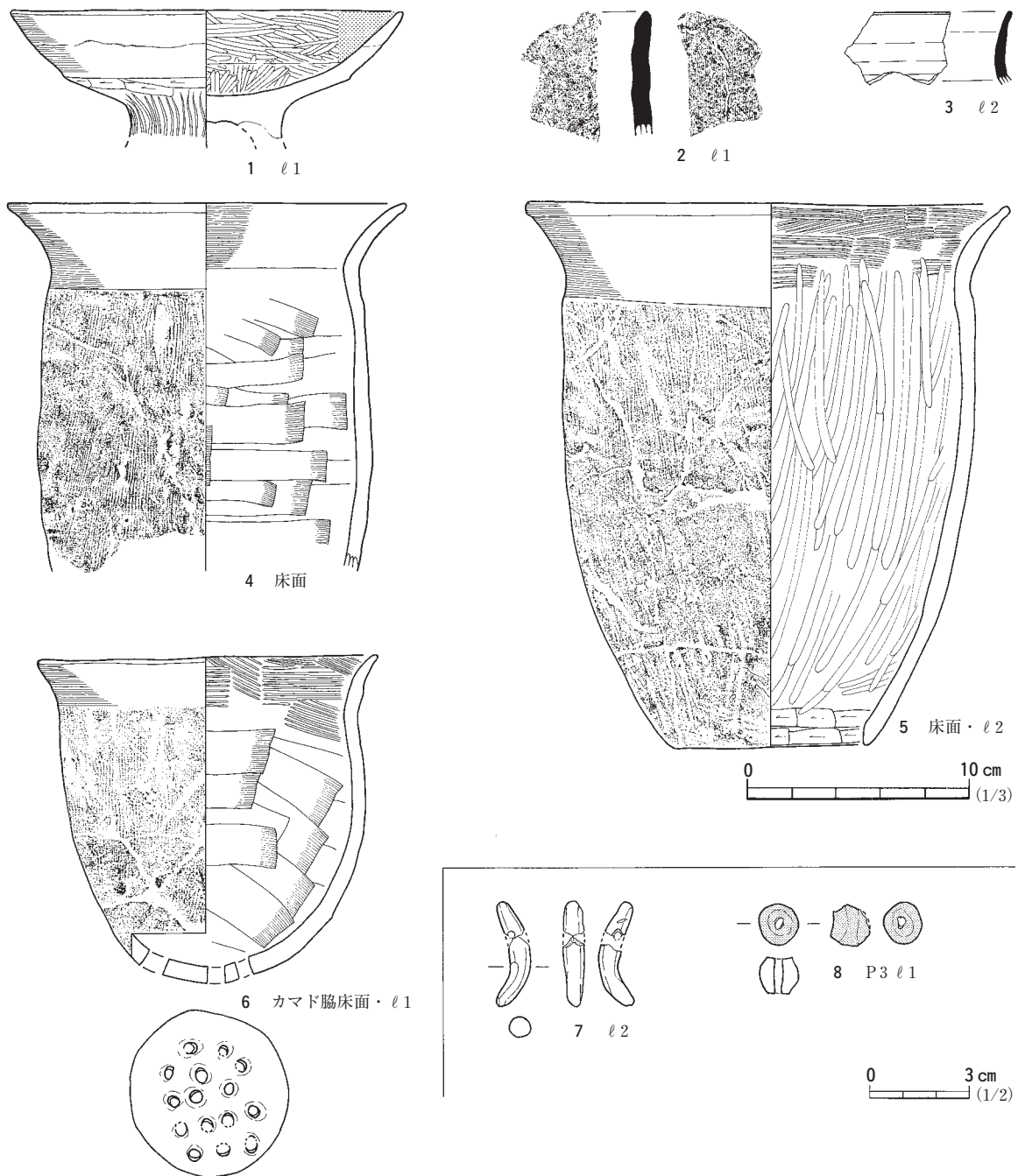


図74 26号住居跡出土遺物 (1)

図74-7は、土製勾玉である。細長い形状を呈しており、屈曲が緩やかになっている。

図74-8は、土製白玉である。側面は稜が形成され、表面は黒色処理されている。

図75-1・3は砥石である。1は、かなり使い込まれたもので、扁平な断面をなす。3は、方形を呈する大型品である。図75-2は、小型の磨石だろうか。表面は摩耗している。

ま と め

4つの柱穴を規則的に配置する、しっかりとしたつくりが特徴の住居跡である。本住居跡の所属時期は、出土土器から考えて、栗圀式期と考えられる。 (高久田)

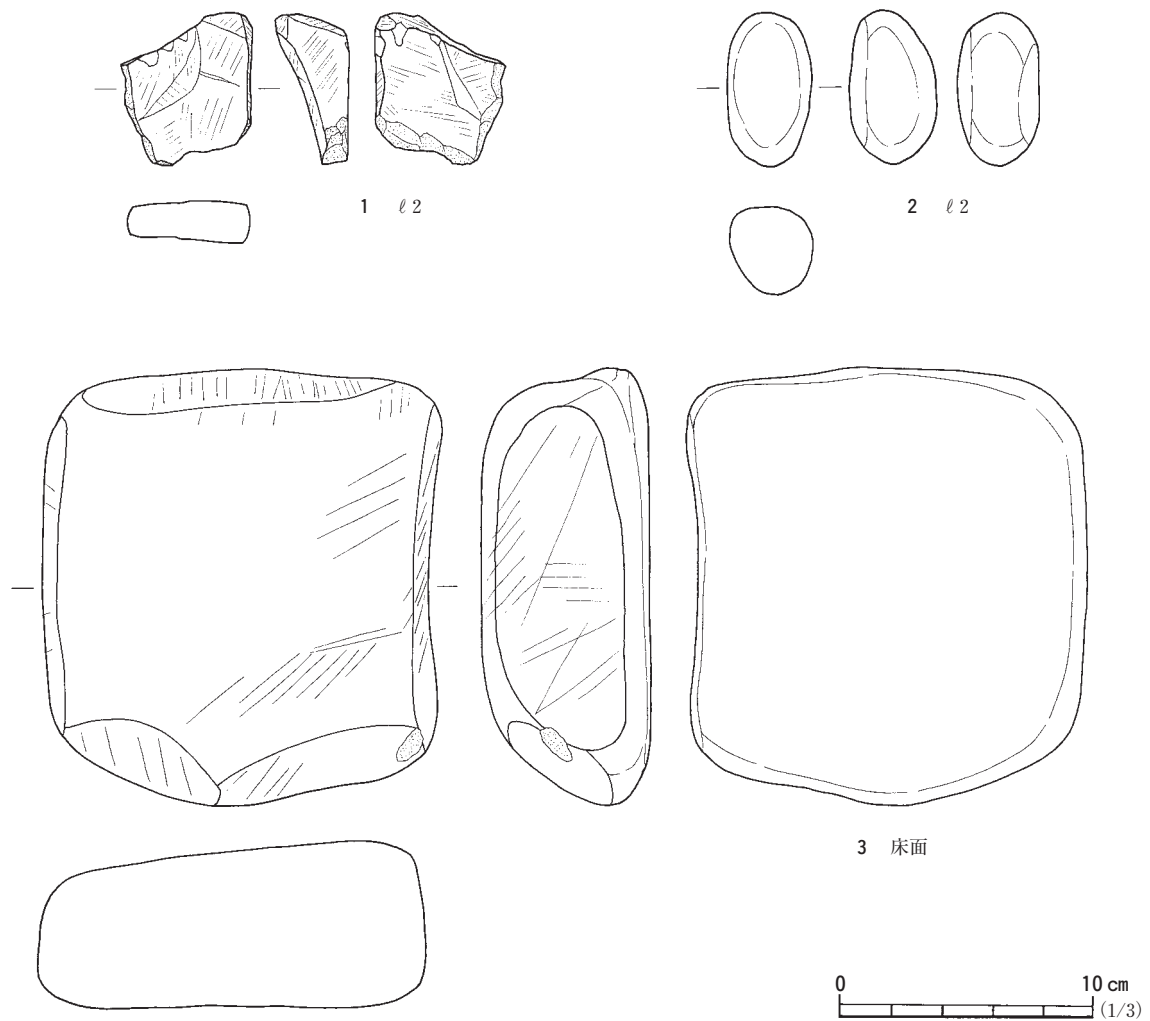


図75 26号住居跡出土遺物（2）

27号住居跡 S I 27

遺 構 (図76~78, 写真78~81)

本遺構は、調査区中央のやや南にあたるN22グリッドに位置しており、LⅢ上面において検出された。

本遺構は、南北に長い長方形を呈する竪穴住居跡である。このような平面プランの住居跡は、高木遺跡ではまれである。

本住居跡は、東側で105・129号住居跡と重複しており、いずれよりも新しい。また、南東隅で重複している29号土坑は、本住居跡を壊してつくられている。

遺構内堆積土は4層に区分した。ℓ1~ℓ3については、いずれもレンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積土と判断した。ℓ4は、暗褐色砂質土で、焼土塊や炭化物を多量に含むことから、人為堆積の可能性も考えられる。

住居跡の平面形は、南北に長い長方形を呈している。住居跡と方位の関係を東周壁で見ると、真

北から20°ほど東へ傾いている。規模は、東西およそ4.9m、南北およそ6.4mである。

検出面から床面までの深さは、壁際で10~25cmを測る。周壁の立上がりは、南周壁が比較的急激で、他は緩やかである。

床面は、細かな凹凸が見られるものの、ほぼ平坦につくられている。また、床面の北西隅部分には、長軸約240cm×単軸約115cmの楕円形の範囲に貼床が認められる。

住居跡内施設として、カマド1基を検出した。カマドは、北周壁の中央からやや東周壁寄りにつくられている。燃焼部は、右袖が約55cm、左袖が約90cm、北周壁から張り出している。袖の床面か

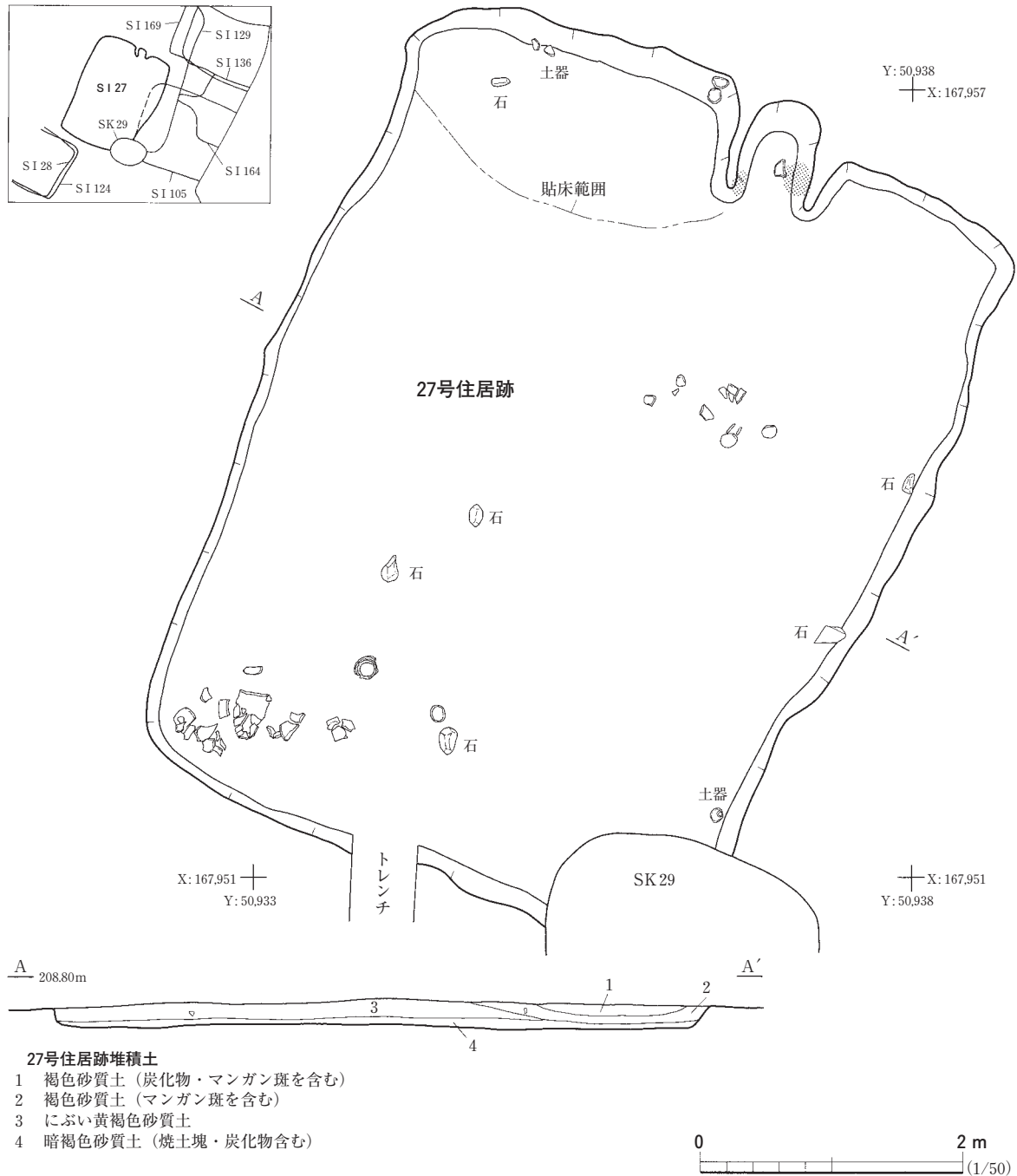


図76 27号住居跡

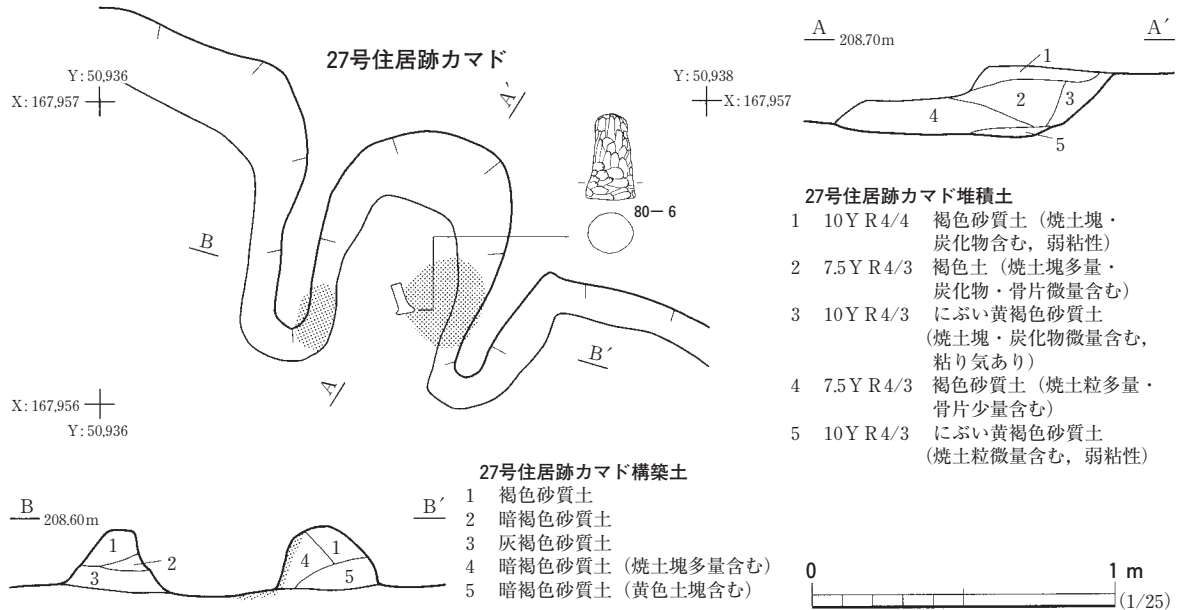


図77 27号住居跡カマド

らの高さは、最大21cmである。焚口は幅約35cm，奥行き60cm以上であり，中央に支脚が設置されている。左袖内側と右袖内側に，焼面が認められる。煙道は検出されなかった。

カマド堆積土は5層に分層される。ℓ 1は，住居跡内堆積土ℓ 1に該当する。ℓ 2・4は，焼土塊を多量に含むことから天井崩落土と考えられる。ℓ 3・5は，カマド上部から自然に流れ込んだ土と考えられる。ℓ 3については，住居跡内堆積土ℓ 3に該当する。

袖の構築土は，5層に分けられる。補強材のためか，ℓ 1・2・4の内側には焼土塊が含まれている。

本住居跡から柱穴は検出されなかった。

遺物 (図79・80, 写真514~517)

土師器片834点，土製品2点が出土した。図示遺物は27点を数え，豊富である。カマド周辺・カマド前面・南西隅床面に，まとまりがみられた。

図79-1~10・12・13・15~17は，土師器杯である。1・2・4・5・7・8・10・12・13・15・16は，有段丸底杯に分類される。このうち，栗罎式古段階の特徴を備えた5を除くと，全体としては，底径が大きく，口縁部が立ち気味なものが多い傾向が指摘できる。1・2・4・8・10は，口縁部外面がヘラミガキされている。3・6は，椀タイプの須恵器杯蓋模倣杯に分類される。どちらも口縁部外面がヘラミガキされている。9・10は，口縁部下端の段がはっきりせず，端部が反り返る。10は，口縁部外面がヘラミガキされている。17は，内面ナデ調整だけの無段丸底杯である。口縁部下端に，1対の円孔が穿たれている。

図79-11・14・18は，土師器高杯である。11は，有段丸底の杯部をなすもので，脚部を欠いている。14・18は，中実の短脚部で，端部がまくれていない。

図79-19・20は，小型の土師器手づくね土器になる。20は，粘土塊に指を差し込んだだけのもの

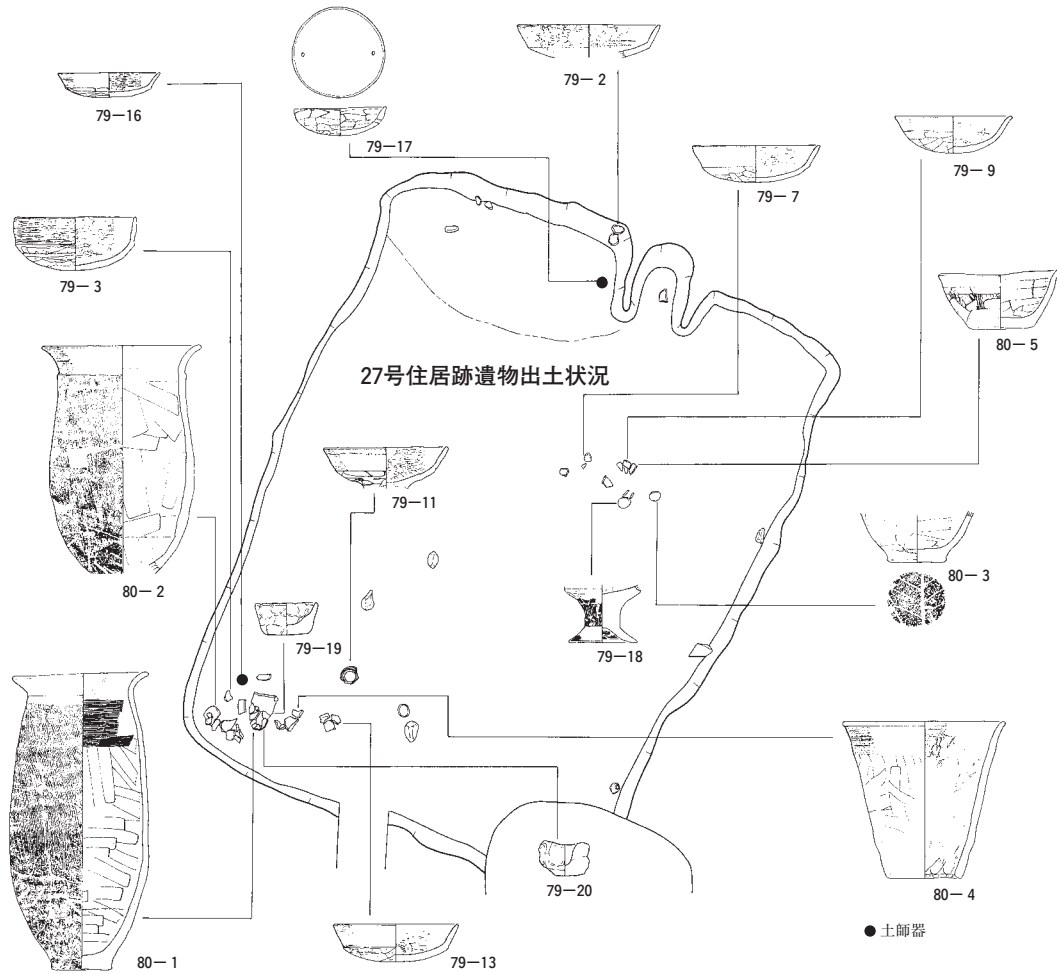


図78 27号住居跡遺物出土状況

ある。

図80-1～3は、土師器甕に分類される。1は、細長い胴部を有するもので、頸部から口縁部にかけて、弓なりに反り返っている。2は、1よりは短いが、やはり長胴甕に分類される。頸部下端の外面に、段を形成している。3は、底部付近の破片なので、器形全体の特徴は知ることができない。以上の3点は、胴部外面がハケメ調整されている。

図80-4は、無底式の土師器甕である。胴部下端から口縁端部まで直線的に外傾しており、頸部が括れない。口縁端部が肥厚している。

図80-5は、小型の土師器甕である。口径が大きく、全体に逆台形の器形を呈する。口縁部は短く外傾する。外面は、ハケメ調整されている。

図80-6は、土製支脚である。煮炊甕に接した面は、丸みを帯びている。

図80-7は、小型の円筒状土製品になる。外面は、ハケメ調整されており、内面に粘土紐痕が明瞭に観察される。

まとめ

本住居跡の平面形は、長方形を呈しており、短軸側にカマドが設置されている。カマド左脇側に

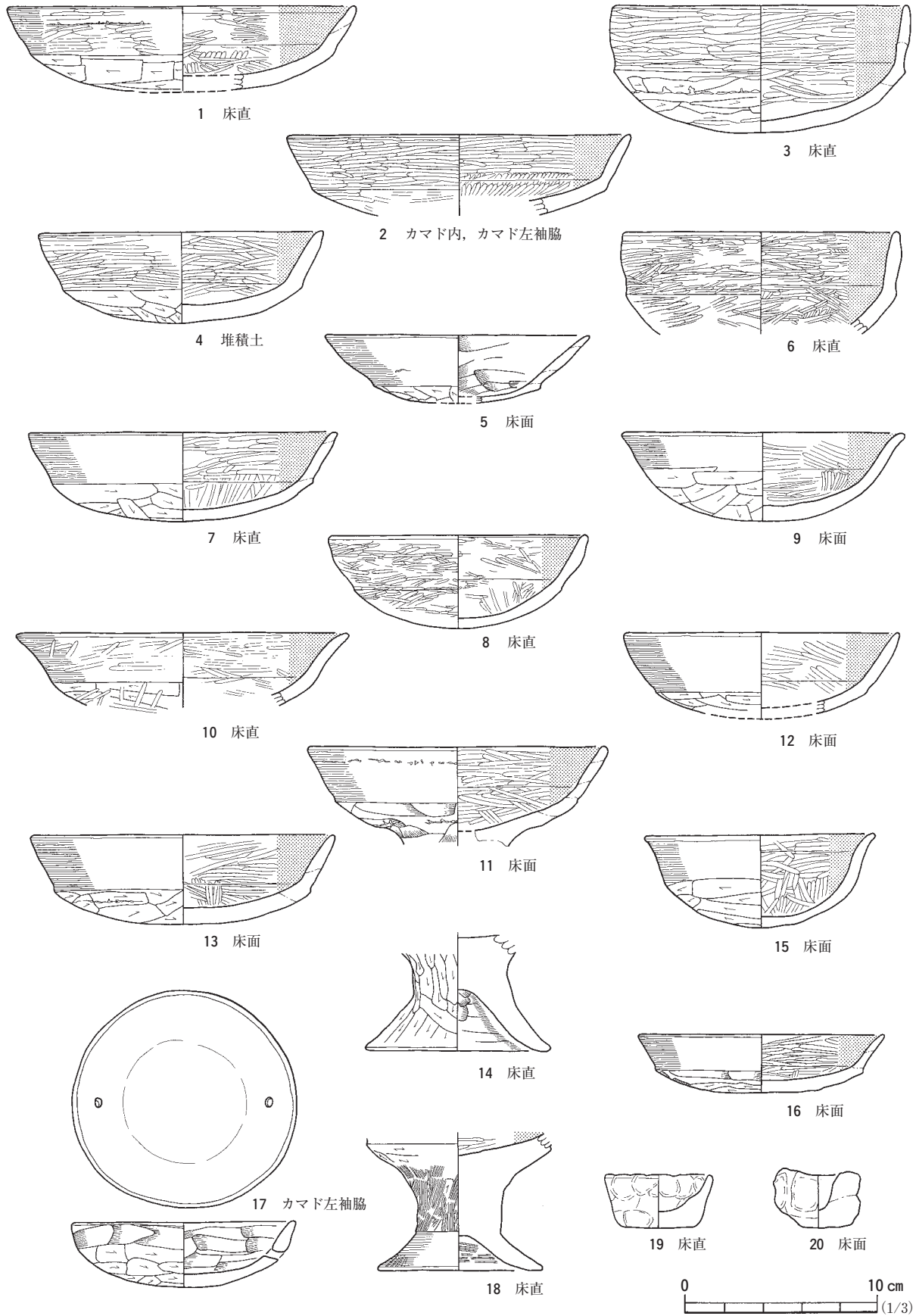


図79 27号住居跡出土遺物 (1)

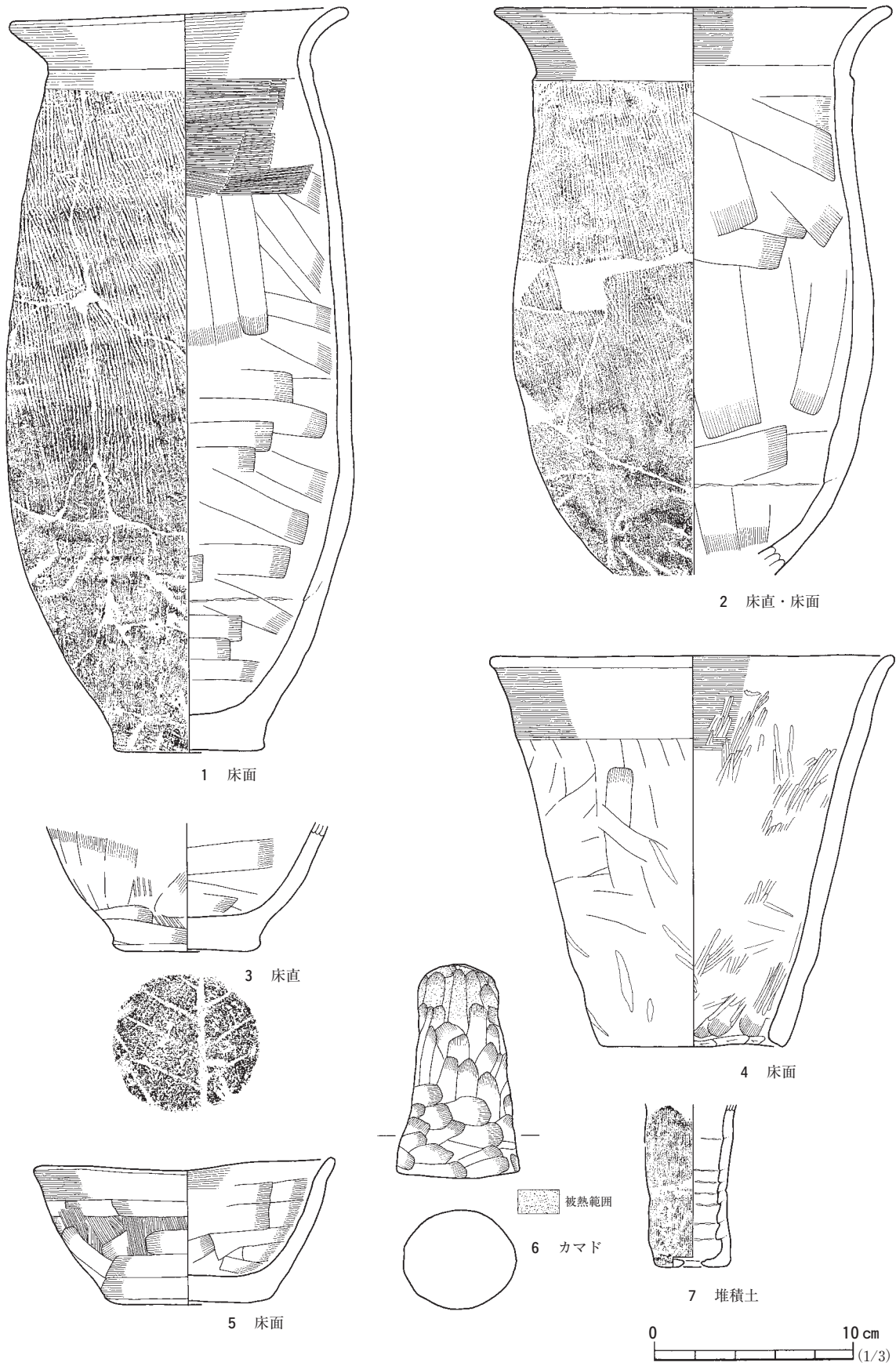


図80 27号住居跡出土遺物 (2)

は、部分的な貼床が施されていた。

遺物は、床面から豊富に出土した。出土位置にいくつかのまとまりがあり、カマドから離れた住居跡南西隅に最も多くの集中が認められた。

本住居跡が営まれたのは、遺物の特徴から栗圀式期と考えている。

※調査記録を優先して、「105号住居跡より本住居跡の方が新しい」と報告した。しかし、遺物を比較すると、逆になる可能性が高い。第3編で検討を加えることにする。ただ、仮にそうであっても、遺構の重複部分では図示遺物が出土していないことから、遺構と遺物の所属関係には、支障の無いことをおことわりしておく。
(佐藤)

28号住居跡 S I 28

遺 構 (図81, 写真82)

本遺構は、調査区中央のやや南になるN22グリッドに位置しており、LⅢ上面において検出された。カマド・柱穴は確認されなかったが、周辺の住居跡に形状や規模が類似していることから、竪穴住居跡として報告する。

本住居跡は、124号住居跡と重なるように重複しており、それより新しい。本住居跡の東側は、高い密度で住居跡が広がっている。

遺構内堆積土は3層に区分した。断面は、全体にレンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積土

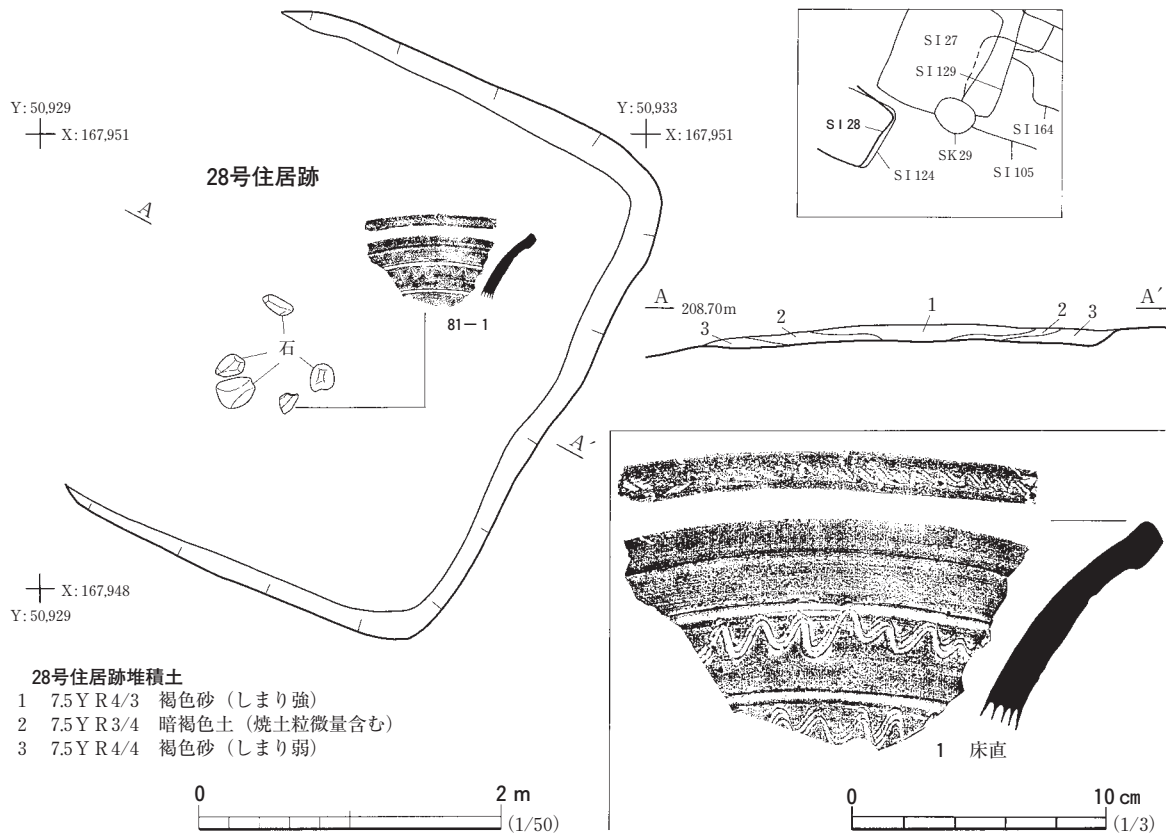


図81 28号住居跡・出土遺物

と判断した。壁際のℓ3は、基本土層のLⅡに近似しており、周壁崩落土と考えられる。

本住居跡は、検出時に掘り過ぎたため、西周壁を検出することができなかった。平面形は、残存部の状態から、比較的整った方形をなしていたものと考えられる。

住居跡と方位の関係を東周壁で見ると、真北から30°ほど東に傾いている。規模は、東西2.8m以上、南北3.7mである。周壁の立ち上がりは全体になだらかで、検出面から床面までの深さは、東周壁で最大11cmである。

床面は、ほぼ平坦に整えられている。貼床は認められないが、全体に踏み締められていた。

遺物 (図81, 写真517)

本住居跡では、土師器片69点、須恵器片1点が出土した。図示遺物は、1点のみである。4個の礫と床面で一緒になっていた。

図81-1は、須恵器甕の破片である。口唇部と沈線で区画された口縁部外面に、波状文が描かれている。

まとめ

本住居跡は、遺存状態が悪かった。カマドも検出されていない。

営まれた時期は、床面の須恵器の類例から、8世紀初頭に下限が求められる。(佐藤)



図82 29号住居跡

29号住居跡 S I 29

遺構 (図82)

本遺構は、N21・N22グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防を阿武隈川側に向かって横断する浅い谷地形である。

本住居跡は重複遺構が無く、周辺にも遺構は分布しない。これは、本住居跡の微地形が遺構を営むのに適していないからばかりでなく、調査開始当初、一帯を大型クローラダンプの搬送路にしてしまったためである。この結果、いくつかの遺構の一部が壊されてしまったと考える。実際、他にも、いくつかのカマド痕跡と考えられる焼土や、床とみられる踏み締まりの痕跡が認められた。本住居跡も、周壁は完全に削ら

れ、床面の一部しか残っていない。

本住居跡の平面形は、正方形基調であったと推定される。規模は、東西4.2m以上、南北3.9m以上を測る。住居跡方向は、発掘基準線北に対して東に17°振れている。

カマドは、西壁中央に設置されている。検出されたのは、燃焼部の焼土面で、細部構造は不明である。

遺物は、出土しなかった。

なお、記録は遺構平面図だけで、写真撮影はしていない。

ま と め

本遺構は、浅い谷地形に営まれた竪穴住居跡である。残りが悪く、構造の詳細は知ることができなかった。

時期も、伴出遺物が無く、不明である。

(菅原)

30号住居跡 S I 30

遺 構 (図83・84, 写真83~87)

本遺構は、N21グリッドでL II 上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の落ち際に、微地形は、南東方向に緩やかに傾斜している。

本住居跡は、サブトレンチで多量の土師器が出土したことから、はじめて存在に気が付いた。これらは、カマド周辺に置き去りにされた一括遺物であることが後で判明している。137号住居跡と重複しており、これより古い。

本住居跡は、残りが悪い。西周壁の高さは23cm以上あるが、斜面下位になるにつれ、低くなり、南周壁と西周壁は消失していた。また、東側ではサブトレンチが床面下まで達しており、さらに、円形の攪乱も入っている。

堆積土は、にぶい黄褐色砂質土の1層である。焼土を少し含んでいる。床面は貼床されず、微地形の傾斜に沿って、南東方向にレベルが下がっている。踏み締まりは認められず、軟弱な印象を受けた。

本住居跡の平面プランは、正方形基調であったと推定している。規模は、東西4.0m、南北3.2m以上を測り、高木遺跡では中型の部類に属する。方向は、発掘基準線北に対して東に55°振れている。

カマドは、北周壁中央で検出された。煙道部は失われており、「ハ」の字状に袖が開く燃焼部だけが検出されている。内部には、赤灰色土が堆積し、底面は焼土化していなかった。袖の長さは、周壁から59cmを測り、焚口幅は、52cmを測る。

遺 物 (図85~87, 写真517~519)

遺物は、土師器片986点が出土した。図示遺物は18点で、そのうちの16点が遺構に伴っている。出土位置は、カマドの設置された西周壁側床面に集中する傾向が顕著であった(図84)。また、細部を

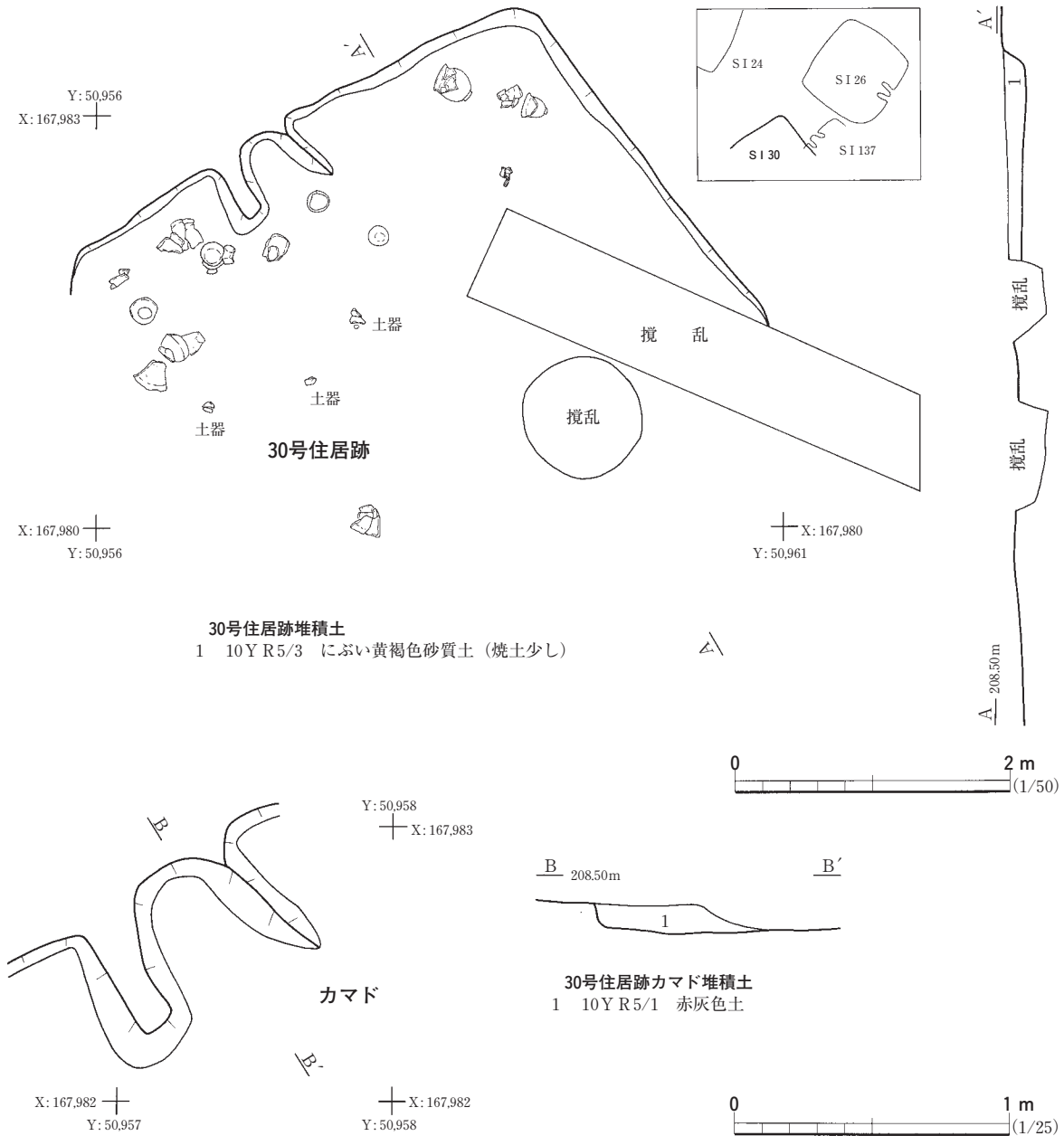


図83 30号住居跡

観察すると、小型品は、入れ子に重ねられていたり、正立しているものがみられた。また、大型品も倒れていたが、本来は、正立していたか伏せられていたと推定される出土状況を示していた。このように、本住居跡の出土遺物は、一括性が高い。

図85-1~3は、土師器杯である、1は、カマド左脇に正立していた。口径が大きく、低平な有段丸底の器形を呈している。口縁部は、外反気味に伸びる。2は、カマド前で正立していたもので、須恵器杯蓋の模倣形態を呈している。器高が高い。3は、検出面出土の有段丸底杯である。本住居跡は、堆積土が薄いことから、これも床面の遺物であった可能性が高いとみられる。1と比べると口径が小さく、器高が高い。

図85-4・5は、土師器高杯である。4は、カマド左袖先の床面に正立し、図86-1の小型甕が

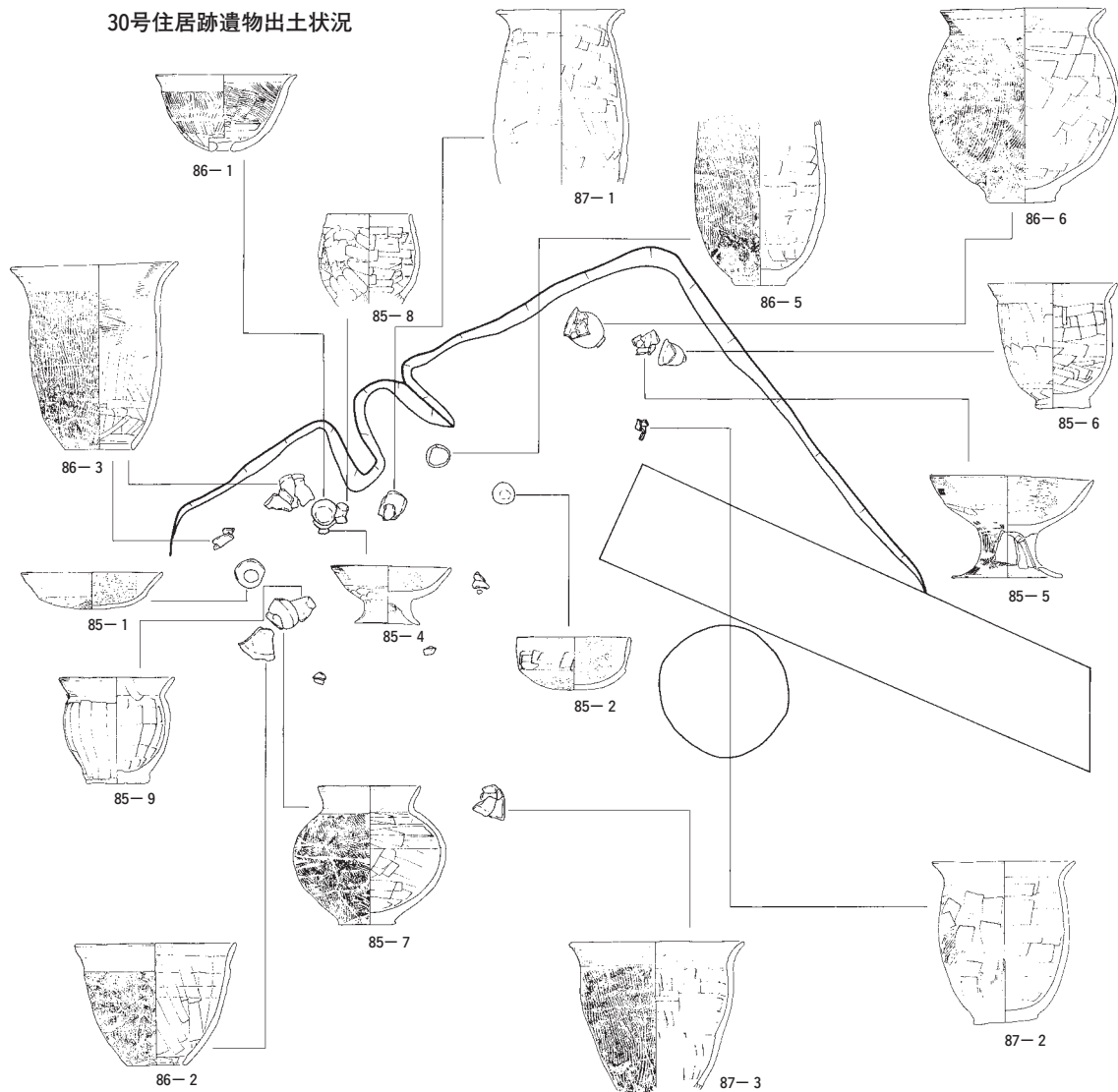


図84 30号住居跡遺物出土状況

上に重ねられていた。当該器種としては、小型の部類に属する。脚部は短く、透かしが入らない。5は、カマド右脇に潰れた状態で、正立していた。口径20.8cm、器高13.1cmを測る大型品である。丁寧につくられている。この大きさに比例してか、脚部は四方透かしである。

図85-6・9、図86-4は、土師器小型甕である。口頸部が「く」の字状に外傾し、胴部外面がナデ調整されている。図85-6は、住居北東隅の床面に横転していた。土師器高杯図85-5とは、重ねられていた可能性がある。図85-9は、住居南西隅の床面に、図85-7の小型球胴甕と重ねられていた。図86-4は、検出面出土で、下半部を欠く。

図85-8は、器形全体が丸みを帯び、口縁部が内傾して立ち上がる土師器小型甕である。これも、胴部外面はハケメ調整のあと、ナデが加えられている。前述した、高杯図85-4・小型甕図86-1にもたれかかる状態で出土した。

図85-7・図86-6は、土師器球胴甕である。どちらも、外面はハケメ調整されている。前者は

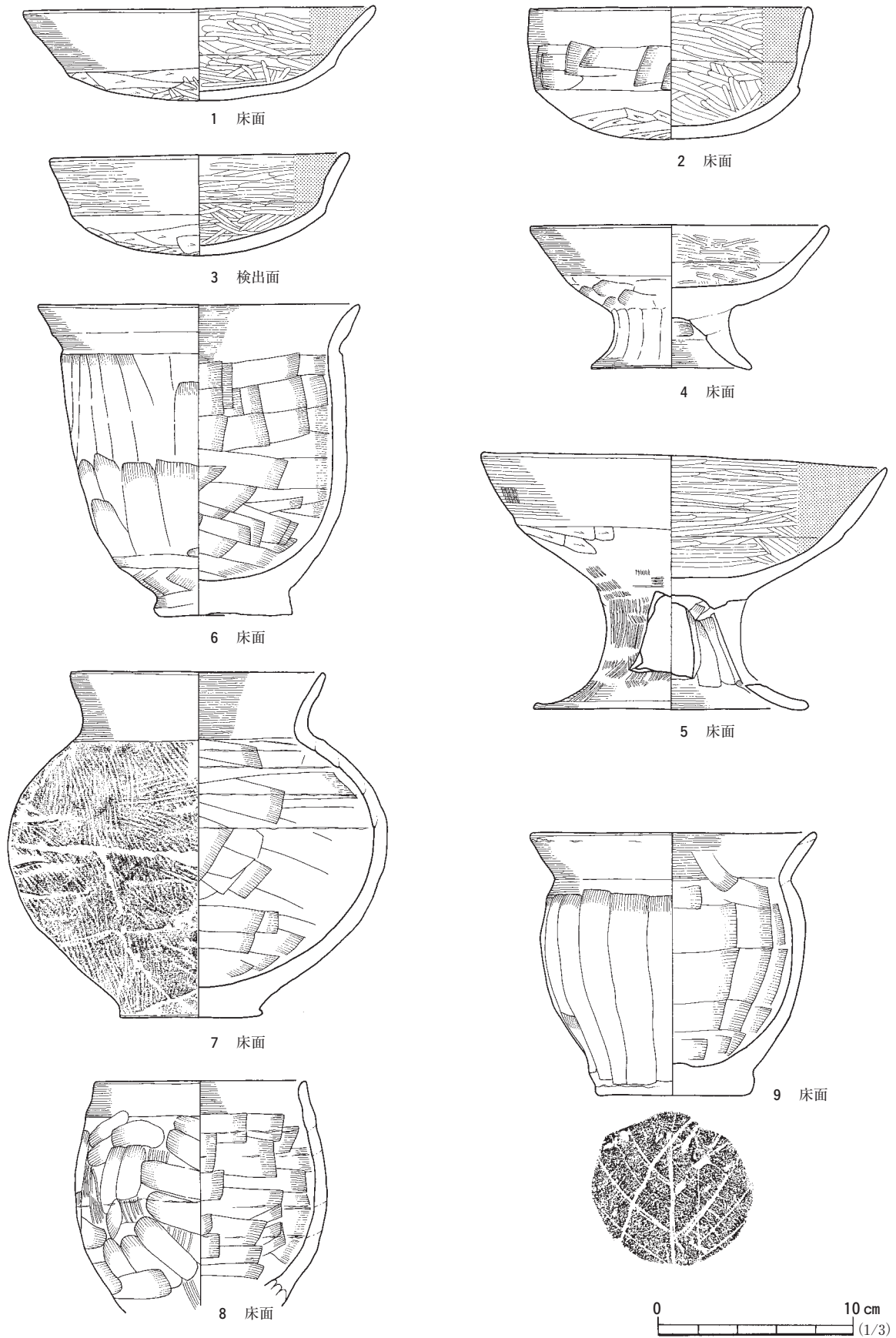


図85 30号住居跡出土遺物 (1)

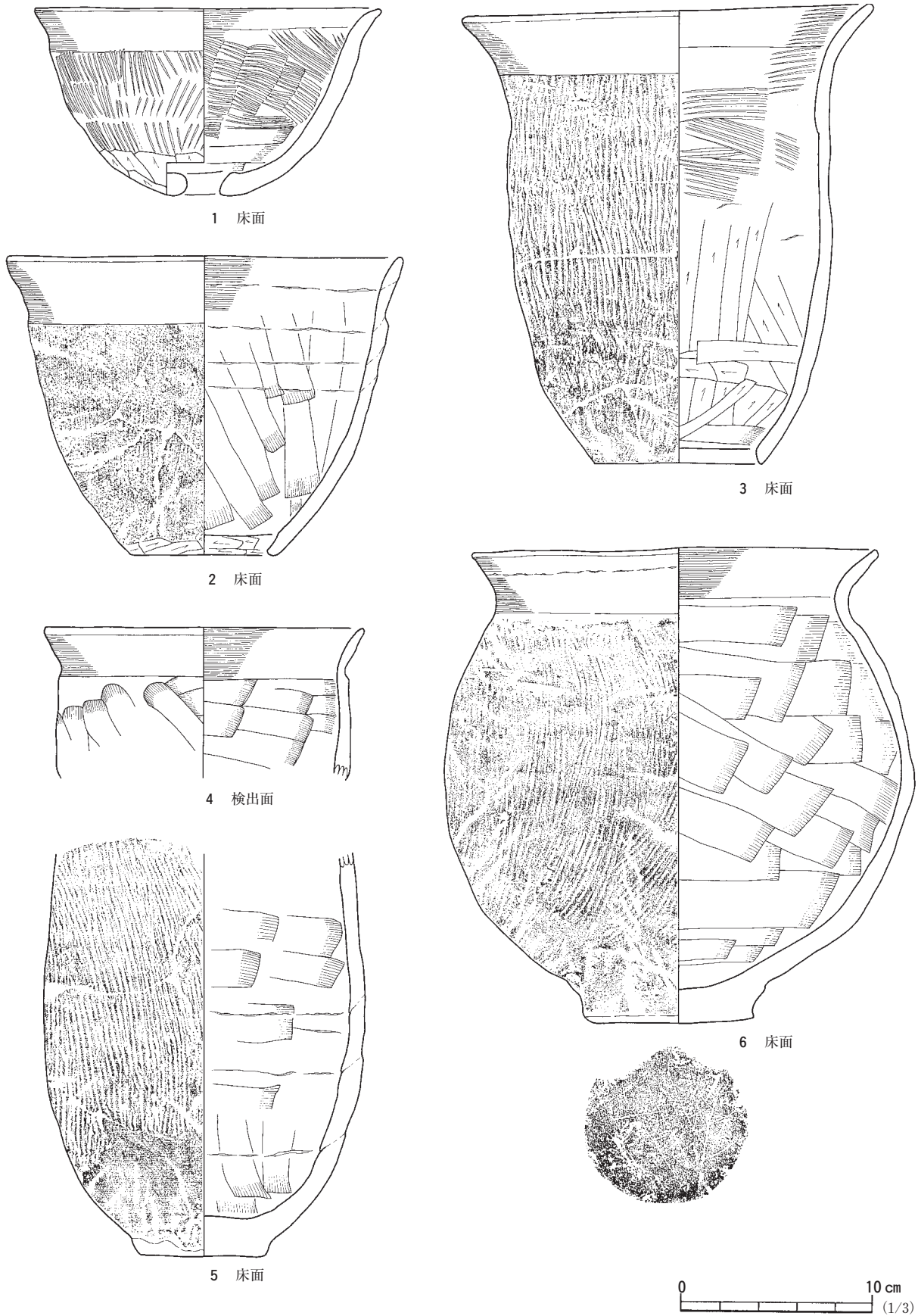


図86 30号住居跡出土遺物 (2)

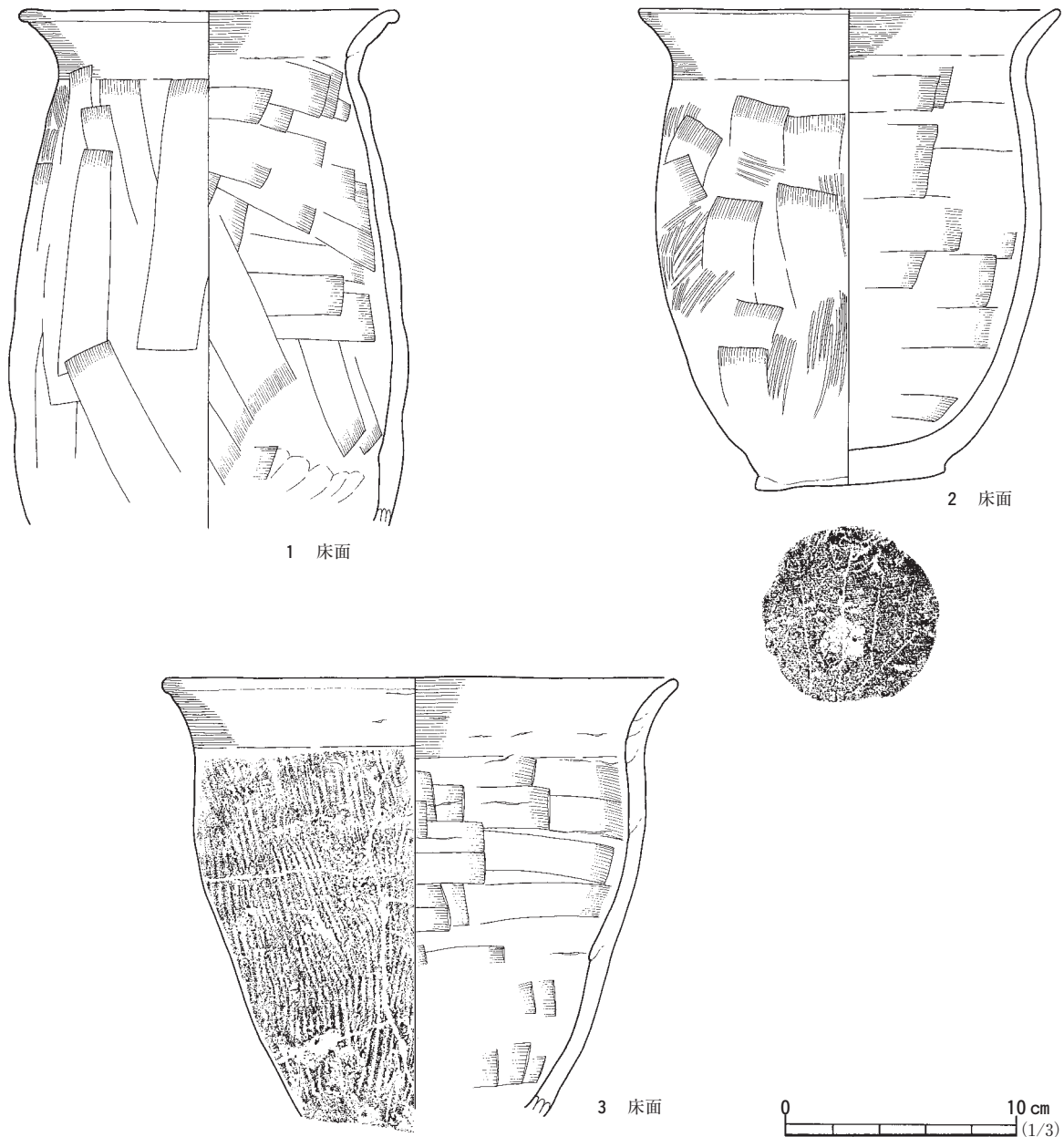


図87 30号住居跡出土遺物（3）

小型品で、胴部最大径が口径を大きく上回る。図85-9の小型甕を上に乗せていた。後者は、北東隅の床面に倒れていた。胴部径が口径と大差なく、頸部の締まりが弱い印象を受ける。

図86-1～3は、土師器甕である。1→2→3の順に法量が大きくなり、反比例して、器高：口径比は小さくなる。器面調整は、外面がハケメ調整である点で共通する。底部は、1が単孔式、2・3が無底式である。1は、前述したように、土師器高杯図85-4の上に乗せられていた。図86-2は、上下に重ねられた図85-7・図85-1の脇で倒れており、並べて置かれていたと推定される。3は、カマド左脇床面で前倒し状態だった。

図86-5・図87-1～3は、中～大型の土師器甕である。図86-5は、外面がハケメ調整される長胴タイプで、カマド燃焼部前に正立していた。上半部を欠いている。図87-1も、やはり、カマ

ド燃焼部前に倒れていた長胴甕である。これは、外面ナデ調整で、底部付近を欠く。形態は、胴部中位に最大径があり、均整がとれている。図87-2は、器高20.8cmの中型品で、北東隅床面から出土した。口径が胴部最大径を少し上回る。図87-3は、他の遺物とは離れ、南西隅床面で出土している。口径が胴部最大径を大きく上回り、底部に向かって窄まる形態を呈する。甗に似た形態である。

ま と め

本遺構は、後背湿地の落ち際に営まれた竪穴住居跡である。遺存状態は必ずしも良くなかったが、出土遺物に恵まれた点が特筆される。床面に残された状況から一括性が高く、編年作業を行う上での好資料となり得る。

時期は、別に詳しい検討を行うが、栗圀式期に比定される。

(菅原)

31号住居跡 S I 31

遺 構 (図88・89, 写真88・89)

本住居跡は、調査区ほぼ中央にあたるN21グリッドに位置している。LⅢ上面において検出された。

本住居跡は、西側で36号住居跡、南側で162号住居跡、北側で140号住居跡、そして、重なるような状態で131号住居跡と重複している。新旧関係は、いずれの住居跡よりも本住居跡の方が新しいことが判明している。

また、本住居跡の西周壁を壊して13号土坑が掘られている。

遺構内堆積土は、4層に区分した。山なりに堆積している $\ell 3$ については、堆積過程が不明である。

しかし、 $\ell 1 \cdot 2 \cdot 4$ がいずれも明らかなレンズ状堆積の状況を示していることから、遺構内は、全体的にみると自然埋没したと判断できる。

住居跡の平面形は、東側を攪乱で欠いているため、残存部から推測すると、ほぼ整った方形を呈していたと考えられる。

方位の関係を西周壁で見ると、真北から17°ほど東へ傾いている。規模は、南北およそ7.0m、東西6.2m以上である。

床面には、約5m×5mの範囲で、踏みしまりが見られ、東に向かって若干下がっている。検出面から床面までの深さは、10~20cmを測る。

周壁の立ち上がりは、西周壁の北側から北周壁にかけてが急で、西周壁の南側から南周壁にかけてが緩やかである。東周壁は、攪乱によって失われ、検出できなかった。

住居跡内施設として、カマド1基を検出した。カマドは、西周壁の中央からやや南寄りにつくられている。遺存状態は良好といえず、袖の高さは、床面から最大で14cmである。右袖に比べると、左袖は比較的残りが良く、西周壁から約60cm住居内に張り出している。右袖長は、約30cmである。

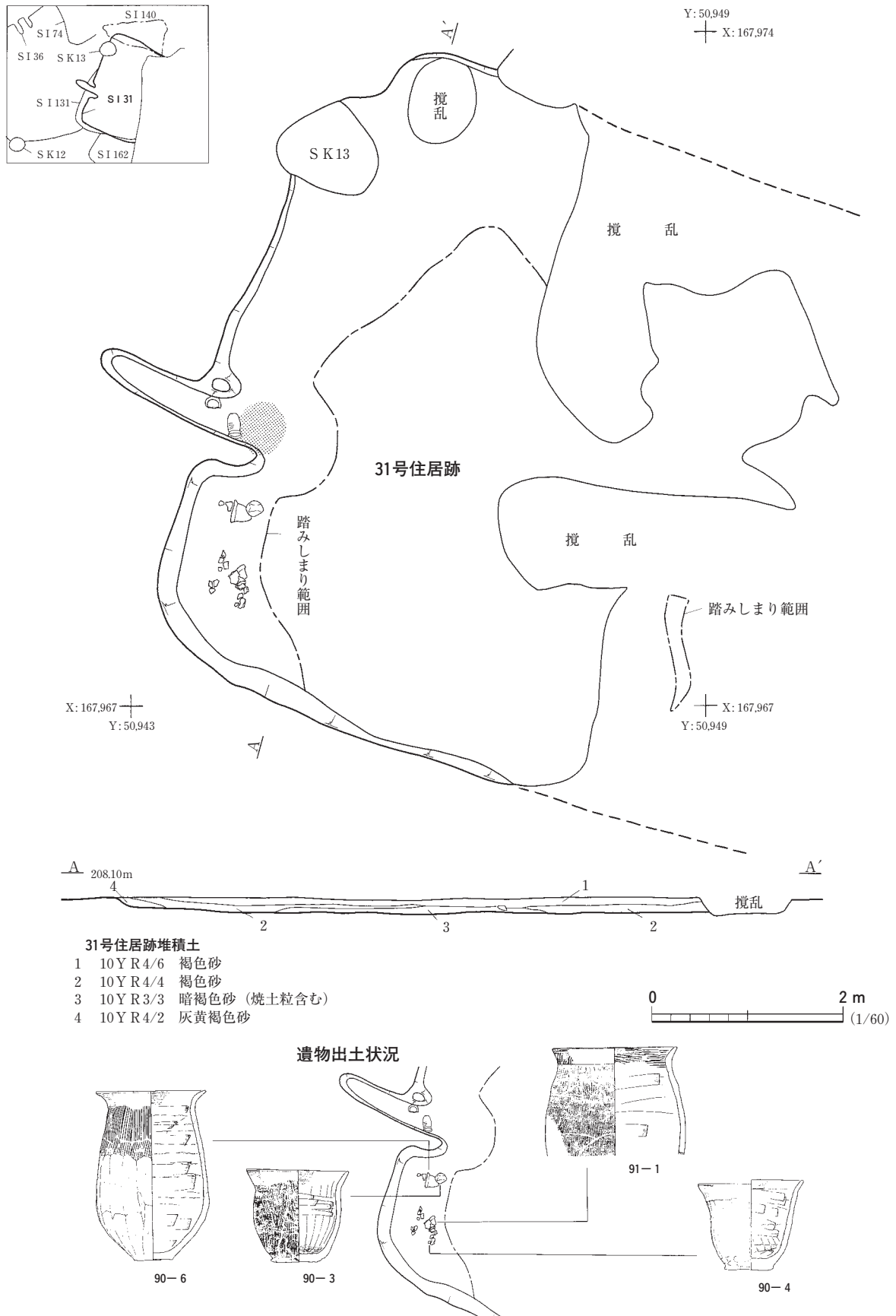


図88 31号住居跡

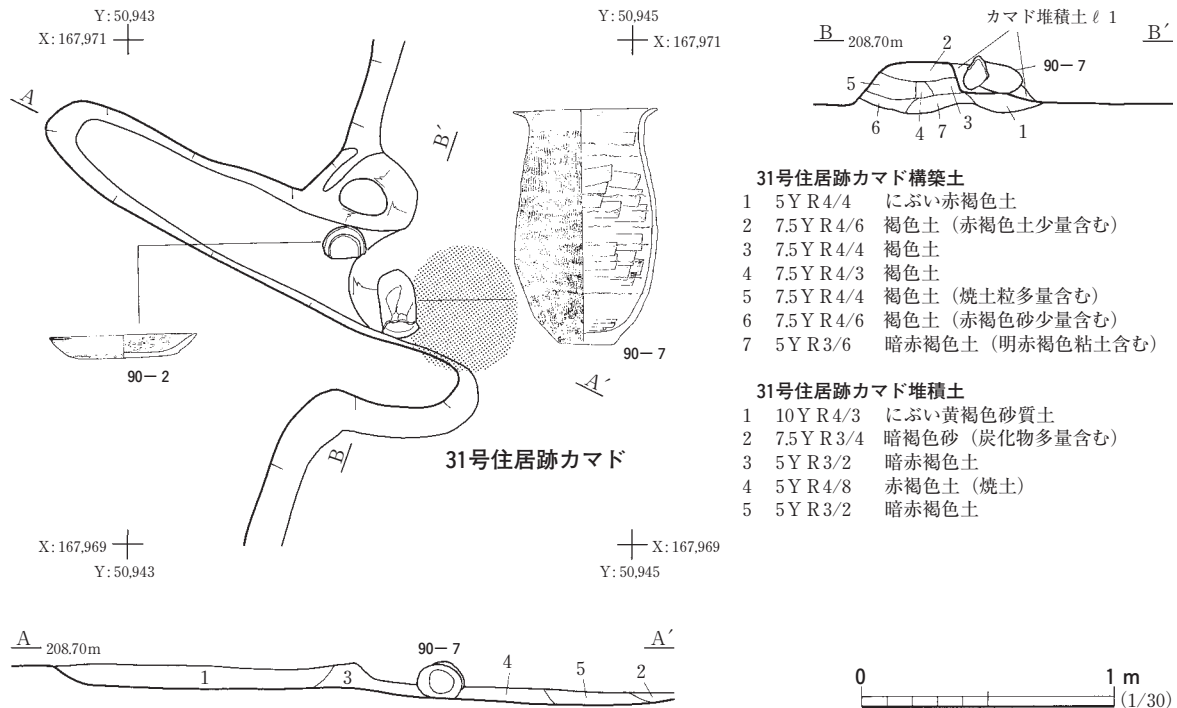


図89 31号住居跡カマド

燃焼部は、焚口幅42cm，奥行き60cm以上である。底面は焼土化していた。煙道は，長さ約130cm，幅40cm前後，検出面からの深さは6～8cmを測る。

カマド堆積土は5層に分層される。ℓ 1は，煙道内への流入土と考えられる。ℓ 2は，住居跡内堆積土 ℓ 3に良く似ている。ℓ 3～5は，焼土塊を含むことから天井崩落土と考えられる。

カマド構築土は，7層に分層された。焼土を含んだものがみられる。カマド燃焼部の下に，深さ6cmほどの掘形が確認されている。

遺物 (図90・91, 写真520・521)

遺物は，土師器片834点，鉄製品1点，土製品1点が出土した。図示遺物は13点あり，このうち遺構に伴う10点が，カマドとその左脇床面にまとまっていた。このことから，厨房空間がこちら側にあったことがうかがえる。

図90-1・2は，土師器杯である。1は，器高の高い椀状のもので，内面はナデ仕上げされている。外面も，ヘラケズリ調整で器面が整えられておらず，粗雑な仕上げで終わっている。全体に厚ぼったいつくりで，重量感がある。2は，皿状の有段丸底形態をなす。金属器を意識したのだろうか。カマドの燃焼部奥壁に伏せられていた。

図90-3～5，図91-4は，土師器小型甕になる。このうち図90-3～5は，口径が胴部径より大きく，口縁部が緩く外傾する。4は，底部外面に木葉痕が観察される。図91-4は，底部周辺の破片なので，器形の特徴は不明。図90-6・7，図91-1は，大型の土師器甕に分類される。図90-6・7は，胴部下膨れの長胴甕で，口縁部が反り返っている。図91-1は，広口のタイプになり，幅広の胴部になると推定される。ただ，下半部を欠いているので，詳細は知ることができない。

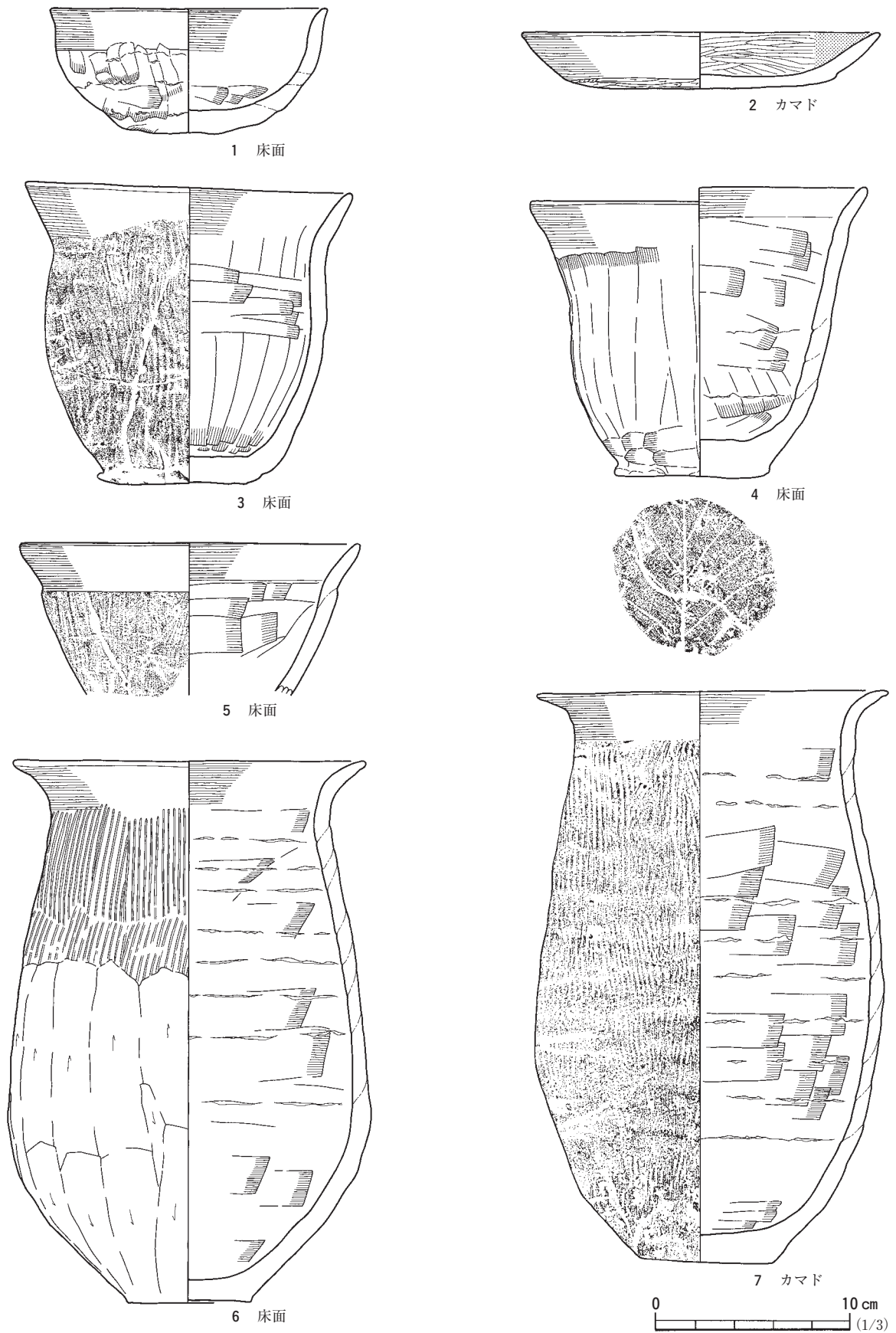


図90 31号住居跡出土遺物 (1)

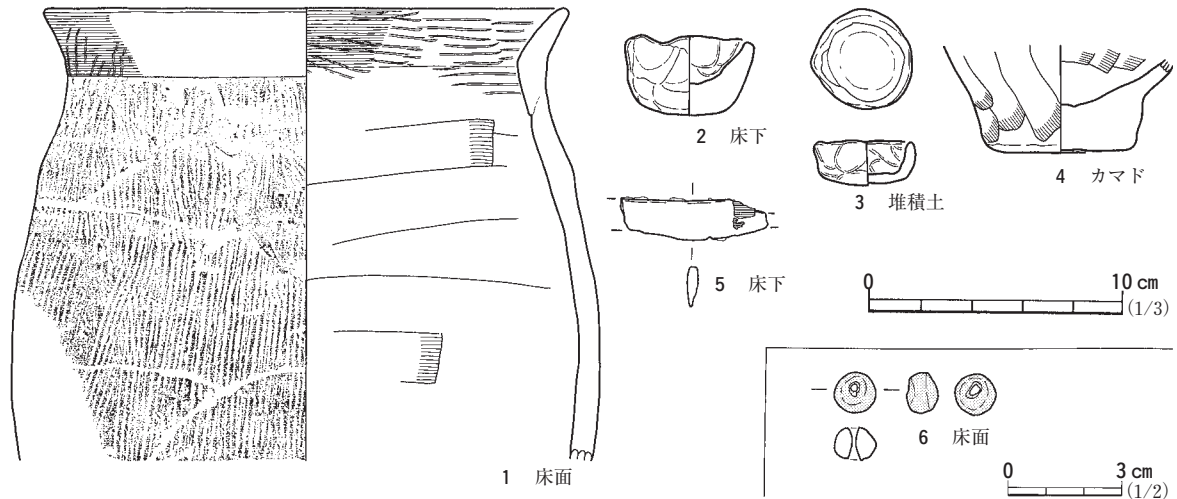


図91 31号住居跡出土遺物（2）

3点とも、胴部外面はハケメ調整されている。

図91-2・3は、土師器手づくね土器である。2は、口縁部の片側を片口状にしており、器壁が薄い。

図91-6は、土製丸玉になる。表面が黒色処理されている。

図91-5は、鉄製刀子とみられる。両端を欠いている。

まとめ

本遺構は、東半分が攪乱で壊されており、遺存状態が悪かった。それでも、カマドの設置された西周壁側は、定量の遺物を伴って検出され、土師器杯の中には金属器皿を意識したとみられる器形のものが含まれていた。

本住居跡が営まれたのは、遺物の特徴から、栗圀式期に求められる。

（佐藤）

32号住居跡 S I 32

遺構 (図92, 写真90・91)

本遺構は、N21グリッドでL II 上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面である。

本住居跡は、39・57・75号住居跡と重複しており、75号住居跡よりも新しい。南西部と南東部は、攪乱で破壊されている。

本住居跡の平面プランは、東西に長い長方形を呈する。ただ、西周壁と南周壁で長さが揃わず、少しいびつになっている。中軸線上で測ると、規模は4.6m×3.5mの中型である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して55°東に振れている。

堆積土は、にぶい黄橙色砂質土の1層で、自然堆積したと考えている。床面は平坦に整えられており、貼床は施されていない。踏み締まりは認められなかった。

カマドは検出されていない。西周壁側で、痕跡らしい焼土の散らばりが認められたが、確証は得

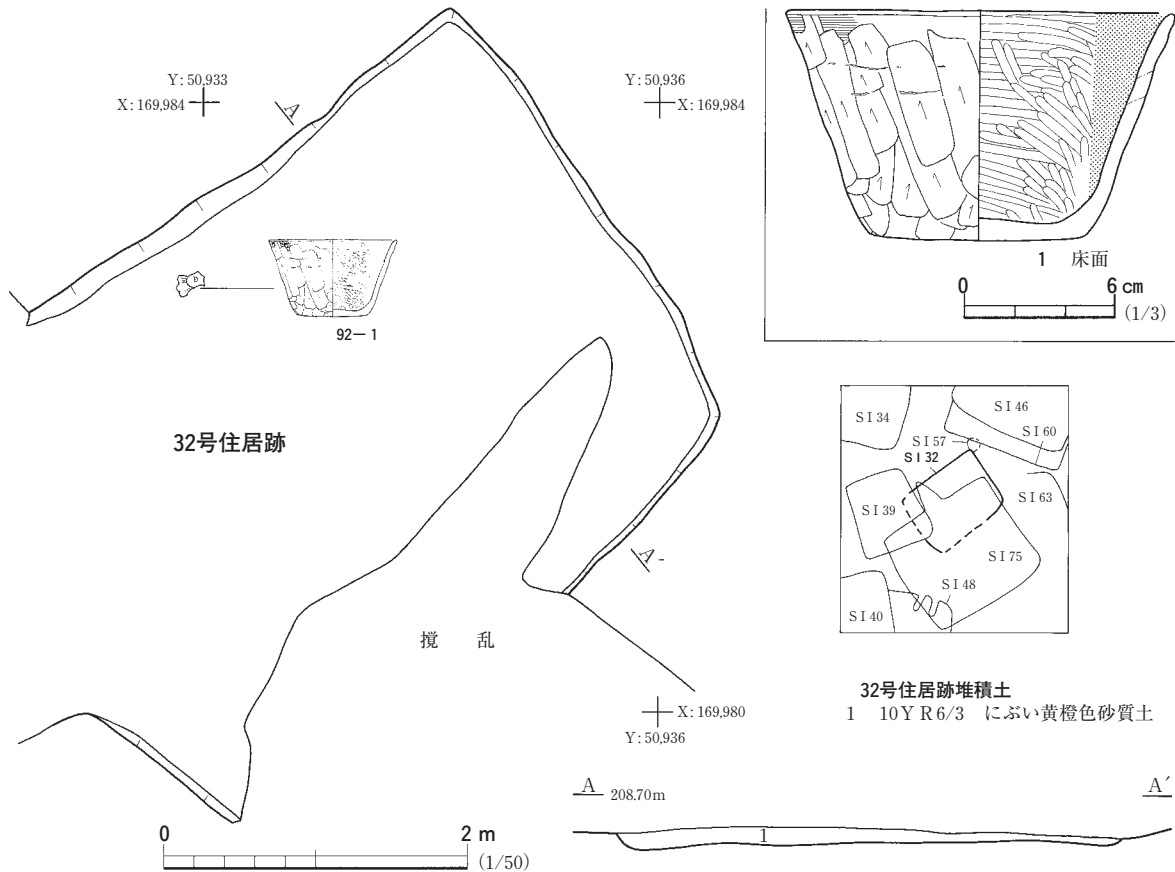


図92 32号住居跡・出土遺物

られなかった。

遺物 (図92, 写真521)

遺物は、土師器片123点が出土した。

図92-1は、床面出土の土師器である。平たい底部から、口縁部が直線的に外傾して立ち上がるもので、外面は縦位にヘラケズリされている。杯にするか小型の甕にするか判断に迷ったが、内面がヘラミガキ・黒色処理されていることを重視して、一応、ここでは杯と考えておく。

まとめ

本遺構は、自然堤防の中央平坦面に営まれた竪穴住居跡である。遺存状態が悪く、カマドの位置も分からなかった。

時期は、図示遺物が栗囲式期の住居跡で共伴する例がみられるので、このことを根拠に、当該期に位置付けておく。

(菅原)

33号住居跡 S I 33

遺構 (図93, 写真92・93)

本遺構は、N21グリッドでL II上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面で、周辺には数多くの住居跡が密集している。本住居跡は、38・53号住居跡と重複し

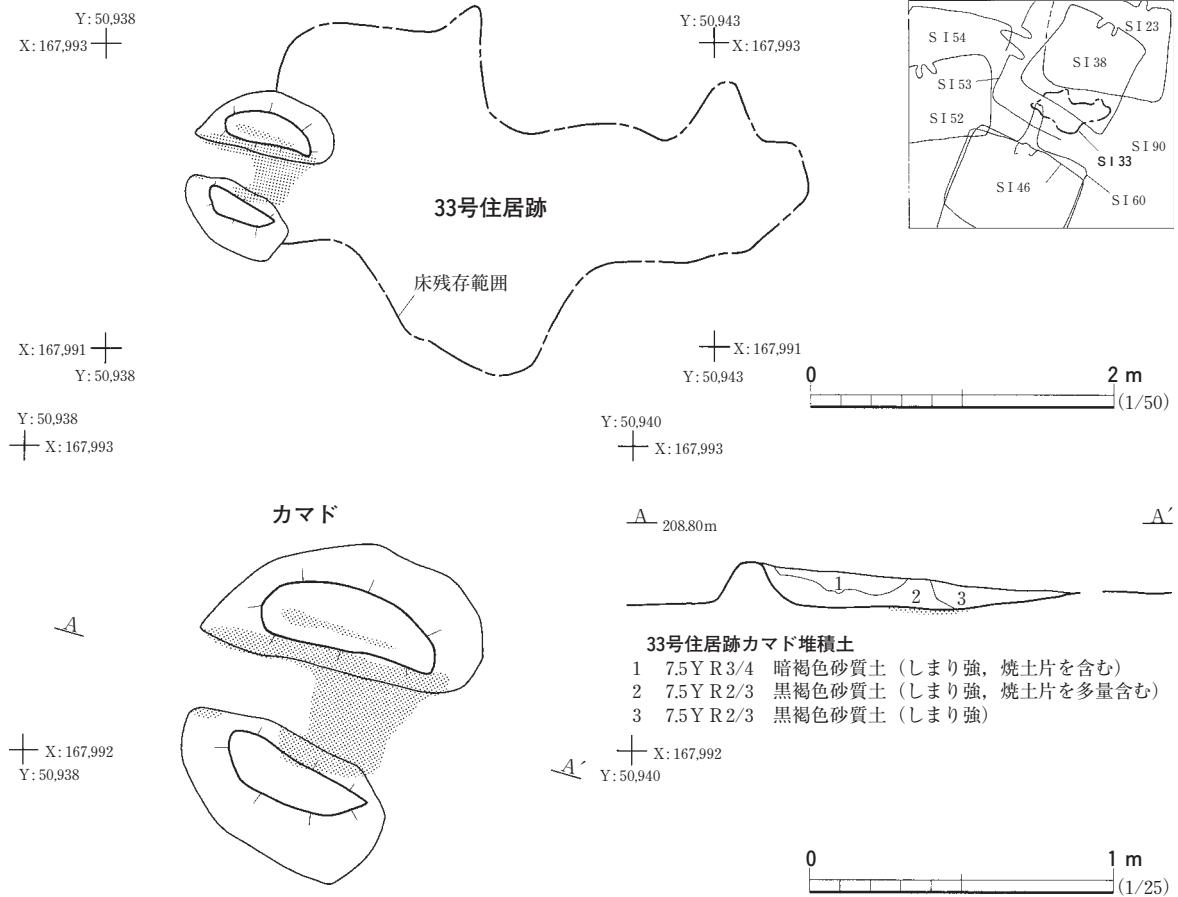


図93 33号住居跡

ており、どちらよりも新しい。

本住居跡は、何度検出作業を繰り返してもプランが確定できず、最終的にカマド、およびその中軸線上の床を残した他は、無くなってしまった。この部分の床が残ったのは、明黄褐色粘質土の貼床が施され、上面が踏み締まっていたためである。

検出範囲でみると、本住居跡の規模は、東西3.5m以上、南北2.4m以上である。

カマドは、側壁の焼土化が著しい点が特徴として指摘できる。煙道部が削平されているため、全体の規模は、不明である。焚口は、幅42cmを測る。燃焼部内部には、焼土片を含む堆積土がみられ、底面も側壁ほどではないが焼土化している。

遺物は、土師器片19点が出土した。図示できなかったが、カマド内資料に非ロクロ調整の杯・甕の破片が認められる。

まとめ

本遺構は、自然堤防の中央平坦面に営まれた竪穴住居跡である。周辺には数多くの住居跡が密集する。検出状態が悪いため、詳細は知ることができなかった。

カマド燃焼部は良く焼けている。

時期は、カマド内の遺物から、国分寺下層式期以前と考えておきたい。

(菅原)

34号住居跡 S I 34

遺 構 (図94・95, 写真94～97)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部にあたり、高木遺跡における住居跡分布の西限の1つをなしている。他の遺構とは重複しない。

住居跡内には、にぶい黄橙色土が1層みられた。自然堆積土と考えている。床面は、貼床されず、掘形底面のLⅢがそのまま平坦に整えられている。踏み締まりは認められなかった。床面と検出面との比高差は、約10cmを測る。

本住居跡の平面プランは、整った正方形を呈している。周壁のラインはまっすぐで、向かい合う周壁どうしの長さが、一致する。規模は、東西4.6m、南北4.6mを測り、高木遺跡では中型の部類に属する。方向は、発掘基準線北に対して、東に16°振れている。

カマドは、西周壁中央で検出された。煙道部は失われており、燃焼部だけ残っていた。袖は、周壁から約60cmの長さがあり、焚口幅は75cmを測る。底面は焼土化が著しく、断ち割りしたところ、8cmの厚さを測った。なお、袖の長さに関しては、底面の焼土範囲が、検出された袖の先端よりも、さらに25cm手前まで広がっていることから、実際は、もう少し長かったとみられる。

後述する土器の出土状況からすると、本住居跡のカマド燃焼部は、廃絶時に取り壊された可能性もある。

ピット類は、検出されていない。

遺 物 (図96・97, 写真521・522)

遺物は土師器片150点、石製品1点が出土した。図示資料は12点ある。それらの出土状態には、まとまりがあり、カマド燃焼部・住居中央・東周壁ぎわに分かれ、それぞれ興味深い様相を示していた(図94)。遺物自体の特徴を説明する前に、まずこの点に触れておく。

カマド燃焼部では、2つの土師器杯と甕の組み合わせが認められた。図96-2・図97-1、図96-3・9がそれである。遺構上部の削平で、破片になっていたが、それぞれ上下に重ねられていたとみられる。杯はカマドの使用器種ではないので、煮炊時の甕の支えに転用されていたか、住居廃絶に儀礼行為で使用されたかのいずれかと見なされる。また、左袖付け根部分に、図96-8の土師器小型甕が倒れていた。

床面中央では、土師器杯・高杯のまとまりがみられた。このうち高杯3点(図96-4～6)は、どれも正立しており、図96-6は、脚部を割り揃えて床面に半分埋め込まれていた。杯(図96-1)が、その上に乗せられており、置き台に転用されていたことが知られる。

東周壁ぎわでは、カマド対面位置で遺物の集中がみられた。土師器高杯(図96-7)が、やはり脚部を割り揃えて床面に埋め込まれていたほか、有孔石製品図(図96-10)や3個の自然石が寄せ集められた状態で出土した。

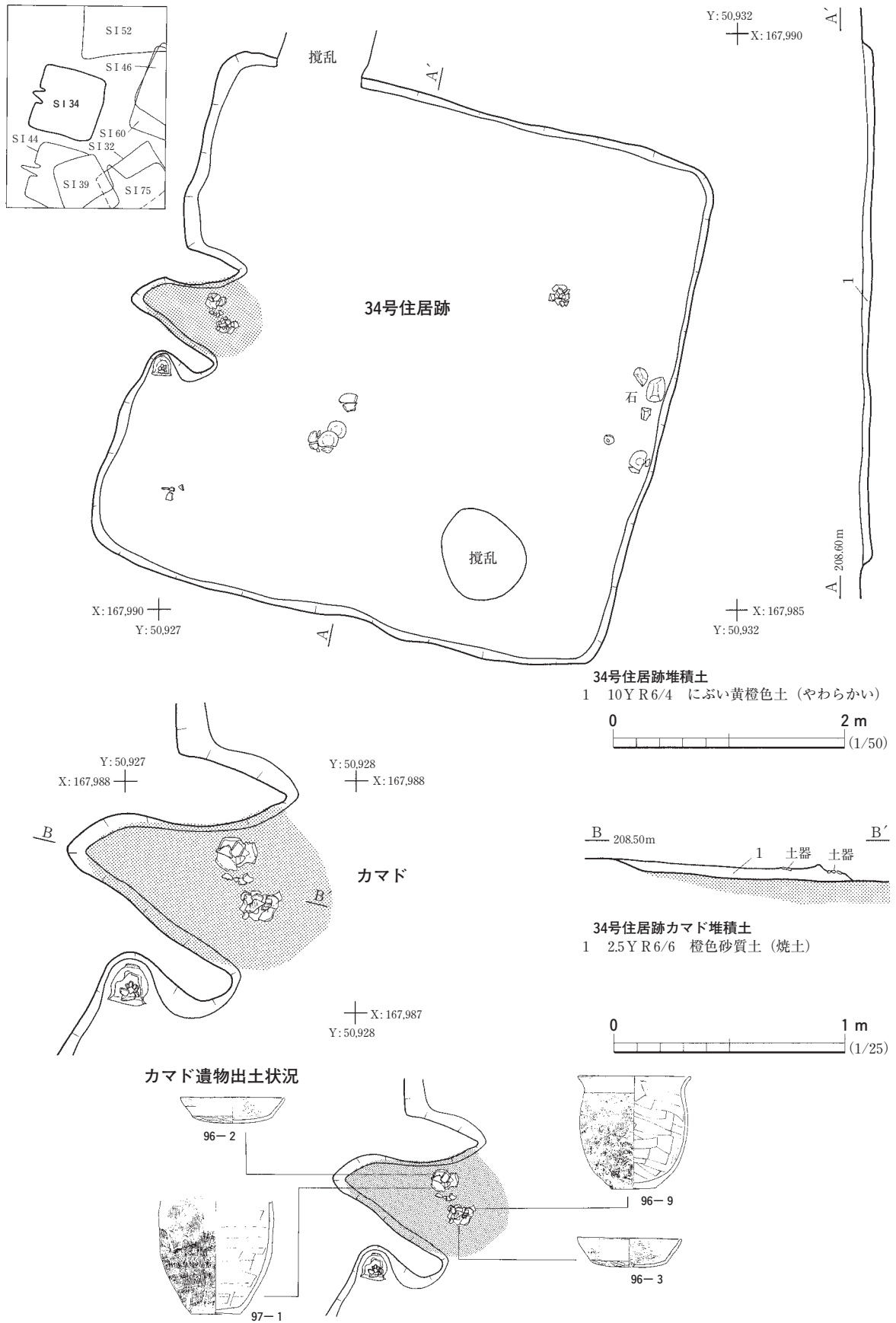


図94 34号住居跡

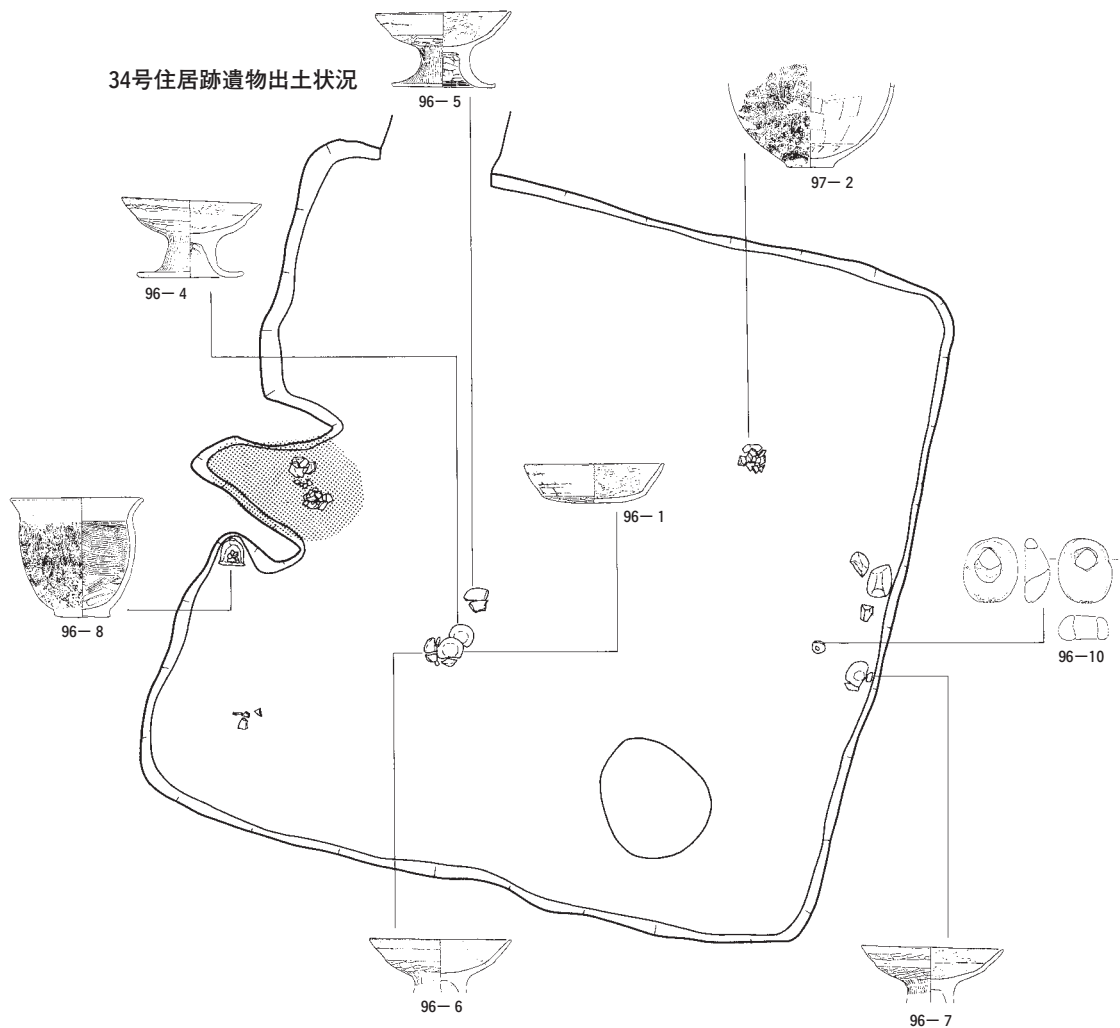


図95 34号住居跡遺物出土状況

次に、器種別の特徴を解説していく。

図96-1～3は、有段丸底の土師器杯である。この3点は、同一規格の製品と見なせるほど、器形・法量が近似している。底部は平底風で、底径が大きい。

図96-4～7の土師器高杯にも、杯同様の規格性がうかがえる。脚は短く、端部がまくれている。透かしは入らない。なお、4・7は、口縁部外面の一部にヘラケズリが施される。

図96-8・9は、小型の土師器甕である。胴部外面は、ハケメ調整されている。器面を観察すると、胴部外面が下半中心にボロボロに荒れており、内面の口縁部下に、煤が付着している。このことから、それらが煮炊具であったことがうかがえる。

図97-1・2は、上部を欠いた大型の土師器甕である。1は長胴タイプ、2は球胴タイプになるとみられる。

図96-10、礫を穿孔したもので、用途不明である。

まとめ

本遺構は、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。出土状況に、

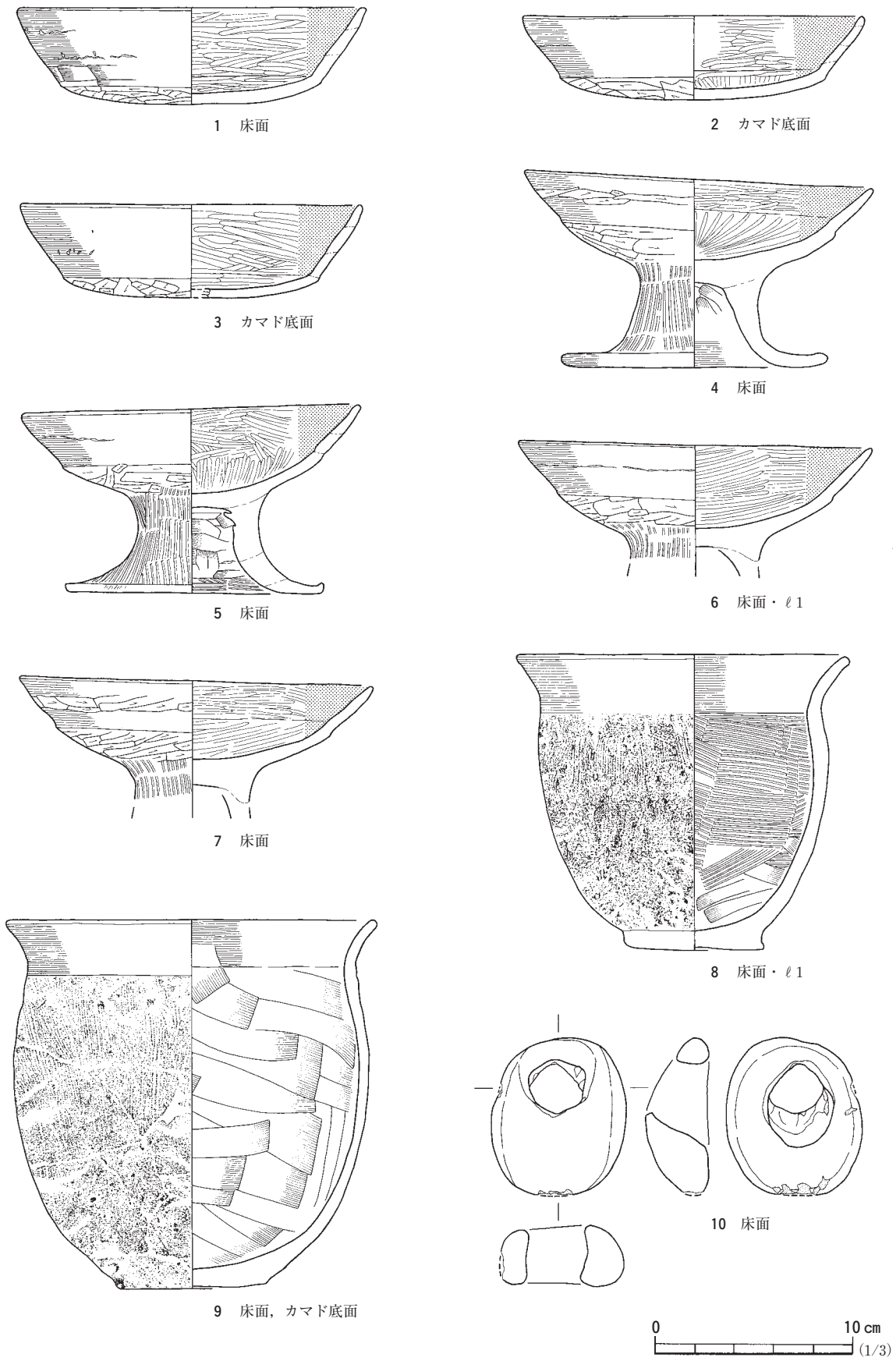


図96 34号住居跡出土遺物 (1)

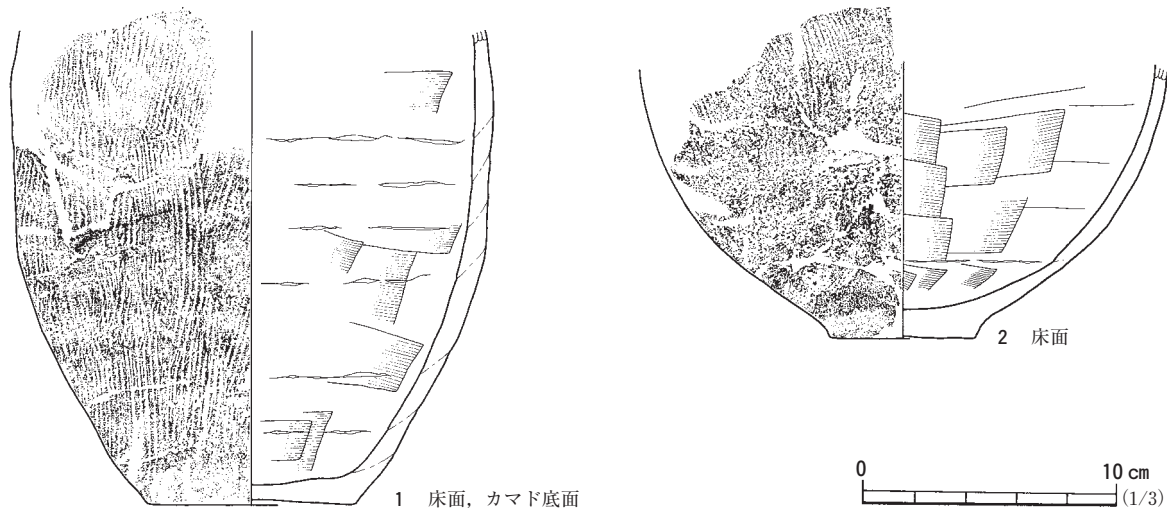


図97 34号住居跡出土遺物(2)

まとまりのある遺物に恵まれた。

平面プランは、正方形をなし、整っている点も特徴として指摘される。

(菅原)

35号住居跡 S I 35

遺構 (図98, 写真98~100)

本遺構は、N20・N21グリッドで、LⅢ・LⅣ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防上の西斜面肩部にあたり、高木遺跡における住居跡分布の西限の1つをなしている。64号住居跡と重複し、これよりも新しい。

堆積土は、にぶい黄橙色土が1層みられた。自然堆積土と考えている。床面は、掘形上面のLⅢがそのまま利用されており、貼床は施されず、平坦に整えられている。踏み締まりは認められなかった。検出面と床面の比高差は、5~10cmを測る。

本住居跡の平面プランは、正方形基調を呈している。規模は、東西2.8m、南北2.5mを測り、小型である。方向は、発掘基準線北に対して、概ね一致している。

カマドは、西周壁で検出された。位置は、左側に偏っている。煙道部は失われており、燃焼部だけ残っていた。袖長は、周壁から37cmあり、焚口幅は45cmを測る。底面の焼土化は弱く、断ち割ったところ、酸化しているのは厚さ1cmであった。ピット類は検出されていない。

遺物は、土師器片12点が出土している。ℓ1で出土した資料の中に、栗圀式に比定可能な杯・甕の破片が認められる。

まとめ

本遺構は、自然堤防の西斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。非常に小さな平面規模で、カマドの他には細部施設を持たない。時期は、共伴遺物が無く遺構自体からは決められない。本住居跡に切られる64号住居跡が栗圀式期古段階に比定されるとすると、6世紀後半~7世紀前半に上限がおさえられる。

(菅原)

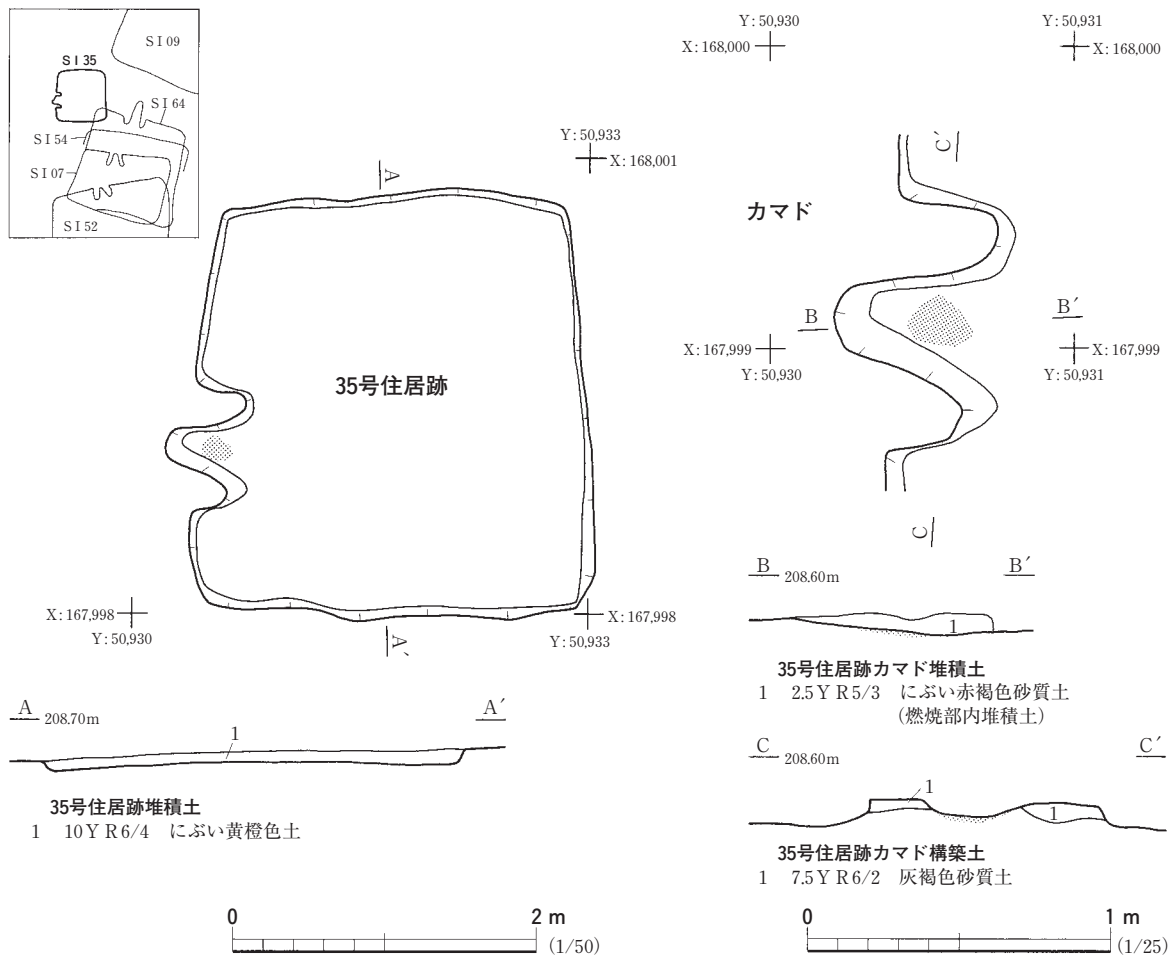


図98 35号住居跡

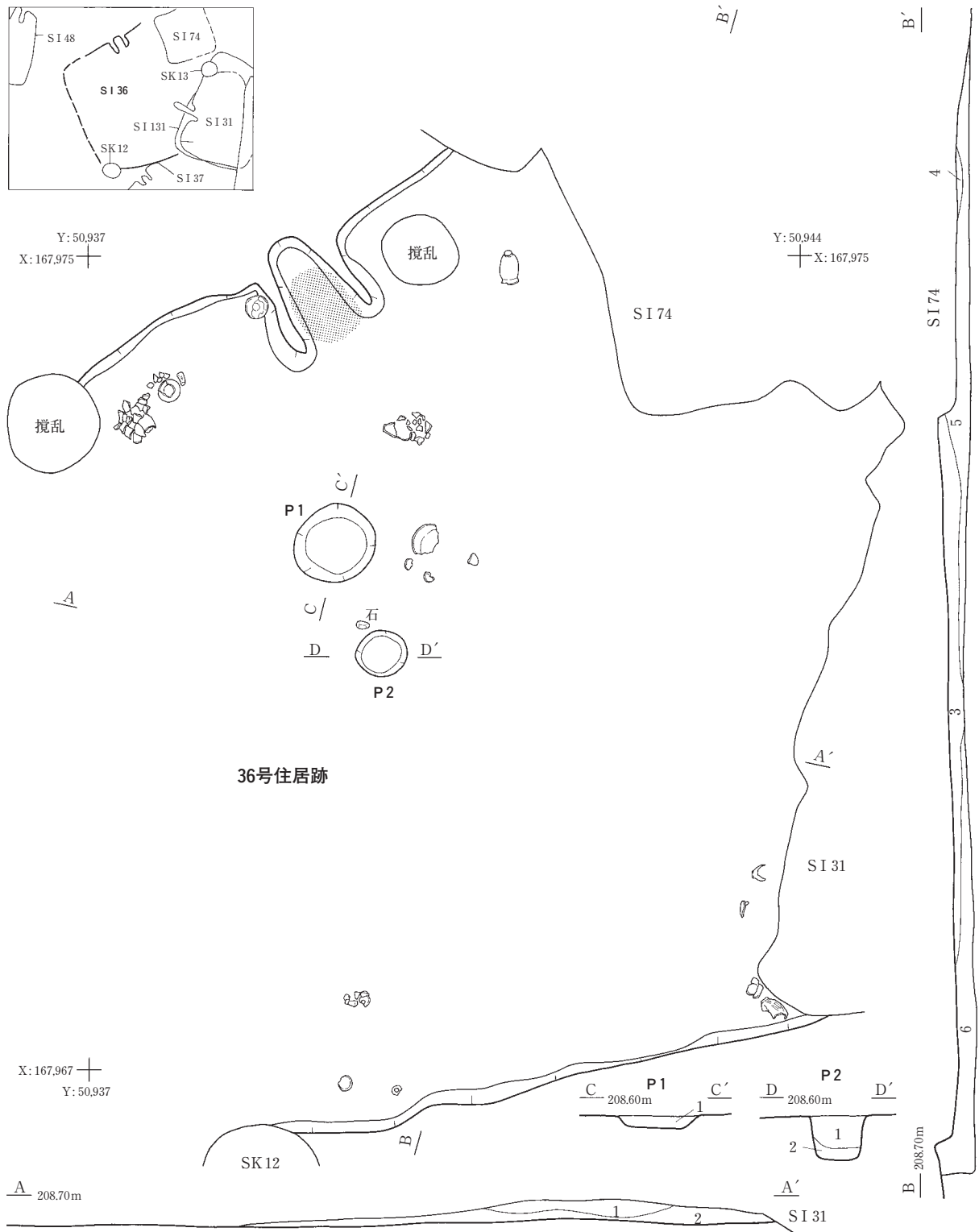
36号住居跡 S I 36

遺 構 (図99・100, 写真101・102)

本住居跡は、調査区中央の東寄りになるN21グリッドに位置している。この周辺は、東に向かって緩やかに傾斜する自然堤防上の平坦面で、周辺には数多くの竪穴住居がつくられている。各遺構との重複関係は、74・131号住居跡の2軒よりも新しく、31号住居跡よりも古い。また、南側で37号住居跡とわずかに接しているが、新旧関係は不明である。

本住居跡の遺存状態は不良であった。北東側は重複住居跡によって失われている。また、南西側についても、宅地造成時の上部削平で、検出段階には既に失われていた。確認できたのは、推定床面積の3分の2程度である。ただ、これも堆積土がほとんど無くなってしまった状態でプランを確認しており、検出状態は必ずしも良いとはいえない。

本住居跡は、北周壁と南周壁が平行していない。カマドの設置された北周壁は確実な状態で掘り上げているので、南周壁側に問題があると思われる。検出状態で見ると、本住居跡は一辺8.5mほどの大型住居であったと考えている。壁高は、北周壁の中央やや西寄りの部分で最大12cm、南周壁の



36号住居跡堆積土

- 1 10Y R4/4 褐色砂 (炭化物微量含む, しまりあり)
- 2 10Y R4/3 にぶい黄褐色砂 (暗褐色土塊微量含む)
- 3 10Y R4/3 にぶい黄褐色砂 (焼土塊少量含む, しまりあり) 貼床
- 4 10Y R3/3 暗褐色砂 (やわらかい) 掘形
- 5 10Y R4/2 灰黄褐色砂 掘形
- 6 10Y R3/4 暗褐色砂質土 掘形

P1 堆積土

- 1 10Y R3/4 暗褐色砂質土 (焼土粒含む, しまり弱)

P2 堆積土

- 1 10Y R4/6 褐色砂質土
- 2 10Y R3/4 暗褐色砂質土

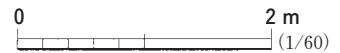


図99 36号住居跡 (1)

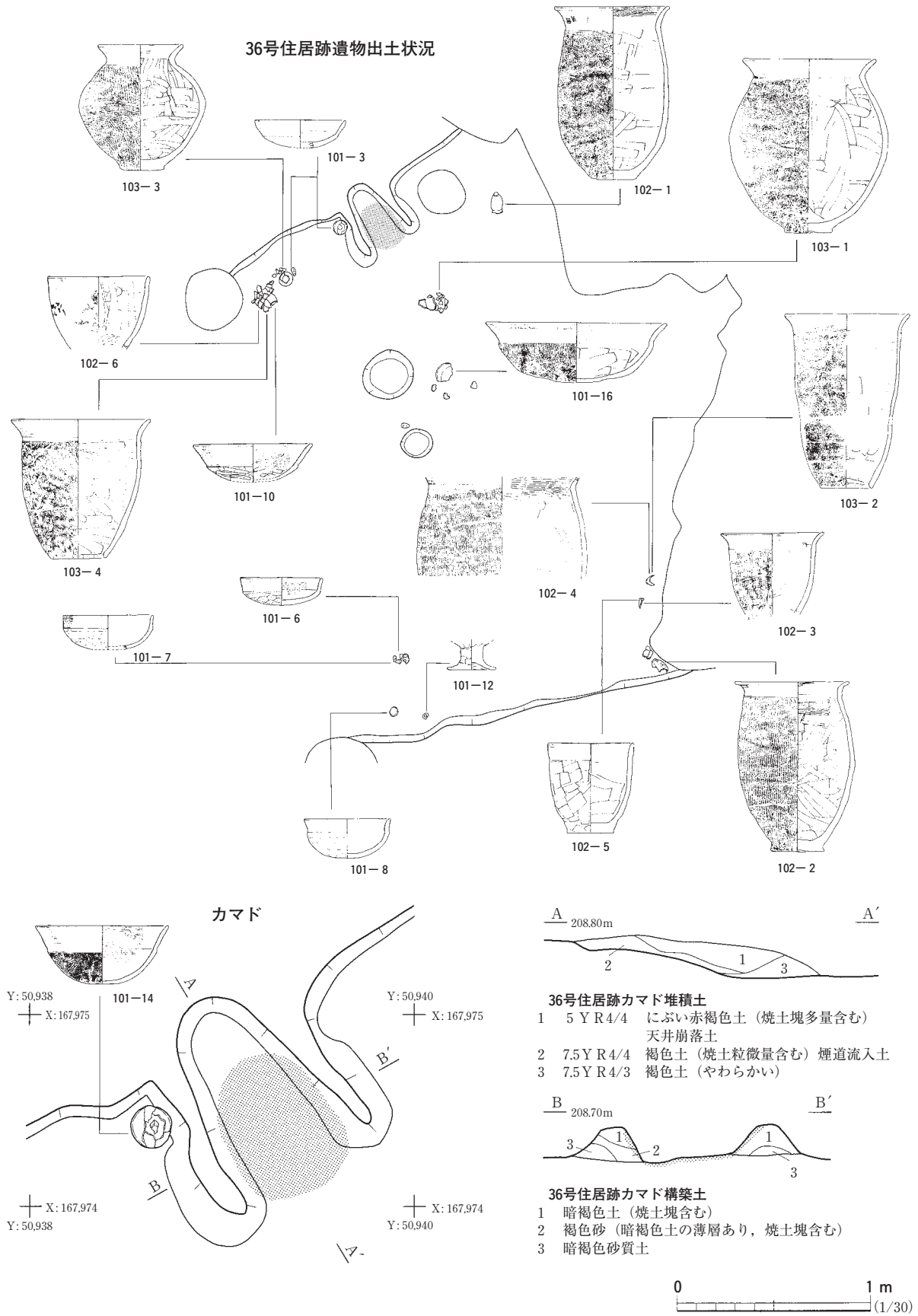


図100 36号住居跡 (2)

中央部分で最大23cmである。壁の立ち上がりは急角度をなしている。

床面は、全体に貼床が施されている。平坦であるが、自然堤防の傾斜と同じく、東に向かって緩やかに傾斜している。

堆積土は6層に区分した。ℓ1・2が住居廃絶後の堆積土、ℓ3～6は貼床土である。前者については、レンズ状に堆積していることから、自然堆積したものと判断した。

住居跡内施設として、カマド1基とピット2個を検出した。カマドは北周壁に取り付いている。平面形は逆U字形に近く、焚口の幅に比べて、袖が長い。規模は、焚口幅が約55cm、左袖が92cm、右袖が85cmを測る。袖の高さは、底面から最大18cmである。

カマド内堆積土は、3層に区分した。ℓ1・2には、焼土が含まれており、ℓ1は天井崩落土、ℓ2は煙道からの流入土と考えられる。

ピットは、P1が住居中央ややカマド寄り、P2が住居ほぼ中央で検出された。規模は、P1が直径約75cm、深さ約10cm、P2が直径約50cm、深さ約45cmである。P1の断面形は鍋底状をなし、堆積土中にはカマドに起因すると考えられる焼土粒子が含まれていた。これらについては、性格を明らかにできるような知見は得られなかった。

他に、柱穴と考えられるような規則的に配置されたピットや、貯蔵穴と考えられるピットは検出できなかった。

遺物 (図101～103, 写真522～525)

遺物は、土師器片642点、須恵器片3点、土製品1点が出土した。図示遺物は29点あり、大半が床面ないしカマド内の資料として取り上げられている。ただ、前述したように、南周壁側の検出状態に問題があり、すべてが本住居跡に帰属したと見なすには、危険が伴う。ここでは、カマド周辺とP1・2周辺の遺物に限って、確実な共伴資料と捉えておくのが無難であろう。

図101-1～11・14～16は、土師器杯である。1～5・10・11・14は、有段丸底杯に分類される。1・2・4は、底径が小さく、口縁部が大きく開いている。3は、底径が大きく、口縁部が立ち気味の器形を呈している。口縁部外面がヘラミガキされている。11・14は大型品に属するもので、14は器高が高く、椀状をなしている。16は、口径30cm近くの特小品である。内面はナデ仕上げされている。6～9は、須恵器模倣杯になる。6・9は、比較的忠実に須恵器を模倣しているが、7・8は実物より器高が高めになっている。とくに、8に関しては椀に近い。

図101-12・13は、土師器高杯になる。12は、中実の短脚で、端部はまくれない。13は、有段丸底杯を短脚に乗せており、脚端部を欠いている。脚部は太く、透かしが入らない。

図101-17は、土師器手づくね土器である。半球形を呈しており、粘土塊に指を押し込む方法で、成形が行われている。

図101-18は、器種不明の須恵器片である。外面に沈線があり、刺突が連続的に加えられている。

図102-1・2は、土師器長胴甕になる。1は、やや細長のもので、胴部は膨らみが弱い。2は、胴部中央に膨らみがあり、底部が突出している。どちらも、外面ハケメ調整である。

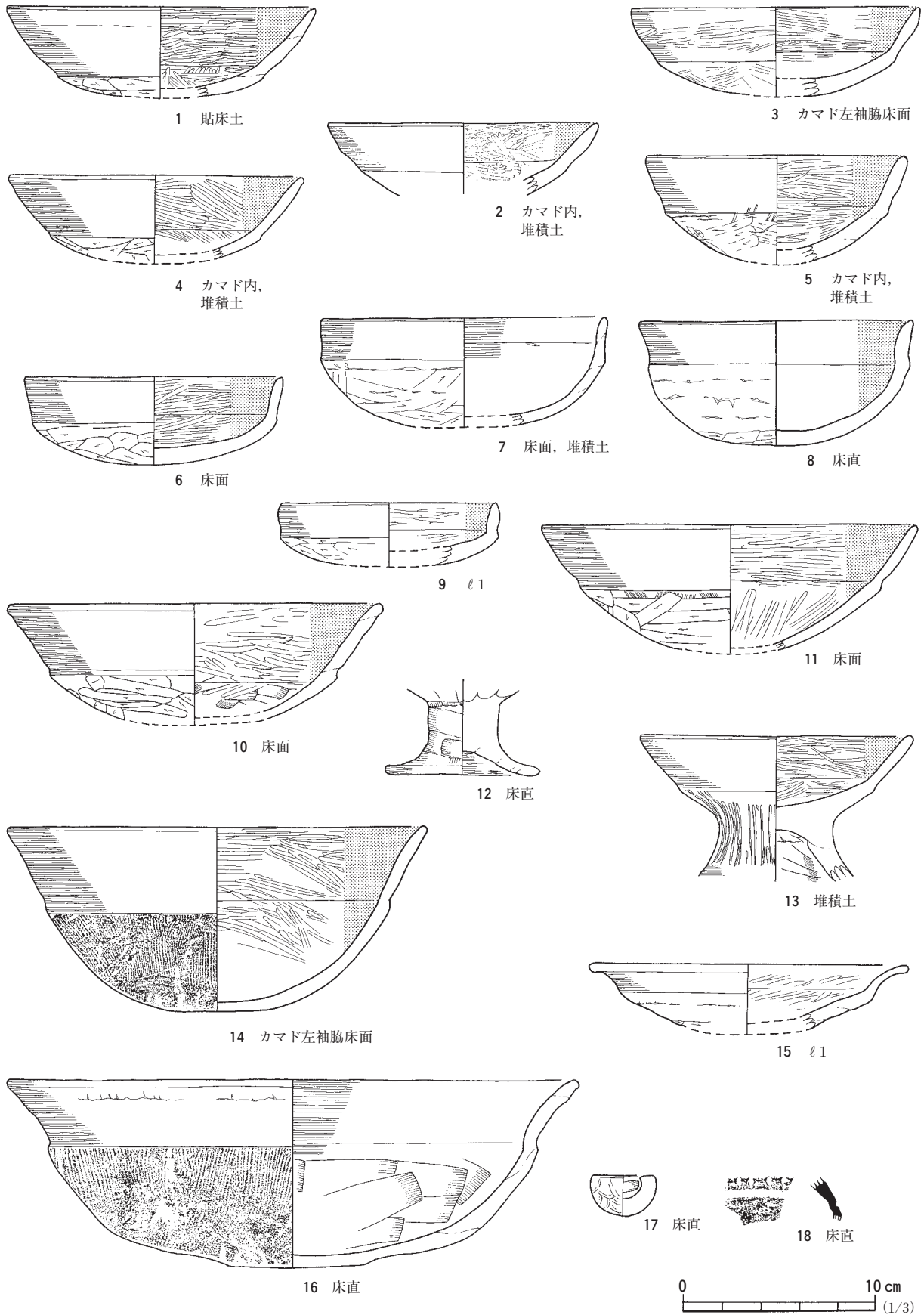


図101 36号住居跡出土遺物 (1)

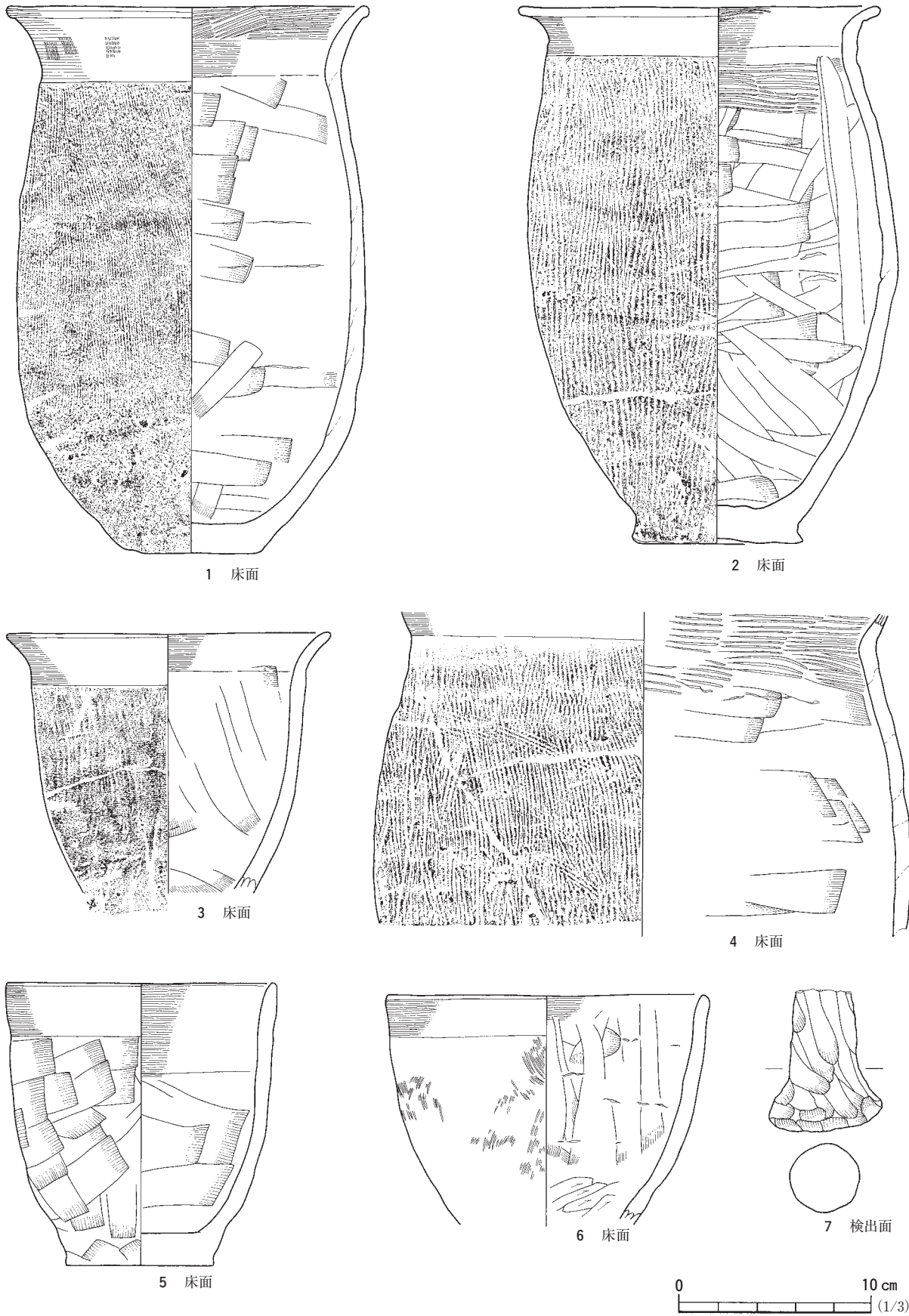


図102 36号住居跡出土遺物（2）

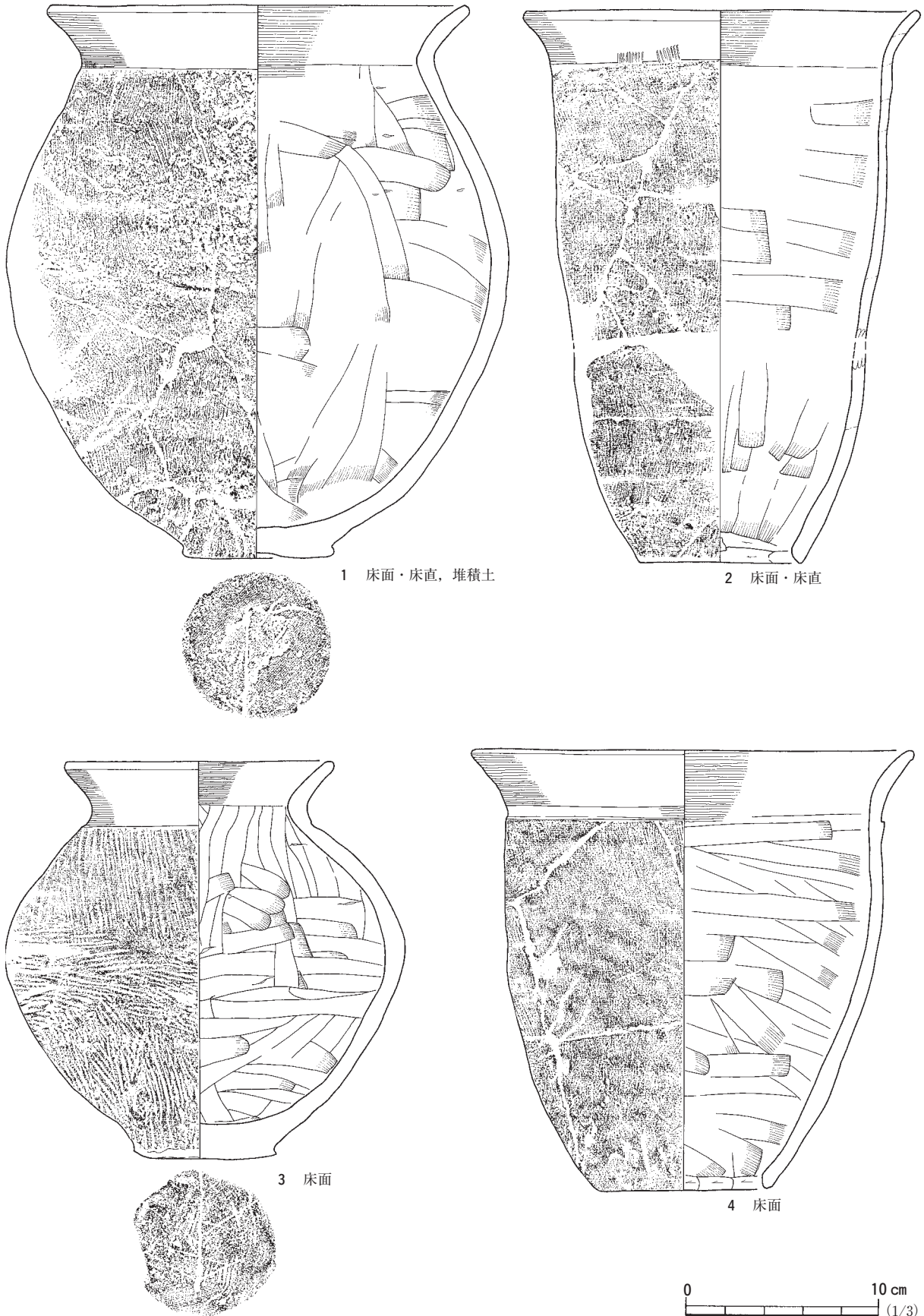


図103 36号住居跡出土遺物 (3)

図102-3・5・6は、土師器小型甕に分類される。3は、口縁部が外反し、胴部下半が窄まっている。5は、頸部が括れず、胴部中央から口縁端部まで、そのまま直立して立ち上がる。6は、全体が下に向かって窄まる形態を呈するもので、頸部が括れていない。外面の器面調整は、3・6がハケメ、5がナデである。

図102-4は、特大の土師器広口球胴甕であろうか。胴部は、やや細長の形態になると推定される。外面はハケメ調整されている。

図102-7は、土製支脚になる。甕に接した部分が欠損している。

図103-1・3は、土師器球胴甕に分類される。1は大型品であり、広口につくられている。3は、玉葱状の胴部を有するもので、頸部が締まっている。2点とも、外面はハケメ調整されている。

図103-2・4は、大型の土師器甕になる。2は、当該器種としては、かなり細長の胴部を呈している。4は、通有の胴部上半の張った器形のものである。どちらも、外面はハケメ調整されている。

ま と め

本遺構は、自然堤防の東緩斜面に営まれた竪穴住居跡である。床面で、豊富な遺物が出土した。しかし、遺構の検出状態に問題があり、それらすべてを共伴遺物と見なすわけにはいかない。

それでも、確実な資料の内容から、本住居跡が営まれた時期は、栗圀式期と考えることができる。

(佐藤)

37号住居跡 S I 37

遺 構 (図104・105, 写真103・104)

本住居跡は、N21グリッドの南寄りにおいて検出された。内部施設として、カマド1基とピット2個を持つ。

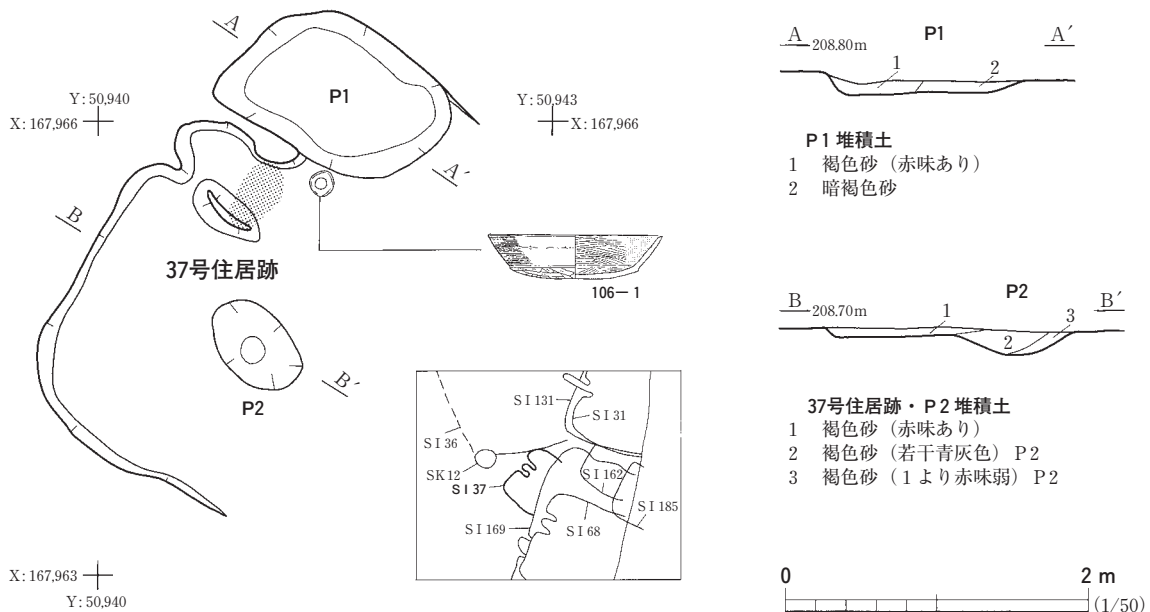


図104 37号住居跡

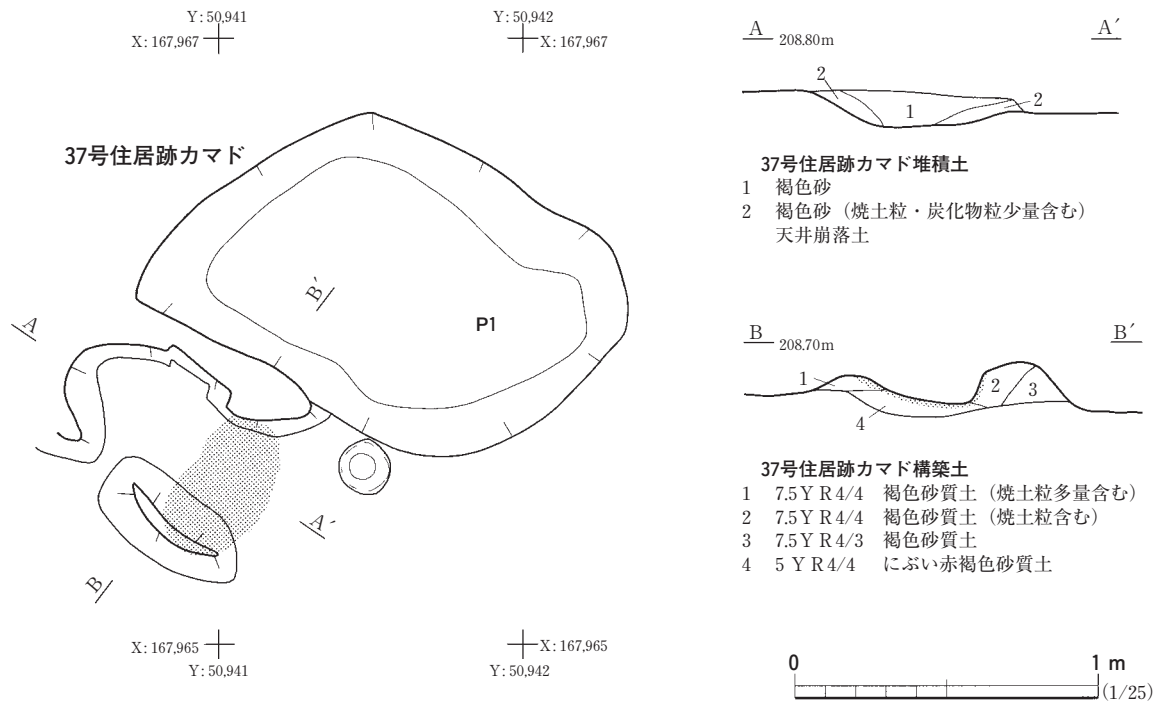


図105 37号住居跡カマド

本住居跡は、東側で169号住居跡と重複しており、それよりも新しい。また、北側で36号住居跡とわずかに接しているが、新旧関係は不明である。

本住居跡は、検出時に東側半分を削平してしまった。そのため、遺構内堆積土は、西周壁付近の1層しか確認できていない。堆積過程は不明であるが、後述するP 2が自然埋没した状態を示していることから、竪穴全体も自然に埋没した可能性が考えられる。

住居跡の平面形は、遺存部分から、方形を呈していたと推測できる。方位との関係を西周壁で見ると、真北から30°ほど東へ傾いている。遺存部の規模は、南北軸3.3m、東西軸は1.9m以上を測る。

検出面から床面までの深さは、比較的遺存状態の良い西周壁側で、6～9cmを測る。そして、東へ行くにつれて浅くなっている。また、周壁の立ち上がりは、全体に緩やかである。

床面は、ほぼ平坦で、東に向かってわずかにレベルが上っている。

住居跡内施設としてカマド1基、ピット2個を検出した。カマドは、西周壁中央のやや北寄りに位置し、褐色砂質土で構築されている。遺存状態は良くない。左袖は、壊された部分を補って考えると、80cmほど住居内に張り出していたとみられる。右袖は、北半分を壊されているものの、住居内に70cmほど張り出していたのが確認できる。

この両袖によって確保された燃焼部の規模は、焚口幅約32cm、奥行き70cm以上を測る。焚口底面から遺存する袖上面までの高さは、最大12cmである。燃焼部底面から袖の内側にかけて、焼土化した部分が認められる。

カマド内堆積土は2層に区分した。②は、焼土粒を含むことから、天井崩落土と考えられる。

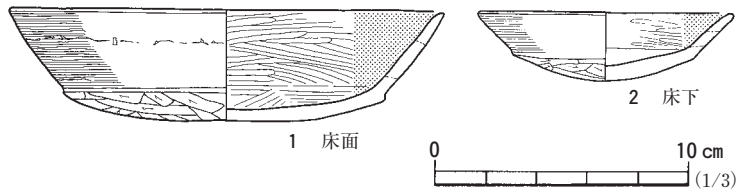


図106 37号住居跡出土遺物

ℓ 1 は、天井崩落後に堆積した土と考えられ、自然堆積の可能性が高いと思われる。煙道は、確認できなかった。

P 1 は、カマド脇に位置しており、貯蔵穴の可能性が考えられる。平面形は、若干歪んだ隅丸方形を呈しており、長辺132cm、短辺94cmの大きさを測る。床面からの深さは、4～16cmである。底面は、床面と同様に、東に向かってわずかにレベルが上っている。堆積土は2層に分層され、どちらも自然流入土と判断した。なお、このピットのℓ 1 は、住居跡内堆積土ℓ 1 に類似している。

P 2 は、カマド左袖から南へ約40cmのところに位置している。長径68cm、短径44cmの楕円形を呈する。床面からの深さは、最大15cmで、堆積土は2層に分層される。自然流入状態を示している。

遺物 (図106, 写真525)

遺物は、土師器片82点が出土した。図示遺物は2点ある。カマド手前の床面から出土した図106-1が、遺構に共伴している。

図106-1・2は、土師器杯である。1は、底径の大きめな有段丸底杯に分類される。口縁部は外傾している。2は、口径10cmあまりの小型品である。同じく有段丸底杯になる。底径が小さく、口縁部が大きく開く。

まとめ

本住居跡は、カマドの設置された西半分だけ検出され、遺存状態は良くなかった。規模は小型である。

営まれた時期は、床面の遺物から、栗圀式期に位置付けられる。 (菅原)

38号住居跡 S I 38

遺構 (図107, 写真105~107)

本遺構はN21グリッドに位置し、23・33号住居跡の下層において検出された。また、本遺構のさらに下層から、53号住居跡が検出されている。調査区中央の最も住居跡の集中する区域に位置しており、2号溝跡が北側13mに位置している。

住居跡の平面形は、北周壁がほとんど検出されなかったものの、残存する周壁から四隅の角張った正方形を呈していたと考えられる。規模は、東西4.9m、南北5.2mである。住居跡と方位との関係は、発掘基準線北に対して28°東に傾く。周壁は急角度で立上がり、検出面から床面までの深さは、東周壁で最大21cmである。床面は掘形底面をそのまま利用した直床である。

堆積土は、2層に分層される。2層とも締まりの弱い褐色の砂質土で、自然堆積土である。

住居跡内施設は、カマド1基とピット1個を検出した。カマドは北周壁中央に取り付いている。遺存状態は悪く、袖の痕跡が一部残っているのみである。底面は、直径55cm程の円形に焼土化して

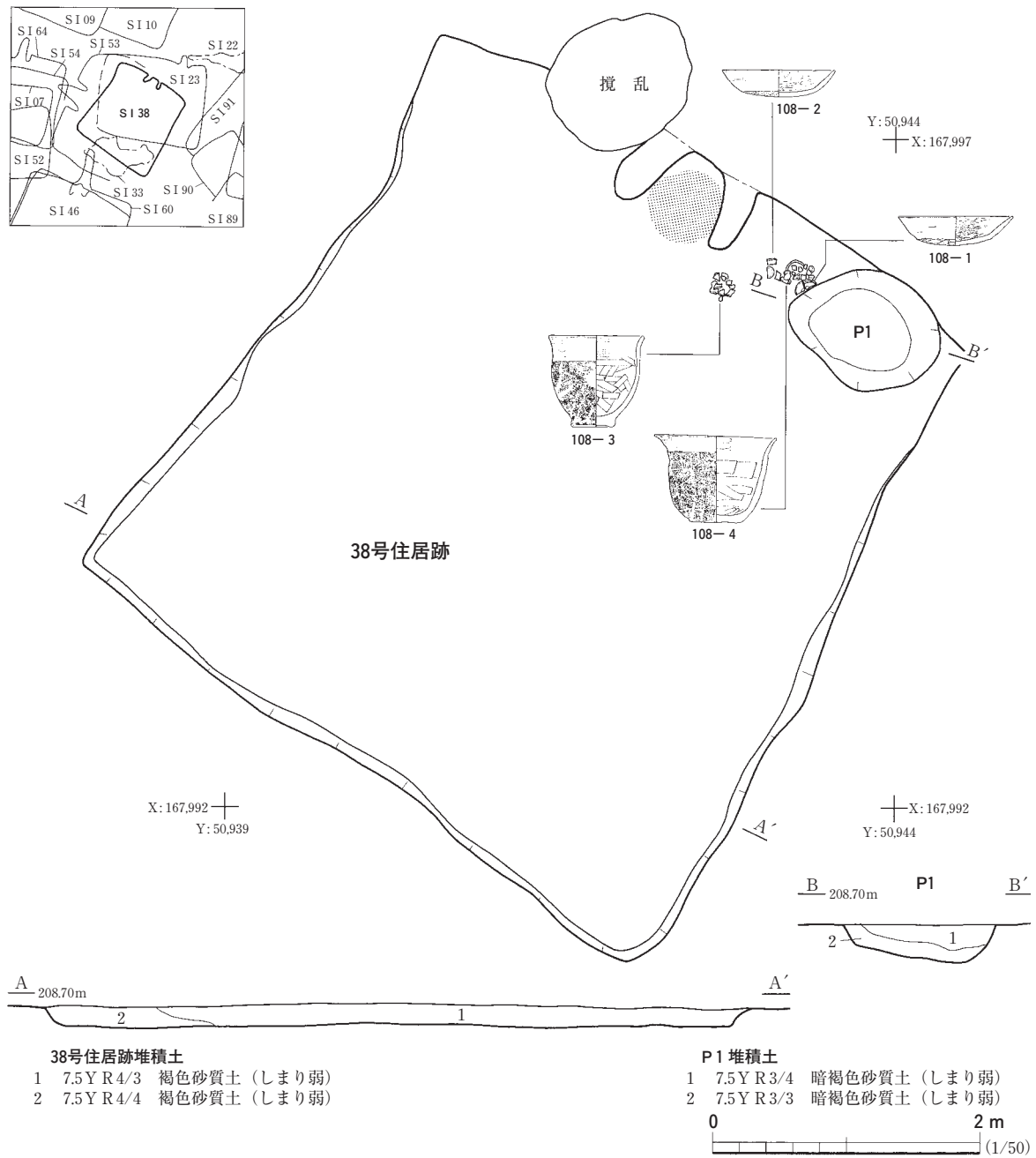


図107 38号住居跡

いた。煙道は完全に失われ、堆積土も確認できなかった。

住居跡北東隅で、P1が検出されている。長径1.2mの不整楕円形をなすもので、床面からの深さは30cmである。位置的にみて、貯蔵穴と判断している。堆積土は2層からなり、いずれも締まりの弱い暗褐色の砂質土である。自然堆積土と考えている。

遺物 (図108, 写真525)

遺物は、土師器片161点が出土した。図示遺物の4点は、カマド右脇に集中していたもので、遺構に伴っている。

図108-1・2は、有段丸底の土師器杯である。1は、段がしっかりしており、外面は稜を形成し

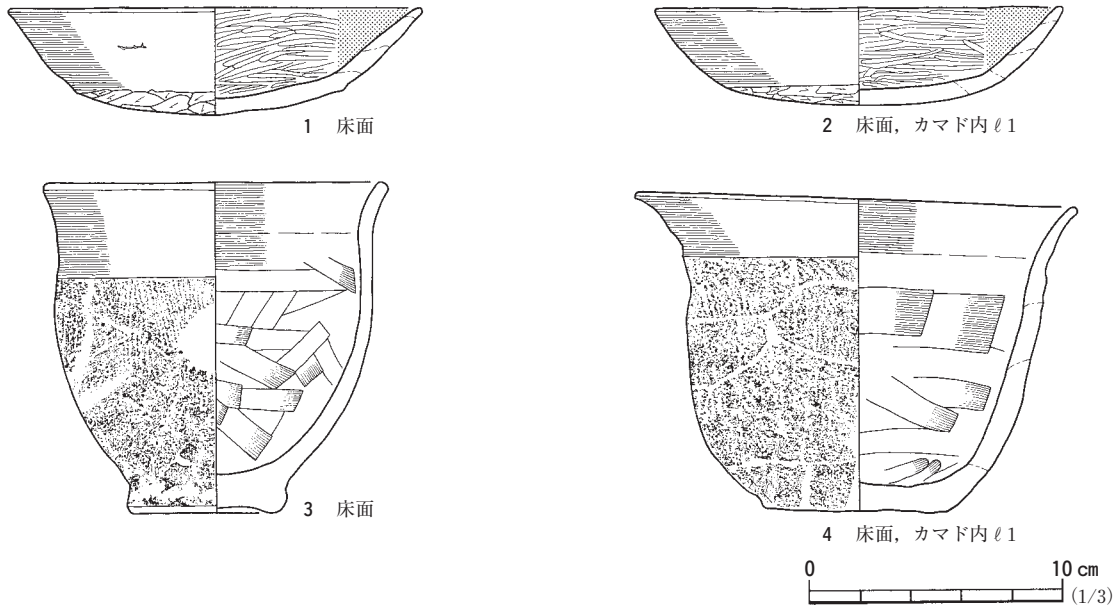


図108 38号住居跡出土遺物

ている。2は、無段に近く、口縁部と底部の境は、丸みがある。

図108-3・4は、小型の土師器甕である。3は口径が大きく、胴部上半が膨らんで、下半が強く窄まる器形を呈している。口縁部は、緩く外反している。底部は突出しており、上げ底状をなす。4は、口径が大きく、胴部が膨らまないで、そのまま底部にいたる器形を呈している。以上の2点は、外面ハケメ調整で共通する。

ま と め

本住居跡からは、カマドと貯蔵穴と思われるピットを確認した。カマドは北周壁に取り付き、北東隅には、貯蔵穴がつくられていた。貯蔵穴の脇からは、土器が一括で出土している。柱穴は検出されず、上屋の状態を知ることはできなかった。

本住居跡の所属時期は、出土土器から考えて、栗圀式期に位置付けられる。 (高久田)

39号住居跡 S I 39

遺 構 (図109, 写真108・109)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。検出段階で、既に上部削平が著しく進んでおり、遺構内容の詳細は知る事ができなかった。

本住居跡が営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部である。32・41・44・75号住居跡と重複している。新旧関係は、41号住居跡より古く、44・75号住居跡より新しいことが判明している。

堆積土は、にぶい黄橙色砂質土の1層である。自然堆積か人為堆積であるかについては、分からなかった。

床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。踏み締めりは認められない。

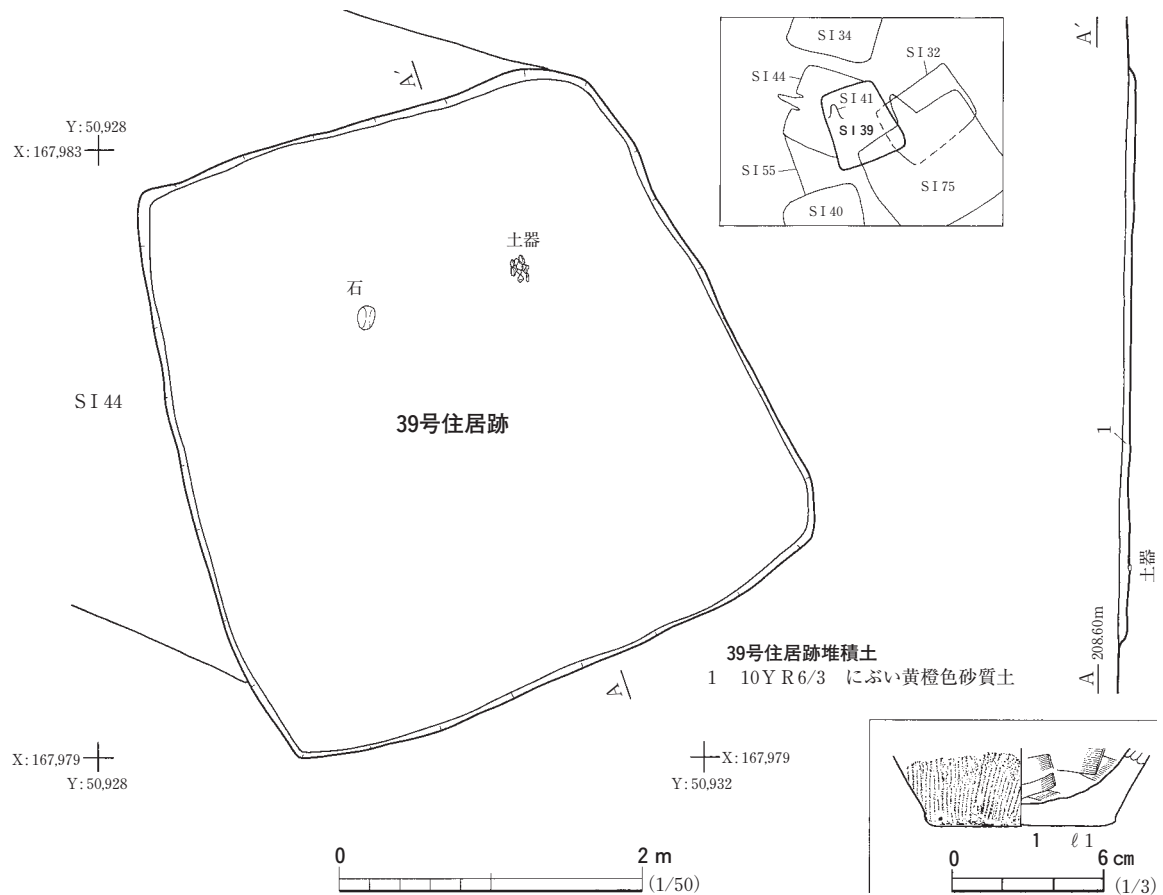


図109 39号住居跡・出土遺物

床面と検出面の比高差は、4～6cmを測る。

本住居跡の平面プランは、正方形基調を呈している。ただし、向かい合う周壁の長さが一致せず、台形気味となっている。

規模は、東西3.9m、南北3.7mを測り、比較的小型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に70°振れている。

カマドは検出されなかった。ただ、南周壁ぎわで、焼土の分布が認められたので、これがその痕跡であったのかもしれない。しかし、確証は得られなかった。

ピット類は検出されていない。

遺物 (図109)

遺物は、土師器片30点が出土した。

図109-1は、土師器甕の破片資料である。ℓ1から出土したもので、遺構に伴う遺物ではない。胴部外面は、ハケメ調整されている。

まとめ

本遺構は、自然堤防の西斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。遺存状態に恵まれず、良好な共伴遺物も出土しなかった。

本住居跡が営まれたのは、重複遺構から、栗圀式期に上限が求められる。(菅原)

40号住居跡 S I 40

遺 構 (図110, 写真110~113)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。自然堤防の中央平坦面に営まれており、周囲には数多くの住居跡が分布している。本住居跡は、45・48・55号住居跡と重複し、それらのどれよりも新しい。

堆積土は、暗褐色砂質土が1層みられた。自然堆積土と考えている。床面は、部分的にしか貼床が施されず、あとは下層住居跡の堆積土上面がそのまま平坦に整えられている。このため、断面図には、貼床は示されていない。踏み締まりは、認められなかった。

本住居跡の平面プランは、整った正方形を呈しており、向かい合う周壁どうしの長さが一致する。規模は、東西4.1m、南北4.0mを測り、中型である。方向は、阿武隈川を背にする方を西周壁とみると、発掘基準線に対して、東に74°振れている。この傾きは、本遺跡の住居跡の中で、異質である。

カマドは、西壁中央で検出された。煙道部は失われており、燃焼部だけ残っていた。袖は、周壁から約70cm住居跡内側に伸びている。底面は良く焼けており、断ち割ったところ、10cmの厚さで酸化していた。

遺 物 (図111・112, 写真526)

遺物は、土師器片209点、石製品3点が出土した。図示遺物は、12点ある。

図111-1・2は、土師器杯である。1は、関東地方からの搬入品とみられる。形態は、須恵器杯身模倣であり、口縁部が内傾する。胎土は、緻密で夾雑物を含まず、白っぽい色調を呈している。内面はナデ調整され、黒漆を塗布して内外面が仕上げられている。この資料は、貼床中で出土した破片である。住居跡に伴うものではないと考えている。2は、床面出土で、有段丸底の形態を呈している。口径20cmを越える大型品である。

図111-3・4・9は、小型の土師器甕で、床面・カマド底面から出土した。3と4は、口縁部の立ち上がりに違いがみられる。前者は外反するのに対し、後者は外傾する。9は、底部側しか残っていない。

図111-5・6は、中～大型の土師器甕になる。5は、上半部を欠いており、器形全体の特徴は知ることができない。外面は、ハケメ調整である。6は、広口で、胴部が球形に近い形態を呈する。外面にハケメ調整痕が観察される。

図111-8は、ミニチュアの土師器球胴甕である。貼床中で出土した。口縁部を欠く。

図112-1～3は、貼床出土の紡錘車である。1は、孔が2つあり、失敗品と考えられる。3は、未成品と考えられるものである。

ま と め

本遺構は、自然堤防の中央平坦面に営まれた竪穴住居跡である。平面プランは、正方形を呈して

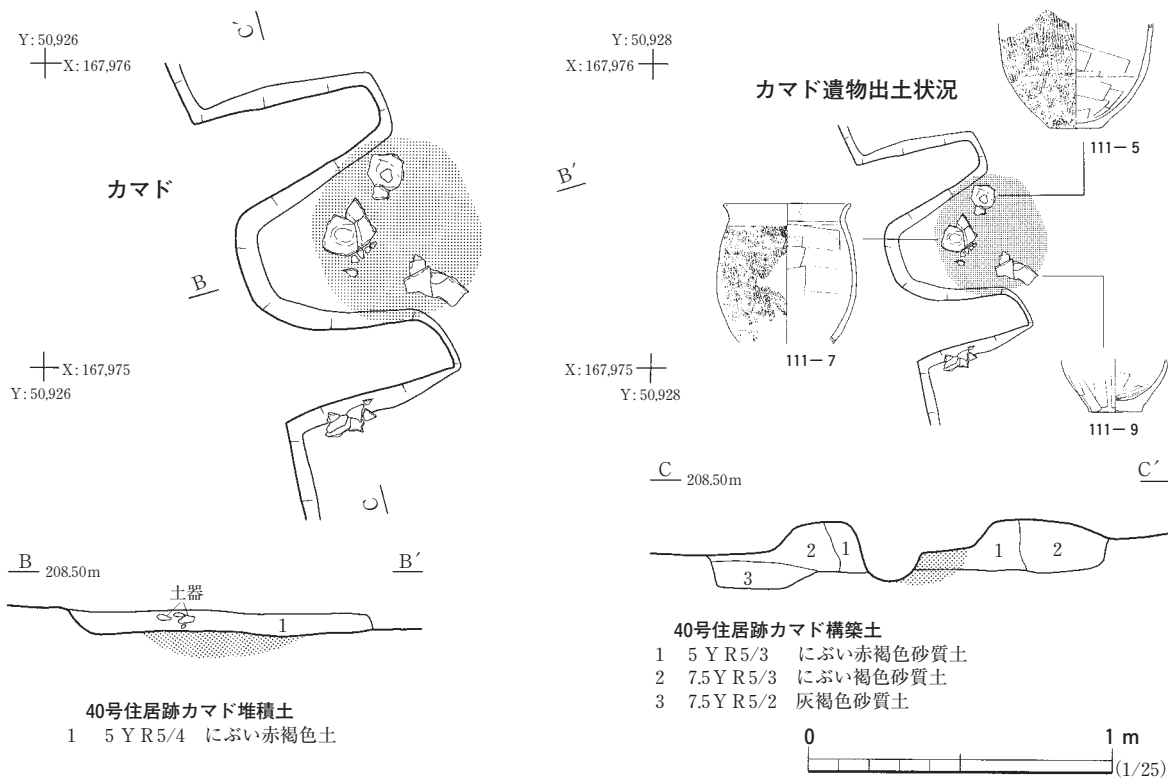
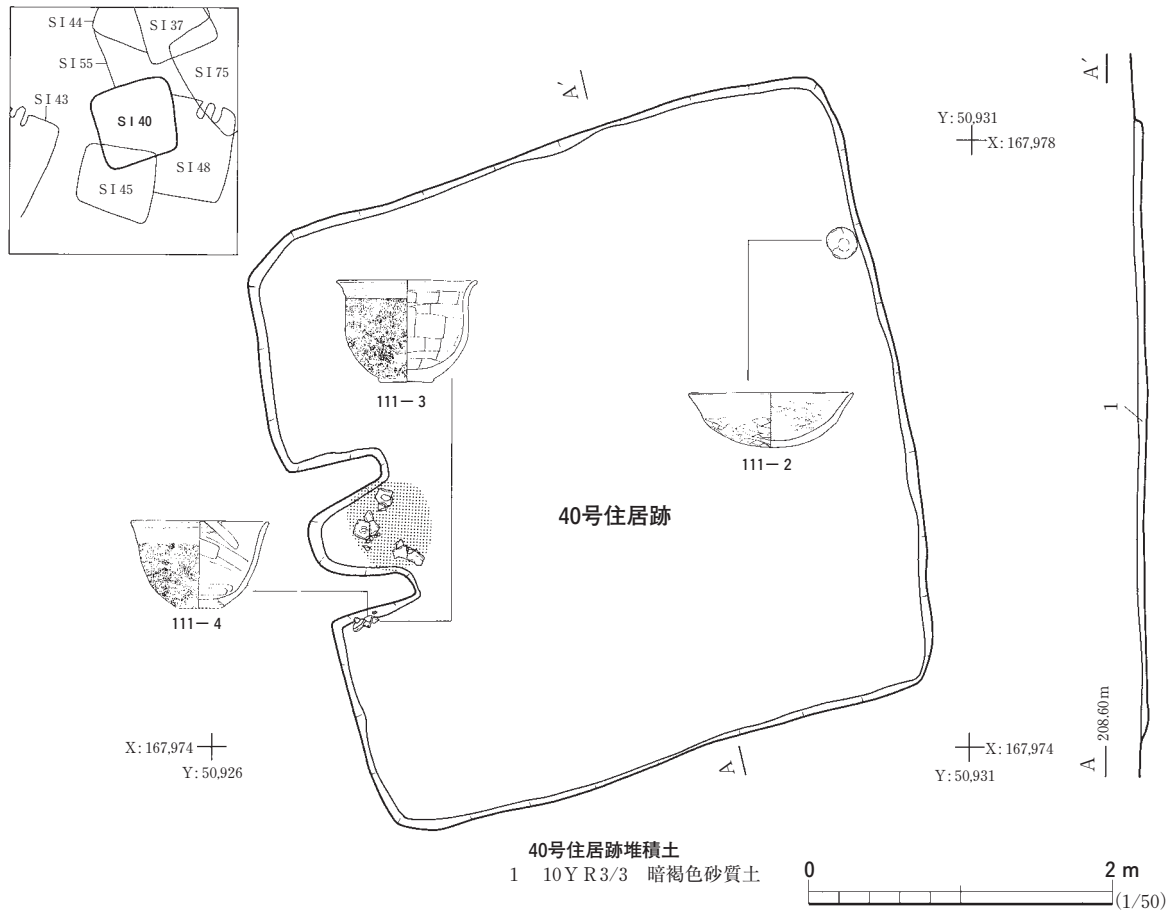


図110 40号住居跡

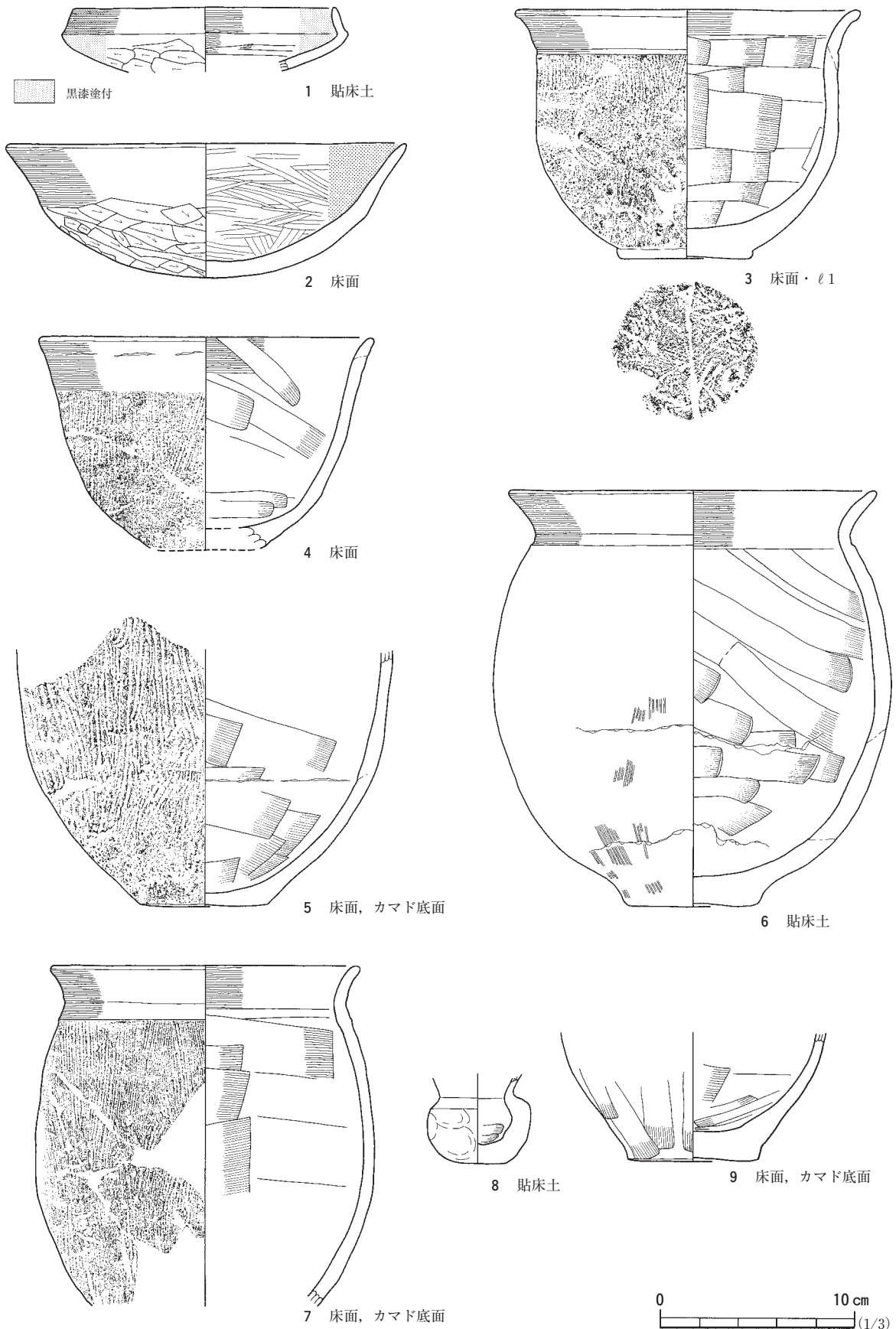


図111 40号住居跡出土遺物 (1)

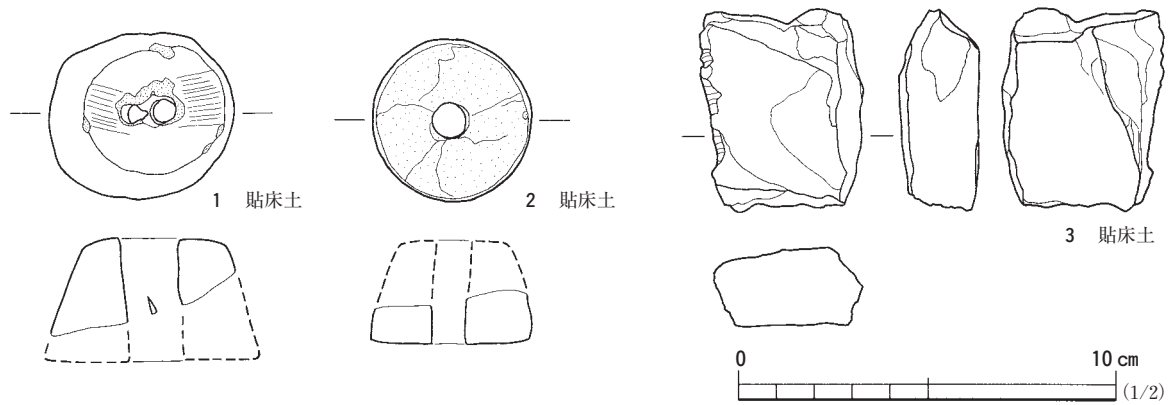


図112 40号住居跡出土遺物 (2)

おり、中型の規模を有する。

本住居跡では、カマド中心に定量の相伴資料が得られた。また、遺構に伴うものではないが、関東産土師器が出土したことも、重要である。

営まれた時期については、遺物の特徴から、栗田式期に位置付けられる。 (菅原)

41号住居跡 S I 41

遺 構 (図113, 写真114)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。

営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部である。周辺には、数多くの住居跡が分布している。

本住居跡は、39号住居跡と重複している。新旧関係は、それよりも新しい。

本住居跡は、遺存状態が非常に悪かった。検出されたのは、カマドだけである。しかも、煙道部は完全に消失しており、燃烧部が一部遺存しているだけであった。このため、遺構内容の詳細についてはほとんど何も判明していない。

遺存していたカマドは、西周壁に設置されていたとみられ、軸線方向は、発掘基準線北に対して、西に少し振れている。底面は、焼土化しており、断面で2 cm前後の厚さがあった。

遺 物 (図114)

遺物は、カマド燃烧部底面で、土師器甕の底部図114-1が出土した。底径からみると、

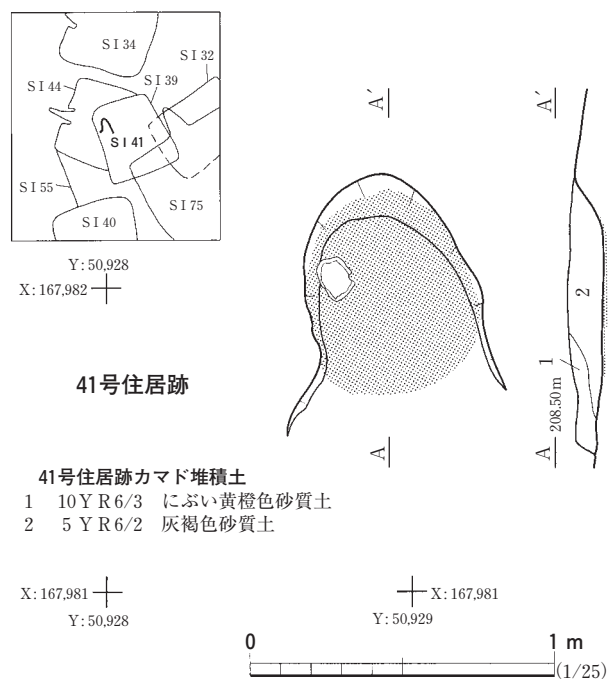


図113 41号住居跡

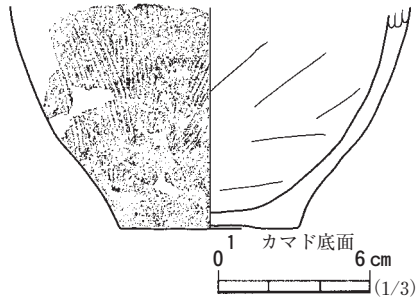


図114 41号住居跡出土遺物

小型品であろうか。外面がハケメ調整されている。

まとめ

本遺構は、自然堤防の中央平坦面に営まれた竪穴住居跡である。カマド燃焼部しか残っておらず、詳細については不明である。

時期は、伴った土師器甕の特徴から、国分寺下層式期～栗圀式期の幅の中で大きく捉えておきたい。(菅原)

42号住居跡 S I 42

遺構 (図115・116, 写真115～117)

本遺構は調査区北部のO20グリッドから検出された竪穴住居跡である。複数の住居跡と重複している。

それぞれの住居跡との関係は、69号住居跡→42号住居跡→50号住居跡→12号住居跡となり、本住居跡は50号住居跡と12号住居跡に破壊されて東周壁側の一部分しか遺存しない。特に平安時代の竪穴住居跡である12号住居跡と本住居跡はほぼ同位置に造られ、主軸の傾きも一致していたため、プラン検出時には12号住居跡として調査を行っている。

本住居跡はカマドの付設する東周壁側の一部しか検出できなかったが、カマド部分はL II中から良好な状態で検出できた。しかし12号住居跡と本住居跡の東周壁がほぼ平行していたため、はじめ12号住居跡のカマドと判断して調査を進めている。

カマド袖部分からは12号住居跡に伴うものと考えられる須恵器の長頸瓶が出土したが、カマド内から出土した遺物と時期が合わなかった。そのため12号住居跡とは別住居跡のカマドと判断して42号住居跡を設定した。

本住居跡のカマドと判断した段階で土層ベルトを設置したところ、12号住居跡の東周壁は立ち上がりらしいものがないが、床面から直立する本住居跡の壁の立ち上がりを確認できた。住居跡内積土は壁際の一部分しか確認できないが、 $\ell 1$ が灰黄褐色砂、 $\ell 2$ が黒褐色砂の2層に分層でき、2段階で堆積した自然堆積と考えられる。

住居跡の大きさは不明であるが、東周壁の遺存する部分で約3.8mを測る。深さは東周壁際で約30cmを測り、床面には貼床等は認められず、L IIIをそのまま使用しているものと思われる。主軸方位はN25°Eである。

カマドは東周壁に付設され、煙道部、煙出しも確認できた。カマドは焚口から煙出しの先端までの長さが約2.2mを測る。焚口の底面はほぼ平坦で、そこから緩やかな傾斜となって煙道部へと繋がっている。また、煙道部の先の煙出しは一段低く掘り窪められている。カマド内堆積土は5層に分層したが、 $\ell 1 \sim 4$ は煙道方向から流れ込んで堆積した自然堆積土と考えられ、燃焼部底面上の堆積土には焼土塊を含み、煙道部と煙出しには黒褐色砂が堆積している。 $\ell 4 \cdot 5$ は焼土塊とともに粘

土塊を含んでいるため、天井崩落土とも考えられる。

カマド袖は壁面から約90cmほど張り出ししており、両袖間の幅は約115cmを測る。燃焼部の底面と側面は赤く焼けている。カマド袖の構築土は焼土塊を含んだ砂であったが、強く締まっていた。煙道部は壁面から直交するようにのびており、長さが約90cm、幅が約20cm前後である。煙出しは長軸約40cm、短軸約30cmの楕円状で、深さは約20cmで底部がやや丸く造られている。煙出しの検出面からは長さが約10cmほどの石がみられたが、1点だけなので煙出し部分を覆っていたものかどうかはわからない。

遺物 (図116, 写真527)

本住居跡から出土した遺物のうち、

図示したものは土師器2点と須恵器1点、土製品1点である。出土遺物の中には、本住居跡とほぼ同位置に築かれた12号住居跡の東周壁が大きく崩れていることもあって、12号住居跡に伴うものと考えられる遺物も混じっている。

図116-1は土師器の甕でロク口調整されており、他の出土遺物と時期が異なることから、12号住居跡に伴うものと考えられる。底部は欠けているが、外面の体部下半には底部方向にヘラケズリが施されており、内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。

図116-2は土師器のミニチュア土器で、小型の球胴甕にみられる器形である。その口頸部にはほぼ対極線上に1対の穿孔が施されている。

図116-3は須恵器の壺とみられる口縁部の細片である。

図116-4は東周壁際の床面から出土した土製の管玉で、ミガキが施され、黒色処理されている。

まとめ

本住居跡は出土遺物と重複する住居跡との関係から栗圀式期のものと考えられる。

本住居跡のカマドは本遺跡で検出された一般的な住居跡とは異なり、カマドが東周壁に付設されている。

また、カマドは住居外に煙道部が長く延びるもので、このようなタイプは本集落の中では比較的古い段階のものにみられる。

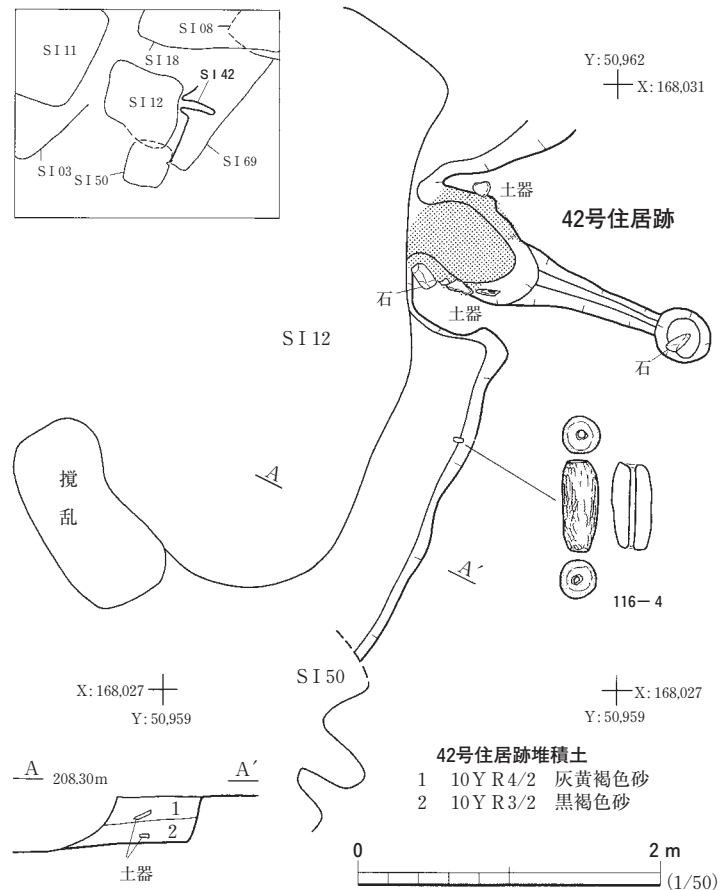


図115 42号住居跡

(大波)

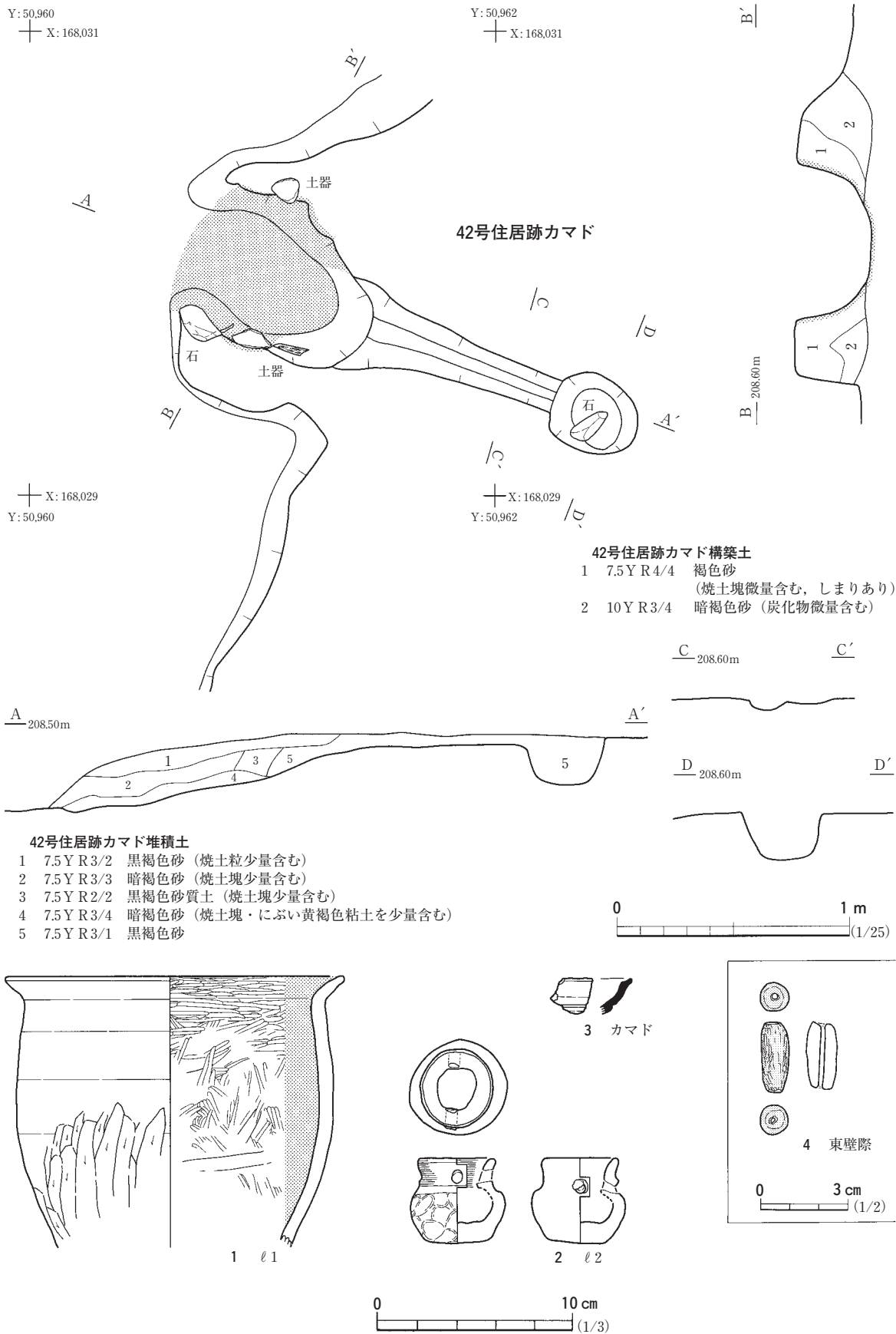


図116 42号住居跡カマド・出土遺物

43号住居跡 S I 43

遺 構 (図117・118, 写真118~121)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。

営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部である。また、南側は浅い谷地形に面しており、このため、南半部の遺存状態が悪く、検出作業を繰り返すうちに周壁は消失してしまっている。

本住居跡は、32号土坑と重複しており、これより新しい。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、南北5.0m以上、東西4.6mを測る。この大きさは、高木遺跡9区の住居跡の中では、中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に20°振れている。

堆積土は、にぶい黄橙色砂質土が1層みられた。確証は得られていないが、断面の様子から、自然堆積土と考えている。

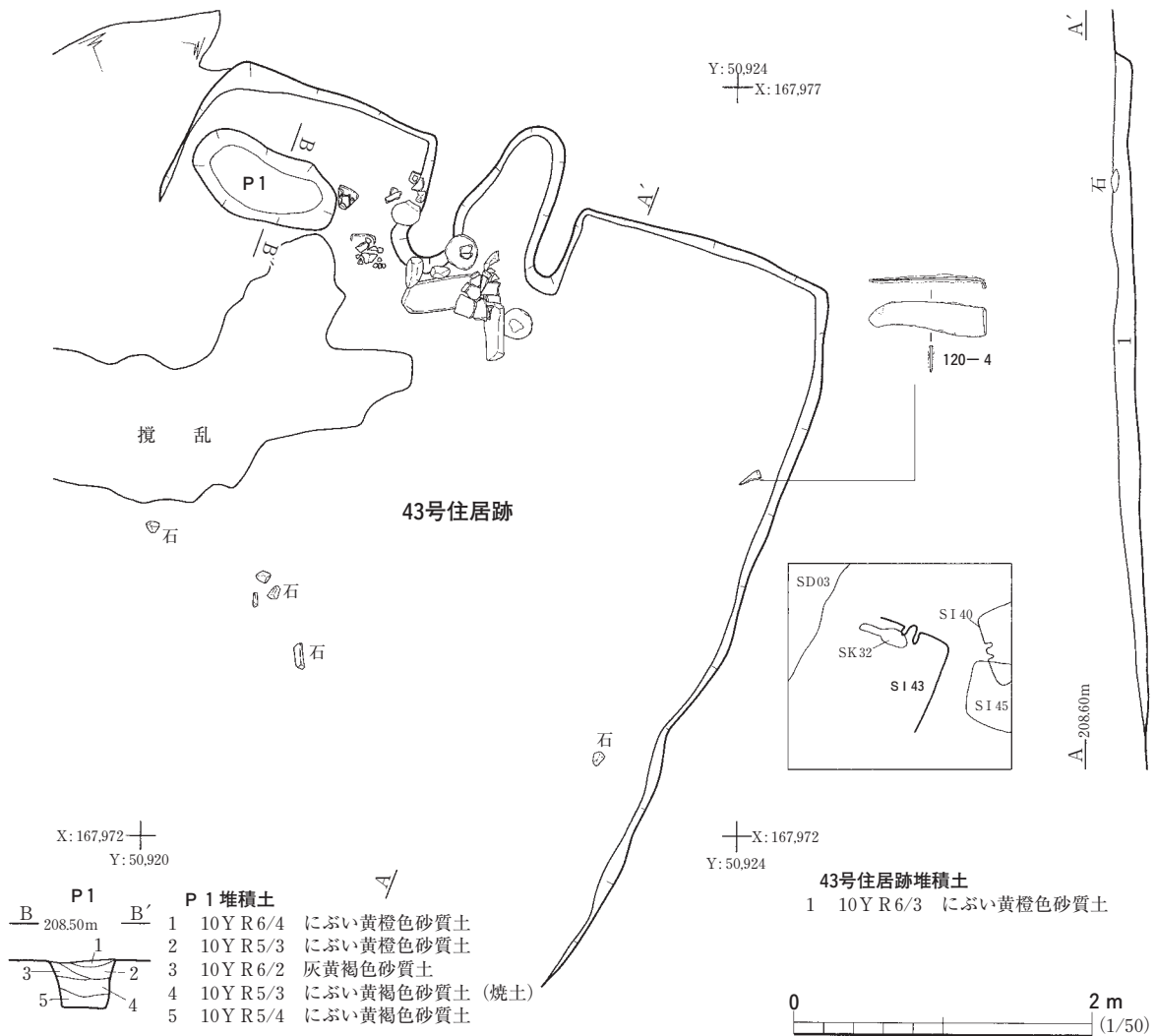


図117 43号住居跡

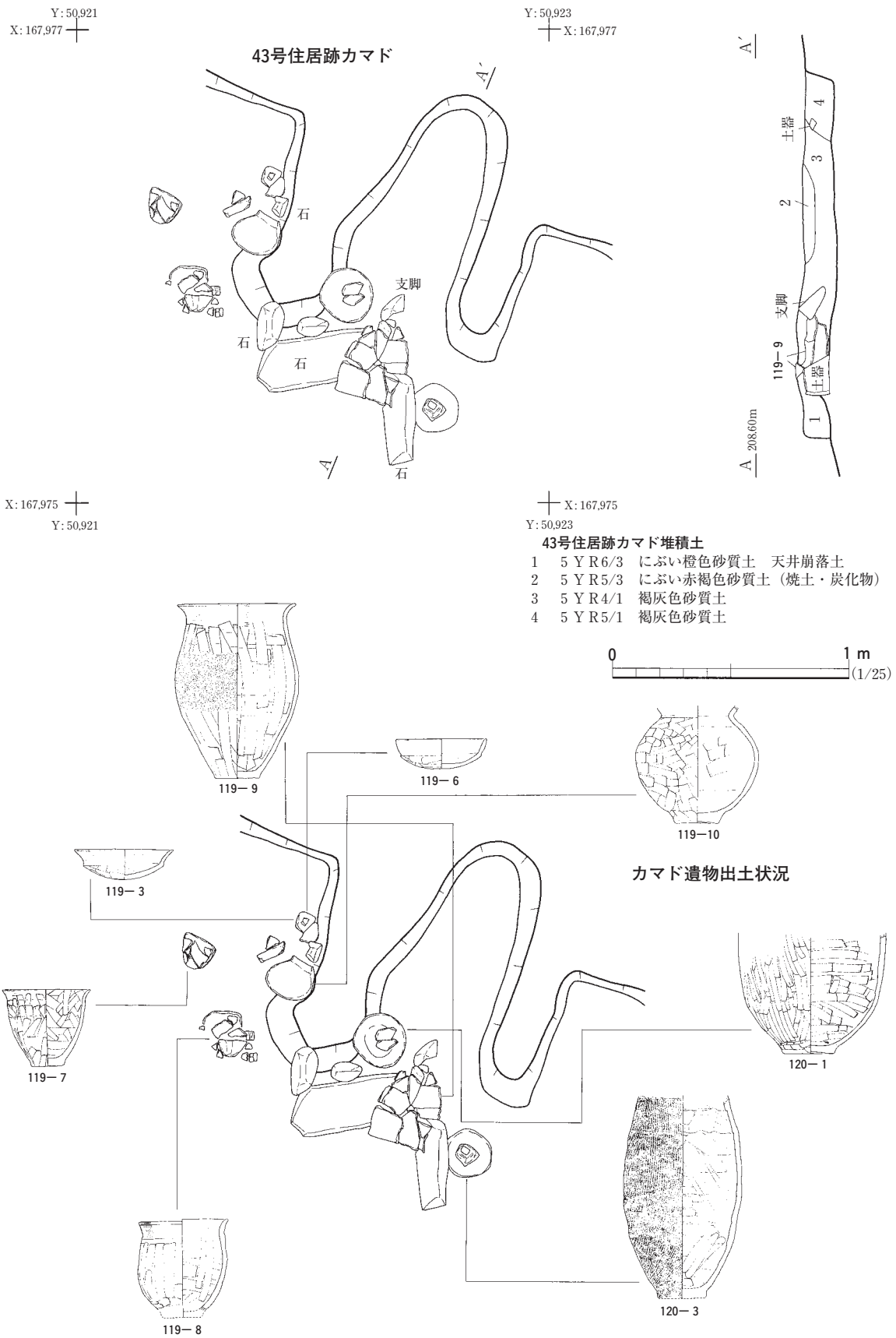


図118 43号住居跡カマド

床面には、貼床が施されていない。掘形底面のLⅢがそのまま平坦に整えられている。とくに、顕著な踏み締まりは認められなかった。床面と検出面の比高差は、残りの良い北周壁で、10～16cmを測る。

カマドは、北周壁中央で検出された。煙道部は失われていたが、燃焼部の残りは、良好であった。検出状況から復元すると、左袖先端が自然石、右袖先端が土師器甕（図120-3）で、それぞれ補強され、さらにその上に、平たい天井石が横架けされていたと推定される。天井石の上に、土師器甕（図119-9）が横転しており、廃絶時の状況をよくとどめていた。また、支脚は、天井部が崩れた際に原位置から動いたと推定される。床面から少し浮いた状態で出土した。棒状を呈する自然石である。

遺物（図119・120，写真527・528）

本住居跡では、土師器片497点、須恵器片1点、石製品3点、鉄製品1点が出土した。図示遺物は、17点あり、カマド周辺に分布が集中している。なかでも、カマド前面には、石製紡錘車の未成品3点が1か所に寄せ集められた状態で出土しており、注目される。

図119-1～6は、有段丸底の土師器杯である。それらは、口縁部形態の特徴から、1・3と、2・4～6の2つに分けることができる。前者は口縁部が外反し、後者は内湾するもので、さらに、この2つのタイプは、口縁部の調整技術にも明確な違いが指摘される。外反タイプは、ヨコナデされるのに対し、内湾タイプは、6を除く3点がヘラミガキされている。

図119-7・8は、土師器小型甕である。どちらも、カマド左脇床面に横転していた。外面はナデ調整される。7は、口径が胴部最大径を上回り、底部に向かって窄まる。8は、胴部最大径が口径を上回り、中膨らみである。また、器面に煮炊痕跡が明瞭に残る。

図119-9、図120-1・3は、土師器長胴甕である。図119-9は、カマド天井石の上に倒れていた完形品である。胴部外面には、懸け口に固定されていたことを示す粘土の付着が、観察される。器形は、胴部中位に最大径があり、下半が強く窄まっている。胴部外面は、ナデ調整される。図120-1も、出土位置からみて、カマドに固定されていたと推定される。正立状態で出土しており、上部が欠損している。胴部外面は、ナデ調整されている。図120-3は、カマドの右袖補強材に使用され、倒立していた。口縁部は、転用の際に割られている。胴部は細長く、最大径が中位にあって、均整がとれている。胴部外面は、ハケメ調整されている。

図119-10は、土師器球胴甕である。カマド左袖に寄り掛かって出土した。外面は、ナデ調整されている。

図120-2は、須恵器甕の口縁部片になる。ℓ1から出土している。沈線で区画された中に、波状文が描かれている。

図120-5～7は、石製紡錘車の未成品である。5→7→6の順に作業工程が進んでいる。これらは、カマド前の床面にかたまっており、故意に置かれた状況を示していた。

図120-4は、鉄鎌である。北東隅の床面で出土した。遺存状態は良い。

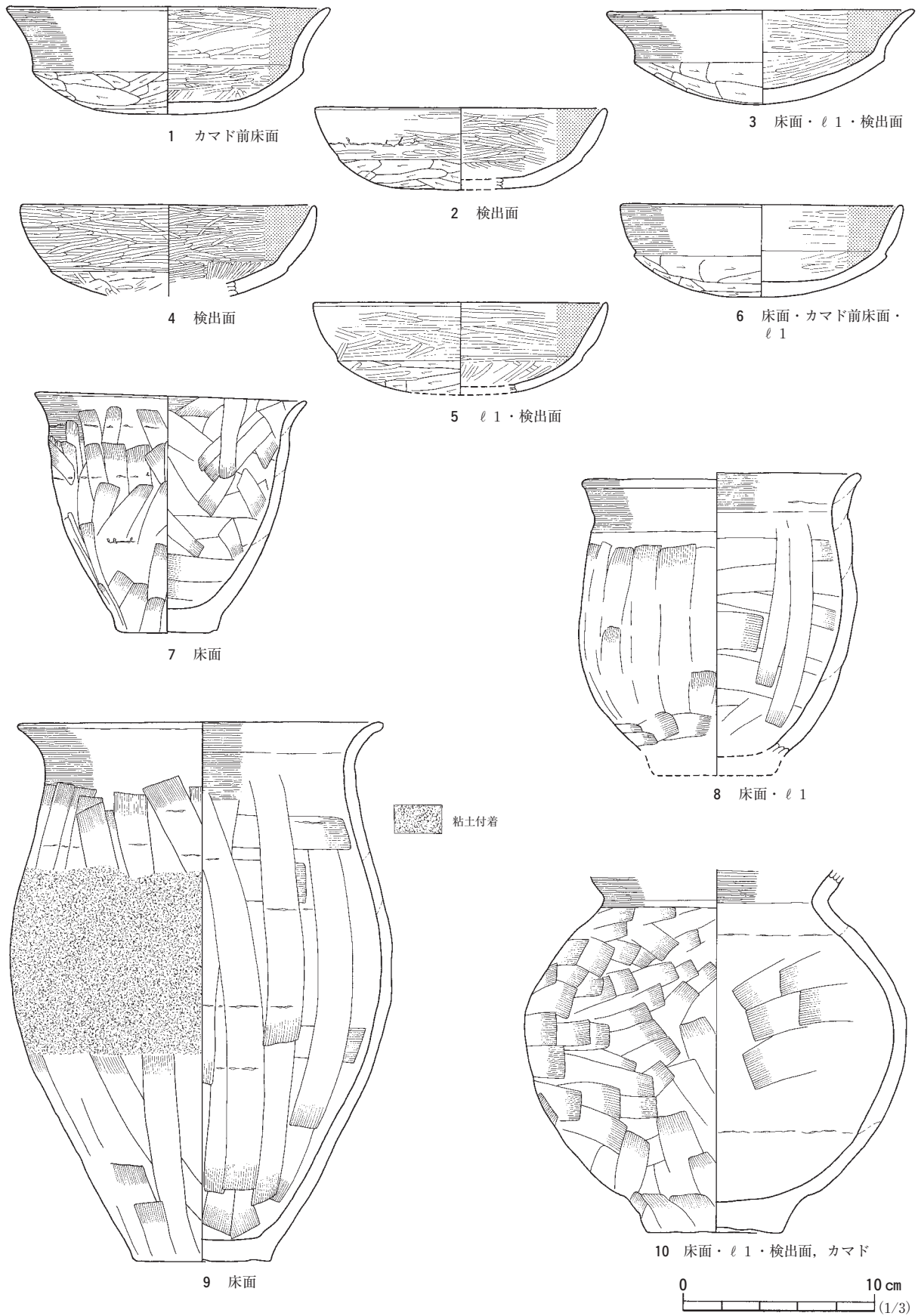


図119 43号住居跡出土遺物（1）

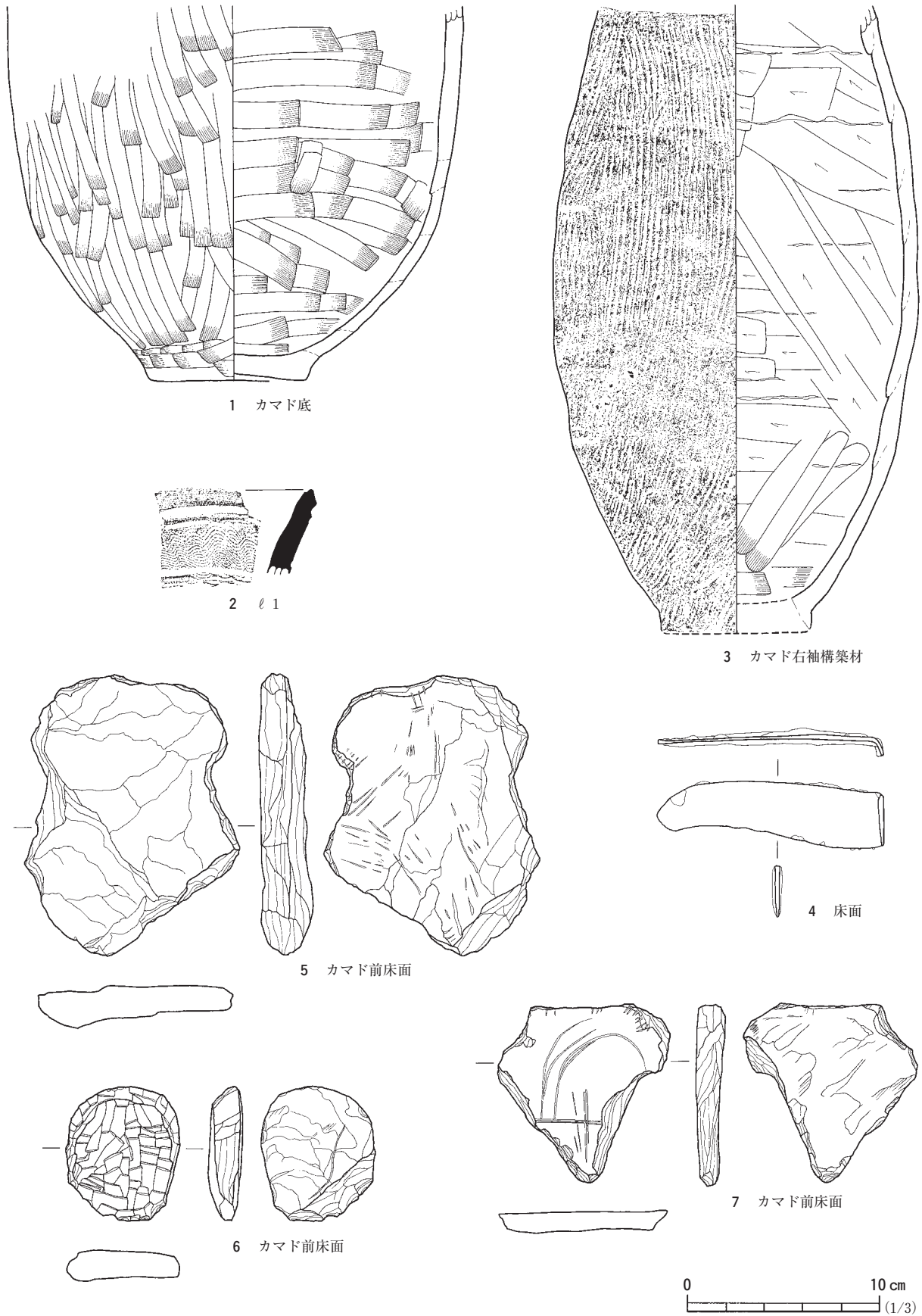


図120 43号住居跡出土遺物 (2)

ま と め

本遺構は、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。

カマドは、袖先端が土師器甕と自然石で補強され、さらに、天井部が平たい自然石で構築されていることが判明した。

遺物は、カマド周辺で良好な一括資料が出土している。有段丸底の土師器杯には2つのタイプがみられ、石製紡錘車の未成品が集中して出土するなど、興味深い知見が得られた。

時期はとりあえず、7世紀中心の栗圀式期で捉えておく。詳細は、第3編で検討することにした。
(菅原)

44号住居跡 S I 44

遺 構 (図121・122, 写真122~125)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。

営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部である。周囲には、数多くの住居跡が高い密度で分布している。この中で、本住居跡の重複関係は、39・41号住居跡に切られ、55号住居跡を切っている。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。ただ、全体の形状は、東周壁が39号住居跡に壊されているため、知ることができない。検出された範囲でみると、各コーナーは角張って、周壁が直線的に伸びており、整っている。

規模は、南北4.2m、東西4.0m以上を測り、高木遺跡では中型の部類に属する。方向は、発掘基準線北に対して、東に19°振れている。

堆積土は、暗褐色砂質土が1層認められた。確証は得られていないが、断面の様子から、自然堆積土と考えている。

床面は、ほとんど貼床が施されず、掘形底面のLⅢがそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み締まりは認められなかった。床面と検出面の比高差は、残りの良い北周壁で、5~7cmを測る。

本住居跡のカマドは、西周壁中央で検出された。煙道部は、周壁から1.0mの長さを有しており、細長く住居外に伸びている。燃焼部の規模は、袖長60cm、焚口幅45cmを測る。底面には、2本の自然石を横に並べた支脚が据えられていた。こうした事例は、142号住居跡でも検出されている。外山政子らの研究成果に従えば、甕は横並び2つ掛けされていたと考えられる。

底面は良く焼けており、断ち割りしたところ、最大5cmの厚さで酸化していた。

ピット類は検出されていない。

遺 物 (図123, 写真529・530)

遺物は、土師器片238点、土製品1点が出土した。図示遺物は、8点ある。

それらの分布は、カマドの設置された西周壁側に集中している。とくに、図123-3~5・7の4

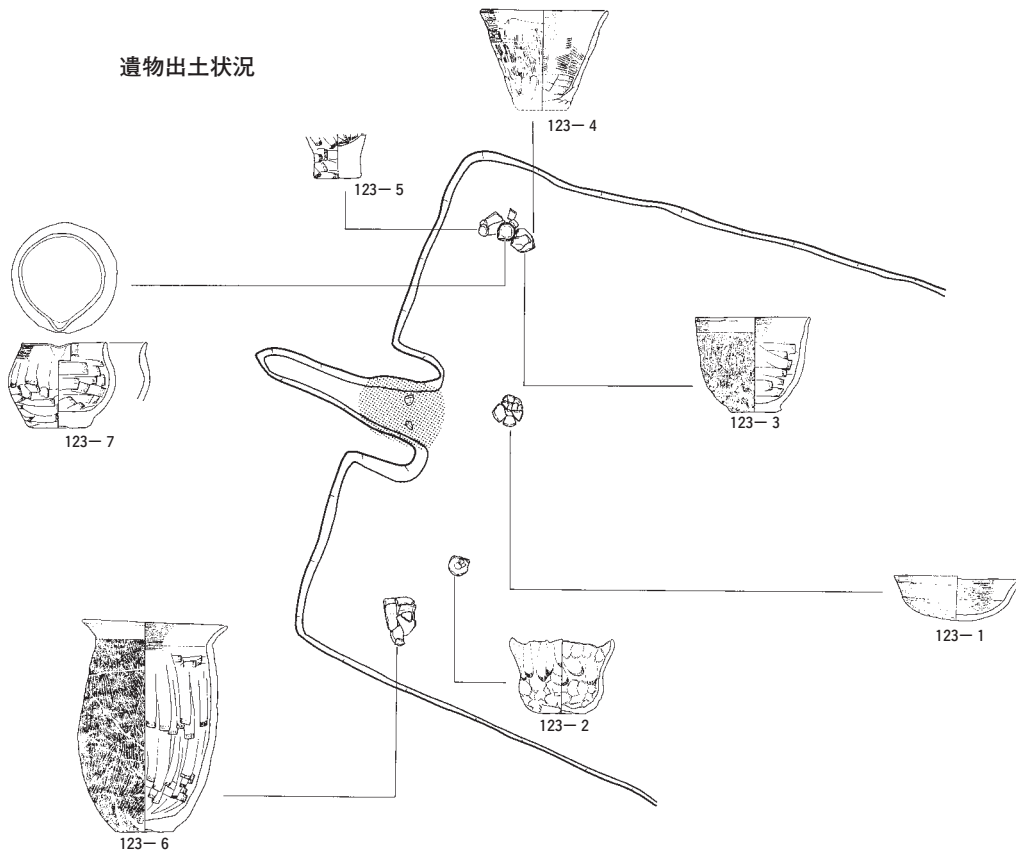
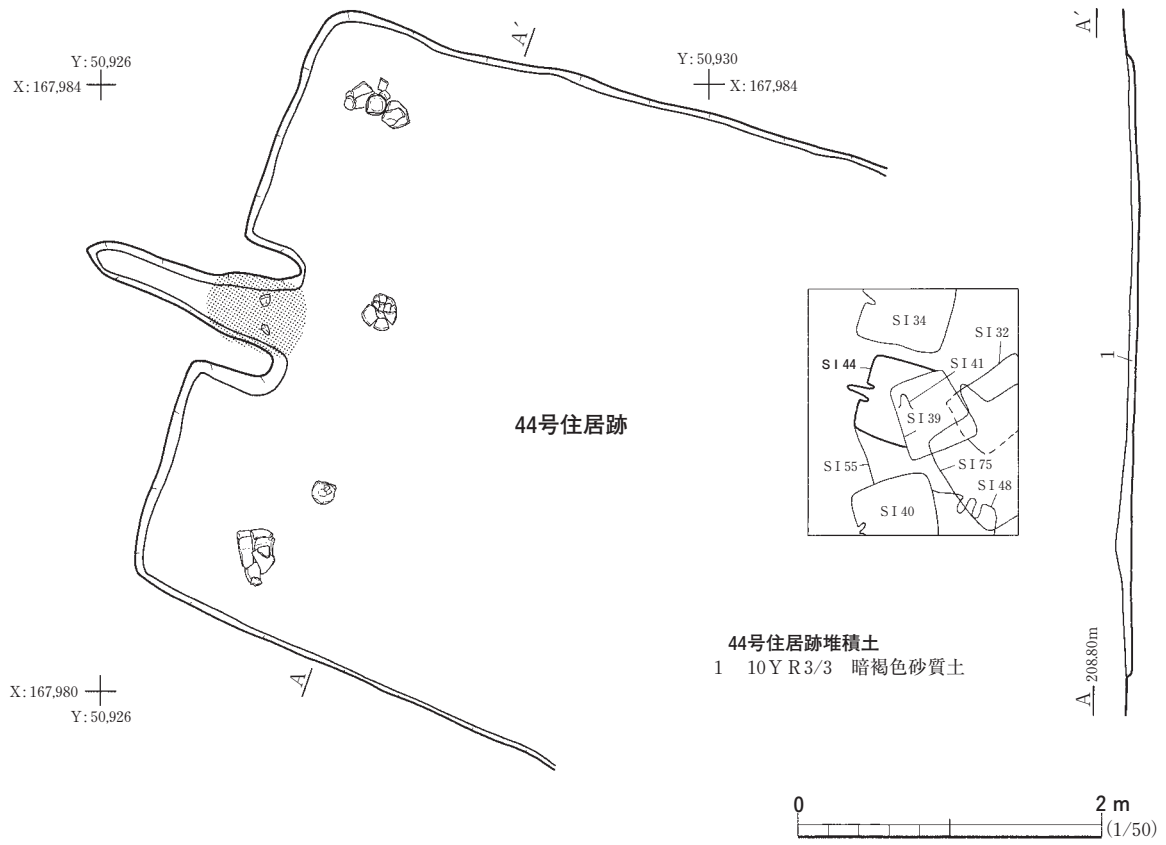


図121 44号住居跡

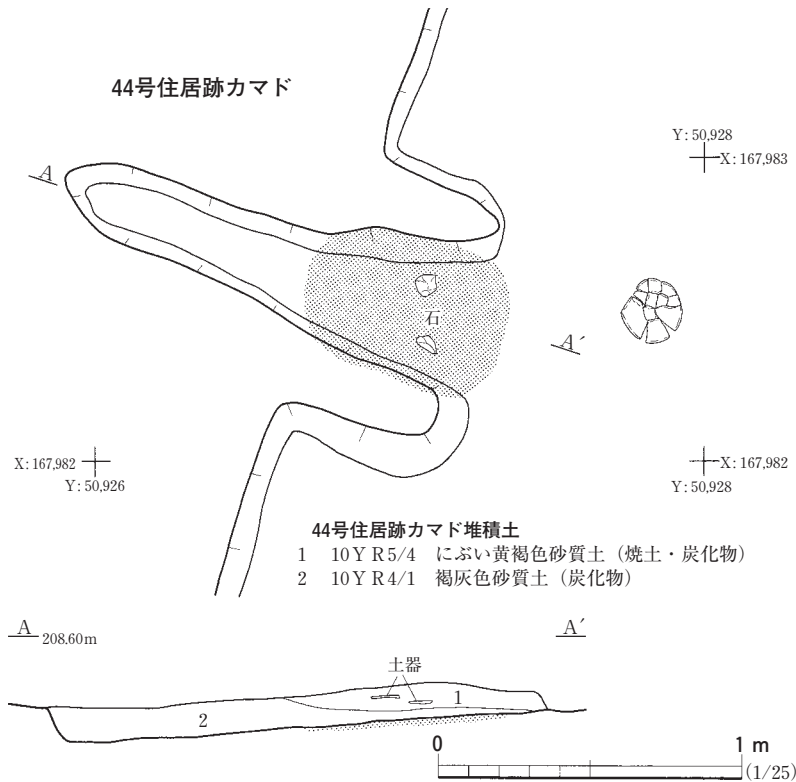


図122 44号住居跡カマド

形しただけのもので、器面調整は一切施されていない。色調は黒色を呈する。用途は不明である。器形は、胴部中央でいったん括れ、上半部が外傾したあと、端部近くで再び短く内傾している。これは、口縁部を指で摘んで整えたことに起因している。ちょうど、縄文時代中期のキャリパー形を呈する深鉢に類似している。

3・4は、土師器小形甕である。2つは、北西隅床面に寄せ集められた土器の一部である。3は、胴部下半部が丸みを帯び、4は、直線的なラインを呈している。どちらも、胴部外面はハケメ調整されている。

6は、長胴タイプの土師器甕である。南西隅床面から出土した。口径と胴部径は、ほぼ等しく、口頸部は、「く」の字状に屈曲する。外面は、ハケメ調整されている。

7は、土師器片口土器である。北西隅床面から出土した1つである。正立していた。器形は、丸みを帯びた小型甕と同一で、口縁部は内傾する。片口は、口縁部の端を外に曲げることでつくられている。外面は、ナデ調整されている。

8は、土製丸玉になる。床面から出土した。表面は、黒色処理されている。

まとめ

本遺構は、自然堤防の中央西寄りに営まれた竪穴住居跡である。カマド構造は、燃焼部に支脚を2つ横並びさせている。

遺物は、良好な一括資料が得られた。なかでも、片口土器が出土したことは注目される。これまで東北北部に類例が多くみられた器種であり、系譜に関心がもたれる。

(菅原)

点は、平たい自然石3個と共に、北西隅床面に故意に寄せ集められていたもので、強い同伴関係を示している。

1・5は、土師器杯である。1は、カマド前の床面で、正立したままの状態であつて潰れていた。有段丸底の器形をなす。5は、底部を柱状のまま残したもので、上部を欠いている。内面は、ヘラミガキ・黒色処理されていない。北西隅床面から出土している。

2は、何と表現してよいか判断に苦しむ土師器である。南西隅の床面に正立していた。手づくねの状態であつて、おおまかに成形

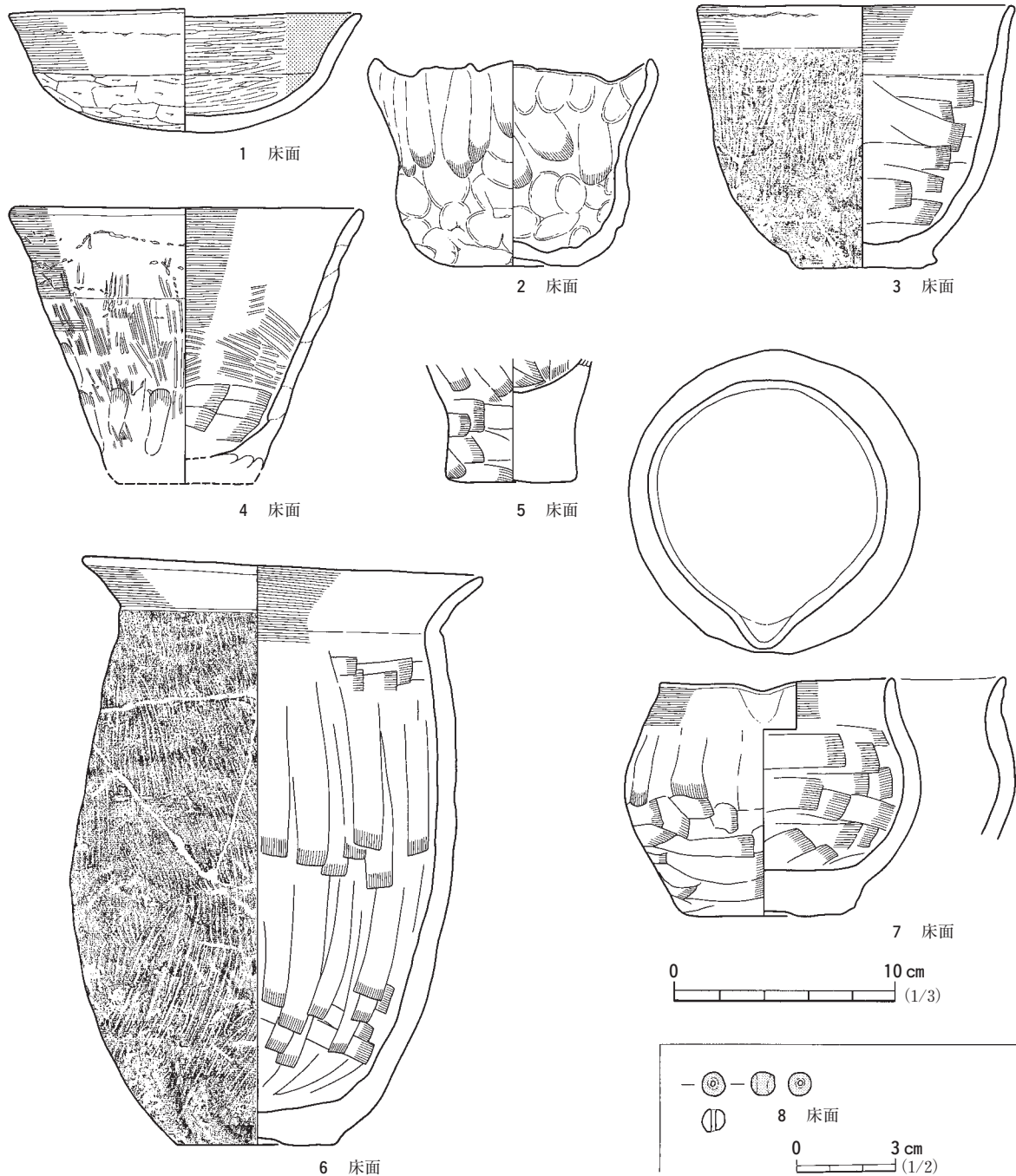


図123 44号住居跡出土遺物

45号住居跡 S I 45

遺 構 (図124, 写真126・127)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央付近にあたり、南側は浅い谷地形に面している。重複関係は、40号住居跡に切られ、48号住居跡を切っている。

本住居跡は、遺構全体の削平が著しい。東半分は、周壁が無く、床面が露呈していた。

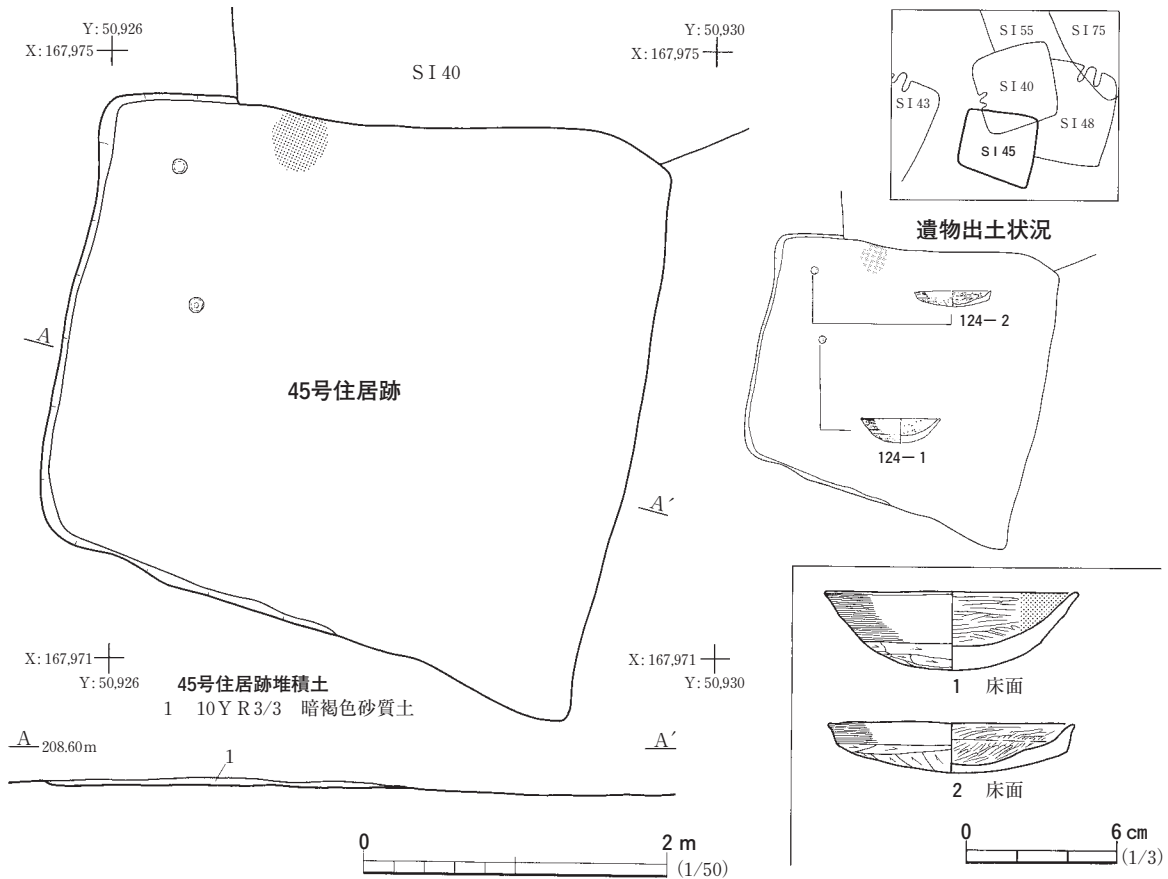


図124 45号住居跡・出土遺物

平面形は、正方形基調を呈している。歪みが大きく、向かい合う東西周壁の長さが一致しない。中軸で計測すると、規模は、東西3.8m、南北3.4mを測り、高木遺跡では中型の部類に属する。方向は、発掘基準線北に対して、東に10°振れている。

堆積土は、暗褐色砂質土が1層みられた。自然堆積土と考えている。床面は、貼床されず、掘形底面のLⅢがそのまま平坦に整えられている。踏み締まりは、認められなかった。

本住居跡のカマドは、北周壁の中央西寄りで見出された。燃焼部底面の酸化範囲だけで、詳細については知ることができなかった。

遺物 (図124, 写真530)

遺存状態の制約で、出土遺物は少ない。土師器片8点である。それでも、床面に密着した2個体の土師器杯が得られた。どちらも、口径10cmを下回る小型品なのが特徴である。

図124-1は、有段丸底の器形で、口縁部は内湾気味に外傾する。2は、須恵器杯蓋模倣である。器高が著しく低く、口縁部は短い。

まとめ

本遺構は、自然堤防を横切る浅い谷地形に面した竪穴住居跡である。残りが悪く、ほとんど床面が露呈していた。このため、構造の詳細は知ることができなかった。

時期は、床面の遺物から、栗圀式期に比定される。

(菅原)

46号住居跡 S I 46

遺 構 (図125・126, 写真128~130)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面で、下層からは、本住居跡の建て替え前のものと推定される60号住居跡が検出されている。また、北西隅で52号住居跡と接している。これとの関係は、直接の切り合いが無く、新旧は不明である。

堆積土は、2層に分層された。土層断面図が示すように、典型的なレンズ状堆積の様相を呈している。このことから、本住居跡は自然埋没したと考えている。床面は、貼床されず、60号住居跡の

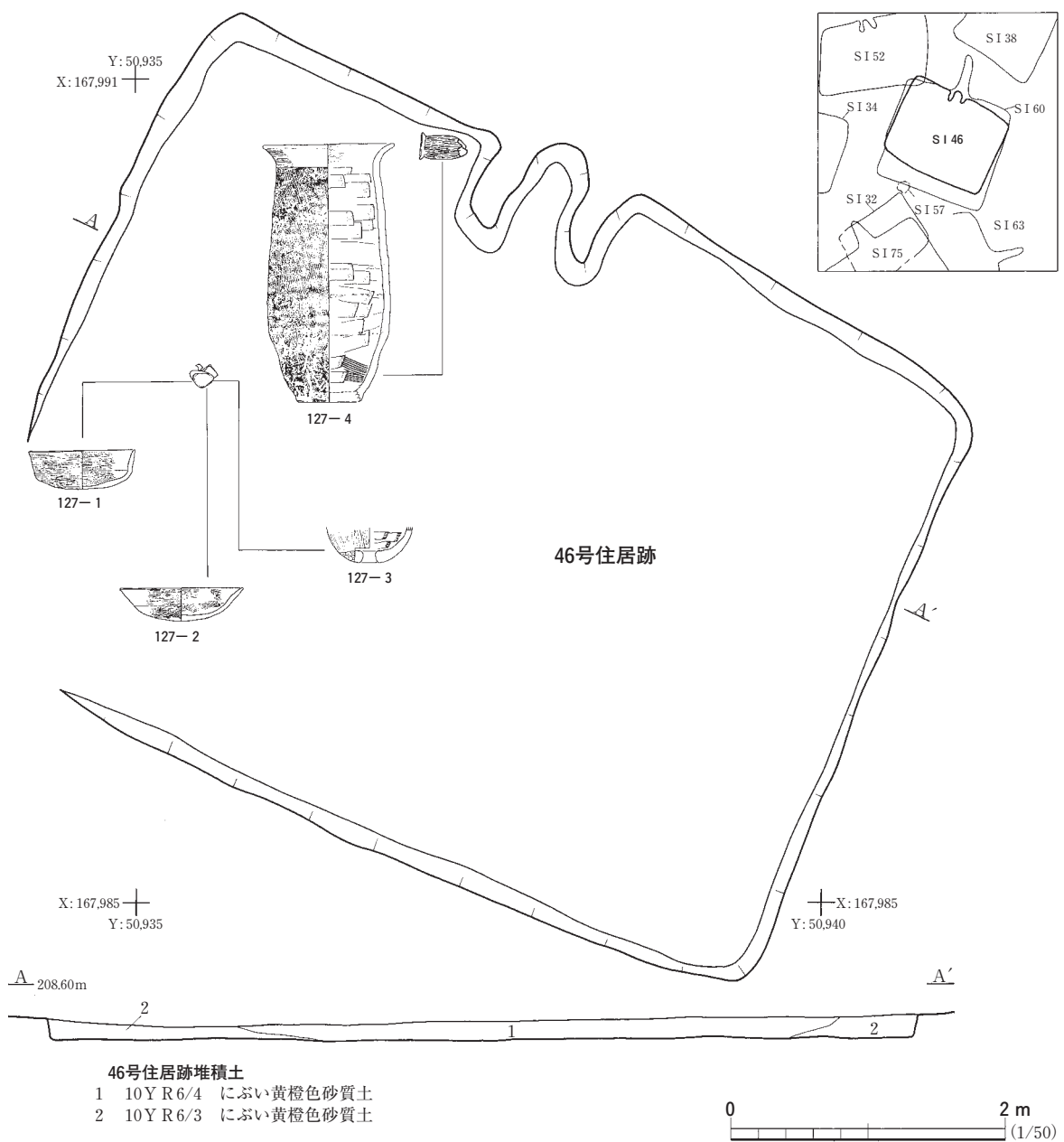


図125 46号住居跡

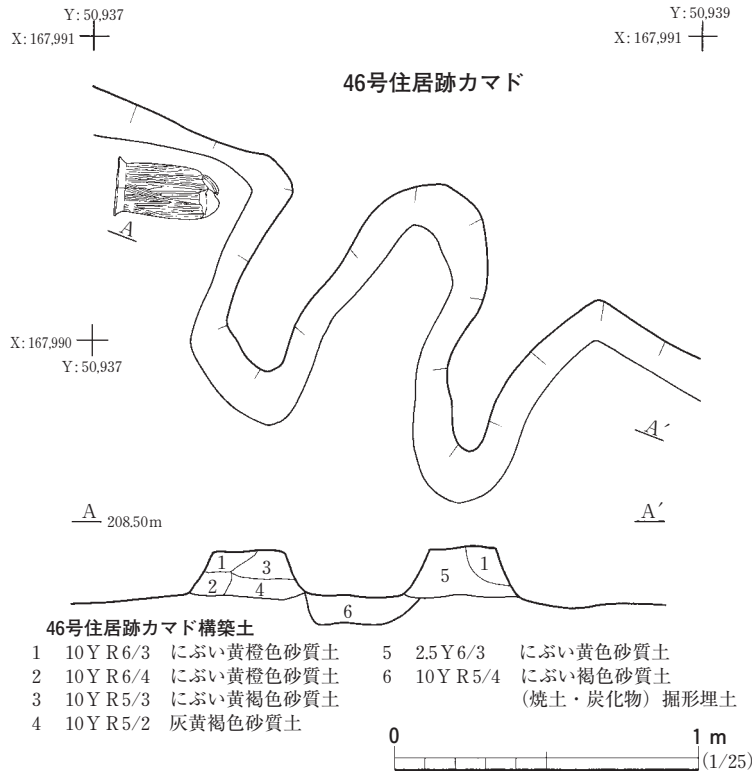


図126 46号住居跡カマド

位置は、少し左に偏っている。煙道部は削平され、残っていない。燃烧部は、袖長55cm、焚口幅51cmの規模を測る。袖は、床面から15cmの高さが残っていた。底面の焼けは弱く、図示していない。断ち割りでは、底面下に、にぶい褐色砂質土の掘形埋土が認められた。

ピット類は出土していない。

遺物 (図127, 写真530)

遺物は、土師器片177点、鉄製品1点が出土した。図示遺物は5点ある。

図127-1・2は、土師器杯である。3と、1か所にかたまっていた。1は、須恵器杯蓋模倣になる。口縁部外面は、ヘラミガキされている。2は、低平な有段丸底形態をなすもので、内外面は、ヘラミガキ・黒色処理されている。

3は、土師器甌の底部である。単孔式に分類される。外面は、縦位にヘラミガキされている。

4は、土師器長胴甕である。カマド左脇の床面に横転していた。底部を欠いているが、ほぼ完形品に近い状態のもので、胴部外面はハケメ調整されている。

5は、鉄鏝になる。ℓ1から出土した。先端を欠いている。

まとめ

本遺構は、自然堤防の中央平坦面に営まれた竪穴住居跡である。火災に遭った60号住居跡を建て替えたもので、東西に細長い平面プランを呈している。

時期は、床面の遺物から、栗圀式期に比定される。

(菅原)

堆積土上面がそのまま利用されている。

60号住居跡は火災に遭っており、本住居跡の床面を検出していくと、この下層住居跡の炭化物層がドーナツ状に広がってきた。検出面と床面の比高差は、10~18cmを測る。

本住居跡の平面プランは、東西に細長い長方形を呈する。長軸方向は東西にあり、規模は、6.4m×5.1mを測る。この大きさは、高木遺跡では比較的大型の部類に属するものといえる。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に20°振られている。

カマドは、北周壁で検出された。

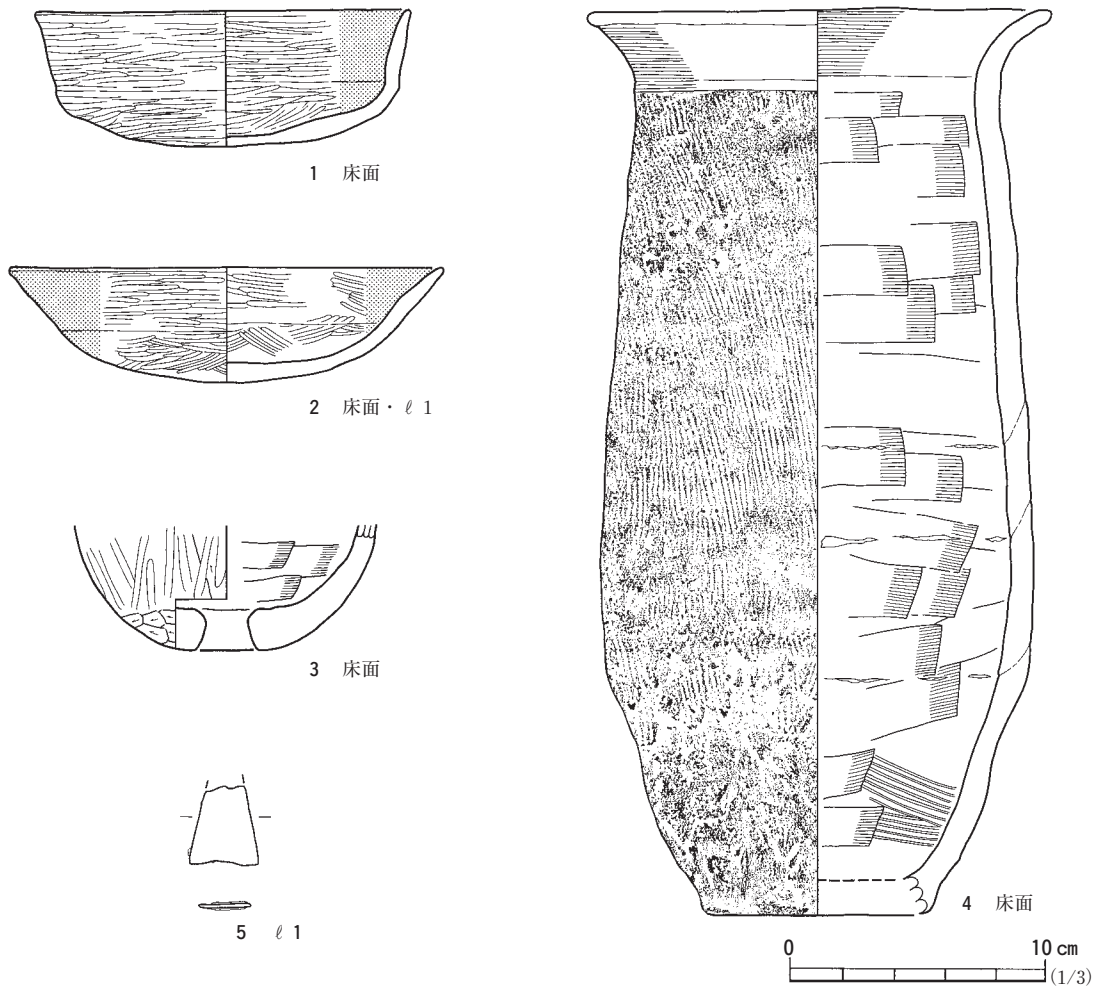


図127 46号住居跡出土遺物

47号住居跡 S I 47

遺 構 (図128, 写真131~133)

本遺構は、調査区北部のO20グリッドから検出された竪穴住居跡である。カマドの周辺部分しか検出できなかった。そのため、本住居跡の南東方向に位置する65号住居跡と重複すると思われるが、遺構の重複状況からの新旧関係は判断できなかった。

本住居跡は、L II 中よりカマドとカマドの付設する西周壁の一部分しか検出できず、西周壁はあわせて約2mほどしか確認できなかった。

西周壁から判断する住居跡の主軸方位は、N20°Eである。他の住居跡同様に、阿武隈川の流路方向を意識して造られているようである。住居跡の深さは約15cm程度で、しまりのない褐色砂が堆積していた。

本住居跡の西周壁は、緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、踏み締まりなどは確認できなかった。

カマドは燃焼部以外の煙道や煙出しは確認できなかったが、焚口から緩やかな傾斜となって煙道

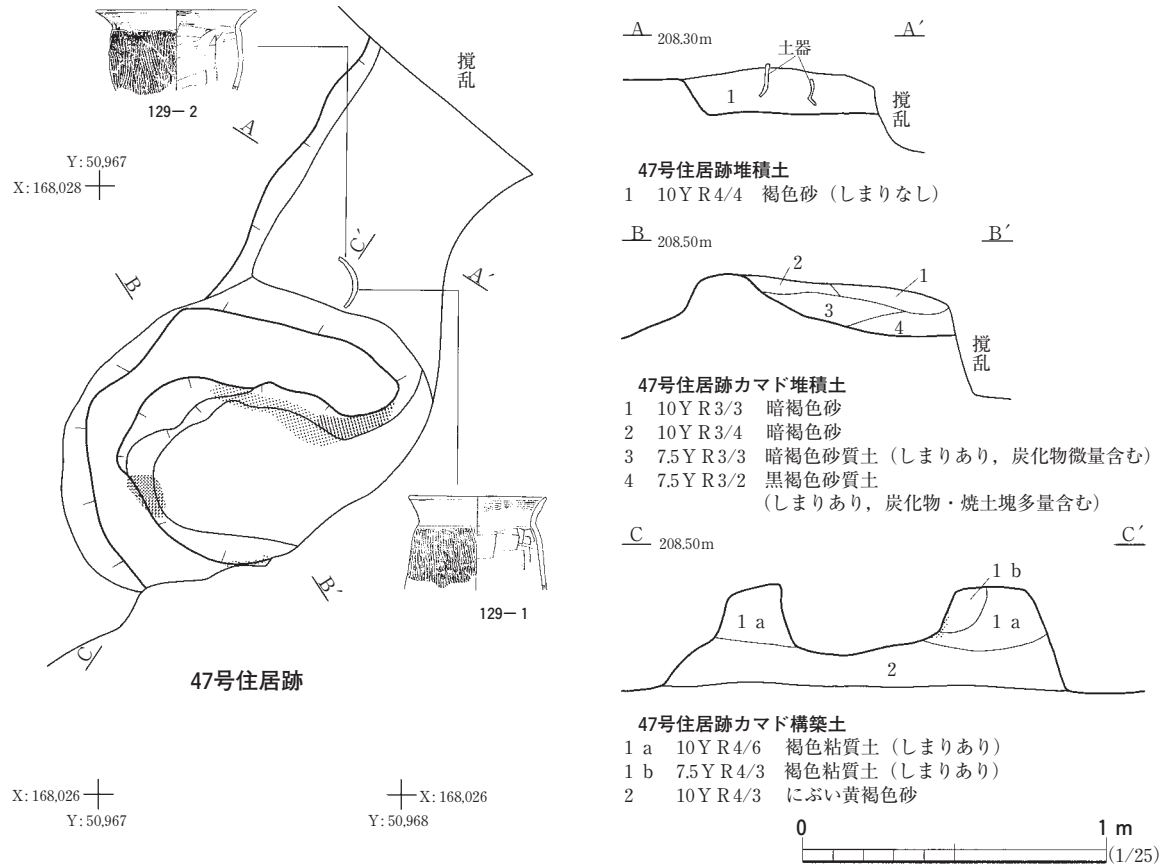


図128 47号住居跡

部へとつながっていたようである。

カマド内堆積土は4層に分層したが、燃烧面上のℓ3・4は焼土や炭化物を含んだ暗褐色ないし黒褐色の砂質土で、ℓ3は煙道部の方向から流れ込んだようである。カマド袖が壁面から約80cmほど張り出しており、側壁部分は焼けていたが底面は特に強くは焼けていない。

カマドはにぶい黄褐色砂で土台を築き、袖から天井部にかけてしまりのある褐色粘質土で構築していたと考えられる。

遺物 (図129, 写真531)

本住居跡から出土した遺物のうち、図示したものは図129-1・2の土師器の甕2点で、カマドの北袖脇から出土している。どちらも体部外面にハケメ調整がみられ、煤の付着も認められることから煮炊具として使用されていたようである。

まとめ

本住居跡は、栗圀式期のものと考えられる。本住居跡と重複する65号住居跡からは焼土範囲が確認されたが、本住居跡の床面のほうが高い位置に造られているため、新旧関係は判断できなかった。

出土した遺物の特徴からは、それほど大きく隔たらない前後する時期に営まれていたものと考えられる。

(大波)

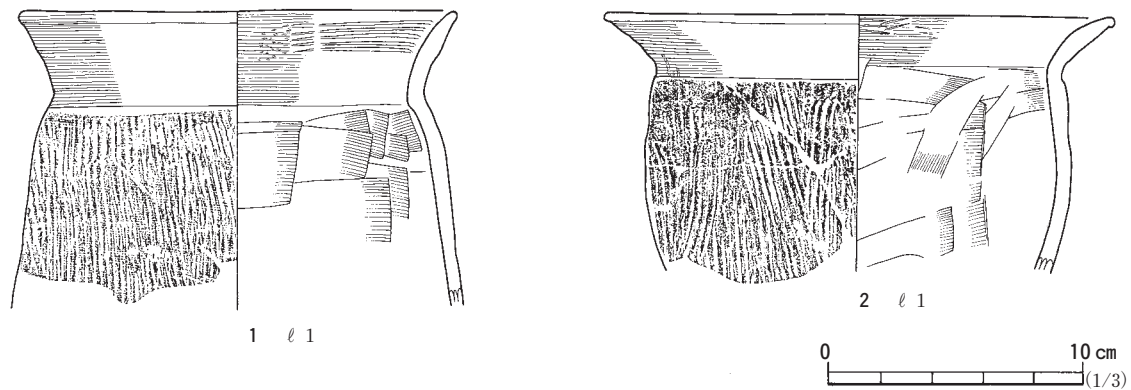


図129 47号住居跡出土遺物

48号住居跡 S I 48

遺 構 (図130～132, 写真134・135)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。

本住居跡が営まれたのは、自然堤防の中央西寄りの一角である。南側は浅い谷地形に面している。重複関係は、40・45号住居跡に切られ、75号住居跡を切っている。この重複で、西周壁は残っていない。

本住居跡は、全体の上部削平が著しかった。

堆積土は、にぶい黄橙色砂質土の1層である。確証は得られなかったが、断面の様子から、自然堆積土と考えている。

床面は、貼床されず、75号住居跡と重複する部分の他は、LⅢそのままとなっている。また、立地する微地形のため、南側に向かって上面のレベルは緩やかに傾斜している。検出面と床面の比高差は、2～5cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。規模は、東西3.7m以上、南北5.3mを測る。この大きさは、高木遺跡9区の住居跡の中では、比較的大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に13°振れている。

本住居跡では、4本柱の痕跡が検出された。P3～P6が、それに該当する。いずれも円形を呈するもので、径18～30cm、深さ28～32cmである。

柱間寸法は、P3－P4間が2.5m、P6－P5間が3.2m、P6－P3間が2.0m、P5－P4間が2.2mを測る。このように、東西方向に対して、南北方向の柱間が広くとられている点が、特徴として指摘できる。

カマドは、北周壁で検出された。位置は少し右に偏っている。煙道部は削平されて、残っていない。燃焼部は、袖長88cm、焚口幅50cmの規模を測り、袖は、床面から5cmの高さが残っていた。底面は焼けており、断ち割りしたところ、7cmの厚さで酸化していた。

本住居跡のカマドでは、円筒状土製品が多用されている。底面中央に、支脚として据えられ、焚

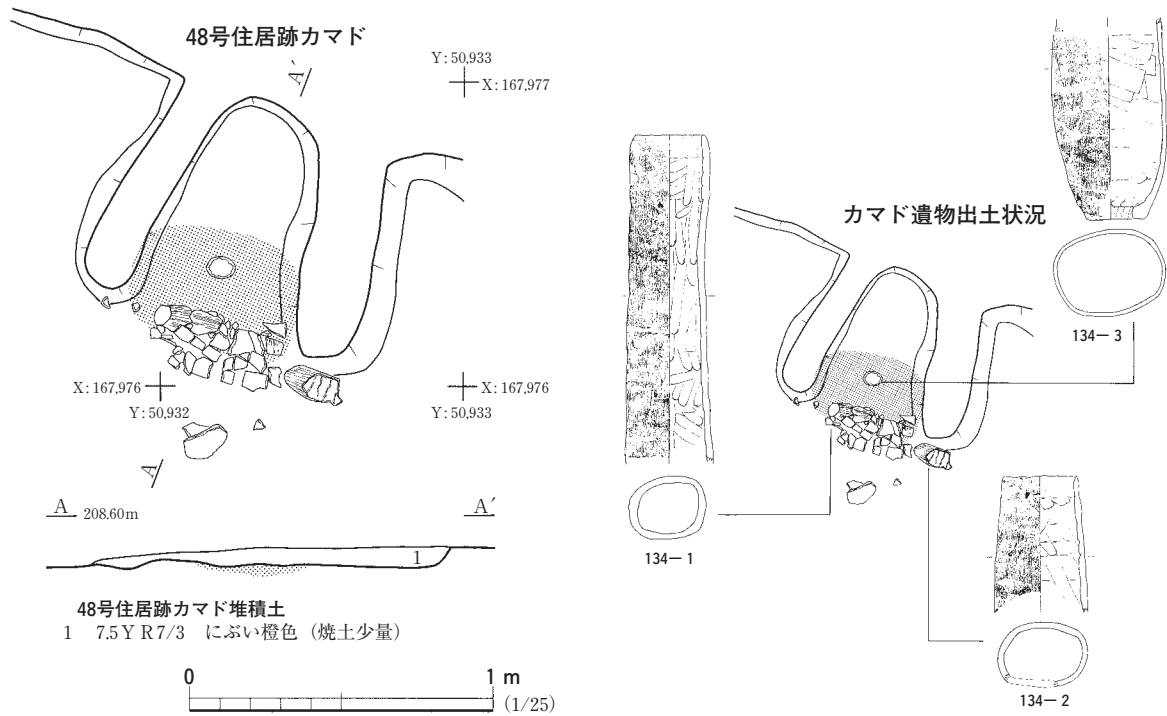


図131 48号住居跡カマド

図133-1～3は、土師器杯である。1は、椀状の須恵器模倣杯に分類される。貯蔵穴右肩から出土した。2は、器高の低い有段丸底杯である。床面から出土した。内面は、ナデ調整だけで仕上げられており、ヘラミガキ・黒色処理が施されていない。3は、大型の有段丸底杯になる。床面から出土した。内面に、暗文風のヘラミガキが施されている。

図133-4は、小型の土師器甑である。単孔式に分類されるもので、貯蔵穴 ℓ 3から出土した。器形は、最大径が口縁部にあり、胴部は窄まって、そのまま底部に至っている。外面はハケメ調整されている。

図133-5～7・9は、小型の土師器甕である。5は、貯蔵穴近くの床面から出土したもので、法量が最も小さい。器形は、口縁部に最大径があり、胴部が膨らみ気味に窄まって、底部に至る。外面は、ハケメ調整のあと、ナデ調整されている。6は、カマド左脇の床面で出土した。外面ハケメ調整で、底部を欠いている。口縁部と胴部の境に、段を形成する。7は貯蔵穴脇の床面から出土した。口縁部に最大径があり、胴部上位が膨らんで、底部に至る。外面はハケメ調整されている。9は、貯蔵穴脇の床面で出土した口縁部である。やはり、外面がハケメ調整されている。

図133-8は、長胴の土師器甕である。P1から出土した。器形は、口径が胴部最大径を上回っている。口縁部外面に軽いヘラミガキが加えられ、胴部外面は、ハケメ調整されている。下半部を欠く。

図133-10は、土製模造鏡になる。床面から出土した。鈕の付された面に、沈線で二重の同心円文が描かれている。また、鈕のつけ根部分は、水平に穿孔されている。

図133-11は、土師器手づくね土器である。P1脇の床面で出土した。指で簡単に成形されただけ

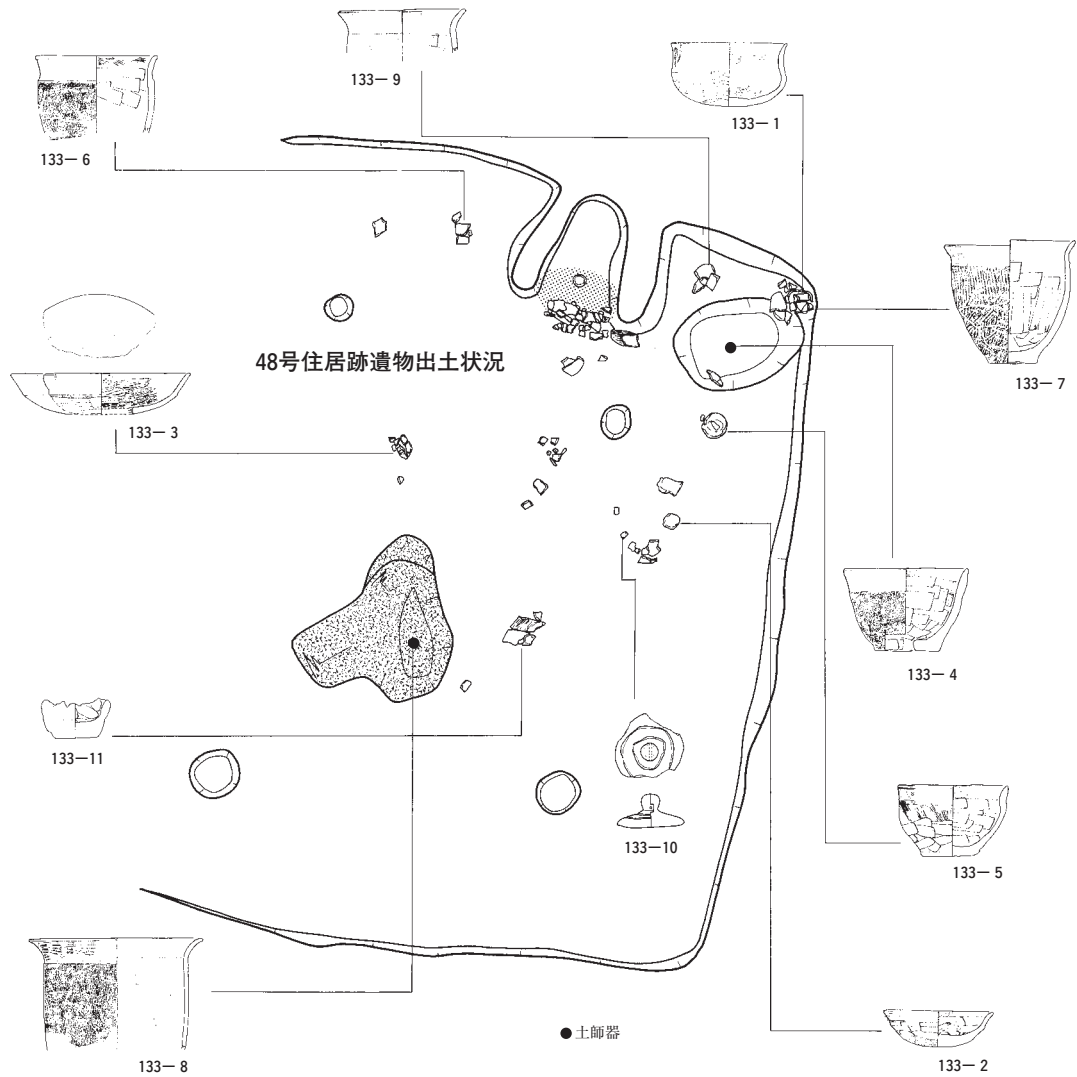


図132 48号住居跡遺物出土状況

のもので、器面調整は一切施されていない。

図133-12は、土製丸玉である。黒色処理されている。

図134-1～3は、円筒状土製品になる。外面はハケメ調整されており、内面の粘土積み上げ痕は、指ナデ調整で消されている。1と2は、カマド焚口に落下していた。天井部構築材に使用されていたと考えている。3は、燃焼部中央に据えられた支脚である。

ま と め

本遺構は、自然堤防を横切る浅い谷地形に面した竪穴住居跡である。遺構全体は削平が著しい。カマドは、支脚と天井部構築材に円筒状土製品を使用していた。また、床面に灰白色粘土を充填した窪みが設けられており、注意を要する。

遺物としては、土製模造鏡が遺構に共伴した点が重要であろう。

所属時期は、共伴遺物から、栗圀式期に比定される。

(菅原)

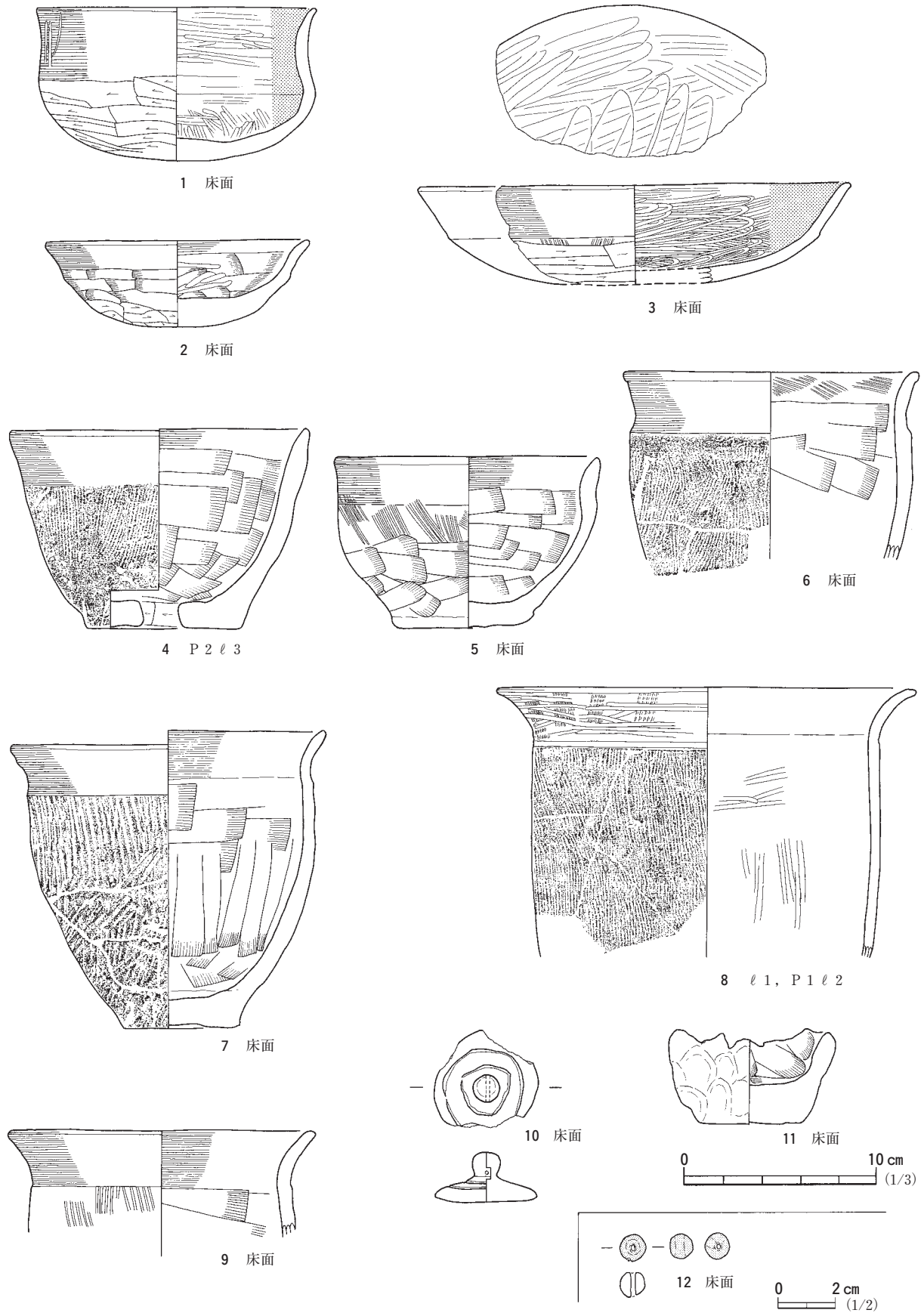


図133 48号住居跡出土遺物 (1)

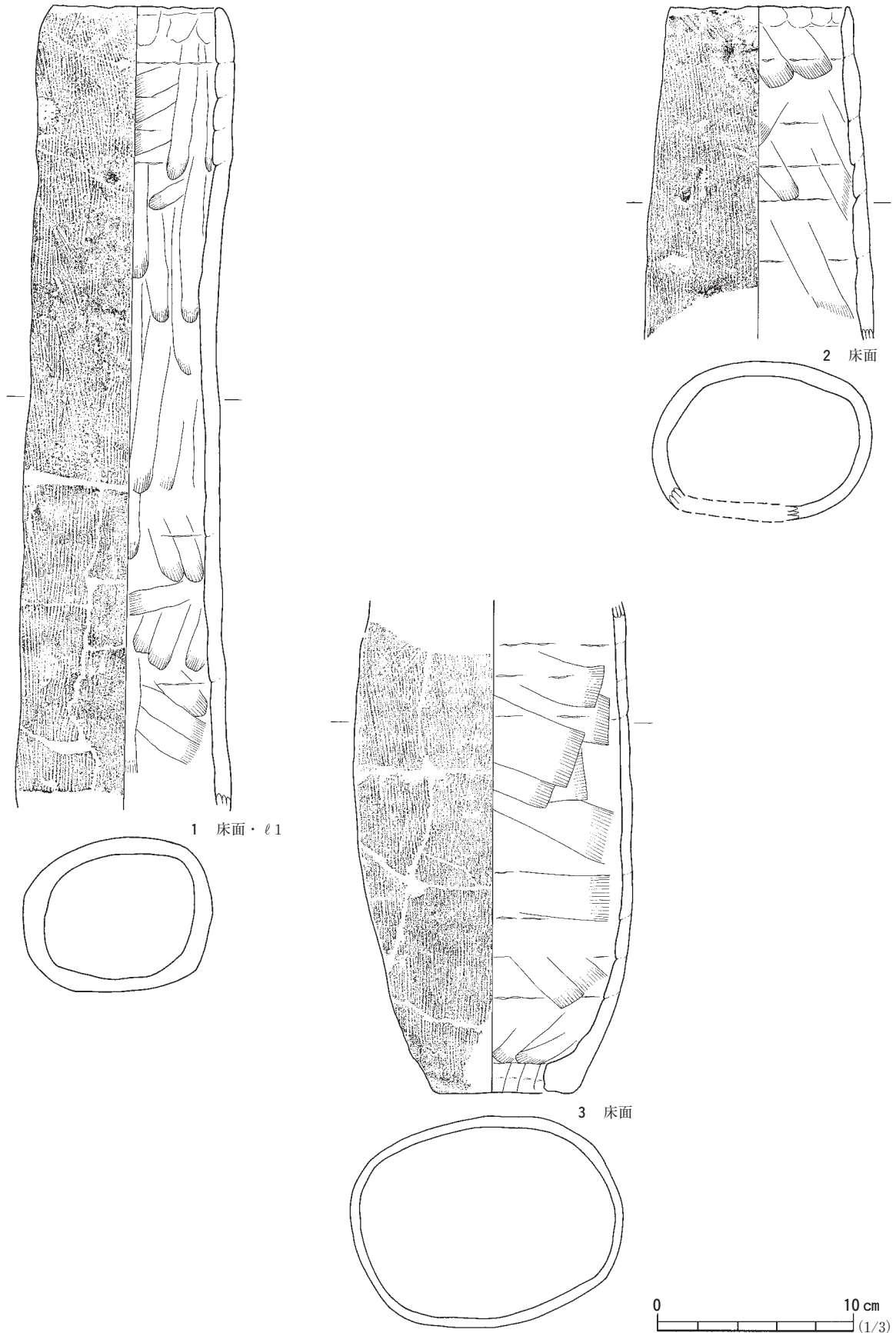


図134 48号住居跡出土遺物 (2)

49号住居跡 S I 49

遺 構 (図135・136, 写真136~139)

本遺構はN21グリッドに位置しており、調査区中央の最も住居跡の集中する区域で検出された。

本住居跡の重複関係は、今回の調査区の中でも特に著しい。南側で、24・93・106・142号住居跡、14・17号土坑、東側で25号住居跡、さらに、西側で93号住居跡と重複している。新旧関係を整理すると、106・142号住居跡より新しく、24・25・93号住居跡、14・17号土坑より古い。

住居跡の北東隅は、攪乱により失われていた。また、南周壁の大半は、新しい住居の構築のため破壊され、検出できなかった。残存する周壁から、平面形は長方形を呈し、四隅は角張っていたと考えている。掘り上げ状態は、ゆがんでいるが、北周壁の東端はもう少し長かったとみられ、東周壁は西周壁と平行していたと考えられる。

中軸線上で計測すると、住居跡の規模は、東西8.8m、南北5.8mである。住居跡と方位との関係は、発掘基準線北に対して東に25°振れている。

周壁は急角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは、南西隅付近で最大36cmを測る。床面は、貼床を施さない直床である。

住居跡堆積土は、3層に分層される。ℓ1・2は、にぶい黄褐色の砂質土である。焼土と炭化物を含んでいる。自然堆積土であろう。ℓ3は、東周壁ぎわに堆積した黒褐色の粘質土である。壁の崩落土と考えている。

本住居跡内からは、カマドや柱穴などの細部施設は検出されなかった。ただ、カマドに関しては、床面の遺物分布状況から、南周壁に設置されていた蓋然性が最も高いと考えられる。

遺 物 (図137~139, 写真533~536)

遺物は、土師器片1,956点、須恵器片7点、鉄製品2点、石製品5点が出土した。図示遺物は22点あり、このうち床面の遺物は、南東部に集中する傾向が認められた。

図137-1・4は、土師器杯である。1は、有段丸底杯に分類されるもので、口径が小さく、器高の高い特徴を有している。口縁部は内湾しており、内外面がヘラミガキされている。底部外面には、焼成前に施された線刻が観察される。4は、器高が低く、口縁端部が反り返る特徴が認められる。口縁部下端に段は形成されておらず、底部から口縁部まで、そのままスムーズに移行する。

図137-2は、土師器高杯である。有段丸底杯を短脚に乗せたもので、口縁部は内湾気味に立ち上がる。脚部は中空につくられており、端部はまくれない。

図137-3・5・6は、小~中型の土師器甕である。3は、口径が大きく、全体が底部に向かって下に窄まる器形を呈している。口縁部は、短く外傾している。外面は、荒れてボロボロになっており、内面の口縁部下に煤がリング状に巡っている。5は、口縁部が反り返り、膨らみ気味の胴部形態を有している。底部は突出しており、外面はハケメ調整されている。6は、椀状の器形を呈するもので、頸部が括れていない。口縁部は、胴部からそのまま連続的に移行しており、内傾して立ち

第1編 高木遺跡

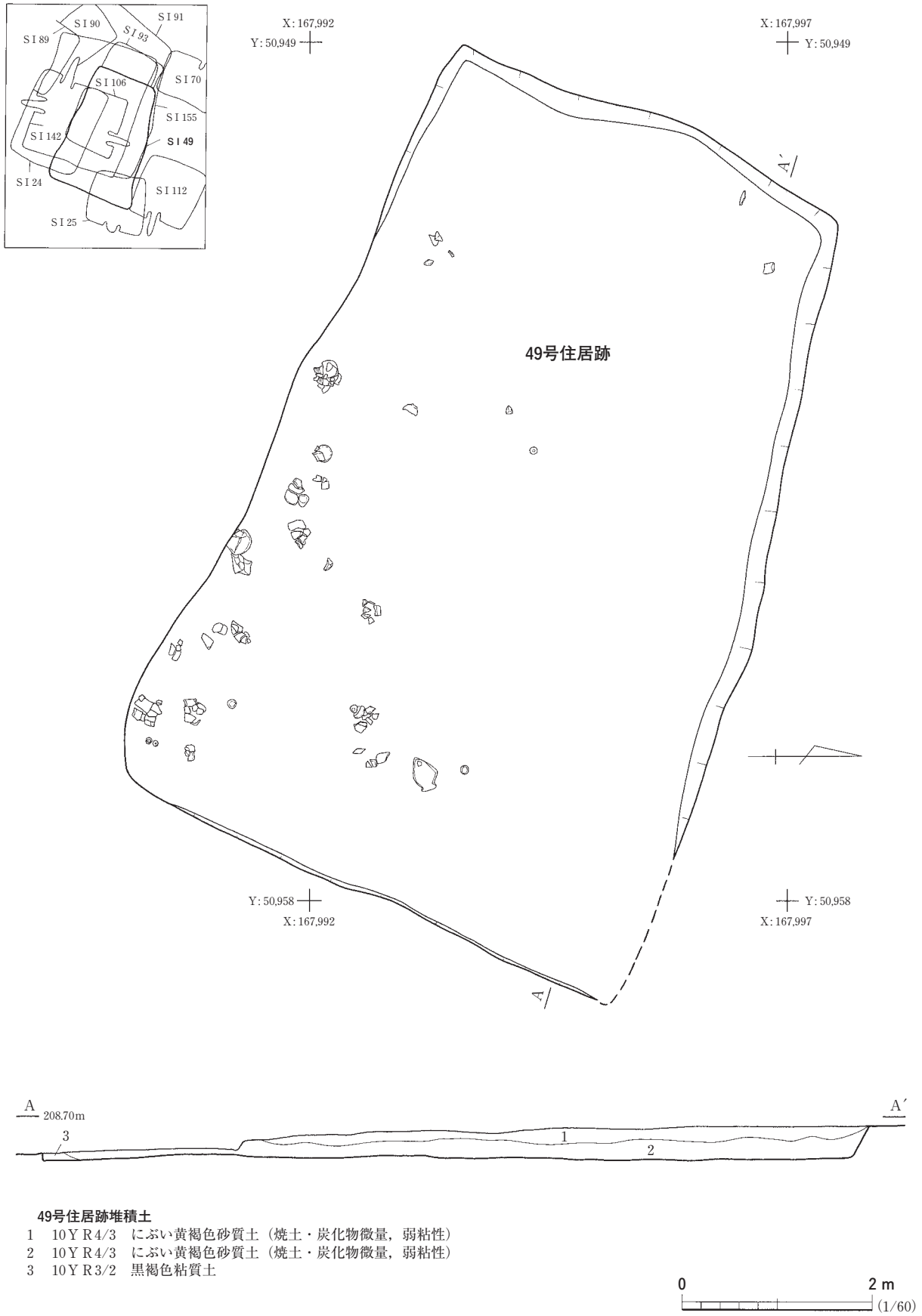


図135 49号住居跡

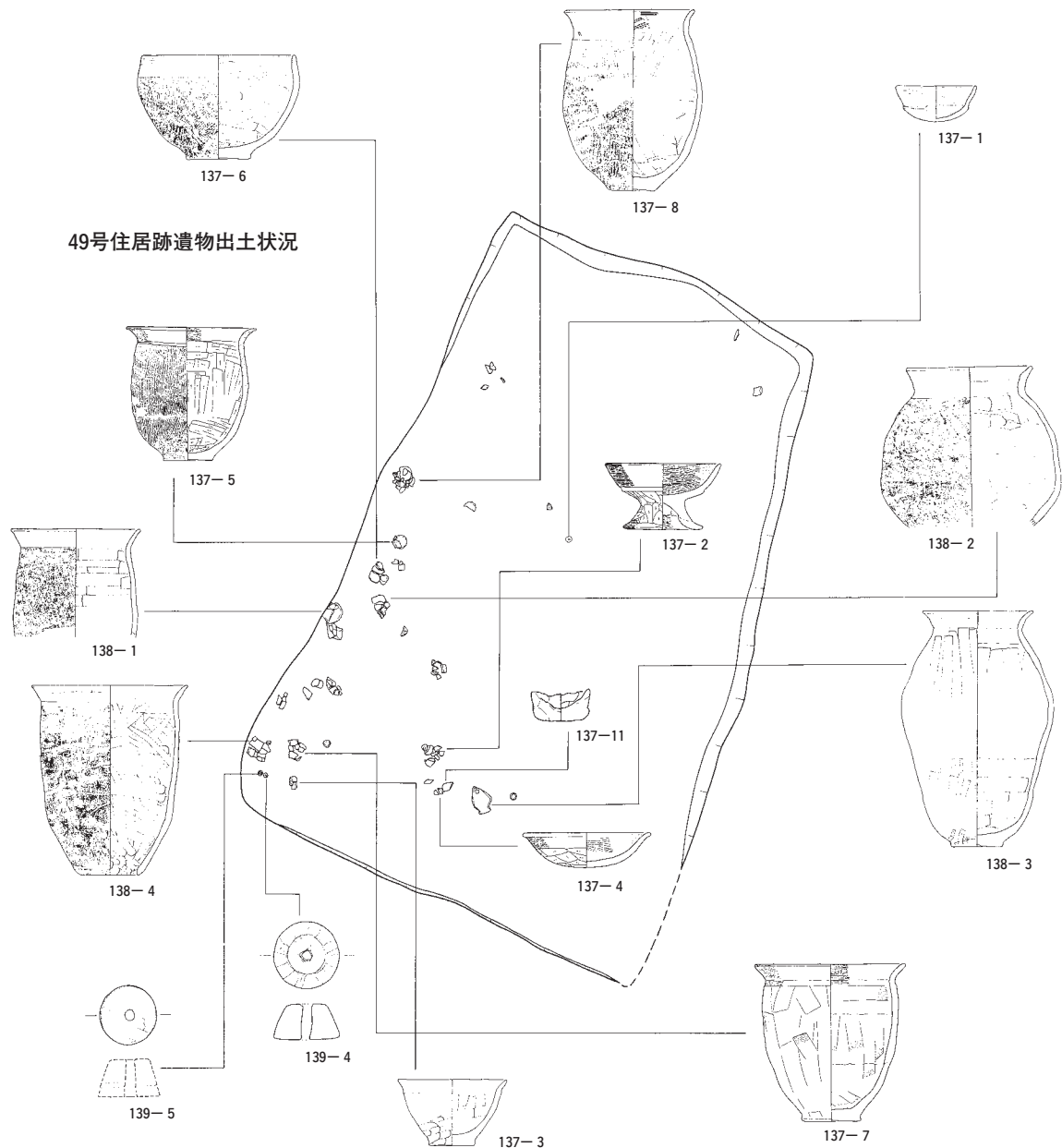


図136 49号住居跡遺物出土状況

上がる。この土器は、内面がヘラミガキ調整されており、煮炊具でないことは明らかである。

図137-7・8, 図138-1～3は、中～大型の土師器甕に分類される。図137-7は、口径が大きく、全体が底部に向かって窄まる器形を呈している。口縁部は「く」の字状に外傾し、下端に明確な段が形成されている。底部が突出している。8は、長胴タイプのもので、胴部中央に最大径がある。頸部は直立して立ち上がり、口縁部が外反する。外面は、ハケメ調整されている。図138-1は、胴部下半を欠いており、全体の特徴を知ることができない。長胴タイプになると推定される。外面は、ハケメ調整である。図138-2は、球胴甕に分類される。胴部は下膨れ気味で、頸部が直立し、口縁部が外反する。外面は、ハケメ調整されている。図138-3は、長胴甕になる。胴部最大径は、中央よりやや上の位置にある。外面はナデ調整されており、下半部には、さらにヘラケズリが加え

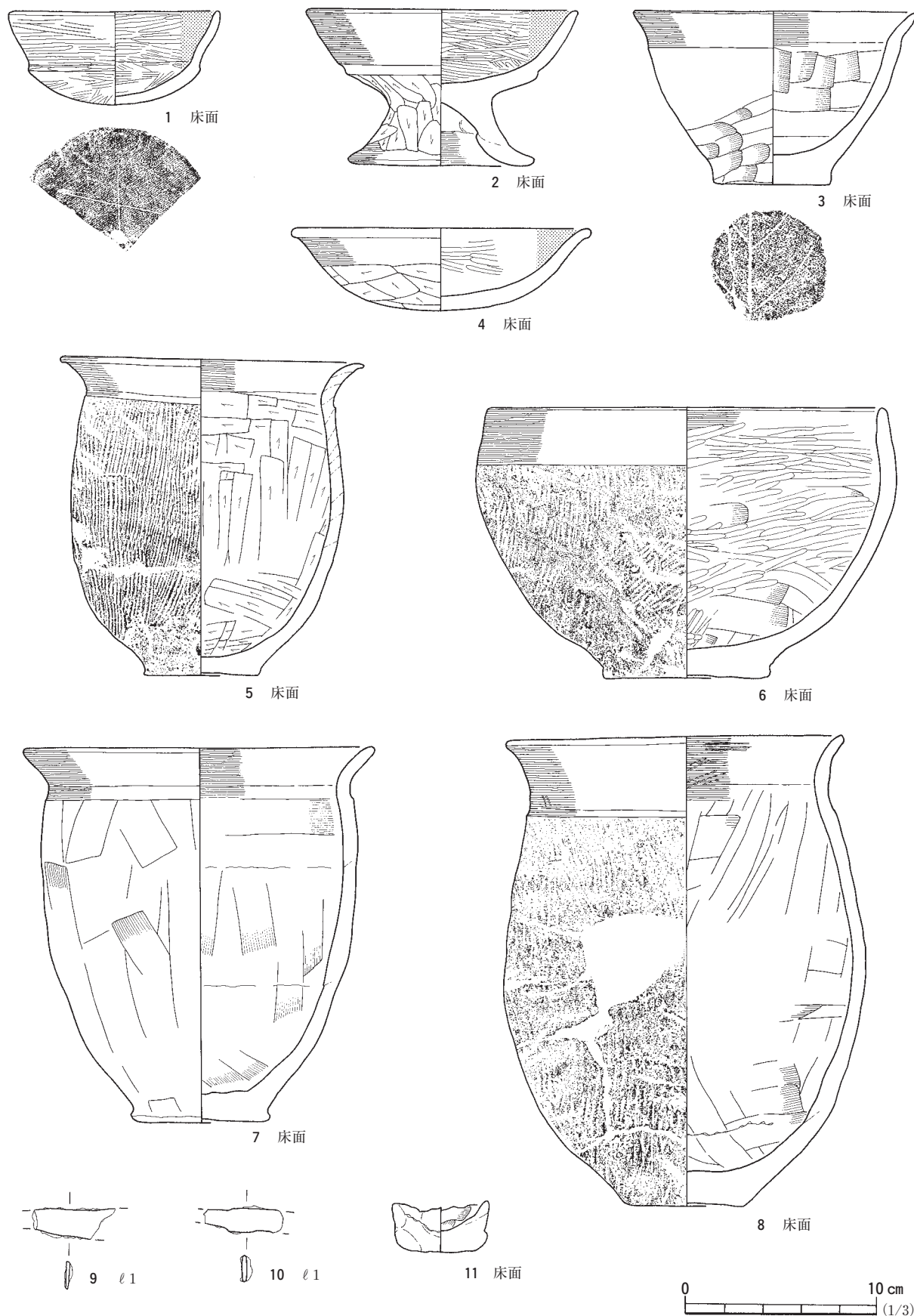


图137 49号住居跡出土遺物 (1)

られている。

図138-4は、大型の土師器甕である。無底式に分類されるもので、胴部の膨らみは少ない。外面は、ハケメ調整されている。

図137-11は、土師器手づくね土器になる。指で簡単に成形しただけで、器面調整は、一切行われていない。

図139-1は、ロクロ調整の土師器杯である。1の遺物であり、形式的にも、床面の遺物とは大きく異なる。混入品であろう。回転糸切り底で、体部下端に手持ちヘラケズリ調整が施されている。

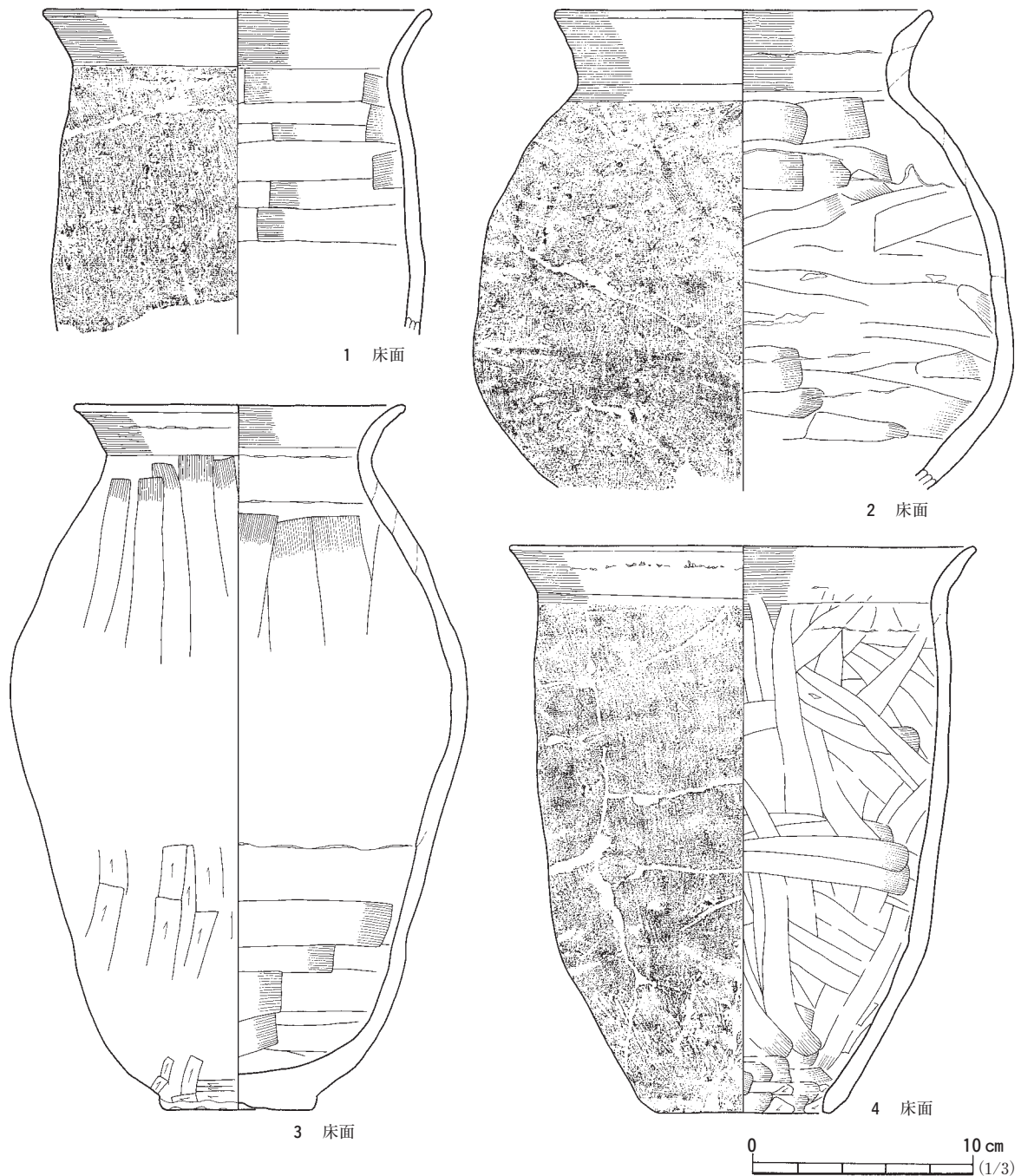


図138 49号住居跡出土遺物 (2)

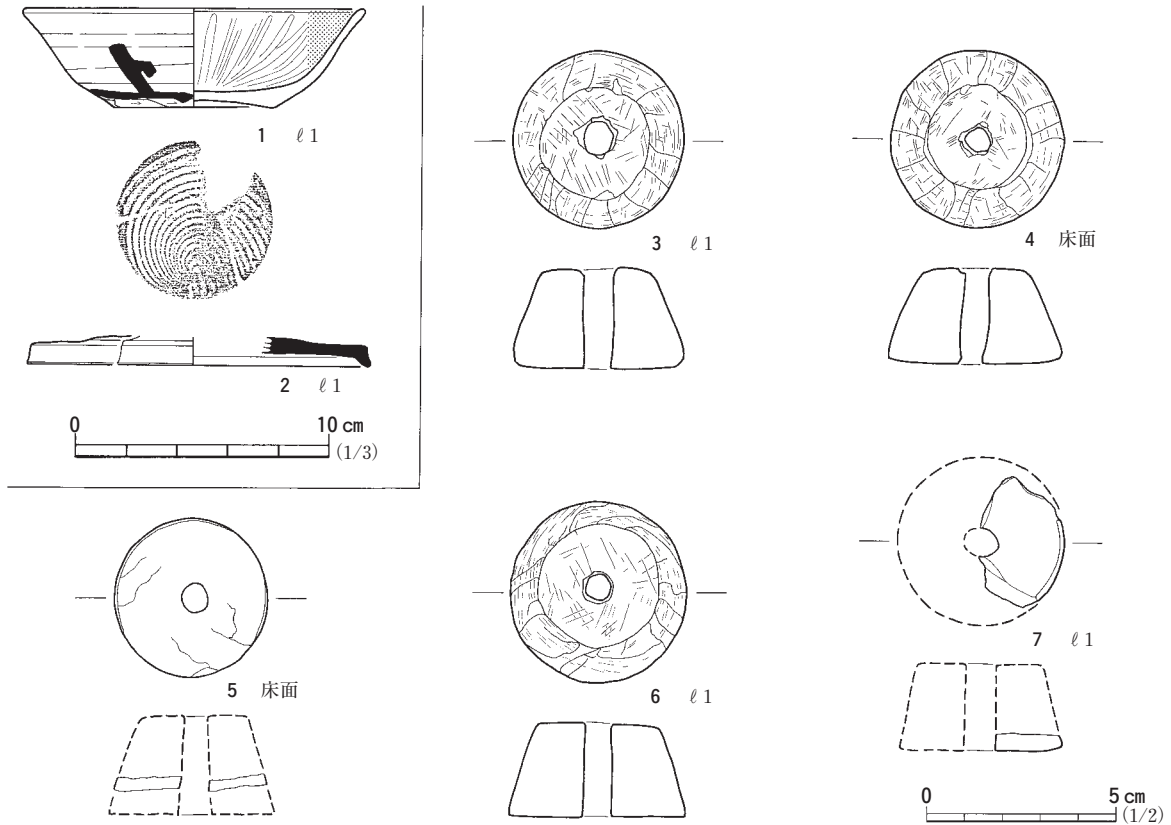


図139 49号住居跡出土遺物（3）

「上」の墨書がみられる。

図139-2は、須恵器蓋の破片になる。高台杯に伴うと推定される。天井部は水平に近く、口縁部は短く外反する。この特徴からいって、奈良時代以降に位置付けられるもので、後世の紛れ込みと判断される。

図137-9・10は、鉄製刀子の破片になる。

図139-3～7は、石製紡錘車である。

ま と め

本住居跡は、床面上から比較的まとまった量の出土遺物を得ることができた。平面形は、細長い長方形を呈しており、長軸側にカマドが設置されていたと推定される。このような状況は、重複する142号住居跡に類似する。

本住居跡の所属時期は、出土遺物の特徴から、栗圀式期に位置付けられると考えている。

(高久田)

50号住居跡 S I 50

遺 構 (図140, 写真140~144)

本遺構は、調査区北部のN20・O20グリットから検出された竪穴住居跡である。規模は、小型である。

重複関係は、42号住居跡→50号住居跡→12号住居跡となり、12号住居跡に北周壁部分を破壊されている。

42号住居跡の調査開始後に本住居跡を検出したため、新旧を逆に調査を行っている。そのため、12号住居跡に破壊されずに遺存していた北周壁の一部は、確認できなかった。

本住居跡は、L II 中より検出でき、暗褐色砂が堆積していた。住居跡の大きさは南周壁が約2.1mを測り、1辺約2mの小型の住居跡で、主軸方位はN13°Eである。深さは約10cmほどしか残らず、周壁の立ち上がりは緩やかである。

床面は平坦であったが、踏み締まり等は確認できなかった。住居跡の北西にあたる床面直上からは、ほぼ完形の土師器の杯と小型甕が出土している。

カマドは東周壁に付設され、燃焼部以外の煙道や煙出しは確認できなかったが、住居跡と同様に小型のものであった。

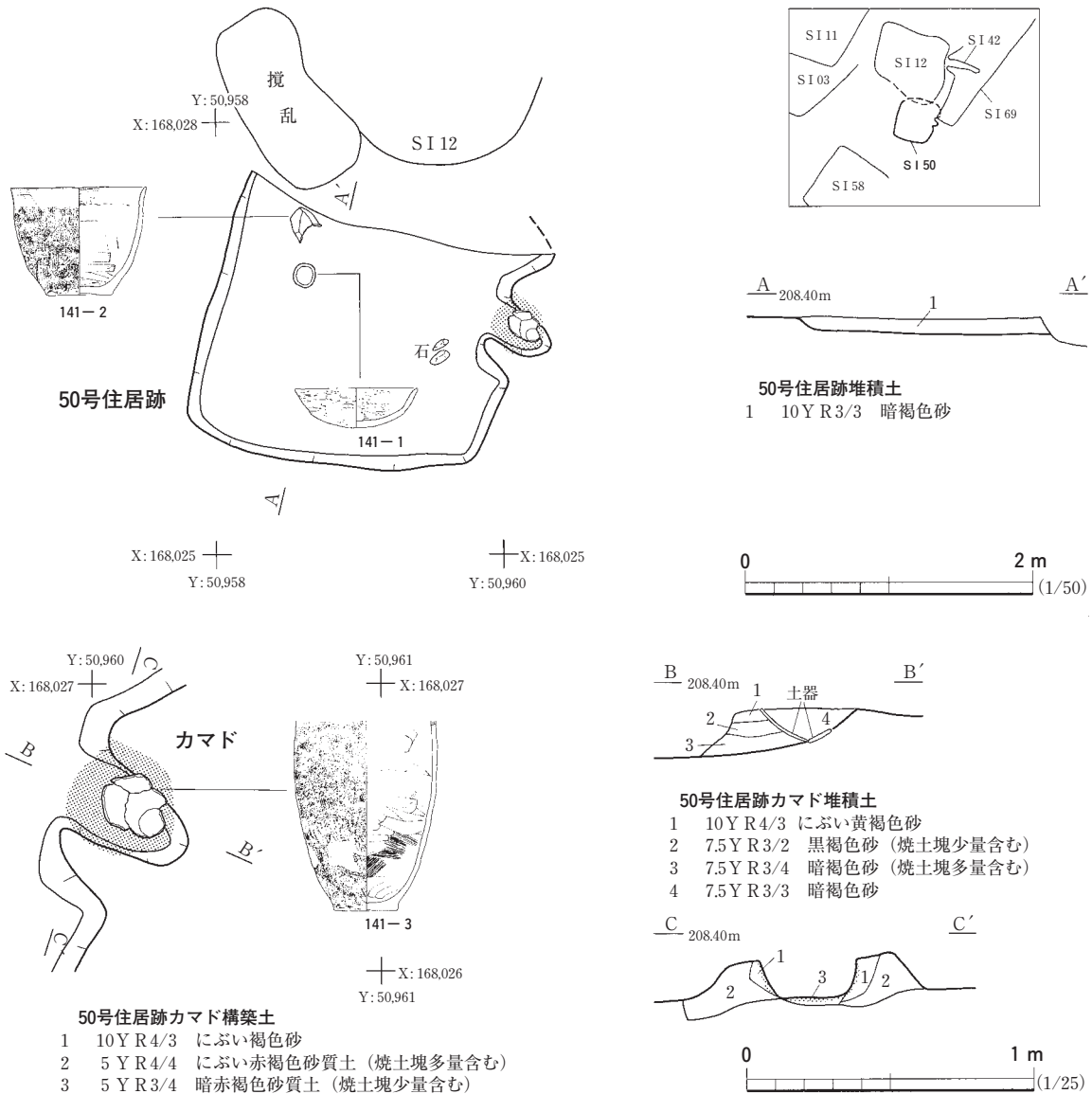


図140 50号住居跡

カマドの両袖は、壁面から約20cmほど張り出し、両袖間は約25cmほどである。燃焼部底面から側壁にかけて赤く焼けており、その中央には甕が置かれていた。カマド内堆積土は4層に分層したが、置かれていた甕を境に焚口側の堆積土には焼土塊を含んでいた。カマドは壁際と床面をやや掘り込んで造られており、焼土塊を含んだ赤褐色砂質土で構築されていた。

ピット類は検出されていない。

遺物 (図141, 写真536)

本住居跡から出土した遺物のうち、図示した3点は本住居跡に伴うものと考えられる。それらは床面ないし床面からやや浮いた状態で出土しており、それぞれの位置を平面図に図示している。

図141-1は土師器の杯で、口縁部が大きく外傾する有段丸底のものであるが、内外面にヘラミガキが施されている。また、この杯の底部には「×」のヘラ記号が認められる (写真536)。このような杯は他の住居跡からも出土しているが、特に11号住居跡から出土した杯とは外面のミガキとヘラ記号が一致するだけでなく、器形、法量ともほとんどかわらない。

図141-2・3は土師器の甕である。体部外面は、ハケメ調整が施されている。3はカマドに置かれていた長胴の甕で、底部には僅かに周縁に粘土を貼った痕跡が認められる。外面には加熱で剥離する部分があり、煮炊具として使用されていたものである。2は小型の甕で、底部に木葉痕が認められる。図上に示した拓本は木葉痕と重なっていて判りづらいが、この甕の底部にも「×」のヘラ記号が付く。



図141 50号住居跡出土遺物

ま と め

本住居跡は約2m四方の小型の住居跡である。本遺跡内から検出された住居跡にはあまりみられない、東周壁にカマドの付くものである。

本住居跡と重複する42号住居跡や、同じヘラ記号の付く杯の出土した11号住居跡等との関係から、本住居跡は7世紀前半ごろに営まれたものと考えている。 (大 波)

51号住居跡 S I 51

遺 構 (図142, 写真145)

本遺構は、N21グリッドにおいて検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の西斜面肩部である。

この一帯は、遺構が密集しており、本住居跡は、36・73・74・140号住居跡と重複している。新旧関係は、74・140号住居跡より新しく、36・73号住居跡より古い。

遺構内堆積土は3層に区分した。ℓ1・2は、レンズ状の堆積状況を示しており、ℓ3は壁の崩落土と考えられる。したがって、遺構は自然埋没したと思われる。

住居跡の平面形は、残存部から推測すると、ほぼ整った方形を呈していたと考えられる。住居跡と方位の関係を西周壁で見ると、真北から21°ほど東へ傾いている。規模は、東西およそ4.1m、南北3.5m以上である。

検出面から床面までの深さは、12~18cmを測り、北に向かってレベルが低くなる。西周壁は急な立ち上がりを見せるが、南周壁の立ち上がりは、比較的緩やかである。

住居跡内施設としてカマド1基を検出した。カマドは、遺存している西周壁の中央やや北寄りにつくられていた。攪乱で煙道部を壊されている。燃烧部は、左袖が32cm、右袖が36cm以上住居跡内に張り出している。どちらも床面をわずかに掘り込んだ後、褐色土で構築されている。床面からの高さは、最大で30cmである。両袖の内面に燃烧面が確認された。焚口は、遺存部から推測して、幅約35cmと考えられる。奥行きは不明である。

カマド内堆積土は、3層に区分した。ℓ1・2は、焼土粒、粘土塊を含んでいることから、天井崩落土と考える。ℓ3は、天井崩落前の堆積土である。

遺 物 (図142, 写真536)

本住居跡からは、土師器片8点、土製品1点が出土した。遺構の遺存状態が不良だったのを反映して、図示遺物は1点しかない。

図142-1は、堆積土から出土した土製丸玉である。表面が黒色処理されている。

ま と め

本住居跡は残りが悪かった。北西側の半分が失われている。また、共伴遺物も無く、所属時期は不明である。 (佐 藤)

52号住居跡 S I 52

遺 構 (図143・144, 写真146)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。上部削平が著しく、堆積土は残りが少なかった。また、南周壁は、西端付近を除いて消失していた。

営まれた場所は、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部にあたる。重複関係は、54号住居跡より新しく、7号住居跡より古い。また、46号住居跡ともわずかに重複しており、本住居跡の方が新しいと判断した。

堆積土は2層に区分した。どちらもにぶい黄橙色砂質土であり、断面の様子から、自然堆積土と考えている。

床面は貼床されず、掘形底面が直接使用されている。とくに顕著な踏み締まりは認められなかった。検出面と床面の比高差は、4～12cmを測る。

住居跡の平面プランは、長方形を呈している。長軸は東西方向にあり、少し歪んでいる。規模は、

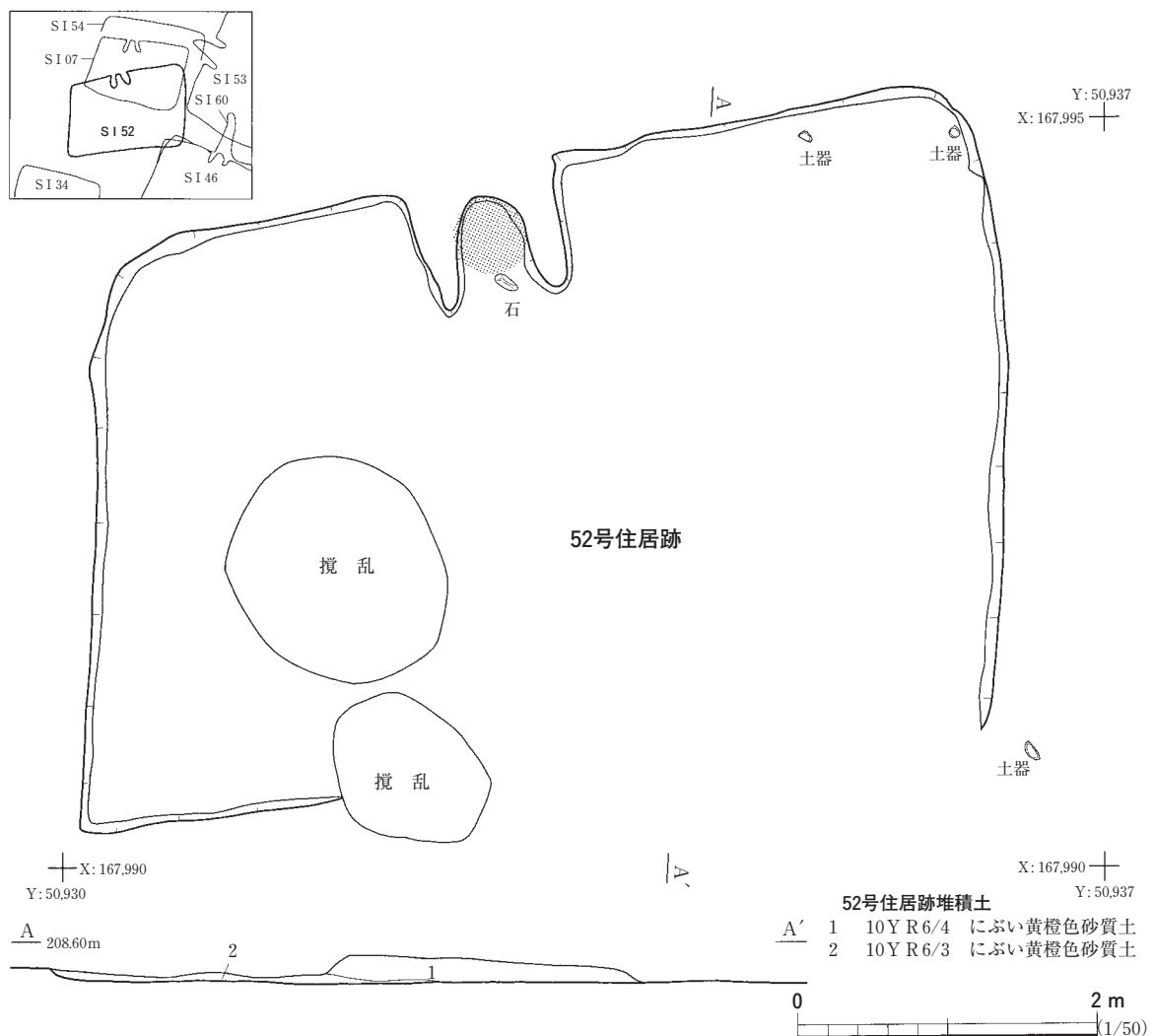


図143 52号住居跡

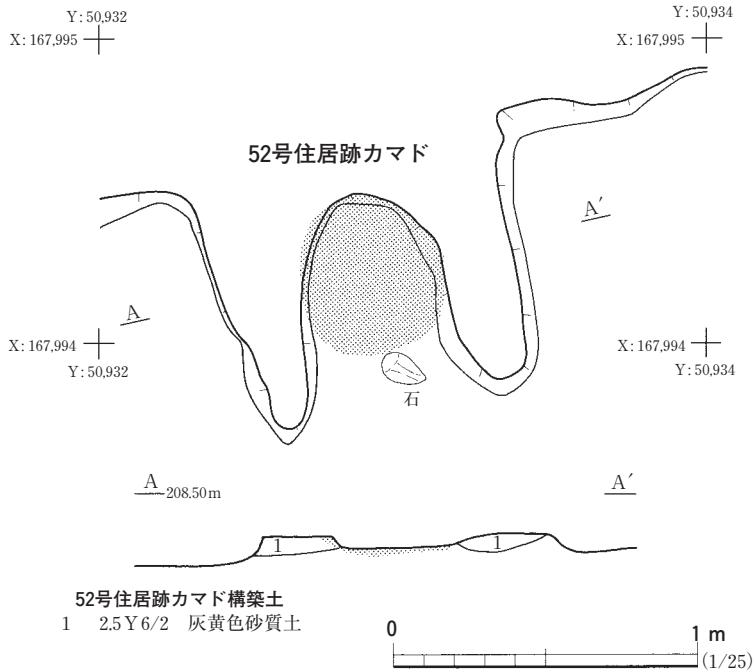


図144 52号住居跡カマド

東西6.1m, 南北3.9mを測る。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、西に10°振れている。

カマドは北周壁で検出された。位置は少し左に偏っている。燃焼部は、袖長89cm, 焚口幅40cmを測り、中央に自然石の支脚が据えられている。袖は、床面から3~5cm高さが残っていた。底面には、焼土化がみられた。

ピット類は検出されていない。

遺物 (図145, 写真536)

本住居跡からは、土師器片27点、土製品1点が出土した。遺構の遺

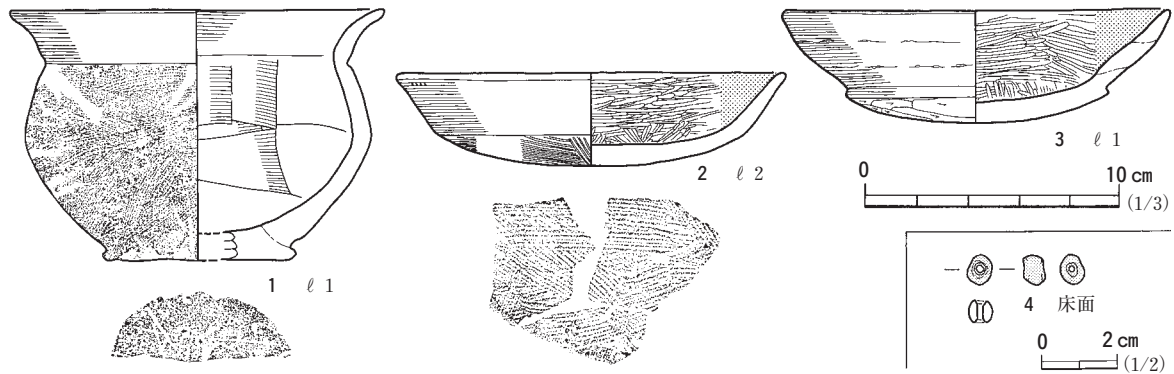


図145 52号住居跡出土遺物

存状態が良くなかったことを反映して、数が少ない。

図145-1は、土師器小型甕である。胴部は横長で、頸部が直立したのち、口縁部で強く外反している。外面はハケメ調整されている。

図145-2・3は、有段丸底の土師器杯になる。1は、段が曖昧で、底径が大きい。底部外面にハケメ調整痕が観察される。3は、底径が小さめで、口縁部が内湾する。

図145-4は、土製丸玉である。表面が黒色処理されている。

まとめ

本住居跡は、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。平面プランは長方形を呈しており、北周壁でカマドが検出された。

営まれた時期は、床面で土器が出土せず、特定することができない。重複遺構の状況を勘案すると、栗圀式期の可能性が高いと思われる。

(菅原)

53号住居跡 S I 53

遺 構 (図146・147, 写真147~149)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面である。重複関係は、23・38号住居跡に切られ、60・64号住居跡を切っている。

本住居跡は、削平が著しい。とくに、それは東側で顕著で、東周壁は欠損している。検出面と床面の比高差は、残りの良い西周壁で15cmを測る。

堆積土は、にぶい黄橙色砂質土が1層認められた。自然堆積土と考えている。床面は、貼床されず、掘形底面のLⅢがそのまま利用されている。踏み締まりは、認められない。

本住居跡の平面プランは、方形を呈しており、北西隅が崩れていた。規模は、東西4.2m以上、南北7.1mを測り、大型の部類に属している。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に23°振れて

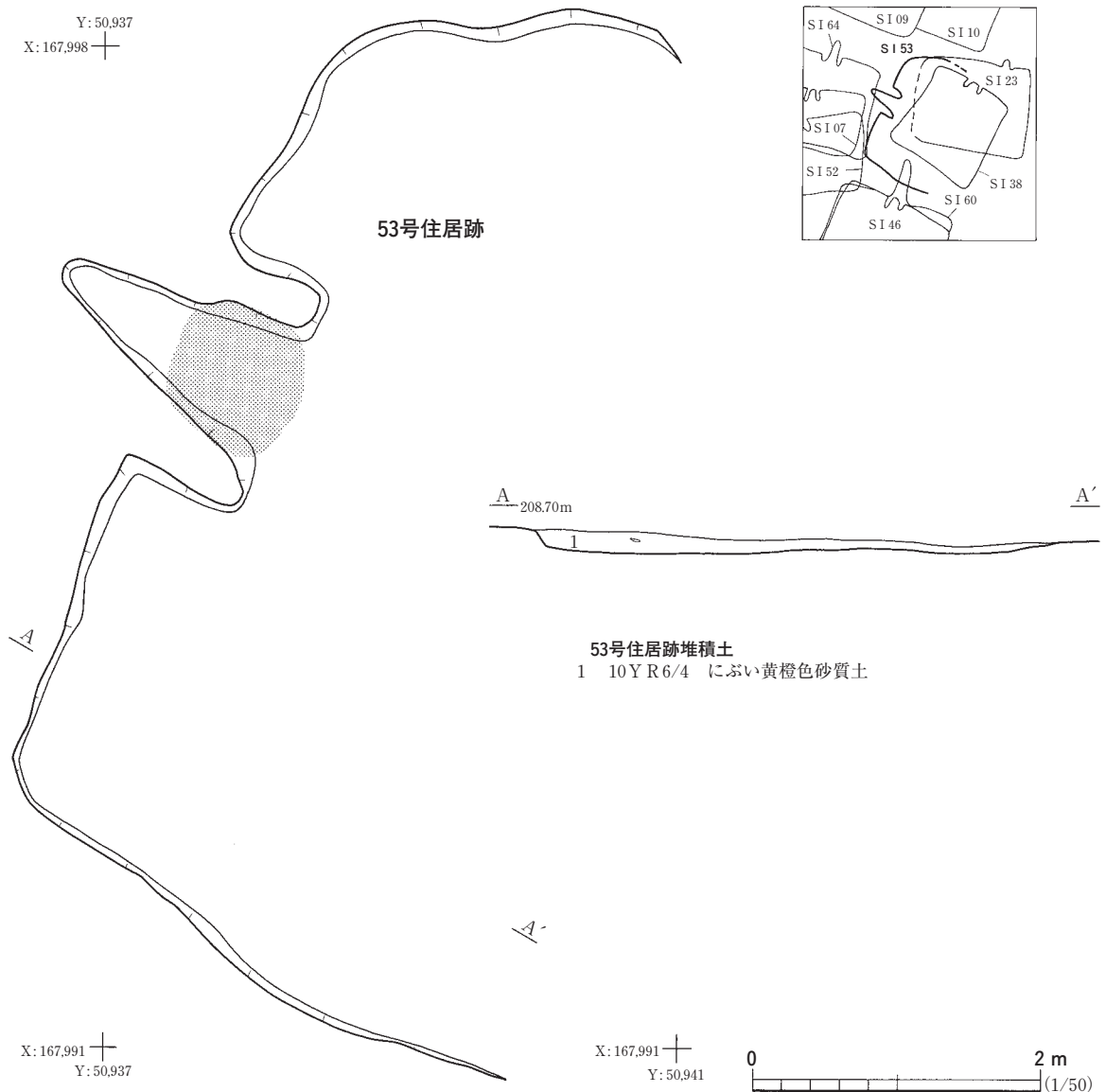


図146 53号住居跡

いる。

カマドは、西周壁中央で検出された。住居規模に比例して、つくりが大きく、またしっかりしている。しかし、煙道部は、先端が削平され、完全には残っていない。

燃焼部は、袖長60cm、焚口幅90cmの規模を測る。袖は、にぶい黄橙色砂質土で構築され、床面から18cmの高さが残っていた。構築土には、焼土・炭化物が混じっている。底面は焼けており、断ち割りしたところ、5cmの厚さで酸化しているのが確認された。煙道部の境には、明瞭な段は無く、わずかにレベルが上がるだけである。軟弱な砂質土のため、崩れてしまったのかも知れない。

遺物は、土師器片54点が出土した。ハケメ調整の非ロクロ甕が、確認される。出土層位は、 ℓ 1である。

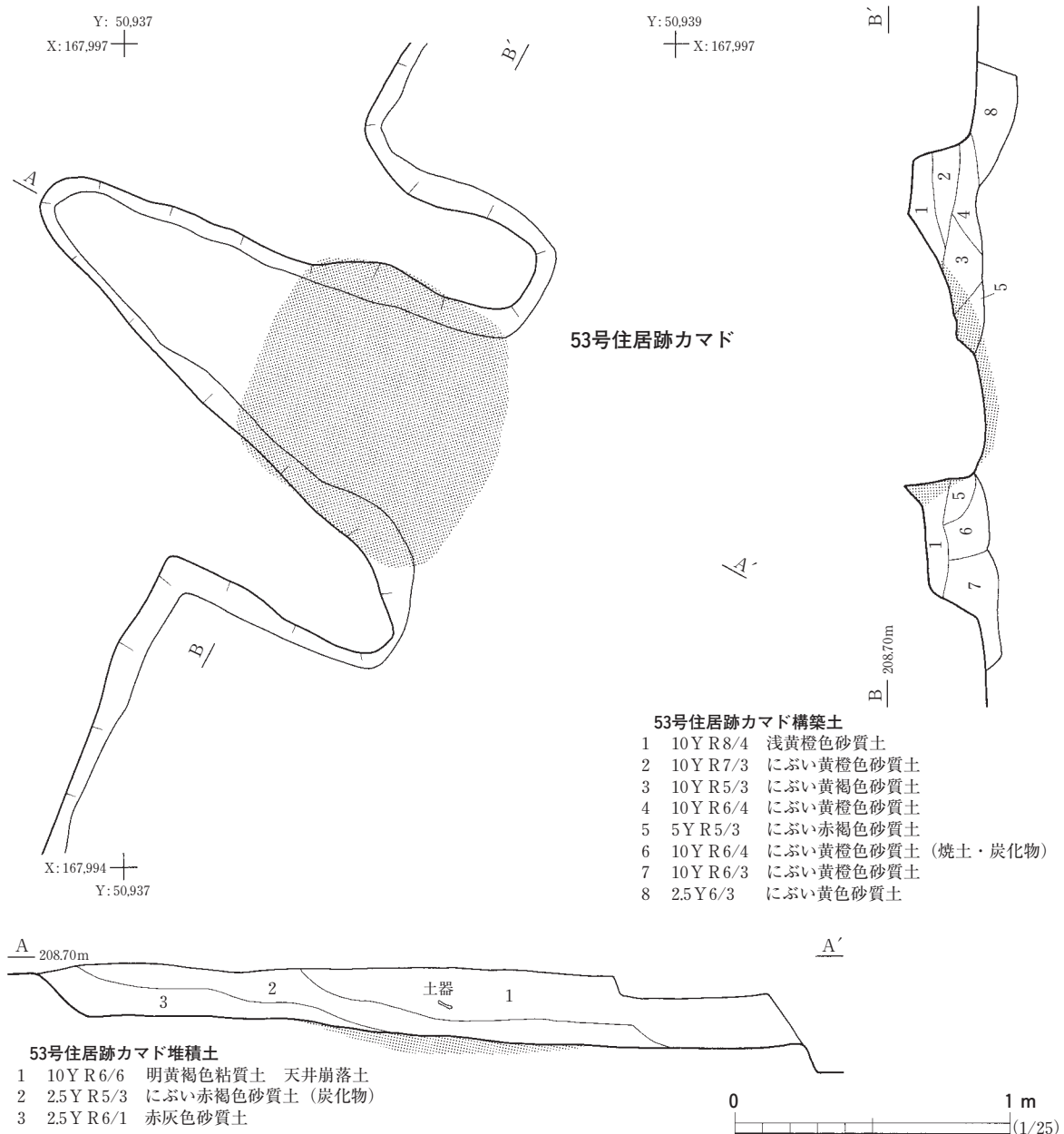


図147 53号住居跡カマド

ま と め

本遺構は、自然堤防の中央平坦面に営まれた竪穴住居跡である。規模が大きく、カマドのつくりがしっかりしていた。ただ、残りが悪く、詳細については、知ることができなかった。

時期は、重複遺構との関係から、栗圀式期に上限を設定できる。(菅原)

54号住居跡 S I 54

遺 構 (図148)

本遺構は、集中豪雨にみまわれ、図面作成前に遺構が崩れてしまった。ここでは、検出時に作成した遺構カードの記録をもとに、報告を行う。

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央西寄りである。高木遺跡における住居跡分布の西

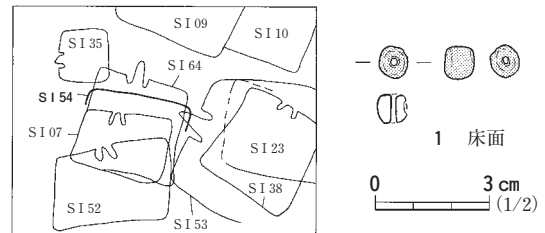


図148 54号住居跡・出土遺物

限の1つをなしている。重複関係は、7・53号住居跡に切られており、64号住居跡を切っている。

平面形は、方形を呈しており、規模は、東西5.5m、南北1.8m以上を測る。住居跡方向は、発掘基準線北に対して東に13°振れている。カマド構築位置は不明である。

遺 物 (図148, 写真537)

遺物は、土師器片8点、土製品1点が出土した。

図148-1は、床面から出土した土製丸玉である。表面は、ヘラミガキ・黒色処理されている。

ま と め

本遺構は、自然堤防の中央西寄りに営まれた竪穴住居跡である。高木遺跡における住居跡分布の西限の1つをなしている。集中豪雨で遺構が崩れてしまい、平面図・写真を提示することができない。

時期は、重複遺構と床面出土の土製丸玉の存在を勘案して、栗圀式期と想定しておきたい。

(菅原)

55号住居跡 S I 55

遺 構 (図149, 写真150)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。

営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部である。東側には、高い密度で遺構が分布している。

本住居跡は、40・44号住居跡に挟まれ、両者に切られている。また、直接の切り合いは認められないが、39・48・75号住居跡とも重複関係を有していたと考えられる。

本住居跡は、西周壁付近の一部しか残っていない。堆積土は、にぶい黄橙色砂質土が1層認めら

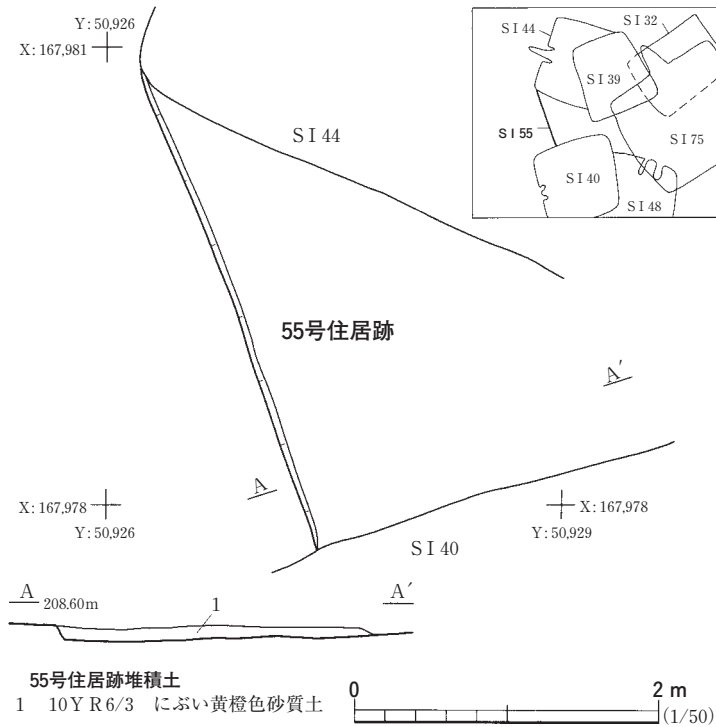


図149 55号住居跡

石製品1点の遺物が出土した。遺構の残り具合を反映して、数は少なかった。

図150-1は、石製紡錘車の未成品である。床面から出土した。ほとんど形は完成している。しかし、穿孔が行われていない。

まとめ

本遺構は、残りが悪く、詳細は知ることができなかった。

石製紡錘車の未成品が共伴したこと、本住居跡を切る2軒の住居跡が栗圀式期に比定されることから、時期は、栗圀式期に下限が求められる。

(菅原)

56号住居跡 S I 56

遺構 (図151, 写真151・152)

本遺構は調査区北部のO20グリッドから検出された竪穴住居跡で、カマドの周辺部分しか検出できなかった。本住居跡は複数の住居跡と重複しており、重複関係は62号住居跡→61号住居跡→56号住居跡となり、本住居跡が最も新しい。

本住居跡はL II中よりカマドの一部は検出できたが、住居跡のプランは検出できずに床面はL III上面まで掘り下げてしまっている。そのため、本住居跡として検出できた部分は島状に残ったカマドの部分だけである。カマドの燃焼部底面から想定すると、住居跡の床面はL II中から検出できたはずで、焚口前方にある焼土範囲はL IIIまで熱変していたために辛うじて確認することができた。

れただけである。自然堆積土と推定している。

床面は、貼床されず、掘形底面が平坦に整えられている。踏み締まりは認められなかった。検出面と床面の比高差は、7cmである。

本住居跡の平面形は、方形を呈していたと推定している。規模は、3.3m以上×2.5m以上を測る。住居跡方向は、遺存していた西周壁で見ると、発掘基準線北に対して、東に72°振れている。

カマド構築位置は、不明である。

遺物 (図150, 写真537)

本住居跡からは、土師器片5点、

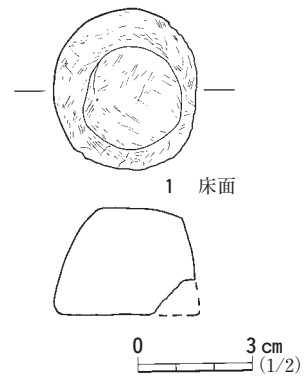


図150 55号住居跡出土遺物

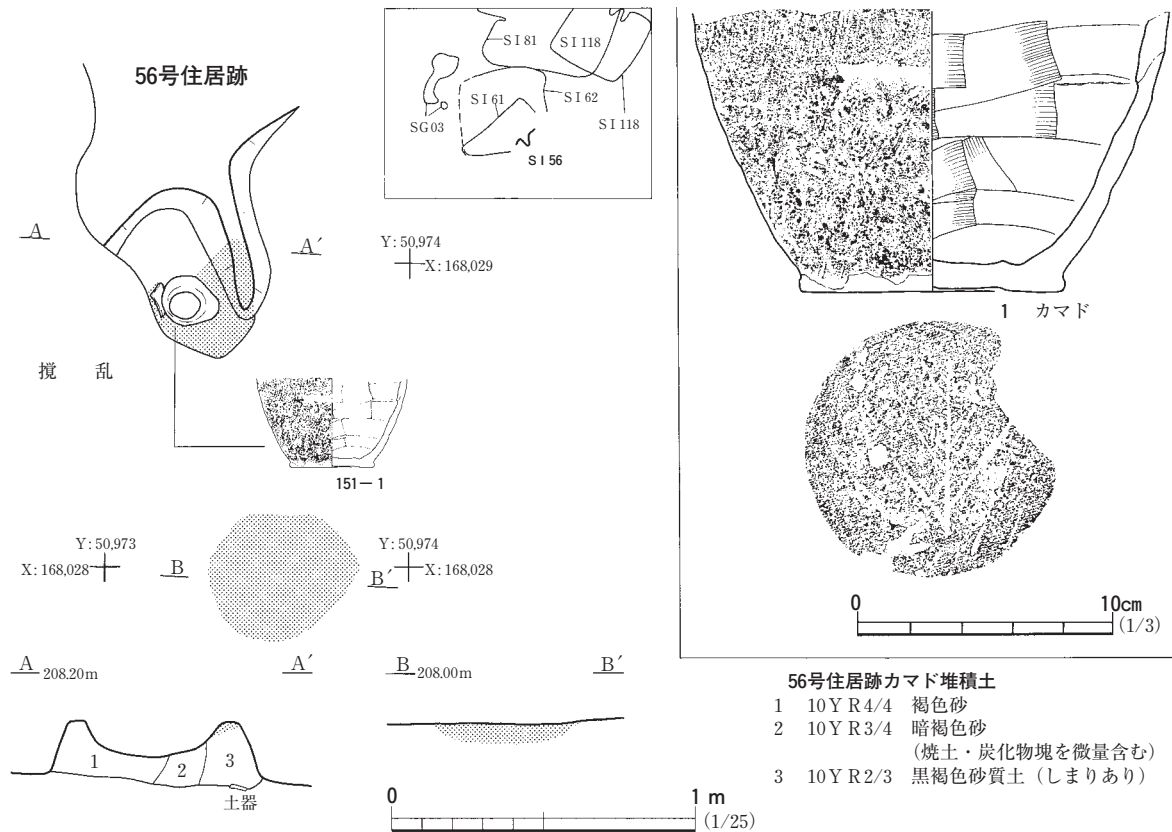


図151 56号住居跡・出土遺物

周壁はほとんど検出できなかったが、西周壁の傾きから主軸方位はN50°Eと想定できる。

本住居跡のカマドは西周壁に付設しているが、煙道や煙出しは確認できず、燃焼部の北袖周辺しか遺存しない。赤く焼けた燃焼面および北袖部分が検出できた段階でカマドと判断できたため、カマド内堆積土は確認できなかった。北袖部分は壁面より約50cmほど張り出しており、燃焼面のほぼ中央には上部が欠損した土師器の甕が伏せた状態で置かれていた。カマドの構築土には焼土塊や炭化物を含んでいる。

また、カマドから約50cmほど南方では、長軸約50cm、短軸約40cmほどの楕円形の焼土範囲を検出できた。焼土の範囲はLⅢ上面から確認できたが、想定される本住居跡の床面の高さからは約10～15cmほども焼けていることになる。そのため本住居跡とは別遺構の可能性もある。

遺物 (図151)

本住居跡から出土した遺物のうち、図示したものは土師器甕1点である。この甕はカマド内に伏せられていたもので、上半部分を欠いている。器面は荒れているがハケメ調整らしきものが確認できる。底部には本葉痕が認められ、その周縁に僅かながら粘土を貼って作られている。

まとめ

本住居跡は8世紀前半頃の遺物が出土する住居跡よりも新しいことから、それ以降に造られている。また、カマド出土遺物にハケメ調整が認められることから、本住居跡の時期は8世紀代におさまるものと考えられる。

(大波)

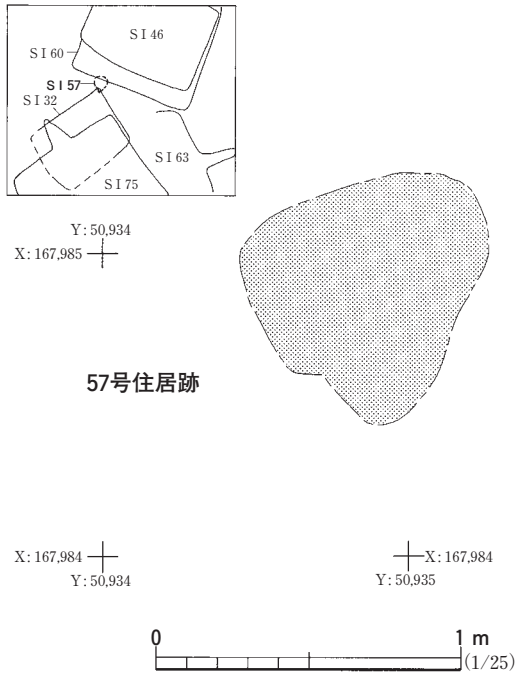


図152 57号住居跡

57号住居跡 S I 57

遺 構 (図152, 写真153)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれた場所は、自然堤防の中央平坦面にあたり、周囲に、数多くの住居跡が分布している。

重複関係は、60号住居跡を切っている。

本住居跡で残っていたのは、カマド燃焼部底面だけである。そのため、規模・平面形・細部施設の構造など、具体的内容については知ることができなかった。

遺物は、出土していない。

ま と め

カマドの燃焼部底面だけ残っていた竪穴住居跡である。

遺構内容と所属時期の詳細は、不明である。ただ、重複遺構との関係から、上限だけは栗圀式期に求めることが可能である。 (菅 原)

58号住居跡 S I 58

遺 構 (図153, 写真154~156)

本遺構は、調査区北部のN20グリッドから検出された竪穴住居跡である。

本住居跡は複数の住居跡と重複している。

新旧関係は、103号住居跡→59号住居跡→58号住居跡となり、本住居跡が最も新しく位置付けられる。

本住居跡は、旧道路直下のL II中より検出した。しかし、東周壁部分は検出できずにL III上面まで掘り下げてしまっている。

住居跡を分断するように水道管が通っていたため、その部分を利用して住居跡内堆積土を観察したところ4層に分層できた。そのうち③・④はカマドと考えられる燃焼部底面の上に堆積しており、住居跡内全体には暗褐色砂が堆積している。

住居跡の大きさは、遺存する西周壁で約4.2mを測る。また、北周壁は、遺存する部分で約3.6mを測る。

カマドと考えられる焼土面は、西周壁から約2.4mのところにあるので、ほぼ中央にあったものと仮定すると、東西幅は約4.8mとなり、本住居跡は、東西にやや長い方形を呈した竪穴住居跡となる。

深さは約15cmほどしか残っておらず、床面の踏み締まり等は確認できなかったが、L III上面まで

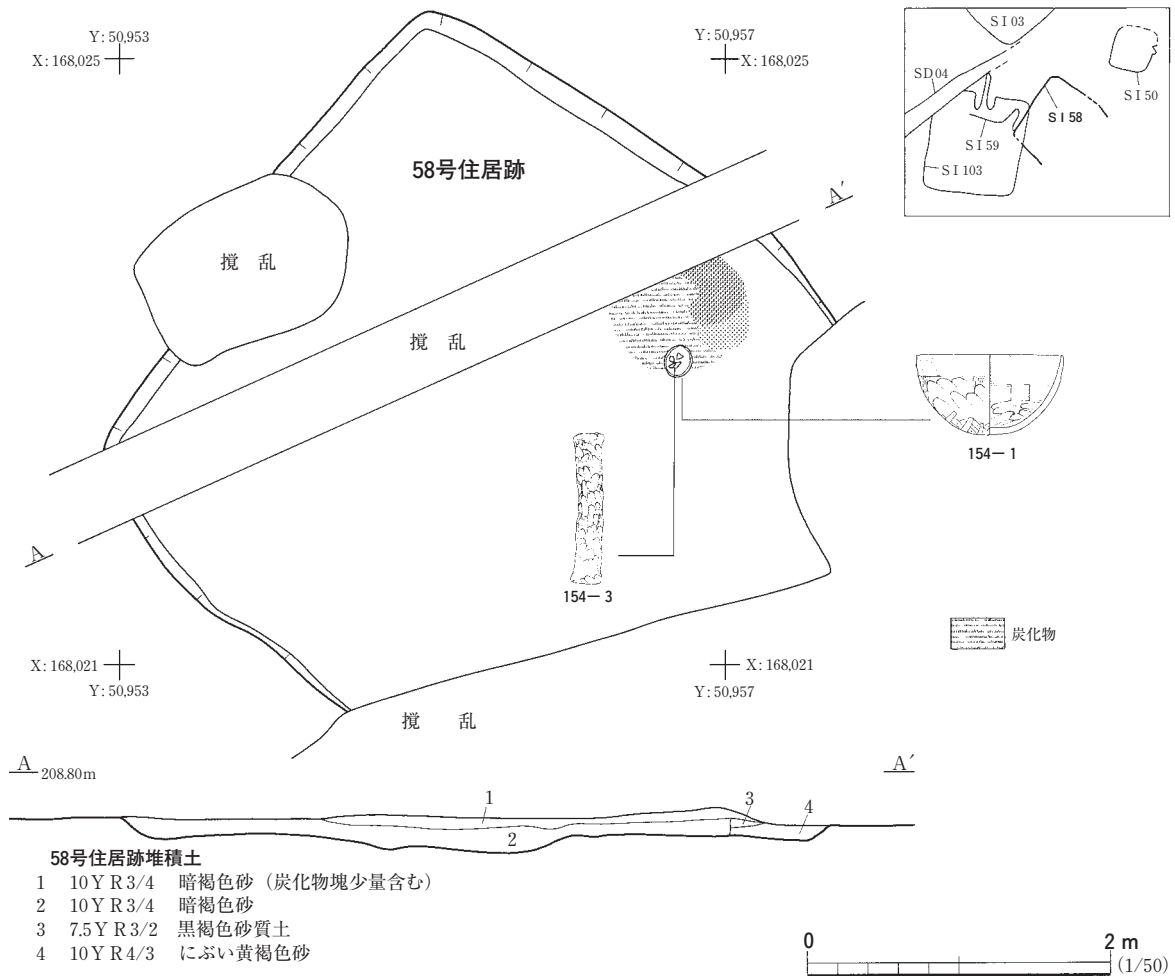


図153 58号住居跡

掘り込んで直接利用していたものと考えられる。

また、住居跡の主軸方位は、 $N45^{\circ}E$ と他の住居跡同様に阿武隈川の流路方向を意識して造られている。

カマドは確認できなかったが、北周壁の壁際から焼土跡が検出できたため、本来は北周壁にカマドが付設されていたものと考えられる。焼土跡からはカマドに使用されたとみられる土製の支脚も出土している。

その他に住居跡と関係する施設は確認されていない。

遺物 (図154, 写真537)

本住居跡からは、土師器片269点、土製品1点が出土した。これらの遺物のうち、図示したものは土師器2点と、土製品1点である。

図154-1は、土師器の大型の杯である。底部が丸く削り出されて半球形の器形を呈している。しかし、体部外面にはハケメ調整痕も認められ、調整技法は土師器の甕類と同じ技法が採用されている。

図154-2は土師器の小型甕で、体部外面がハケメ調整で、口縁部が外反する。底部の木葉痕は2

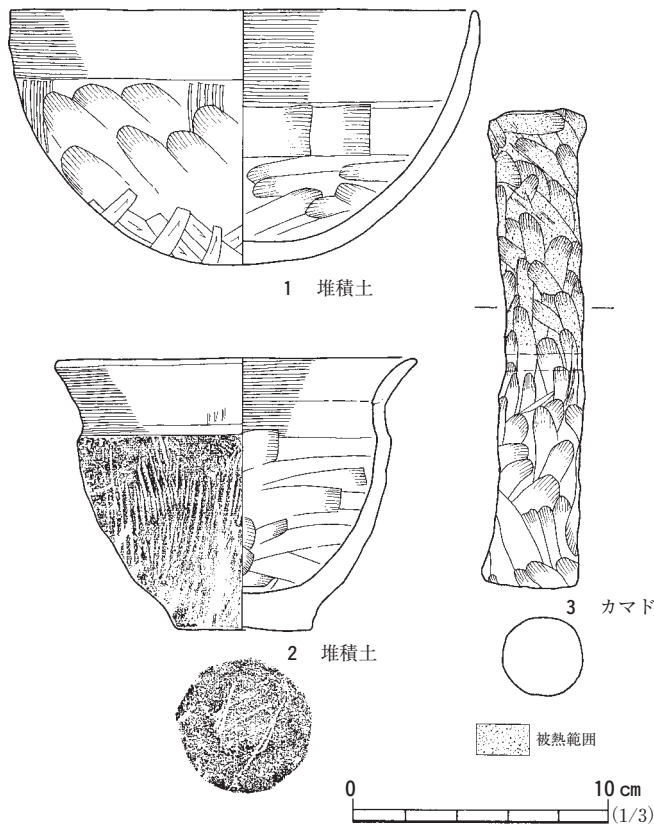


図154 58号住居跡出土遺物

枚分の葉脈が認められ、底部の周縁には薄く粘土を貼ってある。また、外面は部分的に熱変するため、煮炊具として使用されたものかもしれない。

図154-3は土製の支脚である。長さが約18cmほどの円柱状で、端部は平坦である。この支脚の中央には小さな穴が貫通しており、そこから約1/2ほどが片面だけ焼けている。

まとめ

本住居跡は大きさが約5m前後で、北周壁にカマドが付設された、本遺跡内で検出される一般的な住居跡である。

出土遺物や重複する他の住居跡との関係から、栗圀式期に営まれた住居跡と考えられる。(大波)

59号住居跡 S I 59

遺構 (図155, 写真155・157)

本遺構は調査区北部のN20グリッドから検出された竪穴住居跡である。本住居跡は複数の住居跡と重複しており、重複関係は103号住居跡→59号住居跡→58号住居跡となる。4号溝跡や58号住居跡に破壊されて、住居範囲を確定できなかった。

本住居跡は私道直下のLⅡ中より検出したが、西周壁から北周壁にかけては攪乱が著しく、住居跡の東半部分は58号住居跡に、西周壁部分は4号溝跡に破壊されてほとんど確認できなかった。辛うじて検出できたところはカマドの付設する南周壁と西周壁の一部だけである。住居跡内堆積土は4層に分層したが、深さが約10cmと浅いために堆積状況を判断できる材料にはならなかった。住居跡の大きさは遺存する部分で東西幅約5m、南北幅約5.4mを測る。床面はほぼ平坦である。主軸方位はN28°Eである。

カマド以外の付属施設は確認できなかった。

カマドは本集落ではあまり例のない南周壁に付設されている。カマド内堆積土は4層に分層でき、焼土塊や炭化物粒を含む $\ell 2$ の暗褐色砂が全体に堆積している。カマド内には甕が立てられて置かれており、甕を境に堆積土が異なっていた。カマド袖の遺存状態は悪く、構築土の灰褐色砂が僅かに残るのみである。

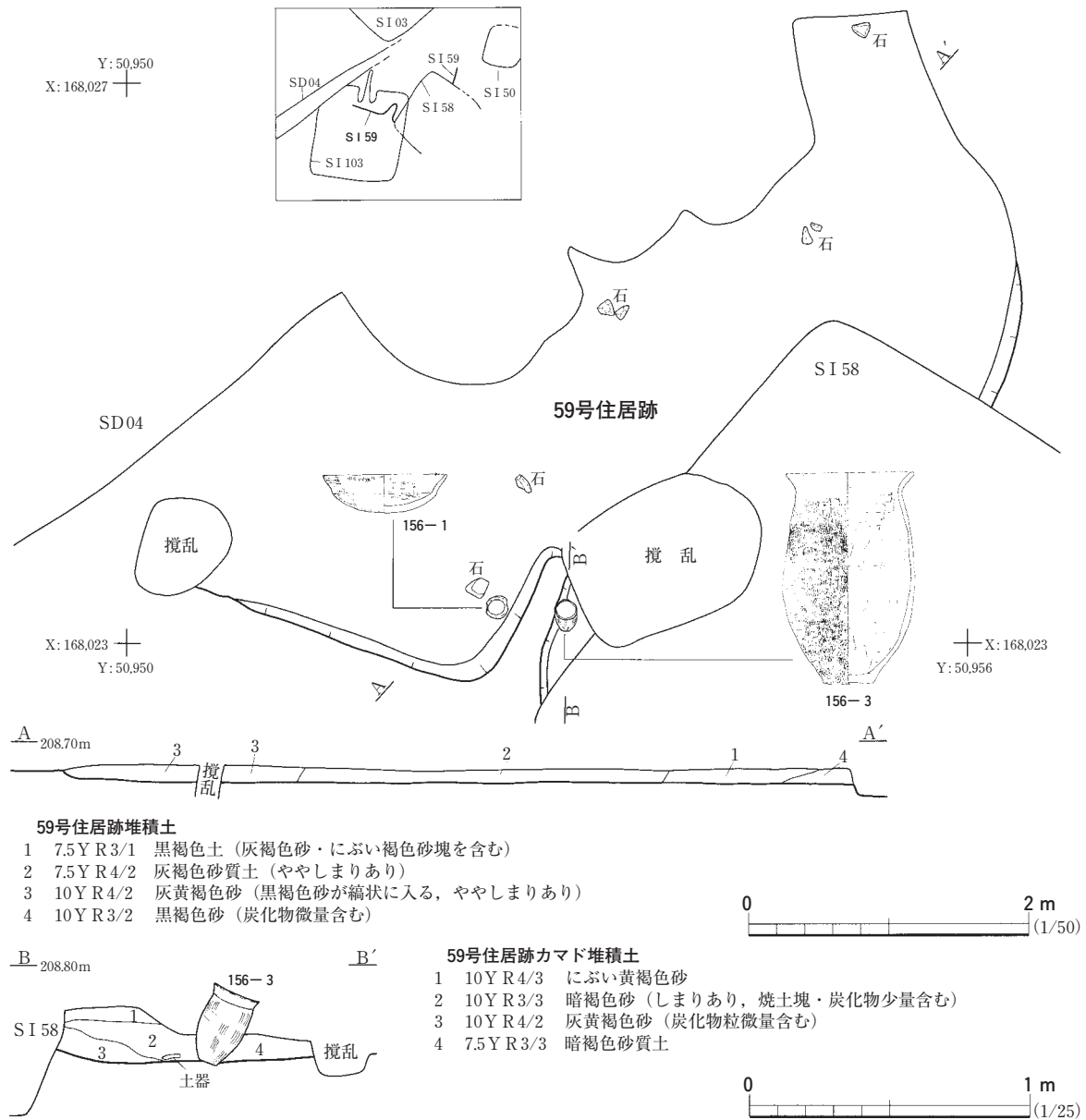


図155 59号住居跡

遺物（図156，写真537）

本住居跡から出土した遺物のうち，図示したものは土師器4点である。

図156-1は有段丸底の杯で，西袖脇の床面から正置した状態で出土した。この杯は有段丸底で，外面も黒色であるが，顕著なミガキがないため黒斑とみている。

図156-2は小型の椀で，丸底で口縁部が内湾する。口縁部が1/3ほどしか残らないため元の形はわからないが，口縁部の一端が張り出し，内外面とも同じような黒色を呈する。

図156-3は甕で，カマド内に置かれていたものである。この甕は胴部中央に最大径のある長胴甕で，体部外面がハケメ調整され，底部は周縁に粘土を貼っている。また，内面の下半部には黒色の付着物がみられる。

図156-4は体部外面がハケメ調整される無底式の甑である。体部内面にはヘラミガキが施されて

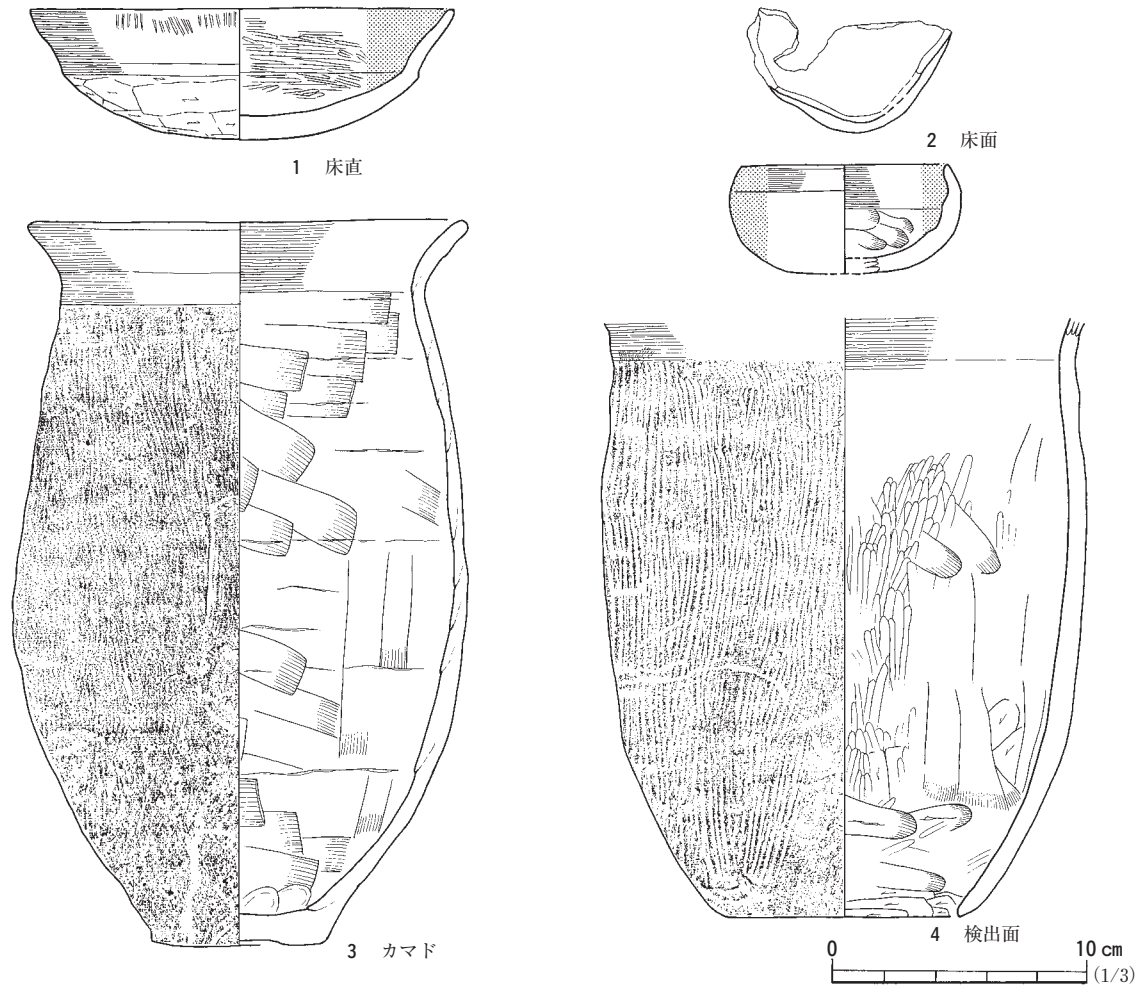


図156 59号住居跡出土遺物

いる。

ま と め

本住居跡は一般にあまり例のない南周壁にカマドを持つ住居跡である。住居跡の遺存状態は悪く、遺物も少ないが、カマド周囲から出土した土師器は日常的に使用されていた組み合わせとみられる。出土遺物と他の住居跡との重複関係から、本住居跡は栗圀式期に営まれている。 (大波)

60号住居跡 S I 60

遺 構 (図157~159, 写真158~165)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面である。

本住居跡は、46号住居跡の建て替え前に営まれていたものと考えている。同住居跡の直下で検出され、主軸方向とカマド構築位置が一致する。規模は、46号住居跡より大きく、建て替え時に南周壁側が縮小されたことが判明している。他に、33・52・53・57号住居跡とも重複しており、本住居跡はそれらに切られている。遺存状態は、良好であった。

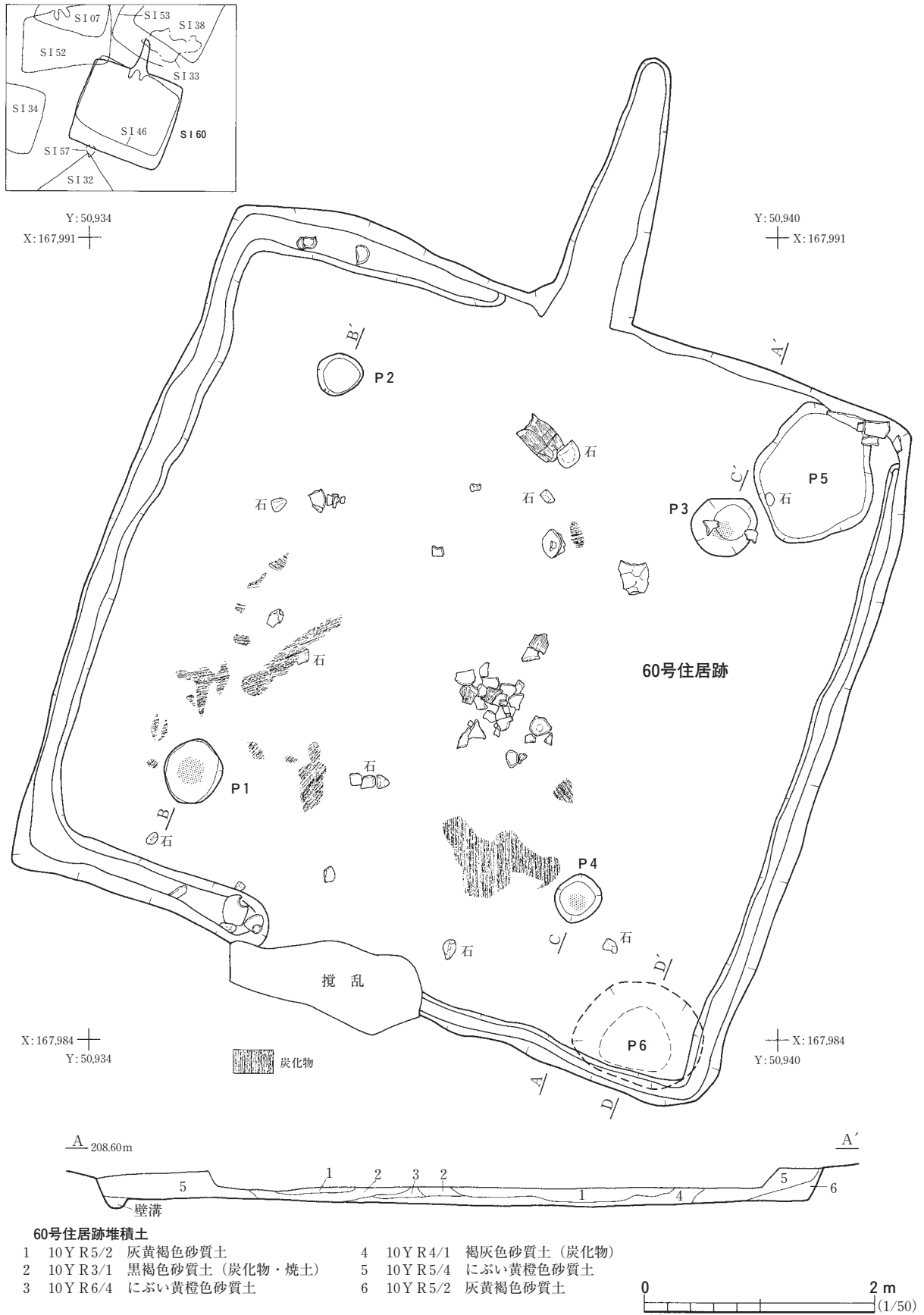


図157 60号住居跡

本住居跡の平面プランは、整った正方形を呈している。歪みがなく、向かい合う周壁どうしの長さが一致する。規模は、東西6.6m、南北6.3mを測り、大型の部類に属している。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に21°振れている。

堆積土は、6層に分層された。断面はレンズ状を呈しており、このうち、床面を直接覆うℓ4には、炭化物が充満していた。また、その直上層のℓ2でも、焼土・炭化物を多量に含んでいた。このことは、本住居跡が火災に遭ったことを示している。ただ、通常の火災住居跡と比べると、炭化材の残りが悪く、検出される焼土も少なかった。したがって、短時間のうちに鎮火したか、上屋のほとんど無くなった廃屋が焼失したかのいずれかと考えている。仮に、後者だとすれば、意図的なことも考えられよう。

床面は、貼床されず、掘形底面のLⅢがそのまま利用されている。検出面と床面の比高差は、30cmを測った。周壁直下には、壁溝が巡り、攪乱で破壊された南辺中央以外は全周した。幅22～28cm、深さ10～25cmを測る。

本住居跡では、4本柱の痕跡が検出されている。P1～4が、それで、住居跡隅を結んだ対角線上に規則正しく配置されている。平面形は、いずれも円形を呈し、大きさは、径32～50cm、深さ30～32cmである。このうち、P1・3・4で、径7～10cmの柱痕跡が検出された。

柱間寸法は、P1－P2間が3.6m、P2－P3間が3.5m、P3－P4間が3.5m、P4－P1間が3.5mを測る。

カマドは、北周壁中央で検出された。燃焼部は、火災前に壊されていたと考えられ、袖がまったく残っておらず、この部分の周壁ぎわまで火災の形成層が及んでいた。この所見は、本住居跡が廃屋を焼却処分したとみる考えの傍証となるかもしれない。底面には、棒状の自然石を利用した支脚がみられ、位置は、左に偏っていた。

煙道部は、周壁から2.4m直線的に住居外へ伸びている。堆積土は4層に分層された。

カマドの右脇で、P5が検出されている。その位置から、貯蔵穴と考えられる。1.2m×1.0mの不整形をなすもので、深さ20cmを測る。また、南東隅の床面でも、同規模のP6が検出されている。これは床下土坑と考えられる。人為的に埋められており、その上面を掘り込んで壁溝が構築されている。

遺物 (図160～162, 写真538～540)

遺物は、土師器片471点、須恵器片1点が出土した。床面や貯蔵穴底面で、図示可能な15点が得られている。他に、ℓ1出土の2点を図示した。

図160-1～6は、有段丸底の土師器杯である。1は、強く外反する口縁部が特徴的で、外面はヨコナデ調整されている。これだけがℓ1から出土した。残る5点は、床面ないしP5底面の資料である。器形・調整技法に、類似した特徴が備わっている。口縁部が、内湾ないし直立気味に立ち上がり、外面に、例外なくヘラミガキ調整が施されている。

図160-7は、土師器小型甕である。散らばった状態で床面から出土した。器形は、口縁部が外反

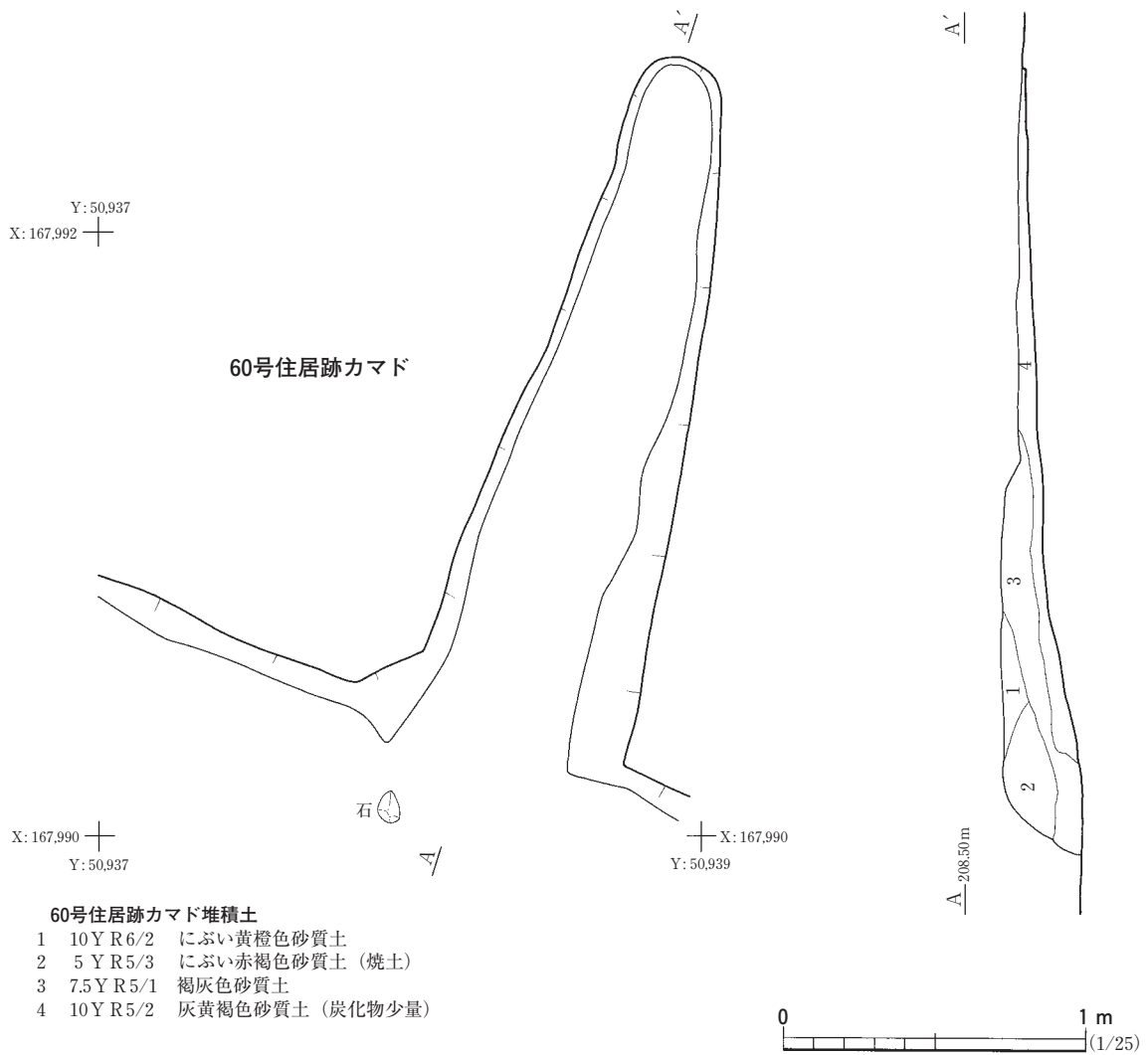
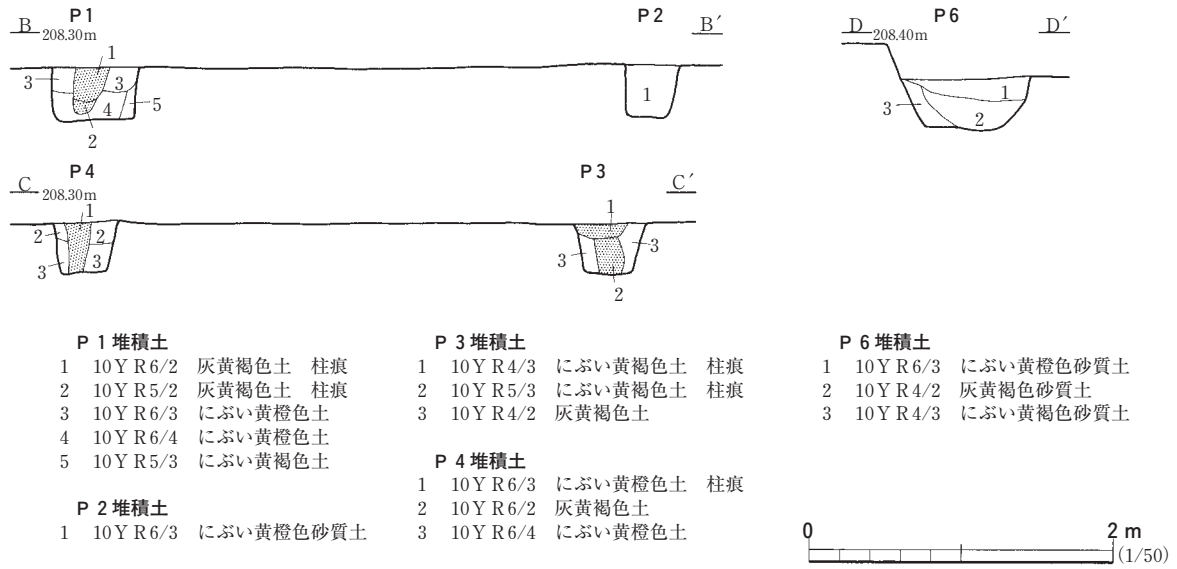


図158 60号住居跡カマド

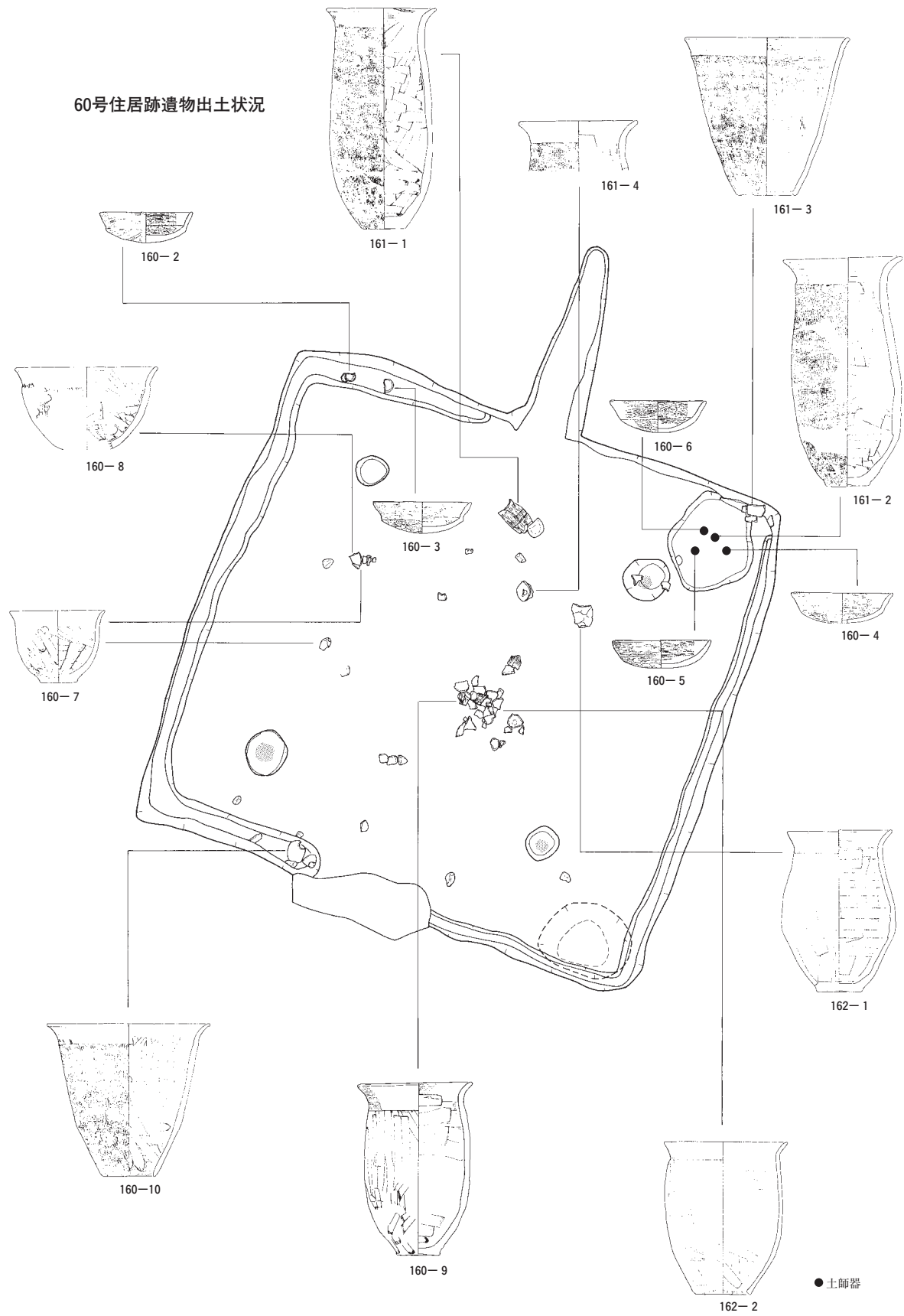


図159 60号住居跡遺物出土状況

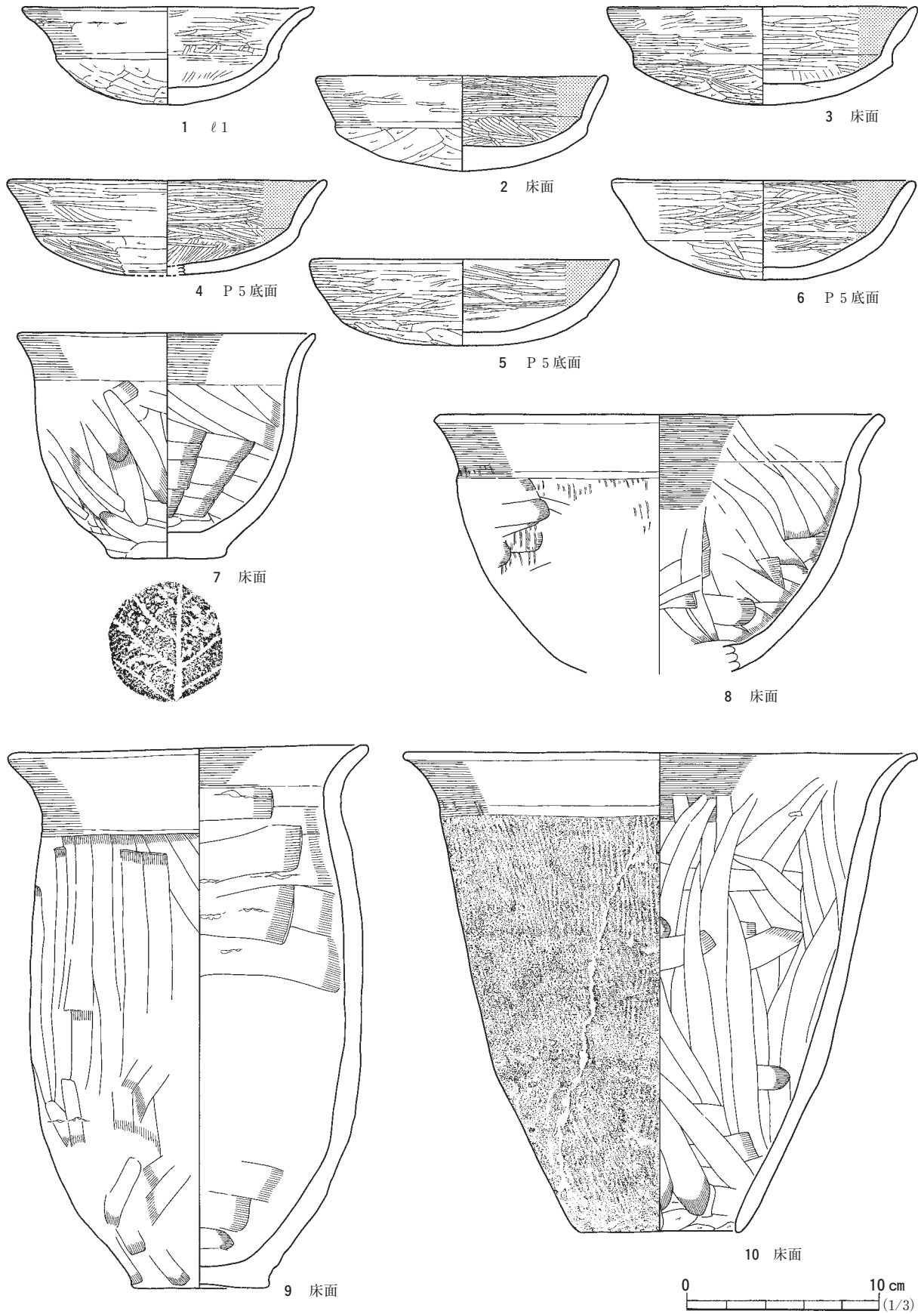


图160 60号住居跡出土遺物 (1)

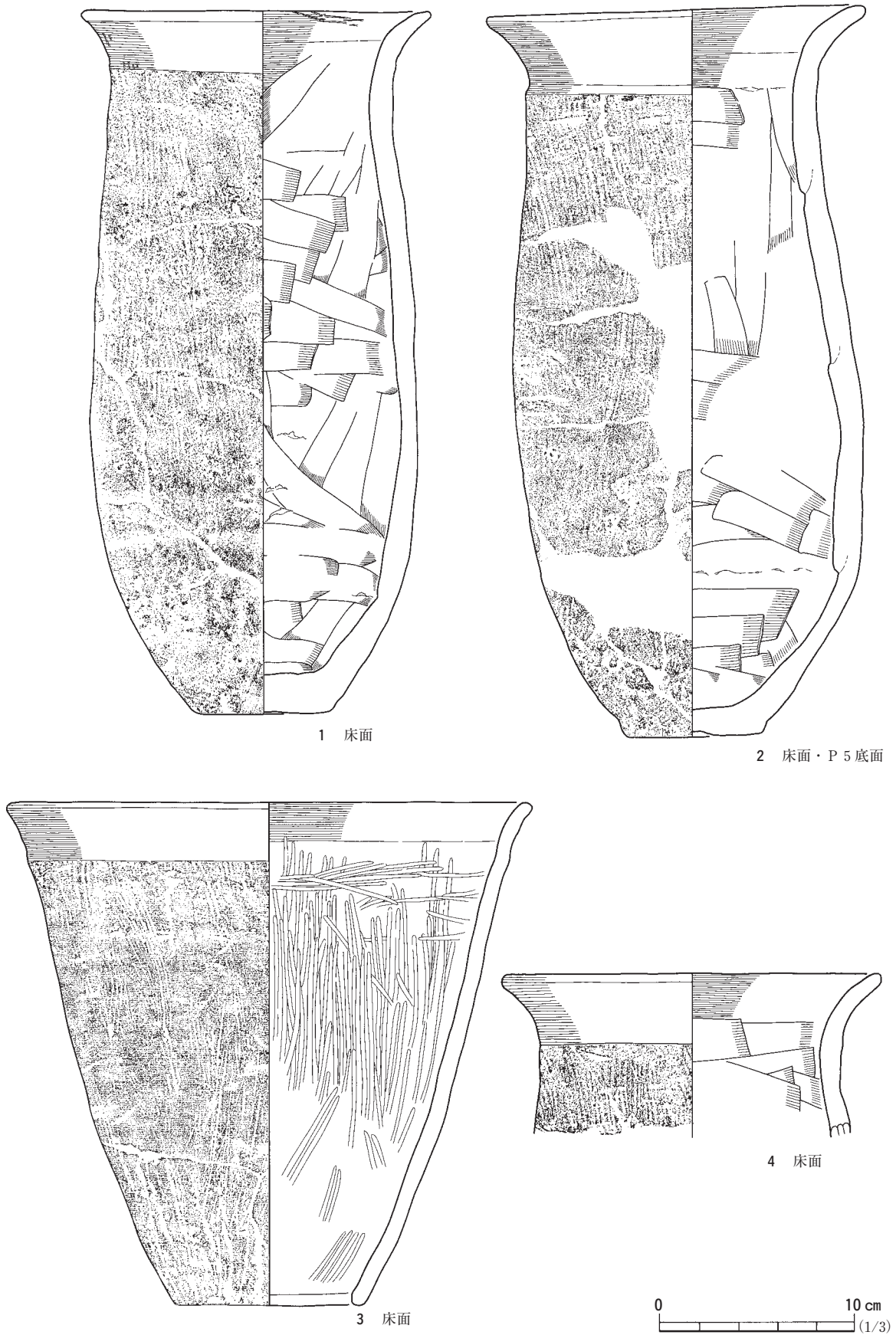


図161 60号住居跡出土遺物(2)

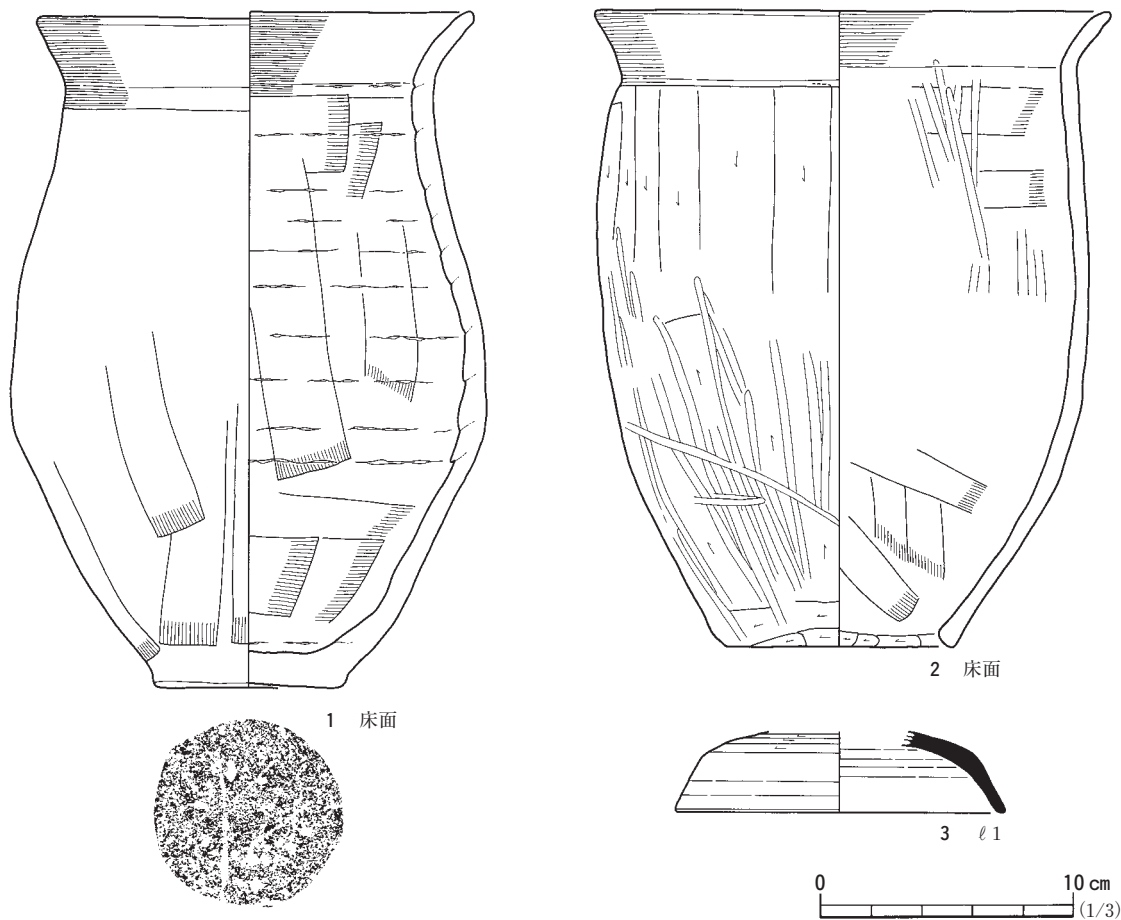


図162 60号住居跡出土遺物（3）

気味に開き、胴部中央が丸みを帯びて、下に窄まっている。胴部外面は、ナデ調整されている。また、底部外面に木葉痕が観察される。

図160-8は、中型の土師器甕である。図160-7の破片と一緒に、床面から出土した。底部を欠いている。器高：口径比が小さく、器形は甕に類似する。しかし、内面の口縁部下にリング状の煤が付着しており、甕とみる方が妥当と考えている。胴部外面は、ハケメ調整のあと、ナデ調整が加えられている。

図160-9，図161-1・2・4，図162-1は、長胴の土師器甕である。図160-9と図162-1は、住居跡中央の床面で、破片と一緒に散らばっていた。どちらも、当該器種としては中型の製品であり、器高30cmを下回る。外面はナデ調整されている。図160-9は、口径が胴部最大径を上回っており、胴部に張りが無い。逆に、図162-1は、胴部最大径が口径を上回っており、中位に強い膨らみをもつ。底部外面に、木葉痕が観察される。図161-1・2は、相似形をなしており、細長い胴部を有するものである。器高：口径は、2.0前後で、当該器種の中でも、長胴化の著しいグループに所属する。前者がカマド手前の床面、後者がP5底面から出土した。胴部外面は、ハケメ調整されている。残る図161-4も、これと同様の長胴甕と推定される。しかし、口縁部のみで、詳細は知ることができない。床面から出土した。

図160-10・図161-3は、土師器甕である。断面逆台形をなしており、大きさが近似している。また、外面調整もハケメで一致しており、同一規格の製品と見なされる。図160-10は、南周壁上で出土した。口縁端部は外反し、玉縁状をなす。図161-3は、P5肩部の周壁ぎわで、床面から出土している。

図162-3は、須恵器杯蓋の破片である。l1から出土した。口縁は「ハ」の字状に開き、端部は丸く収められている。天井部外面は、回転ヘラケズリ調整が施されている。

ま と め

本遺構は、自然堤防の中央平坦面で検出された火災住居跡である。炭化材の残りが少なく、火災前にカマド燃焼部は壊されていた。したがって、廃屋が焼却処分された可能性が想定される。

また、本住居跡は、出土遺物に恵まれていた。一括性が高く、好資料である。その内容から、営まれた時期は、栗圀式期に比定される。 (菅原)

61号住居跡 S I 61

遺 構 (図163, 写真166)

本遺構は調査区北部のO20グリッドから検出された竪穴住居跡で、西周壁部分しか検出できなかった。本住居跡は複数の住居跡と重複しており、重複関係は62号住居跡→61号住居跡→56号住居跡となる。

本住居跡は私道直下のLⅡ中より西周壁を検出したが、東側部分は確認できずにLⅢ上面まで掘り下げてしまっている。住居跡内堆積土は3層に分層でき、西壁際にややしまりのある褐色砂が三角堆積していることから自然堆積と考えられる。住居跡の大きさは西壁で約4.2mを測り、一辺が約

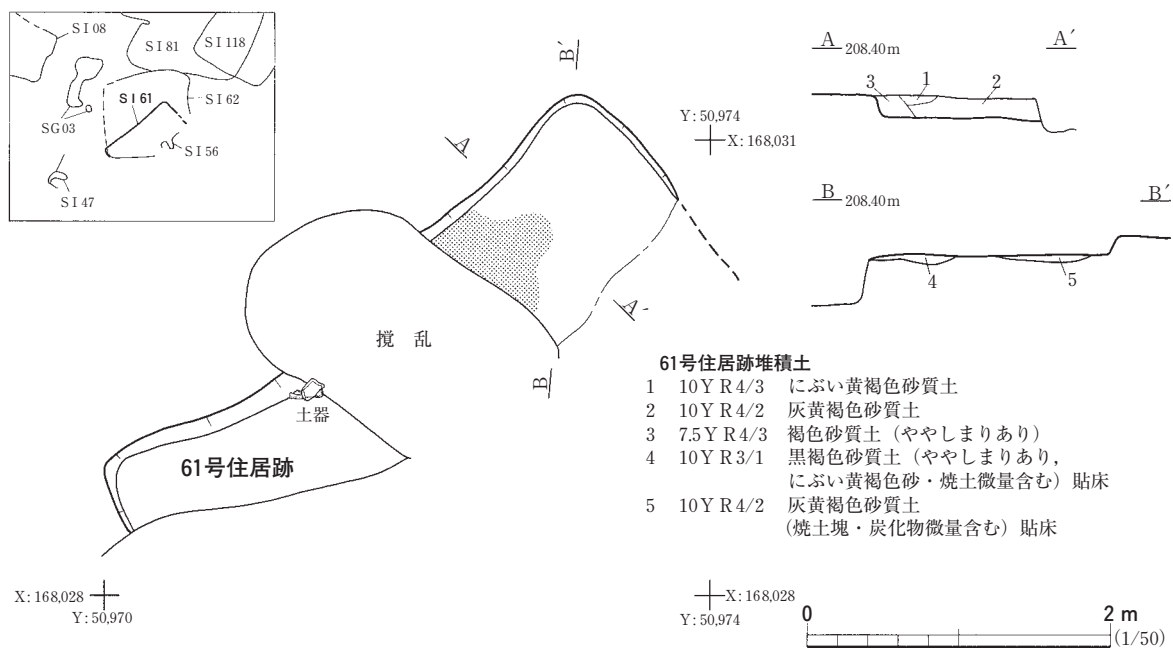


図163 61号住居跡

4 mほどの住居跡と推測できる。深さは約15cmほどしか残らず、壁は直立して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、部分的に貼り床が認められる。貼床は焼土塊や炭化物を含み、しまりのある黒褐色砂質土が認められる部分もある。カマドなどの付属施設は確認できなかったが、西周壁の中央からやや北寄りのところには赤く熱変した面的な広がり認められる。カマドの位置は攪乱のため判断できなかったが、他の住居跡の例にも多いことから、西周壁に付設していた可能性が考えられる。

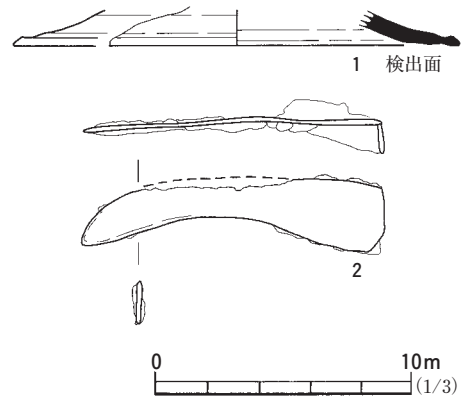


図164 61号住居跡出土遺物

遺物 (図164, 写真540)

本住居跡から出土した遺物は少なく、図示したのは須恵器1点と、鉄製品1点である。

図164-1は須恵器の蓋の細片である。かえりはなく、表面がやや赤みを帯びた色調であるため、火を受けている可能性もある。

図164-2は鉄製品で、鎌の刃である。曲刃鎌で、刃先が湾曲しており、基部を折り曲げて柄に装着していたようである。

まとめ

本住居跡の北側に重複する62号住居跡は出土遺物から8世紀頃のものと考えられる。62号住居跡は本住居跡よりも先に築かれているため、本住居跡は少なくともその後造られたものである。検出面ではあるが本住居跡から出土した須恵器の杯蓋と同様のものが、62号住居跡のカマドの燃焼部底面の掘形から出土している。そのため、時期的にはあまり隔たらずに築かれたものと推測する。

(大波)

62号住居跡 S I 62

遺構 (図165, 写真167~169)

本遺構は調査区北部のO20グリッドから検出された堅穴住居跡である。本住居跡は複数の住居跡と重複しており、それぞれとの関係は62号住居跡→61号住居跡→56号住居跡となる。

本住居跡は旧道路直下のL II中より検出できたが、北西隅は水道管によって破壊され、南側部分は61号住居跡と重複し、周壁が確認できた部分は北東隅だけである。しかし駄目押しの段階で、南西隅から壁溝と1号ピット跡が検出できたため、およその住居跡の範囲を捉えることができた。住居跡内堆積土は含有物の違いにより細かく分層したが、大きくみると黄褐色砂と黒褐色砂が交互に堆積しており、 $\ell 1$ が後から流れ込んでいる。また、 $\ell 8$ は他の砂層と異なりしまりのある黒褐色土であるため、住居跡の使用時から堆積していたなど、別過程で堆積したものと考えられる。

住居跡の大きさは1辺が約4.5mで、ほぼ正方形である。主軸方位がN 5°Wと、ほぼ真北と一致する。深さは遺存状態の良い北周壁で約30cmを測り、直立して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、住

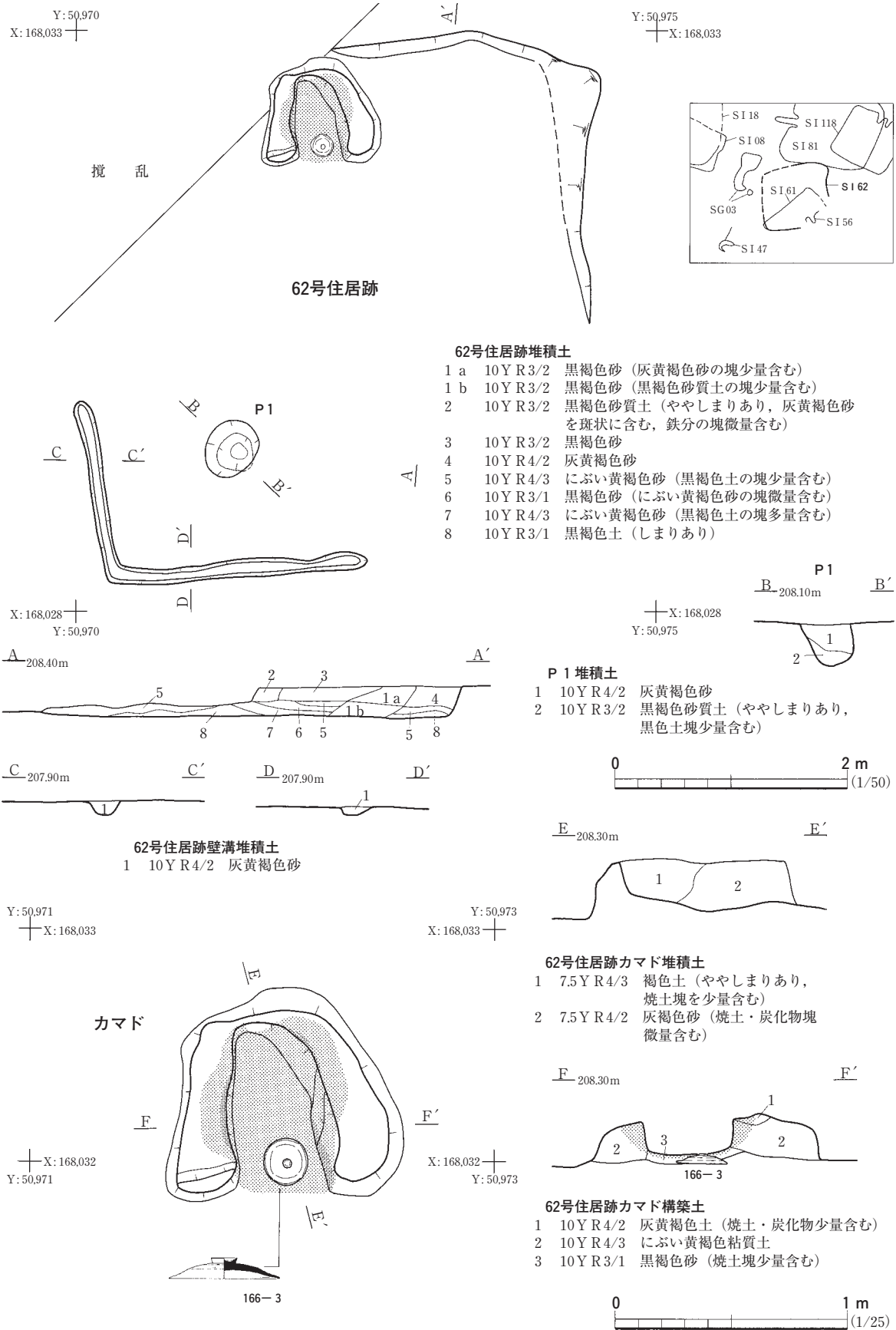


図165 62号住居跡

居跡の南西隅に壁溝と1号ピットを検出した。壁溝は南西隅に合うようにカギ状で、長さは西壁側が1.7m、南壁側が2.3mで、幅は約15~20cm、深さが10cm前後である。1号ピットは支柱穴のうちのひとつと考えられ、検出面で長軸約50cm、短軸約40cmの楕円形で、深さは約40cmほどである。ピットの掘形からは、柱材は北西方向に傾いて立てられていたようである。

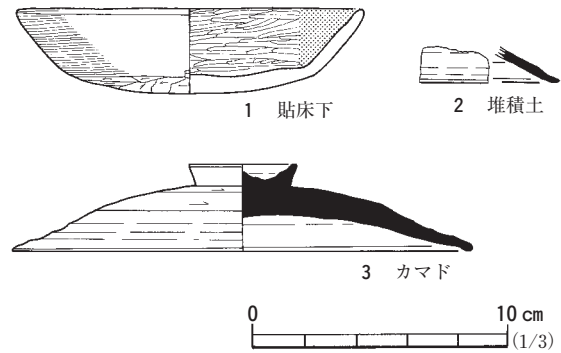


図166 62号住居跡出土遺物

カマドは北西隅の周壁が検出できなかったことから、カマドが独立して配置されているようであるが、本来は北周壁の壁面に付設していたものと考えられる。煙道や煙出しは確認できなかったが、燃烧部は比較的残りが良く、カマド袖は壁面から約90cmほど張り出しており、両袖間は約40cmを測る。燃烧部内の堆積土は2層に分層でき、焼土や炭化物を微量ながら含んでいる。カマドは燃烧部全体が熱を受けており、側壁側が強く焼けている。燃烧部底面は焚口側がやや高めにあって、奥壁は直立していた。カマドは底面を褐色砂で築いてから、黄褐色の粘質土で上部構造を築いていた。また、図面上には須恵器蓋が図示してあるが、これはカマドの底面に埋められていたものである。焚口側が一段盛り上がっていたのも、あらかじめ須恵器蓋が埋められていたためと考えられ、カマド祭祀との関連性がうかがわれる。

遺物 (図166, 写真540)

本住居跡から出土した遺物のうち、図示したものは土師器1点、須恵器2点である。

図166-1は土師器の杯で、貼床下から出土している。内黒の有段丸底の杯であるが、平底化の傾向がうかがわれる。

図166-2・3は須恵器の蓋で、かえりは認められない。2は細片であるが、胎土は精選されている。3はカマド掘形から出土したもので、ほぼ完形であるが、熱を受けて変色している。器形は美濃須衛・湖西窯に代表される東海系の笠形といわれる形に影響を受けたと思われる。

まとめ

本住居跡はカマド内に埋められていた須恵器の杯蓋から8世紀前半頃と考えられ、貼り床下から出土した土師器の杯とも時期は一致する。本住居跡が営まれたのは8世紀以降で、この時期になると集落の中心が調査区北部へと移動するようである。本遺跡の北側に位置する北ノ脇遺跡からもこの時期の住居跡の検出例が多い。

(大波)

63号住居跡 S I 63

遺構 (図167, 写真170・171)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは自然堤防の中央平坦面で、他の遺構との重複関係は認められない。

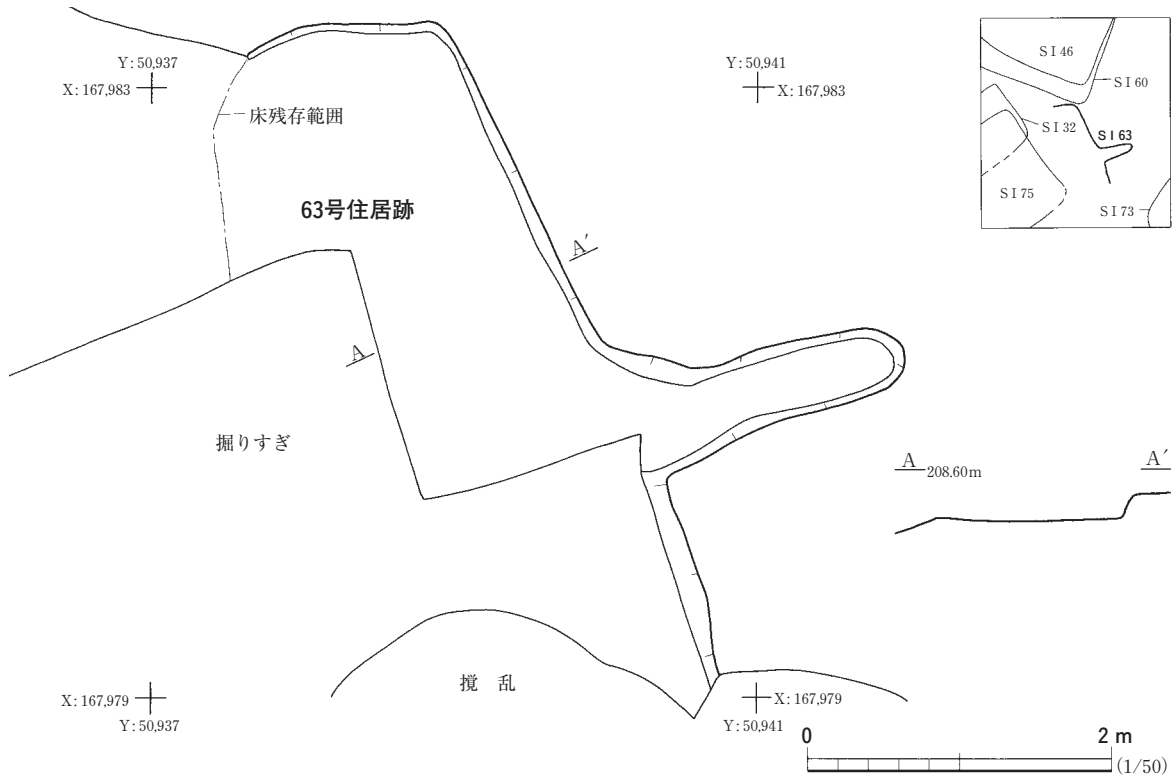


図167 63号住居跡

本住居跡は、破壊が著しい。東周壁付近が一部残っただけである。床面は、貼床されず、掘形底面のLⅢが平坦に整えられている。踏み締まりは認められなかった。検出面と床面の比高差は、10～13cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形を呈していたと推定される。規模は、東西2.1m以上、南北5.0m以上を測り、大型に入る。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に65°振れている。

カマドは、東周壁から検出された。煙道部は、長さ1.6mを測る。燃焼部は、袖が残っていなかった。

ピット類は検出されていない。

遺物 (図168, 写真540)

遺物は、土師器片241点、須恵器片2点、鉄製品1点が出土した。図示遺物は3点で、遺構に伴うものは無い。どれもℓ1で出土した。

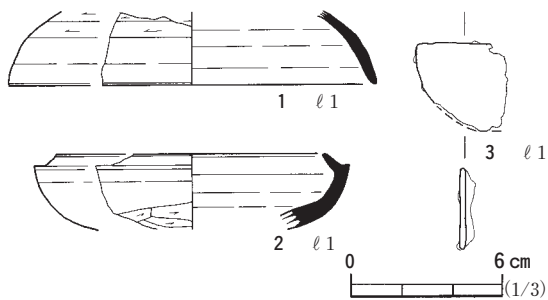


図168 63号住居跡出土遺物

図168-1は、須恵器杯蓋の破片である。口縁部は、「ハ」の字状に開いており、天井部は回転ヘラケズリされている。

図168-2は、須恵器杯身である。口縁部は短く、内傾している。底部外面は、手持ちヘラケズリ調整されている。

図168-3は、鉄鎌の破片である。

ま と め

本遺構は、自然堤防の中央平坦面に営まれた竪穴住居跡である。破壊が著しく、詳しいことは知ることができなかった。

時期は、共伴遺物に恵まれず、重複遺構も無いことから、不明である。(菅原)

64号住居跡 S I 64

遺 構 (図169・170, 写真172~174)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。

営まれたのは、自然堤防の中央西寄りである。このため、周辺の微地形は、阿武隈川の流れる西側に向かって緩やかに傾斜している。遺構は、高木遺跡における住居跡分布の西限の1つをなしている。

本住居跡は、主軸を揃えて重複する3軒の住居跡の北端に位置している。新旧関係は、その中で最も古く、7・54号住居跡に切られている。また、35・52号住居跡に切れ、さらに、53号住居跡にも切られている可能性がある。つまり、本住居跡は重複する周辺遺構の中で最も古く位置付けられるものである。

遺存状態は、54号住居跡の削平のため、南側で残りが悪かった。遺構平面図に一点鎖線で示したラインより南は、貼床土がほとんど削られていた。南周壁の位置は、掘形の立ち上がりで確認している。

堆積土は、2層に分層された。断面は、レンズ状を呈しており、遺構は自然埋没したと考えている。

床面は、粘土粒を含むにぶい黄橙色砂質土で貼床されている。ただ、上述したように、南側は削られて残っていなかった。検出面と床面の比高差は、10~13cmを測る。

本住居跡の平面プランは、南東隅が突出気味の正方形を呈している。規模は、東西5.0m、南北5.0mを測り、中型の部類に属する。

住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に11°振れている。

カマドは北周壁中央で検出された。煙道部は、周壁から1.1m伸びており、燃焼部は、袖長48cm、焚口幅83cmを測る。燃焼部底面は、ほとんど酸化していなかった。

本住居跡では、南西隅床面で、貯蔵穴と考えられるP1が検出されている。これは、カマド脇に設けられたものではないが、110cm×105cmの不整円形を呈し、土師器杯・小甕・長胴甕・甌の一括セットが出土している。床面からの深さは、8cmを測る。

遺 物 (図171・172, 写真540~542)

遺物は、土師器片275点が出土した。図示遺物は7点で、そのうち4点が上述したP1の一括遺物である。

図171-1は、土師器甌である。無底式の大型品で、器高26.7cmを測る。器形の特徴は、胴部上位

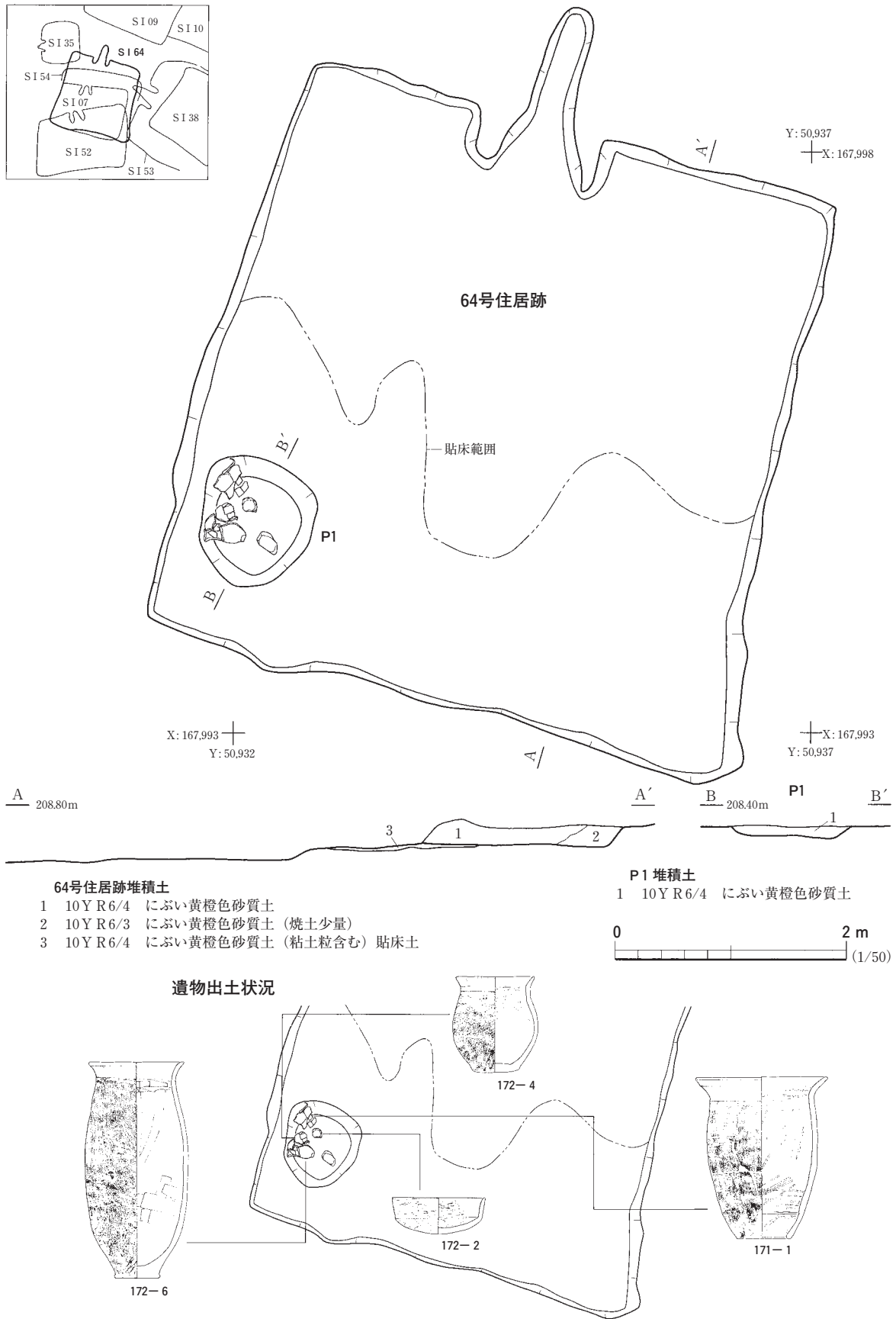


図169 64号住居跡

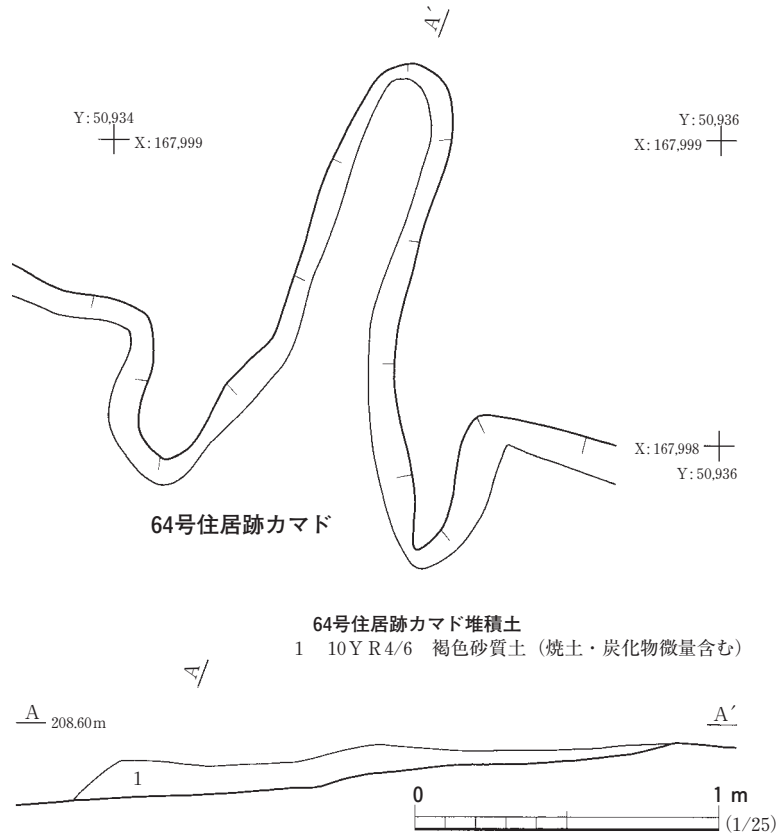


図170 64号住居跡カマド

は、わずかに8.9cmしかない。口径と器高が等しく、寸詰まりの形態をなしている。胴部外面は、ナデ調整である。4は、器高が高く、いくぶん細長の胴部形態を呈している。外面はハケメ調整されている。

図172-5・6は、長胴タイプの土師器甕である。5は、底部を欠いているが、器高40cmを越え、非常に細長い胴部を有している。胴部は、全体に張りが無く、底部近くが下膨れとなっている。外面は縦位にヘラケズリされている。6は、胴部の最大径が中央にあり、器形全体の均整が取れている。外面は、ハケメ調整で、底部に木葉痕が残る。

まとめ

本遺構は、自然堤防の中央西寄りに営まれた竪穴住居跡である。高木遺跡における住居跡分布の西限の1つをなしている。重複関係が著し

に膨らみがあり、口縁端部は平坦面をなしている。外面は、ハケメ調整され、内面には入念な縦位のヘラミガキ調整が施されている。

図172-1・2は、土師器杯である。1は、口縁部が強く外反する有段丸底の杯で、口縁部と底部の境には、明確な段をなさない。内外面は、ヘラミガキ調整されている。2は、須恵器模倣杯に分類される。器高が高く、内外面はヘラミガキ調整されている。

図172-3・4は、土師器小型甕である。3は、当該器種としても、小さな製品であり、器高

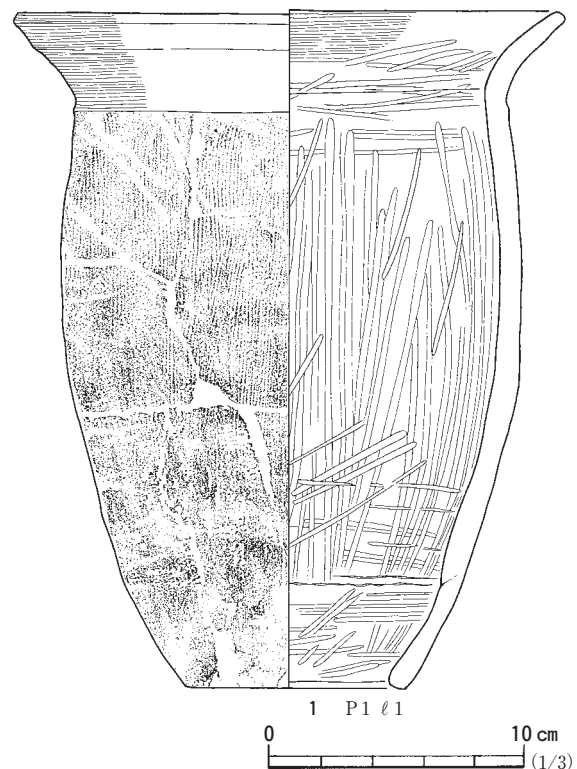


図171 64号住居跡出土遺物 (1)

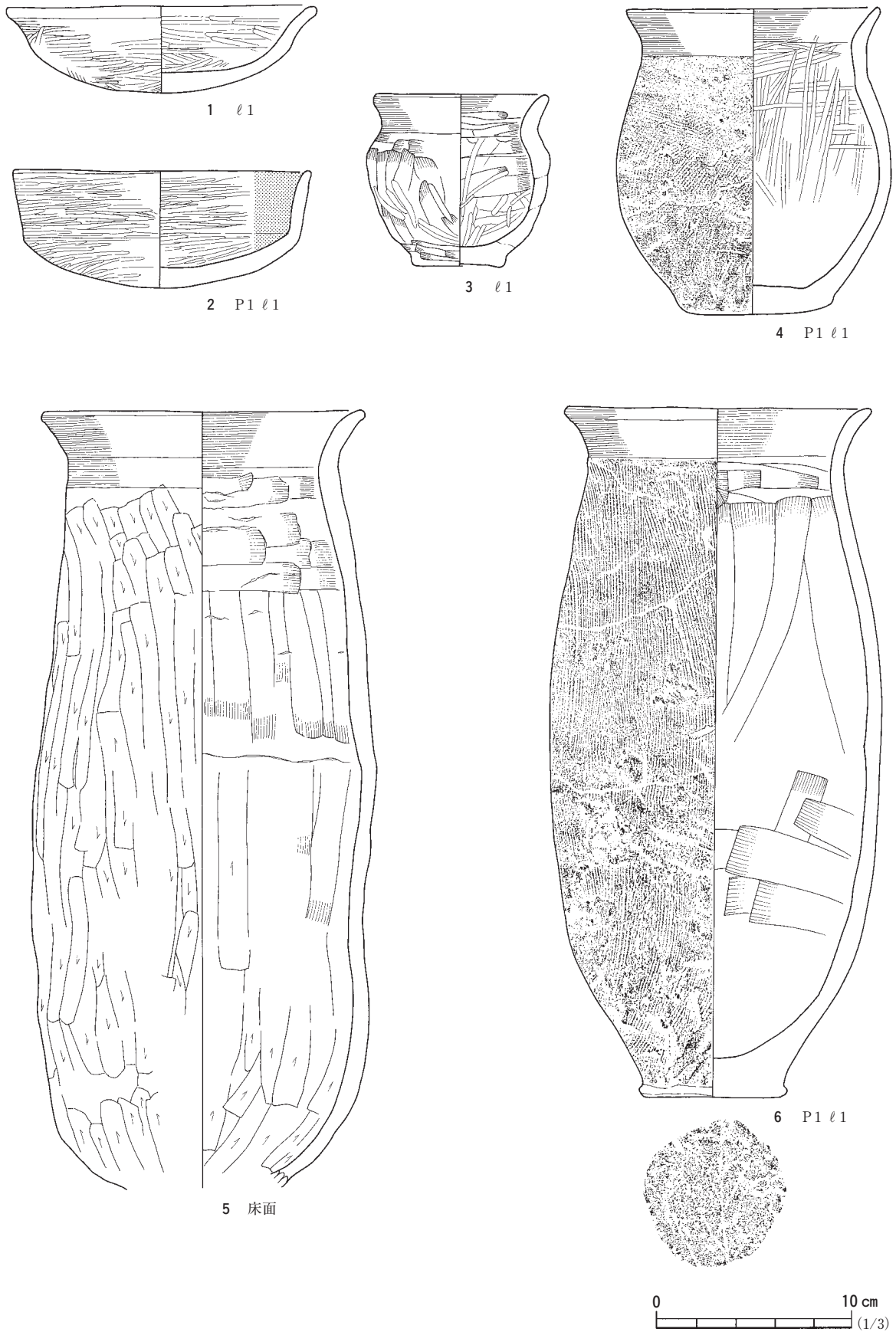


图172 64号住居跡出土遺物（2）

く、そのどれよりも古い。

遺物は、貯蔵穴から、土師器食膳具・煮炊具の一括セットが得られた。

時期に関しては、共伴遺物の特徴から、栗圀式期に比定されると思われる。(菅原)

65号住居跡 S I 65

遺 構 (図173, 写真175・176)

本遺構は調査区北部のO20グリッドから検出されたが、検出できた部分は焼土跡だけである。しかし焼土跡の周囲からは多数の土器が出土し、付近の竪穴住居跡の密集状況を考慮すると、本遺構も竪穴住居跡の可能性が高い。そこで本報告では竪穴住居跡として報告することとし、遺構配置図には破線で想定線を記している。また、本住居跡の北西には47号住居跡が位置し、本来は重複するものと思われるが、検出状況から新旧関係は判断できなかった。

L II 中からは住居跡らしいプランを確認できなかったためL III 上面まで掘り下げたが、遺物が集中して出土することから、その地点を島状に残し、土層ベルトを設定した。その断面からは遺物の集中する部分の堆積土は3層に分層でき、 $\ell 3$ は壁際の三角堆積にもみれるが、壁の立ち上がりや床面は判断できなかった。焼土跡は隣接した2か所から検出でき、北西に位置するもののほうが小さいがよく焼けていた。大きさは北西側にある焼土跡が長軸約50cm、南東側が約70cmである。住居跡の想定線は焼土跡をカマドとし、住居跡内堆積土の $\ell 3$ を壁際の崩落土として作成している。

遺 物 (図174, 写真541・542)

本住居跡から出土した遺物のうち、図示したものは土師器の甕6点と、須恵器の細片1点である。土師器の甕は器形や大きさは異なるものの、どの甕にも体部外面にハケメ調整がみられ、多くは煮炊具として使用されていたものと考えられる。図174-1は小型の球胴甕である。底部は周縁に粘土を貼った後、ヘラケズリを施している。2は、口縁部がやや内湾する半球形であるが、小型の甕に分類する。底部の木葉痕には、複数枚分の葉脈が認められる。遺存する底部には木葉痕のみられるもの、4

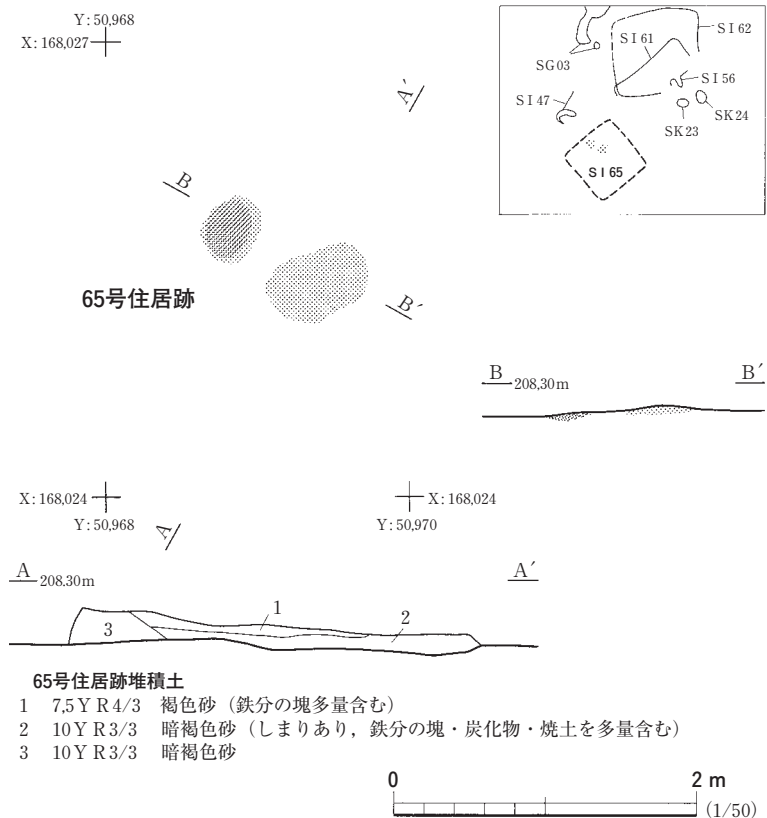


図173 65号住居跡

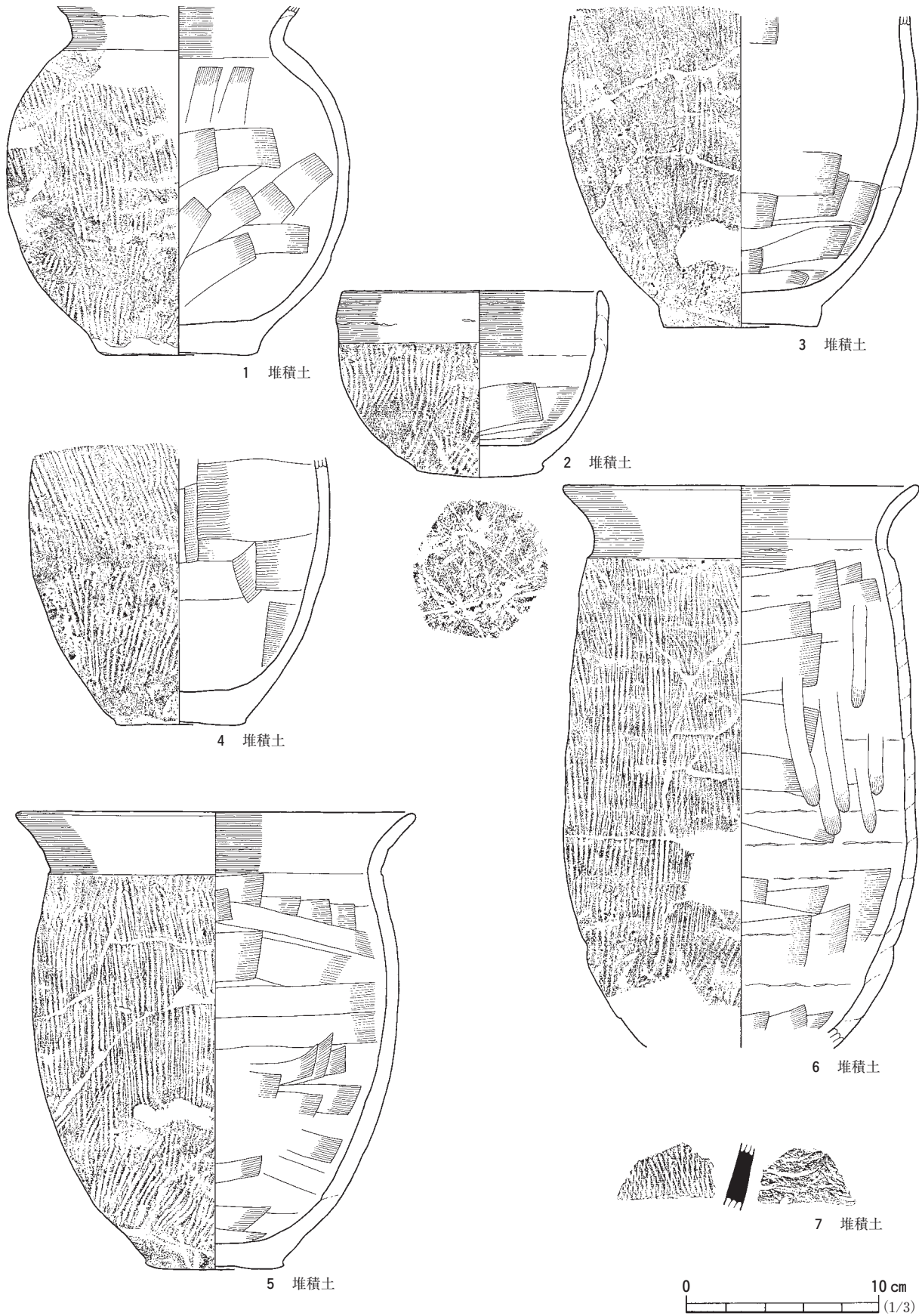


図174 65号住居跡出土遺物

のようにケズリで仕上げられるもの、周縁に粘土を貼って上げ底状になるものがある。3・5の底部は熱を受けて表面が剥離するが、上げ底状である。また、口縁部まで遺存する5・6は、口縁部が外反し、体部との境には明瞭な段が形成されている。

図示できた須恵器は図174-7で、甕とみられる細片で、タタキメと当て具痕が認められる。

ま と め

本住居跡は、出土遺物から7世紀ころの住居跡と考えられる。出土状況からは判断できないが、竪穴状の窪地に土師器甕が一括廃棄された可能性も想定される。(大波)

66号住居跡 S I 66

遺 構 (図175・176, 写真177~181)

本住居跡は、調査区南側L・M24グリッドに位置する。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の西側緩斜面の肩部に立地している。

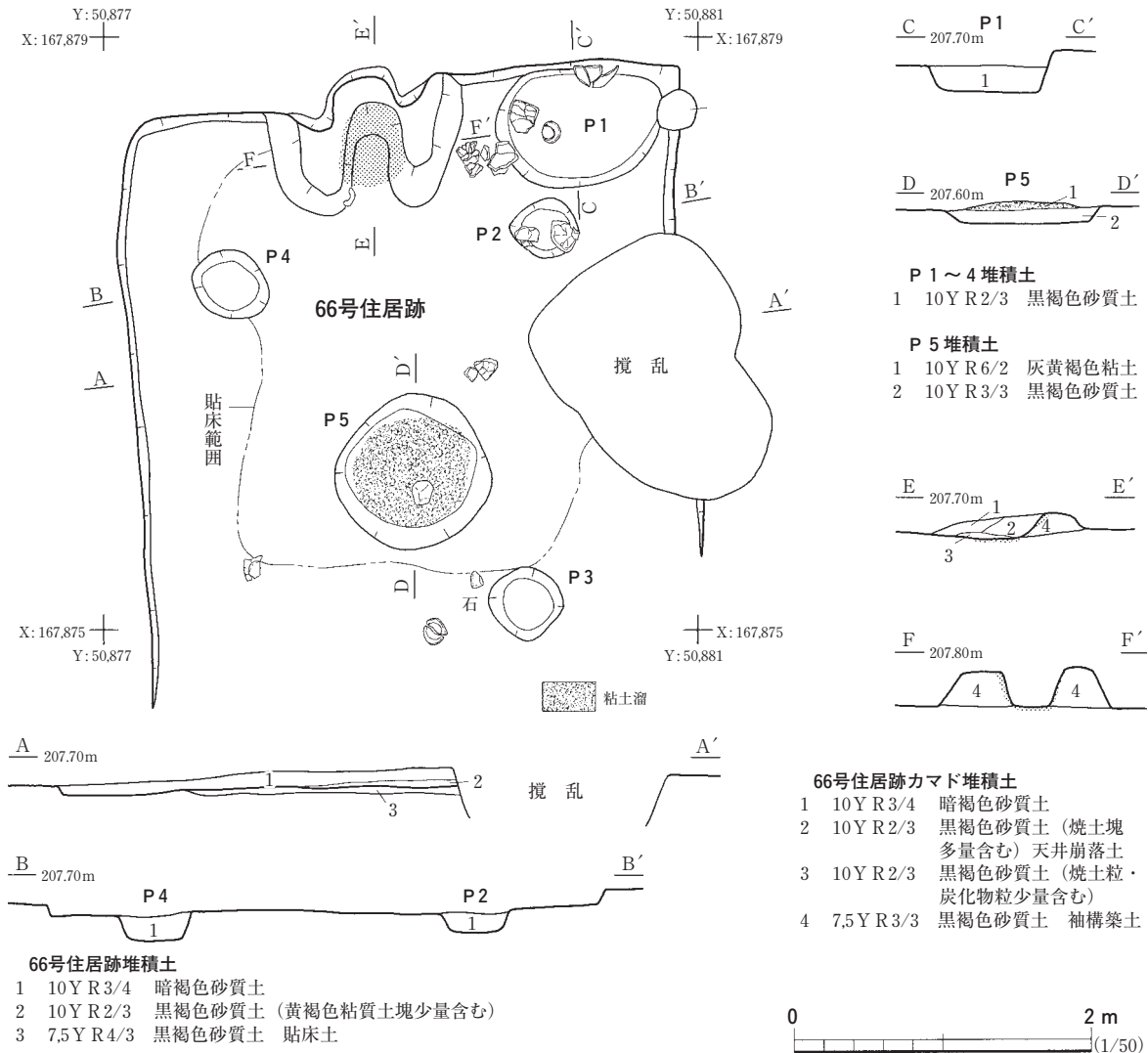


図175 66号住居跡

本遺構は、LⅣ上面で検出した。南側の壁は検出作業の段階で削平されてしまい、遺存していなかった。

他の遺構との重複関係は、認められない。ただ、本住居跡の北側には、隣接して85号住居跡が位置している。

遺構内堆積土は、2層に区分できる。ℓ1・2の堆積状況については、東側の壁が攪乱を受けているため、詳細な堆積過程は判断はできないが、不自然な混入物などが認められないため、自然堆積と考えている。

本住居跡の平面形は、遺存状況から推定すると、南北に長い方形を呈していたと考えられる。規模は、残りの良い西側の壁で約4m、北側の壁で約3.7mを測る。

遺存する壁は、いずれもやや急に立ち上がっている。床面から検出面までの高さは、8～12cmを測る。

床面は凹凸が激しく、住居跡の北側がやや高まっている。また、住居跡中央から北側にかけて、部分的に貼床が施されていた。

住居跡内施設として、カマドとピット5個を検出した。カマドは、住居跡の北壁中央やや西寄りに位置している。カマドの袖と奥壁は、黒褐色砂質土を用い構築されていた。カマドの袖は西側の袖で70cm、東側で90cmほど住居内に張り出していた。袖の最大幅は西側で55cm、東側で45cmを測る。両袖に挟まれた燃焼部は最大長50cm、最大幅は40cmを測る。また、燃焼部底面から奥壁にかけては、約2cmほど焼土化していた。

カマド内堆積土は3層に区分した。カマド上方から流入するℓ1は、色調や土質などから住居跡内堆積土ℓ1に相当するものと考えている。ℓ2は、焼土塊を多量に含むことから天井崩落土と判断した。ℓ3については、基本的にはカマド崩壊以前の堆積土と判断している。

ピットは、5個検出した。P1はカマド東側、北側の壁に接して検出された。平面形は東西に長い楕円形で、東西長110cm、南北長80cm、深さは、18cmを測る。堆積土は、1層で黒褐色砂質土が堆積していた。P1上面から、小型甕(図177-6)や甑(図177-9)などが出土している。P1は規模や、位置などから貯蔵穴と考えられる。

また、床面の北側東寄りでP2、西寄りでP4、床面南側東寄りでP3を検出した。平面形は、いずれも直径50cmほどの歪んだ円形を呈している。床面からのピットの深さは、12～18cmを測る。堆積土は、いずれも黒褐色砂質土が堆積していた。これらのピットについては、P2とP3、P2とP4でそれぞれ位置的に対応関係にあり、堆積土や規模なども類似することから、上屋を支えた支柱穴と考えられる。

P5は床面のほぼ中央で円形状に広がる粘土溜まりとして検出した。粘土溜まりの平面形は、直径80cmほどの円形を呈し、厚さ2～6cmを測る。P5の平面形は、粘土溜りより一回り大きく、直径110cmの歪んだ円形を呈している。床面からの深さは10cmを測る。P5については、検出状況などから、住居跡機能時には、埋め戻されていたと考えられ、性格的には、上面で検出された粘土溜り

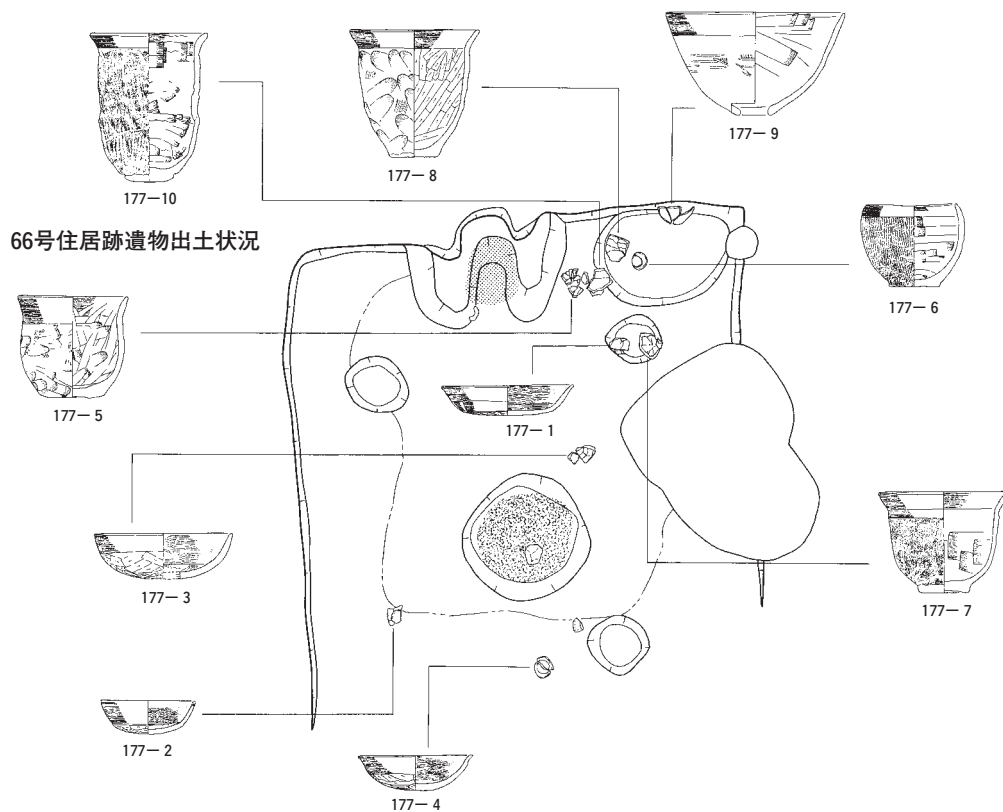


図176 66号住居跡遺物出土状況

の掘形と考えられる。

遺物 (図177, 写真542~544)

遺物は、カマド東側周辺の床面とP1・2から、甕、甌といった煮炊具がまとめて出土した。出土物の内訳は、土師器片114点である。

図177-1~4は杯である。1は底部が平底気味、2は底部が丸底で体部から口縁部にかけて緩やかに直線的に外反する器形となる。3・4は丸底の底部で、口縁部が直立気味に立ち上がる器形となる。

図177-5~7は小型の甕で、底部はやや上底気味になる。胴部はやや丸みをもつもの(5・6)と直線的に立ち上がるもの(7)とがあり、口縁部は外反するもの(5・7)と内湾するもの(6)が認められる。また、6・7の底面には木葉痕が認められる。

図177-8・10は、中型の甕である。8は、やや上げ底の底部から、緩やかに外傾しながら、直線的に立ち上がる器形となる。10は、丸底風の底部から直立気味に立ち上がる器形となる。胴部全体の器形に、めりはりが認められない。

9は甌で、体部が緩やかに外傾しながら、直線的に立ち上がる器形である。底部の状態から、単孔式に分類される。

まとめ

本住居跡は、平面形が南北に長い方形を呈している。

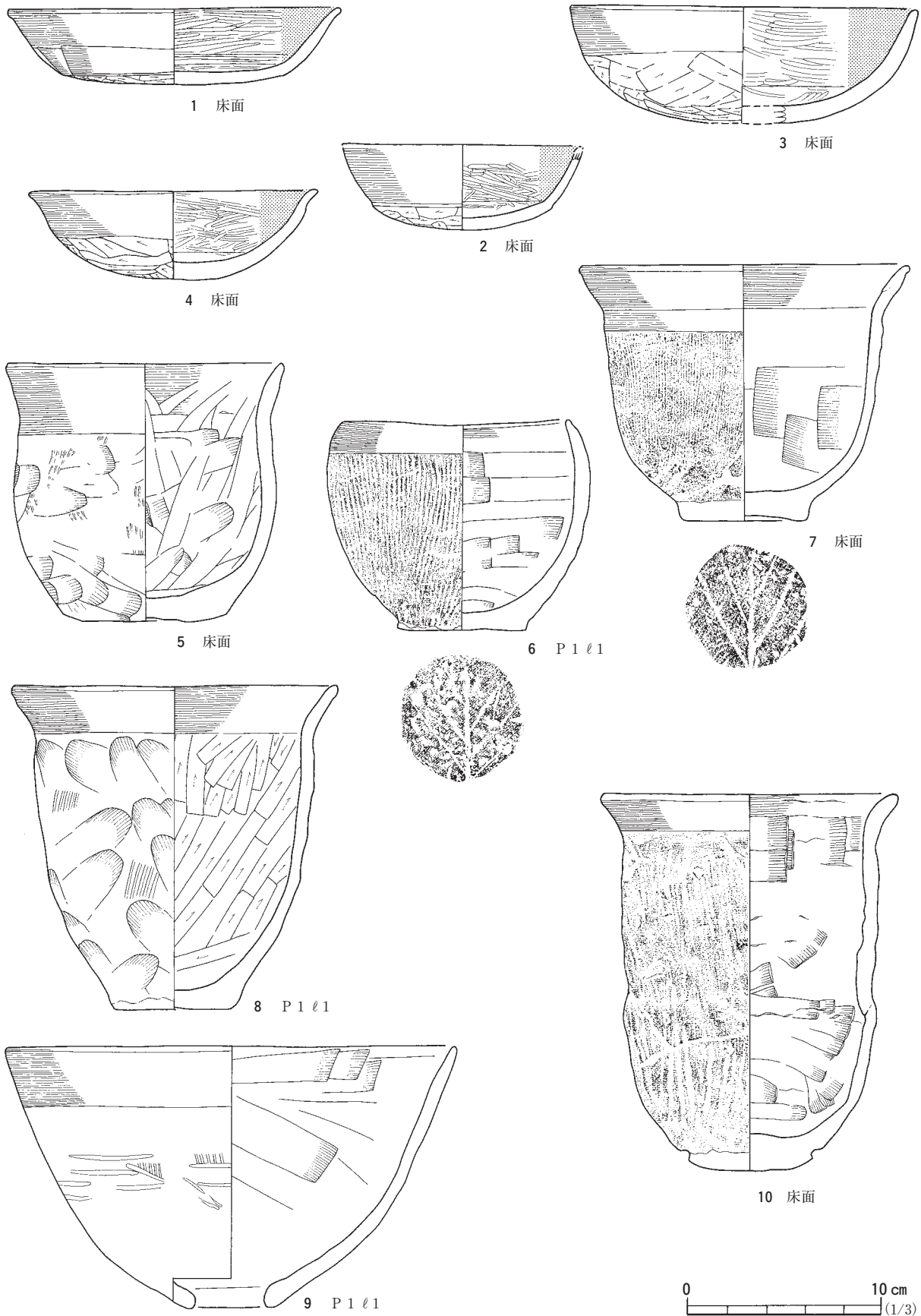


図177 66号住居跡出土遺物

住居跡内施設は、カマドとピット5個を検出した。この内、カマド脇に位置するピットは貯蔵穴、住居跡の主軸と平行し、位置的に対応関係にあるピットは柱穴と考えている。

また、床面中央で検出したピットについては、粘土溜まりと考え、生業に関する施設の可能性も考えられる。

本住居跡の所属時期は、床面からの出土遺物などから栗圀式期と考えている。 (大河原)

68号住居跡 S I 68

遺 構 (図178・179, 写真182・183)

本住居跡は、調査区中央のやや南で、N21・22グリッドにまたがって検出された。北東隅で185号住居跡と重複しており、本住居跡の方が新しい。

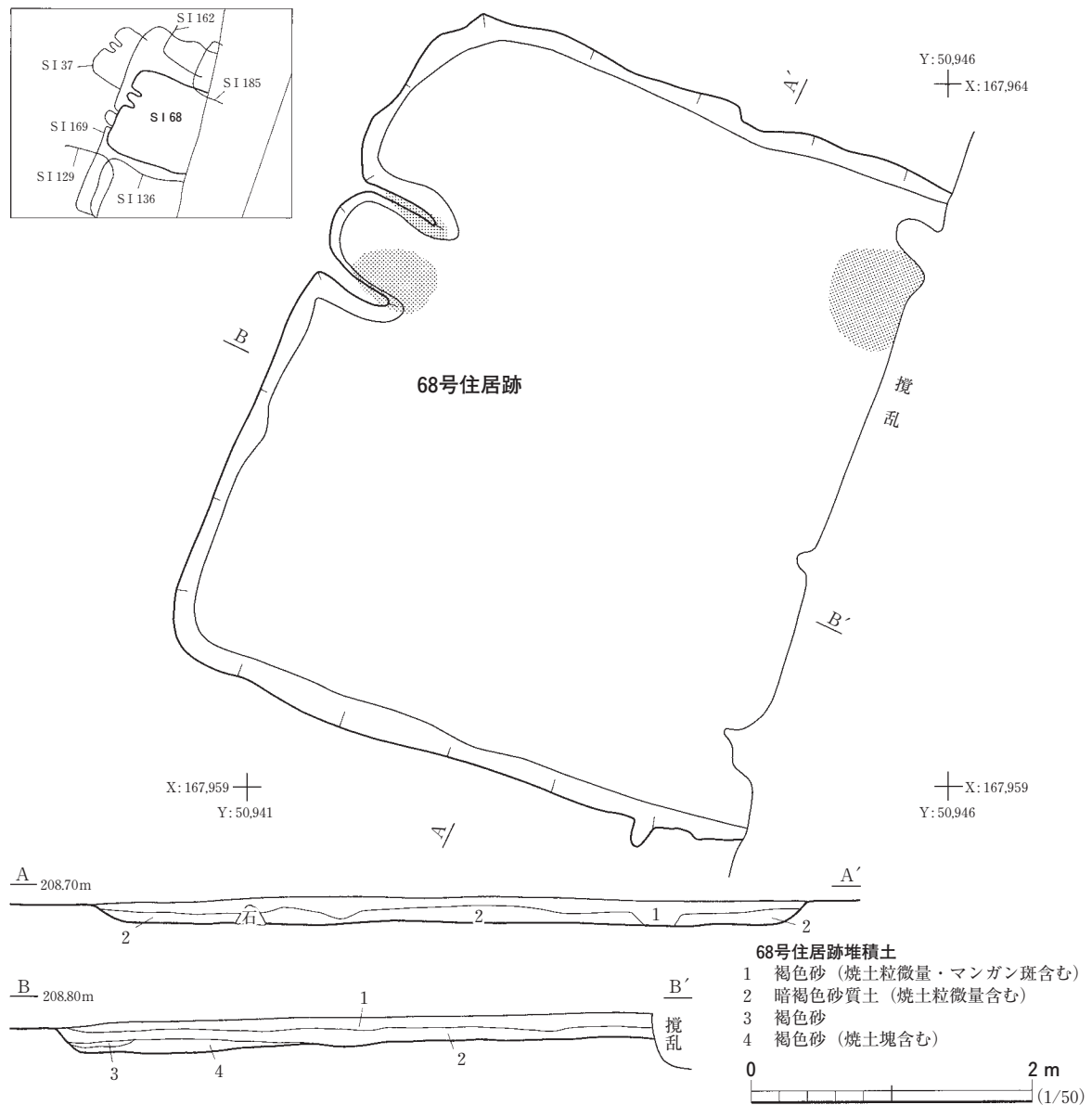


図178 68号住居跡

また、本住居跡の下層から169号住居跡が検出されており、やはりこれよりも新しいことが分かっている。

遺構内堆積土は、4層に区分された。ℓ1～4は、ほぼレンズ状の堆積状況を示しており、遺構は自然埋没したと判断している。ℓ4は、焼土ブロックを含んでおり、壁際からの流入状態を示している。

住居跡は、東側を攪乱で欠いている。平面形は、残存部から推測すると、ほぼ整った方形を呈していたと思われる。住居跡と方位の関係を西周壁で見ると、真北から23°ほど東へ傾いている。規模は、南北軸5.1m、東西軸約4.1m以上である。

床面は、細かな凹凸はあるものの、ほぼ平坦である。北東隅に75cm×56cmの範囲で焼土がみられたが、性格の特定はできなかった。検出面から床面までの深さは、10～16cmを測り、壁の立ち上がりは、全体に緩やかである。

住居跡内施設として、カマド1基を検出した。カマドは、西周壁の中央やや北寄りに設置されている。左袖は住居内に56cm張り出し、右袖は66cm張り出している。袖は、カマド底面から最大15cmの高さが遺存している。燃烧部の規模は、焚口幅60cm、奥行き64cmを測る。両袖内側からカマド底面にかけて、赤く焼けた部分が認められた。

カマド内堆積土は、3層に分けられる。焼土や炭化物を含む暗褐色土の上に、にぶい赤褐色土が堆積している。使用時の土と天井崩落時の土が、交じり合っているものと考えられる。

煙道部は、確認できなかった。

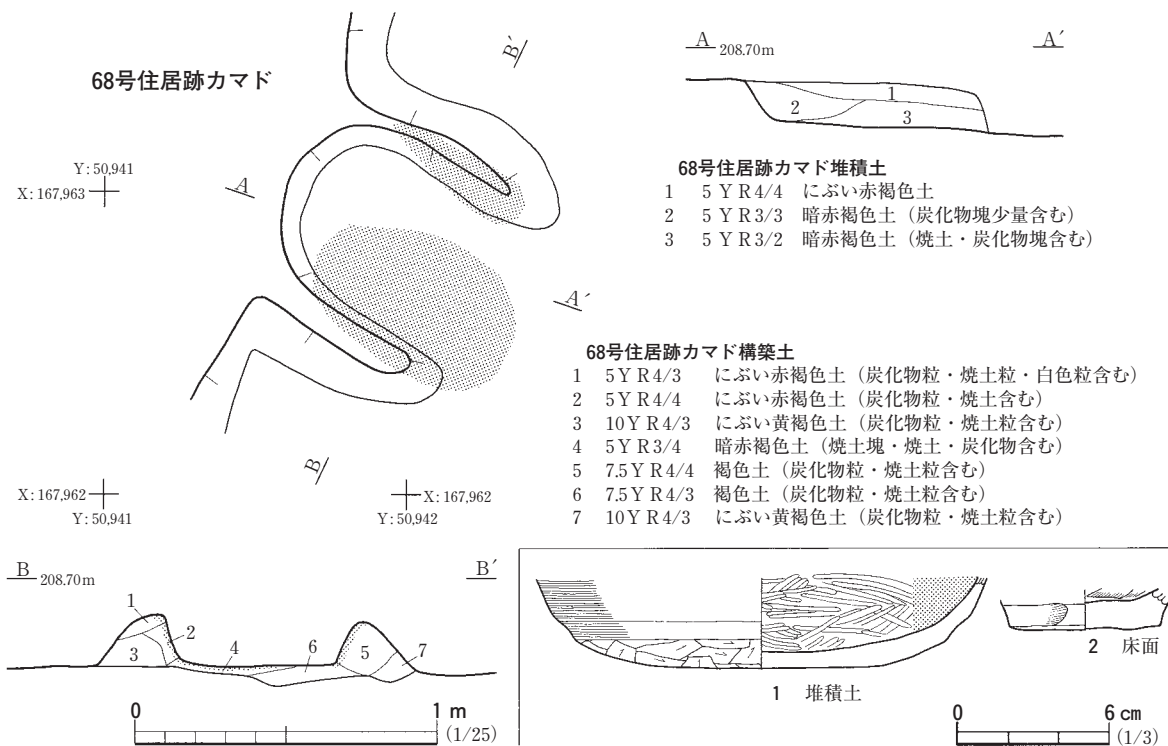


図179 68号住居跡カマド・出土遺物

遺物 (図179)

遺物は土師器片71点が出土した。

図179-1は、堆積土出土の土師器杯である。有段丸底の器形を呈するもので、口径は大きめになると推定される。口縁部は、内湾して立ち上がる。

図179-2は、床面出土の小さな土師器片である。小型甕の底部になると思われる。内面にナデ調整痕が観察される。

まとめ

本住居跡は、東側が削平されて残っていなかった。カマドは、西周壁に設置されており、底面は焼土化していた。

本住居跡では、遺物の出土が極端に少なく、床面の遺物は、小さな土師器片1点に限られる。このため、細かな時期比定はできない。

本住居跡は、重複遺構との関係から、栗圀式期に上限が求められる。(佐藤)

69号住居跡 S I 69

遺構 (図180, 写真184・185)

本遺構は調査区北部のO20グリッドにかけて検出された竪穴住居跡である。遺存する東周壁部分から一辺約8m前後の大型の住居跡が想定され、複数の住居跡と重複する。重複する他の住居跡との関係は、南側では69号住居跡→42号住居跡→50号住居跡→12号住居跡となり、本住居跡が最も古い。北側では8号住居跡、18号住居跡と重複し、そのうち8号住居跡が最も新しいが、本住居跡と同規模の大型住居跡と考えられる18号住居跡との新旧関係は遺構の調査ではわからなかった。

本住居跡からはカマドなどの付属施設は検出できず、東周壁と南東隅部分の一部を確認したのみである。プランはL II中から検出でき、色調の違いから比較的識別しやすかった。

住居跡内堆積土は3層に分層した。大きく上層が $\ell 2$ の**い**黄褐色砂で、下層に $\ell 3$ の**しまり**のある黒褐色土が堆積する。 $\ell 1$ は土層ベルトに僅かにかかる程度であるが、部分的に後から堆積したものと考える。

住居跡の大きさは遺存する東周壁部分で約7.7mを測ることから、北側に隣接する18号住居跡と同規模か、ひとまわり大きかったものと推測できる。主軸方位はN32°Eである。深さは東周壁で約20cmを測り、壁は緩やかに立ち上がっている。

床面はL IIIを掘り込んで造られているが、東周壁の壁際から約1m前後までが1段低く造られている。壁際が一段低くなる掘形跡として、平面図ではその上端を破線で示した。貼床等は認められなかったものの、そのままL IIIを床面として利用したとは考え難い。

本住居跡から出土した遺物は少なく、図示できたものはなかった。

まとめ

本住居跡は重複する住居跡との関係から、本遺跡に大集落が形成される初期の段階の住居跡と考

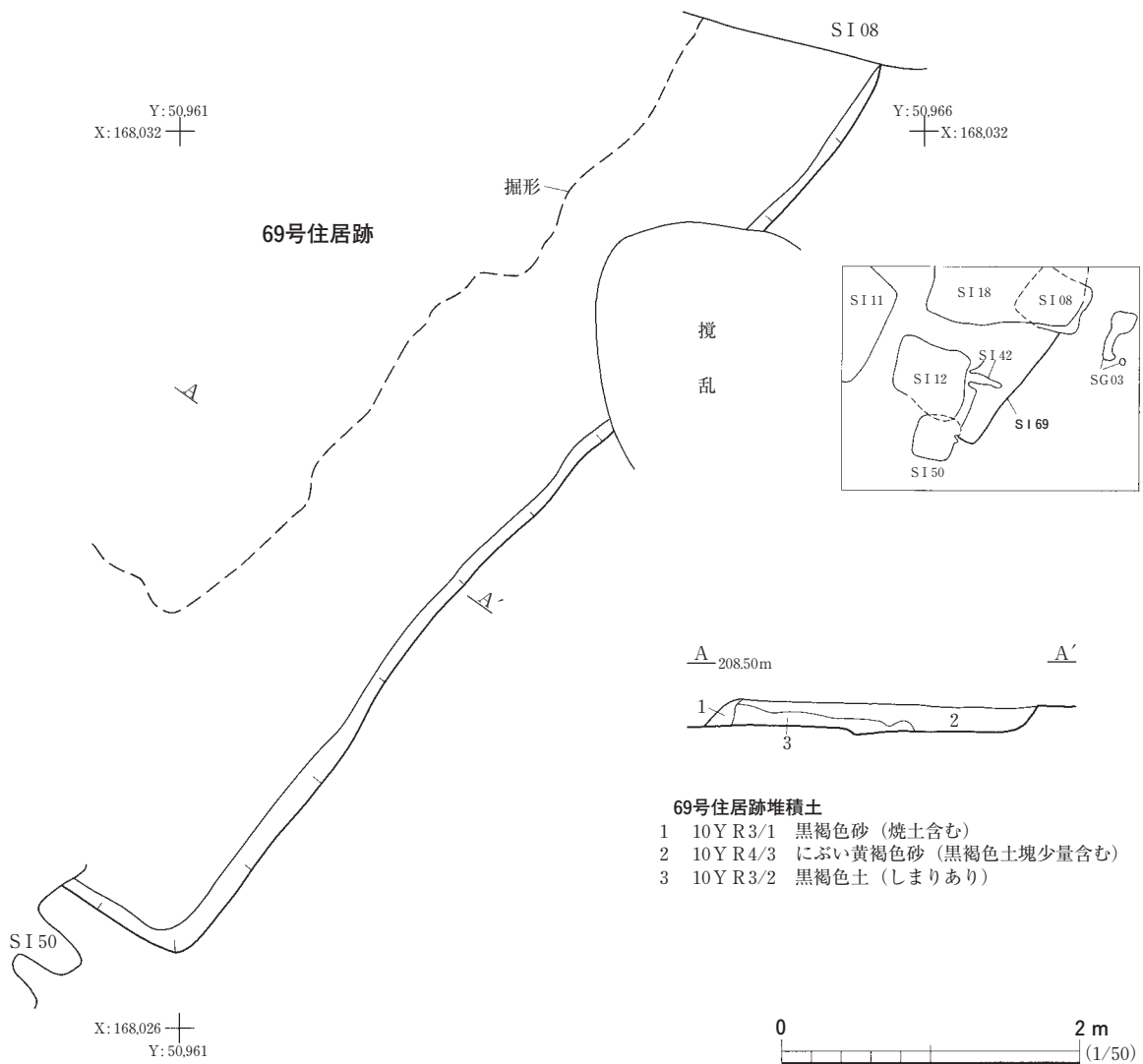


図180 69号住居跡

えられ、重複する18号住居跡に先行して築かれたものとみられる。

また、同じく初期の住居跡と考えている104号住居跡は2号溝跡のすぐ北側に位置する、本住居跡と同規模の大型の住居跡である。そのことから推測して、本住居跡の時期は栗囲式の初めごろと考えている。

(大波)

70号住居跡 S I 70

遺 構 (図181, 写真186・187)

本遺構は、N20・21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面である。重複関係は、22号住居跡に切られており、この住居跡よりも古い時期に営まれている。また、14・91号住居跡と接しているが、これらについては新旧関係ははっきりしない。

堆積土は、にぶい黄橙色砂質土が1層認められた。この土層の様子から、遺構は、自然埋没した

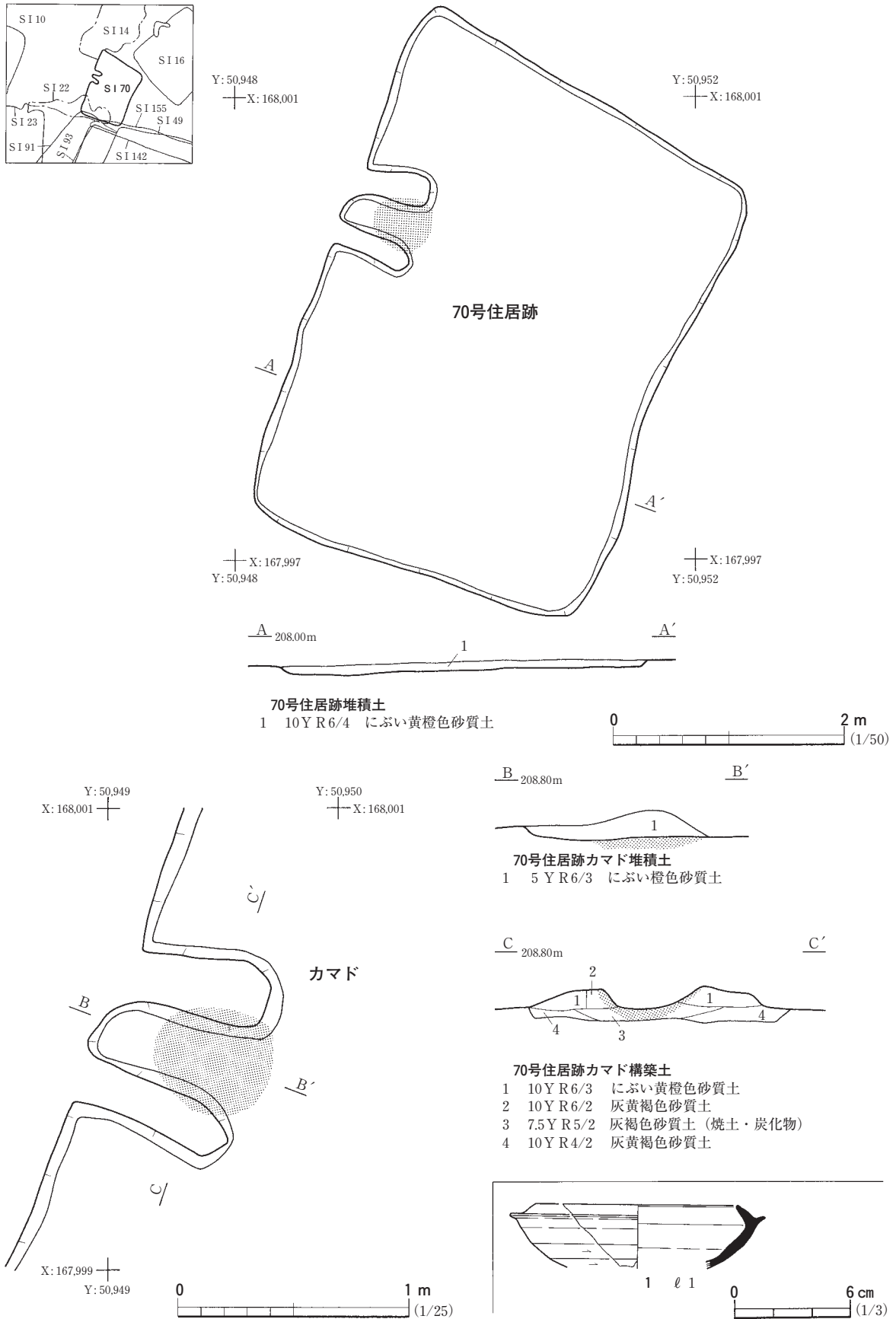


図181 70号住居跡・出土遺物

と考えている。

床面は、貼床されず、掘形底面のLⅢがそのまま平坦に整えられている。検出面と床面の比高差は、7～10cmを測る。

本住居跡の平面プランは、南北に細長い長方形を呈している。ただ、西周壁が東周壁より少し長いため、台形気味となっている。

規模は、南北4.4m、東西3.1mを測り、中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に20°振れている。

カマドは西周壁中央の北寄りで見出された。煙道部は残っていない。燃焼部は袖長65cm、焚口幅48cmを測る。底面はよく焼けている。断ち割ったところ、7～10cmの厚さで焼土化しているのが観察された。

ピット類は見出されていない。

遺物 (図181, 写真544)

遺物は、少ない。土師器片38点、須恵器片2点が見出した。

図181-1は、1出土の須恵器杯身である。小破片のため、図面の口径は、厳密でない。口縁部は短く、内傾して立ち上がる。

まとめ

本住居跡は、自然堤防の中央平坦面に営まれた竪穴住居跡である。平面プランは、細長い長方形を呈している。カマドは、長軸側に設置されていた。

遺構に伴う遺物は、見出なかった。時期は、栗園式期の14号住居跡に切られていることから、ここに上限が求められる。

(菅原)

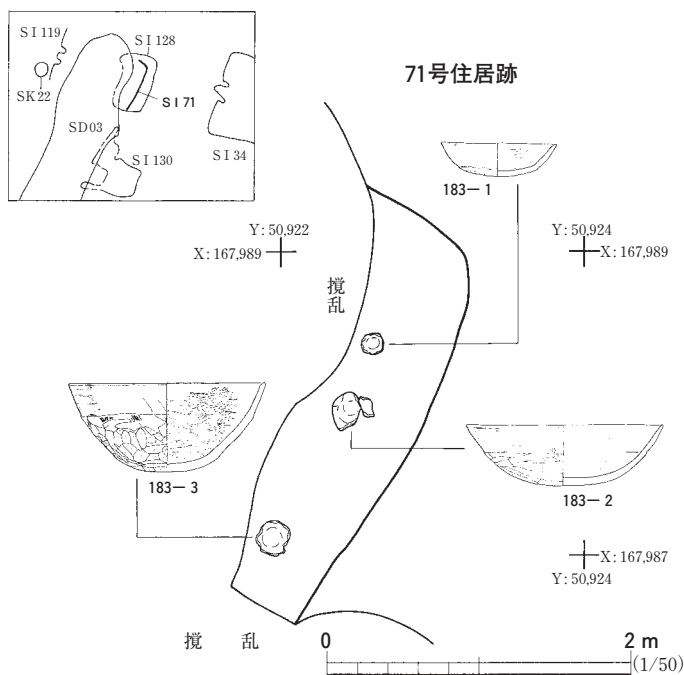


図182 71号住居跡

71号住居跡 S I 71

遺構 (図182, 写真188)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から見出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の頂部で、ここに掘り込まれた3号溝跡に大部分が壊されている。そのうえ、遺構全体の上部削平が著しく、残りは非常に悪い。

なお、下層から、128号住居跡が見出されている。

本住居跡は、北東隅付近だけが残っていた。しかし、ここも見出時に周壁

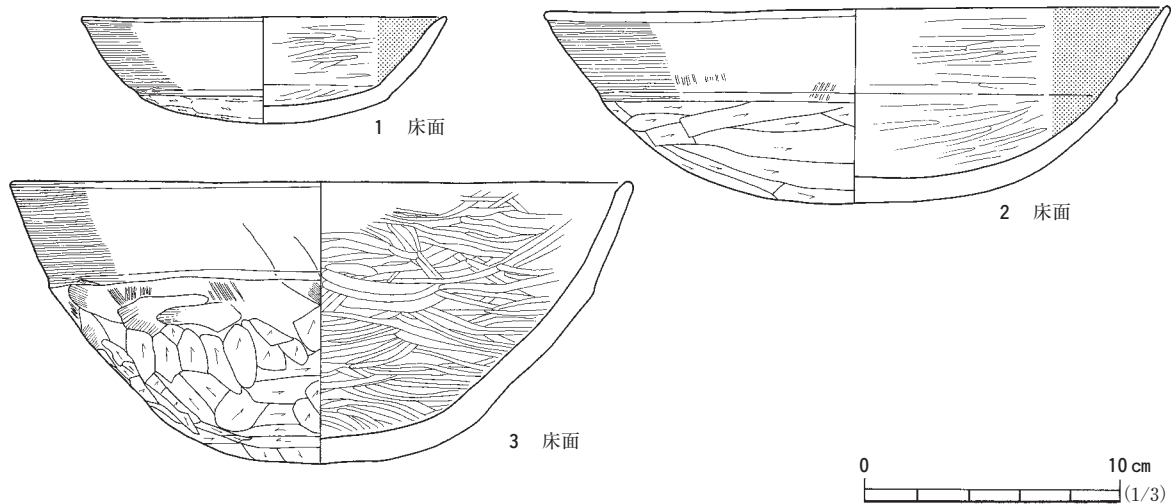


図183 71号住居跡出土遺物

が失われており、床面が露呈した状態だった。

床面は、貼床されず、掘形底面のLⅢがそのまま平坦に整えられている。踏み締めりは、認められなかった。

本住居跡の平面形プランは、方形を呈していたと推定される。規模は南北2.8m以上、東西0.8m以上を測る。東周壁で見ると、住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に30°振れている。

カマドの構築位置は、不明である。

ピット類は検出されていない。

遺物 (図183, 写真544)

遺物は、土師器片13点が出土した。床面出土の土師器杯3点が得られている。

図183-1は、有段丸底の土師器杯である。口縁部は内湾気味に立ち上がっている。2は、有段丸底杯の大型化したもので、外面の段がしっかりしている。3は、身の深い椀タイプの杯である。やはり、大型になるもので、器形全体が丸みを帯びる。

まとめ

本遺構は、阿武隈川に面した自然堤防の頂部に営まれた竪穴住居跡である。残りが非常に悪かった。このため、詳細については知ることができなかった。

時期は、床面の遺物から栗圀式期に比定される。

(菅原)

72号住居跡 S I 72

遺構 (図184, 写真189)

本遺構は、M21グリッドでLⅣ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは阿武隈川に面した自然堤防の頂部である。遺構は、高木遺跡における住居跡分布の西限の1つをなしている。3号溝跡に切られていた。

本住居跡は、残りがきわめて悪い。検出されたのは、カマド燃焼部の痕跡だけで、遺構の具体的

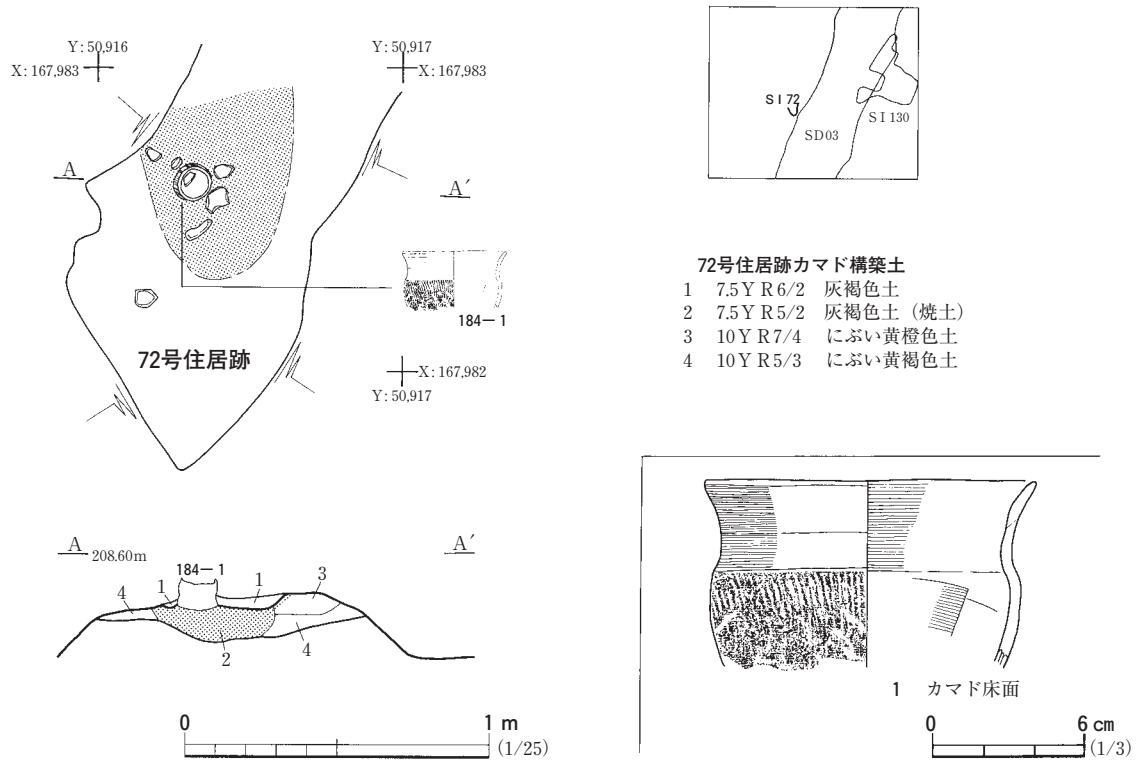


図184 72号住居跡・出土遺物

内容については、ほとんど何も知ることができなかった。

燃焼部は、にぶい黄橙色土を掘形に充填して構築されたことが判明している。

遺物 (図184)

遺物は、土師器片12点が出土した。

図184-1は、カマド燃焼部に倒立していた土師器甕である。出土状況からいって、支脚か袖の補強材に使用されていたものと考えられる。口径12.8cmの小型品で、口縁部と胴部の境には、段が形成されている。外面は、ハケメ調整である。

まとめ

本遺構は、自然堤防の頂部に営まれた竪穴住居跡である。遺存状態は非常に悪く、カマド燃焼部の痕跡だけが検出された。

時期は、共伴遺物の特徴から、栗圀式期と推定しておきたい。

(菅原)

73号住居跡 S I 73

遺構 (図185, 写真190)

本住居跡は、調査区ほぼ中央のN21グリッドにおいて検出された。重複関係は、36・51・74号住居跡を切っている。

遺構内堆積土は5層に区分した。いずれもレンズ状の堆積状況を示すことから、遺構は自然埋没したと判断している。

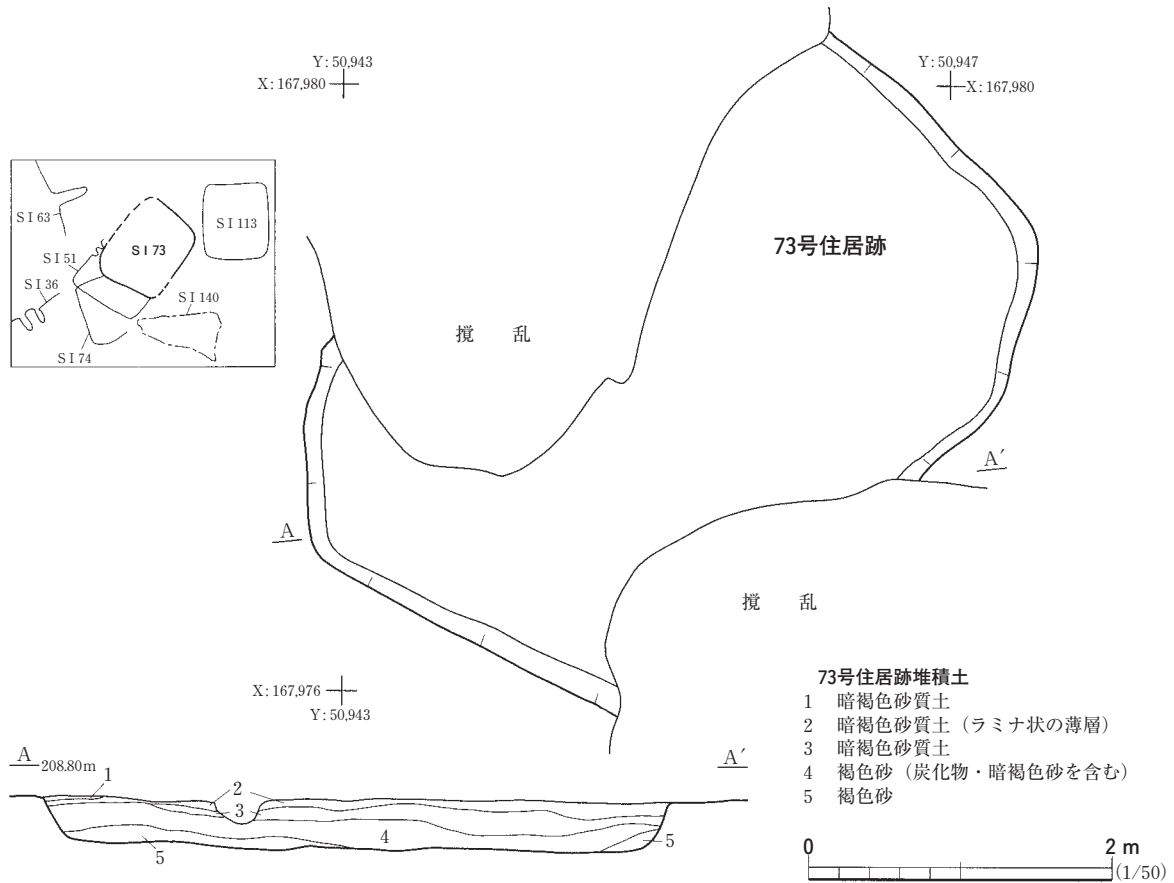


図185 73号住居跡

本遺構は、多くの部分が攪乱によって失われている。遺存部分でみると、平面形は、長方形を呈していたと推測するが、長軸側の周壁が膨らんでいる。規模は、東西4.0m、南北4.6mを測り、やや小型である。

床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま使用されている。細かな凹凸がみられるものの、ほぼ平坦に整えられている。検出面から床面までの深さは、南西隅と北東隅で、最大32cmを測る。その他では、16～20cmである。周壁は、全体的に緩やかに立ち上がっている。

住居跡と方位の関係は、発掘基準線北に対して、28°ほど東へ傾いている。

住居跡内施設は、確認できなかった。カマドは、西周壁に設置されていた可能性が最も高いと思われる。

遺物 (図186, 写真544・545)

土師器片57点、須恵器片2点、石製品1点、土製品1点が出土した。5点を図示したが、どれも遺構に伴っていない。

図186-1・2は、土師器杯になる。1は、口縁部の外反する有段丸底杯である。舞台式に比定される。2は、段が曖昧で、無段丸底杯に近い器形を呈している。浅い皿状をなしており、器高が低い。1より後出のものだろう。

図186-3は、須恵器甕の口縁部片とみられる。外面に隆帯を有している。

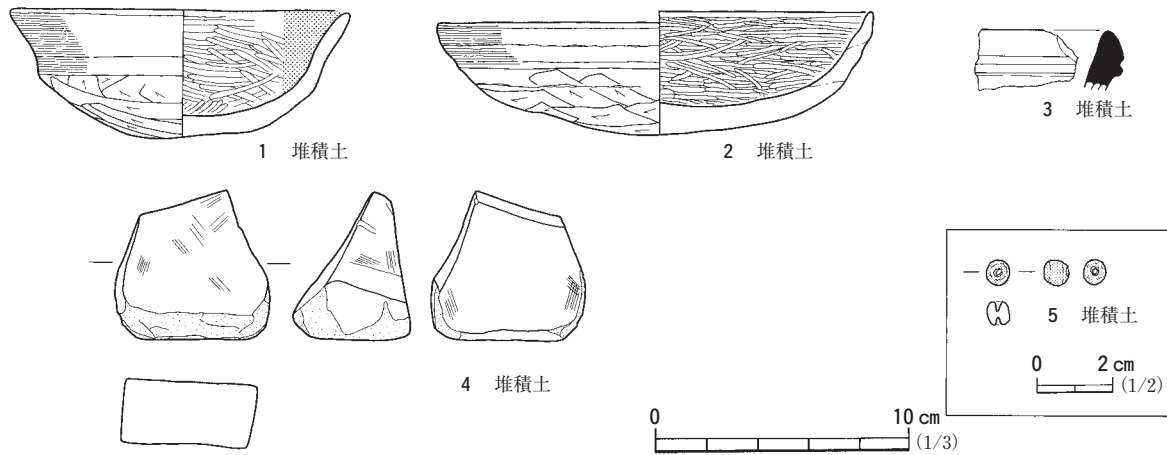


図186 73号住居跡出土遺物

図186-4は、砥石である。断面は、方形をなしている。

図186-5は、土製丸玉である。孔が貫通していない。表面は、黒色処理されている。

ま と め

本遺構は小型の竪穴住居跡である。攪乱のため、カマドは残っていなかった。平面プランは方形基調を呈しているが、長軸側の周壁が膨らんでいる。

遺物は、良好な共伴資料が得られなかった。

本住居跡が営まれたのは、重複遺構から、栗圀式期に上限が求められる。

(佐藤)

74号住居跡 S I 74

遺 構 (図187, 写真191)

本遺構は、N21グリッドに位置し、36号住居跡の精査時において検出された竪穴住居跡である。同住居跡との関係は、北東隅を壊しており、掘形埋土上に本住居跡が構築されている。また、140号住居跡の床残存部とも重複が認められ、本住居跡の方が新しいことが判明している。さらに、51・73号住居跡が、本住居跡の北側を壊している。

遺構内堆積土は2層に区分した。残りが悪いので、遺構全体の堆積過程を推測するのは難しいが、 $\emptyset 1 \cdot 2$ は、ともに壁際からの流入状態を示している。このことから、遺構は自然埋没したと考えている。

住居跡の平面形は、遺存する周壁の状態から、正方形基調であったと考えられる。住居跡と方位の関係は、真北から70°ほど東に傾いている。規模は、西周壁長3.4m、北周壁遺存長1.75m、南周壁遺存長1.5mである。壁高は、南周壁で12cmの高さまで認められるのが最大で、西周壁では4～8cmと遺存状態が良くない。周壁の立ち上がりは、全体的に緩やかである。床面は、僅かな凹凸がみられるが、おおむね平坦である。

住居跡内施設としては、カマド1基を検出した。遺存状態は悪く、右袖がわずかに確認できただけである。カマドは、南周壁の中央やや東寄りに設置されていたものと考えられる。遺存している

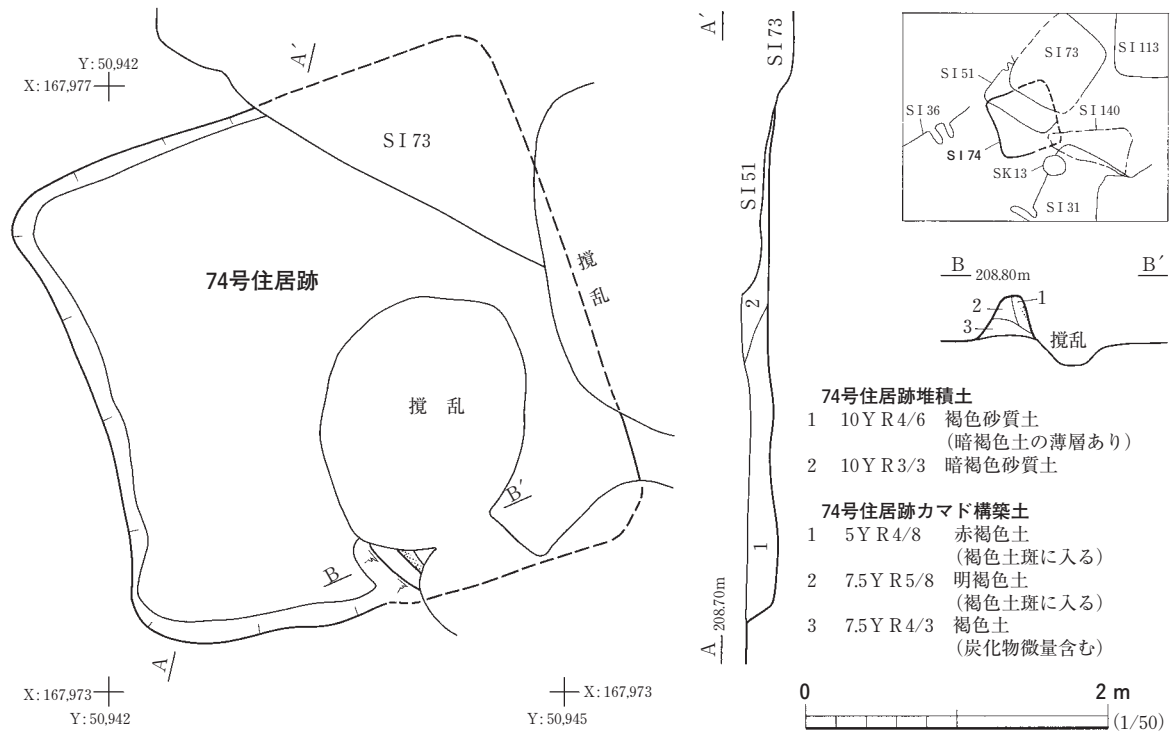


図187 74号住居跡

右袖の長さは28cm、床面からの高さは、最大で26cmである。袖の内面に燃烧面が確認された。焚口の規模は、不明である。

遺物は出土していない。

まとめ

本住居跡は、遺存状態が悪く、カマド半分が攪乱で失われていた。また、出土遺物にも恵まれていない。

本住居跡の営まれた時期は、重複遺構から、栗囲式期に上限が求められる。下限については、良好な所見が無いので、おさえることができない。(佐藤)

75号住居跡 S I 75

遺 構 (図188~190, 写真192~195)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央で、周囲には数多くの住居跡が分布している。

重複関係は、32・41・48号住居跡に切られている。本住居跡は、これら3軒より掘り込みが深いため、平面プランのほぼ全体を捉えることができた。ただ、径4.0mの大きな攪乱が床面中央を壊しており、南東隅も攪乱で失われている。

堆積土は、3層に分層された。土層断面図が示すように、典型的なレンズ状堆積をしている。したがって、遺構は自然埋没したと考えている。

床面は、貼床されず、掘形底面のLⅢがそのまま平坦に整えられている。踏み締まりは認められ

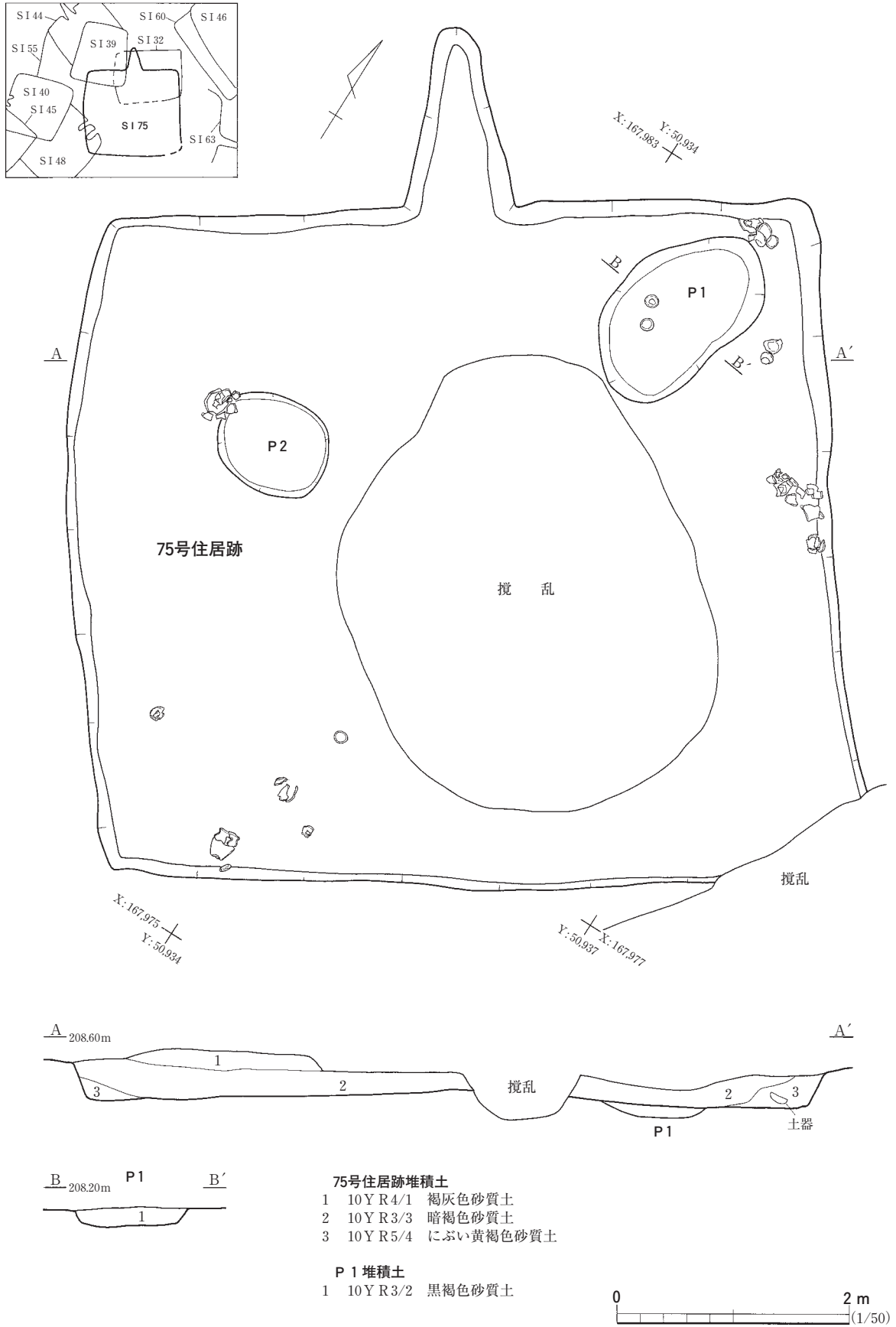


図188 75号住居跡

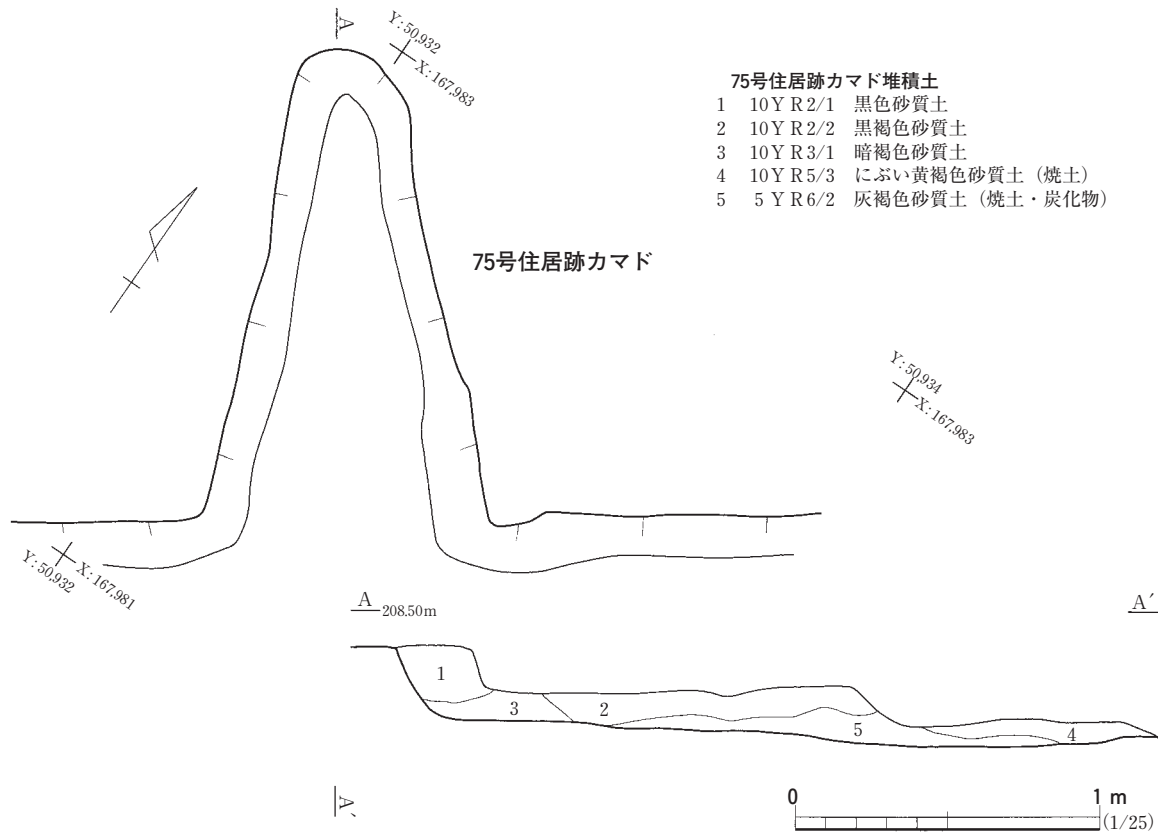


図189 75号住居跡カマド

なかった。検出面との比高差は、最大で40cmを測る。

本住居跡の平面プランは、正方形基調を呈している。ただ、東西に少し長く、南東隅が突出気味になっている。規模は、東西6.5m、南北5.9mを測り、高木遺跡では比較的大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に58°振れている。

カマドは、北周壁中央で検出された。煙道部は、周壁から1.6mの長さを有している。燃焼部は、袖が検出されず、住居廃絶時に取り壊されたと推定している。また、燃焼部は、ほとんど底面が焼土化しておらず、平面図には表現できなかった。本住居跡の居住期間は、短かったのだろうか。

床面上でピットが2個検出された。P1は、貯蔵穴である。カマド右脇に掘られ、長軸1.7m×単軸1.0mの楕円形を呈している。床面からの深さは、18cmを測る。P2は、カマド左手前に掘られたもので、P1に比べて小ぶりである。長軸1.0m×単軸0.7mの大きさで、床面からの深さは12cmを測る。これも、貯蔵穴とみられる。

遺物 (図191・192, 写真545~547)

遺物は、土師器片300点が出土した。図示遺物は21点あり、図191-5を除くと、すべて遺構に共伴している。平面分布は、P1を含めた住居北東部、南西部、P2肩部の3か所に集中し(図190)、完形もしくはそれに近い状態に復元された。内容は、粗製の土師器杯が多くみられ、10点が出土しているのが注目される。それらは、重ねられた状態で出土したものもあり、住居廃絶に伴う儀礼で使用された可能性が考えられる。

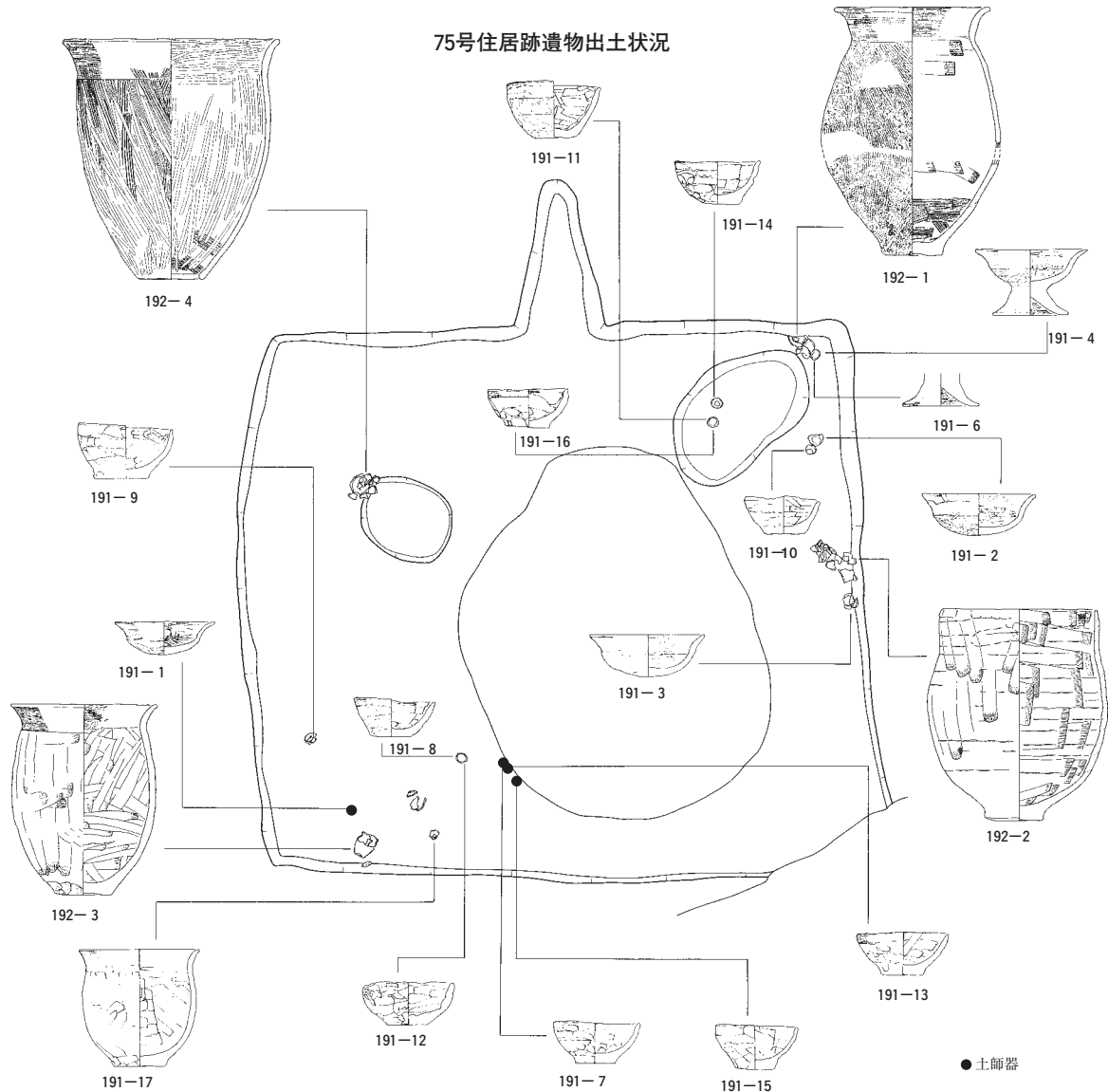


図190 75号住居跡遺物出土状況

図191-1～3は、有段丸底の土師器杯である。器高が高く、口縁部が強く外反する特徴がみられる。典型的な舞台式杯とみてよからう。

図191-4～6は、土師器高杯である。4は、上述の杯に短脚を乗せたもので、脚端部は、「ハ」の字状に広がる。杯部を欠く5・6も、これと同形態であったと推定される。

図191-7～16は、粗製の土師器杯である。7・13・15, 11・16, 8・12が重ねられていた。内外面は、粘土紐巻き上げ痕を明瞭に残し、簡単な指ナデ、ナデ調整が行われているだけである。器形も、有段丸底杯とは別形態を呈する。これらがまとめて出土するのは、古墳周溝が一般的であり、このような住居跡での在り方には興味もたれる。

図191-17は、小型土師器甕である。口径と器高がほぼ等しく、寸詰まりの形態をなす。外面は、ナデ調整されている。

図192-1～3は、中～大型の土師器甕である。1には、舞台式の典型的な特徴が見いだせる。

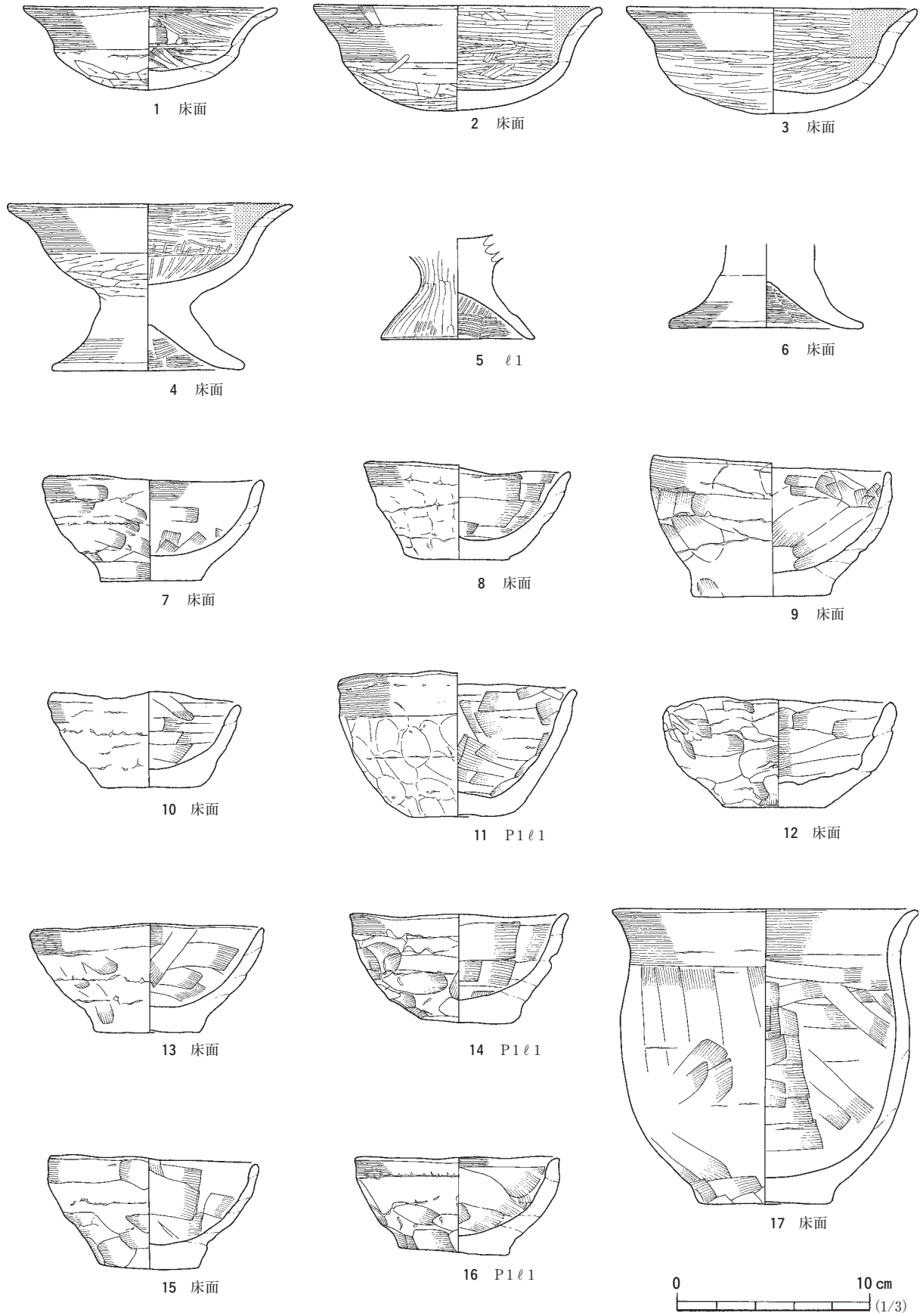


図191 75号住居跡出土遺物 (1)

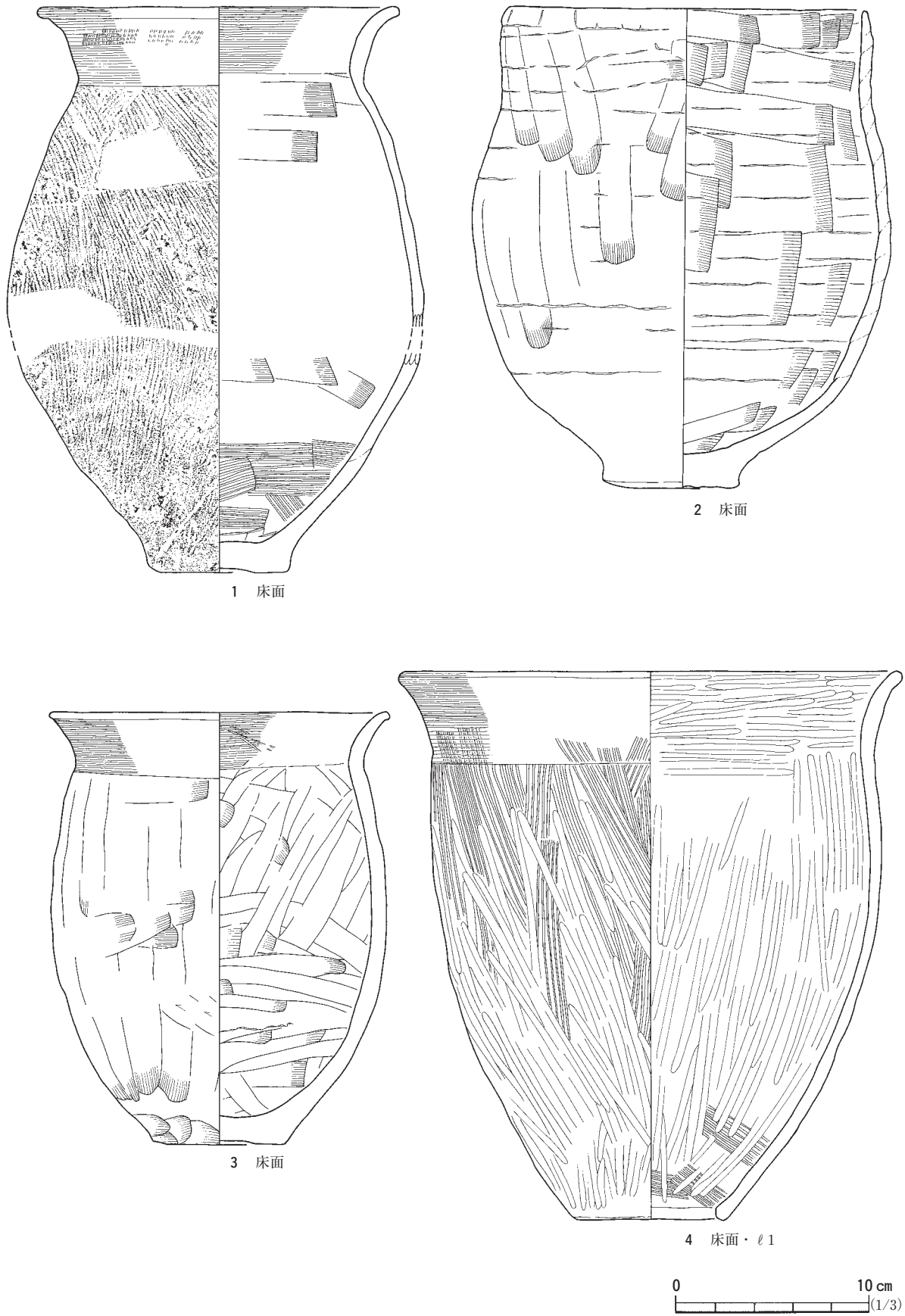


図192 75号住居跡出土遺物（2）

胴部は膨らみが大きく、頸部が直立し、口縁部が外反している。ただ、胴部外面がハケメ調整される点は、ナデ調整優位の当該形式の中で珍しい。2は、粗製の大型甕ともいうべき製品である。内外面に、粘土紐巻き上げ痕を明瞭に残し、器面調整は、簡単なナデ・ヘラナデ調整だけで行われている。また、器形も特種で、丸みのある胴部から頸部が直立し、口縁端部でわずかに内傾している。このため、口径より頸部径の方が大きい。煮炊具として機能したか、疑問がもたれる。3は、図191-17の器形をそのまま細長くしたような甕で、外面もナデ調整されており、一致する。口縁端部は玉縁状を呈する。

図192-4は、土師器甕である。単孔式の大型品で、胴部上位は膨らみ気味になっている。内外面は、ヘラミガキされている。

ま と め

本遺構は、自然堤防の中央平坦面に営まれた竪穴住居跡である。遺存状態は良好であった。全体の平面プランが捉えられ、周壁の高さは40cmを測った。

遺物は、一括性の高い良好な土器群に恵まれている。編年作業を行う上で、基準資料の1つとなる。内容では、粗製土師器杯がまとまってみられたことが、注目される。この器種は、古墳周溝に伴うことが一般的であり、本住居跡のカマドが廃絶時に取り壊されたことをみると、儀礼行為に使用された可能性が指摘できると思われる。(菅原)

76号住居跡 S I 76

遺 構 (図193, 写真196・197)

本住居跡は、調査区南部のM24グリッドに位置する。

地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の西緩斜面の肩部に立地している。遺構は、LⅢ上面で検出した。

他の遺構との重複関係は認められなかったが、本住居跡南側に83号住居跡、35号土坑が位置している。

遺構内堆積土は、1層で暗褐色砂質土が堆積していた。本住居跡の平面形は、東西に長い方形を呈している。

規模は、南側の壁で約4.7m、西側の壁で約4.1mを測る。床面は、ほぼ平坦に作られていた。上面のレベルを追って行くと、南側に向かい緩やかに傾いている。また、床面は暗褐色砂質土を用い貼床が施されていた。住居跡内施設として、カマドと床下ピット1個を検出した。

カマドは、住居跡の北壁中央で検出した。カマドの袖は、にぶい黄褐色粘土を用い構築されていた。カマドの袖はいずれも、住居内に60cmほど張り出していた。袖の最大幅は西側で35cm、東側で38cmを測る。両袖に挟まれた燃焼部は最大長35cm、最大幅は50cmを測る。燃焼部底面は、床面から約5cmほど掘り窪められていた。また、燃焼部底面と奥壁の一部は、3cmほど焼土化していた。カマド内堆積土は2層に区分した。いずれも、カマド上方からの流入土と考えている。

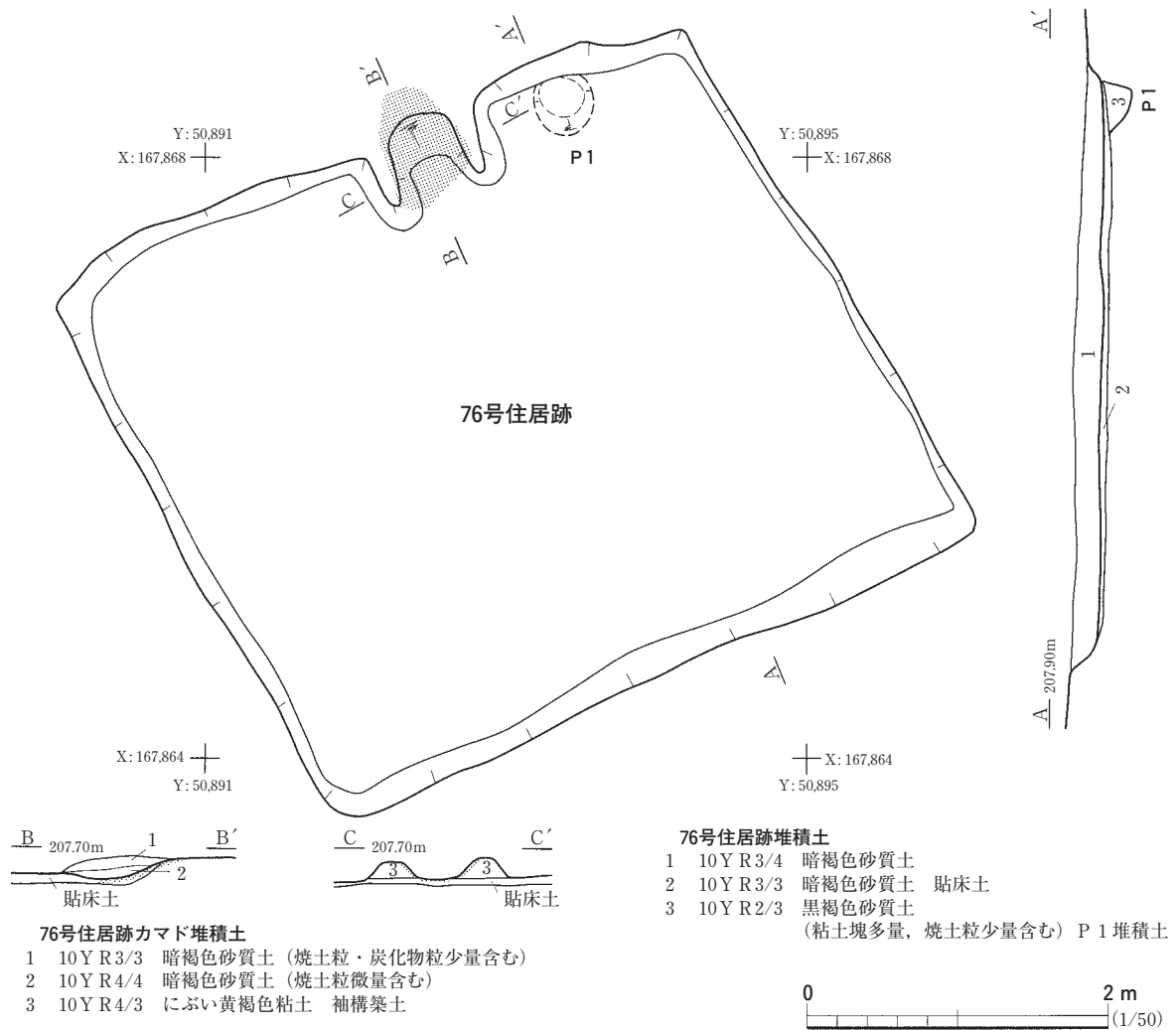


図193 76号住居跡

貼床除去後、カマド東側で、P1を検出した。平面形は、直径約40cmの円形を呈している。深さは、検出面から18cmを測る。

遺物 (図194, 写真547)

遺物は、検出面から底面にかけて土師器片96点が出土している。

図194-1・2は杯である。いずれも緩やかに外傾しながら直線的に立ち上がる器形である。

底部は1が丸底風、2は平底気味である。

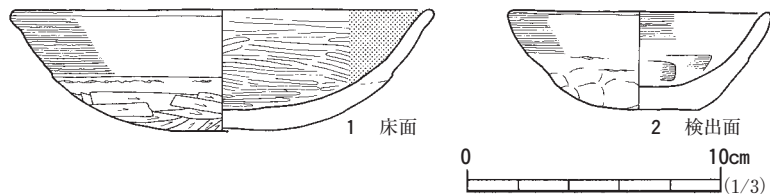


図194 76号住居跡出土遺物

まとめ

本住居跡は、東西に長い歪んだ方形を呈している。住居跡内施設として、カマドと床下ピット1個を検出した。本住居跡の所属時期は、床面からの出土遺物などから栗圀式期と考えている。

(大河原)

77号住居跡 S I 77

遺 構 (図195, 写真198・199)

本住居跡は、調査区南端のL・M24グリッドに位置する。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の西側緩斜面の裾部に立地している。遺構はL IV上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められなかった。

遺構内堆積土は黒褐色砂質土1層で、堆積過程は不明である。本住居跡の平面形は、西側に歪んだ方形を呈している。規模は、北側の壁で約4.2m、東壁約3.3mを測る。壁は、いずれも比較的急に立ち上がっている。床面からの高さは、8～15cmを測る。床面はほぼ平坦に作られていた。また、西側壁の床面周辺を除き貼床が施されていた。

住居跡内施設として、カマドを検出した。カマドは、住居跡の北壁中央やや東寄りに位置している。カマドの袖は、にぶい黄褐色土を用い構築されていた。また、東側の袖先端部には、甕の口縁部片を構築材として用いていた。カマドの袖は、西側の袖で約60cm、東側で55cmほど住居跡内に張り出していた。袖の最大幅は西側で28cm、東側で30cmを測る。両袖に挟まれた燃烧部は最大長50cm、最大幅は50cmを測る。また、燃烧部底面から奥壁にかけて、2cmほど焼土化していた。カマド内堆積土は2層に区分した。①・②はいずれも、カマド上方からの流入土と考えている。その他の住

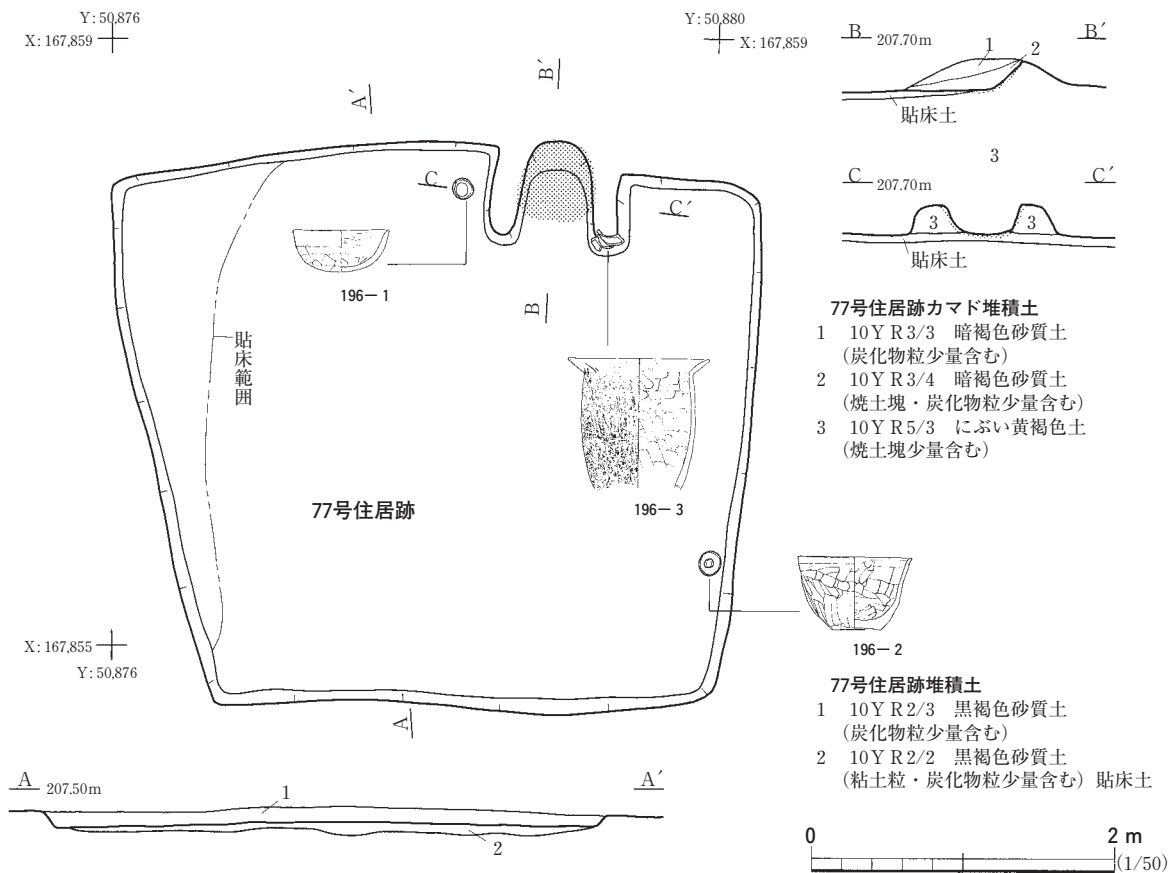


図195 77号住居跡

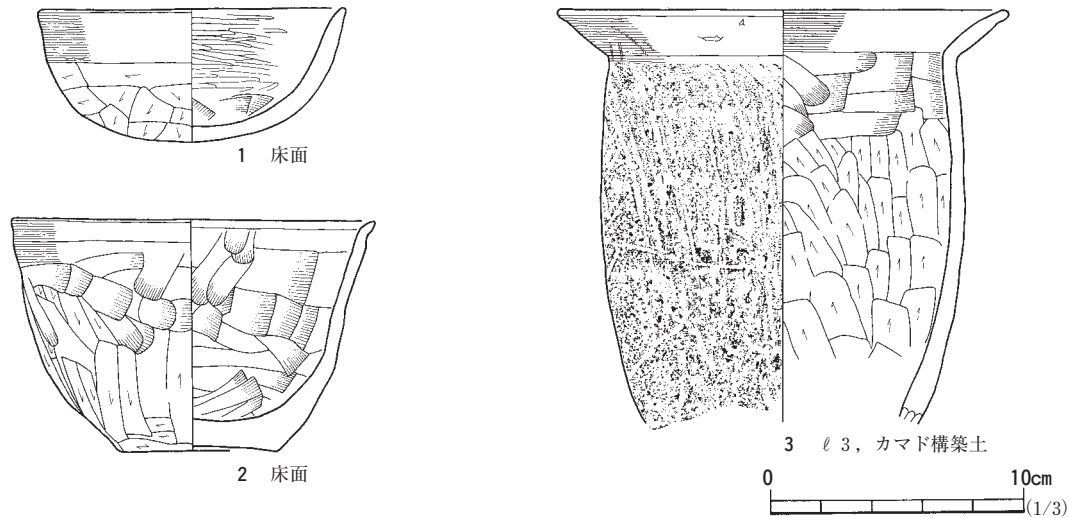


図196 77号住居跡出土遺物

居跡内施設は、確認されなかった。

遺物 (図196, 写真547・548)

遺物は、検出面から床面にかけて出土した。また、図196-3の甕は、カマドの東袖の構築材として用いられていた。出土遺物の内訳は、土師器片65点である。

図196-1は、丸底で体部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がる杯である。2は、胴部下半に膨らみを持ち、胴部中央から口縁部にかけて直線的に立ち上がる小型の甕である。3は、やや膨らみをもった胴部から口縁部が「く」の字状に外反する甕である。

まとめ

本住居跡は、平面形が東西に長い台形を呈している。住居跡内施設として、北側の壁東寄りでカマドを検出した。その他ピットなどは、確認されなかった。本住居跡の所属時期は、床面からの出土遺物などから栗圀式期と考えている。 (大河原)

78号住居跡 S I 78

遺構 (図197, 写真200・201)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央東寄りの地点である。微地形は、東側に向かって緩やかに傾斜している。重複関係は、156号住居跡、3号特殊遺構(住居掘形)を切って営まれている。南周壁は、攪乱で壊され、残っていなかった。

堆積土は、2層に分層された。土層断面図が示すように、典型的なレンズ状堆積であり、遺構は自然埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面のLⅢがそのまま平坦に整えられている。踏み締まりは認められなかった。検出面との比高差は、15~18cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西2.9m、南北3.2m以上を測り、小型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線と概ね一致している。

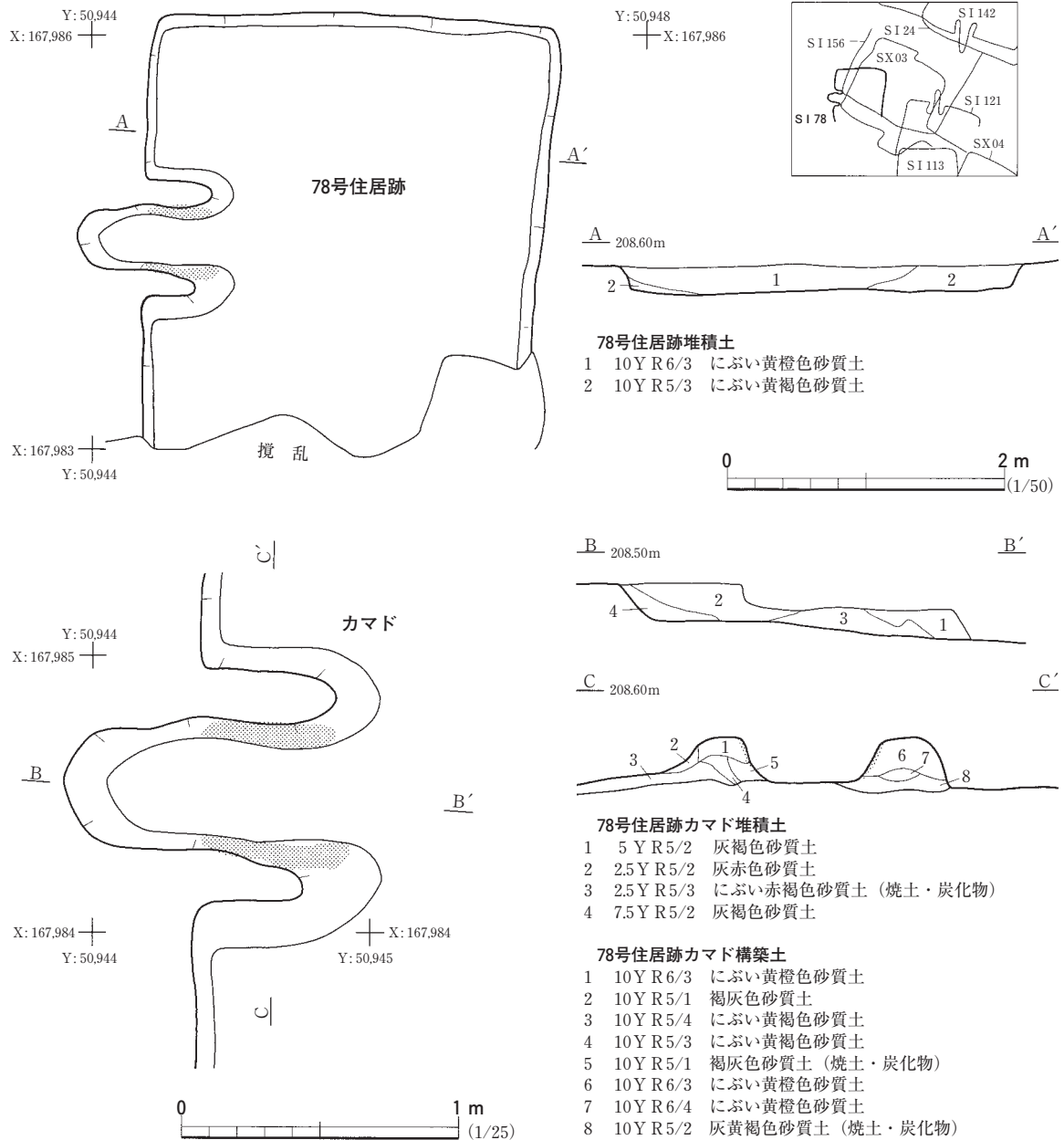


図197 78号住居跡

カマドは、西周壁で検出された。煙道部は、周壁からの遺存長が50cmを測り、先端が失われている。燃焼部は、袖長60cm、焚口幅38cmを測る。内壁面は焼土化していた。袖は、床面から16cmの高さが残っており、焼土混じりの砂質土で構築されたことを確認している。

遺物 (図198)

遺物は、土師器片75点、須恵器片1点が出土した。図示遺物3点は、床面出土である。

図198-1は、銅鏡模倣タイプの土師器杯である。口縁端部が内傾しており、外面はヘラミガキされている。

図198-2は、土師器甕の底部片である。木葉痕が観察される。

図198-3は、須恵器甕の胴部片である。

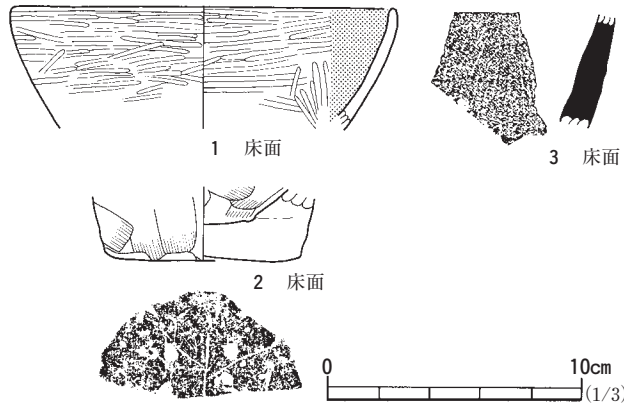


図198 78号住居跡出土遺物

まとめ

本遺構は、自然堤防の中央東寄りで検出された竪穴住居跡である。規模は小さく、住居跡方向は、発掘基準線に概ね一致する。

時期は、床面の土師器杯が国分寺下層式に一般化するタイプなので、8世紀代中心に考えておきたい。

ただし、上限は7世紀代まで溯る可能性を含んでいる。(菅原)

79号住居跡 S I 79

遺 構 (図199, 写真202・203)

本住居跡は、調査区ほぼ中央のN21グリッドにおいて検出された。92・135・140号住居跡、19号土坑と重複しており、いずれの遺構よりも新しい。本住居跡は、多くの部分が攪乱によって失われている。

遺構内堆積土は5層に区分した。いずれもレンズ状の堆積状況を示している。このことから、遺構は自然埋没したと判断した。

住居跡の平面形は、方形を呈していたと思われる。住居跡と方位の関係を南周壁で見ると、真北から83°ほど東へ傾いている。規模は、東西が3.6m、南北が遺存長2.5mである。

検出面から床面までの深さは、7~18cmを測る。南東隅が最も残りが良く、そこから離れるにしたがって浅くなっている。周壁の立ち上がりは、全体的に緩やかである。

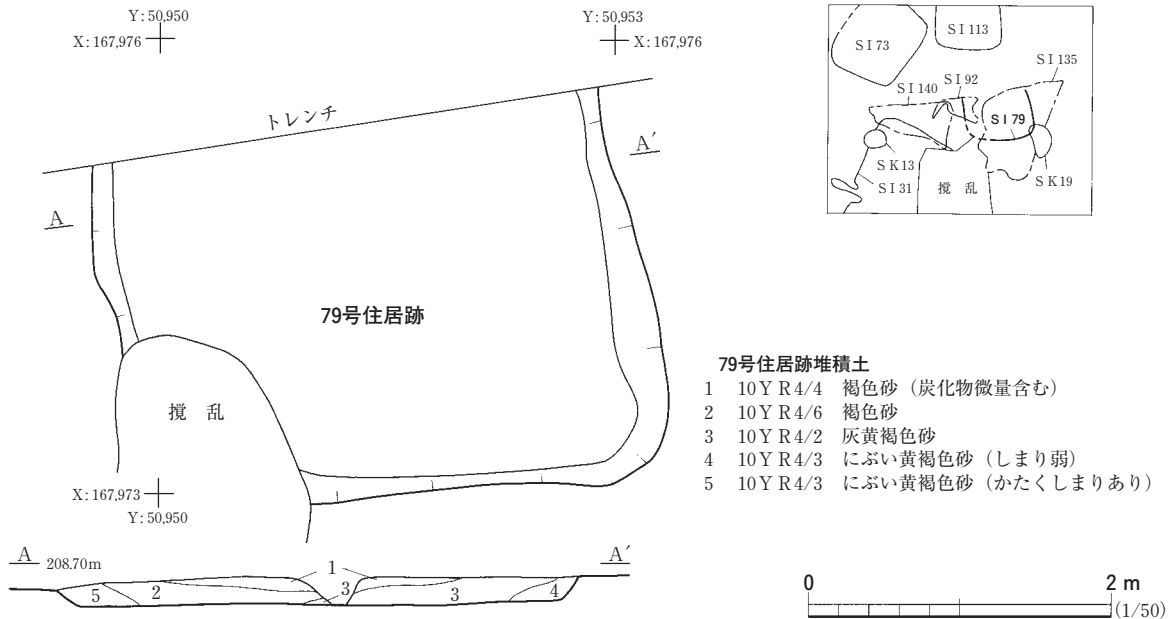


図199 79号住居跡

79号住居跡堆積土

- 1 10Y R4/4 褐色砂 (炭化物微量含む)
- 2 10Y R4/6 褐色砂
- 3 10Y R4/2 灰黄褐色砂
- 4 10Y R4/3 にぶい黄褐色砂 (しまり弱)
- 5 10Y R4/3 にぶい黄褐色砂 (かたくしまりあり)

床面は、細かな凹凸がみられるものの、ほぼ平坦につくられている。とくに顕著な踏み締まりは認められなかった。

住居跡内施設は、確認できなかった。カマドに関しては、北周壁に設置されていた可能性が高いと思われる。

遺物 (図200, 写真547)

遺物は、土師器片64点が出土した。

図200-1は、検出面から出土したロクロ土師器杯である。回転糸切り底で、体部下端に手持ちヘラケズリ調整が施されている。

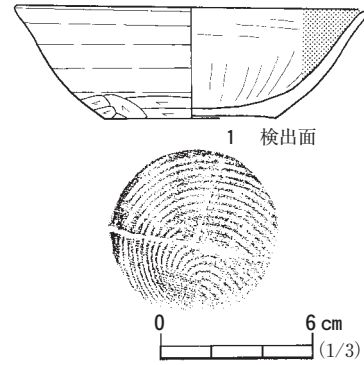


図200 79号住居跡出土遺物

器形の特徴から、9世紀前半～中頃に位置付けられると思われる。しかし、出土状況が悪いので、直接の住居跡年代決定資料とはならない。

まとめ

本遺構は、小型の竪穴住居跡である。カマドは検出されなかった。

営まれた時期は、重複遺構と検出面の遺物から、栗田式期～表杉ノ入式期の幅の中で捉えられると思われる。

(佐藤)

80号住居跡・4号特殊遺構 S I 80・S X 04

遺構 (図201・202, 写真204～206)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。

調査時点では、本遺構は、80号住居跡と4号特殊遺構に別々に精査を行なった。しかし、整理段階で両者の図面・写真を照合したところ、4号特殊遺構は80号住居跡の掘形であり、両者は1つの遺構とみるのが妥当であると判断した。

そこで、ここでは一括して事実報告を行う。提示する平面図は、両者を合成復元して作成したものである。

本住居跡は、113・165号住居跡と重複しており、これらを切って営まれている。また、南東部はトレンチで削りとられ、残っていない。これにより、推定される床面積の半分以上が失われてしまったと考えられる。

堆積土は、2層に分層された。土層断面図が示すように、典型的なレンズ状堆積をしている。このことから、遺構は自然埋没したと考える。

床面は、断面図を作成した付近では貼床されず、掘形底面のLⅢがそのまま平坦に整えられている。しかし、東周壁側では、4号特殊遺構とした掘形上部に、にぶい黄橙色粘質土粒が薄く貼られていた。踏み締まりは、後述するカマドBの中軸線上に認められた。検出面と床面の比高差は、15cm前後を測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西6.5m、南北5.4m以上を測る。

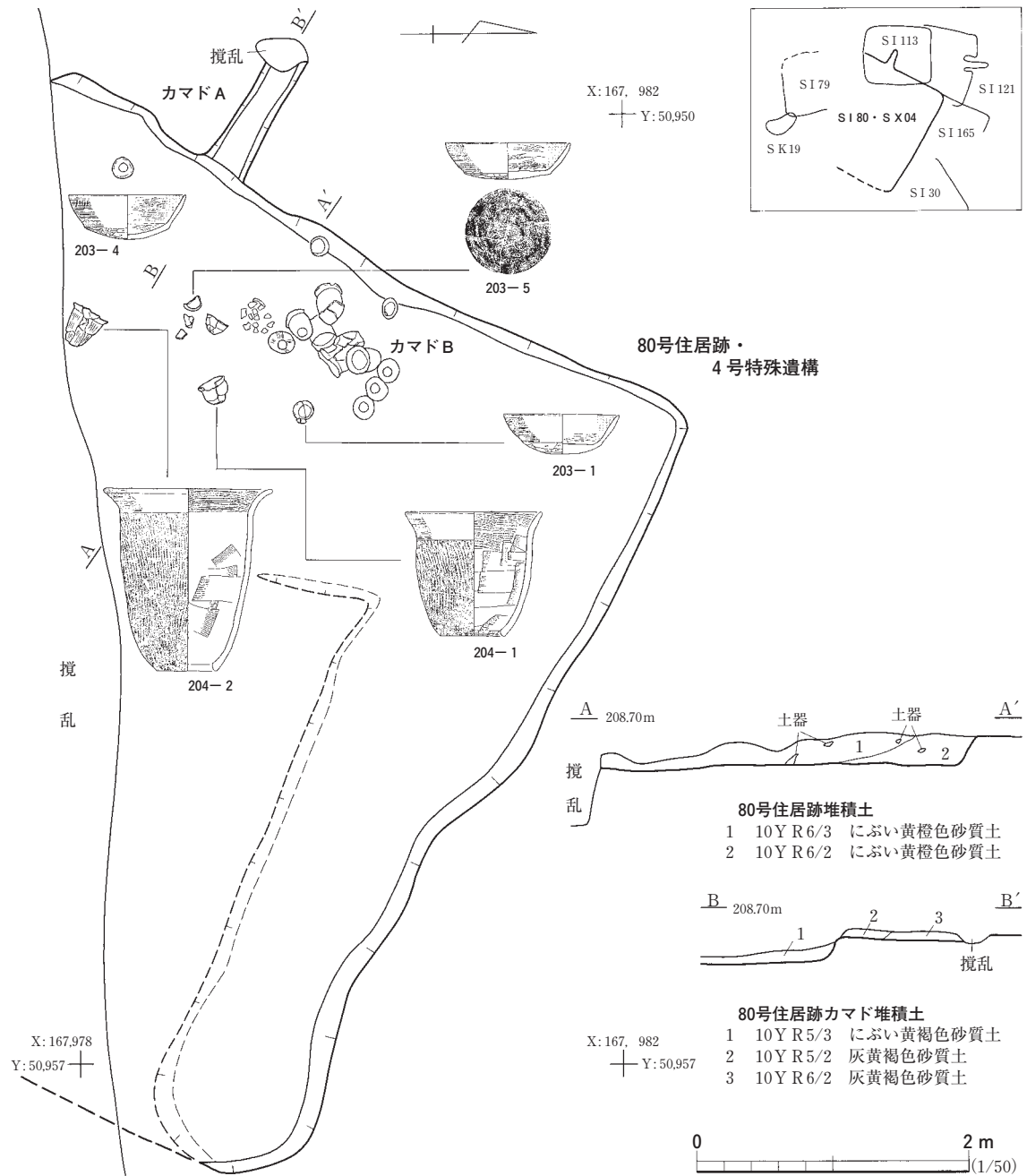


図201 80号住居跡・4号特殊遺構

この大きさは、高木遺跡では比較的大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に32°振れている。

カマドは、西周壁で2か所検出された。記述の都合上、南側のものを「カマドA」、北側のものを「カマドB」とする。

カマドAは、煙道部だけ残っていた。燃烧部は袖が失われ、痕跡すら認められなかった。この点を根拠に、カマドBに先行する古い段階の施設と考えている。煙道部は、周壁から1.0mの長さを測る。

カマドBは、その右隣に構築されたもので、調査の不手際から、袖の構築土を最初から取り除い

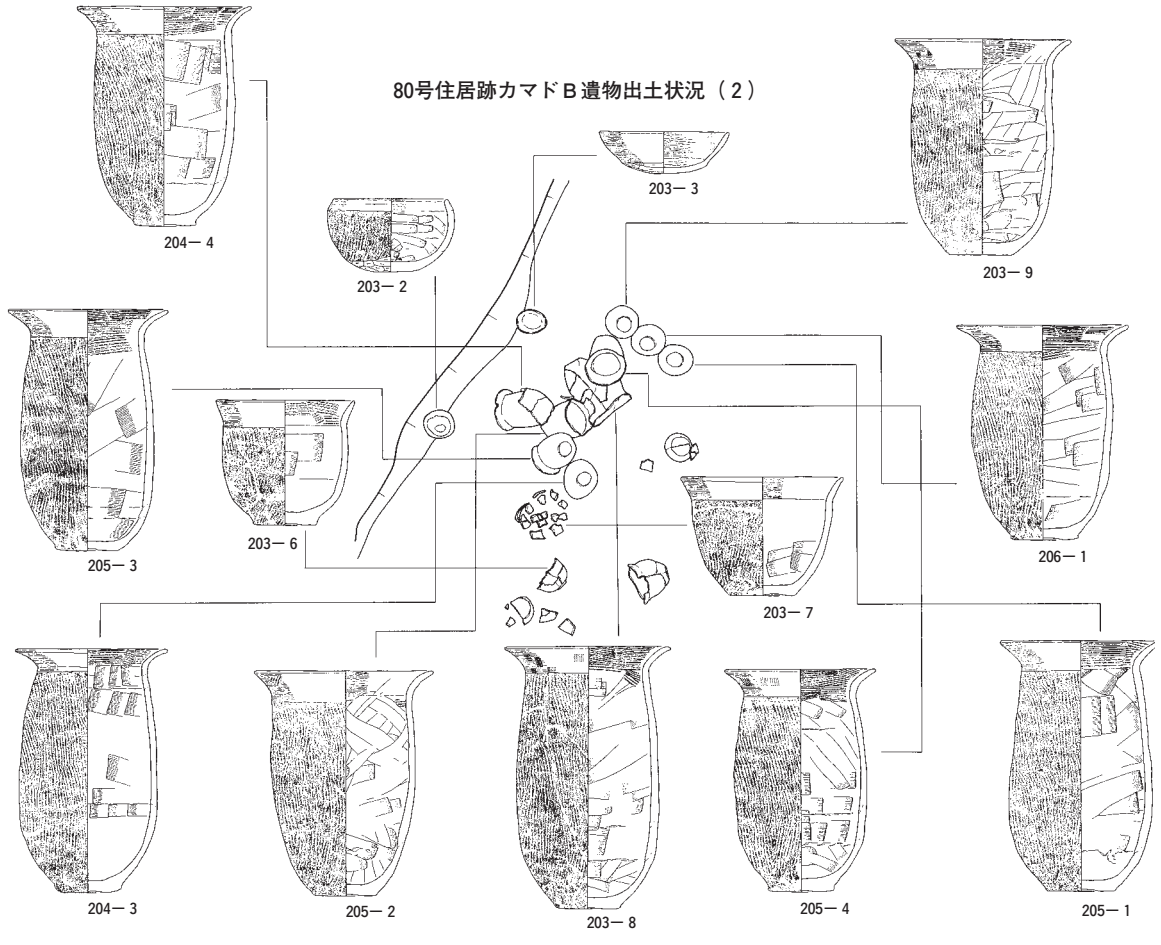
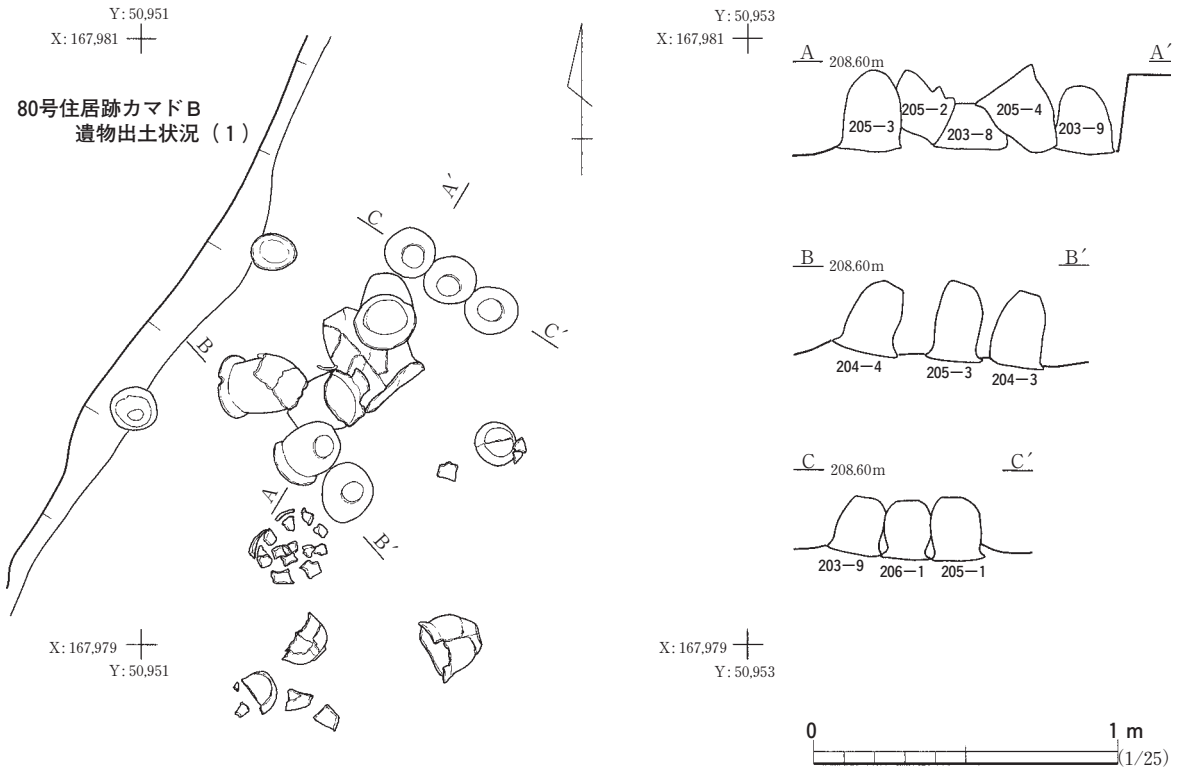


図202 80号住居跡カマドB 遺物出土状況

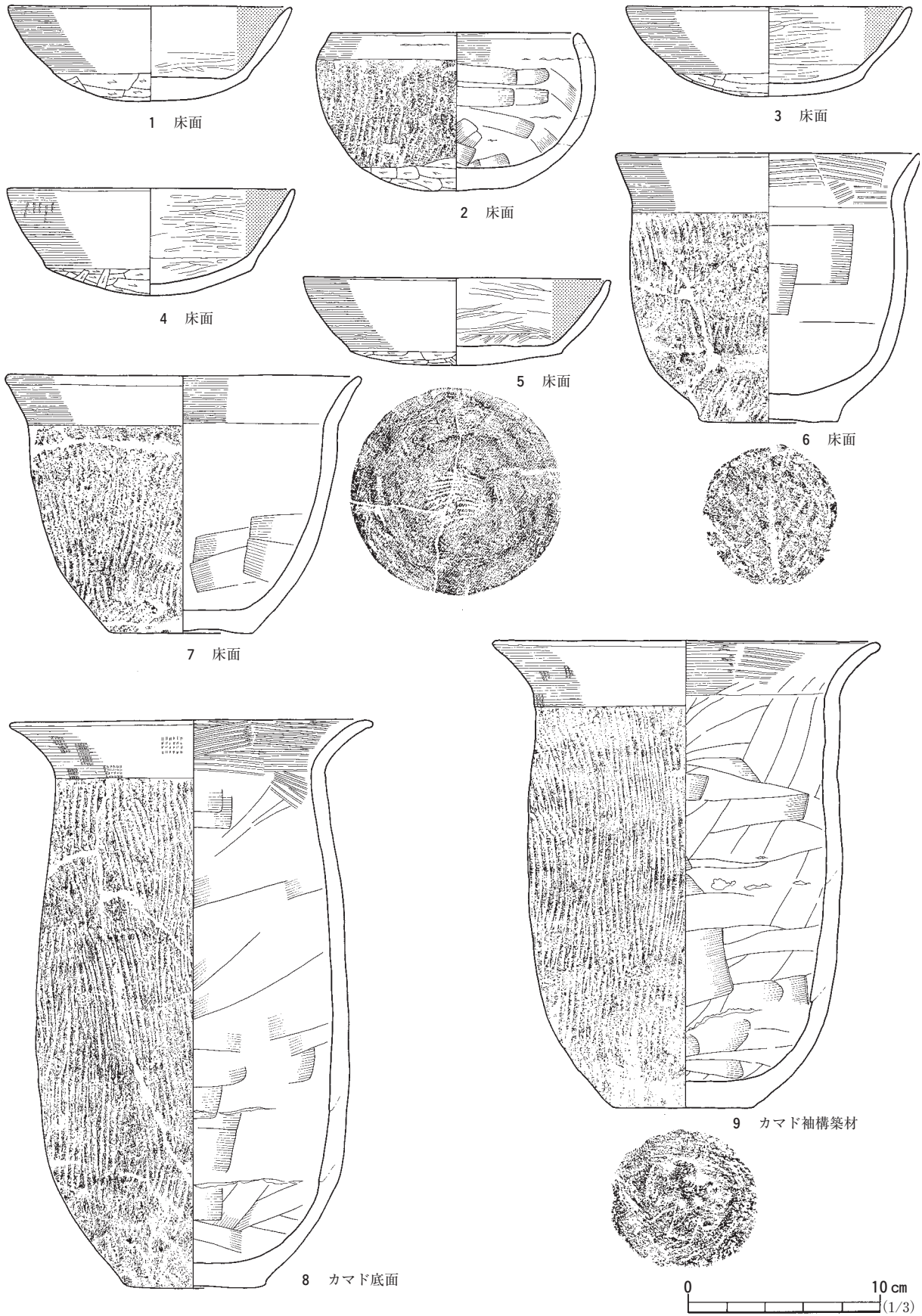


図203 80号住居跡出土遺物（1）

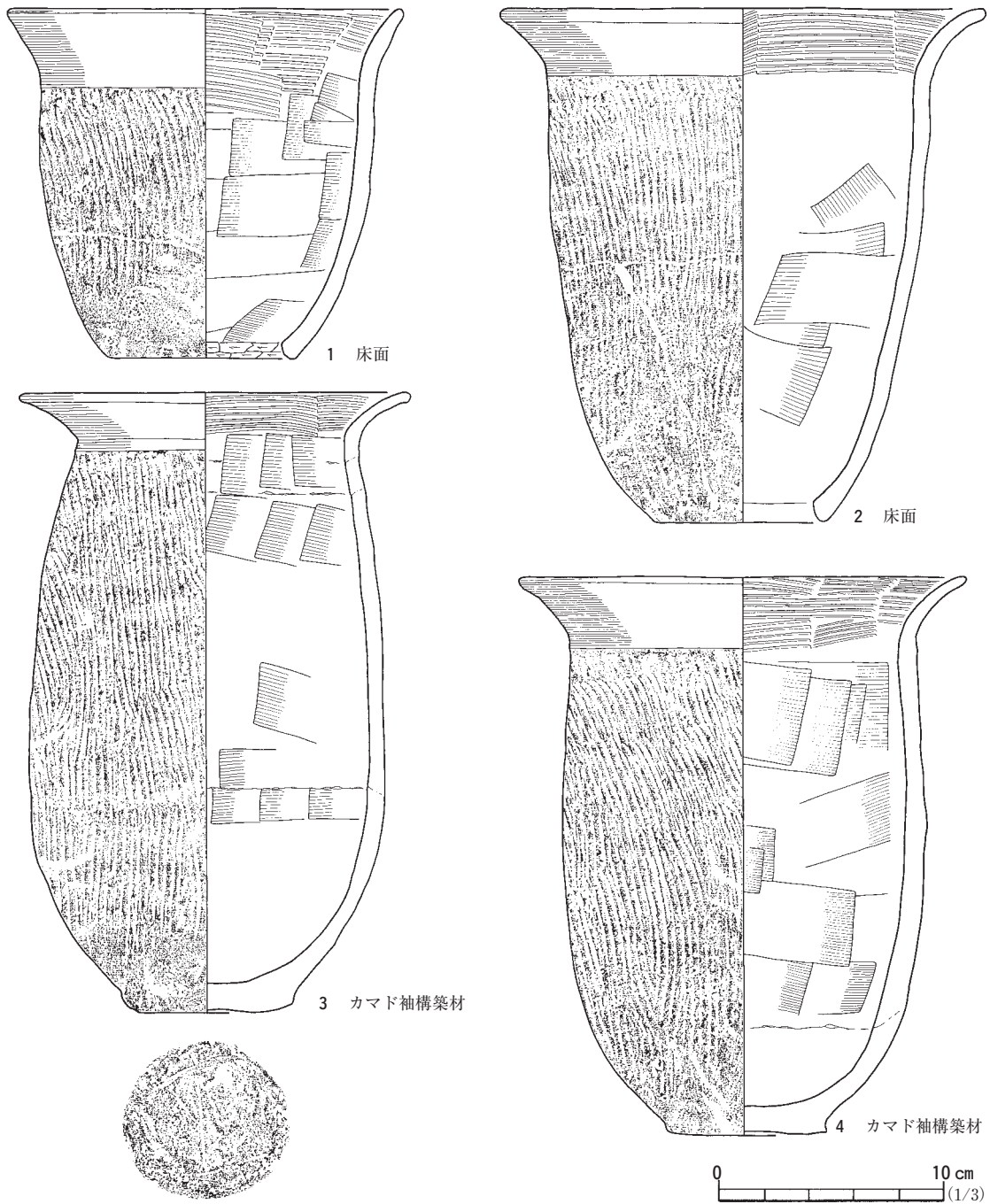


図204 80号住居跡出土遺物（2）

てしまった。ただ、このことで、補強材の据え付け状況がはっきりと捉えられ、伏せた3個体の土師器甕を直線的に並べた状況が窺えた（図202）。

また、懸け口に固定された土師器甕も、原位置を保ったまま検出され、3つ懸け構造であったことが判明している（図202）。

さらに、このような所見とは別に、廃絶時の儀礼行為を示す遺物の出土も確認されている。焚口底面と燃焼部奥壁で、完形の土師器杯が1個体ずつ出土した（図203-1・3）。前者は、正立、後者は伏せられており、故意に置かれた様子がうかがえる。

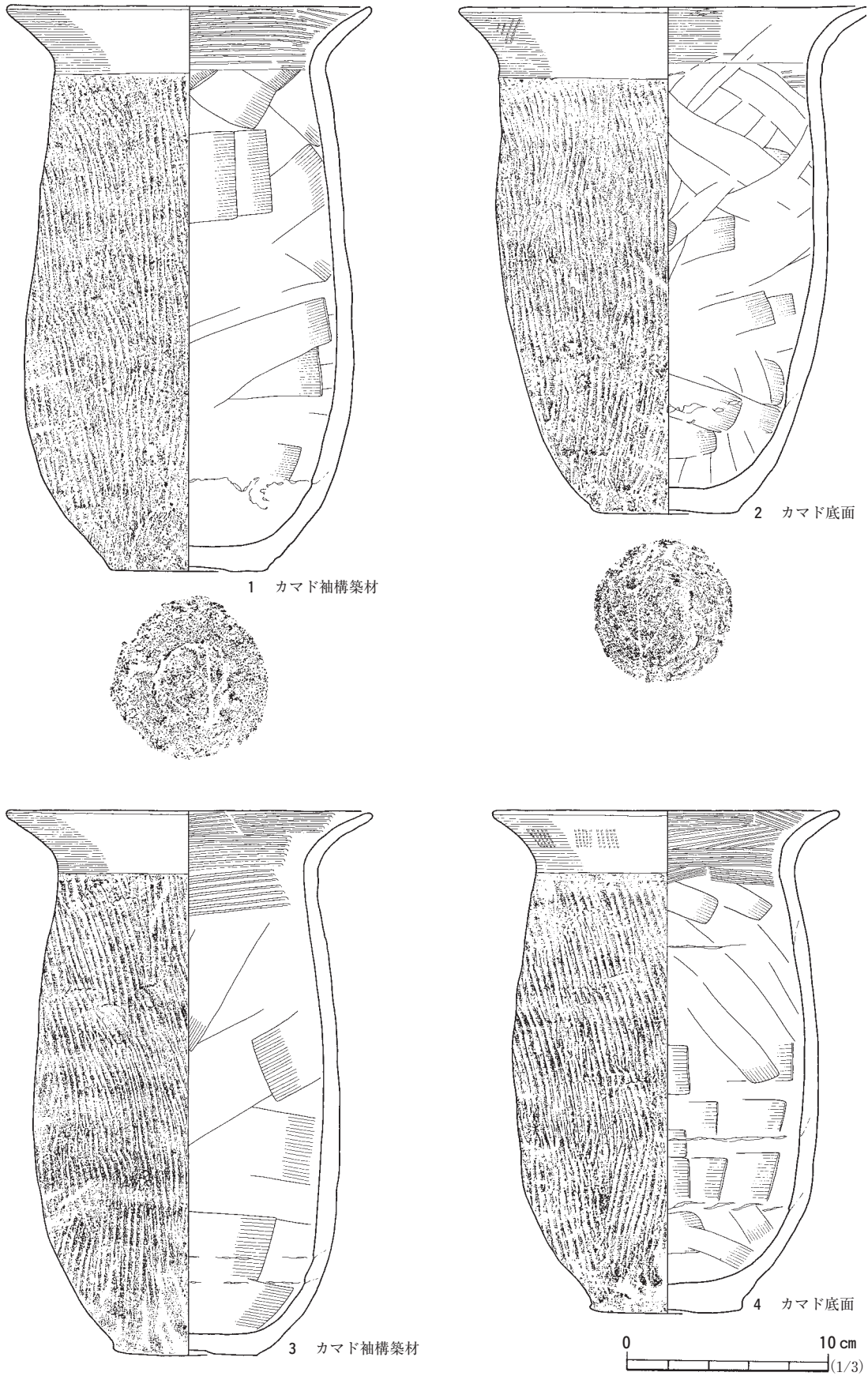


図205 80号住居跡出土遺物（3）

ピット類は検出されていない。

遺物 (図203～206, 写真548～552)

本住居跡からは、土師器片366点が出土した。図示遺物は、18点を数え、豊富である。分布は、カマドBの周辺に集中している。

図203-1～5は、土師器杯である。すべて床面から出土した。2を除く5点は、有段丸底杯に分類され、形態・法量が近似している。注目されるのは、5である。底部外面に、静止糸切り痕が観察される。2は、椀タイプの杯になる。椀ともとれる器形を呈しているが、器面に煮炊痕跡は認められない。器高が高く、口縁部は内湾している。外面はハケメ調整で、内面はナデ仕上げされている。

図203-6・7は、土師器小型甕である。カマドBの左袖脇床面で、近接していた。6は、胴部上半が直立気味で、口縁部が弱く外傾する器形をなす。胴部外面はハケメ調整され、底部外面に木葉痕が観察される。7は、口径が胴部最大径を上回っている。全体に底部に向かって窄まる器形で、外面はハケメ調整されている。

図203-8・9, 図204-3・4, 図205-1～4, 図206-1は、土師器長胴甕になる。このうち、図203-8, 図205-2・4が、煮炊に使用された甕である。他の6点は、カマド袖の補強材にあたる。それらを一見すると、同一工人の製品なのが明らかである。寸胴の胴部に、口縁部が大きく開く共通の器形を呈している。しかも、すべて外面ハケメ調整で、使用された工具の柁目幅が一致しており、胎土・色調までよく似ている。

図204-1・2は、外面ハケメ調整の土師器甕である。どちらも床面から出土した。1は、器高が口径を下回っている。無底式に分類される。2は、胴部に張りが無い。器高20cmを越える大型品である。無底式に分類される。

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。カマドは、袖に土師器甕を3個体ずつ補強し、頑強につくられていた。また、懸け口は、三つ懸け方式であったことが判明している。

遺物では、土師器杯の静止糸切り痕の存在が、注目される。土師器工人と、須恵器・瓦工人の接触を示す事例であろう。

時期については、栗圀式期の後半段階とみておきたい。

(菅原)

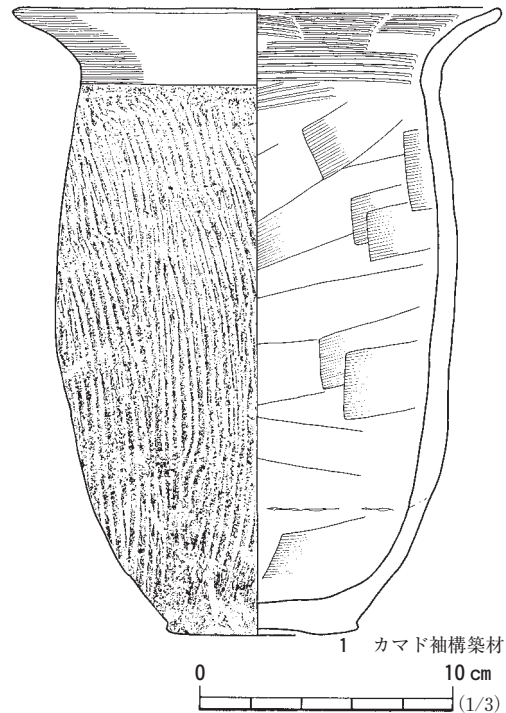


図206 80号住居跡出土遺物 (4)

図206-1は、土師器長胴甕になる。このうち、図203-8, 図205-2・4が、煮炊に使用された甕である。他の6点は、カマド袖の補強材にあたる。それらを一見すると、同一工人の製品なのが明らかである。寸胴の胴部に、口縁部が大きく開く共通の器形を呈している。しかも、すべて外面ハケメ調整で、使用された工具の柁目幅が一致しており、胎土・色調までよく似ている。

図204-1・2は、外面ハケメ調整の土師器甕である。どちらも床面から出土した。1は、器高が口径を下回っている。無底式に分類される。2は、胴部に張りが無い。器高20cmを越える大型品である。無底式に分類される。

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。カマドは、袖に土師器甕を3個体ずつ補強し、頑強につくられていた。また、懸け口は、三つ懸け方式であったことが判明している。

遺物では、土師器杯の静止糸切り痕の存在が、注目される。土師器工人と、須恵器・瓦工人の接触を示す事例であろう。

時期については、栗圀式期の後半段階とみておきたい。

(菅原)

81号住居跡 S I 81

遺 構 (図207・208, 写真207~209)

本住居跡は調査区北側のO20グリッドに位置しており、118号住居跡と重複しているが、本住居跡の東壁が118号住居跡の西壁を破壊している。

住居跡検出面はL II 砂質土面で、方形のプランとカマド煙道と思われる飛び出しが確認されたが、北東コーナーから南西コーナーにかけては水道管理設溝が横切っており、溝断面によって住居跡床面まで一部破壊が及んでいることを知ることができた。遺構内の堆積土は黄褐色砂質土を主体とするもので、壁際に最初に流れ込んだ褐色土を含んだ土の三角堆積が認められ、その状況からして自然に埋没したものと考えられる。

住居跡平面形は北壁下端ラインで約5.5m、西壁下端ラインで約4.5mの長方形を呈し、カマドを通る軸線は74°西に傾いている。壁高は残りの良い北壁で20cm前後遺存しているが、南壁は地形の傾斜によって流出し失われている。床面は貼床はなされておらず、掘り込んだ面をそのまま床としているが、砂質のせいか締まりの強い部分は認められなかった。

床面では2基のピットが検出されている。P 1は2基のピットが重複したものかも知れないが、堆積土は1層しか判断できなかった。大きい掘り込みプランの長径67cm、深さ17cm、円形基調の小さい掘り込みプランの長径38cm、深さ35cmを測る。検出位置から柱穴の可能性も考えられるが、1基のみで対応するピットが未検出であることから、性格は不明である。P 2は北西コーナーに位置する不整形のピットで、長径140cm、深さ30cmを測る。形態から計画性の高い遺構とは考えがたく、住居機能時に開口していたかどうかは不明である。

カマドは西壁中央に位置し、長大な掘形を有すものである。形態は住居跡プラン内に燃焼部を持つ両袖タイプのもので、両袖によって確保された燃焼部の規模は、下端ラインで焚口幅約55cm、煙道へ移行する立ち上がり部分までの奥行き約55cmを測り、袖の高さは20cmまで遺存している。燃焼部から一度立ち上がって外に伸びる煙道は、西壁外方へ掘り込んだ掘形に黒褐色土を充てんして築くものである。8~14cmの下端幅でカマド奥から住居外へ70cm伸びた部分まで遺存しており、先端部は失われている。燃焼部は強く火を受けており、厚いところで10cm程の酸化壁が形成されている。また燃焼部中央の奥壁よりには、土製の支脚が据えられている。

カマド掘形は西壁外方に約200cm飛び出す形で平均60cm前後の幅で掘り込まれており、先端は丸く収められている。砂質の地盤にカマドを築く不都合性から掘形に黒褐色土を充てんしたものと考えられ、おそらく煙道先端も掘形先端近くまで伸びていたと考えられる。失われた煙道を復元すれば、掘形の深さは30cm以上あったものと推定される。

遺 物 (図209, 写真552~554)

出土遺物には土師器・須恵器・土製品があり、図示できたのは12点である。図209-1~5は土師器の杯ですべて住居跡堆積土からの出土である。4は口縁部と体部の境に段を有す丸底の杯である

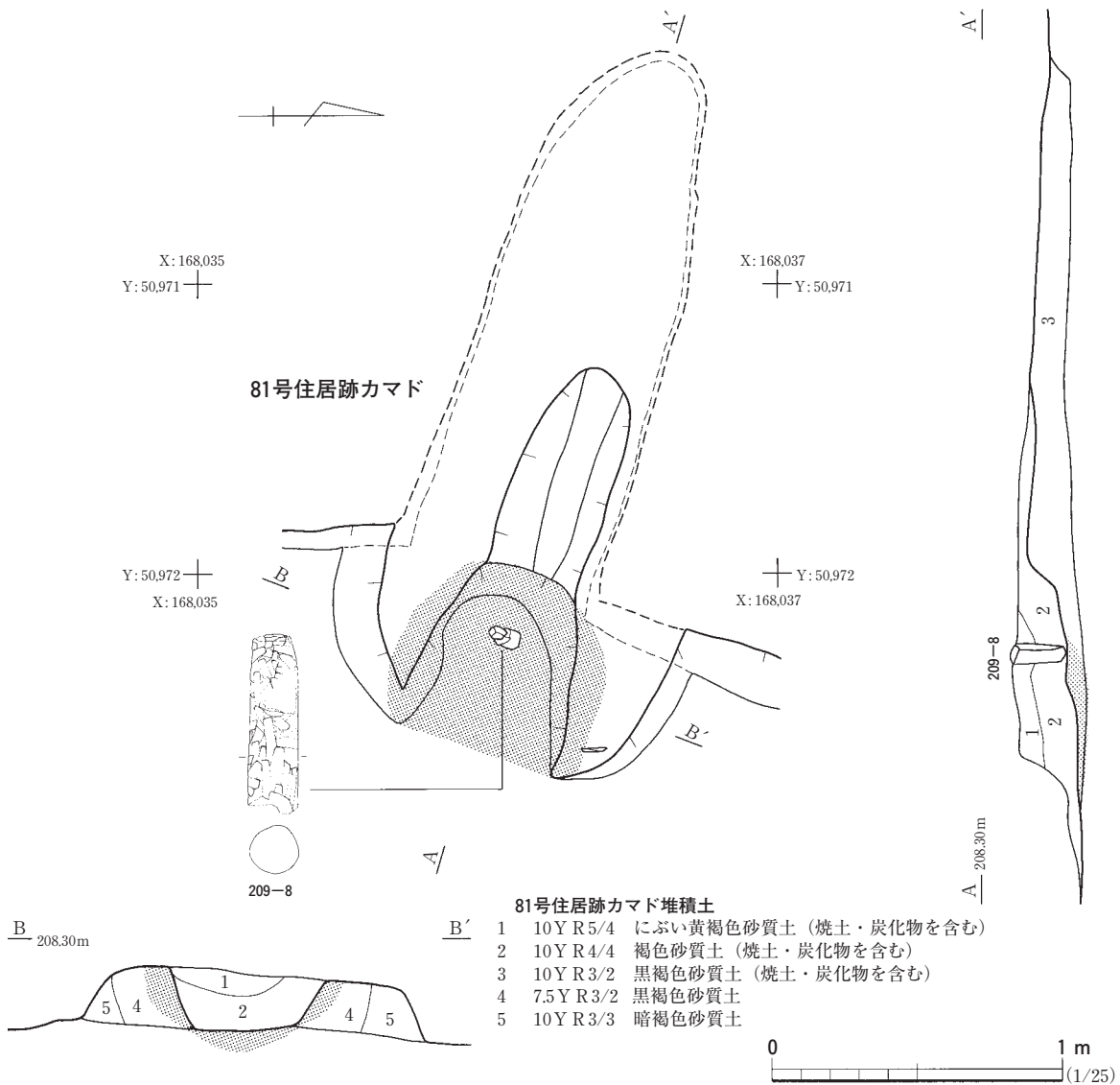


図208 81号住居跡カマド

が、内面には段が見られず、低部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がっている。調整は口縁部ヨコナデ、体部から底部にはヘラケズリがみられ、内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。1・3は平底風丸底、2・5は平底のものでいずれも内湾気味に立ち上がる体部を有している。調整は内外面ともにヘラミガキが施されているが、ヘラミガキの下にヨコナデが認められるものもある。1・3・5は内面黒色処理、2は内外面黒色処理がなされている。

図209-6・7は胴部最大径が中位から上位にあり口縁部が外に開く土師器の甕である。調整は口縁部がヨコナデ、体部にはヘラナデが施され、7には積み上げ痕がよく見られる。いずれも胴部には火を受けた痕跡が認められる。

図209-8はカマド内に据えられていた土製の支脚で、表面は熱を受けてややもろくなっているが全体にナデ調整が観察される。

図209-9～12は住居跡堆積土から出土した須恵器である。9・12は大型の甕の口縁部と体部の破

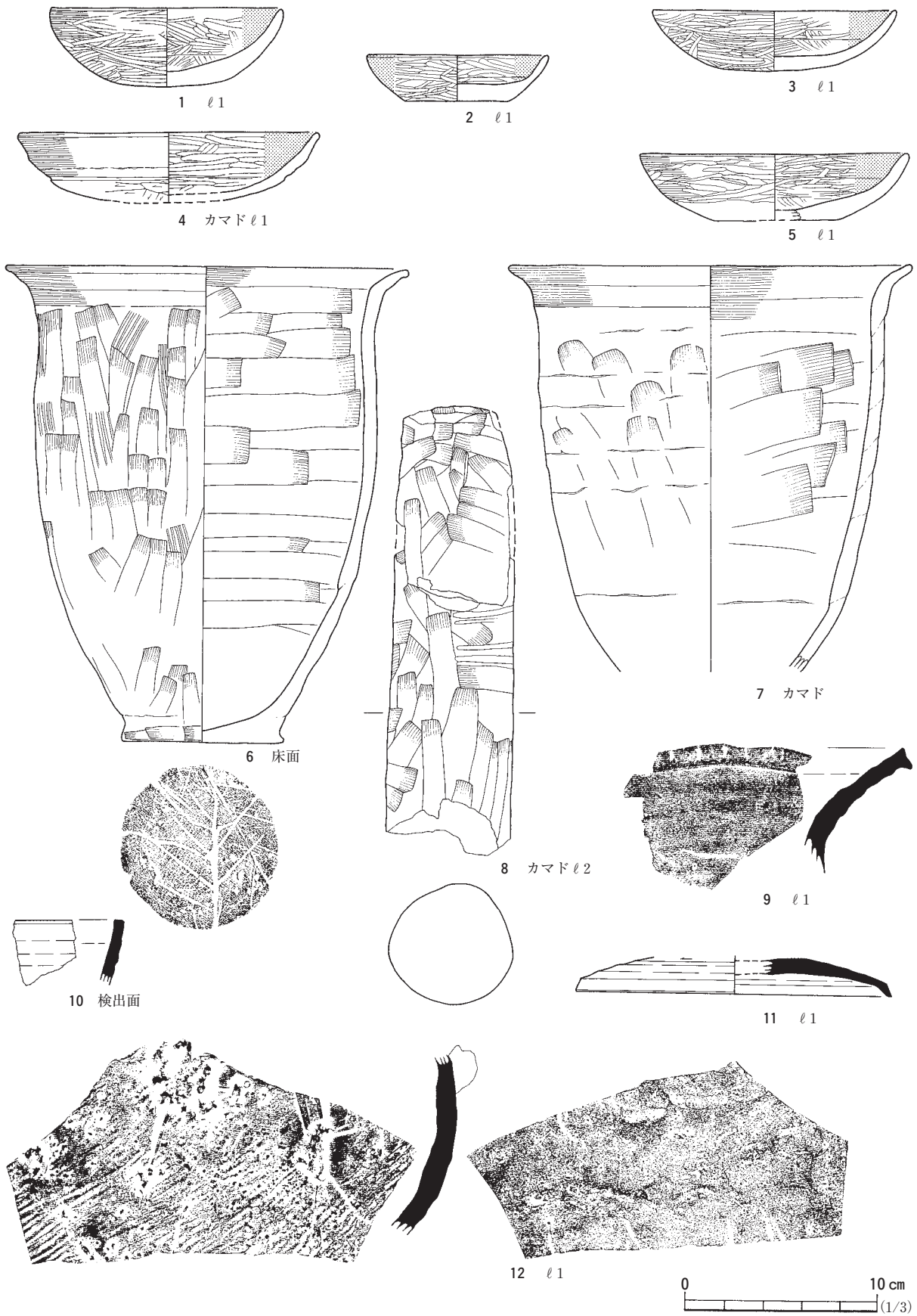


図209 81号住居跡出土遺物

片で、9の口縁部資料には波状沈線などの装飾は見られずロクロ痕のみが観察される。12の外表面には平行タタキ、裏面にはアテ具痕が見られ、外面の数箇所に粘土小塊が熔着している。10は杯の口縁部にも見えるが端部の状況からすると断定しがたく、小片のこともあり判断に苦しむ資料である。11は蓋で端部を下方に曲げる器形を呈し天井部には回転ヘラケズリが観察される。

ま と め

本住居跡はプラン全体が把握される比較的遺存状態の良い遺構である。その規模は一辺5m前後を測る中型のもので、長大な掘形を有すカマドの作りが特徴的である。時期については遺物の特徴からすると8世紀後半頃の時期が考えられる。 (安 田)

82号住居跡 S I 82

遺 構 (図210・211, 写真210~213)

本住居跡は、調査区の南側M23グリッドに位置する。

地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の狭い平坦部の微高地上に立地している。遺構はLⅢ上面で検出したが、住居跡西側と南側壁の周辺は著しい攪乱を受け遺存していない。他の遺構との重複関係は認められなかったが、住居跡の南東側に、84・127・148・149号住居跡が隣接している。

遺構内堆積土は、掘形埋土を加えると2層に区分できる。①については、炭化物や焼土が多量



図210 82号住居跡

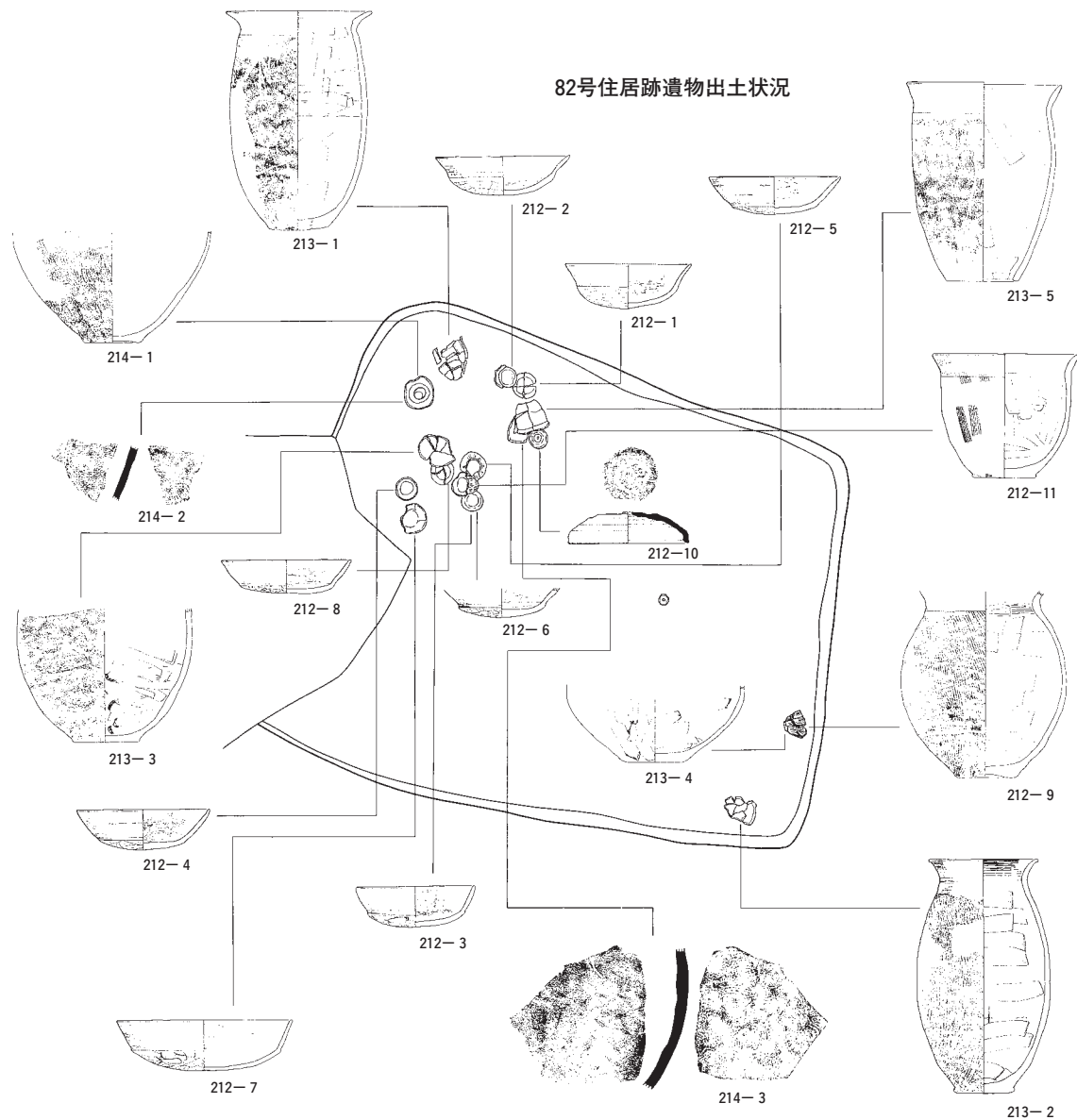


図211 82号住居跡遺物出土状況

に含まれていること、炭化物や焼土粒が床面に散見していることなどから、火災に起因する堆積土と判断した。l 2は、掘形埋土である。方形に掘り込んだ竪穴の底面を、黒褐色砂質土で埋め戻し、住居の床を構築している。

本住居跡の平面形は遺存状況から、東西に長い方形を呈していたと考えられる。規模は、遺存する北側の壁で約4.1m、東側の壁で約3.5mを測る。壁は、比較的急に立ち上がっている。床面からの高さは、6～10cmを測る。

床面は細かな凹凸が認められ、全体的に踏み締まっていた。本住居跡については、炭化材などは確認されなかったものの、炭化物や焼土粒が床面に散見していることなどから、火災によって焼失したものと判断した。

また、床面の北西隅からは、多量の遺物がほぼ完形のままで、出土していることから、住居機能

時に火災に見舞われたものと考えられる。

本住居跡からは、住居跡内施設は確認されなかった。

遺物 (図212～214, 写真554～556)

遺物は、床面の北西隅でまとまって出土している。本住居跡は、住居機能時に火災によって焼失したものと判断したことから、床面で出土した遺物の多くがほぼ当時の状況を示していると思われる。

出土遺物を見ると、食膳具の杯がほぼ完形で出土しているのに対し、煮炊具の甕については、口縁部から胴部にかけて欠損しているものが目立つ。これについては、後世の攪乱の影響で接合関係にある破片資料が欠落したためとも考えられるが、使用時の状況を保っていたとすれば、口縁部を欠損した状態で使用した可能性もあることを指摘しておきたい。出土遺物の内訳は、土師器片288点、須恵器片5点である。

図212-1～8は、土師器杯である。器形的には、体部中央に段を有し、口縁部が緩やかに外反するもの(1・2)、体部下半に段を有すもの(3～8)、口縁部の立ち上がり直立気味なもの(3)、緩やかに外傾しながら、直線的に立ち上がるもの(4・5・7・8)とに分類することができると思われる。

同図10は、須恵器の杯蓋である。天井の中央と体部間に段を有し、口縁端部がやや内傾する。また、天井部には小穴が認められる。これは、焼成前に施されたもので、この製品が通常の使われ方をしていなかったことを示している。

図212-9・11, 図213, 図214-1は土師器の甕である。全体の器形が分かるものとして、中型のもので、胴部中央がやや膨らみ、口縁部が「く」の字状に外反するもの(図212-11)、大型で胴部中央が膨らみ球形状になるもの(図212-9)、やや膨らみを持った胴部から、緩やかに内傾しながら頸部へ立ち上がり、口縁部が大きく外反するもの(図213-1)、胴部が卵形を呈し、頸部が大きくすぼまり、口縁部が「く」の字状に外反するもの(図213-2)などが認められる。図213-3・4, 図214-1は、いずれも大型の甕の底部から胴部中央の資料と思われる。

図213-5は、甗である。胴部上半がやや膨らみ、口縁部が緩やかに外傾しながら立ち上がる器形となる。

図214-2・3は須恵器の甕の胴部付近の資料である。いずれも、アテ具痕とタタキ板の痕跡が認められ、3の内面には、同心円状のアテ具痕が認められる。

まとめ

本住居跡は、遺存状況から南北に長い隅丸方形を呈していたと考えられる。住居跡内堆積土や床面に散見する炭化物、焼土粒などから、焼失家屋と判断した。住居機能時に火災に見舞われたためか、遺物は、北西隅の床面からまとまって出土した。当時の土器組成を知る上で良好な資料といえる。また、住居跡内施設などは確認されなかった。

本住居跡の所属時期は、床面で出土した遺物などから栗圀式期と考えている。(大河原)

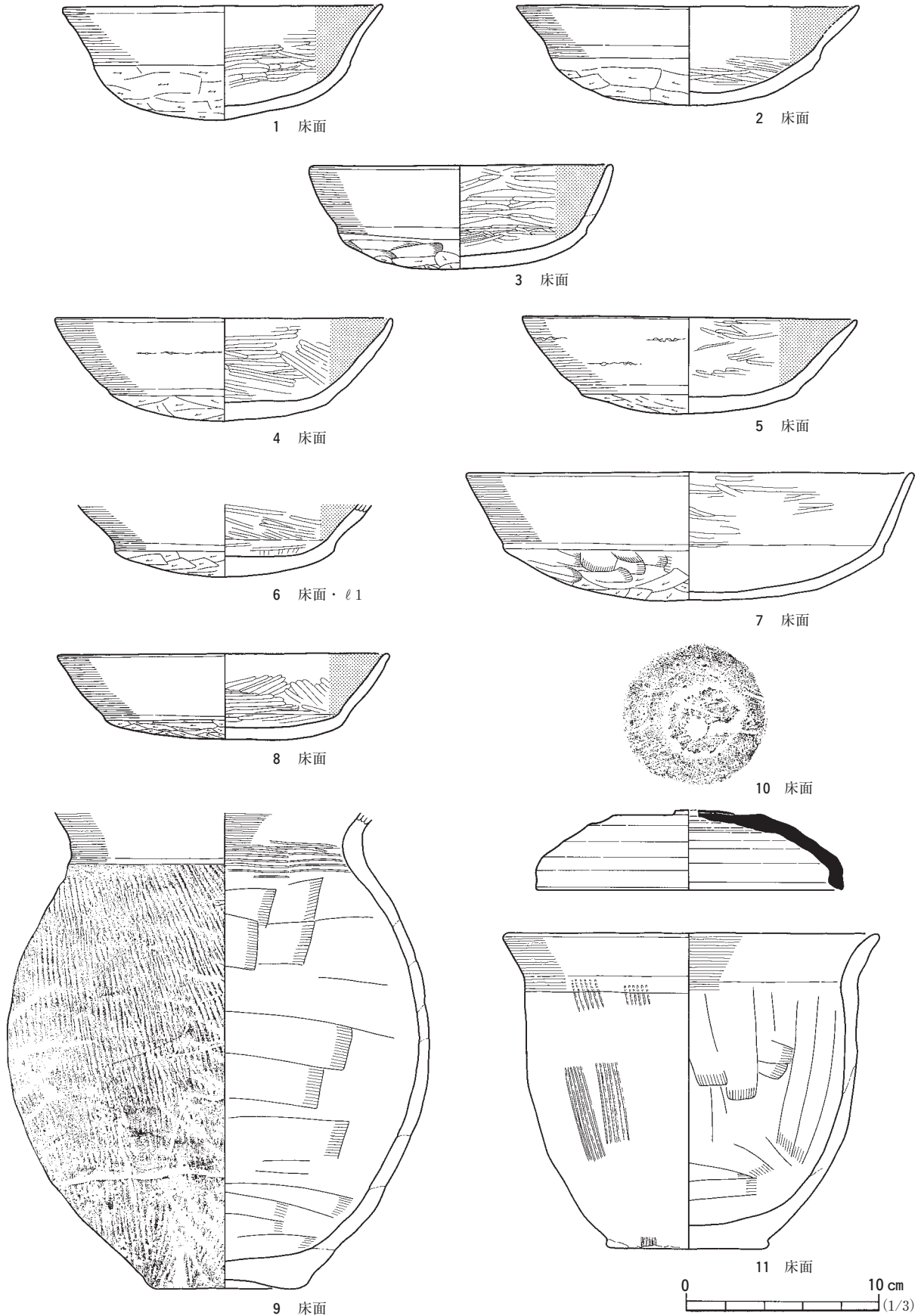


図212 82号住居跡出土遺物 (1)

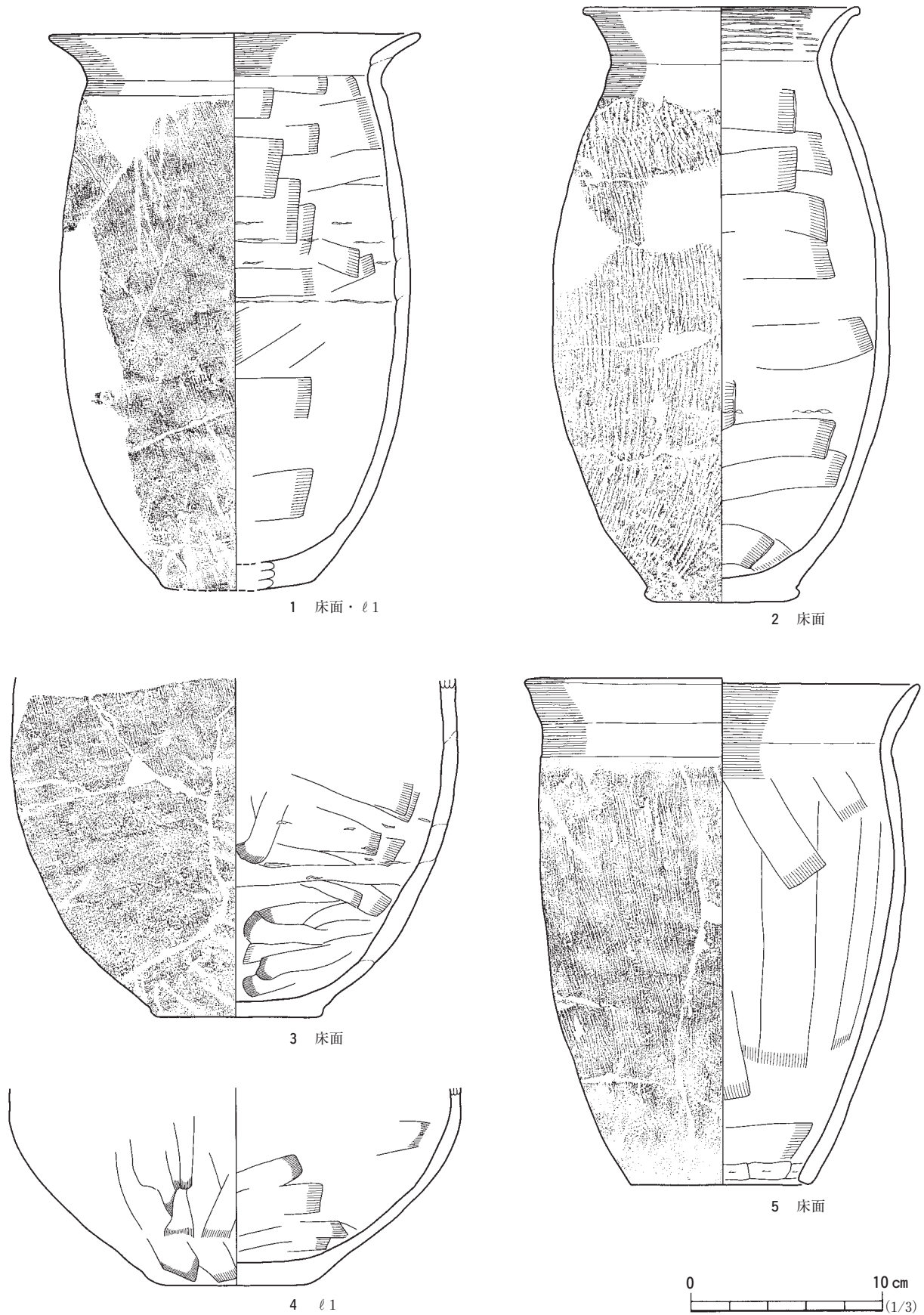


図213 82号住居跡出土遺物（2）

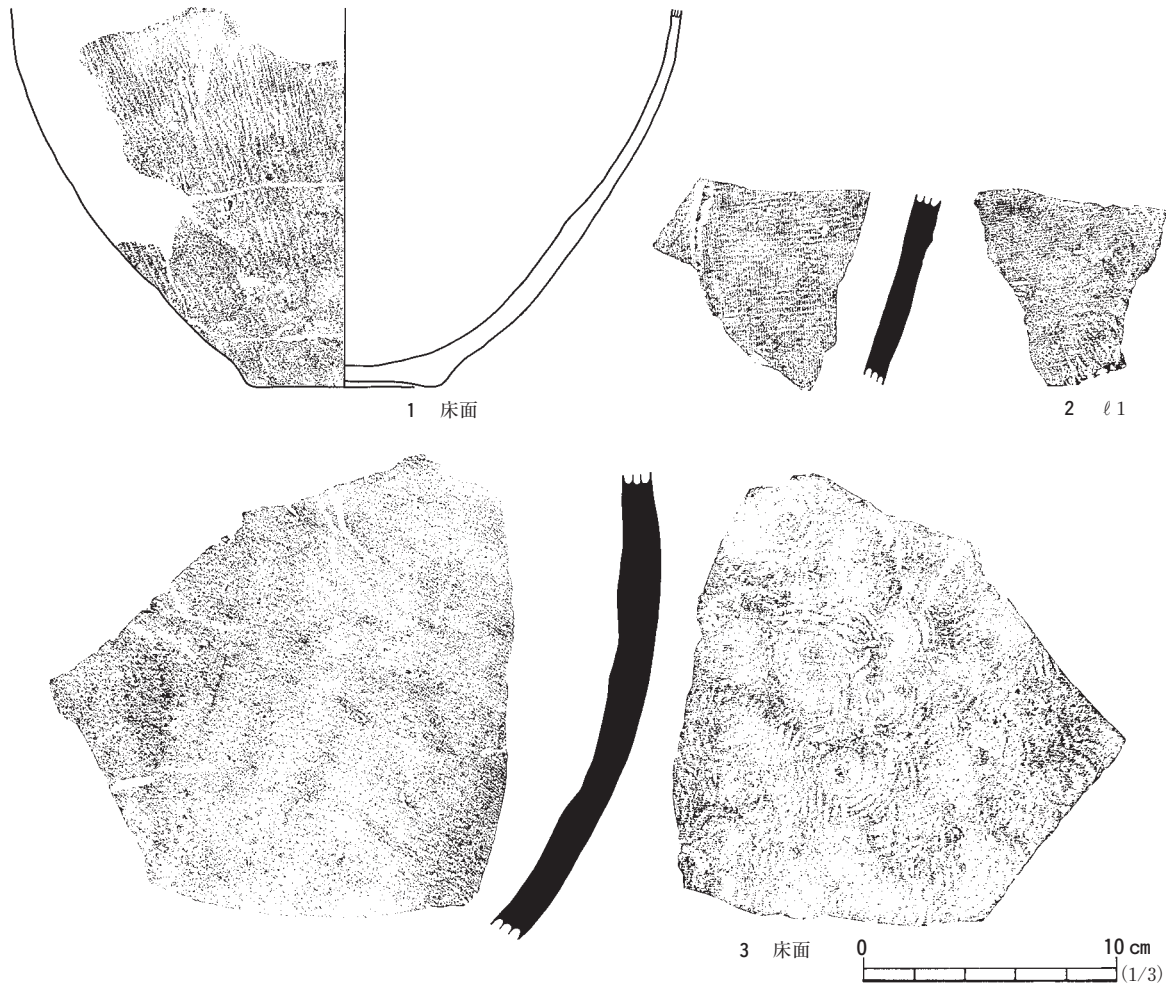


図214 82号住居跡出土遺物 (3)

83号住居跡 S I 83

遺 構 (図215, 写真214・215)

本住居跡は、調査区南側M24グリッドに位置する。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の西側緩斜面の肩部に立地している。遺構はL IV上面で検出したが、東側と西側の壁の一部は攪乱を受け遺存していない。35号土坑と重複関係にあり、本住居跡が新しい。また、76号住居跡が南側に隣接している。

遺構内堆積土は、2層に区分できる。l 1・2ともに壁際からの流入状態を示すことから、自然堆積と判断した。

本住居跡の平面形は、一辺が約4.7mの歪んだ正方形を呈している。遺存する壁は、南西側で比較的急に立ち上がるものの、その他の壁は緩やかに外傾しながら立ち上がっている。床面から検出面までの高さは、8~33cmを測り、南側に向かい高まる。床面は、黒褐色砂質土を用い貼床が施され、ほぼ平坦に整えられているが緩やかな凹凸が認められる。また、床面中央付近で、強い踏み締まりが認められた。

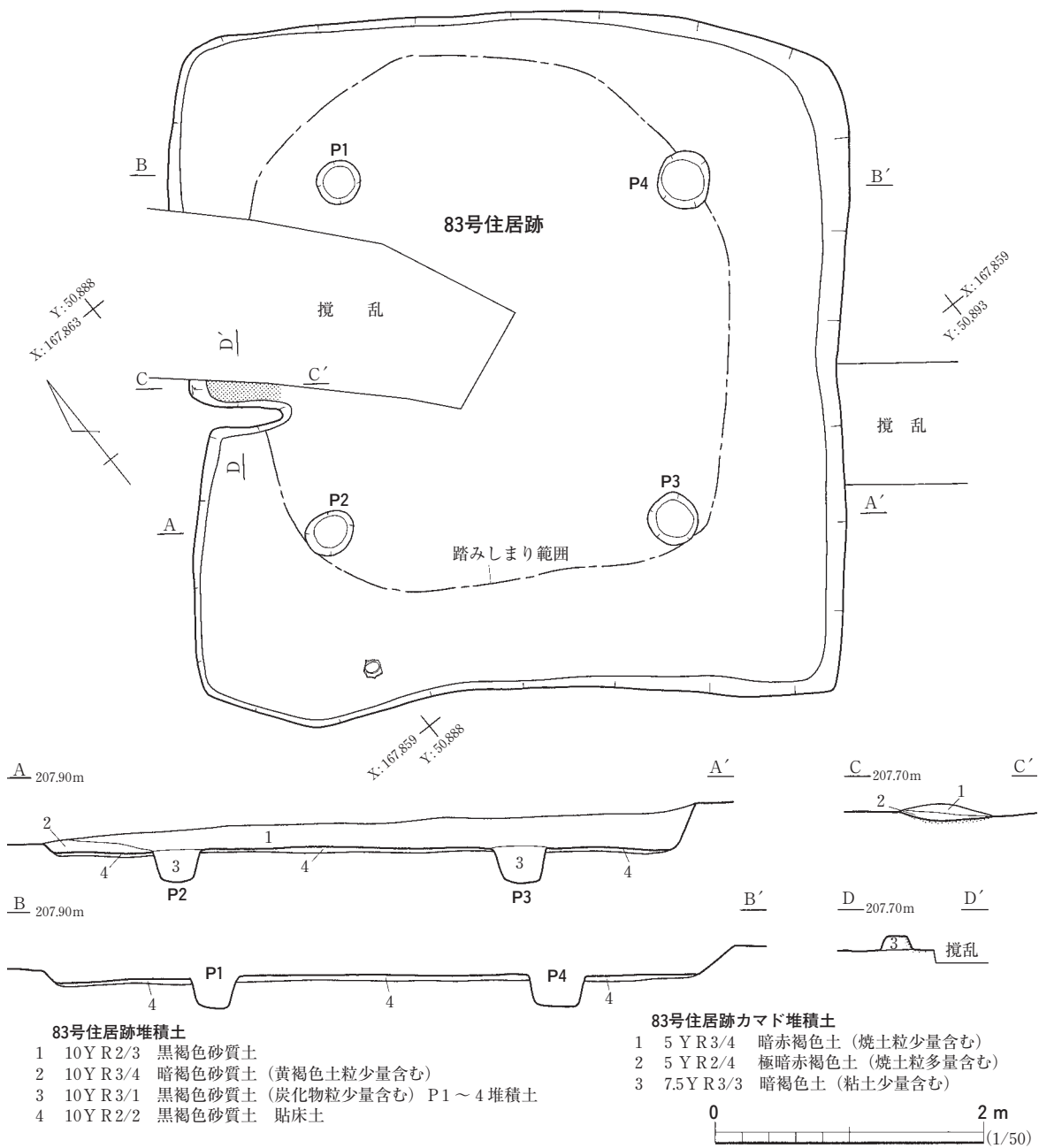


図215 83号住居跡

住居跡内施設として、カマドとピット4個を検出した。カマドは、住居跡の西壁のほぼ中央に位置している。攪乱を受け北側の袖は遺存していない。遺存する南側の袖は、褐色土に少量の粘土を用い構築されていた。規模は、遺存する南側の袖で住居内に60cmほど張り出し、最大幅は30cmを測る。遺存する燃焼部は最大長60cm、燃焼部底面は、床面から5cmほど窪まり、約2cmほど焼土化していた。

カマド内堆積土は2層に区分した。焼土粒を多量に含む2は天井崩落土、1については、カマド崩壊後の堆積土と判断している。

ピットは、4個検出した。床面の北側西寄りP1、東寄りP4、床面南側西寄りP2、東

寄りでP 3をそれぞれ検出した。ピットの平面形は円形を呈し、規模直径30cm～40cm、深さは20cm～30cmを測る。ピット内の堆積土は、1層でいずれも黒褐色砂質土が堆積していた。これらピットについては、ほぼ住居跡

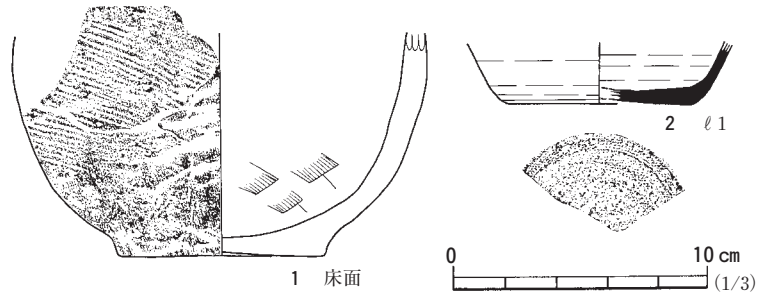


図216 83号住居跡出土遺物

各隅の対角線上に位置し、一辺が2.5m前後の間隔で配置されていることや、堆積土や規模なども類似することから、上屋を支えた支柱穴と考えられる。

遺物 (図216, 写真556)

遺物は、検出面から床面にかけて土師器191点、須恵器1点が出土している。図216-1は、やや上げ底気味の土師器甕である。2は須恵器杯の底部で、底面に回転ヘラ切りの痕跡が認められる。

まとめ

本住居跡は、一辺が4.7mの歪んだ方形を呈している。住居跡内施設としてカマドとピット4個を検出した。ピットは、ほぼ住居跡各隅の対角線上に位置し、一辺が2.5m前後の間隔で配置されていることから、支柱穴と判断した。本住居跡の所属時期は、床面などの出土遺物などから栗田式期と考えている。

(大河原)

84号住居跡 S I 84

遺構 (図217・218, 写真216・217)

本住居跡は、調査区の南側M23・24グリッドに位置する。

地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の狭い平坦部の微高地上に立地している。

遺構はL III上面で検出した。

149号住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が新しい。また、住居跡の北西側に82号住居跡、南側に127号住居跡、南東側に148号住居跡が隣接している。

遺構内堆積土は、1層である。不自然な混入物などが認められないことから、自然堆積と判断している。

本住居跡の平面形は、東西に長い歪んだ方形を呈している。規模は、南側の壁で約4.6m、東側の壁で約3.6mを測り、やや小型であった。

壁は、いずれもやや急激な角度で立ち上がっている。床面から検出面までの高さは、18～22cmを測る。床面は、ほぼ平坦に作られ、全体的に軽い踏み締まりが認められた。貼床は、施されていない。

住居跡内施設として、カマドとピット1個を検出した。

カマドは、住居跡西壁のほぼ中央に作られている。カマドの袖は黒褐色粘土を用い構築されてい

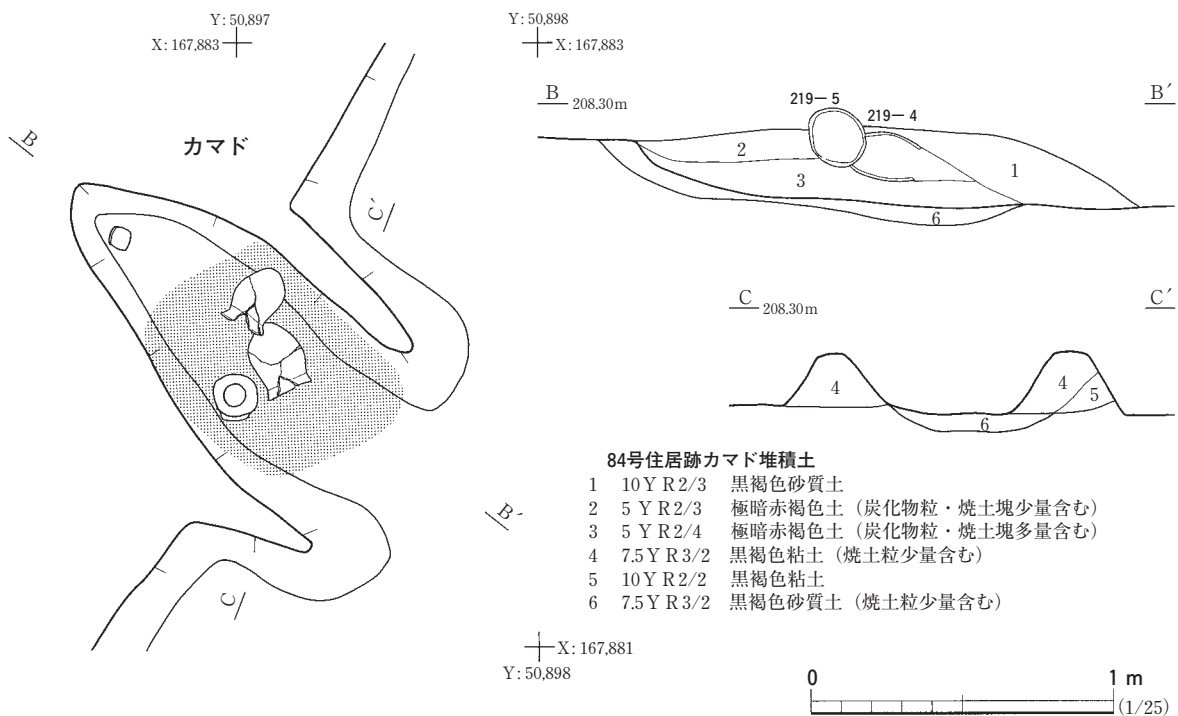
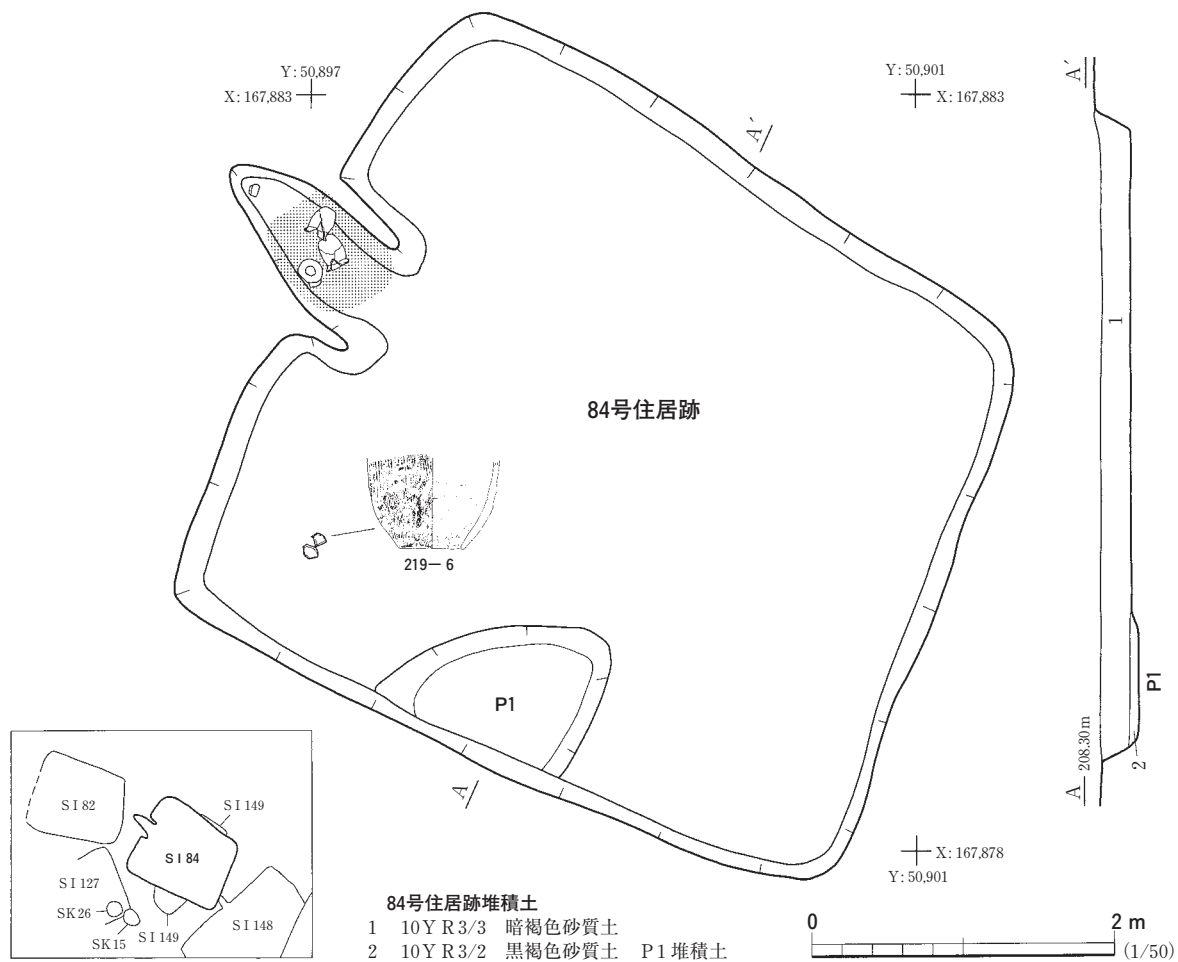


図217 84号住居跡

たが、北側の袖は、断面観察の結果、黒褐色粘土を2度積み上げ作られていた。カマドの袖は、北側の袖で72cm、南側で50cmほど東側に張り出していた。袖の最大幅は北側で35cm、南側で35cmを測る。

両袖に挟まれた燃焼部は最大長55cm、最大幅は42cmを測る。燃焼部底面では、舌状の焼面が認められたが、被熱は弱く焼土化はしていなかった。

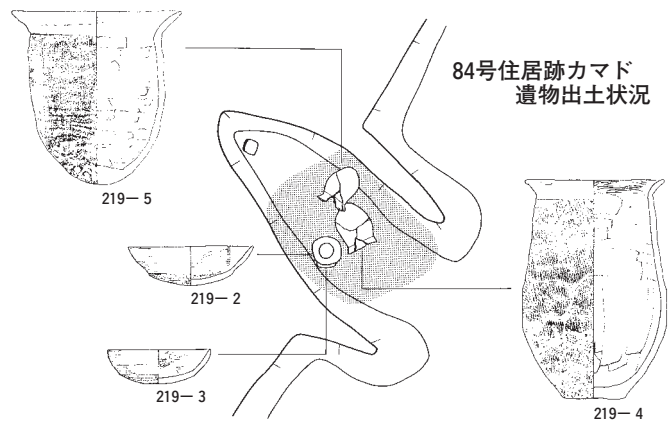


図218 84号住居跡カマド遺物出土状況

また、燃焼部から奥壁にかけては、土坑状の掘形を設け、掘形を黒褐色砂質土で埋め戻し、平坦に整えている。

カマド内堆積土は3層に区分した。炭化物と焼土塊を多量に含む ℓ 3は天井崩落土、 ℓ 1・2については、カマド天井崩落後の流入土と判断した。

また、 ℓ 3上面で土師器杯が重なって(図219-2・3)、土師器甕(図219-4・5)がほぼ完形のまま横倒しの状態で出土している。これらの杯、甕については、構築材やカマド据え付けの甕の可能性も考えられるが、出土状況やカマド内堆積土などから、カマド崩壊後に意識的に置かれたものと判断した。

ピットは、南側の壁中央に接して1個検出した。このため、P1の平面形は歪んだ台形状を呈している。規模は、南北で最大長110cm、東西で140cm、床面からのピットの深さは10cmを測る。堆積土は、1層で黒褐色砂質土が堆積していた。

遺物 (図219, 写真557)

遺物は、検出面から床面にかけてとカマド内から出土している。特にカマドからは、土師器杯が二重に重なり、また土師器甕がほぼ完形のまま横倒しの状態で出土している。

図219-1～3は、土師器杯である。いずれも、底部に施されたケズリ調整により、体部下半に段を有している。1は平底気味に、2・3は丸底風に仕上げられている。

同図4・5は、土師器甕である。4は胴部下半が膨らみ、やや内傾しながら立ち上がる。底部はやや上底となる。5は胴部がほぼ直線的に立ち上がる器形で、底部は丸底に近い。口縁部は、いずれも「く」の字状に外反する。

同図6は、甌の底部付近の資料である。

まとめ

本住居跡は、東西に長い方形を呈している。住居跡内施設として、カマドとピット1個を検出している。

カマド内からは、土師器杯と土師器甕がほぼ完形のままで出土している。出土状況やカマド内堆

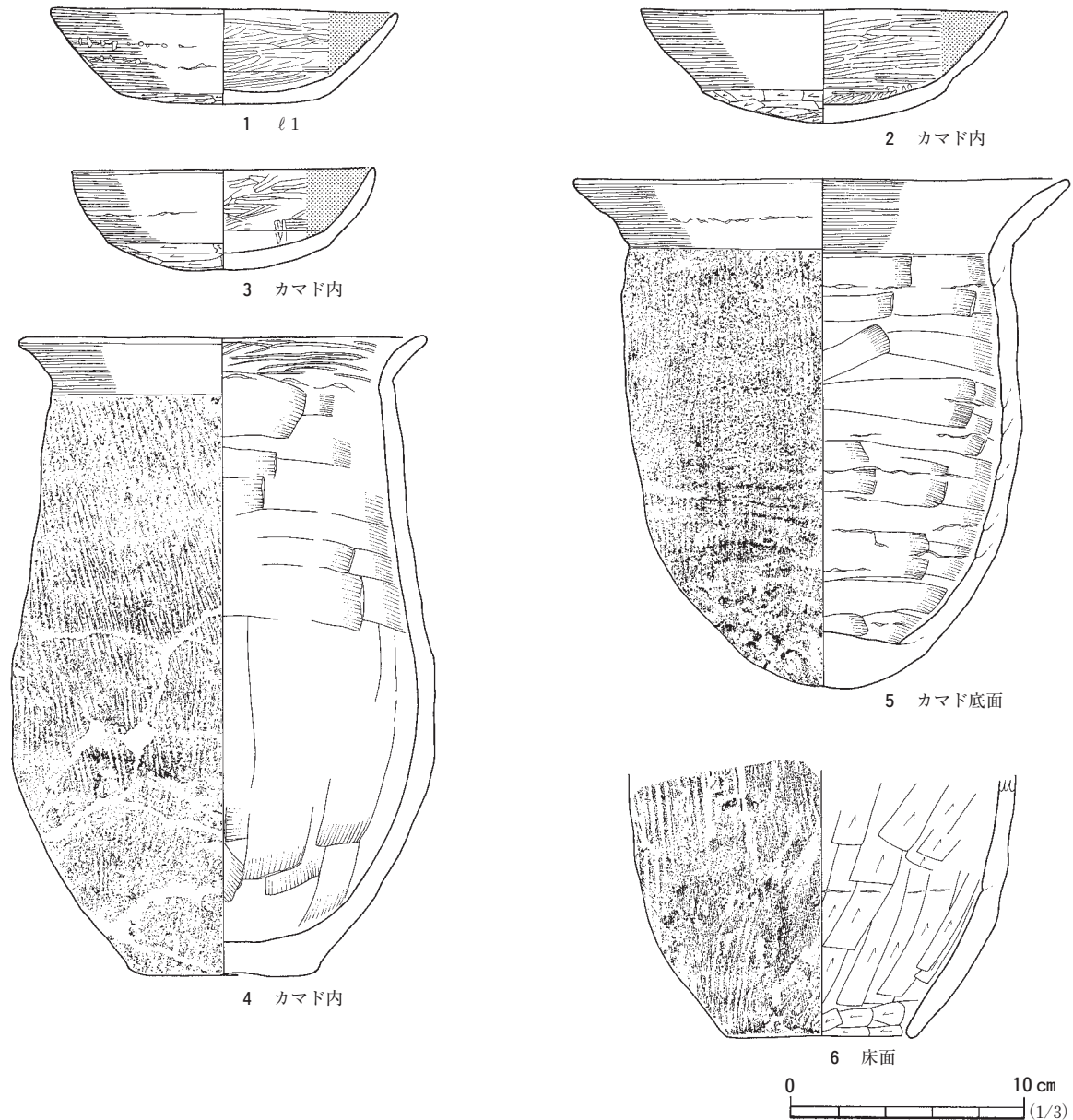


図219 84号住居跡出土遺物

積土などから、カマド据え付けの甕や天井芯材とは考えにくく、カマド崩壊後に意識的に置かれたものと考えている。

本住居跡の所属時期は、カマド内や床面から出土した遺物などから栗圀式期と考えている。

(大河原)

85号住居跡 S I 85

遺 構 (図220, 写真218・219)

本住居跡は、調査区南側L・M23グリッドに位置する。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の西側緩斜面の肩部に立地している。遺構は、L III上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められなかったが、住居跡の壁は、東側を除き攪乱を受け遺存していない。また、住居

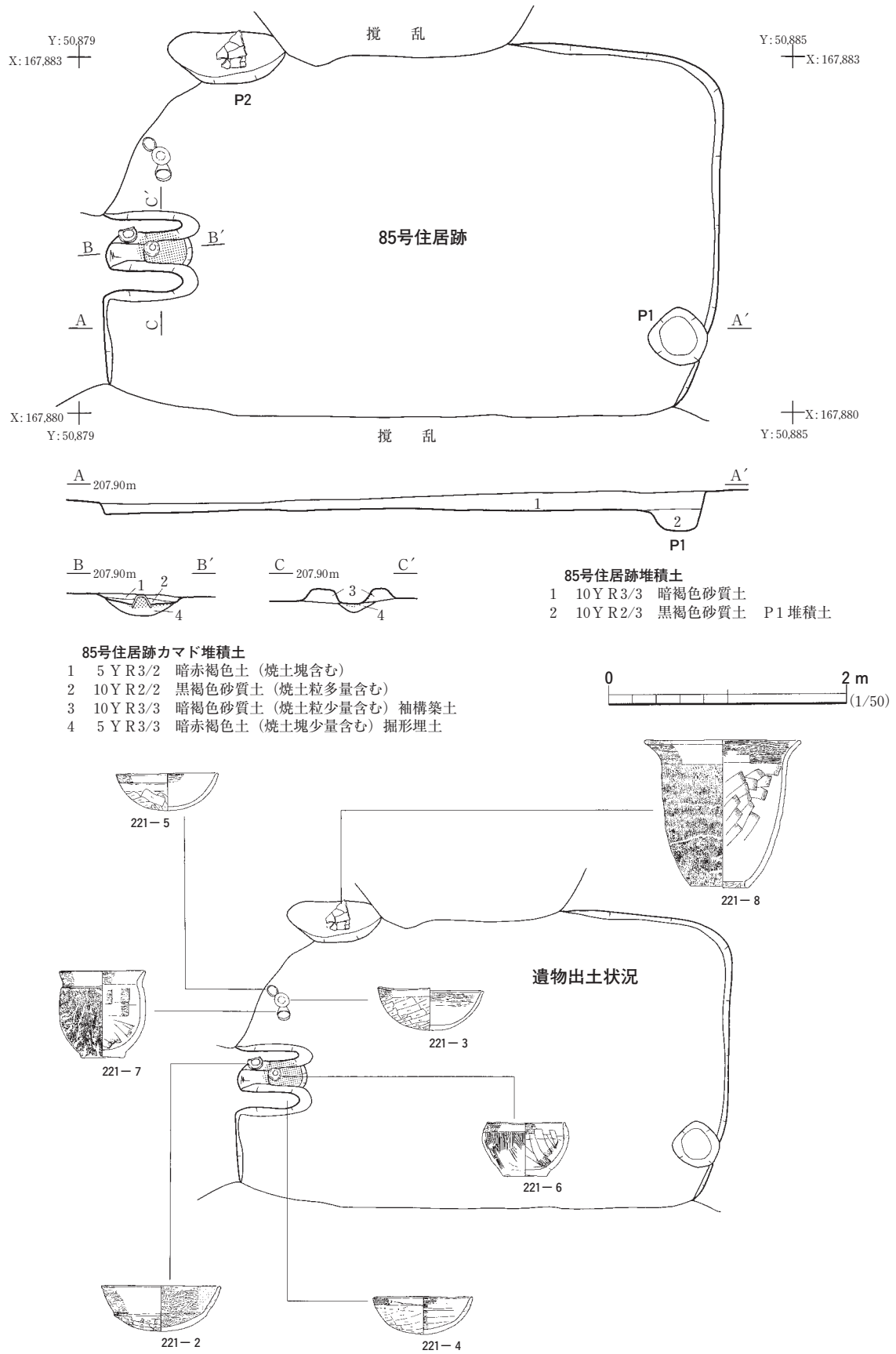


図220 85号住居跡

跡南側に66号住居跡が位置している。

遺構内堆積土は、暗褐色砂質土1層で、堆積過程は判断できない。本住居跡の平面形は、遺存状況から、東西に長い方形を呈していたと考えられる。規模は、南北長が遺存値で約2.7m、東西長が遺存値で約4.8mを測る。遺存する壁は、いずれもほぼ垂直に近い角度で立ち上がっている。床面から検出面までの高さは、8～16cmを測る。床面には、小さな凹凸が見られ、床面中央がやや高まっている。貼床などは、施されていなかった。

住居跡内施設として、カマドとピット2個を検出した。カマドは住居跡の西壁に作られていた。カマドの袖と奥壁は、暗褐色砂質土を用い構築されていた。また、土師器杯(図221-2・4)をカマド袖の構築材として使用していた。カマドの袖は南側の袖で76cm、北側の袖で82cmほど住居内に張り出していた。袖の最大幅は南側で32cm、北側で25cmを測る。両袖に挟まれた燃焼部は最大長60cm、最大幅は32cmを測る。燃焼部底面は、床面より5cmほど窪み、2～8cmほど焼土化していた。また、燃焼部底面北寄りで、小型甕が倒立した状態で出土した。小型甕は、燃焼部底面に固定され、倒立した状態で出土していることから、支脚として転用されたものと考えられる。

カマド内堆積土は2層に区分した。焼土塊を多量に含むℓ1は天井崩落土、ℓ2は、カマド使用時の堆積土と考えられる。

ピットは、2個検出した。P1は、東側の壁南寄りで検出した。平面形は、直径50cmほどの歪んだ円形を呈している。床面からのピットの深さは、20cmを測る。P2は、カマド北側で検出したが、北側は攪乱を受け遺存していない。平面形は、遺存状況から東西に長い楕円形を呈していたと思われる。規模は、遺存値で東西長96cm、南北長43cm、深さは6cmを測る。P2底面からは、土師器甑が潰れた状態で出土している。

遺物(図221, 写真557・558)

遺物は、カマド北側周辺の床面とP2から比較的まとまって出土した。出土した遺物の内訳は、土師器片78点、須恵器片1点が出土している。図221-1～5は土師器杯である。1・2は体部下半に段を有し、1は逆「ハ」の字状、2は直線的に緩やかに外傾しながら立ち上がる口縁部となる。1の底面には、「十」字状の線刻が認められる。3～5は、やや丸みを持った体部を呈し、全体的に碗型に近い器形である。

6・7は小型の甕である。6は底部から胴部上半にかけて外傾して立ち上がり、口縁部が内傾する器形となる。7は、やや膨らみをもった胴部下半から、頸部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、口縁部がやや外傾する器形となる。8は甑で、底部から胴部にかけて緩やかにほぼ直線的に立ち上がり、口縁部が「く」の字状に外反する器形となる。

まとめ

本住居跡は、遺存状況から、東西に長い方形を呈していたと思われる。住居跡内施設として、カマドとピット2個を検出した。カマド袖の構築材として土師器杯、またカマドの支脚として小型の甕を転用して利用していた。遺物は、カマド側で比較的まとまって出土し、中には碗型を呈した土

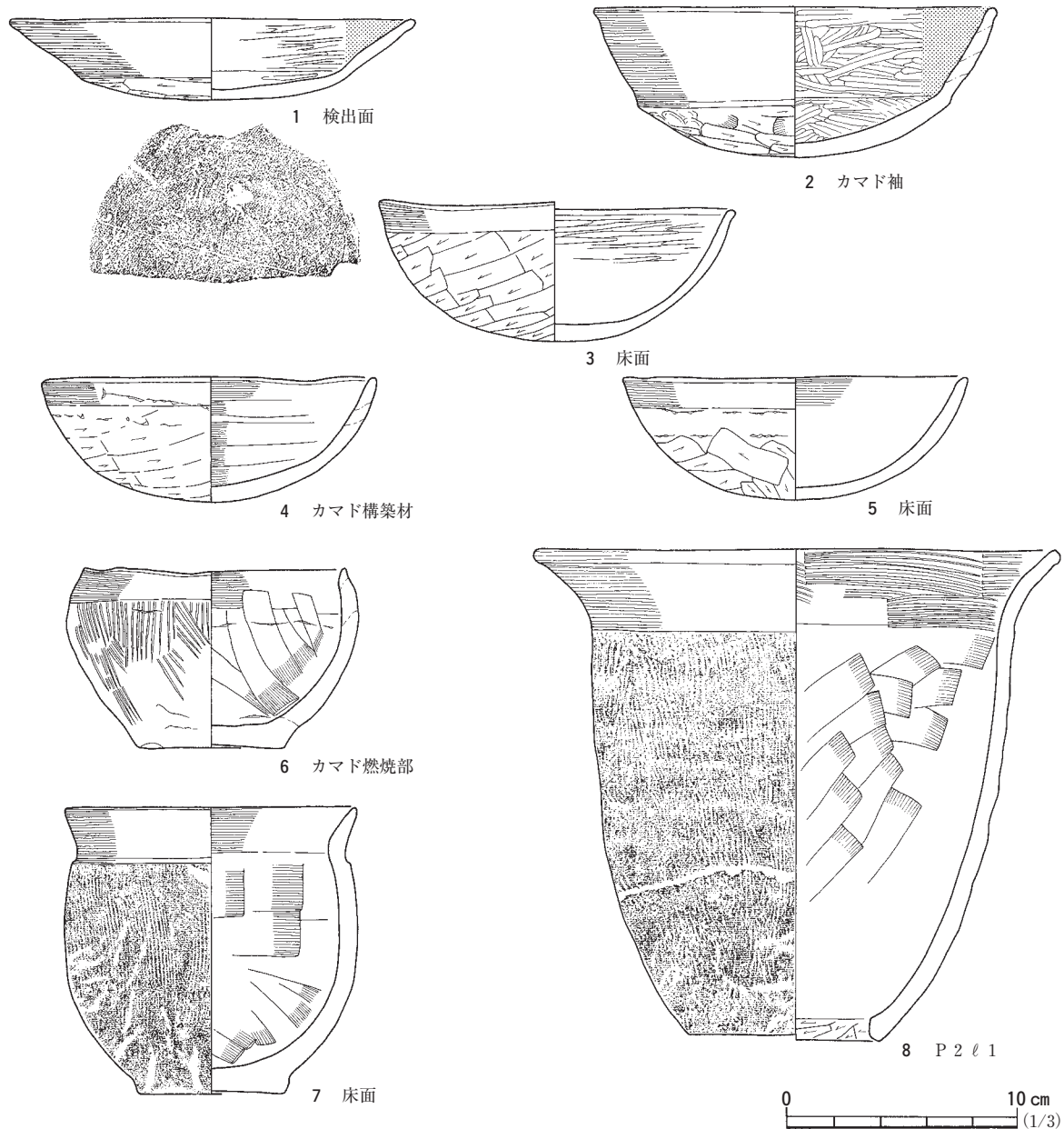


図221 85号住居跡出土遺物

師器杯なども認められる。本住居跡の所属時期は、住居跡内などから出土した遺物などから、栗囲式期と考えている。(大河原)

86号住居跡 S I 86

遺 構 (図222, 写真220・221)

本住居跡は、調査区南部のM23グリッドに位置する。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の狭い平坦部の微高地上に立地している。遺構は、L III上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められなかった。

遺構内堆積土は、1層で暗褐色砂質土が堆積していた。堆積過程は判断できない。本住居跡の平

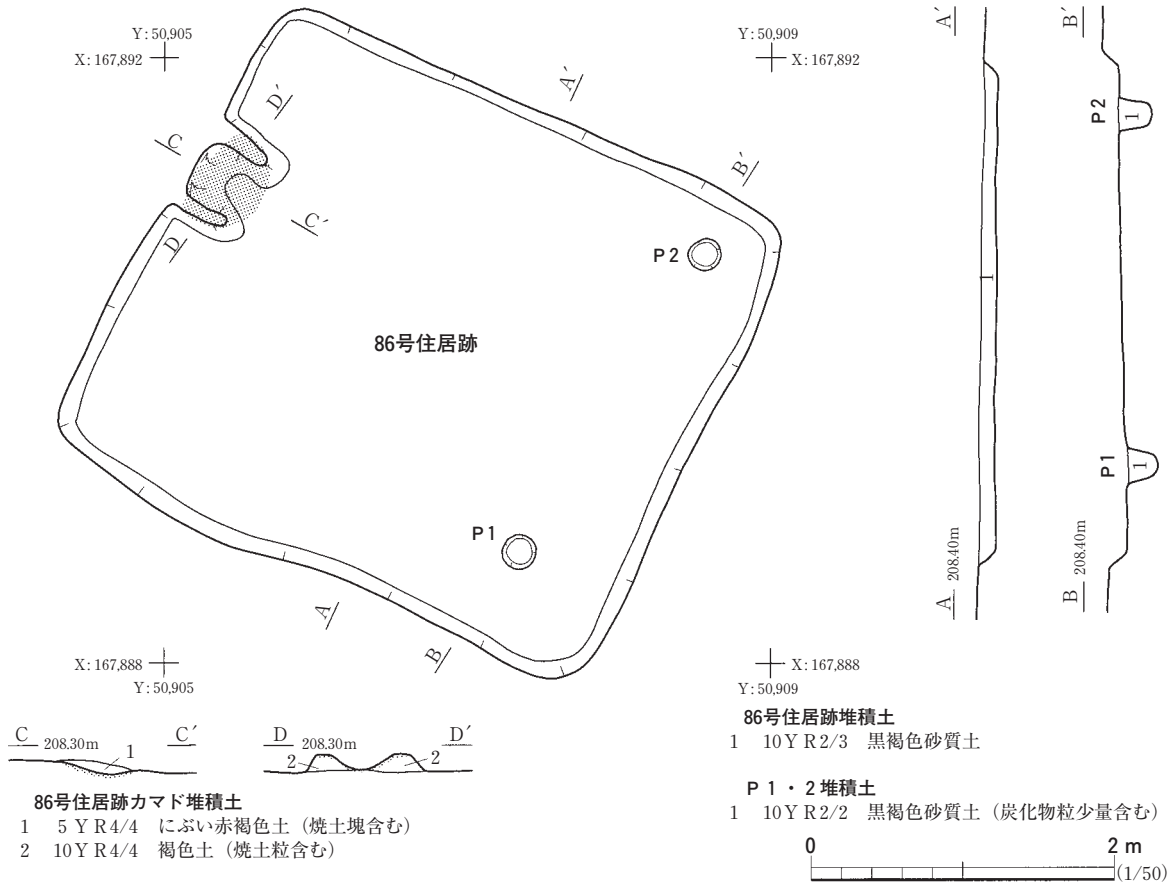


図222 86号住居跡

面形は長方形を呈し、規模は南側の壁で約3.8m、東側の壁で約3.3mを測る。壁は、南側の壁でやや急角度で立ち上がるものの、他は比較的緩やかに立ち上がっている。検出面から床面までの深さは、10～15cmを測る。床面はほぼ平坦に作られていたが、細かい凹凸が認められた。また、貼床などは施されていない。

住居跡内施設として、カマドとピット2個を検出した。カマドは、住居跡の西壁中央やや北寄りで検出した。カマドの袖は褐色土を用いて構築され、住居内に50～60cmほど張り出していた。袖の最大幅は南側で30cm、北側で28cmを測る。両袖に挟まれた燃焼部は最大長30cm、最大幅は30cmを測る。燃焼部底面は、床面から約5cmほど掘り窪められ、3cmほど焼土化していた。カマド内堆積土は、焼土塊を含んだにぶい赤褐色土1層で、天井崩落に起因するものと考えられる。

ピットは、床面の南側東寄りでP1、北寄りでP2を検出した。ピットの平面形は、いずれも直径20cmほどの円形を呈し、深さは15cm～20cmを測る。ピット内の堆積土は、1層でいずれも黒褐色砂質土が堆積していた。これらピットについては、ほぼ住居跡各隅に位置し、堆積土や規模なども類似することから、上屋を支えた支柱穴と考えられる。

本住居跡からは、土師器片7点が出土しているが、いずれも細片で図示できなかった。

まとめ

本住居跡は、平面形が方形を呈した住居跡である。住居跡の内部施設としてカマドとピット2個

を検出した。カマドは西側の壁で検出した。また、検出したピットについては、住居跡の隅に位置し、対応関係にある事などから、上屋を支えた主柱穴と考えている。

本住居跡の所属時期は、時期を特定する出土遺物がないため判断できないが、周囲の遺構の分布状況などから栗圀式期に属するものと考えている。(大河原)

87号住居跡 S I 87

遺 構 (図223・224, 写真222~224)

本遺構は、調査区北部のN20・O20グリッドから検出された竪穴住居跡である。円面硯が出土している。

本住居跡の南側には2号溝跡が巡り、本住居跡は溝で区画された集落のすぐ北側に配置されている。本住居跡と重複する住居跡は確認できなかったが、南側半分は崩れてしまって遺存状態はよくない。カマド部分も攪乱で南側半分が破壊されており、原形をとどめていない。

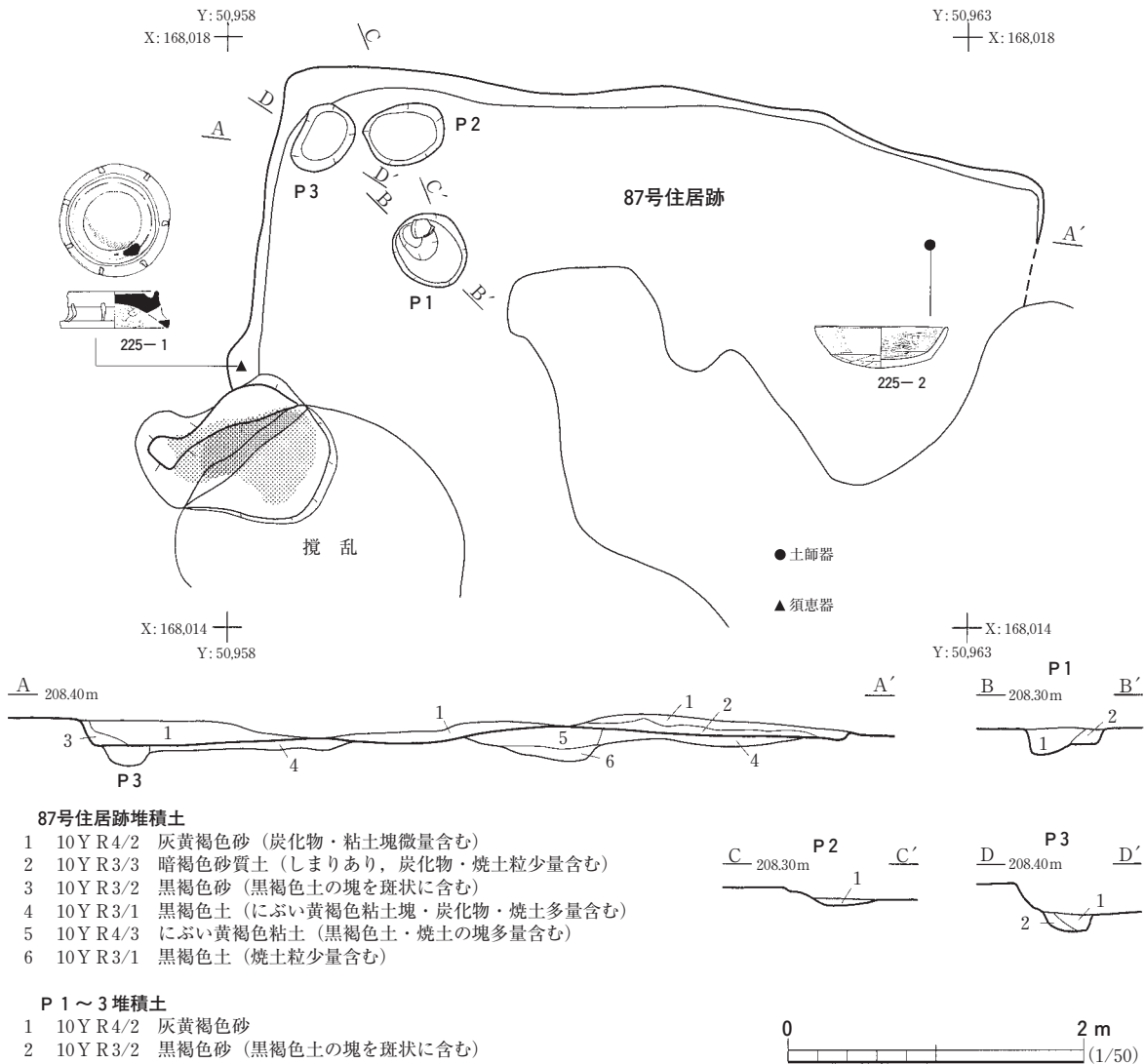


図223 87号住居跡

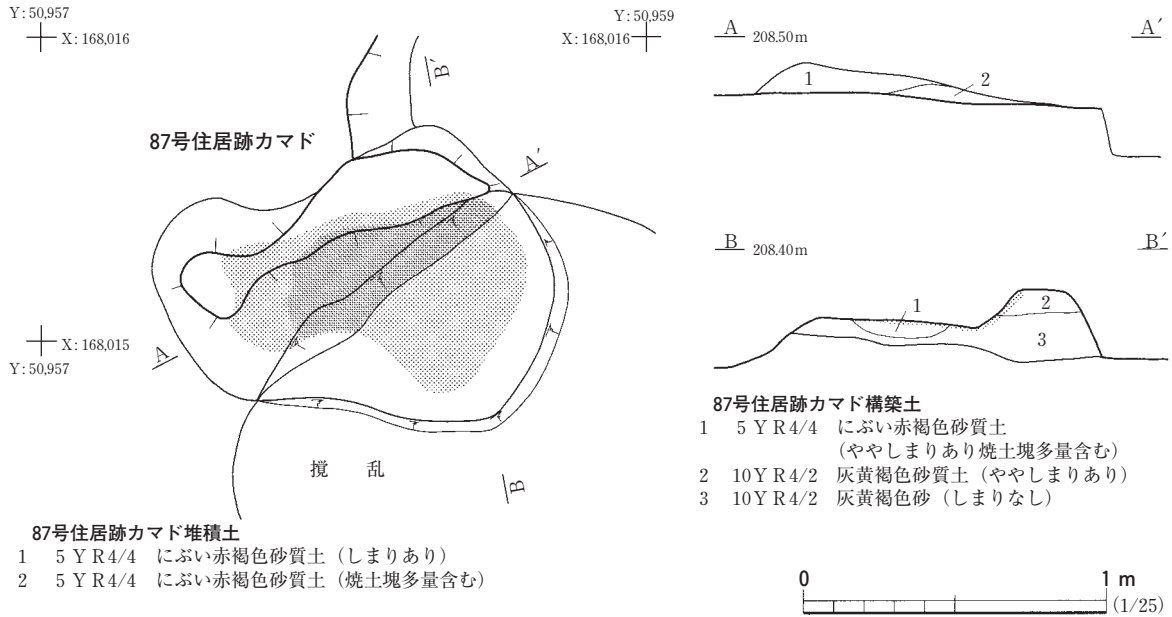


図224 87号住居跡カマド

本住居跡はLⅢを掘り込んで造られていたために、LⅢ上面から辛うじて確認することができた。カマドらしい焼土範囲と住居跡の北西隅は確認できたが、南側の大部分は調査中の降雨で流れてしまい、ほとんど残っていない。

住居跡内堆積土は3層に分層したが、その大部分は灰黄褐色砂で、部分的に床面上には暗褐色砂質土が堆積している。比較的遺存状態の良い北西隅の壁際からは黒褐色砂の三角堆積が認められることから、本住居跡は自然堆積と考えられる。

住居跡の主軸方位はN 7° Eで、ほぼ真北を指す。大きさは北周壁が約5.1m、西周壁の遺存する範囲がカマド部分を含めて約3.0mを測る。深さは北西隅の周壁では約20cm前後を測るが、他は数cmほどしか残っていない。

床面は部分的に貼り床が認められる。

カマド以外の付属施設としては、北西隅から窪み状の小ピットを3基ほど検出した。どのピットにも住居跡内堆積土と同じ灰黄褐色砂が堆積している。3号ピットは位置的に柱穴跡の可能性も考えたいが、それぞれの用途は不明である。

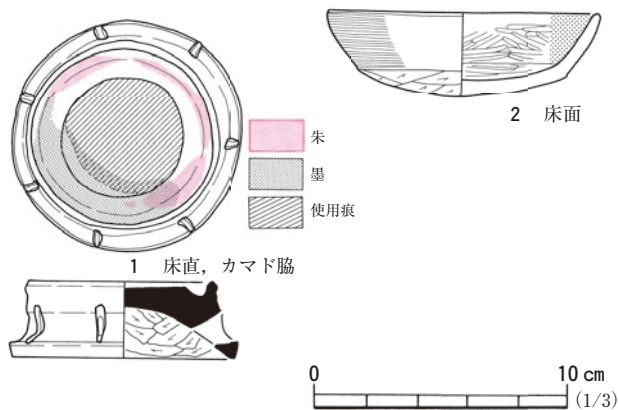


図225 87号住居跡出土遺物

カマドは西周壁の北西隅から約2.1mほど南に付設されている。カマドは径約1mほどの円形状の後世の攪乱で破壊されていて、燃焼部の一部分しか確認できなかった。僅かにカマド北袖の側壁部分が使用時のものとみられ、その上にはにぶい赤褐色砂質土が堆積していた。攪乱で破壊されて燃焼部底面は残っていないにもかかわらず、底面

から側壁にかけて著しく赤変している。カマドを断ち割った場所が悪いために図面上ではよくわからないが、掘形内には黄褐色砂、カマド袖には黄褐色砂質土、燃焼部底面には焼土塊を含んだ砂質土が用いられていた。

また、円面硯はカマド北袖脇の壁際から出土している。

遺物 (図225, 写真558・559)

本住居跡からの出土遺物のうち、図示したものは2点である。

図225-1は須恵器の小型の円面硯で、短い円筒形の硯脚の付いた圈脚円面硯である。硯脚には縦に細長い7つの透かし孔が認められる。硯部は墨を磨る面よりも一段下がって墨汁をためる窪みがあり、その外側に外堤が巡る。外堤は硯面より高く作られ、直径は約7.2cmで、高さは約3.0cmである。また、硯面からは墨と朱の痕跡が観察できた。

図225-2は土師器の小型杯で、直径が約10.5cm、器高が約3.3cmである。有段丸底の杯で、口縁部が外傾し、内外面とも体部との境に明瞭な段が認められる。

まとめ

本住居跡は、出土遺物から栗圀式期のものとみられる。

本住居跡の南側半分は残っていないが、カマドが西周壁中央に付設していたとすると一辺約5mの住居跡となり、集落を区画する北側の溝である2号溝跡とは重複しないものと考えられる。

そのため、本住居跡は少なくとも溝跡が機能していた同時期に営まれていた可能性があると思われる。

本住居跡からは、集落内に識字者層を想定できる円面硯が出土している。しかしながら住居跡の遺存状態は悪く、出土遺物も少なく、集落内において本住居跡の役割を捉えるための判断材料には乏しい。

(大波)

88号住居跡 S I 88

遺構 (図226・227, 写真225・226)

本遺構は、M22グリッドでL II 上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部近くにあたる。遺存状態は比較的良い。重複関係は、2号住居跡と151号住居跡を切っている。

堆積土は、3層に分層された。土層断面図が示すように、典型的なレンズ状堆積であり、遺構は自然埋没したと考えている。このうち、床面を直接覆う②では、焼土・炭化物が充満しており、火災で形成されたような痕跡を示していた。ただ、形態をとどめた炭化材は認められず、本住居跡が火災で焼失したという確証は得られなかった。

床面は、貼床されず、掘形底面のL IIIがそのまま平坦に整えられている。上面には、炭化物と焼土が土器片や石と一緒に、散乱していた。検出面と床面の比高差は、15~18cmを測る。

本住居跡の平面形は、正方形基調を呈する。規模は、東西3.6m、南北3.5mを測り、小型である。

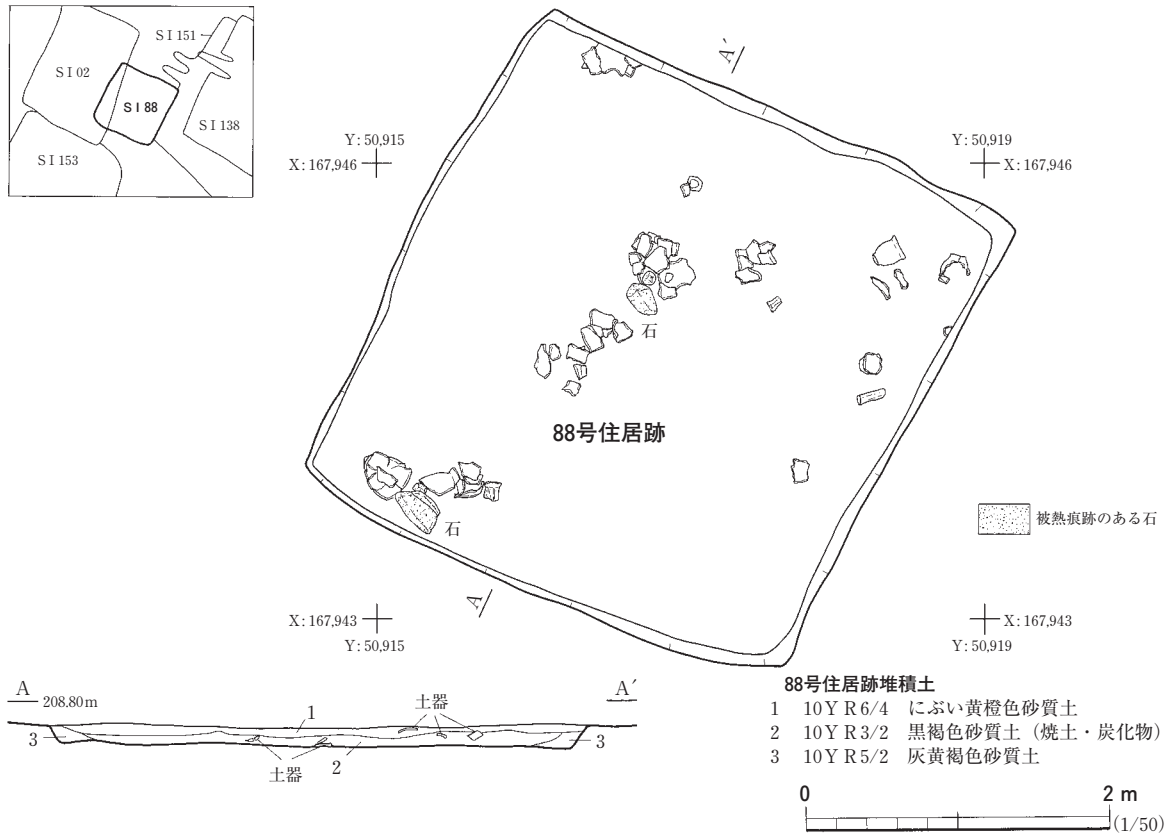


図226 88号住居跡

住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に25°振れている。

カマドは、検出されなかった。周壁の残り具合からみると、本遺構には設置されていなかった可能性が高いと考えられる。

遺物 (図228～230, 写真558～562)

遺物は、土師器片203点、土製品4点、石製品1点、鉄滓が出土した。出土状況は、焼土・炭化物に混じって床面に散乱した状態であった。器種内容は、ほとんど煮炊具で占められている。なお、スクリーントーン貼付の石は、金床石と考えられる。被熱痕が観察される。

図228-1・2は、土師器小型甕である。1は、胴部が丸みを帯び、底部が突出する器形を呈している。外面は、ハケメ調整で、中位では横方向に施されている。2は、やや胴部が長く、頸部の括れが弱い器形を呈している。外面は、1と違ってナデ調整されている。また、底部には木葉痕が観察される。

図228-3～6は、中型の土師器甕である。3・5は、外面ハケメ調整で、やや下膨れの胴部を有している。法量も近似する。4は、外面ナデ調整で、この特徴が前述の2点とは異なっている。口縁端部が玉縁状をなす特徴は、5と同一である。6は、破片のため、器形の詳細を知ることができない。外面は縦位にヘラケズリ調整されている。

図229-1・4は、土師器長胴甕である。どちらも長胴化の著しいのが特徴で、器高30cmを越えている。1は、頸部の窄まりが小さく、口縁部が強く外反する。外面はハケメ調整され、底部を欠い

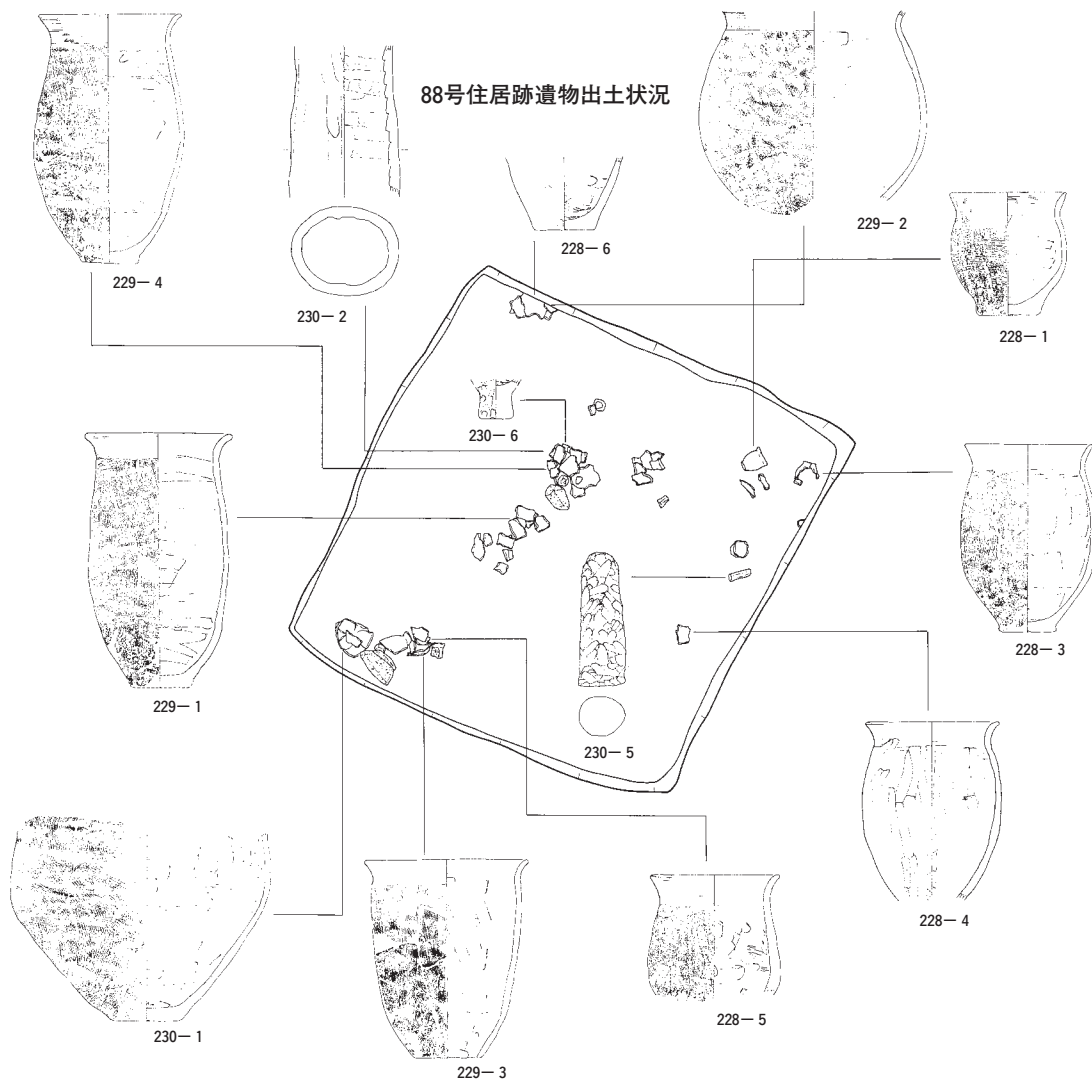


図227 88号住居跡遺物出土状況

ている。4は、均整の取れたラグビーボール状の胴部を有し、頸部の窄まりが大きい。外面は、ハケメ調整されている。

図229-2と図230-1は、土師器球胴甕である。図229-2は、推定器高30cm前後の大型品で、頸部の括れは弱い。外面は、ハケメ調整されている。図230-1は、さらに大きく、器高は50cm近くになると思われる。上半部を欠いている。

図230-6は、柱状を呈した土師器小型品の底部である。器種は、丸底にするのを省略した杯と思われる。

図230-2は、円筒状土製品になる。カマド構築材であったと推定され、外面はナデ調整されている。両端を欠く。

図230-3は、羽口の破片である。

図230-4・5は、土製支脚になる。被熱範囲が明瞭に識別できる。

図230-7は、石製紡錘車である。断面は、偏平気味になっている。

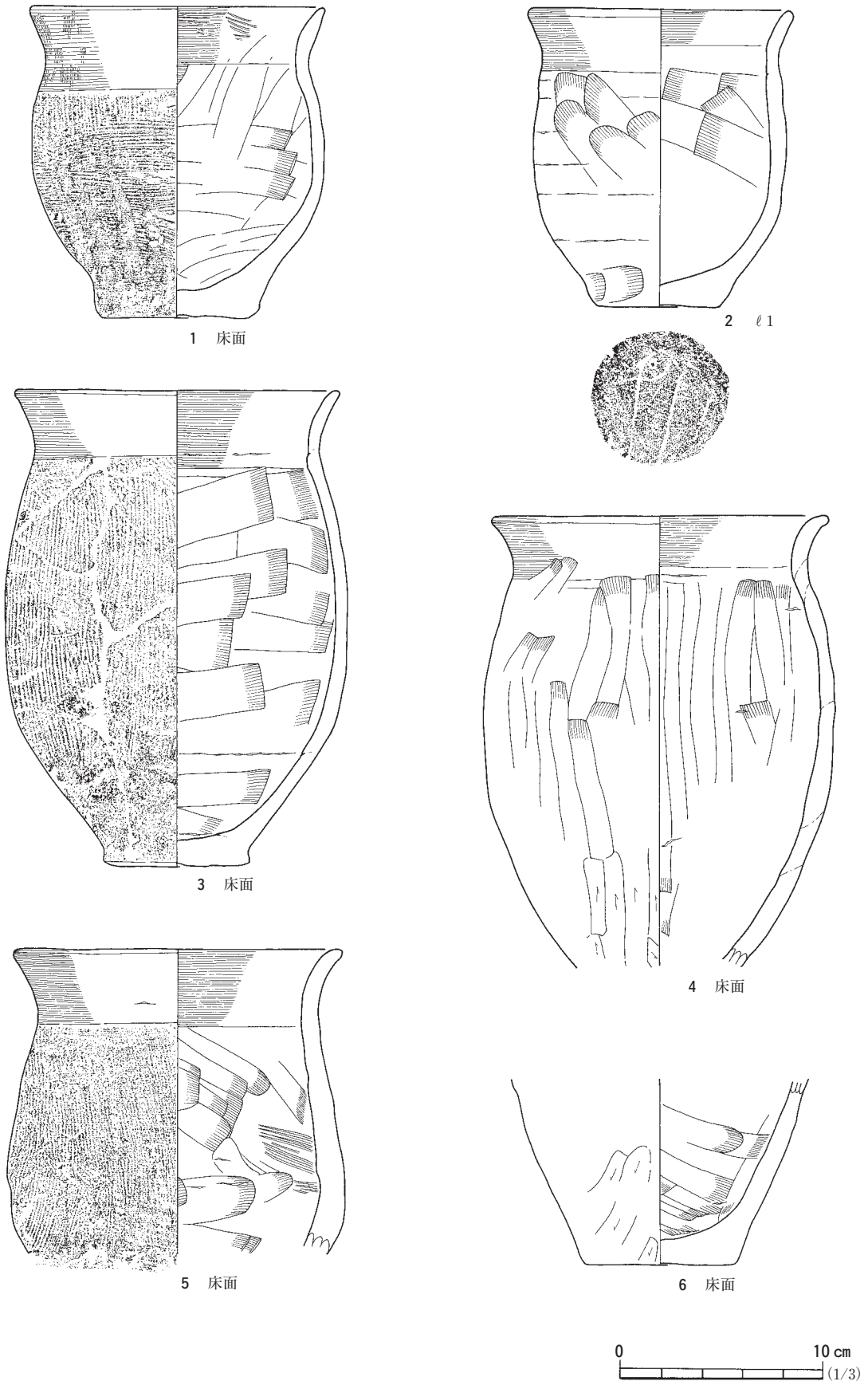


图228 88号住居跡出土遺物（1）

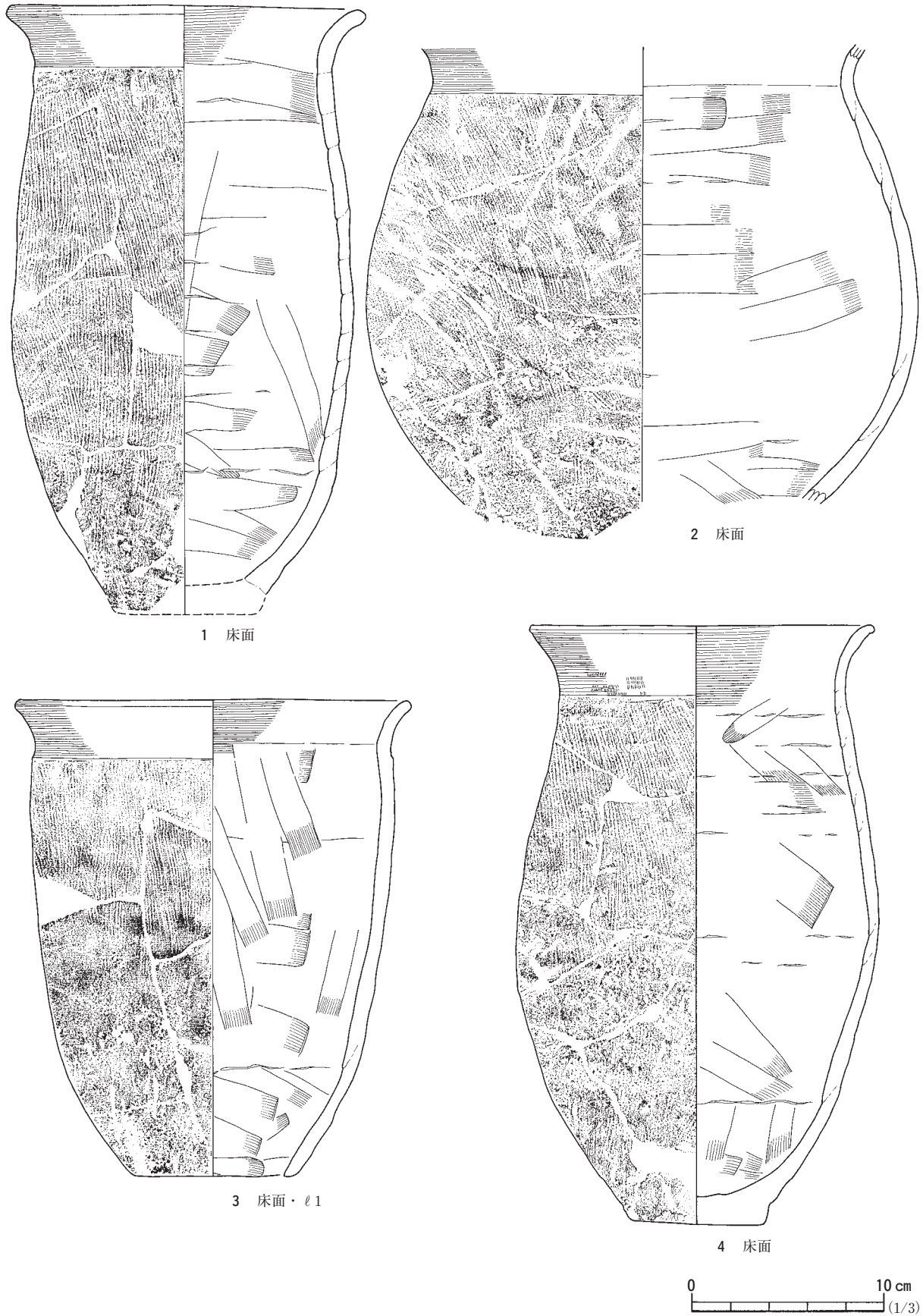


図229 88号住居跡出土遺物（2）

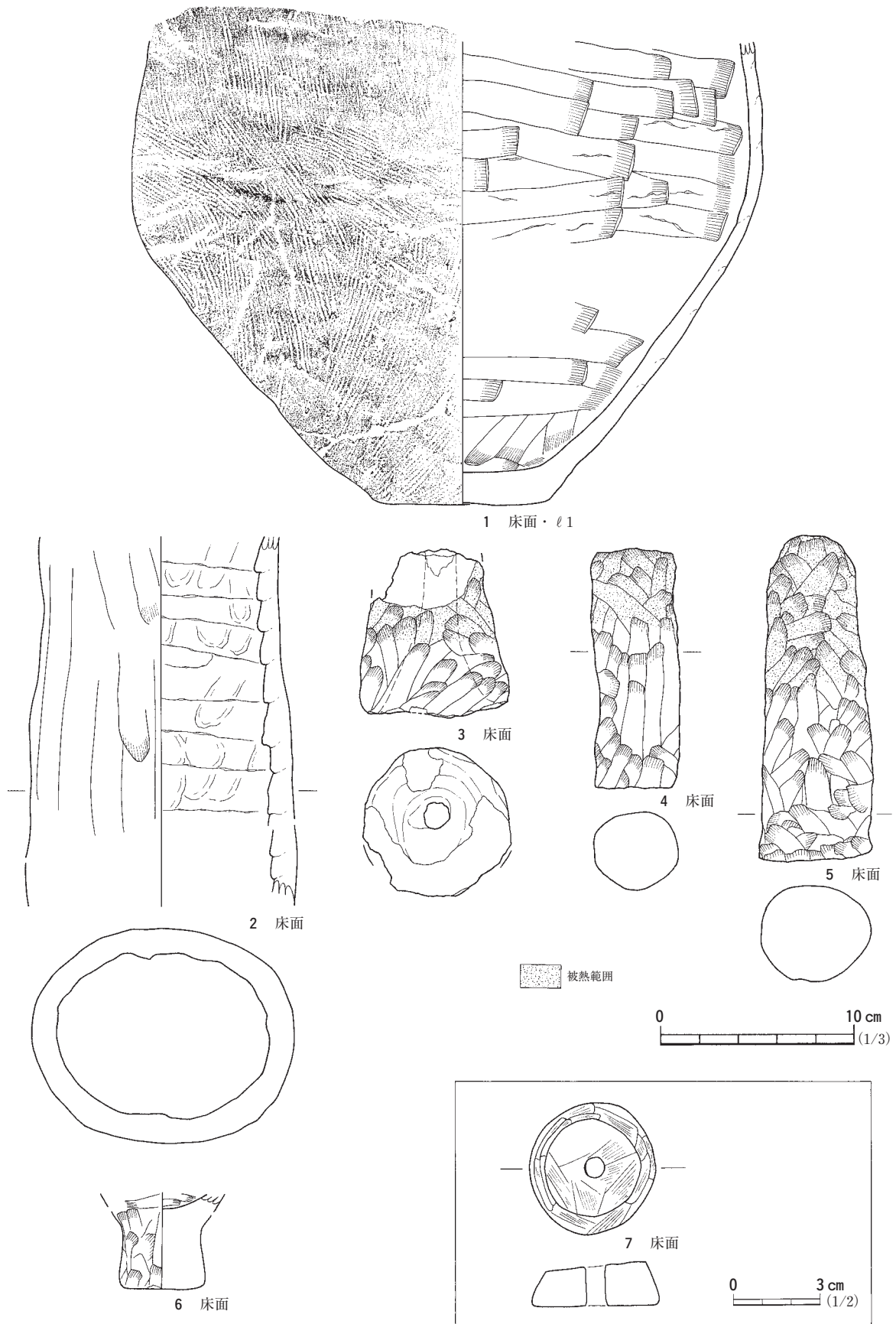


図230 88号住居跡出土遺物（3）

ま と め

本遺構は、自然堤防の西斜面肩部近くに営まれた竪穴住居跡である。平面プランは正方形を呈しており、規模が小さい。

床面上には、焼土・炭化物に混じって遺物が散乱していた。その中には、羽口・鉄滓・金床石がみられ、本住居跡が鍛冶工場の機能を備えていたことを示している。周壁にカマドが設置されていないことも、このことで説明できると思われる。

ただ、そうした場合、土製支脚が2点出土しているのは、問題であり、ここでは他の住居から廃棄されたものと捉えておきたい。

時期は、栗圀式期に比定される。

(菅原)

89号住居跡 S I 89

遺 構 (図231, 写真227・228)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。LⅢを掘り下げていく段階で検出された。

本住居跡は、調査区中央の住居集中区域に営まれており、重複関係が著しい。北側で、24・90・142号住居跡の3軒と重複している。

新旧関係を整理すると、90・142号住居跡より新しく、24号住居跡より古く位置づけられる。また、隣接する遺構には、北側に49・91・106号住居跡、南側に156号住居跡・3号特殊遺構が認められる。

本住居跡の遺存状況はおもわしくなく、北周壁側が確認されたのみである。堆積土も残っておらず、床面がほとんど露呈した状態だった。残存する周壁から、平面形は方形を呈し、四隅は角張っていたと思われる。

規模は、確認できた北周壁が4.8mを測り、東周壁は、遺存長1.1m、西周壁は、遺存長2.1mである。

住居跡と方位との関係は、発掘基準線北に対して、東に34°振れている。周壁は急角度で立上がり、検出面から床面までの深さは、北東隅付近で最大33cmである。

住居跡内施設はカマド1基を検出した。カマドは北周壁中央に取り付いている。燃焼部は、焚口幅55cmで、右袖は70cm、左袖は75cmの遺存長があった。袖は、床面から最大で24cmの高さが残っていた。

煙道部は完全に失われていた。

遺 物 (図231, 写真561)

遺物は、土師器片21点が出土した。

図231-1は、カマド右袖脇に置かれていた土師器杯である。底部外面が床面に密着していた。皿状の器形なすもので、口縁部下端に段は認められない。

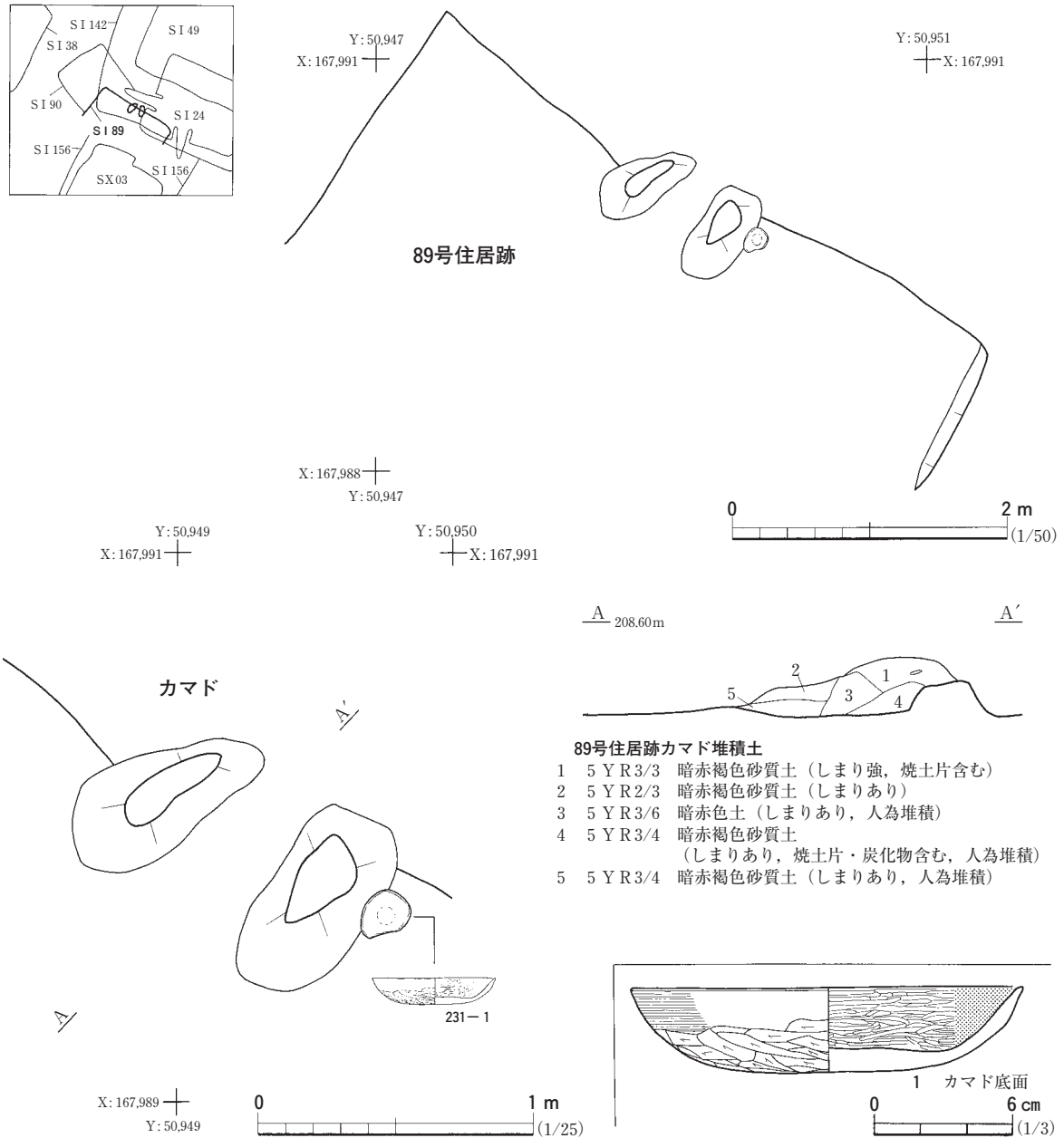


図231 89号住居跡・出土遺物

まとめ

本住居跡は、北側半分だけが残存していた。

時期に関しては、床面の遺物から、栗圀式期～国分寺下層式期と考えられる。 (高久田)

90号住居跡 S I 90

遺 構 (図232, 写真229・230)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。LⅢを掘り下げて行く途中で検出された。

本住居跡は、調査区中央の遺構集中区域に位置している。このため重複関係が著しく、東側で24

・142号住居跡，南側で89号住居跡，北側で91号住居跡と重複している。新旧関係を整理しておくと，91・142号住居跡より新しく，24・89号住居跡より古く位置付けられる。また，隣接する遺構には，東側に106号住居跡，17号土坑，西側に23・38号住居跡，南側に78・156号住居跡，北側に22・70号住居跡が位置している。

住居跡の平面形は長方形をなしている。住居跡方向は，発掘基準線北に対して，55°東に傾いている。規模は，東西4.1m，南北3.2mである。

本住居跡は，上部削平が著しく，周壁は残っていなかった。このため，床面は検出面を下げて行った段階で，踏み締まりにより，確認している。

住居跡内施設はカマド1基を検出した。南周壁中央に取り付いている。燃烧部は，焚口幅40cmで，右袖長50cm，左袖長50cmを測る。煙道部は完全に失われていた。

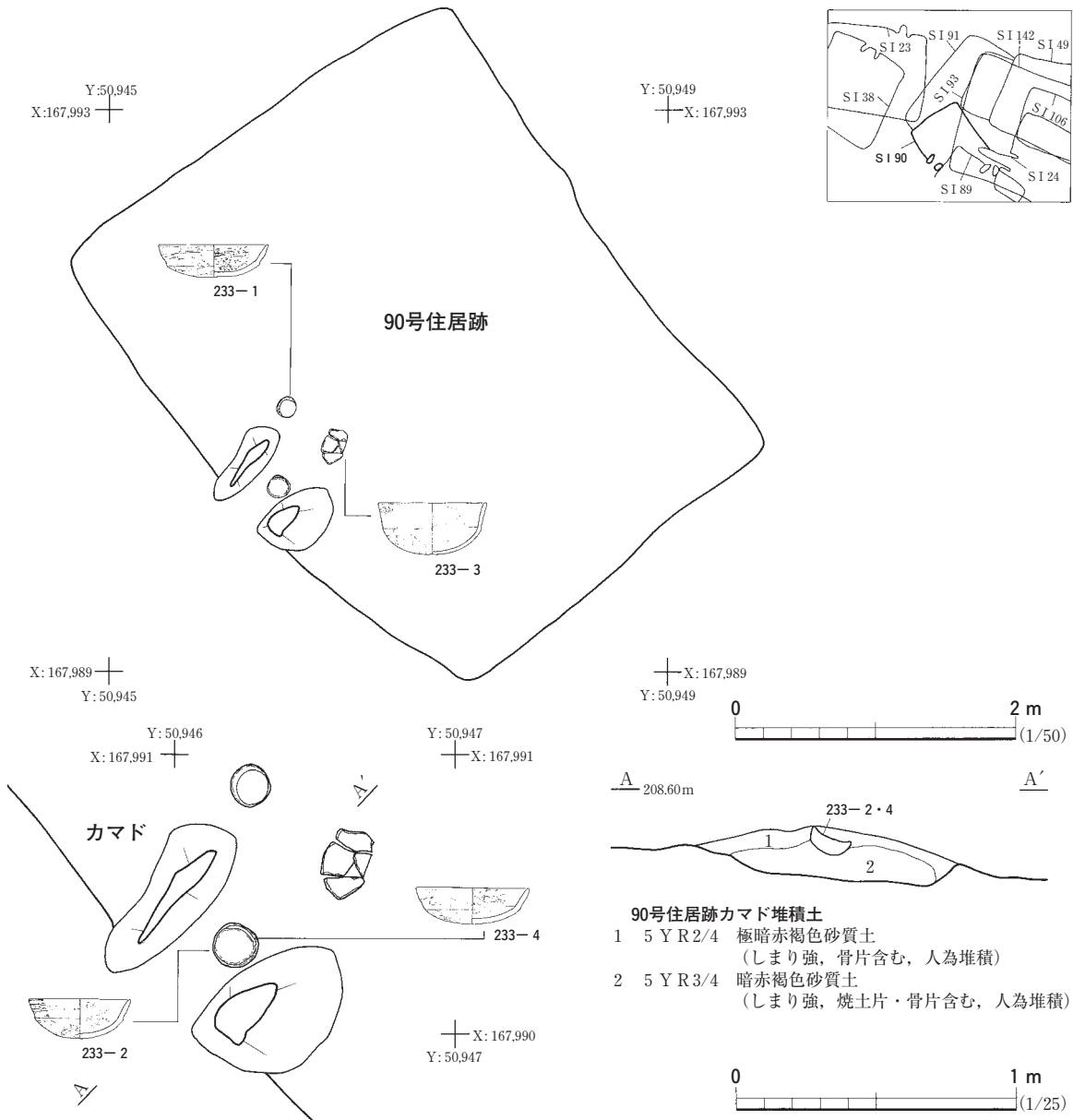


図232 90号住居跡

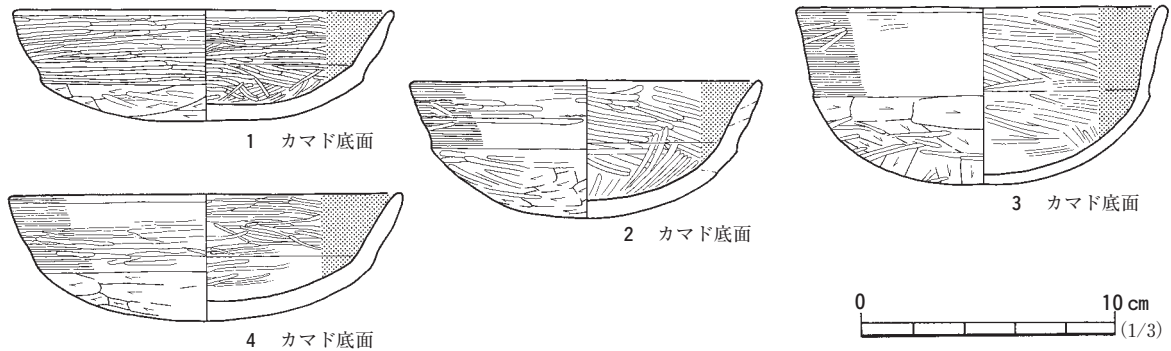


図233 90号住居跡出土遺物

なお、燃焼部中央には土師器杯2個体が重ねられていた。

遺物 (図233, 写真562)

遺物は、土師器片12点が出土した。図示遺物には、土師器杯4点がある。どれも遺構に共伴している。

図233-1~4は、土師器杯である。このうち1・4は、器高の低い有段丸底杯に分類される。口縁部が内湾気味で、外面にヘラミガキ調整が施されている。2は、やや深めの有段丸底杯になる。口縁部外面がヘラミガキ調整されている。3は、口縁部が直立気味に立ち上がるもので、須恵器杯蓋模倣に分類される。器高が高く、椀状をなしている。これも、口縁部外面がヘラミガキ調整されている。

まとめ

本遺構は、住居跡の切り合いが著しいところで、周壁は消失し、床面だけが残存していた。カマド周辺より4個の土師器杯が検出されており、うち2個は重ねて置かれていた。

なお、時期に関しては、出土した土器より栗圀式期と考えている。 (高久田)

91号住居跡 S I 91

遺構 (図234・235, 写真231・232)

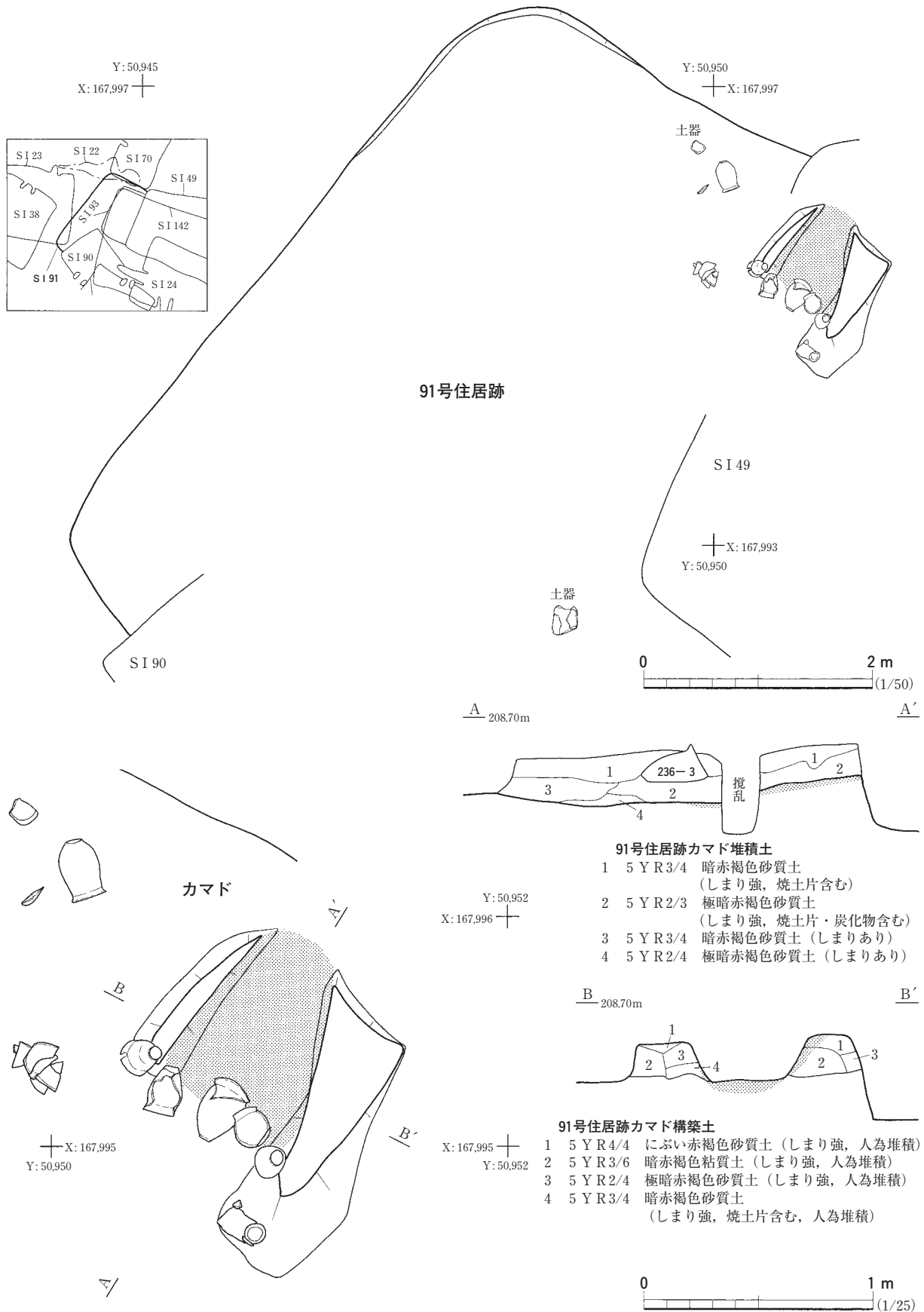
本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。LⅢを掘り下げて行く途中で検出された。

本住居跡は、調査区中央の遺構集中区域に位置している。このため、重複関係が著しく、東側で49・93・142号住居跡、西側で23号住居跡、南側で90号住居跡、北側で22・70号住居跡と重複している。

新旧関係を整理しておくと、93・142号住居跡より新しく、22・23・49・90号住居跡より古く位置付けられる。

また、隣接する遺構には、東側に24・106・142号住居跡、17号土坑、西側に23号住居跡、南側に89号住居跡、北側に14・16号住居跡、8号土坑が位置している。

本住居跡は、残りが悪く、推定床面積の半分以上が失われていた。周壁は、かろうじて北端隅の



91号住居跡

カマド

91号住居跡カマド堆積土

- 1 5 Y R 3/4 暗赤褐色砂質土 (しまり強, 焼土片含む)
- 2 5 Y R 2/3 極暗赤褐色砂質土 (しまり強, 焼土片・炭化物含む)
- 3 5 Y R 3/4 暗赤褐色砂質土 (しまりあり)
- 4 5 Y R 2/4 極暗赤褐色砂質土 (しまりあり)

91号住居跡カマド構築土

- 1 5 Y R 4/4 にぶい赤褐色砂質土 (しまり強, 人為堆積)
- 2 5 Y R 3/6 暗赤褐色粘質土 (しまり強, 人為堆積)
- 3 5 Y R 2/4 極暗赤褐色砂質土 (しまり強, 人為堆積)
- 4 5 Y R 3/4 暗赤褐色砂質土 (しまり強, 焼土片含む, 人為堆積)

図234 91号住居跡

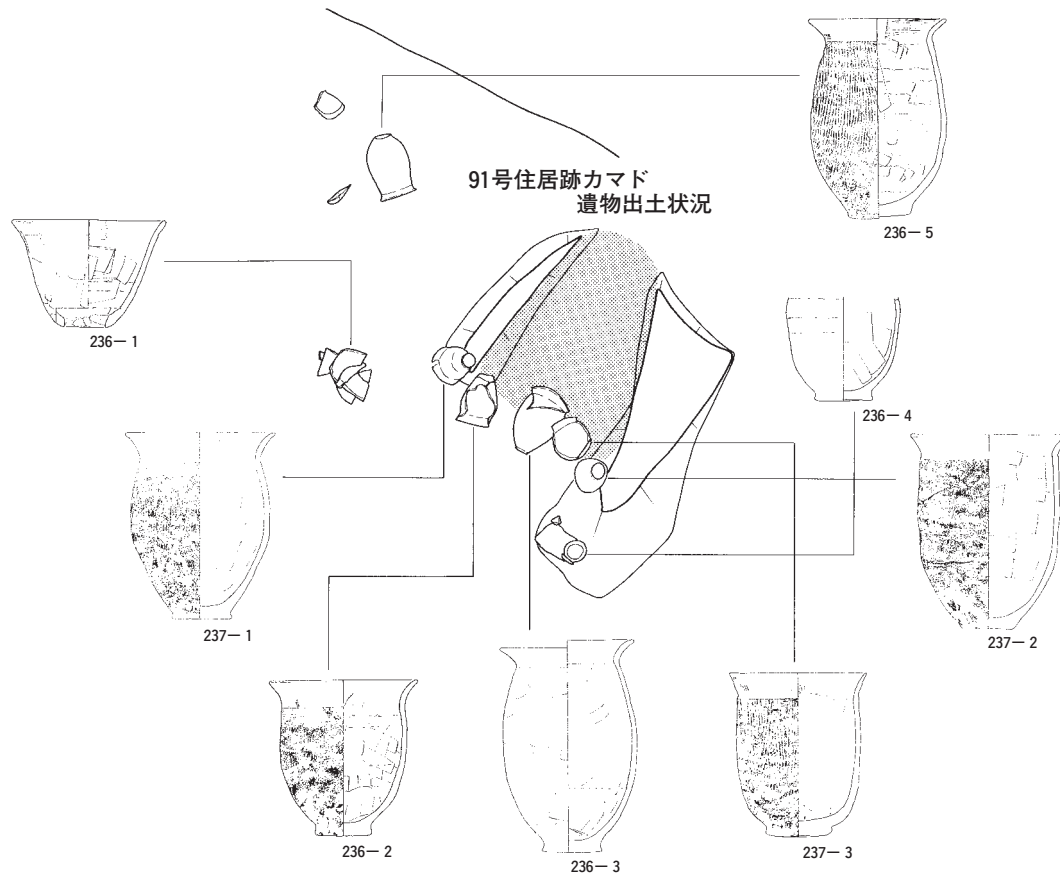


図235 91号住居跡カマド遺物出土状況

一部が検出されただけで、ほとんど床面が露呈した状態だった。

残存する周壁から、平面形は方形を呈していたと考えられる。西周壁の主軸方向は真北から40°ほど東に傾いている。

住居跡の規模は、南北6.5mほどである。床面は、検出面を下げて行った段階で、踏み締まりにより、確認できた。北西隅の周壁高は、最大12cmを測る。

住居跡内堆積土は、確認できなかった。

カマドは、北周壁に位置している。燃焼部は、焚口幅50cm、袖長85cmの規模を有している。袖は床面から15cmの高さが残っていた。内部は焼土化が著しく、底面中央では、厚さ9cmを測った。煙道は失われ、確認できなかった。

なお、袖の先端には、伏せた土師器甕が補強材に使用されている（図237-1・2）。また、その間に挟まれた状態で、3個体の土師器甕が出土した（図236-2・3、図237-3）。

遺物 (図236・237, 写真563・564)

遺物は、土師器片168点が出土した。煮炊具ばかり、8点が図示された。

図236-1は、小型の土師器甕である。口径が大きく、全体が底部に向かって窄まる器形を呈している。頸部は括れず、口縁部が少しだけ外傾する。単孔式に分類される。

図236-2～5・図237は、中～大型の土師器甕である。胴部中央に膨らみのあるもの（図236-3

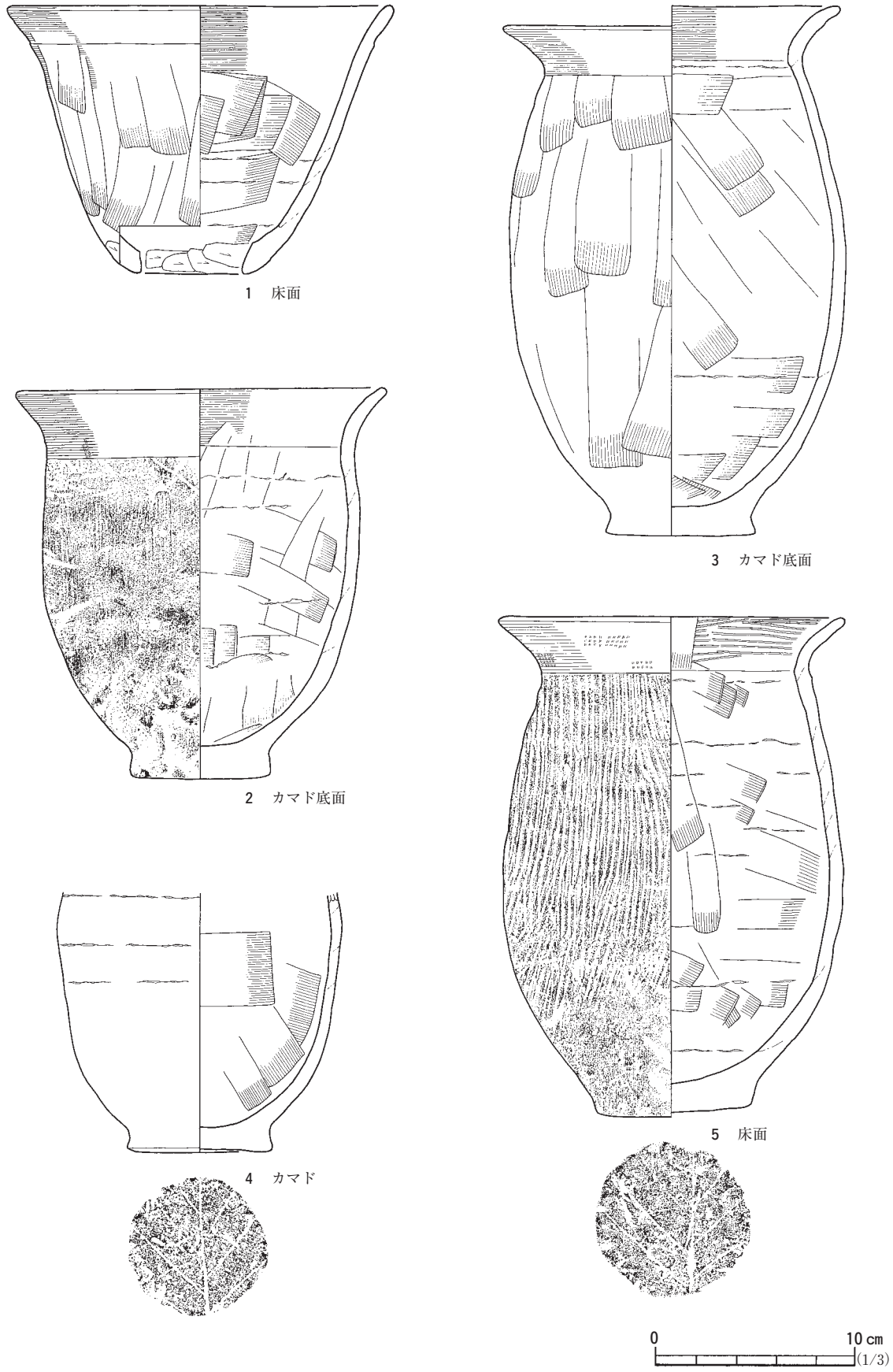


図236 91号住居跡出土遺物 (1)

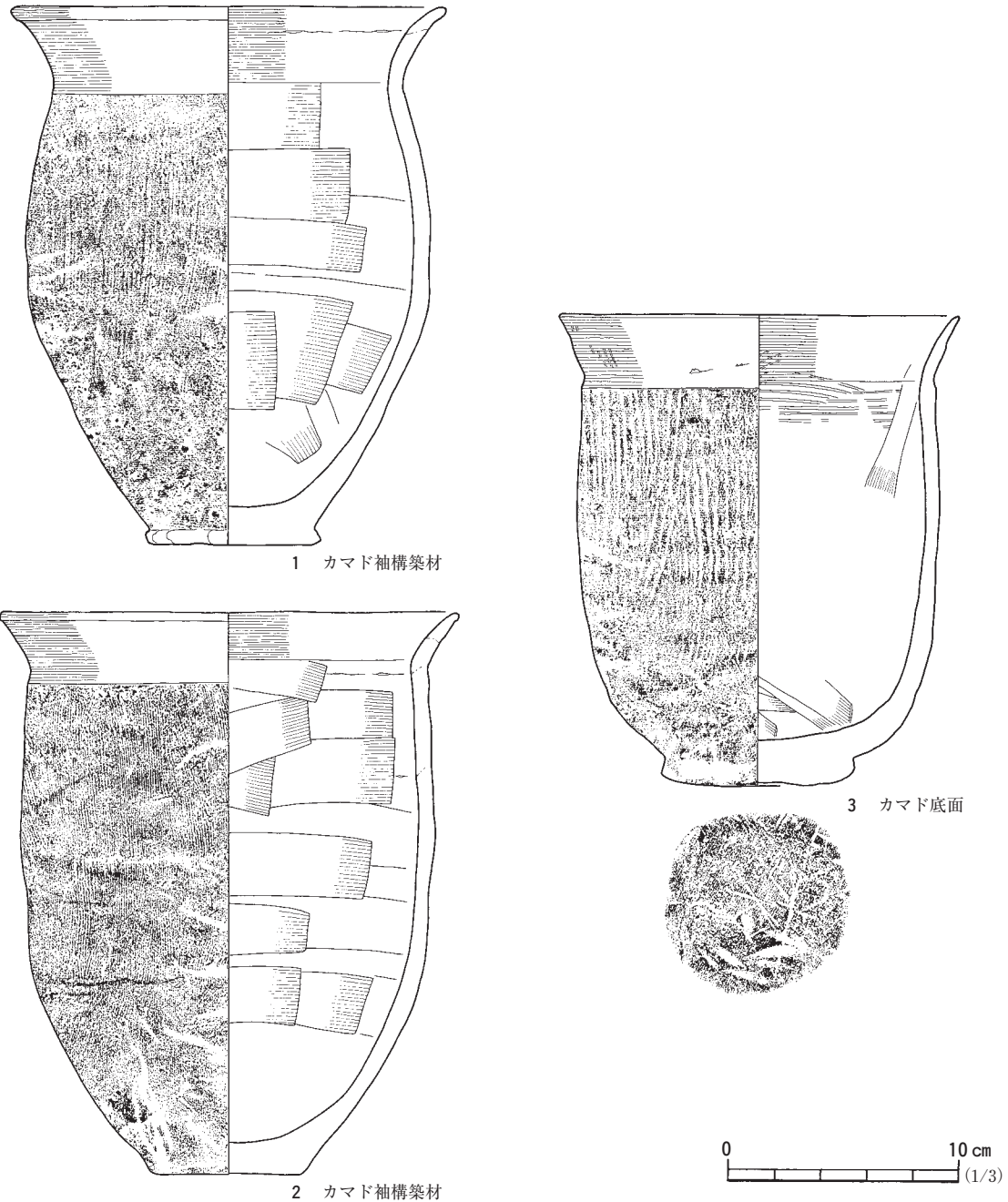


図237 91号住居跡出土遺物（2）

・5), 寸胴のもの(図237-2・3), 中間的な様相を呈するもの(図236-2・図237-1)に分類される。図236-4は, 上半部を欠いており, 器形全体の特徴が分からない。胴部外面の器面調整は, ハケメが卓越しており, 図236-3を除くと, この技法で統一されている。

ま と め

本遺構は, 調査区中央の遺構集中区域に位置している。このため, 重複が著しく, 遺存状態が悪かった。検出されたのは西半分だけで, しかも, 床面がほとんど露呈した状態だった。

遺物は, カマド内とその周辺で一括出土している。また, 燃焼部両袖には, 補強材として土師器甕が伏せられていた。時期に関しては, 栗圀式期と考えている。 (高久田)

92号住居跡 S I 92

遺 構 (図238, 写真233)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面落ちぎわである。

本住居跡は、79・140号住居跡と重複している。79号住居跡より古く、140号住居跡との新旧関係については、不明である。

検出されたのは、カマド左袖と床面のごく一部だけで、遺存状態には恵まれなかった。住居跡の規模は、東西2.4m以上、南北1.3m以上である。

カマドは南周壁に設置されている。左袖は遺存長47cmを測り、床面から22cmの高さが残っていた。構築土には、焼土・炭化物が含まれている。表面は焼土化していた。

ピット類は検出されていない。

遺 物 (図239, 写真564・565)

遺物は、土師器片120点が出土した。図示遺物は、すべてカマド崩落土で取り上げられたものである。

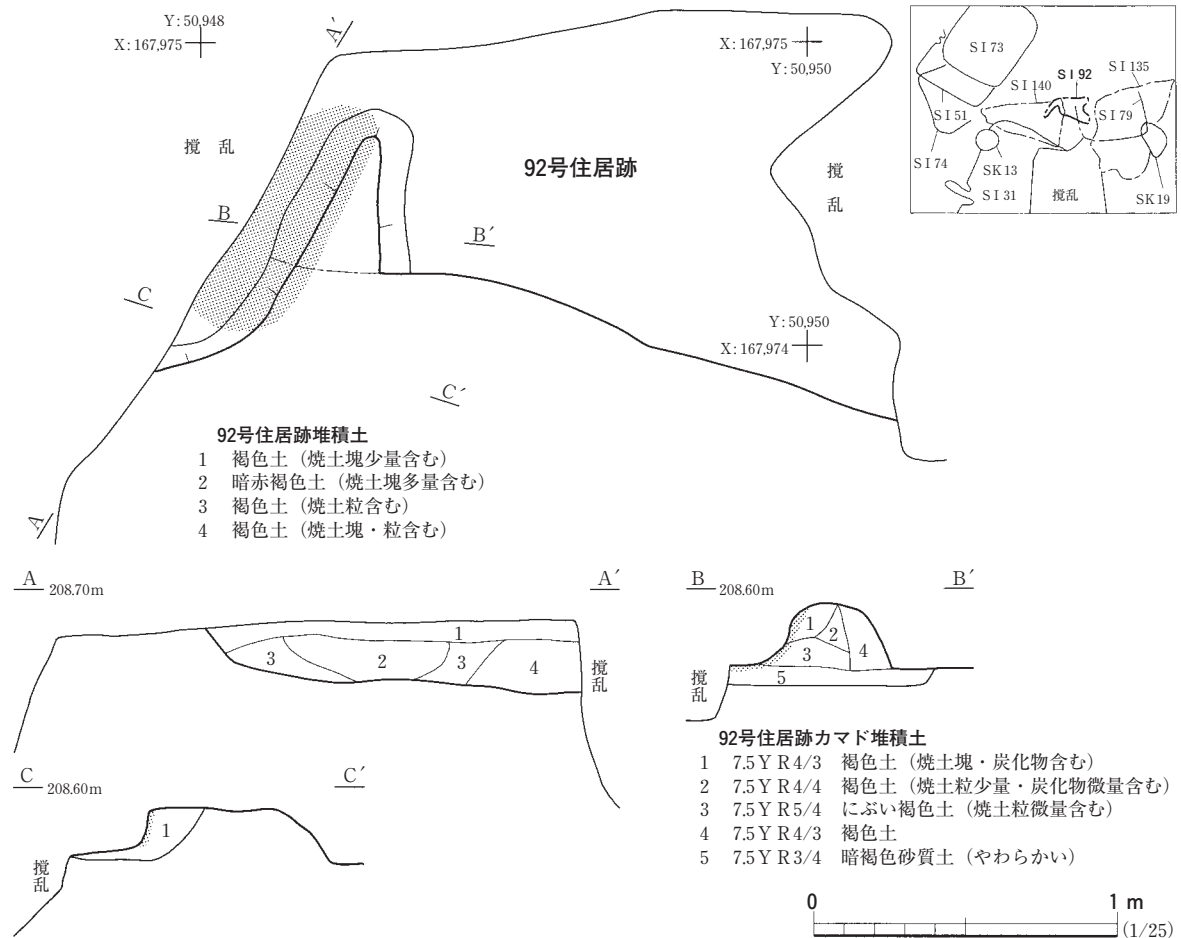


図238 92号住居跡

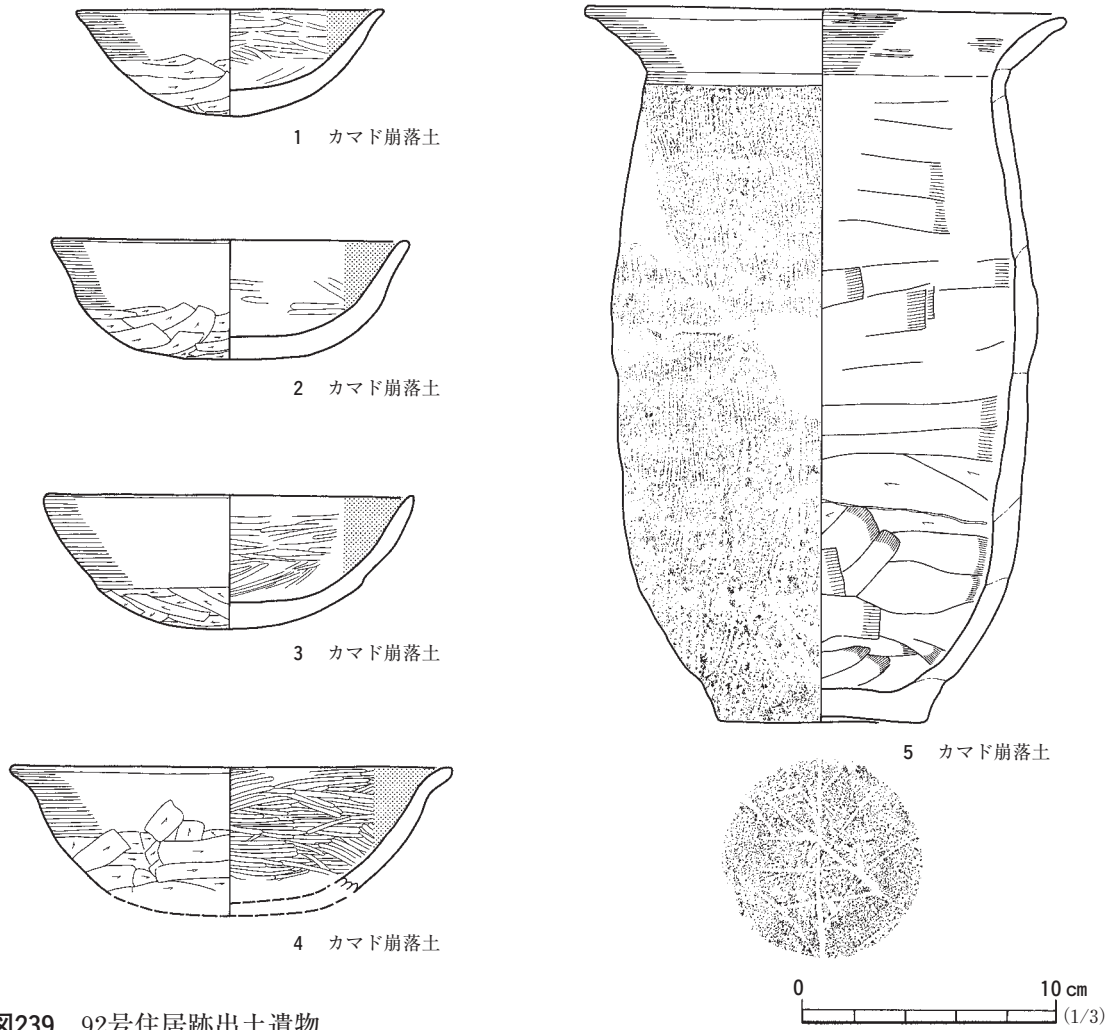


図239 92号住居跡出土遺物

しかし、原位置を押さえたものは無く、降雨で崩れた堆積土から採取されている。したがって、所属関係は厳密でない。

図239-1～4は、非ロクロ調整の土師器杯である。1・2・4は、外面における段の形成が不明瞭で、外反する口縁部形態を呈している。とくに、4はその度合いが強く、古手の印象を与える。3は、有段丸底杯に分類される。器形全体に丸みがあり、口縁部は内湾して立ち上がっている。内面の括れは無く、当該類型の杯としては後出的な位置付けが与えられる。

5は、外面ハケメ調整の土師器長胴甕になる。当該器種としては、中型に属する。器形は胴部中央に膨らみがあり、口頸部が「く」の字状に外傾している。底部はやや突出し、外面には、明瞭な木葉痕が観察される。

ま と め

本遺構は、自然堤防の東斜面落ちぎわに営まれた竪穴住居跡である。

遺存状態が非常に悪く、このため、細部の内容については、ほとんど何も知ることができなかった。

時期についても、確証のある遺物に恵まれず、不明である。

(菅原)

93号住居跡 S I 93

遺 構 (図240, 写真234)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。LⅢを掘り下げて行く途中で検出された。

本住居跡は、調査区ほぼ中央の最も遺構の集中する区域に占地している。49・91・142号住居跡の中に取り込まれる形で重複している。49・142号住居跡より新しく、91号住居跡より古い。

また、隣接する遺構には、東側に106号住居跡、17号土坑、南側に24号住居跡、北側に70号住居跡がある。住居跡の東側半分は、49号住居跡の構築時に失われたものと推定される。

遺存部の平面形は方形をなしている。西周壁は真北から22°ほど東に傾いている。住居跡の規模は、

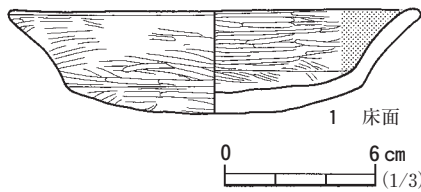


図241 93号住居跡出土遺物

遺 物 (図241, 写真564)

遺物は、土師器片52点が出土した。床面の遺物1点を図示した。

図241-1は、有段丸底の土師器杯である。底部は平底風で、口縁部が外反する。口縁部外面には、ヘラミガキ調整が加えられている。

ま と め

本住居跡は、調査区の中でも特に遺構の重複の著しい一画に占地している。西半分だけが残存し、細部施設は検出されなかった。東側半分は、49号住居跡の構築時に失われたものと思われる。

時期に関しては、出土した土器より、栗圀式期と考えている。

(高久田)

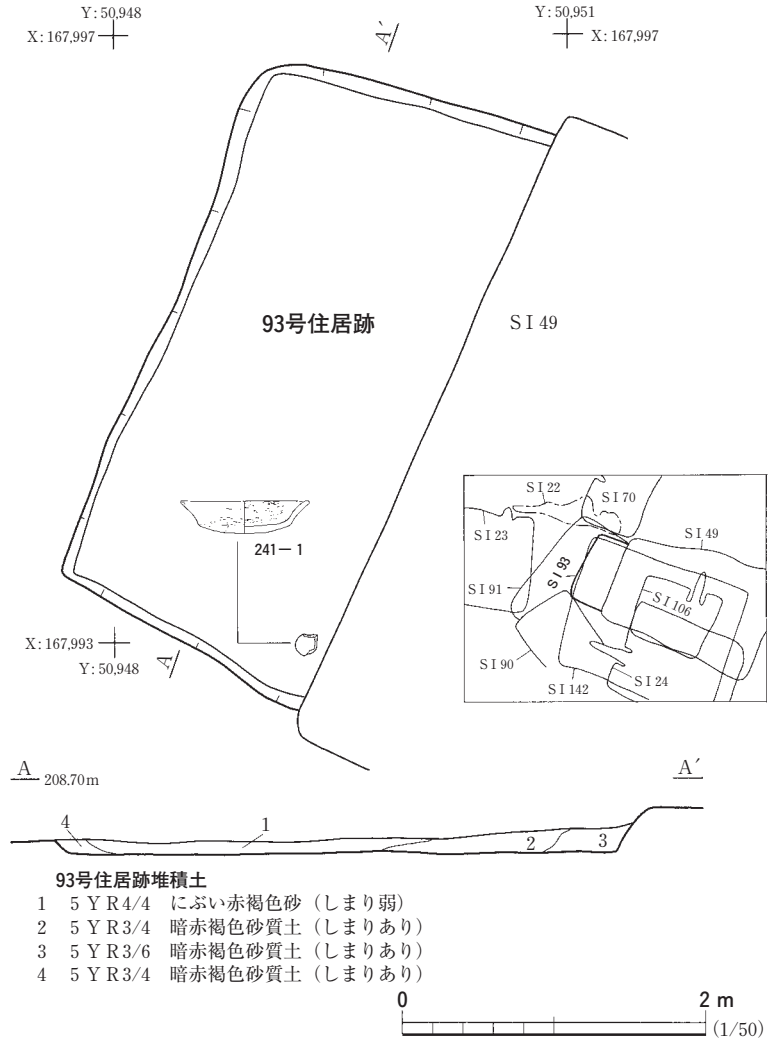


図240 93号住居跡

西周壁3.7mで、北周壁は遺存長1.9m、南周壁は遺存長1.7mを測る。床面はLⅢを掘り込んだままの直床で、おおむね水平である。検出面から床面までの深さは、6~30cmを測る。

遺構内堆積土は、4層に細分される。レンズ状堆積をしており、遺構が自然埋没したことを示している。

94号住居跡 S I 94

遺 構 (図242・243, 写真236~238)

本遺構は、M22グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面落ちぎわである。遺構は、高木遺跡における住居跡分布の西限の1つをなしている。

本住居跡は、123号住居跡と重複しており、これに切られている。ただ、当初は新旧関係を誤認してしまい、逆の順序で掘り始めてしまった。遺存状態は、南周壁側が攪乱で壊され、残っていない。

堆積土は、2層に分層された。土層断面図が示すように、レンズ状堆積をしている。したがって、本遺構は、自然に埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面のLⅢがそのまま平坦に整えられている。カマド手前の上面は、硬化していた。床面と検出面との比高差は、8~13cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。残存範囲からすると、北周壁に対して南周壁が短く、台形気味であったと推定される。

規模は、東西5.4m、南北3.8m以上を測り、大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線に概ね一致している。

カマドは、北周壁中央で検出された。遺存状態は良好である。煙道部は、周壁から長さ53cmが残っており、燃烧部は、袖長75cm、焚口幅40cmを測る。袖は、床面から15cmの高さが残っていた。にぶい黄橙色砂質土主体に構築されている。内壁面・底面は、焼土化が著しく、断面で最大5cmの厚さを測った。

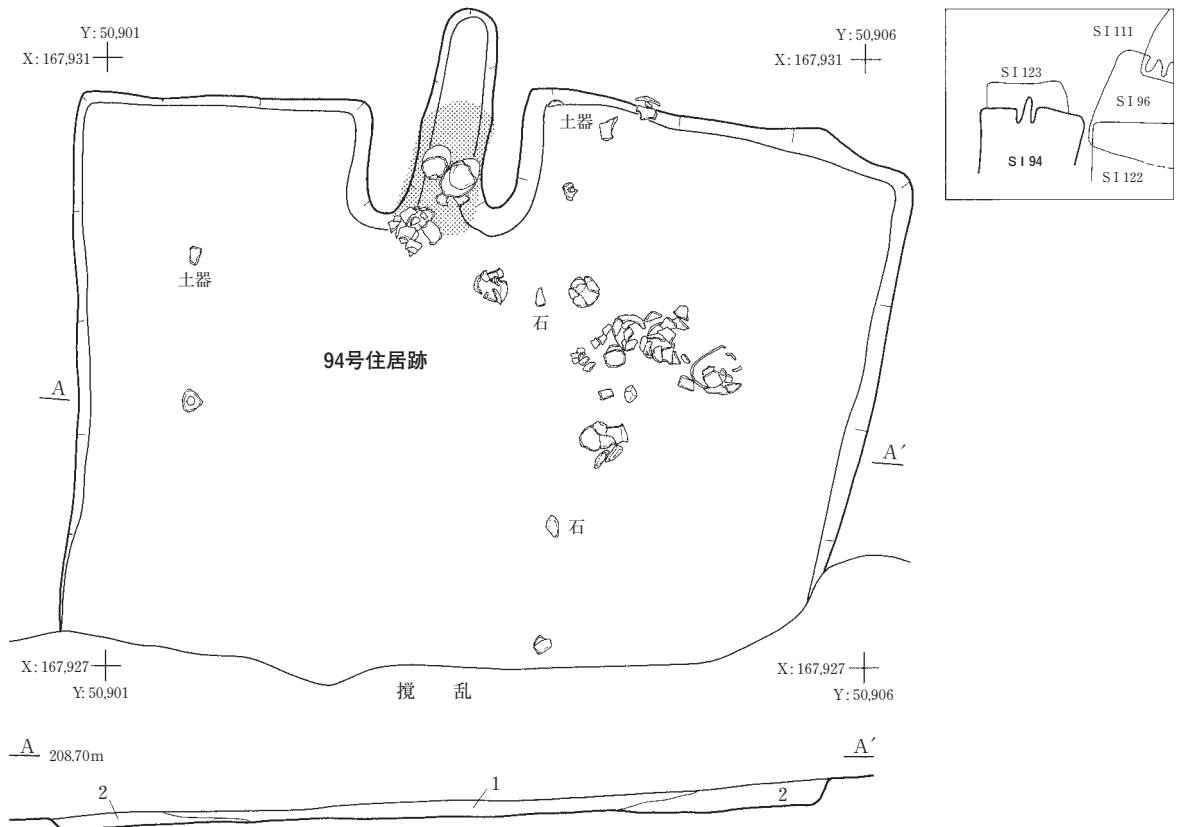
本住居跡のカマドでは、燃烧部中央から、土師器長胴甕が横に並んで2個体出土した(図245-3, 図246-1)。このことから、懸け口に甕が横並びさせられる構造であったことが判明している。焚口出土の土師器甕(図245-4)は、このどちらかとセットで使用されたのだろう。

ピット類は、検出されていない。

遺 物 (図244~246, 写真564~568)

遺物は、土師器片545点である。カマドのほか、北東部床面に多くの個体が認められた。以下に解説する図示資料は、すべて遺構に共伴する。

図244-1~5は、土師器杯になる。1と2は、須恵器杯蓋模倣杯に分類され、そのタイプの中でも器高の高い部類に入る。2は、外面にヘラミガキ調整が加えられている。3は、粗製の杯である。内外面は、ナデ調整されているだけで、ヘラミガキ・黒色処理が行われない。4は、典型的な舞台式杯とみてよからう。丸底で、口縁部が強く外反しており、内面は、口縁部下端に明瞭な稜が形成されている。5も、舞台式の範疇で捉えられる杯である。4に比べると、口径：底径比が大きく、口縁部外反の度合いが弱い。



94号住居跡堆積土

- 1 10Y R 6/3 にぶい黄橙色砂質土
- 2 10Y R 5/3 にぶい黄褐色砂質土

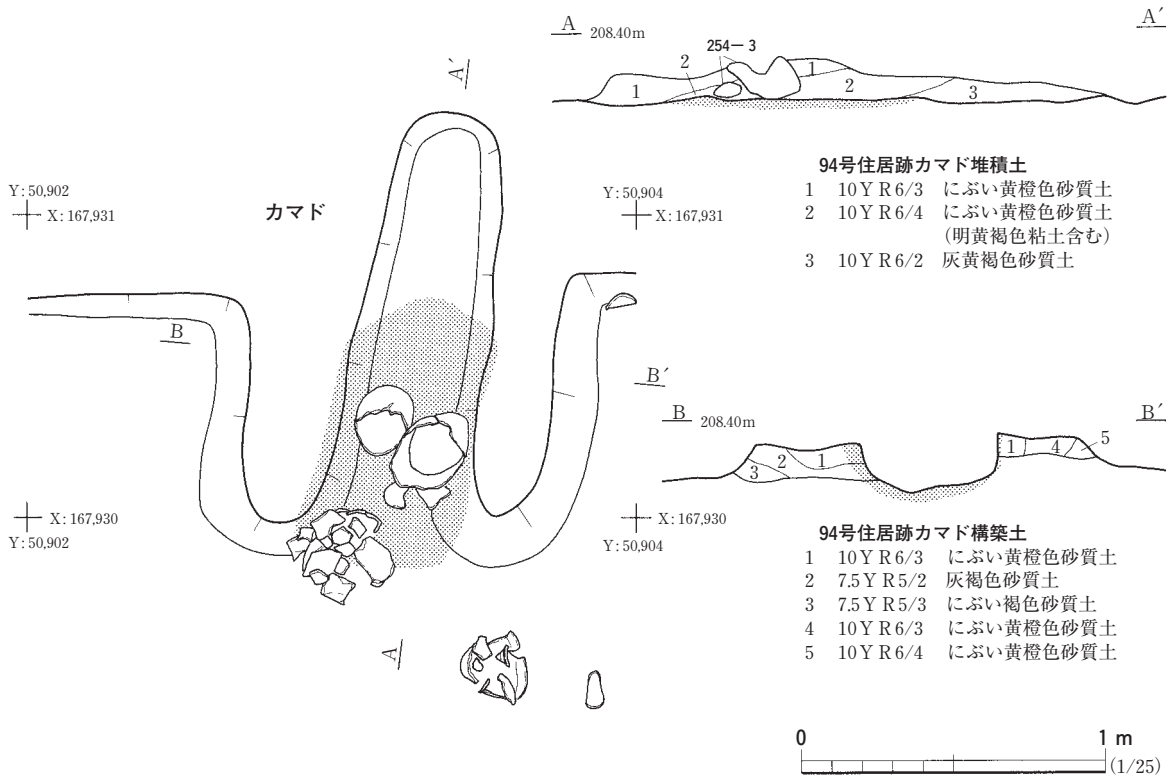
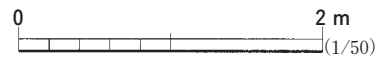


図242 94号住居跡

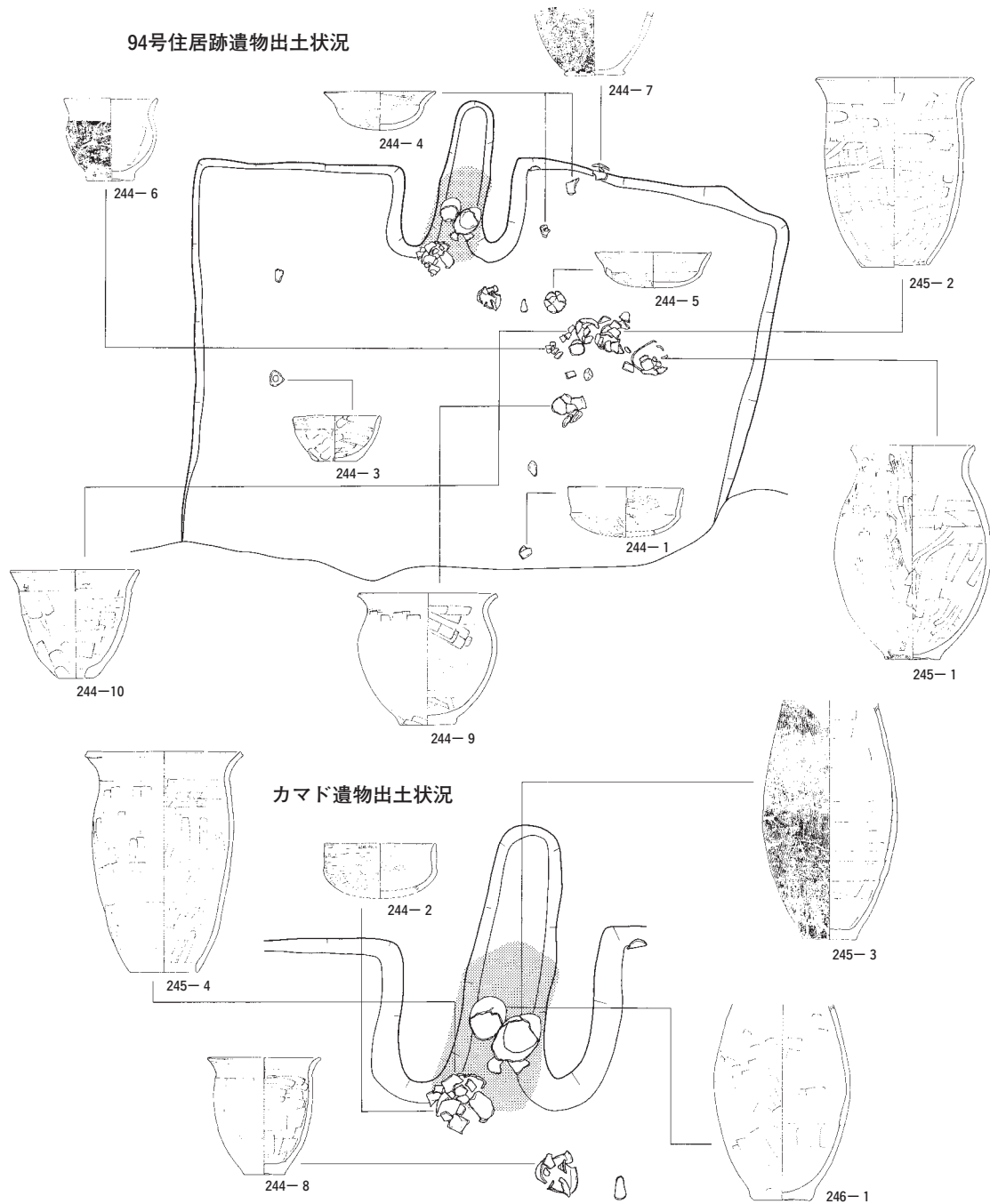


図243 94号住居跡遺物出土状況

図244-6・8・9は、中～小型の土師器甕である。6は、口径が胴部径を上回っており、寸詰まりの器形をなしている。器高11.7cmの小型品で、外面は、ハケメ調整されている。9は、これの相似形である。ただ、外面はナデ調整されており、口唇部は平坦面をなす。8は、この2点に比べると、細長い胴部を有している。頸部の括れが弱い。

図245-1・3は、土師器長胴甕になる。1は、典型的な舞台式甕の特徴を備えている。器形は、中膨らみの胴部から、頸部が直立して立ち上がり、口縁部が外反している。それに比べて、3はより長胴化した細長い胴部を有するもので、栗罎式へつながる後出的な要素をみせている。外面調整

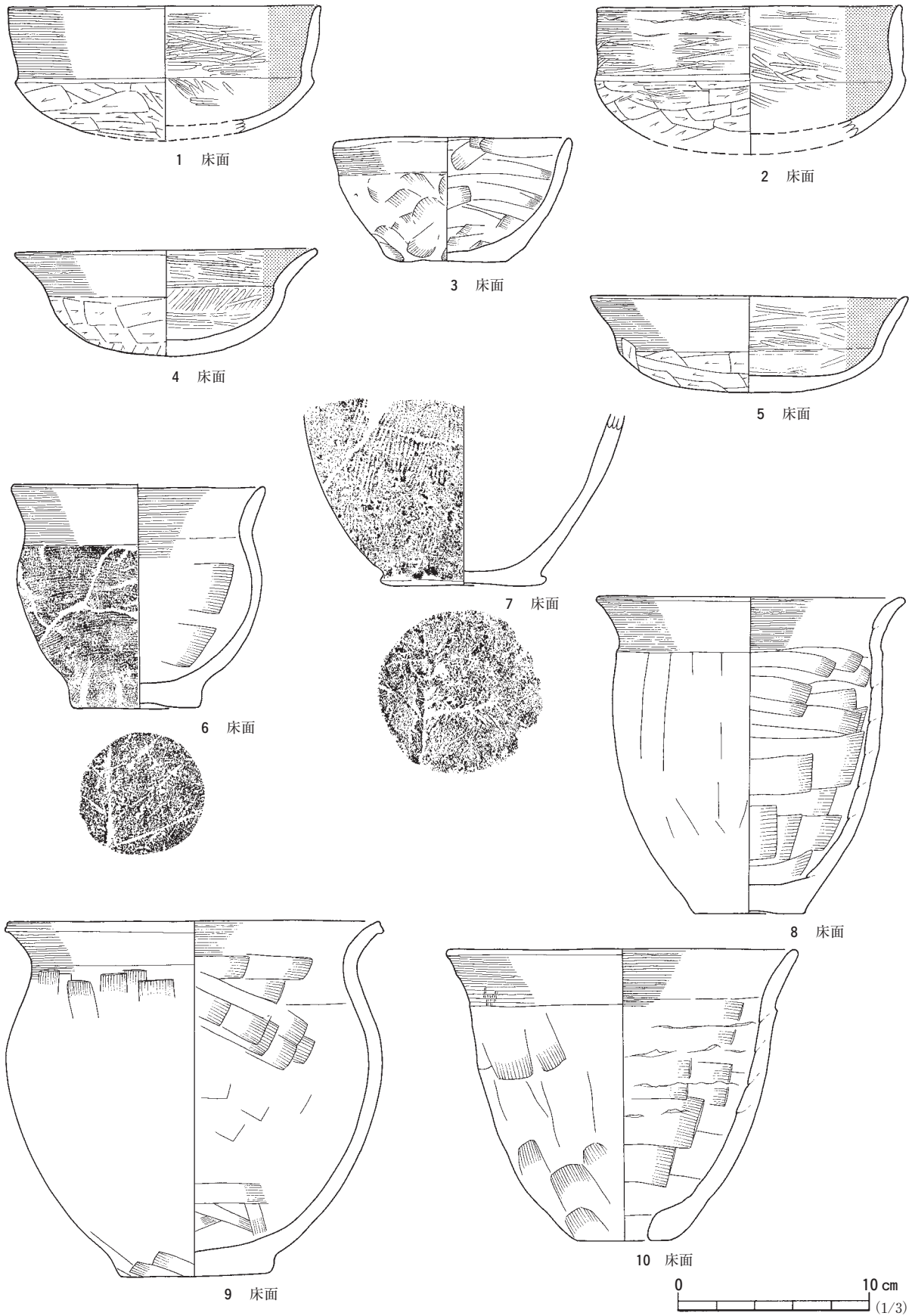
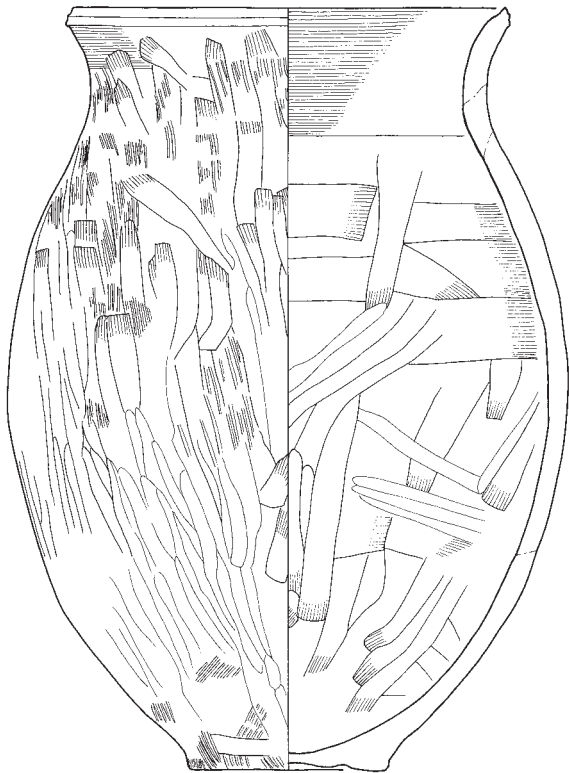
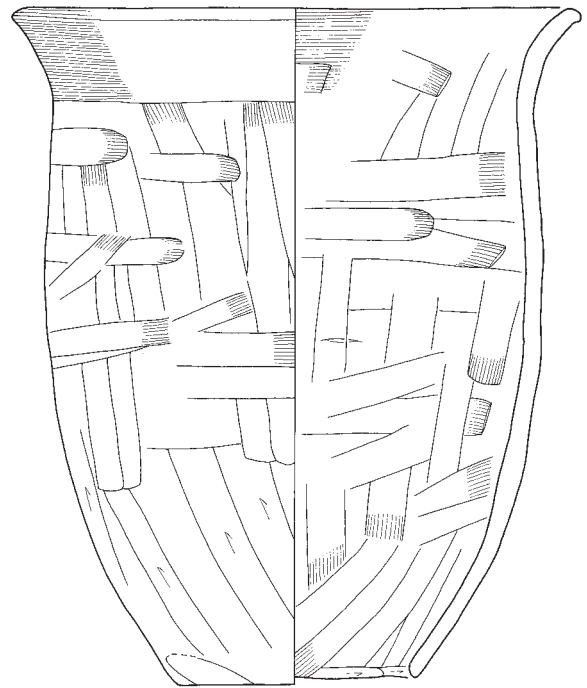


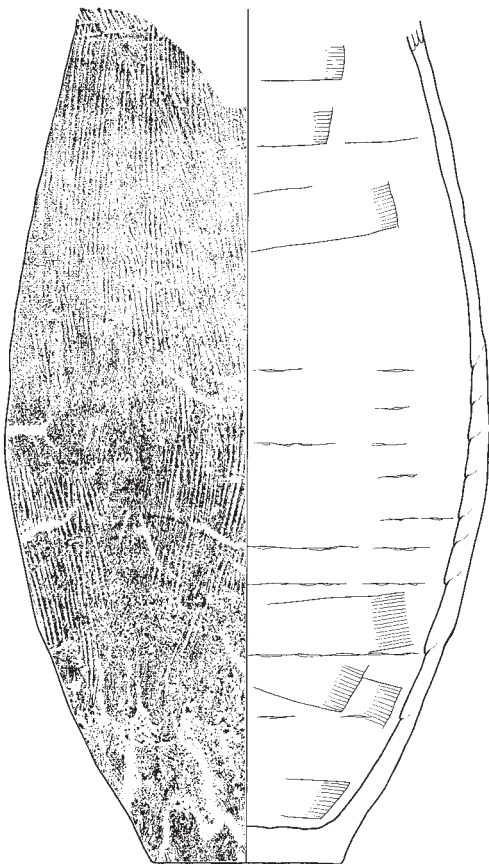
図244 94号住居跡出土遺物 (1)



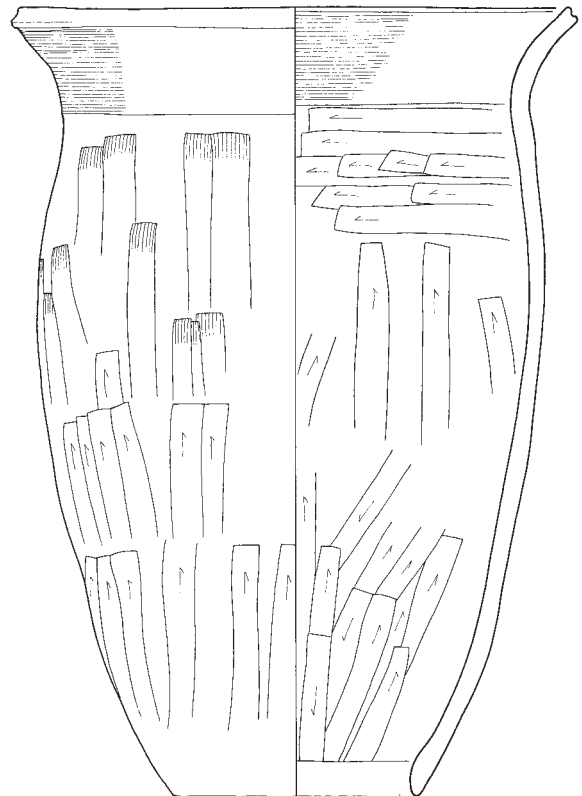
1 床面



2 床面



3 カマド底面



4 床面

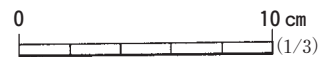


図245 94号住居跡出土遺物(2)

がハケメであることも、この特徴と合致する。図246-1は、両者の中間的な様相を示している。胴部は長胴化が進んでおり、外面はナデ調整されている。

図244-10は、小形の土師器甑になる。単孔式で、逆台形の器形を呈している。外面は、ナデ調整されている。

図245-2・4は、大型の土師器甑になる。無底式に分類される。器形の特徴は、胴部上半にやや張りがあり、口頸部がなだらかに外反している。このうち、4は口唇部が強いヨコナデ調整により、凹面を形成している。外面の器面調整は、ナデである。

まとめ

本遺構は、自然堤防の西斜面落ちぎわに営まれた竪穴住居跡である。遺構は、高木遺跡におけるの住居跡分布の西限の1つをなしている。

カマドの遺存状態が良く、懸け口に甕が2つ横並びさせられる構造であったことが判明した。また、床面でも出土遺物に恵まれ、良好な共伴資料が得られている。

時期は、舞台式後半期と考えられる。

(菅原)

95号住居跡 S I 95

遺 構 (図247, 写真239~241)

本遺構は、M22グリッドでL II上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部である。遺構は、高木遺跡における住居跡分布の西限の1つをなしている。重複関係は、111・126・153号住居跡を切っている。

本住居跡は、全体の削平が著しい。これは、微地形の最も標高の高い場所を占地していることに起因している。堆積土は、1層しか残っておらず、検出段階で床の半分は露呈していた。このため、遺構が自然埋没したか、人為的に埋められたかについては、はっきりしない。

床面は、貼床されず、掘形底面のL IIIが平坦に整えられている。カマド周辺には、踏み締まりが認められた。

本住居跡の平面プランは、正方形を呈している。規模は、東西6.5m、南北6.5mを測り、大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に32°振れている。

カマドは、西周壁で検出された。位置は、右に大きく偏っており、煙道部は残っていなかった。燃焼部は、袖長55cm、焚口幅53cmを測るが、袖の残りは、痕跡程度である。底面は、ほとんど焼土

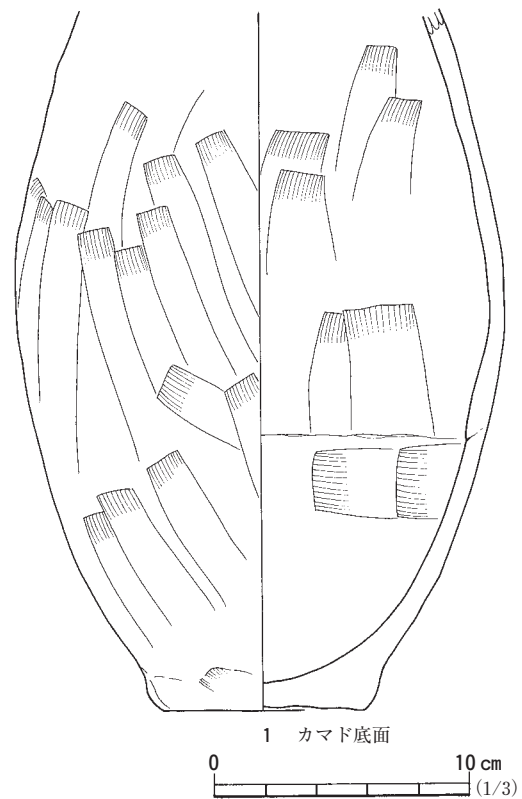


図246 94号住居跡出土遺物(3)

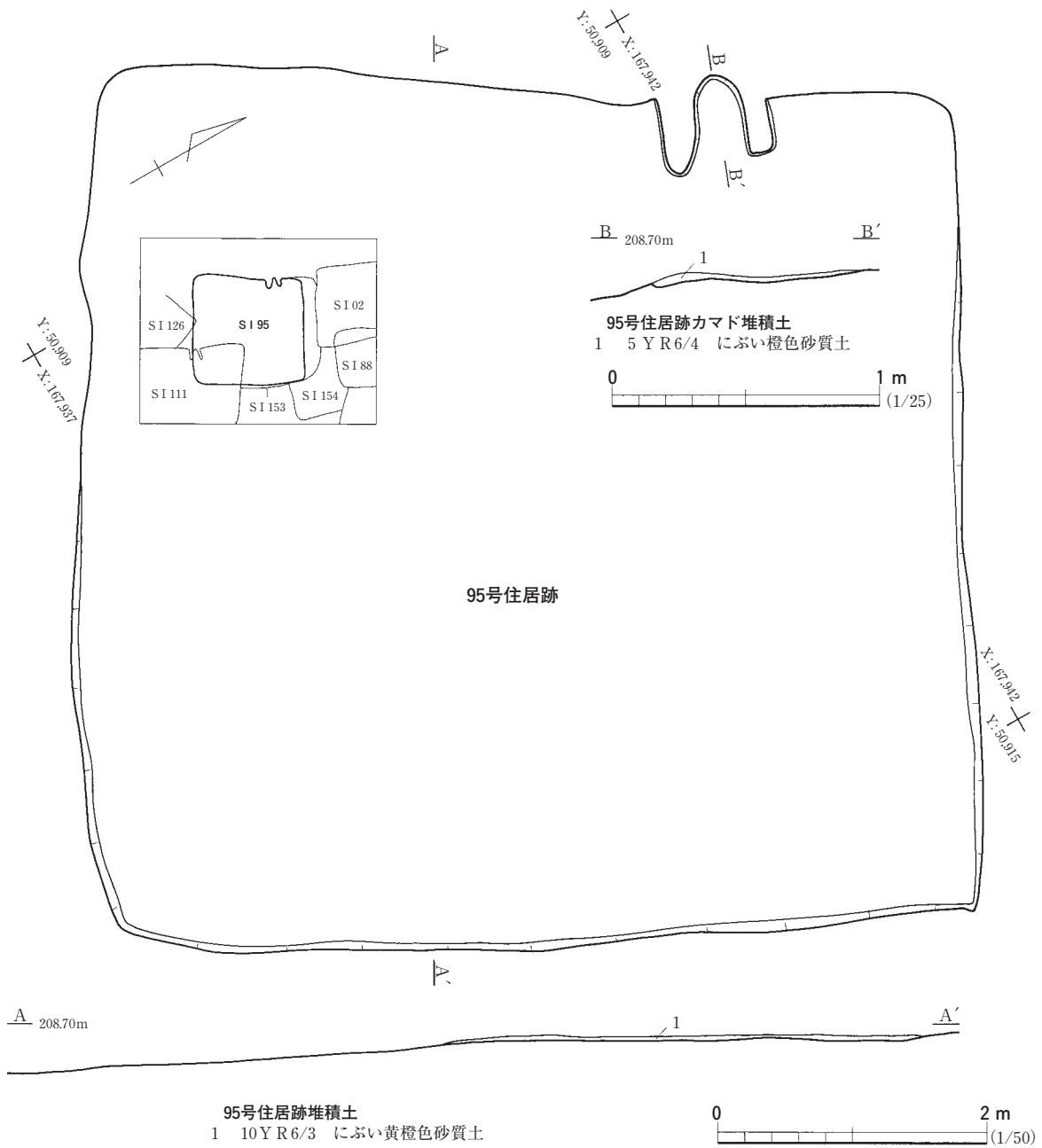


図247 95号住居跡

化していない。

ピット類は検出されなかった。

遺物 (図248, 写真567)

遺物は、土師器片64点、鉄製品1点が出土した。図示遺物は、床面の2点である。どちらも、遺構に伴う。

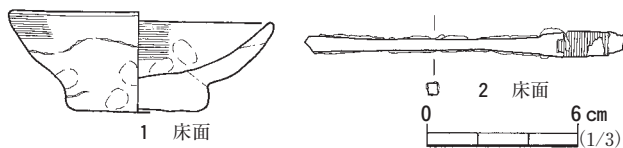


図248 95号住居跡出土遺物

図248-1は、土師器粗製杯になる。手づくね土器に分類しようかとも考えたが、口縁部が横ナデされていることを、ここでは

重視した。体部は、指で押さえただけの簡単な調整が行われているにすぎない。

図248-2は、鉄鏝になる。先端が欠損している。

ま と め

本遺構は、自然堤防の西斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。遺構全体の削平が著しく、床面が露呈していた。平面プランは方形を呈し、規模が大きい。

時期は、床面の土師器から平安時代より溯ることは、確実である。上限は、重複遺構との関係から、栗圀式期に求められる。 (菅原)

96号住居跡 S I 96

遺 構 (図249, 写真242・243)

本遺構は、M22グリッドでL IV上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の西斜面肩部である。

本住居跡は、2軒の竪穴住居跡と重複している。その中で最も新しく、111・122号住居跡を切っ
て、営まれている。

堆積土は、2層に分層された。断面の様子から、遺構は自然埋没したと判断している。床面は、貼床されず、掘形底面のL IVがそのまま平坦に整えられている。踏み締まりは、カマド周辺にみられたが、それほど強いものではなかった。

検出面と床面の比高差は、10～15cmを測る。

本住居跡の平面プランは、整った正方形基調を呈している。規模は、東西5.2m、南北5.5mを測り、比較的大型の部類に属している。

住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に22°振れている。カマドは、北周壁で検出された。位置は、少し左に偏っている。煙道部は残っていなかった。

燃焼部は、袖長85cm、焚口幅53cmの規模を測る。袖は、床面から12cmの高さが残り、主に褐灰色砂質土で構築されている。

底面は、3cmの厚さで焼土化していた。

ピット類は検出されていない。

遺 物 (図250)

遺構の残りが良好であった割に、遺物の数は少ない。土師器片189点、須恵器片5点がある。図示遺物2点は、遺構に伴わない。

図250-1は、土師器杯になる。口縁部が強く外反する有段丸底杯で、その下端に、鋭い稜線を形成する。上述のように遺構に伴う資料ではないが、土器自体の特徴は、舞台式～栗圀式古段階に比定される。

図250-2は、須恵器杯の破片である。飛鳥・藤原宮分類の杯Gに該当する。底部外面は、手持ちヘラケズリ調整されている。

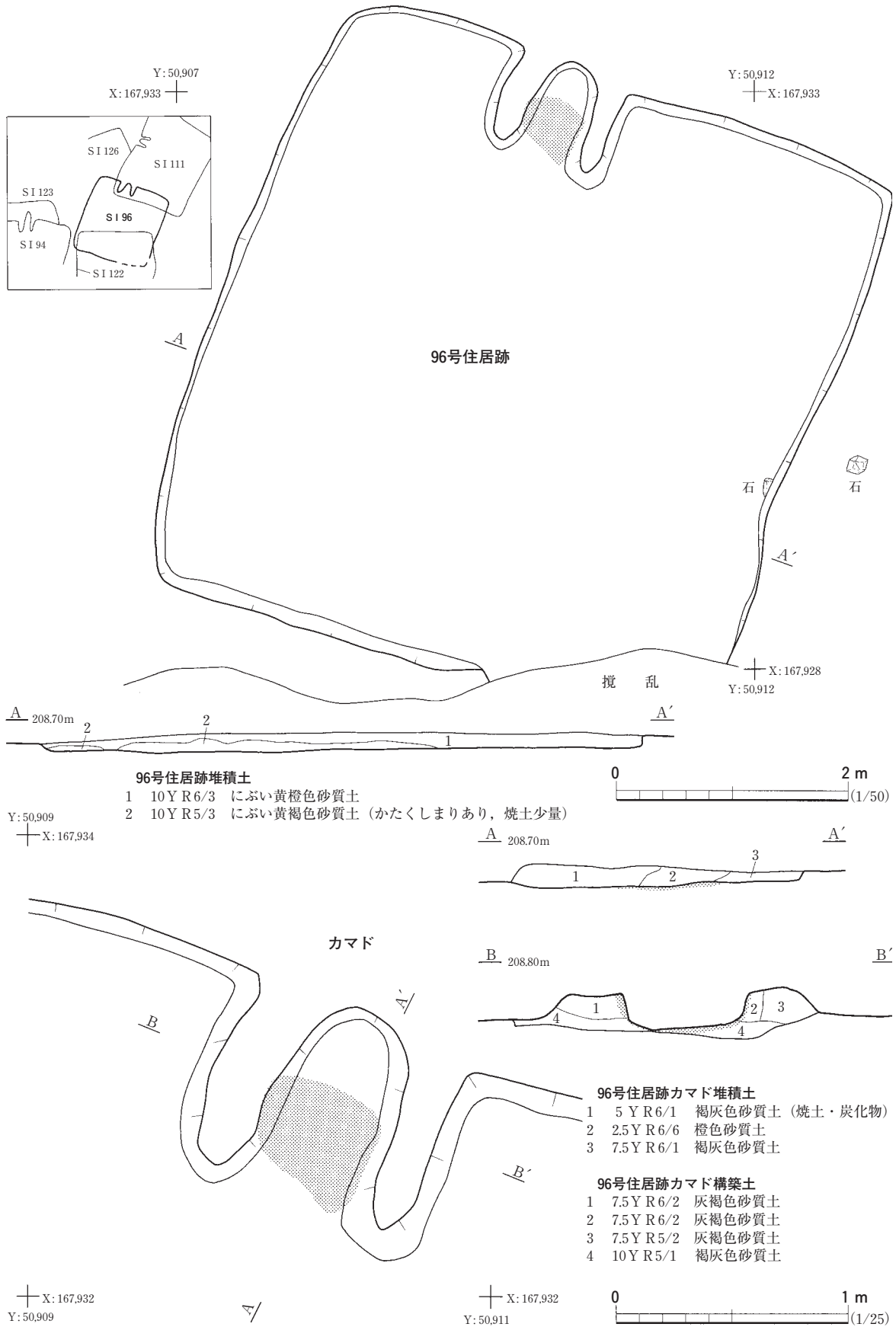


図249 96号住居跡

ま と め

本遺構は、自然堤防の西斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。整った正方形の平面プランを有している。

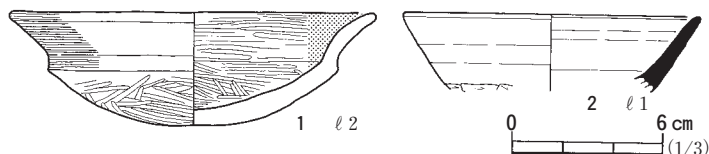


図250 96号住居跡出土遺物

時期は、遺構自体からは特定できない。重複遺構との関係を勘案すると、栗圀式期に上限が求められる。(菅原)

97号住居跡 S I 97

遺 構 (図251, 写真244~246)

本遺構は、N23グリッドでL II 上面から検出された竪穴住居跡である。

本住居跡が営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。重複関係は、102号住居跡より新しく、これを切っている。また、南周壁は攪乱で壊されており、残っていなかった。

堆積土は、3層に分層された。この断面の様子から、遺構は自然埋没したと判断している。床面は、貼床されず、掘形底面のL IIがそのまま平坦に整えられている。検出面と床面の比高差は、10cm前後を測る。

本住居跡の平面プランは、正方形基調を呈している。ただ、南周壁は膨らみ気味で、南東隅が、大きくカーブを描いている。

規模は、東西5.1m、南北5.0mを測り、高木遺跡では比較的大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に53°振れている。

カマドは、北周壁で検出された。位置は右側に寄っている。煙道部は、ほとんど残っていなかった。燃烧部は、袖長65cm、焚口幅750cmを測り、縦に細長い平面プランを有している。袖は、粘性のある褐色砂質土で構築され、床面から18cmの高さが残っていた。底面の焼土化は、最大で3cmを測る。

ピットは、2個検出されている。P 1は、北周壁ぎわに掘られており、平面プランは、45cm×44cmの円形をなす。床面からの深さは、28cmである。平坦な底面で、壁は垂直に立ち上がる。P 2は、カマド中軸線上に掘られており、P 1より少し規模が大きい。77cm×75cmの円形で、床面から12cmの深さを測る。底面は平坦である。

遺 物 (図252, 写真568)

遺構の残りが良好であった割に、遺物の出土数は少ない。土師器片377点がある。2点を図示することにした。

図252-1は、土師器甕になる。ℓ1出土のため、遺構に伴う資料ではない。器形は、下膨れの胴部を有しており、口縁部は上から押しつぶされたように、強く反り返っている。外面は、ハケメ調整されている。

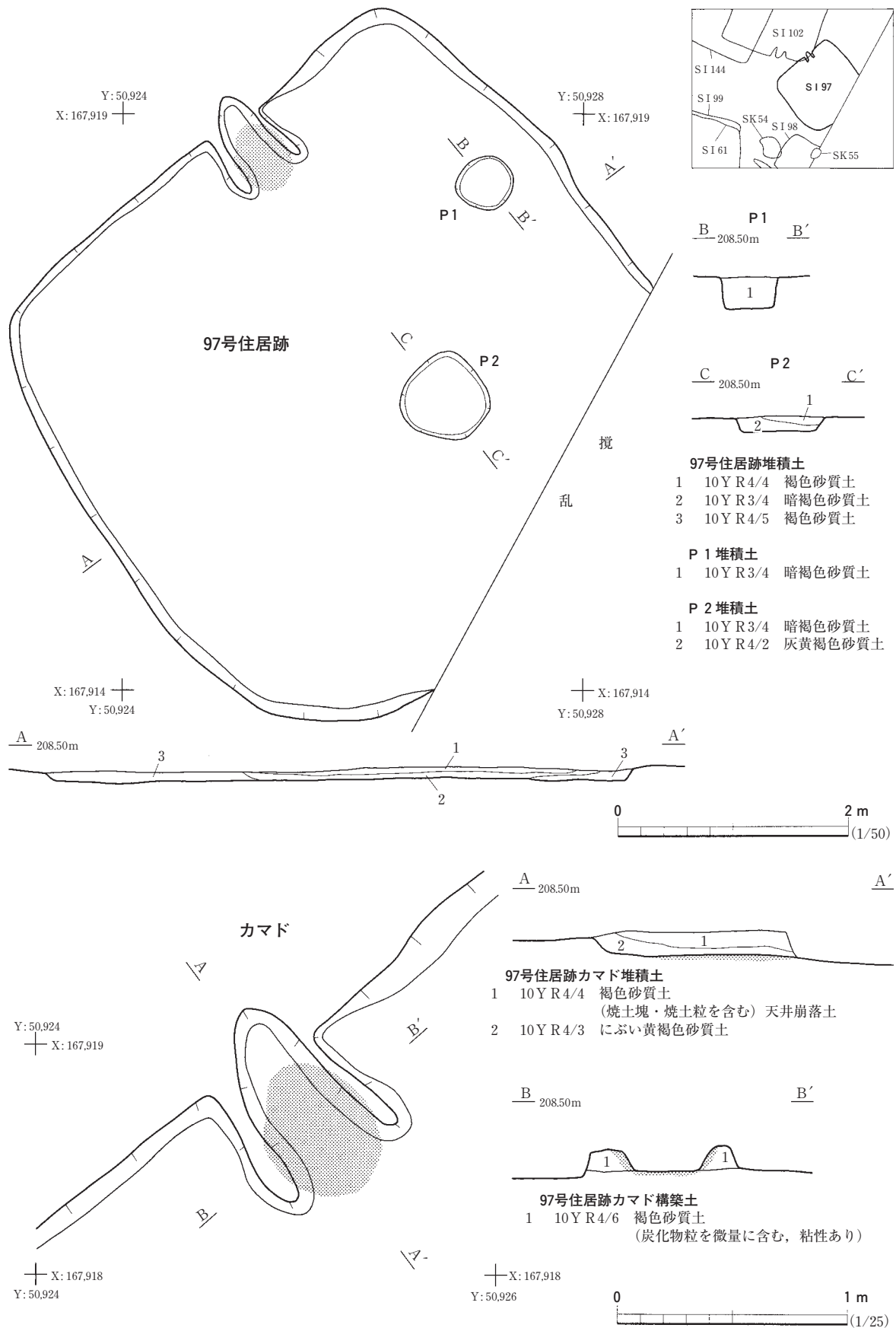


図251 97号住居跡

図252-2は、床面出土の土師器高杯になる。ただ破片のため、これも遺構に伴うかどうか不安が残る。脚部は短く、中実である。裾が「ハ」の字状に開いている。杯部が失われている。

まとめ

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。

正方形の平面プランを有している。

時期は、遺構自体からは特定できない。重複する102号住居跡の所見を勘案すると、栗圀式期に上限が求められると思われる。

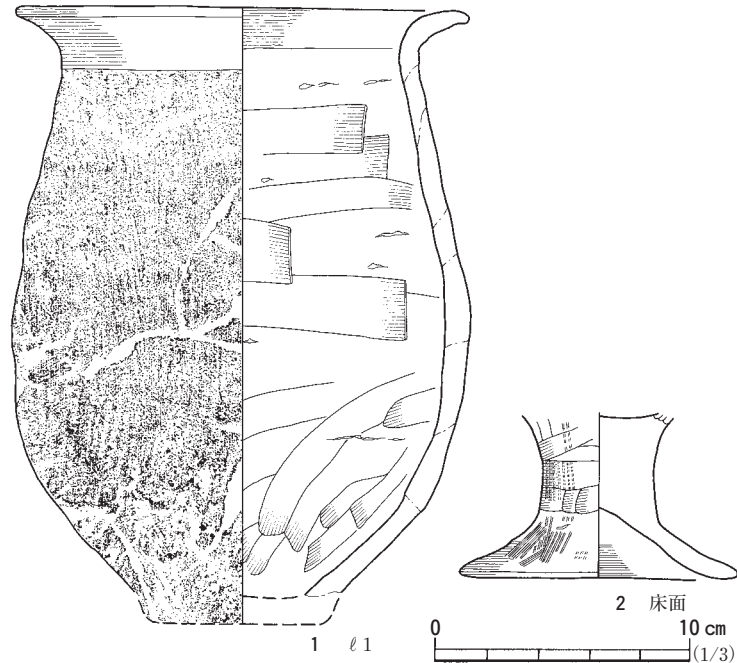


図252 97号住居跡出土遺物

(菅原)

98号住居跡 S I 98

遺構 (図253～255, 写真247～251)

本遺構は、N23グリッドでL II上面から検出された竪穴住居跡である。

周辺の状況から、本住居跡が営まれた場所は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部にあたる位置と推定される。

重複関係は、54・55号土坑より新しく、これを切って営まれている。東周壁は攪乱によって壊され、残っていない。

堆積土は、2層に分層された。断面の様子は、レンズ状堆積したことを示している。このことから、遺構は自然埋没したと判断している。

床面は、貼床されず、掘形底面のL IIがそのまま平坦に整えられている。検出面と床面の比高差は、11～13cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。ただ、床面積の半分以上が失われ、詳細は不明である。

規模は、東西2.3m以上、南北6.0mを測り、比較的大型のクラスに属している。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に29°振れている。

カマドは、西周壁中央で検出された。煙道部は、長さ135cmを測り、周壁から直線的に伸びている。燃烧部は、縦に細長い平面プランを有しており、袖長80cm、焚口幅48cmの規模を測る。袖は、

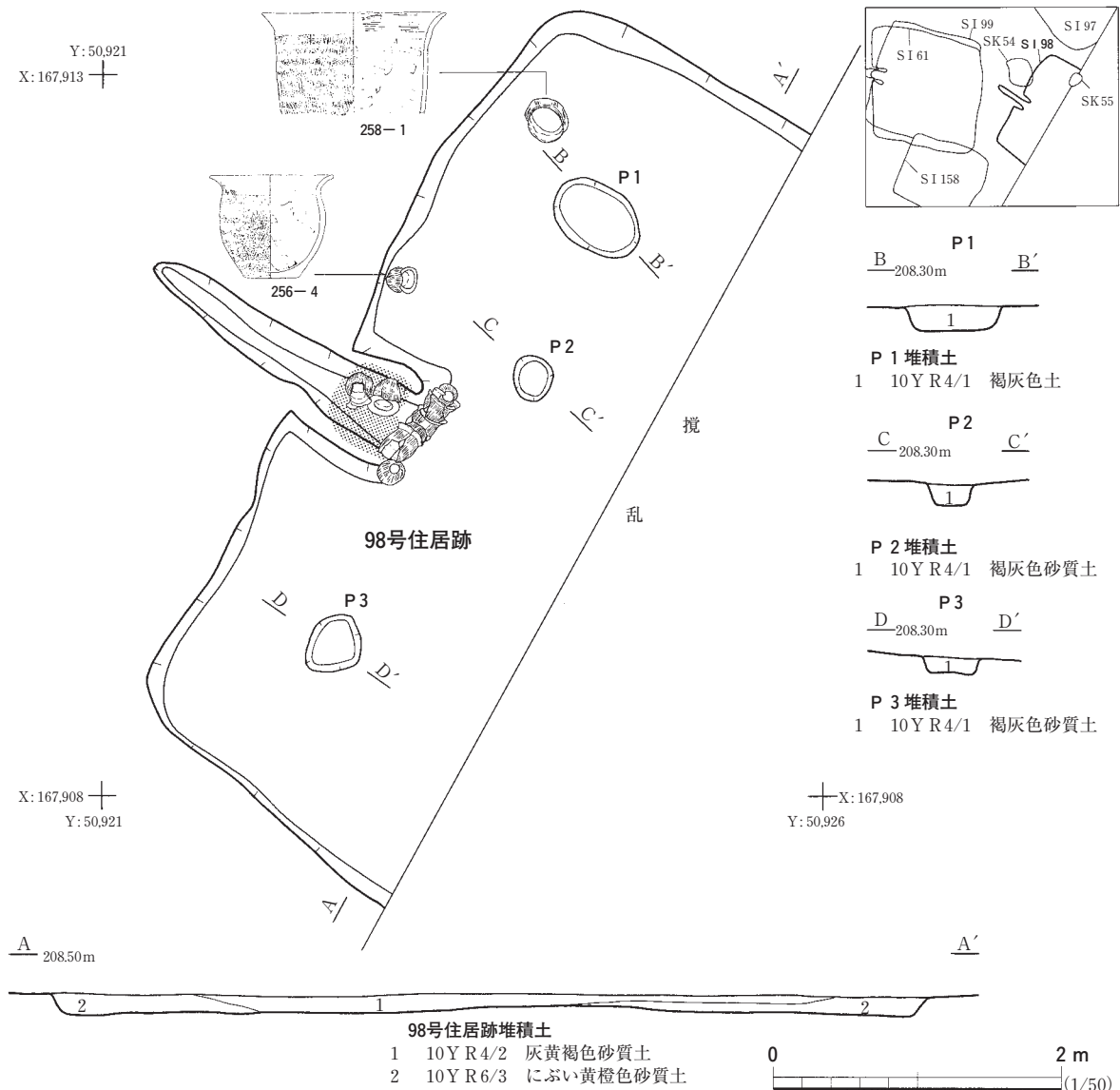


図253 98号住居跡

黄褐色粘質土で構築され、床面から18cmの高さが残っていた。底面の焼土化は、最大で厚さ8cmを測る。

本住居跡のカマドでは、構築材に土師器甕を多用する特徴が認められた。両袖には、土師器甕1個体がそれぞれ伏せた状態で先端に据えられている(図256-5・7)。また、天井部には、土師器甕3個体が横に連結されて、強化が図られている(図257-2~4)。このような類例は、関東地方に多く、出自が問題になるとされる。

また燃焼部中央では、これとは別に、土師器甕が4個体出土している(図256-2・3・6, 図257-1)。懸け口に固定された煮炊用とみられるもので、内訳は、大小2個体ずつになっている。当時の使用状況がうかがえる好材料であろう。

ピットは、3個検出された。平面分布は、西周壁近くに偏っている。

P1は、北西隅床面にあり、70cm×41cmの楕円形を呈している。床面からの深さは、19cmを測る。

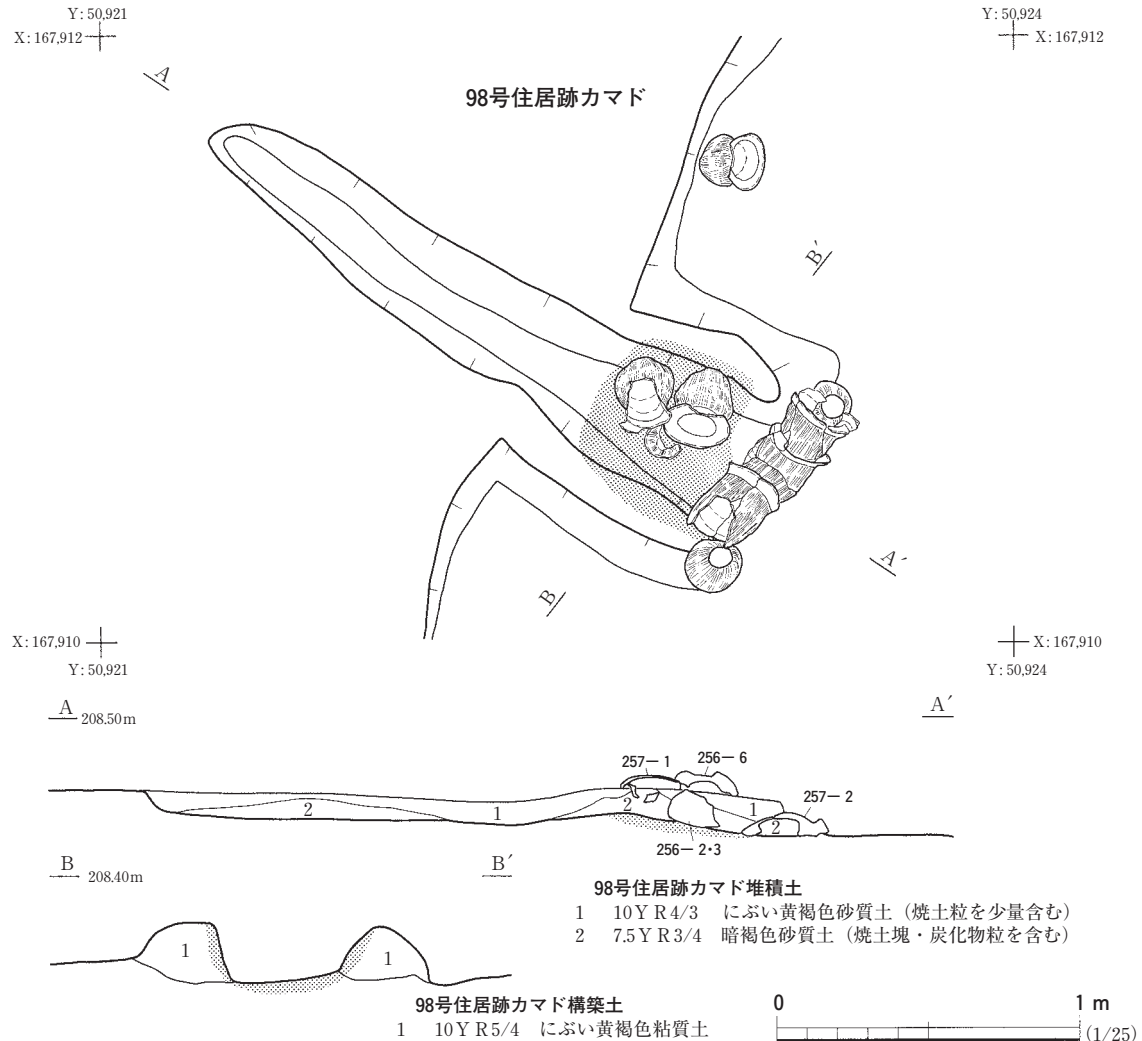


図254 98号住居跡カマド

P 2 は、カマド右袖前に掘られたもので、13cm×12cmの小さな円形を呈している。床面からの深さは、13cmを測る。P 3 は、南西隅の床面に掘られている。ちょうど、P 1 とは、対照的な位置関係にあり、両者は支柱穴を構成していた可能性を有している。しかし、掘り込みが浅く、残る2つが調査区外にあって確認できないことから、断定できない。

遺物 (図256～258, 写真568～571)

遺物は、土師器片325点、須恵器片2点、鉄製品1点が出土した。図示遺物は、14点である。内容に偏りがあり、遺構に伴うのは甕ばかりであった。

図256-1は、土師器杯になる。口径：底径比の大きな有段丸底杯で、段の位置は、器高の下位にあり、底部は平底風を呈している。口縁～体部の立ち上がりは、直線的である。この杯は、外面がヘラミガキされ、遺構には伴っていない。

図256-2～4は、中～小型の土師器甕である。器面調整は、どれも胴部外面がハケメ調整されており、斉一化されている。2は、口径が大きく、全体が下に窄まっていく器形を呈している。3は、口頸部が「く」の字状に外傾しており、寸胴気味の器形を呈している。4は、胴部の膨らみが大き

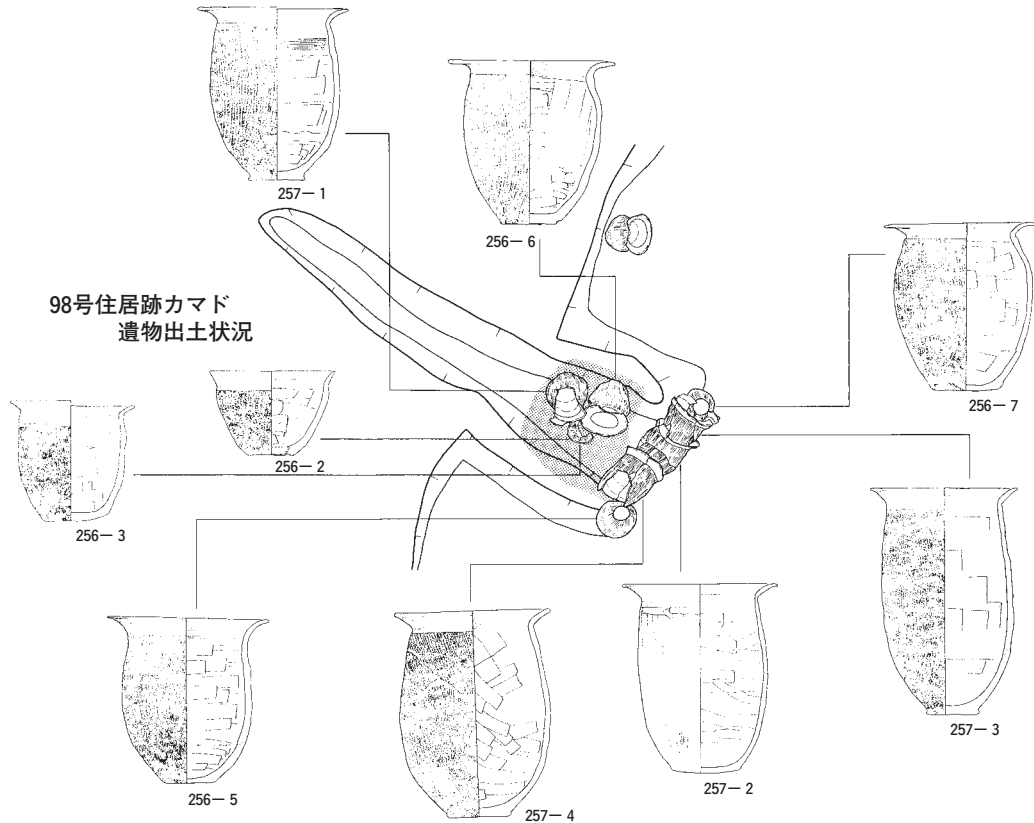


図255 98号住居跡カマド遺物出土状況

く、口縁部が大きく外反する特徴をもっている。

図256-5～7，図257-1～4は，大型の土師器甕である。ただし，器高30cmを越えるものはなく，ほとんどが長胴甕というにはためられる器形の資料である。

図256-5～7，図257-1は，そのなかでも，最も胴部の短いグループで，器高20cm前後を測る。胴部に膨らみがあり，大きな口頸部が「ハ」の字状に開くため，上から押し潰されたような印象を受ける。胴部外面は，ハケメ調整され，このうちの図256-6と図257-1には，底部外面に木葉痕が観察される。

図257-2は，上述の3点より少し胴部が長く，外面は，本住居跡の甕としては例外的なナデ調整が施されている。図257-3は，器高28.4cmを測り，長胴甕らしい様相を呈している。頸部が広く，胴部上位に膨らみがないため，器形全体に締まりの無い印象を受ける。胴部外面は，ハケメ調整されている。

残る図257-4は，中膨らみの胴部に，「く」の字状の口頸部が付く。胴部外面は，ハケメ調整されている。

図258-1は，胴部下半を欠く土師器甕になる。他と違って，口縁部の立ち上がりが緩やかで，器壁が薄い。したがって，甌の可能性もある。ただし，遺存状態の制約のため，確かめることはできない。

図258-2は，器種不明の須恵器口縁部になる。壺や瓶になるのだろうか。外面に端整な波状文が

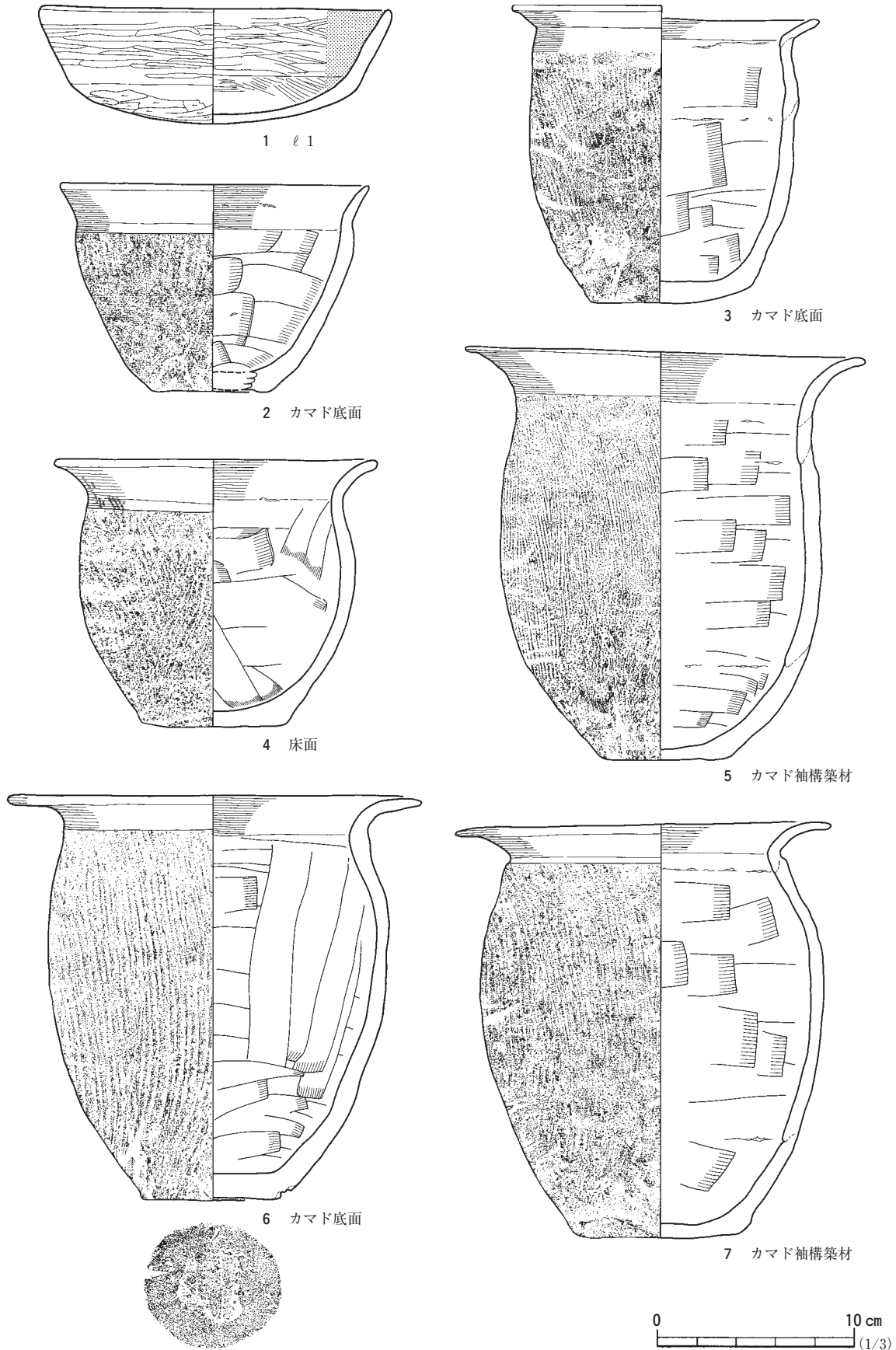
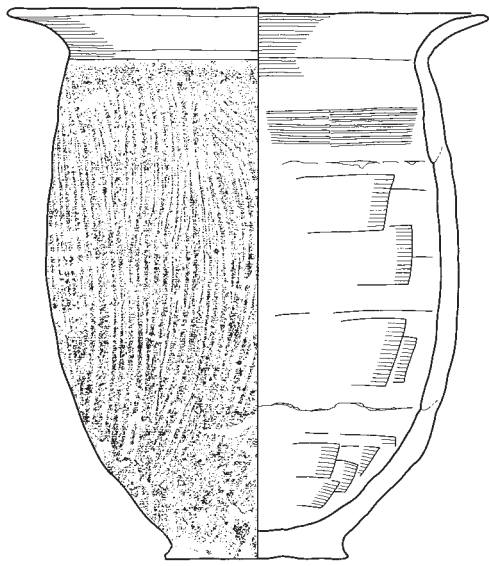
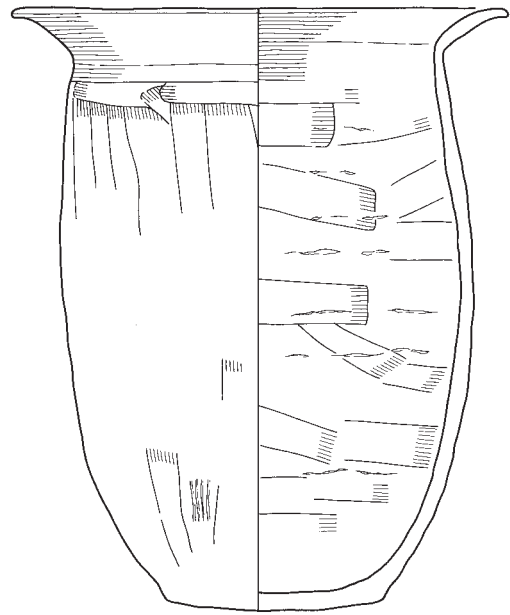


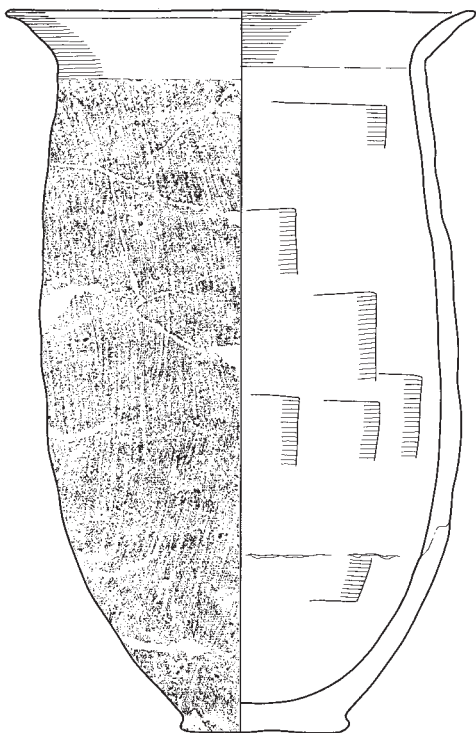
図256 98号住居跡出土遺物 (1)



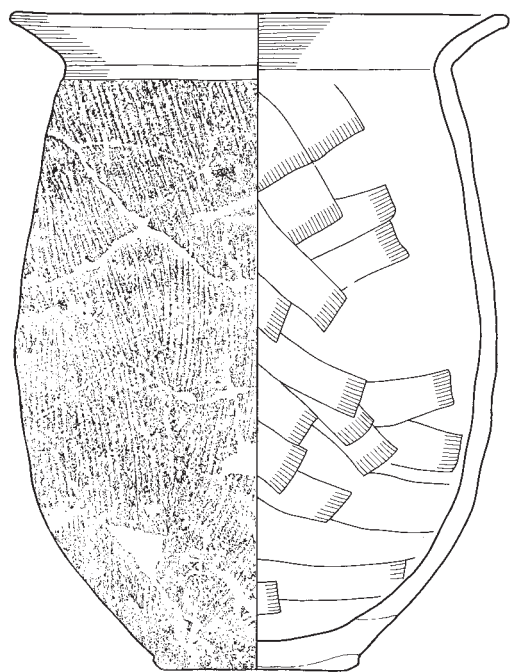
1 カマド底面



2 カマド天井部構築材



3 カマド天井部構築材



4 カマド天井部構築材

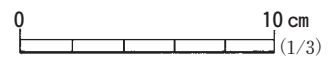


図257 98号住居跡出土遺物 (2)

施されている。

図258-3は、鉄製刀子の破片になる。両端を欠いており、全体の特徴は知ることができない。錆膨れが激しい。

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。

東半分は、失われていた。このため、全体の規模と平面プランは知ることができなかった。

本住居跡のカマドは、構築材に土師器甕を多用する特徴が認められた。袖の先端と天井部に5個体が使用されている。

時期は、栗圀式期に位置付けておきたい。

(菅原)

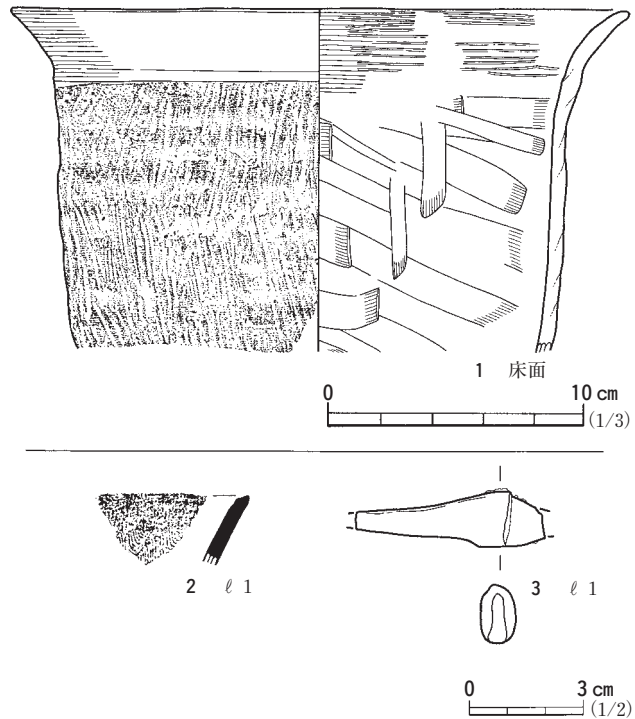


図258 98号住居跡出土遺物(3)

99号住居跡 S I 99

遺構 (図259・260, 写真252・253)

本遺構は、M23・N23グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれた場所は、自然堤防の中央で、栗圀式期の集落区画溝=5号溝跡とは至近距離に位置している。重複関係は、100・158・161・178号住居跡、41号土坑より新しく、それらを切って営まれている。

東周壁が失われていたが、全体としては、本住居跡の遺存状態は良好である。

堆積土は、3層に分層された。断面は、レンズ状堆積したことを示している。このことから、遺構は自然埋没したと判断している。

床面は、貼床されず、掘形底面のL IIがそのまま平坦に整えられている。検出面と床面の比高差は、15~20cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西5.5m以上、南北6.1m以上を測り、高木遺跡では比較的大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に11°振れている。

カマドは、西周壁中央で検出された。煙道部は、ほとんど残っていない。燃烧部は、袖長70cm、焚口幅38cmの規模を有している。袖は、褐色砂質土で構築され、床面から25cmの高さが残っていた。構築土には、炭化物・焼土が含まれている。底面の焼土化は、厚さ3cmを測った。

ピットは、北周壁側で2個検出された。60cmの間隔を開け、東西に並んでいる。P 1は、45cm×40cm、深さ22cmを測る。P 2は、70cm×58cm、深さ12cmを測る。性格は、不明である。

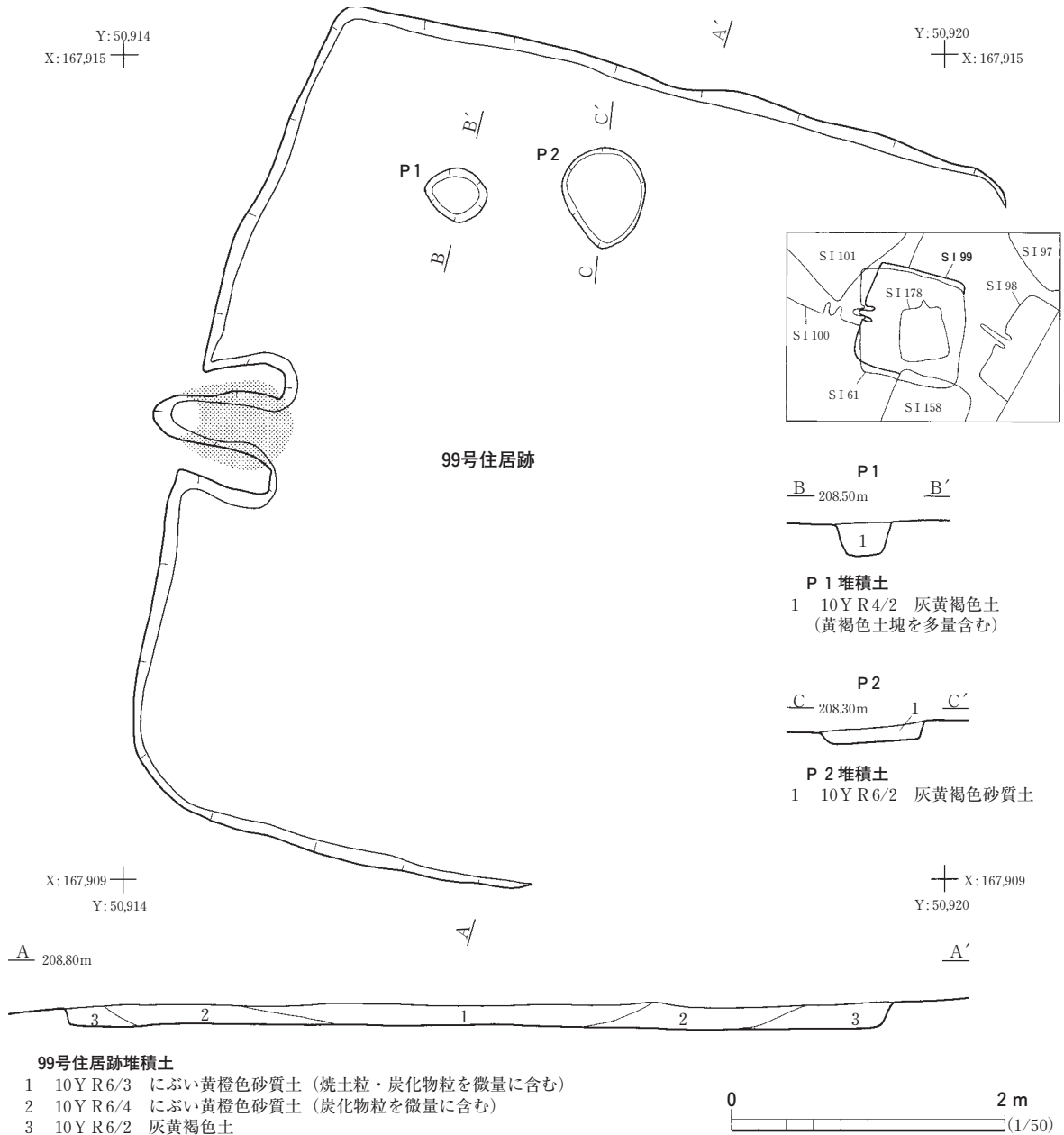


図259 99号住居跡

遺物 (図260, 写真571)

遺物は、土師器片827点、須恵器片4点、土製品1点が出土した。図示遺物は、8点である。遺構に伴うのは1点だけで、他は1から出土した。

図260-1~5は、土師器杯になる。床面出土の2は、口縁部下端に段を形成せず、内面はナデ調整だけで仕上げられている。1も、これと同様の特徴を備えており、本来は遺構に伴う遺物であったと考えられる。3・4は、通有の有段丸底杯で、栗囲式に比定される。5は、器高の高い椀タイプである。須恵器杯模倣杯の可能性が指摘される。

図260-6は、須恵器の口縁部片になる。外面に沈線がみられる。杯であろうか。

図260-7は、須恵器杯蓋になる。口径14.2cmに復元できる。口縁部が「ハ」の字状に開く、特徴

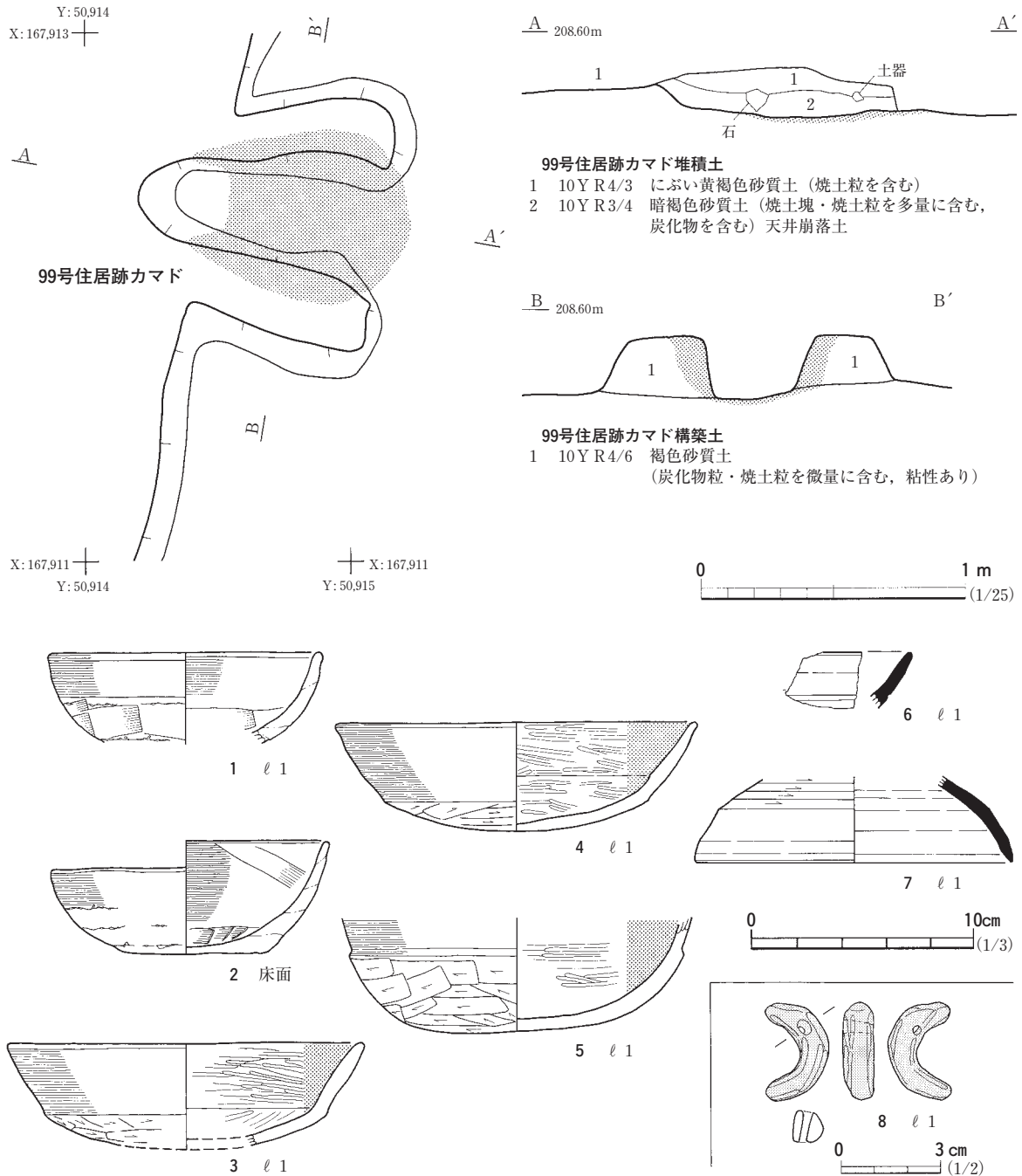


図260 99号住居跡カマド・出土遺物

的な器形を呈している。天井部外面は、回転ヘラケズリ調整されている。

図260-8は、土製勾玉になる。表面は、ヘラミガキ・黒色処理されている。

まとめ

本遺構は、自然堤防の中央に営まれた竪穴住居跡である。南側の至近距離に、栗圀式期の集落区画溝跡がある。カマドは、西周壁中央に付設されていた。

時期は、床面の遺物が通有の土師器杯でないため、判断が難しい。上限は、栗圀式期の住居跡を切っていることから、ここに設定することが可能である。

(菅原)

100号住居跡 S I 100

遺 構 (図261・262, 写真254・255)

本遺構は、M23グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれた場所は、自然堤防の中央で、栗圀式期の集落区画溝 = 5号溝跡とは至近距離にある。重複関係は、99号住居跡に切られ、101号住居跡を切っている。この重複で、遺構の南東隅は破壊されている。

堆積土は、4層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構

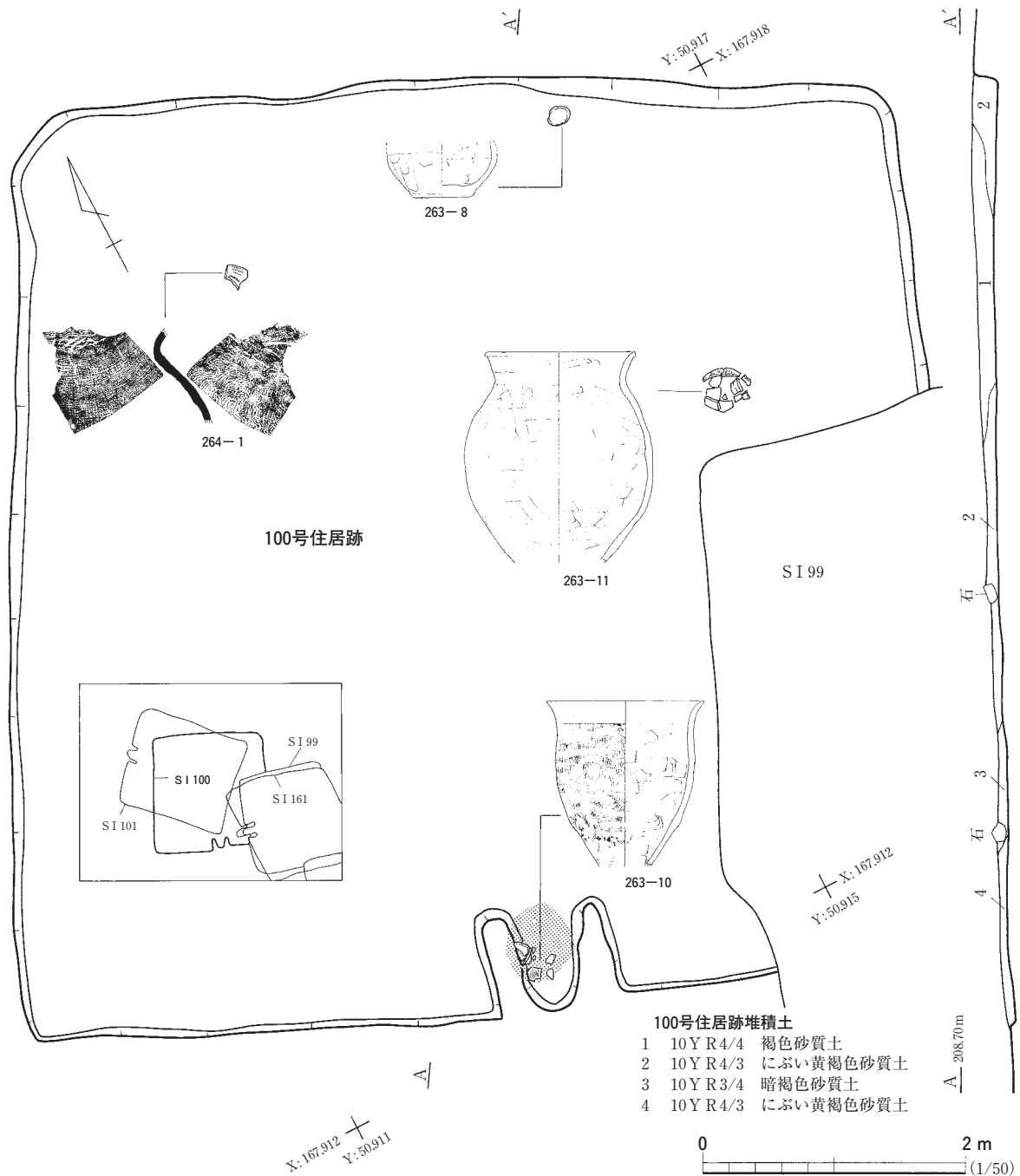


図261 100号住居跡

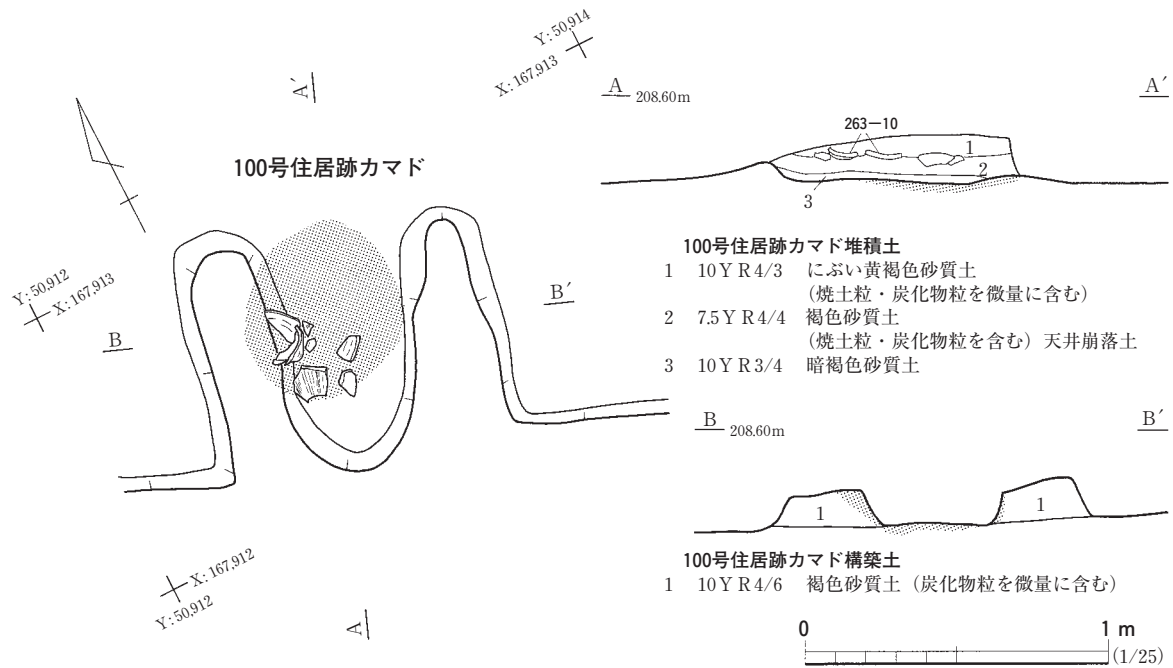


図262 100号住居跡カマド

は自然埋没したと判断している。床面は、貼床されず、掘形上面のL IIがそのまま平坦に整えられている。検出面と床面の比高差は、8~20cmを測る。

本住居跡の平面プランは、整った正方形を呈している。規模は、東西7.0m、南北7.2mを測り、高木遺跡では大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に27°振れている。

カマドは、本遺跡では珍しく、南周壁中央で検出された。煙道部は、残っていなかった。燃焼部は、袖長87cm、焚口幅48cmの規模を有している。袖は、褐色粘質土で構築され、床面から26cmの高さが残っていた。構築土には、微量の炭化物が含まれている。底面の焼土化は、3cmの厚さを測った。

ピット類は、検出されていない。

遺物 (図263・264, 写真571~573)

遺物は、土師器片828点、須恵器片6点、土製品1点、石製品1点が出土した。図示遺物は、15点である。

図263-1~7は、土師器杯になる。このうち、1~6は有段丸底杯に分類される。1・2は、底径が大きく、口縁部の立ち上がり之急である。1の内面は、ナデ調整で仕上げられており、2の外表面は、ヘラミガキ調整が加えられている。2・3・6は、口縁部の内湾する器形を呈している。この中で、6は段の位置が器高中央にあり、深めの印象を与えるつくりとなっている。5は、口縁部が強く外反するのが特徴で、外面の段は明瞭である。7は、椀状の器形を呈した大型品であり、口縁部は短く内傾している。

図263-8は、小~中型の土師器甕になる。上半部を欠いているので、器形全体の特徴が分からない。球胴甕だろうか。胴部外面は、ナデ調整されている。

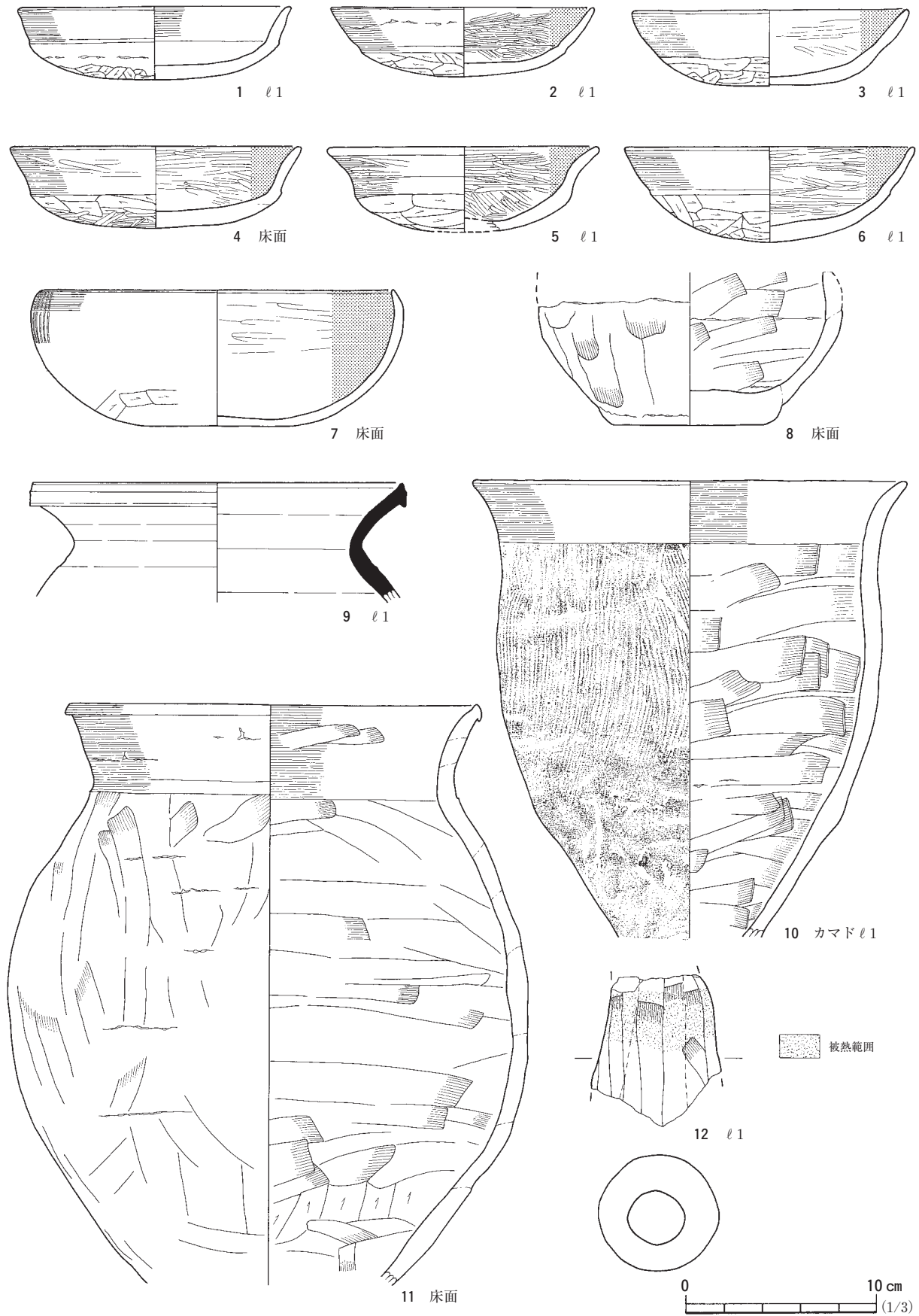


図263 100号住居跡出土遺物 (1)

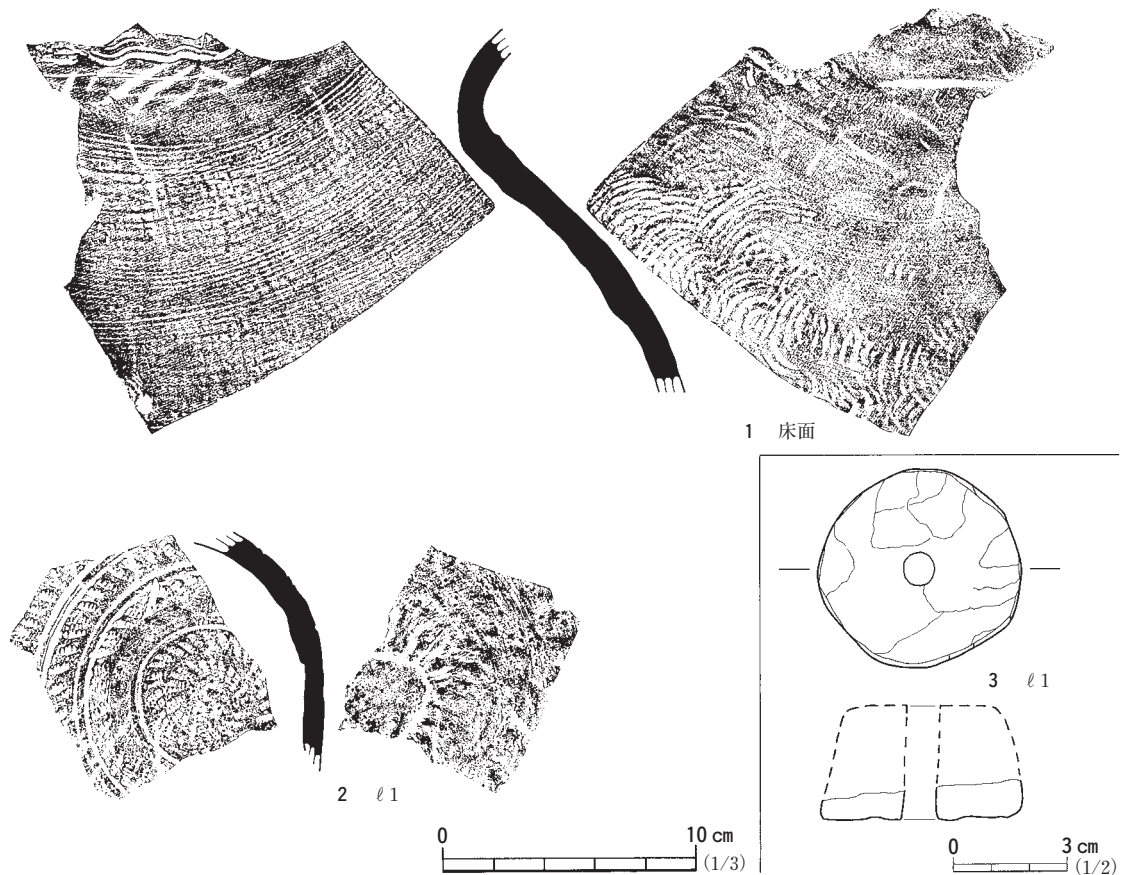


図264 100号住居跡出土遺物（2）

図263-10・11は、大型の土師器甕になる。10は口径が大きく、胴部中央が膨らんで、下半部が強く窄まる器形を呈している。頸部の括れはなだらかで、緩いカーブを描いて口縁部へ移行している。胴部外面は、ハケメ調整である。11は、球胴甕に分類される。頸部は、直立気味に外傾しており、口縁部は、わずかに外反する。胴部外面は、ナデ調整が施されている。

図263-9、図264-1は、須恵器甕の破片資料になる。図263-9は、頸部が「く」の字状に強く折れ曲がり、口縁端部が上下に挽き出されている。図264-1は、頸部外面に波状文が巡り、胴部は、外面にタタキメ・カキメ、内面に同心円アテメが観察される。

図264-2は、須恵器提瓶になる。円盤閉塞した側の胴部片とみられ、内面に絞りめが観察される。外面は、同心円文の中に櫛歯状列点文が施されている。

図263-12は、羽口になる。両端が欠損しているが、被熱痕は明瞭に観察される。

図264-3は、石製紡錘車になる。片面が破損している。

まとめ

本遺構は、自然堤防の中央に営まれた竪穴住居跡である。南側の至近距離に、栗圀式期の集落区画溝跡がある。平面プランは正方形を呈しており、規模が大きい。カマドは、本遺跡には珍しく、南周壁中央に付設されていた。

時期は、床面の遺物から栗圀式期と考えている。

(菅原)

101号住居跡 S I 101

遺 構 (図265・266, 写真256・257)

本遺構は、M22・23グリッドで検出された竪穴住居跡である。平面プランの全体が判明し、定量の共伴遺物にも恵まれた。

本住居跡が営まれた場所は、自然堤防の中央で、栗圀式期の集落区画溝 = 1・5号溝跡の至近距離である。

重複関係は、100号住居跡・57号土坑に切られている。これにより、北周壁付近を除く遺構全体が、上部削平されている。また、157号住居跡ともわずかに重複しているが、これとの関係については、本住居跡のほうが新しい。

堆積土は、4層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は自然埋没したと判断している。

床面は、貼床されず、掘形底面のLⅡがそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み締まりは認められなかった。西周壁で見ると、検出面と床面の比高差は、25cmを測る。周壁の立ち上がりは、急角度であった。

本住居跡の平面プランは、東西に長い方形基調を呈している。規模は、東西6.4m、南北5.9mを測り、高木遺跡では大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に40°振れている。

カマドは、西周壁中央で検出された。煙道部は、ほとんど残っていなかった。燃焼部は、袖長78cm、焚口幅60cmの規模を有している。

袖は、にぶい黄褐色粘質土で構築され、床面から17cmの高さが残っていた。構築土には、微量の炭化物が含まれている。底面の焼土化は、5cmの厚さを測った。

ピット類は、検出されていない。

遺 物 (図267・268, 写真573・574)

遺物は、土師器片589点、須恵器片2点、土製品1点が出土した。

図示遺物は、11点である。そのうち遺構に伴うのは、図267-1・7、図268-2の破片資料3点だけである。

本住居跡では、良好な資料は4から得られている。西周壁ぎわで6個体が出土し、住居廃絶後間もない段階の堆積土一括遺物と見なせる(図265下段)。

図267-1・2は、有段丸底の土師器杯になる。1の器形は、口縁部が外反し、口縁部下端に鋭い稜線を形成している。外面はヘラミガキ調整である。2は、器高が深く、口縁部が内湾するもので、端部は肥厚している。この杯では、外面がヨコナデ調整のあと、ヘラミガキ調整されていない。この点で、1とは違っている。

図267-3は、土師器鉢になる。口縁部～体部が直線的に開き、外面は、ハケメ調整されている。

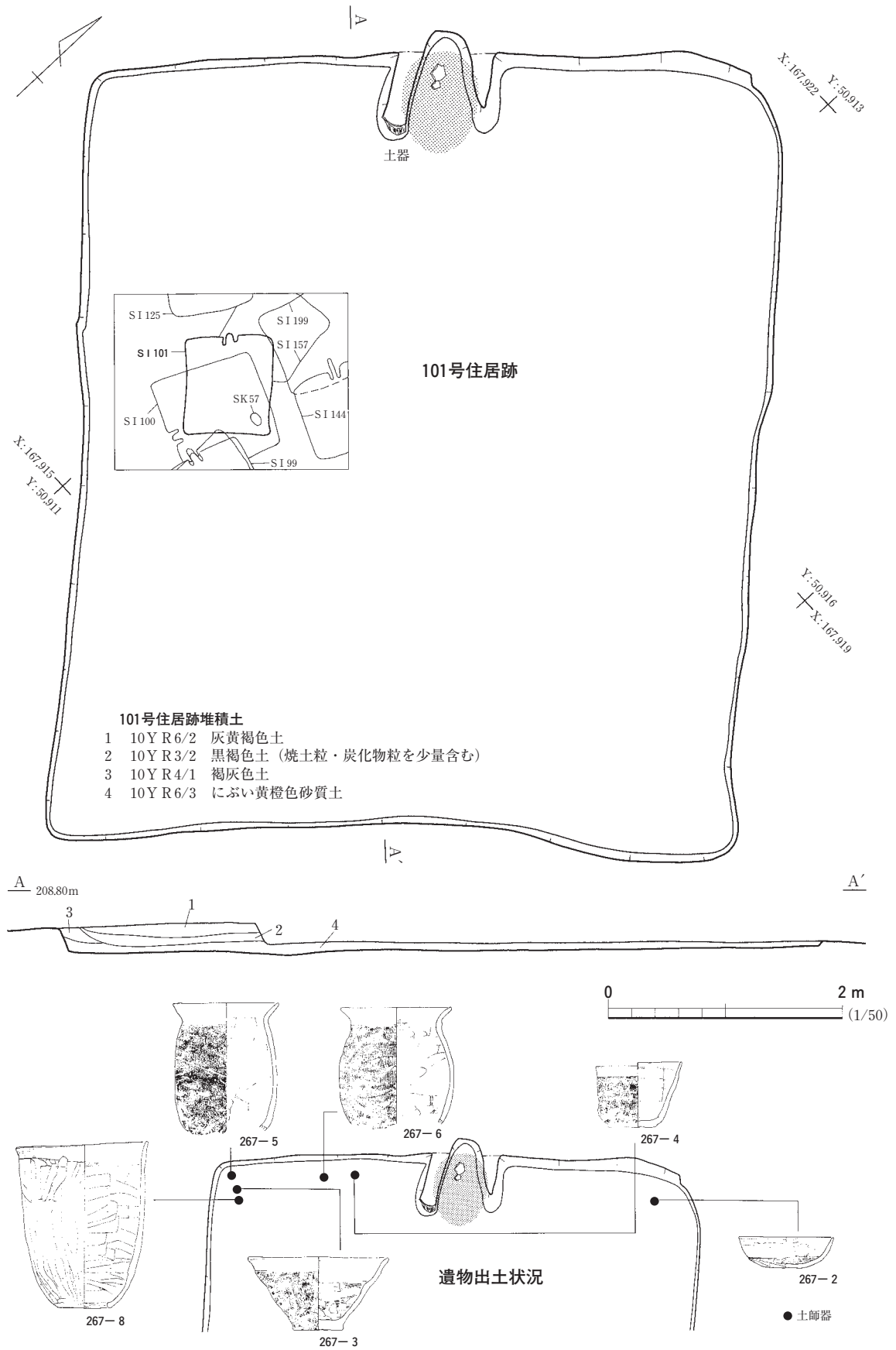


図265 101号住居跡

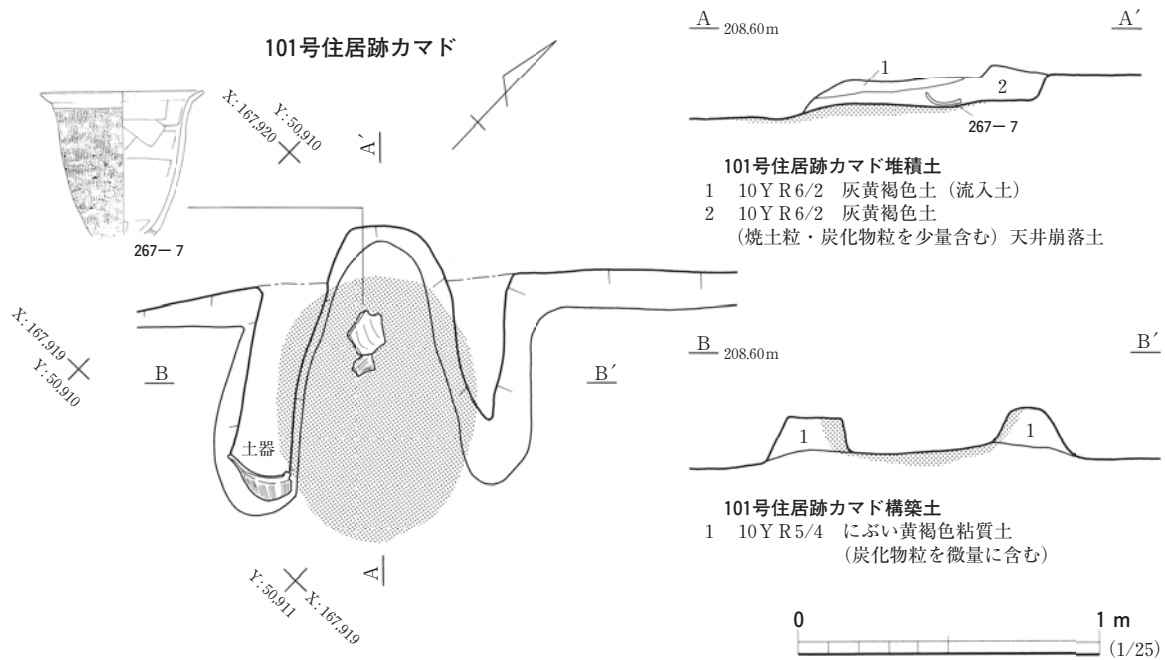


図266 101号住居跡カマド

また、内面にも、ヘラナデ前のハケメ調整痕が部分的に観察される。この土器は、剥離したような外面の荒れた様子から、煮炊具の可能性が高いと考えている。

図267-4は、土師器小型甕になる。器形の特徴は、口縁部～胴部が変化に乏しく、逆台形を呈している。また、土器全体には歪みが認められる。器面調整は、胴部外面がハケメ調整されており、煮炊痕跡を明瞭にとどめている。

図267-5～7は、土師器長胴甕になる。これらは、外面の器面調整がハケメに統一されている。5は、当該器種の典型的なもので、胴部最大径は、中位にある。6は、胴部径が口径を大きく上回っており、胴部の膨らみが強い。ただし、球胴甕に分類できるほど横幅は広くない。7は、長胴甕には違いないが、口縁部が大きく開き、胴部は張りを消失している。当該器種の変遷の中では、後出的な位置付けが与えられると思われる。

図267-8は、土師器甌になる。単孔式の大型品で、胴部は膨らみをもたない。口縁部は直立気味に立ち上がり、頸部がまったく括れない。胴部外面はナデ調整され、底部付近では、さらに縦位のヘラケズリ調整が施されている。

図268-2は、須恵器甕の口縁部片になる。端部は下に折り曲げられており、隆帯状に仕上げられている。外面に波状文がみられる。

図268-3は、須恵器杯身と考えている。しかし、破片のため、杯蓋の可能性もある。外面は、回転ヘラケズリ調整が施されている。

図268-1は、羽口になる。吸気部の破片で、ラップ状に開いている。外面に溶着滓が付着している。また、被熱痕が認められる。

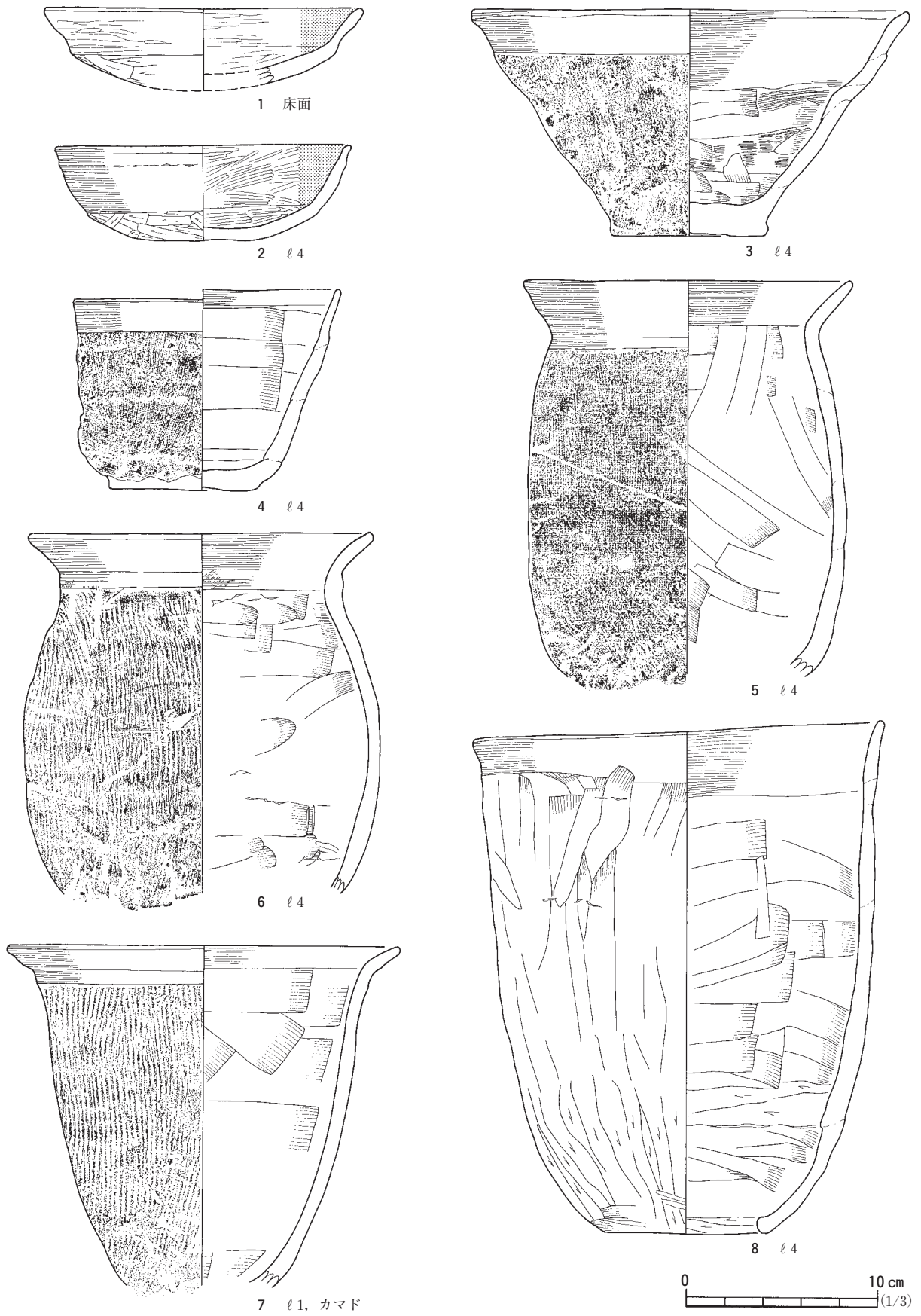


図267 101号住居跡出土遺物 (1)

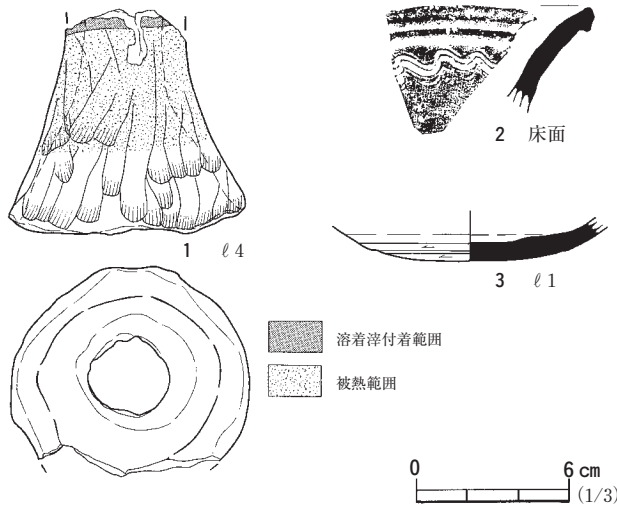


図268 101号住居跡出土遺物（2）

ま と め

本遺構は、自然堤防の中央に営まれた竪穴住居跡である。

南側の至近距離に、栗圀式期の集落区画溝 = 1・5号溝跡がある。

平面プランは、整った方形を呈しており、規模が大きい。

しかし、その割りには貯蔵穴や柱穴が検出されず、内部構造は簡素であった。

時期は、共伴遺物の特徴から、栗圀式期と考えている。（菅原）

102号住居跡 S I 102

遺 構（図269・270、写真258～261）

本遺構は、M22・23、N22・23グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれた場所は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部にあたと推定される。重複関係は、97号住居跡・56号土坑に切られ、144号住居跡を切っている。

堆積土は、3層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈している。このことから、遺構は、自然埋没したと判断している。床面は、貼床されず、掘形底面のL IIがそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み締まりは、認められなかった。検出面と床面の比高差は、15～18cmを測る。

本住居跡の平面プランは、東西に長い方形基調を呈している。規模は、東西6.2m、南北6.0mを測り、高木遺跡では大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に18°振れている。

カマドは、本遺跡には珍しく、南周壁で検出された。位置は、左に偏っている。煙道部は、ほとんど残っていなかった。燃焼部は、袖長70cm、焚口幅41cmの規模を有している。袖は、褐色砂質土で構築され、床面から15cmの高さが残っていた。底面はほとんど焼けていなかったため、範囲の図示はしていない。

このカマドの燃焼部前では、破碎された土師器甕が、床面に敷かれた状態で出土している（写真260）。

ピットは、8個検出された。このうち、P 1・3・4・6は、主柱穴と考えられる。住居跡隅を対角線上に結んだ位置に、規則正しく配置されており、本住居跡が4本柱構造であったことを示している。各柱穴の規模は、径30～42cmの円形を呈しており、床面から21～40cmの深さがある。また、芯々間の距離は、P 1 - P 3間が4.1m、P 3 - P 4間が3.7m、P 4 - P 6間が3.6m、P 1 - P 6

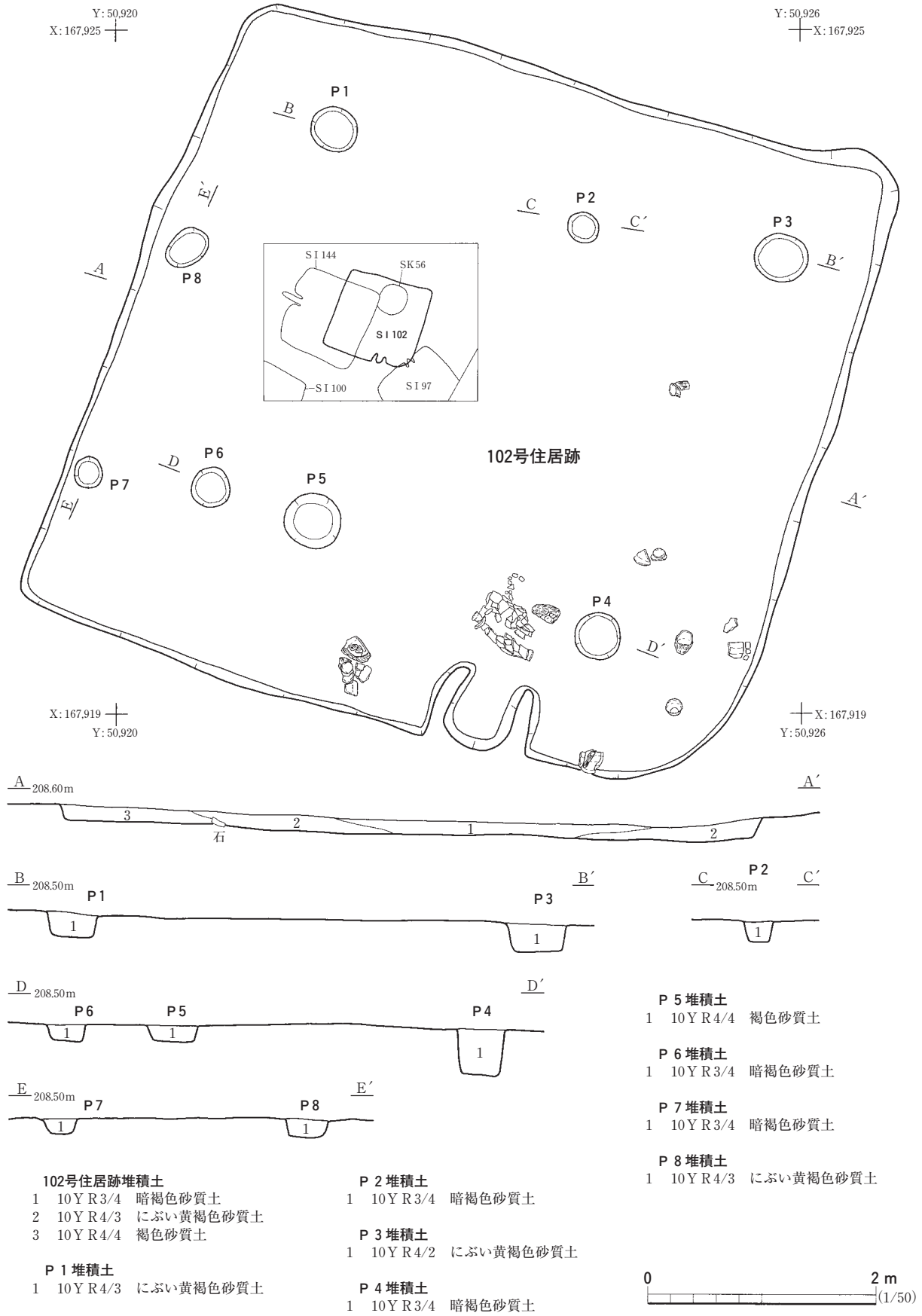


図269 102号住居跡

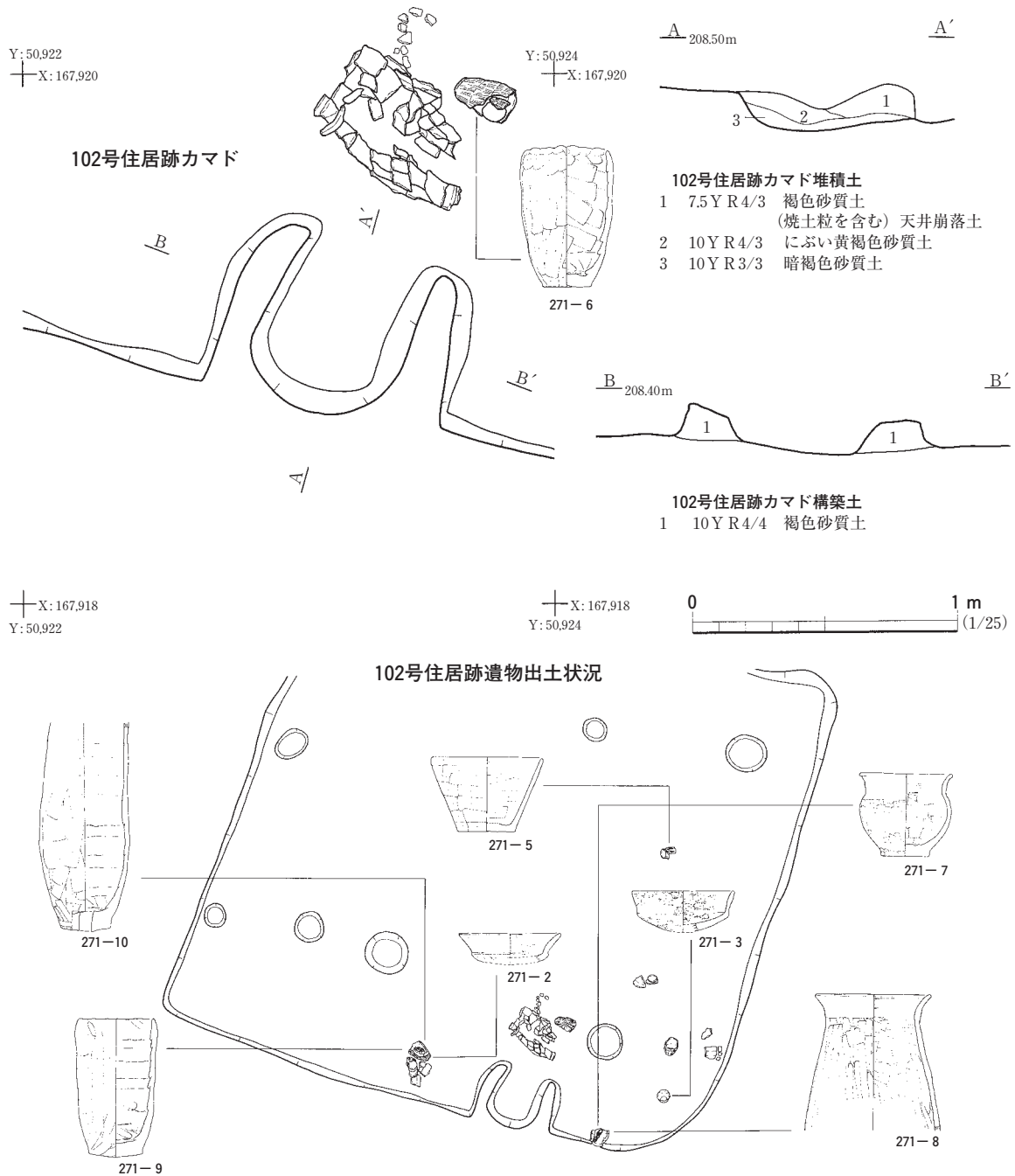


図270 102号住居跡カマド・遺物出土状況

間が3.3mを測る。

その他の4個は、補助柱穴であろうか。P7とP8は、2.0mの間隔をあけて西周壁ぎわに掘られている。入り口に関わる施設の可能性が想定される。また、P5はP6の東脇に、P2はP1とP3のほぼ中間にあり、それぞれ、支柱穴に付属する配置の在り方を示している。

遺物 (図271, 写真574~576)

遺物は、土師器片977点、土製品3点が出土した。図示遺物は、10点である。そのうち、図271-1を除く9点が、遺構に伴っている。それらの出土状況を観察すると、カマドには土器が残されてお

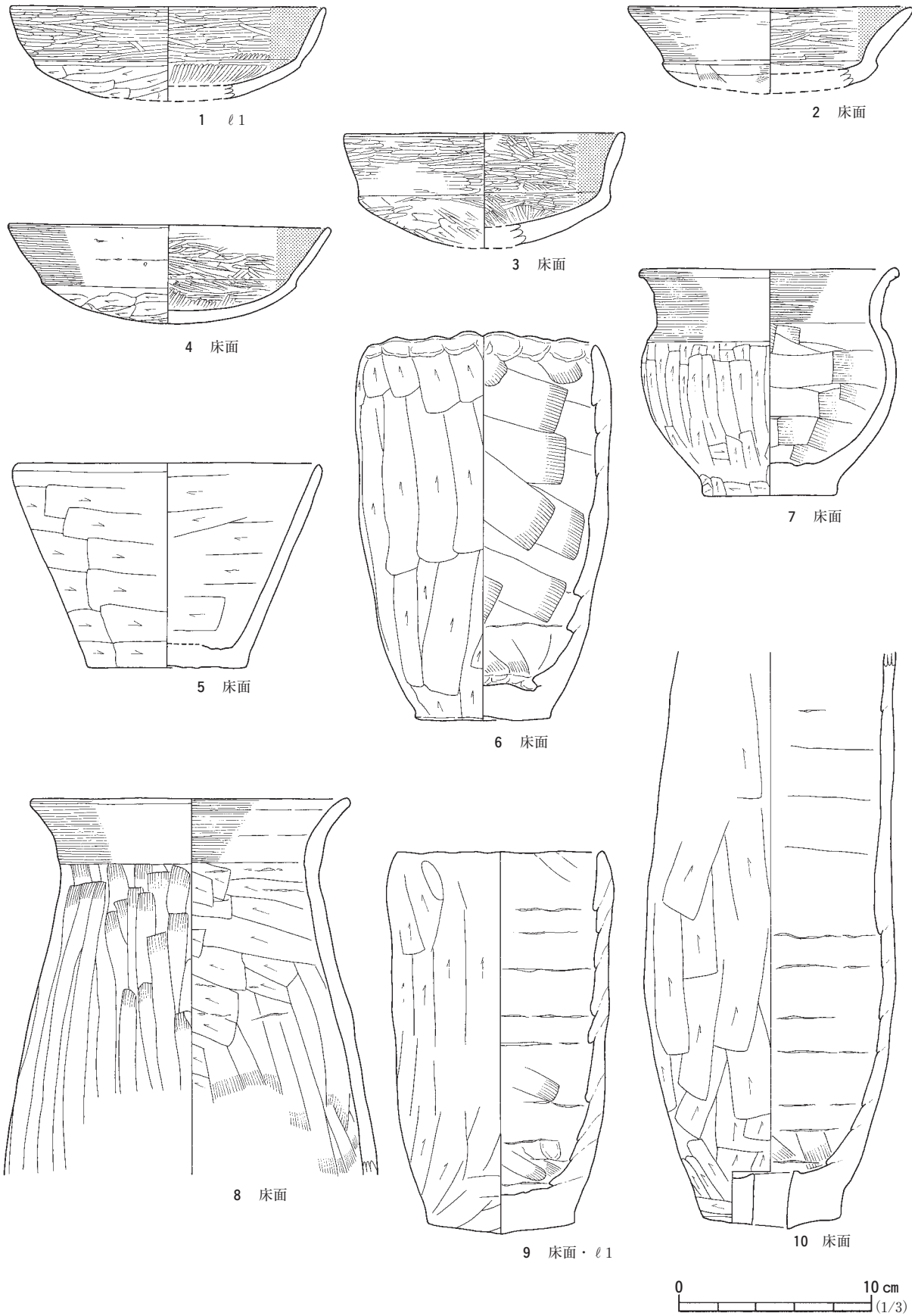


図271 102号住居跡出土遺物

らず、その周囲に、甕やカマド構築材の円筒状土製品が散らばっていた。このことから、住居廃絶時にカマドが壊されたと推定している。

図271-1～4は、有段丸底の土師器杯になる。4を除いて、外面はヘラミガキされている。1は、口縁部が内湾気味に立ち上がり、内面の口縁部下端に稜が認められる。2は、口縁部が強く外反しており、外面の口縁部下端は鋭い稜が形成されている。この土器は、カマド右脇床面に、2点の円筒状土製品と置き去りにされていた。3は、器高が高く、須恵器杯身模倣と考えられる。南東隅床面に正立していた。

図271-5・7は、土師器小甕になる。5は、特異な形態で器種分類に迷ったが、一応当該器種に含めておいた。ただ、器面の状態から、煮炊具でなかったことは確かである。底部内面を観察してみると、中央に表面の潰れが認められ、支脚の高さ調節のために、この土器が上に被せられていたと推定される。このような類例は、群馬県三ツ寺Ⅱ遺跡でも報告されている。7は球胴甕になる。外面は、ヘラケズリされているが、5より丁寧に行われている。頸部は直立し、口縁端部が強く外反する。

図271-8は、土師器長胴甕になる。下半を欠く。胴部中位に最大径があるとみられ、かなり細長い器形になると推定される。外面は、ナデ調整されている。

図271-6・9・10は、円筒状土製品になる。6と9は、当該品としては器高が低く、天井部構築材であったとは考えられない。数からみて、袖の補強材と考えるのが妥当であろうか。10は、天井部構築材と推定される。

ま と め

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。南側に、栗圀式期の集落区画溝＝1・5号溝跡がある。

平面プランは、整った方形を呈しており、規模が大きい。柱穴は4本構造で、さらに、補助柱穴が認められる。住居廃絶に際して、カマドは壊されていた。

時期は、共伴遺物の特徴から、栗圀式期と考えている。 (菅原)

103号住居跡 S I 103

遺 構 (図272～274, 写真262～267)

本遺構は調査区北部のN20-38・48・49・58・59グリットから検出された竪穴住居跡である。複数の住居跡と重複しているが、本住居跡は他の住居跡よりも深く掘り込まれていたため、比較的良好的な遺存状態であった。他の住居跡との関係は104号住居跡→103号住居跡→59号住居跡→58号住居跡となり、床面しか検出できなかった104号住居跡を掘り込んで造られている。

本住居跡は59号住居跡の床面から北周壁部分を確認し、それに対応する東・南周壁をLⅡ中から検出できたため竪穴住居跡として調査を行った。本住居跡の東側はLⅢを掘り込んでいたが、河川側の西周壁部分はLⅡが厚く堆積しており、住居跡内堆積土との判別が困難で西周壁は確認できな

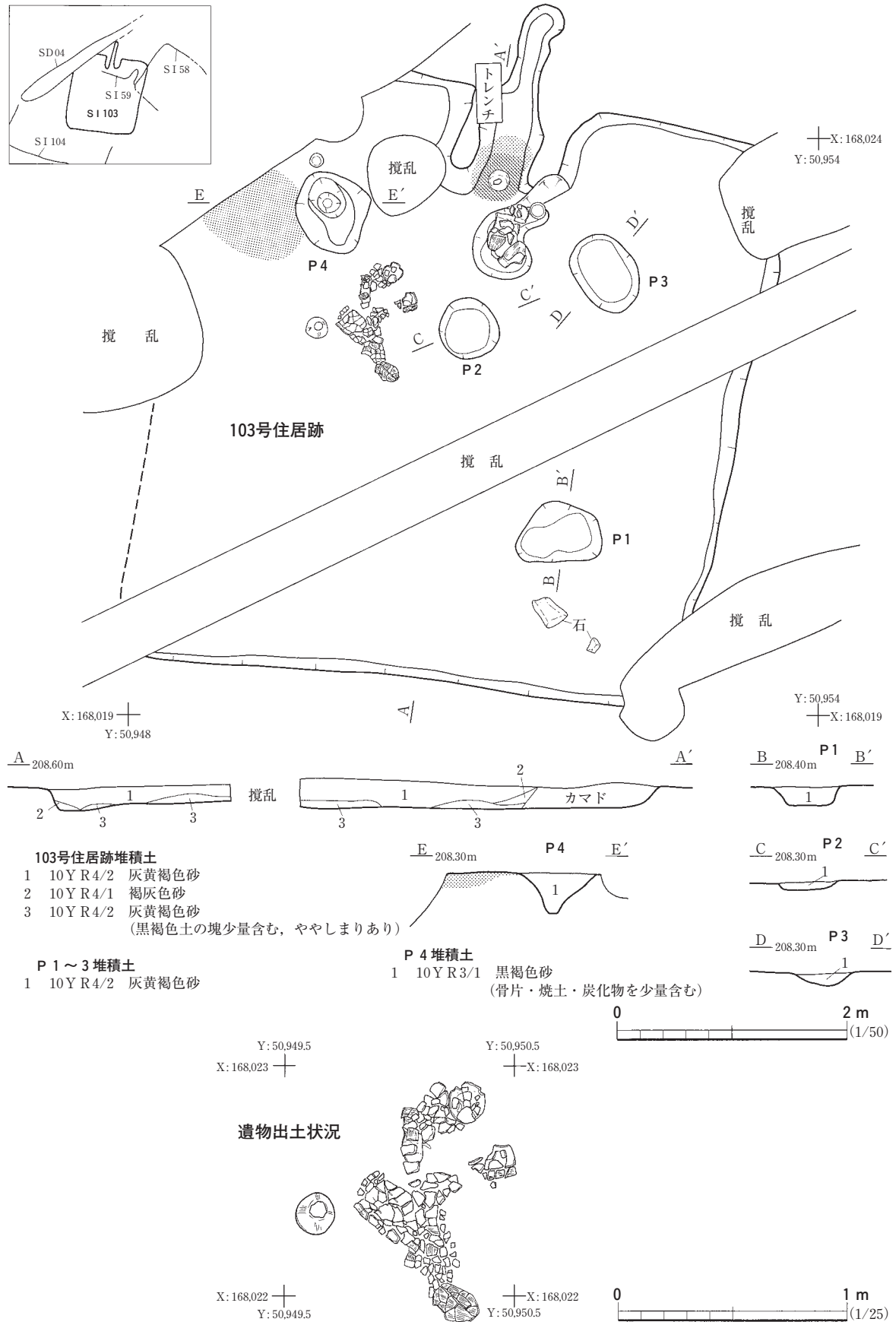


図272 103号住居跡

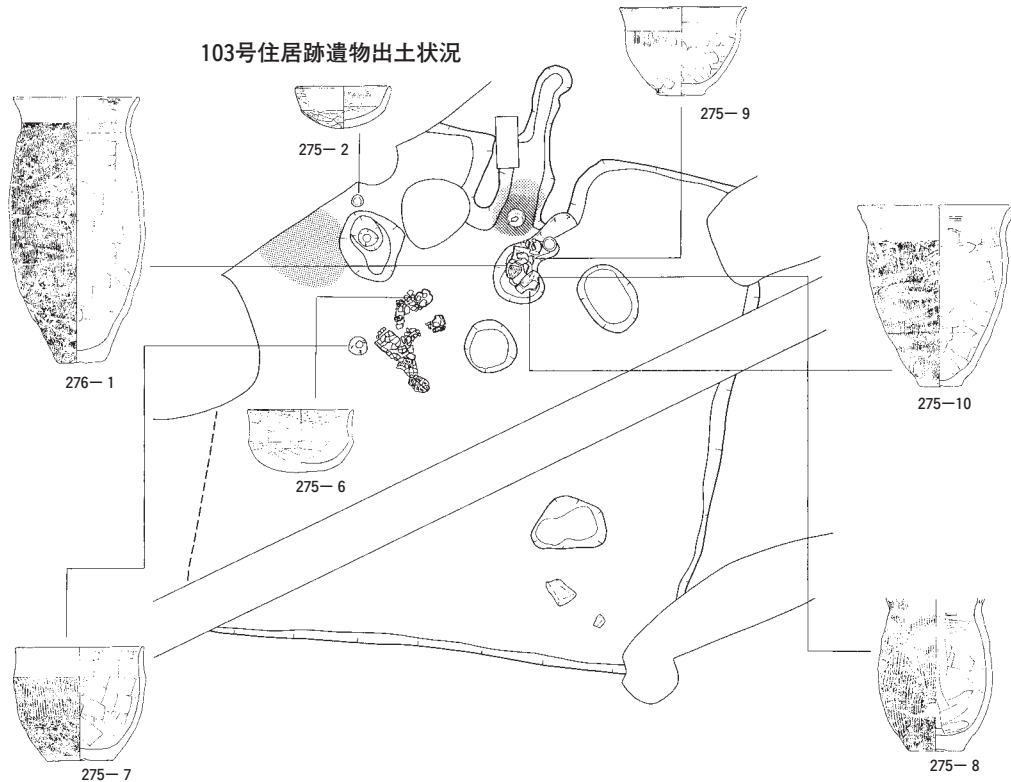


図273 103号住居跡遺物出土状況

かった。また、北西隅は4号溝跡で破壊されており、住居跡を分断するように水道管が通っている。

住居跡内堆積土は3層に分層でき、 l_1 の灰黄褐色砂が住居跡全体に堆積している。 l_3 は l_1 と同じ灰黄褐色砂であるが、黒褐色土塊を含んでおり、床面上に薄く堆積する。また l_2 の褐灰色砂は l_3 の堆積後にカマド方向から流れ込んでおり、住居跡内堆積土は自然堆積と考えられる。本住居跡の大きさは東周壁で約5.3m、南周壁の遺存する部分で約4.8mを測り、一辺が約5mの正方形の住居跡と考えられる。北周壁のほぼ中央にカマドがあり、主軸方位は $N 8^\circ E$ と、ほぼ真北に軸をあわせて造られている。住居跡の深さは約25cmほどで、周壁はほぼ直立する。床面は平坦で、貼床等は確認できなかった。

床面からは位置的に柱穴跡の可能性のある小ピット4基を検出したが、1～3号ピットはいずれも浅く、住居跡と同様の灰黄褐色砂が堆積している。一方、北西隅から検出した4号ピットは、床面からの深さが約40cmと他のピットより深く掘り込まれており、上端は大きく崩落しているが底部近くからは柱状の掘形が確認できた。堆積土は黒褐色砂の1層で、柱材は建て替えの際に抜き取られ、上端の崩落はその際に生じたとも推測できる。4号ピットは主柱穴のうちのひとつである可能性が高い。そのため、本住居跡は対角線に並ぶ4ないし5本の支柱穴を持ち、他の検出したピットも位置的には柱穴跡の可能性があると考えられる。また、4号ピットの西側からは焼土跡が確認されたが、本住居跡に関わるものかどうか判断できなかった。

カマドは北周壁に付設され、カマド袖は壁面から約1mほど住居内に張り出し、煙道は住居の外側に約80cmほど延びている。カマド内堆積土は焼土・炭化物塊を含んだ黒褐色砂で、煙道部内には

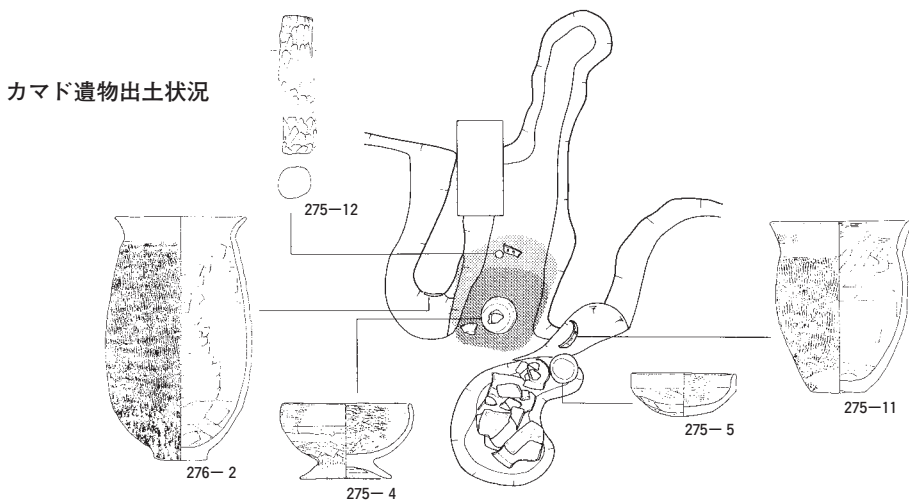
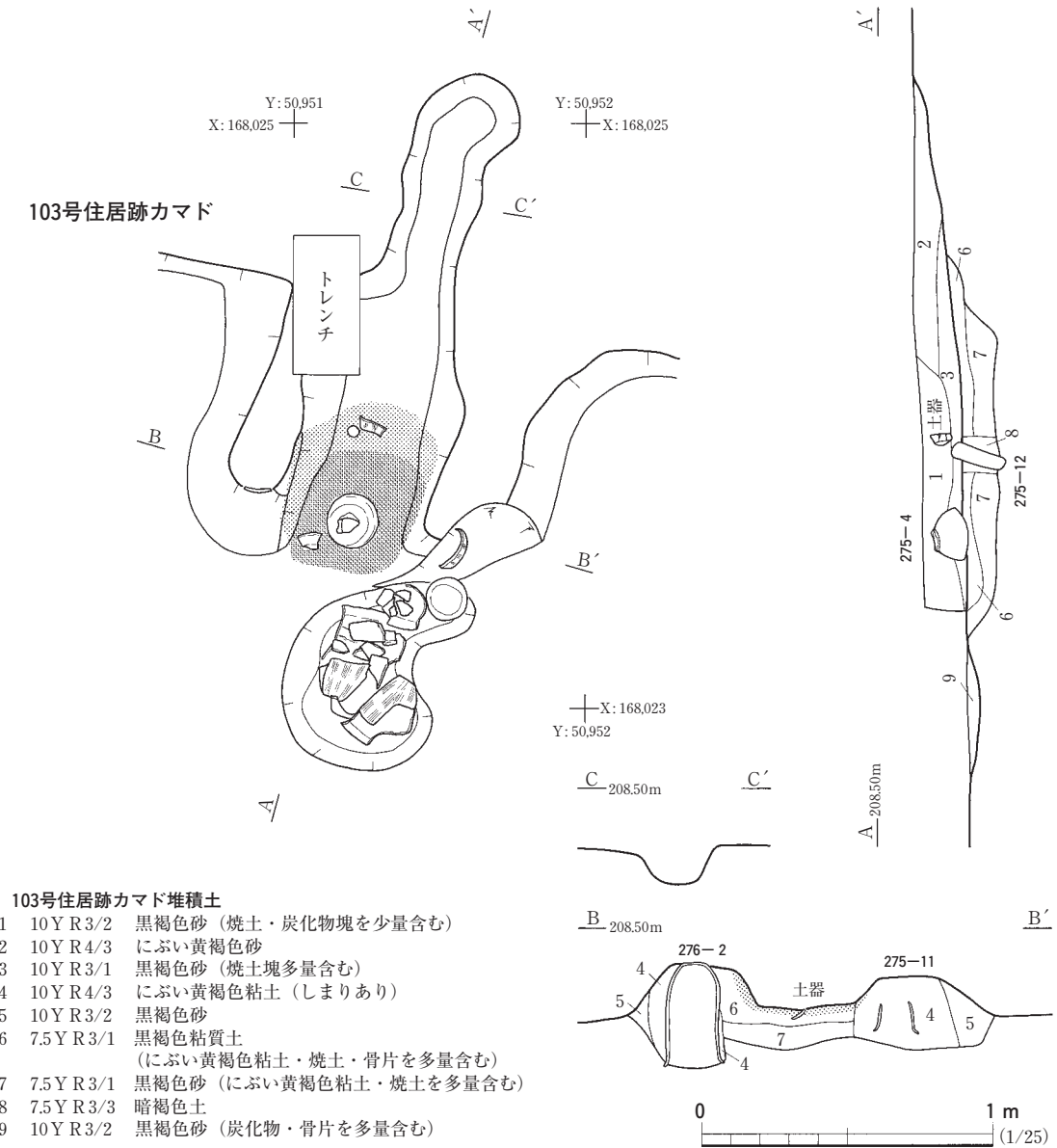


図274 103号住居跡カマド

にぶい黄褐色砂が堆積していた。カマドの燃焼部底面はほぼ平坦であるが、そこから煙道にかけて緩やかに傾斜しており、煙を屋外に出していたようである。燃焼部底面の中央には支脚が設置されており、その手前の焚口付近が著しく熱を受けて赤変していた。赤変した底面上からは図275-4に図示した高杯が伏せた状態で出土している。煙道は基本土層を掘り込んでそのまま使用されていたが、燃焼部は粘土質の構築土を選択して造られている。特にカマド袖は土師器の甕を芯材にして、しまりのある黄褐色の粘土で覆っている。また、用いられる構築土には焼土塊を含んでいる。

カマド燃焼部の外側には、床面を浅く掘り込んだ窪地状になるところがあり、そこからは煮炊具である甕を中心に数個体の土器が出土している。その窪んだところは焚口から少し東袖に寄った位置にあり、カマド近くに用具類を一括して収納していたものと考えている。

遺物 (図275・276, 写真576~578)

本住居跡からは多数の遺物が出土している。その位置により大きく2群に分けることができ、ひとつはカマドの焚口に隣接した窪んだところから出土したもので、もうひとつは2号ピットの西側の床面からまとまって出土したものである。

前者のカマド脇から出土した遺物のうち、図示したものは5点で、それぞれ平面図に出土状況を示している。図275-5は杯であったが、図275-8~10, 図276-1の4点は甕であり、どの甕も熱を受けた痕跡が認められ、カマドでの煮炊用の調理具とみられる。出土した甕は、いずれも器形や法量が異なり、大中小の大きさが揃っていることから、用途別に使用されていたことが推測される。

後者の出土遺物は2号ピットと4号ピットに挟まれた位置から、床面に貼り付いたような状態で出土している。そのうち図示した遺物は図275-6・7の2点である。7はほぼ完形の小型甕で口縁部を下にして伏せて出土しているが、他は床面に押しつけられてつぶされたような状態であった。そこからは甕類と思われる数個体分が細かい破片となって出土している。また、それらの遺物は床面上に部分的に僅かに堆積する黒褐色土に覆われていた。

他にも本住居跡からの出土遺物には、両カマド袖の芯材として土師器の甕が転用されているなど、出土状況の良好なものが多い。そのような遺物の中から図示したものは土師器6点と、土製品1点であり、以下にそれぞれの特徴を述べていくこととする。

図275-1~3, 5・6の5点は土師器の有段丸底の杯で、3・6を除いた3点が内面黒色処理されている。1・3は口縁部が大きく開くが、それ以外の3点は須恵器の模倣杯とみられる。2は口縁部が短く外傾し、5は短く直立するが、どちらも杯蓋の模倣とみられる。2は4号ピットの北側から出土している。6は大きく直立しており、杯身を模倣しているようである。

図275-4は高杯で、杯部は半球形で、脚部は短く「ハ」の字に開いている。この高杯はカマド燃焼部底面から出土したもので、廃絶時に故意に置かれたものと考えている。

図275-7~11, 図276-1・2は土師器の甕で、どの甕も体部外面はハケメ調整されるが、口縁部と体部との境が不明瞭なものが多い。甕の大きさは図275-7・9などの小型のものから、図276-1・2などの長胴のものまであり、図275-7を除き煮炊具として使用されていた痕跡が認められる。

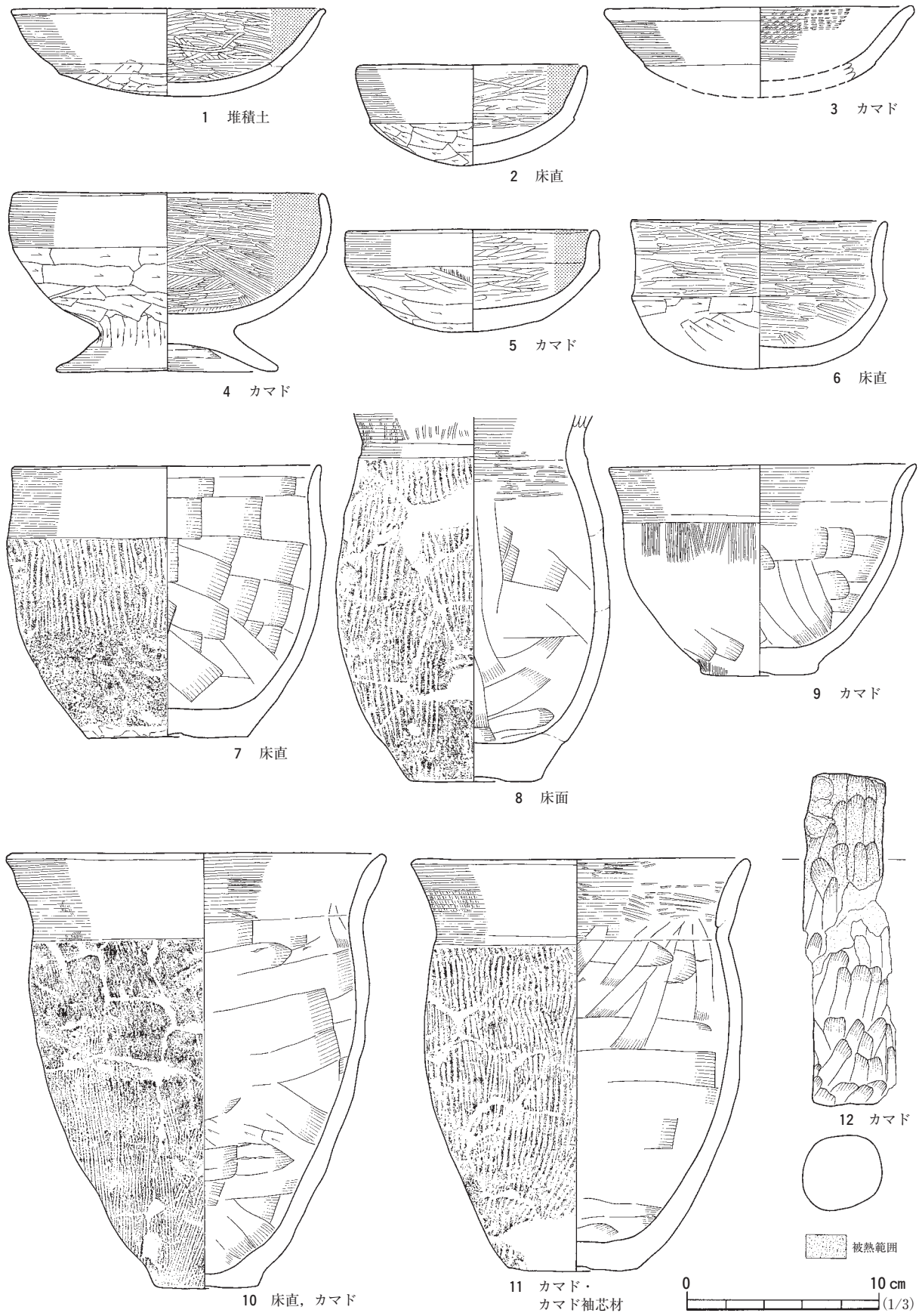


図275 103号住居跡出土遺物 (1)



図276 103号住居跡出土遺物（2）

底部は熱を受けて遺存状態がよくないが、周縁に粘土を貼るものが多い。

図275-12は土製品の支脚で、カマド内に設置されていたものである。3分の2が埋められていた状態で出土しており、熱を受けていた部分は脆くなっている。

ま と め

本住居跡は周囲の住居跡よりもLⅢを掘り込んで造られていたため遺存状態がよく、特にカマド周辺の保存状態が良好であった。本住居跡は本遺跡における一般的な住居跡の検出例とみられる。

本住居跡の時期は、出土遺物から栗圀式期の初めごろと考えられる。 (大波)

104号住居跡 S I 104

遺 構 (図277, 写真268・269)

本遺構は調査区北部のN20-47・56・57・58グリットから検出した竪穴住居跡で、本住居跡から約2mほど南には2号溝跡が巡っていて、本集落を区画している。

本住居跡は1辺約7.5mの大型の住居跡であるが、北側部分は103号住居跡と4号溝跡に破壊されており、遺存状態は極めて悪い。重複する他の遺構との関係は104号住居跡→103号住居跡→4号溝跡で、本住居跡が最も古い。

本住居跡はLⅡ中から確認できなかったが、LⅢを僅かに掘り込んでいたためにLⅢ上面から辛

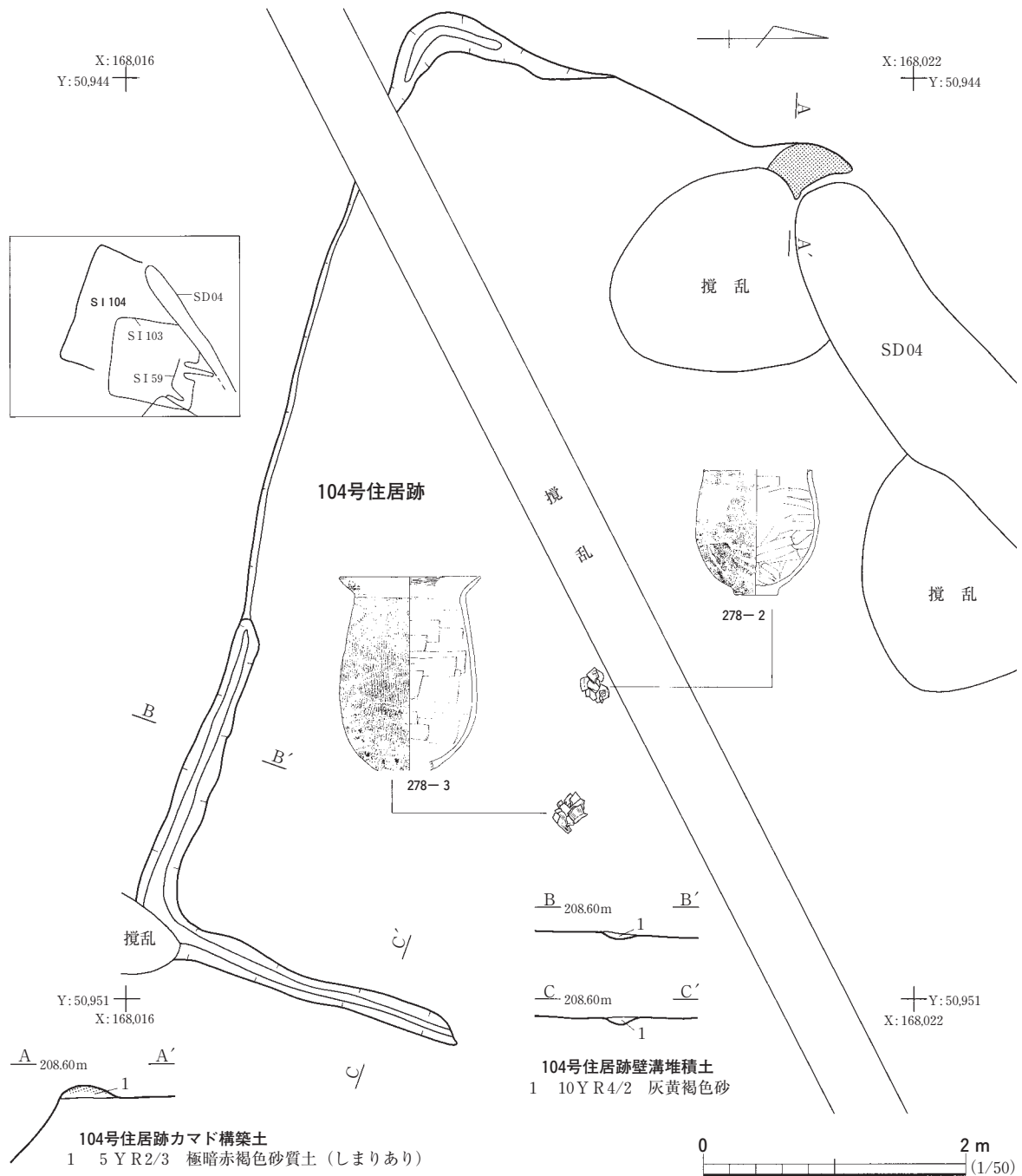


図277 104号住居跡

うじて検出することができた。壁の立ち上がりはほとんど残っておらず、住居跡内堆積土は床面上に薄く堆積する灰黄褐色砂が僅かながら確認できた程度である。住居跡の大きさは、遺存する南周壁で約7.5mを測る。床面はほぼ平坦で、LⅢをそのまま利用していたのか、貼床等は認められなかった。床面から柱穴などは確認できなかったが、南西隅と南東隅の壁際に沿うように壁溝を検出した。壁溝は幅が約20～30cm、深さが5cm前後で、住居跡内堆積土と同じ灰黄褐色砂が堆積していた。壁溝は南周壁の両隅で検出できたが、本来は一周していたかどうかは判断できなかった。壁溝から推測される住居跡の主軸方位はN15°Eである。

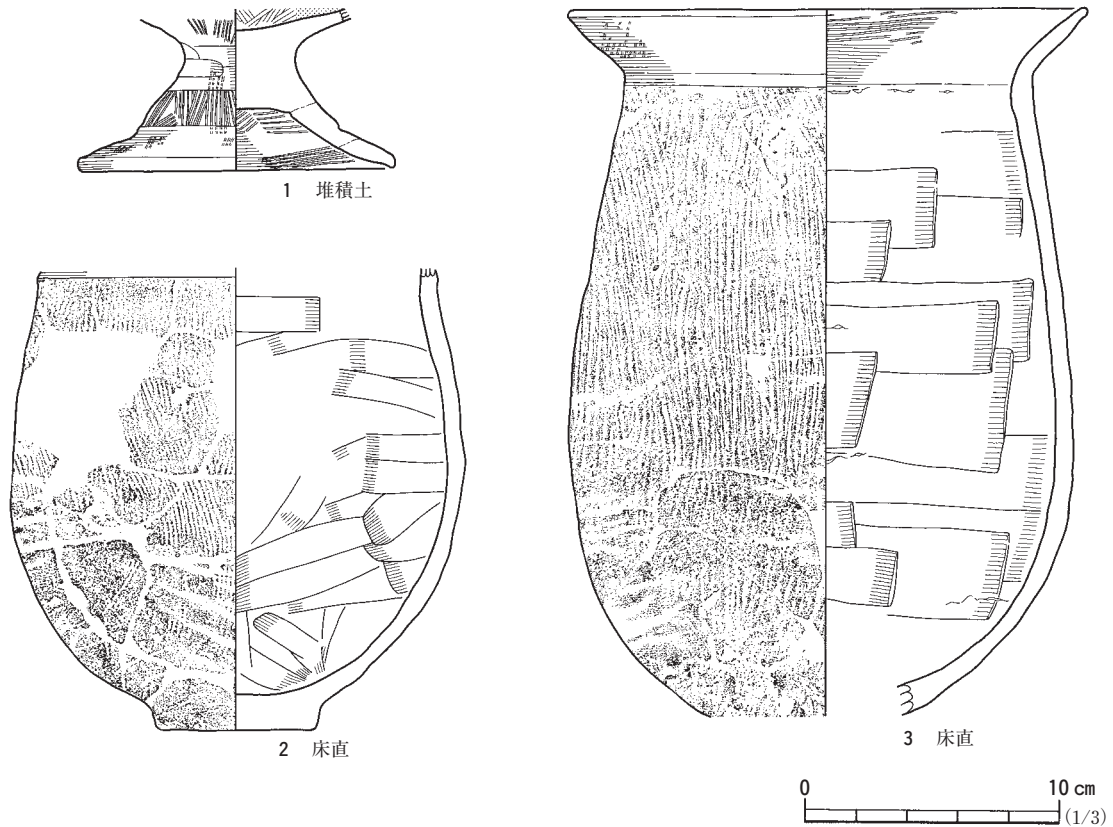


図278 104号住居跡出土遺物

他に住居跡に関わる施設としては、西周壁から張り出すように島状に残る焼土範囲を検出した。攪乱と4号溝跡に破壊されてほとんど残っていないが、南西隅から約3mのところのところに位置し、本住居跡のカマドの痕跡と判断した。

遺物 (図278, 写真578)

本住居跡から出土した遺物のうち、図示したものは土師器3点である。

図278-1は、高杯の脚部である。杯部との接合部分近くまでは中空とはならないが、裾が大きく「ハ」の字状に開き、外面のハケメ調整と裾部のヨコナデの境には明瞭な段が認められる。杯部はほとんど残っていないが、内面黒色処理されている。

図278-2・3は甕で、住居跡の床面から僅かに浮いたところから複数の破片となった状態で、約1mほど離れて同じように出土した。3がやや小さいが、器形は最大径が胴部下半にある下方が膨らんだ形をしており、体部外面はハケメ調整である。どちらも煮炊具として使用されていたらしく、2は熱を受けて表面が剥離し、3は煮こぼしたような跡が認められる。

まとめ

本住居跡の北側に重複する103号住居跡は、出土遺物から栗圀式初期のものと考えられる。本住居跡から出土した遺物は少ないが、103号住居跡のカマドの芯材には、本住居跡から出土したような器形の土師器甕が転用されていた。そのため103号住居跡は本住居跡が廃絶して間もなく築かれており、住居として機能していた時期に大きな隔たりは無かったものと推測する。 (大波)

105号住居跡 S I 105

遺 構 (図279, 写真270)

本遺構は、N22グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれた場所は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部にあたる。27・129・164号住居跡、29号土坑と重複関係を有している。27号住居跡・29号土坑より古く、129・164号住居跡より新しい。

堆積土は、2層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈している。このことから、遺構は、自然埋没したと判断している。ℓ1には、微量の炭化物が含まれていた。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み締まりは、認められなかった。検出

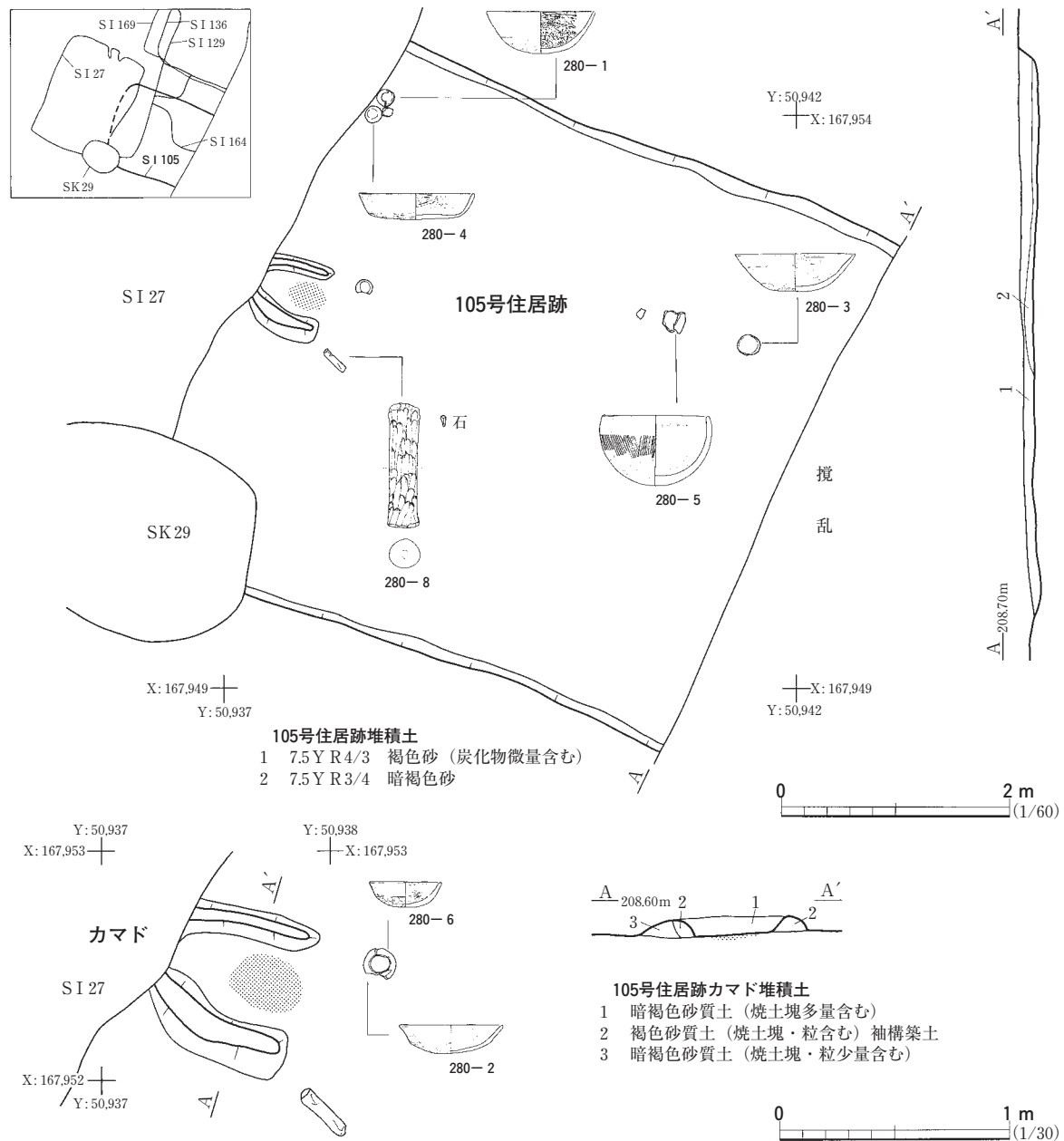


図279 105号住居跡

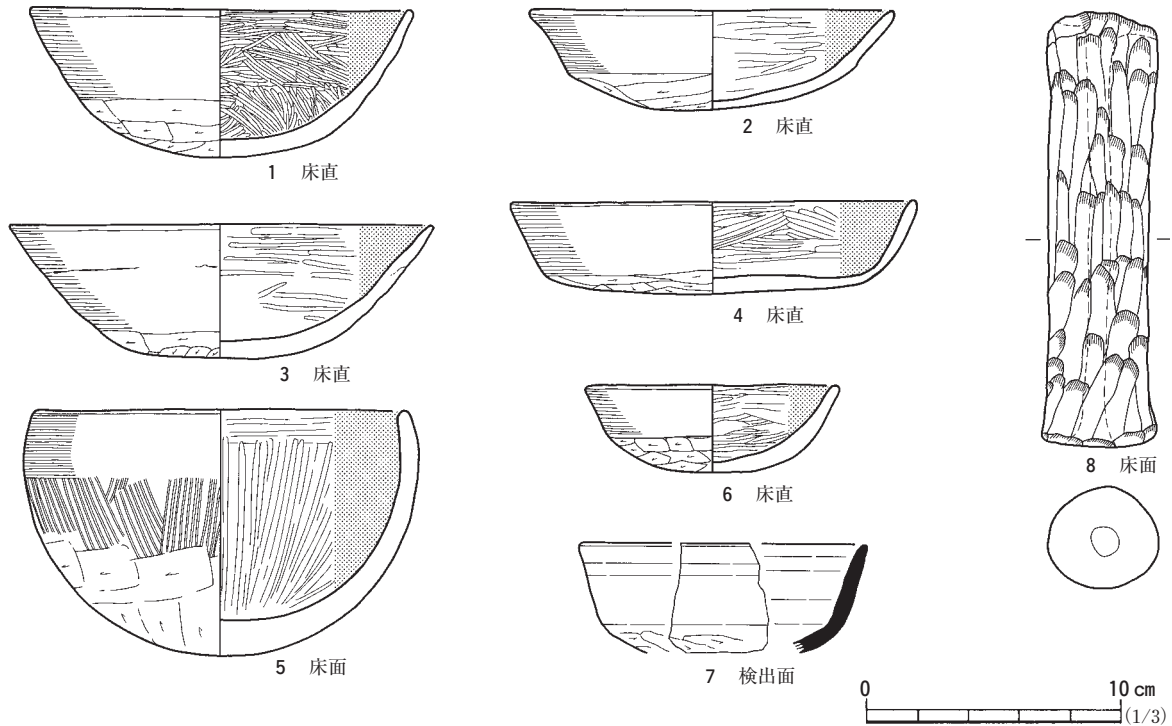


図280 105号住居跡出土遺物

面と床面の比高差は、9～18cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。規模は、東西5.0m以上、南北4.9m以上を測り、中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に23°振れている。

カマドは、西周壁の中央に設置されている。燃焼部は、焚口幅35cm、袖の遺存長57cmの規模を有している。袖は、床面から11cmの高さが残っていた。

構築土には、焼土が含まれている。底面は焼土化しており、中央で厚さ3cmを測った。煙道部は、残っていない。

遺物 (図280, 写真579)

遺物は、土師器片190点、須恵器片1点、土製品1点が出土した。図示遺物は8点あり、このうちの7点が遺構に共伴している。

図280-1～6は、土師器杯になる。1～3・6は、口縁部の大きく開いた器形を呈しており、2では、外面に段が形成されている。6は小型品で、1との相似形をなす。4は、皿状の器形を呈している。底部は平底風で、口縁部の立ち上がり角度が大きい。5は、金属器碗を意識した器形である。半球形を呈しており、口縁部が内傾する。

図280-7は、須恵器杯の破片になる。飛鳥・藤原宮分類の杯Gに該当すると思われる。丸底で、外面に手持ちヘラケズリ調整が施されている。

図280-8は、土製支脚になる。出土状況は、カマド左袖前の床面に転がっていた。このことは、住居廃絶時にカマドが壊されたことを示している。また、中心に孔が開いており、棒に粘土を巻いて焼成したことがうかがえる。

ま と め

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。支脚の出土状況から、住居廃絶時にカマドは壊されたと推定される。

時期は、共伴遺物の特徴から、栗圀式期と考えている。 (菅原)

106号住居跡 S I 106

遺 構 (図281・282, 写真271~273)

本遺構は、N21グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。

営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。周囲には、数多くの住居跡が分布している。

重複関係は、24・49号住居跡、17号土坑に切られ、142号住居跡を切っている。この重複遺構のうち、17号土坑としたものは、埋没した本住居跡の竪穴中央に土器類を投棄した窪みである。ここからは、本住居跡の下限を示す栗圀式の土師器が出土している。

堆積土は2層に分層された。どちらもにぶい黄橙色砂質土である。それらの断面の様子から、遺構は、自然埋没したと判断している。

床面は、貼床されず、下層住居跡の堆積土上面がそのまま平坦に整えられている。カマド周辺には、踏み締まりが認められた。検出面と床面の比高差は、15~18cmを測る。

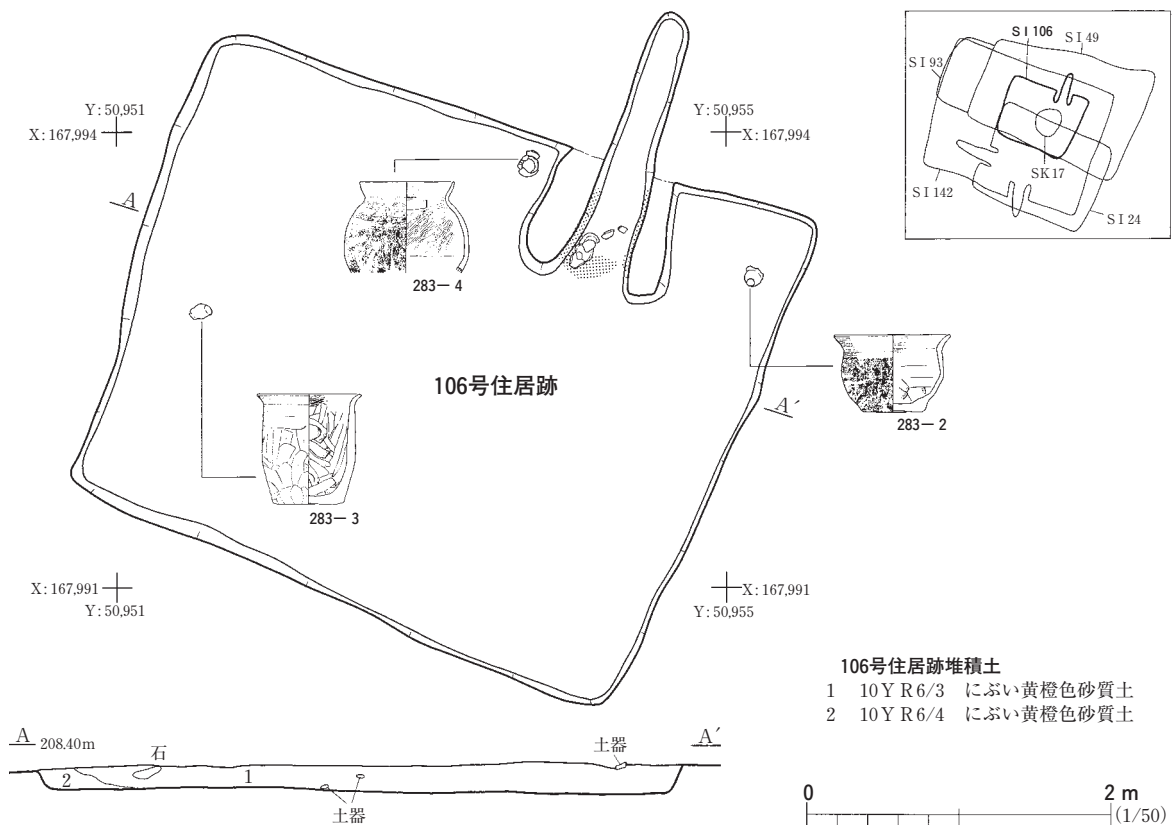


図281 106号住居跡

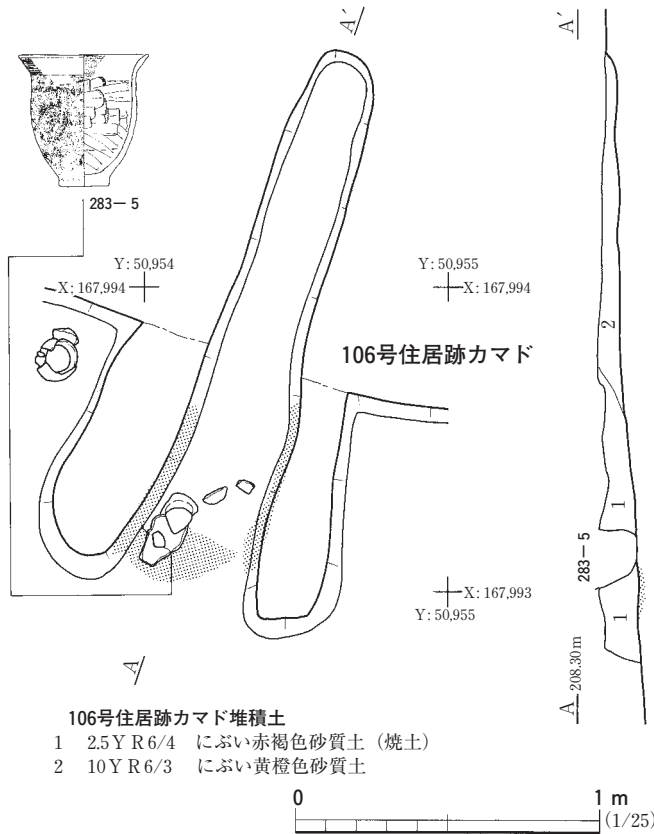


図282 106号住居跡カマド

ピット類は検出されていない。

遺物 (図283, 写真579・580)

遺物は、土師器片320点、土製品1点が出土した。図示遺物は6点ある。このうち、図283-1・6を除く4点が遺構に伴っている。

図283-1は、有段丸底の土師器杯になる。口縁部が内湾しており、器高が低い。栗囲式の後出的な要素を備えている。

2・3・5は、煮炊用の土師器小甕になる。2は、口縁部が開き、押し潰されたように胴部が短いのが特徴である。外面はハケメ調整されている。出土状況は、北東隅床面に逆さになっていた。5は、それを縦に伸ばした器形を呈している。胴部外面はハケメ調整で、この点も2と一致する。3は口縁部が短く、胴部下半の窄まらない器形である。胴部外面は、ヘラケズリ調整されており、他の2点とは違っている。

4は、小形の土師器球胴甕になる。頸部が外傾し、口縁部が直立しているので、内側に巻き込んだような状態になっている。外面はハケメ調整が施されており、内面は、ヘラミガキ調整されている。

図283-6は、土製支脚である。分銅形を呈している。

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。東西に長い平面プランを有して

本住居跡の平面プランは、東西に長い長方形基調を呈している。ただ、向かい合う周壁どうしの長さが一致せず、歪んでいる。

規模は、東西4.1m、南北3.3mで、小型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に19°振れている。カマドは、北周壁右寄りで検出された。遺存状態は比較的良好である。煙道部は、周壁から1.1mの長さを有していた。燃烧部は、灰褐色砂質土主体に構築されており、袖長85cm、焚口幅40cmを測る。内壁面・底面は、3cmの厚さで焼土化していた。

小型の土師器甕が、燃烧部底面から出土している(図283-5)。煮炊に使用されたものと推定される。

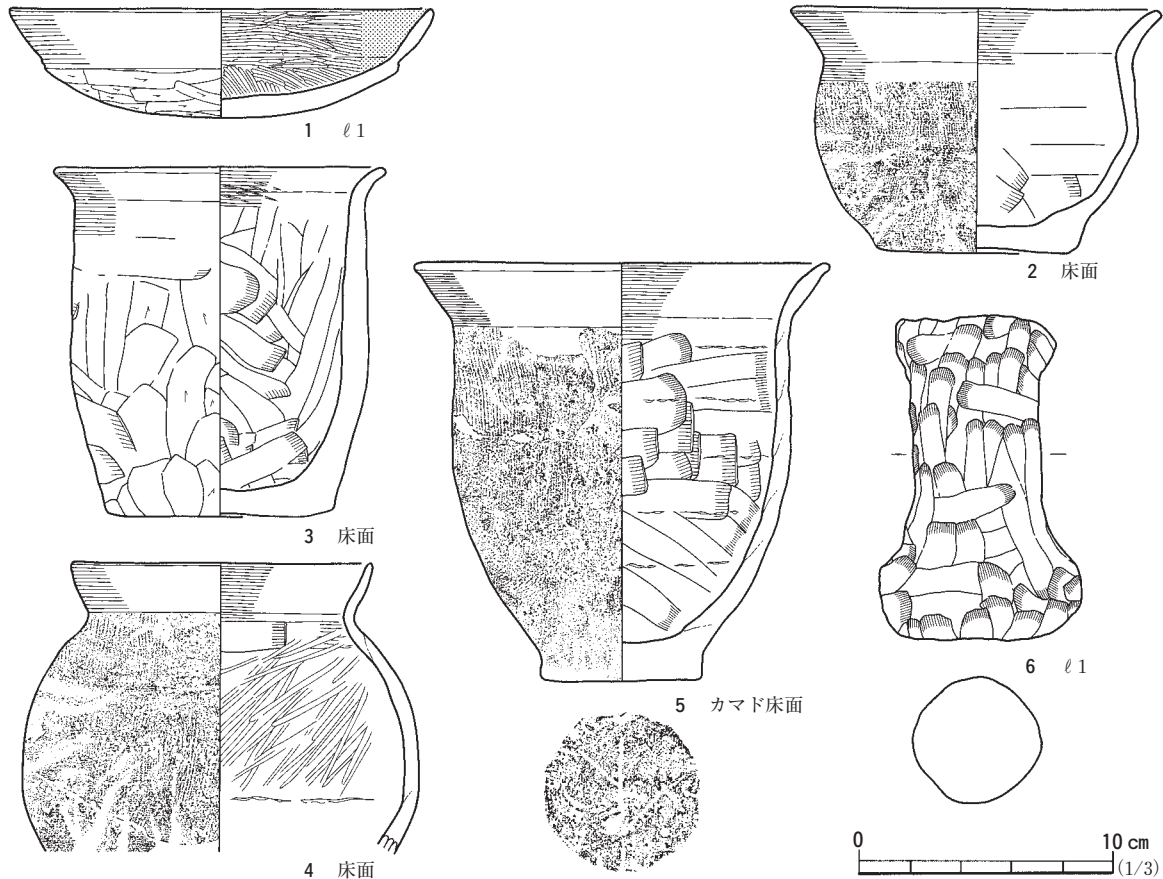


図283 106号住居跡出土遺物

いる。カマドは北周壁に設置されていた。

時期は、共伴遺物の特徴から、栗圀式期と考えている。

(菅原)

107号住居跡 S I 107

遺 構 (図284, 写真274)

本遺構は、N22グリッドで検出された堅穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。床面積の半分は調査区外に広がっている。重複関係は、214号住居跡に切られ、114号住居跡を切っている。また、北周壁は攪乱で壊され、残っていない。

堆積土は、3層に分層された。土層断面図が示すように、レンズ状堆積をしている。このことから、遺構は、自然埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形上面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み締まりは認められなかった。床面と検出面との比高差は、20cm前後を測る。

本住居跡のプランは、方形基調を呈している。規模は東西3.1m以上、南北4.9m以上を測る。誤差を含むと思われるが、検出範囲で計測すると、住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に43°振れている。

カマドは、西周壁で検出された。攪乱の法面で確認しただけで、精査は行っていない。

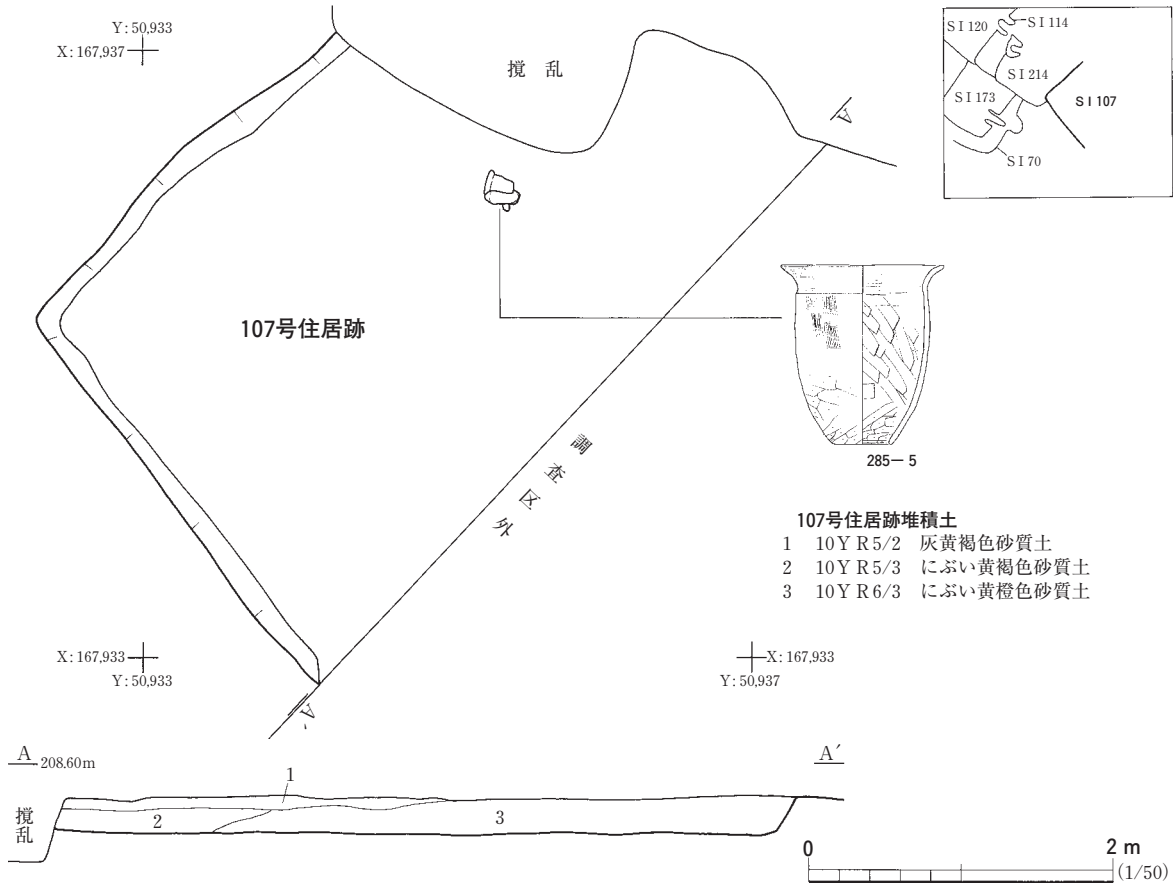


図284 107号住居跡

遺物 (図285, 写真581・582)

遺物は、土師器片399点、須恵器片3点、石製品1点が出土した。図示遺物は、7点ある。そのうち、遺構に伴うのは、1点しかない。

図285-1～3は、有段丸底の土師器杯になる。1は平底風の底部をなし、皿に近い器形を呈している。口縁部は、内湾気味に立ち上がる。それに対して、2は口縁部が強く外反しており、器高も高く、1とは印象が随分異なっている。また、内面は、ナデ調整だけで仕上げられている。3も同様な仕方で、内面処理された杯である。口縁部が直線的に外傾する点で、2とは違っている。

4は、大型の土師器甕になる。底部を欠いているが、器高は30cmを超える。口縁部が短く外反するのが特徴で、胴部中位に膨らみをもつ。外面は、ハケメ調整されている。

5は、無底式の土師器甕になる。遺構に伴う唯一の相伴資料である。口縁部が外反し、胴部下半が窄まる器形を呈している。

図285-6は、丸底の須恵器底部片になる。小壺であろうか。

図285-7は、石製紡錘車の未成品になる。ほぼ形は出来上がっているが、研磨されておらず、穿孔もなされていない。

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面に営まれた竪穴住居跡である。床面積の半分は調査区外にあり、詳

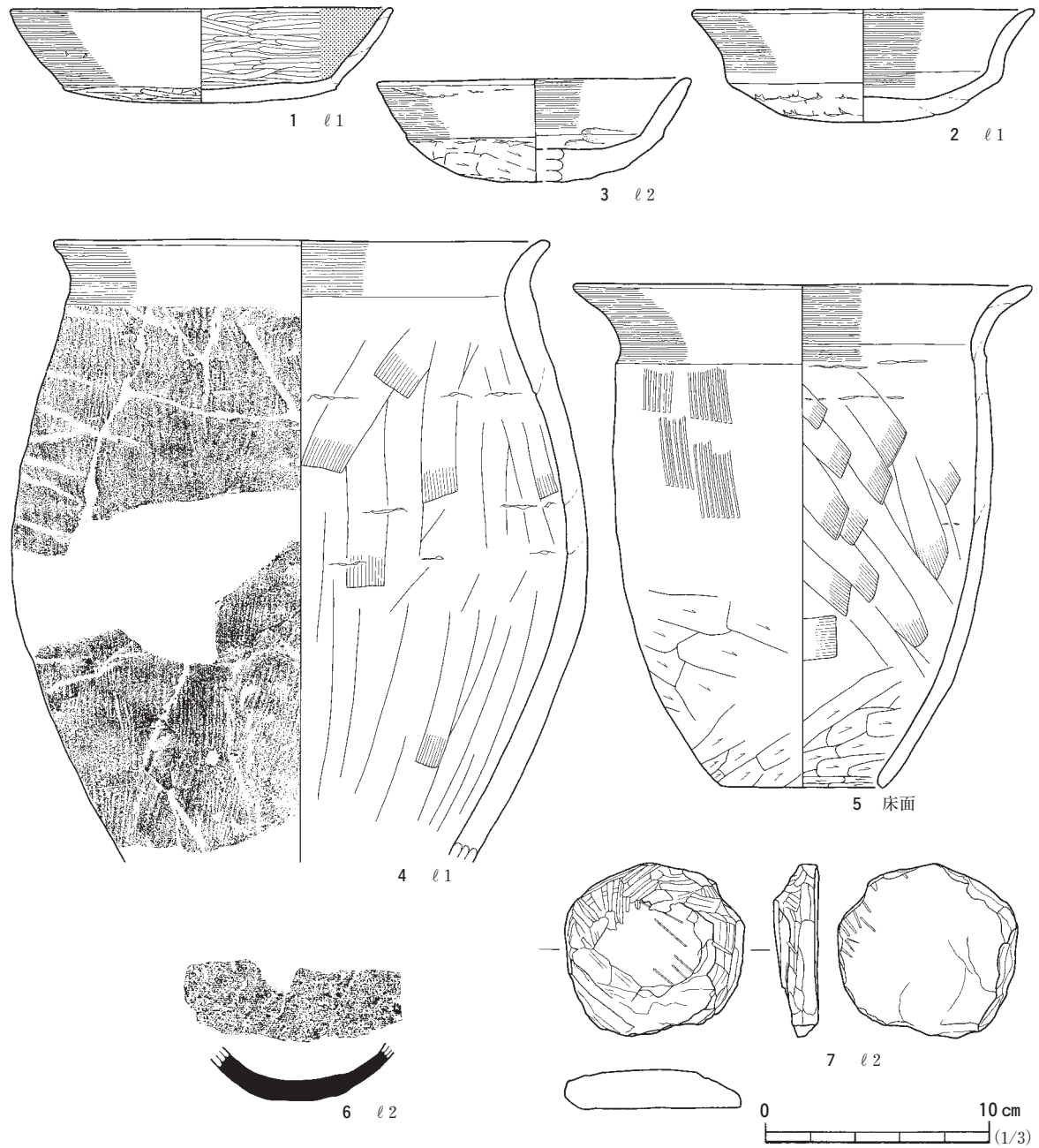


図285 107号住居跡出土遺物

細を知ることができなかった。

時期は、共伴した土師器甑の特徴から、栗圀式期と捉えておく。

(菅原)

108号住居跡 S I 108

遺 構 (図286・287, 写真275~277)

本遺構は、N22グリッドで検出された竪穴住居跡である。

営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。床面積の東半分は、上部削平のため、消失していた。このため、全体の規模や平面形については知ることができなかった。重複関係は、160

号住居跡を切っている。

堆積土は、4層に分層された。土層断面図が示すように、典型的なレンズ状堆積である。このことから、遺構は自然埋没したと考えている。

床面は、貼床されず、掘形底面が平坦に整えられている。カマド前面には、踏み締まりが認められた。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西3.5m以上、南北6.2mを測り、大型である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に35°振れている。

カマドは、西周壁で検出された。位置は、少し左に偏っており、遺存状態は良好であった。煙道部は、周壁から長さ150cmを測る。燃烧部は、袖長91cm、焚口幅49cmを測り、袖は、床面から32cmの高さが残っていた。燃烧部は、焼土化が著しく、底面中央で厚さ8cmを測った。

本住居跡のカマドでは、10個体の土師器甕が出土している。それらの出土状態から、次のようなことが考えられる。

まず、袖先端は、倒立させた甕で補強が行われていたと推定される。それも、左袖で3個（図288-5・図289-1・図290-2）、右袖で2個の甕（図288-3・図289-2）が使用され、異例な入念さで構築されたのがうかがえる。

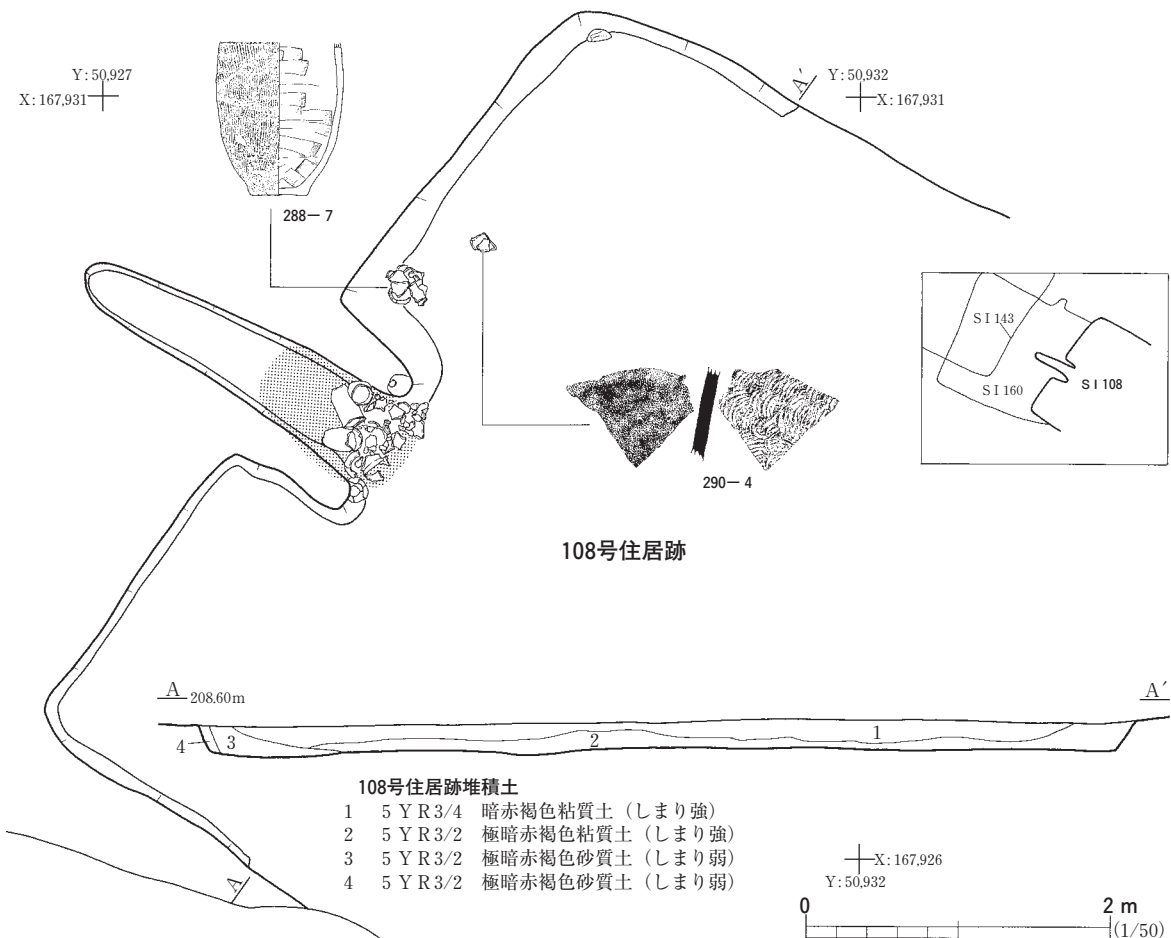


図286 108号住居跡

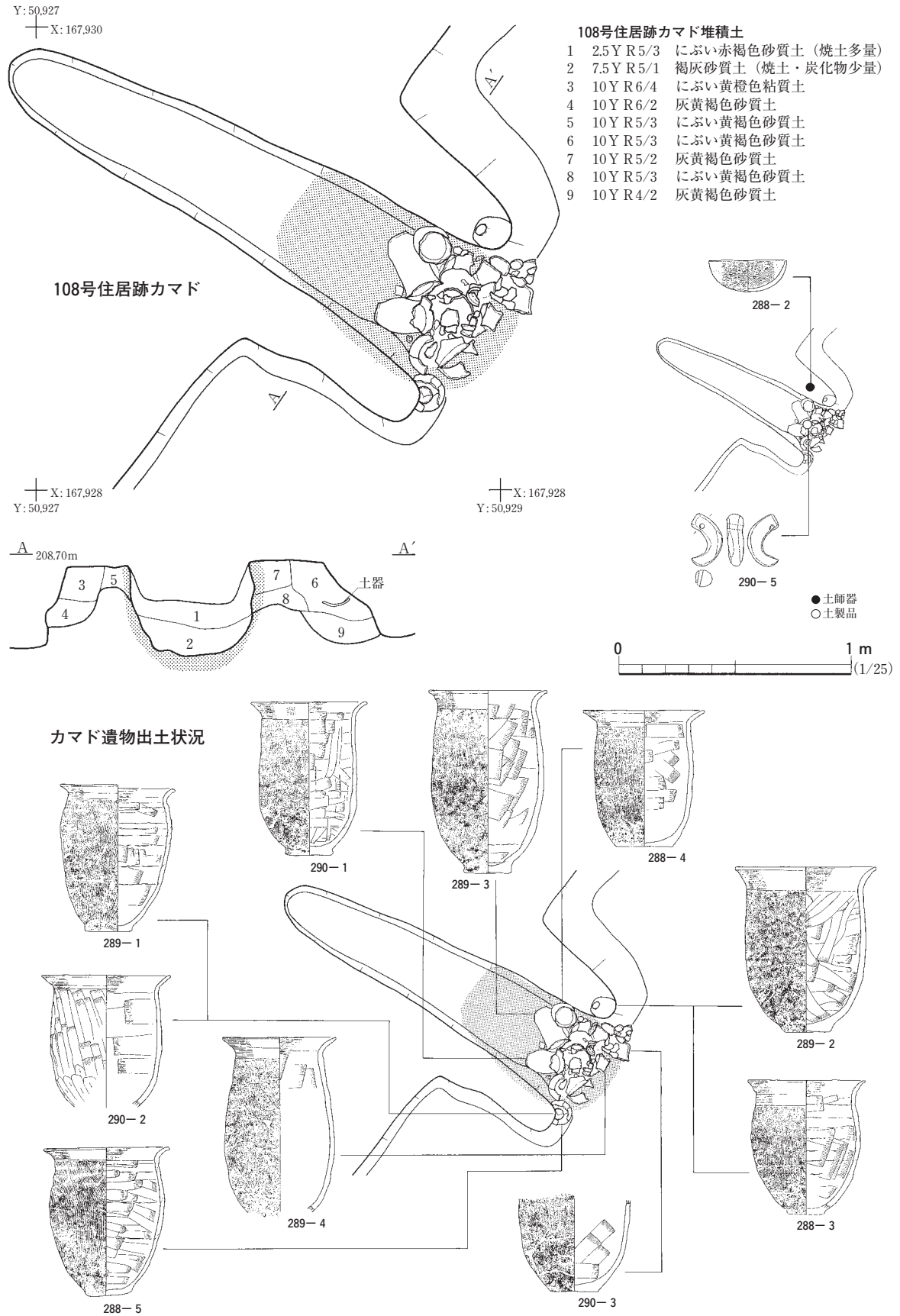


図287 108号住居跡カマド

さらに、天井部にも、甕を横に連結して補強が図られたようである。ただし、これについては、破片のため、個体の特定が難しい。懸け口に固定された甕は、3つである（図288-4・図289-3・図290-1）。中央の甕は、両脇の2つより少し奥に据えられていたようで、該当する図289-3の底部位置がそのことを示している。

この他に、カマド儀礼に関わる所見も得られている。右袖構築土に、金属器鉢を模倣した土師器杯が埋め込まれていた（図288-2）。また、天井部補強材の甕を取り去ったところ、燃焼部底面から、大型の土製勾玉が出土した（図290-5）。前者はカマド構築時、後者は廃棄時に伴うものである。

遺物（図288～290，写真581～584）

遺物は、土師器片385点、須恵器片1点、土製品1点が出土した。図示遺物は、16点を数える。このうち14点が遺構に共伴している。平面分布は、カマド燃焼部に集中しており、12点がここから出土した。

図288-1・2は、土師器杯になる。1は有段丸底杯であるが、口縁部下端の段が痕跡にとどまり、器形全体に丸みがある。したがって、当該器種としては後出的な様相を呈していると思なされる。2は、金属器鉢を模倣したものである。器形は半球形をなし、内外面がヘラミガキ・黒色処理されている。

図288-3～7，図289，図290-1～3は、中～大型の土師器甕になる。図290-2を除くと、胴部外面はハケメ調整で統一されている。しかも、その中には同一器形で法量分化し、明らかに同じ工人による製品と思なされるものが含まれている。まず、図288-3・5，図289-1が、1つに括れると思われる。胴部上位に膨らみがあって、口縁部が外反するタイプである。次に、図288-4，図289-2，図290-1・2が1つに括れると思われる。胴部上半に膨らみが無く、下半が底部に向かって窄まるタイプである。さらに、図289-3・4も、類似した器形を呈している。ただ、これについては、頸部の括れに違いが認められる。

図290-4は、須恵器甕の胴部片になる。外面に平行タタキメ、内面に同心円文アテメが観察される。焼成は、良好である。

図290-5は、大型の土製勾玉になる。表面は、ヘラミガキされていないが、黒色を呈している。意図的なものと考え、実測図にはスクリーンを貼付しておいた。

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。推定床面積の半分は、上部削平で消失していた。

カマドは遺存状態が良く、燃焼部の細部構造が判明した。具体的には、袖先端と天井部に土師器甕を入れて補強が行われている。とくに、袖先端は、複数個体の甕を重ねて用いており、入念な構築方法をとっているのが窺われた。

また、カマド構築時と廃棄時の儀礼痕跡が確認されている。

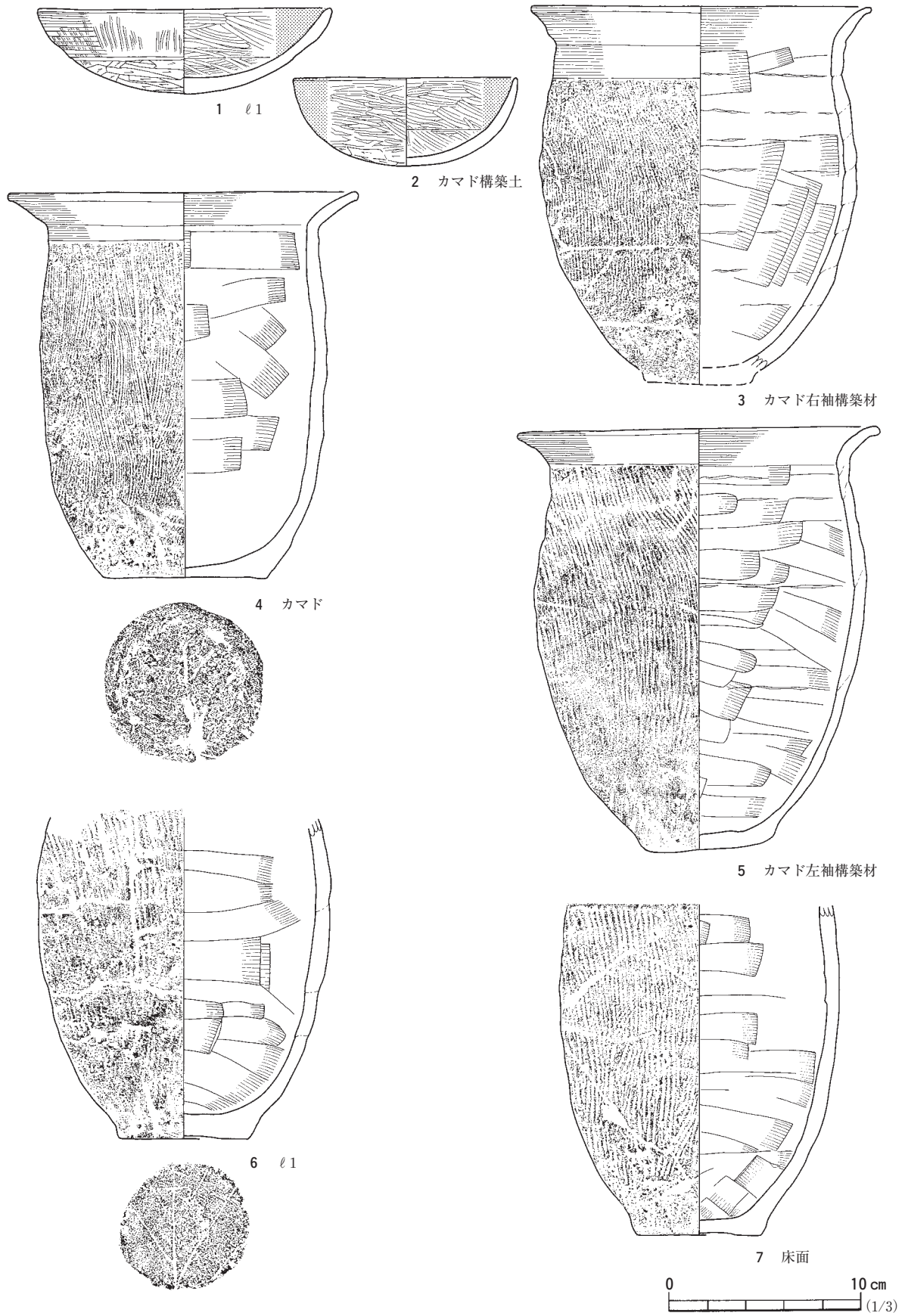


図288 108号住居跡出土遺物 (1)

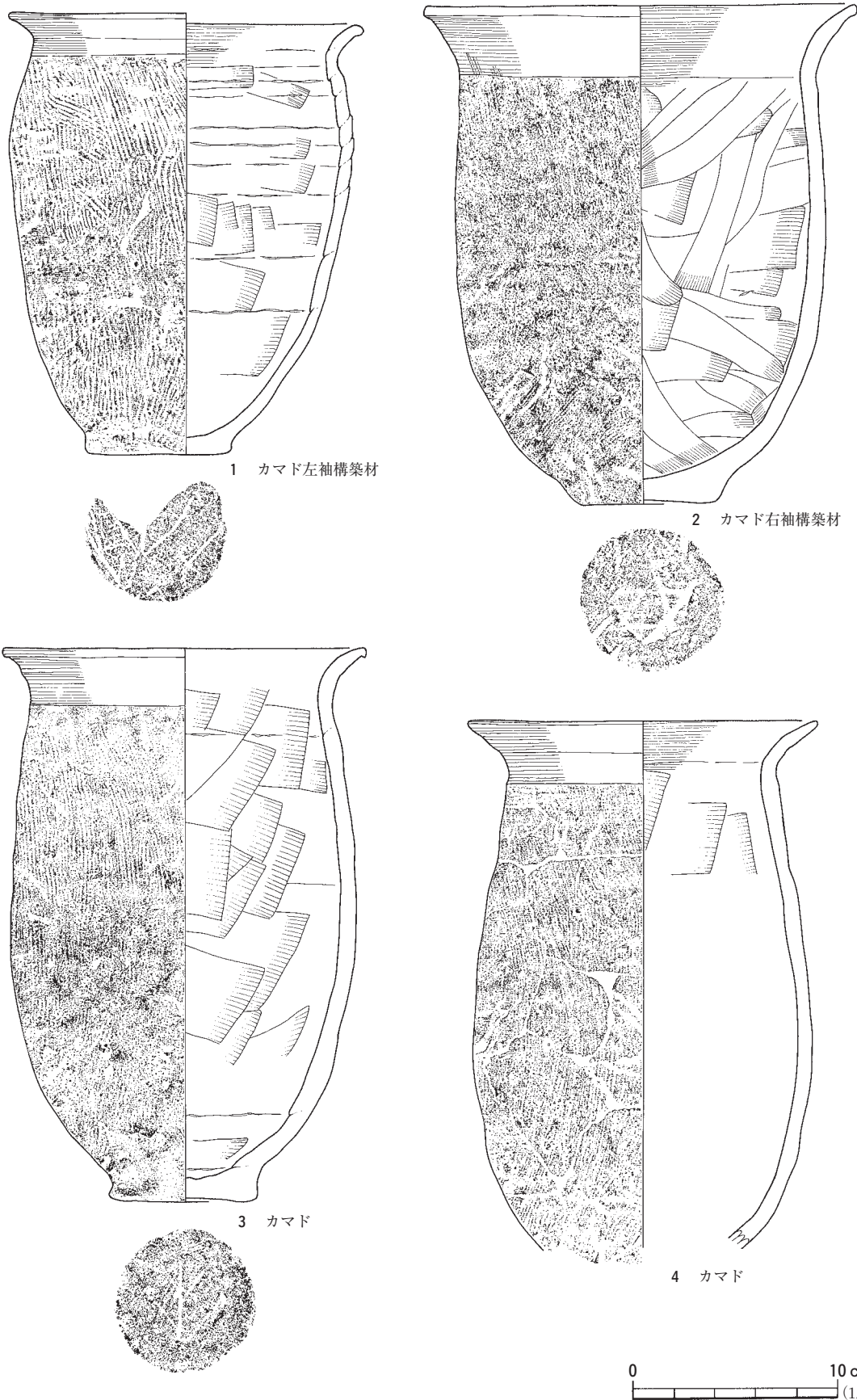


図289 108号住居跡出土遺物 (2)

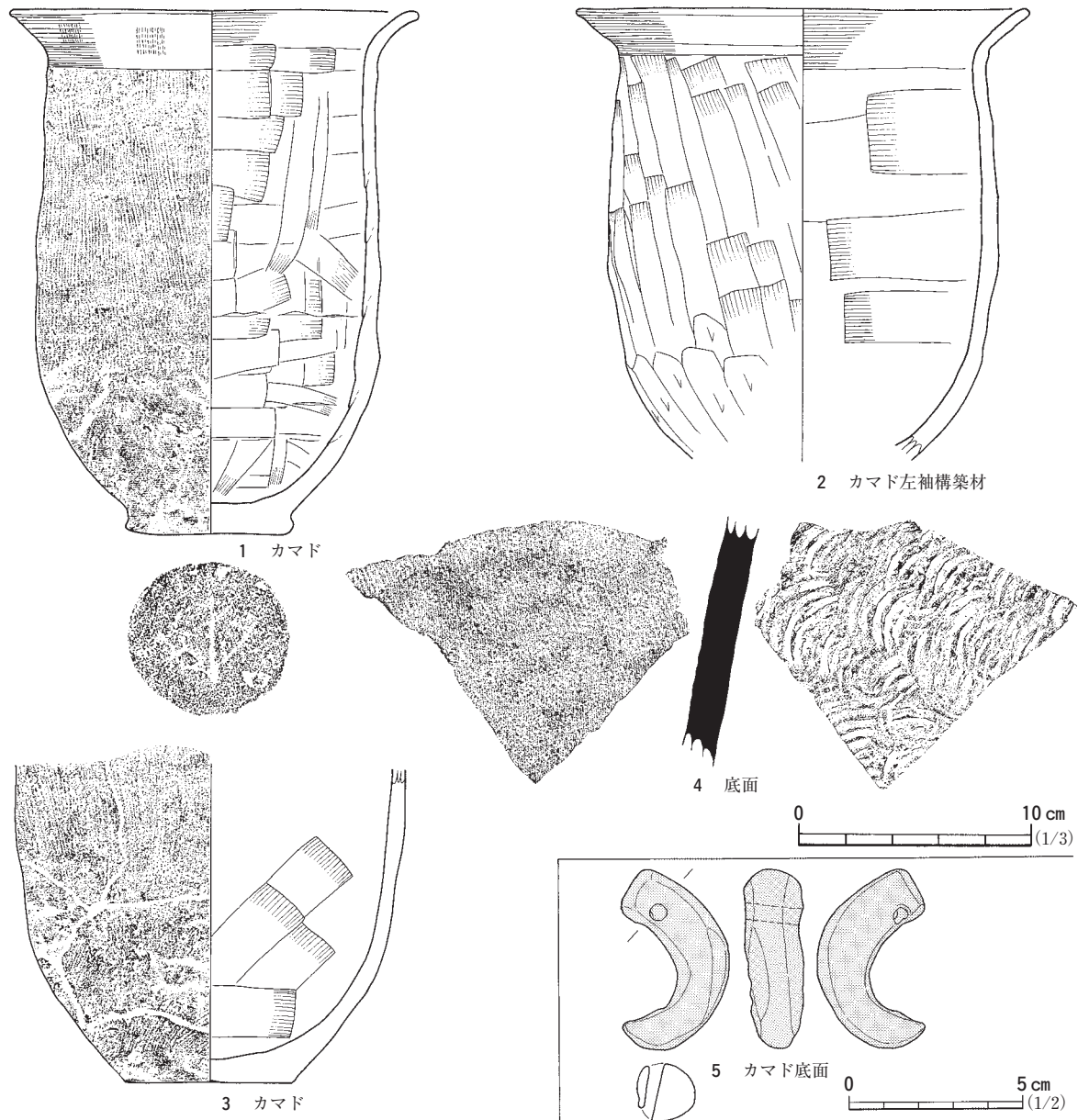


図290 108号住居跡出土遺物（3）

時期は、相伴遺物の特徴から、栗圀式期後半～国分寺下層式期前半と捉えている。金属器範模倣の土師器杯や、口径が大きく、胴部に締まりの無い土師器長胴甕の存在が、そのことを具体的に示している。

(菅原)

109号住居跡 S I 109

遺 構 (図291・292, 写真278～281)

本遺構は、M23グリッドで検出された竪穴住居跡である。

営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面落ちぎわである。その場所は、自然堤防を横断する浅い谷地形にも面している。

重複関係は、110号住居跡を切っている。また、栗囲式期の集落区画溝=1・5号溝跡が、本住居跡の南側至近距離にある。

堆積土は、3層に分層された。土層断面図が示すように、典型的なレンズ状堆積をしている。このことから、遺構は自然埋没したと考えている。

床面は、貼床されていない。掘形底面が平坦に整えられており、カマド前面には、踏み締まりがあった。

本住居跡の平面プランは、南北に長い長方形基調を呈している。ただ、向かい合う北周壁と南周壁は長さが一致していない。このため、台形気味となっている。規模は、東西3.3m、南北4.5mを測り、高木遺跡では小型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に20°振れている。

カマドは、西周壁中央で検出された。煙道部は残っていない。燃烧部は、袖長80cm、焚口幅50cmの規模を測る。袖は、暗黄褐色砂質土で構築され、床面から11cmの高さが残っていた。底面は焼土化が著しく、断ち割りで、5cmの厚さを確認している。

ピットは、1個検出されている。北西隅床面に掘られたもので、径30cmの円形をなしている。床面からの深さは、17cmである。堆積土に、焼土粒が少量含まれていた。このピットの性格について

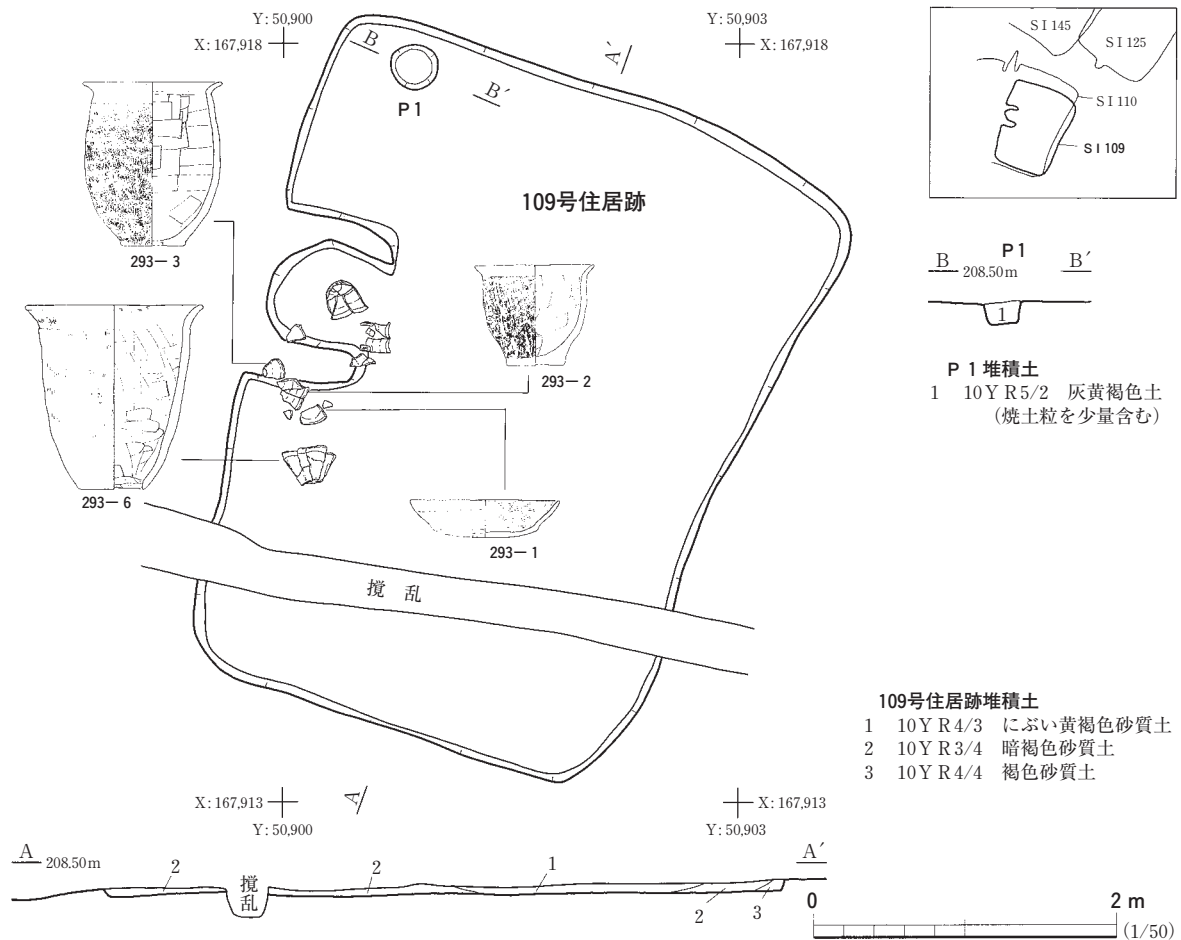


図291 109号住居跡

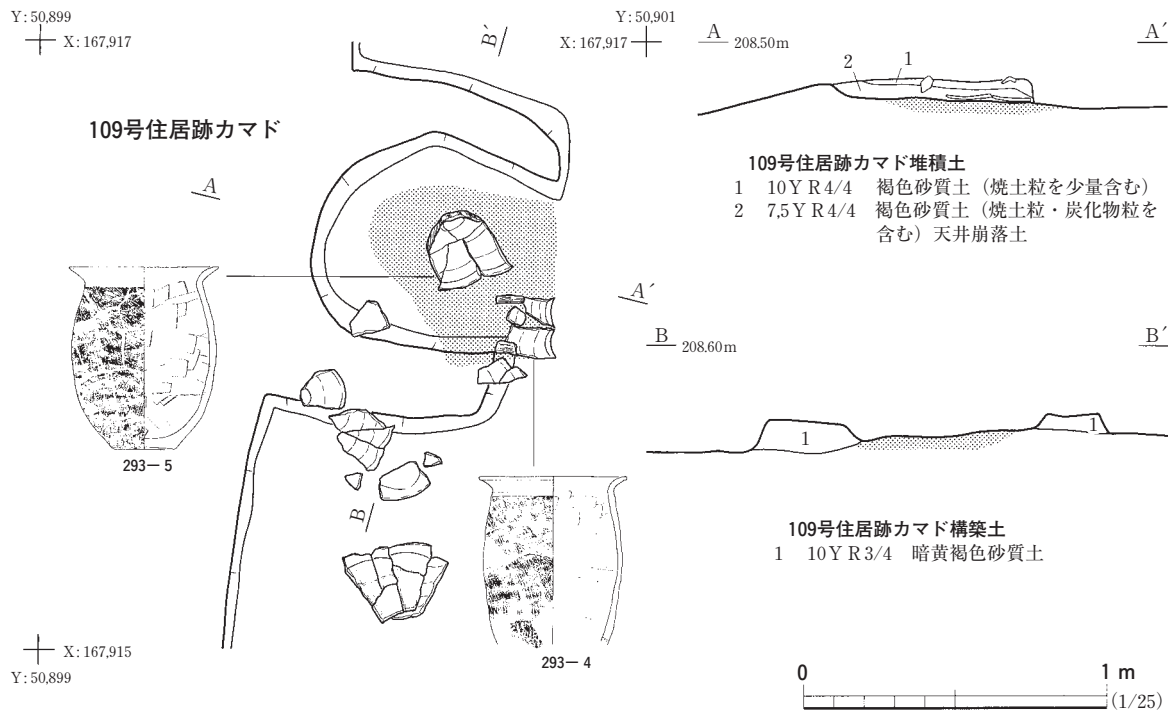


図292 109号住居跡カマド

は、不明である。

遺物 (図293, 写真584・585)

遺物は、土師器片68点が出土した。

遺構上部がかなり削平されていたが、6点の共伴資料を図示することができた。それらの平面分布は、カマド周辺に集中している。

図293-1は、有段丸底の土師器杯になる。底部は平底風で、口縁部が内湾して立ち上がる。口縁部下端の内面には、稜がみられる。

2は、土師器小型甕になる。器形は、口径が胴部径を上回り、胴部下半が窄まっている。胴部外面の器面調整は、ハケメである。

3~5は、中~大型の土師器甕になる。胴部の外面調整は、ハケメに統一されている。3と5は、相似形をなしており、胴部中位に膨らみがあって、頸部が窄まり、口縁部が外反している。4は、上述の2点より長胴であり、頸部の窄まりが小さい。3・5の底部外面には、木葉痕が明瞭に観察される。

6は、土師器甑になる。外面ハケメ調整の無底式である。器形は、口縁部が開いており、胴部にほとんど張りを持たないで、下に向かって窄まっている。

まとめ

本遺構は、自然堤防の西斜面落ちぎわに営まれた竪穴住居跡である。南北に長い平面プランを有している。カマドは、長軸側の西周壁で検出された。

時期は、共伴遺物の特徴から、栗圀式期と考えている。

(菅原)

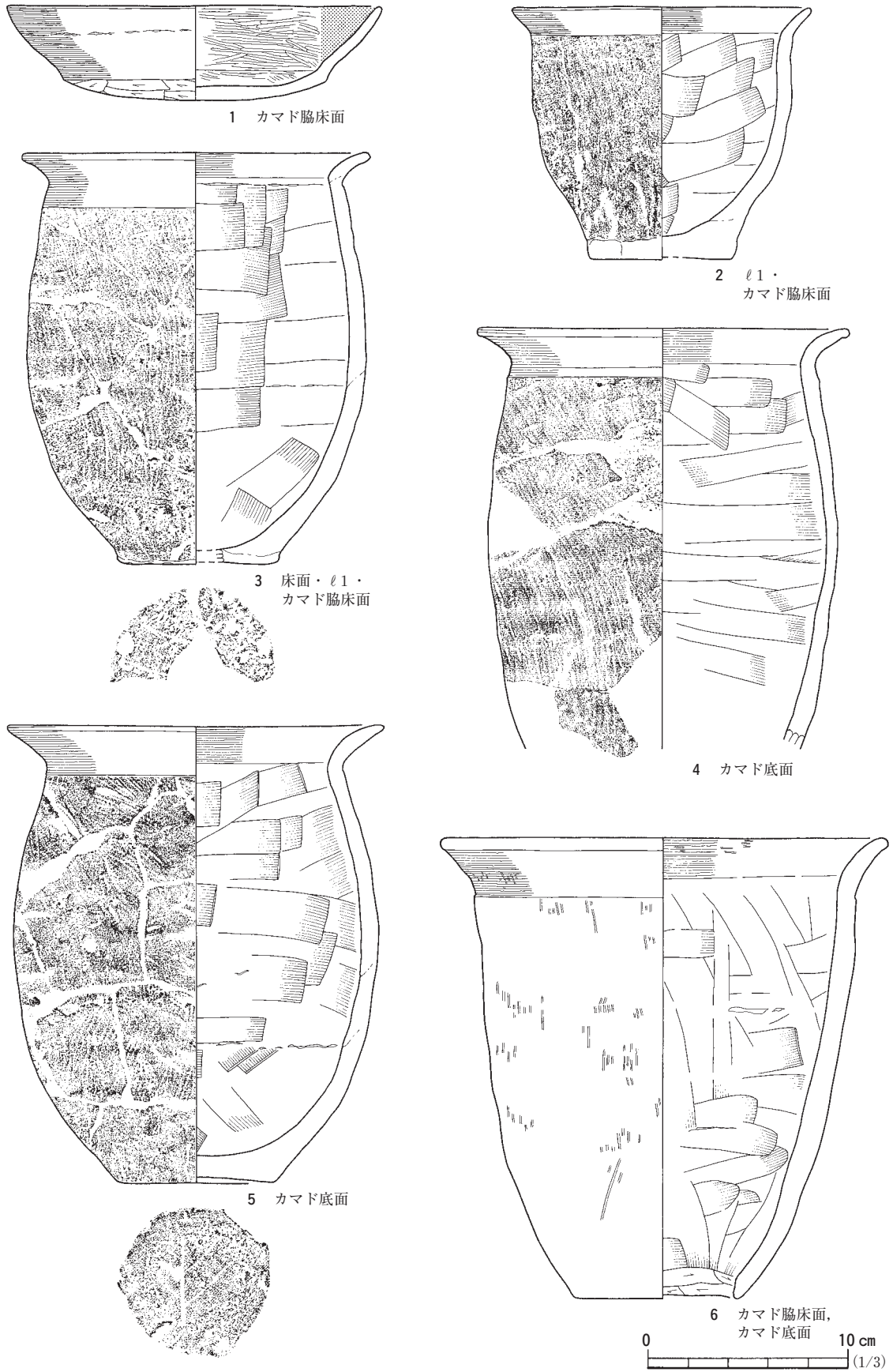


図293 109号住居跡出土遺物

110号住居跡 S I 110

遺 構 (図294・295, 写真282・283)

本遺構は、M23グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面落ちぎわである。また、自然堤防を東西に横断する浅い谷地形にも面している。

重複関係は、109号住居跡に切られている。また、栗囲式期の集落区画溝=1・5号溝跡が、本住居跡の南側至近距離にある。

本住居跡は、西側と南側の削平が著しく、この部分では周壁が失われている。さらに、南周壁の手前に攪乱があり、床面が壊されている。このように、本住居跡は遺存状態に恵まれていなか

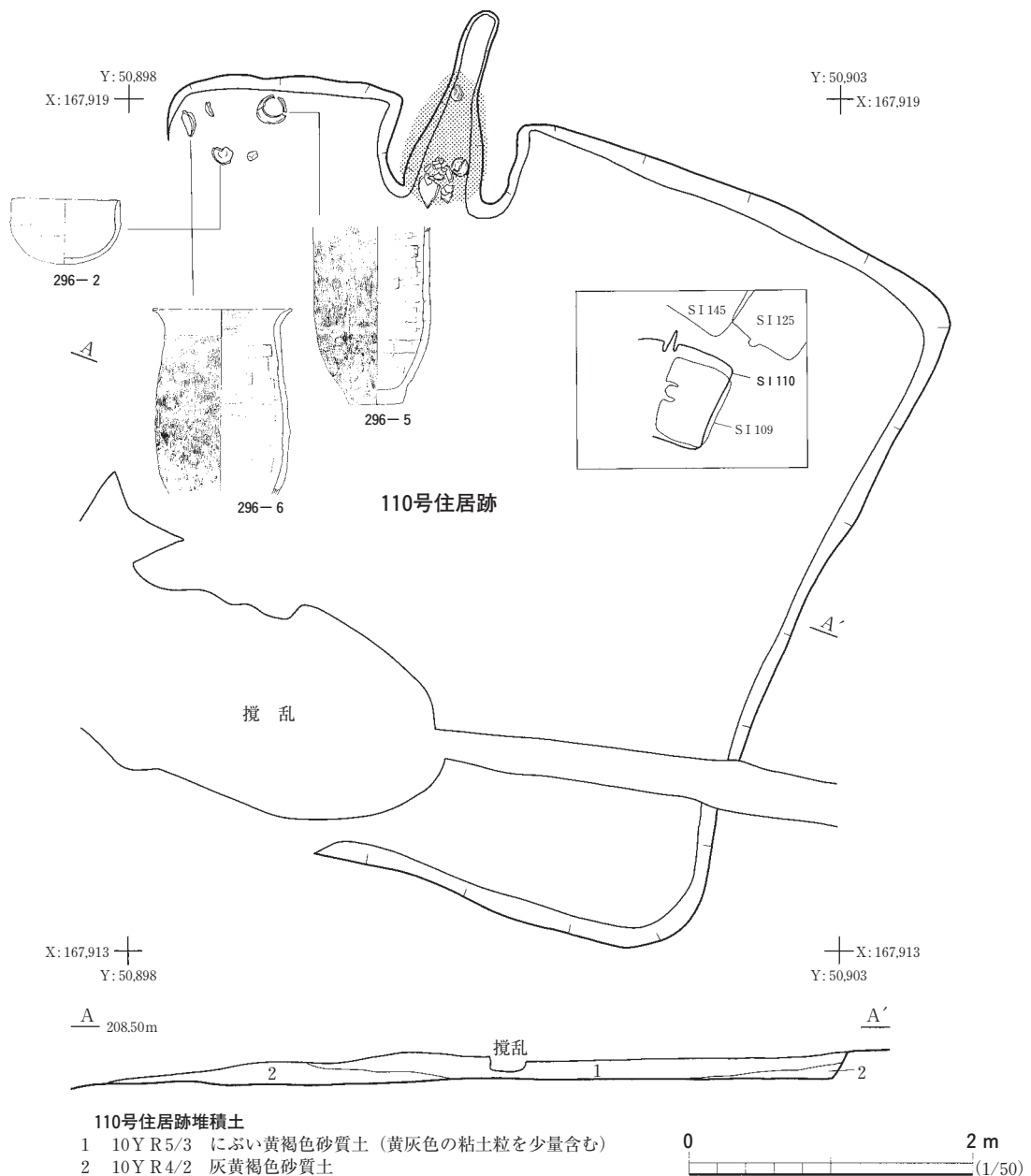


図294 110号住居跡

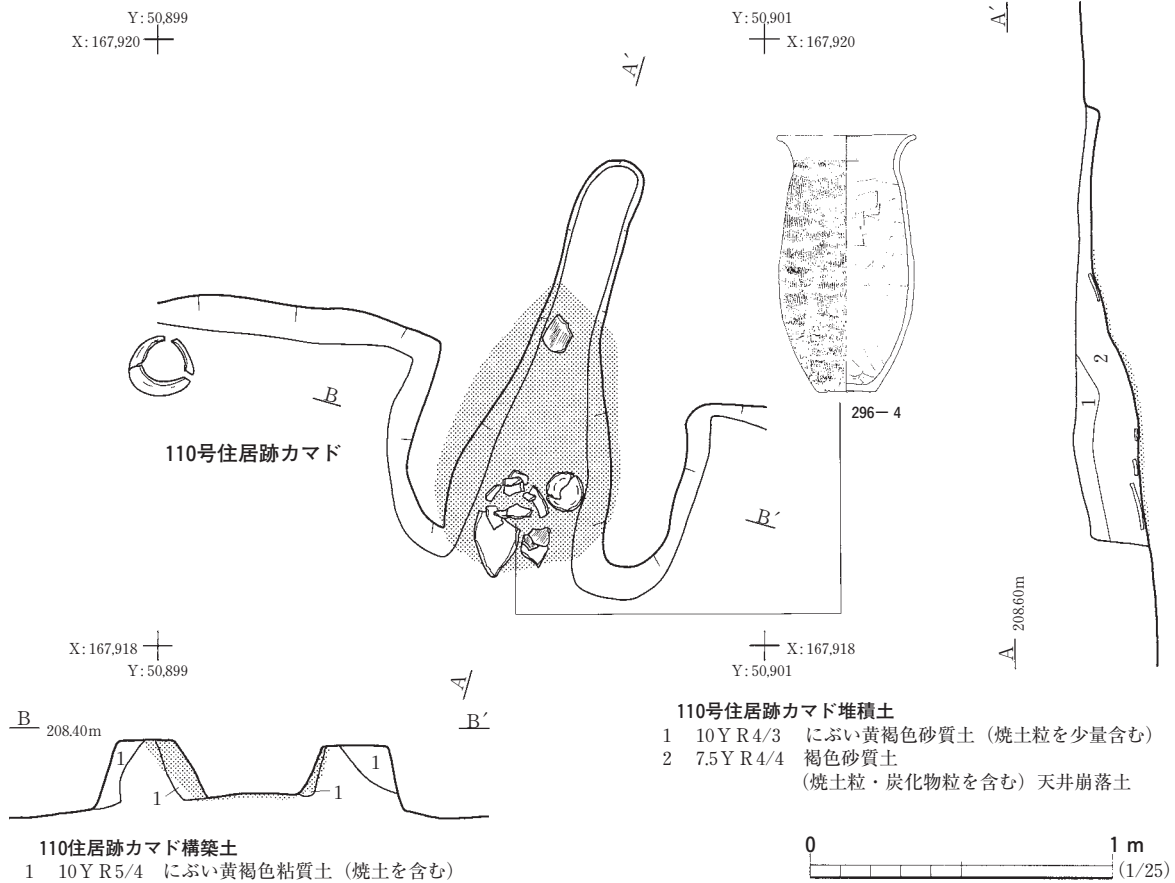


図295 110号住居跡カマド

った。

堆積土は、2層に分層された。土層断面図が示すように、典型的なレンズ状堆積である。このことから、遺構は、自然に埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面が平坦に整えられている。カマド前面には、踏み締まりがあった。

本住居跡の平面プランは、正方形基調をとっている。規模は、東西5.7m、南北5.4mを測り、中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に26°振れている。

カマドは、北周壁で検出された。位置は、左に偏っている。煙道部は、周壁から70cmの長さが残っていた。燃烧部は、袖長60cm、焚口幅38cmの規模を測る。袖は、焼土を含んだにぶい黄褐色粘質土で構築され、床面から、23cmの高さが残っていた。焼土化は、燃烧部全体に及んでいる。

ピット類は、検出されていない。

遺物 (図296, 写真585~587)

遺物は、土師器片268点が出土した。図示資料は、7点あり、図296-1・7を除く5点が、遺構に共伴している。それらの平面分布は、カマド燃烧部と北西隅床面に集中する。厨房空間を反映しているのだろう。

図296-1・2は、土師器杯になる。1は、口縁部が強く外反する有段丸底杯である。外面は、ヘラミガキ調整されている。2は、須恵器杯蓋模倣杯に分類される。このタイプの中では、器高の高

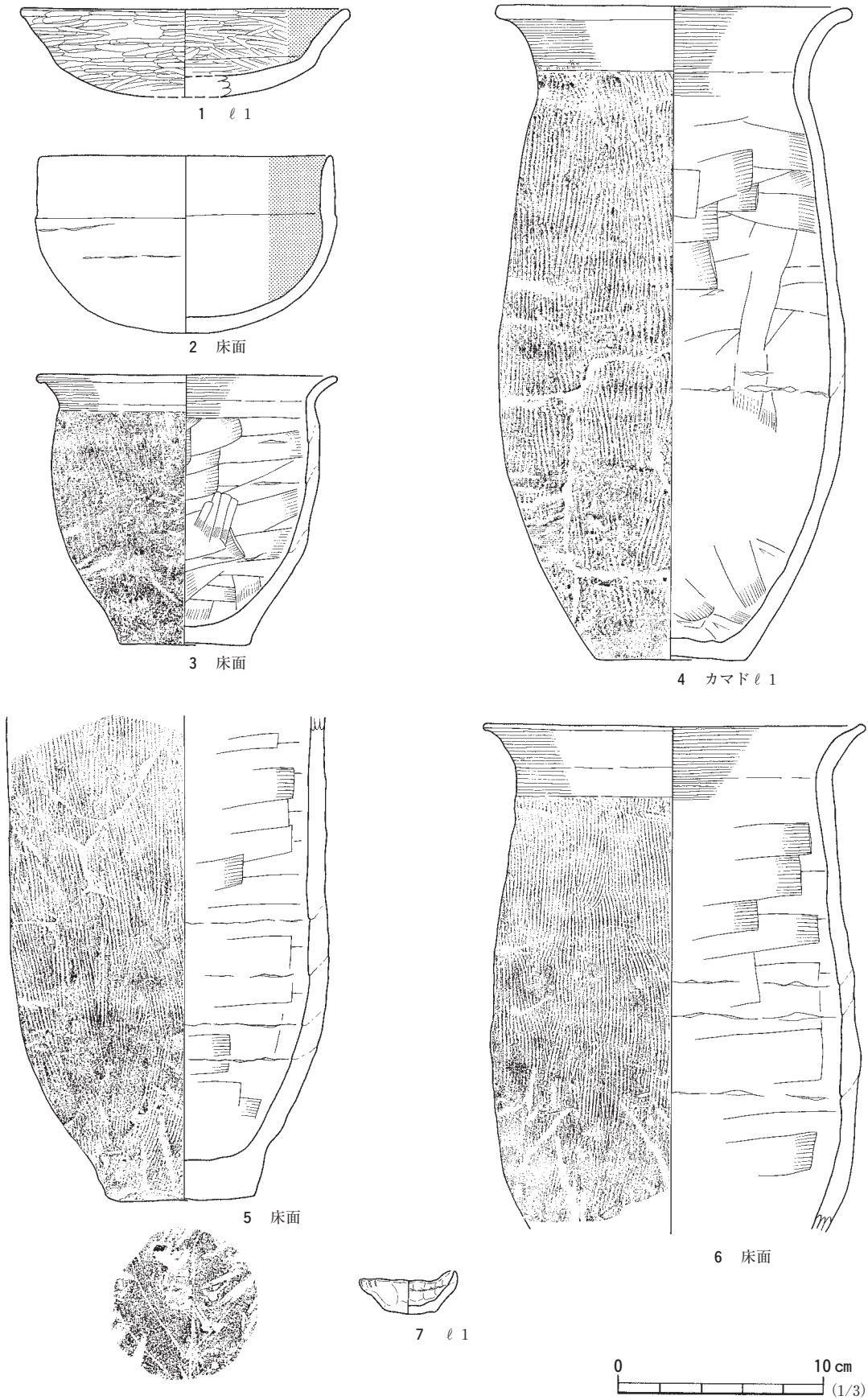


図296 110号住居跡出土遺物

い部類に属し、椀状を呈している。

3は、土師器小型甕になる。器形は、胴部下半が窄まって、口縁部が短く外反している。胴部外面は、ハケメ調整されている。

4～6は、土師器長胴甕になる。4は、カマド燃焼部中央で出土しており、懸け口に固定されていたと推定される。器高30cmを超える細長い胴部を有している。最大径は、中央にある。2は、上半部を欠いている。このため、器形全体の特徴を知ることができない。6は、底部付近を欠いているが、やや下膨れ気味の胴部形態になると推定される。これら3点は、どれも外面ハケメ調整である。

7は、土師器手づくね土器になる。

ま と め

本遺構は、自然堤防の西斜面落ちぎわに営まれた堅穴住居跡である。西周壁と南周壁の一部は破壊されている。カマドは北周壁に設置され、位置は左に偏っていた。

本住居跡の営まれた時期は、共伴遺物の特徴から、栗圀式期と考えている。 (菅原)

111号住居跡 S I 111

遺 構 (図297・298, 写真284～286)

本遺構は、M22グリッドで検出された堅穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部である。

重複関係は、95・96号住居跡、18号土坑に切られ、126号住居跡を切っている。このうち、18号土坑としたものは、埋没の進んだ本住居跡の中央に、土器類を廃棄した窪みである。

堆積土は4層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈している。このことから、遺構は自然埋没したと判断している。

床面は、貼床されていない。L IVの掘形底面が、そのまま平坦に整えられている。上面のレベルは、微地形の影響で、西側に向かってわずかに傾斜していた。検出面と床面の比高差は、10～13cmを測る。

本住居跡の平面プランは、南北に長い長方形基調を呈している。ただ、向かい合う西周壁と東周壁の長さが一致せず、台形気味となっている。

規模は、南北6.5m、東西5.0mを測り、高木遺跡では比較的大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に24°振れている。

カマドは、西周壁で検出された。位置は少し、右に偏している。煙道部は残っていなかった。燃焼部は、袖長80cm、焚口幅31cmの規模を有している。袖は、しまりのある砂質土で構築され、床面から16cmの高さが残っていた。

内壁面・底面は焼土化していた。

ピット類は検出されていない。

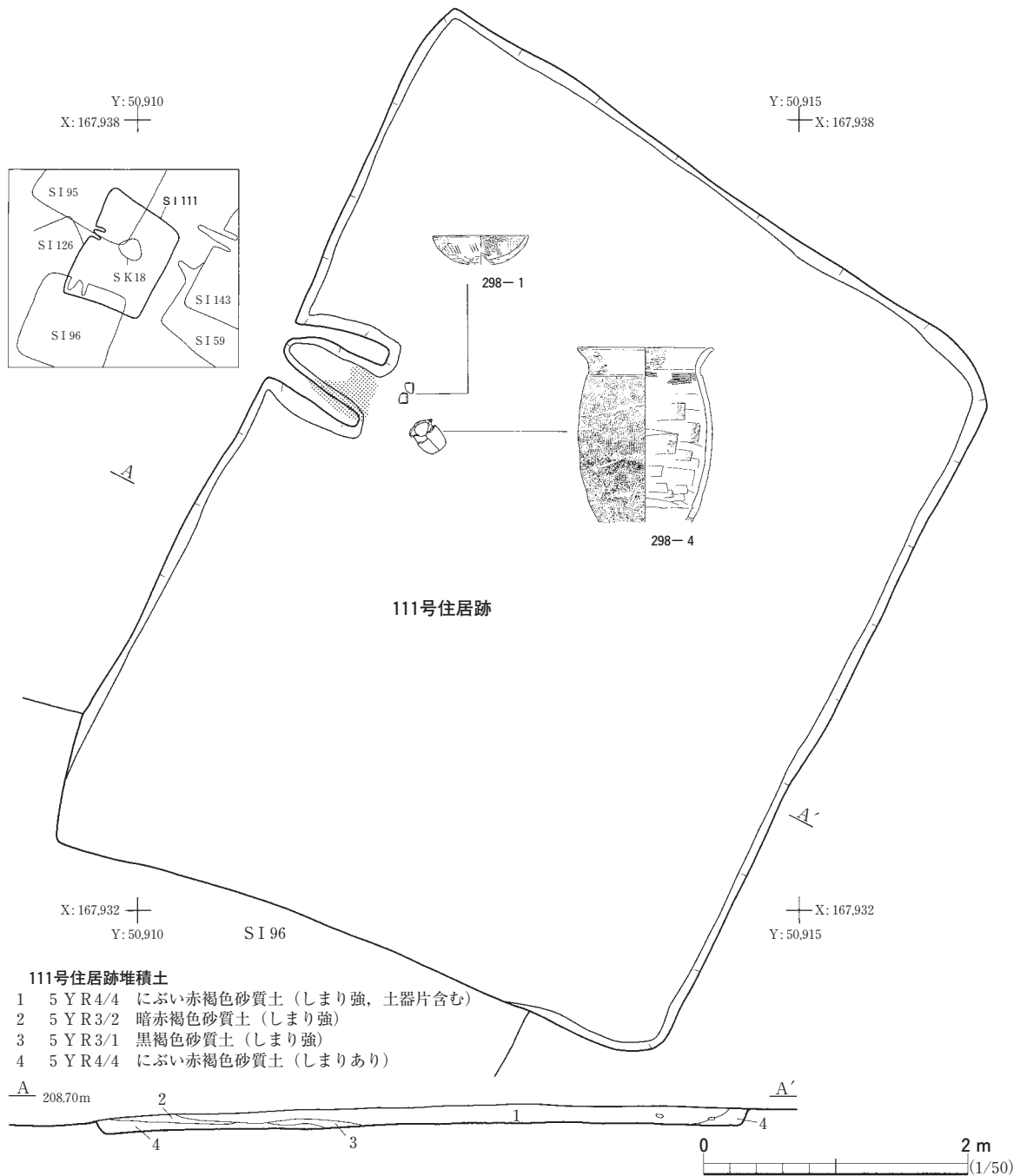


図297 111号住居跡

遺物 (図298, 写真586・587)

遺物は土師器片382点, 須恵器片1点, 土製品1点が出土した。図示遺物は, 5点あり, そのうち遺構に伴うのは, 図298-1・4の2点である。

図298-1・2は, 土師器杯になる。1は, 無段丸底に近い形態で, 口縁部下端に痕跡程度の稜がわずかに認められる。2の器形は, 平底風の底部から, 口縁部が直立気味に外反している。外面はヘラミガキ調整されている。

4は, 土師器長胴甕になる。カマド前の床面で出土した。口縁部下端の外面に段が形成され, 胴

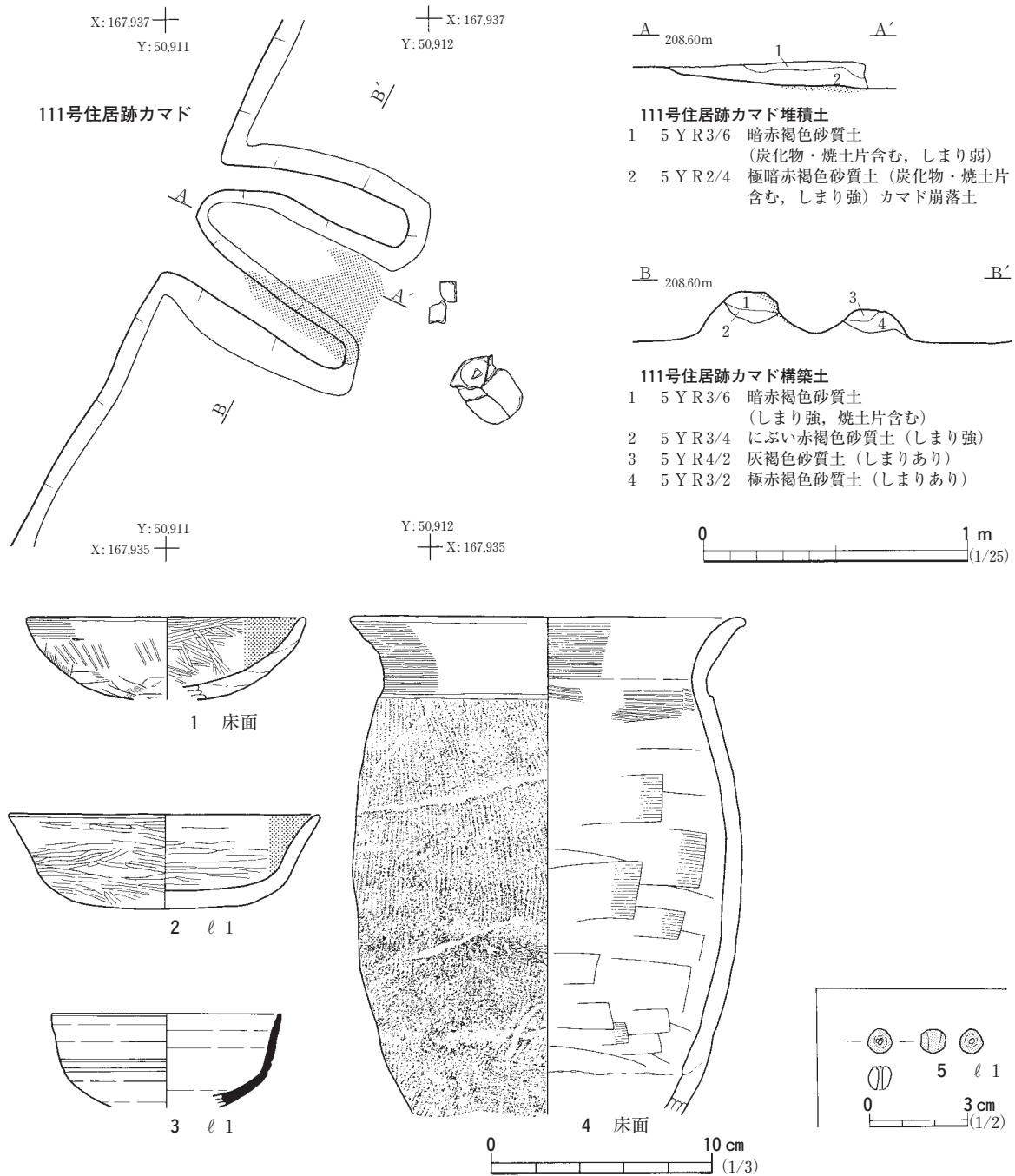


図298 111号住居跡カマド・出土遺物

部はハケメ調整されている。底部は、欠けている。

3は、底部を欠いた須恵器杯ないし高杯になる。外面に二重の沈線が巡る。胎土は緻密で精選されている。焼成は良く、堅緻である。

5は、土製丸玉になる。表面は、ヘラミガキ・黒色処理されている。

ま と め

本遺構は、自然堤防の西斜面肩部に営まれた堅穴住居跡である。南北に長い平面プランを有する。営まれた時期は、出土遺物の特徴から、栗圀式期と考えられる。(菅原)

112号住居跡 S I 112

遺 構 (図299・300, 写真287~289)

本遺構は、N21・021グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。周囲には数多くの住居跡が分布している。重複関係は、16・25・49号住居跡に切られている。

本住居跡は、上部の削平が著しい。とくに南側ではそれが顕著であった。床面が露呈し、周壁が失われていた。また、北西部の周壁も攪乱で壊されている。

堆積土は、2層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は、自然に埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面のLⅢがそのまま平坦に整えられている。カマド前面は、踏み締まっていた。北周壁で計測すると、検出面と床面の比高差は、11cmを測る。

本住居跡の平面プランは、正方形基調を呈している。規模は、東西4.2m、南北4.4mを測り、中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に29°振れている。

カマドは、東周壁中央で検出された。煙道部は、ほとんど底面が露呈した状態だったが、周壁か

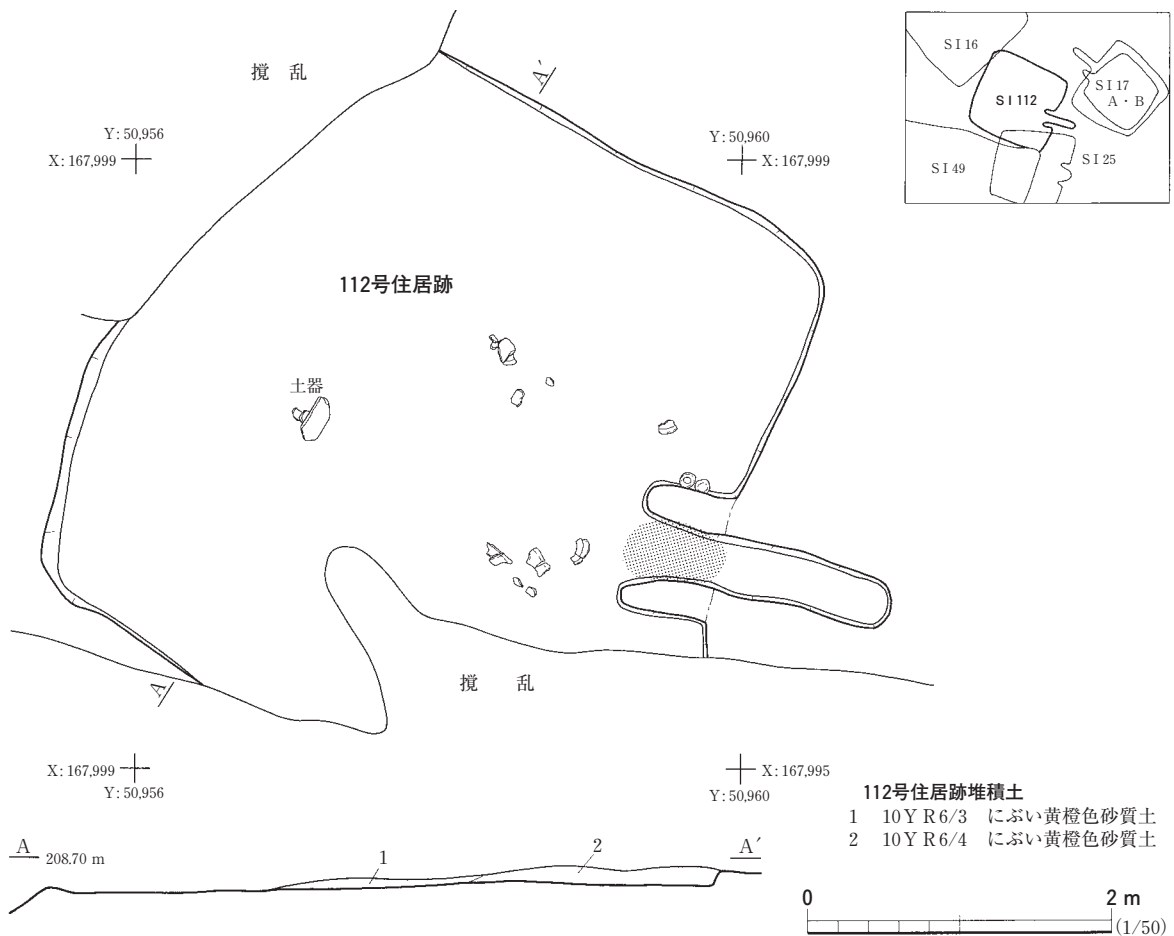


図299 112号住居跡

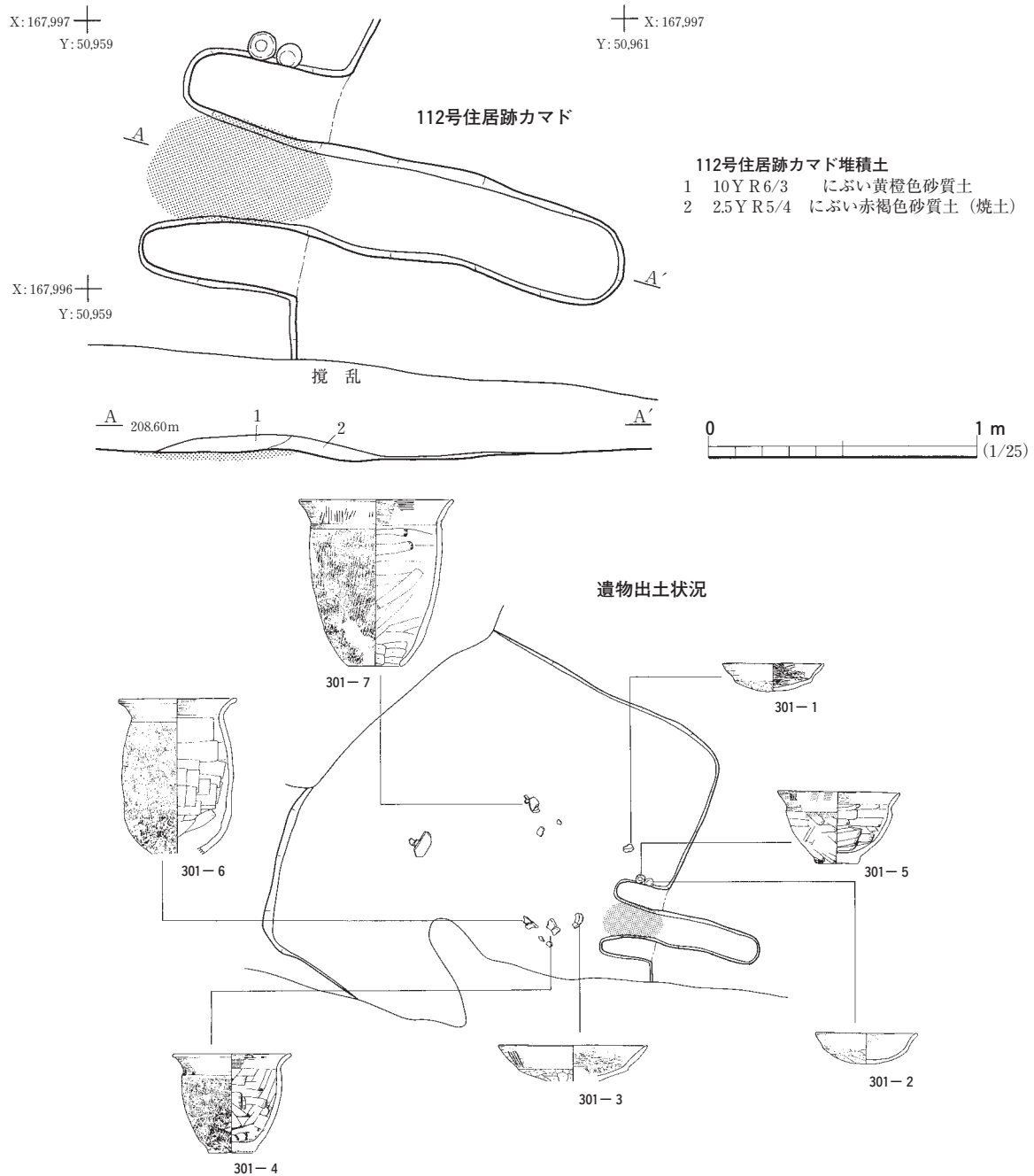


図300 112号住居跡カマド・遺物出土状況

ら111cmの長さが確認された。燃焼部は、袖長60cm、焚口幅39cmの規模を測る。底面は焼土化しており、断面で厚さ3cmを測った。

ピットは、検出されていない。

遺物 (図301, 写真587・588)

遺物は、土師器片202点が出土した。図示資料は、床面出土の7点が得られている。それらの平面分布は、カマド左袖脇に2個体(図301-2・5)が密着していた他、床面に散在していた。

図301-1・2は、有段丸底の土師器杯になる。1は、全体に低平で、口縁部が外反する器形を呈

している。口縁部外面は、肥厚している。2は、1より器高が高めである。口縁部が強く外反している。また、内面はヘラミガキ・黒色処理されず、ナデ調整で仕上げられている。

3は、土師器高杯になる。口径20cmを超える大型品である。脚部を欠いている。杯部は、器高が低く、口縁部外面に、ヨコナデ前のハケメ調整痕が観察される。

4・5は、土師器小甕になる。器形は、最大径が口縁部にあつて、胴部上位が膨らむ点で共通する。器高の違いで、大小に法量分化しており、器面調整も、4がハケメ、5がナデで違っている。

6は、中型の土師器甕になる。胴部は、あまり膨らみをもたず、底部付近で窄まっている。外面

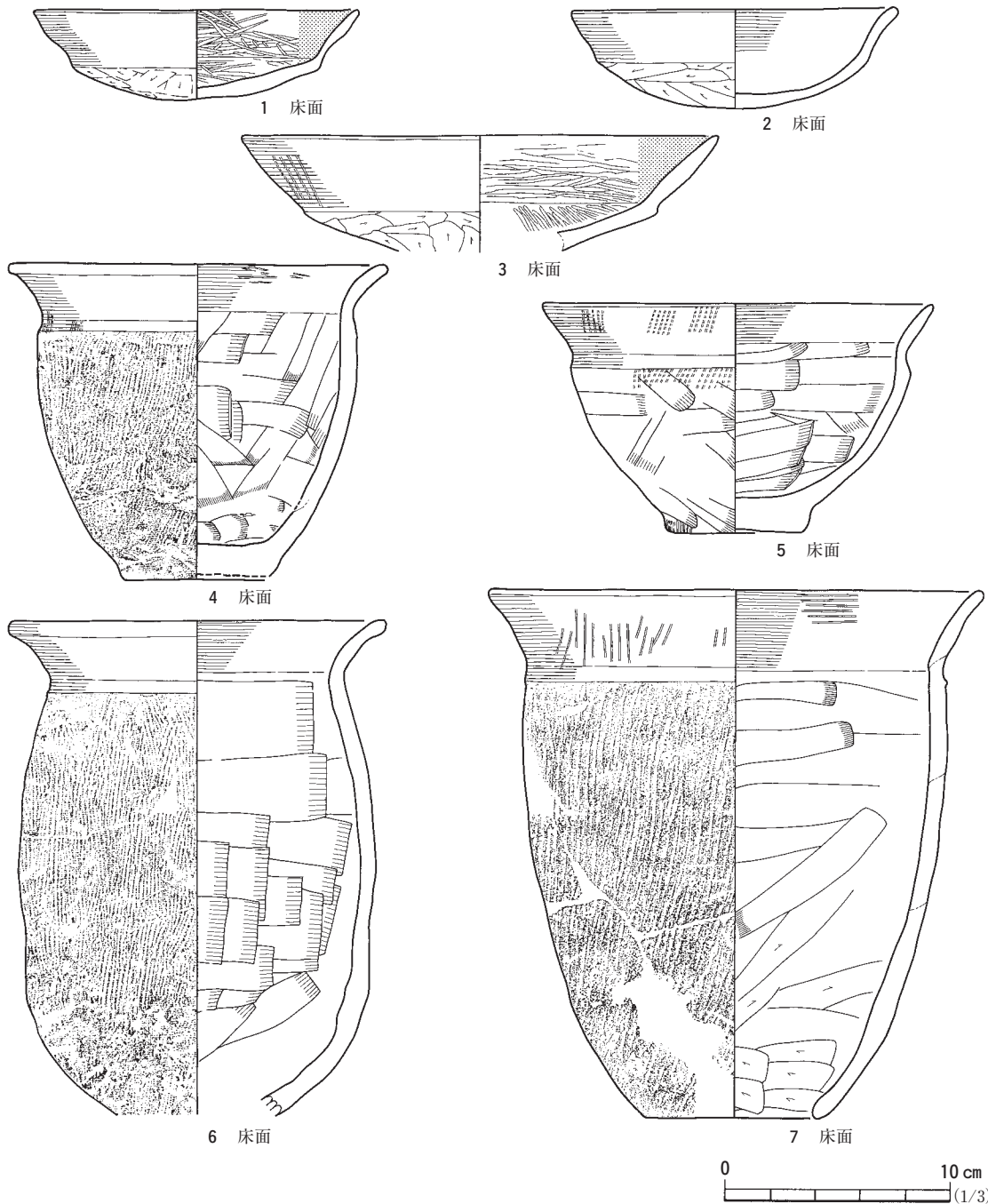


図301 112号住居跡出土遺物

はハケメ調整されている。

7は、土師器甕になる。無底式の大型品で、頸部が窄まり気味の形態を呈している。外面はハケメ調整されている。

ま と め

本遺構は、自然堤防東斜面の肩部に営まれた竪穴住居跡である。上部削平が著しく、周壁も一部失われており、遺存状態には恵まれなかった。それでも、カマド構築位置が判明し、定量の共伴遺物が得られたのは、大きな成果であった。

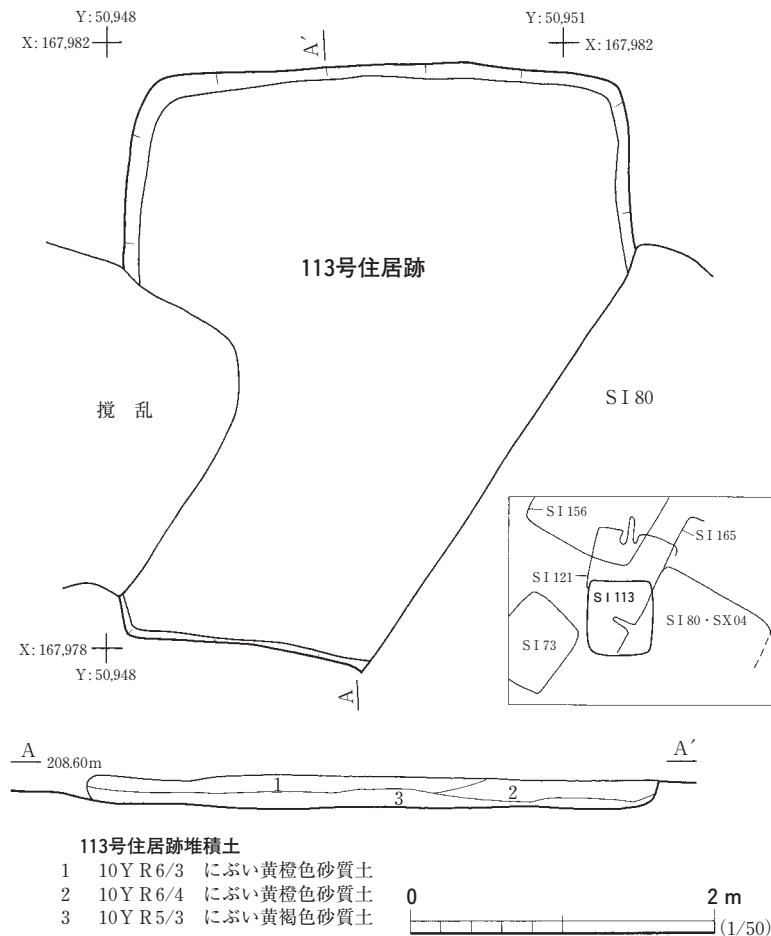
営まれた時期は、栗圀式期と考えている。 (菅原)

113号住居跡 S I 113

遺 構 (図302, 写真290・291)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。重複関係は、80号住居跡に切られており、121・165号住居跡を切っている。西周壁は、攪乱で壊されていた。

堆積土は、3層に分層された。断面は、典型的なレンズ状堆積の様相を呈している。このことから、遺構は、自然に埋没したと



から、遺構は、自然に埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み締まりは認められなかった。床面と検出面との比高差は、15～18cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。規模は、東西3.3m、南北3.8mを測り、小型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線に概ね一致している。カマドは検出されなかった。ただ、遺構の残り具合からすれば、北周壁に設置されてなかったことは、確かであろう。

ピット類は検出されていない。

遺 物 (図303)

本住居跡は、遺物が少ない。

図302 113号住居跡

土師器片152点が出土しただけである。図示遺物の2点は、遺構に伴っていない。

図303-1は、土師器杯になる。有段丸底の器形を呈している。底部を欠いている。

2は、土師器球胴甕になる。口縁部だけの破片資料であるが、かなりの大きさになると推定される。口縁端部は、平坦面をなす。胴部外面は、ハケメ調整されている。

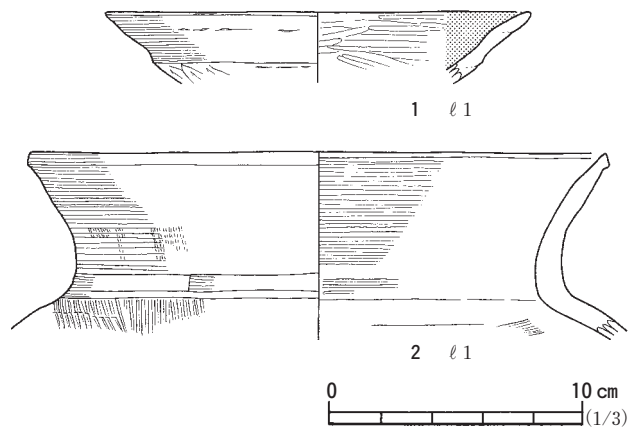


図303 113号住居跡出土遺物

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。平面プランは方形で、規模は小さい。カマドは残っておらず、詳細を知ることができなかった。また、相伴遺物にも恵まれなかった。

本住居跡が営まれたのは、重複遺構との関係から、栗田式期の幅の中でおさえられると思われる。

(菅原)

114号住居跡 S I 114

遺 構 (図304, 写真292・293)

本遺構は、N22グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部近くである。周囲には数多くの住居跡が分布している。

本住居跡は、5軒の竪穴住居跡と重複している。107・214号住居跡に切られ、120・170・173号住居跡を切っている。また、北周壁は、攪乱で壊されている。

堆積土は、4層に分層された。断面の様子から、遺構は自然埋没したと考えている。床面は貼床されず、掘形上面がそのまま平坦に整えられている。踏み締まりが、カマド中軸線上付近に認められた。検出面と床面の比高差は、15~18cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西4.5m、南北3.6m以上を測り、中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に33°振れている。

カマドは、西周壁で検出された。煙道部は残っていなかった。燃焼部は、袖長60cm、焚口幅38cmを測る。袖は、にぶい黄橙色砂質土で構築されており、床面から12cmの高さが残っていた。側壁は焼土化している。

ピット類は検出されていない。

遺 物 (図305, 写真588)

出土遺物は、土師器片229点、須恵器片3点が出土した。図示遺物は4点で、どれも遺構に伴っていない。

図305-1は、土師器杯になる。口径18.0cmの大型品で、有段丸底の器形をなしている。底部を欠

いている。

2は、ミニチュアの土師器甕になる。胴部肩が強く張って、そこから口縁部が内傾する特異な器形をなす。

外面は、ハケメ調整されている。

3は、土師器甕の底部付近になる。胴部外面は、ハケメ調整されている。

4は、須恵器甕の頸部片になる。

外面に波状文が認められる。

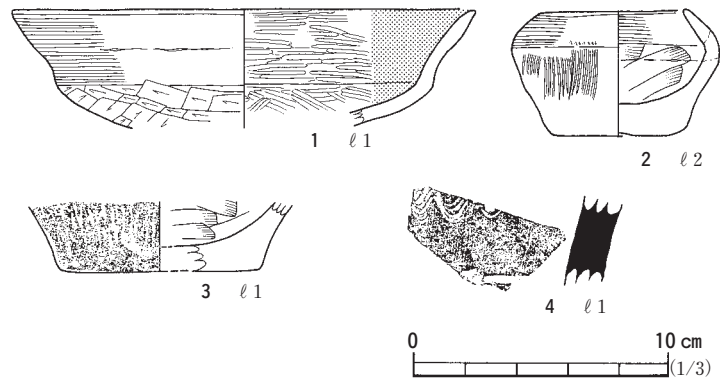


図305 114号住居跡出土遺物

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。方形の平面プランを有し、中規模である。カマドは、西周壁に設置されている。相伴遺物は、出土しなかった。

営まれた時期は、重複遺構の関係から、栗田式期の範疇で捉えられる。

(菅原)

118号住居跡 S I 118

遺構 (図306・307, 写真294・295)

本住居跡は調査区北側のO20グリッドに位置している。81号住居跡・16号土坑と重複関係にあり、本住居跡の西壁が81号住居跡の東壁によって破壊され、16号土坑も本住居跡東辺の中央付近を切っている。

住居跡検出面はL II 砂質土面で、方形のプランが確認されたが、北西コーナーと南西コーナーの上層には水道管理設溝が横切っており、一部破壊されていることが知られた。遺構内の堆積土は黄褐色砂質土を主体とするもので、土層観察ベルト東半でレンズ状の堆積が認められたことから自然に埋没したものと考えられる。

住居跡平面形は正方形に近いが、下端ラインで東辺が約3.6m、南辺が約3.8m、西辺が約3.4m、北辺が約3.7mとややゆがんでおり、カマドを通る軸線は30度東に傾いている。壁高は残りの良い東壁で30cm以上遺存している部分があるが、81号住居跡によって破壊された西半は10cm前後の高さとなっている。床面は貼床はなされておらず、掘り込んだ面をそのまま床としているが、砂質のせいか締まりの強い部分は認められなかった。西壁よりの床面で1号ピットが検出されている。性格は不明であるが、深さは10cm前後と浅く、不整形であることから住居施設として計画的に掘られたものではないと考えられる。

カマドは北壁中央に位置し、住居跡プラン内に燃焼部を持つ両袖タイプのものである。両袖によって確保された燃焼部の規模は、下端ラインで焚口幅約45cm、奥壁までの奥行き約85cmを測り、袖の高さは25cmまで遺存している。燃焼部は強く火を受けており、厚いところで9cm程の酸化壁が形成されている。煙道は確認することができなかった。カマドのほぼ中央には焚口に平行して2個の長

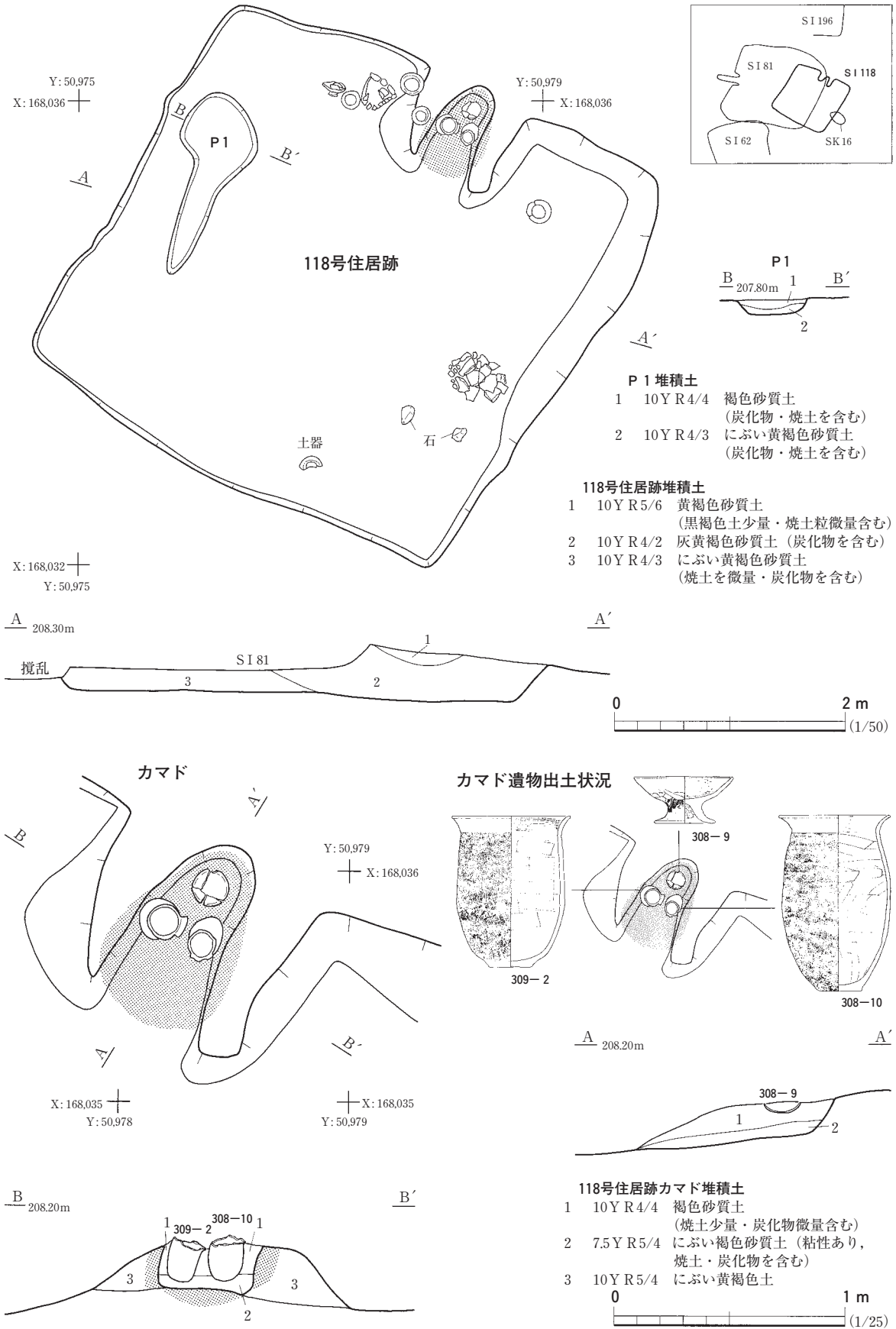


図306 118号住居跡

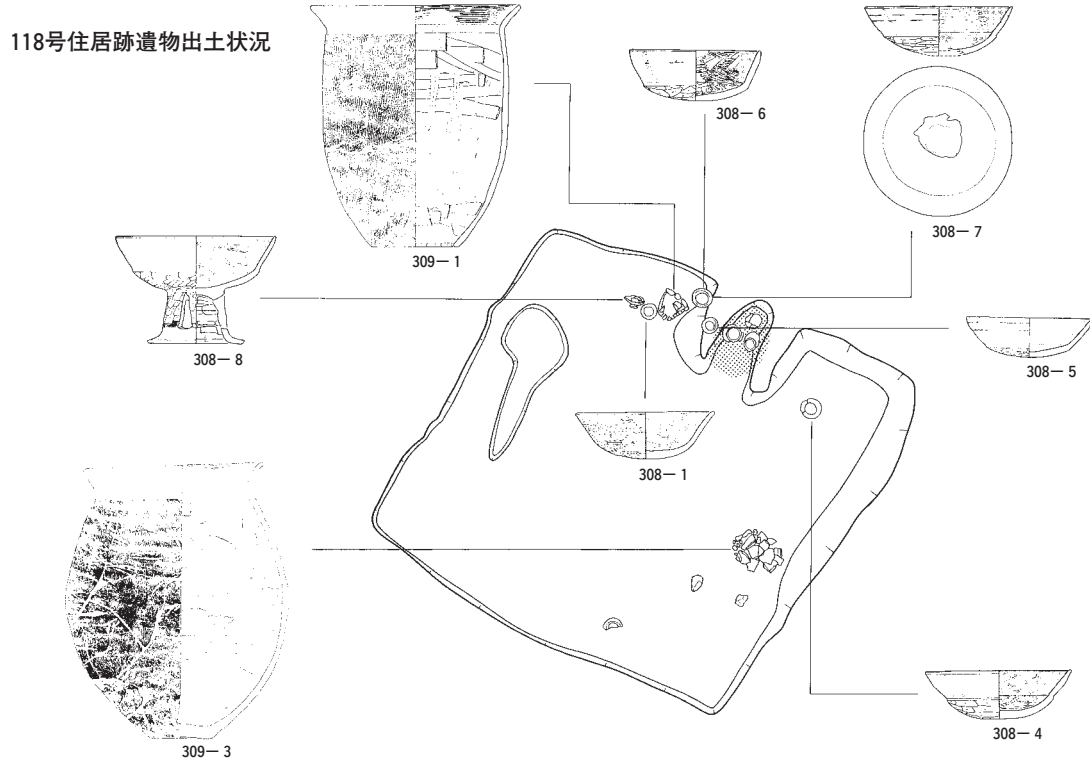


図307 118号住居跡遺物出土状況

胴甕が据えられており、奥壁よりの上層では高杯が出土したが、高杯については出土層位からカマド崩落後に入り込んだ可能性が強いと思われる。また、カマド左脇では甑や高杯などがまとまって出土しており、厨房スペースとして利用されていたことを知ることができる。

遺物 (図308・309, 写真588~590)

本住居跡で図示できた出土遺物は土師器13点、須恵器1点の計14点である。図308-1~7は土師器杯であり丸底で口縁部が外傾して開く器形を呈している。口縁部と体部の境に段を有す特徴があり、1についても明瞭ではないが同様の部分にきわめてゆるい括れが認められる。口縁部には直線的に外傾するものと、1・3のように外湾するもの、6のように立ち気味のものがある。調整は外面が口縁部ヨコナデで、体部から底部ヘラケズリ、内面がヘラミガキを基本とするが、1は外面全体もヘラミガキとなっている。すべての内面には黒色処理が施されている。また、7の底部中央には焼成後に打ち欠いた穴が開けられているが、甑としての利用も推測される。

図308-8・9は土師器高杯で、8は図308-6の杯に近似した杯部に筒形で裾が短く開く脚部をつけたものである。脚部には、三角形の透かしが3方に認められ、調整は裾部がヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ヘラナデである。杯部の調整は、外面が口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデで、内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。9は器厚の厚いラッパ状の脚部を持つもので、カマド上層から出土しているが火を受けた痕跡は無い。調整は杯部が8と同様で、脚部は外面がハケメ、内面がヘラケズリ、裾部はヨコナデである。

図308-10, 図309-2・3は土師器の甕である。図308-10と図309-2はカマドに並置されていた

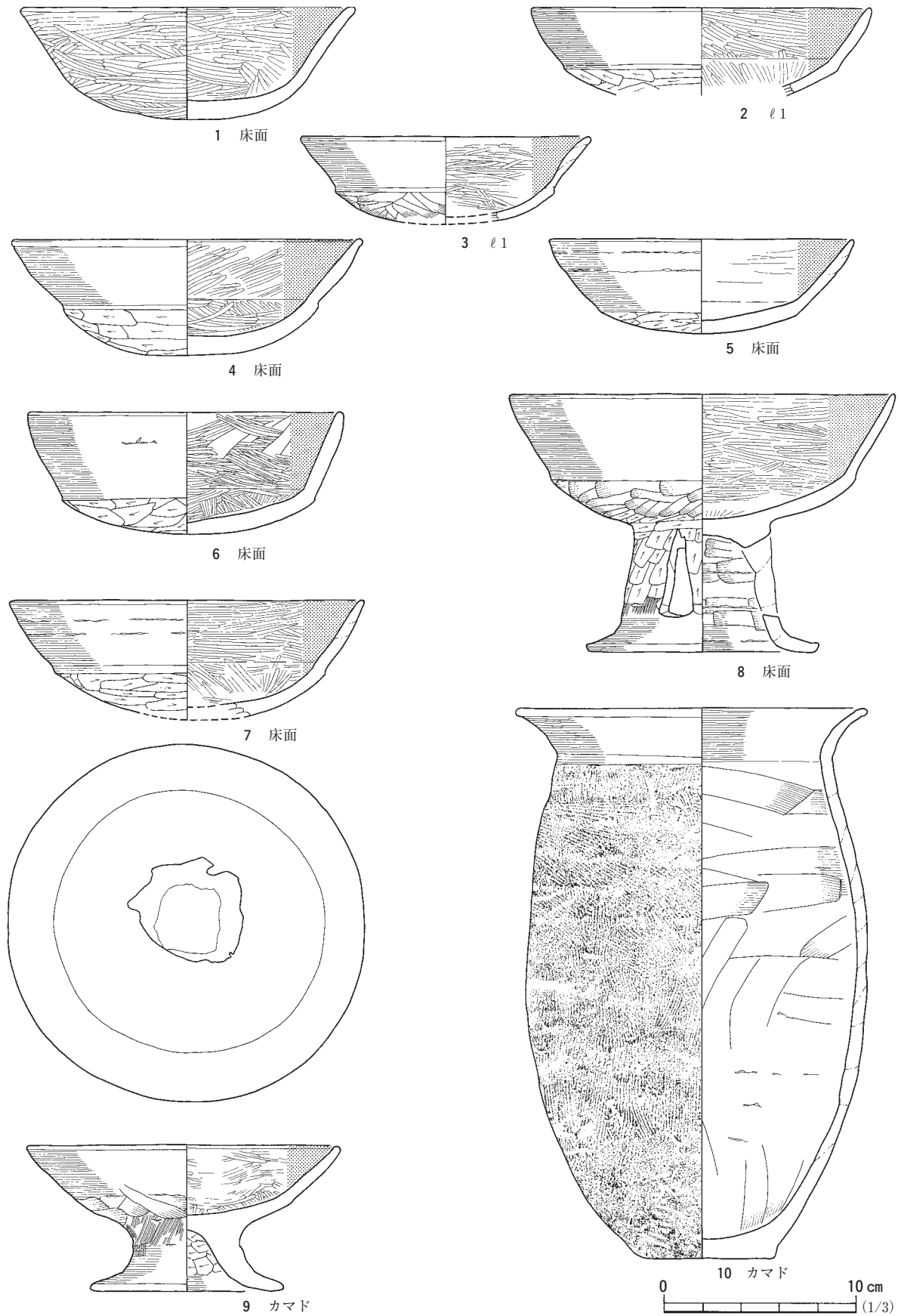


図308 118号住居跡出土遺物 (1)

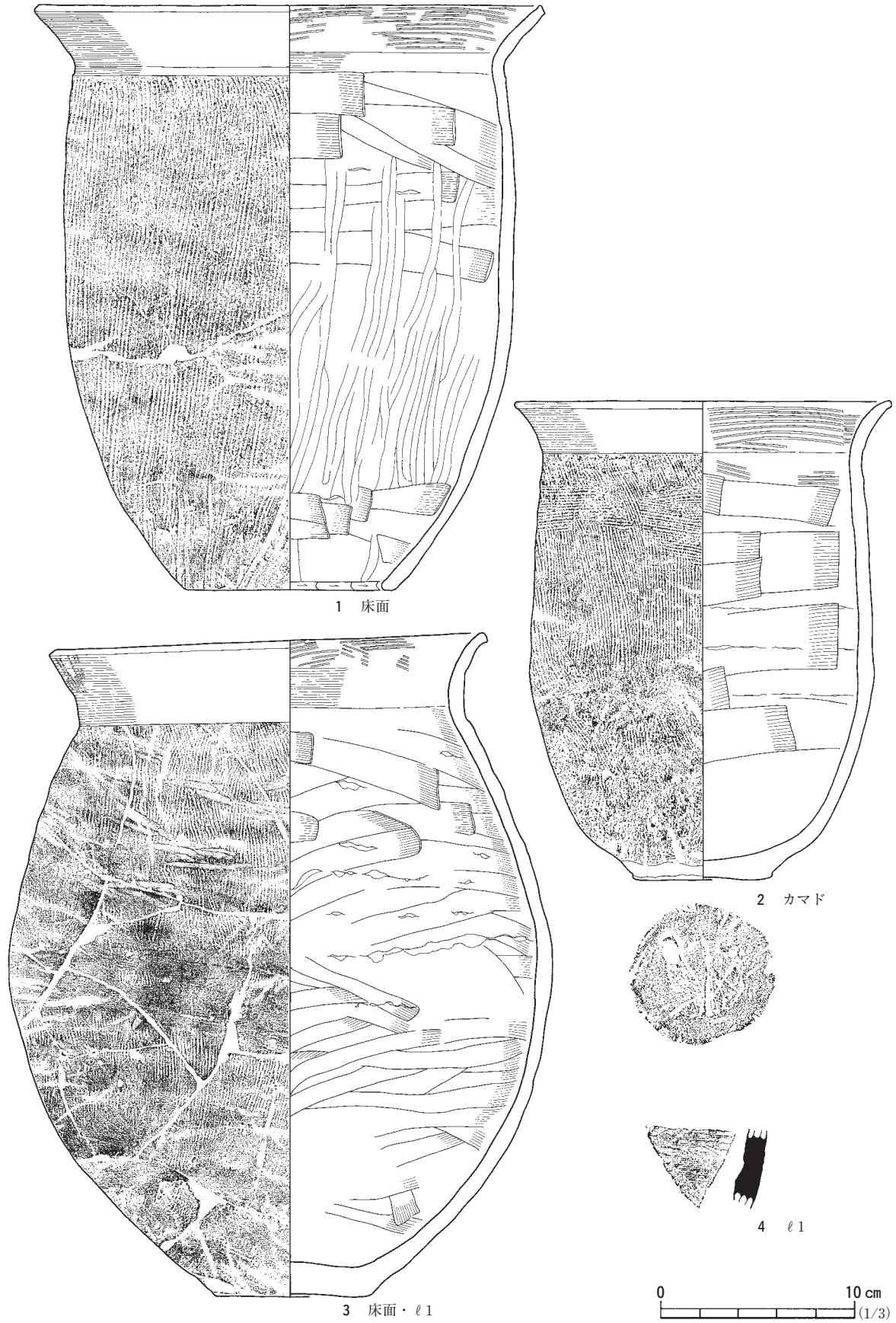


図309 118号住居跡出土遺物 (2)

もので、外面の片側には火を受けた痕跡が見られ、2の胴部内面中位付近には煤状の炭化物が薄く附着している。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケメ、胴部内面ヘラナデで、2の口縁部内面にはハケメ、底部には木葉痕が見られる。3は最大径を胴部中央に有すやや大型のもので調整は他の甕と同様である。火を受けた痕跡などは無くおそらく貯蔵用に用いられたものと思われる。

図309-1は土師器の甕で、調整は甕とほぼ同様であるが、内面に縦方向のヘラミガキが加えられている。図309-4は須恵器の甕の破片で、外面に浅い平行タタキが認められる。

ま と め

本住居跡はプラン全体が把握される比較的遺存状態の良い遺構である。その規模は一辺4m弱の小型のもので、カマド及びその周辺では良好な形で遺物が出土している。時期については遺物の特徴から7世紀頃が考えられる。 (安田)

119号住居跡 S I 119

遺 構 (図310, 写真296・297)

本遺構は、M21グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面落ちぎわである。他の遺構との重複関係は、認められない。隣接遺構としては、南西側に22号土坑、東側に3号溝跡がある。

本住居跡は、残りが非常に悪く、西周壁側の一部だけが検出された。

堆積土は、2層に分層された。土層断面図が示すように、典型的なレンズ状堆積である。このことから、遺構は、自然に埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面が平坦に整えられている。カマド前面には、踏み締まりがあった。

本住居跡の平面プランは、方形を呈していたと推定される。しかし、遺存状態の制約で詳しいことは知ることができない。規模は、東西1.4m以上、南北3.0m以上を測る。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に18°振れている。

カマドは、西周壁で検出された。燃焼部は、袖の遺存長45cm、焚口幅31cmの規模を有している。袖は、12cmの高さが残っていた。なお、底面はわずかに焼土化していたが、図示できるほどではなかった。

カマドの北東方向で、P1が検出されている。65cm×47cmの楕円形をなすもので、床面からの深さは、5cmを測る。

遺 物 (図310)

遺物は、土師器片1点が出土した。

図310-1は、有段丸底の土師器杯になる。器形は、口縁部が大きく開いており、外面の段が、明瞭に形成されている。堆積土出土で、遺構には共伴していない。

ま と め

本遺構は、自然堤防の西斜面落ちぎわに営まれた竪穴住居跡である。遺存状態が、非常に悪かつ

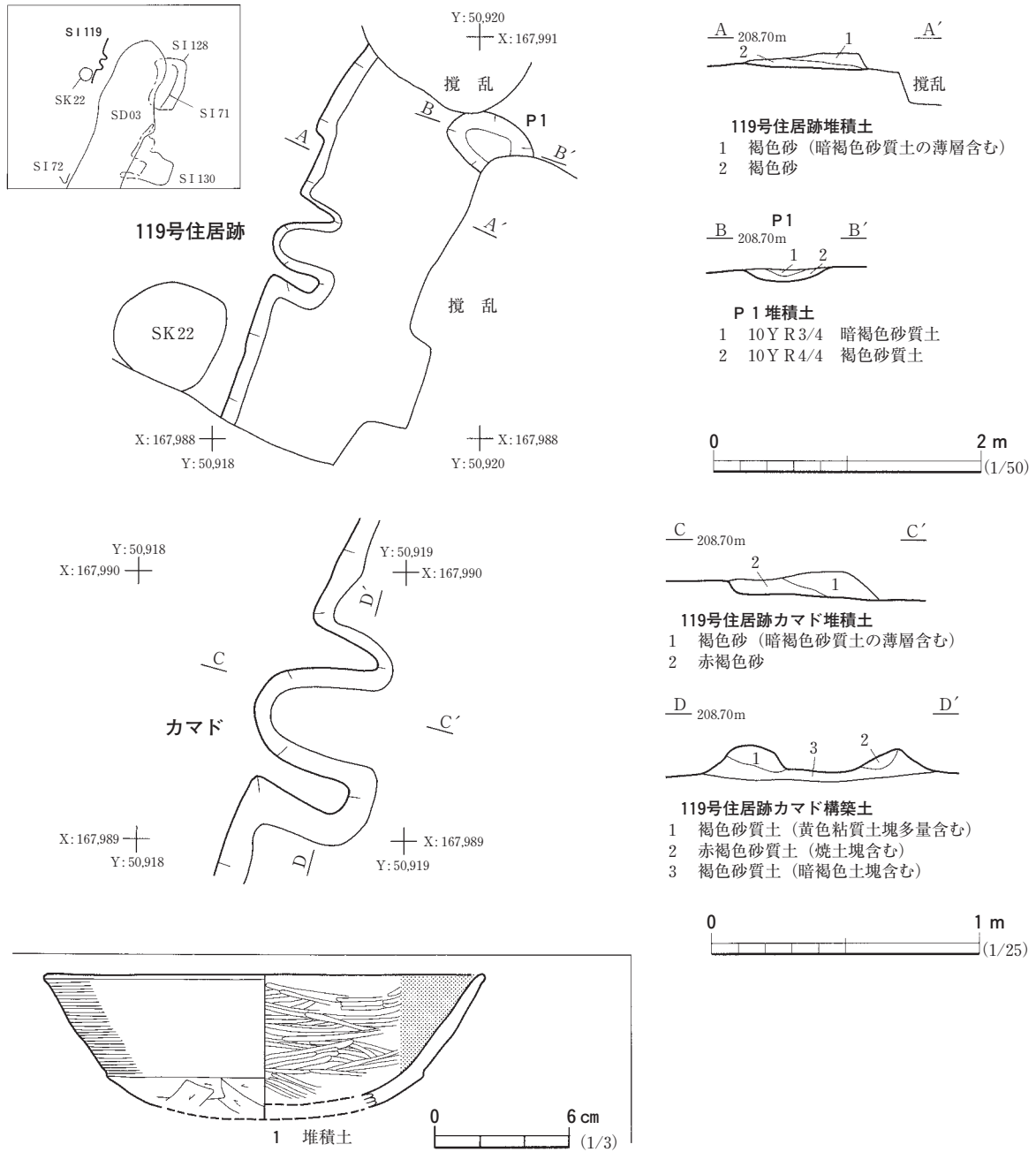


図310 119号住居跡・出土遺物

た。検出されたのは、カマドの設置された西周壁側の一部だけであった。このため、遺構の内容については、不明な部分が多い。また、良好な共伴遺物にも恵まれなかった。

したがって、本住居跡の所属時期は、不明である。

(菅原)

120号住居跡 S I 120

遺 構 (図311, 写真298~301)

本遺構は、N22グリッドで検出された堅穴住居跡である。

営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。周囲に数多くの住居跡が分布し

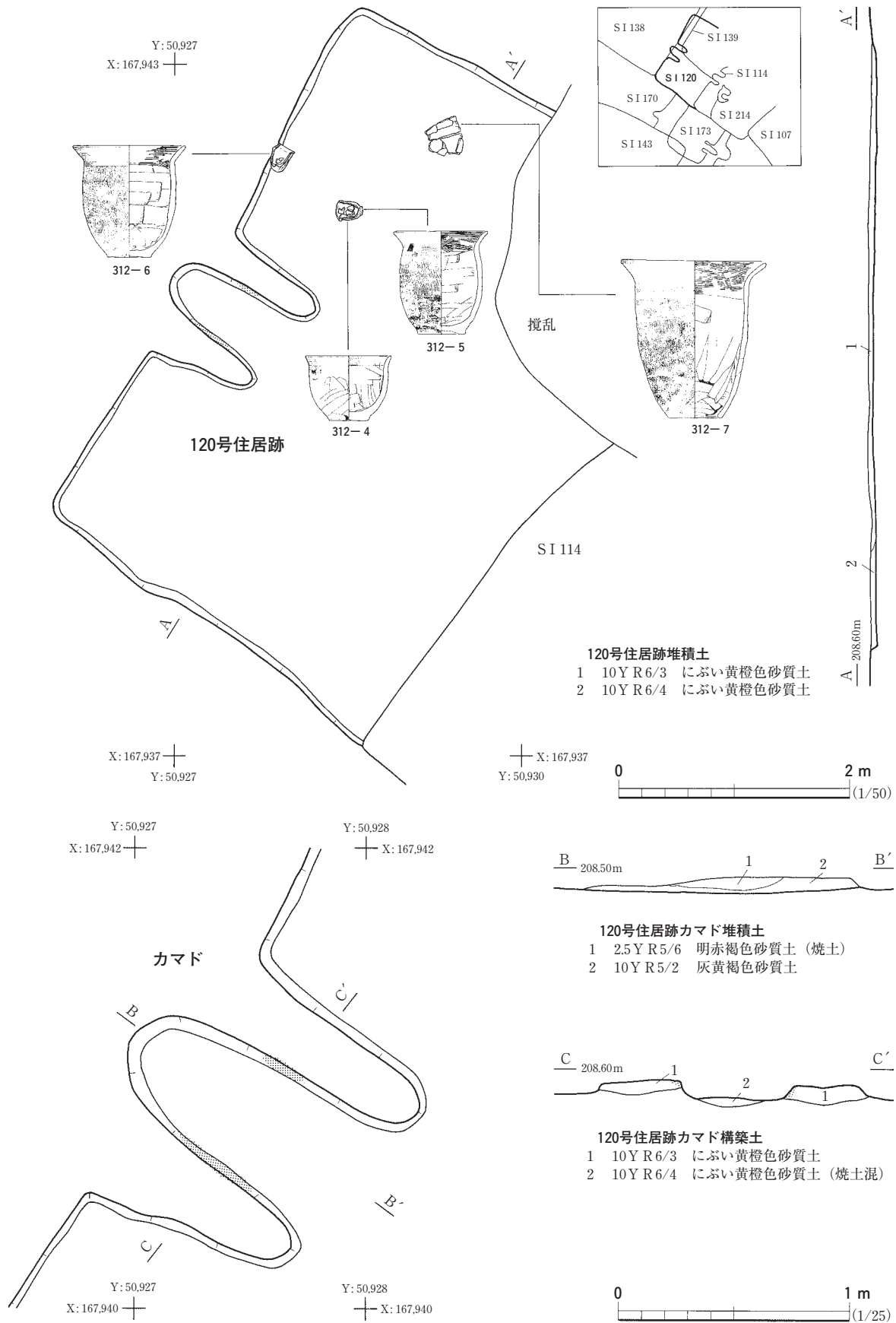


図311 120号住居跡

ている。

本住居跡は5軒の竪穴住居跡と重複している。114号住居跡に切られ、138・139・170・173号住居跡を切っている。また、北周壁は攪乱で壊されている。残っていたのは、床面積の西側3分の2ほどと推定される。

堆積土は、2層に分層された。断面はレンズ状堆積の様相を示している。このことから、遺構は自然埋没したと考えている。

床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。検出面と床面の比高差は、3～6cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西3.7m以上、南北5.5m以上を測り、やや大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に36°振れている。

カマドは、西周壁で検出された。位置は、ほぼ中央である。煙道部は残っていなかった。燃焼部は、袖長180cm、焚口幅48cmを測る。側壁内面は焼土化していた。袖は、焼土の混じったにぶい黄橙色砂質土で構築されている。床面から3cmの高さが残っていた。

ピット類は検出されていない。

遺物 (図312, 写真590～592)

遺物は、土師器片155, 土製品2点が出土した。図示遺物は9点で、このうち煮炊具4点が遺構に伴っている。それらの平面分布は、カマド右脇に集中している。したがって、貯蔵穴は検出されなかったが、ここに厨房空間が想定できよう。

図312-1～3は、土師器杯になる。1と3は、器形・法量が酷似している。口縁部が内湾する有段丸底杯であり、同一工人の製品と見なされる。2は、須恵器杯蓋模倣の大型品である。底部を欠いている。

4は、小形の土師器甕になる。胴部外面が被熱して荒れている。器形は、口縁部が短く、口径より器高が小さい。

5・6は、中型の土師器甕になる。器形は、胴部中位に少し膨らみがあり、外面はハケメ調整されている。6は、底部外面が剥離した状態で割れている。

7は、土師器甌になる。単孔式の大型品である。口径が大きく、口縁部の大きく開いた器形を呈している。胴部外面はハケメ調整されている。また、口縁部内面にも、横方向のハケメ調整痕が認められる。

8・9は、土製丸玉になる。表面は、ヘラミガキ・黒色処理されている。

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。東側は、破壊されている。上部破壊が著しかったが、カマドは西周壁中央で検出され、その右脇床面から土師器煮炊具のセットが出土した。

営まれた時期は、栗圀式期と考えている。

(菅原)

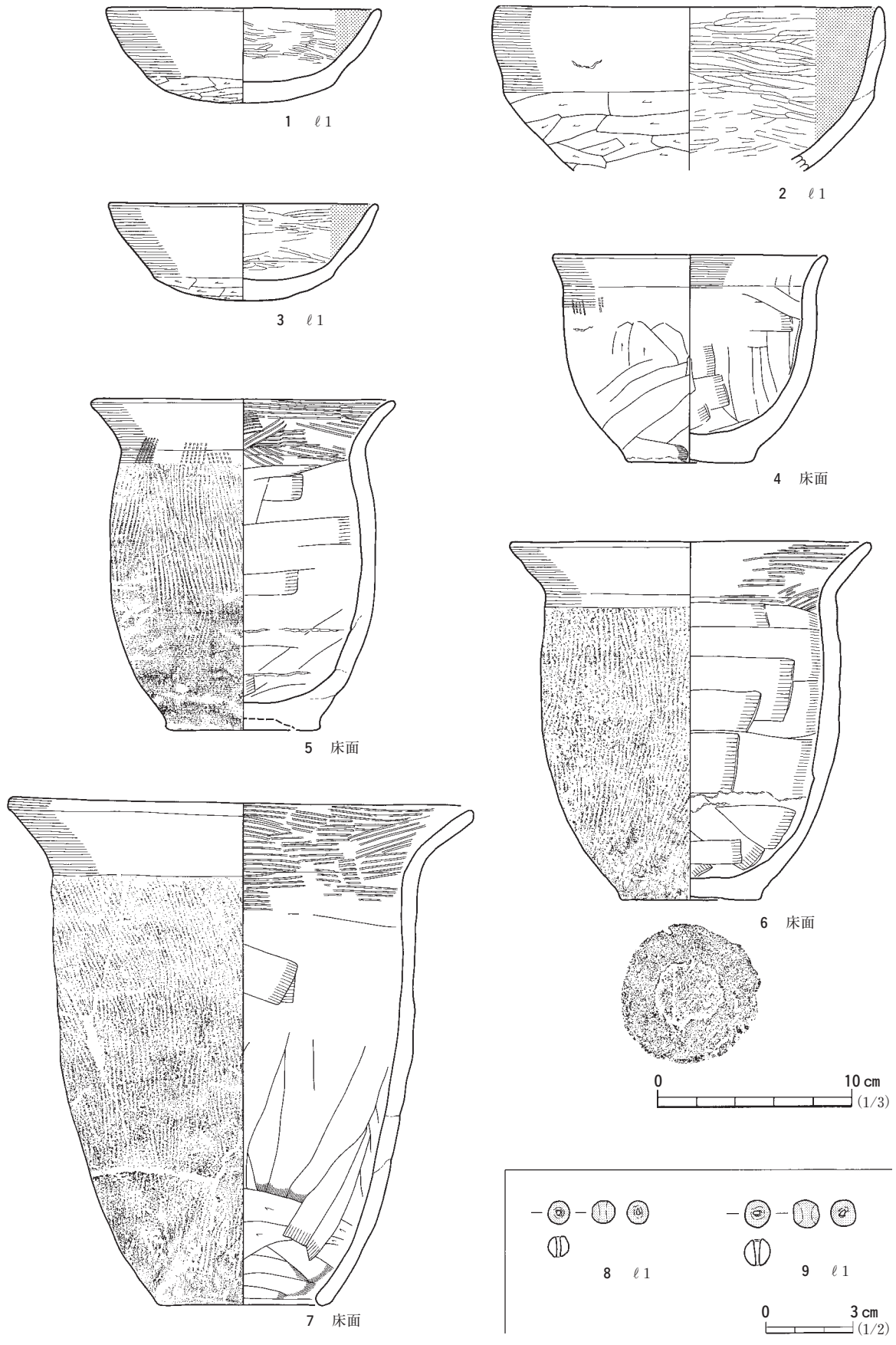


図312 120号住居跡出土遺物

121号住居跡 S I 121

遺 構 (図313, 写真302・303)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。

営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。周囲には、数多くの住居跡が分布している。

重複関係を整理しておくと、本住居跡は113号住居跡に切られ、156・165号住居跡、3号特殊遺構を切っている。残っているのは、床面積の約3分の2と推定される。

堆積土は、にぶい黄褐色砂質土が1層認められた。確証は無いが、この断面の様子から、遺構は自然埋没したと考えている。

床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み締まりは認められなかった。検出面と床面の比高差は、5cm前後を測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西4.2m、南北3.4m以上を測り、中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に14°振れている。

カマドは、北周壁中央で検出された。位置は、左に偏っている。煙道部は、周壁から82cmの長さがある。燃焼部は、袖長65cm、焚口幅38cmを測り、底面は焼土化していた。断ち割りをしたところ、厚さ2～3cmを測った。左袖先端には、土師器甑が埋め込まれていた(図313下段)。袖の補強材に転用されていたものと考えられる。

本住居跡では、カマド右脇で、貯蔵穴と考えられるP1が検出されている。80cm×75cmの不整円形を呈しており、床面から25cmの深さがある。内部の堆積土が、周囲の床面を覆う土層(ℓ2)と同一であることから、住居廃絶時まで開口していたと考えられる。

遺 物 (図314, 写真592・593)

遺物は、土師器片176点が出土した。図示遺物は4点で、そのうち、煮炊具の3点が住居跡に共存している。図314-4の土師器甑は、左袖先端に倒立した状態で出土した。上述したように、カマド補強材に使用されていたと考えられる。

図314-1は、土師器杯になる。器高が低く、口縁部が外反気味に立ち上がる有段丸底杯である。これは、遺構には伴わない。

図314-2・3は、土師器甕になる。どちらも胴部下膨れの長胴甕で、外面はハケメ調整されている。3は、底部外面に木葉痕が観察される。

図314-4は、土師器甑になる。大型の無底式に分類される。胴部外面は、ハケメ調整されている。

ま と め

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。カマドは北周壁に設置されており、その右脇に貯蔵穴が設けられている。

営まれた時期は、床面の遺物から、栗圀式期と考えている。

(菅原)

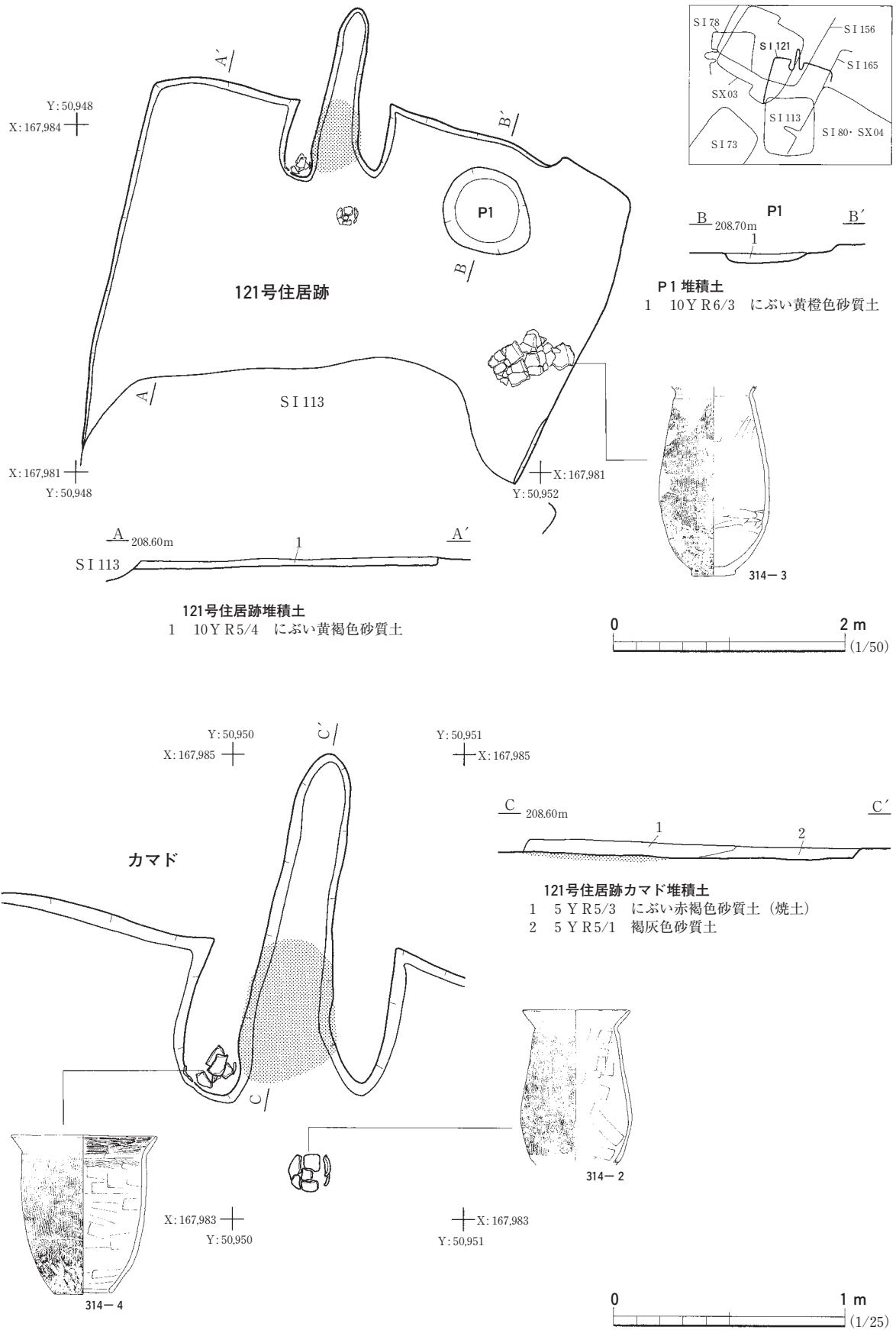


図313 121号住居跡

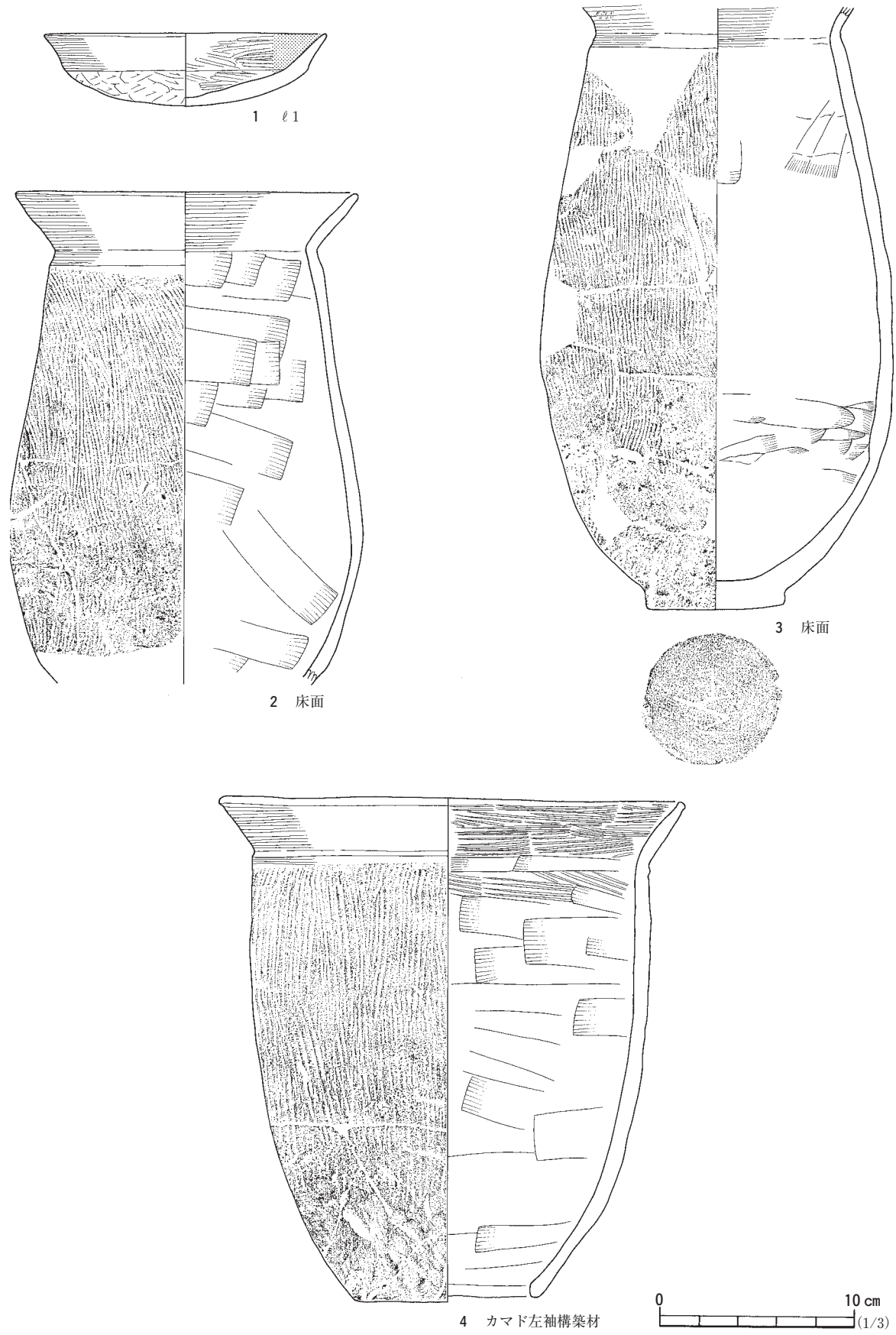


図314 121号住居跡出土遺物

122号住居跡 S I 122

遺 構 (図315, 写真304・305)

本遺構は、M22グリッドでLⅢ上面から検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部である。本住居跡は、96号住居跡に切られている。また、南側は攪乱で壊されており、残っているのは、床面積の約半分と推定される。

堆積土は、3層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は自然埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。踏み締まりは認められなかった。検出面と床面の比高差は、16~18cmを測る。

本住居跡の平面形は、方形基調を呈している。規模は、東西5.4m、南北4.0m以上を測り、高木遺跡では中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線と概ね一致している。

カマドは、北周壁で検出された。位置は右に偏っている。残っていたのは、焼土化した燃焼部底面だけで、あとは96号住居跡に壊されて残っていない。

このカマド右脇で、貯蔵穴P1が検出されている。98cm×85cmの楕円形を呈しており、床面からの深さは、約10cmを測る。後述するように、土師器が一括出土した。

遺 物 (図316, 写真592~594)

遺物は、土師器片145、土製品2点、石製品1点が出土した。このうち10点を図示している。遺構に伴うのは、P1出土の7点で、住居跡の年代決定資料である。出土状況は、貯蔵穴左肩に寄せ集められていたものが、内部に倒れ込んだ様子を示している(図315下段, 写真305c)。

なお、南周壁側の床面に、自然石が散乱していた。

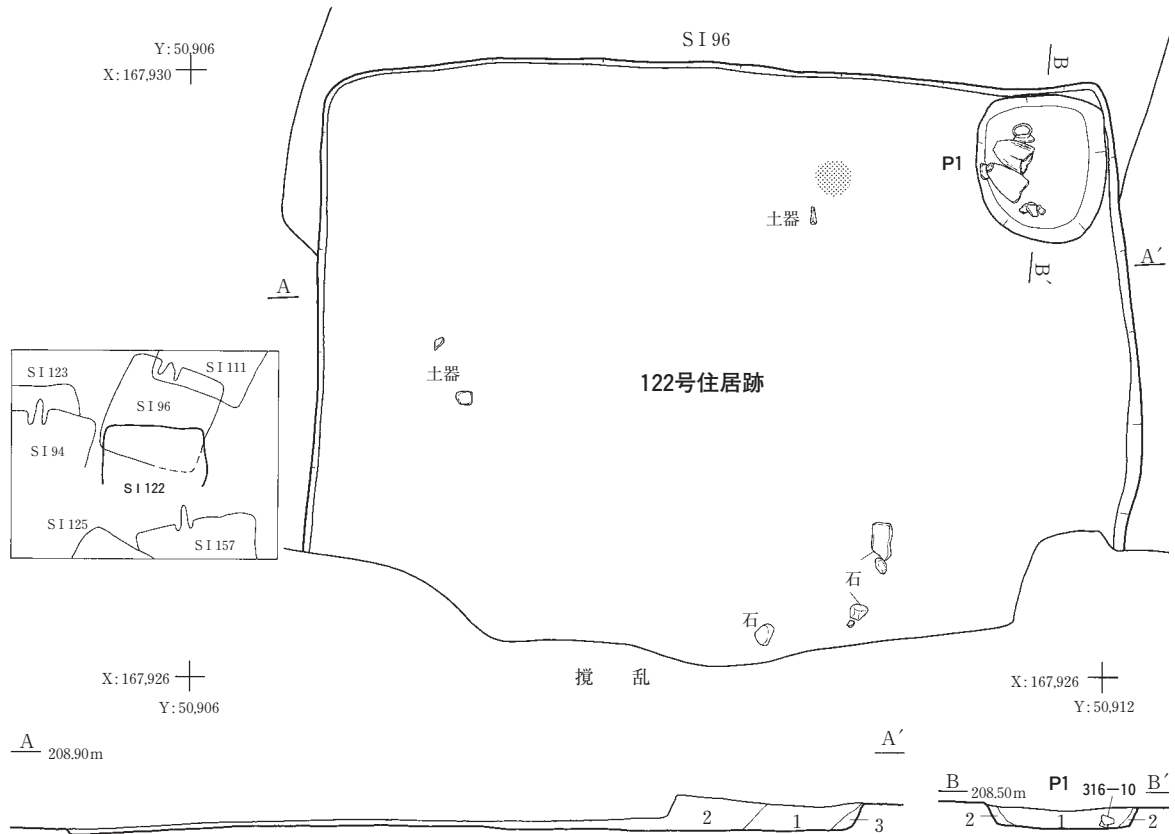
図316-1は、土師器杯になる。口縁部の強く外反した有段丸底杯である。外面はヘラミガキ調整されている。舞台式に比定される。

図316-2・3は、土師器小型甕になる。2の器形は、口縁部が短く外反し、頸部が窄まらない。胴部外面は、ハケメ調整されている。3は、これよりやや大型と思われるが、上半部が無く、全体の様子は分からない。胴部外面は、ナデ調整されている。

図316-5・6は、中~大型の土師器甕になる。5は、頸部の窄まりが弱く、口縁部がなだらかに外反するもので、胴部中位にやや膨らみを有している。長胴甕の範疇で理解できる形態である。胴部外面は、ナデ調整されている。6は、短胴タイプで、口径が胴部径を上回る。胴部中位が強く張り、外面はナデ調整されている。

図316-4は、円筒状土製品になる。両端が欠損している。内面は、簡単にナデ調整されただけで、粘土紐痕がはっきりと残る。外面はハケメ調整されている。

図316-7・8は、土師器ミニチュア土器になる。7は、舞台式の特徴を備えた有段丸底杯である。出土状況は、床面から浮いていたが、本来は遺構に伴っていたのだろう。8は壺の口縁部になる。内外面にヘラミガキ調整が加えられている。



122号住居跡堆積土

- 1 5 Y R 2/1 黒褐色砂質土 (しまりあり)
- 2 5 Y R 3/3 暗赤褐色砂質土 (しまり弱)
- 3 5 Y R 2/3 極暗赤褐色砂質土 (しまり弱)

P1 堆積土

- 1 10 Y R 6/2 にぶい黄橙色砂質土
- 2 10 Y R 6/3 にぶい黄橙色砂質土

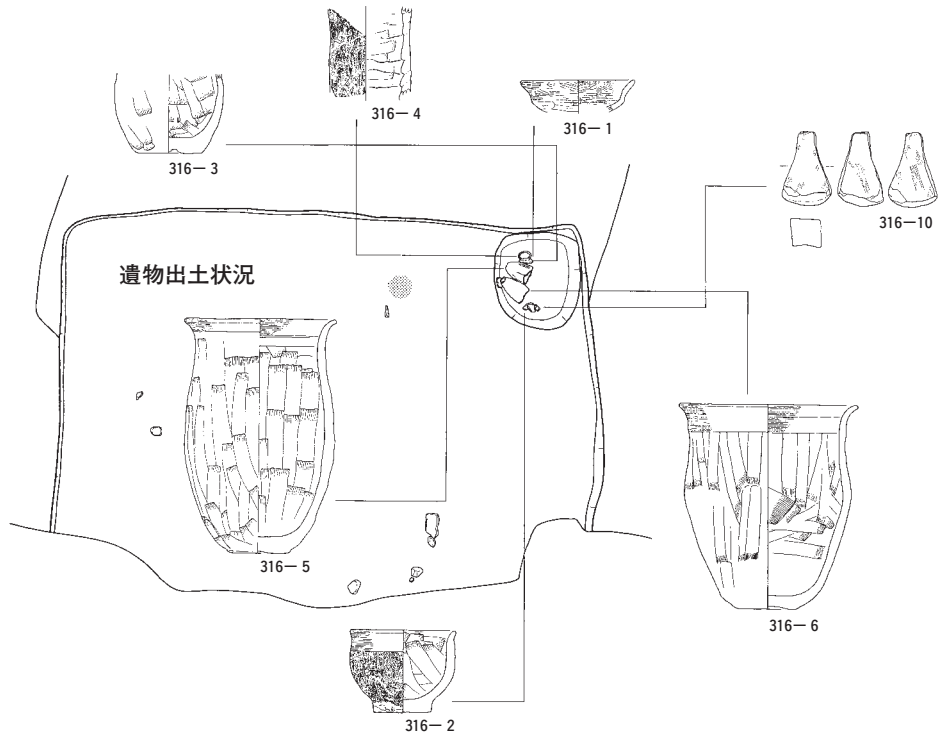


図315 122号住居跡

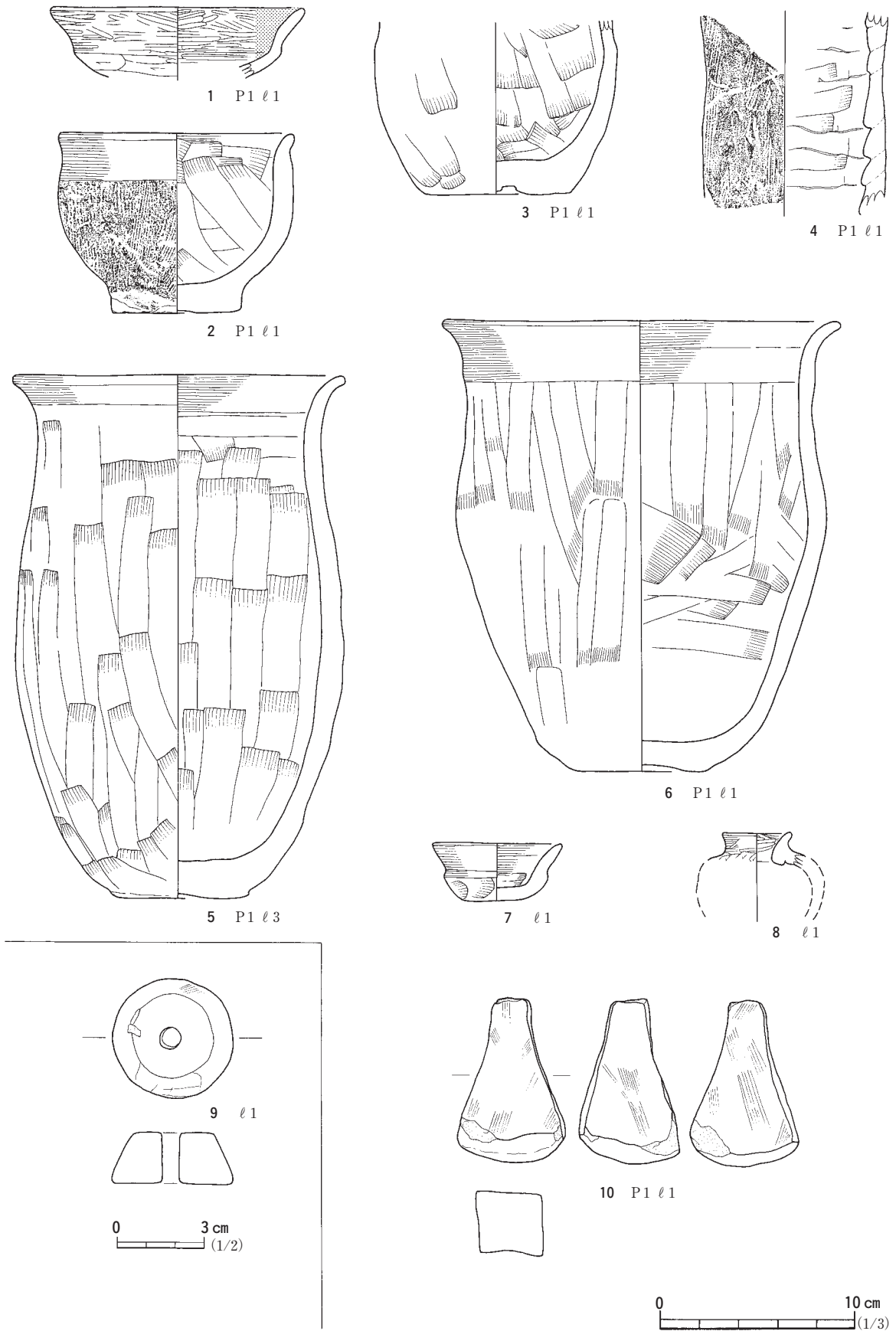


図316 122号住居跡出土遺物

図316-9は、土製紡錘車になる。

図316-10は、砥石になる。分銅状の形態で、断面は正方形を呈する。

ま と め

本遺構は、自然堤防の西斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。遺存状態に、恵まれなかった。それでも、北周壁に設置されたカマドの位置が判明し、右脇に掘られた貯蔵穴から、共伴する土器の一括出土があった。この内容から、本住居跡が営まれたのは舞台式期と考えている。(菅原)

123号住居跡 S I 123

遺 構 (図317, 写真306・307)

本遺構は、M22グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面落ちぎわにあたり、上部削平が著しい。遺構は、高木遺跡における住居跡分布の西限

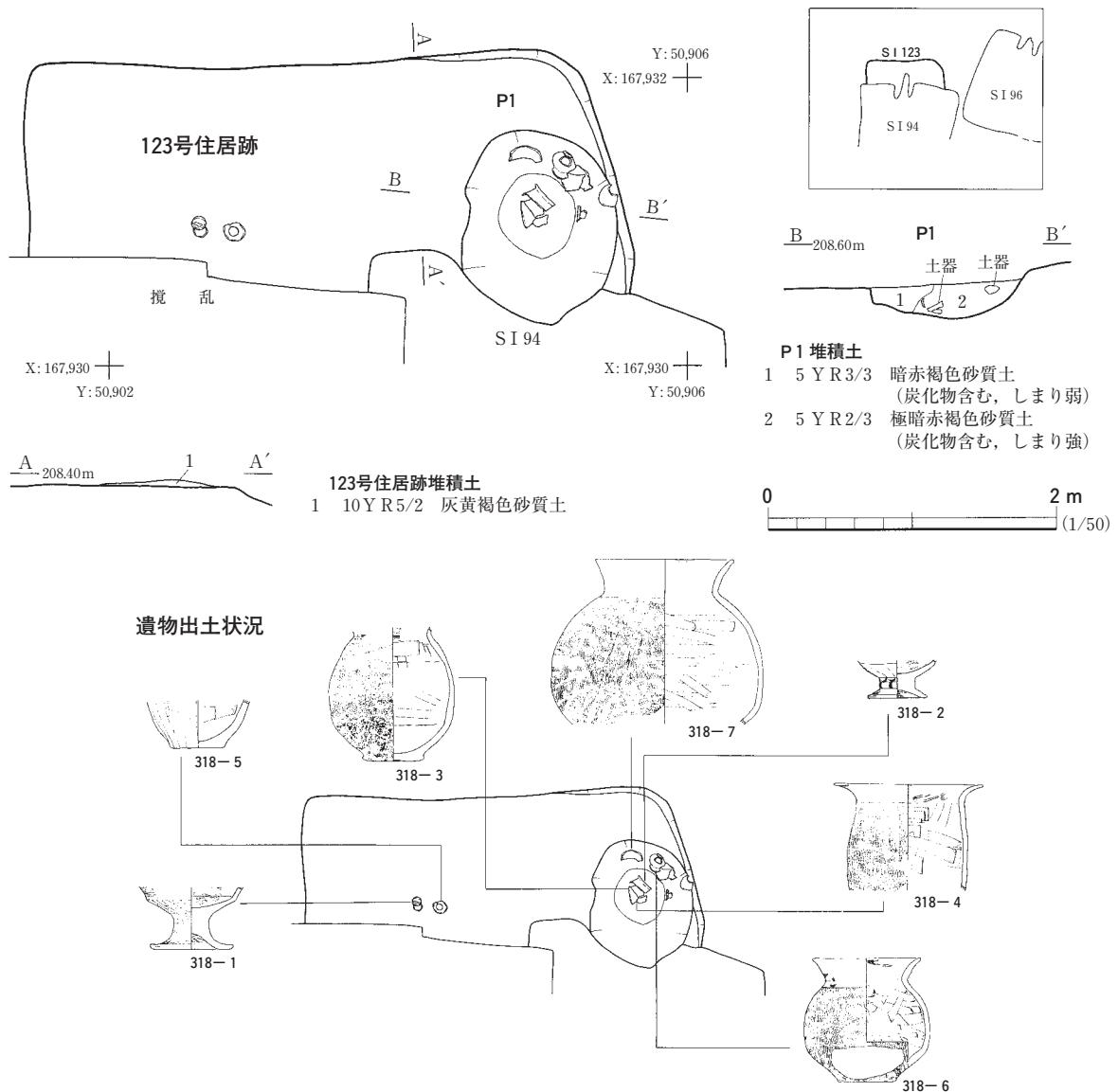


図317 123号住居跡

の1つをなしている。

本住居跡は、94号住居跡を切っている。しかし、既に、検出段階で床面のほとんどが露呈していたため、94号住居跡の方から先に調査に着手してしまった。検出できたのは、推定床面積の約3分の1程度である。

堆積土は、灰黄褐色砂質土が1層残っていた。人為堆積土か自然堆積土かは、不明である。床面は、貼床されておらず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。踏み締まりは、北周壁中央付近で認められたが、それほど顕著ではなかった。検出面と床面の比高差は、最大で3cmを測る。

本住居跡の平面形は、方形基調を呈している。規模は、東西4.1m、南北1.6m以上を測り、高木遺跡では中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線と概ね一致している。

カマドは、検出されなかった。ただ、貯蔵穴の位置と、床面の遺物出土状況から、北周壁に設置されていた可能性が高いと思われる。

貯蔵穴には、住居跡北東隅で検出されたP1が該当する。長軸1.3m×短軸1.1mの楕円形を呈しており、床面からの深さは、23cmを測る。ここで土師器の一括出土がみられた。

遺物 (図318, 写真594・595)

遺物は、土師器片56点が出土した。図示遺物は8点あり、図318-8を除く7点が遺構に共伴している。それらの平面分布は、貯蔵穴に集中しており、5点で最も多い。口縁部を底面中央に向けて倒れ込んでおり、本来は、貯蔵穴の肩部に置かれていたと推定される。他の2点は、カマド推定位置の手前で出土している。

図318-1・2は、土師器高杯になる。どちらも有段丸底杯を脚部に乗せたもので、口縁上部を欠いている。1は、舞台式後半～栗圀式前半の特徴を備えている。脚部が中実で、やや細長く、裾が大きく広がっている。これに対して、2は中実の短脚で、1より古い要素を備えている。

図318-4は、長胴タイプの土師器甕になる。口頸部が、「く」の字状に折れ曲がり、胴部外面はハケメ調整されている。この特徴から、栗圀式に比定される。

図318-5は、土師器甕の底部片になる。器形全体の特徴は、知ることができない。胴部外面は、ヘラケズリされている。

図318-3・6・7は、土師器球胴甕になる。器面調整は、胴部外面ハケメで共通する。3・6は、器高20cm以下の中型品である。3の胴部は、当該器種としては細めであり、煮炊用甕との中間的な様相を備えている。6は、胴下部が焼成後に穿孔されている。7は、器高25cmを越える大型品である。底部を欠く。

図318-8は、有段丸底の土師器杯になる。口縁部は、内湾気味に立ち上がっている。この土器は、遺構には、共伴していない。

まとめ

本遺構は、自然堤防の西斜面落ちぎわに営まれた堅穴住居跡である。遺構上部の削平が著しく、詳細は知ることができなかった。

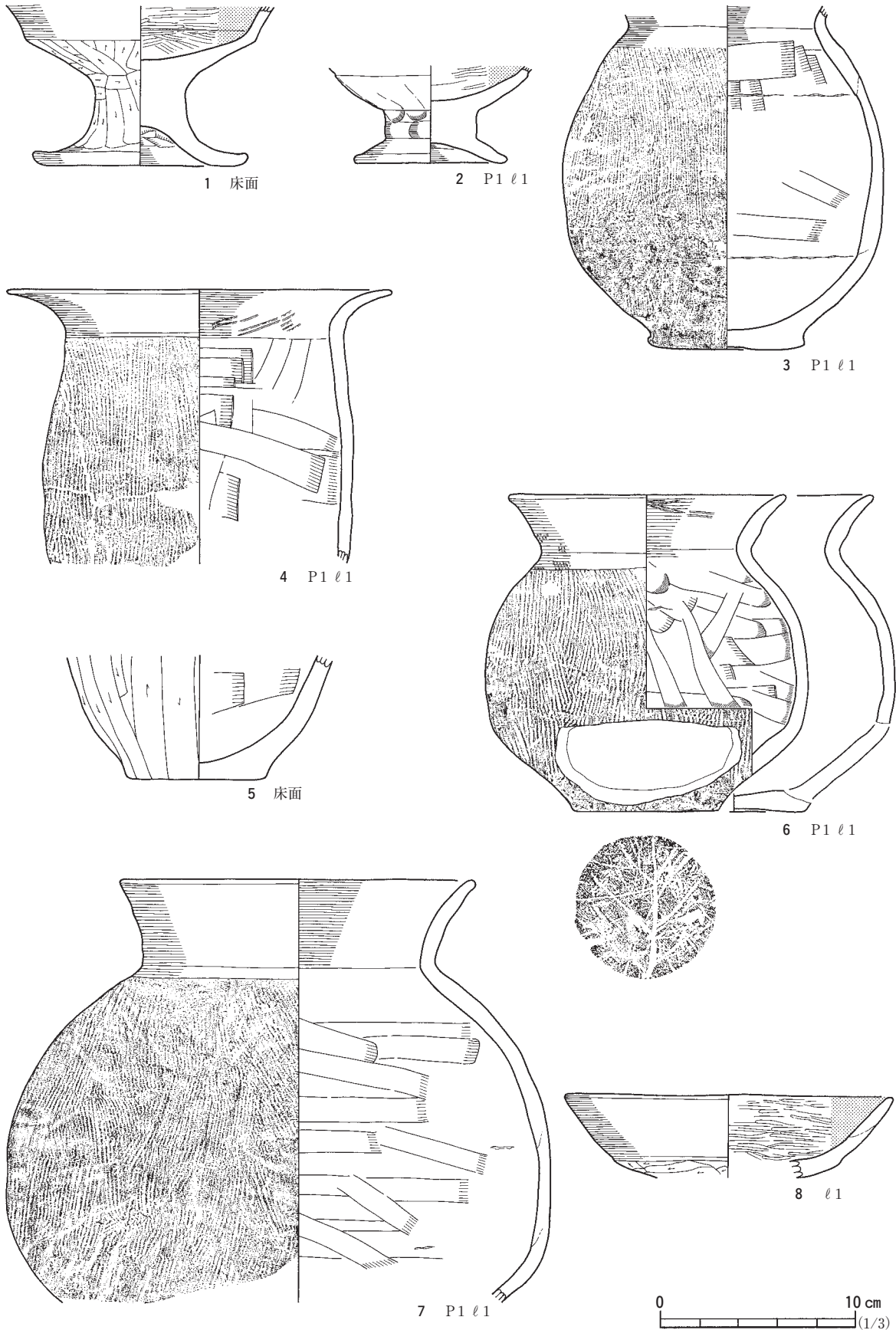


图318 123号住居跡出土遺物

遺物の内容は、古い要素がみられるものの、全体としては栗圀式の範疇で捉えて問題ないと考えている。したがって、本住居跡が営まれた時期は、当該型式期に求められる。(菅原)

124号住居跡 S I 124

遺 構 (図319, 写真308・309)

本遺構は、調査区中央のやや南になるN22グリッドに位置している。LⅢ上面において検出された。カマド・柱穴は確認されなかったが、周辺の住居跡に形状や規模が類似していることから、竪穴住居跡として報告する。

本住居跡は、28号住居跡と重なるように重複している。新旧関係は、それよりも古い。本住居跡の南側および東側では、住居跡が高い分布密度で広がっている。

遺構内堆積土は3層に区分した。自然堆積土と判断している。最下層の③は、ラミナ状の薄層で、床面にへばりつくように堆積していた。

本住居跡は、検出時に掘り過ぎたため、西周壁を検出することができなかった。平面形は、残存部の状態から、比較的整った方形をなしていたものと考えられる。

住居跡と方位の関係を東周壁で見ると、真北から28°ほど東に傾いている。規模は、東西3.1m以上、南北3.8mである。周壁の立ち上がりは全体になだらかで、検出面から床面までの深さは、東周壁で最大20cmを測る。

床面は、ほぼ平坦に整えられている。貼床は認められないが、全体に踏み締められていた。

カマドは、検出されなかった。破壊された西周壁に設置されていたと考えている。

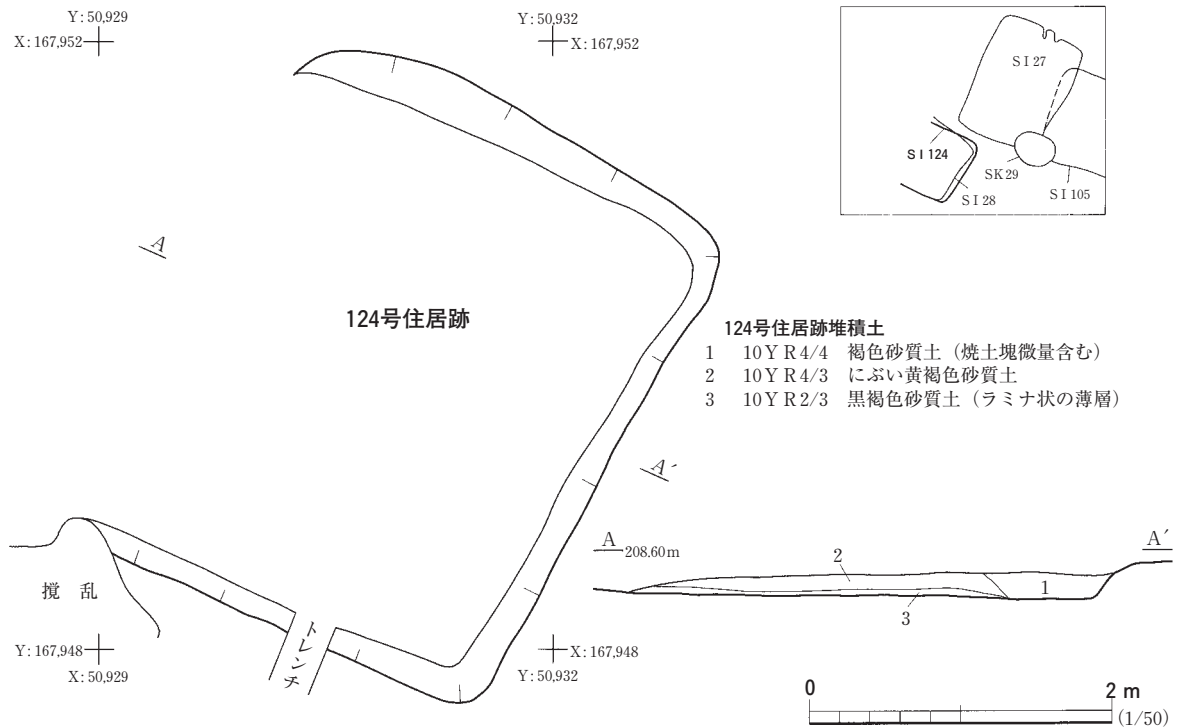


図319 124号住居跡

ピット類は検出されていない。

遺物 (図320)

本住居跡では、土師器片87点
が出土した。図示遺物は、2点
ある。どちらも、 $\ell 2$ から出土
したもので、遺構には伴っていない。

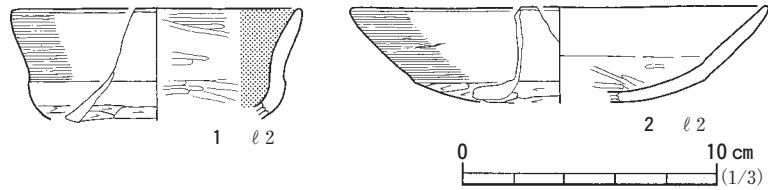


図320 124号住居跡出土遺物

図320-1・2は、有段丸底の土師器杯になる。1は、口径が小さく、急な角度で口縁部が立ち上がる。2は、口縁部が大きく開いている。

まとめ

本住居跡は、遺存状態が悪かった。カマドも検出されていない。

営まれた時期は、重複遺構の関係から、栗圀式期と推定される。

(菅原)

125号住居跡 S I 125

遺構 (図321・322, 写真310・311)

本遺構は、M22・M23グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部付近である。重複関係は、145・157号住居跡を切っている。遺存状態に恵まれ、周壁が良く残り、平面プラン全体が捉えられた。

堆積土は、4層に分層された。断面は典型的なレンズ状堆積の様相を呈している。このことから、遺構は、自然埋没したと考えている。床面は、貼床されておらず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。踏み締まりは、認められなかった。検出面と床面の比高差は、20cm前後を測る。

本住居跡の平面プランは、南北に長い長方形基調を呈している。規模は、東西4.3m、南北5.6mを測り、高木遺跡では中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に30°振れている。

カマドは、南周壁中央で検出された。煙道部は、周壁から51cmの位置で無くなっており、そこから上へ伸びる構造であった可能性も、想定される。燃燒部は、袖がまったく検出されず、住居廃絶時に取り壊されたと考えられる。この点は、住居跡が残り良好であったのに、遺物が極端に少ないことと、対応しているのであろう。

ピットは、6個検出されている。径30~47cmの円形プランで、床面からの深さは16~22cmの範囲にまとまる。それらは、周壁近くに分布が偏り、直線状に並ぶことから、柱穴の可能性が高いと思われる。しかし、4本柱の配置にはならず、組み合わせ不明である。P5は、カマド脇に掘られているので、貯蔵穴の可能性も考えられるが、規模が小さすぎる。

遺物 (図322)

遺物は、土師器片243点が出土した。この数は、遺構の残りが良好であったことを勘案すると、あまりにも少なすぎる。調査所見で、住居廃絶時にカマドが壊されたことが判明しているため、その

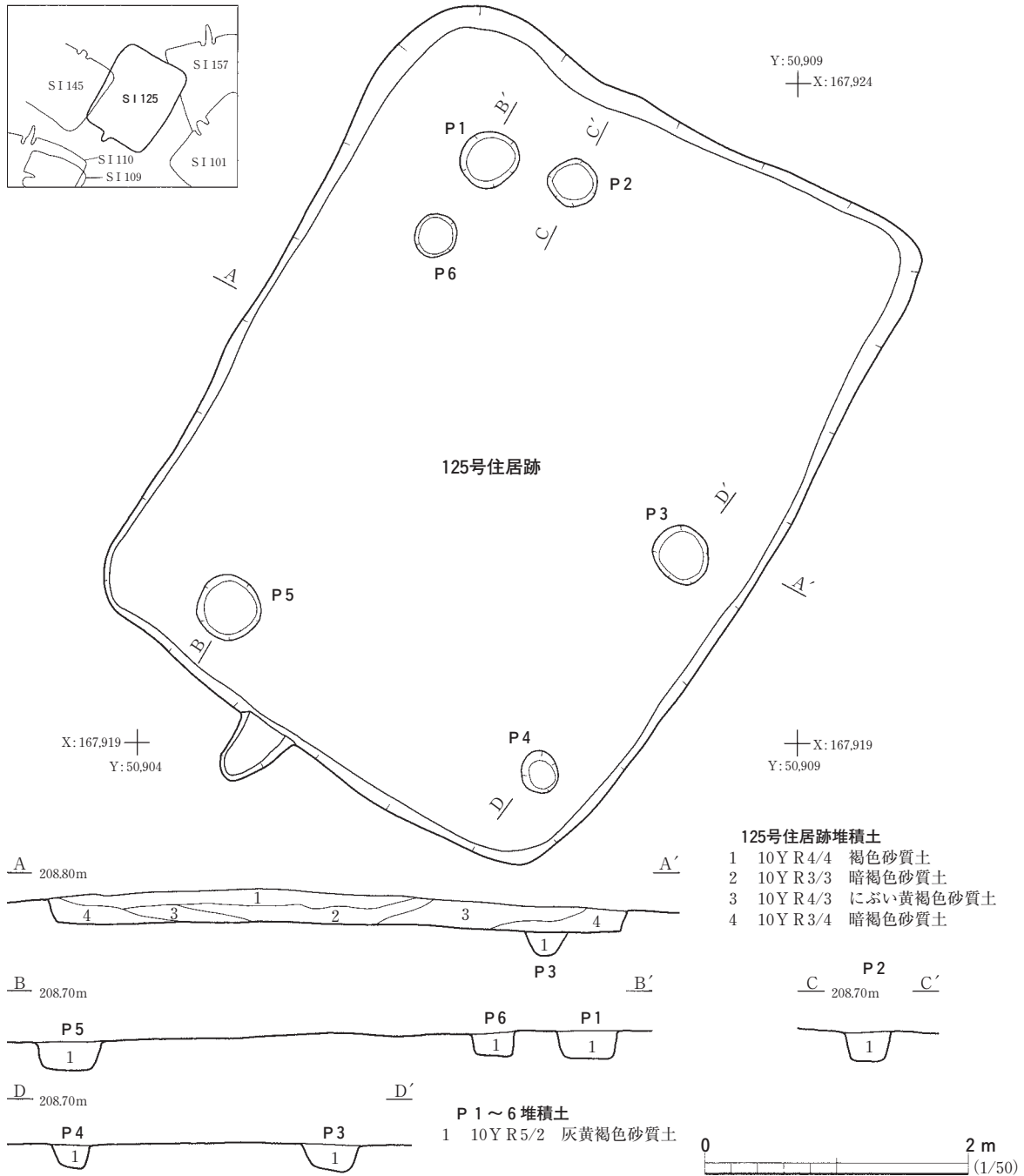


図321 125号住居跡

際に土器類は外に持ち出されたと考えられる。なお、図示遺物の2点は、遺構に伴っていない。

図322-1は、土師器杯になる。口縁部の内湾する有段丸底杯で、外面はヘラミガキ調整されている。

図322-2は、須恵器杯の小破片である。飛鳥・藤原宮分類の杯Gを想定して図化した。あるいは、同分類の杯H蓋になるかも知れない。外面は、手持ちヘラケズリされている。

まとめ

本遺構は、自然堤防の西斜面肩部付近に営まれた竪穴住居跡である。遺存状態は、良好であった。

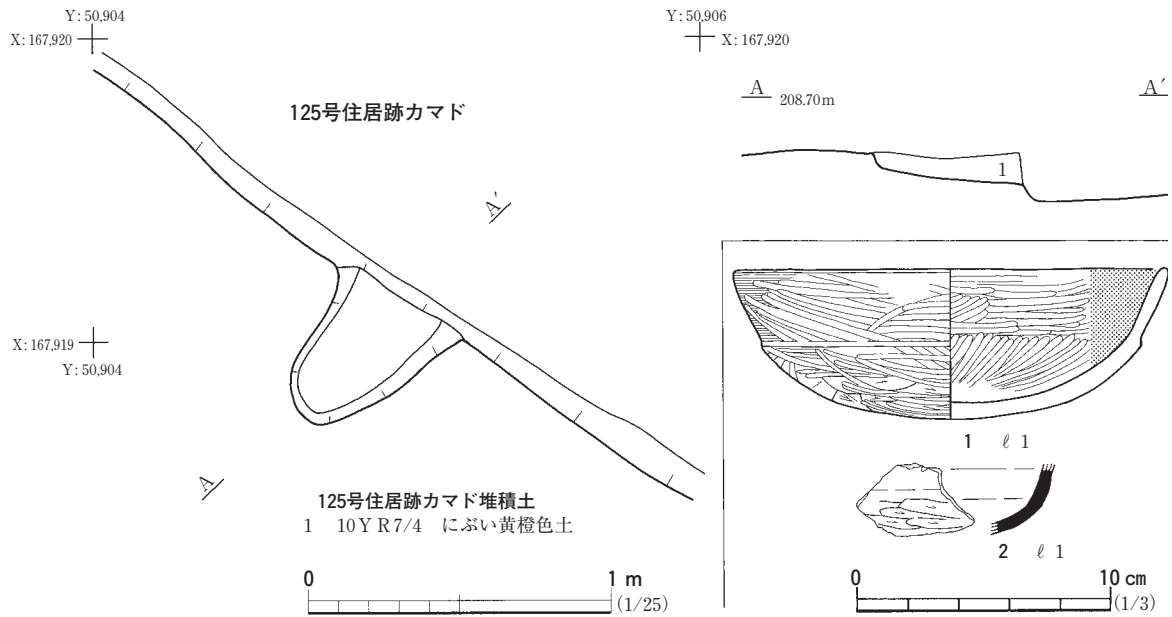


図322 125号住居跡カマド・出土遺物

南北に長い長方形プランを有しており、規模は中型である。カマドは、住居廃絶時に取り壊され、その際に、土器類は外に持ち出されたと考えられる。

本住居跡が営まれたのは、重複遺構の関係から、栗田式期に上限が求められる。(菅原)

126号住居跡 S I 126

遺 構 (図323, 写真312・313)

本遺構は、M22グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部である。

本住居跡は、111号住居跡に切られているのに加え、遺構上部の削平が著しく、西側の周壁と床面

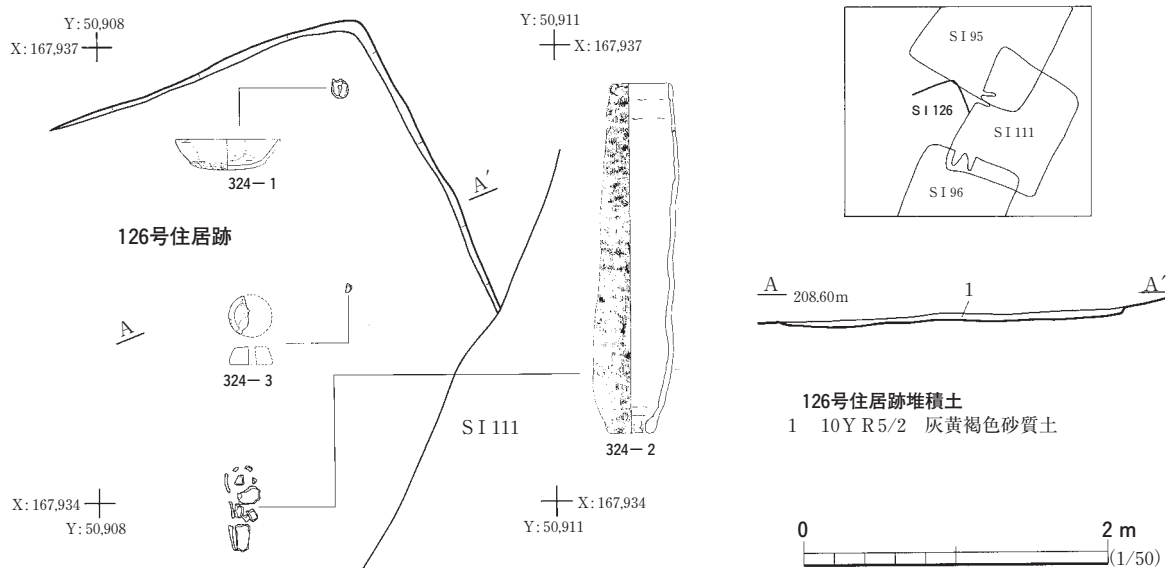


図323 126号住居跡

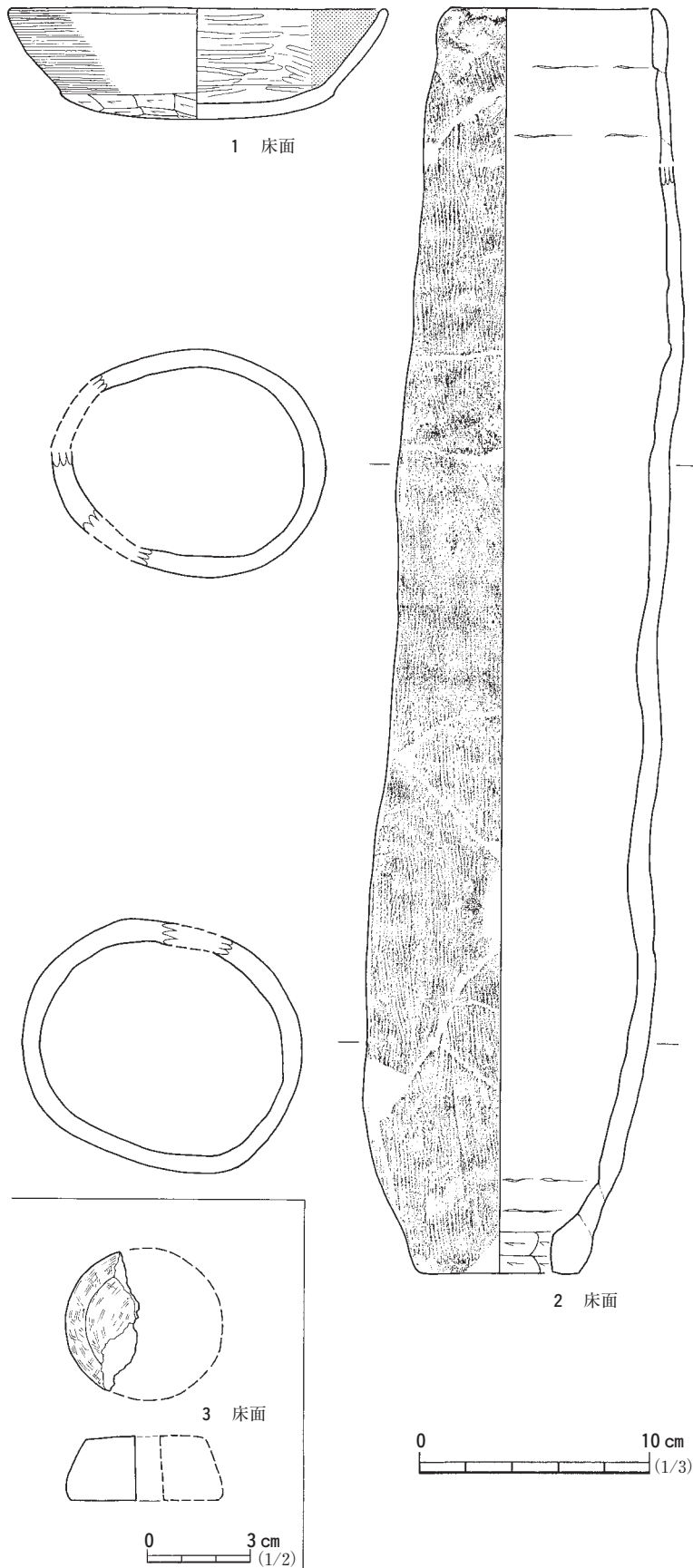


図324 126号住居跡出土遺物

が失われていた。検出されたのは、住居跡北東隅付近だけであり、これは推定床面積の約4分の1にあたる。

堆積土は、灰黄褐色砂質土が1層みられた。自然堆積土か人為堆積土かは、不明である。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。

検出面と床面の比高差は、最大で3 cmを測った。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西3.5m以上、南北2.2m以上を測る。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に67°振れている。

カマド構築位置は不明である。

遺物 (図324, 写真595)

遺物は、土師器片107点、土製品1点、石製品1点が出土した。遺構の残りが悪かった割に、床面の遺物3点が図示できている。

図324-1は、有段丸底の土師器杯になる。口縁部は、内湾して立ち上がる。

図324-2は、円筒状土製品になる。全長の分かる貴重な資料で、カマド構築材であったと推定される。外面は、ハケメ調整されている。

図324-3は、石製紡錘車になる。欠損部が多い。

ま と め

本遺構は、自然堤防の西斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。遺構は残りが悪く、カマドの位置も確かめることができなかった。

営まれたのは、床面の遺物から栗圀式期と考えている。

(菅原)

127号住居跡 S I 127

遺 構 (図325, 写真314・315)

本住居跡は、調査区南側のM23・24グリッドに位置する。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の狭い平坦部の微高地上に立地している。遺構はLⅢ上面で検出したが、遺構検出時に掘り過ぎてしまい、住居跡西側は遺存していない。15・26号土坑と重複関係にあり、本住居跡のほうが古い。

また、北側に82号住居跡、東側に84号住居跡が隣接している。

遺構内堆積土は黒褐色砂質土1層で、堆積過程は不明である。本住居跡の平面形は、遺存状況から方形を呈していたと思われる。規模は、遺存する北側の壁で約1.8m、東壁約3.6mを測る。遺存する壁は、いずれも急角度で立ち上がっている。床面からの高さは、残りの良い東側の壁で15cmを測る。床面はほぼ平坦に作られていた。貼床は施されていない。

本住居跡からは、カマドや柱穴などの施設は検出されなかった。

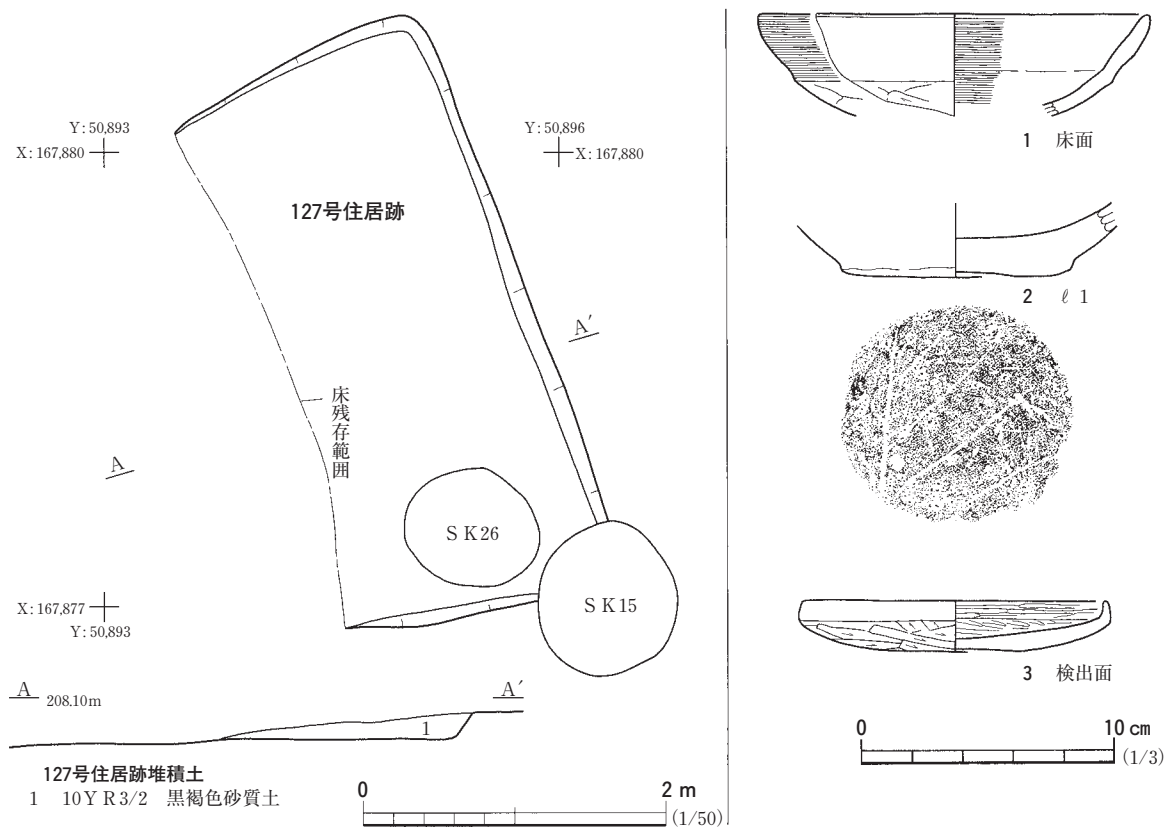


図325 127号住居跡・出土遺物

遺物 (図325, 写真595)

遺物は検出面から、床面にかけて出土している。内訳は、土師器片73点、須恵器片1点である。図325-1・3は土師器杯である。1は、体部から口縁部にかけて緩やかに外傾しながら立ち上がる器形になると思われる。3は器高が低く、口縁端部が直立気味に立ち上がるのが特徴的である。底部は上底气味となる。器形的特徴や黒色処理が認められないことなどから、在地の土師器杯よりむしろ、外来系の土器としてとらえておきたい。2は、甕の底部付近の資料である。底部はやや上底になり、底面には木葉痕が認められる。

まとめ

本住居跡は、遺存状況が悪く、検出できたのは南・北・東壁一部だけである。平面形は遺存状況から、方形を呈していたと考えられる。

本住居跡に伴う施設などは検出されなかった。住居跡の遺存状況は悪いものの、本住居跡から、外来系の土師器杯が出土している点は興味深い。本住居跡の所属時期は、出土遺物などから7世紀代と考えている。(大河原)

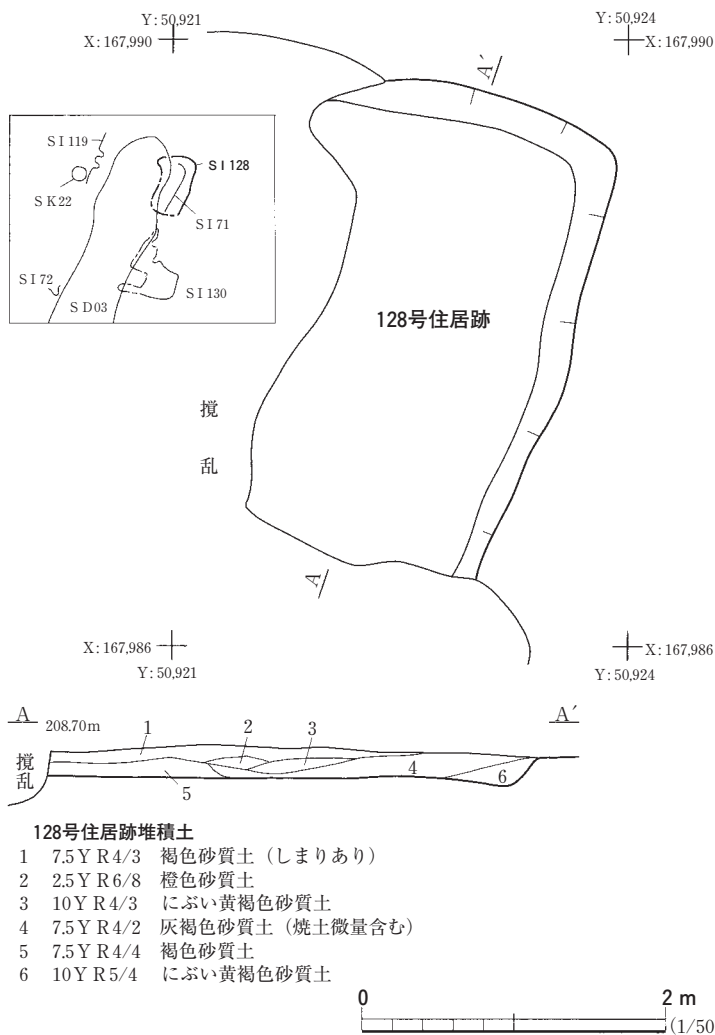


図326 128号住居跡

測る。検出面から床面までの深さは、16～23cmを測り、周壁は、比較的緩やかな角度で立ち上がっている。床面はわずかな凹凸がみられるものの、ほぼ平坦につくられている。

住居跡内施設は確認できなかった。

遺物は、出土していない。

ま と め

本住居跡は残りが悪く、カマドも検出されていない。また、遺物の出土にも恵まれなかった。

営まれた時期は、重複遺構から、栗圀式期に上限が求められる。(佐藤)

129号住居跡 S I 129

遺 構 (図327, 写真317・318)

本遺構は、N22グリッドで検出された堅穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。周囲には数多くの住居跡が密集している。重複関係を整理しておくと、27・105・136号住居跡、29号土坑より古く、164・169号住居跡より新しい。

堆積土は5層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈している。このことから、遺構は自然埋没したと考えている。

床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。南東隅に焼土ブロックの広がり認められたが、性格を明らかにすることはできなかった。検出面と床面の比高差は、15～18cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。規模は、東西3.2m以上、東西9.5mを測り、大型である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に30°振れている。

カマドは、検出されていない。また、ピット類も検出されなかった。

遺 物 (図328, 写真595・596)

遺物は、土師器片384点、鉄製品1点が出土した。東周壁ぎわで、集中的な遺物の分布がみられ、図328に図示することができた。しかし、層位的にはⅡであり、確実な共伴資料とはならない。

図328-1・2は、土師器杯になる。1は、須恵器模倣杯に分類されるもので、外面もヘラミガキされている。2は、口縁部が外反する有段丸底杯である。口径が大きい。内面は、ナデ仕上げであり、ヘラミガキ・黒色処理は行われていない。

3・5は、土師器高杯になる。3は、杯部の破片となるもので、口縁部の立ち上がりが急で、端部は外反している。5は、中実の脚部である。端部はまくれない。

4は、土師器手づくね土器になる。指で簡単な成形が行われただけで、器面調整は一切認められない。

6・8は、大型の土師器甕になる。8は、器高35cmを超えるもので、細長い胴部を有している。頸部は直立し、口縁部は外反している。胴部外面の調整は、ハケメである。8は、上下を欠いた胴部片のため、器形全体の特徴が分からない。外面はナデ調整されている。

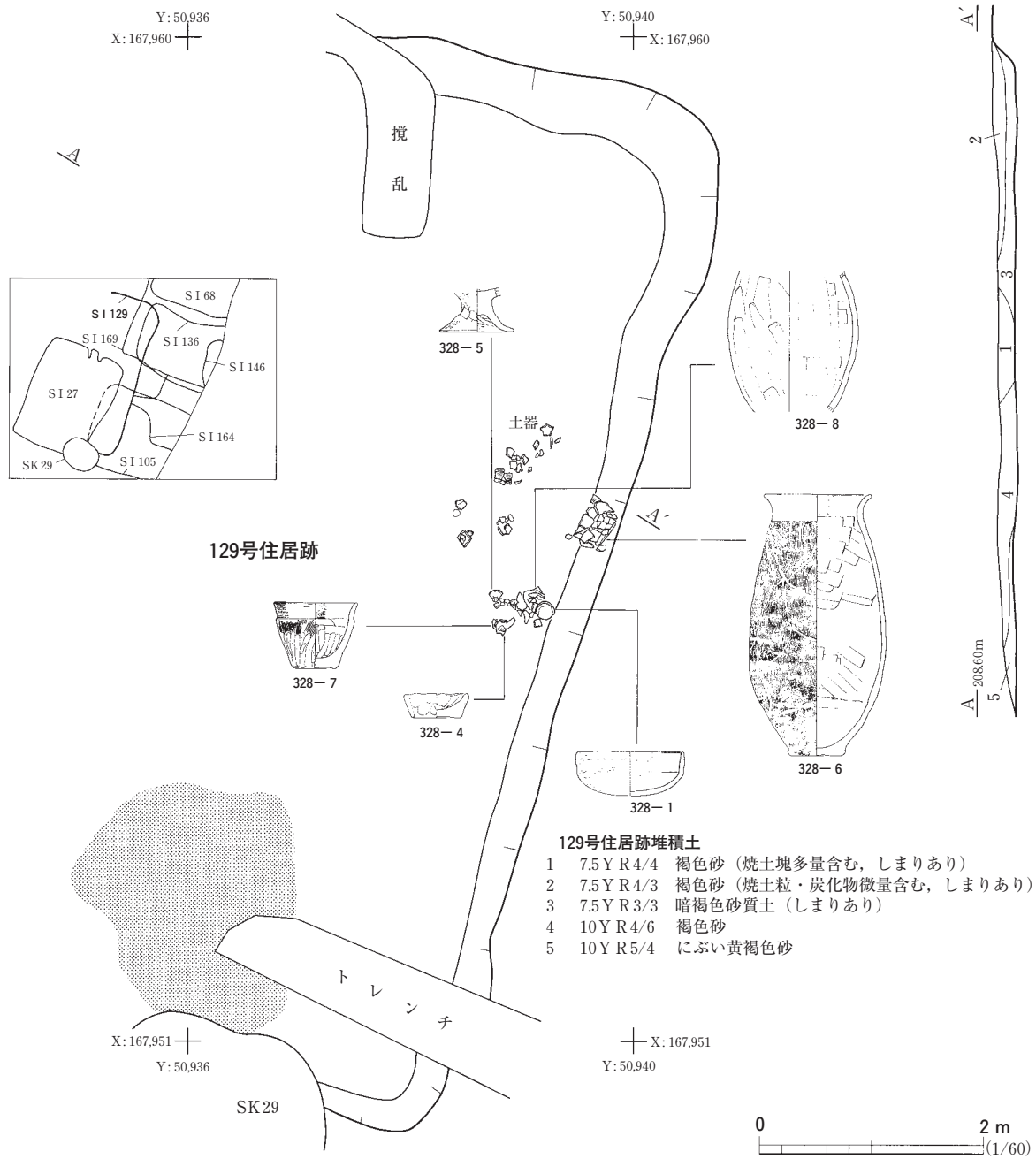


図327 129号住居跡

7は、土師器小型甕になる。器形は、口径が大きく、全体に下に窄まっている。胴部外面は、ハケメ調整の後、縦位にヘラケズリされている。

9は、鉄製刀子の破片になるとみられる。

まとめ

本遺構は、特大の規模を有する竪穴住居跡である。しかし、遺存状態に恵まれず、東周壁側だけが検出された。このため、遺構内容の詳細については、ほとんど知ることができなかった。

遺物は、東周壁ぎわで集中的な分布が認められた。

本住居跡が営まれたのは、舞台式期後半～栗圀式期と考えている。

(菅原)

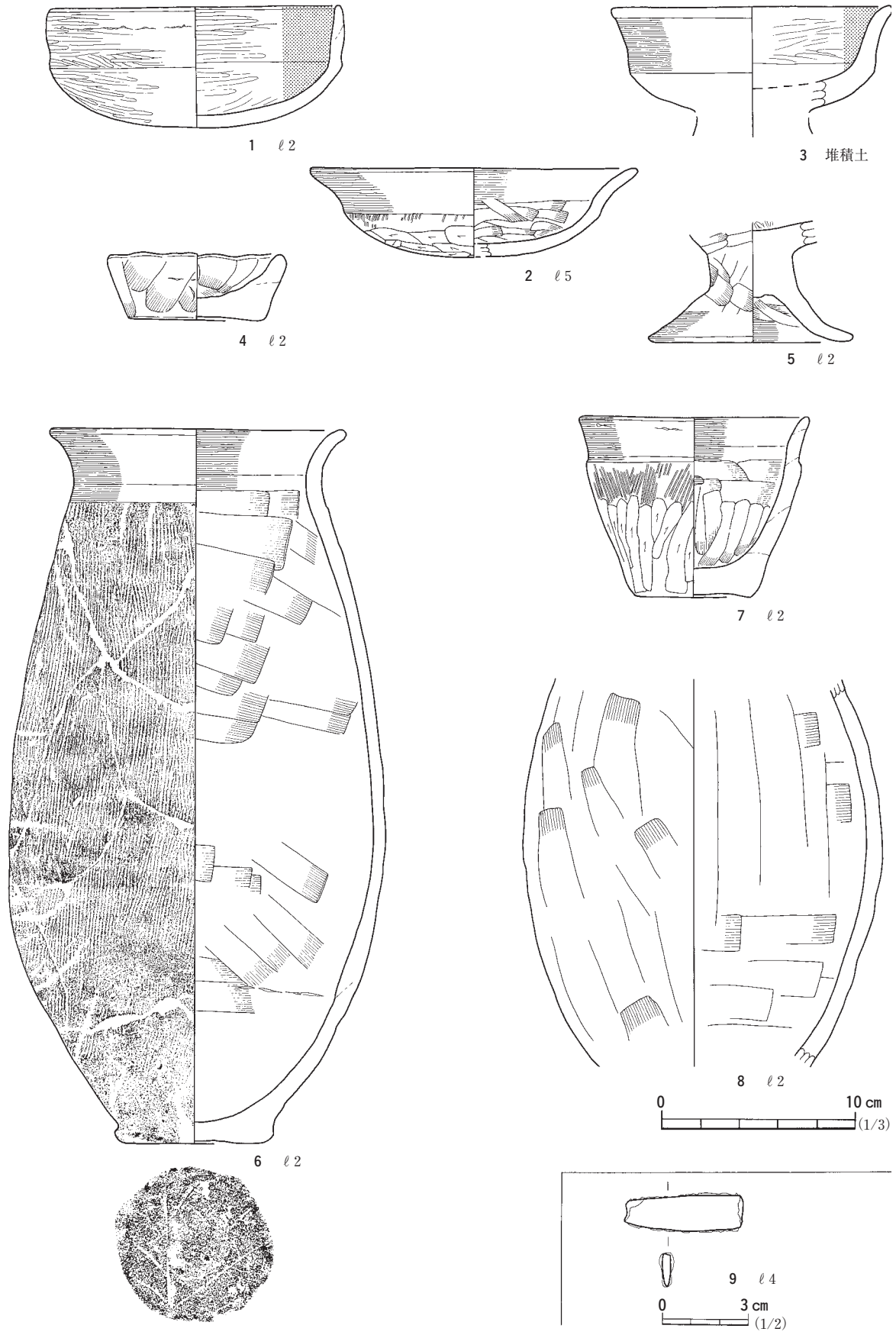


图328 129号住居跡出土遺物

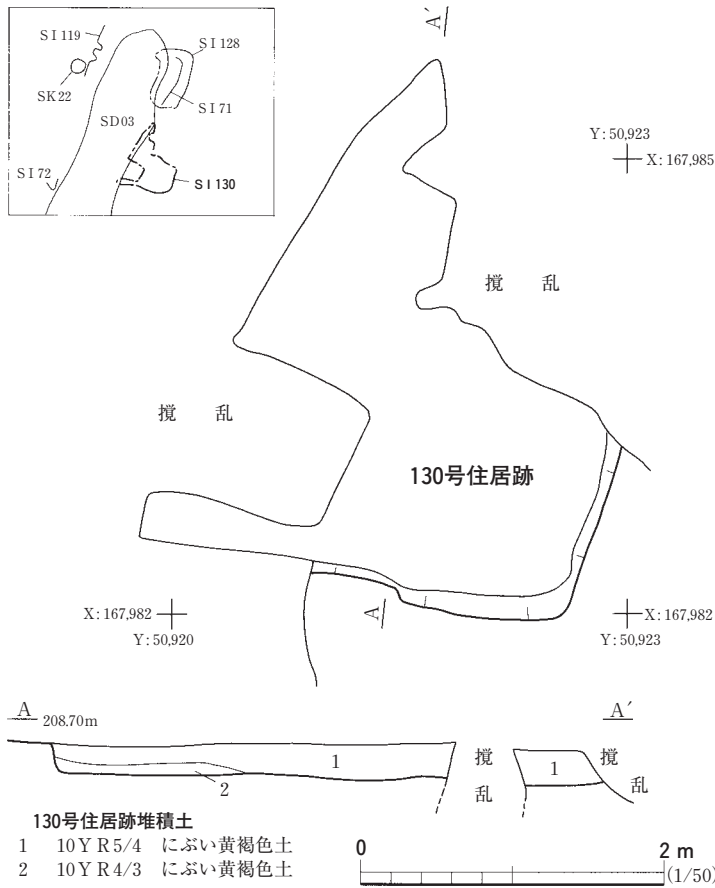


図329 130号住居跡

したと考えている。

遺存する周壁の状態から、本住居跡の平面形は、方形を呈していたと推測する。

住居跡と方位の関係を東周壁で見ると、真北から18°ほど東へ傾いている。規模は、東周壁から遺存している床の西端までの長さが2.8m、南周壁から遺存している床の北端までの長さが3.5mである。

検出面から床面までの深さは、17~20cmを測る。周壁は、比較的急な角度で立ち上がっている。床面は、ほぼ平坦で、阿武隈川側に向かって若干下がり気味である。

住居跡内施設は検出されなかった。

遺物 (図330)

遺物は土師器片15点が出土した。

図330-1は、土師器甕の底部片である。堆積土から出土した。非ロクロ調整で、内面にナデ調整痕が観察される。

まとめ

本遺構は、遺存状態が悪かった。カマドも検出されていない。また、良好な遺物の出土にも恵まれなかった。

営まれた時期は、不明である。

(佐藤)

130号住居跡 S I 130

遺構 (図329, 写真319)

本住居跡は阿武隈川に沿った自然堤防の西端に位置しており、M21・N21グリッドにまたがって検出された。

検出層位は、LIVである。

本住居跡は、西側を3号溝跡によって壊されている。また、本住居跡の北約1mの地点に、71号住居跡と128号住居跡があるが、新旧関係は不明である。

遺構内堆積土は2層に区分した。攪乱が激しく、全体の堆積過程を推測するのは困難であるが、断面がレンズ状の堆積を示しているようにみえることから、住居跡は自然に埋没

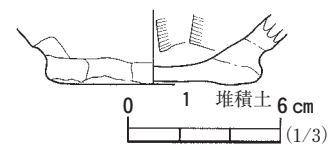


図330 130号住居跡出土遺物

131号住居跡 S I 131

遺 構 (図331, 写真320・321)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。北周壁と東周壁は、攪乱により破壊されていた。

営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。周囲には数多くの住居跡が密集している。

重複関係を整理しておくと、本住居跡は31・36号住居跡、13号土坑より古く、162号住居跡より新しい。

本住居跡は、検出過程で堆積土をすべて掘り上げてしまった。このため、直接床面を検出しており、埋没過程の記録はとれていない。

床面は、貼床されず、掘形底面のLⅣがそのまま平坦に整えられている。検出範囲では、とくに顕著な踏み締まりは認められなかった。検出面と床面の比高差は、遺存していた西周壁と南周壁で、15～18cmの高さを測った。

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。

規模は、東西4.3m以上、南北6.9m以上を測り、大型である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に25°振れている。

カマドは、西周壁に設置されていた。検出されたのは、左袖の一部だけで、遺存状態は不良であった。左袖は、長さ53cmを測り、床面から17cmの高さが残っていた。構築土には、焼土が含まれている。

ピットに登録しなかったが、北西隅付近の床面で、浅い窪みが検出された。性格については、不明である。

遺 物 (図331, 写真596)

遺物は、土師器片17点、石製品1点が出土した。

図331-1は、攪乱から出土した石製紡錘車である。したがって、遺構に伴う資料ではない。断面は、台形を呈している。表面には、仕上げ工程の際に生じたものと考えられる擦痕が、全体に認められる。

ま と め

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。遺存状態が悪かった。

本住居跡は、検出段階で堆積土を掘りあげてしまい、埋没過程の記録がとれていない。また、遺物にも恵まれなかった。

カマドは西周壁で検出され、左袖が残存していた。しかし、詳細は不明である。

時期は、重複遺構から、栗圀式期に下限が求められる。

(菅原)

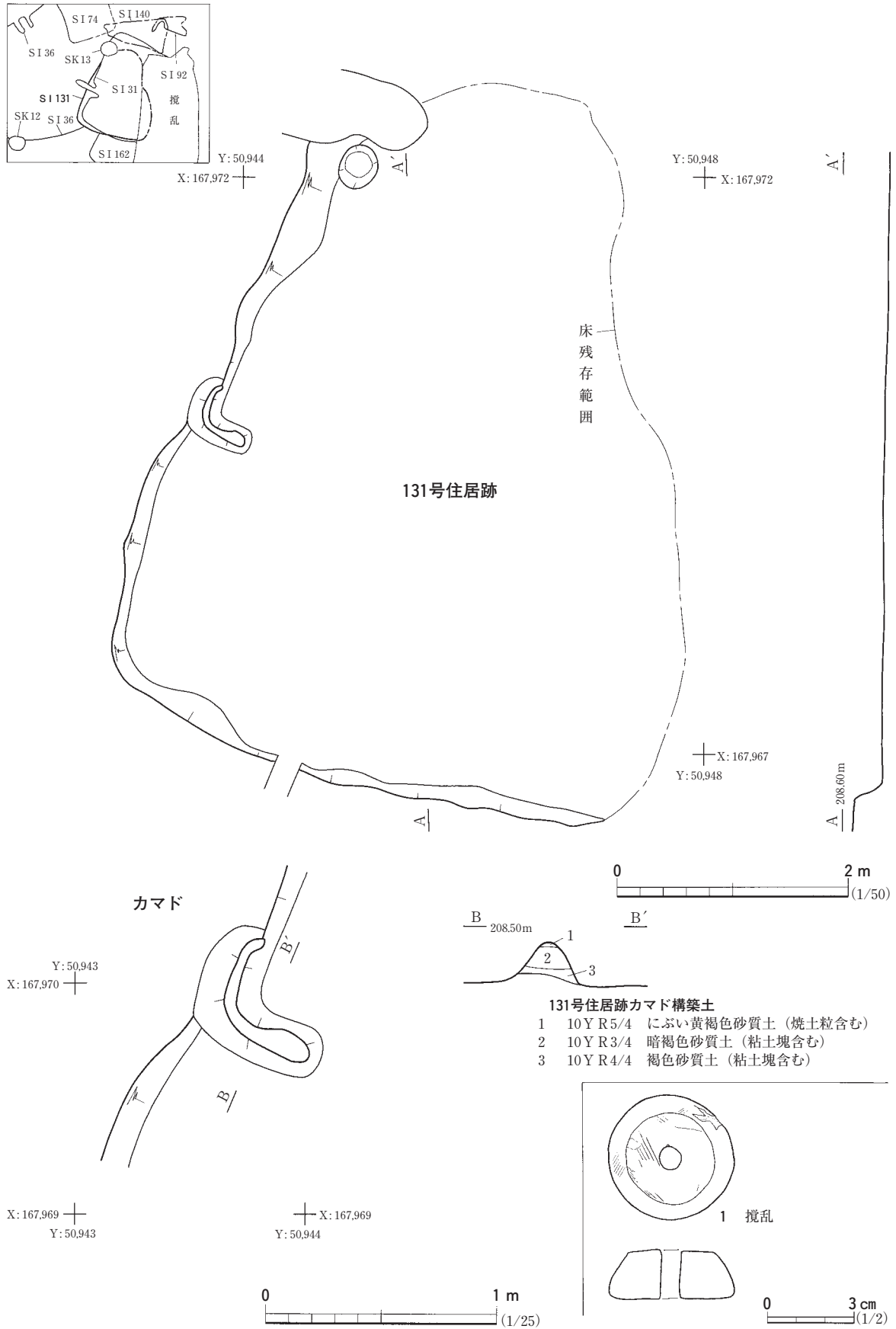


図331 131号住居跡・出土遺物

134号住居跡 S I 134

遺 構 (図332, 写真322・323)

本遺構は、N21・021グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面落ちぎわである。遺構は、高木遺跡における住居跡分布の東限の1つをなしている。

重複関係を整理しておくとして、本住居跡は、25号住居跡に切られている。そのうえ、上部の削平が著しく、東側は周壁・床面が失われている。

このように、遺存状態には恵まれていなかった。検出されたのは、床面積の約半分になると推定される。

堆積土は、2層に分層された。断面の観察から、それらは自然堆積したと考えている。床面は、貼床されておらず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。検出面と床面の比高差は、西周壁で7～10cmを測った。

本住居跡の平面形は、方形基調を呈している。規模は、南北4.4m、東西2.3m以上を測り、中型である。

住居跡方向は、発掘基準線北に対して東に26°振れている。

カマド構築位置は捉えられなかった。竪穴南西隅で弱い焼土面が認められたが、これは位置が偏りすぎているため、燃烧部の痕跡とは考えていない。

ピット類は、検出されていない。

遺 物 (図333, 写真597)

遺物は、土師器片58点が出土した。住居跡の遺存状態が不良であったのを反映して、数が少ない。図示遺物は、1点しか得られなかった。

図333-1は、土師器甑になる。検出面で出土しており、遺構には伴っていない。器高25cmを越える大型品である。口縁端部は、強く外反する特徴がみられる。

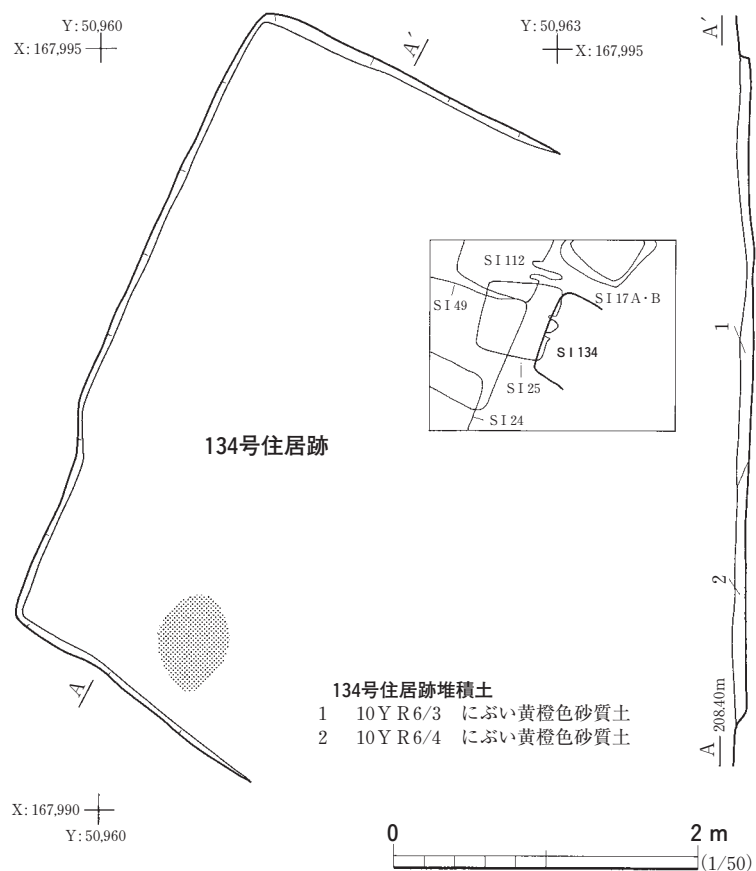


図332 134号住居跡

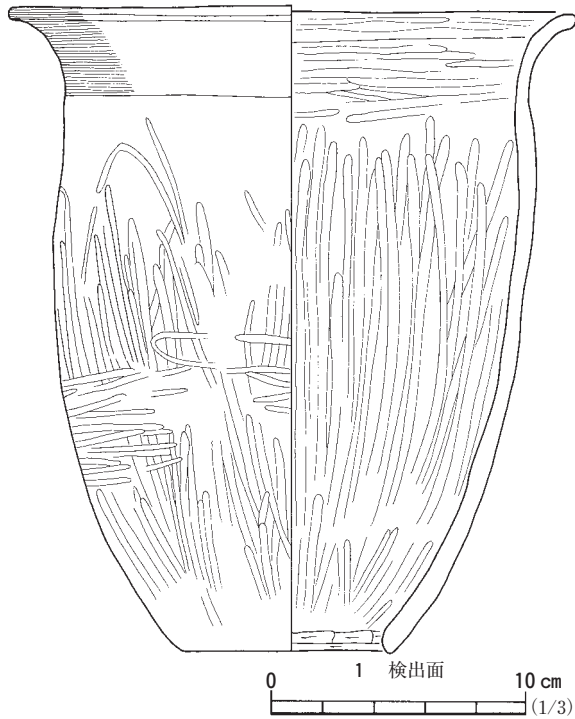


図333 134号住居跡出土遺物

(菅原)

また、外面がヘラミガキされている点も、注目される。

まとめ

本遺構は、N21・021グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれた場所は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面落ちぎわにあっている。

本住居跡は、遺構全体の削平が著しく、東半分は残っていなかった。このため、詳細は把握できていない。

カマド構築位置も不明である。

時期は、重複遺構の所見から、表杉ノ入式期に下限を求めることができる。しかし、上限については、判断材料が得られていない。

135号住居跡 S I 135

遺構 (図334, 写真324・325)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。周囲には数多くの住居跡が密集している。

重複関係は、79号住居跡、19号土坑より古いことが、確かめられている。また、92・140号住居跡とごく近接しているが、これとの新旧関係については、不明である。

本住居跡は、床面の一部だけが検出された。周壁は全く残っておらず、平面プランと規模は知ることができなかった。

遺存部分で計測すると、住居跡規模は、東西3.5m以上、南北5.5mを測り、中規模以上のクラスであったことがうかがえる。

床面は、貼床を行って整えられている。貼床土は、黄色土塊を含んだ暗褐色砂質土である。掘形底面との比高差は、16cmを測る。

遺物は、土師器片3点が出土した。

まとめ

本住居跡は、床面の一部が検出されただけであった。このため、遺構内容の詳細については、ほとんど何も知ることができていない。

また、良好な出土遺物にも恵まれなかった。

時期は、重複遺構から、栗圀式期に下限が求められる。

(菅原)

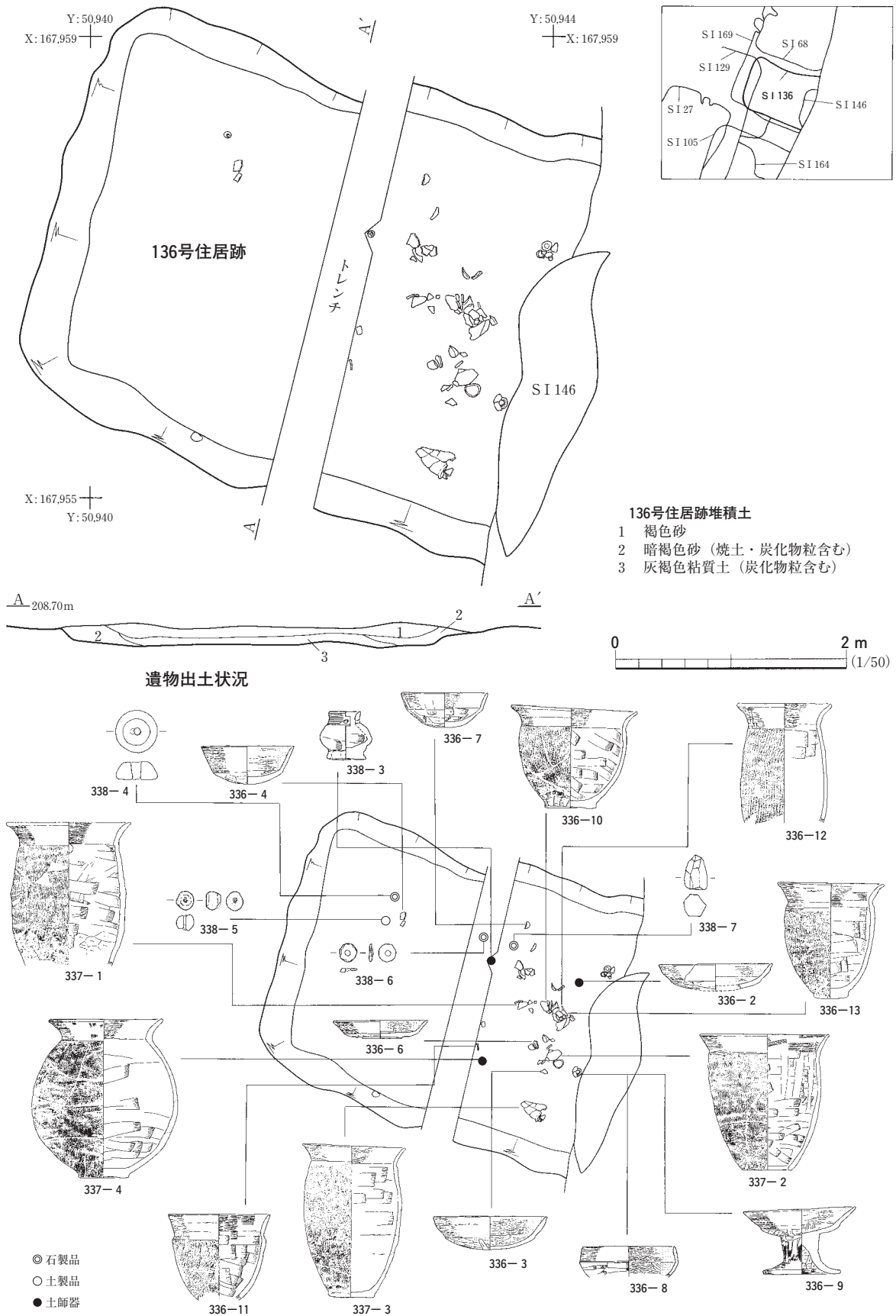


図335 136号住居跡

また、ピットも認められなかった。

遺物 (図336～338, 写真596～600)

遺物は、土師器片998点、土製品1点、石製品3点が出土した。図示遺物は豊富で、多くの共伴資料が得られている。分布は、東周壁側に偏る傾向が認められた。

図336-1～8は、土師器杯になる。このうち、1～4・6・7は、有段丸底杯に分類され、器高の違いからさらに2つに分けられる。1・2・6は、器高が低く、4・7は、器高が高い。3は、両者の中間的な様相を呈している。また、1の底部外面には焼成前に施された線刻が観察される。6は、底部を丸底にしておらず、中心が柱状に残っている。7は、内面がナデ仕上げされており、明るい色調を呈している。5・8は、須恵器模倣杯である。5は、口縁部が内屈しており、8は内傾する。

図336-9は、土師器高杯になる。有段丸底杯を短脚に乗せており、口縁部は大きく開いている。脚部は、透かしが入らず、端はまくれ気味となっている。

図336-10・11・13は、小～中型の土師器甕になる。10は、口縁部が外反し、胴部下半が強く窄まる器形を呈している。胴部外面は、ハケメ調整されている。11は、口縁部が外傾し、胴部が膨らみを持たないで、下に窄まる器形を呈している。胴部外面と口縁部内面に、ハケメ調整痕が観察される。13は、器高がやや高く、中型になる。口縁部は、「く」の字状に外傾しており、胴部上半が少し膨らんで、下に窄まる器形を呈している。胴部外面は、ハケメ調整である。

図336-12, 図337-1・3は、中～大型の土師器長胴甕になる。いずれも、胴部外面がハケメ調整されている。図336-12は、胴部中央に最大径があり、頸部が直立気味に立ち上がって、口縁部が外傾している。図337-1は、本住居跡の甕で、最大の器高になると推定される。器形は、胴部中央に膨らみがあり、口縁部は外傾している。頸部内面は括れ、粘土紐の接合痕跡が明瞭に残っている。図337-3は、胴部上半が膨らんで、下半が窄まる器形を呈している。口縁部は、「く」の字状に外傾しており、下端に段を形成している。

図337-2は、無底式の土師器甕になる。器形は、胴部上位に張りがあるが、口縁部が外傾している。器面調整は、胴部外面にハケメ調整が施されている。

図337-4は土師器球胴甕になる。器形は、胴部形態が整っており、頸部が直立気味に外傾して、口縁部が開いている。頸部下端の内面は、稜を形成し、胴部との境が明瞭につくり出されている。

図338-1は、須恵器杯蓋と推定している。この製品は、器形だけをみると、上下を逆にして奈良時代の杯(身)とみるのが普通であろう。しかし、大粒の白色粒子を含む胎土の特徴が、本遺跡のTK43～209型式期の製品と同一であり、該期の製品と考えられる。天井部は水平で、回転ヘラ切り痕をそのまま残している。口縁部は、直線的に開いており、端部は丸く収められている。

図338-2は、須恵器盤の口縁部片になる。小片のため、どの程度の大きさになるのか判断がつかない。端部は、少し窪んでいる。

図338-3は、ミニチュアの土師器小壺になる。算盤玉状の胴部に、直立気味の口頸部が付く器形

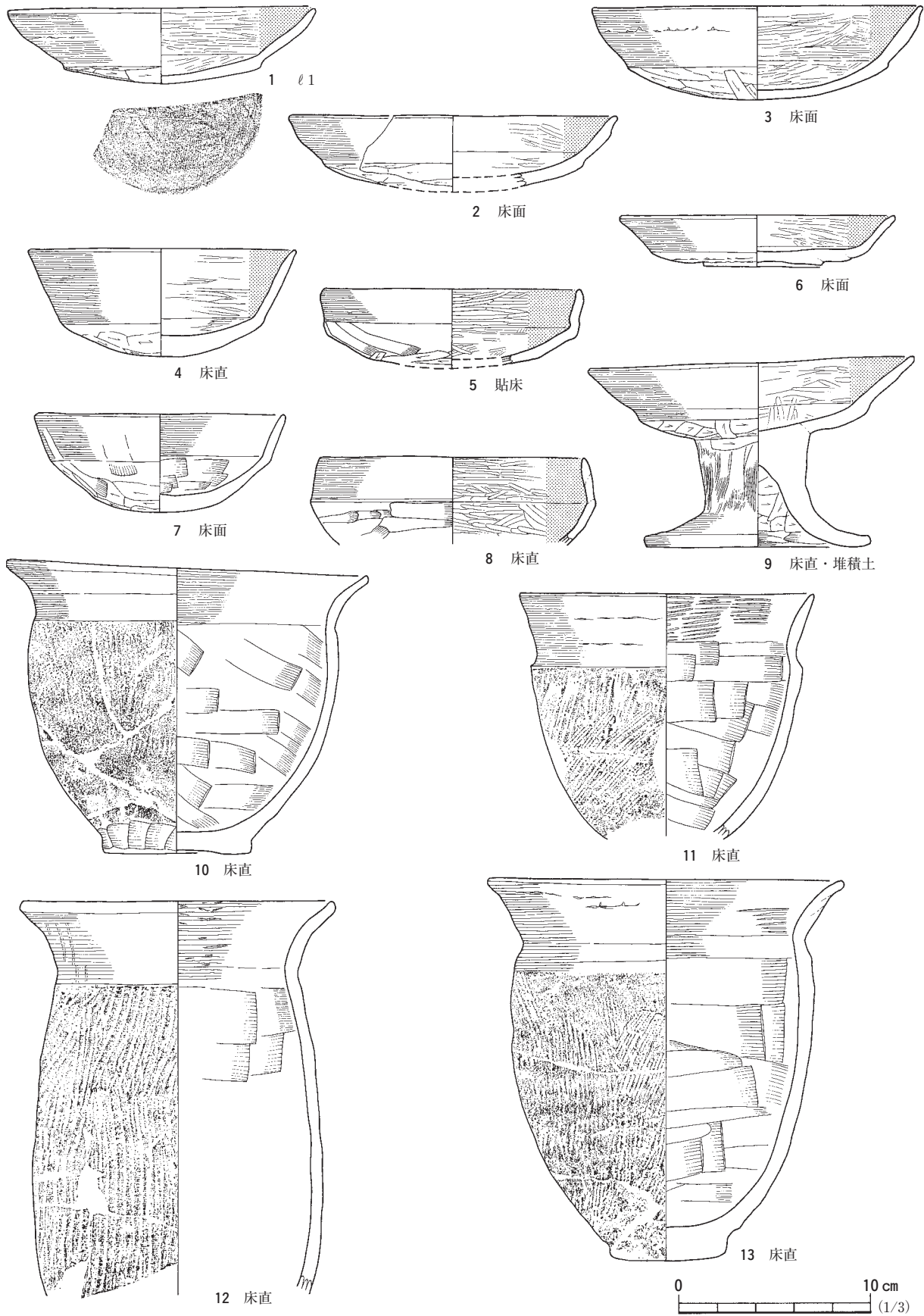
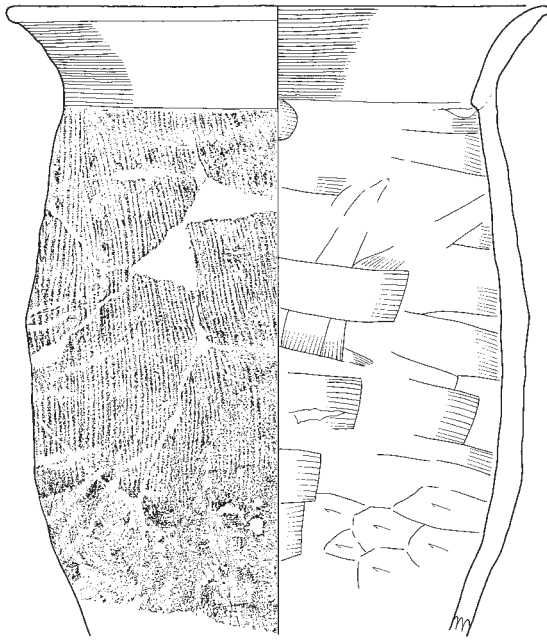
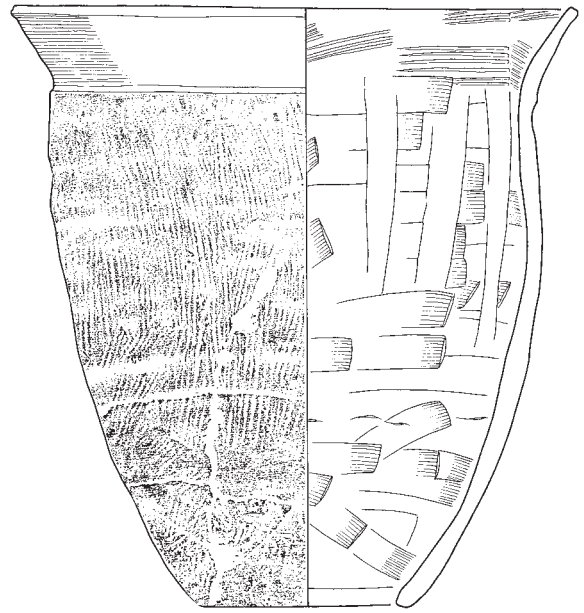


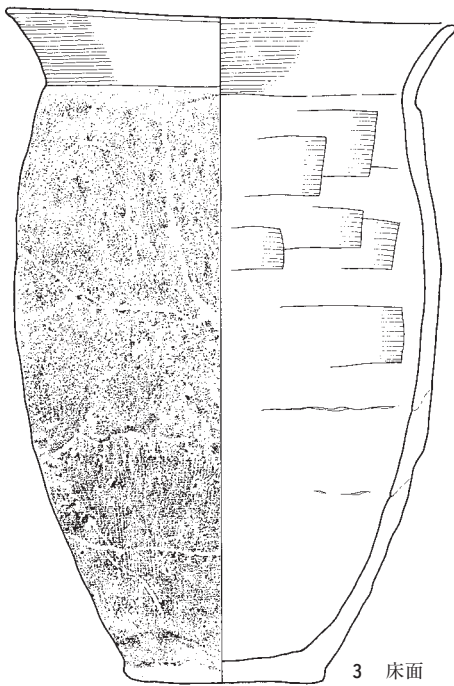
図336 136号住居跡出土遺物 (1)



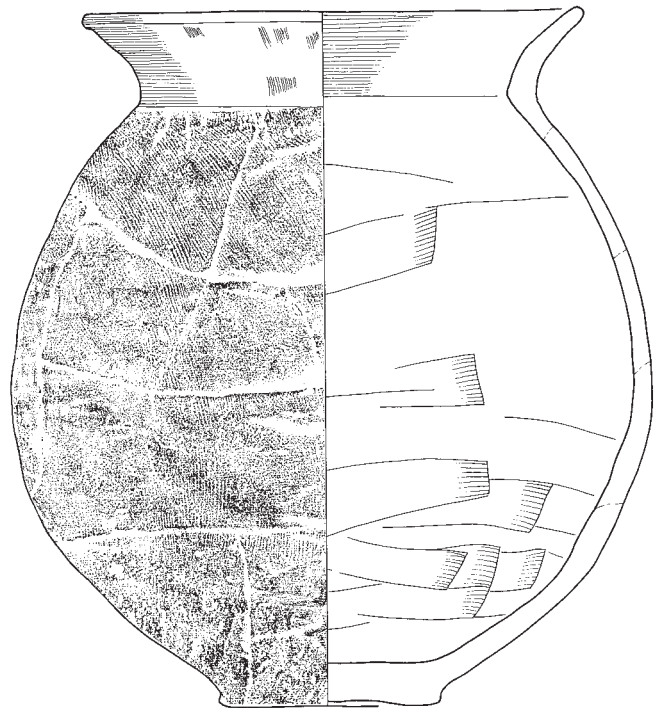
1 貼床, 床直



2 床直



3 床面



4 床直



0 10 cm (1/3)

图337 136号住居跡出土遺物 (2)

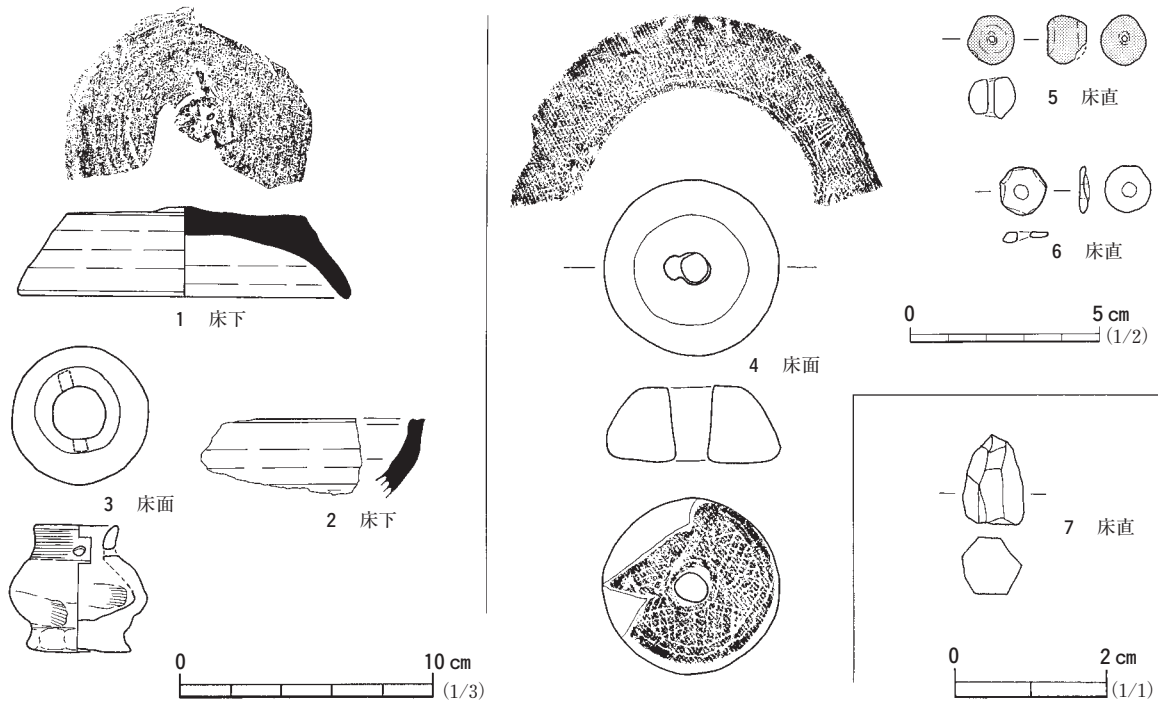


図338 136号住居跡出土遺物（3）

を呈している。頸部に一對の穿孔が焼成前に施されている。

図338-4は、石製紡錘車になる。拓本で示したように、側面と下面には、細かな線刻文様が施されている。

図338-5は、土製丸玉になる。表面は黒色処理されている。

図338-6は、石製平玉になる。

図338-7は、水晶になる。

ま と め

本遺構は、自然堤防の東斜面側に営まれた中型の堅穴住居跡である。平面プランは、長方形を呈しており、遺存状態に恵まれていた。

本住居跡では、床面から多量の遺物が出土した。その中には、玉類・水晶・ミニチュア土器・線刻のある紡錘車といった、特殊遺物が含まれている。また、カマドは設置されていなかったとみられ、居住施設というよりは、土倉のような性格を想定した方が良いのかも知れない。

営まれた時期は、栗圀式期と考えている。

(佐藤)

137号住居跡 S I 137

遺 構 (図339, 写真328~331)

本遺構は、021グリッドで検出された堅穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の落ちぎわで、東側に向かって緩やかに傾斜している。

本住居跡は、検出作業を繰返すうちに、斜面下側が失われてしまった。検出されたのは、床面積

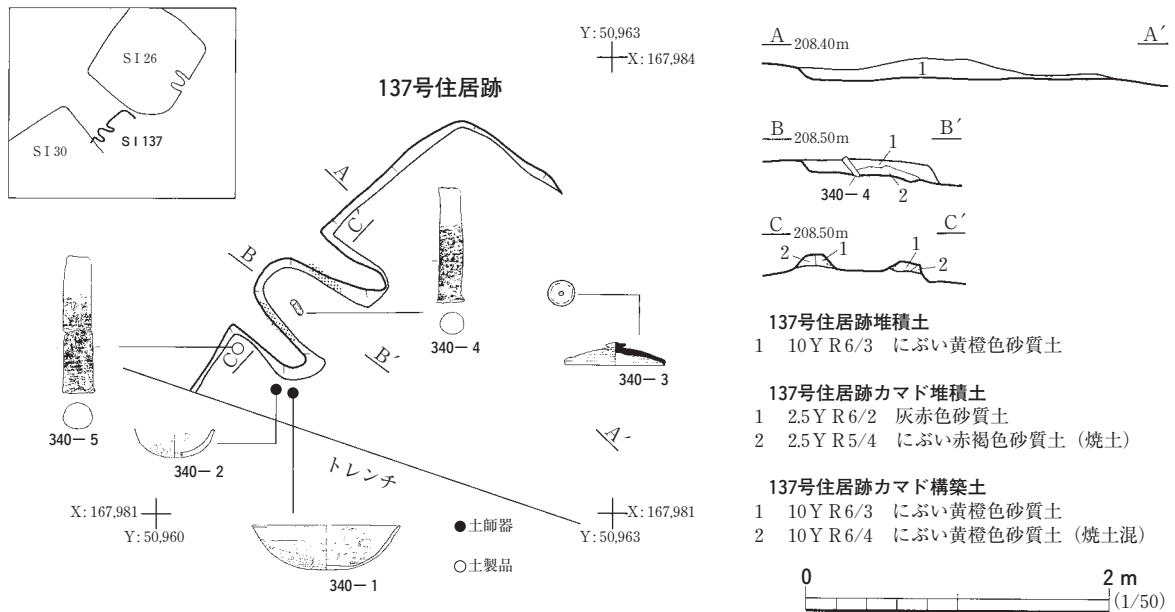


図339 137号住居跡

の約4分の1と推定される。

重複関係は、30号住居跡を切っている。

堆積土は、にぶい黄橙色砂質土が1層認められた。断面の様子から、遺構は自然埋没したと考えている。床面は、貼床されておらず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。検出面と床面の比高差は、西周壁で最大8cmを測る。

本住居跡の平面形は、方形基調を呈している。規模は、東西1.0m以上、南北2.6m以上を測り、小型である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して東に40°振れている。

カマドは西周壁で検出された。煙道部は残っていなかった。燃焼部は、袖長62cm、焚口幅42cmを測り、内面が焼けていた。袖は、焼土混じりのにぶい黄橙色砂質土で構築されている。床面から9cmの高さが残っていた。

本住居跡のカマドでは、底面左寄りの位置で、土製支脚が立ったまま出土している。この所見から、懸け口には、横並びで2個体の甕が固定されていたと考えられる。

遺物 (図340, 写真600・601)

遺物は、土師器片50点、須恵器1点、土製品2点が出土した。図示遺物の5点は、すべて遺構に伴っている。平面分布は、カマド左袖脇の床面にまとまりがみられる。

図340-1・2は、有段丸底の土師器杯になる。1は、器形全体の分かる大型品で、口径は20cmを越えている。底部は平底風であり、口縁部下端の段は、痕跡程度でしかない。また、これに対応する内面にも括れが認められない。2は、口縁部を欠いた破片資料のため、器形の特徴は分からない。ただ、口縁部下端の段はやはり痕跡程度で、内面の括れは認められない。

図340-3は、須恵器蓋になる。器形の特徴は、いわゆる「笠形」の天井部に、潰れた宝珠形のつまみが付いている。口縁部は、短く屈曲しており、端が外反する。東海系に位置付けられる製品で

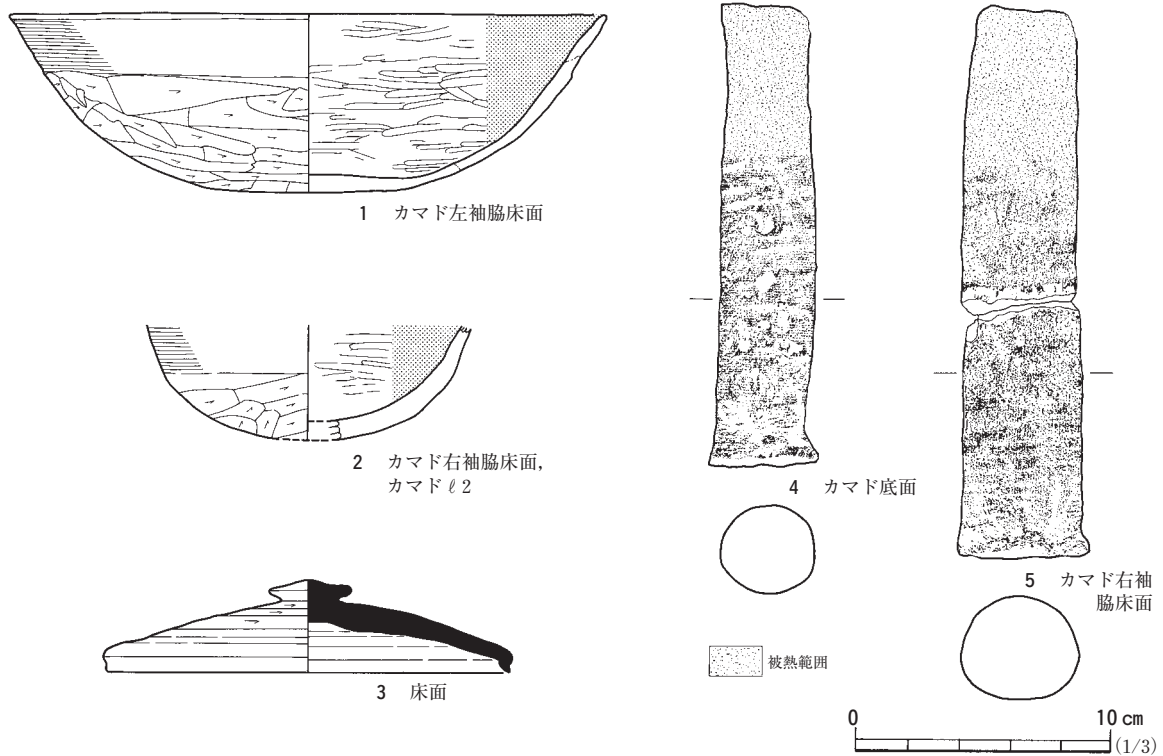


図340 137号住居跡出土遺物

あろう。

図340-4・5は、土製支脚になる。4は、少し前に倒れていたが、原位置を保っていた。

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面落ちぎわに営まれた竪穴住居跡である。遺存状態は不良であったが、カマド周辺が検出されたので、定量の共伴遺物に恵まれた。

それらの特徴から、時期は8世紀前半に位置付けられる。

(菅原)

138号住居跡 S I 138

遺構 (図341・342, 写真332~337)

本遺構は、M22・N22グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面であり、周囲には主軸を揃えた数多くの住居跡が分布している。その中で、本住居跡の重複関係は、120号住居跡に切られており、151号住居跡を切っている。151号住居跡との関係は、両者とも規模が本遺跡の中でも傑出して大きく、住居跡方向が一致することを根拠に、同一世帯の連続的な変遷と捉えている。

堆積土は、2層に分層された。断面は、典型的なレンズ状堆積の様相を示しており、このことから、遺構は自然埋没したと考えている。

住居跡掘形は、151号住居跡の堆積土上面が逆L状に掘り窪められている。遺構平面図に破線で示したのが、範囲にあたる。床面は、そこに炭化物混じりの灰黄褐色砂質土を充填して整えられており、カマド周辺には踏み締まりがあった。

遺物 (図389, 写真623)

遺物は、土師器片3点が出土した。図示遺物は1点で、床面から出土した。

図389-1は、土師器杯になる。口縁部が内湾気味の有段丸底杯である。底部には、焼成後の線刻が認められる。

まとめ

本遺構は、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。規模は小さめで、方形基調の平面プランを有している。カマドは、検出されなかった。

営まれた時期は、出土遺物の特徴から、栗圀式期と考えられる。

(菅原)

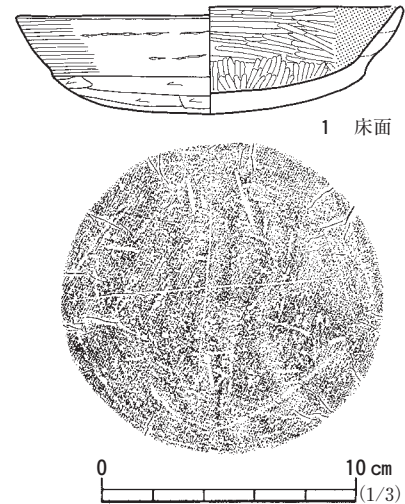


図389 154号住居跡出土遺物

155号住居跡 S I 155

遺構 (図390, 写真376)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。周囲には、数多くの住居跡が密集している。そのなかで、本住居跡は5軒の竪穴住居跡と重複し、49・70・91・106・142号住居跡に切られている。つまり、重複する遺構の中で、最も古く位置付けられる。

検出されたのは、住居跡北側で、推定される床面積の約4分の1である。142号住居跡の調査終了後、テラス状のプランがその北側に認められた。142号住居跡とは、方向・規模が概ね一致することから、建て替えの関係が想定される。

堆積土は、暗赤褐色砂質土が1層認められた。床面は、掘形底面がそのまま利用され、貼床はみられない。検出面と床面の比高差は、45cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈する。規模は、東西8.4m、南北2.2m以上で、大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に15°振れている。

カマドは、検出されなかった。北周壁に設置されていなかったことは確かなので、残る3方向のどこかに設置されていたことになる。

ピット類は検出されていない。

遺物 (図390)

遺物は、土師器片120点が出土した。図示遺物は2点あるが、遺構には伴っていない。

図390-1は、土師器杯になる。口縁部の強く反り返る有段丸底杯である。底部を欠損している。栗圀式古段階～舞台式に比定される。

図390-2は、土師器小型甕になる。口径が器高を大きく上回っており、逆台形の器形をなす。口縁部は短く、端で軽く外反している。

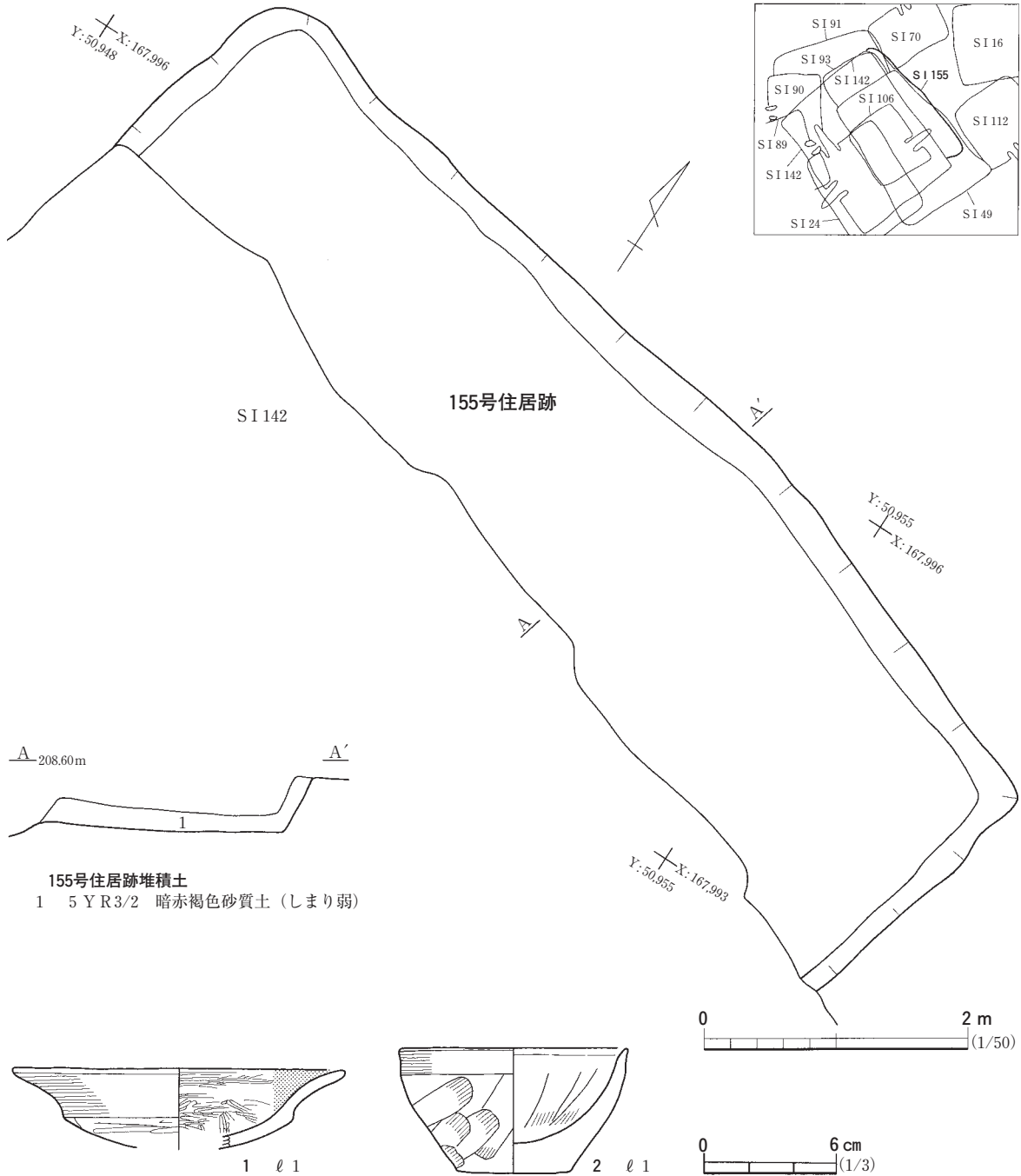


図390 155号住居跡・出土遺物

ま と め

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。周囲には、数多くの住居跡が密集しており、本住居跡も5軒と重複している。切り合いは、その中で本住居跡が最も古く、床面積の約4分の3が壊されていた。規模・住居跡方向の一致する142号住居跡とは、建て替えの関係を想定している。本住居跡が営まれた時期は、共伴遺物に恵まれず、特定することができない。ただ、142号住居跡が栗岡式期の古段階に比定されたことから、ここに下限を設定できる。さらにいえば、両者の関係は連続的と推定されるので、それを大きくは溯らないと考えられる。(菅原)

156号住居跡 S I 156

遺 構 (図391, 写真377)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。

本住居跡は、4軒の竪穴住居跡と重複し、24・78・121・142号住居跡に切られている。つまり、重複する住居跡の中で最も古く位置付けられる。

検出されたのは住居跡南側で、推定される床面積の約3分の2にあたる。全体に削平が著しく、検出段階で所々床面が露呈していた。

堆積土は、2層に分層された。断面の様子から、それらは自然流入したものと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。検出面と床面の比高差は、最大7cmを測る。

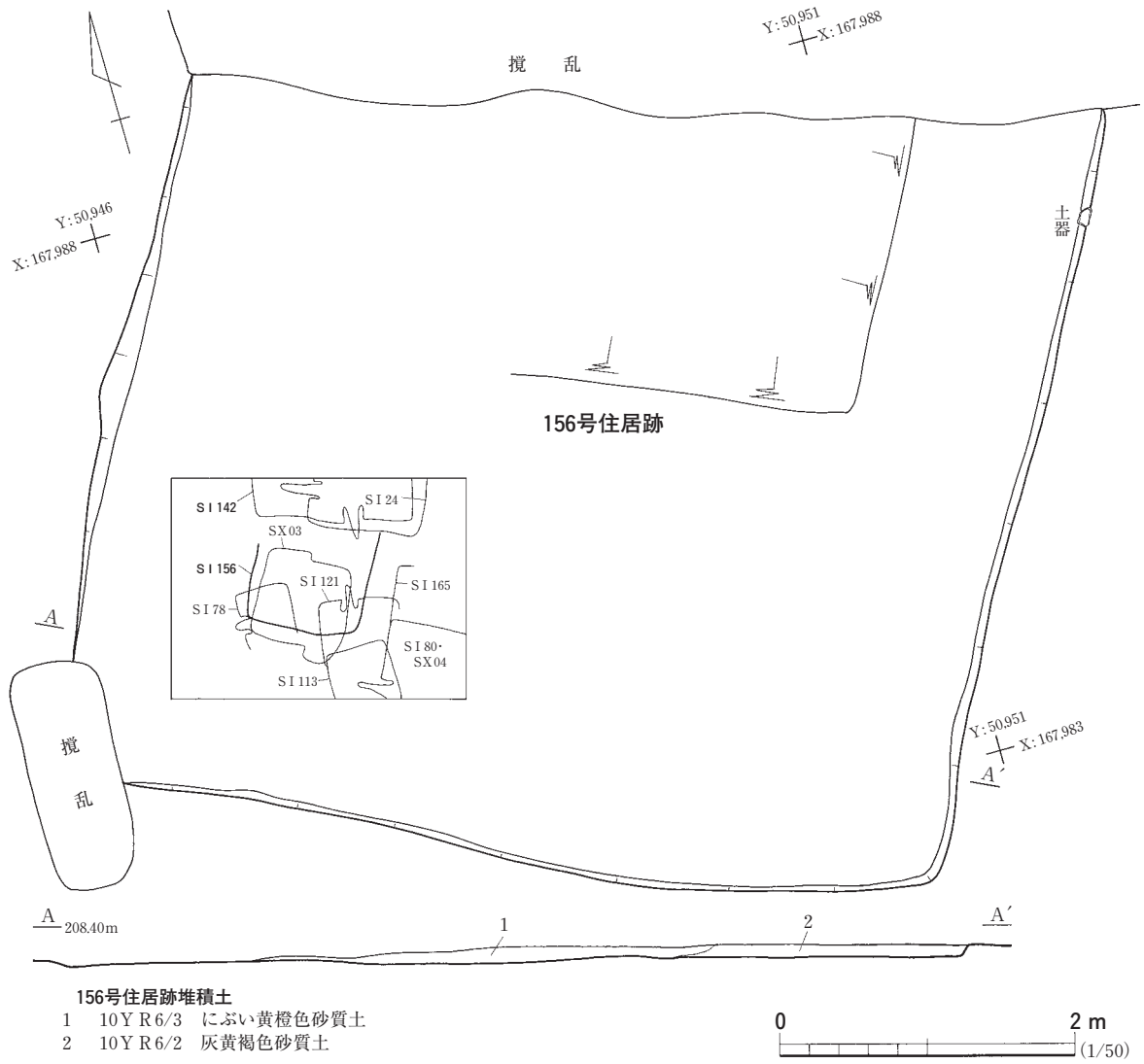


図391 156号住居跡

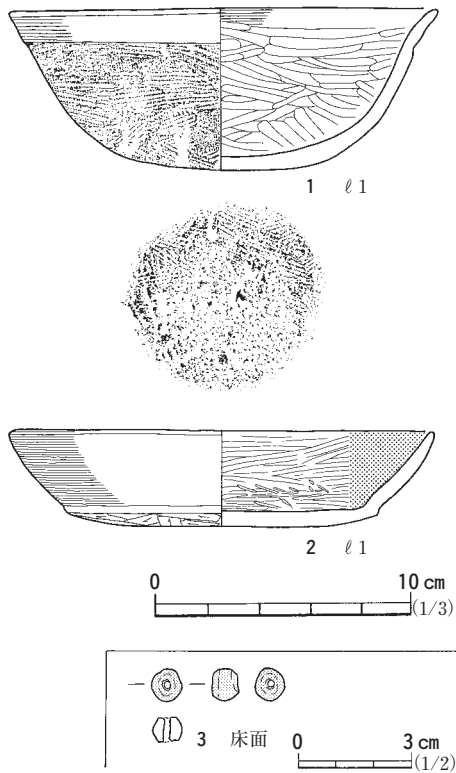


図392 156号住居跡出土遺物

ま と め

本住居跡は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。4軒の住居跡と重複しており、そのどれよりも古い。

カマドは、破壊された北周壁に設置されていたとみられるが、検出されなかった。

営まれた時期は、重複遺構から下限を栗圀式期に設定できる。ただ、良好な共伴遺物が無く、詳細はおさえられない。

(菅原)

157号住居跡 S I 157

遺 構 (図393・394, 写真378~380)

本遺構は、M22・23グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面である。

本住居跡は、4軒の竪穴住居跡と重複しており、100・101・125号住居跡に切られ、199号住居跡を切っている。これにより、西周壁の一部と南周壁が破壊されている。検出されたのは、推定される床面積の約4分の3にあたる。

堆積土は、3層に分層することができた。その断面の様子から、自然流入したものと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。検出面と床面の比高差は、最大20cm前後を測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西6.2m、南北5.7m以上であり、

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西6.2m、南北5.7m以上であり、比較的大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に27°振れている。

カマドは、検出されなかった。おそらく、破壊された北周壁に設置されていたのだろう。

ピット類は、検出されていない。

遺 物 (図392, 写真622・623)

遺物は、土師器片65点、土製品1点が出土した。図示遺物は、3点で、図392-3が遺構に伴っている。

図392-1・2は、土師器杯になる。1は、身の深い椀形をなすもので、外面がハケメ調整されている。2は、平底風の底部から、口縁部が内湾気味に立ち上がる有段丸底杯である。

図392-3は、土製丸玉になる。表面は、ヘラミガキ・黒色処理されている。

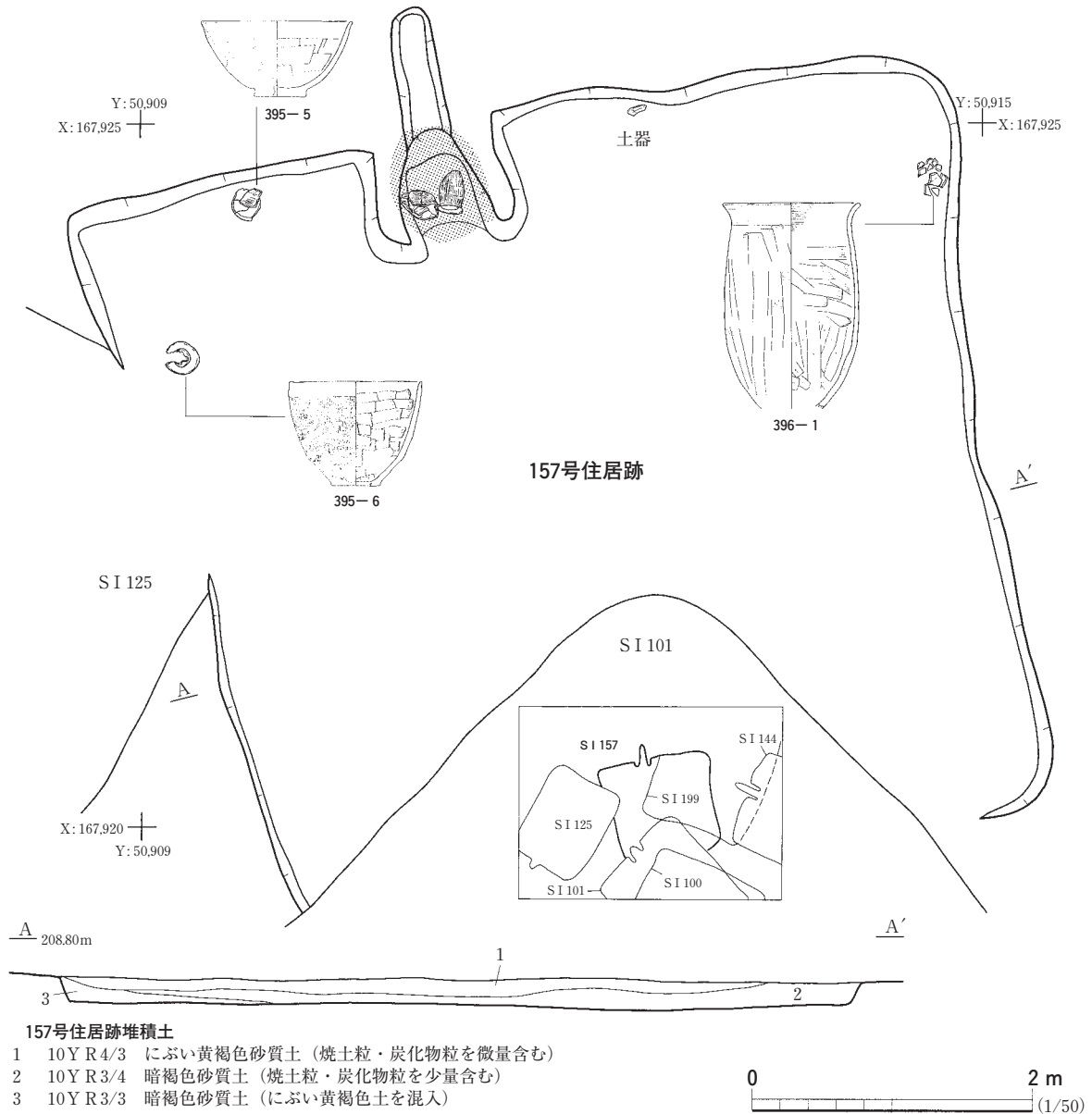


図393 157号住居跡

比較的大型の部類に属する。

住居跡方向は、発掘基準線北に対して、西に14°振れている。この特徴は、東に振れることの多い本遺跡の住居跡の中では、異質であるといえる。

カマドは、北周壁で検出された。位置は左に偏っており、遺存状態は良好であった。煙道部は、長さ88cmを測り、燃焼部とは、周壁に一致した落差14cmの段で区画されている。燃焼部は、袖長92cm、焚口幅42cmの規模を測る。焼土化が著しかった。袖は、明黄褐色粘質土で構築され、床面から23cmの高さが残っていた。左袖は、削り出した地山の上に、構築土が被せられたことが、断面から観察された。

本住居跡のカマドでは、燃焼部から完形の土師器甕2点が出土している。手前に倒れていたが、出土状況を観察すると、横並びに正立させられていた状況が復元できる。このことから、懸け口に

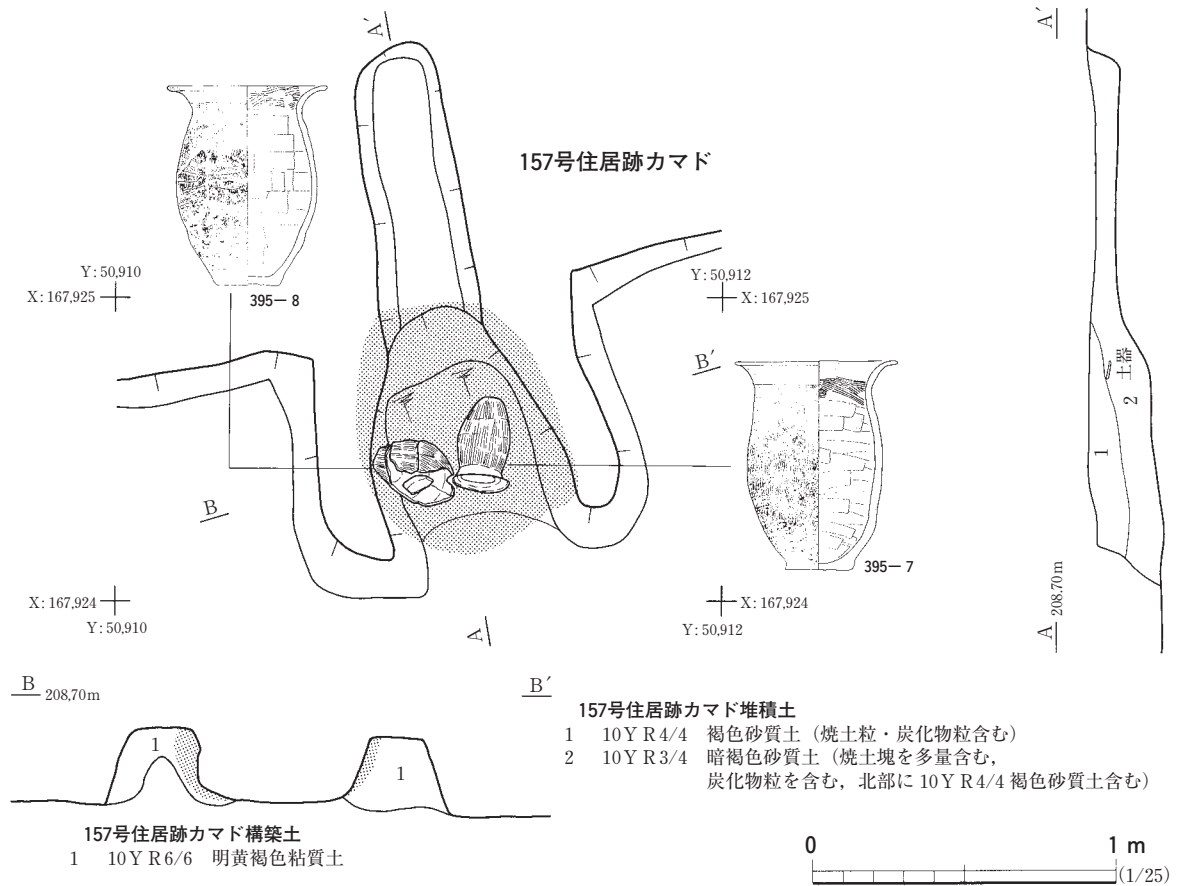


図394 157号住居跡カマド

は、2個体の甕が横並びの状態に固定されていたと考えられる。

ピット類は、検出されていない。

遺物 (図395・396, 写真623・624)

遺物は、土師器片375点、須恵器片5点が出土した。図示遺物は、12点で、図395-2・5～8、図396-1が遺構に伴っている。それらの出土状況は、カマド燃焼部の2点を除くと、1か所にまとまらず、北半の床面に散在した状態だった。ただ、周壁ぎわに偏る点に一定の規則性がうかがえる。

図395-1～5は、土師器杯になる。唯一遺構に伴う2は、小型の有段丸底杯である。1は、須恵器の模倣タイプだろうか。内面ナデ仕上げで、ヘラミガキ・黒色処理がなされていない。3は、口縁部が強く外反する有段丸底杯に分類される。4は、反対に口縁部が内湾気味に立ち上がる有段丸底杯である。器高も高い。5は、椀状の大型品である。底部は突出した平底で、丸底にケズり出す工程が省略されている。外面に木葉痕が観察される。内面はナデ仕上げで、ヘラミガキ・黒色処理されていない。

図395-6は、土師器小型甕になる。頸部が括れず、胴部からそのまま口縁部へ移行する器形をなす。胴部外面は、ハケメ調整されている。

図395-7・8、図396-1は、大型の土師器甕になる。図395-7・8は、器形・法量・器面調整が、類似している。器形は、口頸部が長く反り返っているのが特徴で、胴部中央に張りがある。胴部外

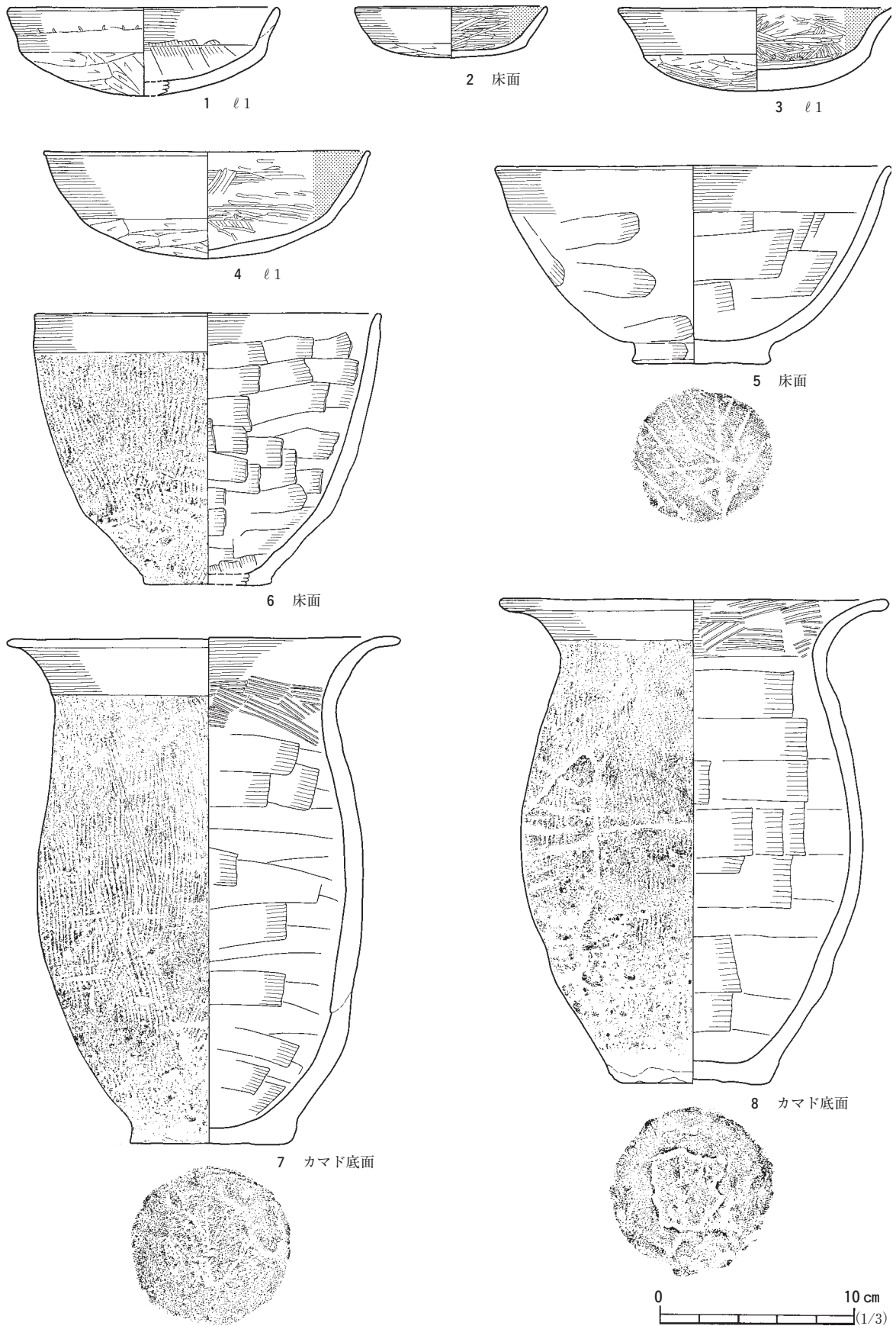


図395 157号住居跡出土遺物 (1)

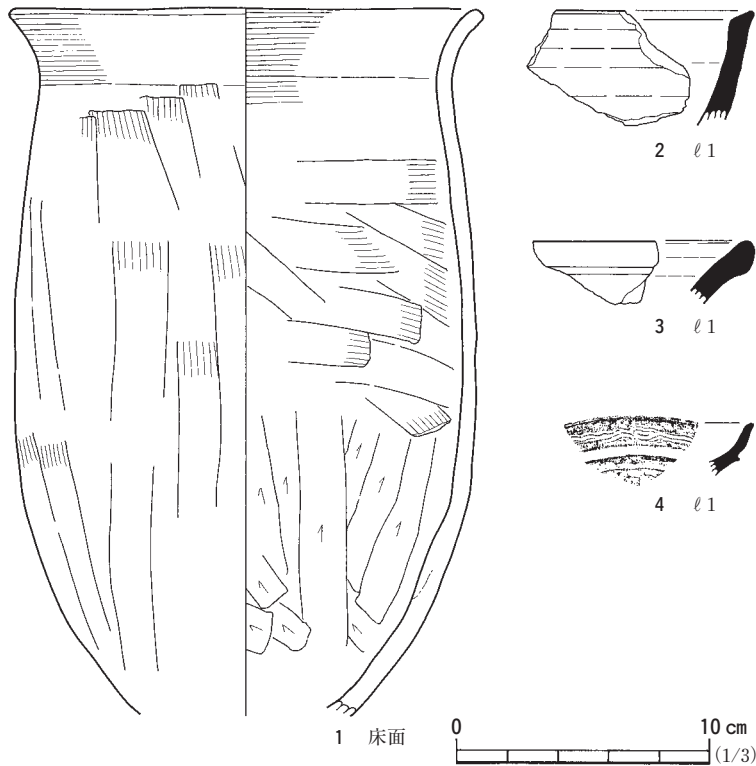


図396 157号住居跡出土遺物（2）

平坦面に営まれた竪穴住居跡である。

高木遺跡の中では、比較的大型の部類に属するもので、軸線方向が、他と違って西に振れていた。カマドは北周壁に設置されており、懸け口に甕が横並びさせられる構造であったと推定される。

営まれた時期は、出土遺物の特徴から、栗圀式期と考えられる。（菅原）

158号住居跡 S I 158

遺 構（図397、写真381・382）

本遺構は、M23・N23グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。微地形は、東に向かって緩やかに傾斜している。

重複関係は、99号住居跡に切られ、5号溝跡を切っている。5号溝跡は、栗圀式期の集落区画溝であり、本住居跡は、その下限を決定する条件を備えているが、残念なことに、良好な共伴遺物に恵まれなかった。遺構の遺存状態は、比較的良好である。平面プランは全体が捉えられている。

堆積土は、2層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は自然埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。ただ、レベルを追うと、微地形に影響され東側に傾斜している。検出面と床面の比高差は、10cm前後を測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西4.4m、南北4.0mを測り、中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に21°振れている。

面は、ハケメ調整されている。

図396-1は、口縁部が短く、胴部が撫で肩を呈する。胴部外面は、ナデ調整されている。

図396-2は、須恵器鉢の口縁部片になる。かなり口径の大きな製品になると予想される。

図396-3は、須恵器甕の口縁部片になる。端部は、丸みがある。

図396-4は、須恵器礎ないし壺の口縁部とみられる細片である。外面に鋭い凸帯を有しており、その上に、波状文が施されている。

ま と め

本住居跡は、自然堤防の中央

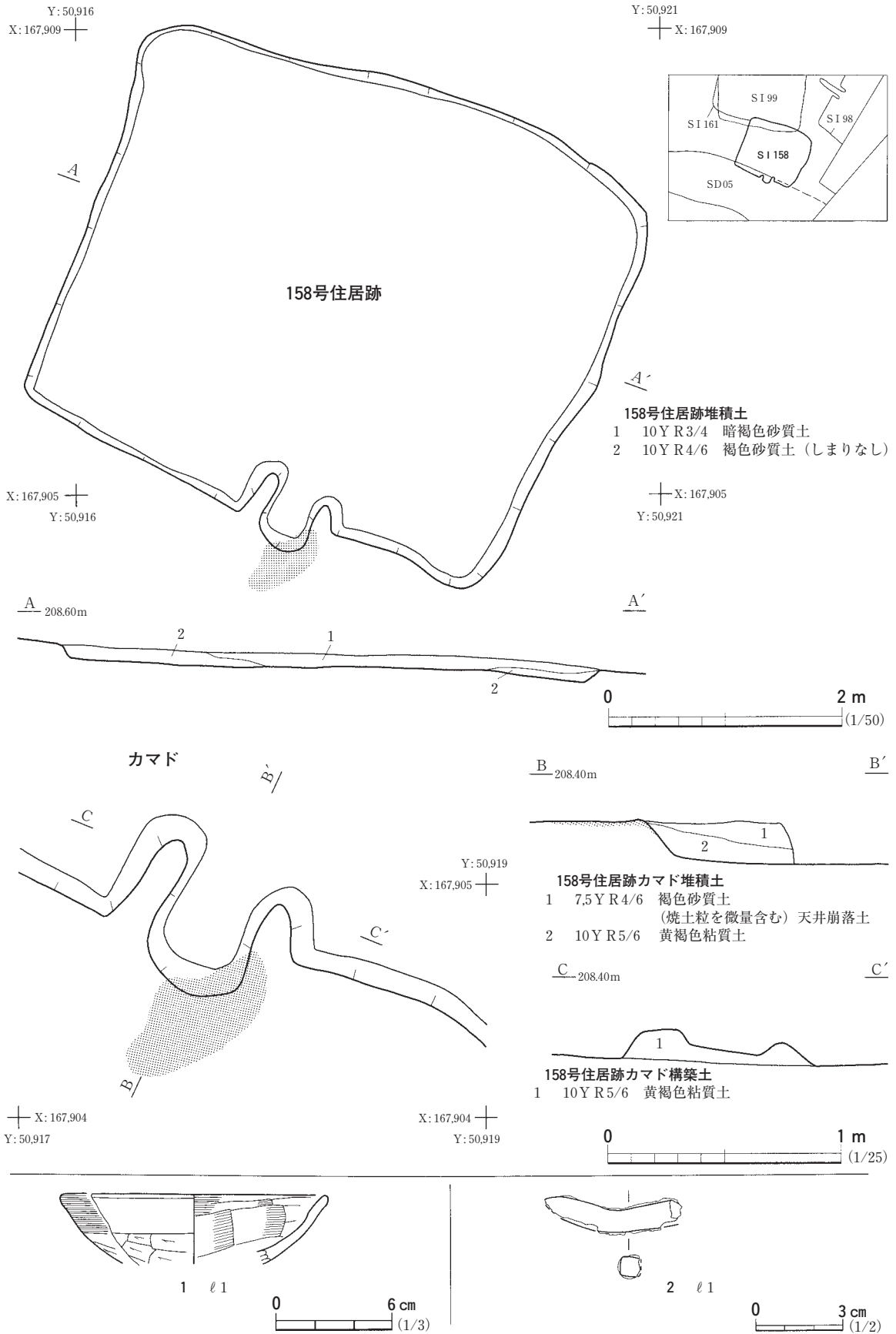


図397 158号住居跡・出土遺物

カマドは、5号溝跡の方を向いており、南周壁で検出された。煙道部は、完全にその溝跡と重複している。したがって、本住居跡が構築された段階には、既に、5号溝跡は完全に埋まり切っていたことになる。位置は左に偏っている。

煙道部は、焼土化した底面の痕跡が認められ、燃焼部は、袖長50cm、焚口幅31cmの大きさを測る。袖は、黄褐色粘質土で構築されており、床面から12cmの高さが残っていた。

ピット類は、検出されていない。

遺物 (図397, 写真625)

遺物は土師器片19点、鉄製品1点が出土した。図示遺物は2点あるが、遺構には伴っていない。

図397-1は、土師器杯になる。非ロクロ調整で、内面はナデ仕上げされている。器形全体の特徴は、底部を欠いており、知ることができない。

図397-2は、種別不明の鉄製品である。断面は方形をなす。

まとめ

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。

集落を区画する5号溝跡の堆積土上面に営まれており、この施設の下限年代がおさえられるのではないかと期待された。しかし、共伴遺物に恵まれず、結局、この点を明らかにすることはできなかった。

重複遺構の関係から、本住居跡が営まれたのは、大きく栗圀式期と捉えられるだけである。

(菅原)

159号住居跡 S I 159

遺構 (図398・399, 写真383~385)

本遺構は、M22グリッドで検出された竪穴住居跡である。

営まれたのは、自然堤防の中央平坦面である。重複関係は、143・174号住居跡に切られており、167号住居跡を切っている。検出されたのは住居跡南西部で、推定される床面積の約3分の1にあたると思われる。

堆積土は、締まりのある極暗赤色砂質土が1層認められた。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。

検出範囲では、とくに顕著な踏み締まりは認められなかった。床面と検出面の比高差は、28cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西4.0m以上、南北4.6m以上を測り、中型以上の部類に属する。

住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に30°振れている。

カマドは、西周壁で検出された。煙道部は、周壁から長さ130cmを測り、燃焼部は、袖長81cm、焚口幅40cmの規模を有している。袖は、明黄褐色粘質土で構築され、床面から21cmの高さが残ってい

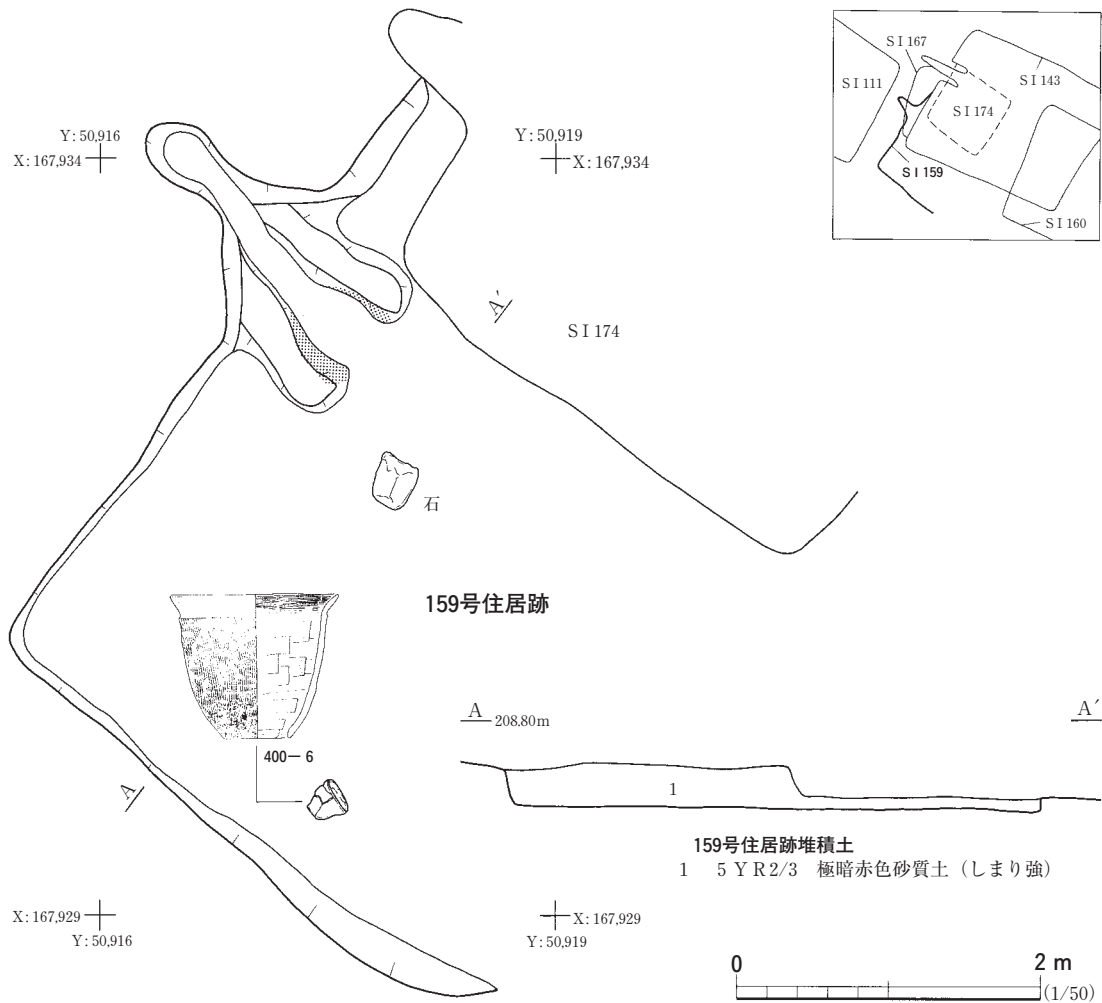


図398 159号住居跡

た。

燃焼部底面から、大・中・小の土師器甕が出土した(図400-5・7・8)。出土状態は、口縁部を手前に向けて3つ並んでいた。これらは、143号住居跡を駄目押しした際に、西周壁ぎわの床面下で、顔を覗かせたものである。このうち、中央の甕には、小型の土師器杯と高杯が入れ子状に収められていた(図400-2・4)。

ピット類は検出されていない。

遺物(図400, 写真625・626)

遺物は、土師器片159点が出土した。図示遺物は8点あり、図400-2・4~8が遺構に共伴している。上述したように、2・4は、8の内部に収められていた。

図400-1~3は、土師器杯になる。1・3は、有段丸底杯である。口縁部が外反しない。2は、金属器模倣と考えられる。無段丸底で、口縁部が直立している。器面は、内外とも、底部が凸凹に荒れている。2次被熱した痕跡であろう。

図400-4は、土師器高杯になる。8の内部に入れ易いようにしたためか、脚部が割り揃えられている。

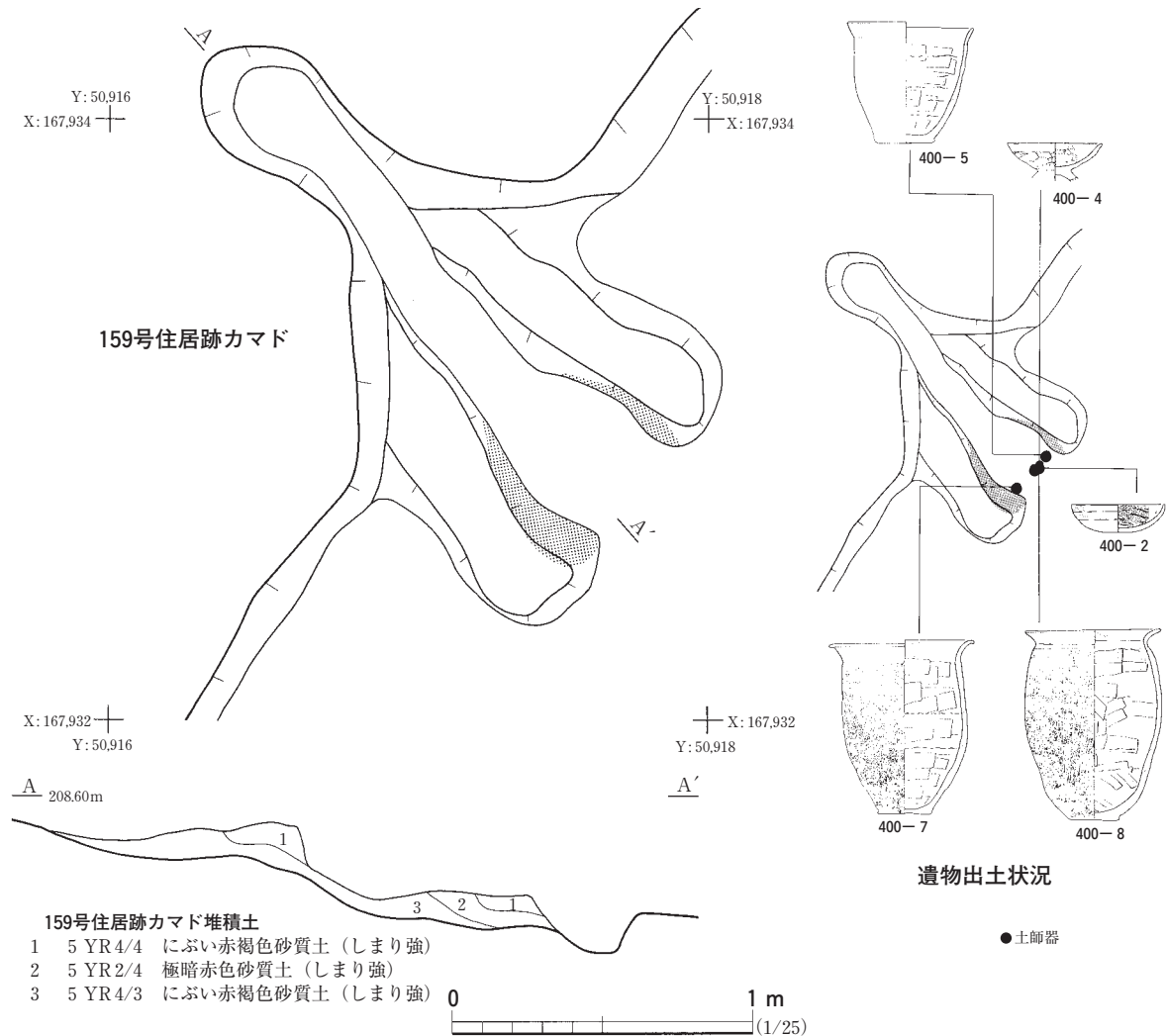


図399 159号住居跡カマド

図400-5・7・8は、土師器甕になる。法量は、5→7→8の順に大きくなり、器形に違いが認められる。5は、頸部があまり括れず、甕に似た形態を呈している。外面が荒れており、器面調整を確認することができない。7は、頸部が強く反り返り、口縁部で下向きになる器形を呈している。胴部外面調整は、ハケメである。8も、口頸部が強く反り返るもので、胴部上位には張りがある。胴部外面調整には、ハケメが用いられている。

図400-6は、無底式の土師器甕になる。口縁部下端に段があり、胴部は張りを持たないで、下に窄まる器形を呈している。胴部外面はハケメ調整されている。

ま と め

本遺構は、自然堤防の中央平坦面に営まれた竪穴住居跡である。重複遺構の削平で、床面の半分近くが失われていた。

カマド燃焼部には、3個体の土師器甕が残され、さらに中央の甕には、土師器杯と高杯が内部に収められていた。

本住居跡が営まれたのは、出土遺物の特徴から、栗圀式期と考えている。

(菅原)

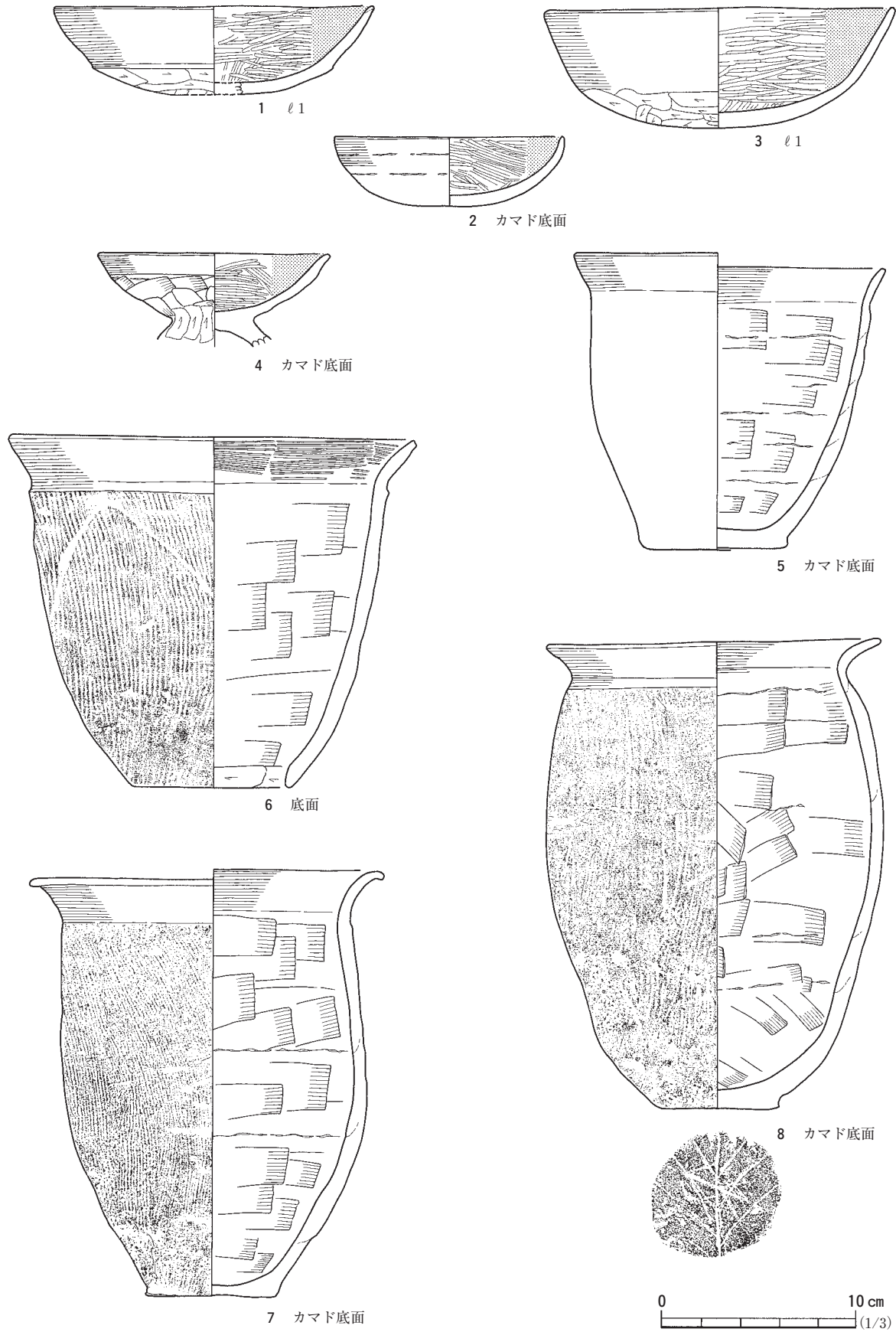


図400 159号住居跡出土遺物

160号住居跡 S I 160

遺 構 (図401, 写真386・387)

本遺構は、N22グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。

重複関係を整理しておくと、108・143号住居跡に切られ、170号住居跡を切っている。東周壁は、残っていない。

堆積土は、2層に分層された。土層断面図が示すように、典型的なレンズ状堆積であり、このことから、遺構は自然埋没したと考えている。

床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み締まりは、認められなかった。

床面と検出面の比高差は、10～12cmである。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西6.3m以上、南北6.2mを測り、高木遺跡では比較的大型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に26°振れている。

カマドは、北周壁で検出された。煙道部は、先端が削平されており、長さは不明である。燃焼部は袖が残っておらず、住居廃絶時に取り壊されたと推定される。

なお、掘り込みを伴う施設ではないが、カマド対面の南周壁ぎわでは、土師器杯(図402-1)と自然石が置かれたような状態で出土した。入り口に関わる痕跡であろうか。34号住居跡でも、同じような所見が得られている。

ピット類は検出されていない。

遺 物 (図402, 写真626)

遺物は、土師器片174点、須恵器片2点、石製品1点が出土した。図示遺物は、6点で、このうち4点が遺構に伴っている。

本住居跡では、遺構が比較的良く残っていた割に、遺物量が少なかったことから、廃絶時に外へ持ち出された可能性が高いと考えている。これは、カマド袖が取り壊されていることと連動した現象であろう。

図402-1～4は、土師器杯になる。1は、器高の高い椀状をなすもので、口縁端部は外反している。器面調整は、外面がヘラミガキ調整されており、丁寧な仕上げが行われている。2は、有段丸底杯である。口縁部は、直線的に外傾して伸びている。3は、椀形杯の退化形態であろうか。器高が低く、口縁部は短い。4は、須恵器杯蓋の模倣と思われる。口縁部は、直立気味に立ち上がっている。

図402-5は、須恵器の胴部片になる。外面にカキメ調整が施されている。器種は、提瓶と推定している。

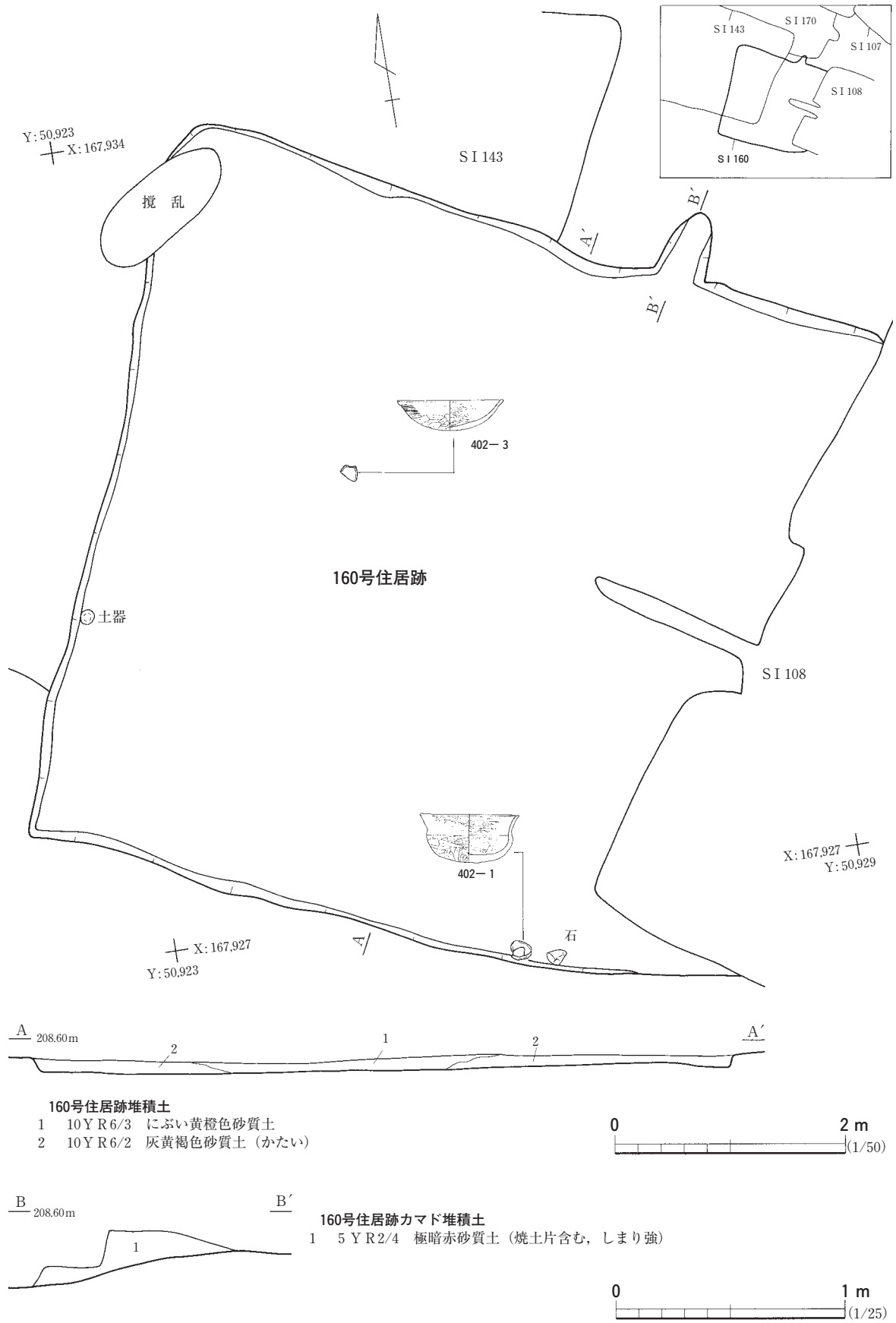


図401 160号住居跡

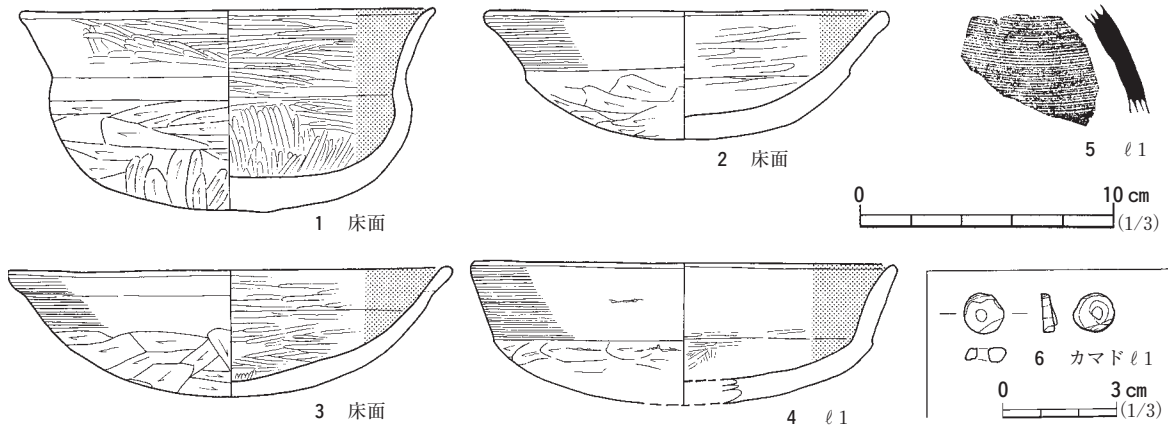


図402 160号住居跡出土遺物

図402-6は、石製平玉になる。カマド堆積土から出土したもので、祭祀行為に関わる可能性が考えられる。

まとめ

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。比較的大きな規模を有しており、遺存状態にも恵まれていた。

しかし、共伴した遺物は少なく、住居廃絶時に外へ持ち去られた可能性を考えている。カマドは、袖が壊されていた。

本住居跡が営まれたのは、出土遺物から、栗囲式期と考えられる。(菅原)

161号住居跡 S I 161

遺構 (図403・404, 写真388~391)

本遺構は、M23・N23グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。

微地形は、南至近距離にある5号溝跡の方向へ、緩やかに傾斜している。

本住居跡の重複関係は、99・100・158号住居跡に切られており、178号住居跡を切っていることが捉えられている。

遺存状態は、99号住居跡による上部削平がかなり著しいが、それでも、平面プランは全体が捉えられた。

堆積土は、暗褐色砂質土が1層認められた。床面は、不整形の窪みに、暗褐色砂質土を貼って平坦に整えられている。

調査の段階では、この窪みを掘形と理解していた。しかし、竪穴より規模が小さく、底面が平坦なことから、下層住居跡の可能性もあると、現在では考えている。

床面と検出面の比高差は4~6cmである。

本住居跡の平面プランは、方形を基調としている。しかし、歪みが激しく、平行四辺形に近い形

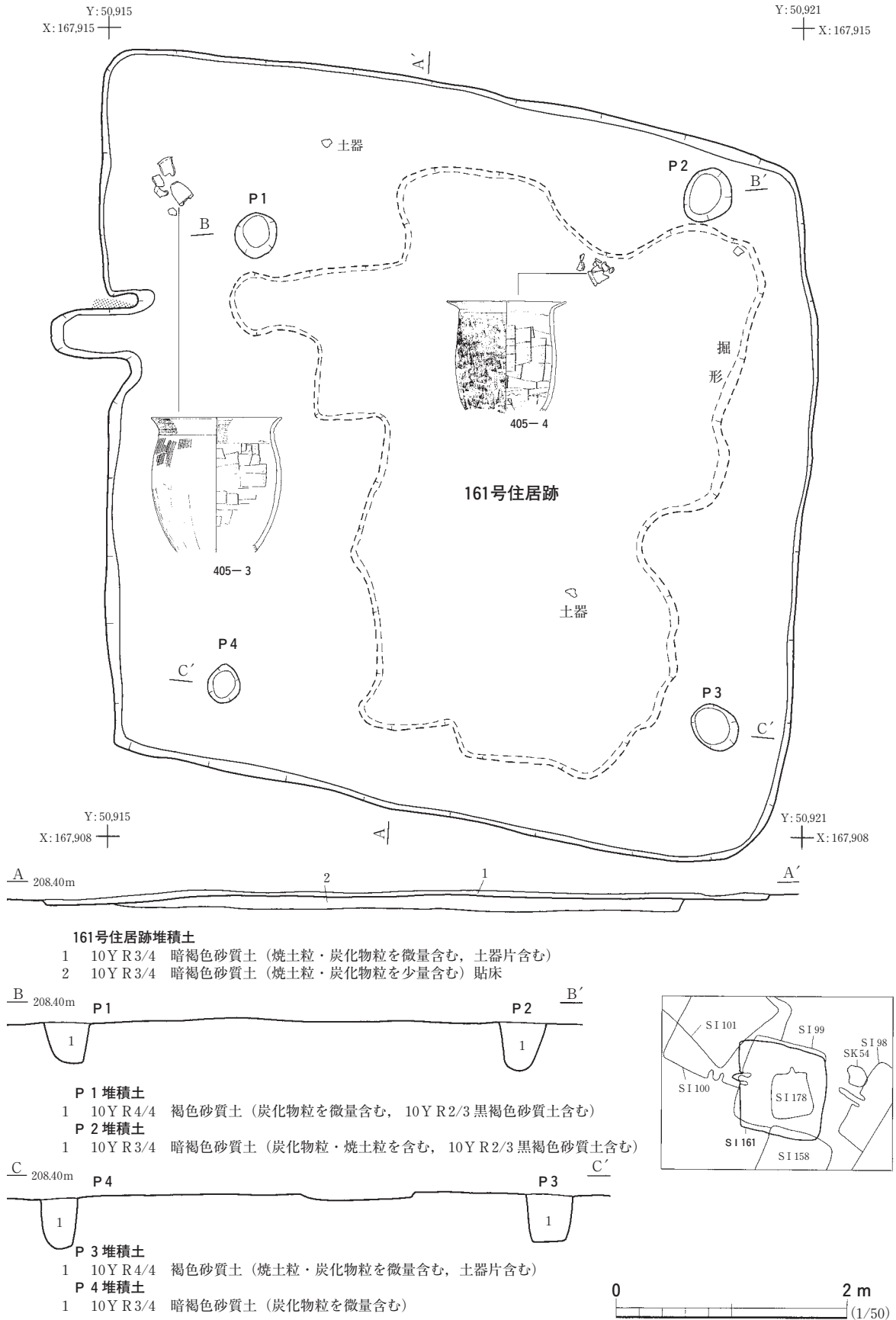


図403 161号住居跡

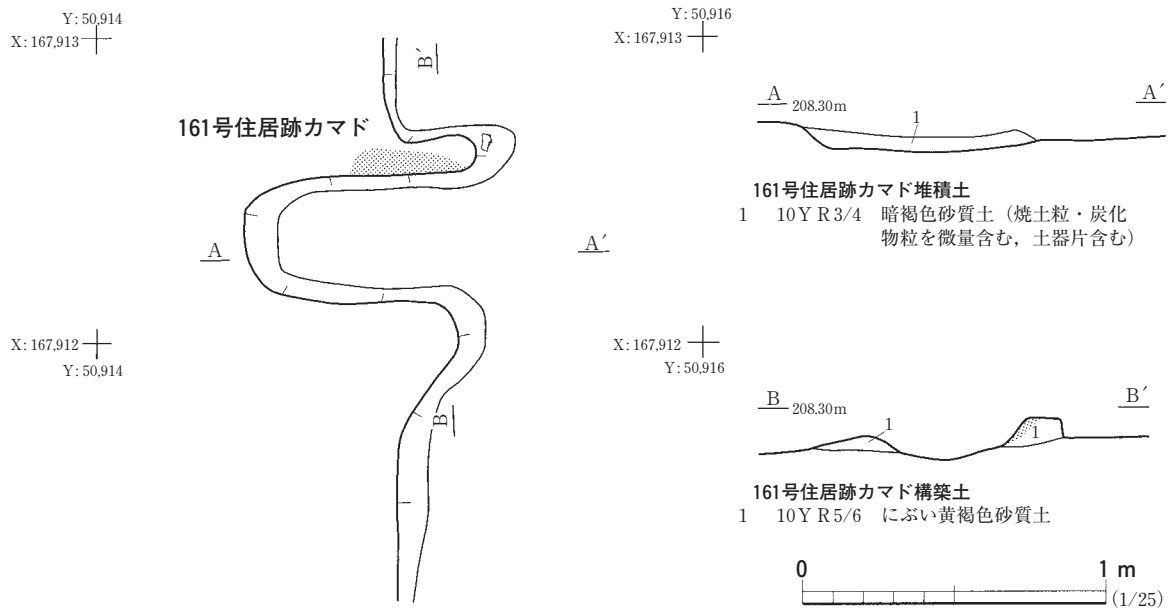


図404 161号住居跡カマド

態になっている。

規模は、東西6.0m、南北6.3mを測り、比較的大型の部類に属する。南北軸で見ると、住居跡方向は、発掘基準線に概ね一致している。

カマドは、西周壁で検出された。位置は少し右に偏っている。煙道部は、先端が削平されており、長さ不明である。燃烧部も袖がほとんど残っておらず、住居廃絶時に取り壊されたと推定される。右袖内側は、表面が焼土化していた。

袖は、にぶい黄褐色砂質土で構築されている。

本住居跡では、4個のピットが検出されている。それらは、位置関係から、4本柱の痕跡と考えられるが、厳密な規格はとられていない。柱穴間を結んだ線と、周壁の方向が一致せず、柱間寸法の統一も大まかである。

具体的な数値で示すと、P1 - P2間が3.9m、P2 - P3間が4.6m、P3 - P4間が4.2m、P4 - P1間が3.9mを測る。各柱穴は、径32~41cmの円形プランをなしており、床面から39~46cmの深さを測る。

遺物 (図405, 写真627)

遺物は、土師器片360点が出土している。図示遺物は、4点あり、土師器甕の2点が遺構に伴っている。

図405-1・2は、土師器杯になる。1は、口縁部が内湾して立ち上がる椀状のもので、内面はナデ仕上げされている。底部は、上げ底を呈している。2は、ミニチュア品である。器高が低く、口縁部は外傾して立ち上がる。

図405-3・4は、土師器甕になる。3は、胴部の膨らみが大きく、口縁部の広い器形をなす。頸部下端の外面には、段を形成している。4は、胴部に膨らみが無く、頸部が「く」の字状に強く屈

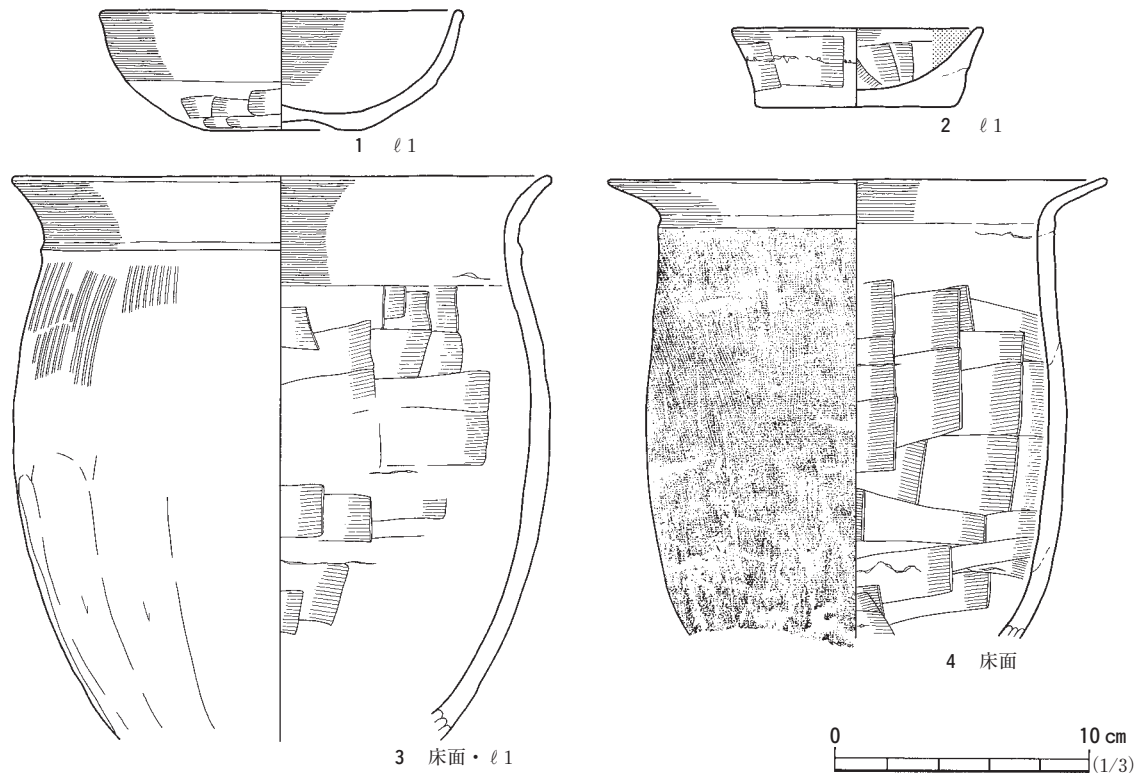


図405 161号住居跡出土遺物

曲する器形をなしている。頸部下端の外面に、段を形成している。以上の2点は、胴部外面がハケメ調整である。

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。比較的大きな規模を有しており、遺存状態にも恵まれていた。しかし、共伴した遺物は少なく、住居廃絶時に外へ持ち去られたと考えられる。

なお、調査時点で掘形としたものは、下層住居跡の可能性が高いと現在では考えている。

本住居跡は、出土遺物から、栗圀式期の所産と考えている。

(菅原)

162号住居跡 S I 162

遺構 (図406, 写真392・393)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。重複関係は、31・131号住居跡より古く、169・185号住居跡より新しいことが判明している。

本住居跡は、床面の4分の3が破壊され、遺構内容の詳細については、ほとんど知ることができなかった。

堆積土は6層に分層された。全体に水平堆積しており、周壁際のℓ5では、微量の炭化物が含まれていた。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。

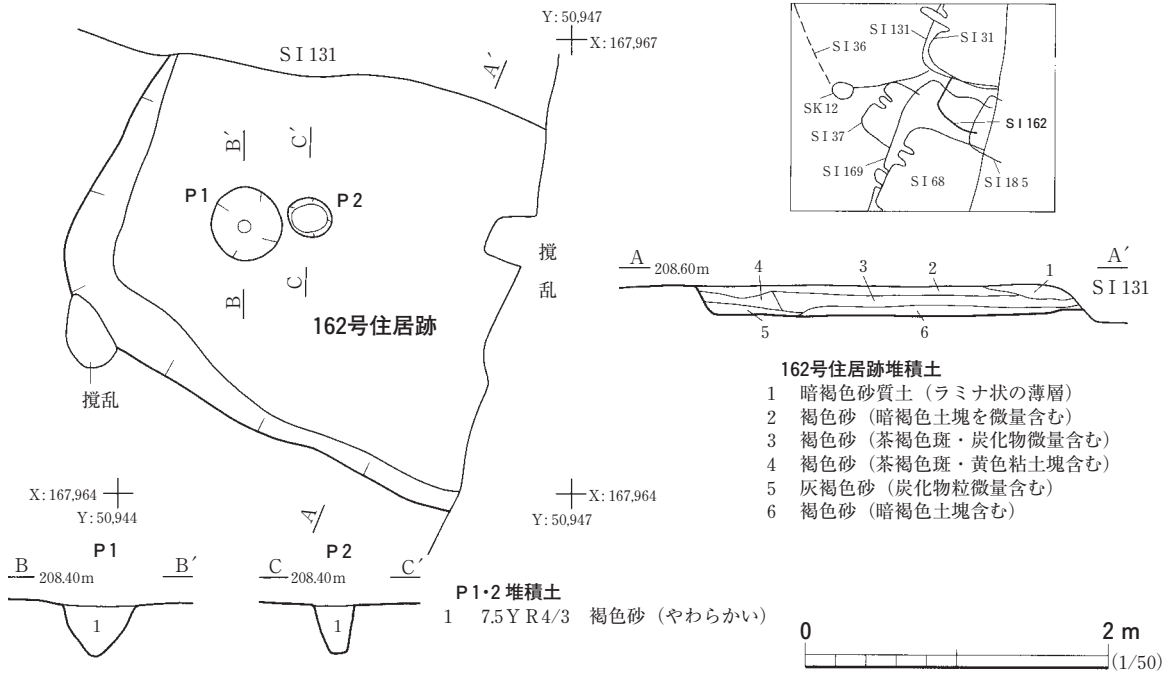


図406 162号住居跡

検出範囲では、とくに顕著な踏み締まりは認められなかった。床面と検出面の比高差は、20～22cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。規模は南北2.6m以上、東西3.0m以上である。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に21°振れている。

カマドは、検出されなかった。

南西隅付近で、2個のピットが検出された。P1は、48cm×49cmの円形をなすもので、床面からの深さは33cmを測る。P2は、30cm×26cmの楕円形を呈するもので、床面から35cmの深さを測る。両者は近接しており、底面の深さが近似している。したがって、同じ機能を備えていたと推定される。しかし、具体的には良く分からない。

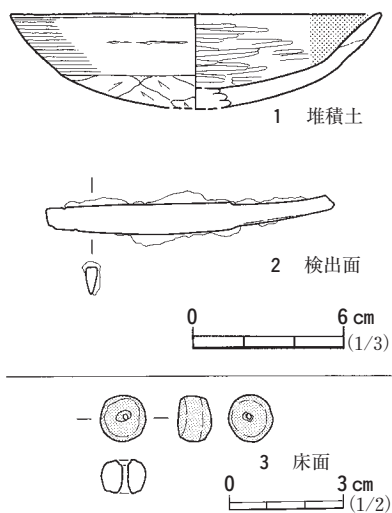


図407 162号住居跡出土遺物

遺物 (図407, 写真627)

遺物は、土師器片124点、鉄製品1点、土製品1点が出土した。

図407-1は、土師器杯になる。有段丸底杯に分類されるが、段は曖昧である。器高が低く、口縁部は大きく開いている。

2は、鉄製刀子になる。先端を欠いている。

3は、土製丸玉になる。床面の遺物で、共伴資料になる。表面が黒色処理されている。

まとめ

本住居跡は、残りが悪かった。床面の4分の3が破壊されており、カマドも検出されていない。細部施設は、南西隅付近の床面で、2個のピットが検出されている。

遺物は、時期を決定できる良好な相伴資料に恵まれなかった。ただ、重複遺構の所見から、栗圀式期に位置付けられる可能性が高いと推定できる。(菅原)

164号住居跡 S I 164

遺 構 (図408, 写真394・395)

本遺構は、N22グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。重複関係は、105・129・136号住居跡より古く、169号住居跡より新しいことが判明している。

本住居跡は、床面の東半分が破壊され、さらに、西周壁ぎわとカマド煙道部先端が破壊されている。

このため、遺構内容の詳細については、ほとんど知ることができなかった。

堆積土は7層に分層された。断面は、やや不自然な堆積状況を呈しているが、自然流入土と判断している。ℓ1・2では、炭化物・焼土の含有が認められた。

床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。検出範囲では、とくに顕著な踏み締まりは認められなかった。

床面と検出面の比高差は、20~22cmを測る。

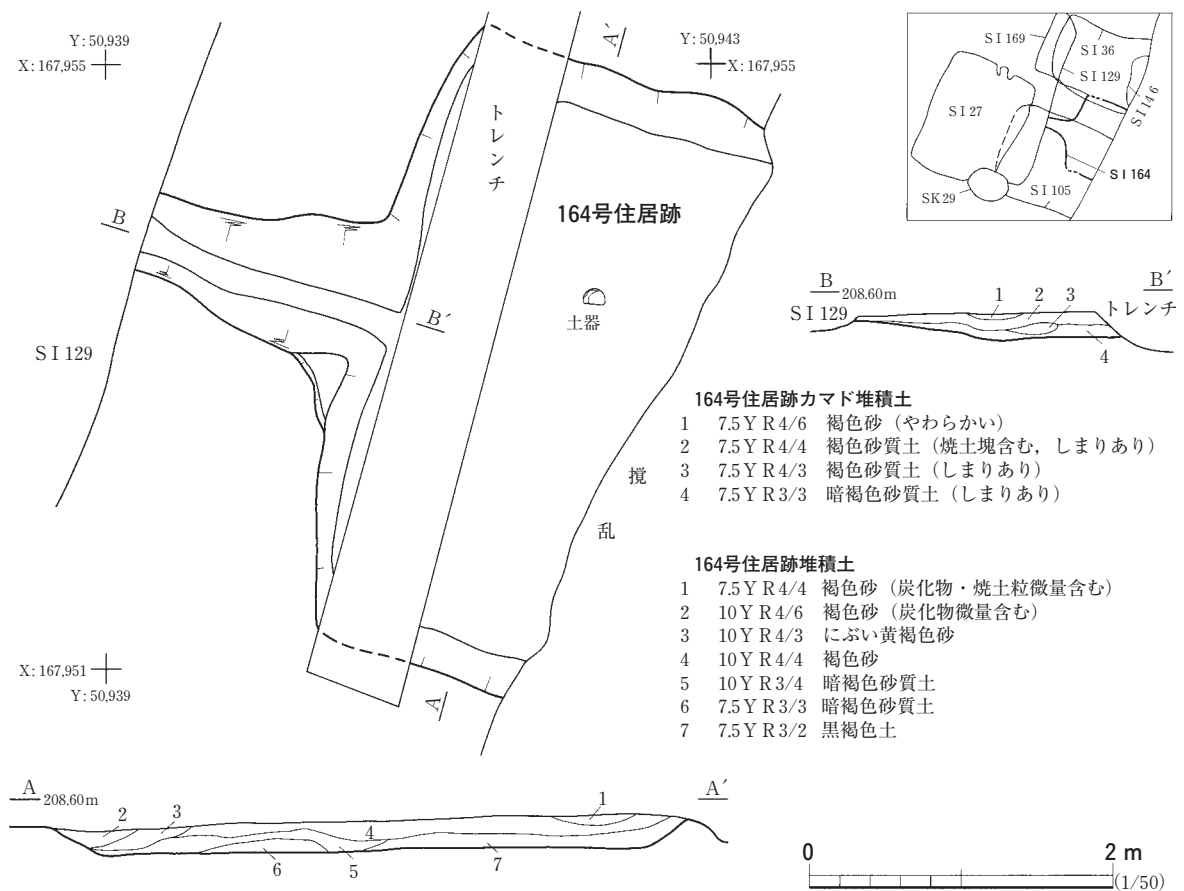


図408 164号住居跡

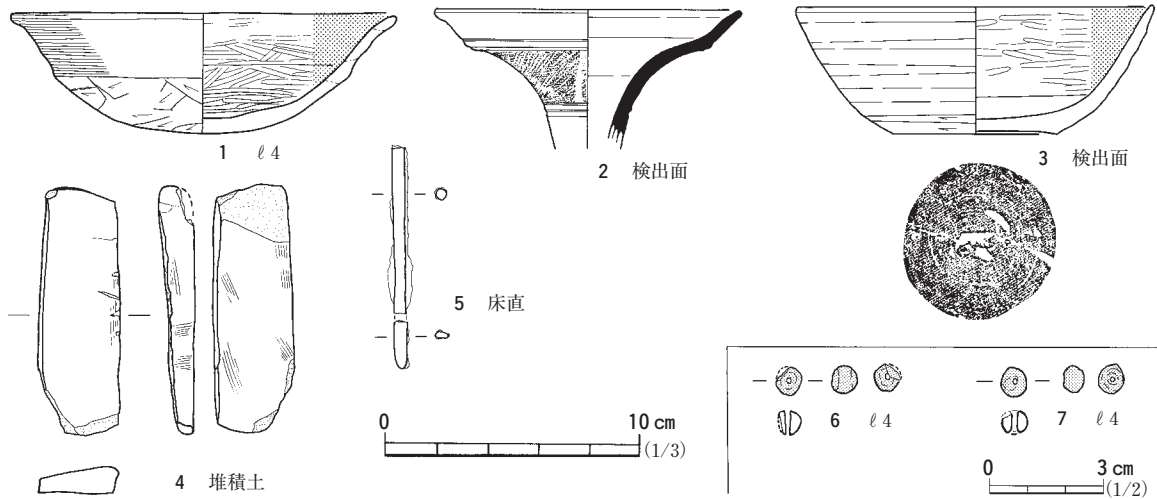


図409 164号住居跡出土遺物

本住居跡の平面プランは、方形を呈している。規模は南北4.1m、東西2.2m以上を測り、中型のクラスに属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に21°振れている。

カマドは、西周壁中央で検出された。煙道は、周壁から長さ1.5mを測り、先端が壊されている。燃焼部は、まったく残っていない。

ピット類は検出されていない。

遺物 (図409, 写真627・628)

遺物は、土師器片170点、須恵器片2点、石製品1点、鉄製品1点、土製品2点が出土した。図示遺物は7点である。

このうち遺構に伴うのは、鉄製品1点である。

図409-1・3は、土師器杯になる。1は、有段丸底杯に分類される。器形は、口縁部が大きく開いており、段の位置が、器高の中ほどにある。3は、ロクロ土師器である。器形の特徴から、表杉ノ入式の前半段階に位置付けられるもので、底部全面と体部下端に回転ヘラケズリ調整が施されている。

2は、須恵器甕になる。頸が細く、口縁部がラッパ状に開いている。頸部には、平行沈線が施され、口縁部下端との間に、櫛歯状の列点刺突文が描かれている。胎土は、精選されており、焼成良好の優品である。

4は、砥石になる。長方形を呈するもので、断面は偏平になっている。

5は、鉄鏝と推定される。端を欠いている。

6・7は、土製丸玉になる。表面は、黒色処理されている。

まとめ

本住居跡は、自然堤防の東斜面に営まれた中型の竪穴住居跡である。西半分が壊されており、また、時期を決められるような共伴遺物にも恵まれなかった。

重複遺構の関係から、本住居跡は栗圀式期に営まれたと考えられる。

(菅原)

165号住居跡 S I 165

遺 構 (図410, 写真396・397)

本遺構は、N21グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。3軒の竪穴住居跡と重複しており、80・113・121号住居跡に切られている。さらに、北側に攪乱が入っており、遺存状態がきわめて悪い。検出されたのは、住居北西側の一部だけである。

堆積土は、2層に分層された。断面は、典型的なレンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は、自然埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。床面と検出面の比高差は、最大15cmである。

本住居跡の平面プランは、方形を呈していたと推定される。しかし、遺存状態の制約から、詳し

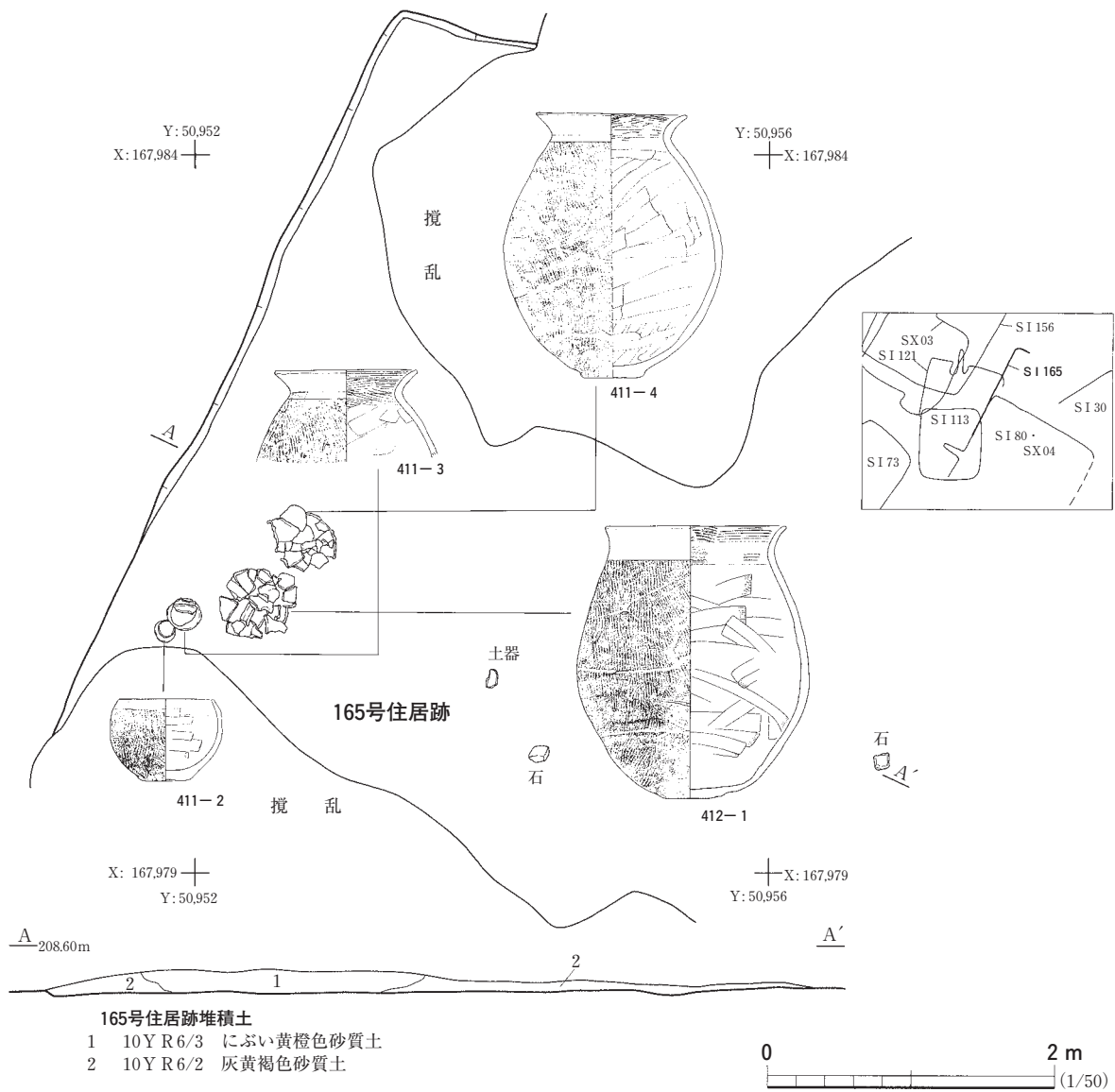


図410 165号住居跡

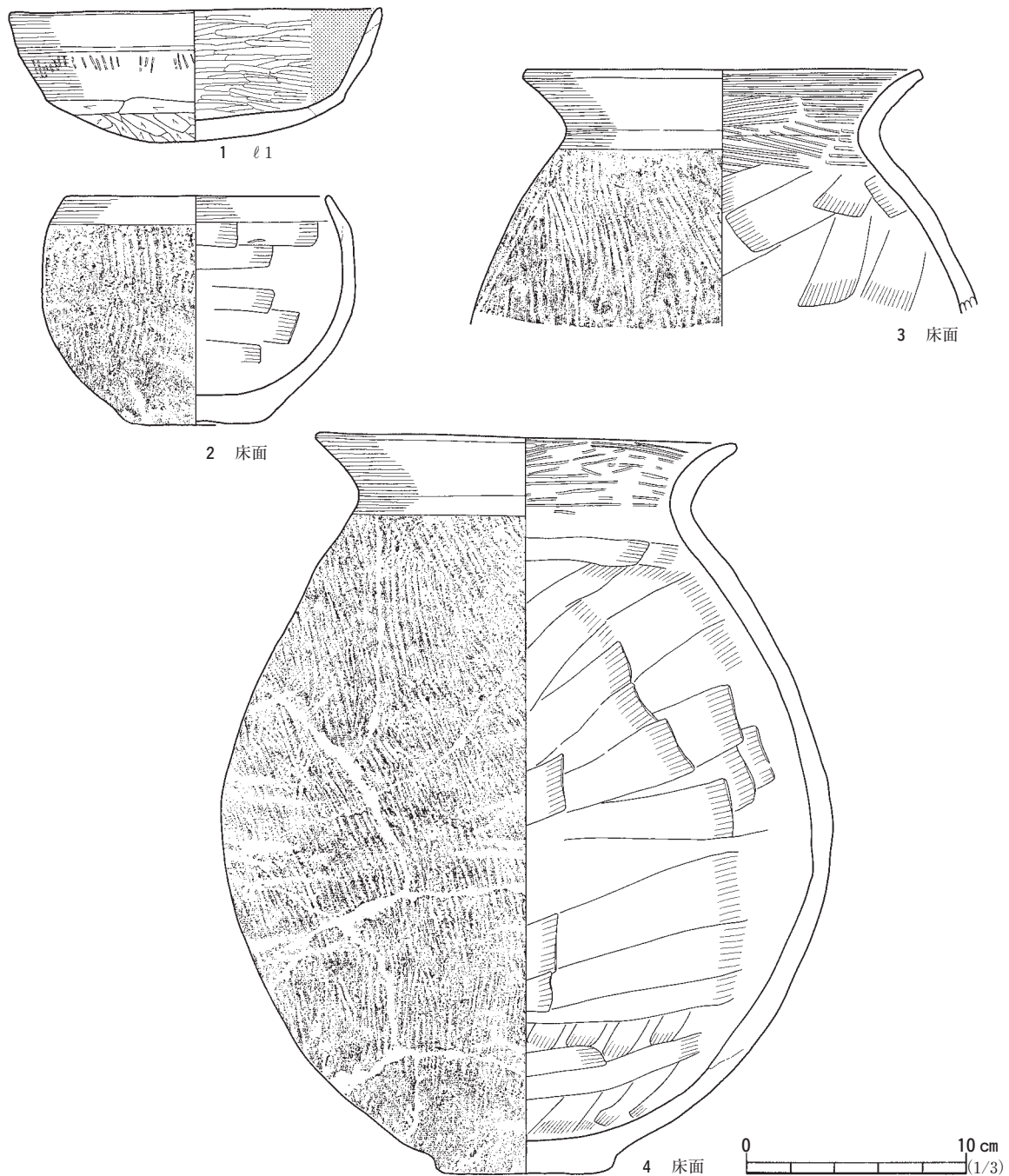


図411 165号住居跡出土遺物（1）

いことは知ることができない。規模は、東西4.7m以上、南北5.6m以上を測り、中型以上の部類に属している。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に25°振れている。

カマドは検出されなかった。ただ、遺物出土状況からみると、西周壁に設置されていた可能性が高いと思われる。完形に復元される土器が、集中して認められた。

ピット類は、検出されていない。

遺物 (図411・412, 写真628・629)

遺物は、土師器片229点が出土した。図示遺物は、5点あり、その中で図411-1を除いた4点が、

遺構に伴っている。相伴遺物は、すべてカマド想定位置の右脇で出土した。

図411-1は、有段丸底の土師器杯になる。口縁部は内湾気味に立ち上がっており、器高が高い。口縁部外面には、ヨコナデ前に施されたハケメ調整の痕跡が観察される。

図411-2は、土師器小甕になる。口径が器高を上回り、口縁部は内傾する。胴部外面は、ハケメ調整されている。

図411-3・4、図412-1は、大型の土師器球胴甕になる。図411-3・4は、頸部の窄まりが強いタイプで、胴部最大径が中央にある。図412-1は、頸部の窄まりが弱い、広口のタイプである。胴部最大径は、やはり中央にある。以上の3点は、胴部外面がハケメ調整で統一されている。

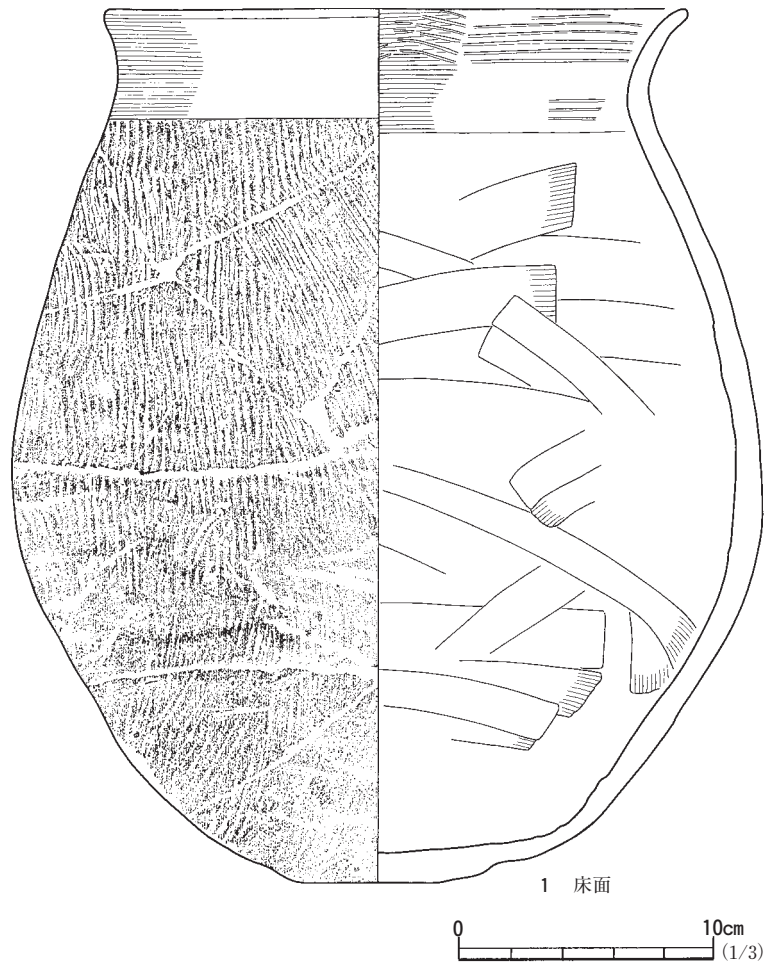


図412 165号住居跡出土遺物(2)

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。遺存状態に恵まれておらず、カマドも残っていなかった。したがって、遺構の詳細については、不明な点が多い。規模は、中型以上である。

本住居跡が営まれた時期は、相伴遺物の特徴から、栗圀式期に求められる。(菅原)

166号住居跡 S I 166

遺構 (図413, 写真398)

本遺構は、N22グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。他の遺構との重複関係は認められない。

本住居跡は、残りが非常に悪かった。検出されたのはカマド燃焼部だけで、しかも、著しい上部削平を受けていた。袖は先端が欠損しており、焚口幅は不明である。構築土は、焼土・炭化物を含んでいた。床面からの高さは、20cmを測る。底面は焼土化していた。

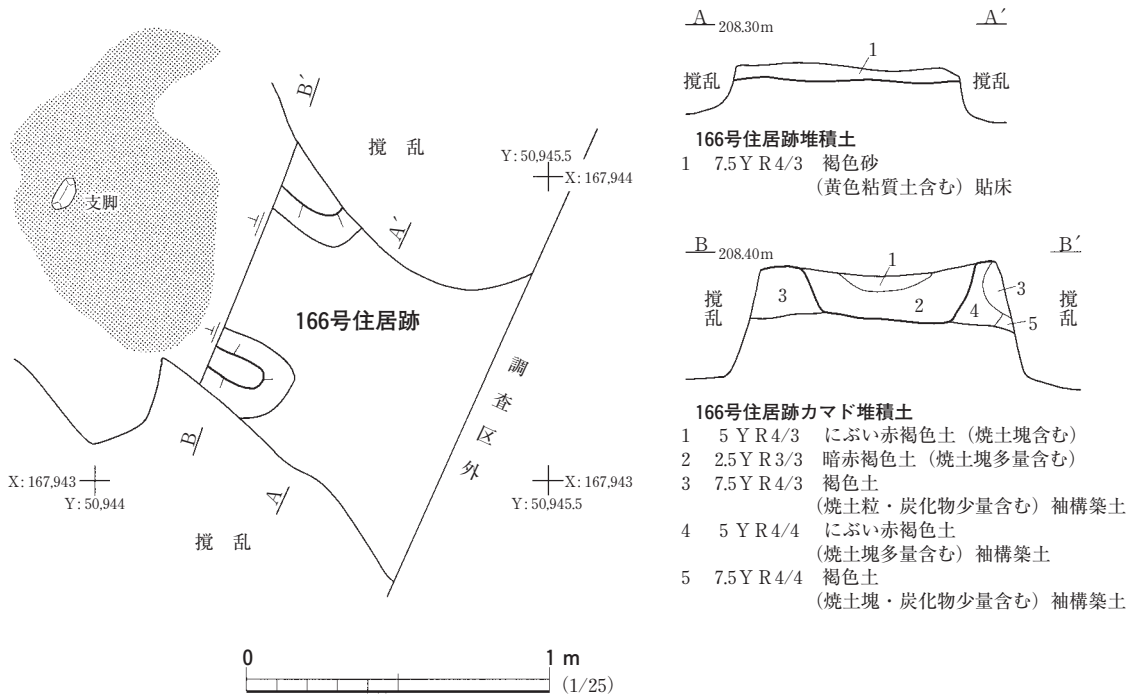


図413 166号住居跡

遺物 (図414)

遺物は、土師器片16点が出土した。カマド出土の1点を図示した。

図414-1は、土師器甕になる。器形は、頸部がほとんど括れず、胴部から口縁端部まで直線的に外傾している。胴部外面は、ハケメ調整である。

まとめ

本住居跡は、自然堤防の東斜面に営まれた堅穴住居跡である。残りが悪く、カマドの一部だけが検出されたにすぎない。

本住居跡は、カマドの遺物から、栗囲式期に営まれたと考えられる。

(菅原)

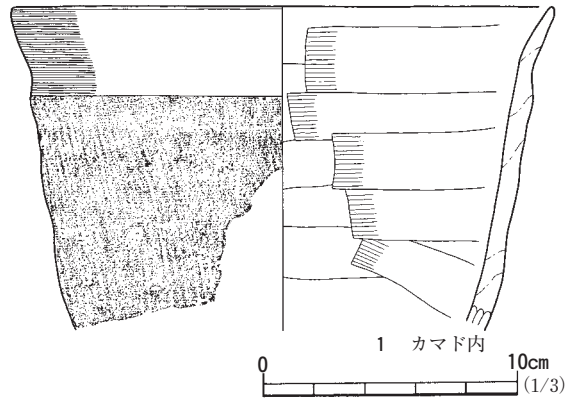


図414 166号住居跡出土遺物

167号住居跡 S I 167

遺構 (図415, 写真399)

本遺構は、M22グリッドで検出された堅穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面である。3軒の堅穴住居跡と重複しており、143・159・174号住居跡に切られている。

本住居跡は、北西隅の一部だけを残してほとんどが破壊されていた。検出されたのは、床面積の4分の1にも満たない範囲と推定される。

堆積土は、にぶい黄橙色砂質土が1層みられた。自然流入土と考えている。床面は、貼床されず、

掘形底面がそのまま平坦に整えられている。検出範囲では、踏み締まりは認められなかった。床面と検出面の比高差は、20cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形を呈していたと推定される。規模は、東西1.7m以上、南北3.2m以上を測る。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に10°振れている。

カマドは検出されなかった。

また、ピット類も検出されていない。

遺物 (図415)

遺物は、土師器片15点が出土した。図示遺物は、1点だけである。この資料は、遺構には伴っていない。

図415-1は、土師器杯になる。底部は丸底で、口縁部が内湾気味に立ち上がっている。体部下端に、段は認められない。

まとめ

本遺構は、自然堤防の中央平坦面に営まれた堅穴住居跡である。重複遺構のため、ほとんどが破壊されていた。したがって、遺構の詳細については、不明である。

共伴遺物も出土しなかった。

本住居跡が営まれた時期は、重複遺構から、栗圀式期に下限を設定することができると思われる。

(菅原)

169号住居跡 S I 169

遺構 (図416・417, 写真400~403)

本住居跡は、調査区中央の東端にあたるN21・22グリッドに位置している。営まれたのは、東に向かって緩やかに傾斜する自然堤防上である。

重複関係を整理すると、37・68・129・136・162・164・185号住居跡より古いことが判明している。また、146号住居跡とも重複しているが、これについては、新旧関係が捉えられなかった。東側は攪乱で大きく壊されており、確認できたのは床面積の約半分だけである。

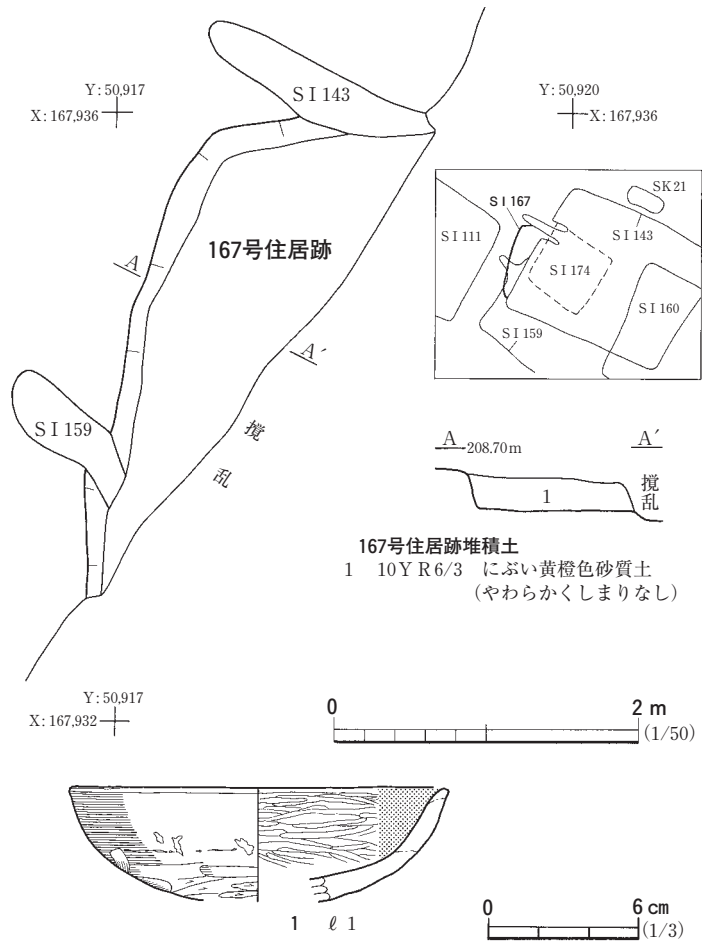


図415 167号住居跡・出土遺物



図416 169号住居跡

本住居跡は、検出できた西周壁の規模から、一辺12.0mほどの大型住居であったと考えている。とすれば、今回高木遺跡で確認された住居跡の中では、最大規模となる。住居跡と方位の関係を西周壁の傾きで示すと、真北から23°東に傾いている。壁高は、西周壁の北寄り部分で最大32cmを測り、急激に立ち上がる。床は、LⅣを掘り込んだだけの直床で、貼床は行われていない。上面はほぼ水平で、平坦である。

堆積土は16層に区分した。基本的には自然堆積したものと考えているが、断面はきれいなレンズ状を呈していない。

住居跡内施設は、西周壁中央に取り付くカマド1基を検出した。検出状態の平面形は、「C」字状をなしており、焚口の幅に比べて、袖が短い。規模は、焚口幅が約30cm、

袖長約40cmを測る。袖の高さは底面から最大で18cmである。袖が短いのは、重複する68号住居跡によって、先端が壊されたことが原因と考えられる。

カマド内堆積土は、4層に区分した。①1・2には、焼土が含まれている。焚口周辺には、ごく弱い焼土面が残っている。袖の構築土中には、焼土ブロックが含まれていた。

遺物 (図418, 写真629)

遺物は土師器片194点、須恵器片2点が出土した。比較的床面に近い堆積土から、5点の図示遺物が得られた。

図418-1~3は、有段丸底の土師器杯になる。1は、口径の小さな、深めの器形を呈しており、口縁部外面が肥厚している。また、底部外面に焼成前の線刻がみられ、口縁部外面にヘラミガキ調整痕が観察される。2・3は、口縁部が大きく開く器形を呈している。立ち上がりは、内湾気味である。

図418-4は、須恵器甕の口縁部片になる。振幅の緩慢な波状文が外面に施されている。胎土は白色粒子の混入が目立ち、ザラザラした質感がある。

図418-5は、須恵器甕の胴部片になる。外面には、平行タタキメとそれを切るカキメ調整痕が認められる。内面には、同心円文アテメが観察される。

まとめ

本住居跡は、今回検出された住居跡の中では、最大規模を誇っている。東半分は破壊されていた

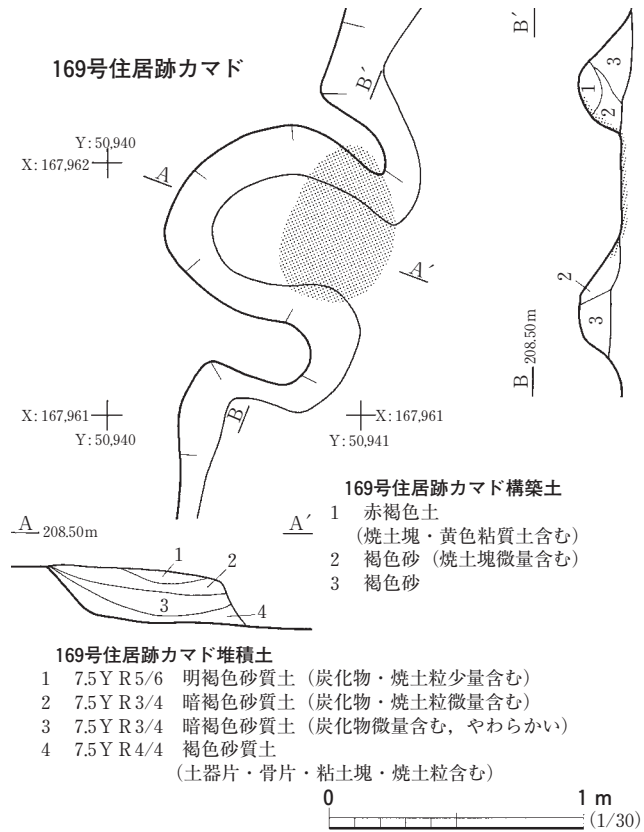


図417 169号住居跡カマド

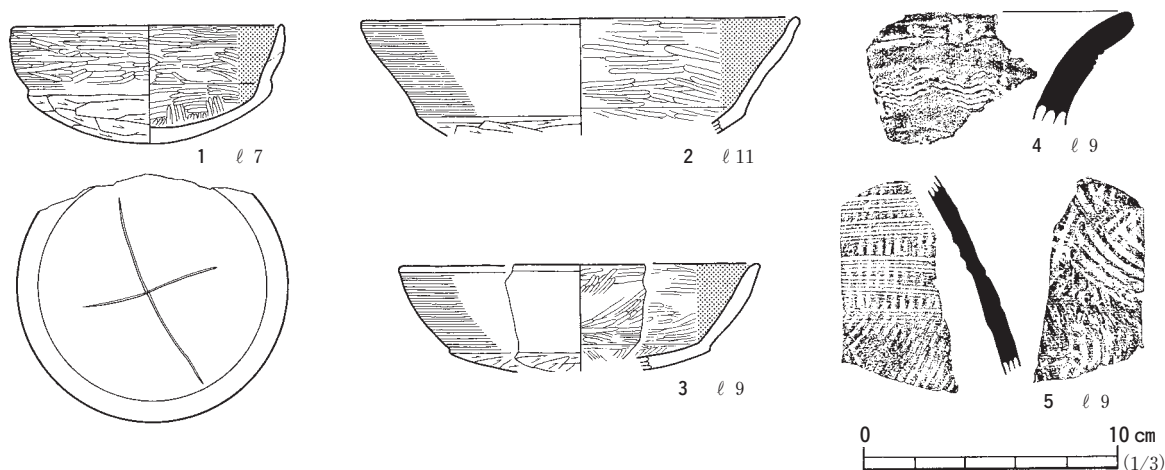


図418 169号住居跡出土遺物

が、検出範囲の遺存状態は良好で、周壁高が30cm以上あった。

しかし、遺物の出土は稀薄であり、床面に残された図示可能な遺物は1点も無かった。住居廃絶時にすべて持ち出されたのだろうか。

本住居跡が営まれたのは、床面に近い堆積土の遺物から、栗圀式期に位置付けることが可能と思われる。(佐藤)

170号住居跡 S I 170

遺構 (図419, 写真404・405)

本遺構は、N22グリッドで検出された竪穴住居跡である。

営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。周囲には、数多くの住居跡が密集している。

その中で、本住居跡は6軒の住居跡と重複しており、114・120・143・160・173・214号住居跡に切られている。

したがって、重複遺構の中では、最も古く位置付けられる。

本住居跡は上部削平が著しいうえに、北周壁と南周壁が壊されていた。しかし、平面プランがおおよそ推定できる状態には遺存していた。

堆積土は、にぶい黄橙色砂質土が1層認められた。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。

レベルを追うと、微地形の影響で、後背湿地側に緩やかに傾斜している。検出面と床面の比高差は、4～7cmを測る。

カマドは、西周壁で検出された。痕跡程度の遺存状態のため、袖は残っていなかった。煙道部も、先端が削平されており、長さ不明である。

本住居跡では、カマドの対面でピットが1個検出されている。東周壁を半分掘り込んでおり、100cm×82cmの楕円形を呈している。床面からの深さは、29cmを測り、底面は平坦である。

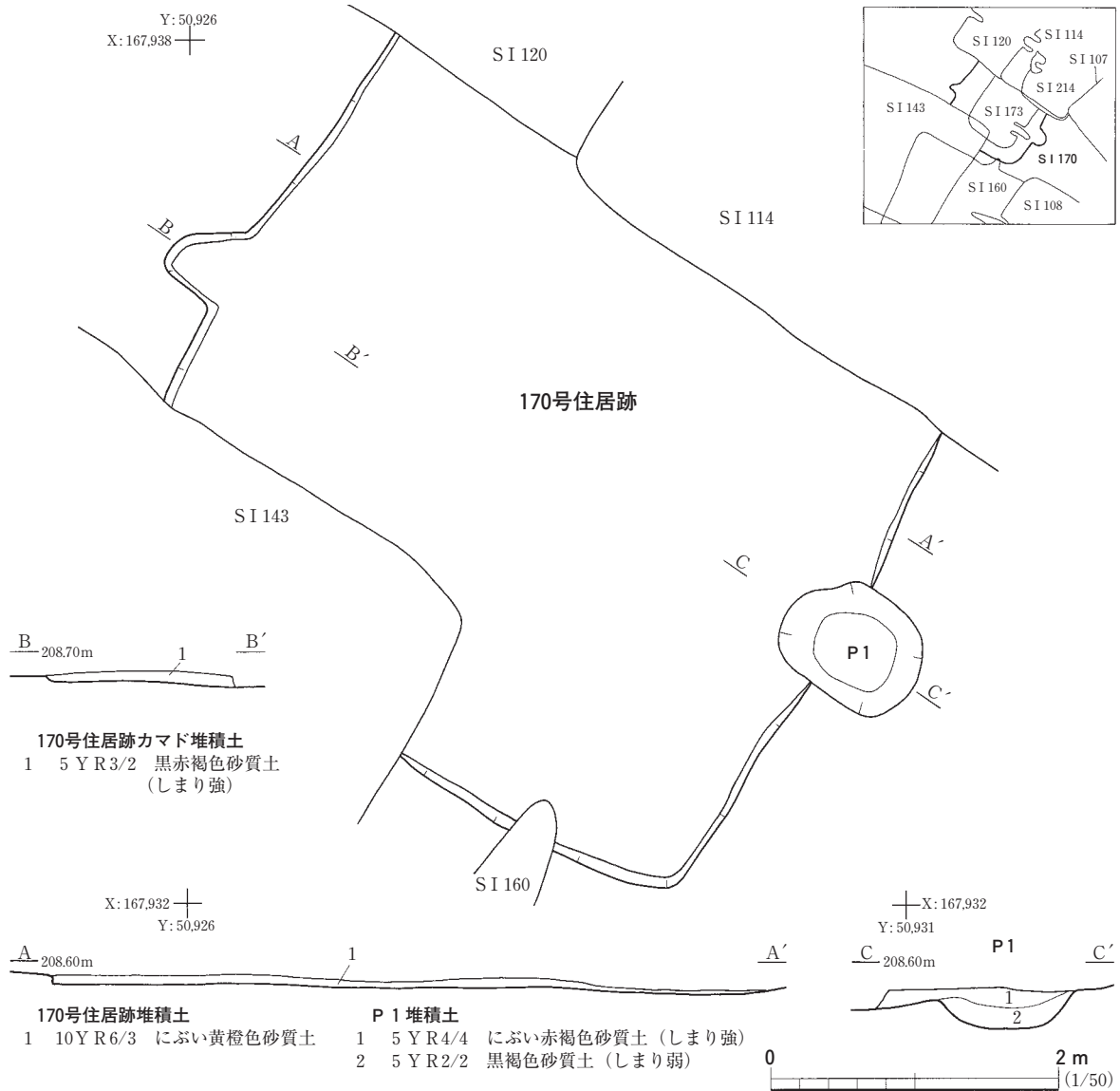


図419 170号住居跡

このピットは、古墳時代中期末～後期によくみられる「張り出しピット」に類似している。数量に恵まれていないが、共伴遺物の年代観にも矛盾が無く、本例は、これに該当する可能性が高いと考えられる。

遺物 (図420, 写真629)

遺物は、土師器片63点・土製品1点が出土した。遺構の上部削平が著しかったことを反映して、数は少ない。

図示遺物は3点あり、土師器杯の2点が遺構に共伴している。

図420-1・2は、有段丸底の土師器杯になる。どちらも小さな破片から復元実測したので、口径の大きさには誤差を含んでいると思われる。器形は、口縁部の反り返るのが特徴的で、舞台式～栗圀式古段階に比定される。

図420-3は、土製丸玉になる。表面は、黒色処理されている。

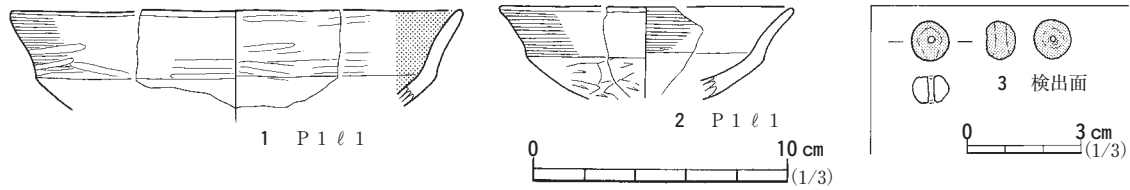


図420 170号住居跡出土遺物

ま と め

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。6軒の住居跡と重複しており、その中で最も古く位置付けられる。

カマドの対面には、張り出しピットが設けられていた。

営まれた時期は、共伴遺物から、舞台式期～栗圀式期古段階に位置付けられる。 (菅原)

173号住居跡 S I 173

遺 構 (図421, 写真406・407)

本遺構は、N22グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。周囲には、数多くの住居跡が密集している。その中で、本住居跡は、5軒の竪穴住居跡と重複している。114・120・143・214号住居跡に切られ、170号住居跡を切っている。

当初、本住居跡はプランが分からず、重複する170号住居跡から先に掘り込んでしまった。そのため、周壁は、本来残っていた高さよりも下がってしまい、遺物も一部混乱してしまっている。

堆積土は、2層に分層することができた。断面は、レンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は自然に埋没したと考えている。床面は、貼床されておらず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み締まりは、認められなかった。床面と検出面の比高差は、16～18cmである。

本住居跡の平面プランは、正方形基調を呈している。規模は、東西3.0m、南北3.2mを測り、小型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に32°振れている。

カマドは、東周壁で検出された。位置は、少し右に偏っている。

遺存状態は比較的良好で、煙道部は、周壁から長さ65cm伸びていた。燃焼部は、袖長80cm、焚口幅23cmを測る。内壁面は焼土化していた。

袖は、極暗赤褐色砂質土で構築され、床面から20cmの高さが残っていた。構築土 ℓ 2では、骨片の混入がみられた。

遺 物 (図421, 写真629)

遺物は、土師器片28点、石製品1点が出土した。遺構の残りが良かった割に、遺物は量が少なかったといえる。図示遺物は4点で、このうち、図421-2・3が住居跡に共伴している。

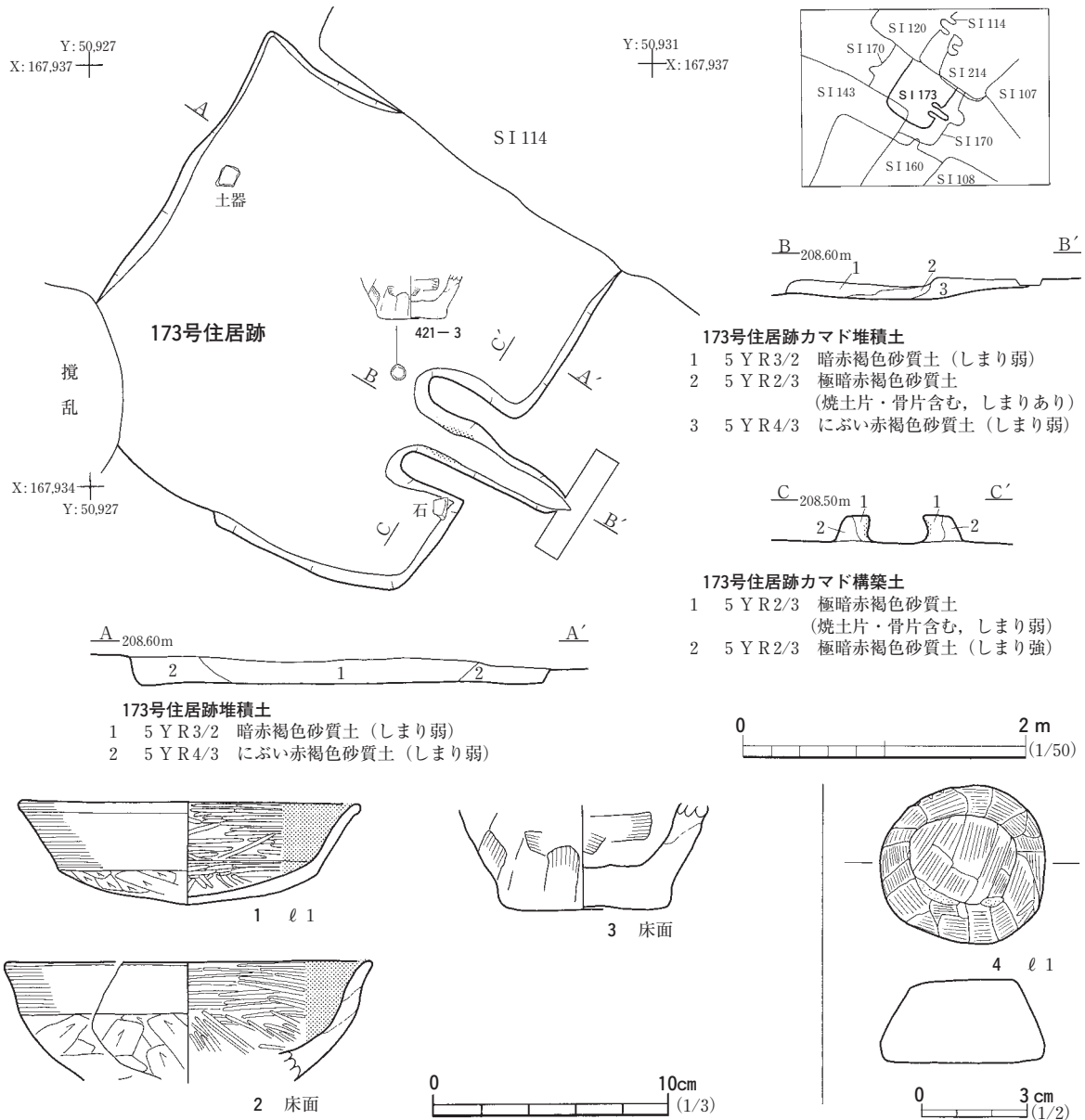


図421 173号住居跡・出土遺物

図421-1・2は、土師器杯になる。1は、口縁部の外反気味の有段丸底杯である。端は、丸く収められている。2は、椀状の形態をなすもので、厚手のつくりである。口縁部は、外反している。

図421-3は、土師器甕の底部になる。小型品になると思われる。器形全体の特徴は、知ることができない。

図421-4は、石製紡錘車の未成品になる。形は概ね完成しているが、研磨・穿孔がまだ行われていない。

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。規模は小さく、正方形の平面プランを有している。

営まれた時期は、共伴遺物から、栗圀式期と考える。

(菅原)

174号住居跡 S I 174

遺 構 (図422, 写真408・409)

本遺構は、M22・N22グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、自然堤防の中央平坦面である。

重複関係を整理しておくと、本住居跡は143号住居跡に切られ、159・167号住居跡を切っている。

本住居跡は、143号住居跡で上部が削りとられ、床面がほとんど露呈した状態で検出された。したがって、堆積土 ℓ 1は、掘形埋土である。しまりが強く、炭化物を含んでいた。厚さ、7～10cmを測る。

本住居跡の平面プランは、正方形基調を呈している。規模は、東西3.5m、南北3.4mを測り、小型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に29°振れている。

カマドは、西周壁中央で確認された。しかし、煙道部先端が、143号住居跡の破壊を免れていただけで、詳細については、不明である。

なお、左袖先端にあたる位置で、大きな礫が出土した。カマド補強材であったかも知れない。

ピット類は、検出されていない。

遺 物 (図423・424, 写真630・631)

遺物は、土師器片284点、土製品1点が出土した。図示遺物は、9点で、すべて遺構に共伴している。

器種は、煮炊具が主体を占め、分布は、カマドのある西半部に偏っている。

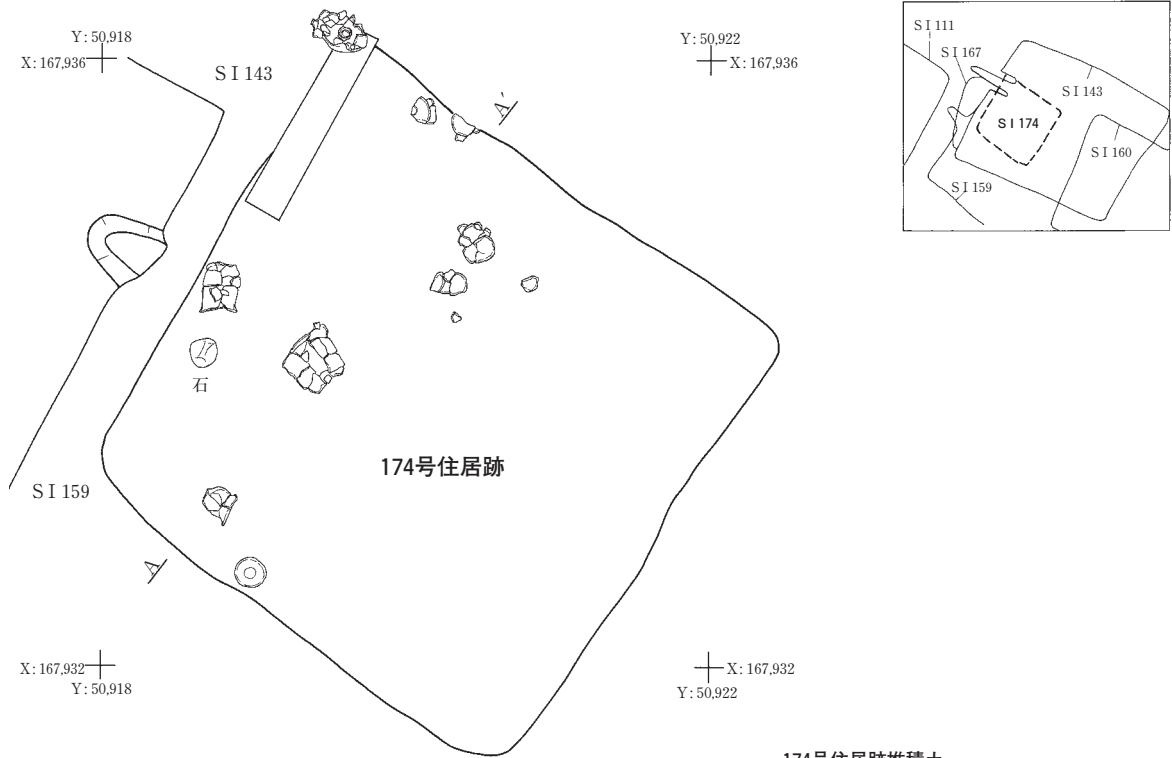
図423-1は、有段丸底の土師器杯になる。ただし、段は、あまりはっきりしていない。内面は、ナデ調整で仕上げられている。底部は、焼成後に穿孔されており、何かの目的に転用されたものと推定される。

図423-3は、土師器小甕になる。器形の特徴は、外面の頸部下端に段があり、胴部は膨らみをもたずに、底部へ窄まっている。器面調整は、胴部外面がハケメ調整されており、底部外面には木葉痕が残る。

図423-2・4・5、図424-1・2は、中～大型の土師器甕になる。ただし、器形全体の判明するのは、図423-2・4の2点だけである。図423-2は、胴部の膨らみが大きく、広口の形態をなしている。底部は突出している。図423-4は、細長い胴部を有するもので、やや下膨れ気味である。出土地点からみて、カマド懸け口に固定されていたものと推定される。底部に木葉痕が残る以上の2点を含め、本住居跡の甕は、胴部外面がハケメ調整に統一されている。

図424-3は、土師器甕になる。器高30cmに近い大型品で、無底式に分類される。器形は、胴部中央が張っている。胴部外面は、甕と同じように、ハケメ調整である。

図423-6は、土製支脚になる。



174号住居跡堆積土
 1 5 Y R 3/3 暗赤褐色砂質土 (炭化物含む, しまり強) 掘形埋土

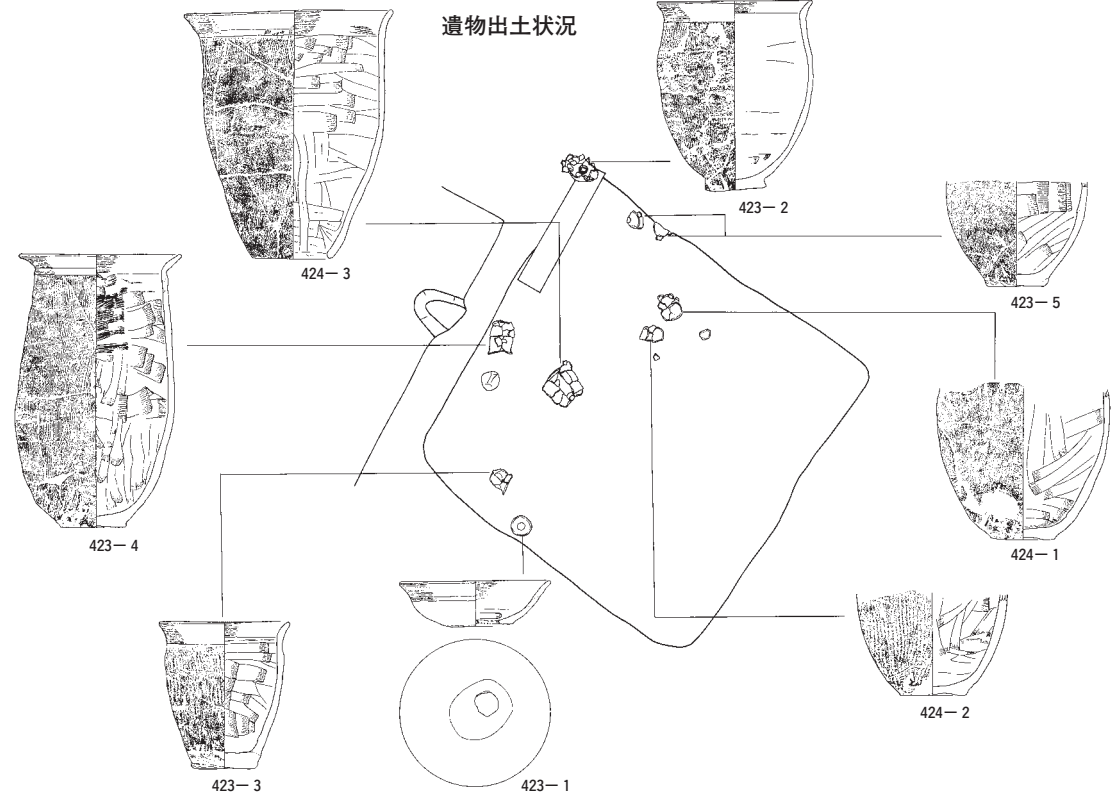
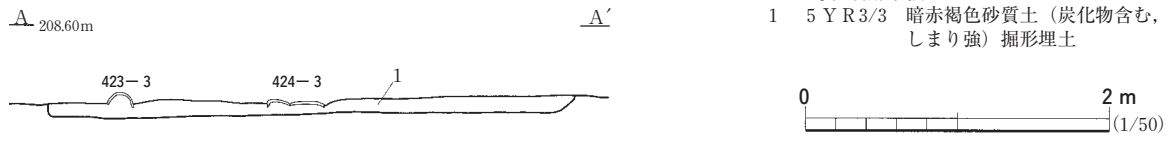


図422 174号住居跡

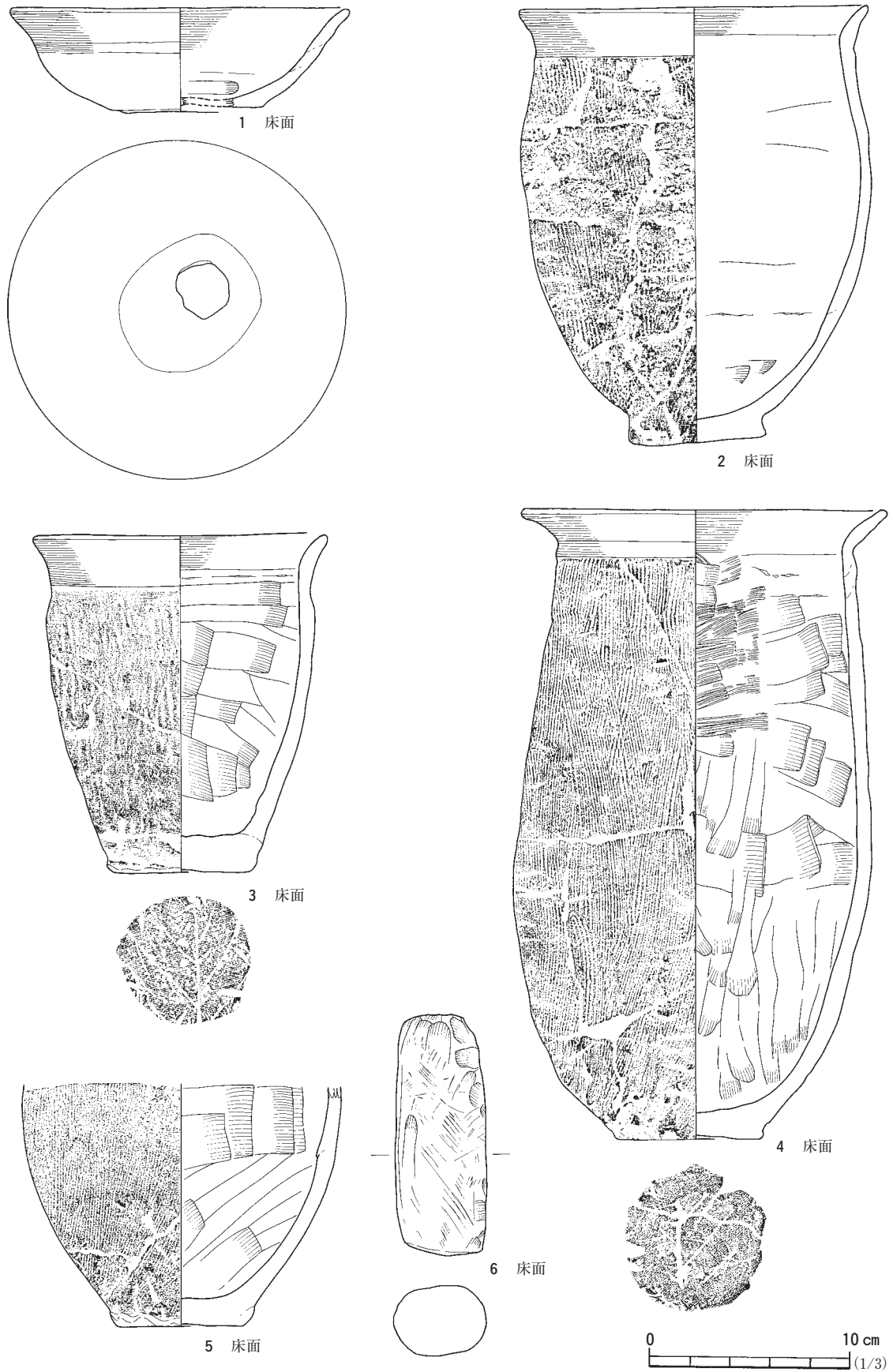


図423 174号住居跡出土遺物 (1)

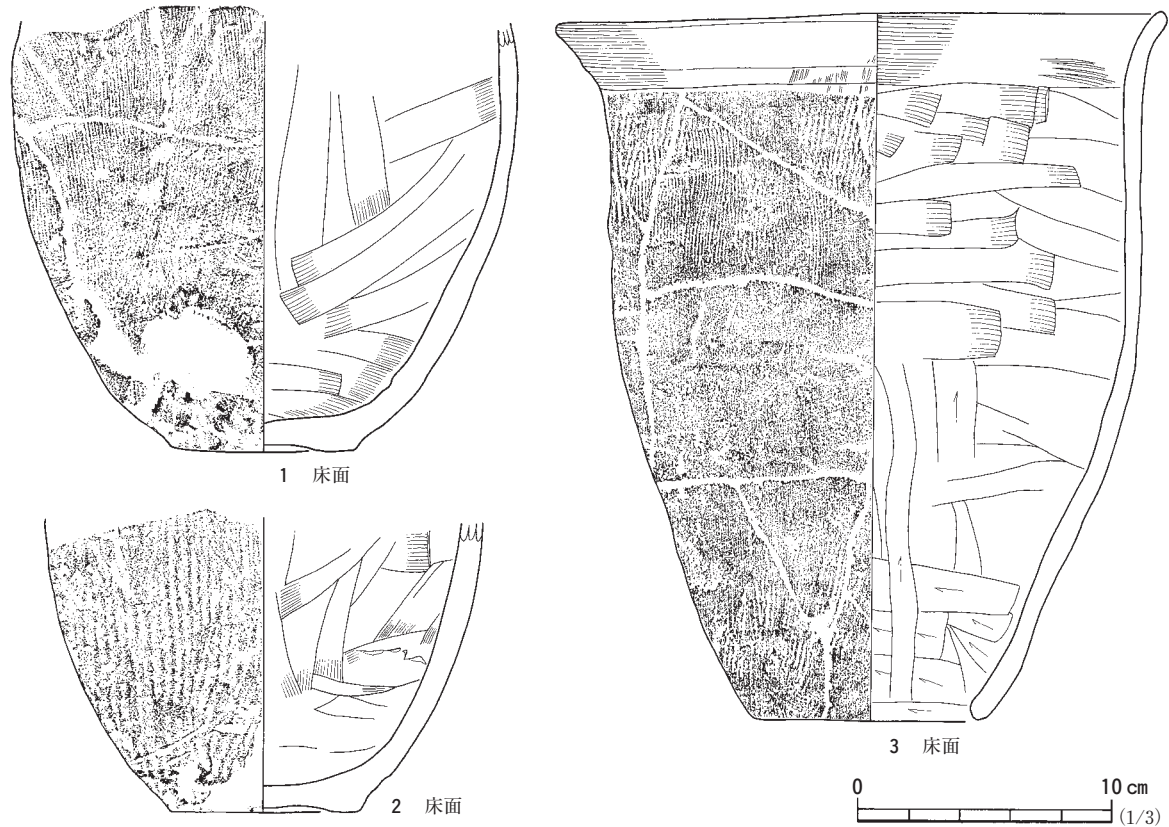


図424 174号住居跡出土遺物（2）

ま と め

本遺構は、自然堤防の中央平坦面で検出された竪穴住居跡である。重複遺構の削平のため、床面が露呈した状態で検出された。

規模は小さく、正方形の平面プランを有している。

本住居跡が営まれたのは、出土遺物の特徴から、栗囲式期と考えられる。

（菅 原）

178号住居跡 S I 178

遺 構（図425，写真410・411）

本遺構は、M23グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。重複関係を整理しておくと、99・161号住居跡、41号土坑に切られている。

本住居跡は、遺存状態が良好であった。西周壁中央が41号土坑で破壊されているが、平面プランのほぼ全体が捉えられている。

堆積土は、2層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は、自然埋没したと考えている。

床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。踏み締まりは、認められなかった。検出面と床面の比高差は、13～15cmを測る。

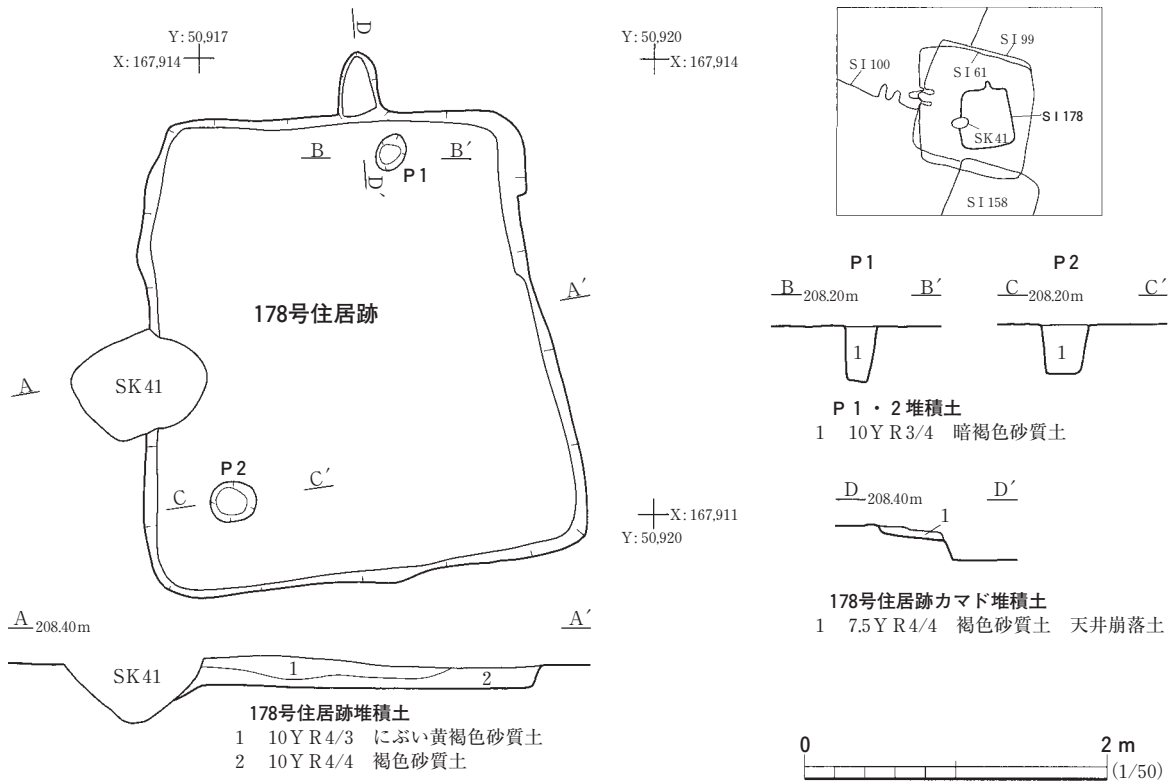


図425 178号住居跡

本住居跡の平面プランは、正方形を基調にしていると思われる。しかし、北周壁が向かい合う南周壁より短いため、実際には、台形状となっている。

規模は、東西2.8m、南北3.5mを測り、小型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、西に5°振れている。

カマドは、北周壁中央で確認された。煙道部は、周壁から40cm残っていたが、先端は削られて残っていない。燃焼部は、袖が壊されていた。

本住居跡では、2個のピットが検出されている。P1は、カマド右袖にあたる位置に掘られたもので、17cm×20cmの小さな円形をなす。補強材が埋め込まれた痕跡であろうか。床面からの深さは、36cmを測る。P2は、南西隅床面で検出された。27cm×25cmの円形プランをなし、床面から、30cmの深さを測る。補助柱穴と推定している。

遺物は、土師器片15点が出土した。図示可能な資料は無いが、1出土の中に、栗罎式の土師器杯・甕がみられる。

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。2軒の住居跡に上部を削平されていたが、残りは比較的良好であった。平面プランは、正方形基調を呈しており、規模は小さい。カマドは、住居廃絶時に壊されていた。

本住居跡が営まれたのは、重複遺構の関係から、栗罎式期に下限が求められる。しかし、それ以上の具体的なことは、確実な共伴遺物が無く、不明である。

(菅原)

180号住居跡 S I 180

遺 構 (図426, 写真412・413)

本遺構は、O19グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。重複関係は、191号住居跡を切っている。また、随所に攪乱が及んでおり、周壁と床面を破壊している。図426に示した本住居跡の平面プランが歪んでいるのは、このためである。

堆積土は、3層に分層された。断面は、典型的なレンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は自然に埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み締まりは、認められなかった。床面と検出面の比高差は、20~22cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西4.5m、南北4.5mを測る。この大きさは、高木遺跡では中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に22°振れている。

カマドは、西周壁で検出された。位置は、少し左に偏っている。煙道部は、周壁から150cmの長さ

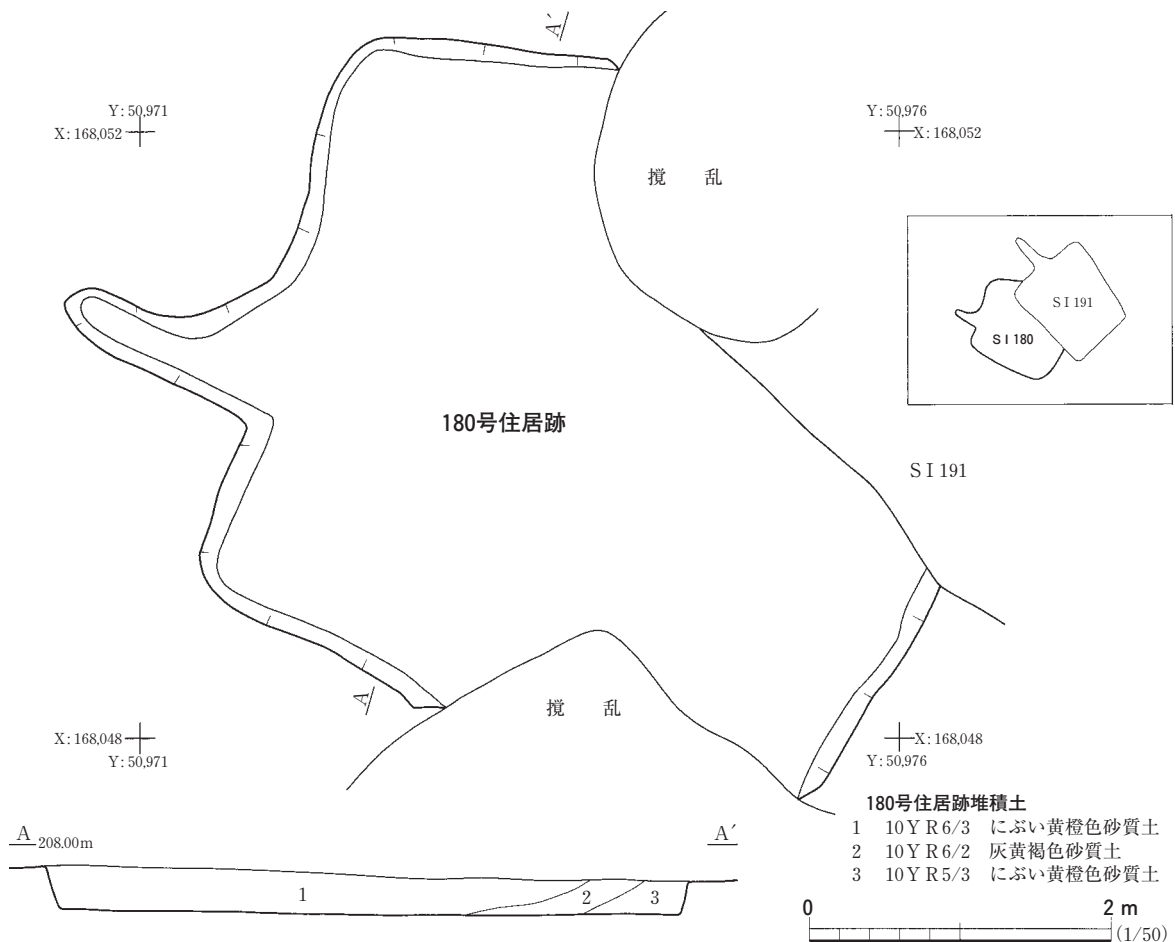


図426 180号住居跡

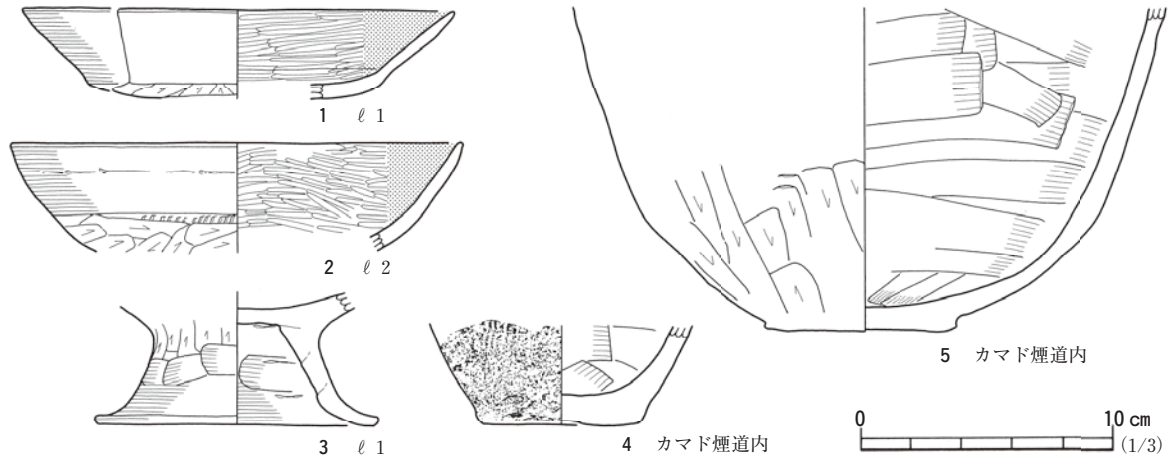


図427 180号住居跡出土遺物

を測る。燃焼部は、前述したように攪乱で袖や底面が壊されており、内容を検証することができなかった。

遺物 (図427)

遺物は、土師器片117点が出土した。図示遺物は5点あり、このうち、遺構に共伴するのは、カマド煙道部から出土した、図427-4・5の2点である。

図427-1・2は、土師器杯になる。1は、底部が平底風の有段丸底杯である。口縁部は、直線的に外傾して伸びている。2も、有段丸底杯に分類されるが、段がはっきりしていない。

図427-3は、土師器高杯の脚部になる。内面は、中空になっており、裾の端部が、大きく開いている。

図427-4は、土師器小甕の底部になる。胴部外面は、ハケメ調整されている。

図427-5は、大型の土師器甕になる。上半部を欠いているので、器形全体の特徴を知ることができない。胴部外面は、縦位にヘラケズリされている。

まとめ

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。カマド周辺が攪乱で壊されており、出土遺物が少なかった。

本住居跡が営まれたのは、栗圀式期と考えられる。 (菅原)

181号住居跡 S I 181

遺構 (図428, 写真414・415)

本遺構は、O19グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地の中央にあたり、微地形は、南側に向かって緩やかに傾斜している。重複関係は、北ノ脇遺跡の10号住居跡に切られ、高木遺跡の192・194号住居跡を切っている。

本住居跡は、上部削平が著しく、床面は検出段階でほとんど露呈していた。このため、断面図の作成は、堆積土の最も残りの良い位置を選定して行った。確認されたℓ1は、にぶい黄橙色砂質土

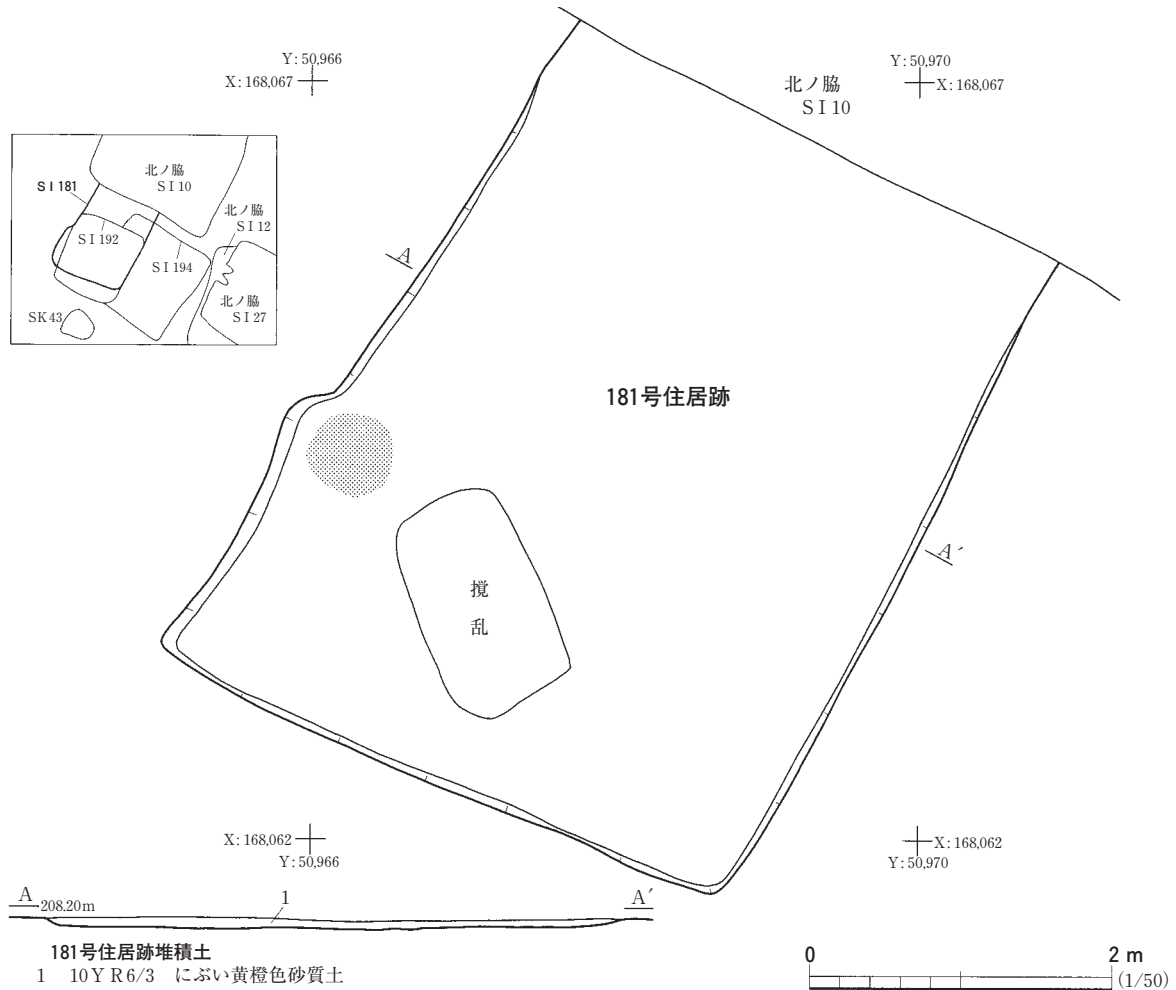


図428 181号住居跡

である。

床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。また、全体に強く踏みしまっていたが、これは遺構自体の特徴ではなく、重機による点圧のためと推定される。

本住居跡の平面プランは、南北に長い長方形を呈している。規模は、東西3.8m、南北4.8m以上を測り、中型に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に28°振れている。

カマドは、西周壁で検出された。位置が左に大きく偏っている点が、特徴として指摘される。遺存状態はきわめて悪く、焼土化した燃焼部底面が残っただけである。

遺物は、土師器片46点が出土した。図示可能な資料は無いが、 ℓ 1出土の中に、栗圀式の土師器杯・甕が認められる。

まとめ

本遺構は、自然堤防の中央に営まれた竪穴住居跡である。床面がほとんど露呈した状態で検出された。このため、カマドは焼土化した燃焼部底面で位置が知られただけであった。

営まれた時期は、重複遺構から、上限を栗圀式期に、下限を国分寺下層式期に求めることが可能と思われる。

(菅原)

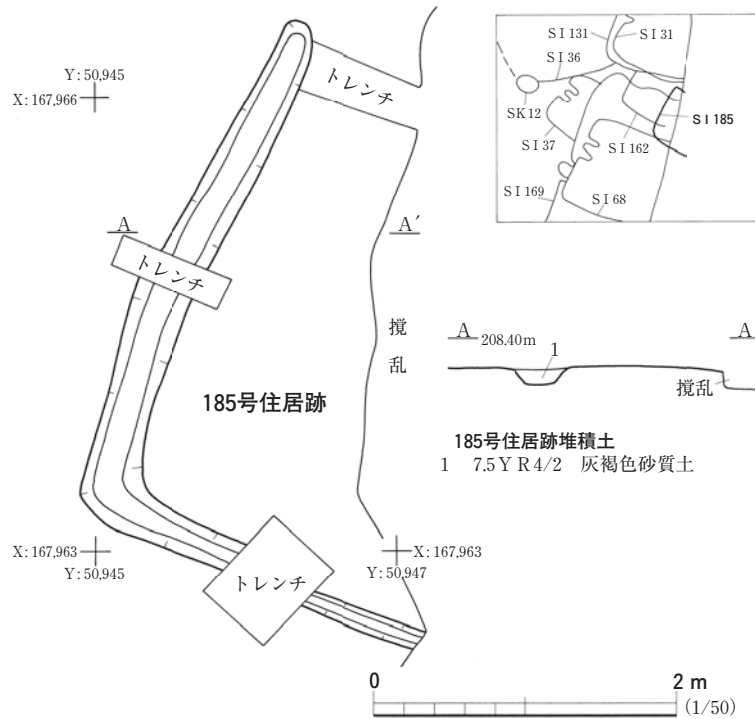


図429 185号住居跡

きなかった。

住居跡の平面形は、残存部分から推測すると、方形を呈していたと思われる。住居跡と方位の関係を西壁溝の位置で見ると、真北から23°ほど東へ傾いている。規模は、南北3.5m以上、東西2.5m以上である。

床面は、よく締まったLⅢからなっている。細かな凹凸はあるものの、ほぼ平坦である。南西部から北東に向かって、レベルが下がっている。壁溝の幅は、西側で最大16cm、南側で最大12cmである。検出面から床面までの深さは10cmを測る。

住居跡内施設は、確認できなかった。

遺物は出土していない。

ま と め

本住居跡は、遺存状態が悪く、床の西端部分と壁溝の一部が検出されただけであった。出土遺物は無い。

営まれた時期は、重複遺構から、栗囲式期に下限が求められると思われる。

(佐藤)

187号住居跡 SI 187

遺 構 (図430, 写真417)

本遺構は、N19・O19グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面落ちぎわである。遺構は、高木遺跡における住居跡分布の西限の1つをなしている。他の遺構との重複関係は認められない。

185号住居跡 SI 185

遺 構 (図429, 写真416)

本住居跡は、調査区中央のやや南になるN21グリッドに位置している。162号住居跡の駄目押しをしている際に検出された。

重複する遺構には住居跡3軒があり、68・162号住居跡より古く、169号住居跡より新しく位置付けられる。

本住居跡は、攪乱で多くの部分が壊され、床の西端部分と壁溝が検出されただけである。このため、遺構内堆積土は確認で

本住居跡は、著しい上部削平を受けていた。検出されたのは、北東側の壁溝だけである。このため、遺構の詳細については、知ることはできなかった。

ただ、東西4.5m以上、南北7.1m以上の範囲を壁溝で検出していることから、本遺跡でもかなり大型の部類に属するものであったことがうかがえる。住居跡方向は、発掘基準線北に対して東に5°振れている。

壁溝は、幅14～20cm、深さ10～14cmを測る。内部には、にぶい黄橙色砂質土が堆積していた。

遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面落ちぎわに営まれた竪穴住居跡である。上部削平が著しいため、一部の壁溝が検出されただけであった。このため、詳細については、ほとんど知ることができていない。

所帰属時期も不明である。

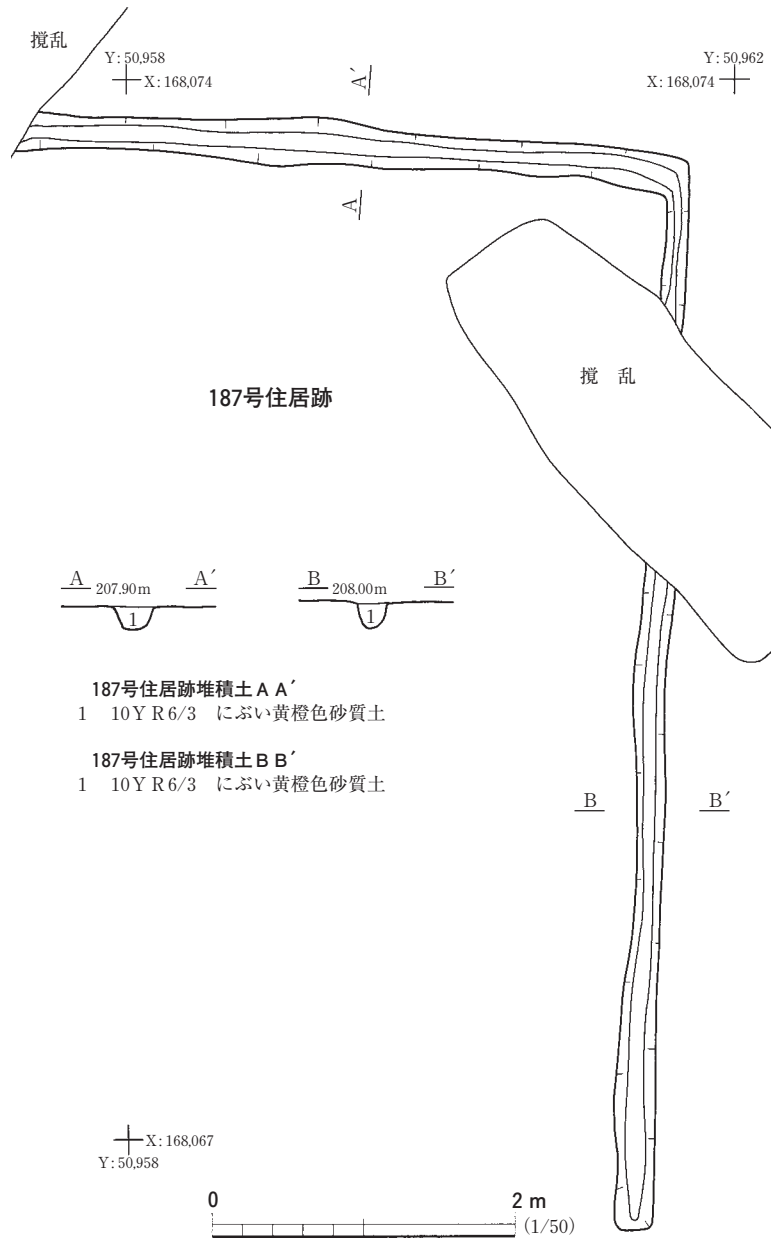


図430 187号住居跡

ただ、検出された壁溝の範囲から推測すると、本住居跡は、かなり大きな規模を有していたと考えられる。

(菅原)

191号住居跡 S I 191

遺 構 (図431・432, 写真418・419)

本遺構は、O19グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。

重複関係は、180号住居跡に切られており、これにより西周壁が壊されている。また、カマド燃焼部から北西隅に攪乱が及んでいた。

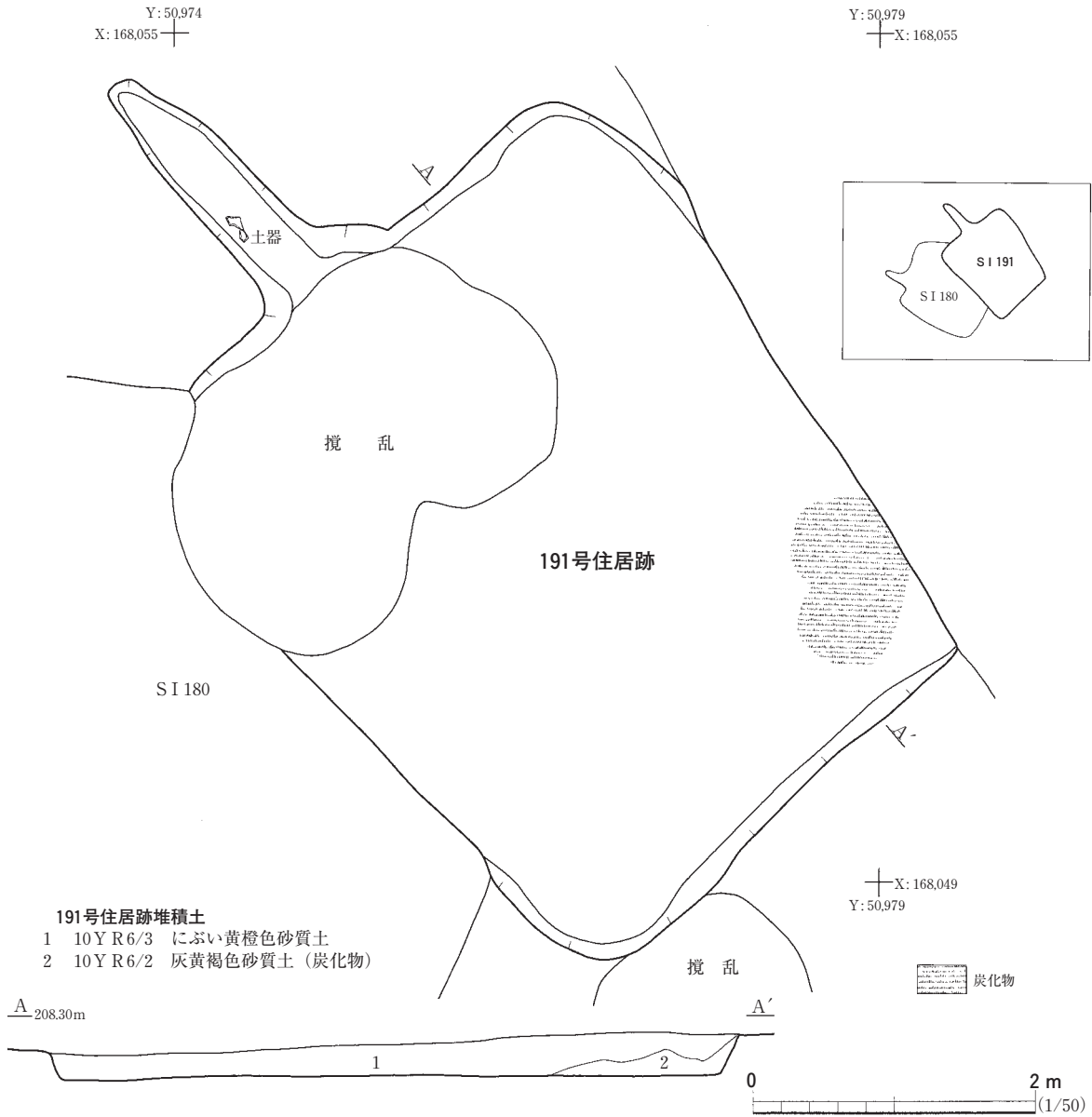


図431 191号住居跡

堆積土は2層に分層された。このうち、 ℓ 2では、炭化物が多量に含まれており、火災に起因して形成された可能性が想定される。ただ、はっきり屋根材と分かるような大きな炭化材が検出されず、焼土も少なかった。

したがって、本住居跡が火災で焼失したという確証は得られていない。南東隅床面は、この土層に直接覆われていた。

床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。踏み締まりは認められなかった。

床面と検出面の比高差は、25~30cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。東西に少し長く、規模は、東西4.9m、南北4.2mを測り、中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に45°偏している。こ

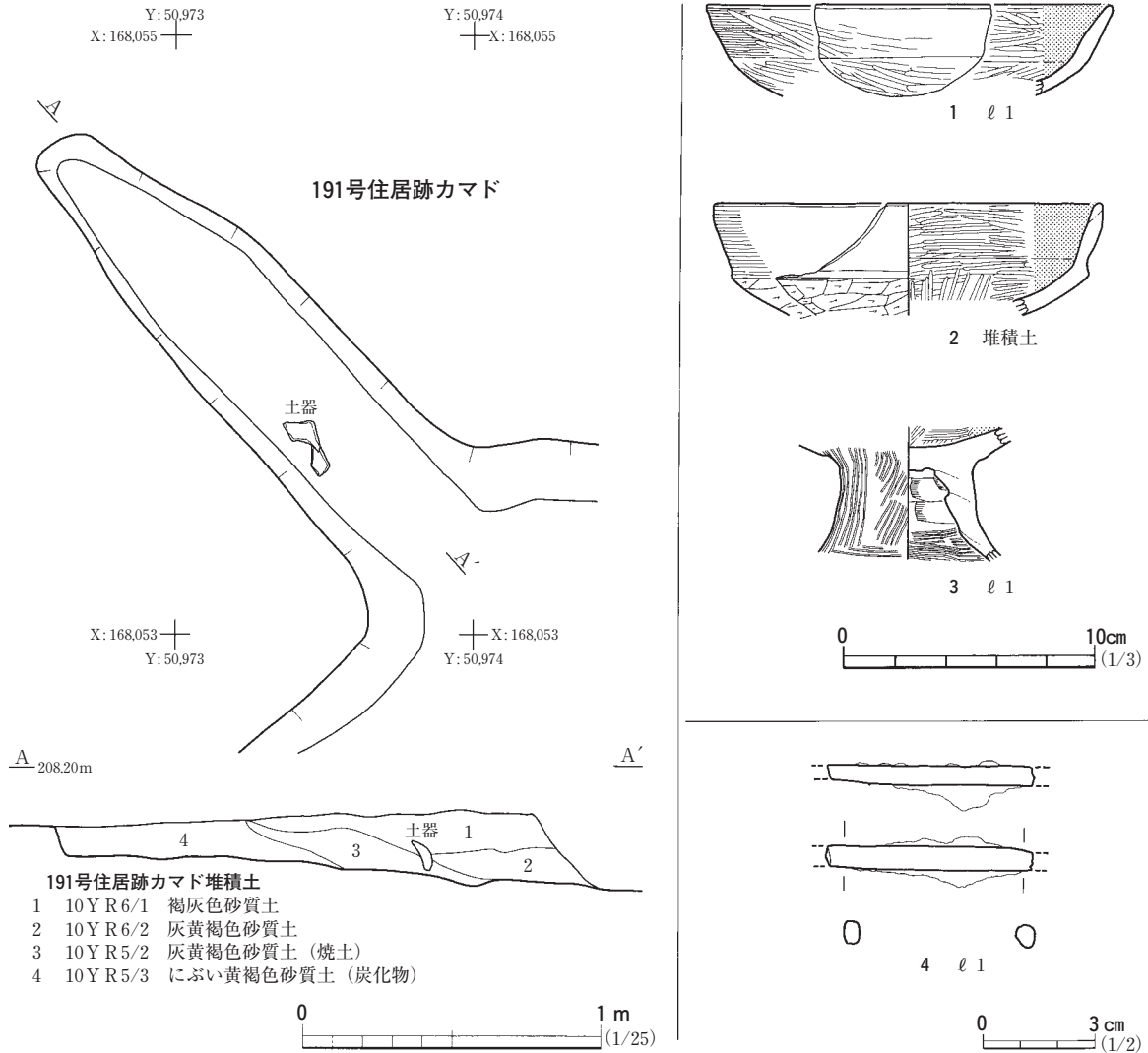


図432 191号住居跡カマド・出土遺物

の点は、重複する180号住居跡と対照的である。

カマドは、北周壁中央で検出された。煙道部は、周壁から長さ203cmを測る。燃焼部は、攪乱で壊され、具体的内容を知ることができなかった。

ピット類は、検出されていない。

遺物 (図432, 写真631)

遺物は、土師器片270点、鉄製品1点が出土した。上述したように、共伴遺物に恵まれず、図示できたのは、堆積土の遺物ばかりである。

図432-1・2は、土師器杯になる。1は、口縁部が内湾気味の有段丸底杯に分類される。外面はヘラミガキされている。2は、須恵器杯蓋の模倣とみられる。口縁部外面が肥厚する。

図432-3は、土師器高杯の脚部片になる。内面は、中空につくられている。外面には、ハケメ調整が施されている。

図432-4は、両端を欠いた鉄製品になる。刀子と推定される。

ま と め

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部に営まれた竪穴住居跡である。土層の様子から、火災で焼失した可能性が想定されたが、確証は得られなかった。

本住居跡が営まれた時期は、重複遺構から、下限を栗圀式期に設定できる。しかし、それ以上の詳細については、共伴遺物に欠けるため、言及することができない。 (菅原)

192号住居跡 S I 192

遺 構 (図433, 写真420・421)

本遺構は、O19グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは自然堤防の中央である。周囲の微地形は、南側に向かって緩やかに傾斜している。

重複関係を整理しておくとして、181号住居跡に切られ、194号住居跡を切っている。また、南に隣接して、43号土坑が位置している。

本住居跡は上部削平が著しく、西側ではほとんど床面が露呈した状態だった。このため、断面図の作成は、堆積土が良く残っている場所を選んで行っている。

堆積土は2層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は自然埋没したと考えている。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。踏み締まりは認められなかった。床面と検出面の比高差は、4~10cmを測る。

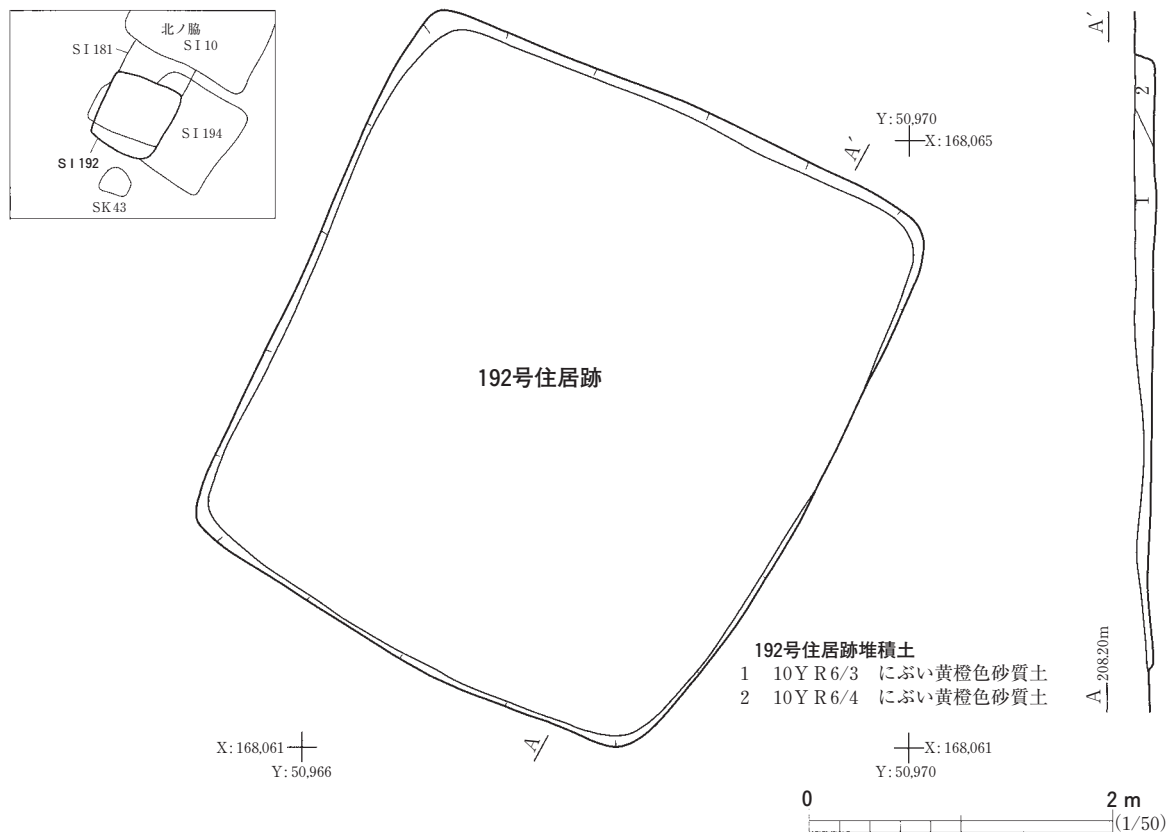


図433 192号住居跡

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。南北に少し長く、規模は、東西3.7m、南北4.1mを測り、小型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に28°偏している。

カマドは、検出されなかった。周壁の遺存状態からすると、北側に設置されていた可能性は低いと思われる。

ピット類は、検出されていない。

遺物は、土師器片42点が出土した。図示可能な資料は無いが、 ℓ 1出土の中に、栗圀式の土師器杯・甕が認められる。

ま と め

本遺構は、自然堤防の中央に営まれた堅穴住居跡である。検出状況は、上部削平が著しく、ほとんど床面が露呈状態だった。このため、カマドも検出されなかった。

営まれた時期は、明確な共伴遺物が無く、重複遺構にもそれが乏しいことから、特定することは困難である。堆積土出土資料を参考にすると、栗圀式期～国分寺下層式期の幅の中には、収まると考えられる。 (菅原)

193号住居跡 S I 193

遺 構 (図434, 写真422・423)

本遺構は、O19グリッドで検出された堅穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面落ちぎわである。重複関係は、200号住居跡を切っている。

本住居跡は、道路造成時の段差で削り取られており、北東隅が遺存していただけだった。

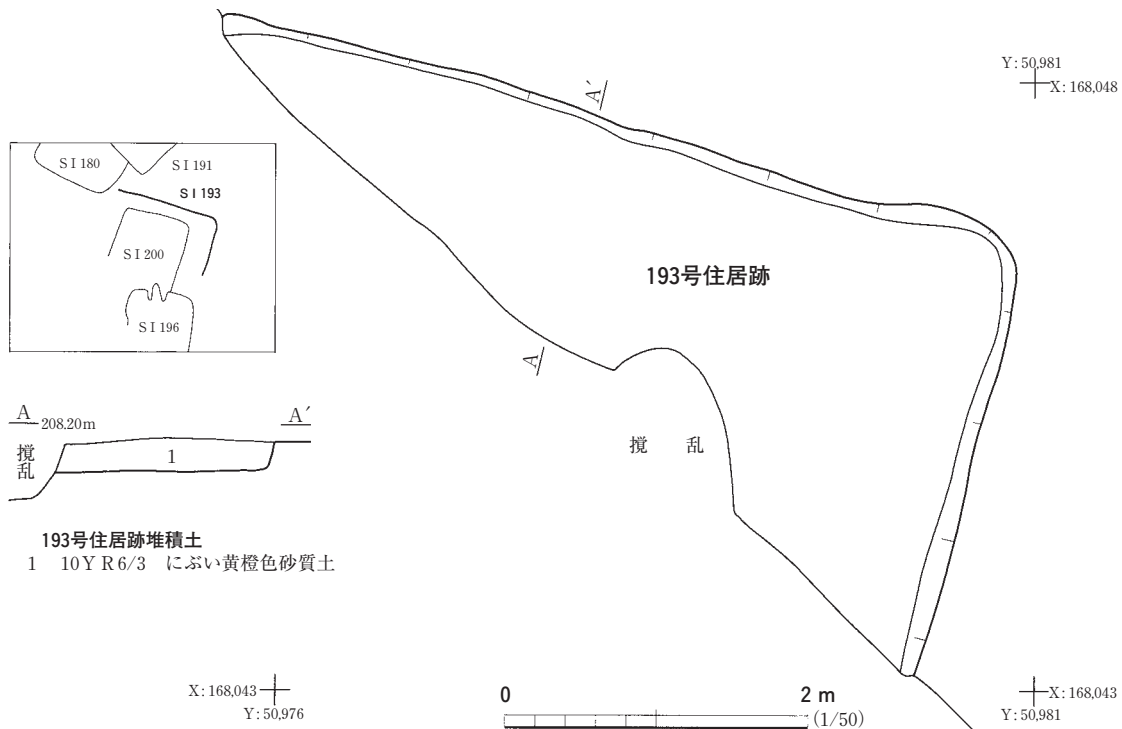


図434 193号住居跡

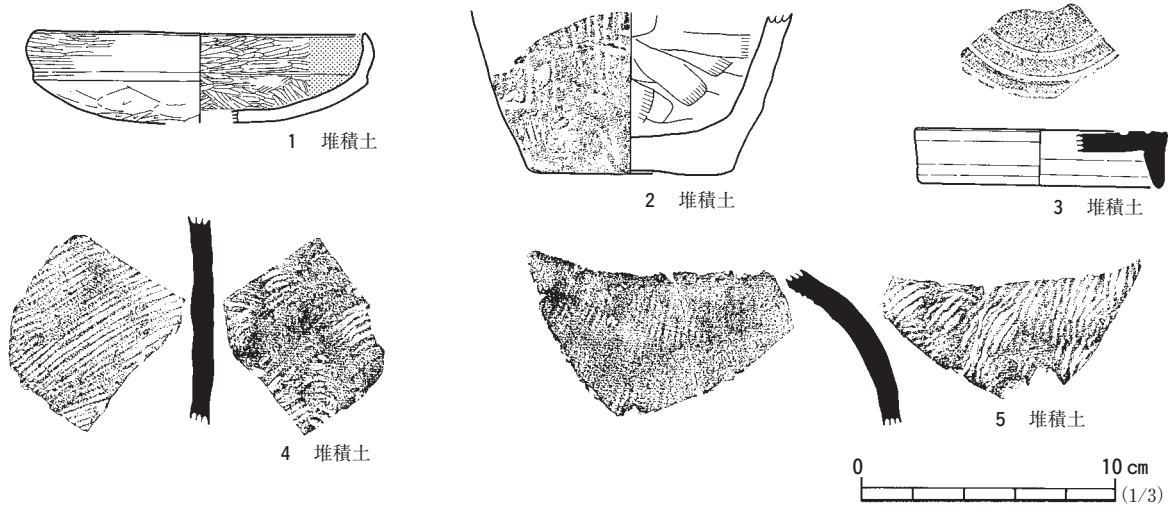


図435 193号住居跡出土遺物

堆積土は、にぶい黄橙色砂質土が1層残っていた。自然堆積土と考えている。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。踏み締まりは認められなかった。床面と検出面の比高差は、20cmを測る。

本住居跡の平面プランは、方形基調を呈している。規模は、東西5.5m以上、南北2.9m以上を測り、中型以上であったと推定される。検出部分で計測すると、住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に13°偏している。カマドは、検出されなかった。周壁の遺存状態からすると、北側に設置されていた可能性は低いと思われる。ピット類は、検出されていない。

遺物 (図435, 写真631)

遺物は、土師器片97点、須恵器片5点が出土した。その中から5点の図示遺物が得られたが、遺構に共伴するものは、無い。

図435-1は、土師器杯になる。須恵器杯蓋の模倣とみられるもので、口縁端部は、内傾している。外面には、ヘラミガキ調整痕が観察される。

図435-2は、土師器甕の底部になる。小型品であろうか。外面は、ハケメ調整されている。

図435-3は、須恵器短頸壺の蓋と推定される。天井部は水平につくられており、外面に2本の同心円沈線が施されている。口縁部は垂直に折れ、端部がやや外反気味となる。つまみは欠けており、形状は判明しない。

図435-4・5は、須恵器甕の胴部片になる。外面にタタキメ・内面にアテメが観察される。

まとめ

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面落ちぎわに営まれた竪穴住居跡である。道路造成時の段差で、ほとんど削られていた。このため、遺構の詳しい内容は、分かっていない。

本住居跡が営まれた時期は、共伴遺物に恵まれず、特定することができない。ただ、下限に関しては、200号住居跡で非ロクロ調整の内黒土師器が共伴しており、国分寺下層式期以前に求めることが可能と思われる。

(菅原)

194号住居跡 S I 194

遺 構 (図436, 写真424・425)

本遺構は、O19グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは自然堤防の中央である。周囲の微地形は、南側に向かって緩やかに傾斜している。

重複関係を整理しておくとして、181・192号住居跡に切られている。また、南側には隣接して、43号土坑が位置している。

本住居跡は上部削平が著しく、堆積土はほとんど残っていなかった。また、住居跡間の重複で、西周壁が壊されている。

堆積土は、にぶい黄橙色砂質土が1層認められた。自然堆積土か人為堆積土かどうかは不明であ

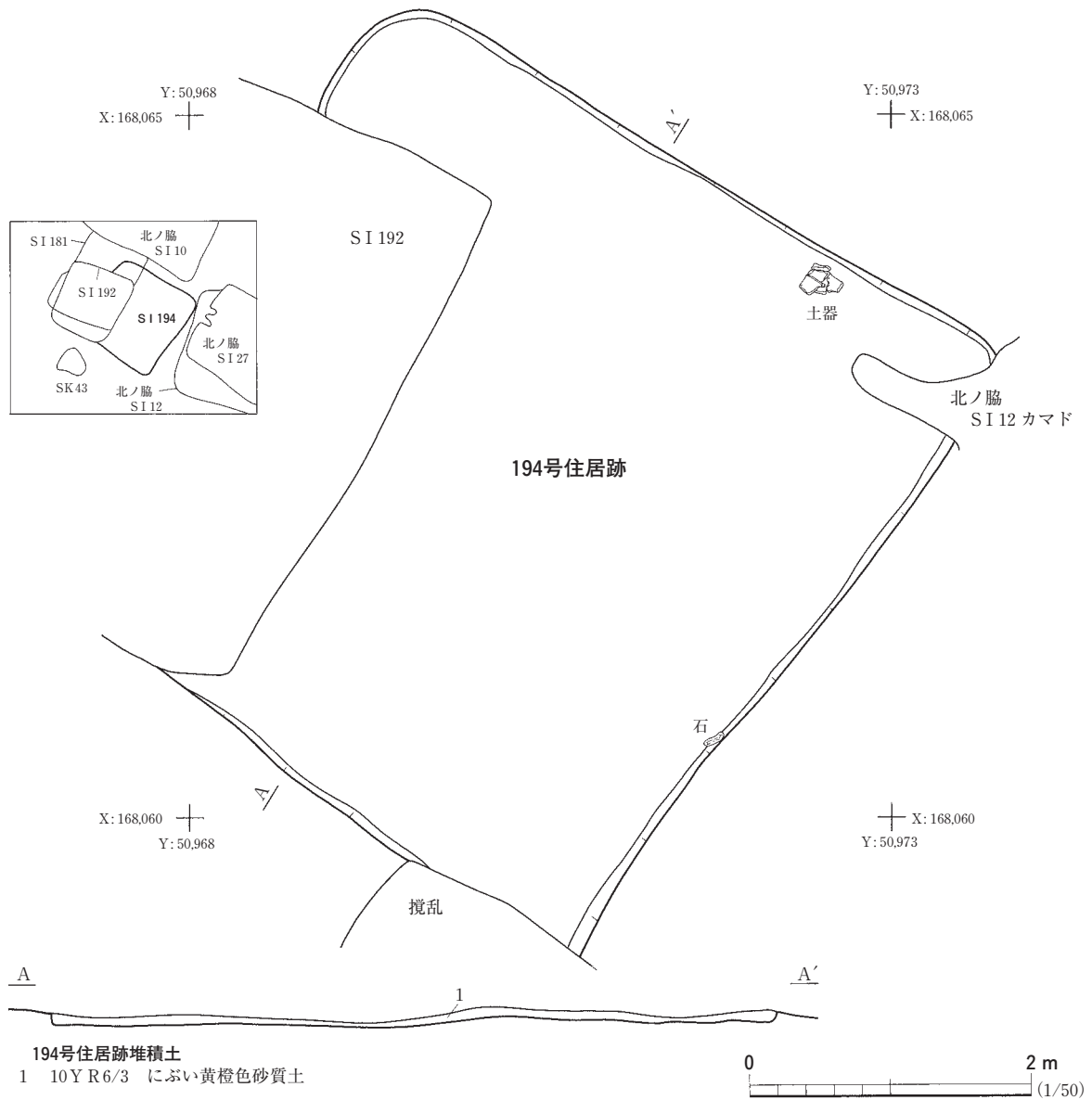


図436 194号住居跡

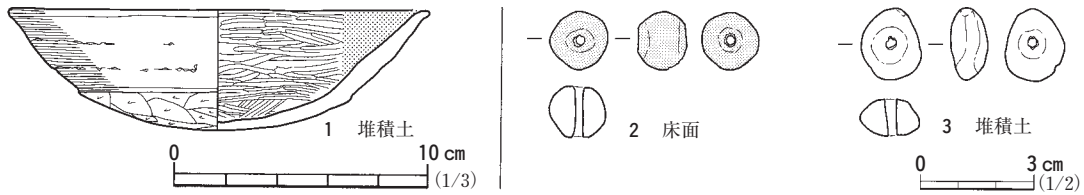


図437 194号住居跡出土遺物

る。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み締まりは認められなかった。床面と検出面の比高差は、4～8cmを測る。

本住居跡の平面プランは、正方形基調を呈している。規模は、東西5.1m、南北5.0mを測り、中型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に32°偏している。

カマドは、検出されなかった。周壁の遺存状態からみると、壊された西周壁に設置されていた可能性が高いと思われる。

ピット類は、検出されていない。

遺物 (図437, 写真631・632)

遺物は、土師器片33点、土製品2点が出土した。図示遺物は3点が得られており、そのうち図437-2の土製丸玉が遺構に相伴している。

なお、図示できなかったが、床面で栗囲式に比定可能な土師器甕の大型破片が出土している。これは、遺構平面図の北周壁ぎわで出土している土師器である。

図437-1は、有段丸底の土師器杯になる。口縁部が大きく開いて、直線的に外傾する器形を呈している。口縁部外面は肥厚している。

図437-2・3は、土製丸玉になる。2は表面がヘラミガキ・黒色処理されており、3はやや偏平な形態を呈している。

まとめ

本遺構は、自然堤防の中央に営まれた堅穴住居跡である。検出状況は、上部削平が著しく、カマドも検出されなかった。

営まれた時期は、床面の遺物から、栗囲式期と考えられる。 (菅原)

195号住居跡 S I 195

遺構 (図438, 写真426・427)

本遺構は、O21グリッドで検出された堅穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。

本住居跡は、調査区法面で検出されており、平面的な調査は行っていない。検出状態は、カマド燃焼部を中心に、3.8mの長さで帯状に確認されている。おそらく、図438左上のような方向で、住居跡は展開するものと推定される。本住居跡は、周壁際のl4の状態から、壁溝が巡らされていたと推定される。また、図439-8と図439-9は、袖の補強材と考えられる。

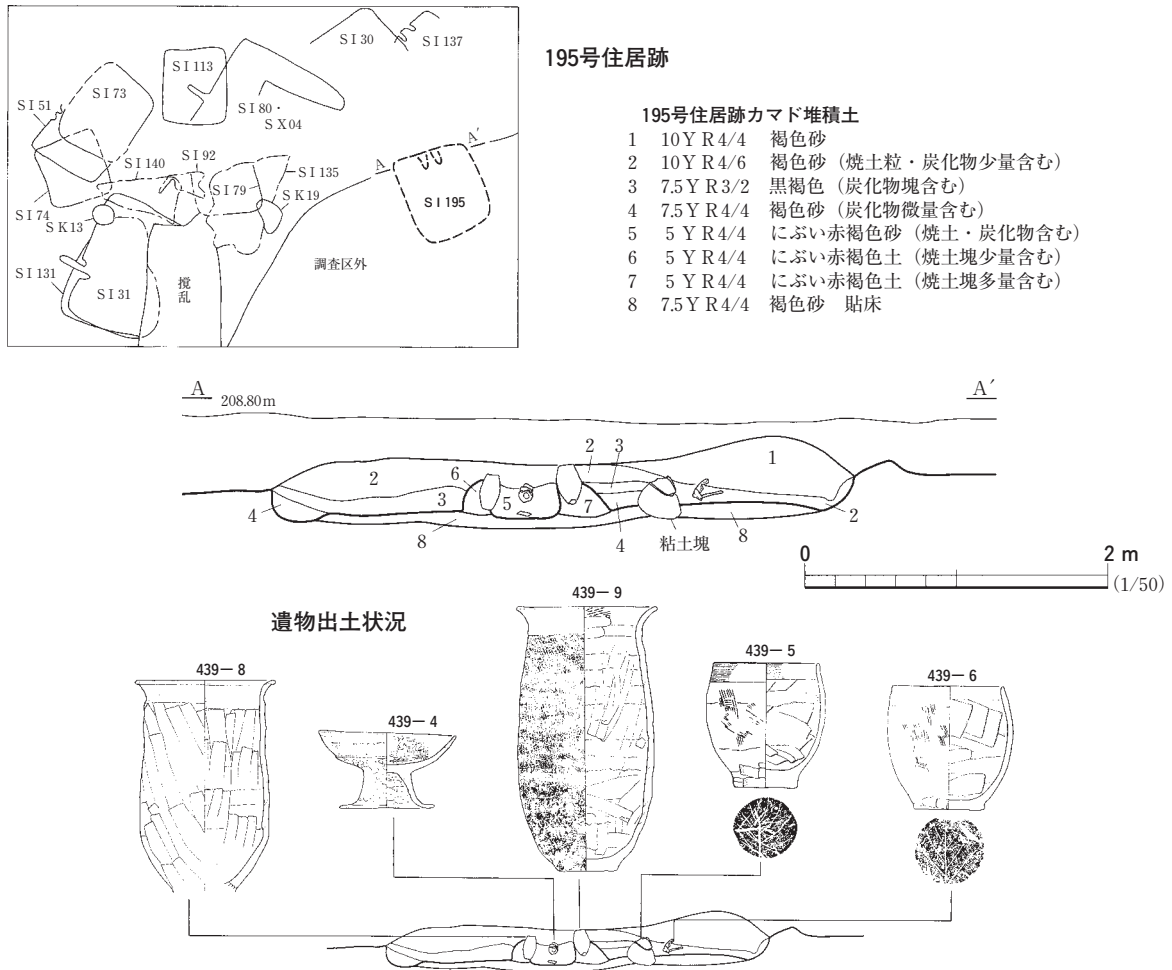


図438 195号住居跡

遺物 (図439・440, 写真632~634)

遺物は、土師器片67点が出土した。

図示遺物は10点である。どれも完形品に近いもので、住居跡に共伴する蓋然性が高いと思われるものばかりである。

図439-1~3は、土師器杯になる。どれも有段丸底杯に分類される。器形の特徴は、口縁部が内湾ないし外傾しており、口径：底径比が大きい点が指摘される。このうち1では、内面の黒色処理が観察できない。

図439-4は、土師器高杯になる。杯部は、有段丸底の器形を呈しており、口縁部は内湾気味に立ち上がる。脚部は、中空のつくりであり、透かしは入っていない。端がまくれている。

図439-5・6は、小型の土師器甕になる。両者は、器形・法量が近似している。胴部中央に膨らみがあり、頸部が括れないで、そのまま口縁部が内傾している。胴部外面は、ハケメ調整である。また、底部外面に木葉痕が観察される。

図439-7は、小型の土師器甕になる。器形は、頸部が括れないで、全体の下に向かって窄まっている。無底式に分類される。胴部外面は、ハケメ調整である。

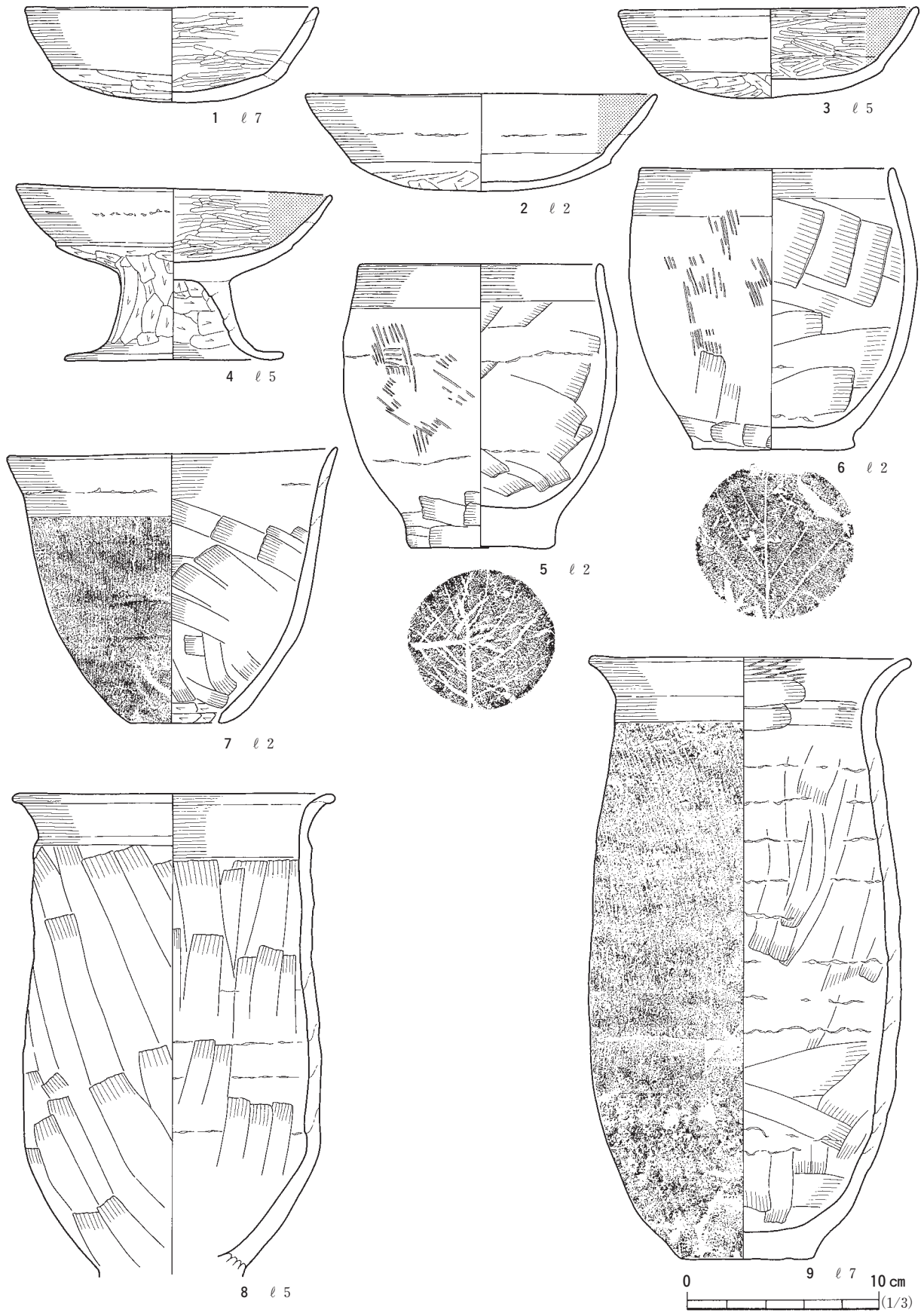
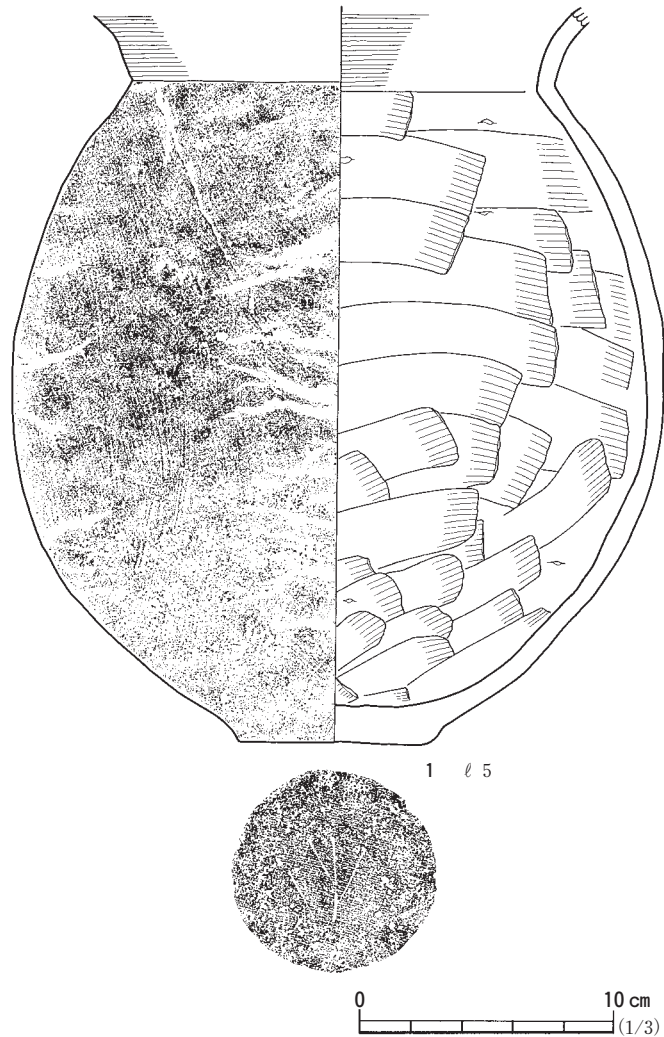


図439 195号住居跡出土遺物 (1)

図439-8・9は、中～大型の土師器長胴甕になる。8の器形は、胴部が下膨れ気味で、頸部が直立し、口縁部が反り返っている。胴部外面は、ナデ調整されている。9は、やや下膨れ気味の細長い胴部を有しており、口頸部は弓なりにカーブを描いている。器高は、8よりいくらか高い。胴部外面は、ハケメ調整である。図440-1は、土師器球胴甕になる。胴部の器形は、やや縦長の球形を呈している。頸部は「く」の字状に強く屈曲しており、口縁部が外反している。胴部外面はハケメ調整され、底部外面に木葉痕が観察される。



ま と め

本住居跡は、自然堤防の東斜面に営まれた竪穴住居跡である。

調査区法面で検出され、定量の遺物が出土した。

本住居跡は、栗圀式期に営まれたと考えられる。 (菅原)

図440 195号住居跡出土遺物 (2)

196号住居跡 S I 196

遺 構 (図441, 写真428・429)

本遺構は、O19・O20グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面落ち際である。重複関係は、200号住居跡を切っている。

本住居跡は遺存状態が比較的良く、南西隅を除くと、平面プラン全体が捉えられている。

堆積土は、にぶい黄橙色砂質土が1層認められた。自然堆積土か人為堆積土かどうかは不明である。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み締まりは認められなかった。床面と検出面の比高差は、12～18cmを測る。

本住居跡の平面プランは、正方形基調を呈している。しかし、向かい合う東周壁と西周壁の長さが一致せず、台形気味となっている。規模は、東西3.4m、南北3.3mを測り、小型の部類に属する。住居跡方向は、発掘基準線北に対して、東に4°偏している。

カマドは、北周壁で検出された。位置は、少し左に偏っている。煙道部は、周壁からの遺存長が

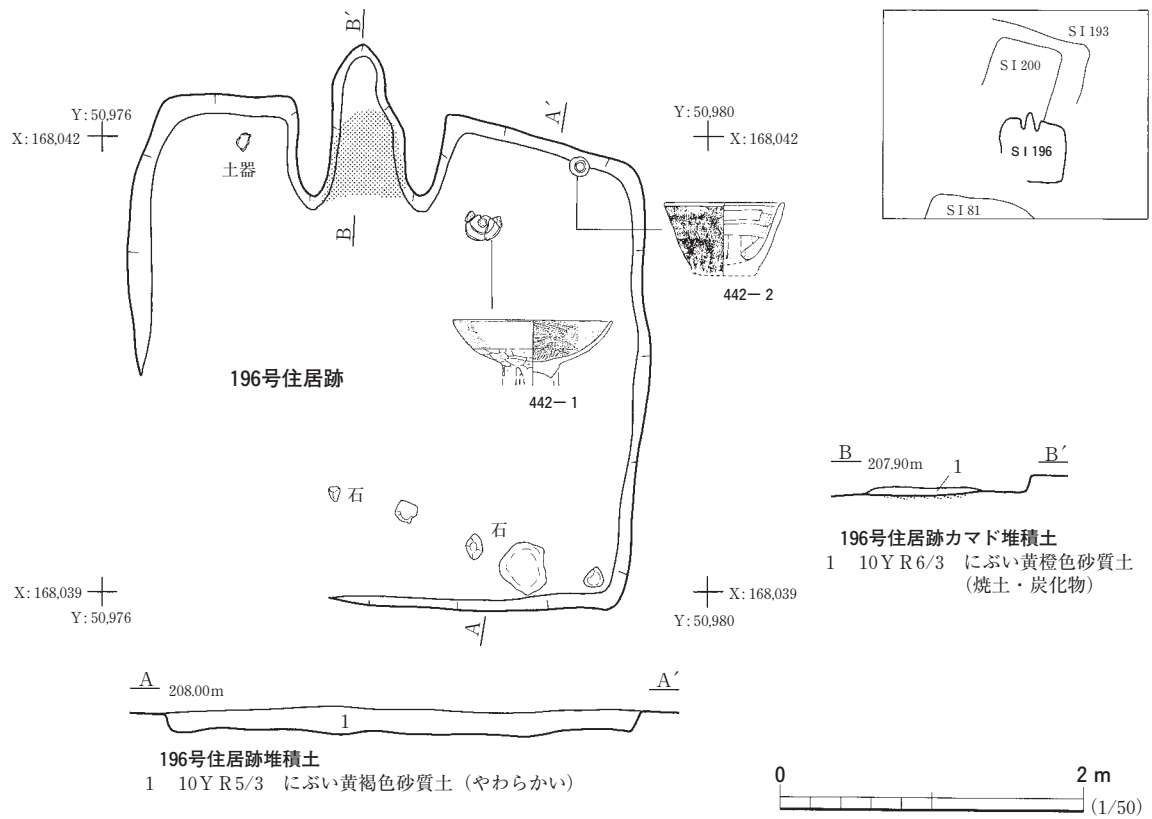


図441 196号住居跡

32cmを測り、先端が削平されている。燃焼部は、袖長80cm、焚口幅39cmを測り、底面が焼土化していた。

なお、貯蔵穴は検出されなかったが、遺物の平面分布状態から、カマド右脇が厨房空間であったと推定される。

この他、注目される所見として、南周壁側の特徴的な礫の分布があげられる。大きさに大小はあるが、南東隅から左斜め方向に、ほぼ等間隔で5個配置されている。性格については、全く不明である。

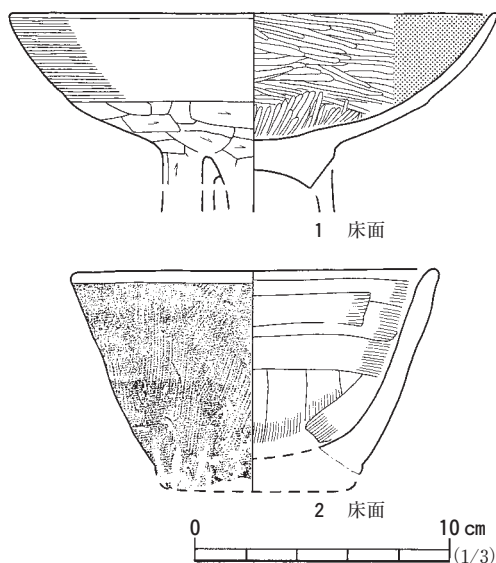


図442 196号住居跡出土遺物

ピット類は検出されていない。

遺物 (図442, 写真633・634)

遺物は、土師器片58点が出土した。図示遺物には、床面出土の2点を選んだ。

図442-1は、土師器高杯になる。床面に、口縁部が密着した状態で出土したもので、脚部を欠いている。残存部からすると、おそらく3方透かしであろう。杯部は、口縁部の内湾する有段丸底杯である。

図442-2は、土師器小甕になる。底部を欠いている。頸部が窄まらず、底部から口縁端部まで直線的に外傾

する器形を呈している。胴部外面は、ハケメ調整が施されている。

ま と め

本住居跡は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面落ち際に営まれた竪穴住居跡である。平面プランは正方形を呈し、規模は小さい。

カマド対面の周壁沿いに、礫が並べられていた。性格不明であるが、注目される所見である。

本住居跡は、床面の遺物から、栗圀式期に営まれたと考えられる。

(菅原)

199号住居跡 S I 199

遺 構 (図443, 写真430・431)

本住居跡は調査区南側のM22グリッドに位置し、標高207.6m前後のほぼ平坦な地形上に構築されている。

本住居跡は、101・144・157号住居跡と重複関係にあり、いずれよりも古い。また周囲には、東方約2.5mに102号住居跡、南方約1.6mに100号住居跡、西方約1.5mに125号住居跡が隣接している。

遺構検出面はLⅢであるが、上面では確認できず、重複する144・157号住居跡の床面精査の際にプランを検出した。

遺構内堆積土は4層に区分した。ℓ1～3は、いずれも褐色を基調とする砂質土である。混入物も無く、レンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積土と判断した。ℓ4は、壁溝内の堆積土である。

本住居跡は、北側を攪乱によって消失し、東側を144号住居跡によって切られている。このため、全体像は明確にできないが、平面形は方形を呈すると推測される。遺存する平面規模は、東西6.5m以上、南北6.5m以上を測り、主軸方向は発掘基準線北に対して東に17°振れている。周壁は70°前後で急激に立ち上がり、周壁の高さは15～40cmを測る。床面はほぼ平坦に整地されており、貼床や踏み締まりは確認できなかった。

本住居跡に伴う施設として、壁溝が検出された。西周壁南半分から南周壁全域に沿って掘られている。壁溝の幅は、西周壁で20～50cm、南周壁で30～55cmを測る。床面からの深さは2～10cmである。断面形は、鍋底状を呈している。

なお、南周壁の壁溝からは、粘土塊と土師器片が放置されたような状態で集中的に出土している。

カマドやピットは確認できなかった。

遺 物 (図444・445, 写真634～636)

遺物は、土師器片294点、土製品1点、鉄製品2点が出土した。図示遺物は17点あり、このうち、図444-1～5・10・12、図445-1の8点が遺構に伴っている。

図444-1～11は、土師器杯になる。1は、須恵器杯の模倣タイプとみられる。椀状の深い器形をなしている。3・5は、粗製杯に分類される。内面はナデ調整で仕上げられており、底部は突出し

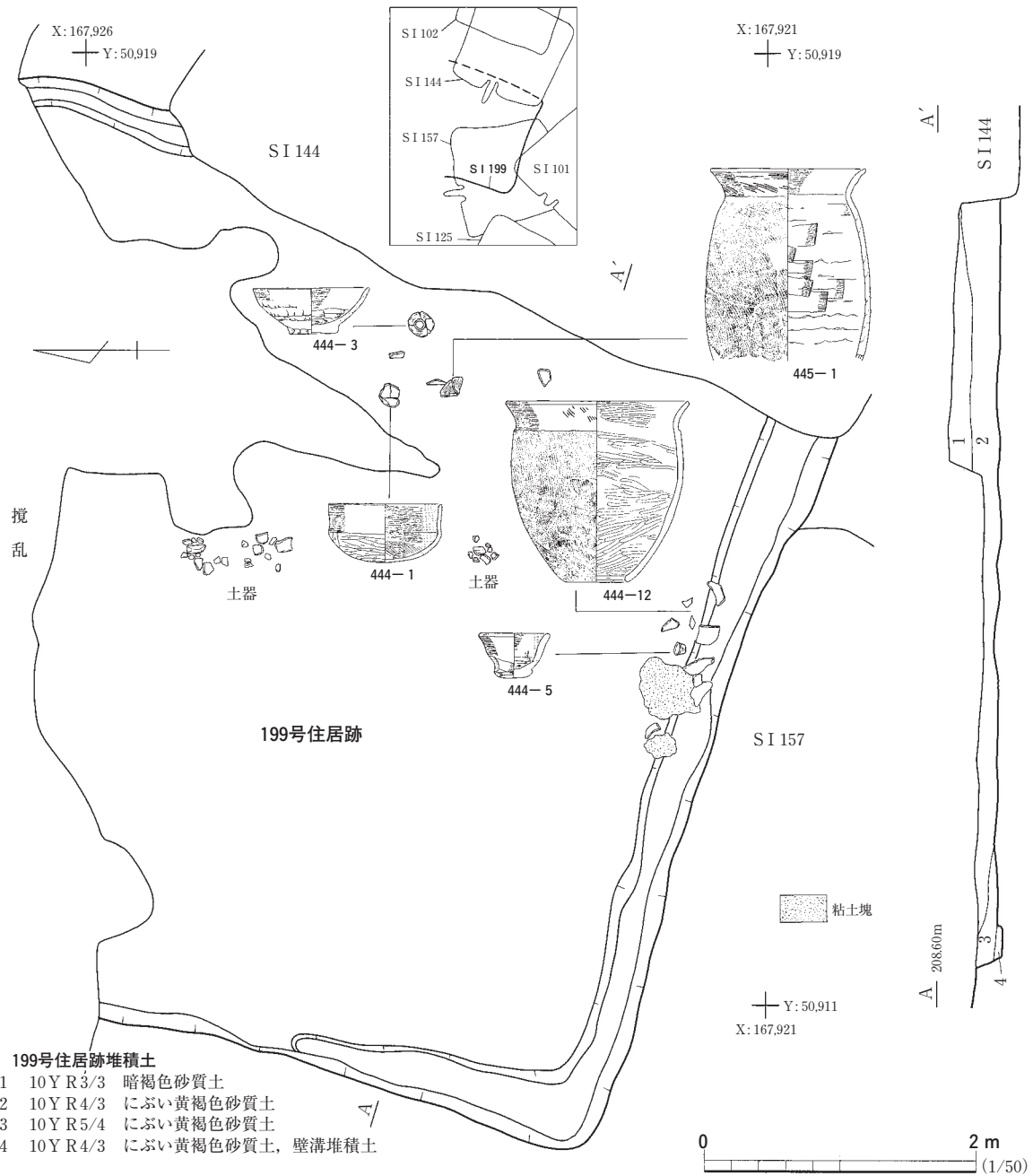


図443 199号住居跡

た平底をなしている。2も粗製杯の一種であるが、少し手が加えられ、内面にヘラミガキ調整が加えられている。10は、南小泉式の系譜を引く杯である。本住居跡の当該器種の中では、最も古い要素を備えたものといえる。外面には、入念なヘラミガキ調整が施されている。残る4・6～9・11は、有段丸底杯に分類される。このタイプが本住居跡の杯の基本形である。このうち、7は口縁部の立ち上がりが急なので、須恵器杯蓋を意識した可能性が考えられる。外面がヘラミガキされているのも、その反映であろうか。また、9と11の底部外面には、焼成後に施された線刻が認められる。

図444-12は、無底式の土師器甑になる。中型品に分類される。器高の割りに、横に幅の広い器形が特徴となっている。口縁端部は、須恵器のように少し窪んでおり、下端に段が形成されている。

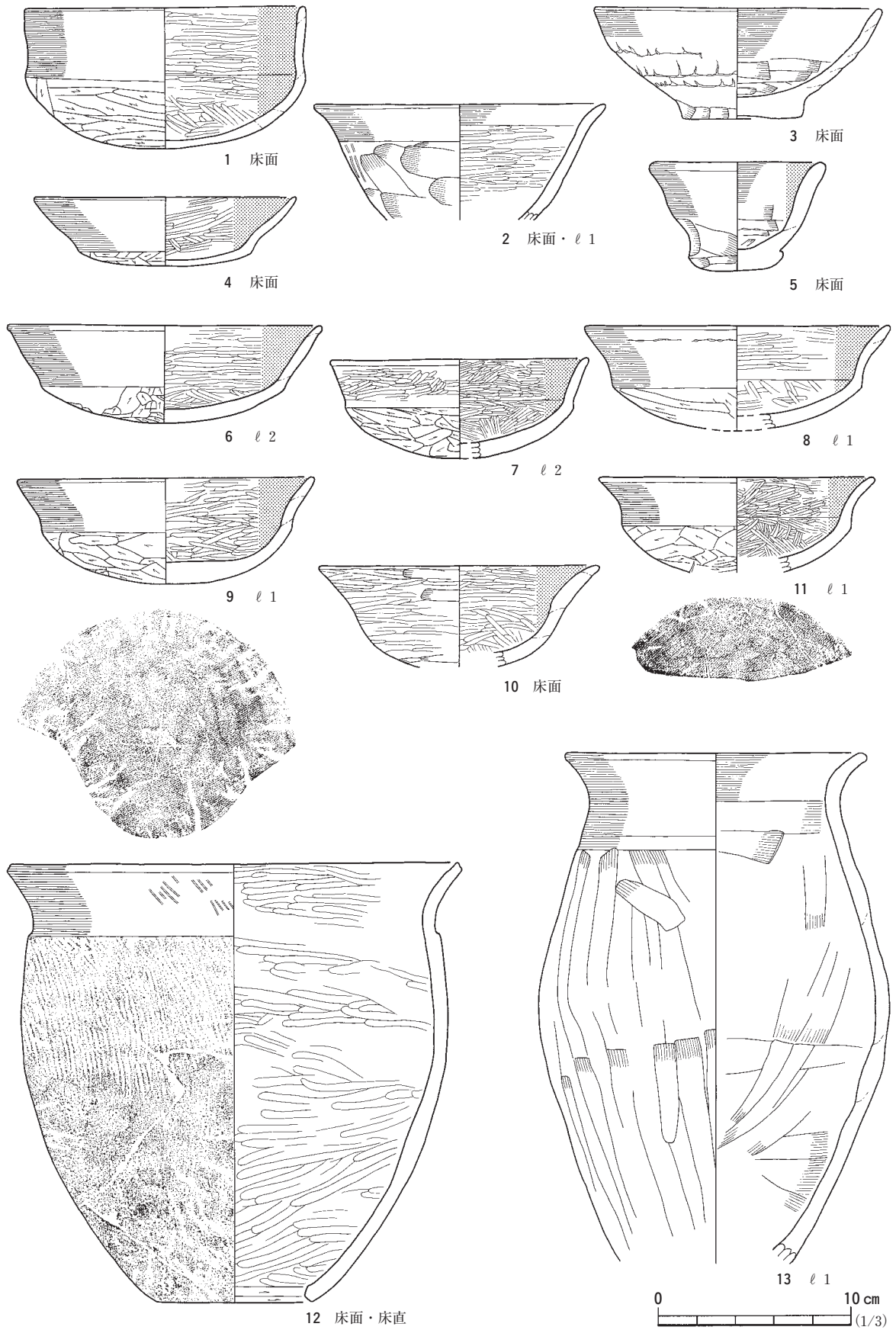


図444 199号住居跡出土遺物 (1)

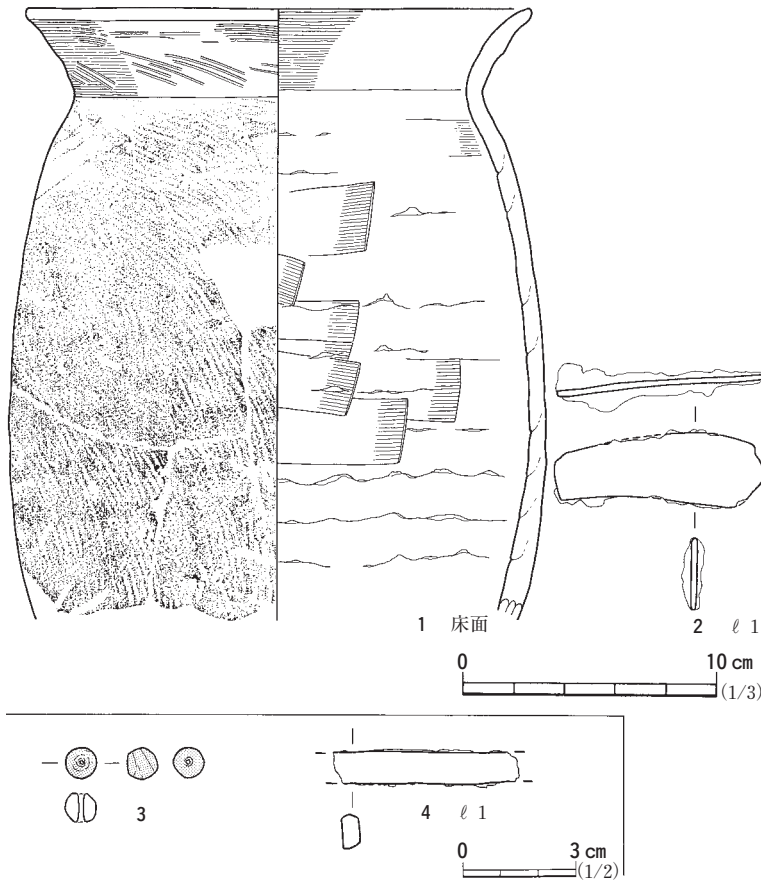


図445 199号住居跡出土遺物（2）

図445-4は、刀子とみられる。両端が欠損している。

ま と め

本遺構は、規模の大きな竪穴住居跡である。攪乱や重複遺構のため、細部構造については、よく分からなかった。

営まれた時期は、床面の遺物から、舞台式期～栗圀式期の幅の中で捉えられる。（成 田）

200号住居跡 S I 200

遺 構 (図446, 写真432・433)

本遺構は、O19グリッドで検出された竪穴住居跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面落ちぎわである。重複関係は、193・196号住居跡に切られている。

本住居跡は、道路造成時の段差で、上部が大きく削られてしまっていた。堆積土が残っていたのは、北周壁付近だけである。このため、ほとんどは床面が露呈した状態で検出されており、遺構内容の詳細については、知ることができなかった。

堆積土は、にぶい黄橙色砂質土が1層認められた。人為堆積土か自然堆積土かについては、不明である。床面は、貼床されず、掘形底面がそのまま平坦に整えられている。とくに顕著な踏み締まりは認められなかった。北周壁では、検出面と床面の比高差が、15cm前後ある。

胴部外面は、ヘラミガキ調整である。

図444-13・図445-1は、大型の土師器甕になる。前者は、ラグビーボール状の形態をなす胴部を有しており、口頸部が弓なりに外反する。胴部の外面調整は、ナデが行われている。後者は、頸部が「く」の字状に折れ、胴部の肩が張る器形を呈している。器高は、30cmを超えると推定される。胴部外面は、ハケメ調整である。

図445-3は、土製丸玉になる。表面は、ヘラミガキ・黒色処理されている。

図445-2は、鉄鎌になる。先端が欠損している。

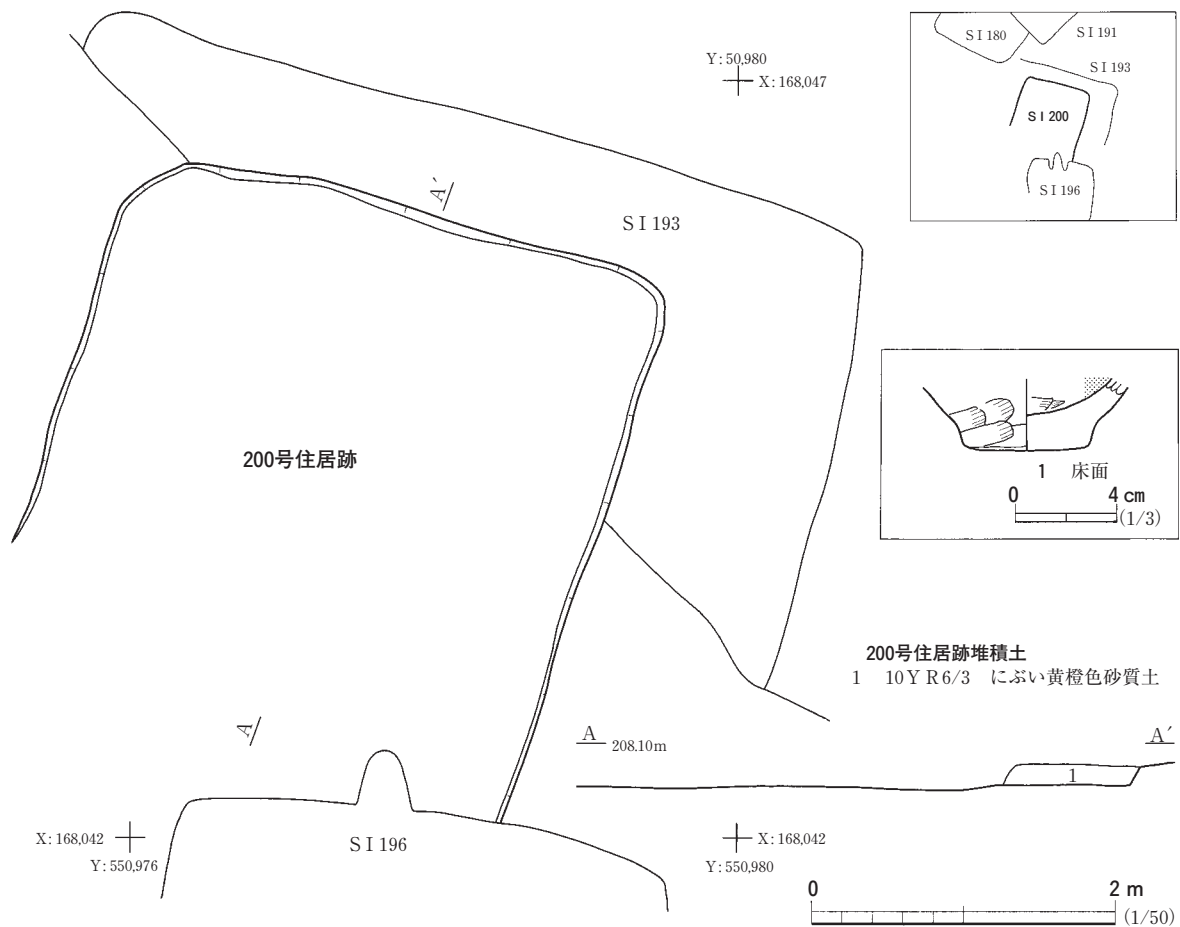


図446 200号住居跡・出土遺物

カマドは検出されなかった。周壁の遺存状態からすると、北周壁に設置されていた可能性は低いと思われる。ピット類は検出されていない。

遺物 (図446)

遺物は、土師器片11点が出土した。図示資料は、床面の遺物である。

図446-1は、土師器杯と推定される。底部を丸底にする工程が省略され、突出した平底をなしている。内面は、ナデ調整のまま黒色処理されている。

まとめ

本遺構は、自然堤防の東斜面落ちぎわに営まれた竪穴住居跡である。規模は小さく、正方形の平面プランを有している。上部削平が著しいため、内部構造の詳細は分からなかった。

営まれた時期は、共伴遺物と重複遺構から、栗圀式期と考えている。 (菅原)

214号住居跡 S I 214

遺構 (図447, 写真434・435)

本住居跡は、調査区のほぼ中央N22グリッドに位置する。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の狭い平坦部に立地している。本住居跡はL IV上面で検出したが、東側は築堤保存

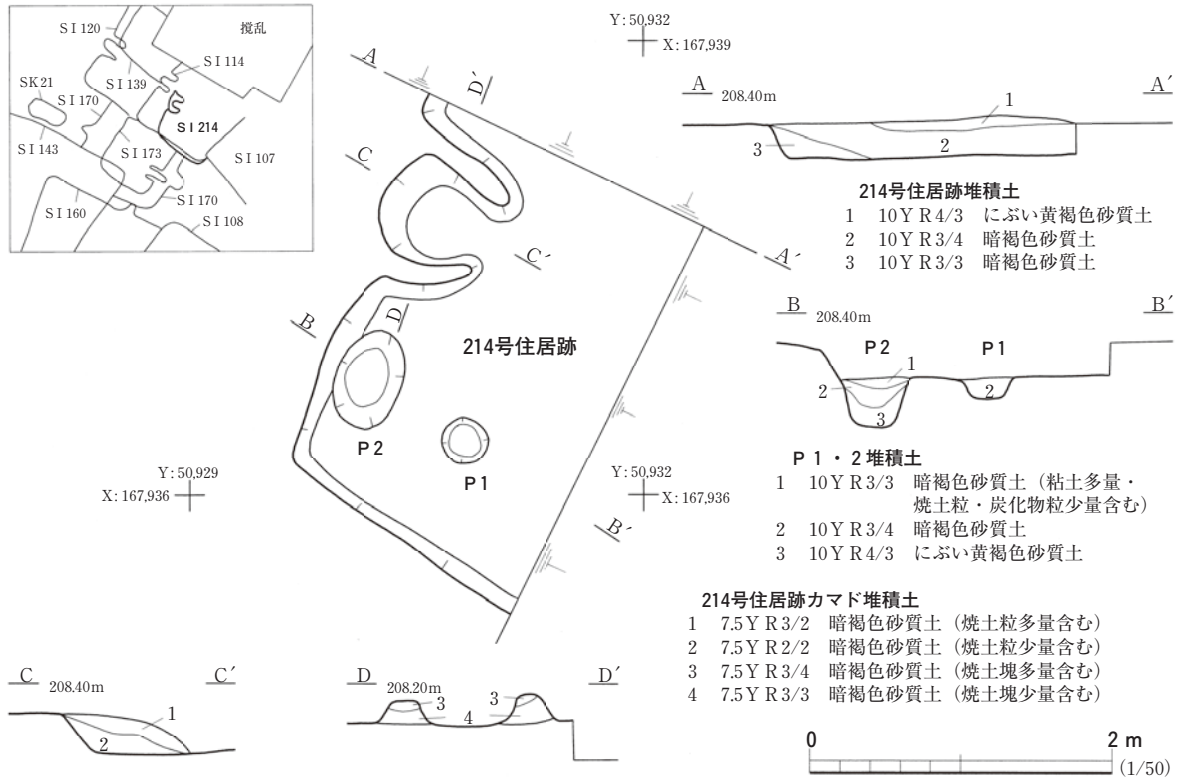


図447 214号住居跡

区内に位置し、北側が大きく攪乱を受けていたため、調査できたのは住居跡西・南壁の一部のみである。本住居跡周辺は、遺構の密度が高く、多くの竪穴住居跡が重複している。整理すると、107・114・170・173号住居跡を切っている。

遺構内堆積土は、3層に分層できた。いずれも壁際からの流入状態を示すことから、自然堆積と判断した。

本住居跡の平面形は、遺存状況から方形を呈していたと考えられる。規模は、遺存値で西側の壁で2.6m、南側の壁で遺存値1.8mを測る。壁は、いずれも比較的急に立ち上がっている。床面から検出面までの高さは、もっとも残りの良い西壁で20cmを測る。床面は、ほぼ平坦に作られ、貼床などは施されていない。

住居跡内施設として、カマドとピット2個を検出した。カマドは住居跡の西壁に位置している。カマドの袖は暗褐色砂質土を積み上げ構築されていた。カマドの袖は、南側の袖で60cm、北側の袖で90cmほど住居内に張り出していた。袖の最大幅は南側で38cm、北側で40cmを測る。両袖に挟まれた燃焼部は最大長57cm、最大幅は65cmを測る。燃焼部底面には、焼土面などは認められなかった。

カマド内体積土は2層に区分した。1・2ともに焼土粒を含むものの、カマド上方からの流入状態を示すことから、天井崩落後の堆積土と判断したい。

ピットは、カマド南側でP 1・2を検出した。P 2は、西壁に接して設けられていた。P 1の平面形は、直径30cmほどの円形を呈している。床面からの深さは、15cmを測る。P 2の平面形は、南北に長い楕円形を呈している。規模は、南北長65cm、東西長45cm、床面からの深さ35cmを測る。

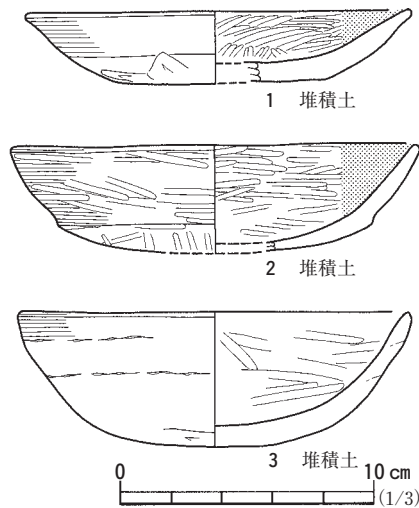


図448 214号住居跡出土遺物

ピットの性格については、住居跡の全てを調査していないため、判断できないが、P1については柱穴、P2については貯蔵穴的性格を持った施設と考えている。

遺物 (図448, 写真636)

遺物は、土師器片22点が堆積土などから出土している。図448-1～3は、土師器杯である。1は、器高が低く、平底風の底部から、緩やかに直線的に外傾する器形である。2は、丸底で体部下半に段を有し、口縁部に向かい直線的に外傾する器形となる。3は、全体的にやや丸みを帯びた器形である。

まとめ

本住居跡は、調査区外との境に位置していたため、調査できたのは住居跡南・西壁のみである。平面形は遺存状況から、方形を呈していたと考えられる。住居跡内施設としてカマドとピット2個を検出した。カマドは、西壁に位置する。検出したピットについては、柱穴、貯蔵穴的性格を持った施設と考えている。

本住居跡の所属時期は、床面から出土遺物などから栗圀式期後半と考えている。 (大河原)

第2節 土坑

本調査区では、34基の土坑が検出された。そのうち、16基が以下の4類型に分類される。時期については、I類に該当する土坑の一部を除いて、すべて栗圀式期の所産に位置付けられると考えている。

- I類……円筒状に掘り込まれた大型のもの
- II類……水辺の祭祀に関わり、火が焚かれたもの
- III類……埋没した住居跡が廃棄坑に転用されたもの
- IV類……住居の屋外付帯施設とみられるもの

以上の各類型に該当する土坑は、次のように整理される。なお、平面分布は図449に示した。

I類……1・2・8・9・15・43・56号土坑

II類……3～7, 16号土坑

III類……17・18号土坑

IV類……21号土坑

その他…12～14, 19, 22～24, 26, 29～32, 35, 41, 54, 55, 57, 58号土坑

補足説明しておくが、I類は、これまで県内の佐平林式期～舞台式期の集落跡で、広く知られていた「円筒状土坑」と同じ特徴を備えたものである。今回の調査区でも、舞台式期の住居跡が検出

表5 土坑一覧

No	グリッド	平面形	規模	深さ	堆積土	分類	備考
SK01	N19・N20	円形	142×133	25	4層	I類	
SK02	M23	円形	140×136	62	3層	I類	S I 04に付属?
SK03	O21	楕円形	95×74	12	2層	II類	祭祀関連施設, 焼土・炭化物・土器片
SK04	O21	楕円形	74×60	20	1層	II類	祭祀関連施設, 焼土・炭化物
SK05	O20	楕円形	150×101	10	2層	II類	祭祀関連施設, 炭化物・土器片
SK06	O20	隅丸長方形	165×100	13	2層	II類	祭祀関連施設, 焼土面, 炭化物・土器片
SK07	O20	円形	108×104	8	1層	II類	祭祀関連施設炭化物・土器片
SK08	N20	円形	120×98	60	2層	I類	底面平坦で, 壁立上がり垂直
SK09	N20	円形	124×122	31	3層	I類	
SK12	N21	円形	115×110	22	1層		
SK13	N21	楕円形	101×88	28	1層		
SK14	N21	不整形	69×68	39	3層		
SK15	M24	円形	105×100	38	2層	I類	
SK16	O20	楕円形	120×83	11	3層	II類	祭祀関連施設, 焼土面・炭化物・土器片
SK17	N21	不整形	148×132	12	2層	III類	S I 106プラン中央に所在, 土器一括廃棄
SK18	M22	不整形	150×123	10	2層	III類	S I 111プラン中央に所在, 土器一括廃棄
SK19	N21	不整形楕円形	190×101	27	1層		
SK21	N22	隅丸長方形	198×95	28	1層	IV類	S I 143に付随
SK22	M21	円形	84×80	18	1層		
SK23	O20	楕円形	69×49	18	2層		
SK24	O20	円形	62×58	30	2層		
SK26	M24	円形	94×85	21	2層		
SK29	N22	隅丸長方形	210×173	40	7層		整った平面プラン, 断面台形状
SK30	N20	不整形楕円形	41×36	11	1層		小型土坑, 底面傾斜
SK31	N20	楕円形	19×11	25	1層		小型土坑, 掘り込み深い
SK32	M21・N21	不整形	260×79	20	3層		竪穴住居跡のカマド残存部か?
SK35	M24	円形	71×67	18	1層		
SK41	M23	不整形楕円形	85×68	45	2層		
SK43	O19	不整形	150×138	71	5層	I類	底面平坦で, 壁立上がり垂直
SK54	N23	不整形楕円形	150×118	42	5層		底面傾斜
SK55	M23	楕円形	100×65	38	1層		
SK56	N22	円形	200×196	43	4層	I類	
SK57	M23	不整形楕円形	85×57	20	2層		
SK58	M23	楕円形	72×58	11	2層		

されており、当該期の遺構も当然含まれていると推定される。しかし、周囲に栗圀式期の住居跡しかみられない例がほとんどであることから、後続期にも、こうした土坑が継続して営まれていた蓋然性が高まった。性格は、貯蔵穴と推定している。

II類は、後背湿地に面した水辺に営まれ、2号溝跡のA群～I群・1号遺物包含層に強く関連した性格を有していたと推定している。5～7号土坑は、1号遺物包含層の斜面上に等間隔で並んでおり、遺存状態の良い6号土坑では、被熱痕跡が認められた。また、5・7号土坑でも、検出時に弱い被熱痕跡が確認されている。こうしたことから、当該土坑では火を扱った祭祀行為が行われ、その斜面上に廃棄された遺物によって、1号遺物包含層が形成されたと推定される。

また、3・4号土坑は、2号溝跡の祭祀跡=A～I群に隣接しており、規模が類似しているばか



図449 土坑分布図

りでなく、検出段階には、弱い焼土面も確認されている。したがって、それらと同じ機能を有していたと考えられる。ただ、上部削平が著しいので、集石や土器のまともは認められなかった。

Ⅲ類は、土器類や焼土・炭化物・礫が一括廃棄されている。埋没して浅い窪みとなった住居跡が転用されており、円形ないし楕円形の平面プランを呈している。土坑としなかつただけで、1号住居跡でも、類似した例がみられている。

Ⅳ類は、竪穴住居跡の外側で、主軸を揃え、寄り添うように掘られている。平面プランは整い、掘り込みがしっかりしている。21号土坑の1基しかなく、普遍的なものではなかったらしい。

(菅原)

1号土坑 SK01

遺構 (図450, 写真436)

本遺構は、N19・N20グリッドで検出された土坑である。

営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面である。他の遺構との重複関係は、認められなかった。

本土坑は、周囲に遺構の分布が確認されず、孤立的に営まれたようにみえる。

しかし、これは、付近一帯が近世の屋敷地に利用され、掘り込みの深くない遺構が破壊されてしまったためである。

平面プランは、円形基調を呈しており、比較的整っている。底面は平坦であり、壁は直線的に立ち上がる。規模は、142cm×133cmを測り、大型である。検出面からの深さは、25cmを測る。

堆積土は、4層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は自然埋没したと考えている。堆積土の色調は、下層ほど暗くなる傾向が指摘される。

遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面に営まれた土坑である。平面プランは、円形を呈しており、規模が大きい。検出面の上部削平が著しいことを勘案すると、本来は、検出状態よりかなり深く掘られていたと推定される。

営まれた時期は、出土遺物が無く、不明である。ただ、平面プランと規模が、後述の2号土坑に類似することから、栗圀式期頃の住居跡に伴っていた可能性が高い。

(菅原)

2号土坑 SK02

遺構 (図450, 写真436)

本遺構は、M23グリッドで検出された土坑である。営まれたのは、自然堤防の尾根中央である。他の遺構との重複関係は、認められない。

ただ、周囲を見回すと、4号住居跡と86号住居跡があり、そのどちらかに伴っていた可能性が高

いと考えられる。

本土坑の平面プランは、円形基調を呈しており、整っている。底面は平坦で、壁は直線的に立ち上がっている。規模は、140cm×136cmを測り、比較的大型である。検出面からの深さは、62cmを測る。

堆積土は、3層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は自然埋没したと考えている。

遺物 (図452)

遺物は、土師器片23点、須恵器片3点が出土した。図示遺物は1点ある。

図452-1は、有段丸底の土師器杯である。口縁部が、大きく開く器形を呈している。栗圀式に比定される。

まとめ

本遺構は、自然堤防の尾根中央に営まれた土坑である。4号住居跡か86号住居跡のどちらかに伴っていたと推定される。円形を呈しており、深く掘られている。

本土坑が営まれたのは、栗圀式期と推定される。 (菅原)

3号土坑 SK03

遺構 (図450, 写真436)

本遺構は、O21グリッドで検出された土坑である。

営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。他の遺構との重複関係は、認められない。

本土坑は、栗圀式期の集落区画溝=2号溝跡の南側に位置している。近接した4号土坑と共に、火の焚かれた痕跡を残していた。

平面プランは、楕円形基調を呈している。底面は平坦であり、壁は開き気味に立ち上がる。規模は、95cm×74cmを測り、中型である。検出面からの深さは、12cmである。ただ、記録を作成した面より、少なくとも30cm高いレベルでプランは見えていた。したがって、その分を加算して深さは考える必要がある。

堆積土は、2層に分層された。ℓ1は、焼土・炭化物・土器片が混じっている。検出作業を繰り返すうち、消えてしまったが、焼土面が認められた。

遺物は、土師器片43点が、ℓ1から出土した。ハケメ調整の甕が、目立ってみられる。栗圀式に比定される。

まとめ

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面で検出された土坑である。栗圀式期の集落区画溝=2号溝跡の南側に位置している。近接する4号土坑と共に、該期の祭祀に関わる施設と考えられる。 (菅原)

4号土坑 SK04

遺 構 (図450, 写真437)

本遺構は、O21グリッドで検出された土坑である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。他の遺構との重複関係は、認められない。

本土坑は、栗圀式期の集落区画溝=2号溝跡の南側に位置している。近接した3号土坑と共に、火の焚かれた痕跡を残していた。

平面プランは、楕円形基調を呈している。底面は丸みを帯び、壁は開き気味に立ち上がる。規模は、74cm×60cmを測り、中型である。検出面からの深さは、20cmである。ただ、記録を作成した面より、少なくとも30cm高いレベルでプランは見えていた。したがって、その分を加算して深さは考える必要がある。

堆積土は、にぶい赤褐色砂質土が、1層認められた。多量の焼土・炭化物が混じっている。検出作業を繰り返すうち、消えてしまったが、焼土面が認められた。

遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面で検出された土坑である。栗圀式期の集落区画溝=2号溝跡の南側に位置している。近接する3号土坑と共に、該期の祭祀に関わる施設と考えられる。(菅 原)

5号土坑 SK05

遺 構 (図450, 写真437~439)

本遺構は、O20グリッドで検出された土坑である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。他の遺構との重複関係は、認められない。

本土坑は、1号遺物包含層の斜面上で検出されたものである。横並びする6・7号土坑と共に、火を焚いた痕跡が認められた。

平面プランは、楕円形基調を呈している。底面は平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。規模は、150cm×101cmを測り、大型である。検出面からの深さは、10cmである。ただ、記録を作成した面より、少なくとも30cm高いレベルでプランは見えていた。したがって、その分を加算して深さは考える必要がある。

堆積土は、2層認められた。l2は、多量の炭化物が混じっている。表面をきれいにするうち、消えてしまったが、底面は弱く焼土化していた。

遺 物 (図452)

遺物は、土師器片8点が出土した。図示遺物は1点ある。

図452-2は、土師器甕の底部である。非クロコ調整で、底部外面に木葉痕が観察される。なお、

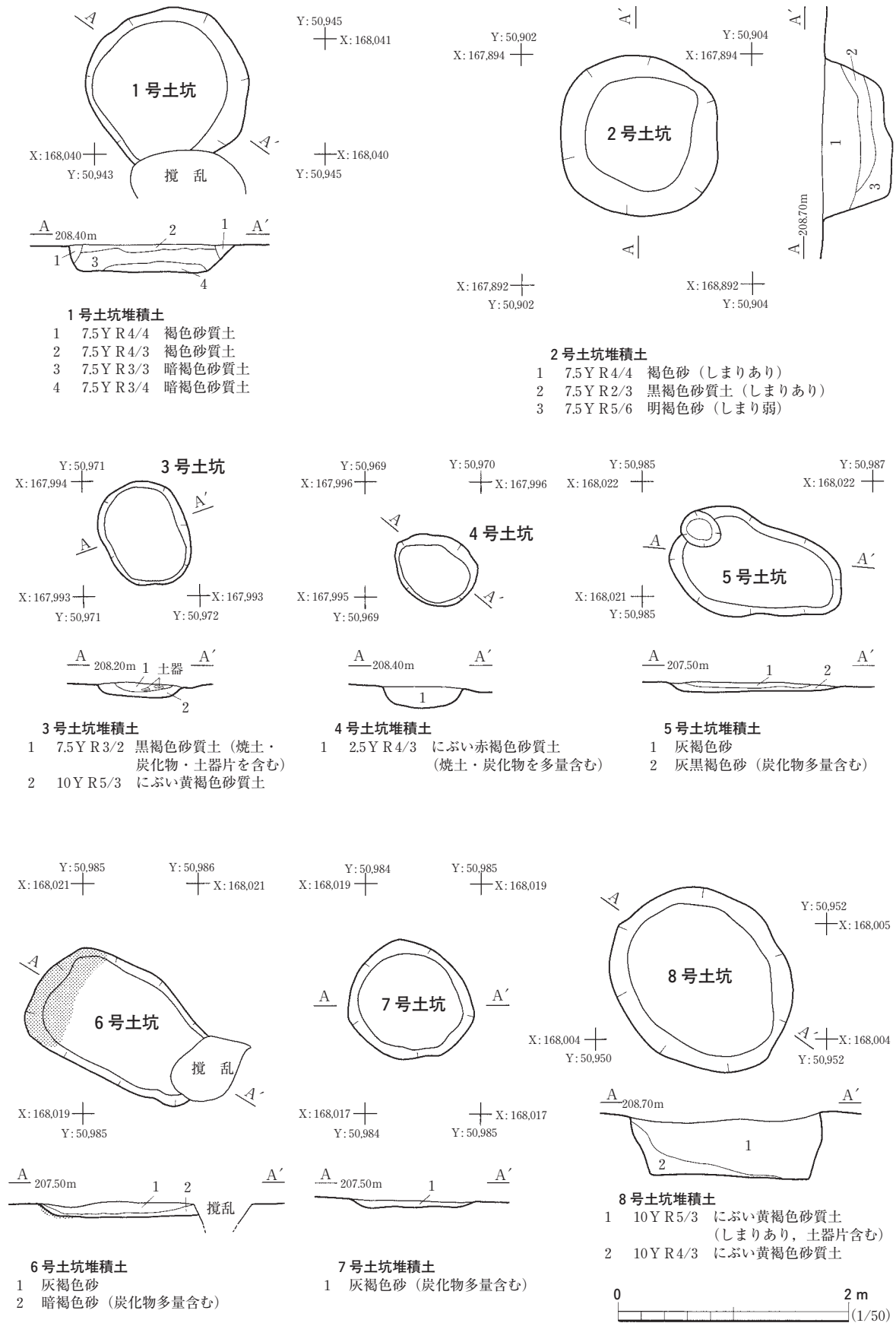


図450 1～8号土坑

他に、図示できなかったが、有段丸底杯の口縁部片がみられる。

ま と め

本遺構は、後背湿地に面した、自然堤防の東斜面で検出された土坑である。1号遺物包含層の斜面上に位置している。底面に、火を焚いた痕跡が認められた。

性格は、栗圀式期の祭祀に関わる施設と考えられる。(菅原)

6号土坑 SK06

遺 構 (図450, 写真438~440)

本遺構は、O20グリッドで検出された土坑である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。他の遺構との重複関係は、認められない。

本土坑は、1号遺物包含層の斜面上で検出されたものである。横並びする5・7号土坑と共に、火を焚いた痕跡が認められた。

平面プランは、隅丸長方形を呈している。底面は平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。斜面上側の西壁が、焼土化していた。規模は、165cm×100cmを測り、大型である。検出面からの深さは、13cmである。ただ、記録を作成した面より、少なくとも30cm高いレベルでプランは見えていた。したがって、その分を加算して深さは考える必要がある。

堆積土は、2層認められた。l2は、多量の炭化物が混じっている。

遺物は、土師器片34点が出土した。杯・甕の破片に、栗圀式に比定されるものが認められる。

ま と め

本遺構は、後背湿地に面した、自然堤防の東斜面で検出された土坑である。1号遺物包含層の斜面上に位置している。底面に、火を焚いた痕跡が認められた。

性格は、栗圀式期の祭祀に関わる施設と考えられる。(菅原)

7号土坑 SK07

遺 構 (図450, 写真438~440)

本遺構は、O20グリッドで検出された土坑である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。他の遺構との重複関係は、認められない。

本土坑は、1号遺物包含層の斜面上で検出されたものである。横並びする5・6号土坑と共に、祭祀行為に伴って、火を焚いた施設とみられる。

平面プランは、円形を呈している。底面は鍋底状をなしており、壁は開き気味に立ち上がる。規模は、108cm×104cmを測り、中型である。検出面からの深さは、8cmである。ただ、記録を作成した面より、少なくとも30cm高いレベルでプランは見えていた。したがって、その分を加算して、深さを考える必要がある。また、平面プランに関しても、底面の深い部分の輪郭が残っただけで、実際は、5・6号土坑のような、細長いものであったと推定される。

堆積土は、灰褐色砂が1層認められた。多量の炭化物が混じっている。検出作業を繰り返すうちに消えてしまったが、弱い焼土面が認められた。

遺物は、土師器片12点が出土した。甕の破片に、栗圀式に比定されるものが認められる。

ま と め

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面で検出された土坑である。1号遺物包含層の斜面上に位置している。

性格は、栗圀式期の祭祀に関わる施設と考えられる。(菅原)

8号土坑 SK08

遺 構 (図450, 写真440・441)

本遺構は、N20グリッドで検出された土坑である。営まれたのは、自然堤防の尾根中央である。14号住居跡と重複しており、新旧関係は、分からない。これは、14号住居跡が床面の露呈した状態で検出され、堆積土相互の切り合いが検証できなかつたためである。

平面プランは、円形を呈している。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。つまり、円筒状に掘り込まれている。規模は、165cm×150cmを測り、大型である。検出面からの深さは、60cmである。

堆積土は、2層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は自然に埋没したと考えている。ℓ1には、定量の土師器片が認められた。

遺 物 (図452)

遺物は、土師器片26点が出土した。図示遺物は1点ある。

図452-3は、土師器甕の底部である。非ロクロ調整であり、小～中型品になると推定される。また、図示遺物から漏れた中に、栗圀式に比定されるハケメ調整の土師器甕の破片が認められる。

ま と め

本遺構は、自然堤防の尾根中央で検出された土坑である。円筒状に掘り込まれたもので、大きな規模を有している。

遺物は、直接共伴するものではないが、栗圀式に比定される土師器甕がみられた。他の類例を勘案して、当該期の所産と考えておきたい。(菅原)

9号土坑 SK09

遺 構 (図451, 写真441)

本遺構は、N20グリッドで検出された土坑である。営まれたのは、自然堤防の尾根中央である。9号住居跡と重複しており、新旧関係は、分からない。これは、9号住居跡が床面の露呈した状態で検出され、堆積土相互の切り合いが検証できなかつたためである。

平面プランは、円形を呈している。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。つまり、円筒状

に掘り込まれている。規模は、124cm×122cmを測り、大型である。検出面からの深さは、31cmである。

堆積土は、3層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を示しており、このことから、遺構は自然に埋没したと考えている。

遺物は、土師器片14点が出土した。層位は、ℓ1に集中している。非ロクロで、ハケメ調整の甕がみられる。

ま と め

本遺構は、自然堤防の尾根中央で検出された土坑である。円筒状に掘り込まれたもので、大きな規模を有している。

遺物は、直接共伴するものではないが、栗罎式に比定される土師器甕がみられた。他の類例を勘案して、当該期の所産と考えておきたい。(菅原)

12号土坑 SK12

遺 構 (図451, 写真441)

本遺構は、N21グリッドで検出された土坑である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。36号住居跡と重複している。前後関係は、不明である。

平面プランは、円形を呈している。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。規模は、115cm×110cmを測り、大型である。検出面からの深さは、22cmである。

堆積土は、褐色砂が1層認められた。自然堆積土と考えている。

遺 物 (図452, 写真636)

遺物は、土師器片14点が出土した。

図452-4は、検出面出土の土師器小甕になる。丸味のある器形を呈しており、頸部が括れず、口縁部は直立気味に内傾している。器面調整は、口縁部の内外面にハケメ調整痕が観察される。

他に、図示できなかったが、有段丸底杯の口縁部片が出土している。

ま と め

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面で検出された土坑である。円筒状に掘り込まれたもので、大きな規模を有している。

遺物は、直接共伴するものではないが、栗罎式に比定される土師器甕がみられた。他の類例を勘案して、当該期の所産と考えておきたい。(菅原)

13号土坑 SK13

遺 構 (図451, 写真442)

本遺構は、N21グリッドで検出された土坑である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。31号住居跡と重複している。前後関係は、本土坑の方が新しい。

平面プランは、楕円形を呈している。底面は鍋底状をなし、壁は開き気味に立ち上がる。規模は、101cm×88cmを測り、中型である。検出面からの深さは、28cmである。

堆積土は、褐色砂が1層認められた。自然堆積土と考えている。

遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面で検出された土坑である。楕円形を呈しており、規模は中型である。

遺物が出土しておらず、時期は判然としない。ただ、重複遺構の所見から、上限は、栗圀式期に求められる。(菅原)

14号土坑 SK14

遺 構 (図451, 写真442)

本遺構は、N21グリッドで検出された土坑である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。24号住居跡と重複している。前後関係は、本土坑の方が新しい。

平面プランは、不整円形を呈している。底面は、上げ底状をなしており、壁は、開き気味に立ち上がる。規模は、69cm×68cmを測り、小型である。検出面からの深さは、39cmである。

堆積土は、3層に分層された。断面は、レンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は自然埋没したと考えている。なお、 $l 1 \cdot 3$ に混入する炭化物は、重複する24号住居跡からの2次堆積物とみられる。

遺 物 (図452, 写真636)

本土坑からは、土師器片9点、須恵器片2点が出土した。図示遺物は2点ある。

図452-5は、須恵器長頸瓶の高台部片である。焼成は、良好・堅緻であり、大戸窯跡群の製品とみられる。

図452-6は、ロクロ調整の土師器杯である。底部は、回転糸切り底で、手持ちヘラケズリが体部下端に加えられている。内面のミガキ調整は、単位が幅広で、放射状をなす。

ま と め

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面で検出された土坑である。不整円形を呈しており、規模は小型である。時期は、栗圀式期の住居跡を切っており、9世紀代の遺物を伴出したことから、表杉ノ入式期に求められると思われる。(菅原)

15号土坑 SK15

遺 構 (図451, 写真443)

本土坑は、調査区南側のM24グリッドに位置する。地形的には、自然堤防の平坦面に立地する。遺構検出面はLⅢ上面である。127号住居跡と重複し、本土坑が新しい。平面形は、直径100cmほど

の円形を呈している。周壁は比較的急角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦に作られている。検出面から底面までの高さは、38cmを測る。遺構内堆積土は2層で、いずれも自然体積と考えている。本土坑からは、遺物は出土しなかった。

ま と め

本土坑の所属時期は、出土遺物がないため特定できないが、検出状況や127号住居跡との重複関係などから、古墳時代に所属するものと考えている。 (大河原)

16号土抗 SK16

遺 構 (図451, 写真443)

本遺構は調査区北側のN20グリッドに位置し、LⅡ精査中に検出されたものである。118号住居跡と重複しており、住居跡の東壁の一部を破壊している。平面プランは長径120cm、短径85cmの楕円形に近い形となっており、深さは10cmを測る。堆積土は初めに壁際が埋まり、中央に黄褐色砂質土が流れ込んだ状態を示していることから自然堆積と考えられ、壁際の堆積土には焼土と炭化物が多く含まれている。砂質の地山であることから壁面は脆いものであるが一部酸化している部分が認められ、堆積土の状況と合わせて本土坑において火を使用したことが明らかである。土器などの遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は形態としては木炭焼成土抗に近いものがあり、時期については検出層位と住居跡との重複から古墳時代以降が考えられる。 (安 田)

17号土坑 SK17

遺 構 (図451, 写真444)

本遺構は、N21グリッドで検出された土坑である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。

本土坑は、埋没後の106号住居跡を転用した、生活残滓の廃棄坑と考えられる。堆積土は、2層に分層され、炭化物・骨片・土器片が充満していた。

平面プランは、不整円形を呈している。底面は、平坦であり、壁は、大きく開いて立ち上がる。規模は、148cm×132cmを測り、大型である。検出面からの深さは、12cmを測る。

遺 物 (図452, 写真636・637)

本土坑から、土師器片162点が出土した。他に、多くの骨片も出土している。図示遺物のうち、図452-8・9・10・13の4点は、集中的にまとまっていたもので、一括廃棄された状況を良く示していた。

図452-7~10は、土師器高杯である。有段丸底杯を、中空の脚に乗せたもので、裾は「ハ」の字状に開く。8は、脚部に3方向からの透かしが入っている。

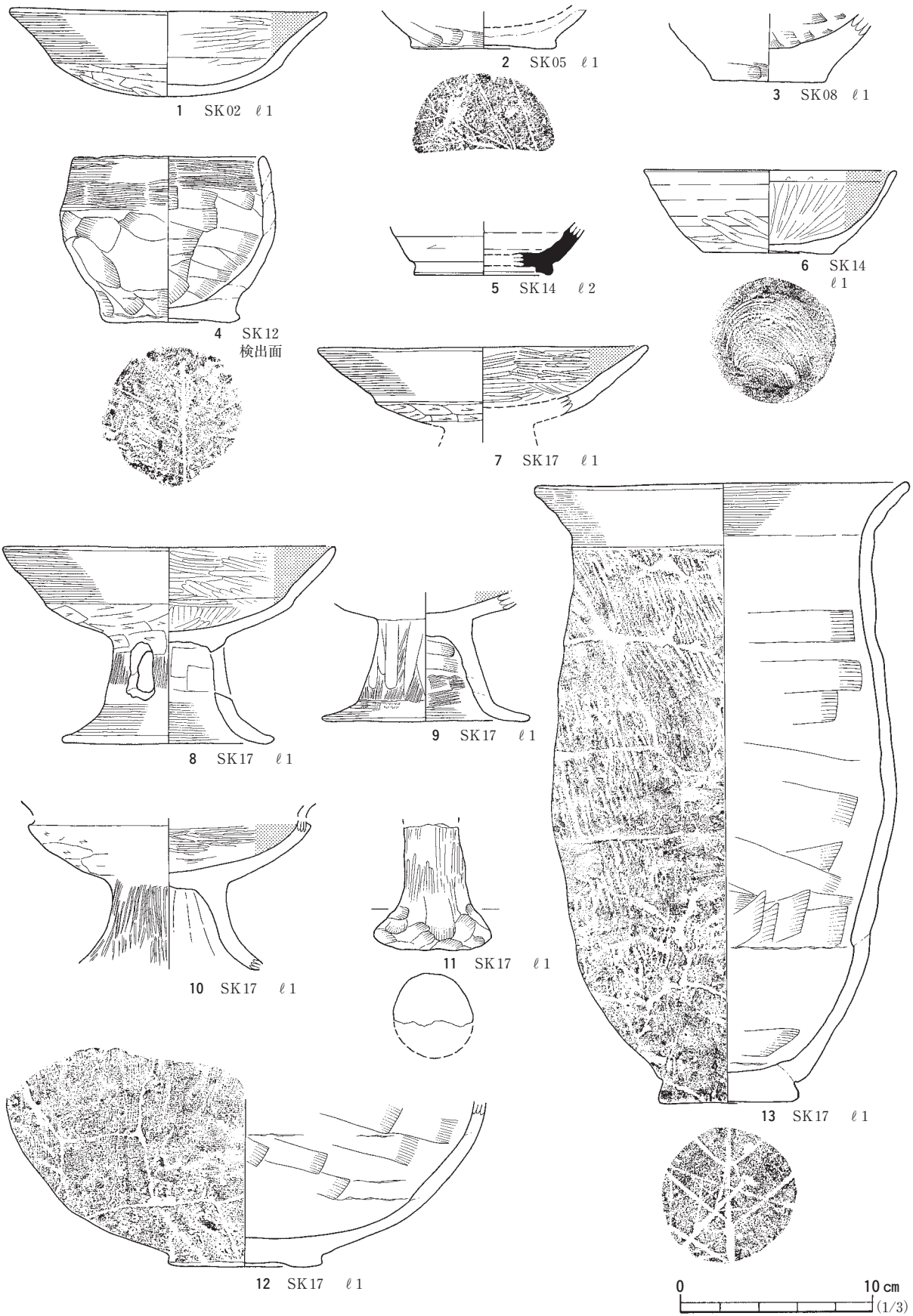


図452 2・5・8・12・14・17号土坑出土遺物

図452-11は、土製支脚である。外面は、軽くミガキ調整されている。

図452-12は、土師器球胴甕の底部付近である。大型品になると思われるが、器形全体の特徴は、
 知ることができない。

図452-13は、土師器長胴甕である。器高30cmを超える大型品で、口頸部は「く」の字状に屈曲する。外面はハケメ調整され、底部に木葉痕が観察される。

ま と め

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部で検出された土坑である。埋没した106号住居跡が、廃棄坑に転用されたもので、炭化物・骨片・土器片が堆積土に充満していた。

時期は、廃棄された遺物の特徴から、栗圀式期に位置付けられる。 (菅原)

18号土坑 SK18

遺 構 (図451, 写真445)

本遺構は、M22グリッドで検出された土坑である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部である。

本土坑は、埋没後の111号住居跡を転用した、生活残滓の廃棄坑と考えられる。堆積土は、2層に分層され、炭化物・骨片・土器片が充満していた。

平面プランは、不整形を呈している。底面は、鍋底状をなしており、壁は、大きく開いて立ち上がる。規模は、150cm×123cmを測り、大型である。検出面からの深さは、10cmを測る。

遺 物 (図456, 写真637・638)

本土坑から、土師器片188点、土製品1点が出土した。他に、多くの骨片も出土している。図示遺物のうち、図456-2～4の3点は、集中的にまとまっていたもので、一括廃棄された状況を良く示していた。

図456-1は、土師器高杯の脚部である。中空で、透かしが入らない。裾は、「ハ」の字状を呈している。内外面は、ヘラケズリされている。

図456-2・3は、土師器小甕である。2は、丸底で、胴部が横長の珍しい器形を呈している。口頸部は、「く」の字状に短く屈曲しており、胴部外面がヘラケズリ調整されている。3は、平底で、丸みのある胴部から、頸部が直立し、口縁部が外反する器形を呈する。内外面は、器面調整にヘラミガキが施されている。

図456-4・5は、土師器長胴甕である。どちらも、底部付近を欠いており、器形全体の特徴を知ることができない。4は、胴部中央が膨らみ、口頸部が「く」の字状に屈曲する。5は、4に比べて胴部の膨らみが弱く、口頸部の屈曲度合いが強い。

図456-6は、土製支脚である。

ま と め

本遺構は、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部で検出された土坑である。埋没した111号住居

跡が、廃棄坑に転用されたもので、炭化物・骨片・土器片が堆積土に充満していた。

時期は、廃棄された遺物の特徴から、栗圀式期に位置付けられる。(菅原)

19号土坑 SK19

遺構 (図453, 写真445)

本遺構は、N21グリッドで検出された土坑である。

営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。重複関係を整理しておくとして、79・135号住居跡を切っている。

堆積土は、灰褐色砂質土が、1層認められた。茶褐色土塊が多量に含まれており、人為堆積土と考えている。

平面プランは、不整楕円形を呈している。底面は、平坦であり、壁は、開き気味に立ち上がる。規模は、190cm×101cmを測り、大型である。検出面からの深さは、27cmを測る。

遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の西斜面肩部で検出された土坑である。平面プランは、不整楕円形を呈しており、規模は大型である。内部は、人為的に埋められていた。

時期は、出土遺物に恵まれず不明である。(菅原)

21号土坑 SK21

遺構 (図453, 写真446)

本遺構は、N22グリッドで検出された土坑である。営まれたのは、自然堤防の尾根中央付近である。他の遺構との重複関係は、認められない。

本土坑は、143号住居跡の屋外付属施設と考えられる。同住居跡の北周壁中央外側に、主軸を揃えて掘られている。

堆積土は、にぶい黄橙色砂が、1層認められた。人為堆積土であるか、自然堆積土であるかは、不明である。

平面プランは、隅丸長方形を呈しており、整っている。

底面は、平坦であり、壁は、開き気味に立ち上がる。規模は、198cm×95cmを測り、大型である。検出面からの深さは、28cmを測る。

遺物は、土師器片6点が出土した。有段丸底杯の破片が認められる。

まとめ

本遺構は、自然堤防の尾根中央付近で検出された土坑である。143号住居跡の屋外付属施設と考えられる。平面プランは、隅丸長方形をしていた。規模は、大型である。

時期は、栗圀式期に位置付けられる。(菅原)

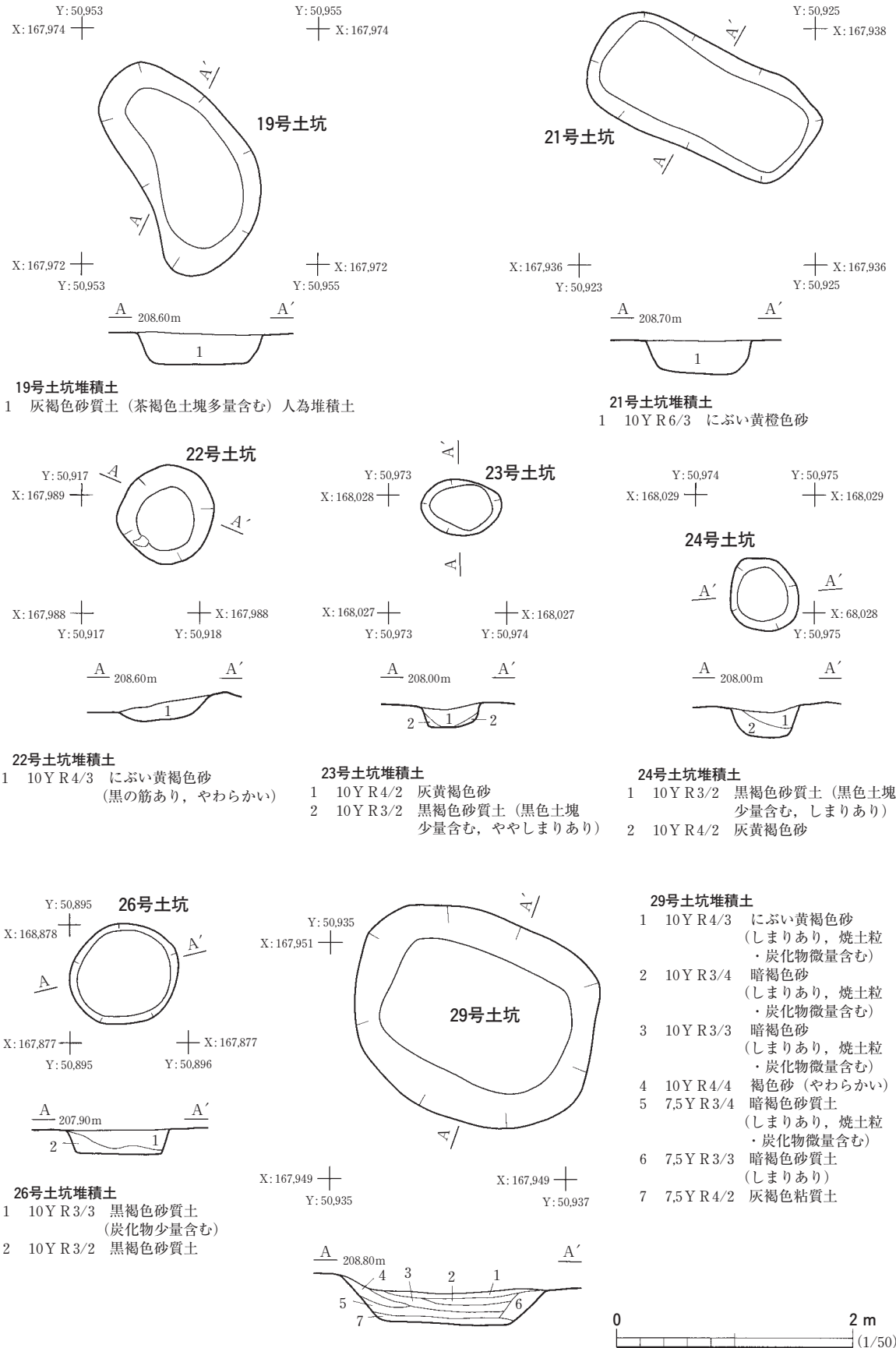


図453 19・21～24・26・29号土坑

22号土坑 S K 22

遺 構 (図453, 写真446)

本遺構は、M21グリッドで検出された土坑である。営まれたのは、阿武隈川に面した后背湿地に面した自然堤防の西斜面である。他の遺構との重複関係は、認められない。

堆積土は、にぶい黄褐色砂が、1層認められた。人為堆積土であるか、自然堆積土であるかについては、不明である。断面で、黒い筋状のラミナが観察された。

平面プランは、円形を呈している。底面は、鍋底状をなしており、壁は、開き気味に立ち上がる。規模は、84cm×80cmを測り、小型である。検出面からの深さは、18cmを測る。

遺 物 (図456, 写真638・639)

遺物は、土師器片28点が出土した。図示遺物が、1点ある。

図456-7は、小～中型の土師器甕である。胴部に、あまり膨らみが無く、下半が強く窄まる器形を呈している。外面はハケメ調整され、底部外面に木葉痕が観察される。

ま と め

本遺構は、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面で検出された土坑である。平面プランは円形を呈しており、小型である。時期は、栗圀式期の可能性が高いと考えている。 (菅 原)

23号土坑 S K 23

遺 構 (図453, 写真447)

本遺構は調査区北部のN20グリッドに位置する小ピット状の遺構で、LⅢ上面から検出した。本土坑から約1.4mほど北東方向に24号土坑が隣接している。堆積土は2層に分層でき、レンズ状堆積が認められることから自然堆積と考えられる。

大きさと平面形は、長軸約65cm、短軸約45cmの楕円形である。深さは約15cmしか残っておらず、その部分の周壁は緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦であった。

図示できる遺物は出土していない。

ま と め

本土坑の時期や性格は不明である。しかし、北西側からは56号住居跡や61号住居跡など複数の住居跡を検出しており、それらの住居跡に関係した施設の一部とも考えられる。 (大 波)

24号土坑 S K 24

遺 構 (図453, 写真447)

本遺構は調査区北部のO20グリッドに位置する小ピット状の遺構で、LⅢ上面から検出した。本土坑から約1.4mほど南西方向に23号土坑が隣接している。堆積土は2層に分層でき、レンズ状堆積が認められることから自然堆積と考えられる。また、堆積土の特徴が類似することから、23号土坑

とはほとんど同時期に埋没したものと考えられる。

本土坑の大きさと平面形は、直径約60cmほどの円形である。深さは、約25cmしか残っておらず、その部分の周壁は緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦であった。

図示できる遺物は出土していない。

ま と め

本土坑の時期や性格は不明である。しかし、付近で56号住居跡や61号住居跡など複数の住居跡を検出しており、それらの住居跡に関係した施設の一部とも考えられる。 (大 波)

26号土坑 S K 26

遺 構 (図453, 写真448)

本土坑は、調査区南側のM24グリッドに位置する。地形的には、自然堤防の平坦面に立地している。検出面はLⅢ上面である。127号住居跡と重複し、本土坑が新しい。平面形は、直径90cmほどの円形を呈している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦に作られ、検出面から底面までの深さは、20cmを測る。遺構内堆積土は2層で、いずれも壁際からの流入状態を示すことから、自然堆積と考えている。本土坑からは、遺物は出土しなかった。

ま と め

本土坑の所属時期は、出土遺物がないため特定できないが、検出状況や127号住居跡との重複関係などから、古墳時代に所属するものと考えている。 (大河原)

29号土坑 S K 29

遺 構 (図453, 写真448)

本遺構は、N22グリッドで検出された土坑である。

営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。重複関係を整理しておくと、27・105号住居跡を切っている。

堆積土は、7層に分層された。断面は、典型的なレンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は自然埋没したと考えている。土層中には、焼土粒や炭化物の混入がみられた。

平面プランは、隅丸長方形を呈している。底面は、平坦で、壁は、直線的に外傾して立ち上がる。規模は、210cm×173cmを測り、大型である。

検出面からの深さは、40cmを測る。

遺物は、土師器片58点が出土した。有段丸底の杯と、ハケメ調整の甕が認められる。

ま と め

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面で検出された土坑である。平面プランは、隅丸長方形を呈しており、大型である。

時期は、重複遺構の所見と出土遺物から、栗圀式期以降に位置付けられる。 (菅 原)

30号土坑 S K 30

遺 構 (図454, 写真449)

本遺構は調査区北部のN20グリッドに位置し、LⅢ上面から検出した小ピット状の遺構である。遺構内は褐灰色砂が堆積している。大きさは上端が直径約40cm前後の楕円形ないし方形をしており、下端がやや東側に寄って長軸約22cm、短軸約18cmの楕円形である。深さは最大約20cmで、周壁は東側は直立するが、他は底面から緩やかに立ち上がっている。

図示できる遺物は出土していない。

ま と め

この小ピットの時期や性格はわからなかった。本遺構の西側からは複数の住居跡を検出しており、それらの付属施設と関係したものかもしれない。(大 波)

31号土坑 S K 31

遺 構 (図454, 写真449)

本遺構は調査区北部のN20グリッドに位置し、LⅢ上面から検出した小ピット状の遺構である。本遺構の大きさは長軸約20cm、短軸約15cmの楕円形と小さいが、堆積土は黒褐色土塊を含んだ灰黄褐色砂で、基本土層のLⅢとは明確に異なっている。深さは検出面から約30cmを測り、先端部分が細くなっている。図示できる遺物は出土していない。

ま と め

この小ピットの時期や性格は不明であるが、104号住居跡の東周壁から約1.4mほど東に位置するため、何らかの付属施設の可能性も考えられる。(大 波)

32号土坑 S K 32

遺 構 (図454, 写真450)

本遺構は、M21・N21グリッドで検出された土坑である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面である。重複関係を整理しておくと、43号住居跡に切られている。

本土坑は、楕円形の窪みに、細長い溝が連結した特徴的な平面プランを呈しており、堆積土には、焼土塊が含まれている。このようなことから、住居跡のカマド残存部の可能性が指摘される。

規模は、260cm×79cmで、検出面からの深さは、最深部で20cmを測る。

遺物は、土師器片17点が出土した。ハケメ調整の甕の破片が認められる。

ま と め

本遺構は、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面で検出された土坑である。細長い平面プランをなしており、内部に焼土塊が充満していた。住居跡のカマド残存部の可能性が推定される。

時期は、重複遺構の所見と出土遺物から、栗圀式期に位置付けられる。(菅 原)

35号土坑 SK35

遺 構 (図454, 写真450)

本土坑は、調査区南部のM24グリッドに位置する。地形的には、自然堤防緩斜面の肩部に当たる。遺構検出面はLⅣである。83号住居跡と重複関係にあり、本土坑が古い。平面形は、直径が70cmほどの円形を呈している。壁は、比較的急な角度で立ち上がる。底面は、ほぼ平坦に作られていた。底面から検出面まで高さは、15cmを測る。遺構内堆積土は1層で、堆積過程は判断できない。

遺 物 (図456, 写真638)

本土坑からは、土師器1点が出土した。図456-8は、土師器杯である。底部に施されたケズリ調整により、体部下半に段を有している。底面は、丸底に仕上げられている。

ま と め

本土坑の所属時期は、検出状況と出土遺物から、栗圀式期以降に位置付けられると考えている。

(大河原)

41号土坑 SK41

遺 構 (図454)

本遺構は、調査区南部のM23グリッドに位置する土坑である。地形的には、自然堤防の緩斜面肩部に立地する。遺構検出面はLⅣである。

本土坑は、17号住居跡と重複関係にあり、これより新しい。平面形は、不整楕円形を呈している。大きさは、85cm×68cmで、検出面からの深さは45cmを測る。

壁は、比較的急な角度で立ち上がる。

堆積土は2層に分層された。断面の様子から、自然堆積したと考えている。

本土坑からは、土師器1点が出土した。図示資料できるような資料には、恵まれていない。

ま と め

本土坑の所属時期は、重複遺構の関係から、栗圀式期に上限が求められる。

(菅原)

43号土坑 SK43

遺 構 (図454, 写真451)

本遺構は、O19グリッドで、高木遺跡の北端から検出された土坑である。営まれたのは、自然堤防の南向き斜面である。他の遺構との重複関係は認められない。

堆積土は、5層に分層された。断面は、典型的なレンズ状堆積の様相を呈しており、このことから、遺構は自然に埋没したと考えている。最上層の①は、廃棄の場に転用されていたと考えられる。土層中には、土器片や炭化物が多量に混入していた。

平面プランは、不整形を呈している。ただ、検出面は凹凸が著しいので、本来的には円形を呈

第1編 高木遺跡

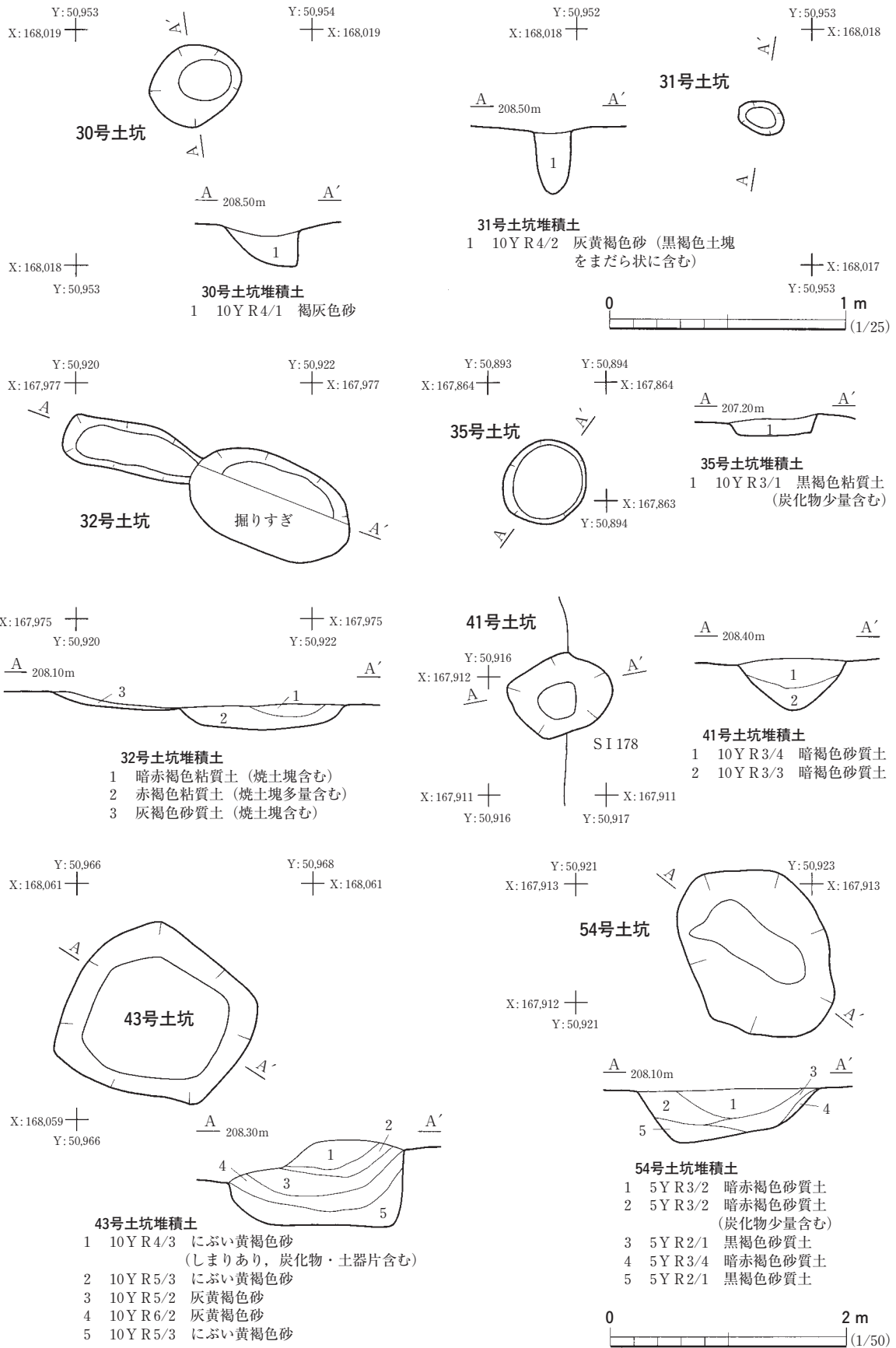


図454 30~32・35・41・43・45号土坑

していたと推定している。

規模は、150cm×138cmを測り、大型の部類に属している。検出面からの深さは、71cmを測る。底面は平坦であり、壁は直立気味に立ち上がる。

つまり、本遺構は、円筒状に掘り込まれた土坑である。

遺物 (図456)

遺物は、土師器片84点が出土した。

図456-9は、 ℓ 1出土の土師器甕である。底部付近の破片で、器形全体の特徴は分からない。外面はハケメ調整されており、底部に木葉痕が認められる。

まとめ

本遺構は、自然堤防の南向き斜面で検出された土坑である。平面プランは、円形を呈していたと推定され、大きな規模を有している。最上層 ℓ 1は、廃棄の場に転用されていた。

時期は、 ℓ 1の遺物から、栗圀式期に下限が設定できる。

(菅原)

54号土坑 SK54

遺構 (図454, 写真451)

本土坑は、調査区南側のN23グリッドに位置する。

地形的には、自然堤防の平坦面に立地している。検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、本土坑周辺は遺構の密度が高く、多くの竪穴住居跡が重複している。本土坑の平面形は不整楕円形を呈し、長径160cm、短径130cmを測る。壁は、いずれも緩やかに外傾しながら立ち上がっている。底面は平坦に作られているが、北側に向かい緩やかに傾斜している。底面から検出面までの高さは、最も高い北側で40cmを測る。

遺構内堆積土は5層に区分した。いずれも壁際に沿った流入状態を示すことから、自然堆積と考えている。本土坑から、遺物は出土しなかった。

まとめ

本土坑の所属時期は、出土遺物がないため特定できないが、検出状況や周囲の遺構の分布状況などから古墳時代に属するものと考えている。

(大河原)

55号土坑 SK55

遺構 (図455, 写真452)

本土坑は、調査区南側のN23グリッドに位置する。地形的には、自然堤防の平坦面に当たる。検出面はL IV上面である。98号住居跡と重複し、本土坑が古い。平面形は不整楕円形を呈し、長径100cm、短径67cmを測る。壁は、比較的急角度で立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦に作られている。底面から検出面までの高さは、35cmを測る。遺構内堆積土は1層で、堆積過程は判断できない。

本土坑から、遺物は出土しなかった。

ま と め

本土坑の所属時期は、出土遺物がないため特定できないが、周囲の遺構の分布状況や98号住居跡との重複関係などから、古墳時代に所属するものと考えている。(大河原)

56号土坑 SK56

遺 構 (図455, 写真452)

本土坑は、調査区南側のN22グリッドに位置する。地形的には、自然堤防の平坦面に立地している。検出面はLⅣ上面である。102・144号住居跡と重複し、本土坑が古い。平面形は不整楕円形を呈し、長径210cm、短径195cmを測る。壁は、比較的急角度で立ち上がっている。底面はほぼ平坦に作られている。底面から検出面までの高さは、40cmを測る。遺構内堆積土は、4層に区分した。いずれも壁際に沿ってレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と考えている。

本土坑から、遺物は出土しなかった。

ま と め

本土坑の所属時期は、出土遺物がないため特定できないが、周囲の遺構の分布状況や102・144号住居跡との重複関係などから、古墳時代に所属するものと考えている。(大河原)

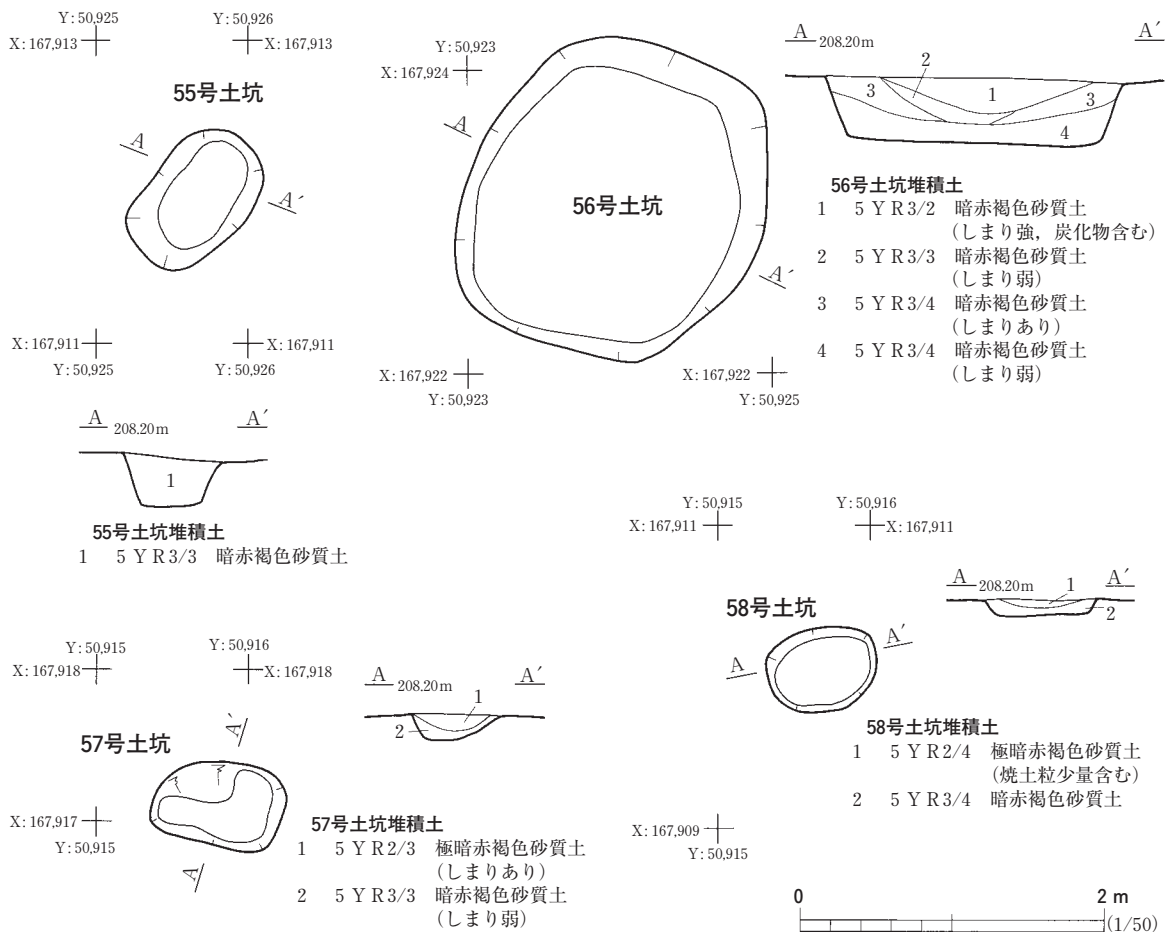


図455 55～58号土坑

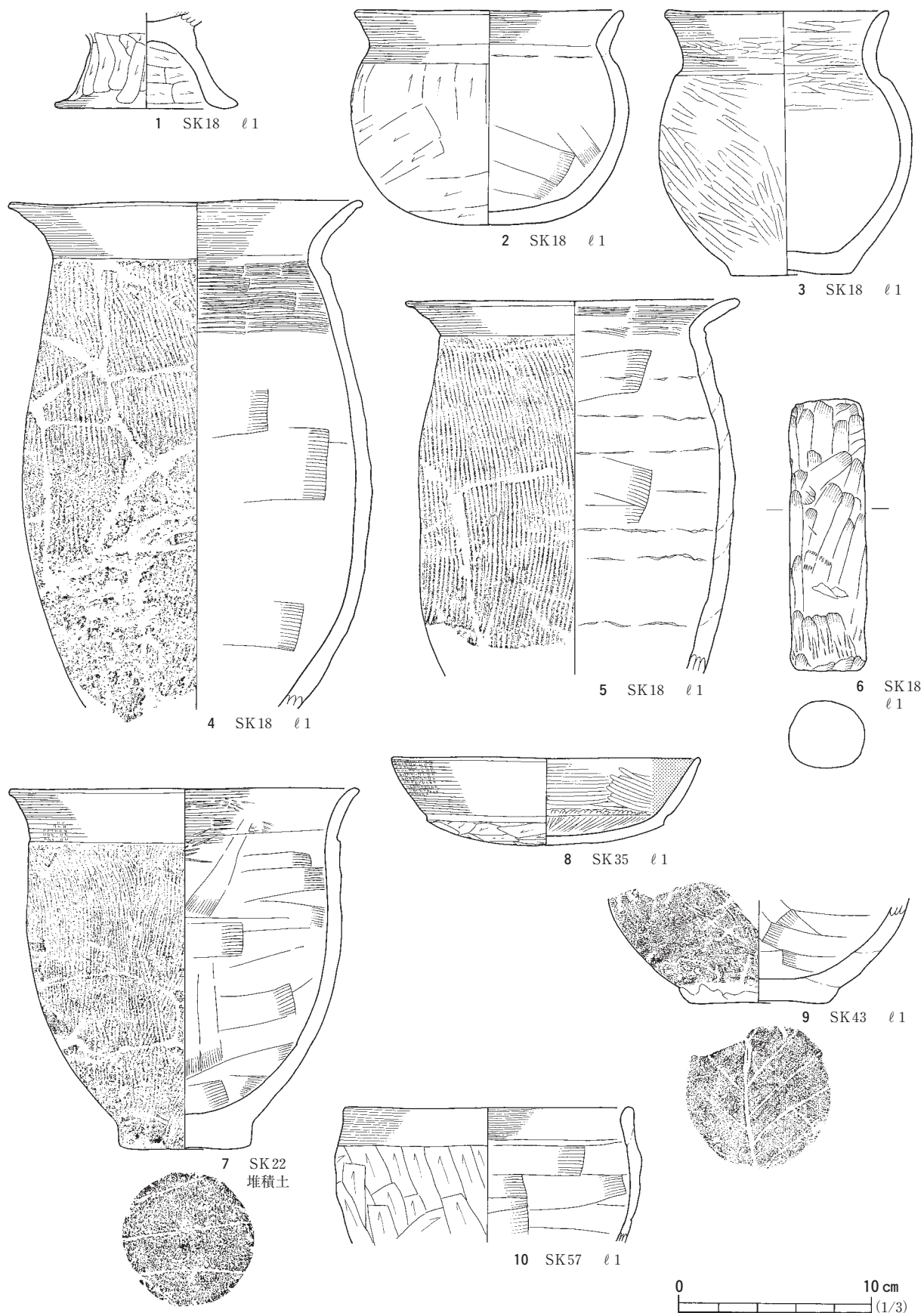


図456 18・22・35・43・57号土坑出土遺物

57号土坑 SK57

遺構 (図455, 写真453)

本土坑は、調査区の南側のM23グリッドに位置する。地形的には、自然堤防の平坦部に当たる。本土坑は、LIV上面で検出した。100・101号住居跡と重複関係にあり、本土坑が古い。本土坑の平面形は不整楕円形を呈し、長径85cm、短径55cmを測る。壁は、北・西の壁で比較的緩やかに立ち上がるものの、他の壁は急角度で立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦に作られているものの、南側に向かい緩やかに傾斜している。底面から検出面までの高さは、最も高い北側で18cmを測る。遺構内堆積土は2層で、いずれも壁際からの流入状態が認められることから、自然堆積と考えられる。

遺物 (図456)

本土坑からは、土師器片2点が出土している。図456-10は、体部中央に膨らみを持ち、口縁部が内傾する土師器甕である。

まとめ

本土坑の所属時期は、出土遺物や、重複関係などから栗圀式期以降と考えている。(大河原)

58号土坑 SK58

遺構 (図455, 写真453)

本土坑は、調査区南部のM23グリッドに位置する。地形的には、自然堤防の平坦部に位置している。遺構は、LIV上面で検出した。本土坑は99・161号住居跡と重複しており、それらを切っている。平面形は楕円形を呈し、長径74cm、短径53cmを測る。壁は、比較的急な角度で立ち上がる。底面はほぼ平坦に作られているが、中央付近がやや高まっている。底面から検出面までの高さは、10cmを測る。遺構内堆積土は2層に分かれ、レンズ状の堆積状況を示していることから自然堆積と考えられる。

本土坑からは、遺物は出土しなかった。

まとめ

本土坑の所属時期は、出土遺物がないため断定できないが、検出状況と周囲の遺構の分布状況から、古墳時代に属するものと考えている。(大河原)

第3節 焼土遺構

焼土遺構は、3基検出された。

どれも、堅穴住居に関連する施設痕跡と推定されるが、遺存状態が悪かったため、性格を決めかねたものである。

以下、順に解説していく。

1号焼土遺構 SG01

遺 構 (図457, 写真478)

本遺構は調査区北部のN20グリッドから検出した焼土遺構で、周囲からは多数の土師器片が出土している。本遺構は104号住居跡と重複するが、焼土面は104号住居跡の床面より高い位置にあるため別遺構と考えられ、本遺構のほうが新しい。また、本遺構のすぐ北側には103号住居跡が位置する。

本遺構はL II中から検出したが、重複する104号住居跡との関係から104号住居跡の堆積土中に形成されたものと推測される。本遺構の焼土の広がりには直径約45cmの円形状で、断ち割りからは厚さ約1cmほどの熱変が観察できた。焼土面とその周囲からは複数個体分の土師器が出土している。その中には焼土範囲から約1mほど北西方向に離れて出土するものもあるが、出土遺物は焼土面とほぼ同一面上に位置付けられることから、本遺構に伴って出土したものと考えられる。

遺 物 (図458, 写真639)

本遺構に伴うと考えられる出土遺物は平面図上に示したが、ある程度のまとまりは捉えられるものの、細かい破片となっていた。そのうち図示できたものは土師器4点である。

図458-1は杯で、口縁部が欠けて底部しか残らないが、内黒の有段丸底のものである。

図458-2~4は甕である。同図2・3は長胴甕のため煮炊具に使用されたものとみられる。体部外面は同図3はハケメ調整であるが、同図2はヘラナデが施されている。同図4は口縁部が欠けているが、体部が最大径となる丸い球形をした球胴甕である。体部外面には部分的にハケメが認められるが、器面が剥離していてよくわからない。底部はヘラケズリが施されている。

ま と め

本遺構の性格はよくわからなかった。しかし、同一面上に遺物が出土したことから住居跡の可能性があり、焼土の部分がカマドの痕跡で、遺物はその周囲に置かれたものと推察できる。その場合

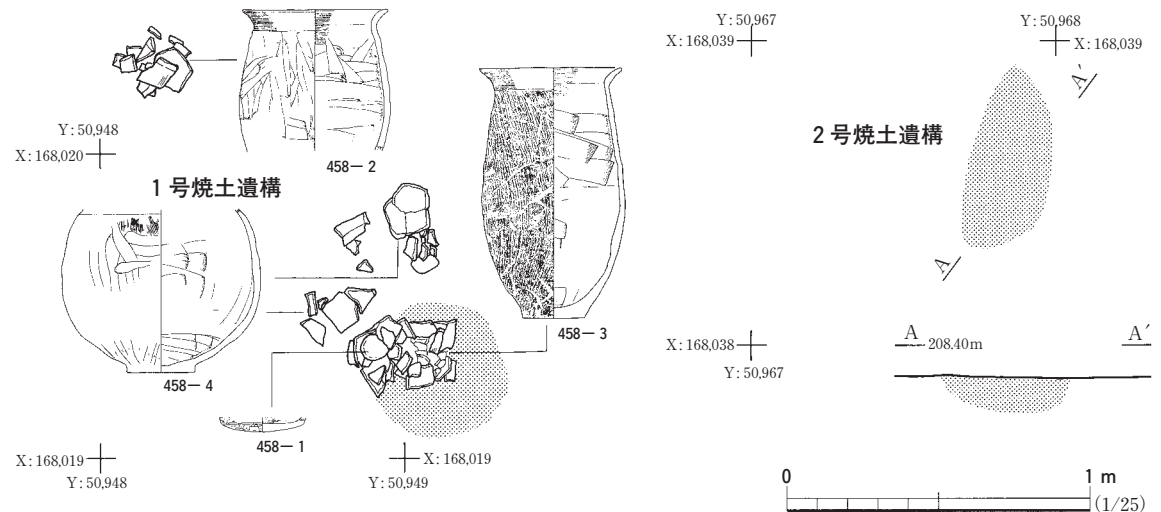


図457 1・2号焼土遺構

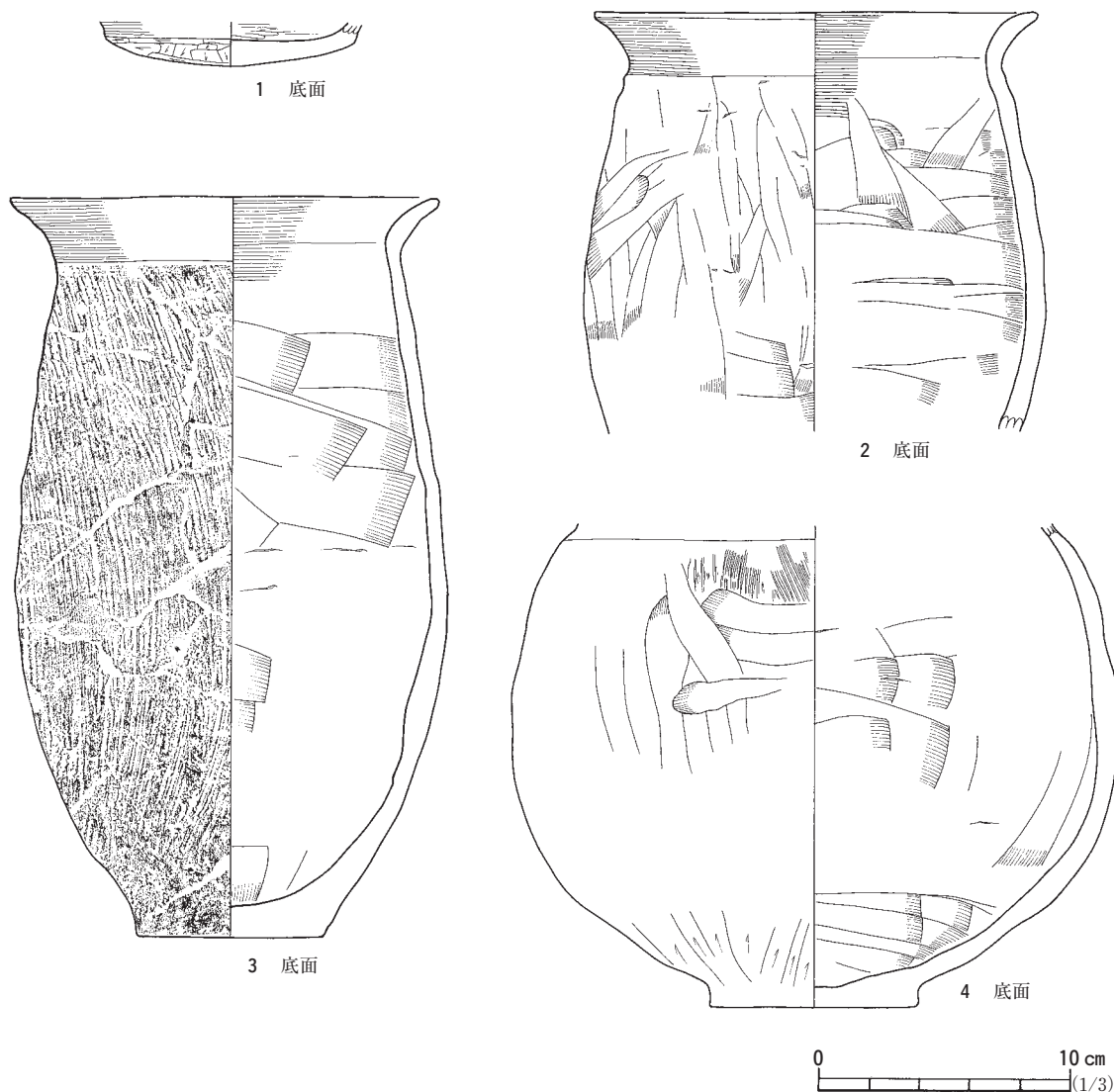


図458 1号焼土遺構出土遺物

は104号住居跡のみならず、103号住居跡とも重複すると考えられる。

本遺構は出土遺物の特徴から、栗圀式期のものとみられ。

(大波)

2号焼土遺構 S G 02

遺 構 (図457, 写真478)

本遺構は調査区北側のO20-2グリッドに位置し、18号住居跡の東に近接している。LⅡ掘り下げ中に検出されたものであり、周辺を精査したが焼土以外のプランは確認できなかった。酸化範囲は長径60cm、短径28cmの楕円形に近い形となっており、厚さは10cmを測る。遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は住居跡のカマド痕跡の可能性も考えられるが、関連するような掘り込みは確認できず、状況からは当個所で火の使用があったことが知られるのみである。時期については検出層位と周辺の遺構から古墳時代が考えられる。

(安田)

3号焼土遺構 SG03

遺 構 (図459, 写真478)
 本遺構は調査区北側のO20-13・23グリッドに位置し、LⅡ精査中に検出されたものである。掘り込んだ結果、長さ3m以上の溝状の遺構に焼土が部分的に堆積するというもので、地山自身が強く火を受けている箇所は見られなかった。溝状の掘り込みは北側部分に約1m四方の方形の広がりをしており、それに幅50cm弱、長さ200cm程の溝が弓なりに取り付く形となっている。また、溝から50cm南には長径65cmの卵形の土抗が見られたが、本来は溝状の掘り込

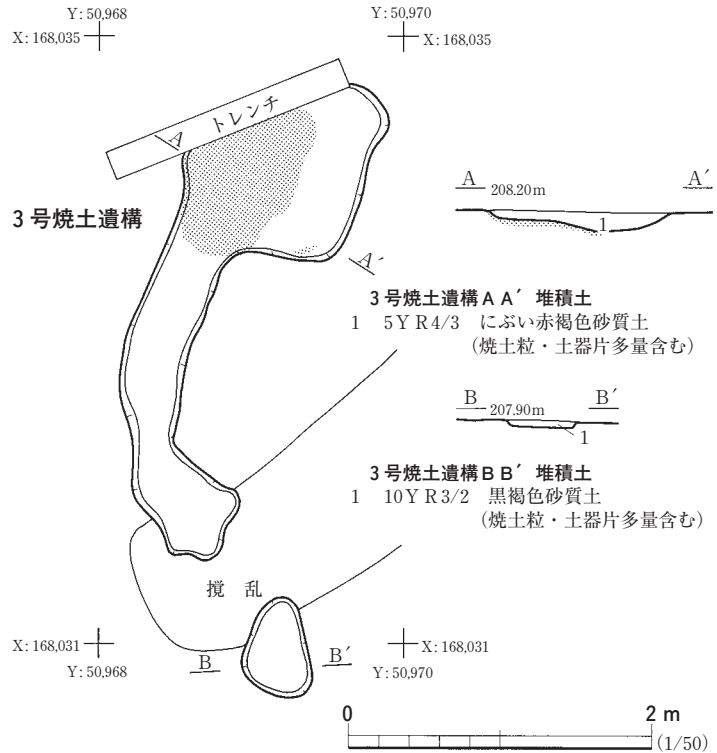


図459 3号焼土遺構

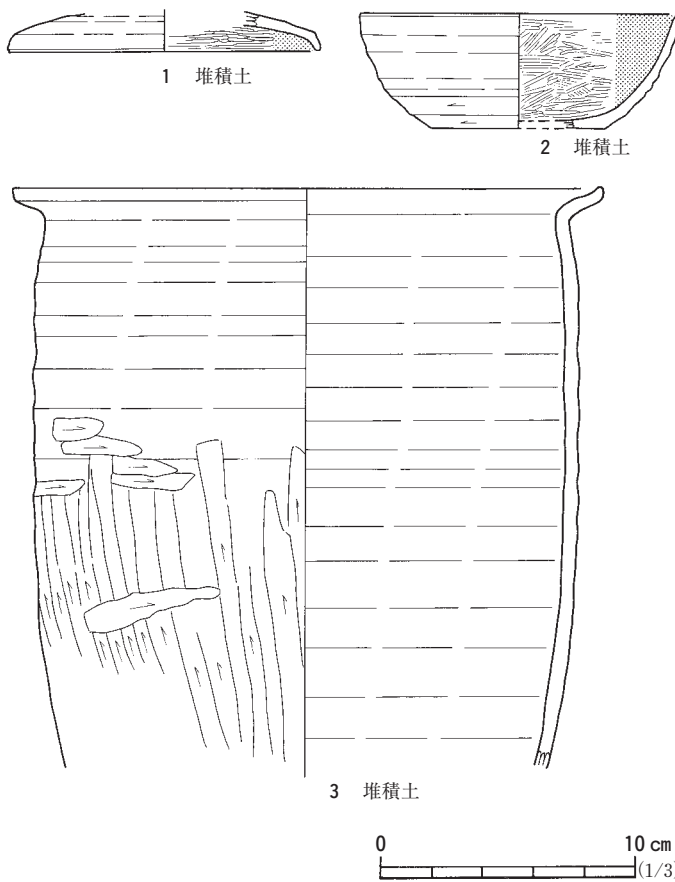


図460 3号焼土遺構出土遺物

みとつながっていたものと思われる。焼土は北側の方形の掘り込み部に多く堆積している。

遺 物 (図460, 写真639)

遺物は、土師器片が多量に含まれており、おそらく掘り込み内に焼土と土器片を廃棄したものと考えられるが、その多くは小片であり図示できたのは3点のみである。

図1・2はロクロ調整による土師器の蓋と杯で両者とも内面にはヘラミガキの後黒色処理が施されており、2の外表面体部下端から底部にかけては回転ヘラケズリがみられる。

図3はロクロ調整による土師器甕で、長い胴部と外に強く開く口縁部を有し、外面の胴部下半にはヘラケズリ調整がなされている。

ま と め

本遺構の形状にどのような意図があるのか判断できず性格については不明である。時期については出土遺物から9世紀前半頃が考えられる。(安 田)

第4節 溝 跡

溝跡は、5条検出された。このうち、1・2・5号溝跡の3条は、栗圀式期の集落内部を区画するための大溝跡である。自然堤防を横断する方向で東西に走り、後背湿地と阿武隈川を結んでいる。

これらによって挟まれたエリアは、内幅で110m～115mを測る。内部に営まれたのは、竪穴住居跡で構成される集落である。したがって、見掛けの上では、区画外部の状況と別段変わった様子は認めれず、いわゆる豪族居館の痕跡も検出されなかった。

ただ、後背湿地側では、溝の窪みを利用して祭祀が行われ、この一画が自然堤防上の集落にとって特別な性格を有していたことを窺わせている。

1号溝跡・13号集石遺構・6号特殊遺構 S D01・S S13・S X06

遺 構 (図461～464, 写真454～461)

[概要]

本遺構は、栗圀式期の集落内部を区画した大溝跡の1つである。ここでは、その溝跡に伴った祭祀遺構と併せて、事実報告を行う。

1号溝跡は、調査区南部のM23グリッドで検出され、自然堤防を東西に横断している。等高線を拾ってみると、この場所は、浅い沢状の旧地形をなしており、このことを利用した意図的な地形の選択が行われたと推定される。

本溝跡の北側には、5号溝跡が平行して走っており、両者は前後関係を有していたと考えられる。ただ、直接の切り合いは無く、この点を確かめることはできなかった。

検出されたのは、14mの長さである。西側は攪乱で破壊されており、検出した東端は、後背湿地まで及んでいない。上幅5.2～5.4mで、検出面からの深さは、80cm～87cmを測る。断面は逆台形を呈しており、平坦な底面をなしている。ただ、東側では、底面中央が溝状に窪んだ状態で検出された。この窪みは、幅50cm～70cm、深さ30cm～34cmのもので、8mの長さが確認されている。

本溝跡は、この底面中央の窪みを含めて、全体が自然埋没したと考えている。断面は、典型的なレンズ状堆積の様相を呈しており、人為的に埋められたと見なす積極的な根拠は得られなかった。層位は、大きく捉えて上下2つに大別される。上層の色調が明るく、下層の色調が暗い傾向が指摘される。炭化物・焼土の含有は、全体を通してみられ、遺物も、検出面から最下層まで連続して出土した。

内容は、ほとんど栗圀式期のもので占められている。

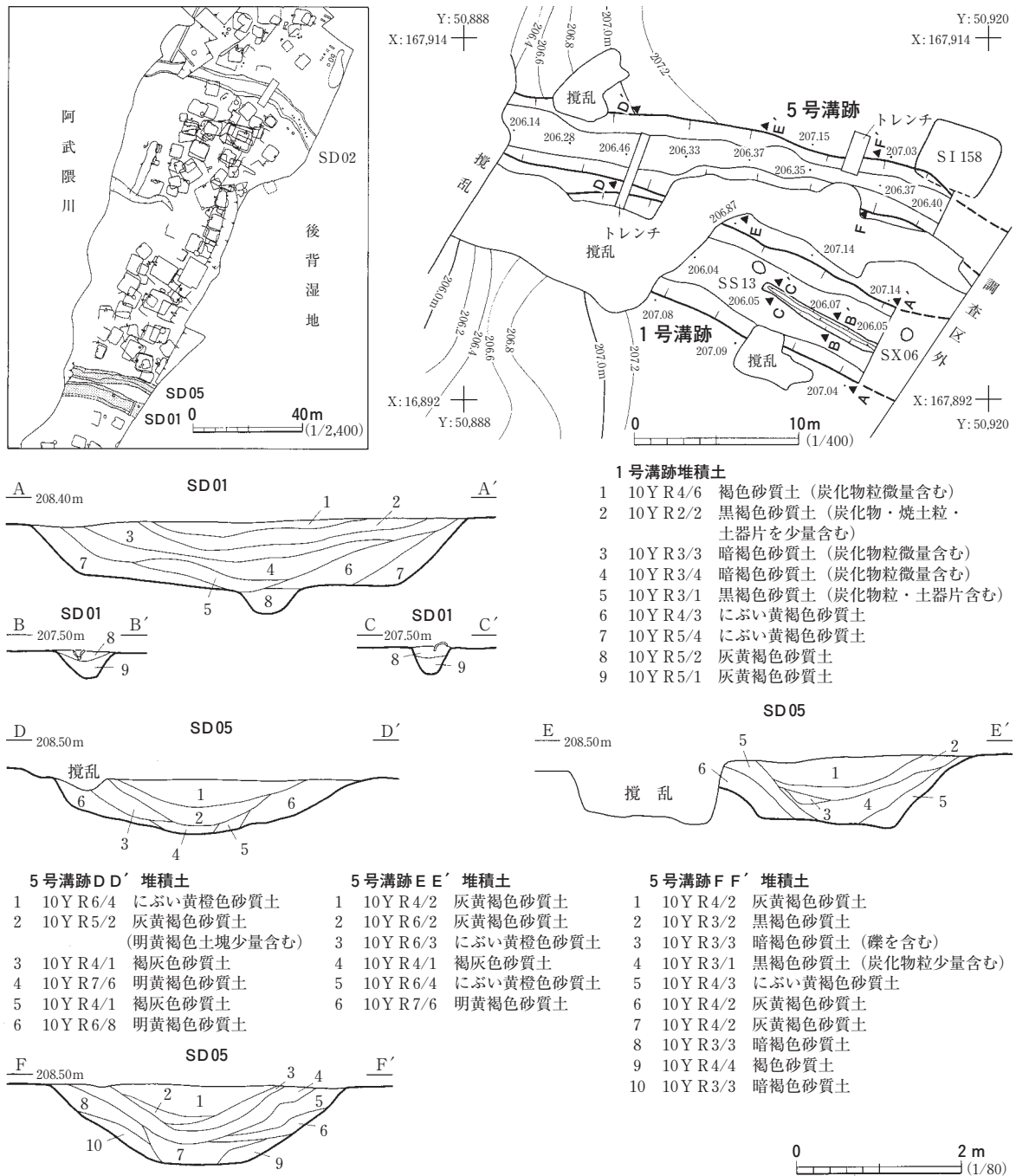


図461 1・5号溝跡

[祭祀遺構]

祭祀遺構は、13号集石遺構と6号特殊遺構が検出されている。分布は、後背湿地につながる東側に偏っており、2号溝跡の状況に類似していた。それらが、水辺の祭祀の性格を帯びていたことを示唆している。

2つの祭祀遺構は、1号溝跡の検出面で確認されており、溝跡底面とは、50~87cmの比高差がある。したがって、かなり埋没が進行した後で、祭祀は行われたと考えられる。この状況は、2号溝跡のA群に対比される。

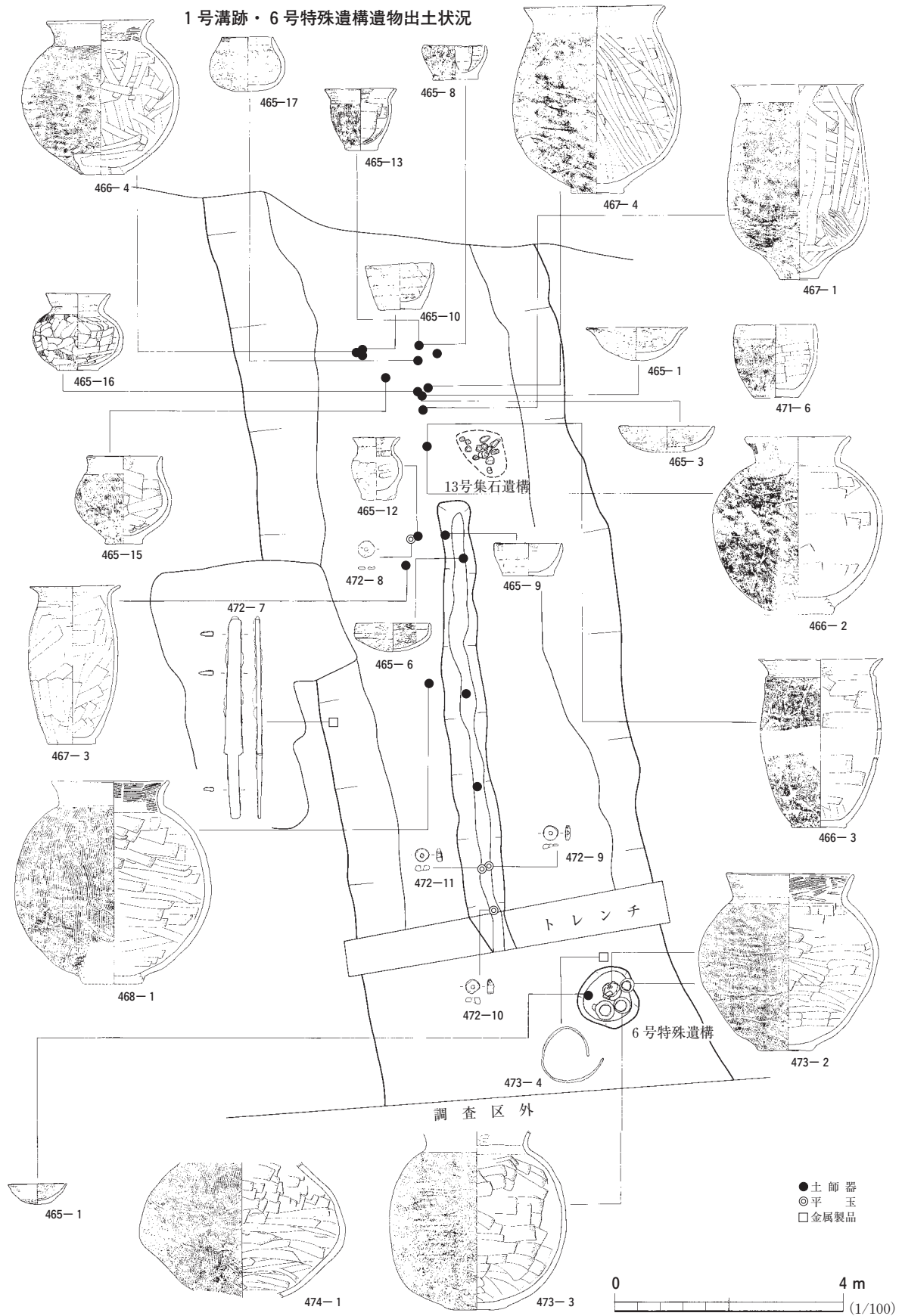


図462 1号溝跡・6号特殊遺構遺物出土状況

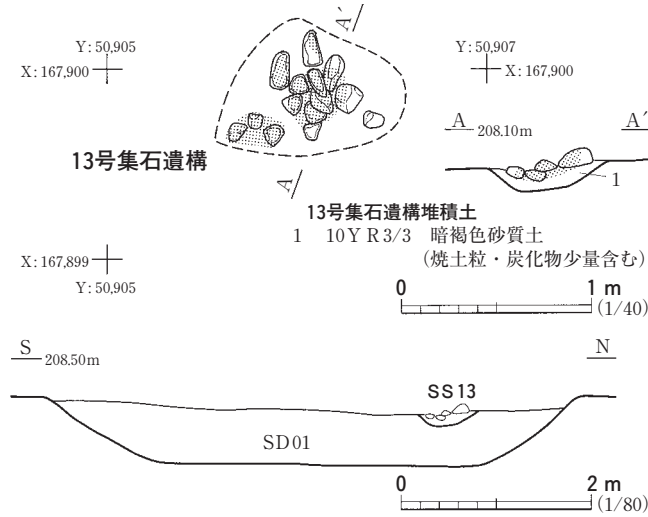


図463 13号集石遺構

ただ、この2号溝跡の事例には、掘り込みが伴っていない。この点に、細部の違いが指摘される。

6号特殊遺構では、円形の窪みに、3個体の土師器球胴甕が置かれていた。また、周囲から、土師器杯と銅釧が各1点出土している。

窪みは、107cm×106cmの大きさで、検出面から19cmの深さを測る。底面は焼土化していないが、土器は器面が荒れており、明らかに、ここで火が焚かれたことを示している。13号特殊遺構との違いは、間層を挟まないで底面に直接土器が置かれていること、礫が敷かれていないことである。

なお、図474-1は、胴部だけにされ、さらに、上下別々に輪切りにされた状態で、離れた位置から出土した。

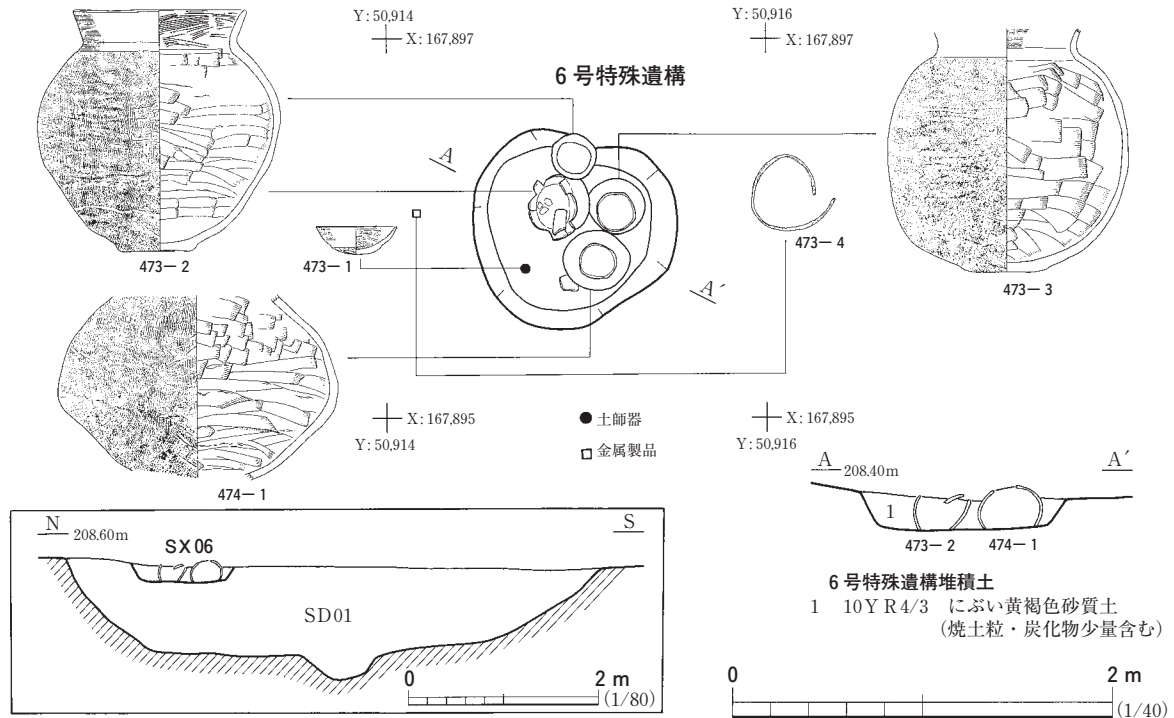


図464 6号特殊遺構

13号集石遺構は、不整形の窪みに、焼土粒・炭化物を少量含んだ暗褐色砂質土が充填され、その上面に、礫が敷かれていた。窪みは、95cm×65cmの大きさで、検出面から11cmの深さを測る。礫は被熱しており、それが敷かれた埋土上面も、弱く焼土化していた。したがって、ここでの祭祀行為には、火が焚かれたと考えられる。さらに、遺存状態の良好な、2号溝跡の所見を参考にすると、礫の上には、土器が置かれていたと推定される（E群・F群）。

6号特殊遺構堆積土
1 10Y R 4/3 にぶい黄褐色砂質土
(焼土粒・炭化物少量含む)

遺物 (図465～474, 写真640～649)

1号溝跡からは、多量の遺物が出土した。また、6号特殊遺構でも、良好な共伴遺物が得られている。以下では、1号溝跡、6号特殊遺構の順に、解説していく。

[1号溝跡の遺物]

土師器片2,529点、須恵器片42点、土製品1点、金属製品4点、石製品3点が出土した。取り上げ層位は、検出面・上層・中層・下層・底面、もしくは、検出面・ℓ1・ℓ2・底面が基本となっている。

出土傾向としては、上部に小型品が集中してみられ、底面周辺に、甕・甗類の大型品が目立つことが指摘できる。具体的にいうと、検出面・上層の遺物は杯類ばかりで、大型品は1点もなく、底面の遺物には、器高25cmを越える大型品が9点混じっている。また、底面中央の溝状の窪みでは、意図的に置かれたとみられる玉類や土師器小型品の出土があった。そのなかには、関東地方の有段口縁杯に類似した製品がある(図465-6)。

底面・底面中央の窪み(ℓ8)出土の土師器 図465～図468に掲載した。

図465-1～7には、土師器杯を示した。1は、南小泉式からの系譜を引く椀形のもので、内外面ヘラミガキされている。溝掘削時の混入品であろう。2～4・7は、有段丸底杯に分類される。2は、口縁部の立ち上がり角度が急で、4は、大きく開く。3は、口縁部が内湾しており、全体に丸味のある器形を呈している。内外面がヘラミガキされている。5は、口縁部の内傾するもので、内面はナデ仕上げされている。6は、関東地方の有段口縁杯に類似する。ただ、胎土・焼成の特徴は、他と同じであり、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。したがって、搬入品でなく、在地の製品と考えられる。

図465-8～10は、土師器粗製杯である。底部は平底で、体部が外傾気味に立ち上がり、口縁部が少し内傾する。8は、外面がハケメ調整されており、9は、痕跡のはっきりしないナデ調整が行われている。10は、縦位にヘラケズリされている。

図465-11は、土師器高杯の脚部である。中空で、端部はまくれている。外面には、縦位のヘラケズリが施されている。

図465-12～17は、小型の土師器甕である。12は、やや細長の胴部から、頸部が直立して括れ、口縁部が外反する器形を呈している。壺に類似する。13・14は、通有の小甕に分類されるもので、口径が大きく、胴部下半は窄まっている。明瞭な被熱痕跡が、観察される。15は、広口の球胴甕である。口縁部は、直立している。16も、同じ球胴甕に分類されるが、頸部は窄まっており、口縁部が「ハ」の字状に開いている。17は、下膨れ気味の球胴部から、そのまま頸部にいたり、口縁部が内傾して立ち上がる。内外面はヘラミガキされている。

図466-1・3、図467-1・3は、土師器長胴甕である。図466-1・図467-3は、長胴化の著しいもので、胴部最大径は、中央にある。図466-3は、甗に類似した器形を呈している。口径が胴部径を上回っており、全体は底部に向かって窄まる。図467-1は、下膨れの胴部で、底部が突出する。広口である。

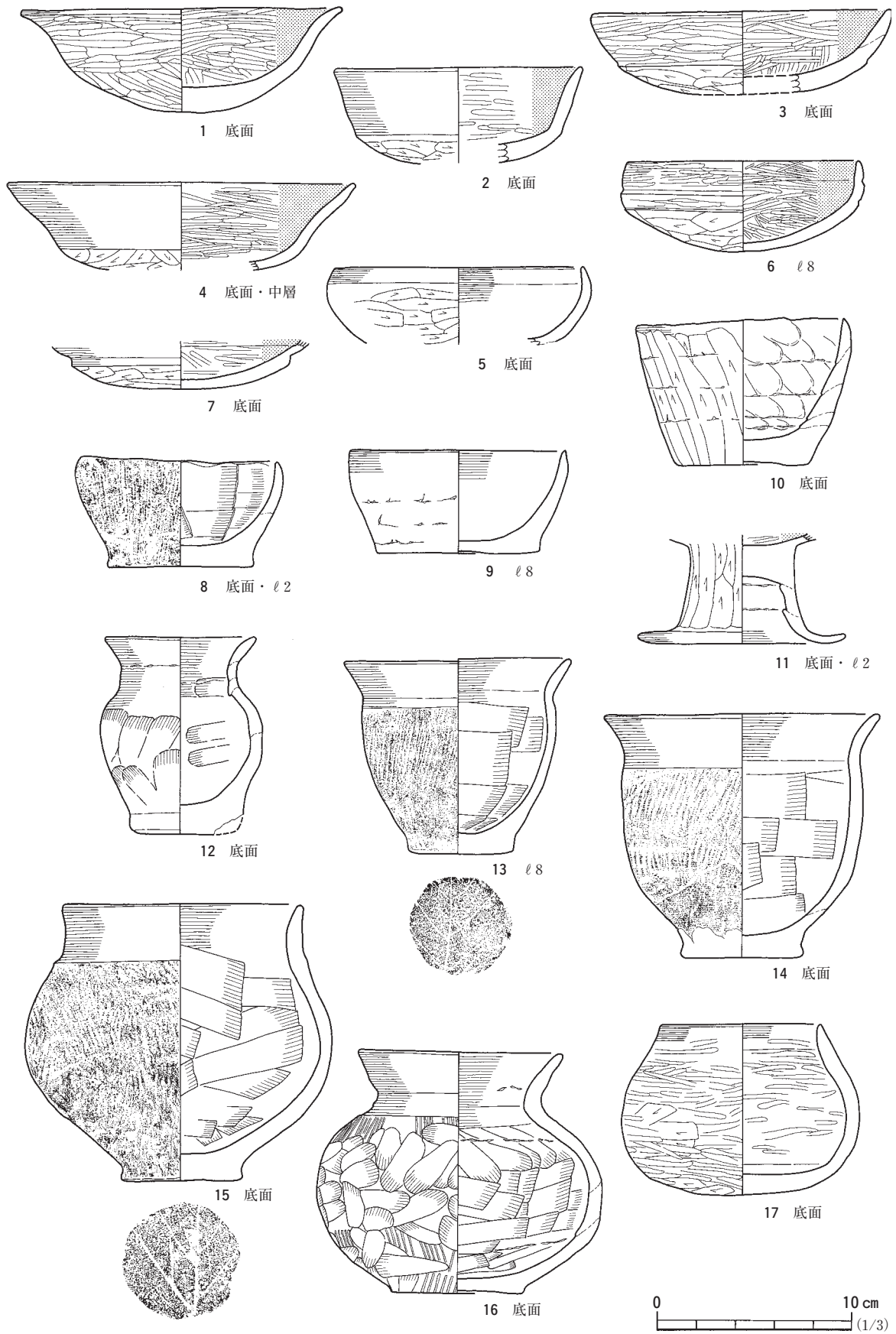


図465 1号溝跡出土遺物 (1)

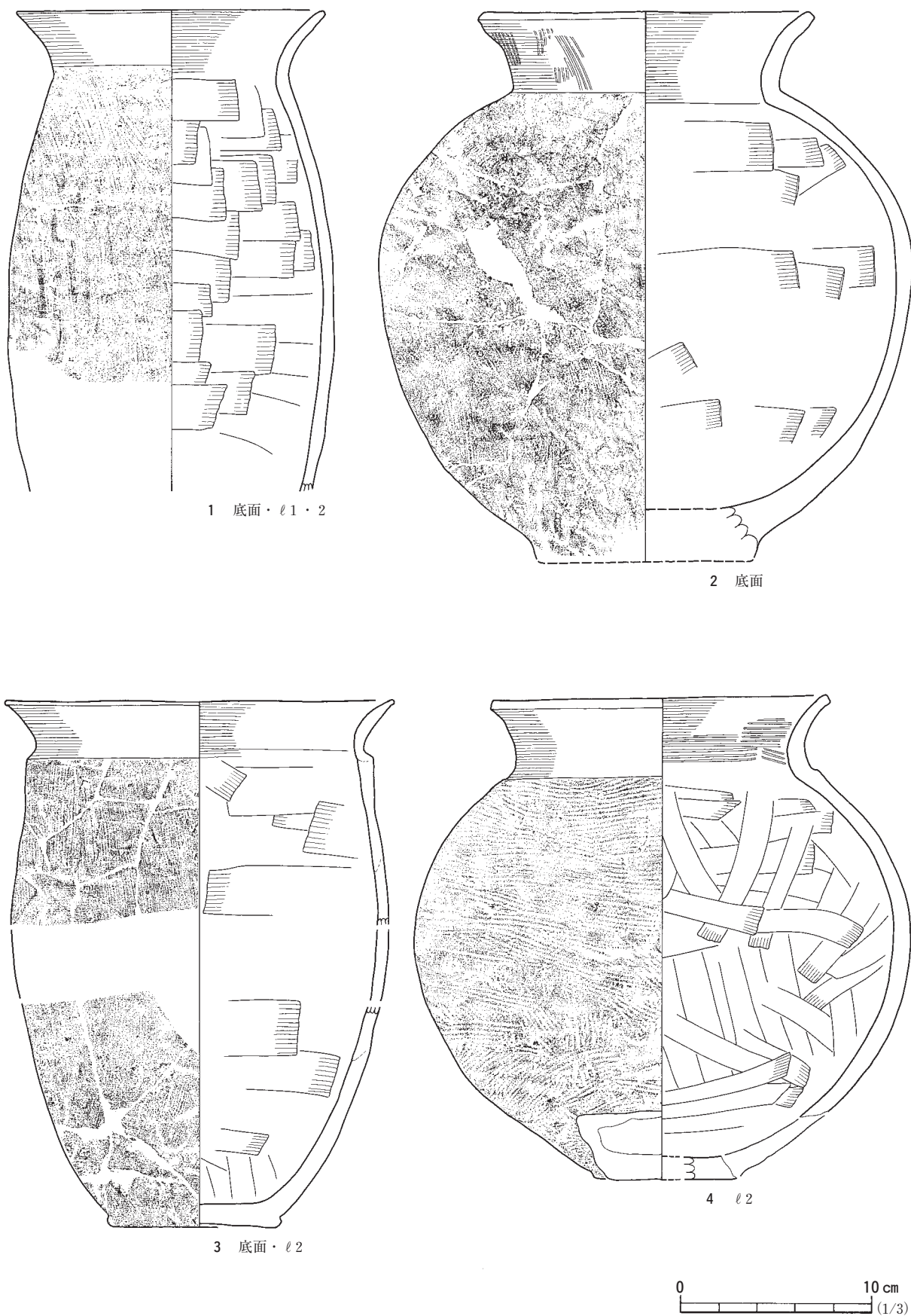


図466 1号溝跡出土遺物 (2)

図467-2は、無底式の土師器甌である。胴部から頸部への変換は、不明瞭で、全体に底部に向かい、窄まっている。外面は、縦位にヘラケズリされている。

図466-2・4、図467-4、図468-1・2は、大型の土師器球胴甕に分類される。図466-2・4、図468-1は、頸部が窄まって直立しており、口縁部が外反している。胴部は、ほぼ完全な球形を呈しており、器種分類に相応しい特徴を備えている。図467-4・図468-2は、広口で、頸部から口縁部が「く」の字状に屈曲する。前者は、胴部が下膨れ気味になっている。

② 2・中層出土の土師器 図469、図471-4・5・9に掲載した。

図469-1~10・12は、土師器杯である。1~10は、有段丸底杯に分類される。最も古い特徴を備えているのは、6で、舞台式に比定される。他は、栗圀式の範疇で捉えて問題なかろう。1は、平底風の底部をなし、口縁部は直線的に外傾する。2は、内面がナデ調整だけで仕上げられており、全体に粗雑なつくりになっている。12は、大型で、椀状の器形をなしている。外面にハケメ調整痕が観察される。

図469-11・13・14は、土師器高杯である。11は、有段丸底杯の杯部で、口縁部が内湾気味に立ち上がる。脚部は、中空であり、裾はあまり広がらない。外面は、ハケメ調整されている。13は、南小泉式の系譜を引く椀形杯を、短脚に乗せている。脚部は中実で、裾の端部はまくれない。杯部は、外面にもミガキ調整が加えられている。14は、脚部だけなので、全体の様子が判明しない。脚部は中空であり、裾の端部がまくれ気味になっている。

図469-15~18、図471-4は、小~中型の土師器甕に分類される。図469-15は、須恵器広口壺の模倣であろうか。内面がミガキ・黒色処理され、外面にもミガキ調整が施されている。薄手のつくりであり、器面調整が丁寧に行われている。図469-16・18は、口径が大きく、胴部が下に窄まる器形を呈している。明らかな煮炊具で、2次被熱の痕跡が顕著にみられる。図469-17・図471-4も、同様の煮炊具とみられるもので、やや長胴気味の器形を呈している。

図471-5は、大型の土師器甌と推定される。底部を欠いているが、無底式であろう。口縁部は、「く」の字状に屈曲している。

図471-9は、土師器手づくね土器である。指で簡単に成形されただけのもので、器面調整は、一切行われていない。

上層出土の土師器 図470、図471-1~3に掲載した。

図470-1~25は、土師器杯である。1~7、9~21、24・25は、有段丸底杯に分類されるもので、組成の大半を占める。口縁部の外反するもの、外傾するもの、内湾するものに分かれるが、栗圀式の範疇ですべてが理解される。特徴的なものを、拾いあげてみると、1は、器高が高く、口縁部外面にハケメ調整痕が観察される。6も、同様の特徴を備えているが、口縁部下端の段は痕跡的で、器高の低い位置にある。10は、口縁部外面に、螺旋状に加えられた粗いヘラミガキ痕跡が観察される。21は、器形全体が丸みを帯び、半球形を呈している。内外面が、ヘラミガキ・黒色処理されており、東北北部型杯（利部修：1994）に類似する。25は、平底風の底部をなしている。

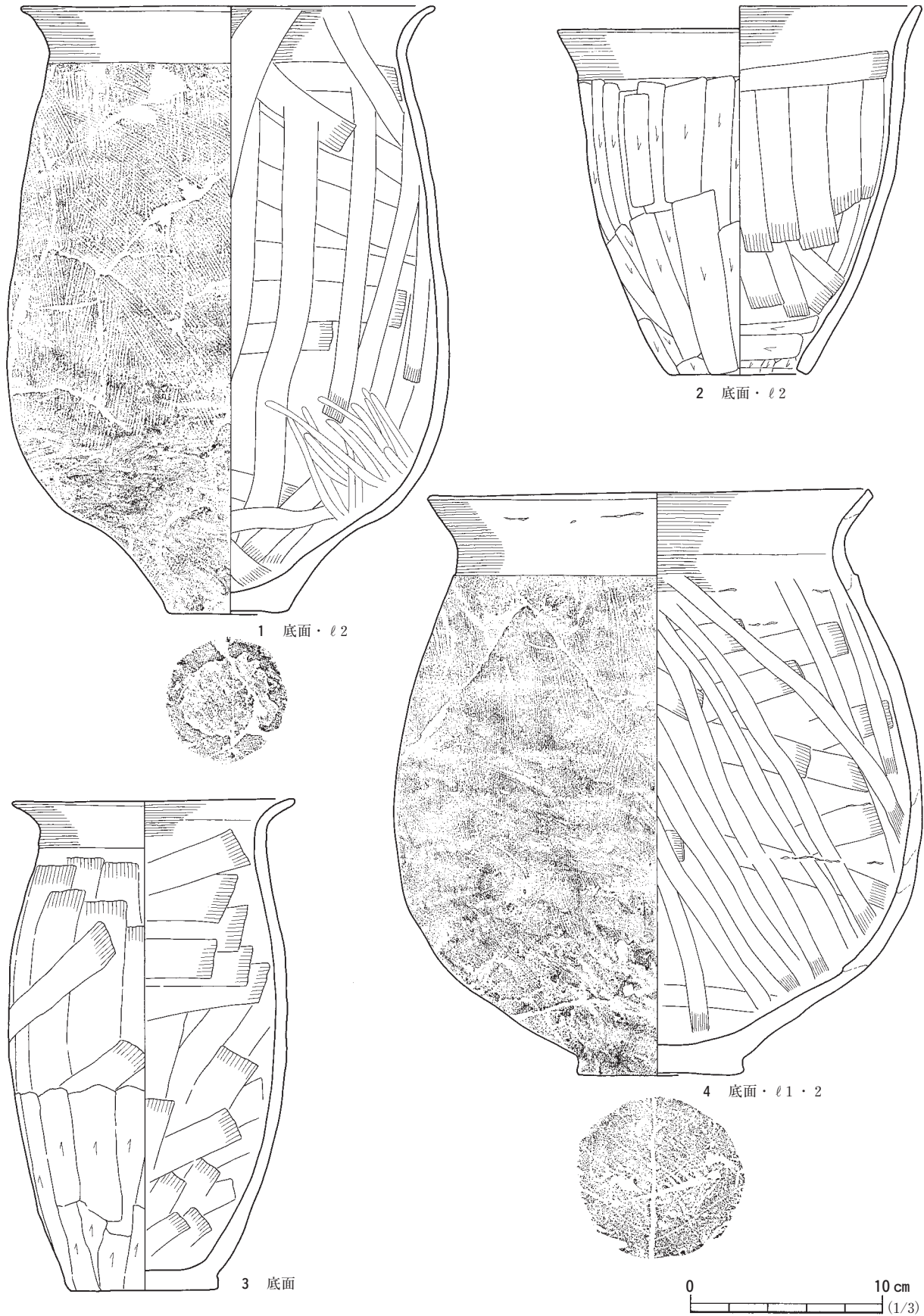


図467 1号溝跡出土遺物 (3)

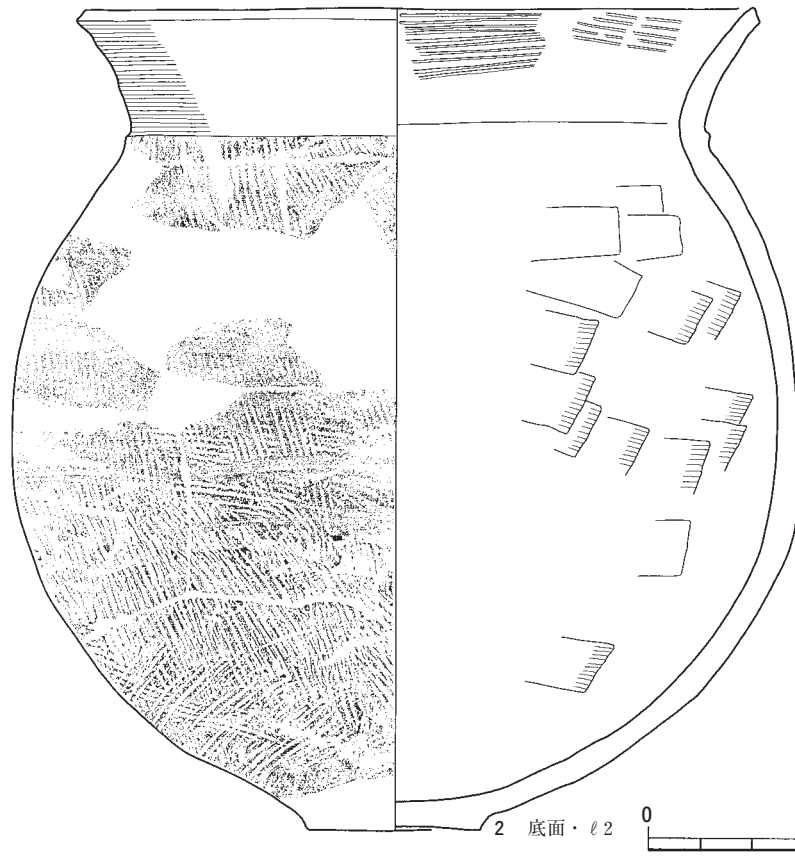
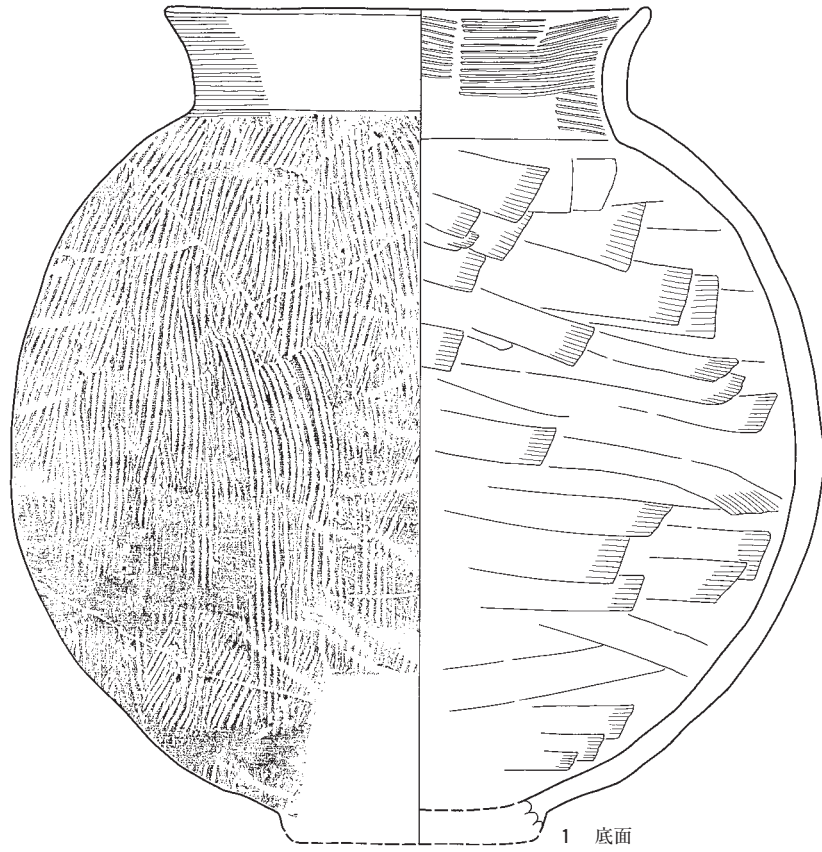


図468 1号溝跡出土遺物 (4)

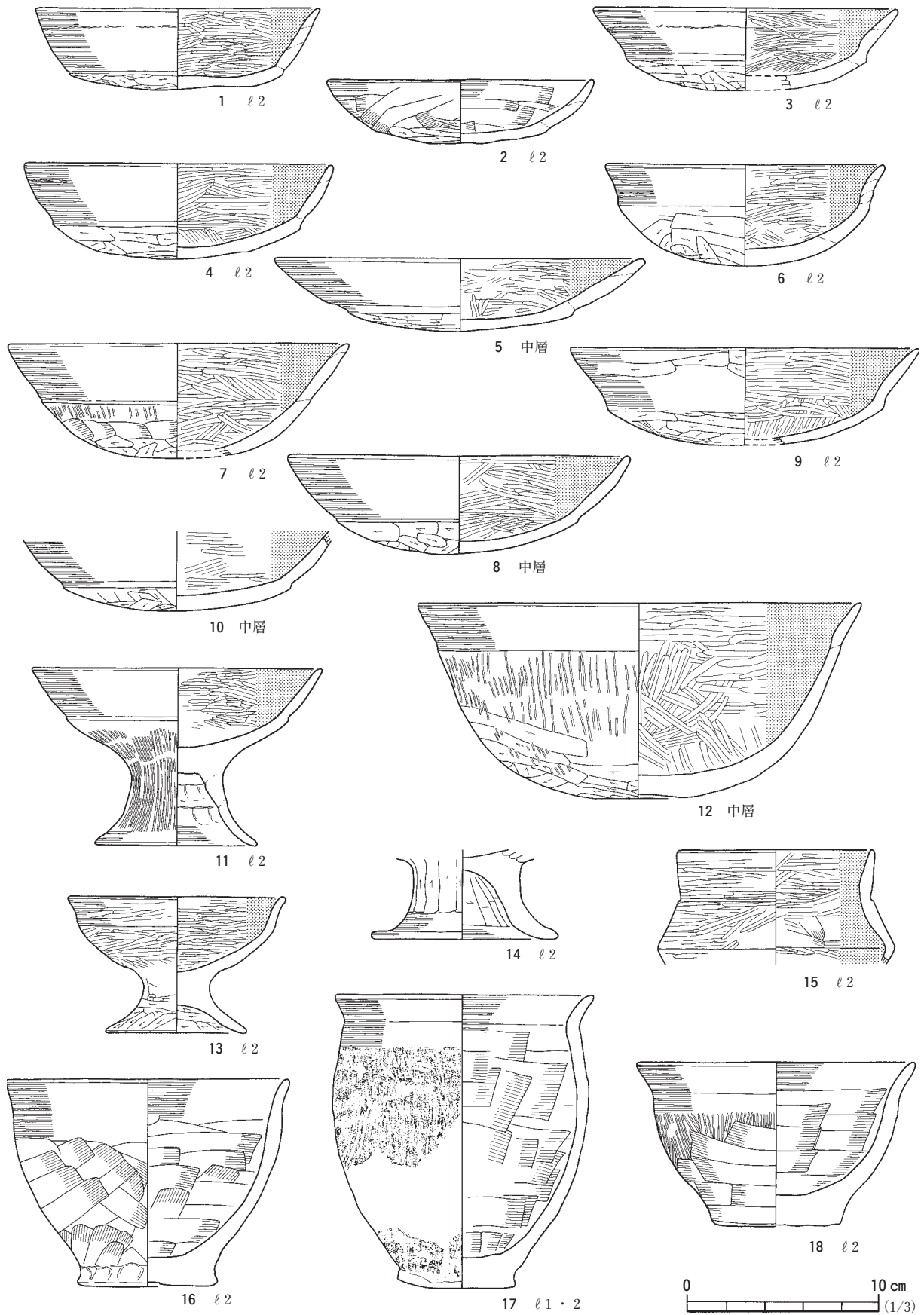


図469 1号溝跡出土遺物 (5)

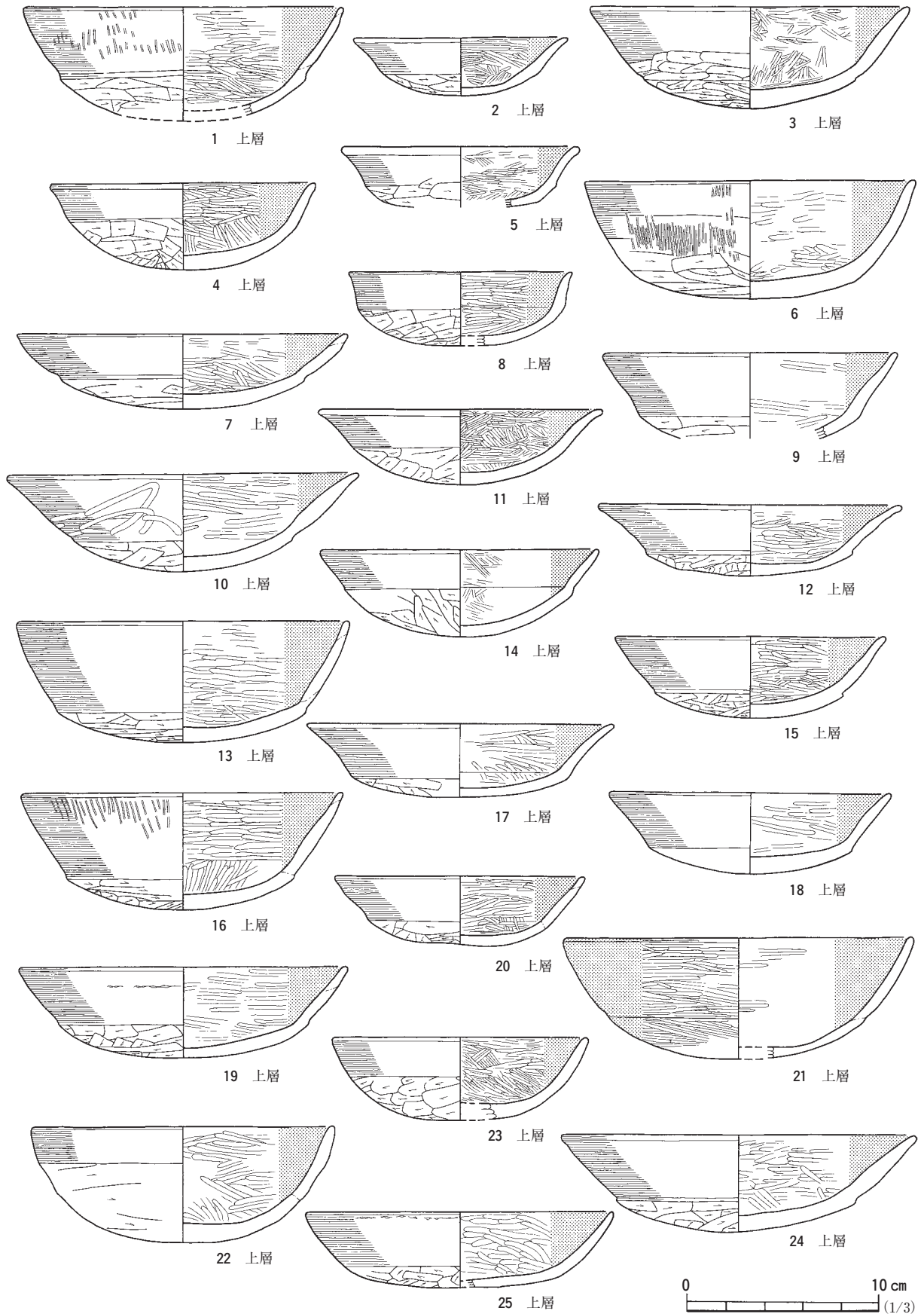


図470 1号溝跡出土遺物 (6)

以上の他に、須恵器模倣杯と無段丸底杯がみられる。8は、須恵器杯蓋の模倣であろう。口縁部下端と体部上端の境は、甘く、明瞭な稜をなさない。22は、椀状の無段丸底で、半球形の器形をなす。23は、器高が低めの無段丸底杯に分類される。

図471-1～3は、土師器高杯である。1は、有段丸底杯を杯部にしたもので、脚部には、3方向からの透かしをもつ。2は、椀状の器高の高い杯部を乗せたものであり、脚部に、やはり3方向からの透かしが入っている。3は、脚部片である。透かしのある短脚で、端部は、まくれ気味になっている。

検出面出土の土師器 図471-6～8, 10に掲載した。

6は、土師器小甕である。頸部が括れず、口縁部は、そのまま直立気味に内傾して立ち上がる。胴部は、中央に少しだけ膨らみを持つ。外面は、ハケメ調整されている。

7・8・10は、土師器粗製杯に分類される。7は、やや大型で、底部外面に木葉痕が観察される。8・10は、外面にハケメ調整痕のみられるもので、小型である。8は、内面にヘラミガキが施されている。

検出面・Ⅰ出土の須恵器 図472-1～5に掲載した。

1は、須恵器蓋の破片である。内面にかえりのあるもので、飛鳥・藤原宮分類の杯G蓋に該当する。天井部は水平で、外面は手持ちヘラケズリ調整されている。年代的には、飛鳥Ⅱないし飛鳥Ⅲに併行しよう。

2～4は、須恵器杯身と杯蓋である。飛鳥・藤原宮分類の杯Hに該当する。このうち、2・3は、杯蓋になるもので、口縁部の「ハ」の字状に開いた、特徴的な細部要素が認められる。口縁部と天井部との境は明瞭で、稜線を形成している。天井部外面は、手持ちヘラケズリ調整が施されている。法量は、口径11cm前後に復元でき、飛鳥Ⅱに比定される。なお、口縁部が「ハ」の字状に開く特徴は、酒井清治の指摘する関東型須恵器（酒井清治：1998他）と合致する。

4は、杯身である。受け部は、口縁部の立ち上がりが短く、内傾している。口径は、9.6cmと推定される。底部は、手持ちヘラケズリ調整されている。飛鳥Ⅱに比定されよう。

5は、須恵器提瓶で、肩にリング状の取手の付くものである。頸部は太く、瓶類というよりは、むしろ甕に近い特徴が認められる。口縁端部も面取りされ、しっかりしている。このような例は、陶邑の製品にはみられないものであり、湖西窯の影響が強く感じられる。

上層・中層・底面出土の鉄製品 図472-6～8に掲載した。

6は、鉄鏃と推定される。肝心の先端を欠いており、どのような形態になるのか、分からない。

7は、鉄刀の刀身である。中層から、水平な状態で出土している。遺存状態はきわめて良好である。切先は、かなり使い込まれたためか、摩耗したような状態で短くなっている。計測値は、刀身長21.0cm以上、茎長9.8cm、元幅3.0cm、茎元幅1.7cm、茎先幅1.4cmを測る。

8は、中央が穿孔された円板状鉄製品である。用途不明。

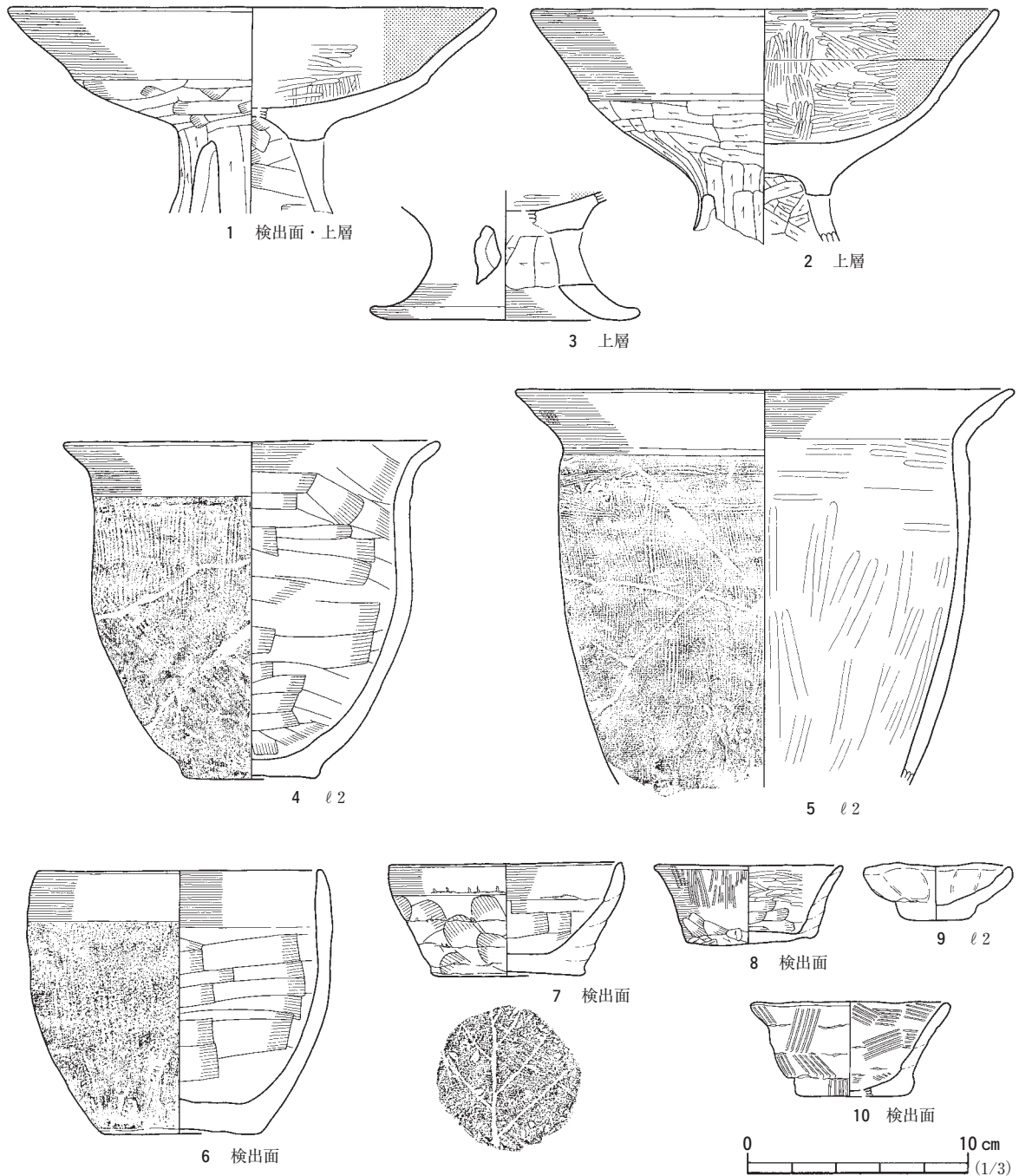


図471 1号溝跡出土遺物（7）

底面中央の窪み（*l* 8）・検出面出土の玉類 図472-9～12に掲載した。

9～11は、底面中央の窪みで出土している。近い位置でまとまっており、意識的に置かれたと推定される。3点とも、石製の平玉で、法量が近似している。12は、検出面出土の土製丸玉である。表面は、黒色処理されている。

〔6号特殊遺構出土の遺物〕 図473・474に掲載した。

図473-1は、小型の土師器杯になる。有段丸底杯に分類されるもので、口縁部は細長く内湾している。内面はヘラミガキされているが、黒色処理は施されていない。

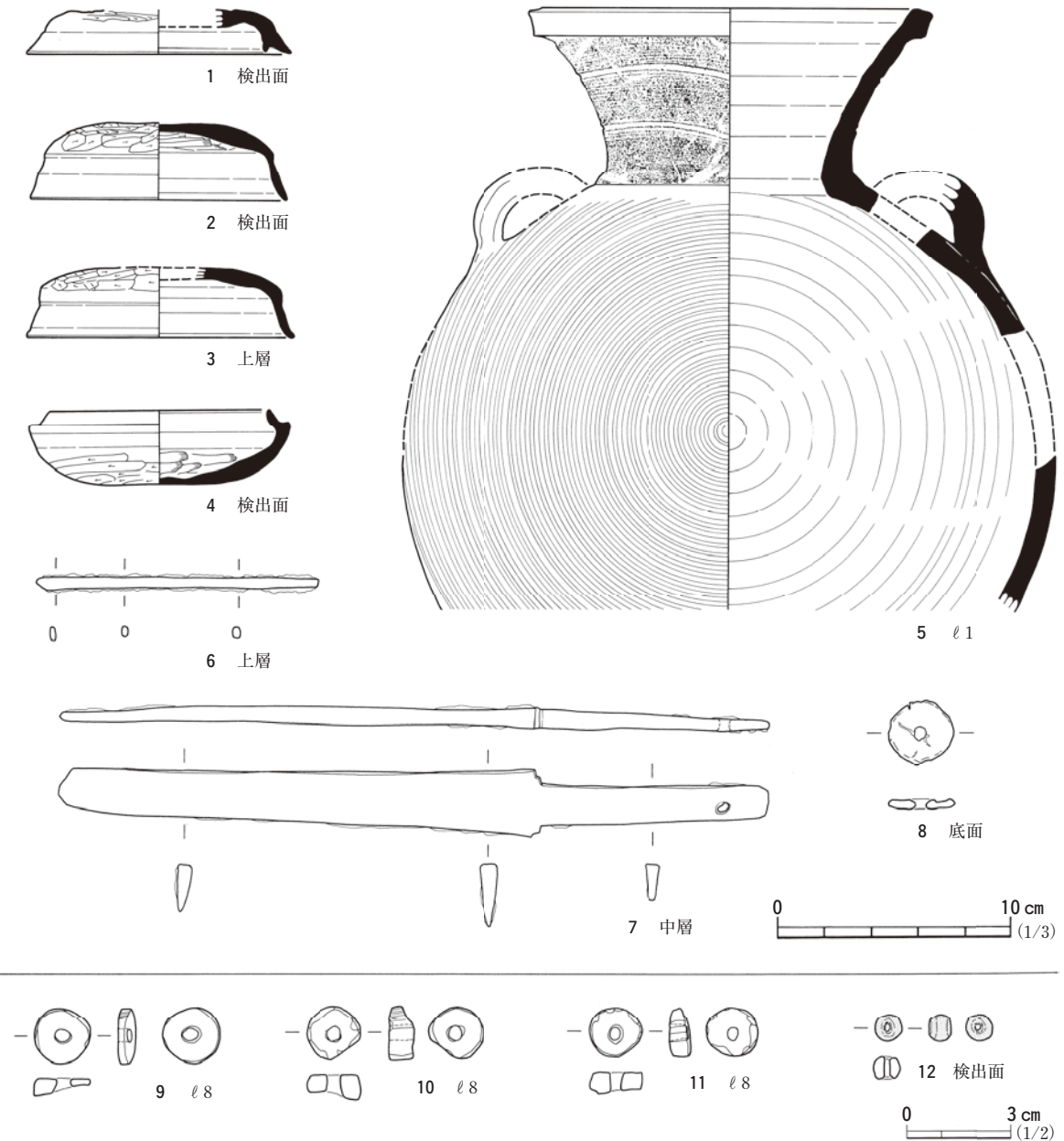


図472 1号溝跡出土遺物（8）

図473-2・3，図474-1は，大型の土師器球胴甕になる。胴部外面の調整は，ハケメに統一されている。このうち，図473-2は胴部中央に張りがあり，やや横長の器形を呈している。口頸部は広口气味で，直線的に外傾している。また，底部外面には，木葉痕が観察される。図473-3は，きれいな球形の胴部を有しており，口頸部はやはり広口气味となっている。口縁部が欠損しており，意図的に壊されたと推定している。図474-1は，口頸部と底部が，明らかに打ち壊されている。しかも，胴部中央で輪切りにされ，別々の地点から出土した。胴部の器形は，図473-2よりさらに中央の張りが強く，算盤玉状を呈している。

図473-4は，銅釧になる。表面に刻みは施されておらず，簡素な作りである。類例は，筑内古墳群で報告されている。

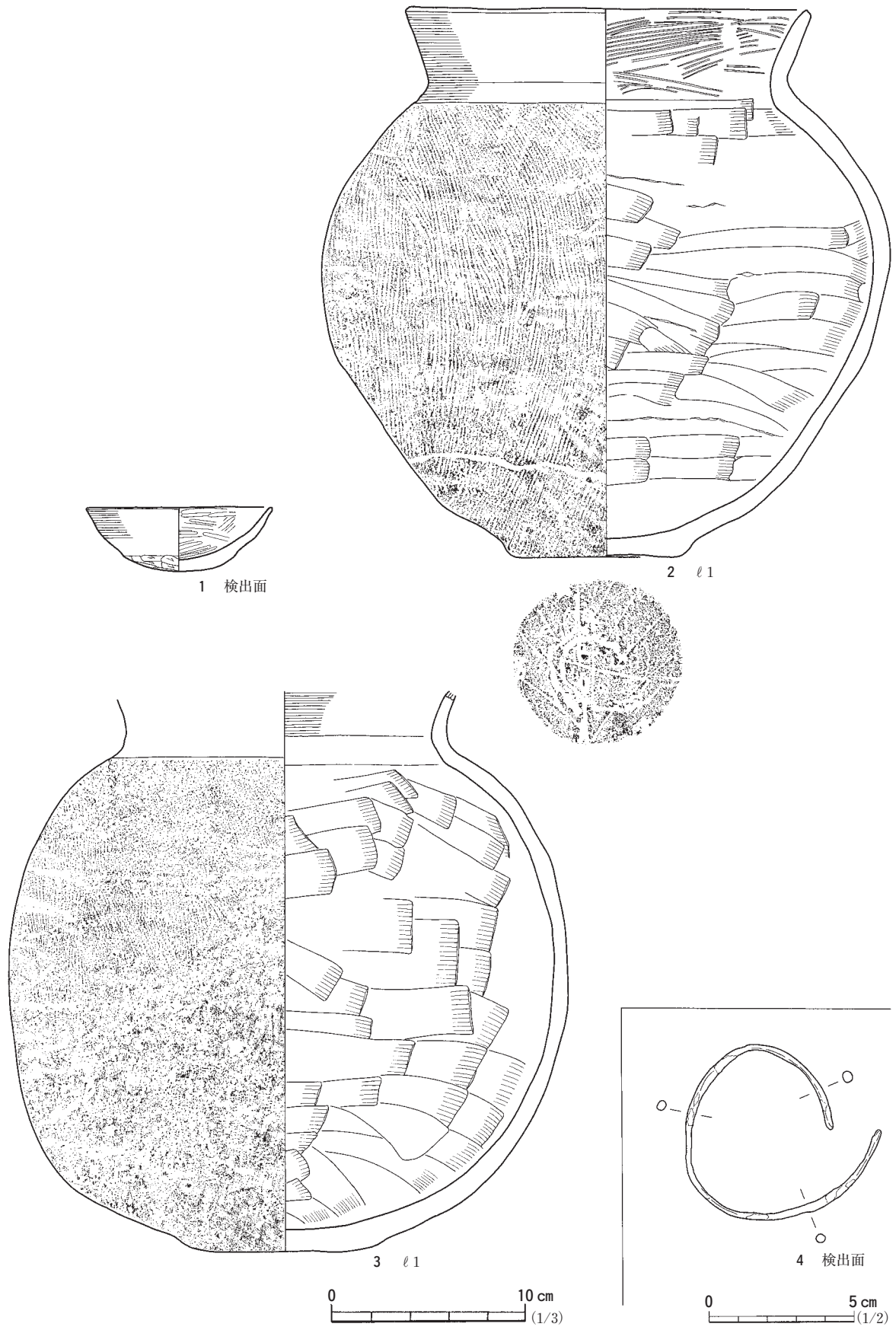


図473 6号特殊遺構出土遺物(1)

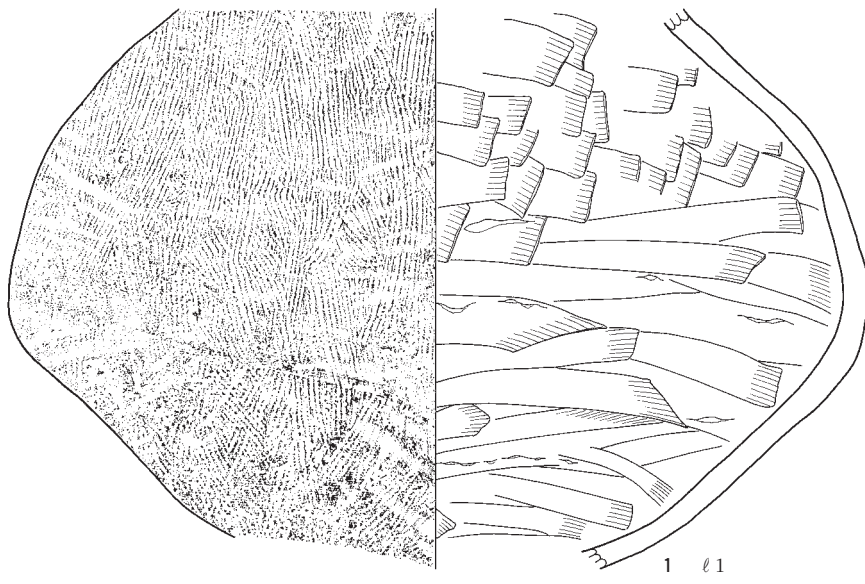
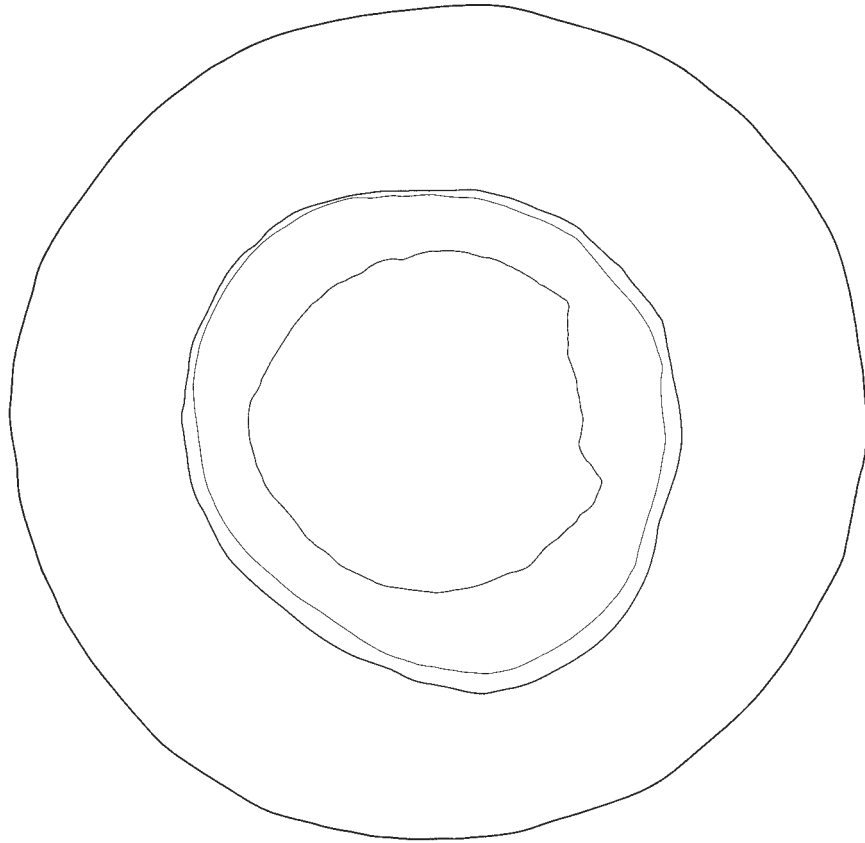


図474 6号特殊遺構出土遺物(2)

ま と め

本遺構は、栗圀式期の集落内部を区画した大溝跡の1つである。自然堤防を横断して、東西に走っている。対になる2号溝跡とは、内幅で110m～115mの距離を測る。

なお、隣接する5号溝跡とは共存せず、前後関係を有していたと考えられる。ただ、直接の切り合いが無く、この点を確かめることは出来なかった。

本溝跡では、後背湿地側で祭祀が行われている。同じ状況は、2号溝跡とその周囲でも確認されており、水辺の祭祀という性格付けが与えられる。(菅原)

2号溝跡 S D02

遺 構 (図475～477, 写真462～473)

【概要】

本遺構は、栗圀式期の集落内部を区画した大溝跡の1つである。ここでは、その溝跡に伴った祭祀遺構(A群～I群)と併せて、事実報告を行う。

2号溝跡は、調査区北部のN20・O20・O21グリッドにまたがって検出された。この場所は、高木遺跡の中で最も自然堤防が安定し、標高の高いところである。溝跡は、それを貫く状態で東西に走っており、明らかに自然地形を開削して造られた施設であることを示している。この点は、1・5号溝跡の浅い沢地形を利用した占地の在り方と、明確に違っている。ただ、流路は蛇行しており、豪族居館のような方形区画も形成していない。

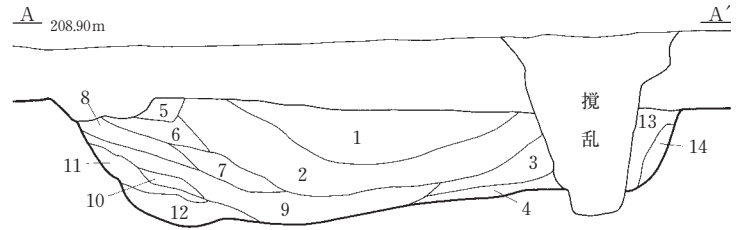
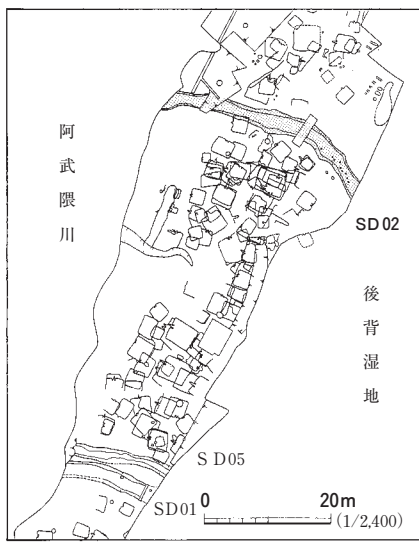
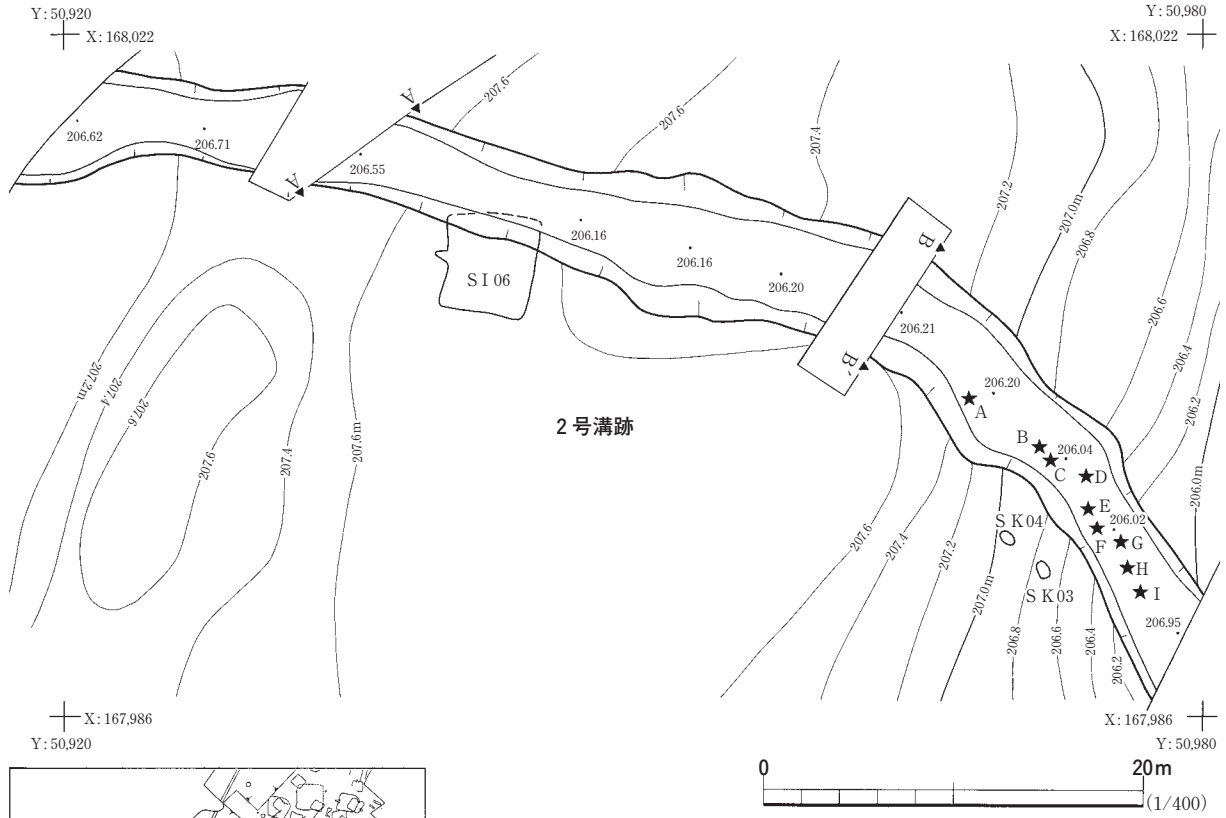
検出されたのは、69mの長さである。西側は阿武隈川の氾濫源に接しており、北側に蛇行して、東端は後背湿地に入り込んでいる。計測値は、上幅5.3～6.5m、検出面からの深さは、中央付近で1.6mを測る。後背湿地に入った東端側は、壁が次第に低くなっており、調査区外で自然消滅すると推定される。

本溝跡は、自然埋没したと考えている。断面は、典型的なレンズ状堆積の様相を呈しており、人為的に埋められたと見なす積極的な根拠は得られなかった。層位は、大きく捉えて上下2つに大別される。上層は色調が明るく、下層は色調が暗い傾向が指摘される。遺物の取り上げ層位は、大半がこの基準で行なった。炭化物・焼土の含有は、全体を通してみられ、遺物も、検出面から最下層まで連続して出土した。内容は、ほとんど栗圀式期のもので占められている。

ところで、本溝跡の底面は、現在の阿武隈川の標準水面と比べると、6m以上も高い数値を示している。調査時において、この溝跡の性格を阿武隈川からの導水施設＝運河と見なす理解が、一部で示された。しかし、当時の水面が現在より仮に高かったとしても、このレベル差は、あまりにも大き過ぎると思われる。そして、何より本溝跡の底面や堆積土には、恒常的な耐水状況を示す痕跡が一切認められなかった。また、縄文時代の遺構面がわずか1.0～1.5m下で検出されており、阿武隈川と自然堤防の関係が、当時から安定していたことを示している。

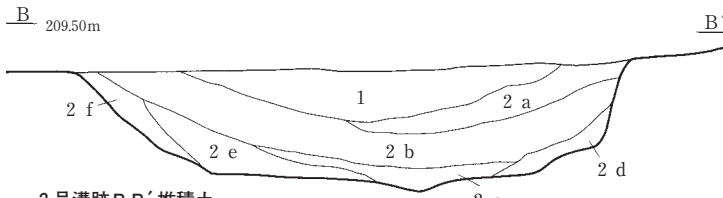
したがって、本溝跡を運河と見なす見解は否定的にならざるを得ないと考える。ここでは、その

第1編 高木遺跡



2号溝跡 A A' 堆積土

- 1 10Y R 4/3 にぶい黄褐色砂質土 (炭化物粒・土器片を微量含む)
- 2 10Y R 3/4 暗褐色砂質土 (炭化物・土器片・褐色粘質土を微量含む)
- 3 10Y R 3/2 黒褐色砂質土 (炭化物微量含む)
- 4 10Y R 4/2 灰黄褐色砂質土
- 5 10Y R 3/3 暗褐色砂質土
- 6 10Y R 3/4 暗褐色砂質土
- 7 10Y R 4/3 にぶい黄褐色砂質土
- 8 10Y R 3/3 暗褐色砂質土
- 9 10Y R 3/3 暗褐色砂質土 (炭化物・焼土・黒褐色土を少量含む)
- 10 10Y R 2/2 黒褐色砂質土
- 11 10Y R 4/2 灰黄褐色砂質土
- 12 10Y R 2/3 黒褐色砂質土
- 13 10Y R 4/2 灰黄褐色砂質土
- 14 10Y R 4/2 灰黄褐色砂質土 (鉄分の塊少量含む)



2号溝跡 B B' 堆積土

- 1 10Y R 6/4 にぶい黄褐色砂質土
- 2 a 10Y R 4/3 にぶい黄褐色砂質土 (炭化物少量含む)
- 2 b 10Y R 4/4 褐色砂質土 (しまりあり)
- 2 c 10Y R 6/2 灰黄褐色砂質土 (やわらかい)
- 2 d 10Y R 5/3 にぶい黄褐色土
- 2 e 10Y R 6/3 にぶい黄褐色砂質土
- 2 f 10Y R 5/3 にぶい黄褐色土

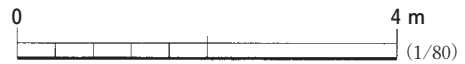


図475 2号溝跡

基本的性格を、冒頭で述べたように、集落内部の区画に求めておきたい。

また、本溝跡は、埋没した後でも、集落民に意識され続けていたと考えられる。埋没終了後の本溝跡は、6号住居跡が北周壁でわずかに接しているに過ぎず、ほとんど遺構の空白地帯になっている。つまり、後続期にも、かたちを変えて区画は生き続けていたと推定される。

住居跡の密集する本遺跡の中で、このような大規模な遺構が重複遺構をほとんど交えずに検出されたのは、このためであろう。

〔祭祀遺構〕

祭祀遺構は、A群～I群の9遺構が検出されている。1m未満の狭い範囲に、土器と礫が集中し、火の焚かれた痕跡があった。分布は、後背湿地に没する東側に偏っており、1号溝跡の状況に類似していた。このことは、それらが、水辺の祭祀であったことを示唆していると思われる。

祭祀遺物には、横穴墓や古墳に副葬されるような特殊器物が含まれている。須恵器甕（図496-7）と提瓶（図498-1）がそれであり、どちらも優品である。

9つの祭祀遺構のうち、B群～I群は、大きな時間差が無く、連続的に形成されたと考えている。底面から20cm～30cm浮いたレベルに、等間隔で分布している。それに対して、A群は、他との位置が離れており、底面から1m近く浮いた面に形成されている。したがって、他よりは、後に行われた祭祀痕跡であろう。この状況は、1号溝跡の13号集石遺構・6号特殊遺構に対比される。ただ、遺物の上では、栗圀式期の範疇でおさまる範囲である。

以下では、遺存状態の良かったA群・E群・F群について、解説する（図476）。

A群は、規則的な配置で敷かれた礫の上に、土師器小甕が伏せられた状態で出土した。原位置で確認された土器は、これ1点だけであるが、E群の所見を参考にすると、周囲に複数の祭祀遺物を伴っていたと推定される。

この遺構は、下部構造を伴っており、礫の下から浅い窪みが検出され、内部に焼土を含んだ褐灰色砂質土が充填されていた。礫は、三つ葉のクローバー状にきちんと置かれており、甕はその中心に伏せられている（写真469-b・c）。窪みは、70cm以上×57cm以上の大きさで、不整形をなし、検出面から10cmの深さを測った。

当該遺構では、火の焚かれた痕跡が確認されている。礫は赤黒く変色しており、その上に置かれた甕も、底部外面が剥離して、明らかな被熱痕跡をとどめていた。なお、礫の敷かれた面は焼土化していなかったが、これは、下部構造の埋土が、焼土化しにくいサクサクした土層であったためと考えている。

E群も、A群同様の配置で礫が敷かれており、その上と周囲に土器類を伴っている。図面だと分かりにくいですが、三つ葉のクローバー状に礫の敷かれた状況が、写真からはっきり読み取れる（写真471・472）。ただ、本遺構では、下部に掘り込みを伴わず、2号溝跡の堆積土上面で、直接祭祀が行われている。この点で、細部の違いがみられる。

ちなみに、断面観察で、この面は隣接するF群の祭祀面と連続することを確認しており、両者は、

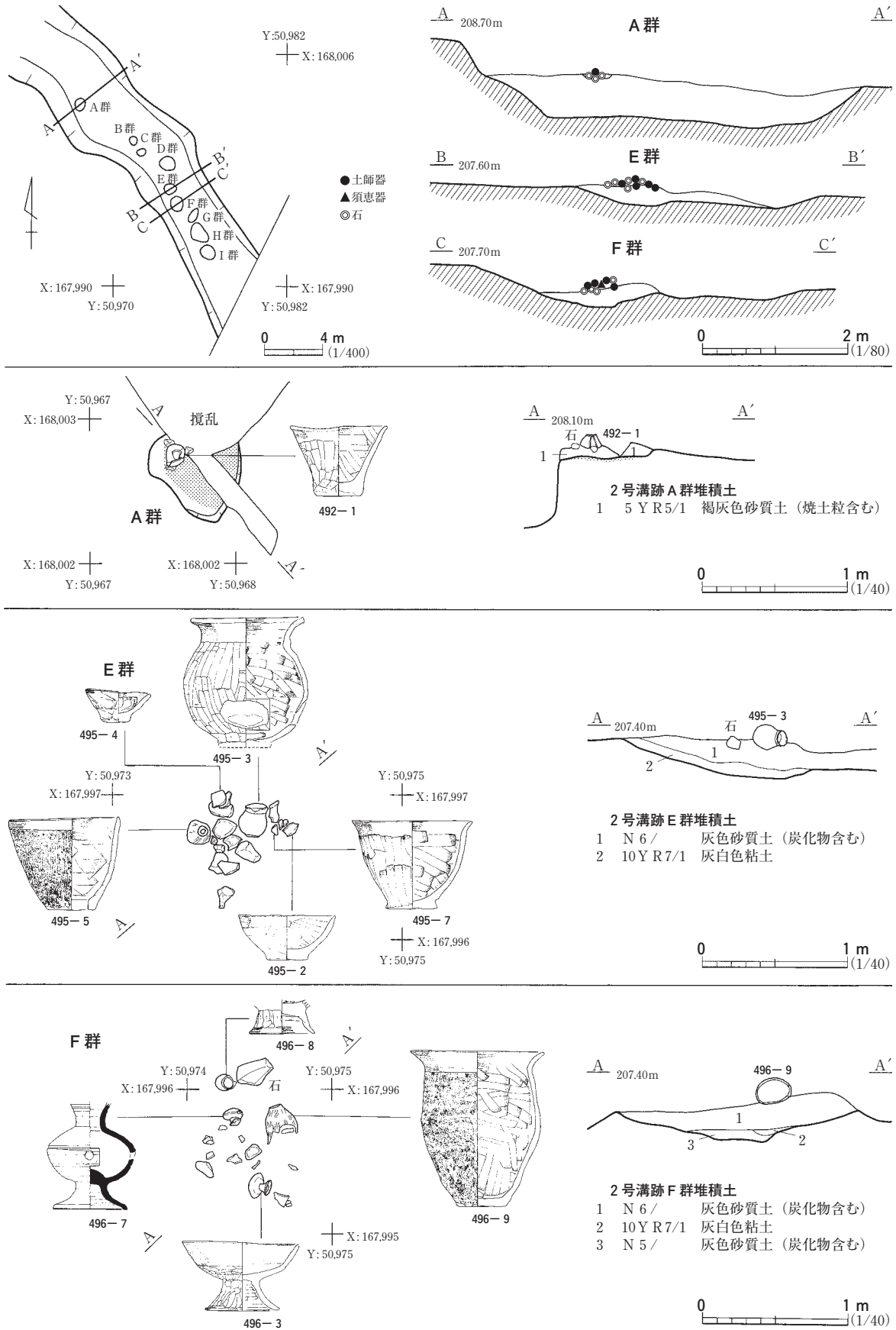


図476 2号溝跡A・E・F群遺物出土状況

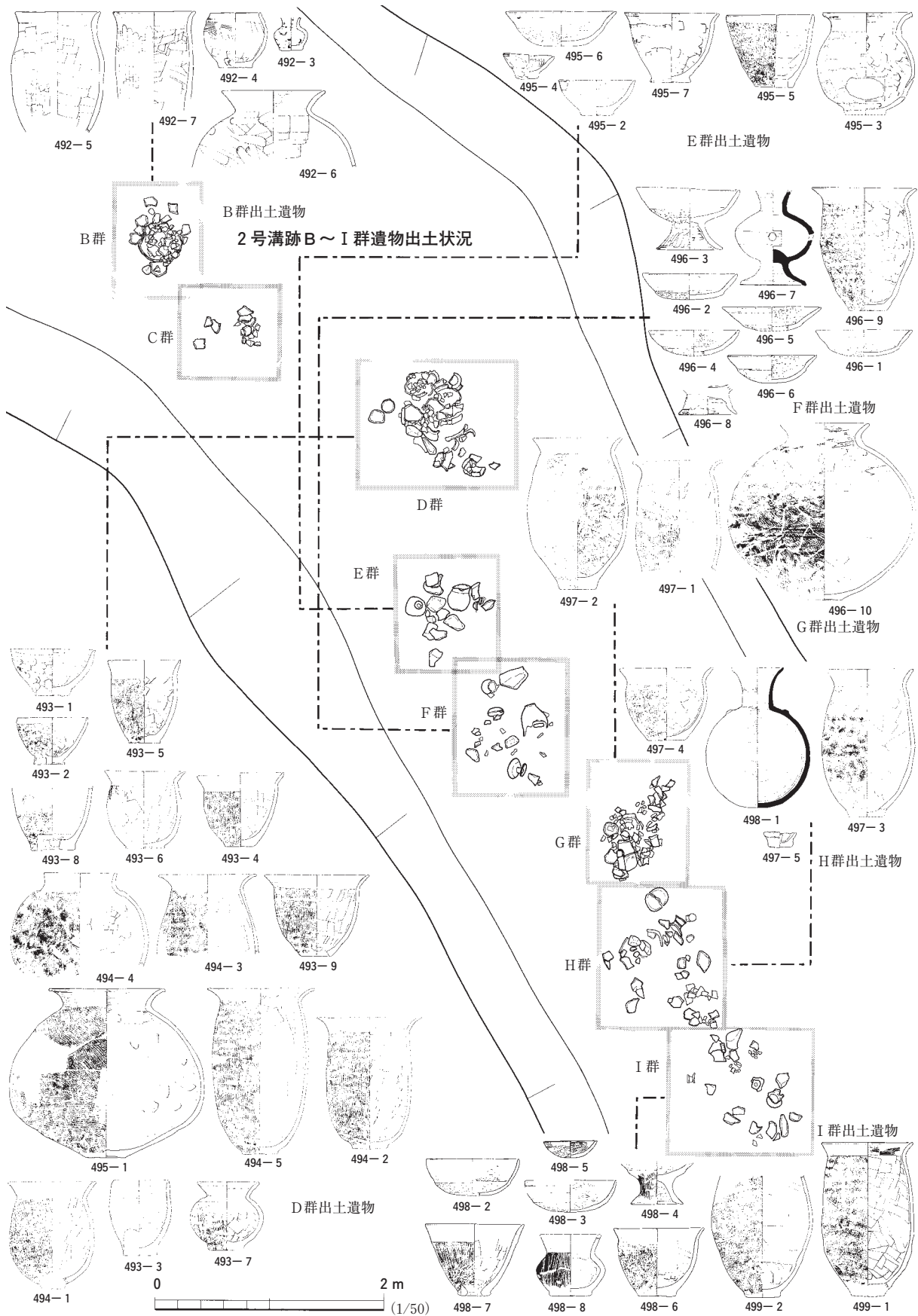


図477 2号溝跡B~I群遺物出土状況

同時かごく近接した時間幅の中で形成されたことが判明している。

本遺構で、磔の中心に置かれていたのは、横転して出土した図495-3の土師器球胴甕と推定される。胴部に、剥離したような穴が開いており、祭祀に起因する痕跡と考えている。そして、その周囲を囲むように置かれていたのが、図495-2・4～7の土器群と考えられる。このうち、土師器甕5と、土師器粗製杯2・4が、伏せられた状態で、原位置を保っていた。

F群は、磔・土器がやや動いてしまっている。磔の中心に置かれていたのは、図496-3の土師器高杯であろうか。外面は、部分的に剥落しており、色調が白っぽく変色している。また、図496-8の土師器高杯は、杯部が壊されて、脚部だけきれいに割り揃えられている。置き台に使用されたと考えられる。この祭祀遺構では、須恵器甕が伴っている（図496-7）。

遺物（図478～499、写真650～672）

2号溝跡からは、多量の遺物が出土した。また、祭祀に伴うA群～I群でも、良好な共伴遺物が得られている。

以下では、2号溝跡、祭祀遺構の順に、解説していく。

[2号溝跡の遺物]

土師器片6,702点、須恵器片46点、土製品10点、鉄製品6点、石製品3点が出土した。取り上げ層位の基本は、上層がℓ1、下層がℓ2となっている。最下部は、ℓ3もしくは底面近く、と表示している。

底面近く・ℓ3出土の土師器 図478-1～3に掲載した。

1は、有段丸底の土師器杯である。口径が小さく、器形全体が半球形状をなす。

2は、土師器小甕である。頸部が括れ、胴部の膨らむ器形を呈している。外面は、ハケメ調整されている。

3は、大型の土師器甕で、胴部は下膨れ気味の卵形を呈している。外面はハケメ調整されており、底部が突出している。

ℓ2出土の土師器 図478-4～16、図479～488、図490-1～11に掲載した。

図478-4～16、図479、図480-1・2は、土師器杯である。このうち、図478-6～16、図479-1～6・8～11・16・17、図480-2は、有段丸底杯に分類される。特徴的なものを拾い上げていくと、図478-6・7は、底部が平底風で、皿状の浅い器形を呈している。図479-3も、平底風という点では同じであるが、器高が高く、逆台形の箱形を呈している。図479-6は、内面がナデ調整だけで仕上げられており、明るい色調である。図479-11は、口縁部外面にヘラケズリが施されている。図478-4・5、図479-7・12～14、図480-1は、無段丸底杯に分類される。図478-4は、口縁部が直立しており、体部との境が、明瞭になっている。内面は、ナデ調整だけで仕上げられ、外面の調整も、粗雑である。図478-5、図479-7は、器高が低く、図479-12～14はやや高めである。図479-15・19は、須恵器模倣杯に分類される。15は杯蓋、19は杯身の模倣であろう。どちらも、器高の高い椀状の器形をなす。図479-18は、金属器を写したものである。半球形の器形を呈しており、

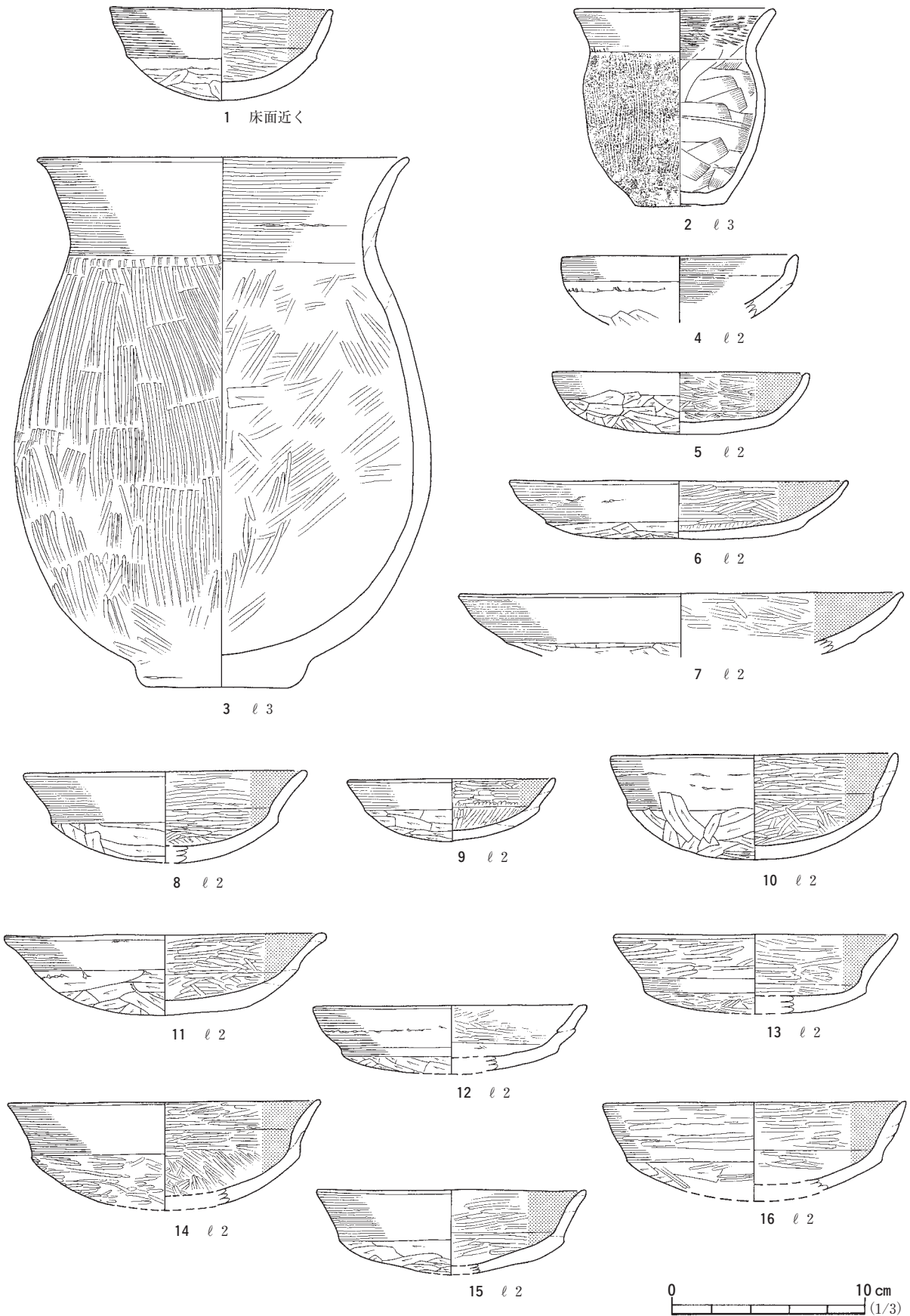


図478 2号溝跡出土遺物 (1)

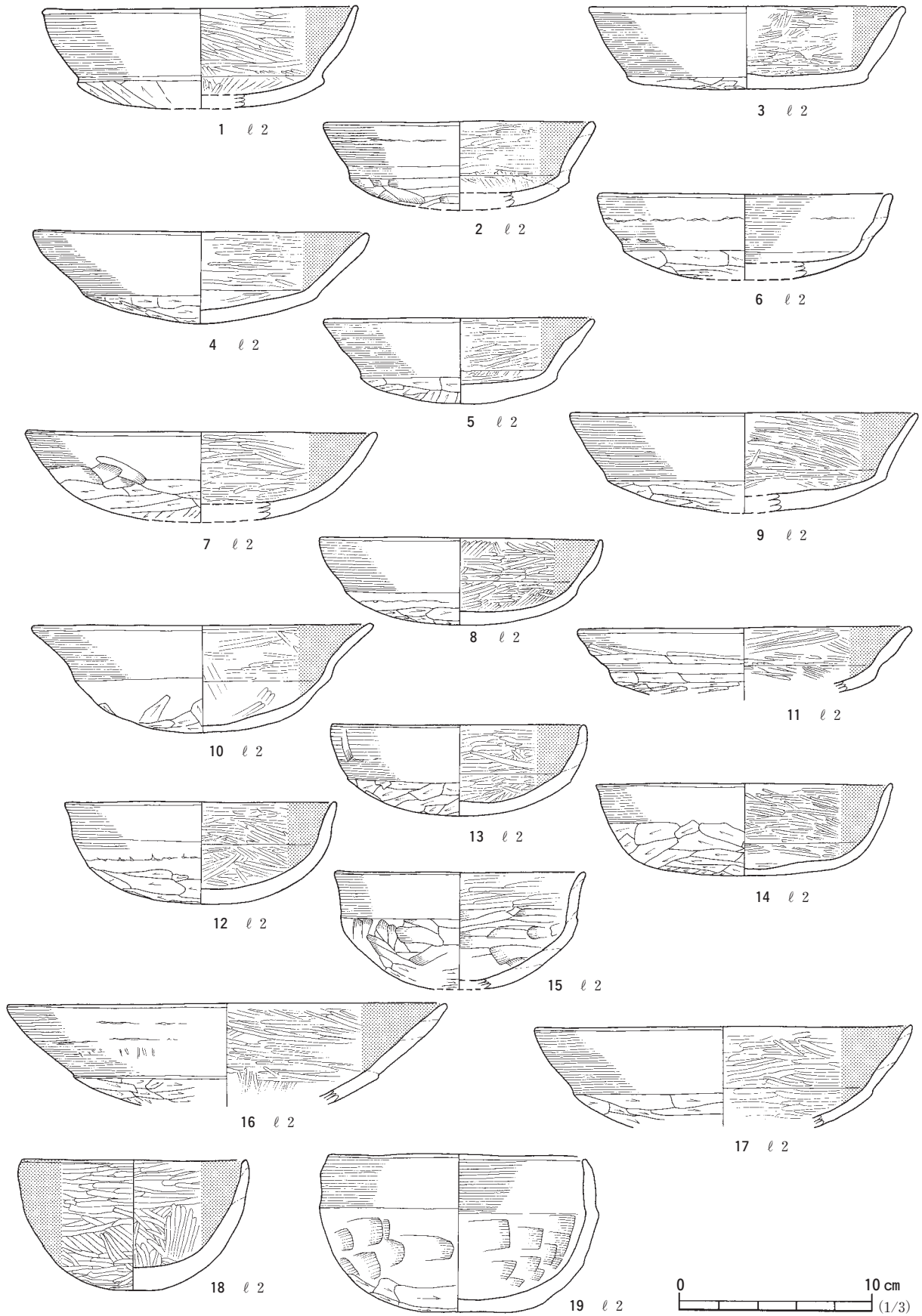


図479 2号溝跡出土遺物 (2)

内外面がヘラミガキ・黒色処理されている。

図480-3～13は、土師器高杯である。杯部の残存した資料は、どれも有段丸底杯である。ただ、13は、南小泉式の混入資料なので、別扱いする必要がある。口縁部は、3・5～7が、内湾気味なのに対し、4は外反している。また、脚部をみると、4・5・11は中実で、裾の端部がまくれないのに対し、3・6～10・12は中空で、裾の端部がまくれる傾向がある。南小泉式の13は、中空の細長い脚部であり、裾が「ハ」の字状に大きく開いている。

図480-15, 図481, 図482-2・4～6は、小～中型の土師器甕である。器形で分類すると、頸部が窄まって、胴部の膨らむもの（図480-15, 図481-4・7・9・10・11）、口径が大きく、全体が底部に向かって窄まるもの（図481-1・3・6）、頸部が括れず、口縁部がそのまま胴部から内傾して立ち上がるもの（図481-2, 図482-2）、球胴のもの（図481-5・8, 図482-4～6）となる。法量は、器高10cm前後と15cm前後で2つにまとまるが、中間的なものもあり、厳密に分かれない。

図482-1・3は、小型の土師器甕である。頸部がほとんど括れず、全体が底部に向かって、窄まる器形を呈している。1は、単孔式のもので、底部外面に木葉痕が観察される。3は、多孔式で、10個の孔が穿たれている。外面の口縁部下端は、段をなす。

図485-1・2・4, 図486-3は、大型の土師器甕である。無底式で共通すると思われるが、図486-3は、底部を欠いているので、確かめることができない。胴部の膨らみが小さく、口径が、胴部径を上回っている。

図482-8, 図483-1～4・6, 図484, 図485-3・5, 図486-1・2・4, 図487, 図488-3は、中～大型の土師器長胴甕である。口径が胴部径を上回るもの、逆に、胴部径が口径を上回るものがあり、さらに、口縁部屈曲の度合いや、胴部長の違いで、細分される。ここでは、特徴的なものについて、触れておく。図483-1は、胴部の肩が張り気味で、口縁部の強く屈曲した器形を呈している。図483-3は、胴部が下膨れ気味で、底部が突出する。図484-1も同じ底部の特徴を有しているが、胴部最大径は中央にある。図484-3・図485-3は、口径が胴部径を大きく上回っており、口縁部が上から押し潰されたように強く屈曲する。図486-1は、器高35cmの細長い胴部を有しており、形態的には均整がとれ、ラグビーボール状を呈している。図486-4は、焼成前に、格子状の線刻が施されている。位置は、頸部から胴部上端にかけての外面で、中世陶器や青森県五所川原窯の製品にみられるものと、類似する。図487-4は、胴部下端付近に、径1.2cmの穿孔が焼成後に施されている。図482-7, 図485-6, 図488-1・2, 図490-1は、中～大型の土師器球胴甕である。図482-7は、中型品に分類されるもので、頸部は直立し、口縁部がわずかに外反している。図488-1は、胴部が玉葱状を呈する大型品である。広口で、口縁部は外傾する。図488-2は、図482-7の相似形をなすもので、器高30cmを越える。図490-1は、玉葱状の胴部を呈しており、大型品に分類される。頸部は強く締まって、径が小さい。

図483-5は、土師器壺である。隣接地点で出土した口頸部と底部の破片であり、同一個体と考えられる。表面は、ヘラミガキ調整され、朱彩が施されている。南小泉式に比定される。混入品であ

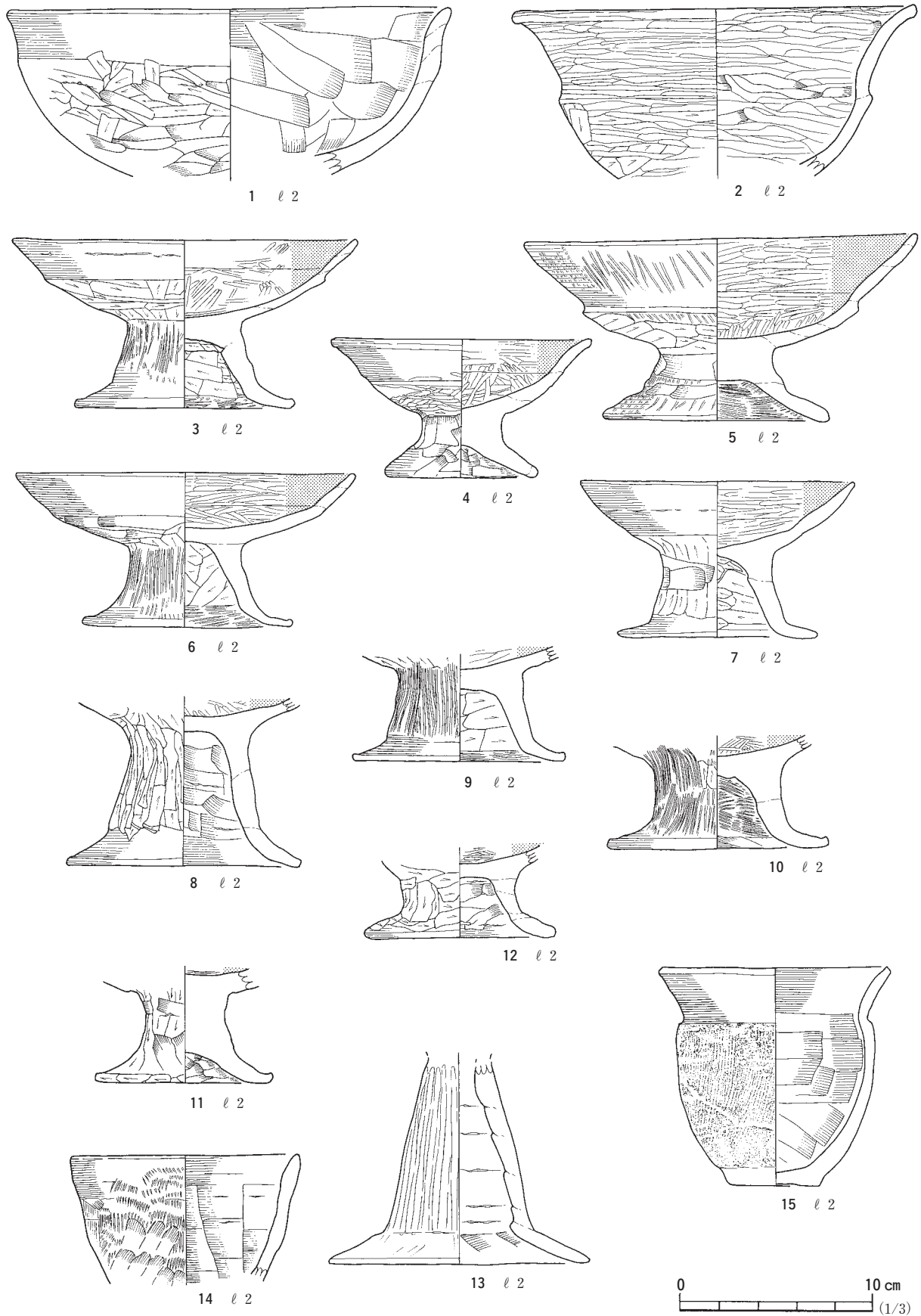


図480 2号溝跡出土遺物 (3)

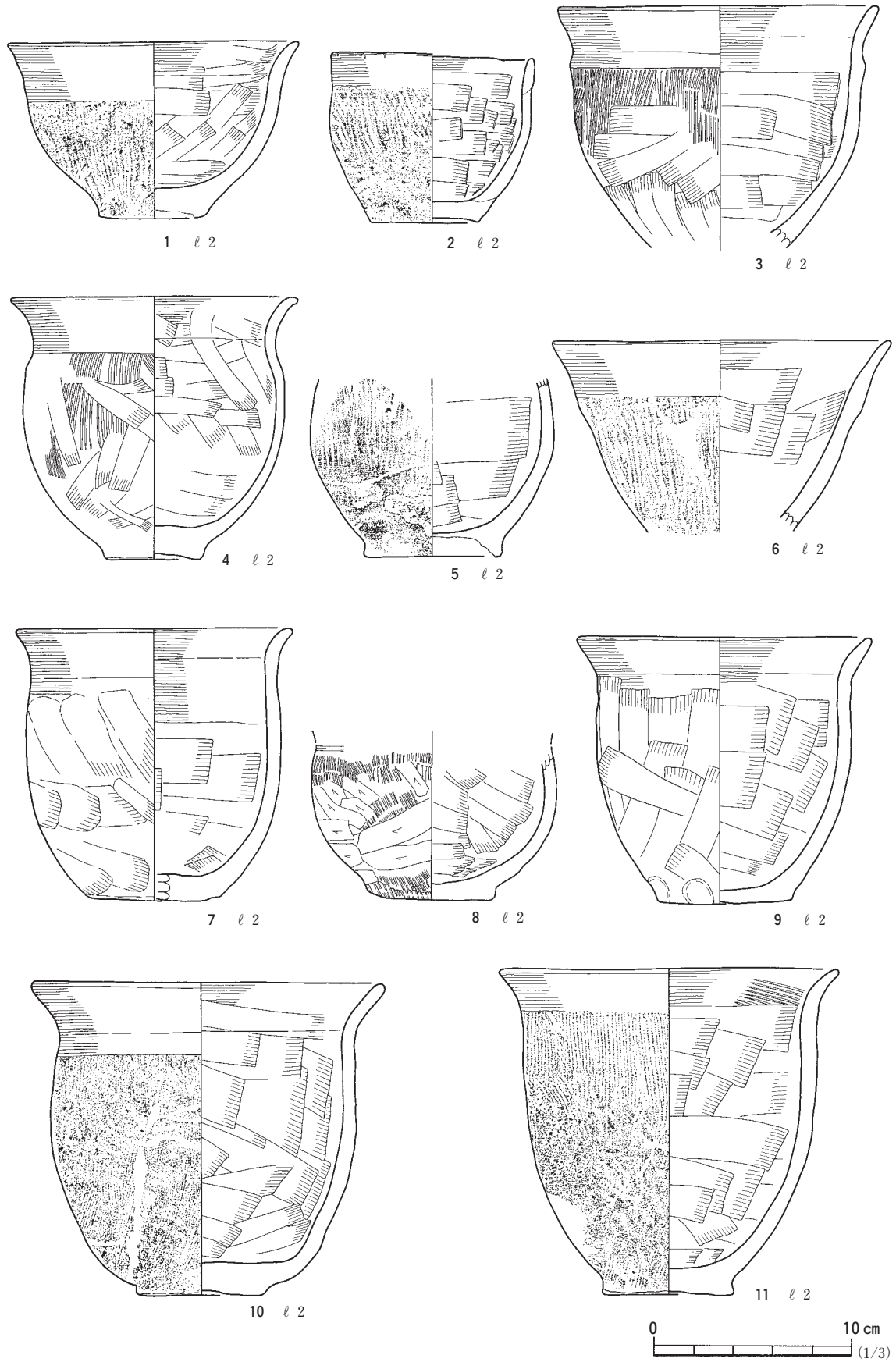


図481 2号溝跡出土遺物(4)

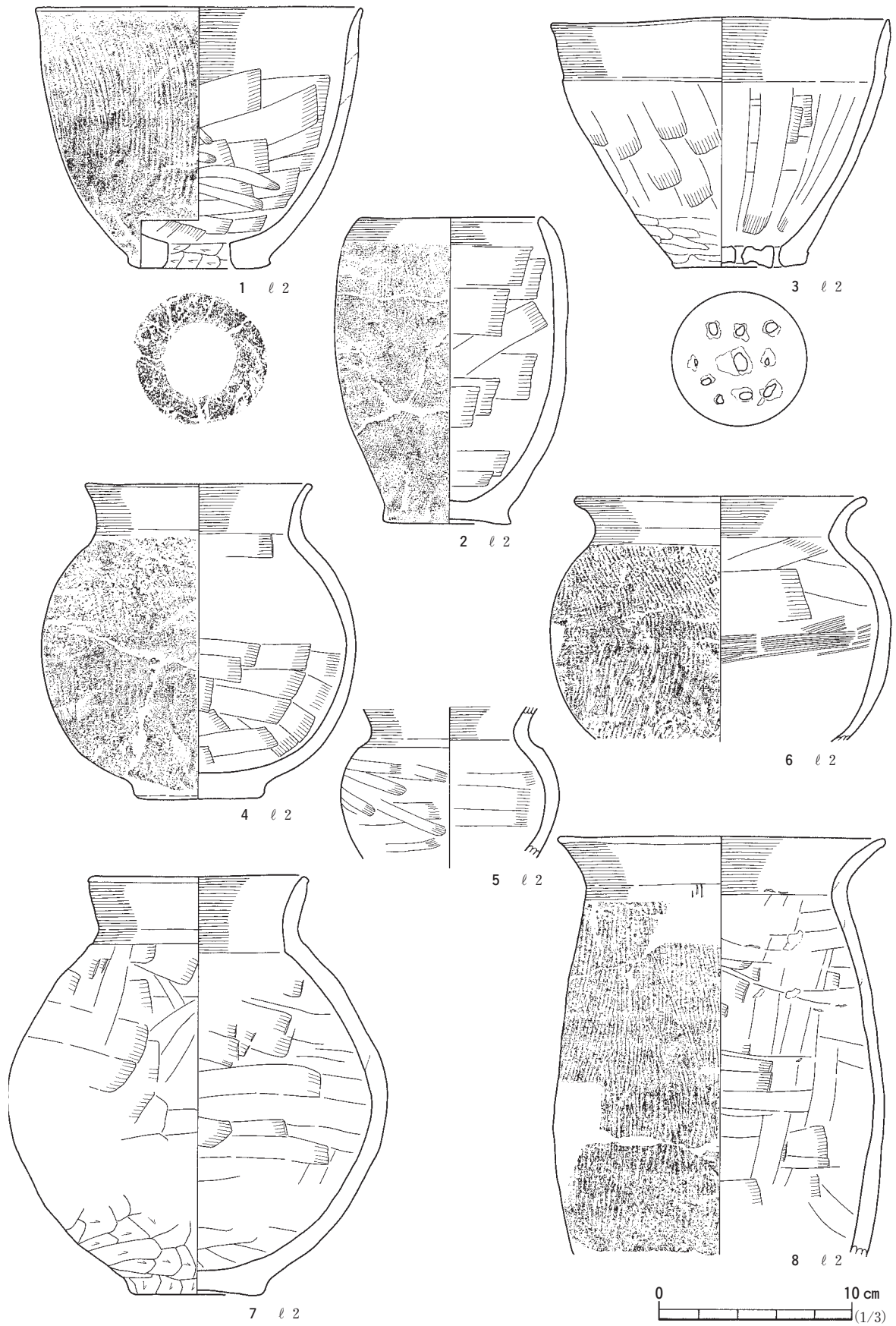


図482 2号溝跡出土遺物 (5)

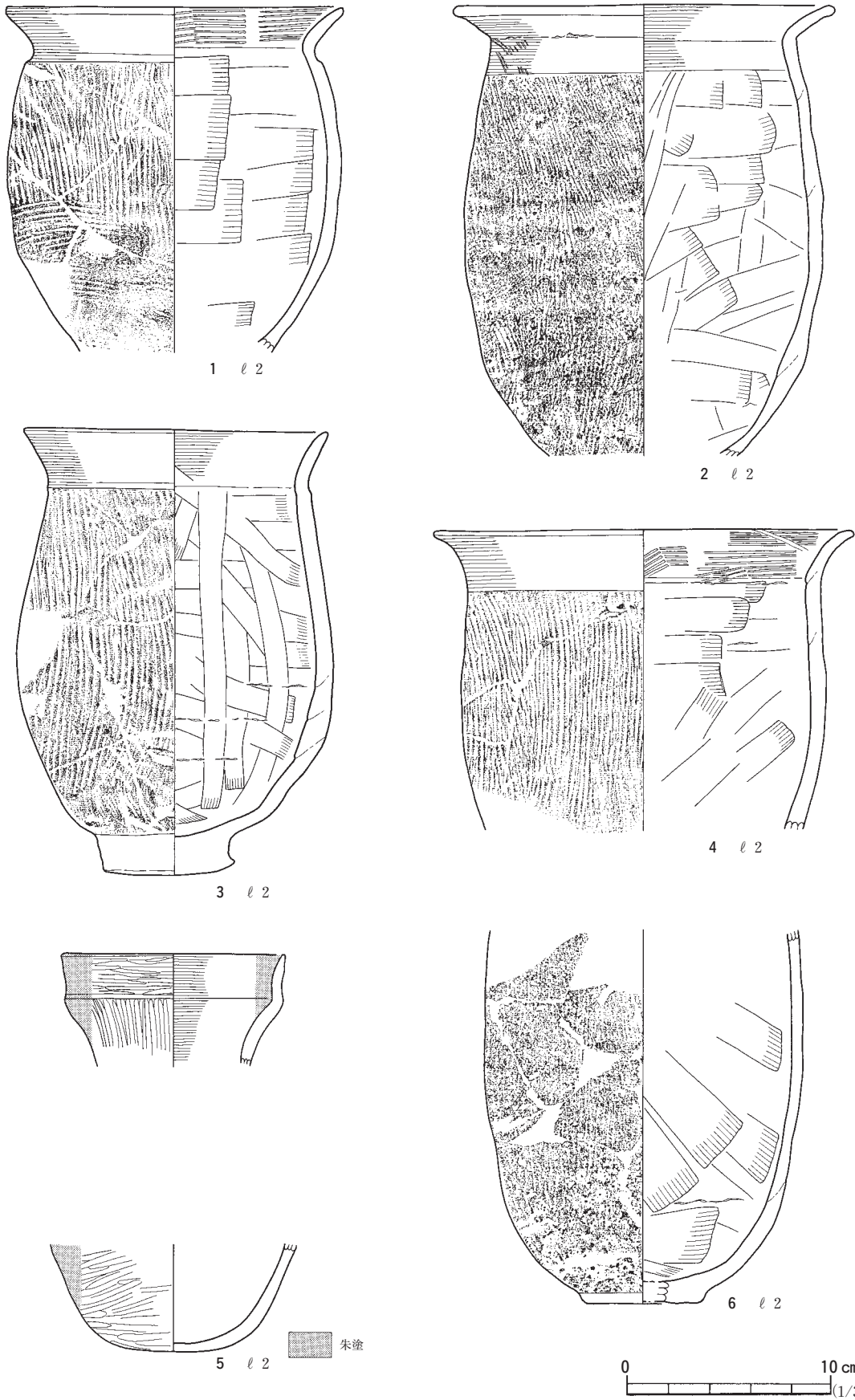


図483 2号溝跡出土遺物 (6)

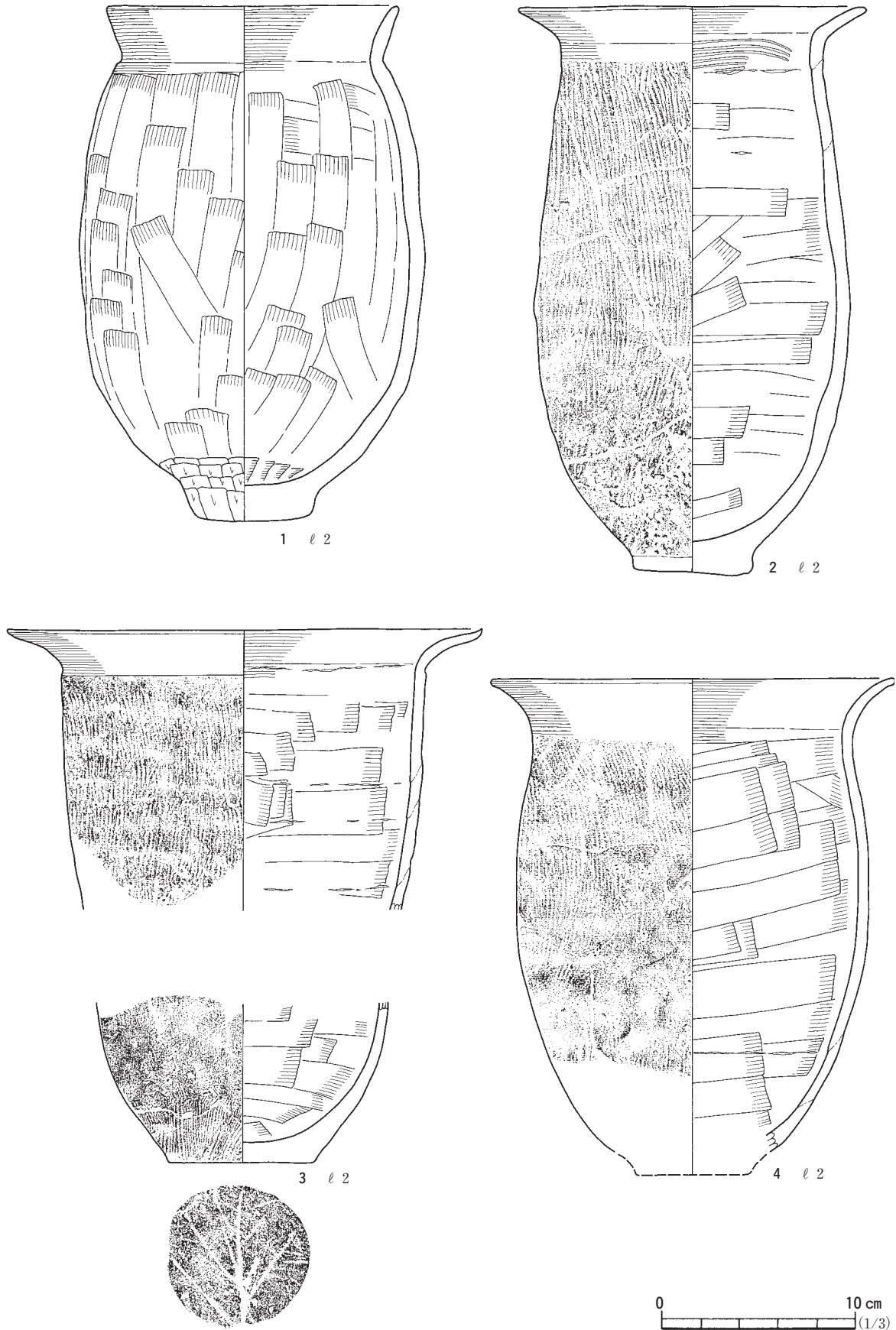


図484 2号溝跡出土遺物 (7)

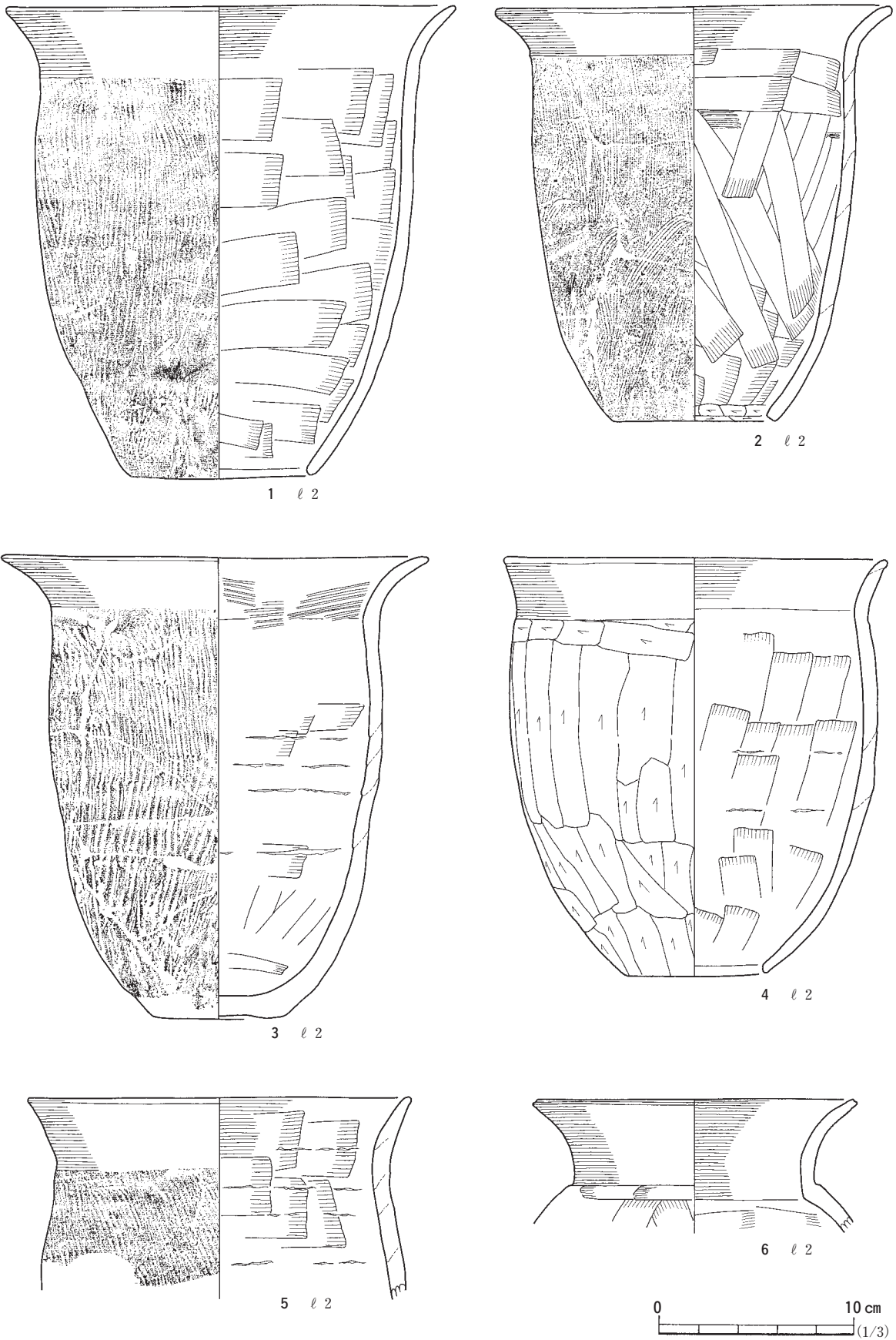


図485 2号溝跡出土遺物 (8)

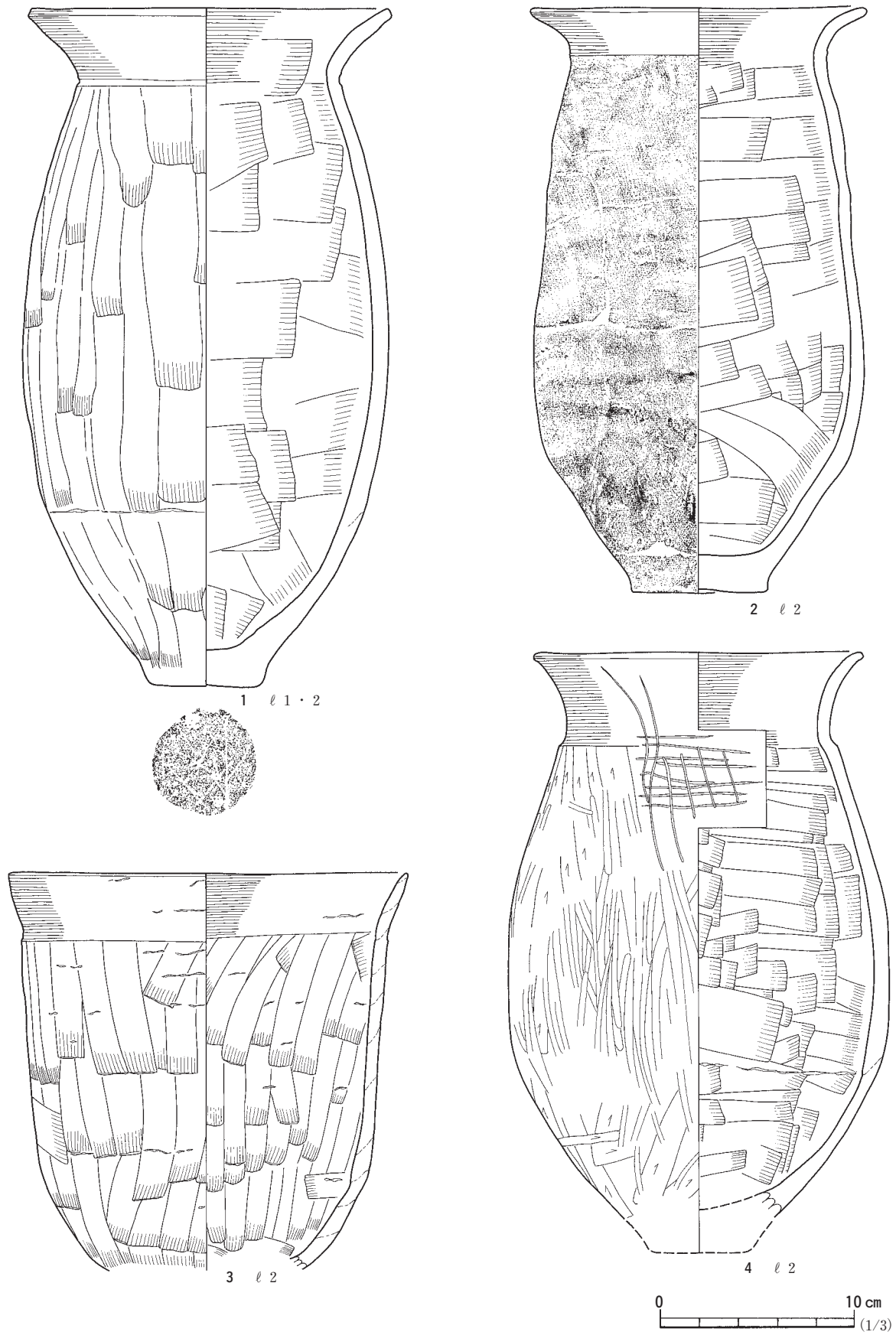


図486 2号溝跡出土遺物 (9)

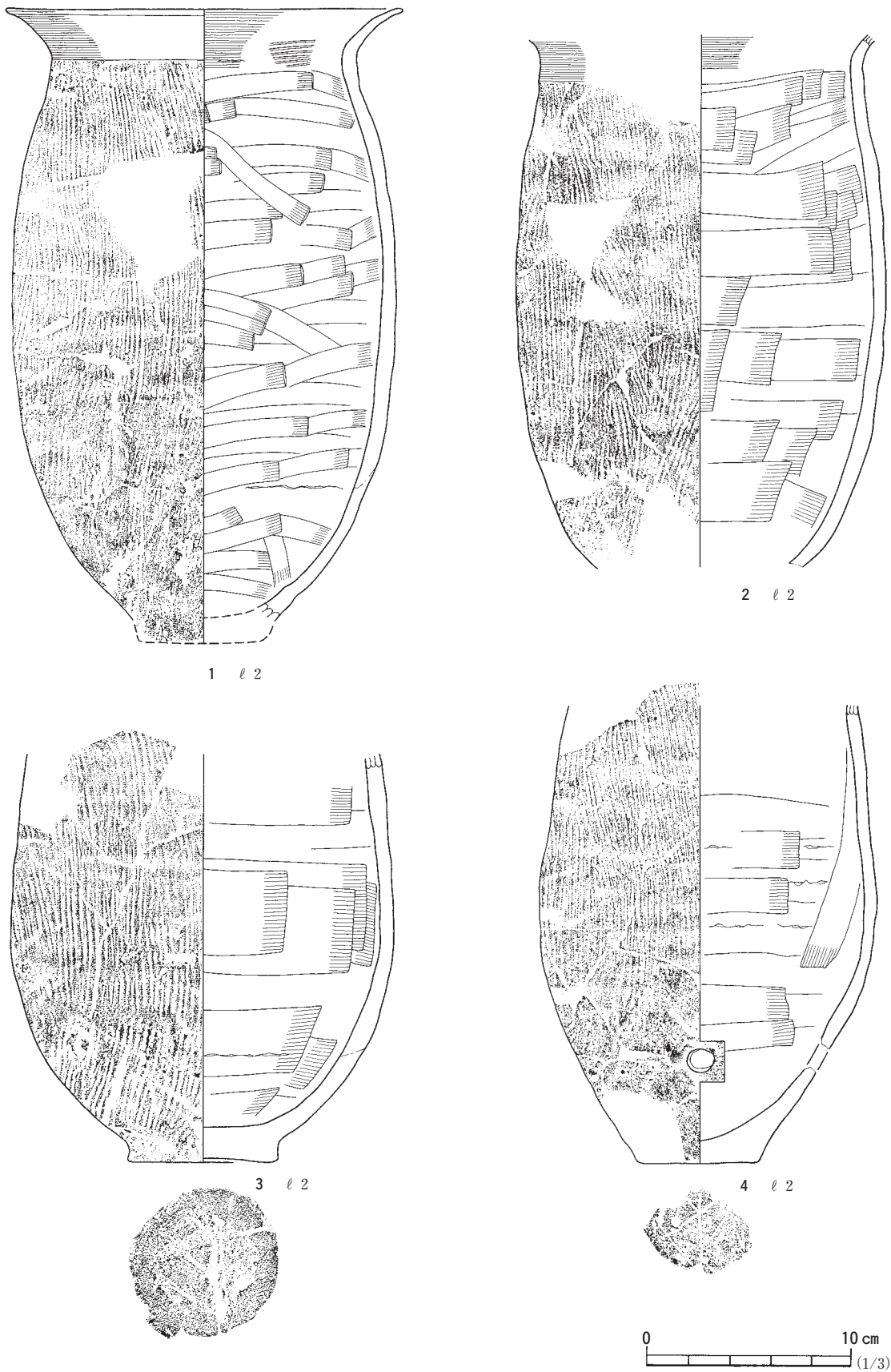


图487 2号溝跡出土遺物 (10)

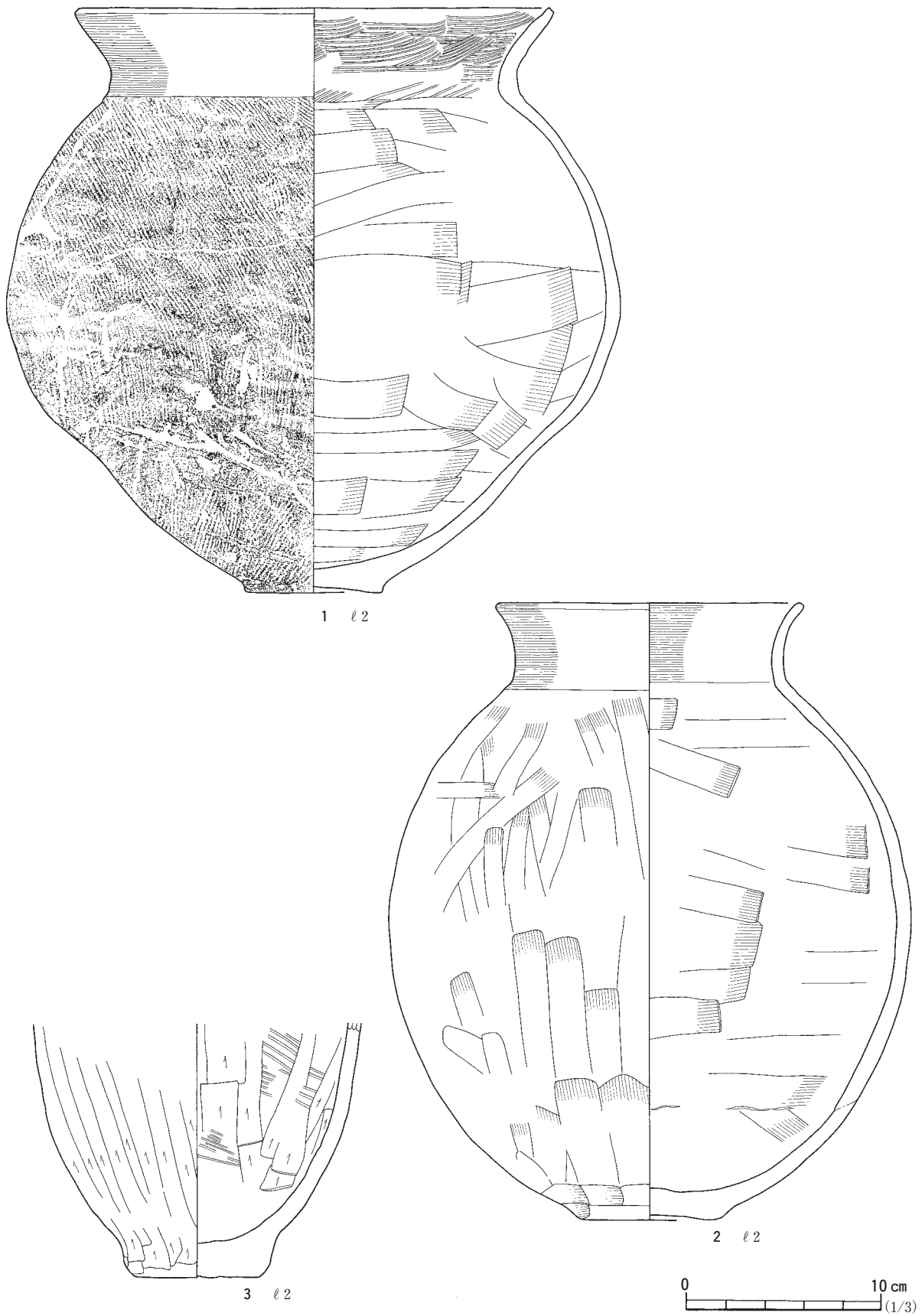


図488 2号溝跡出土遺物 (11)

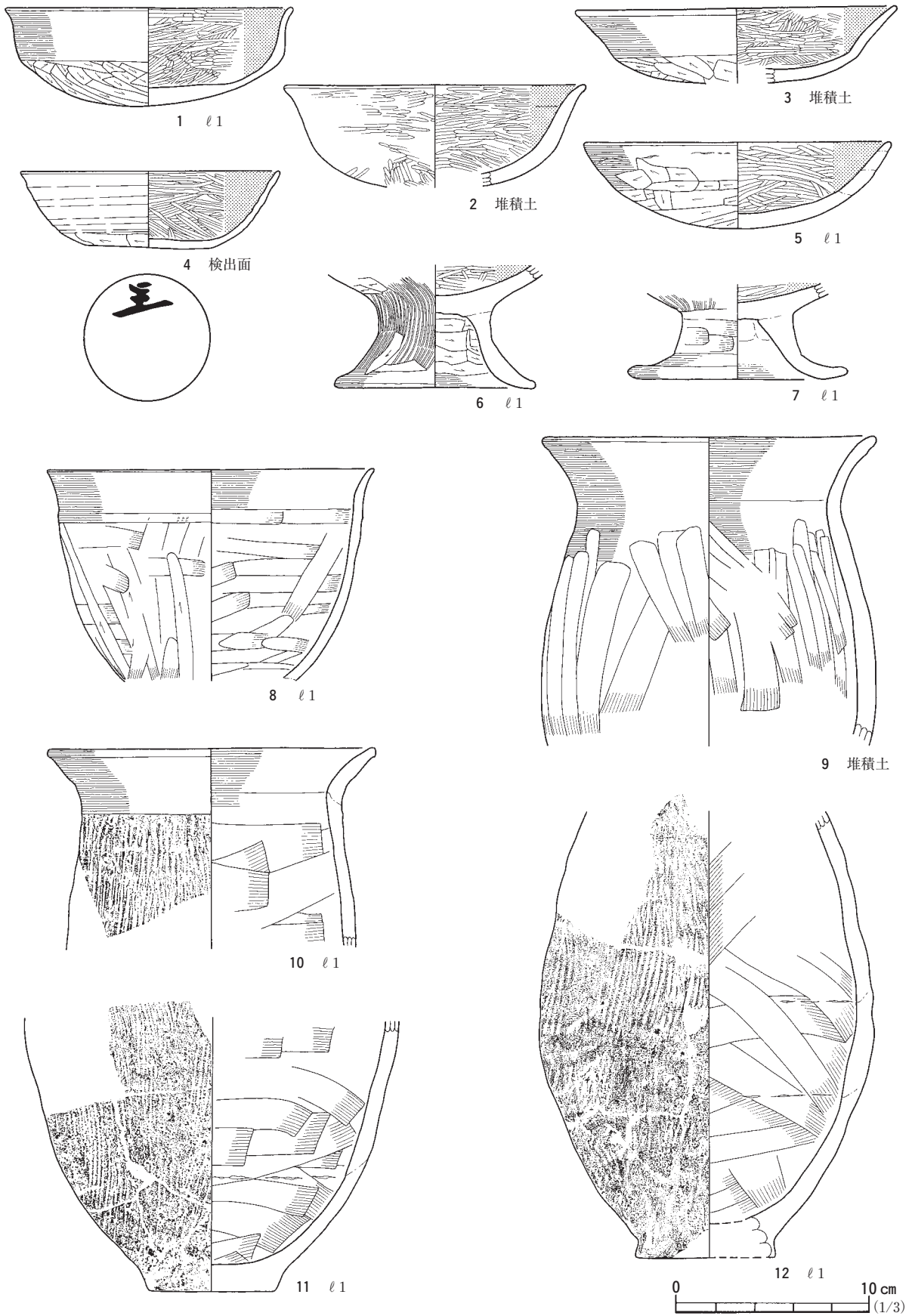


図489 2号溝跡出土遺物 (12)

ろう。

図490-2~5・7・10は、土師器手づくね土器である。口径10cmを超える2と、5cm前後の3~5, 7に分かれる。

図490-6・8は、土師器粗製杯である。内面が黒色処理されており、8では底部外面に木葉痕が残っている。この点で、手づくね土器とは区別した。

図490-9・11は、土師器ミニチュア土器である。9は、小壺に分類される。口縁部が欠損し、器形全体の特徴を知ることができない。11は、須恵器提瓶を真似た製品と推定され、リング状の取手の痕跡が残っている。ただ、水平に付けられおり、モデルに忠実ではない。

㊦ 1・堆積土・検出面出土の土師器 図489に掲載した。

1~5は、土師器杯である。1は、須恵器杯蓋模倣のタイプに分類される。口縁部が強く外反する点に、器形の特徴が認められる。2は椀形杯の系譜を引くもので、外面にヘラミガキ調整痕が観察される。4は、有段丸底杯である。口縁部が大きく開き、外傾している。5は、無段丸底杯に分類される。器高は低めで、全体に丸みがある。

6・7は、土師器高杯である。杯部を欠いており、器形全体の特徴は判明しない。脚部は、中空で、裾が開いている。

8は、小型の土師器甕である。頸部が括れず、器形全体が逆台形状を呈している。胴部外面には、ナデ調整のあと、部分的にヘラケズリ調整が加えられている。

9~12は、中~大型の土師器甕である。器形的には、長胴甕に分類される。9は、胴部外面がナデ調整され、他の3点は、ハケメ調整されている。

㊦ 2・㊦ 1出土の土製品 図490-12~15に掲載した。

12・13は、土製勾玉である。表面は、黒色処理されていない。

14は、土製紡錘車で、表面はヘラミガキされている。

15は、土製模造鏡である。六鈴鏡を模したとみられるもので、円板の周囲に1つの鈕と5つの球形粘土が付けられている。決して、丁寧な作りではないが、5つの球形粘土には、鈴を表現した切れ込みが入れられ、細部のポイントはしっかり押さえられている。

底面近く・㊦ 2・㊦ 1出土の須恵器 図491-1~4に掲載した。

1・3は、須恵器杯蓋である。1は、大型で、天井部から口縁端部までなだらかに移行する。天井部外面は、回転ヘラケズリ調整されている。3は、小型品に分類される。天井部と口縁部の境は、稜をなしており、区別がはっきりしている。口縁部は外反して、「ハ」の字状に開く。天井部外面は、手持ちヘラケズリ調整されている。

2は、須恵器杯身である。口径が大きく、全体に低平な器形を呈している。受け部は、口縁部の立ち上がりが短い。底部外面は、手持ちヘラケズリ調整されている。

4は、小型の須恵器杯である。器形は、半球形をなしており、口縁部は、内傾する。体部外面に、沈線が巡る。底部を欠いているので、判然としないが、無蓋高杯の可能性はある。

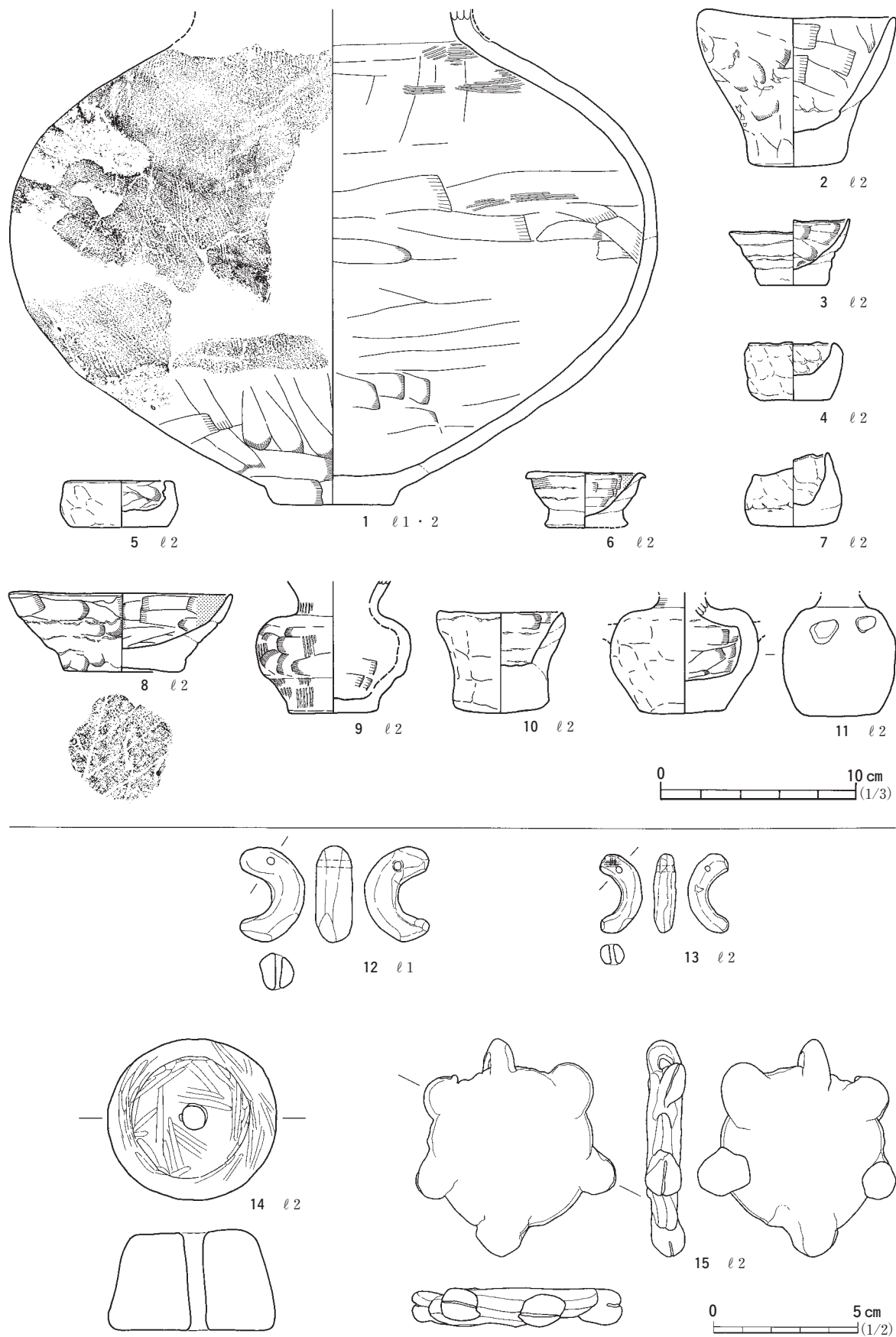


図490 2号溝跡出土遺物 (13)

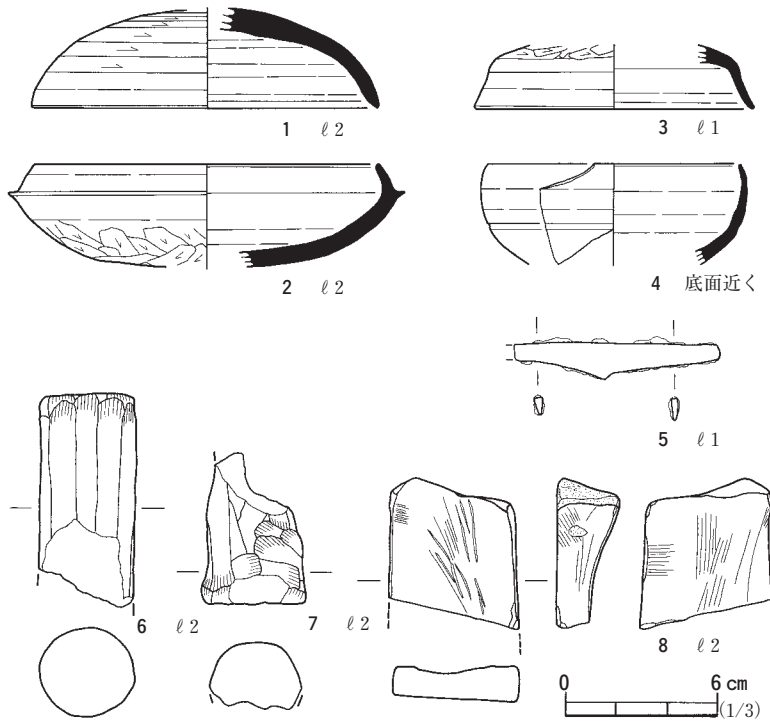


図491 2号溝跡出土遺物 (14)

A群の出土遺物 図492-1・2に掲載した。

1は、土師器小甕である。頸部が括れず、体部下端から口縁端部まで、直線的に外傾する。遺構の記述でも指摘したように、底部外面は剥離している。

2は、土師器長胴甕である。遺物カードの記録にしたがって、ここに図示したが、遺構カードにはこの遺物の記録がまったく無い。したがって、共伴関係に一抹の不安が残っている。ℓ2の遺物が紛れ込んだのかもしれない。胴部は、整ったラグビーボール状を呈している。

B群の出土遺物 図492-3～7に掲載した。

3は、土師器ミニチュア土器である。器種は壺で、口縁端部を欠いている。

4は、土師器小甕である。頸部は括れず、口縁部が胴部からそのまま内傾して立ち上がる。器形全体は、球形をなしている。

5・7は、土師器長胴甕である。5は、頸部から胴部への移行がなだらかで、口縁部は、短く外反する。胴部は中央に膨らみがあり、外面は縦位にヘラケズリ調整されている。7は、胴部の膨らみが弱い点を除くと、5に類似した特徴を備えている。6は、大型の土師器球胴甕に分類される。頸部が締まっており、口縁部は「ハ」の字状に大きく開く。

C群の出土遺物 図示遺物は、無い。

D群の出土遺物 図493・図494・図495-1に掲載した。

図493-1・2は、土師器粗製杯に分類される。口径が大きく、全体が底部に向かって窄まる。底部は、突出している。1は、底部外面に木葉痕が観察される。

図493-3～7は、小～中型の土師器甕である。3は、頸部が括れず、胴部から口縁部までそのま

ℓ2・ℓ1出土の鉄製品・土製品・石製品

図491-5に掲載した。

5は、鉄製の刀子と推定される。先端を欠く。

6・7は、土製支脚である。カマドで使用されたものであろう。

8は、砥石である。断面方形を呈している。

[祭祀遺構の遺物]

土師器片1,637点, 須恵器片17点, 骨片が出土した。

図示遺物について、解説していく。

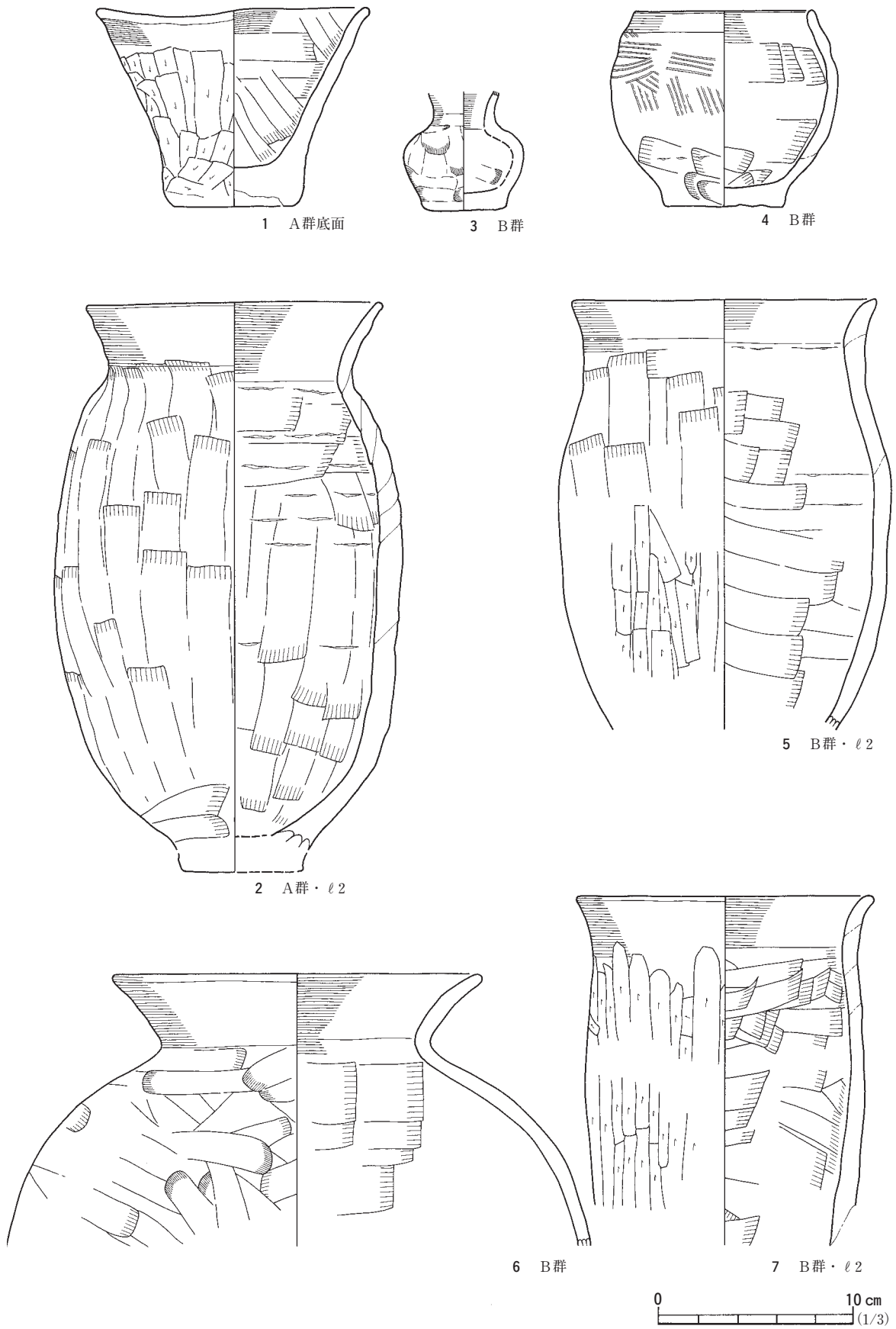


図492 2号溝跡出土遺物 (15)

ま連続して立ち上がる。このため、口縁部は内傾している。胴部外面は、縦位にヘラケズリ調整されており、内面は、粘土紐痕を指で押さえただけの簡単な調整が行われている。この土器は、胴部下端に、焼成後の粗い穿孔が観察される。祭祀に関わる痕跡であろう。4～6は、頸部が括れ、口縁部が外傾ないし外反する器形を呈している。4・5は、胴部全体が下に窄まっており、6は、中央に膨らみをもつ。5は、頸部の括れが弱く、口縁部が直立気味に立ち上がる。7は、器形の上では、球胴甕に分類される。頸部は強く括れており、口縁部は「ハ」の字状に開く。以上の4～7は、外面がハケメ調整で共通する。

図493-8・10は、外面ハケメ調整の土師器甕である。8は、単孔式に分類されるもので、上半部を欠いている。9は小型の無底式に分類される。口縁部が「ハ」の字状に大きく開き、胴部全体が下に窄まる器形を呈している。

図494、図495-1は、中～大型の土師器甕である。図494-1は、寸詰まりの胴部を有しており、長胴甕には分類しがたい。中型品に属する。胴部は下膨れ気味を呈する。図494-2・3・5は、長胴甕に分類される。2は、寸胴で、口縁部が外反する。3・5は、胴部中央に膨らみを有しており、口縁部が外反する。図494-4・図495-1は、球胴甕にあたる。前者は、頸部と胴部の境に明瞭な段を形成し、口縁部が直立する。胴部は、ほぼ球形を呈する。後者は、胴部が横長の玉葱状を呈している。頸部は短く直立し、口縁部は大きく反り返っている。以上は、外面がハケメ調整で共通する。

E 群の出土遺物 図495-2～7に掲載した。

2・4は、土師器粗製杯に分類される。2は口径がやや大きく、底部外面に木葉痕が観察される。4は、小型品に属するもので、内面は黒色を呈している。ヘラミガキは施されていないが、意図的なものと考え、図化している。

3は、中型の土師器球胴甕である。胴部はほぼ球形で、頸部は直立し、口縁部が外反している。口縁端部は、平坦面をなす。胴部外面は、縦位のヘラケズリ調整で仕上げられている。この土器は、底部外面が剥離しており、胴部下端も、同じ状態で孔が開いている。表面の色調は、一部変色しており、被熱した痕跡をとどめている。

5は、小型の土師器甕である。単孔式に分類されるもので、器形全体は、底部に向かって窄まっている。頸部は括れない。外面は、ハケメ調整されている。

6は、有段丸底の土師器杯である。口径20cmを越える大型品で、底部は平底風をなす。口縁部は、大きく開いている。

7は、小型の土師器甕に分類される。口径が大きく、胴部全体は下に向かって窄まっている。底部が突出する。口縁部は、短く外反する。

F 群の出土遺物 図496-1～9に掲載した。

1・2・4～6は、有段丸底杯に分類される土師器杯である。1・2・5・6は、口縁部が外傾しており、4は内湾する。

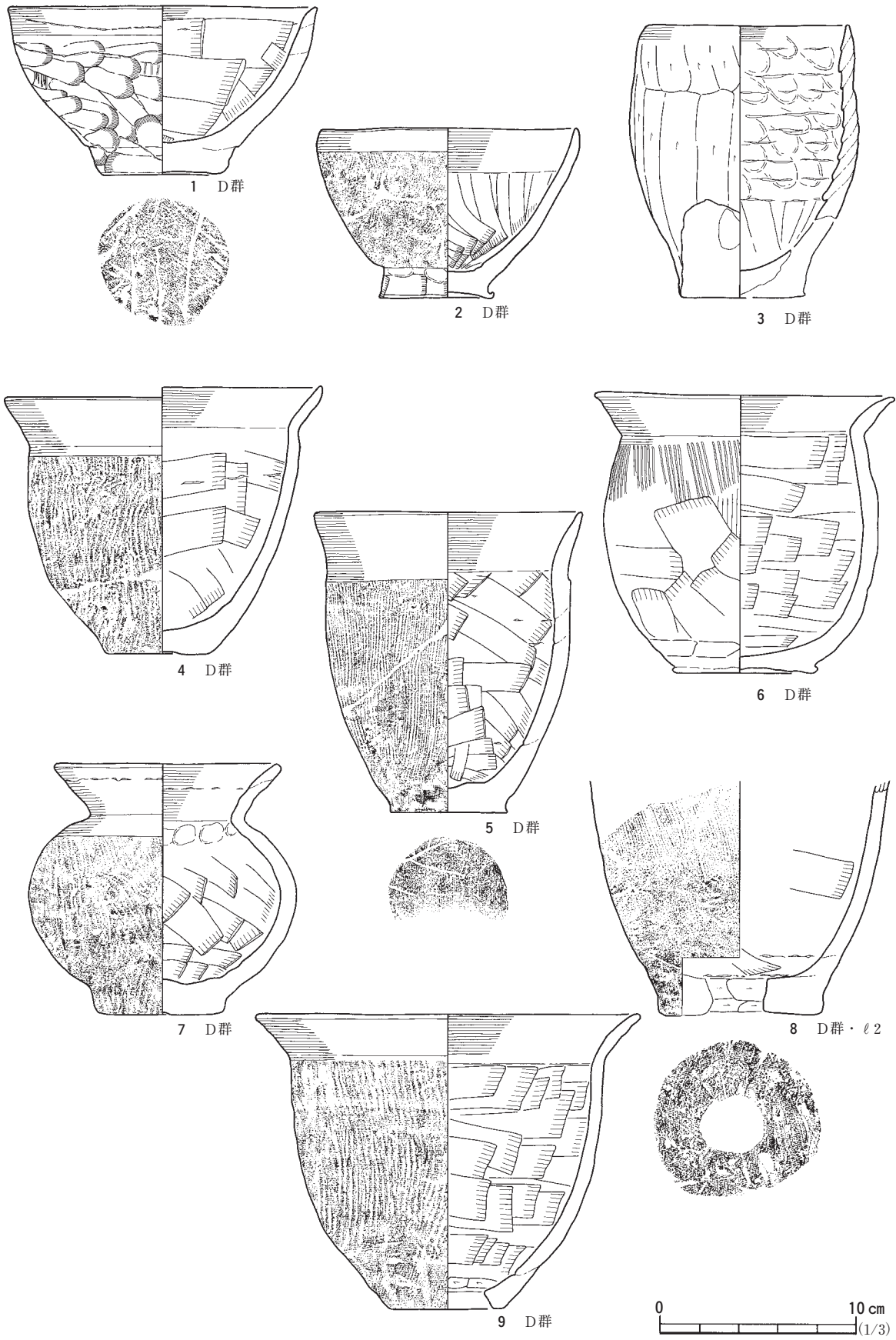


図493 2号溝跡出土遺物 (16)

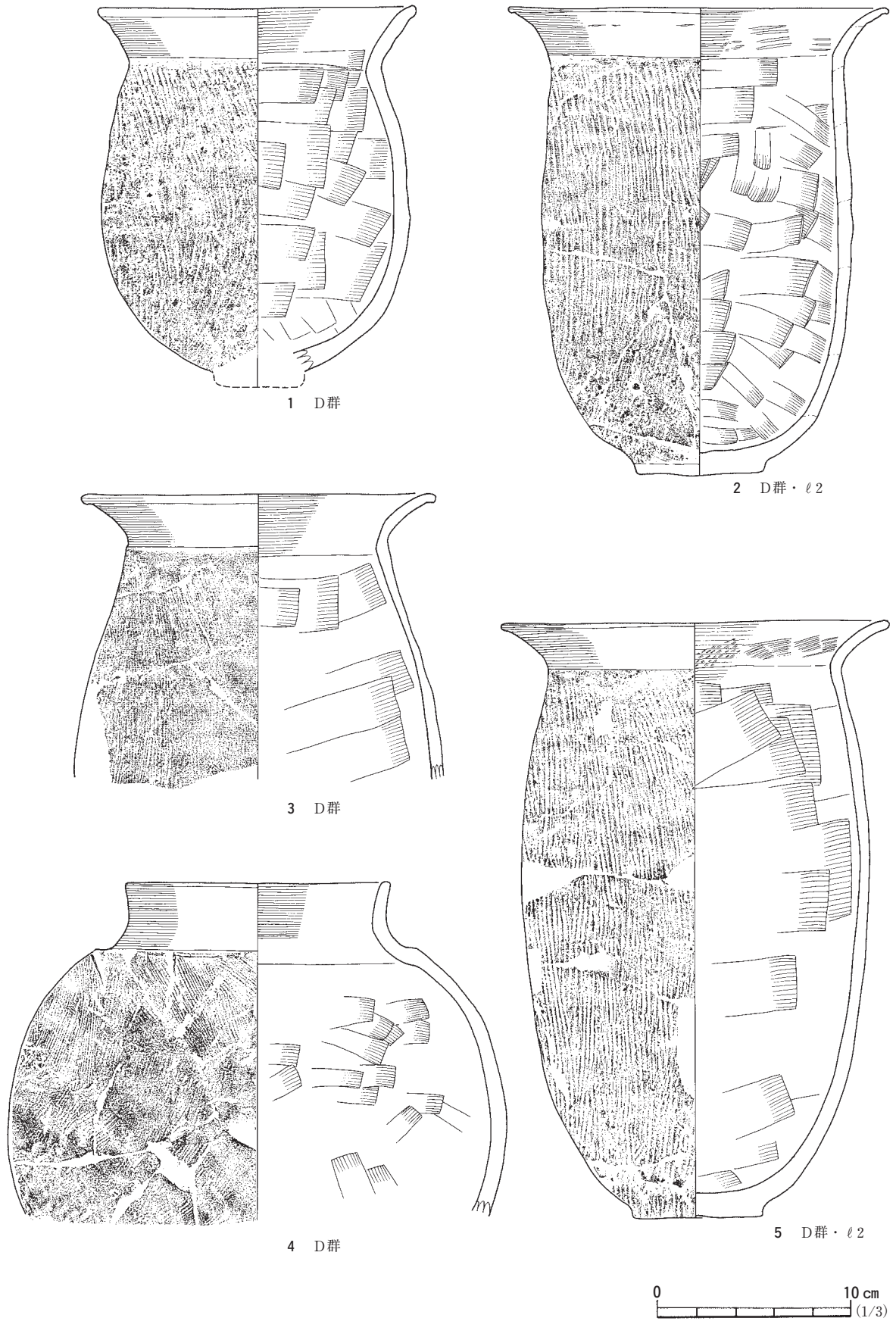


図494 2号溝跡出土遺物 (17)

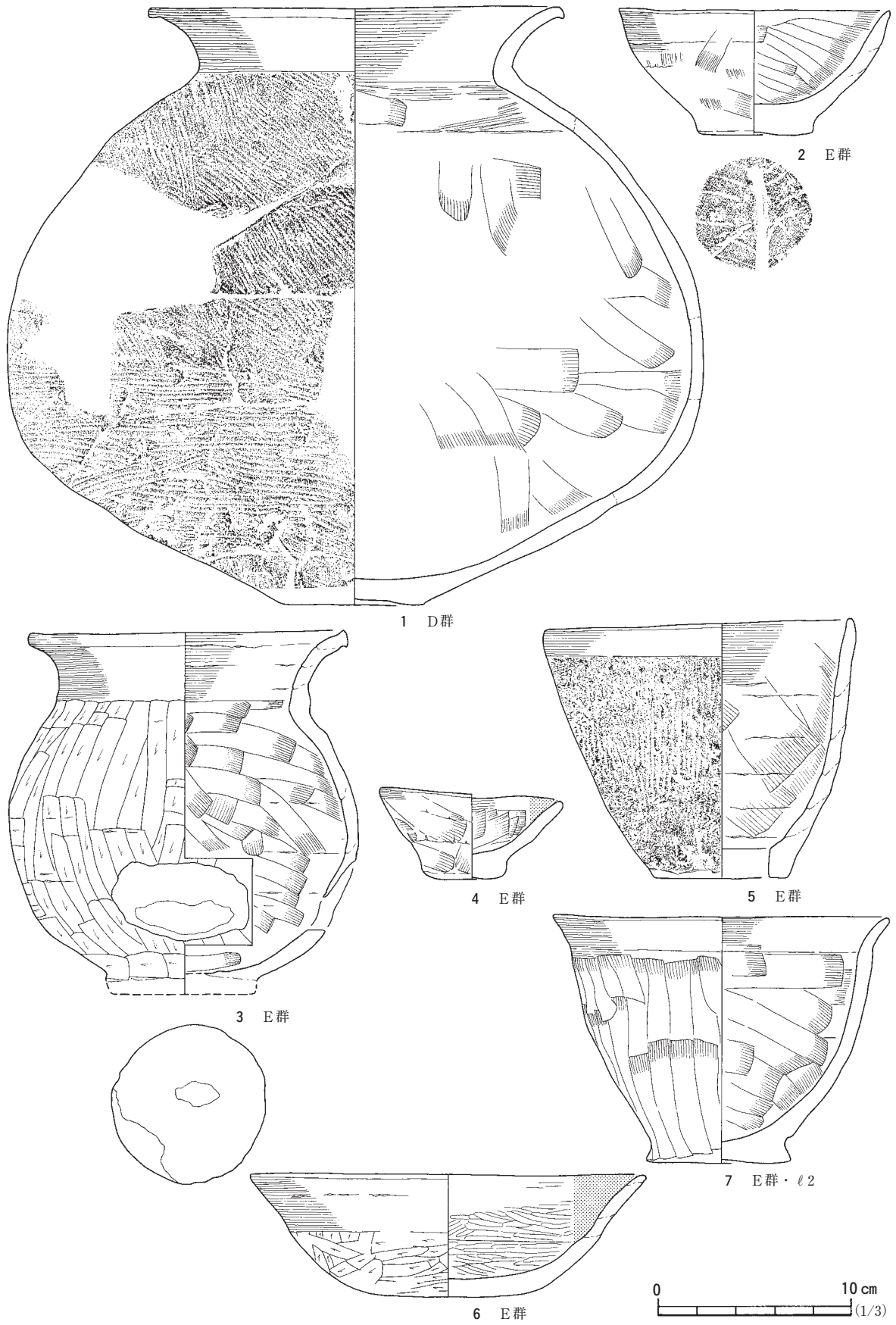


図495 2号溝跡出土遺物 (18)

3・8は、土師器高杯である。3は、単脚に有段丸底杯を乗せたもので、杯部は器高が高く、安定感がある。脚部は、中空につくられており、裾は「ハ」の字状をなす。透かしはみられない。8は、杯部が意図的に壊されており、どのようなものであったかを知ることができない。遺構の記述で触れたように、置き台に転用されたと推定している。

7は、高台の付く須恵器甕である。口縁部を欠損しており、注ぎ口外面が剥離している。ただ、出土状態は、頸部が祭祀面に潜り込んでいたので、この段階で、既に頸部は欠損していたことになる。意図的に壊されたのだろうか。器形は、胴部が玉葱状をなしており、肩が少し張る。そして、この位置の外面に、1条の沈線が施されている。また、底部内面は、大きく盛り上がる特徴を有している。注ぎ口は、受け口を意識してつくられとみられるが、それほど突出していない。高台部は、裾広がり、端部が内側に屈曲する。この須恵器は、優品である。細部のつくりが丁寧で、胎土は精選されており、焼成はきわめて良好である。色調は、表面が青灰色、断面が赤褐色を呈している。

9は、土師器長胴甕になる。器形は、口径が胴部径より大きく、広口である。胴部は、中央に膨らみをもち、下半が強く窄まる。外面は、ハケメ調整されている。この資料は、外面に白っぽく変色した部分がみられ、明らかな被熱痕跡を残している。

G群の出土遺物 図496-10・図497-1・2に掲載した。

図496-10は、大型の土師器球胴甕に分類される。胴部は、きれいな球形を呈しており、強く締まった頸部が内傾して立ち上り、口縁部が外反する。胴部外面は、ハケメ調整されている。

図497-1・2は、ハケメ調整の土師器長胴甕である。1は、胴部に膨らみがあまり無く、なだらかなプローションを呈している。口縁部端部は、反り返っている。2は、胴部中央が膨らんでおり、底部が突出気味になっている。口縁部は、外傾している。

H群の出土遺物 図497-3～5、図498-1に掲載した。

図497-3は、土師器長胴甕である。胴部中央に膨らみがあり、口縁部は外傾する。外面は、ハケメ調整されている。

図497-4は、土師器小甕に分類される。口径が大きく、頸部が括れて、胴部下半が窄まっている。胴部外面はハケメ調整で、底部外面に木葉痕が観察される。

図497-5は、土師器手づくね土器である。底部は平底をなしている。

図498-1は、須恵器提瓶である。肩に、ボタン状の取っ手痕跡の付くもので、頸部外面に、2重沈線が回る。口縁部は、「ハ」の字状に開いており、端部は窪み気味の平坦面をなす。この須恵器は、優品である。細部まで丁寧につくられており、良好な焼き上がりとなっている。ただ、胴部は歪んでおり、破片の接合が不整合となった。したがって、在地の製品と考えられ、本遺跡近隣に窯跡の存在が想定される。

I群の出土遺物 図498-2～8、図499に掲載した。

図498-2・3・5は、土師器杯である。2・3は、器高の高い椀状を呈するもので、口縁部は内湾している。5は、平底状の底部をなす小型品である。口縁部下端に、段は形成されていない。

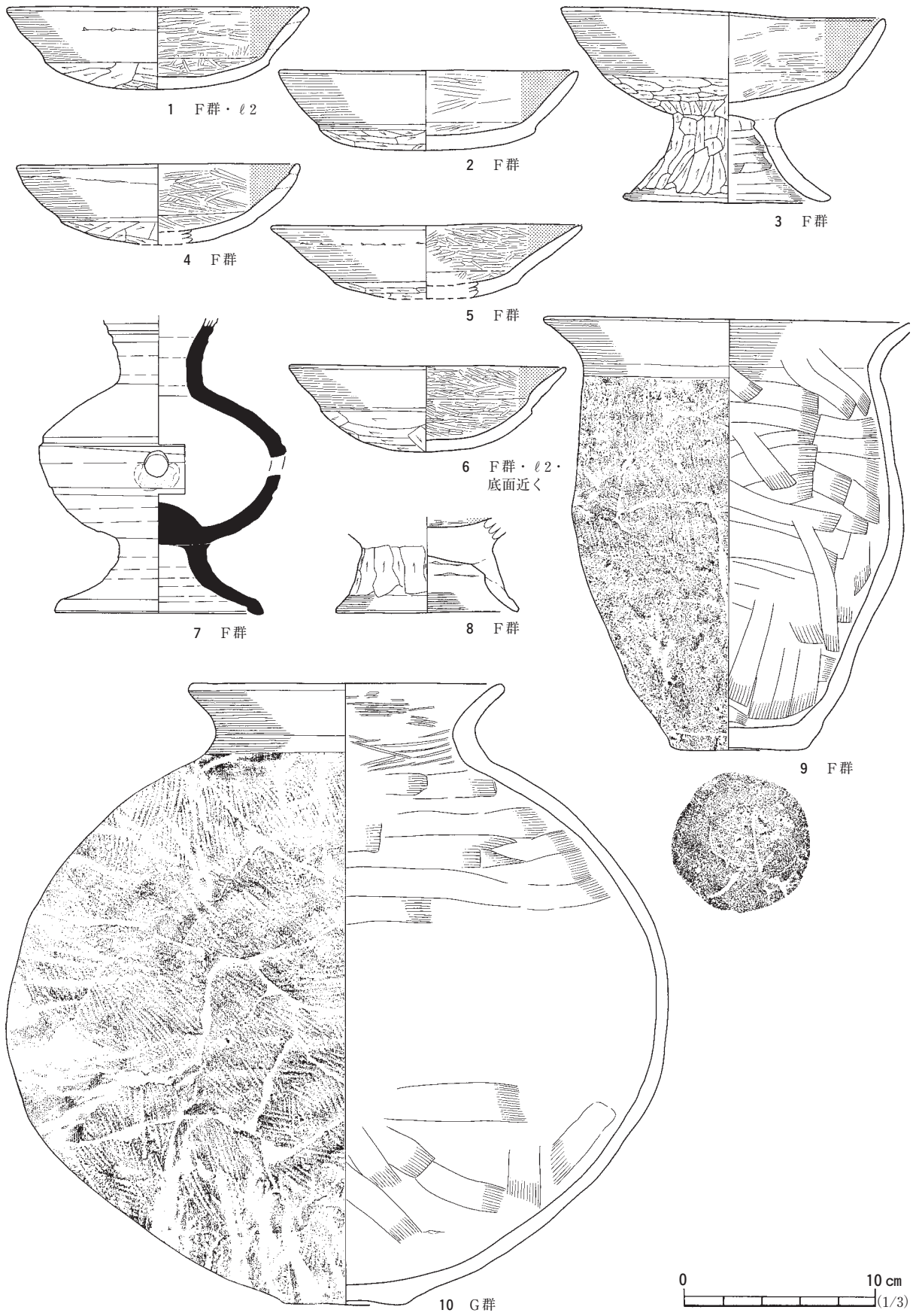


図496 2号溝跡出土遺物 (19)

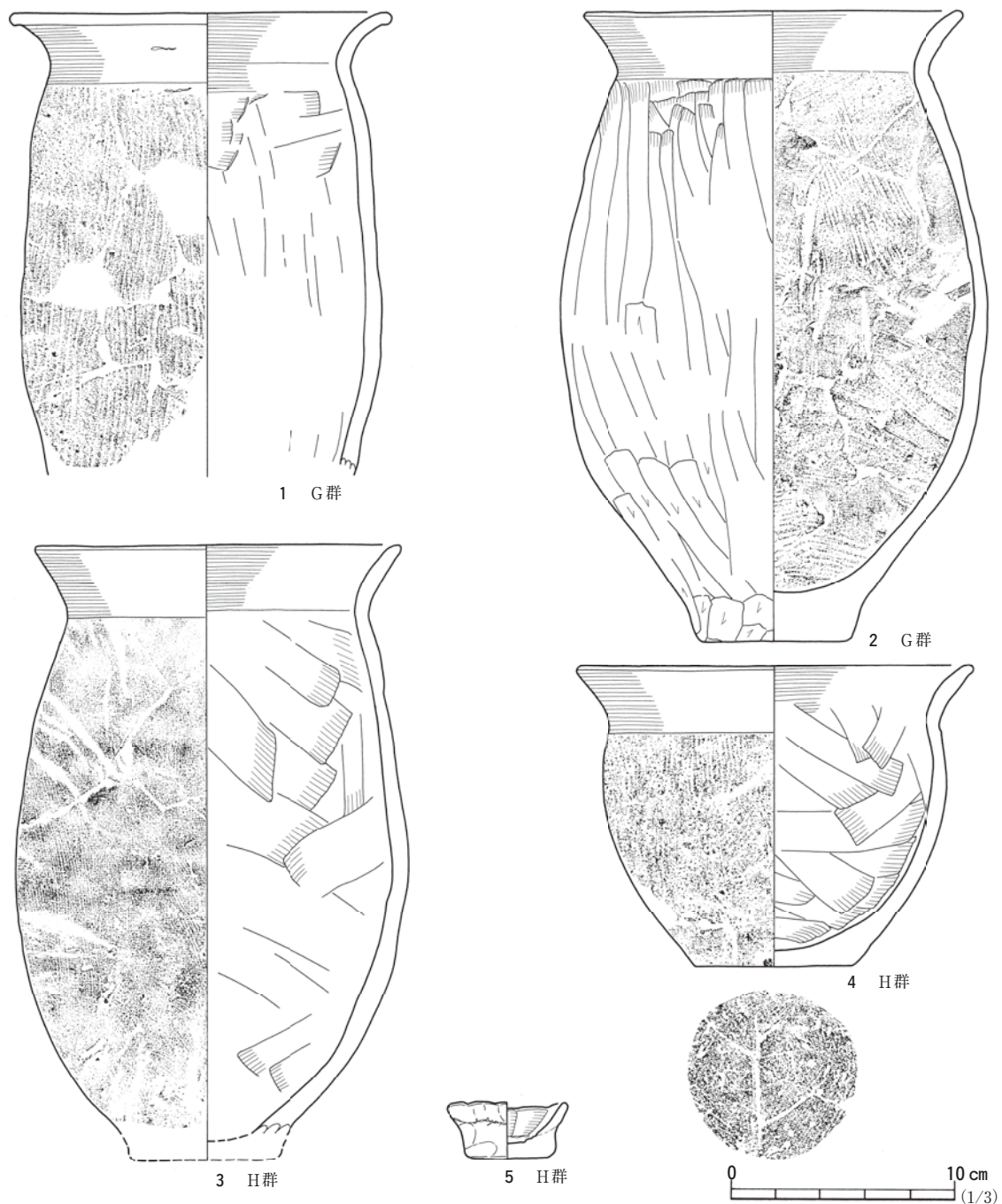


図497 2号溝跡出土遺物 (20)

図498-4は、土師器高杯である。口縁部は、粘土紐接合部できれいに割れている。脚部は短く、中空につくられている。端部はまくれない。

図498-6は、小型の土師器甕に分類される。口径が大きく、胴部は、全体に下へ向かって窄まる。口縁部は、外反する。外面はハケメ調整されている。

図498-7は、小型の土師器甌である。器形は、体部下端から口縁端部まで、直線的に外傾する。単孔式に分類されるもので、胴部外面はハケメ調整されている。

図498-8は、土師器の小型壺に分類される。胴部は、算盤玉状をなしており、口縁部は、直立気

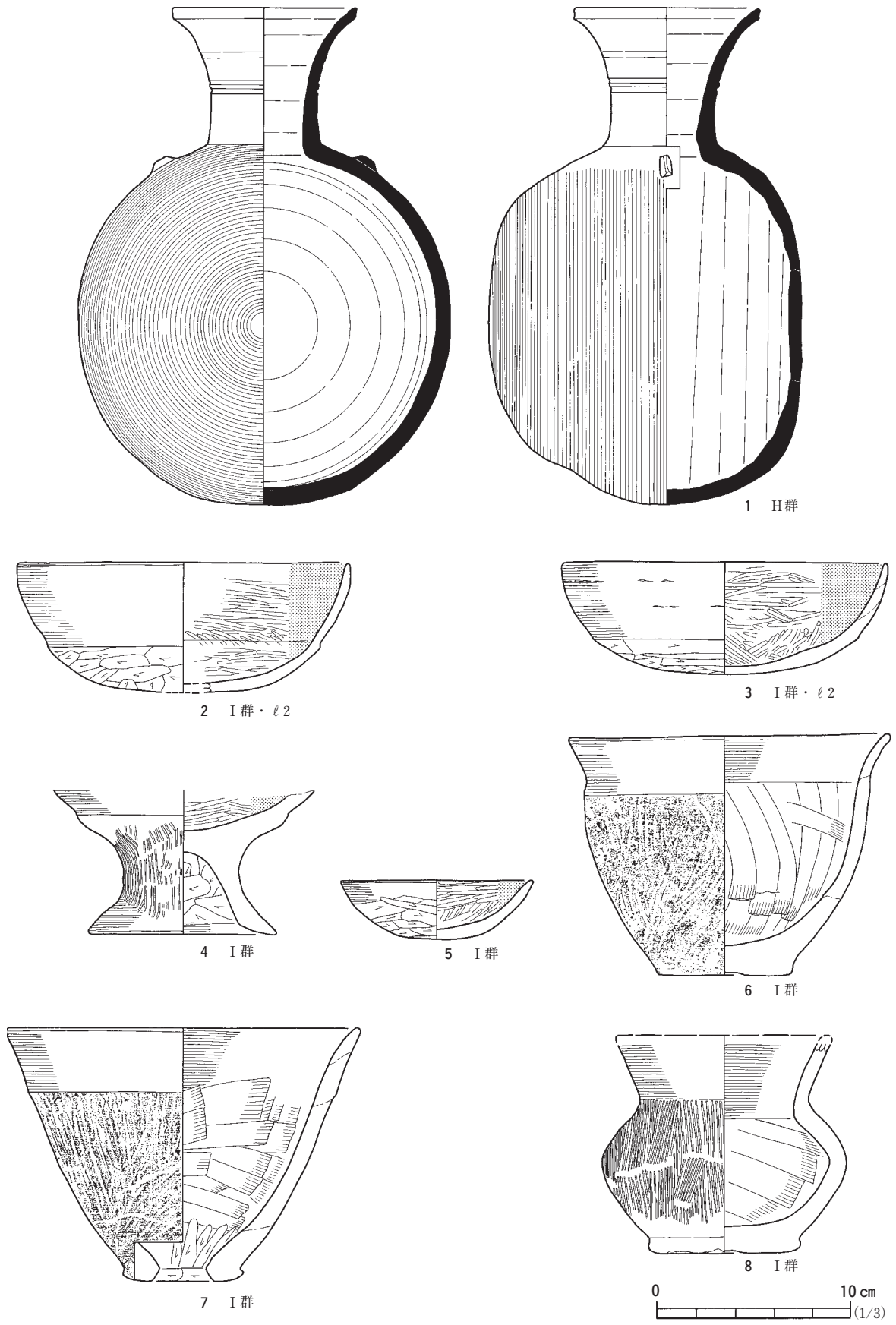


図498 2号溝跡出土遺物 (21)

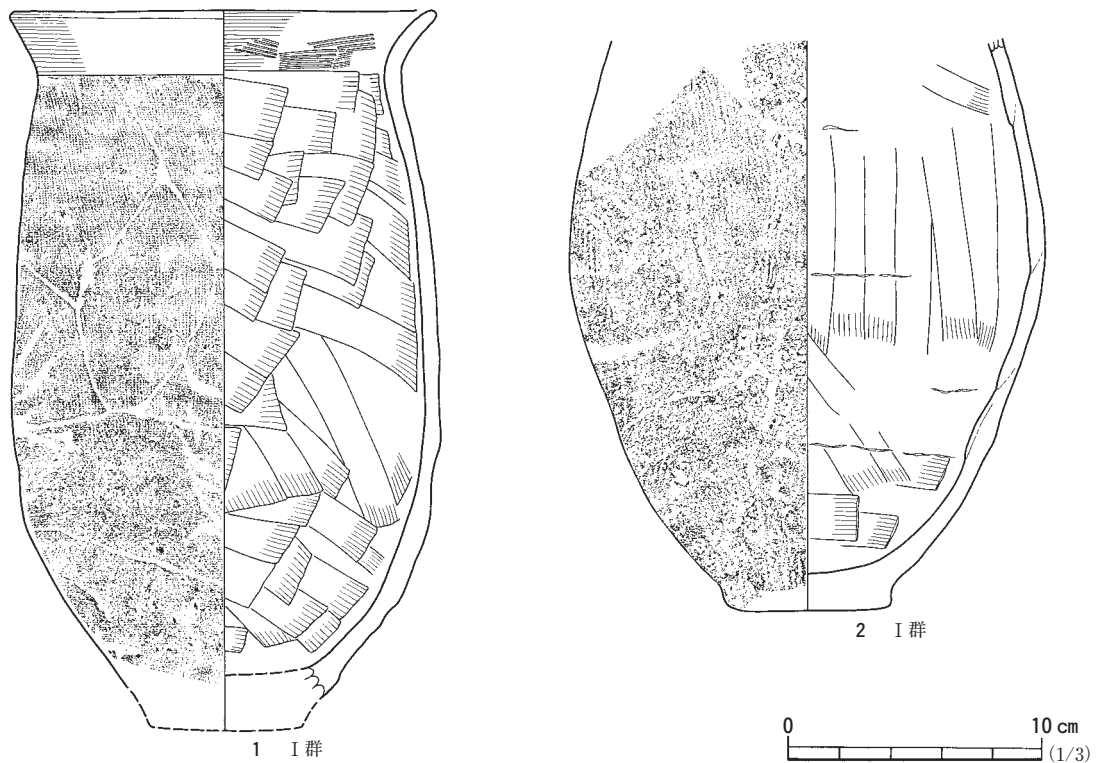


図499 2号溝跡出土遺物 (22)

味に長く外傾する。外面はハケメ調整されている。

図499-1・2は、土師器長胴甕である。外面は、ハケメ調整されている。1は、胴部下膨れのタイプで、口頸部が「く」の字状に外傾する。2は、胴部中央に膨らみのあるもので、口縁部を欠いている。

まとめ

本遺構は、栗圀式期の集落内部を区画した大溝跡の1つである。自然堤防を横断して、東西に走っている。対になる1・5号溝跡とは、内幅で110m～115mの距離を測る。また、埋没後も、集落の住民に「区画」が意識されたようで、そのことが遺構分布の上から窺えた。

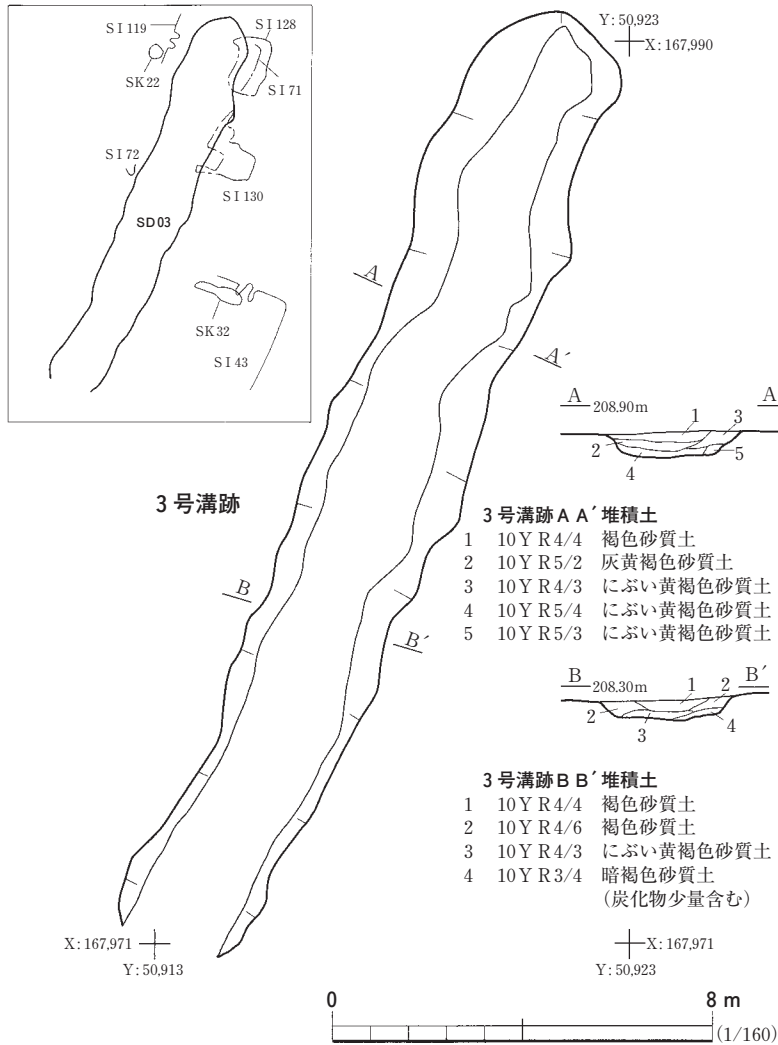
本溝跡では、後背湿地側で祭祀が行われている。集石と土器を伴うもので、同じ状況は、1号溝跡でも確認されている。水辺の祭祀という性格付けが与えられる。 (菅原)

3号溝跡 SD03

遺構 (図500)

本遺構は、M21・N21グリッドにまたがって検出された溝跡である。営まれたのは、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面片部である。71・72・128・130号住居跡と重複しており、それらより新しい。

本溝跡は、全長26.5m、幅3.0～4.1mの規模を有しており、高木遺跡の西端を縁取るように掘られている。検出当初、栗圀式期の集落区画施設ではないかと想定し、調査を進めたが、上述のように



竪穴住居跡をすべて切っており、遺物の量も少なかったことから、新しい時期の遺構と判断した。

堆積土は、自然流入土と考えている。

2か所で、土層断面を観察したが、いずれもきれいなレンズ状堆積の様相を呈している。

遺物は、土師器片24点が出土した。

小さな破片ばかりで、遺構の時期を直接示すものではないと考えている。

まとめ

本遺構は、阿武隈川に面した自然堤防の西斜面肩部に掘られた溝跡である。

時期・性格については、決め手が得られなかった。

(菅原)

図500 3号溝跡

4号溝跡 SD04

遺構 (図501, 写真474・475)

本遺構は調査区北部のN20-38・39・47・48グリットから検出した、幅約1mの細長い溝跡である。59・103・104号住居跡と重複しているが、本溝跡はそれらの廃絶後に造られている。

そのため、本遺跡で検出された住居跡を中心とした集落が形成された時期とは異なるものとみられる。

本溝跡は旧道路下のL II中から検出した。旧道路の西側沿いに直線的に延びるため、旧道路と同時期のものとも考えたが、道路中央に通る水道管の延びる方向とはやや異なっている。本溝跡は104号住居跡のカマドとみられる焼土跡を破壊して、そこから北東方向へと延びているが、59号住居跡と重複する付近までしか確認できなかった。遺存する部分の長さは約9.5mで、褐灰色砂質土が堆積していた。溝跡の幅は約1m前後で、深さは8~20cmしか残っておらず、壁は緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦であった。

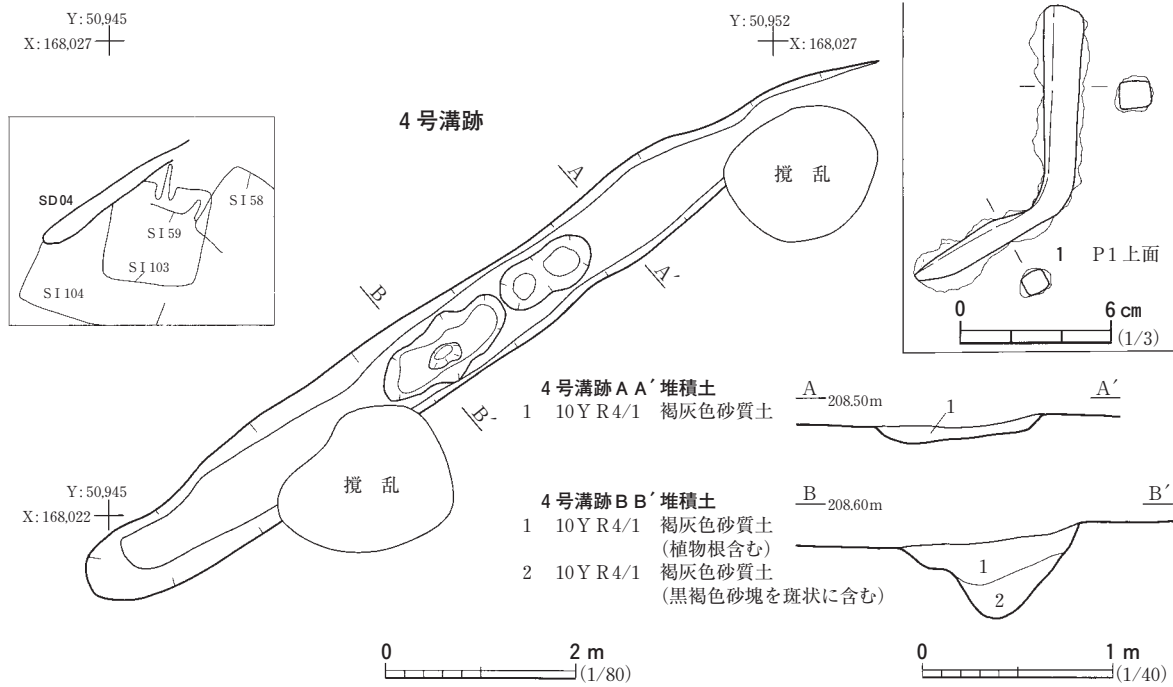


図501 4号溝跡・出土遺物

また、本溝跡の底面からはピット2基を検出している。ピットは南西端から約4mほど離れたところに隣接しており、不整な楕円形とも方形ともいえる形をしている。これらのピット内の堆積土は溝跡の堆積土と同じ褐灰色砂質土であったが、その中には黒褐色砂塊を斑状に含んでいた。大きさは西側の1号ピットが長軸約150cm、短軸約50cm、深さ約40cmで、東側の2号ピットが長軸約110cm、短軸約45cm、深さ約15cmである。また、1号ピット底面の中央からは長軸約40cm、短軸約20cmの楕円形の小ピットが確認できた。深さは1号ピット底面から約15cmほどである。

遺物 (図501, 写真673)

本溝跡から出土した遺物のうち、図示したものは図501-1の鉄製品1点である。1は形状から断面が角状になる角釘とみられる。1号ピットにかけた土層ベルトBB'のℓ1から出土した。

まとめ

本溝跡の性格や時期は不明である。出土遺物の鉄釘は古代のものとみられ、周囲に使用されていたと考えられる建物跡が存在しないことから、本溝跡の何らかの施設に用いられていた可能性もある。しかし、本溝跡は幅が1mであり、後世の規格で造られたものとみられる。(大波)

5号溝跡 SD05

遺構 (図461, 写真457・476・477)

本遺構は、栗圀式期の集落内部を区画した大溝跡の1つである。調査区南部のM23・N23グリッドで検出され、自然堤防を東西に横断している。等高線を拾ってみると、この場所は、浅い沢状の旧地形をなしており、掘削しやすい点を利用して意図的な地形の選択が行われたと推定される。

本溝跡の南側には、1号溝跡が平行して走っており、両者は前後関係を有していたと考えられる。

ただ、直接の切り合いはなく、この点は確かめることはできなかった。

検出されたのは、31mの長さである。西側は攪乱で破壊されており、東端は調査区外に伸びている。規模は、上幅3.2~4.4mで、検出面からの深さは、68~80cmを測る。断面は逆台形を呈しており、平坦な底面をなしている。

本溝跡は、自然埋没したと考えている。断面は、典型的なレンズ状堆積の様相を呈しており、人為的に埋められたと見なす積極的な根拠は得られなかった。堆積土は、1号溝跡に比べると、含有物を含まず、純粋な基本土層に近い傾向が認められた。このことは、本溝跡がごく短期間のうちに埋没したことを示していると考えられる。出土遺物が、1号溝跡に比べてはるかに少ないことにも、それはよく反映されていると思われる。

遺物 (図502, 写真673)

遺物は、土師器片123点、須恵器片4点、土製品1点、金属製品1点が出土した。

図502-1は、有段丸底の土師器杯になる。口縁部の大きく開いた器形を呈している。

図502-2は、小型の土師器甕になる。頸部がほとんど括れず、口縁部の直立する器形を呈している。胴部外面調整は、ハケメである。

図502-3は、須恵器杯身になる。器高の高い特徴的な器形を呈しており、受け部は、口縁が細長く伸びて、丸く収められている。また、底部外面には手持ちヘラケズリ調整が加えられ、体部下端には回転ヘラケズリ調整が施されている。

図502-4は、須恵器甕の胴部片になる。外面にタタキメが観察される。

図502-5は、性格不明の土製品になる。中央に孔の開いたボタン状を呈しており、片面は中心が突出する。

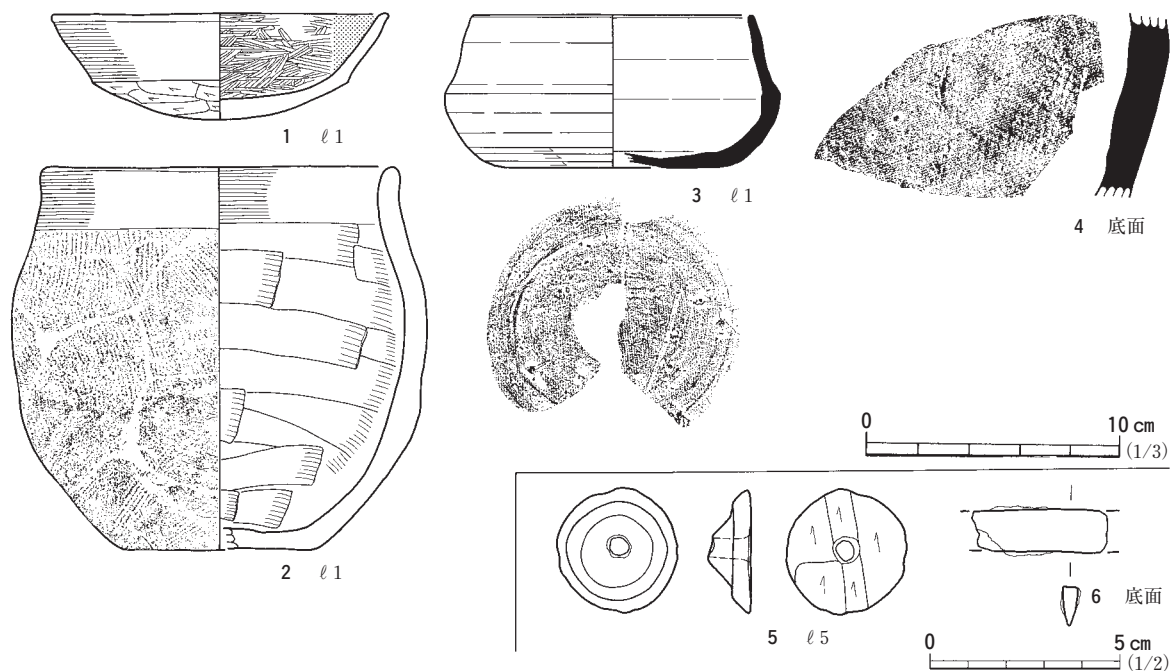


図502 5号溝跡出土遺物

図502-6は、鉄製の刀子と考えられる。両端が欠けている。

ま と め

本遺構は、栗田式期の集落内部を区画した大溝跡の1つである。自然堤防を横断して、東西に走っている。対になる2号溝跡とは、内幅で110~115mの距離を測る。

隣接する1号溝跡とは共存せず、前後関係を有していたと考えられる。ただ、直接の切り合いがなく、この点を確かめることは出来なかった。

堆積土の特徴と出土遺物の少なさから、本溝跡が機能していたのは、ごく短期間であったと考えられる。(菅原)

第5節 特殊遺構

特殊遺構としたのは、これまで報告した竪穴住居跡・土坑・焼土遺構・溝跡に該当しない7遺構である。このうち、4号特殊遺構は80号住居跡の中で、6号特殊遺構は1号溝跡の中で、既に事実報告を行っている。前者は80号住居跡の掘形であり、後者は1号溝跡で行われた祭祀遺構である。

本節では、残る5遺構について記述していく。

1号特殊遺構 SX01

遺 構 (図503, 写真480・481)

本遺構は、O20グリッドで検出された。

5本の平行する溝跡で構成されており、実際には、さらに多くの溝跡が周囲に広がっていたと推定される。別遺構で調査した4号特殊遺構も、同一遺構の可能性が高いと考えている。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。

遺構配置図の上では、本遺構のすぐ斜面下に5~7号土坑が位置している。しかし、層位的にみて、両者は明らかに共存しない。5~7号土坑は、LⅡ3上面から掘り込まれており、本遺構は、その上のLⅡ2a上面から掘り込まれている。

本遺構を構成する5本の溝跡は、1.0~1.3mの間隔で、整然と並んでいる。方向は、発掘基準線北に対して、西に約55°振れている。これは、立地する微地形の等高線に、ほぼ直交した傾きであることが指摘される。

各溝は、幅50cm前後で、断面は「U」字形をなしている。掘り込み面のLⅡ2a上面からは、25~30cmの深さを測る。堆積土は、にぶい黄橙色砂質土で共通している。締まりがなく、柔らかい傾向が認められた。

遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、5本の平行する溝跡で構成された遺構である。各溝跡は、ほぼ等間隔で並んでおり、

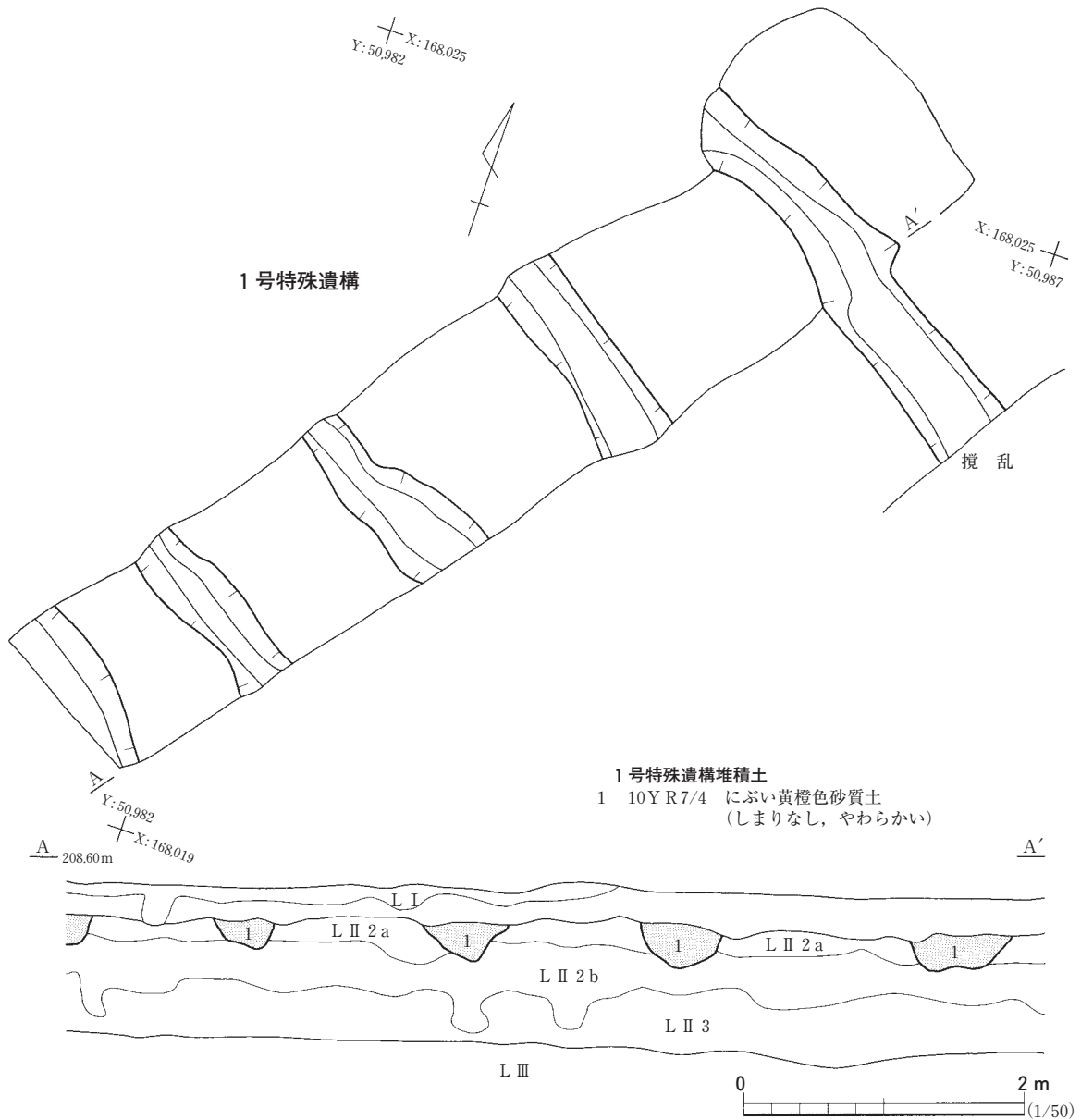


図503 1号特殊遺構

さらに、周囲に広がっていたと推定される。

こうした特徴は、畝状遺構と呼ばれるものと一致しており、本遺構の性格は、耕作痕と考えられる。時期は、層位的な観点から、表杉ノ入式期～栗圀式期の幅の中で位置付けることが可能と考えている。(菅原)

2号特殊遺構 SX02

遺 構 (図504, 写真482)

本遺構は調査区北西側のN20グリッドに位置し、L II精査中に検出されたものである。

遺構は円形の焼け面・整地層の広がり・ピットからなり、それらがほぼ3m四方の範囲にまとまっている。最も北側に位置する焼け面は直径約40cmの円形の範囲で酸化しているもので、それより一

遺物 (図505, 写真639)

本遺構からは土師器・羽口・鉄滓が出土しており、そのうちの4点を図示した。

図505-1・2は土師器の杯でロクロ調整によるものである。外面体部下端から底部には回転ヘラケズリが施されているが1の中央には糸切り痕が認められる。内面はヘラミガキの後黒色処理が施されているが2は二次加熱を受けており器面が荒れ、黒色が失われて一部赤変している。

図505-3・4は羽口で3は先端部近くを残す破片、4は全体の8割程度遺存するものである。外面全体はナデ調整が行われており、両者とも先端部側は熱を受けて灰色となっているが溶着滓はみられない。なお、出土した鉄滓については化学分析を実施しているので詳細は付編を参照していただきたい。

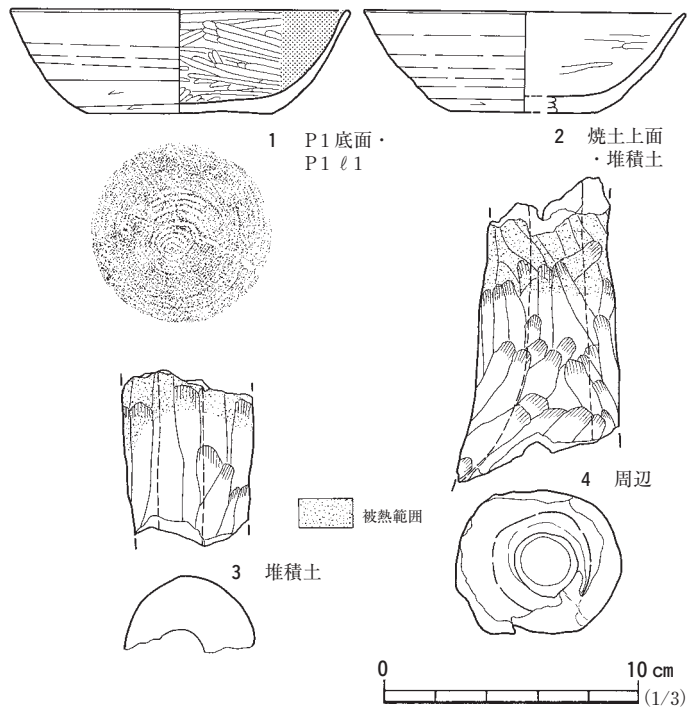


図505 2号特殊遺構出土遺物

まとめ

本遺構は遺構の特徴と出土遺物から鍛冶遺構と推定され、北側で検出された円形の焼け面が鍛冶炉と考えられる。整地層や周辺のピットにみられる焼土や炭化物は、鍛冶作業において生じ、混入したものであろう。時期については図示した土師器から9世紀前半が考えられる。(安田)

3号特殊遺構 SX03

遺構 (図506, 写真483・484)

本遺構は、N21グリッドで検出された住居掘形である。床面は、まったく残存せず、カマド痕跡も認められなかったため、特殊遺構で扱った。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部である。

重複関係を整理しておくとして、周辺遺構の中で最も古く位置付けられ、78・121・156号住居跡に切られている。

堆積土は、2層に分層された。人為堆積土と考えている。l1に、焼土・炭化物が土器片と一緒に含まれていた。底面は、緩やかに凹凸があり、締まっていなかった。

本遺構の平面プランは、中の抜けた方形基調を呈している。北西隅と南東隅は、突出しており、規模は、東西4.5m、南北5.0mを測る。住居跡としては、中型のものであろう。

遺物は、土師器片164点が出土した。層位は、l1に集中している。図示可能な資料に恵まれなかつ

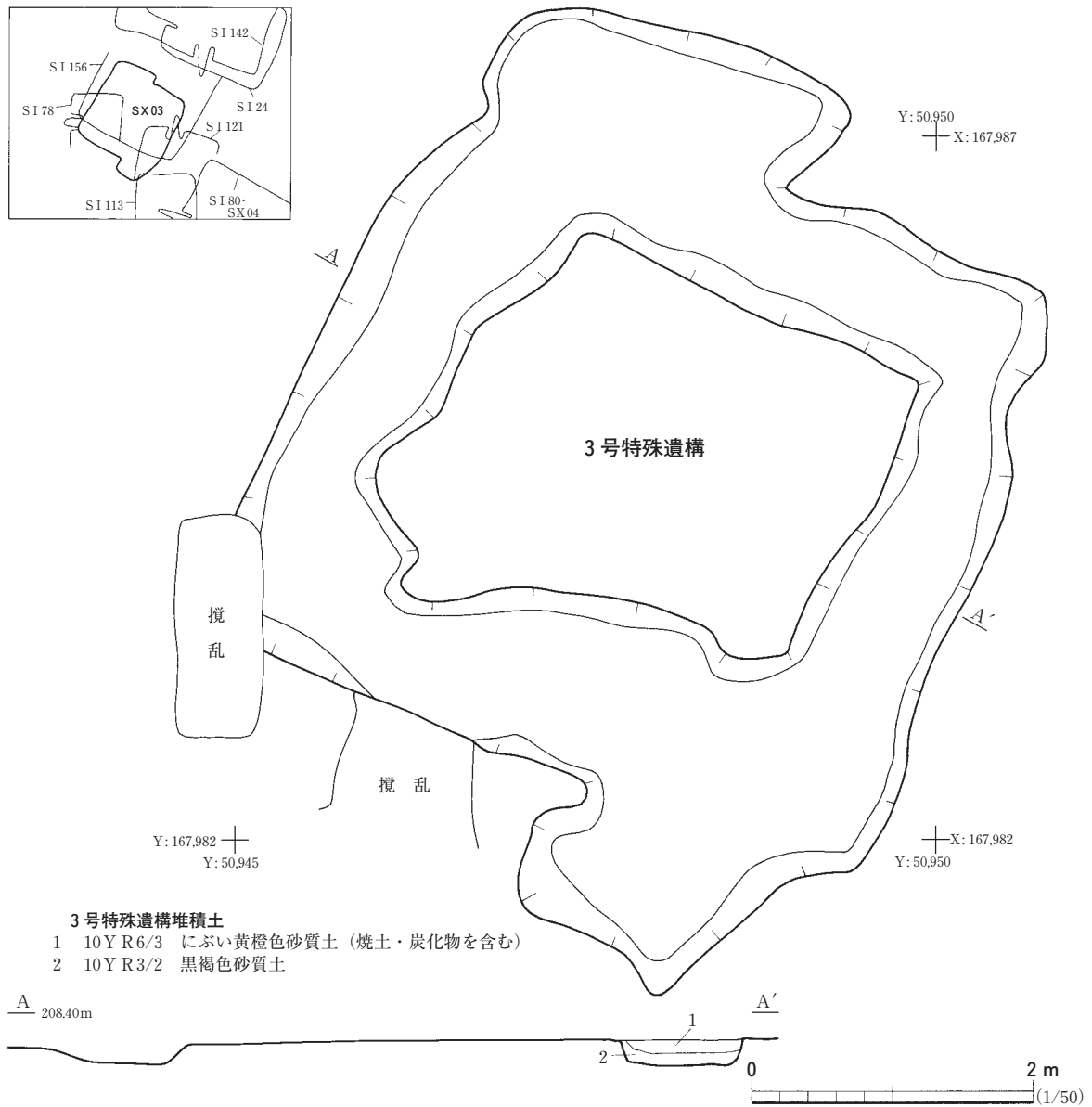


図506 3号特殊遺構

たが、栗囲式に比定される杯・甕の破片が認められた。

ま と め

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面肩部に営まれた住居跡の掘形である。床面はまったく残存せず、カマド痕跡も認められなかった。

時期は、重複遺構の所見と出土遺物から、栗囲式期と考えている。

(菅原)

5号特殊遺構 S X 05

遺 構 (図507, 写真484)

本遺構は、O20グリッドで検出された2本の平行する溝跡である。営まれたのは、後背湿地に面した自然堤防の東斜面である。

他の遺構との重複関係は、認められない。

本遺構は、規模・方向が1号特殊遺構と類似している。したがって、一連の広がりやを部分的に検出しただけで、両者は、同一遺構と考えている。

本遺構を構成する2本の溝跡は、1.4mの間隔で、平行に並んでいる。規模には斉一性がみられ、幅42~50cm、検出面からの深さ18~21cmの範囲におさまる。

遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、後背湿地に面した自然堤防の東斜面で検出された遺構である。

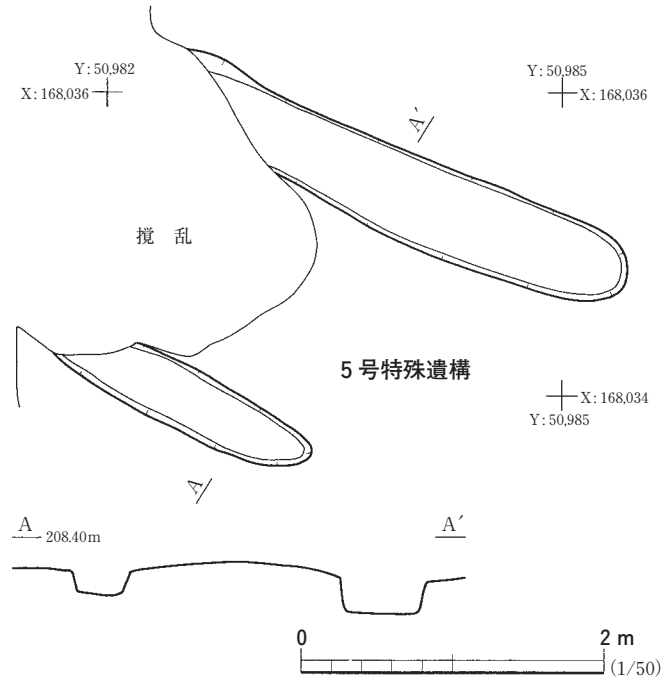


図507 5号特殊遺構

1号特殊遺構と一連の低地に営まれた畝状遺構 = 耕作痕と推定している。

時期は、表杉ノ入式期~栗囲式期の幅の中で捉えられる。

(菅原)

7号特殊遺構 S X 07

遺 構 (図508, 写真484)

本遺構はM24グリッドで検出された焼土面を伴う施設である。営まれたのは、調査区南端近くの西向き斜面である。

平面プランは、楕円形を呈しており、規模は90cm×71cmを測る。底面は平坦で、壁は直線的に外傾して立ち上がる。

堆積土は2層に分層された。人為堆積土と考えている。

焼土面は、 ℓ 1 上面に形成されており、検出状態で52cm×36cmの範囲に認められた。断面の厚さは、4cmである。

この焼土面に食い込むような状態で、逆さに伏せられた須恵器が出土した。意図的に置かれたものと推定される。

遺 物 (図508, 写真639)

遺物は、須恵器片1点が出土した。

図508-1は、須恵器盤の高台部と考えられる。裾が強く外反して開いており、内端接地する。また、その外面側には縦位の刻みが施され、装飾的效果をあげている。このような類例は、多摩ニュータウンNo.342遺跡1号窠跡で認められる。

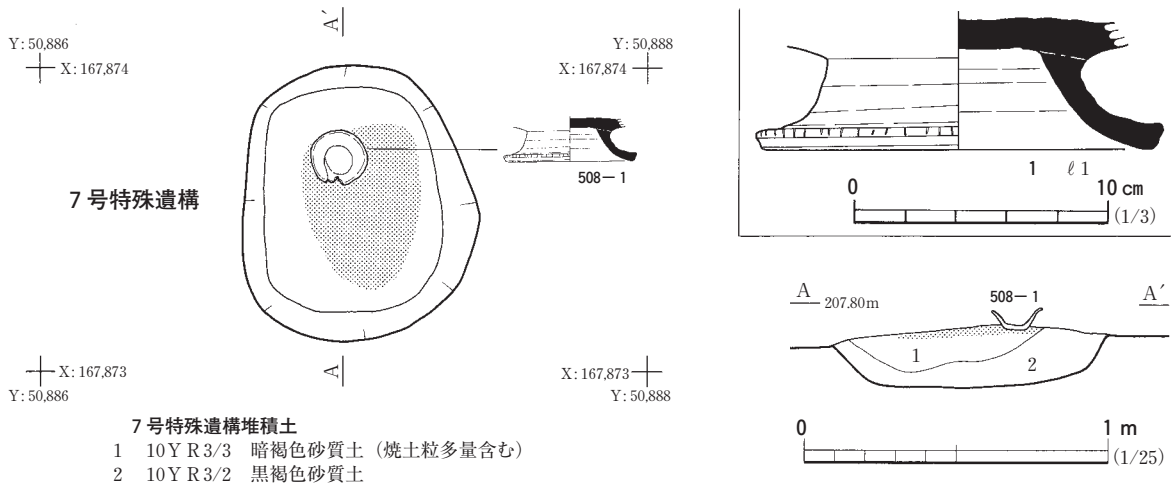


図508 7号特殊遺構・出土遺物

ま と め

本遺構は、焼土面が形成され、意図的に置かれたとみられる須恵器を伴っていた。したがって、祭祀に関連する性格を有していたと考えられる。 (菅原)

第6節 遺物包含層

概 要 (図509・510, 写真485～493)

遺物包含層 (L II 3) は、O20グリッドの東向き斜面から検出された。標高205.9mの等高線に平行して多量の遺物が帯状に検出され、さらにその斜面下側には、被熱した礫がまばらに散在していた。

時期は、栗圀式期に比定される。

この包含層は、斜面上に被熱痕跡のある5～7号土坑が横に並んでおり、ここで行われた祭祀の道具が廃棄されたと考えられる。5号土坑の北側には、さらにもう1基土坑が認められ、調査できなかったが、これも、祭祀の施設跡であったと考えている。

包含層の形成された場所は、後背湿地の落ちぎわである。図509に、スクリーントーンを貼った部分は、土層が青白くグライ化していた。当時は、常時水に漬かった状態であったと推定され、桃核・クルミ・流木といった自然遺物類が多数検出されている。遺物の帯は、ちょうどこの部分の縁と重なり合っており、ここで行われたのが、水辺の祭祀であったことを明確に示している。

遺 物 (図511～523, 写真674～686)

遺物は、土師器片3,787点、須恵器片69点、土製品15点、石製品4点、金属製品1点が出土した。土器類は、器形全体の復元できるものがほとんどで、なかには、器面の一部を意図的に壊したものが認められた。とくに土師器甕にそれは顕著であり、胴部もしくは底部を粗く穿孔したものが8個体確認された (図513-1～4, 図514-1・3・4, 図516-4)。

同じような行為は、1・2号溝跡の祭祀遺物にも少なからず確認され、栗圀式期の祭祀では頻繁

に行われていたと考えられる。

また、手づくね土器・ミニチュア土器や、土製玉類・土製模造鏡といった祭祀固有の遺物も豊富に出土している。

以下、解説していく。

土師器杯 図511-1～9・11・12は、土師器杯になる。このうち、1～8は有段丸底杯である。1と2は、器高が低く、口縁部の開いた器形を呈している。2の底部は平底風であり、安定感がある。3は、器形全体に丸みがあり、口縁部外面がヘラミガキ調整されている。4・7・8は、1より器高が高めで、体部下端の位置が低い器形を呈している。5は、異形の杯である。体部下端の段は、器高の中ほどにあり、椀状の深い器形を呈している。また、内面はナデ調整で仕上げられ、ヘラミガキ・黒色処理が行われていない。6は、段の形成が曖昧で、無段丸底杯に近い器形である。9は、須恵器模倣杯に分類される。口縁部は直立しており、外面はヘラミガキ調整されている。11は、口縁部が内傾する杯である。器面調整は簡素であり、外面はハケメ調整、内面は底部を除いてナデ調整だけで仕上げられている。この点では、12も類似した特徴を備えており、口縁部形態に違いがあるだけで、質感は良く似ている。

小～中型の土師器甕 図511-13～16、図512-1～9、図513-1、図515-3・6は、小～中型の土師器甕になる。それらは、本来、煮炊具であったとみられ、使用痕跡の観察される個体もある。したがって、祭祀に使用されたとはいえ、そのために製作された土器ではないと考えられる。順に解説していくと、まず、図511-14は逆台形の器形を呈しており、頸部には括れが認められない。胴部外面はハケメ調整の後、軽いナデ調整が加えられている。図511-13は、頸部が内傾し、口縁部が直立する器形を呈している。胴部外面調整は、ハケメである。それらを除いたほとんどは、口頸部が外反ないし外傾するタイプであり、外面調整は、やはりハケメで統一されている。図511-15・16、図512-4・6・8は、その中でも、寸詰まりの器形をなすもので、口径が器高を上回るか、それに近い数値を示す。他は、やや縦長の器形を呈しており、図513-1では、祭祀に伴なう器面の一部破壊が行われている。

長胴タイプの土師器大型甕 図513-3・4、図514-1～4、図515-4・5、図516-1は、長胴タイプの土師器大型甕になる。このうち、図513-3・図514-2・4は、口径が胴部径より大きな1群である。図513-3は、胴部上半が大きく膨らんでおり、図514-2→図514-4の順にそれが弱くなる。図513-4・図514-1・図515-4・図516-1は、胴部径の方が口径より大きく、胴部が下膨れをなす1群である。中でも、図513-4は、胴部下半の膨らみが大きく、図513-3とは対照的な器形を呈している。また、図516-1は、器高35cm前後の大型品で、胴部全体の横幅が広めである。図514-3は、口径が胴部径よりわずかに大きく、胴部がラグビーボール状を呈している。

土師器球胴甕 図516-2～4、図517-1～3、図518-1～3、図519-1～4は、土師器球胴甕になる。胴部外面調整には、ハケメが卓越しており、一部にヘラミガキ・ナデが認められる。それらは、大きさの違いで、小型の図516-2・4、中～大型の図516-3、図517-1～3、図518-1～

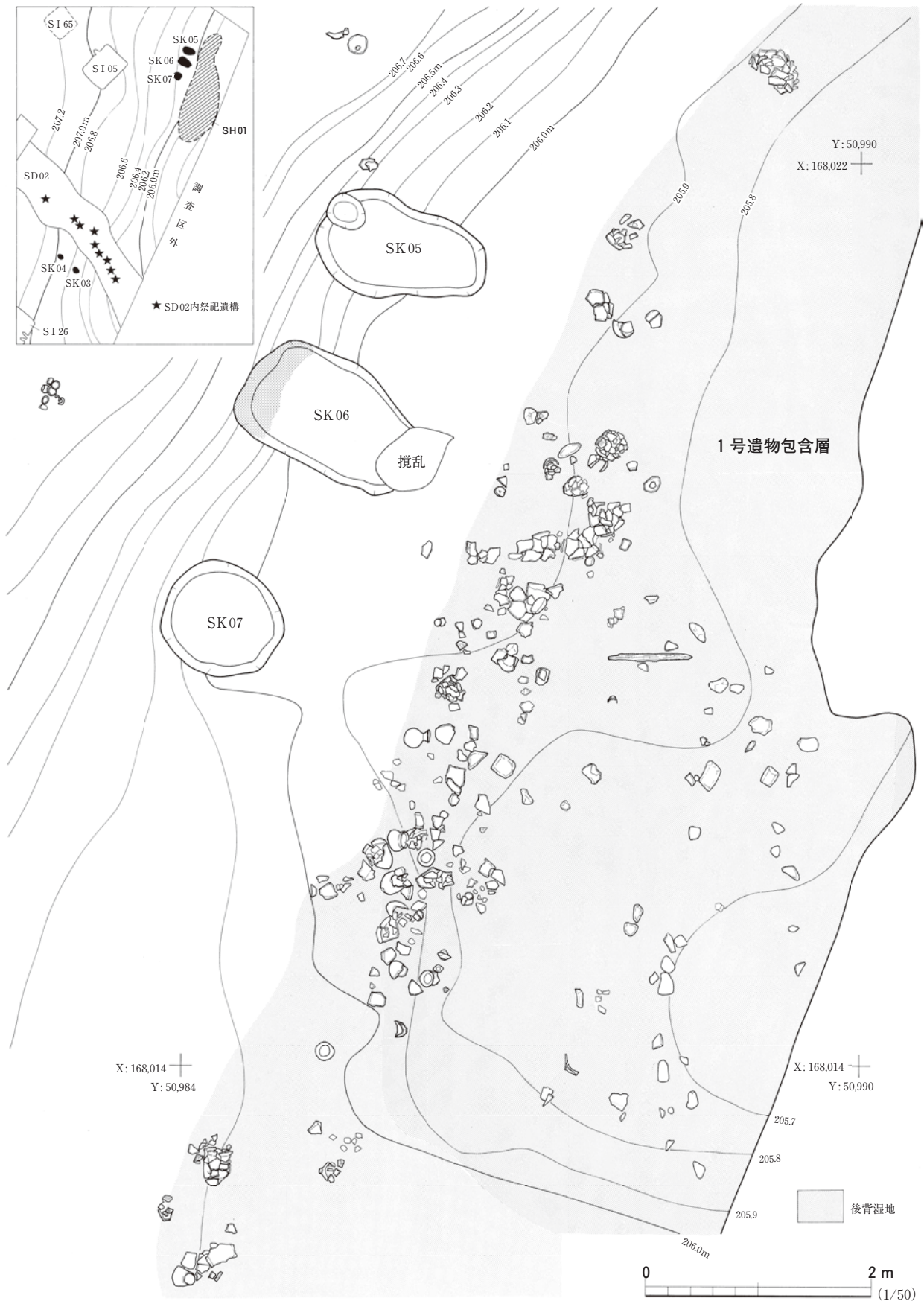


図509 1号遺物包含層

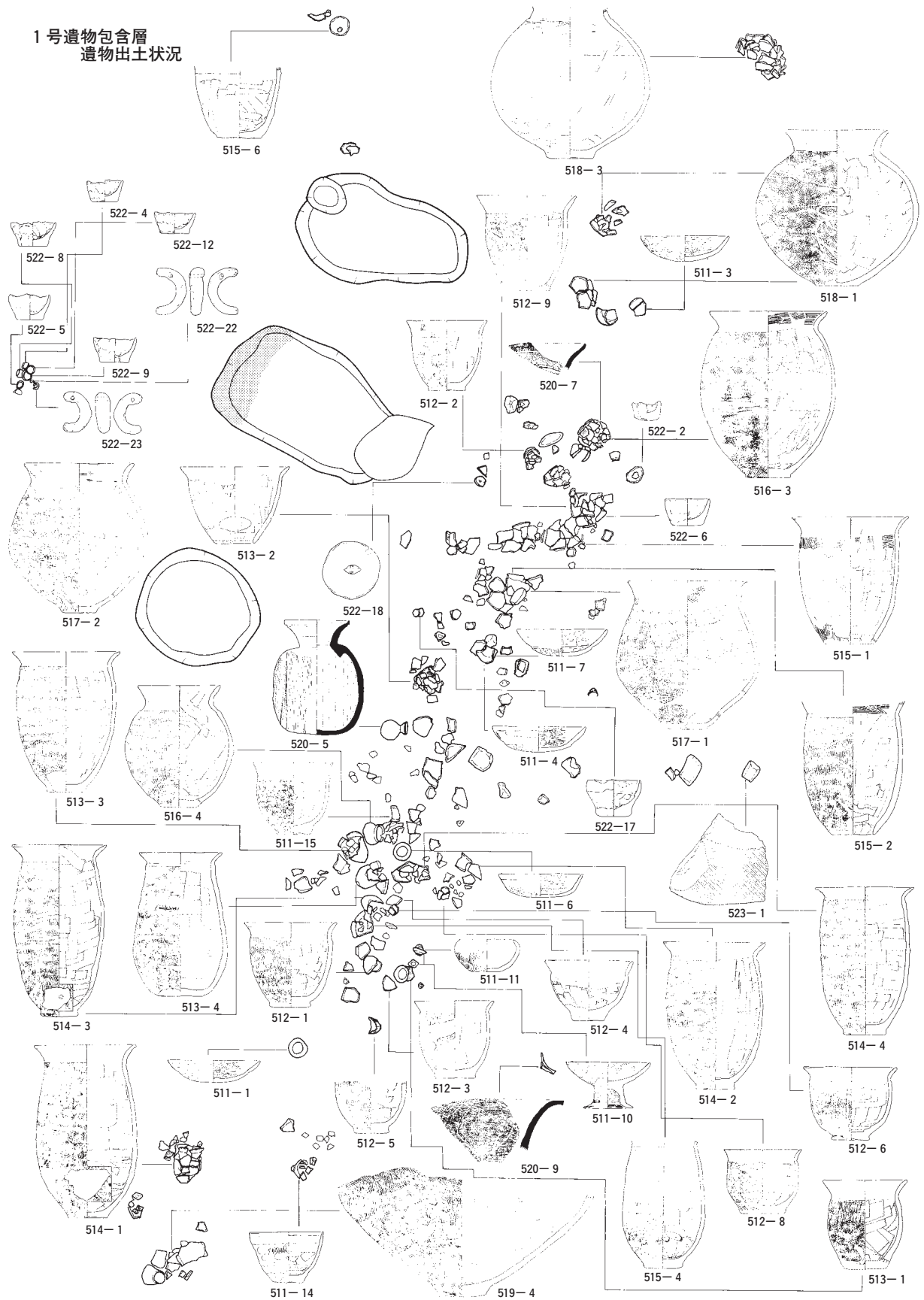


图510 1号遺物包含層遺物出土狀況

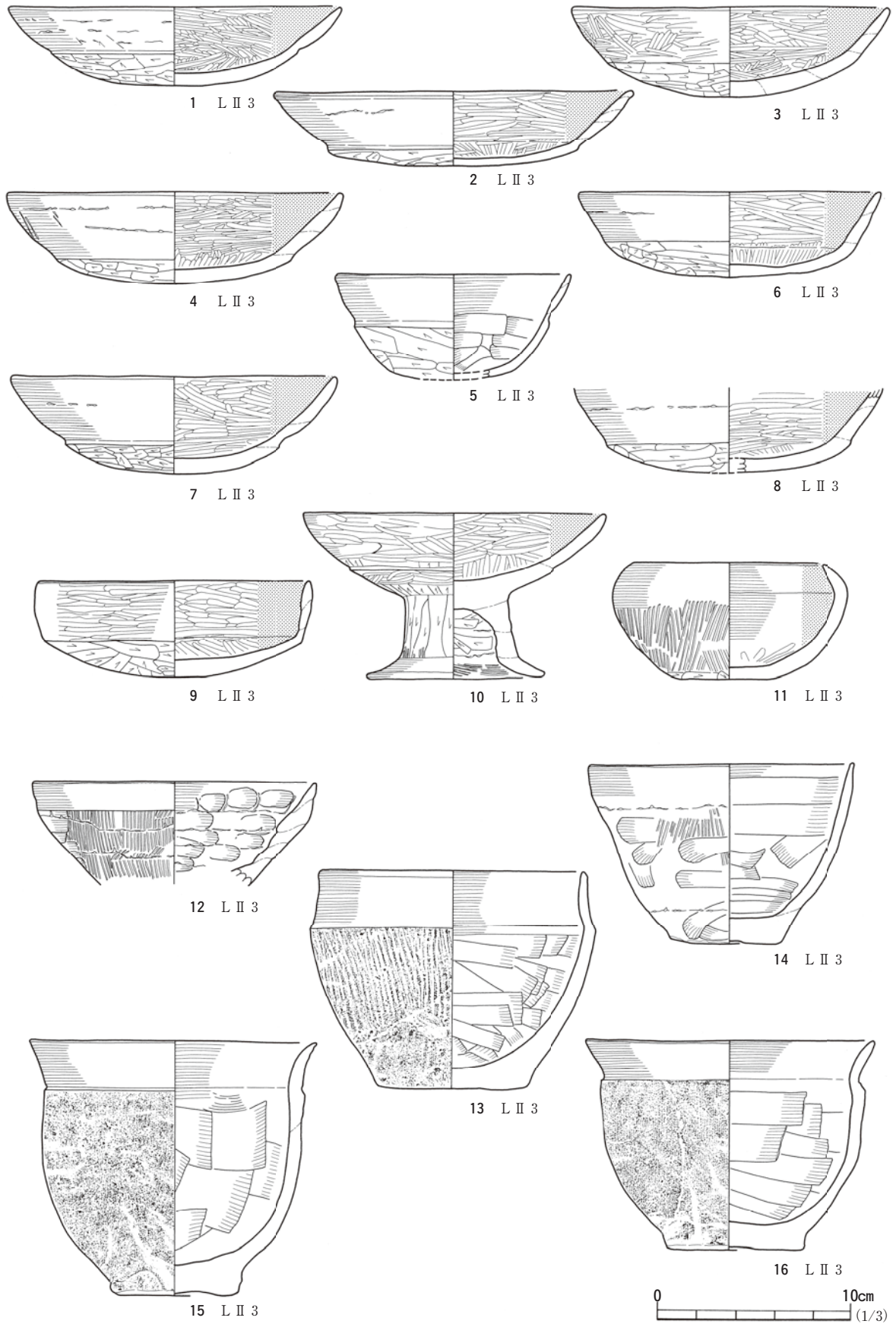


図511 1号遺物包含層出土遺物 (1)

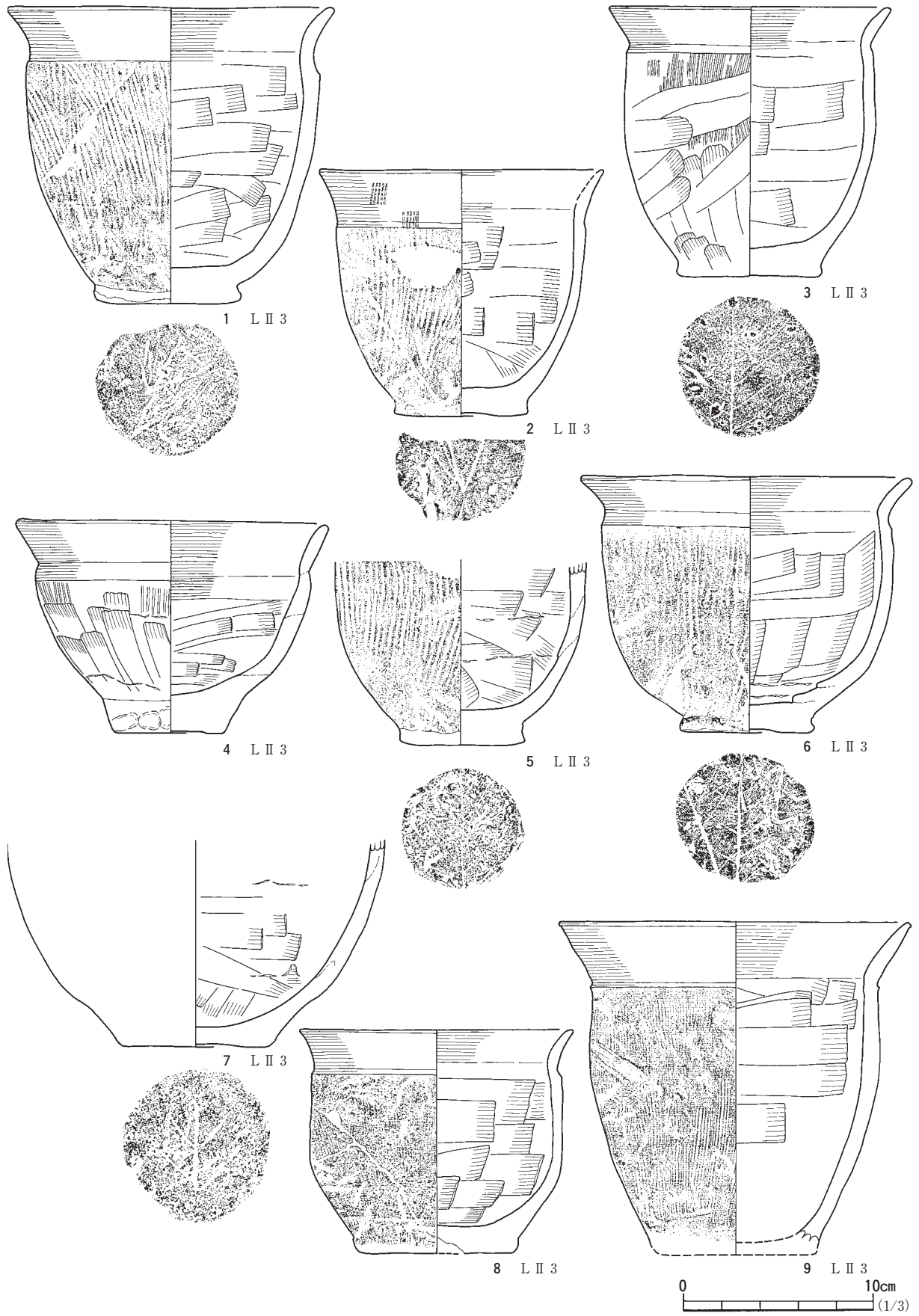


図512 1号遺物包含層出土遺物 (2)

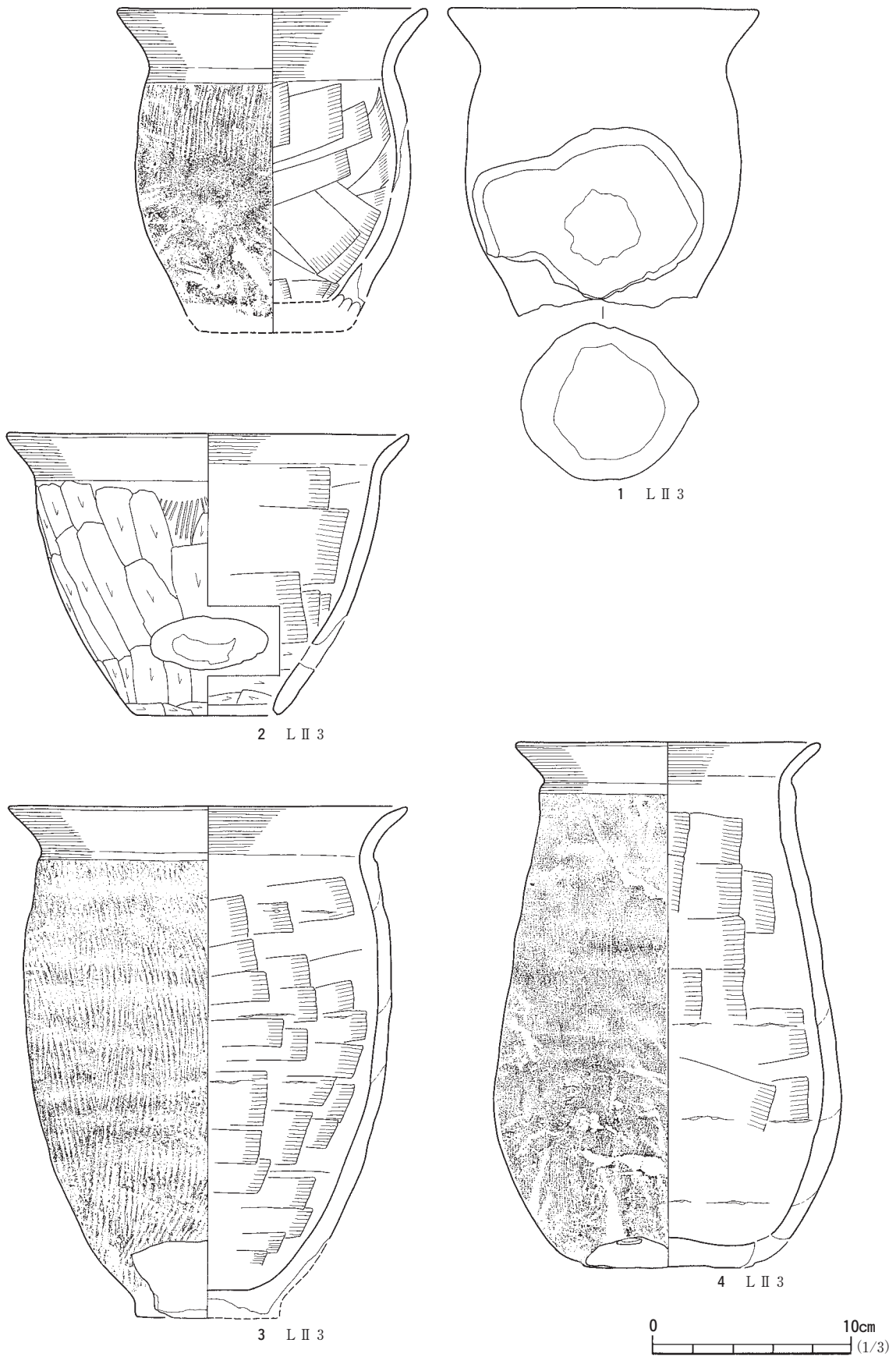


図513 1号遺物包含層出土遺物 (3)

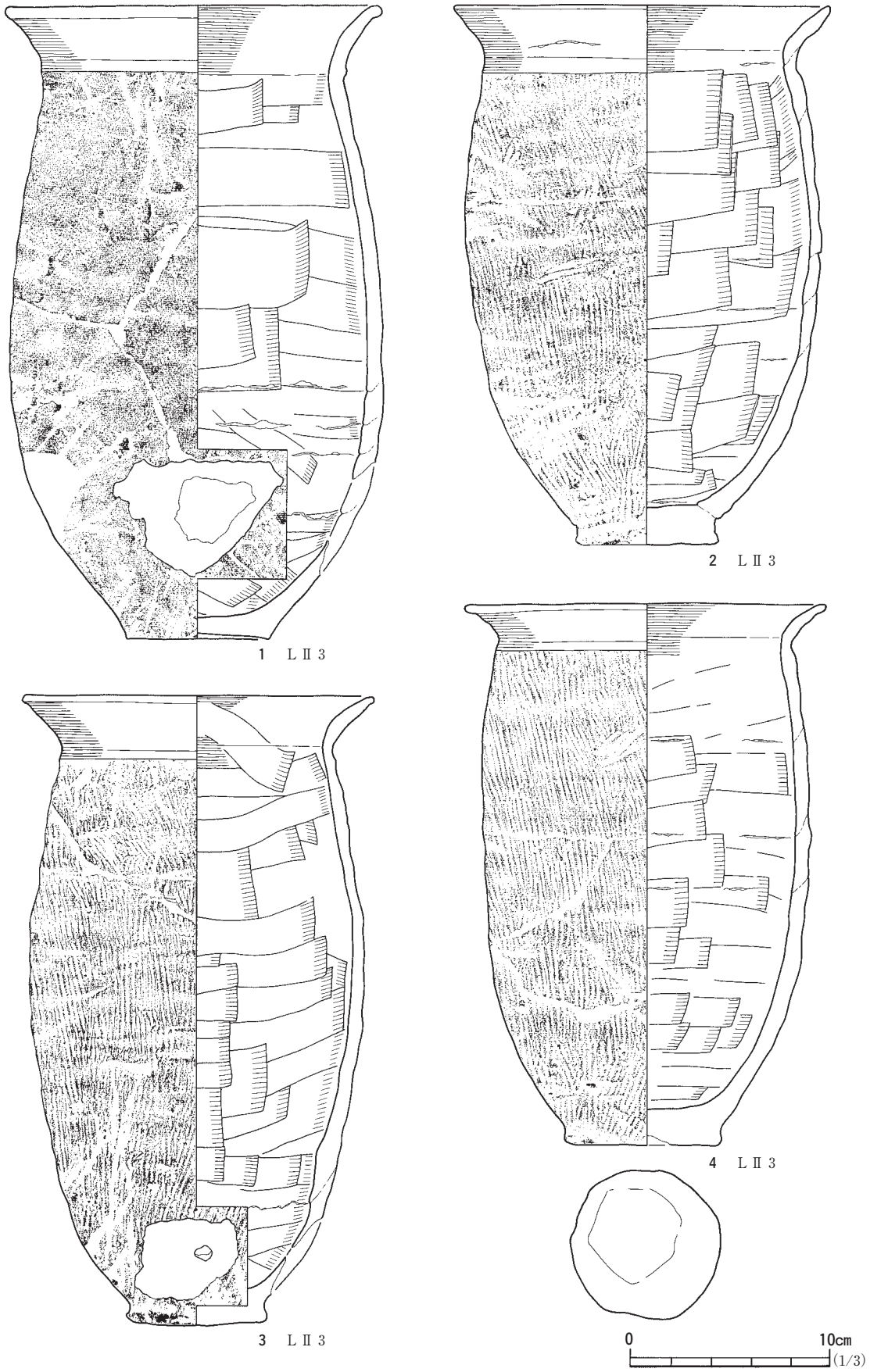


图514 1号遺物包含層出土遺物 (4)

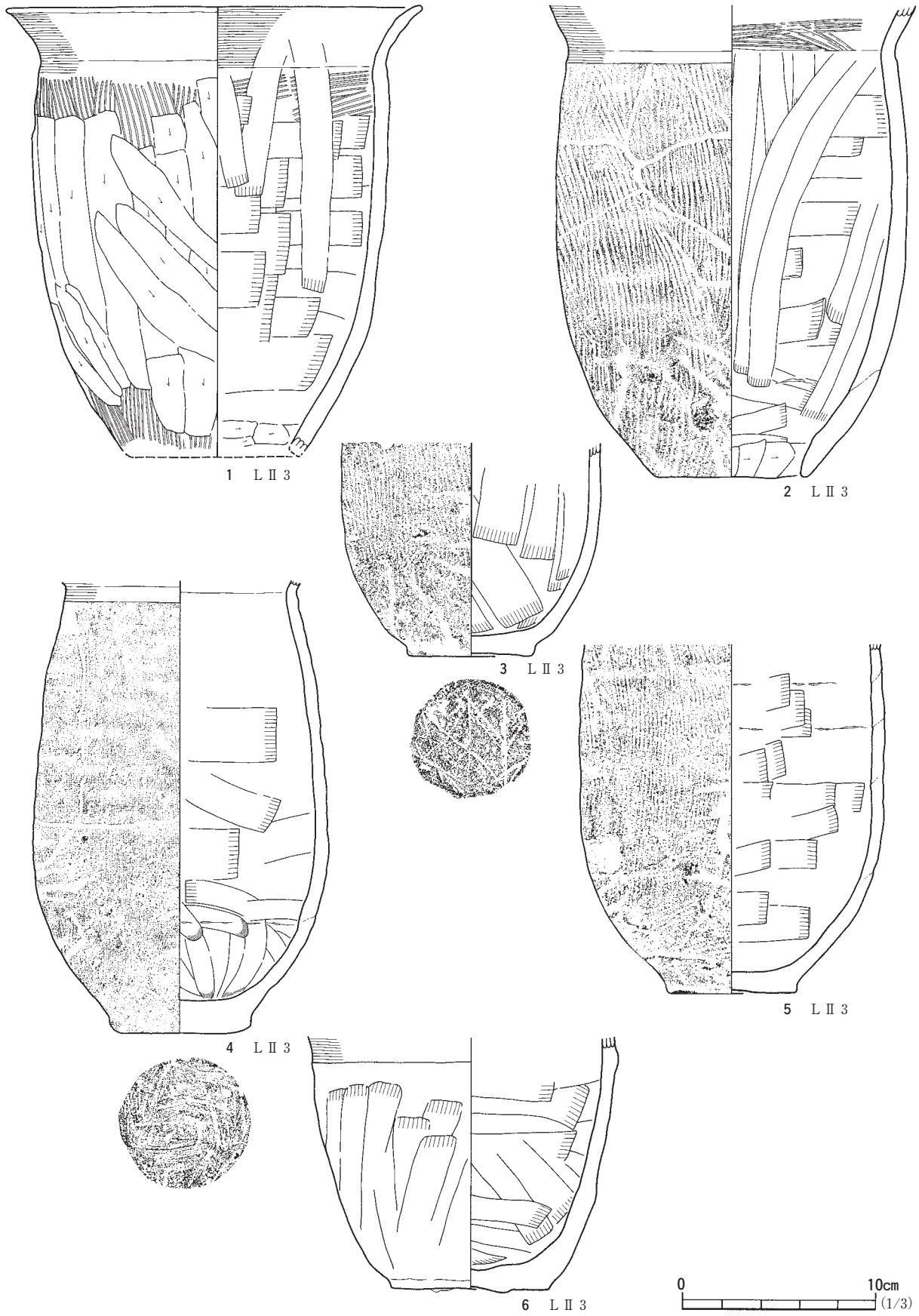


図515 1号遺物包含層出土遺物 (5)

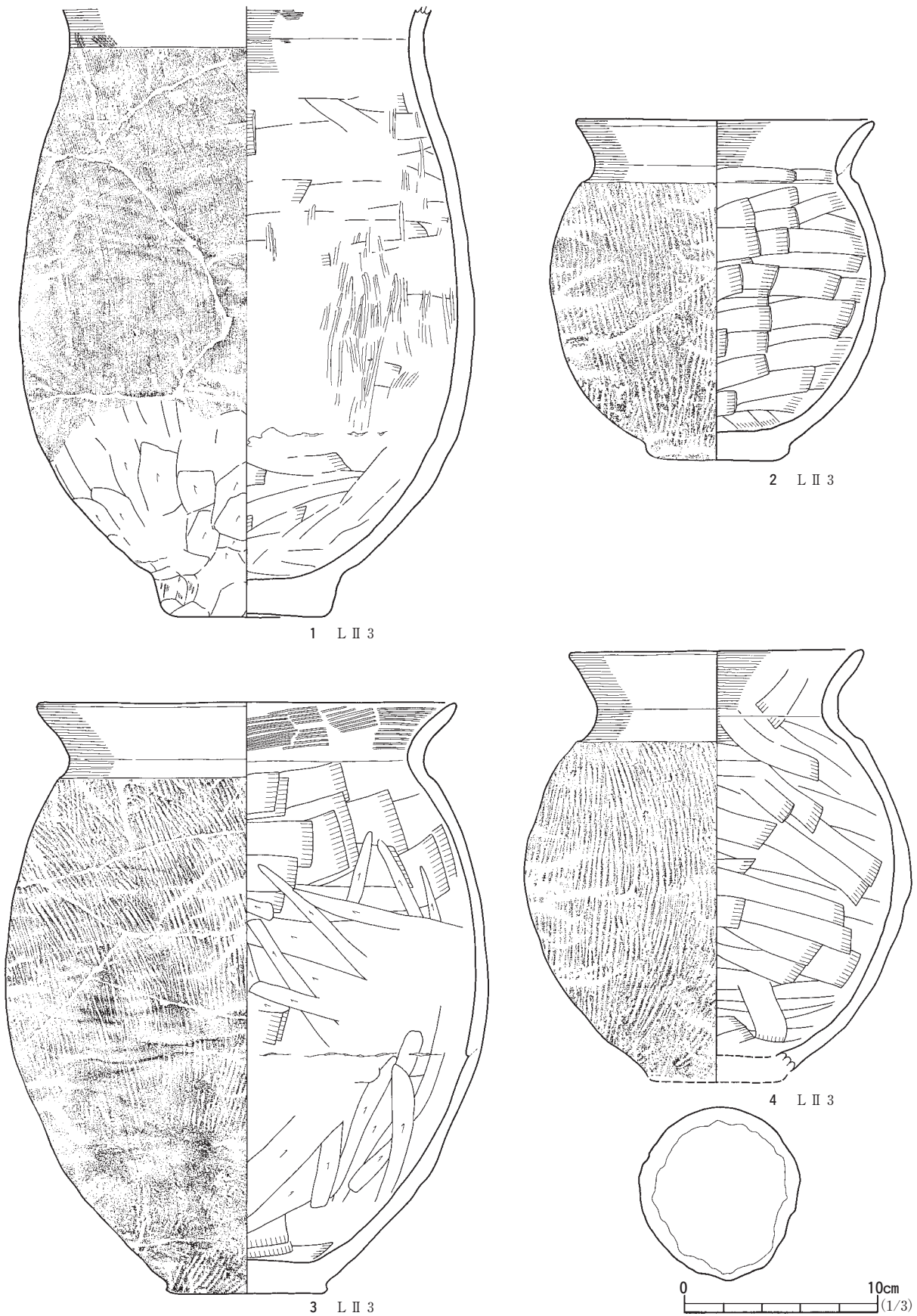


图516 1号遺物包含層出土遺物 (6)

3, 図519-1~3, 特大型の図519-4に分類される。小型の2点は, どちらも整った胴部形態をなしており, 図516-1はやや広口である。中~大型の10点のうち, 図517-3, 図518-1~3, 図519-1・2は, 頸部が強く窄まっている。図517-1・2, 図519-3は広口である。特大型の図519-4は, 下半部だけのため, 器形全体の特徴は知ることができない。

須恵器杯 図520-1は, 須恵器杯になる。器高が高めで, 全体に丸みを帯びた器形を呈している。口縁部は内傾気味に立ち上がり, 先は丸く収めている。器壁は厚めであり, 外面のロクロメは明瞭である。

須恵器高杯 図520-2は, 須恵器高杯の脚部になる。長脚2段の4方透かして, 外面には波状文が施されている。透かしは上下に揃わず, 互い違いに施される点が特徴的である。また, 胎土には大粒の白色砂粒の混入が顕著に目立つ。

須恵器瓶 図520-3は, 須恵器瓶の口頸部になる。口縁端部が上下に挽き出されており, 内面は沈線状をなしている。

須恵器小壺 図520-4は, 須恵器小壺になると思われる。胴部上半の破片であり, 外面に櫛歯状の列点刺突文が施されている。

須恵器横瓶 図520-5は, 須恵器横瓶になる。この資料は無傷の完形品である。胴部は寸詰まりで, 圧縮されたようになっており, 当該器種としては古手の要素を備えている。頸部は直立気味に外傾しており, 口縁部は強く外反して, 先端が短く上に摘み出されている。胴部外面調整は, カキメである。

須恵器鉢 図520-6は, 須恵器鉢になると思われる。口縁部は直立しており, 先端は内傾する平坦面をなす。あるいは, 大型器種の高台になるかもしれない。

須恵器甕 図520-7~9, 図521-1は, 須恵器甕になる。図520-7は, 中型品の口頸部片である。端整なつくりであり, 外面には整った波状文が施されている。口唇部は平坦面をなしている。図520-8は, 大型品の頸部片である。残存部からすると, 胴部の肩が張るタイプになると推定される。図520-9は, 大型品の口頸部片になる。口縁部は, 反り返っており, 上端は水平になっている。内外面に波状文が認められる。図521-1は, 器形全体の判明する大型品である。肩の強く張る胴部を有しており, 底部は平底である。外面に平行タタキメ, 内面にアテメが観察される。この甕は, 底部が平底である点で, 当該遺物包含層の遺物としては, 年代的に後出的な要素を備えており, 本当に共伴したのか疑問がある。したがって, 混入の可能性が高いことを明記しておく。

須恵器広口壺 図521-2は, 須恵器広口壺になる。胴部は球形を呈しており, 頸部が直立気味に外傾して, 口縁部が外反する。口唇部は, 平坦面をなす。胴部外面は, カキメ調整されている。

ミニチュアの土師器杯 図522-1は, ミニチュアの土師器杯になる。丸底の整った器形をなしており, 口縁部は短く外傾する。

土師器粗製杯 図522-15は, 土師器粗製杯になる。器形は手づくね土器と違わないが, 口縁部が横ナデ調整されている点に特徴がある。

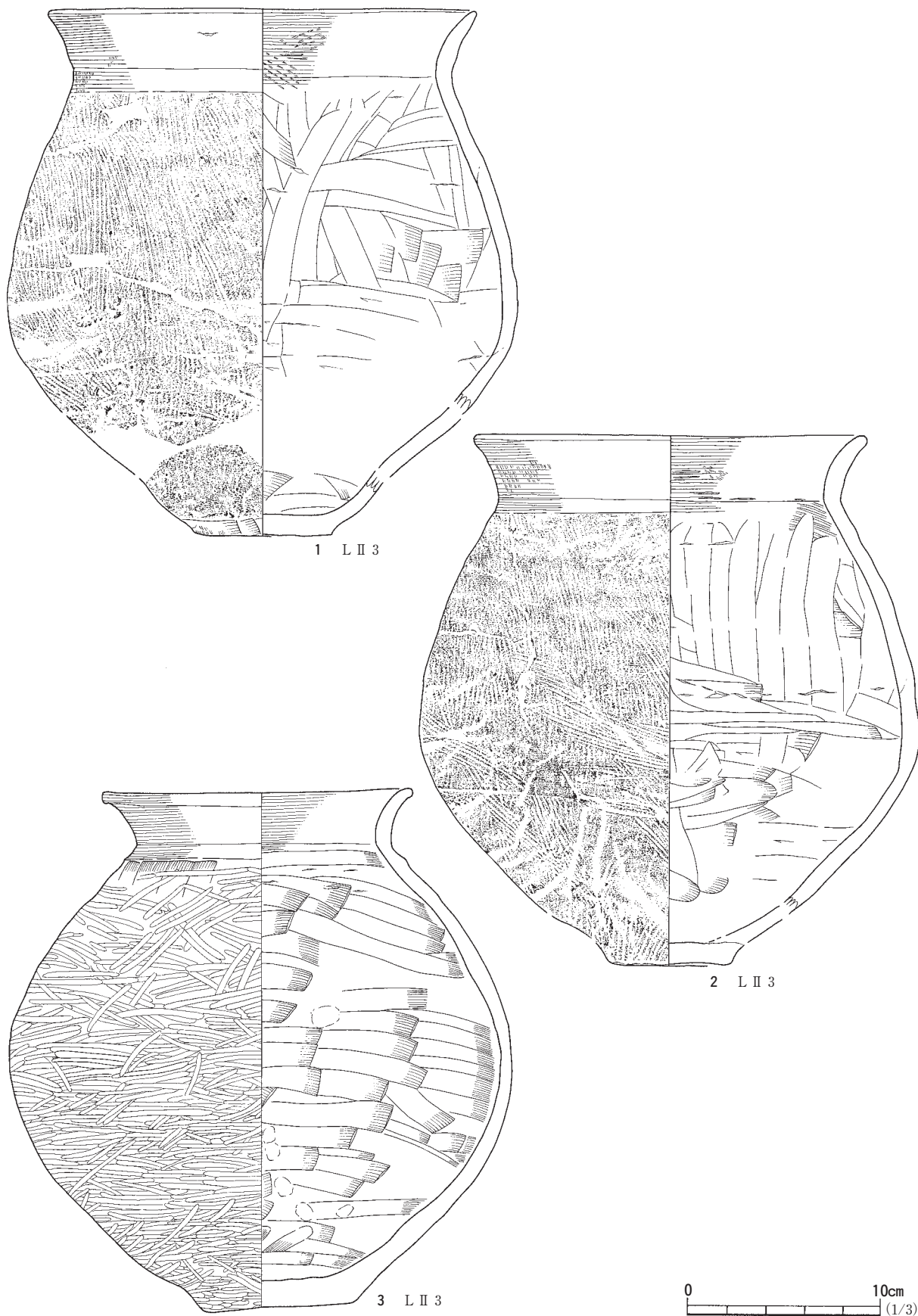


図517 1号遺物包含層出土遺物 (7)

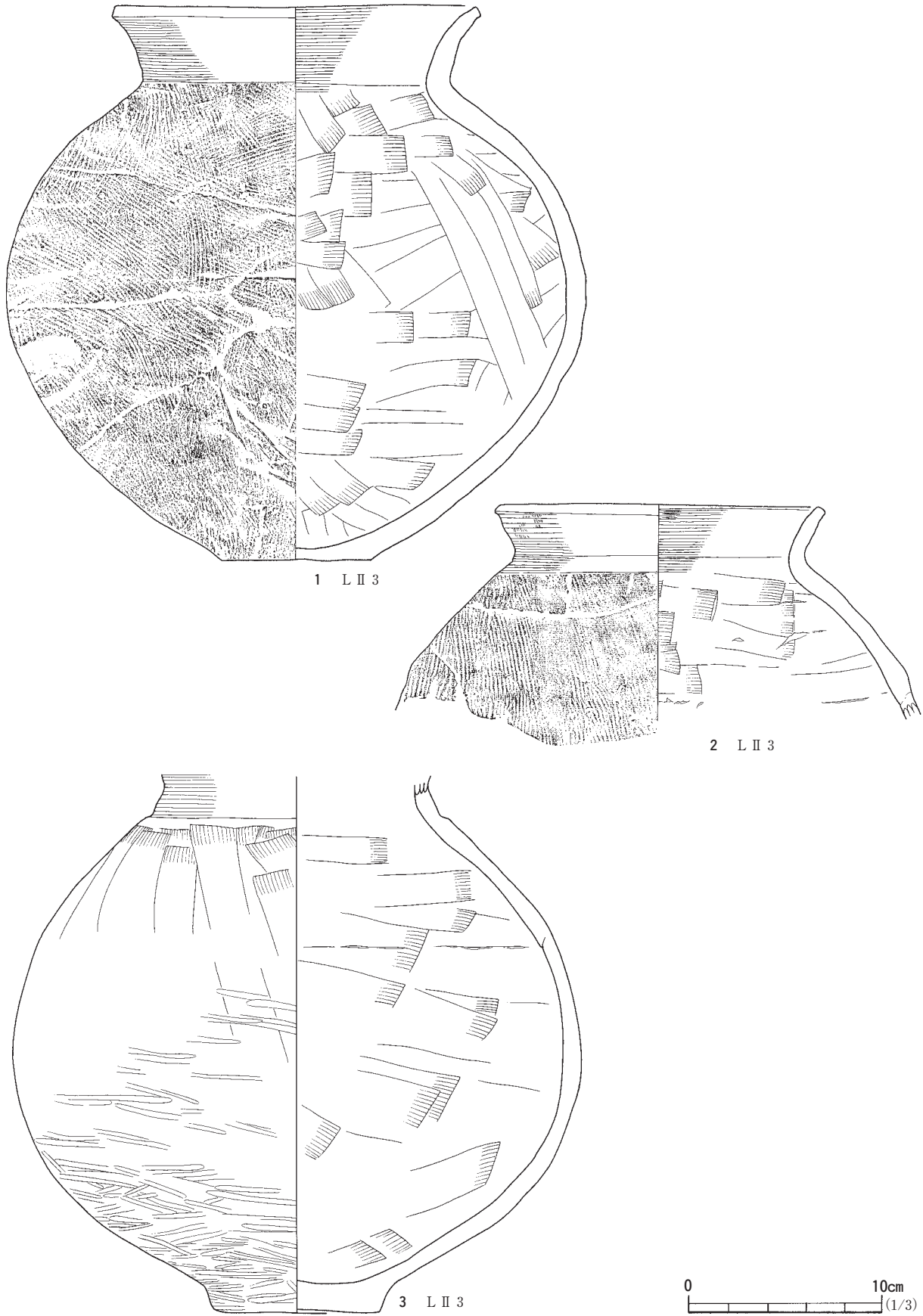


図518 1号遺物包含層出土遺物 (8)

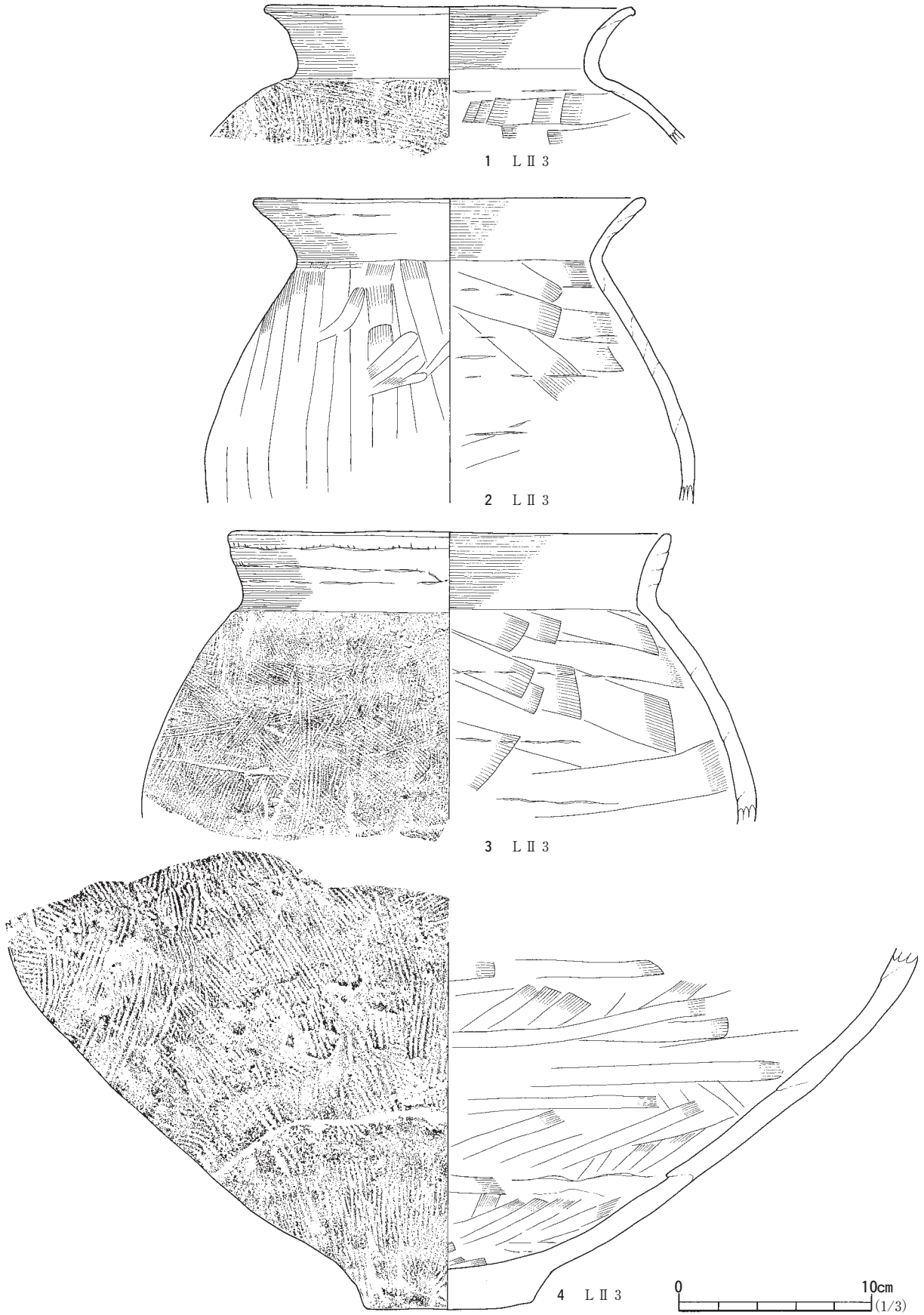


図519 1号遺物包含層出土遺物 (9)

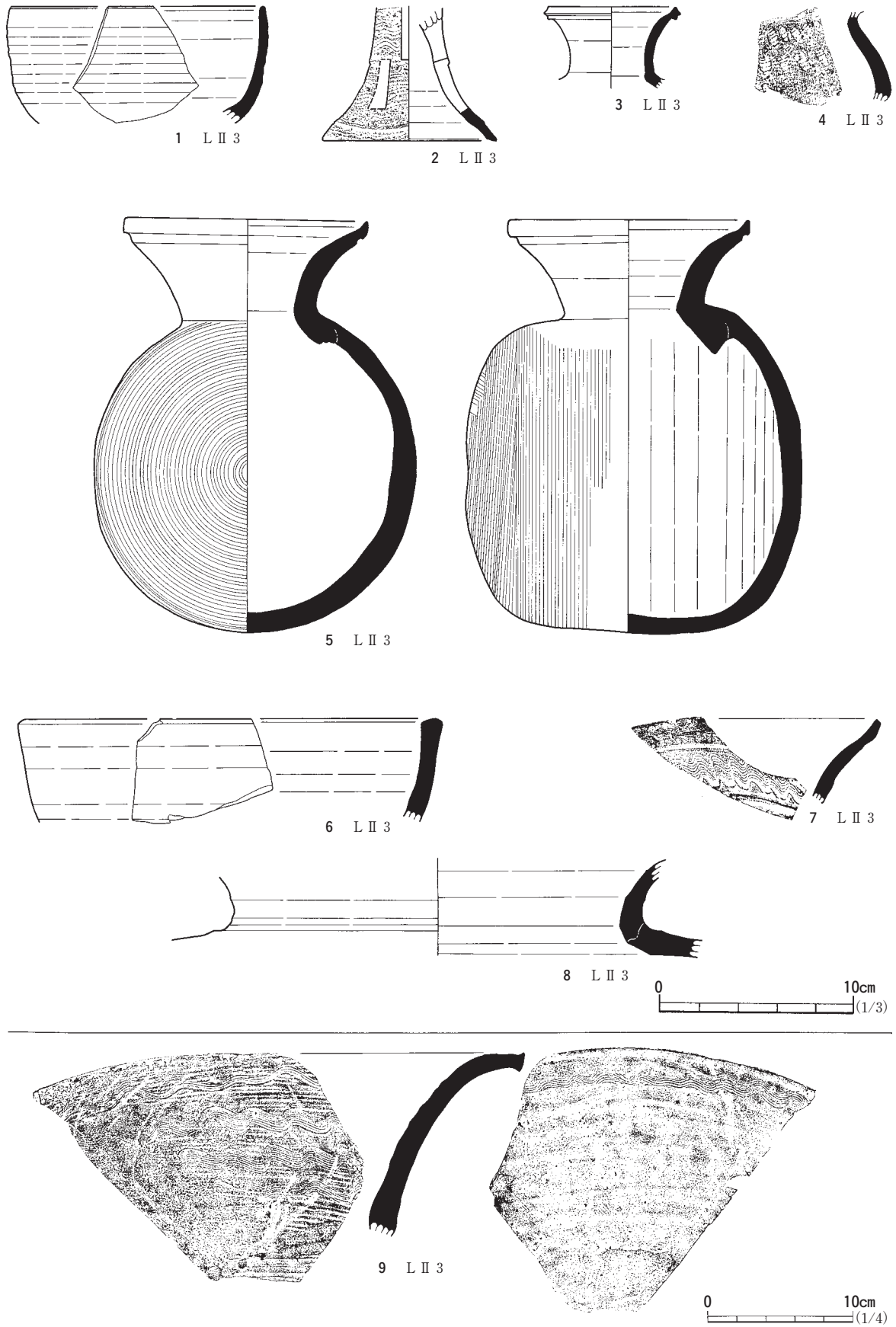


図520 1号遺物包含層出土遺物 (10)

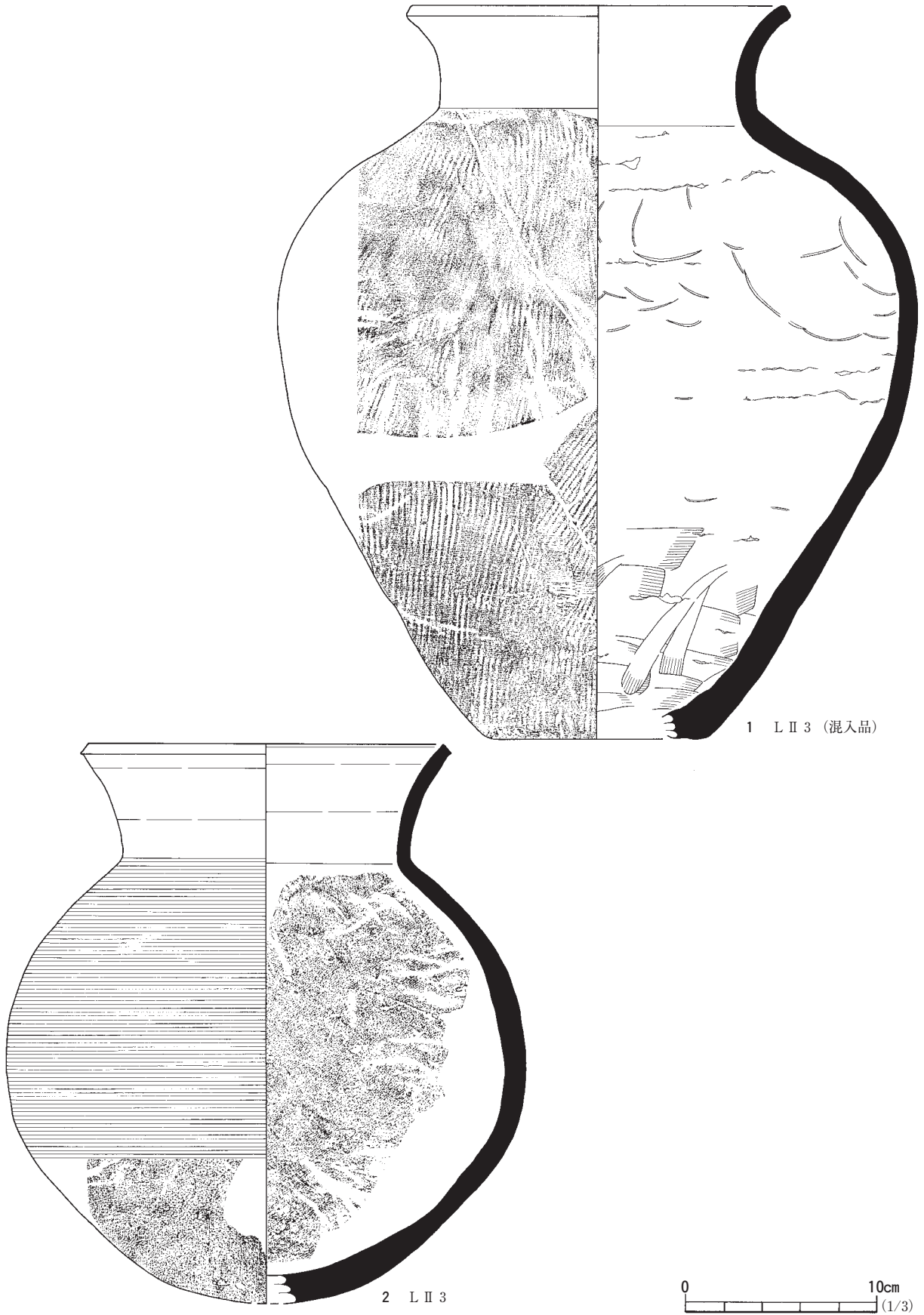


図521 1号遺物包含層出土遺物 (11)

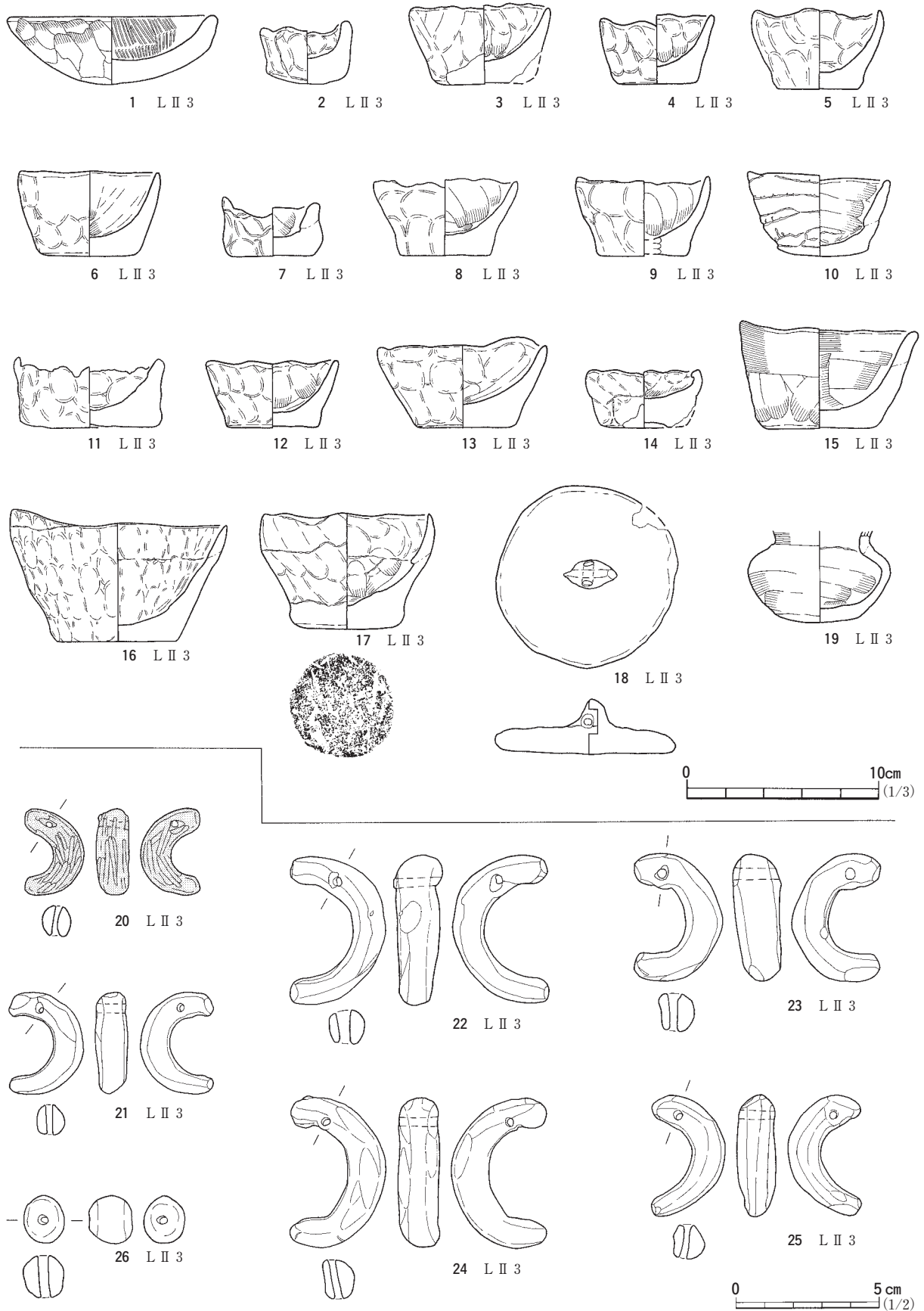


図522 1号遺物包含層出土遺物 (12)

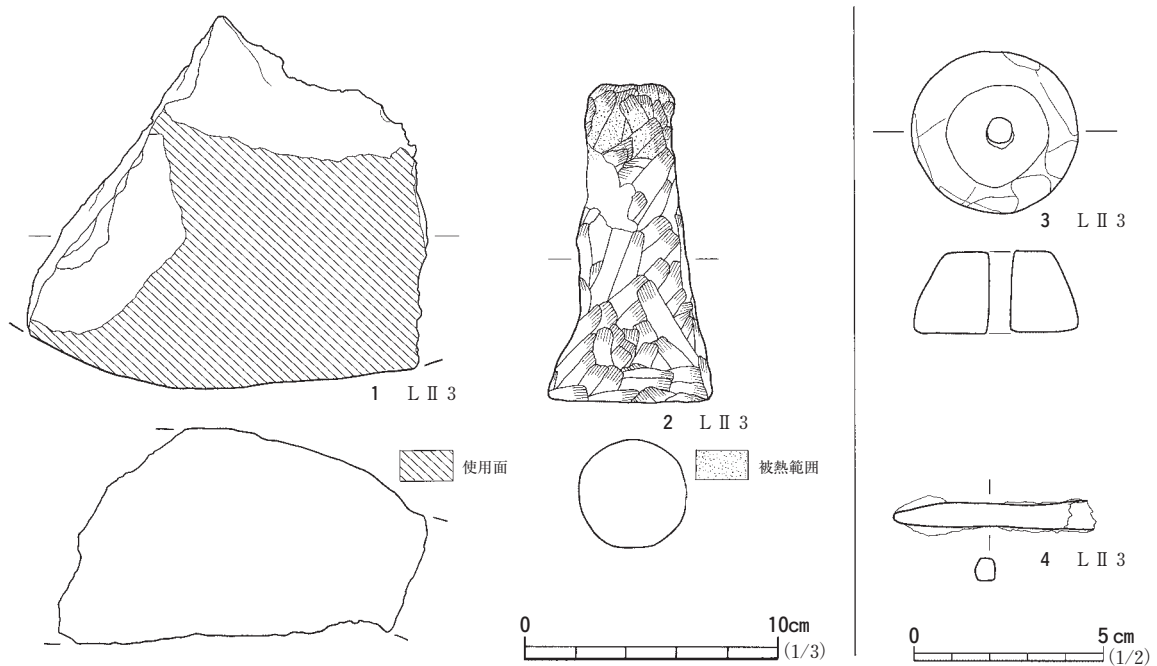


図523 1号遺物包含層出土遺物 (13)

土師器手づくね土器 図522-2~14, 16・17は, 土師器手づくね土器になる。大きさにバラエティがあるが, すべて逆台形を呈しており, 指オサエで成形されている。

土製模造鏡 図522-18は, 土製模造鏡になる。片面中央に孔の開いた鈕が付されている。

ミニチュアの土師器小壺 図522-19は, ミニチュアの土師器小壺になる。胴部は算盤玉状を呈しており, 口縁部が欠損している。

土製勾玉 図522-20~25は, 土製勾玉になる。20は, 表面がヘラミガキ・黒色処理されている。

土製丸玉 図522-26は, 土製丸玉になる。

砥石 図523-1は, 砥石とみられる。スクリーントーンを貼った部分は, 表面に光沢があり, ツルツルしている。

土製支脚 図523-2は, 土製支脚になる。カマドの焚口に面していた部分には, 被熱痕跡が明瞭に残っている。

土製紡錘車 図523-3は, 土製紡錘車になる。完形品である。

鉄鏃 図523-4は, 鉄鏃と考えられる。一部しか残っていない。

ま と め

1号遺物包含層は, 水辺の祭祀の道具が廃棄された場所である。祭祀が行われたのは, 斜面上の5~7号土坑と推定され, 北側には, 同様の施設がさらに1基存在していたと推定される。

祭祀遺物の内容は, 土師器杯・甕類のような日常用品を主体とし, 土製模造鏡や玉類のような祭祀固有の遺物や, 須恵器横瓶のような特殊器物が含まれている。

時期は, 栗圀式期に位置付けられる。古墳時代祭祀の最終形態を示す良好な資料と評価することができよう。

(菅原)

第7節 遺構外出土遺物

遺構外からは、膨大な量の遺物が出土している。

時期的には、古墳時代後期～平安時代前半にまたがっており、その中で主体を占めるのは、栗圀式の土師器である。

以下に、図示遺物の解説を加える（図524～548、写真686～714）。

土器・土製品

〔口口土師器杯〕 図524，図525-1～7に掲載した。表杉ノ入式に比定される。

特徴的なものをみていくと、まず、図524-4・7は、口口土師器杯の最も初源的なものに位置付けられる。年代は、8世紀代の中におさまると考えられる。4は、口径：底径比が大きく、内面のヘラミガキが井桁状に加えられている点に、特徴が認められる。7は、山王川原遺跡の類例で、これまでも注目されてきたタイプである。口径：底径比が小さめで、口縁部が内湾して立ち上がる低平な器形を呈している。底部外面には、静止糸切り痕が残っている。

反対に、図525-5・7には、最も後出的な位置付けを与えることができると思われる。口径10cm前後の小型品で、10世紀後半以降に卓越する小皿に該当する。

図524-1・3・12，図525-1・2・4は、大型で器高の高いタイプである。再調整は、図524-1・12，図525-2・4に回転ヘラケズリ調整が、図524-3，図525-1に手持ちヘラケズリ調整が施されている。また、図525-1・4は、底部外面に回転糸切り痕が観察される。

図524-6・17は、上述の6点を小型化したタイプになる。このうち、6は体部が膨らんで、口縁部が短く外反する磁器指向型である。17は、底部外面に焼成後の穿孔が認められる。

図524-9・図525-3は、高台杯になる。図525-3は、高台部を欠いているが、杯部の器形は明らかに椀形を呈している。このことから、9世紀後半以降の所産に位置付けられる。

墨書は、5点で確認されている。図524-8は、体部外面に「生」、図524-9は、底部外面に「生」、図524-10は、体部外面に「林」が観察される。また、図524-12・13は、体部外面に判読不明の墨書が観察される。

〔非口口土師器杯・高杯〕 図525-8～16，図526～530に掲載した。特徴的なものを分類し、解説を加える。

椀形杯 ここでいう椀形杯とは、南小泉式に出現した口縁部の外反するタイプである。図526-1～3が該当する。身が深く、口縁部外反の度合いがかなり進んでいる。この特徴から、舞台式に位置付けられると思われる。

有段丸底杯 図525-8・9・11・12・14～16，図526-4～18，図527-2～11・15，図529-1～17，図530-1・2・4・18が該当する。ほとんどが栗圀式に比定され、舞台・国分寺下層式のもの

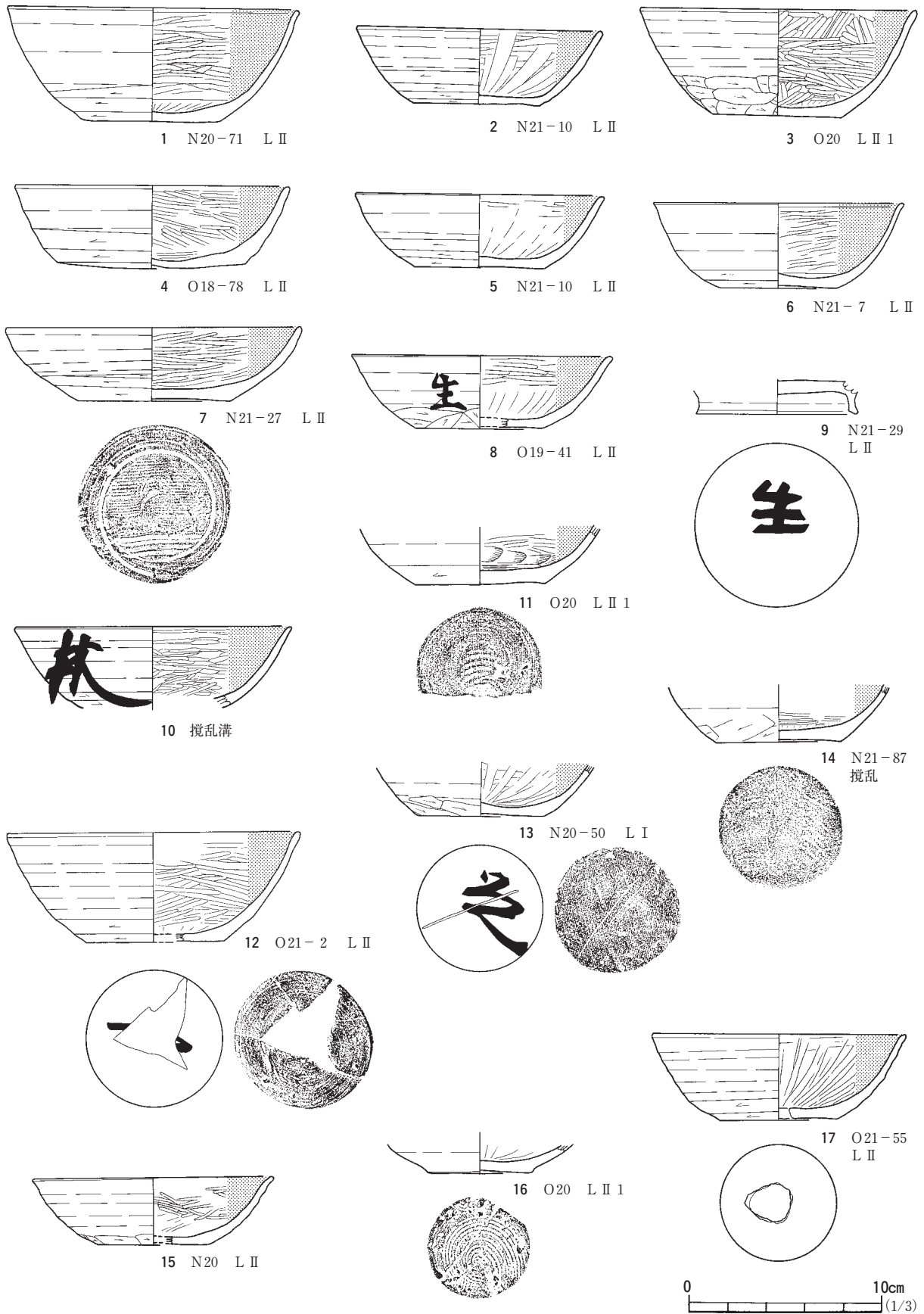


図524 遺構外出土遺物 (1)

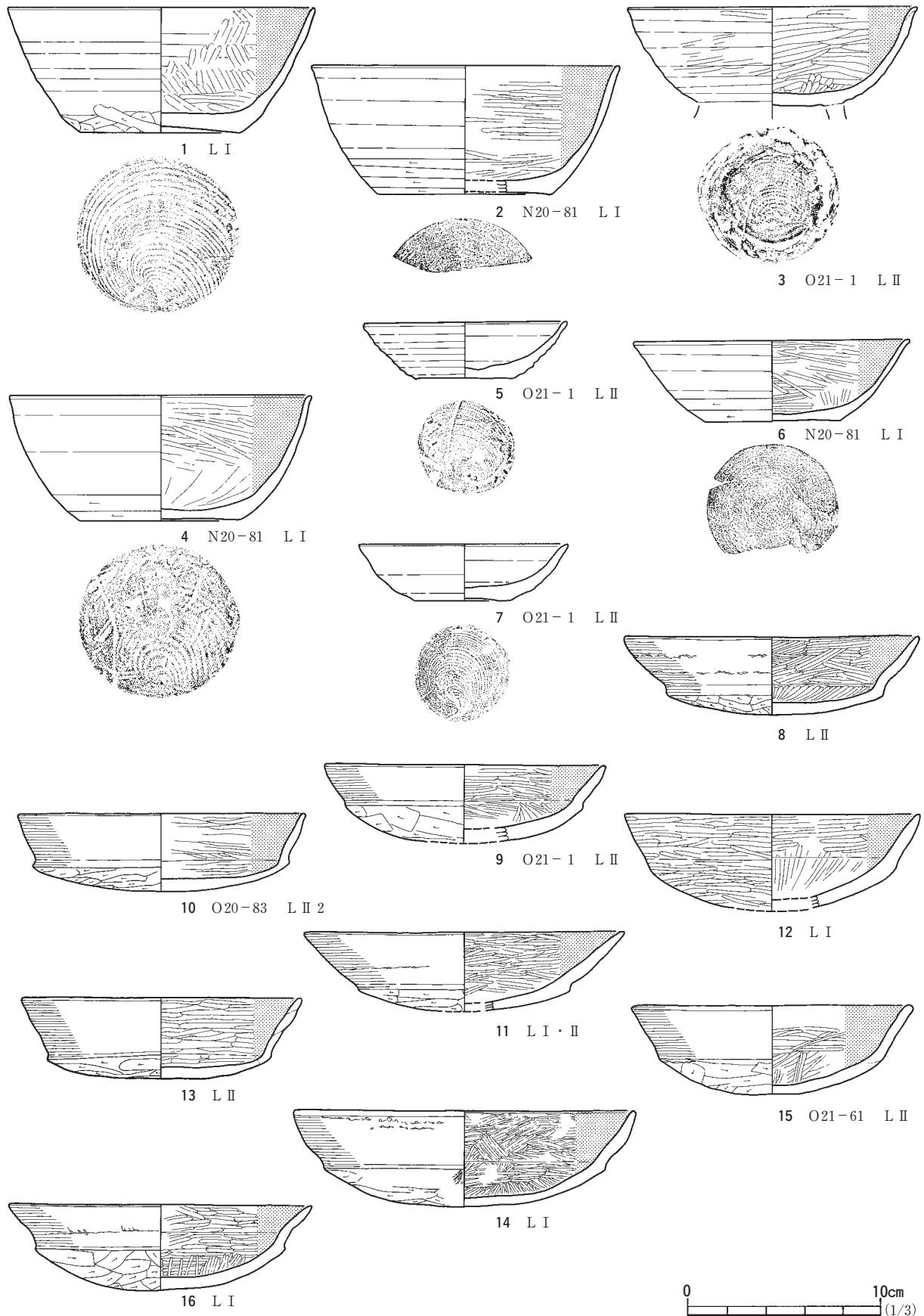


図525 遺構外出土遺物 (2)

を少しだけ含む。ただし、国分寺下層式に関しては、単体での判断が難しい。

特徴的なものを拾っていくと、まず、外面をヘラミガキする一群が目につく。図525-12、図526-10、図527-3・6、図529-1・4・12・14、図530-1がそれである。口縁部が急角度で短く立ち上がるものが大半を占めており、須恵器杯蓋模倣タイプとも理解できる器形を呈している。図527-11は、皿を意識した器形であると思われる。口径が大きく、低平で、底部は平底風を呈している。図530-2・4は、有段丸底杯の古手の特徴を備えている。器高が高く、口縁部は長く外反して伸びている。また、内面の括れも明瞭であり、鋭い稜を形成している。したがって、舞台式後半まで溯る可能性も考えられる。

器面調整の特徴的な痕跡としては、図527-8の口縁部外面にハケメ調整痕、図527-9の底部外面にハケメ調整痕、図529-11・15の底部外面に焼成後の線刻が認められる。

須恵器模倣杯 図525-10・13、図527-1・12・14、図530-5~10・13~16が該当する。舞台~栗圀式に比定される。このうち、図527-12・14は、身の深い器形をなしており、12では口縁部が内側へ巻き込むように立ち上がっている。

金属器模倣杯 底部が、平底風ないし平底を呈し、無段のものが該当する。栗圀式後半~国分寺下層式と思われる。外面をヘラミガキ・黒色処理する傾向が認められる。図528-1~3・5は、皿状の器形を呈するタイプである。3は、内外面がヘラミガキ・黒色処理されている。5は、大型である。

図528-4・7、図530-17は、深めの器形を呈している。図530-17は、平底で、内外面がヘラミガキ・黒色処理されている。

高杯 図531-1~7が該当する。このうち4は、深めの杯部形態と、裾のまくれない中実の短脚部の特徴から、舞台式に比定される。

他の6点は、栗圀式であろう。1は、口縁部が内湾しており、脚部は中空である。2は、口縁部が大きく開いている。3は、口縁部が大きく開き、脚部は中空で、付根から裾まで「ハ」の字状に大きく開く器形を呈している。5は、裾のまくれる中実の短脚部である。6は、口縁部が直線的に外傾している。7は、中空の脚部で、裾があまり広がっていない。

[ロクロ土師器甕] 図535-2に掲載した。

胴部中央に最大径のある均整の取れた器形を呈している。口頸部は、「く」の字状に短く外傾し、口唇部は平坦面をなしている。器面調整は、胴部外面の下位に、縦位の手持ちヘラケズリ調整が施されている。表杉ノ入式に比定される。

[非ロクロ土師器甕・甗] 図531-8~13、図532~534、図535-1・3・4、図536~図538が該当する。ほとんどは、栗圀式である。

口縁部の内傾する小型の甕 図531-8・9の2点がある。8は、外面の頸部下端に軽い段がある。また、底部は突出しており、外面に木葉痕が観察される。9は、胴部下端にヘラケズリ調整が加えられている。

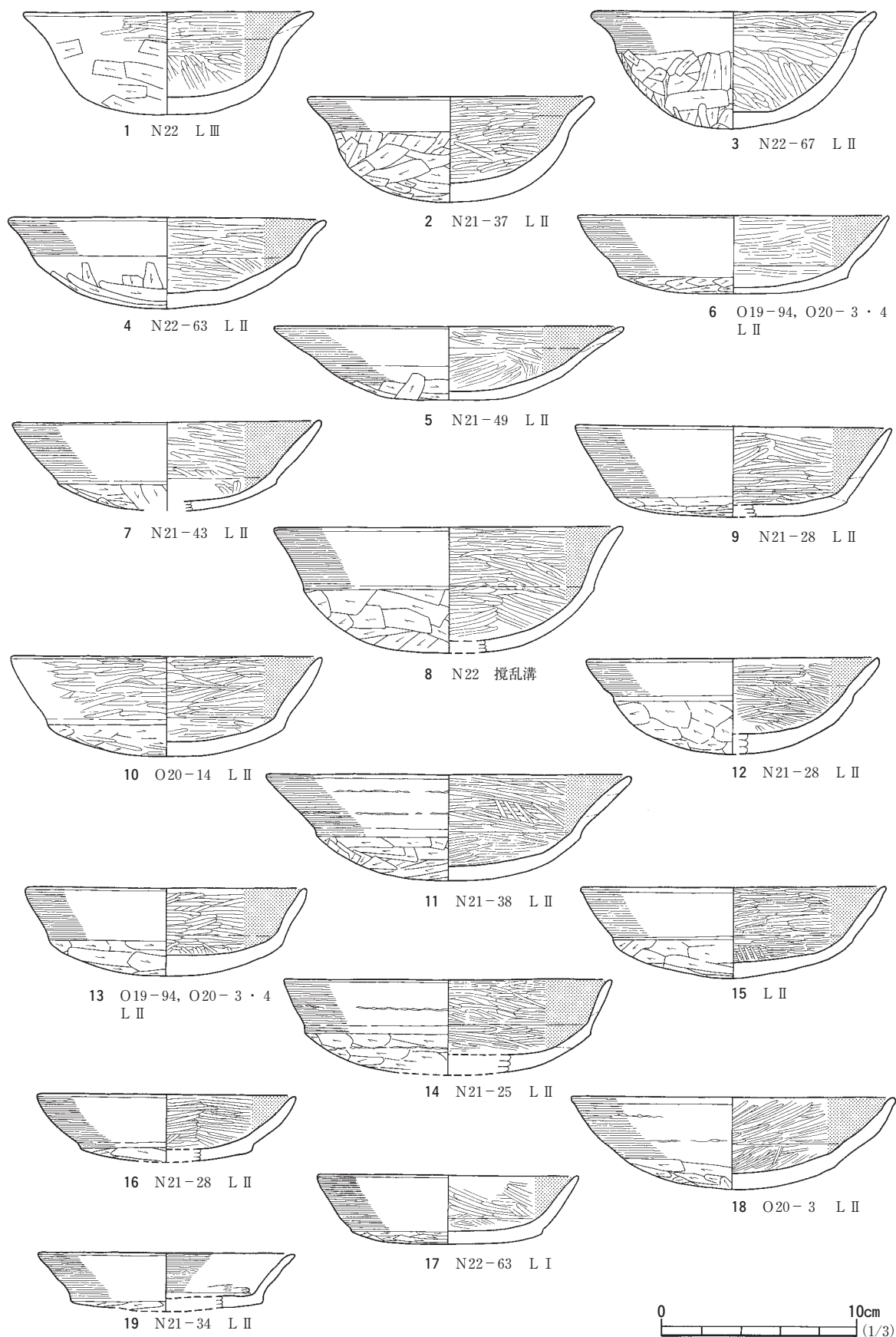


図526 遺構外出土遺物 (3)

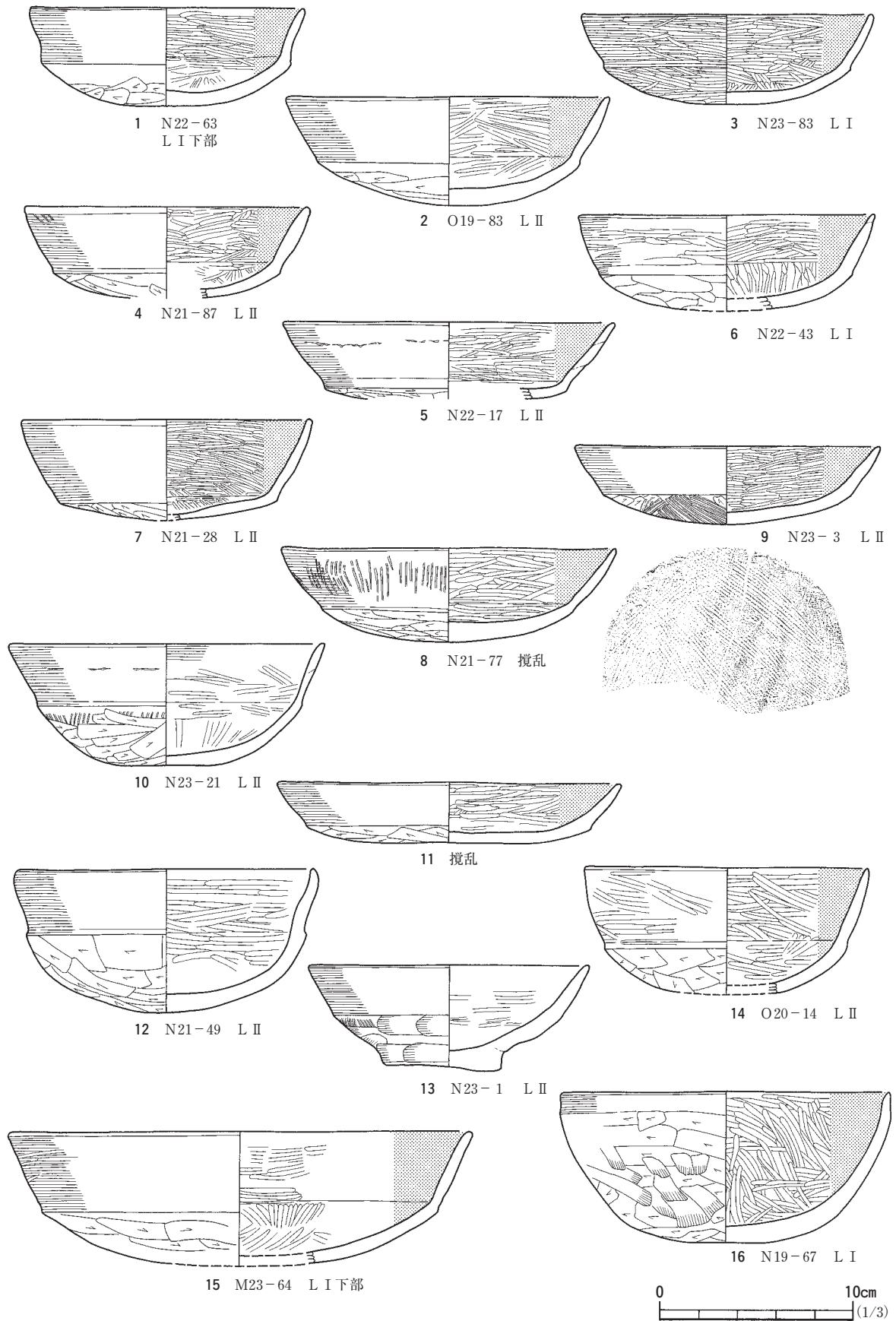


図527 遺構外出土遺物 (4)

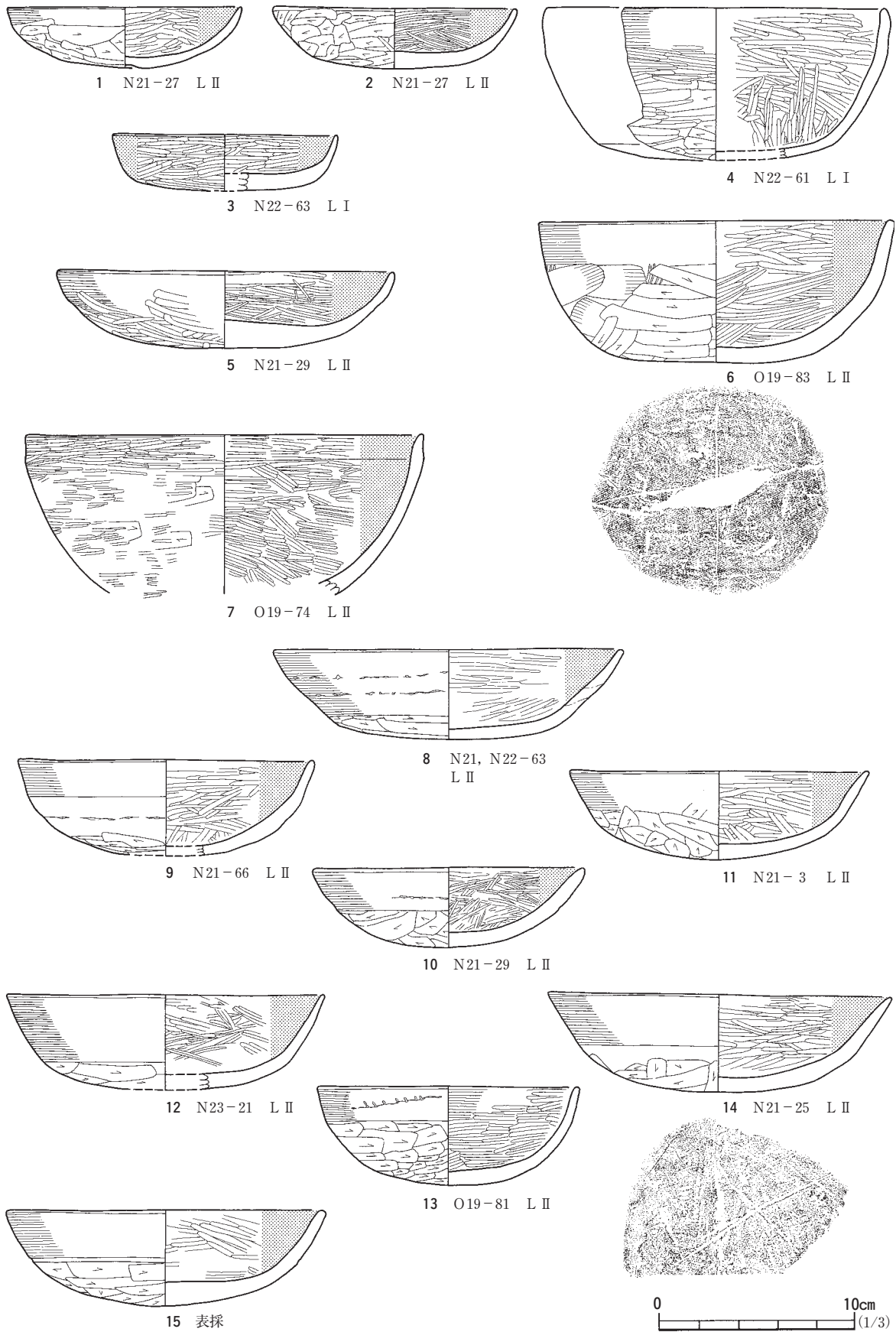


図528 遺構外出土遺物 (5)

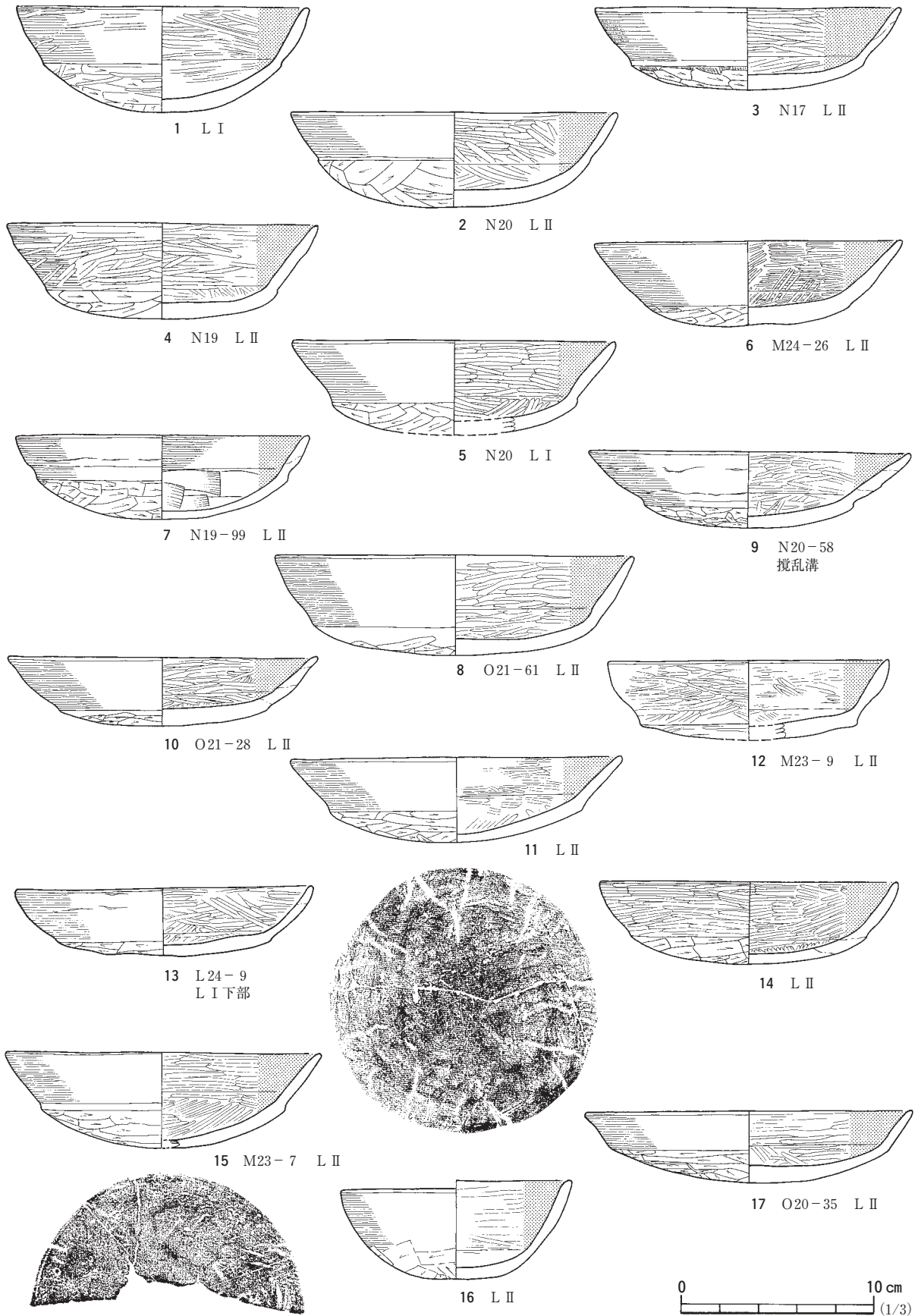


図529 遺構外出土遺物 (6)

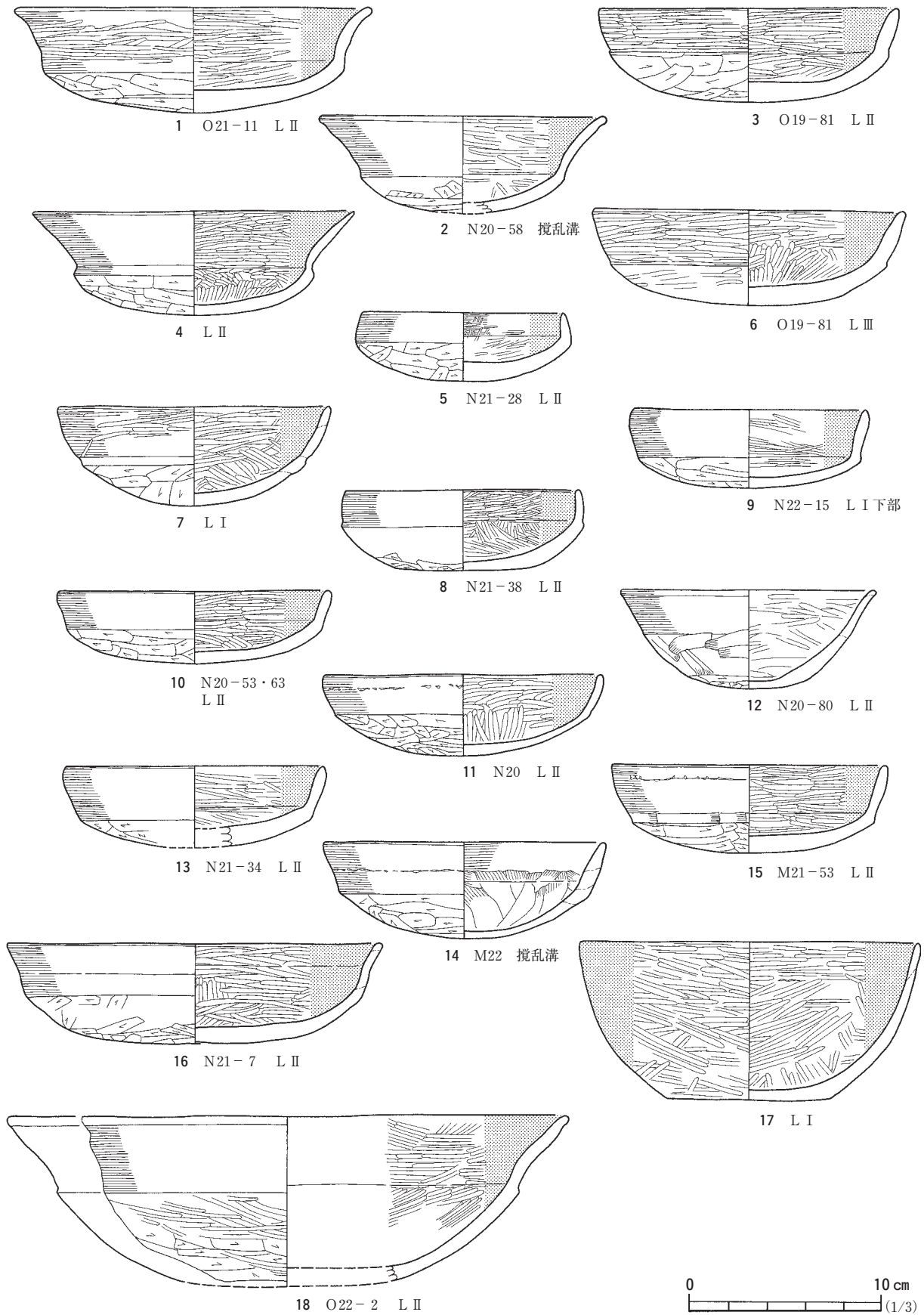


図530 遺構外出土遺物 (7)

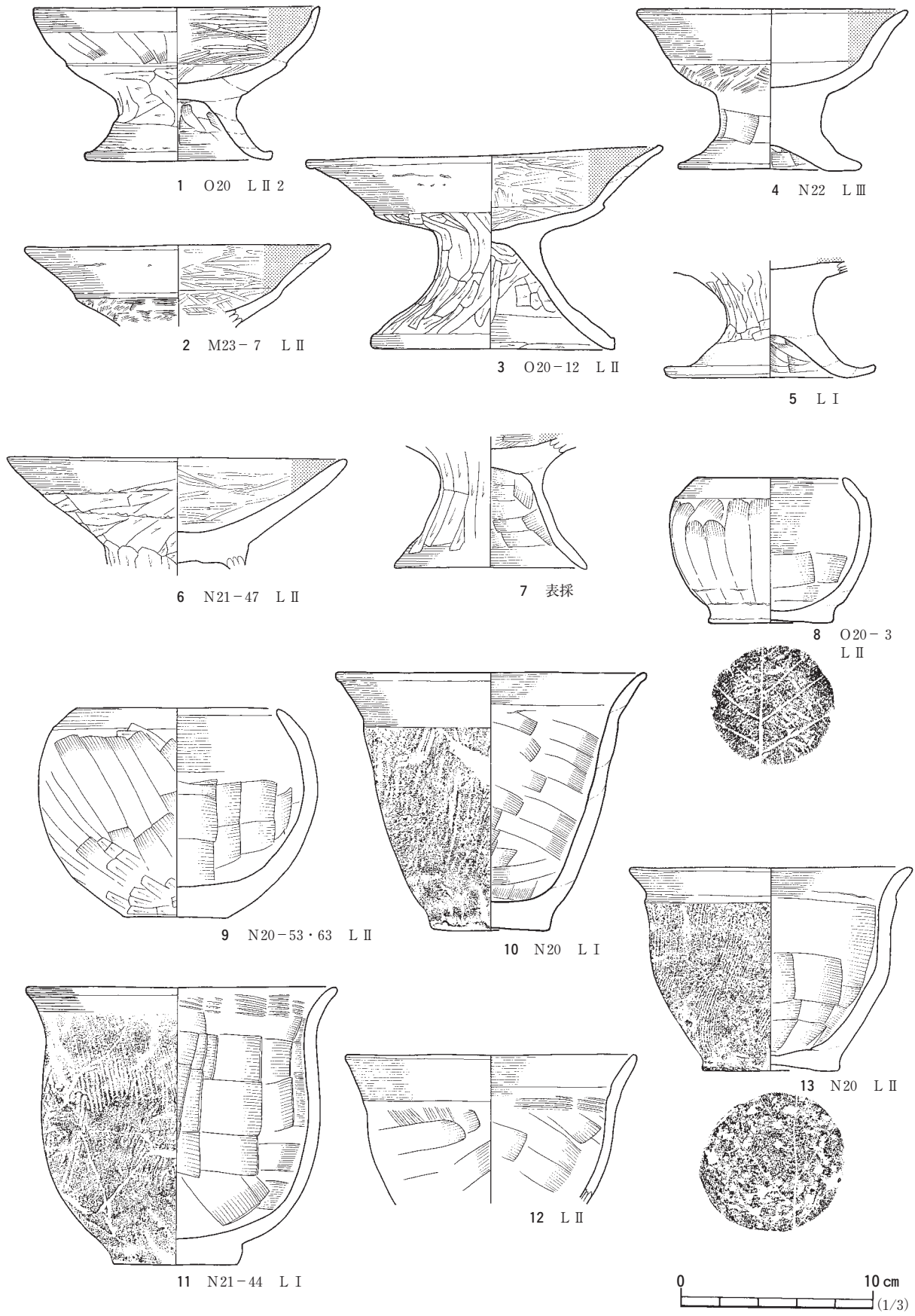


図531 遺構外出土遺物 (8)

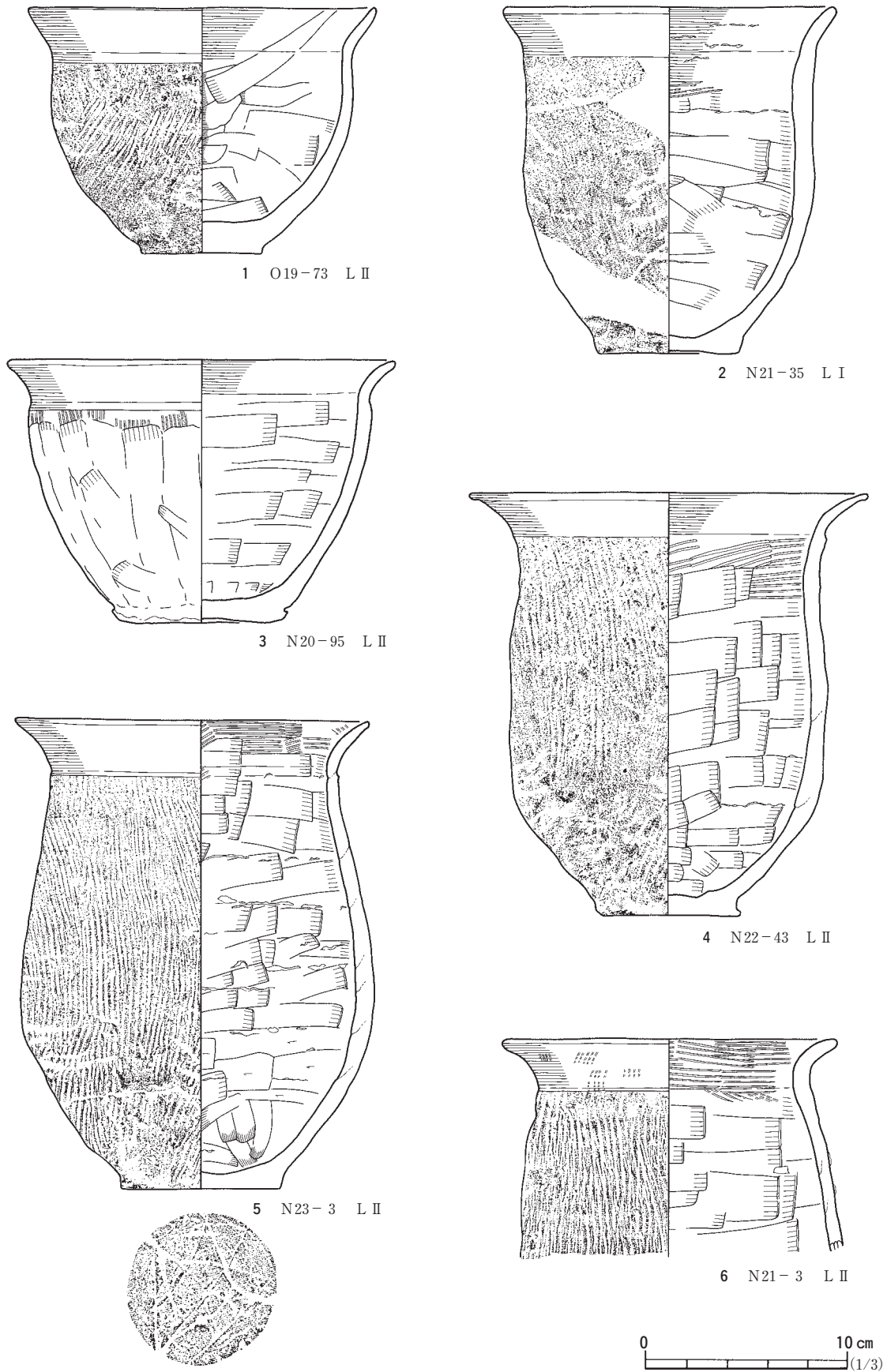


図532 遺構外出土遺物 (9)

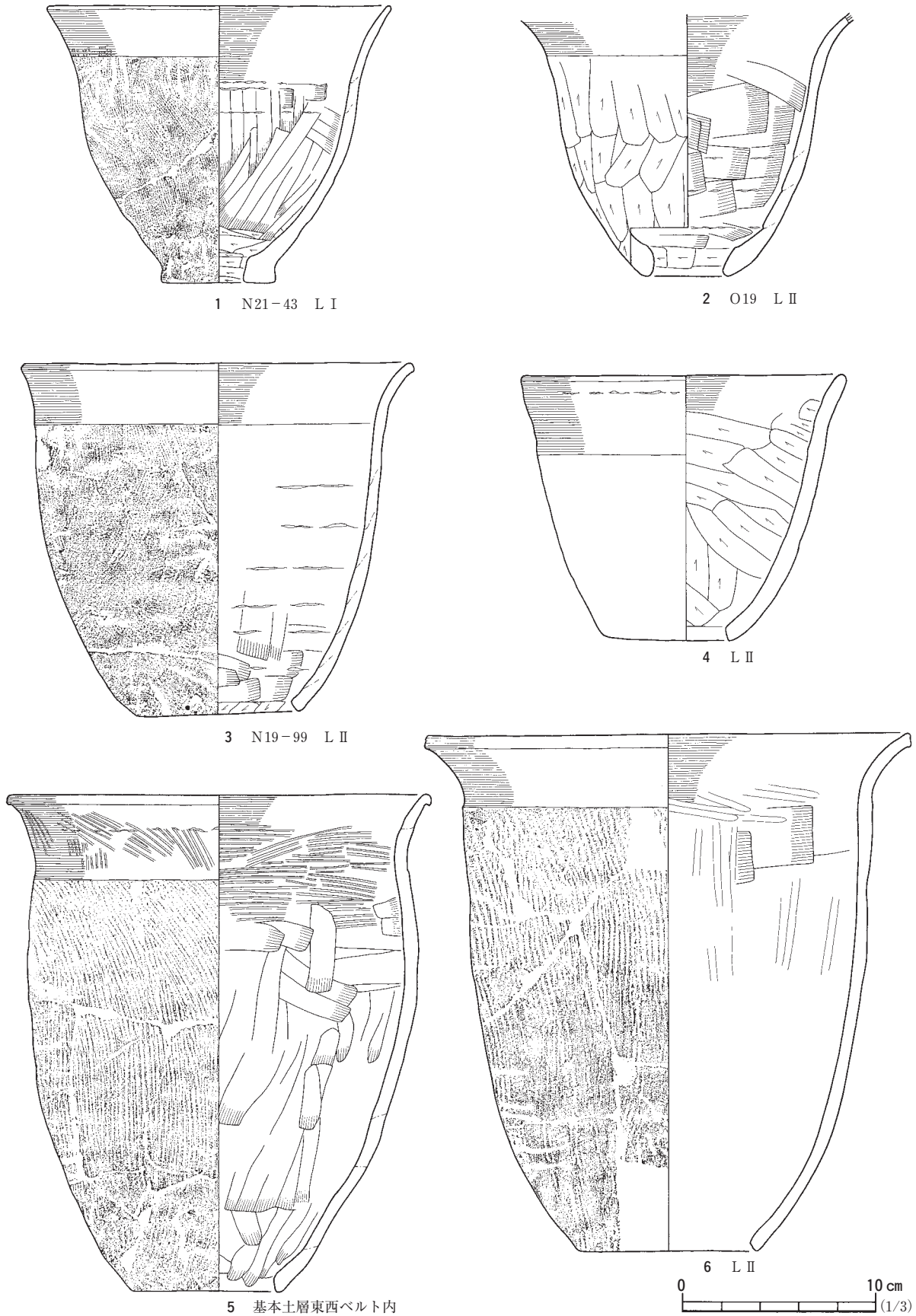


図533 遺構外出土遺物 (10)

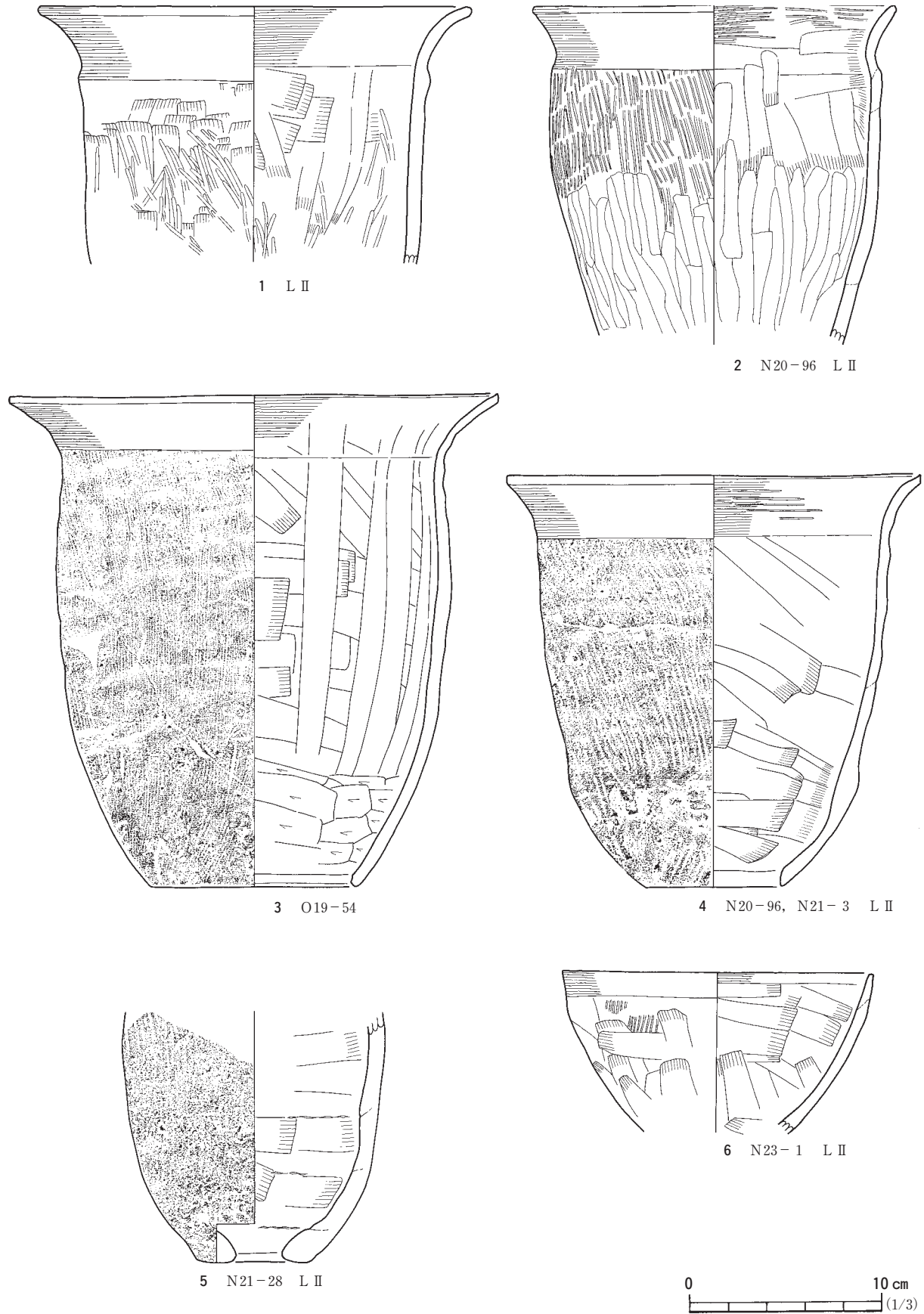
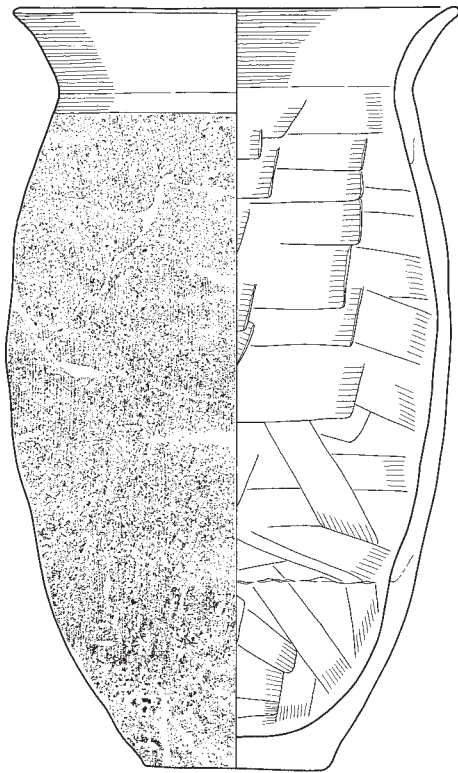
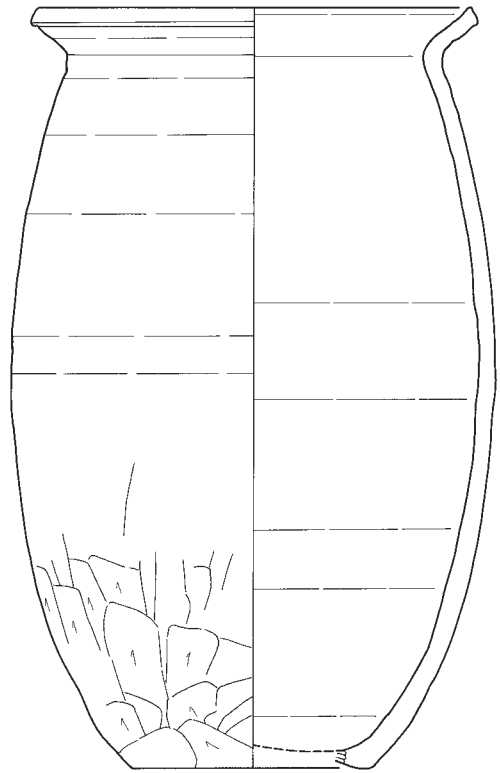


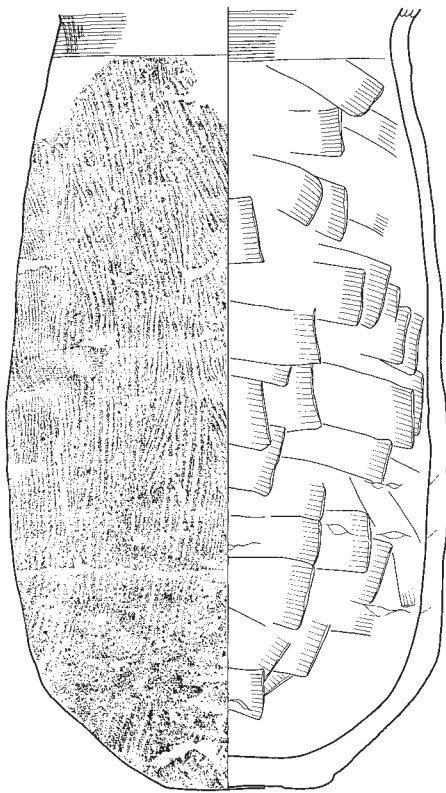
図534 遺構外出土遺物 (11)



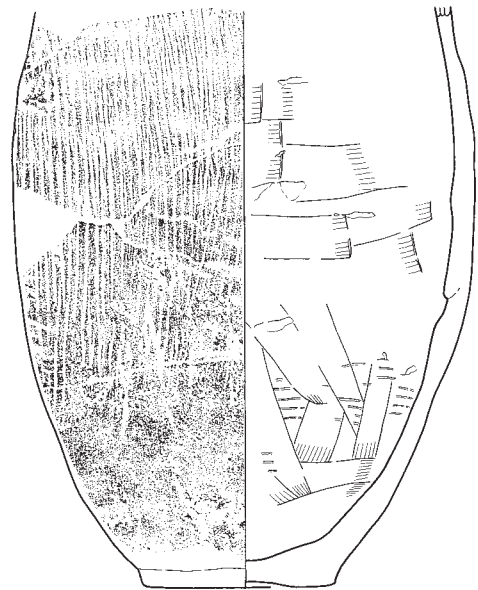
1 O20-3 L II



2 N20 L II



3 N20-19



4 N21-3 L II



0 10 cm (1/3)

図535 遺構外出土遺物 (12)

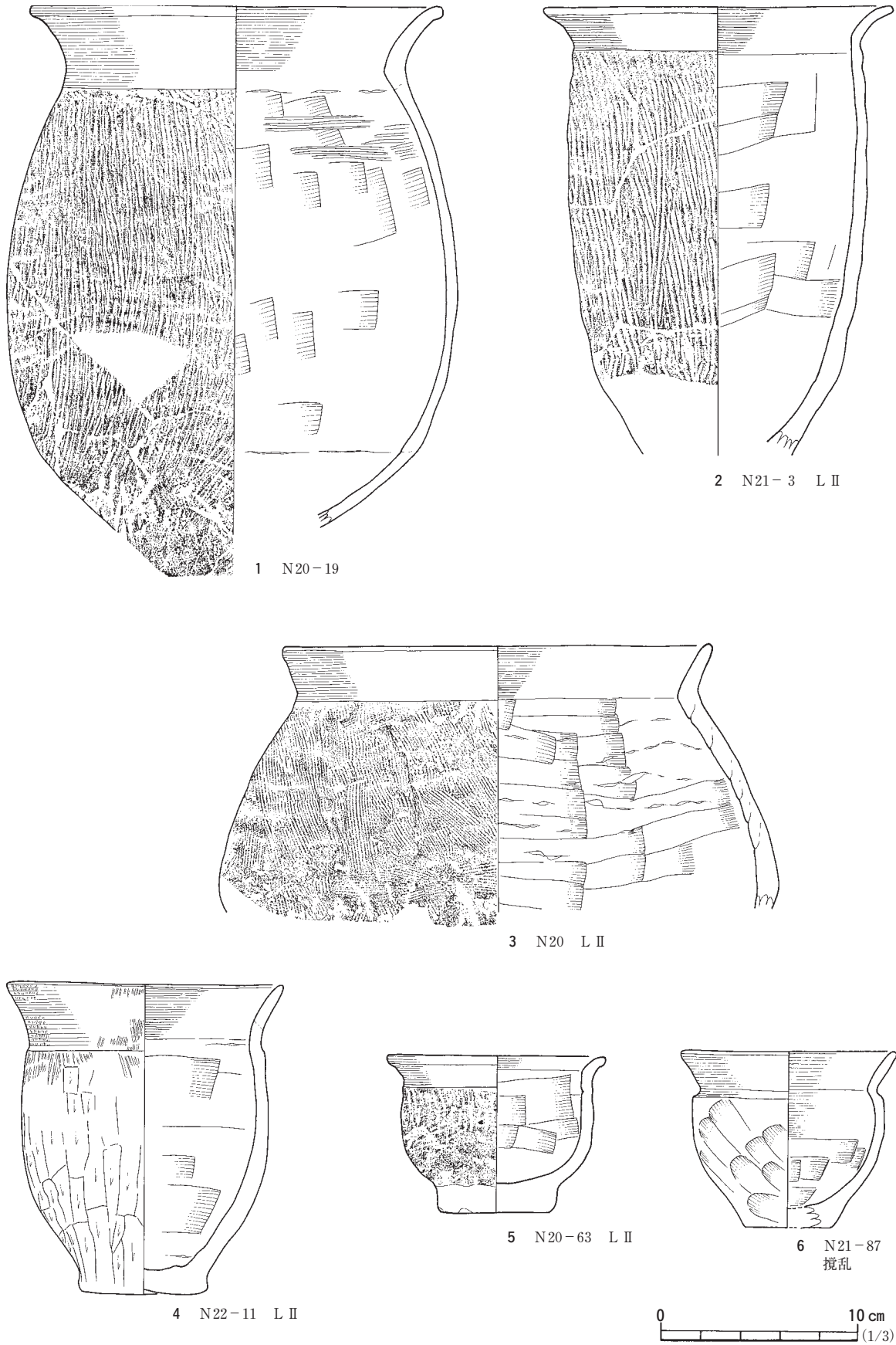
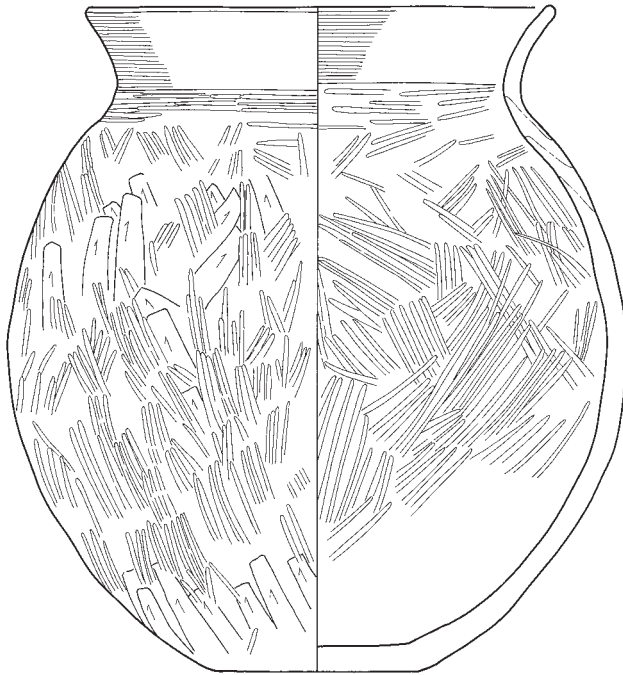
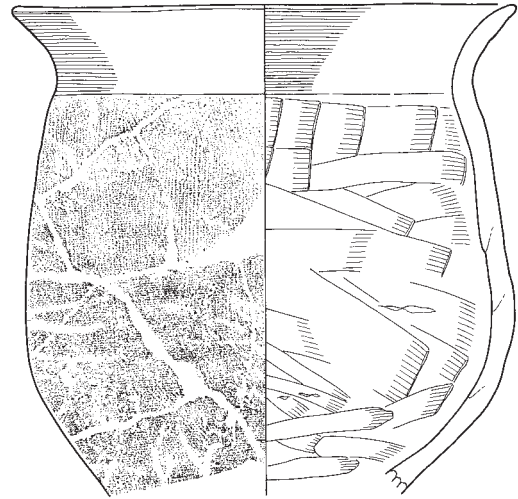


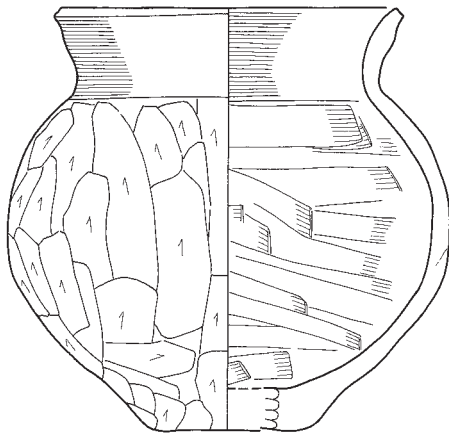
図536 遺構外出土遺物 (13)



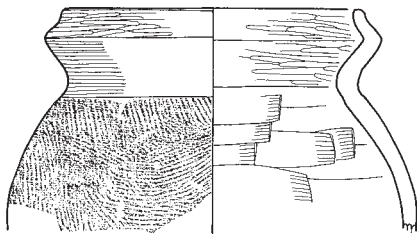
1 N20-62 L II



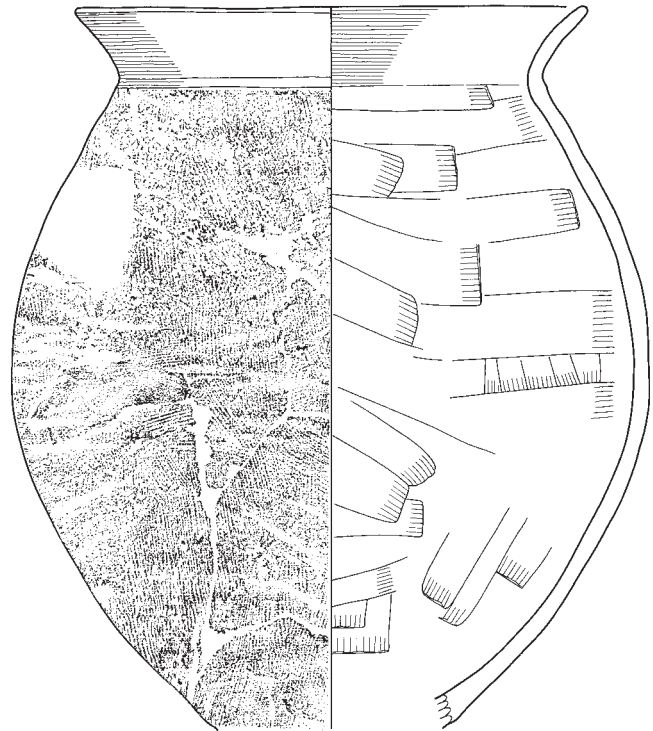
2 M23-95 L II



3 O19-81 L II



4 N22-67 L I 下部



5 L I



図537 遺構外出土遺物 (14)

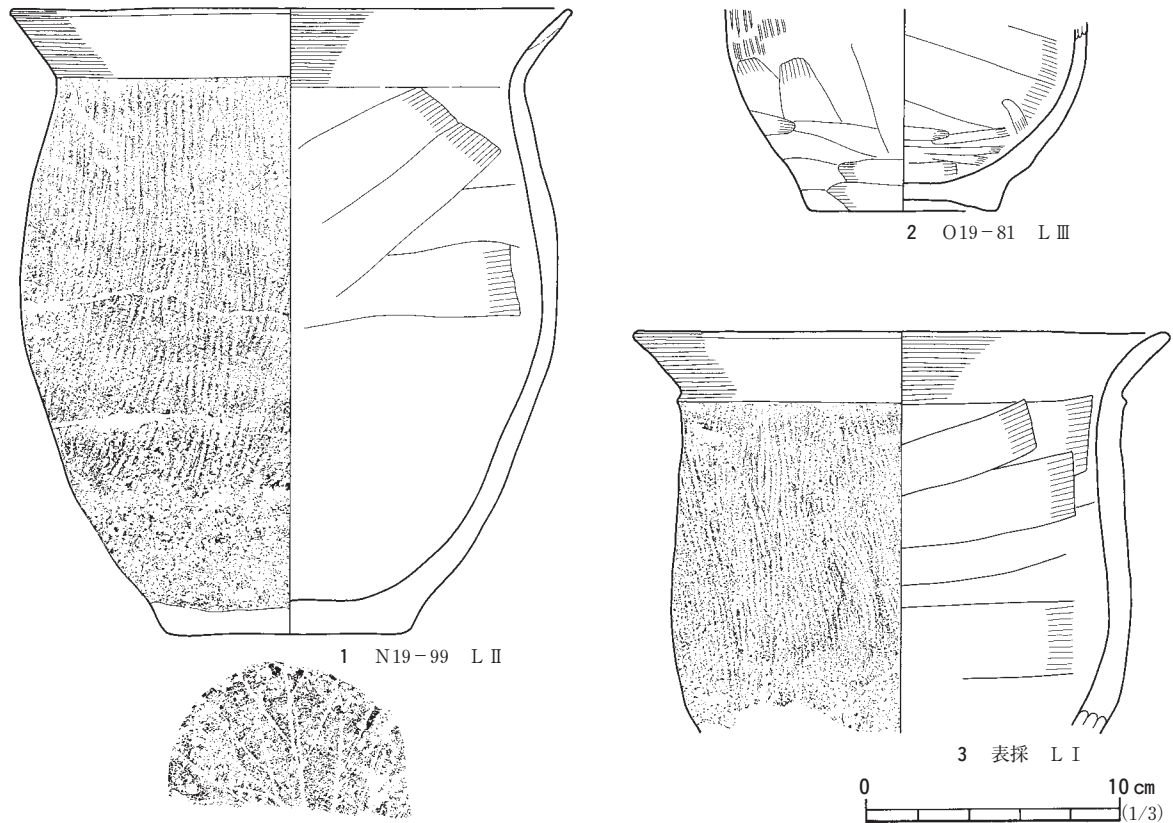


図538 遺構外出土遺物 (15)

口縁部の外反・外傾する小～中型の甕 後述する球胴甕を別にすると、図531-10~13, 図532-1~6, 図536-4~6, 図538-1・3が該当する。器形全体の特徴は、口径：器高比が小さなものほど小型で、短胴になる傾向がうかがえる。図531-11~13, 図532-1・3, 図536-5・6は、口径が器高を上回っている。逆に、図531-10, 図532-2・4・5, 図536-4, 図538-1・3は、口径が器高を下回っており、やや細長の胴部形態を呈している。器面調整は、図536-6を除くと、ハケメで統一されている。

長胴甕 図535-1・3・4, 図536-2である。胴部外面は、いずれもハケメ調整されている。図535-1は、胴部中央に最大径があり、口頸部は緩やかに外傾している。図535-4は、口頸部を欠いているが、胴部形態は図535-1と類似する。また、底部外面に木葉痕が観察される。図535-3は、下膨れの胴部を呈している。図536-2は、口径が大きく、胴部は膨らみを持たないで、下に窄まっていく。

球胴甕 図536-1・3, 図537, 図538-2がある。器形は、広口のタイプ（図536-3, 図537-2）と頸部の窄まるタイプ（図536-1, 537-1・3~5）に分かれる。

広口のタイプのうち、図536-3はかなり大型である。下半部を欠いているが、胴部は玉葱状を呈すると思われる。

一方、頸部の窄まるタイプは、大きさにバラエティが認められる。図537-3・4は、小型に属するもので、胴部は整った球形を呈している。このうち、3は胴部外面が縦位にヘラケズリされ、口

唇部は平坦面をなしている。4には、口縁部が逆「く」の字状を呈する特異な器形的特徴が認められる。類例は、東北部に散見され、系譜が問題になると思われる。

大型のものには、図537-1・5がある。1は、胴部が整った球形をなし、口頸部は弓なりに外反している。胴部外面調整は、ヘラミガキである。5は、やや縦長の胴部で、口頸部は「く」の字状に外傾している。胴部外面は、ハケメ調整されている。

甑 図533・534がある。小型で単孔式の図533-1・図534-5、小型で無底式の図533-2～4、無底式中～大型の図533-5・6、図534-1～4に分類される。図534-6は、甑の可能性が高いと思われるが、底部を欠いている。そのため、この器種比定は不確実である。

〔須恵器食膳具〕 図539, 図540-1～5に掲載した。

蓋 4点ある。高台杯に伴う資料と推定され、年代は8世紀～9世紀前半に位置付けられる。図539-1・3は、つまみを欠いた破片資料である。口縁端部が短く下に折れ曲がっており、3では天井部が水平になっている。図539-2は、環状のつまみである。粘土円盤の中央を窪ませている。図539-11は、潰れた宝珠形つまみである。

高台杯 5点ある。8世紀～9世紀前半に位置付けられる。図539-4は、水平な底部から体部が直立し、口縁部がわずかに外反する器形を呈している。口縁部内面は、沈線状をなす。高台部は、欠損しており、特徴が判明しない。図539-5は、杯部を欠いている。高台部は短く、断面は方形を呈する。内端接地している。図539-6は、体部が丸みを帯び、口縁部が直線的に外傾したのち、わずかに内湾する器形を呈している。高台部は長く外傾している。底部外面には、静止糸切り痕が残っている。図539-7は、底部～体部にかけての破片である。全体に丸みがある。図539-12は、口縁～体部片になる。立ち上がり角度は急で、直立気味になっている。

無台杯 9点が認められる。図539-8～10・13は、奈良・平安時代の所産と考えられる。底部が平底で、器形全体の判明する8・9は、口縁～体部が直線的に外傾している。8は、底部外面に糸切り痕と焼成前に施された「十」の線刻が観察される。また、9は底部外面に静止糸切り痕が残っている。

図539-16～18, 図540-1・2は、底部が丸底で、小降りである点が特徴的である。栗圀式併行期に位置付けられるものであろう。16は、器形全体が判明し、口縁部は急な角度で直線的に立ち上がっている。底部外面には、回転ヘラケズリ調整が施されている。17は、16よりやや口径の大きな製品と推定され、底部外面は、手持ちヘラケズリ調整されている。18は、きわめて薄手のつくりである。口縁部は軽く外反しており、高杯の可能性も想定される。

杯蓋 1点ある。図539-14は口径が大きく、天井部下端の外面に、段が形成されている。器面調整は、天井部外面に手持ちヘラケズリ調整が加えられている。TK43～209に比定されよう。

杯身 2点ある。どちらもTK43～209に比定されると考えている。図539-15は、底部の小破片で、器形の特徴はよく分からない。底部外面は、回転ヘラケズリ調整されている。図539-19は、受け部内面の下端が、爪を入れたように鋭い稜線を形成している。器高が高く、底部外面は回転ヘラケズ

り調整が施されている。この杯身は、胎土が精選されており、器壁が薄く、シャープなつくりになっている。

高杯 6点ある。いずれも、栗圀式併行期の製品と思われる。図539-20は、無蓋高杯の杯部になり、口縁端部を欠いている。遺存部分の観察から、脚部は3方透かしであったと推定される。図539-21は、口縁部の大きく開いた杯部資料になる。口唇は内傾する平坦面をなしている。図539-22は、図539-20と類似した形態の杯部破片であり、底部外面にカキメ調整が施されている。図539-23・24は、透かしのある脚部片になる。23は外面に波状文が施されており、強い在地色がうかがえる。24は、裾が大きく開いている。図542-14は、無蓋高杯の杯部破片だろうか。口縁部外面に波状文が施されている。

盤 3点ある。栗圀式後半～国分寺下層式前半併行期に位置付けられると思われる。図540-3は、最も大型になる製品で、口径は30cm弱になる。真上から見た図面で示したように、底部内面にナデ調整が施されている。また、底部外面には、回転ヘラケズリ調整が施されている。図540-4は、体部が斜めに外傾し、口縁部が直立し、端部で強く外反する器形を呈している。図540-5は、口径が最も小さい。

【須恵器貯蔵具】 図540-6～17, 図541・542, 図543-1～12, 図544が該当する。

甕・壺・瓶 この3器種は、破片資料だと該当する器種を特定するのが難しい。そこで、ここでは一括して扱うことにする。

時期は、大半が栗圀式併行期に位置付けられると思われる。

まず、口頸部資料をみていくと、図540-6・8は、口縁部の内湾する薄手の優品である。甕になる可能性が最も高いと思われる。図540-7も甕であろうか。図540-10・11は、壺か瓶になると推定される。外面の口縁部下端に形成された隆帯が特徴的である。

図540-9は、甕になる。口縁部先端を欠いただけであり、器形の特徴を窺うことができる。胴部は玉葱状を呈しており、細長い頸部が付いている。この須恵器は、外面全体が加飾されており、きわめて在地色の強い製品である。頸部には、中央の沈線を挟んで上下に波状文が施され、胴部には、円孔脇に列点刺突文が施されている。また、器壁が厚く、重量感があり、野暮ったい感じを与える。

図540-13は、甕か瓶の頸部になる。外面に2重の平行沈線が巡らされている。

図540-14・15は、壺の胴部上半と推定される。14は小型品になり、15は外面に回転ヘラケズリ調整が加えられている。

図540-16は、提瓶か横瓶の胴部になるか、丸底壺の底部になると考えられる。外面に平行タタキメ、内面に同心円文アテメが観察される。色調は白っぽい。

図540-17は、短頸壺の耳と推定される。完形品が、北ノ脇遺跡で出土している（本宮町教育委員会調査資料）。

図542-13・15・17は、施文のある胴部片である。13は、沈線で区画された中に波状文が、15は、

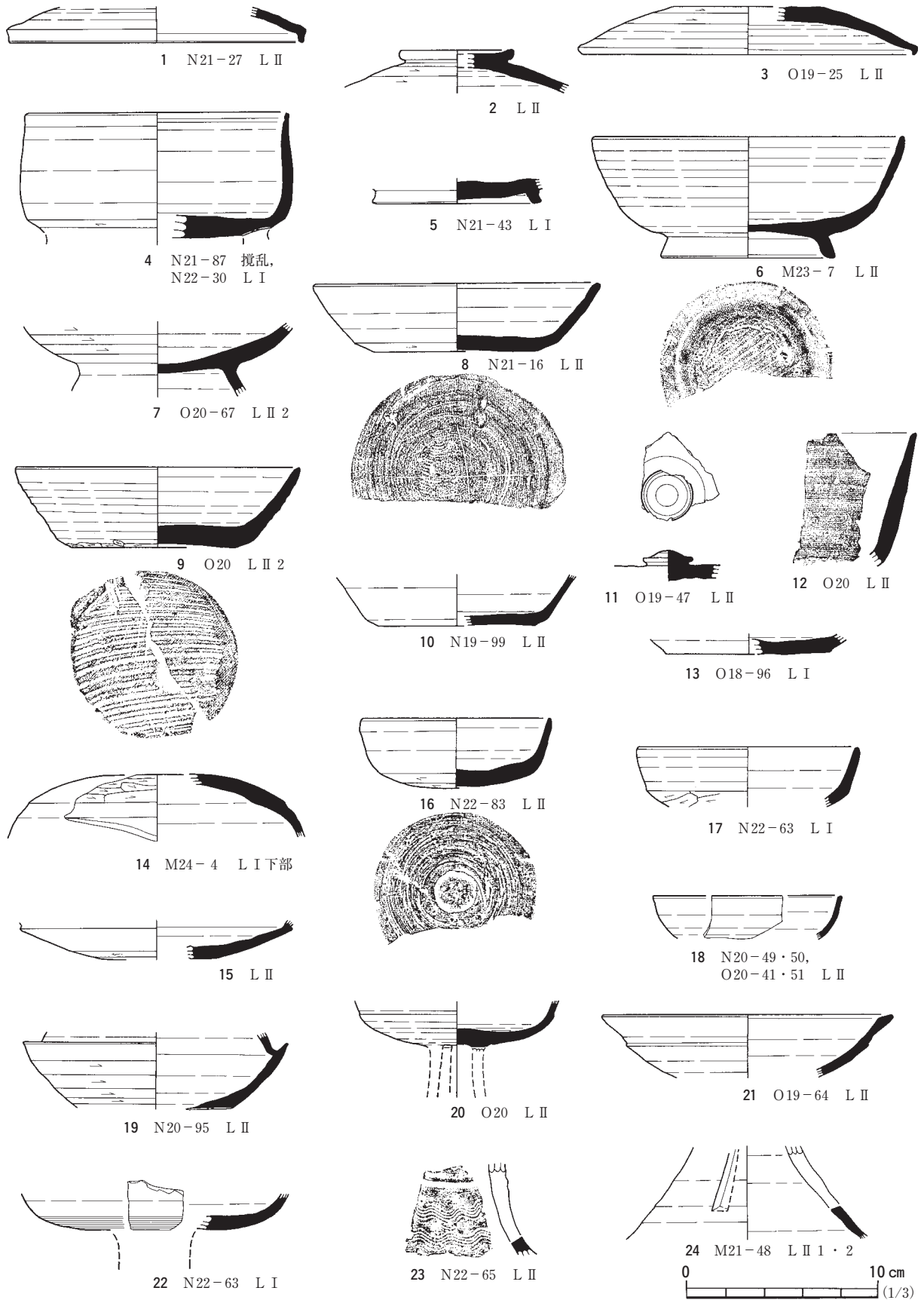


図539 遺構外出土遺物 (16)

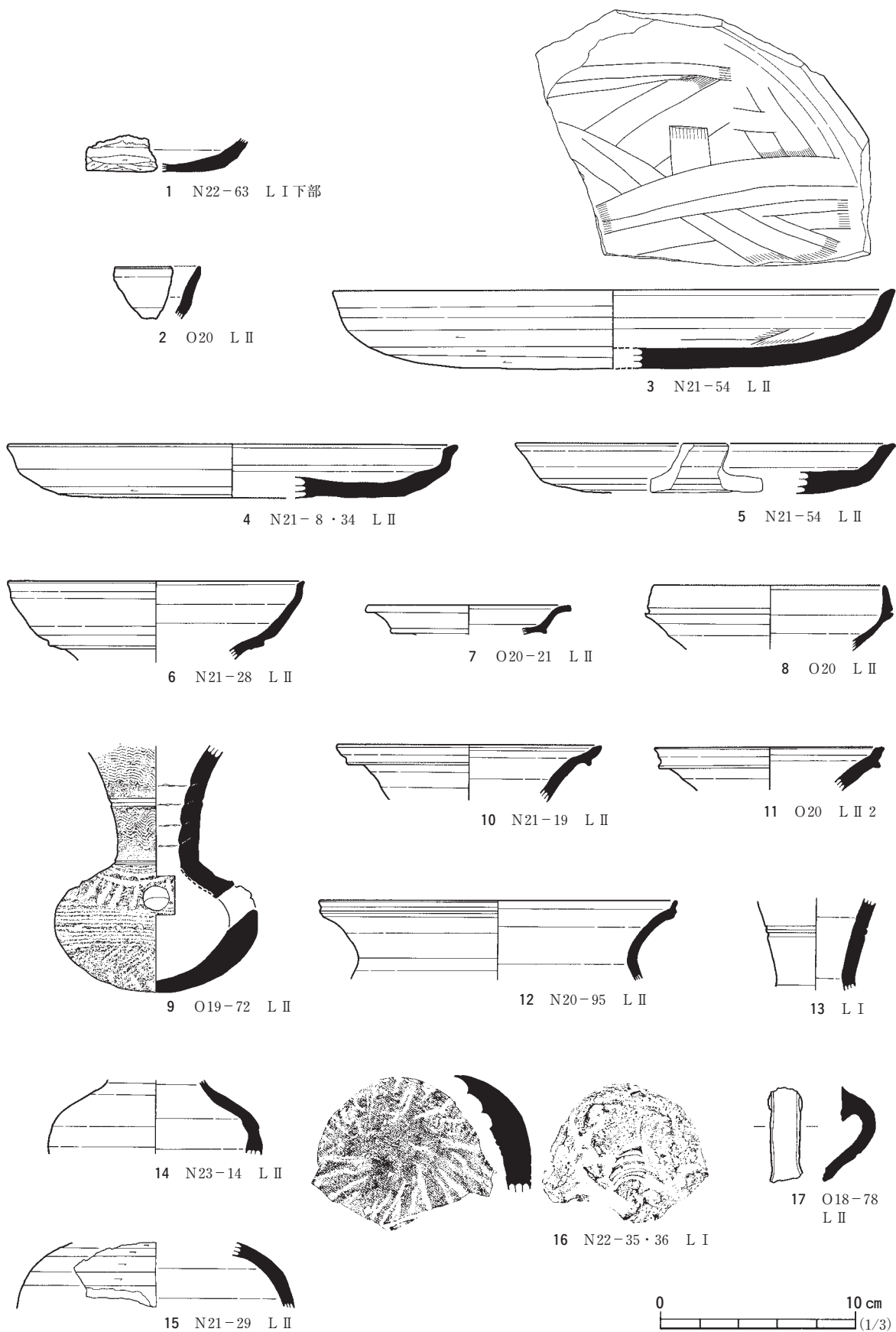


図540 遺構外出土遺物 (17)

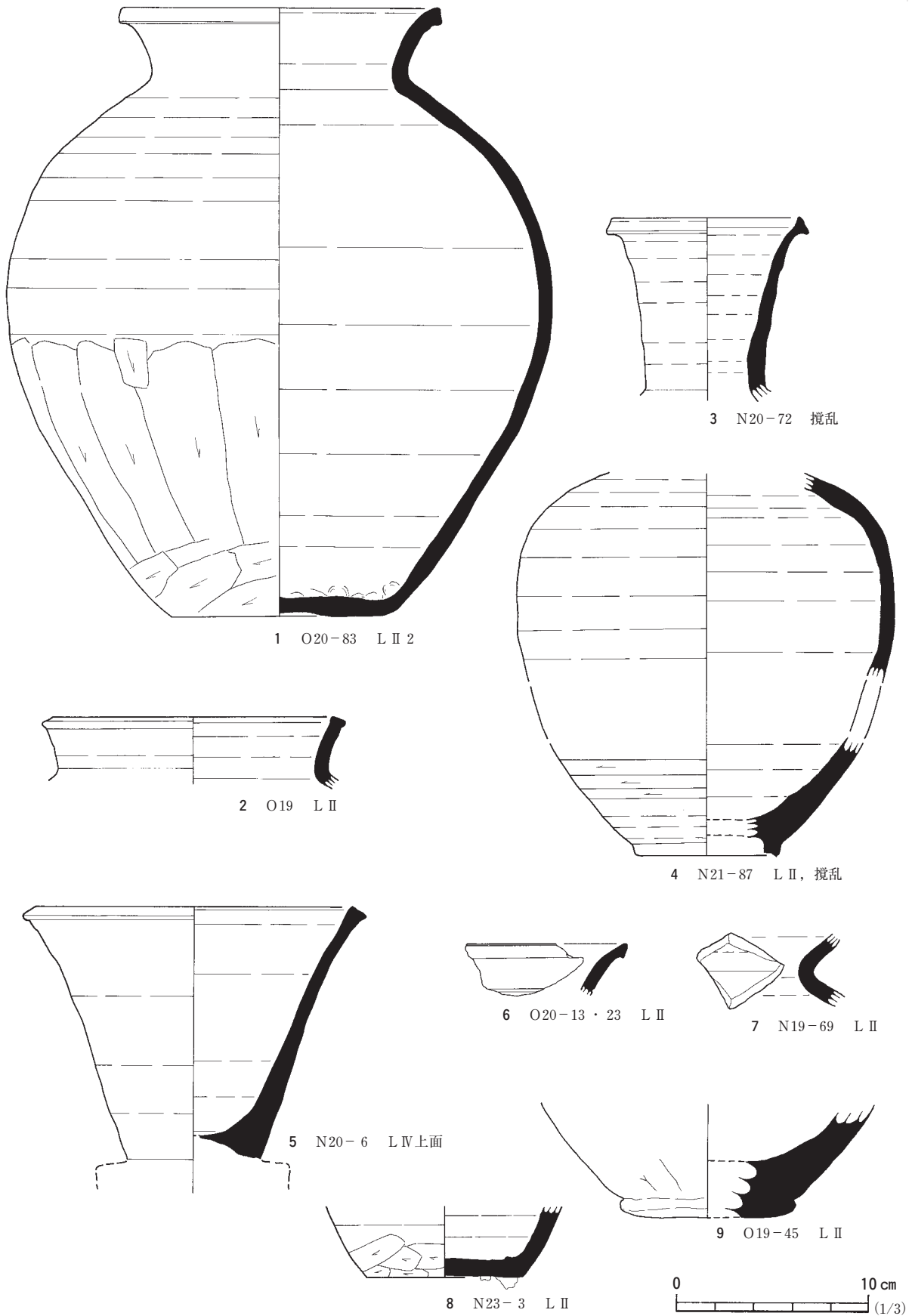


图541 遺構外出土遺物 (18)

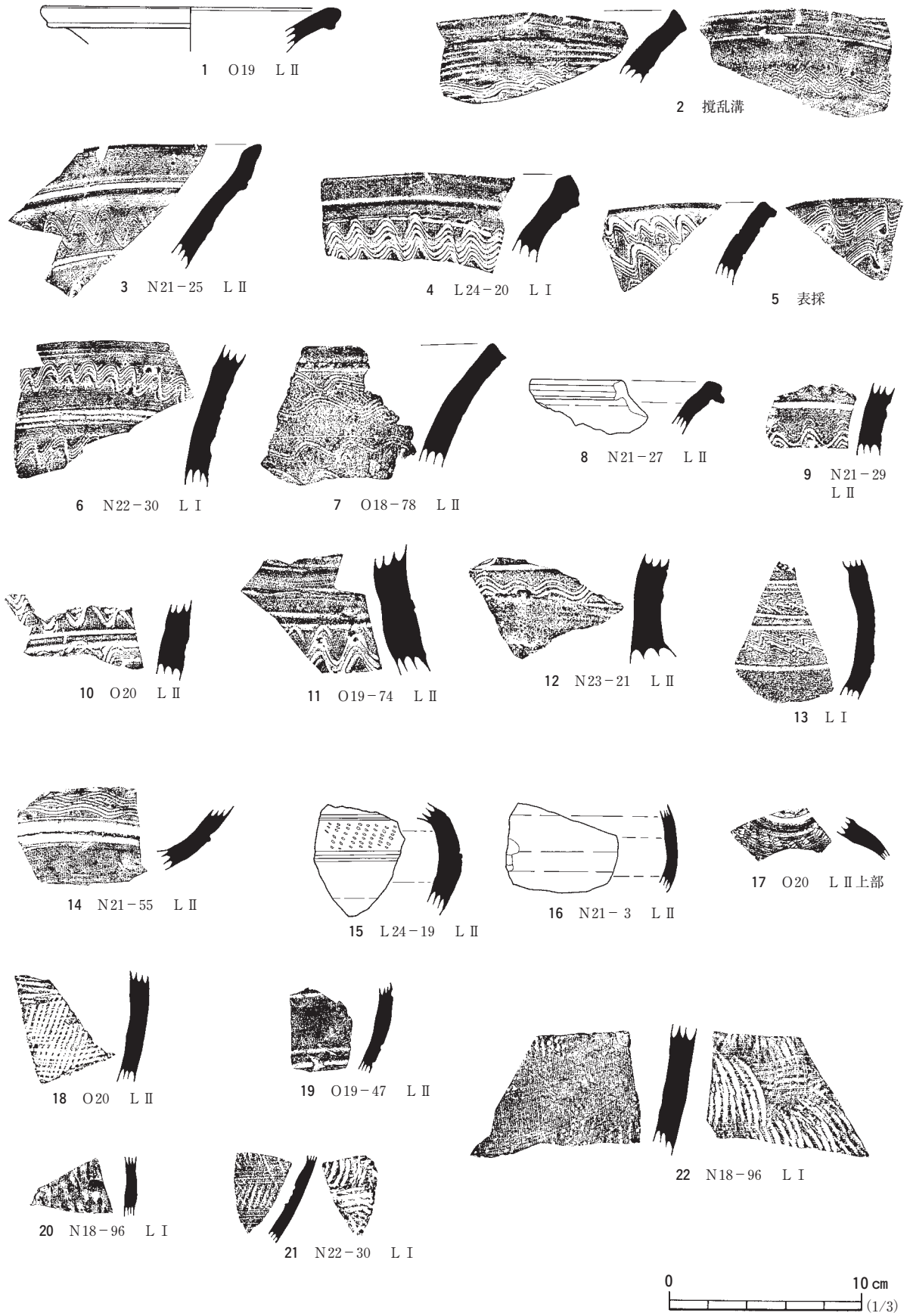


図542 遺構外出土遺物 (19)

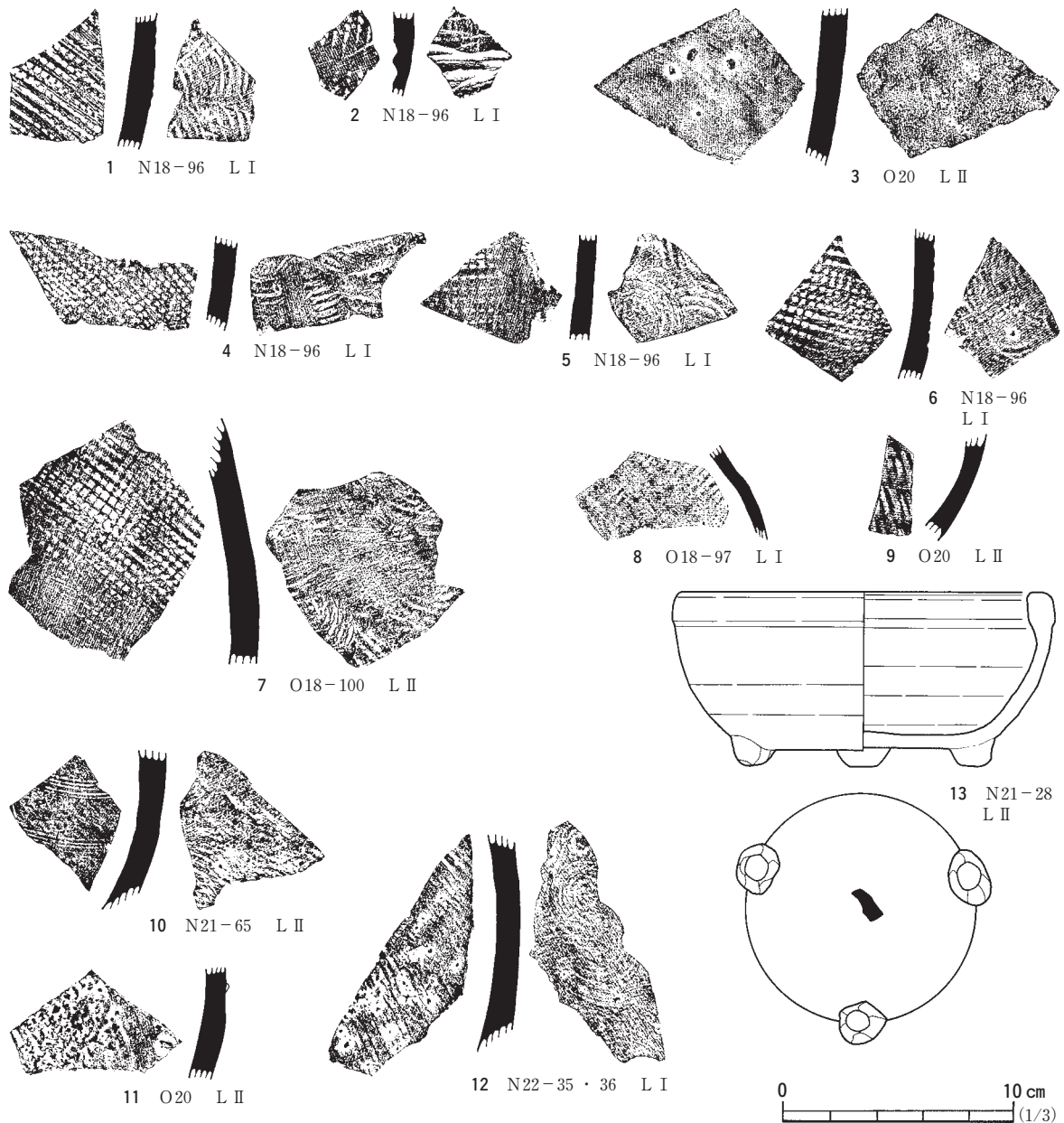


図543 遺構外出土遺物 (20)

沈線で区画された中に櫛歯状の列点刺突文が施されている。17は、沈線は認められないが、櫛歯状の列点刺突文が施されている。

図541-3・4は、長頸瓶になる。3は口頸部資料である。頸部が直線的に立ち上がり、口唇部が平坦面をなしている。4は、胴部～高台部資料である。胴部は肩が張っており、高台部は断面が方形を呈する。どちらも、表杉ノ入式併行期の所産に位置付けられると思われる。

図541-2は短頸壺になる。胴部を欠いているので、器形全体の特徴は知ることができないが、大型品である。口唇部は肥厚しており、平坦面をなす。

図542-1・8は、壺か瓶の口縁部片と考えられる。口唇の外側が、隆帯を形成している。

図542-19は、壺か瓶の胴部片と思われる。外面に沈線がみられる。

捏鉢 図541-5・9の2点がある。5の器形は、体部が直線的に外傾し、口縁部が緩く外反している。口唇部は、平坦面をなす。この資料は、底部内面に使用痕跡が認められず、当該器種に比定するには疑問点も残っている。あるいは、大型食膳具の脚部になるのかも知れないが、該当器種の類例は本遺跡周辺で出土していない。

9は、底部付近の破片になる。底部はぶ厚いつくりであり、外面は不安定な平底になっている。内面に、凹凸のある使用痕が観察される。

甕 34点ある。図540-12は、口頸部の破片である。口唇が摘み上げられており、器壁は薄くつくられている。図541-1は、器形全体の分かる製品になる。底部は平底で、胴部中央のやや上に最大径があり、口頸部が「く」の字状に屈曲している。この特徴から、8世紀後半以降に位置付けられる製品と思われる。図541-6は、口唇部外面側が下に短く伸びる破片になる。図541-7は、頸部が強く屈曲している。図541-8は、平底の底部片になる。

図542-2～7、9～12は、外面に波状文のある口頸部片を一括した。このうち、2・5では、内面にも波状文が認められる。

図542-18・20～22、図543-1～12、図544は、胴部片を一括した。

〔近世陶器〕 図543-13の1点がある。三足の火鉢で、完形品である。口縁部は玉縁状をなしており、口唇は平坦面をなす。

〔土製祭祀用具〕 図545-1～22が該当する。舞台～栗圀式期に伴うものと推定される。

手捏ね土器 図545-1～6、9の7点がある。指で簡単に成形が行われただけで、口縁部の調整は一切施されていない。器形は逆台形を基本としているが、9は長方形を呈している。

粗製杯 図545-7・8になる。手捏ね土器とは、大きさが違い、口縁部が横ナデ調整されている点で、区別される。また、底部外面に木葉痕が残る。

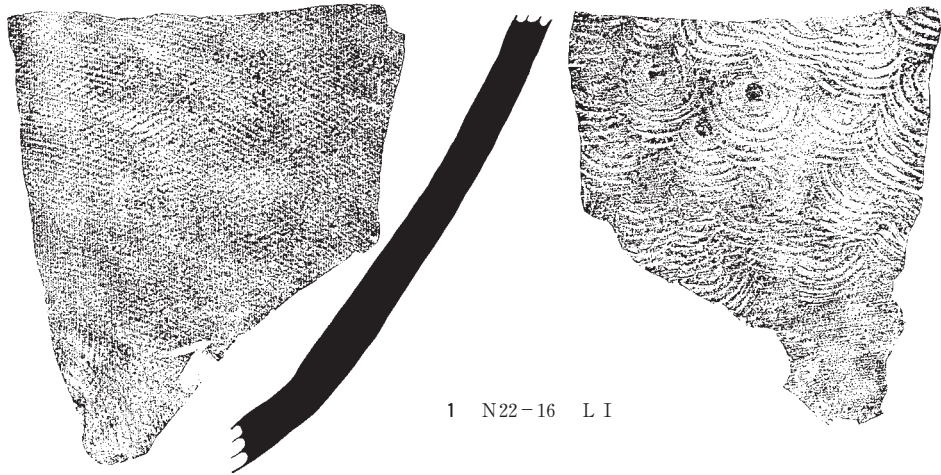
ミニチュア土器 図545-12・16は、杯になる。このうち、12は、口縁部が内湾しており、椀に近い器形を呈している。16は、器高が低く、全体に丸みがある。口縁部には、2つの小孔がみられ、欠損部にも、おそらく対になる小孔が穿たれていたと推定される。

図545-10・11・13・14は、小壺になる。10の口頸部は、短く内傾するだけで、あまり目立っていない。このため、全体に球形に近い器形を呈している。11・13・14は、算盤玉状の胴部に、「く」の字状のしっかりした口頸部が付いている。14は、頸部に一對の小孔がみられ、他の2点にも、欠損部分に同様な小孔が穿たれていたと考えられる。

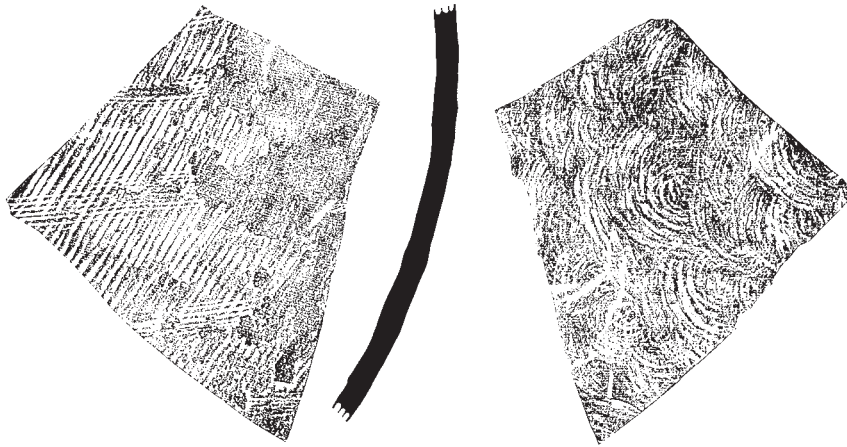
模造鏡 図545-15の1点がある。粘土円盤に、断面三角形の鈕が付けられている。鈕は、両側から孔が開けられている。

模造釧 図545-17の1点がある。外面に連続する横方向の刻みが施され、比較的忠実な模倣が行われている。

勾玉 図545-18～20の3点がある。19・20は、円孔側の先端が尖り気味で、18に比べると小型につくられている。



1 N22-16 L I



2 M22-97 L I



3 N21-27 L II



図544 遺構外出土遺物 (21)

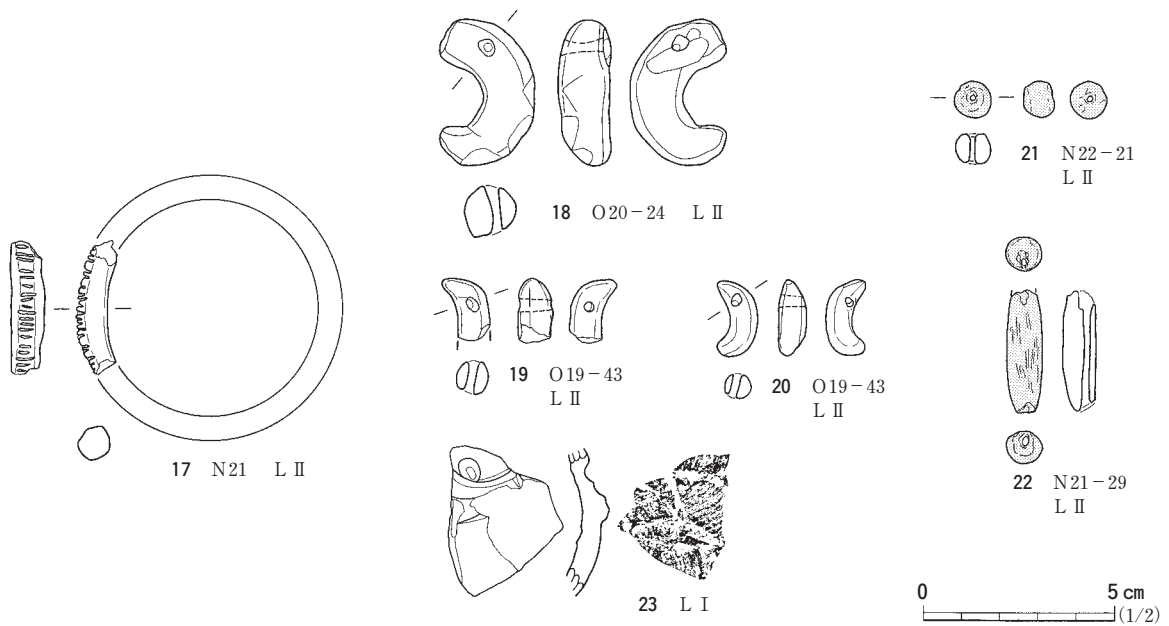
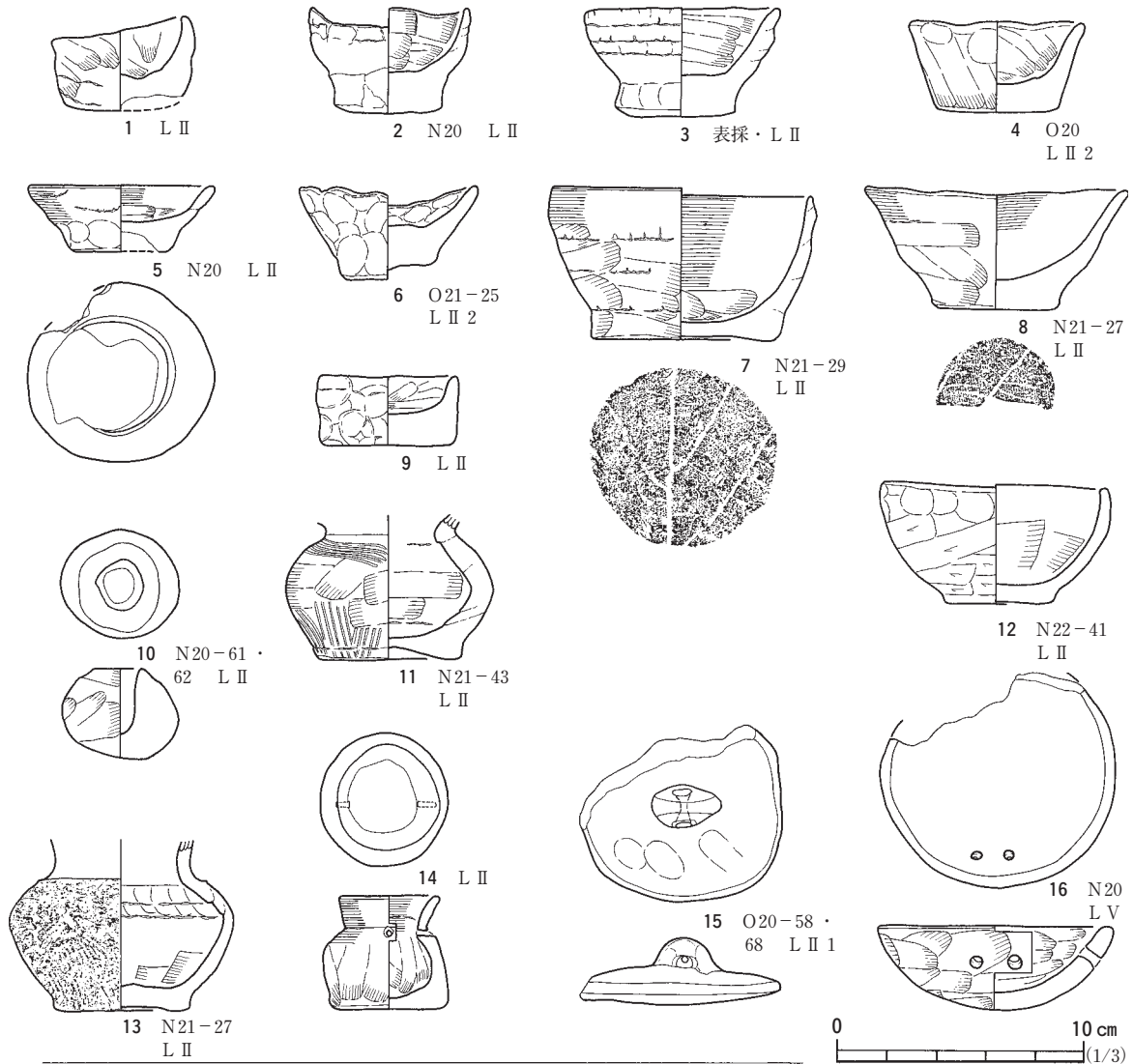


図545 遺構外出土遺物 (22)

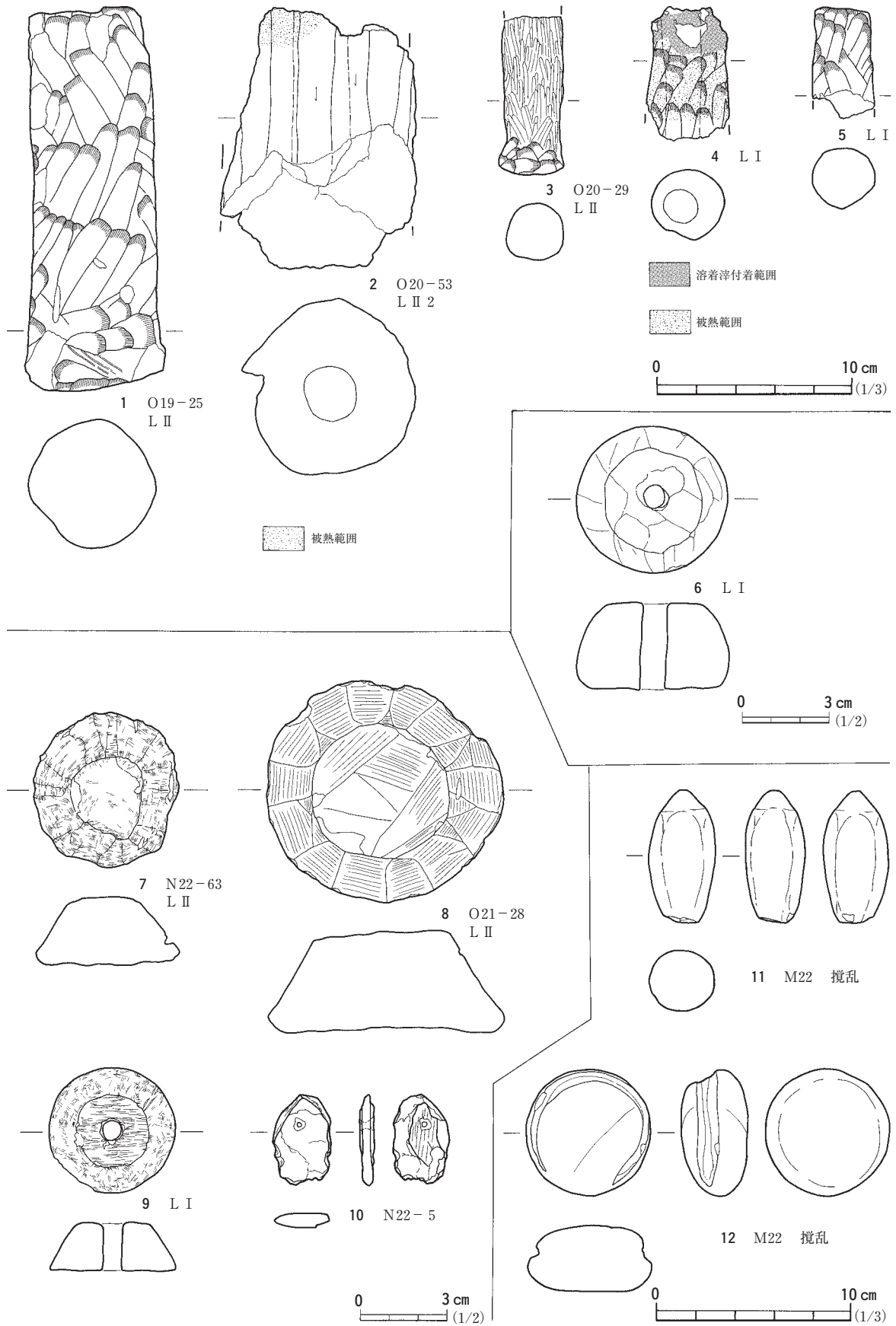


図546 遺構外出土遺物 (23)

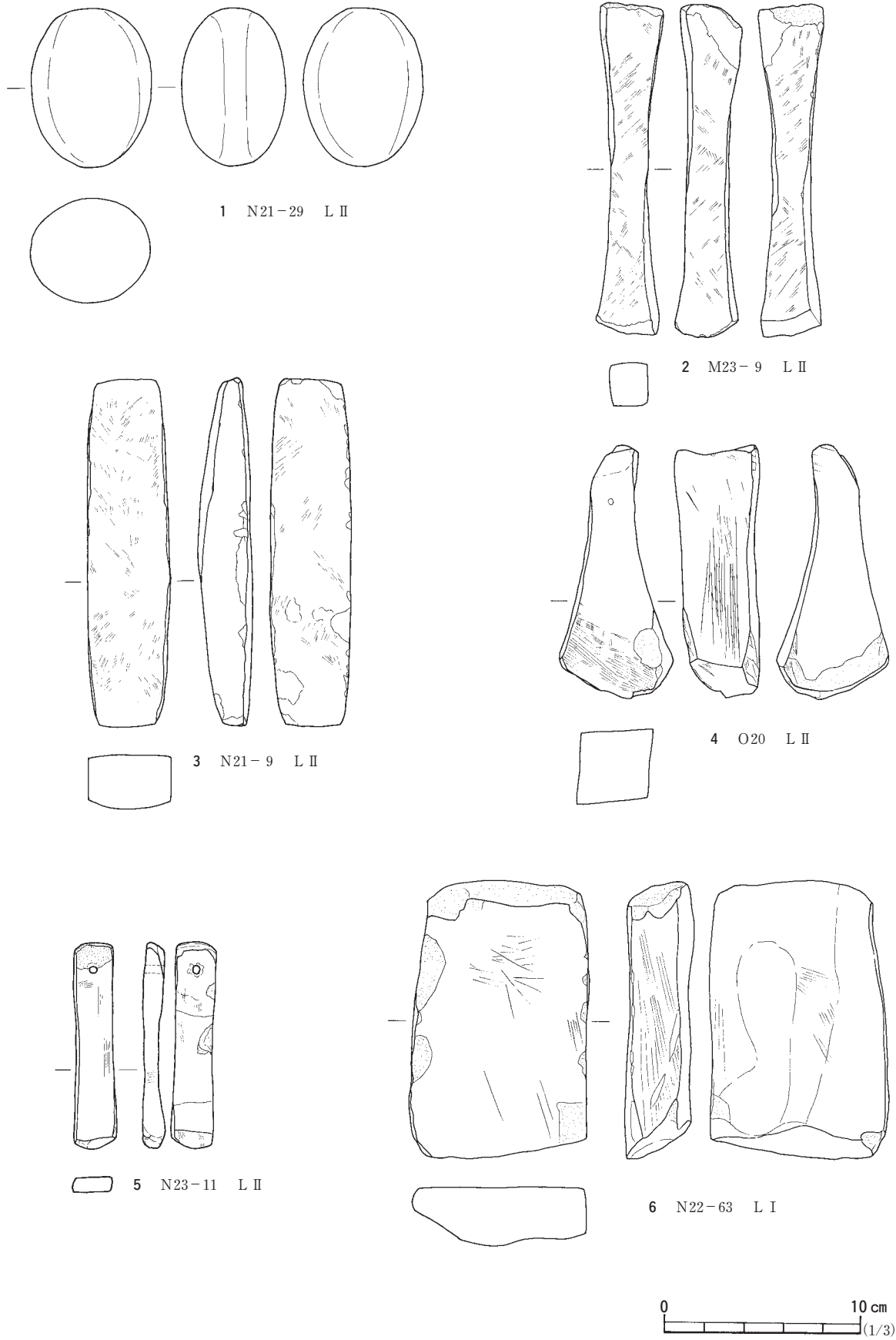


図547 遺構外出土遺物 (24)

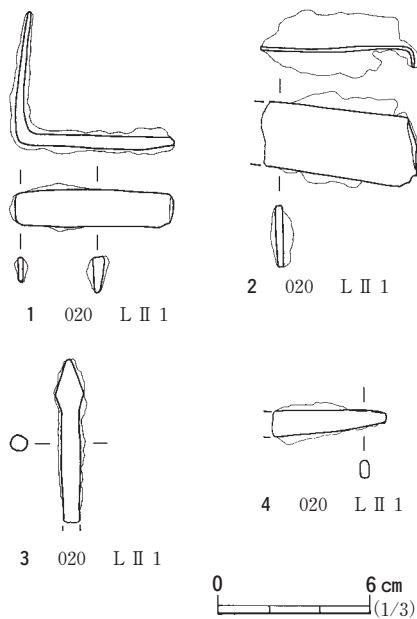


図548 遺構外出土遺物 (25)

丸玉 図545-21がある。表面が黒色処理されている。

管玉 図545-22の1点がある。両端が先細り気味になっており、表面はヘラミガキ・黒色処理されている。

[その他の土製品] 図546-1～6が該当する。

支脚 図546-1・3・5の3点がある。1は通有の大きさであるが、3・5はかなり小型につくられている。それに加え、3では表面にヘラミガキ調整が施されており、丁寧な仕上げが行われている。

羽口 図546-2・4の2点がある。2は大型、4は小型になる。

紡錘車 図546-6の1点がある。完形品。

用途不明 図545-23の1点がある。外面には渦巻き状の隆帯があり、内面には布目痕が残っている。胎土は緻密で、砂をまったく含んでおらず、他の土製品や土師器とは明らかに違っている。したがって、古墳～平安時代より新しい時期の製品の可能性が高いと推定される。

石製品・金属製品

[石製品] 図546-7～12、図547が該当する。

紡錘車 4点ある。図546-7・8は未成品になる。7は、ほぼ形は出来上がっているが、穿孔が行われていない。8は、大まかな形が整えられただけで、完成品に比べるとまだ径が大きく、研磨も行われていない。

9は、完成品である。10は、穿孔の途中で表面だけ剥がれてしまったのだろうか。石材は、他の紡錘車と同一である。

磨石 2点ある。図546-11は、先端の尖った小型品になる。図547-1は、卵形を呈している。

これらは、縄文時代の所産の可能性もあるが、古墳～奈良・平安時代の住居跡でも確実な共伴資料がみられることから、出土層位を優先して、本報告に掲載した。

砥石 5点ある。図547-2は、細長の形態をなすもので、中央はやや細身となっている。3・5は、短冊状を呈している。このうち、5は片側に小孔が設けられており、携帯品であったことがうかがえる。4は、撥状を呈しており、6は、横幅の広い形態をなす

[金属製品] 図548が該当する。すべて鉄製品になる。

刀子 2点ある。図548-1は、中ほどで直角に折り曲げられている。4は、破片のため、全体の特徴が判明しない。

鎌 1点ある。図548-2は、柄に装着される側の破片になる。

鍬 1点ある。図548-3は、先端部側だけが残っている。

(菅原)

表6 土器観察表(1)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
9図1	496	S I 01	ℓ 1	須	杯身				ロクロナデ	ロクロナデ	5%	
9図2	496	S I 01	ℓ 1	須	甕				ロクロナデ・波状文	ロクロナデ	小片	
9図3		S I 01	ℓ 1	土	高杯			10.8	ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
9図4		S I 01	ℓ 1	土	高杯			10.3	ハケメ・ケズリ・ナデ	ミガキ・黒色処理	40%	脚部3方透かし
9図5	494	S I 01	床面	土	甕	11.2	9.6		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	完形	
9図6	494	S I 01	床面	土	甕	17.8	11.9	6.4	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	85%	底部木葉痕
9図7	495	S I 01	ℓ 1	土	甕	12.2	14.1	8.4	ヨコナデ・ハケメ・軽いミガキ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
9図8	495	S I 01	ℓ 1	土	甕	15.7	26.6	8.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
9図9		S I 01	床面	土	甕	16.8	25.4	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	30%	
10図1	494	S I 01	ℓ 1	土	甕	17.9	17.4	6.9	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
10図2		S I 01	ℓ 1	土	甕	19.4			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	20%	
10図3	496	S I 01	ℓ 1	土	甕	26.4	34.1	7.9	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	胴部中央焼成後穿孔
10図4	495	S I 01	ℓ 1	土	甕	21.4	20.2	7.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	85%	無底式
10図5	496	S I 01	床面	土	甕	19.9	21.2	7.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	無底式
11図1	494	S I 01	床面	土	甕	23.8			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残32.7cm
11図2	495	S I 01	ℓ 1	土	甕	17.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	60%	器高残25.7cm
11図3	494	S I 01	ℓ 1	土	甕	18.4			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	器高残23.0cm
14図1	497	S I 02	床面	土	杯	14.4	4.7		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	底部外面焼成前線刻
14図2	497	S I 02	床面	土	杯	16.4			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
14図3	497	S I 02	床面	土	杯	8.8	2.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	ミニチュア
17図1		S I 03	ℓ 2	土	杯	17.0	5.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
17図2	497	S I 03	ℓ 1	土	甕	13.2	14.3	8.8	ヨコナデ・ナデ	ナデ	85%	底部木葉痕、外面被熱
19図1	498	S I 04	床面	土	杯	16.1	5.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
19図2	498	S I 04	ℓ 1	土	杯	15.1	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	75%	
19図3	498	S I 04	ℓ 1	土	高杯	15.2	8.0	10.2	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ナデ	60%	非ミガキ・内黒
19図4		S I 04	床面	土	甕	19.0			ヨコナデ・ハケメ		20%	
19図5	498	S I 04	ℓ 1	土	甕	14.2	12.7	4.0	ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	40%	単孔式
19図6	497	S I 04	床面	土	甕	18.4			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	30%	
19図7	498	S I 04	ℓ 1	須	壺				ロクロナデ・カキメ	ロクロナデ	40%	推定胴部径19.4cm?, 湖西窯製品
21図1	498	S I 05	床面	土	杯	10.0	4.2		ケズリ・ミガキ・黒色処理	ミガキ・黒色処理	55%	底部ケズリ粗い
21図2	499	S I 05	ℓ 2	土	杯	15.2	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	
21図3		S I 05	床面	土	甕	20.6			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	20%	
24図1	499	S I 06	床面	土	杯	15.4	5.6		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	完形	非ミガキ・内黒
24図2	499	S I 06	床面	土	杯	14.1	7.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	60%	
24図3		S I 06	ℓ 2	土	杯	15.8	4.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
24図4	500	S I 06	ℓ 2	土	杯	17.2	5.3		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	底部ケズリ粗い, 平底風
24図5	499	S I 06	床面	土	甕	13.7	13.2	6.6	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	80%	内面口縁部下に煤付着
26図1		S I 07	ℓ 2	土	杯	12.8	5.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	40%	
26図2	500	S I 07	ℓ 2	須	杯身	13.7	4.6		ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	10%	口径値誤差を含む
26図3	500	S I 07	床面	土	甕	14.6			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	30%	
28図1		S I 08	床直	土	甕			8.2	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ	60%	底部内面菊花状オサエ
31図1	501	S I 09	床面	土	杯	15.6	4.2		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	85%	底部外面焼成前線刻
31図2	501	S I 09	床面	土	高杯	14.4	7.9	9.4	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	
31図3	501	S I 09	ℓ 1	土	高杯	15.3	7.8	10.3	ヨコナデ・ハケメ	ミガキ・黒色処理	80%	
31図4		S I 09	P 1底	須	杯蓋				ロクロナデ	ロクロナデ	小片	
31図5		S I 09	カマド	土	甕			6.9	ハケメ・ケズリ	ナデ	60%	器高残22.5cm, カマド燃焼部底面出土
31図6	501	S I 09	P 1底	土	甕	27.8			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	30%	器高残22.6cm・器面黒色
32図1	501	S I 10	床面	土	杯	16.8	5.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	底部外面ケズリ
32図2	501	S I 10	床面	土	甕	13.6	8.8	5.3	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	55%	
35図1	502	S I 11	検出面	土	杯	15.6	4.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	口縁部片口状
35図2	502	S I 11	検出面	土	杯	13.6	5.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	底部外面に黒斑
35図3		S I 11	ℓ 1	土	杯	15.5	6.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
35図4	502	S I 11	焼土	土	杯	15.2	3.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
35図5	502	S I 11	床直	土	杯	16.4	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	
35図6		S I 11	ℓ 1	土	杯	20.7	5.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
35図7		S I 11	検出面	土	杯	16.3	4.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
35図8	502	S I 11	床直	土	杯	29.4	8.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	大型杯
35図9	502	S I 11	床直	土	杯	16.9	5.2		ミガキ	ミガキ・黒色処理	85%	
35図10	502	S I 11	床直	土	杯	16.8	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	
35図11	502	S I 11	床直	土	甕	21.1			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残20.0cm
35図12	503	S I 11	床直	土	甕	12.5	13.0	6.4	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	70%	内面口縁部下に煤付着
36図1	502	S I 11	床直	土	甕	9.0			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	80%	器高残6.5cm
36図2		S I 11	焼土	土	甕			7.0	ナデ	ナデ	10%	外面被熱で変色
36図3		S I 11	焼土	土	甕			8.6	ハケメ	ケズリ・ミガキ・ナデ	20%	床面出土破片と接合
38図1	503	S I 12	不明	土	杯	13.0	4.5	6.1	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	95%	灯明皿転用, 口縁欠, 油煙付着
38図2		S I 12	ℓ 1	土	甕	21.9			ロクロナデ	ロクロナデ・ナデ	10%	

表7 土器観察表(2)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
38図3	503	S I 12	ℓ 1	須	長頸瓶			8.4	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	80%	器高残17.6cm, 大戸窯, 自然釉
38図4	503	S I 12	ℓ 1	須	長頸瓶			8.4	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	50%	器高残13.0cm, 大戸窯
38図5	503	S I 12	ℓ 1	須	甕			12.5	ロクロナデ・タタキメ	無文アテメ	40%	器高残21.5cm, 底タタキメ
40図1	504	S I 13	床面	土	甕	20.5	20.2	7.6	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ハケメ・ナデ	完形	無底式
42図1	504	S I 14	床面	土	杯			3.0	ヨコナデ・ケズリ	不明	20%	底部ケズリ不徹底
42図2	504	S I 14	床面	土	杯	5.9	4.3		ヨコナデ・ケズリ	ナデ	80%	ミニチュア
42図3		S I 14	床面	土	甕	16.6			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	20%	
42図4	504	S I 14	床面	土	甕	21.0			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	30%	
44図1	505	S I 15	カマド	土	甕	15.2	21.3	8.4	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	完形	カマド袖先端の補強材
44図2	504	S I 15	カマド	土	甕	12.6	10.2	5.4	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	完形	カマド支脚転用
44図3	504	S I 15	カマド	土	甕	17.5	21.2	6.0	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	完形	カマド天井部芯材
44図4	505	S I 15	カマド	土	甕	13.6			ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	80%	器高残24.9cm, カマド天井部芯材
44図5	505	S I 15	カマド	土	甕	16.7			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	70%	器高残23.0cm, カマド天井部芯材
44図6	505	S I 15	カマド	土	甕	19.7			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	90%	器高残23.3cm, カマド右袖補強材
48図1	506	S I 16	カマド	土	杯	10.8	3.5		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	完形	関東系土師器, カマド左袖補強材
48図2	506	S I 16	床面	土	杯	11.0	3.6		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	完形	関東系土師器
48図3	506	S I 16	カマド	土	杯	11.7	3.8		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	完形	関東系土師器, カマド右袖補強材
48図4	506	S I 16	床面	土	杯	12.8	4.4		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ミガキ	50%	関東系土師器, ミガキ放射状
48図5		S I 16	ℓ 2	土	杯	11.8			ヨコナデ	ミガキ・黒色処理	45%	
48図6	506	S I 16	床面	土	杯	16.3	6.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
48図7		S I 16	掘形	土	杯	21.6	9.1		ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	40%	底部内面黒塗
48図8	506	S I 16	床面	土	高杯	19.4	11.8	13.0	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	3方透かし
48図9	507	S I 16	床面	土	甕	17.6	13.0	6.0	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	完形	単孔式
48図10	507	S I 16	床面	土	高杯	14.7	9.6	10.5	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	完形	透かし無し
48図11	506	S I 16	床面	土	甕	21.0	23.2	8.1	ヨコナデ・ハケメ	ナデ・ケズリ	80%	無底式
48図12	507	S I 16	床面	土	甕	14.4			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	85%	器高残18.3cm, 底部割り揃え, 置台
49図1	508	S I 16	カマド	土	甕	16.5	29.2	5.7	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	カマド左袖先端補強材
49図2	508	S I 16	カマド	土	甕	17.4	29.7	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	60%	カマド懸け口固定
49図3	508	S I 16	カマド	土	甕	17.1	27.0	7.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	完形	カマド右袖先端補強材
49図4	508	S I 16	カマド	土	甕	17.6	29.5	5.5	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	85%	カマド焚口天井部芯材
50図1	507	S I 16	床面	土	甕	21.6	30.8	7.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	完形	胴下部焼成後穿孔
50図2	509	S I 16	カマド	土	甕	19.5			ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	75%	カマド天井部芯材, 関東系土師器
50図3		S I 16	床面	土	甕			6.8	ハケメ・ケズリ	ナデ	30%	胴部割り揃え, 置台
50図4		S I 16	カマド	土	甕			6.0	ハケメ・ケズリ	ナデ	50%	カマド懸け口固定
51図1		S I 16	床面	土	甕			8.3	ハケメ	ナデ	40%	器高残27.8cm
54図1	509	S I 17A	床面	土	杯	15.8	5.3		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
54図2	509	S I 17A	床面	土	杯	16.6	4.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	
54図3	509	S I 17A	床面	土	杯	13.6	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	口縁部外面ケズリ
54図4	509	S I 17A	ℓ 1	土	杯	13.2	3.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	60%	
54図5	509	S I 17A	床面	土	杯	14.2	6.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
54図6	509	S I 17A	床面	土	杯	13.2	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
54図7	510	S I 17A	床面	土	杯	24.3	12.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
54図8	509	S I 17A	カマド	土	甕	15.7	27.4	6.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	カマド左袖先端補強材
55図1	510	S I 17B	ℓ 1	土	杯	14.9	4.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	85%	
58図1		S I 18	ℓ 1	土	杯	25.8			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	口縁部外面ケズリ, 器高残7.1cm
58図2	510	S I 18	カマド	土	甕	14.7	15.0	9.2		ヨコナデ・ナデ	60%	内面剥離
58図3		S I 18	ℓ 1	土	甕	21.8			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	20%	器高残21.3cm
58図4		S I 18	ℓ 1	土	甕	20.3	16.9	7.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	30%	底部木葉痕
58図5	510	S I 18	堆積土	土	甕	16.8			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	85%	器高残21.4cm
60図1	511	S I 19	検出面	土	甕	19.0	24.2	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	60%	
60図2	511	S I 19	検出面	須	高杯	12.3			ロクロナデ	ロクロナデ	20%	短脚一段透かし
62図1		S I 22	カマド	土	手捏ね	8.2	3.3		指ナデ	指ナデ	40%	カマド煙道内ℓ1出土, 祭祀?
65図1	511	S I 23	床面	土	杯	18.1	7.0	8.2	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	切り離し不明, 全面回転ヘラケズリ
65図2	512	S I 23	床面	土	甕	22.8			ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ・ナデ	40%	外面粘土付着, カマド前床面出土
65図3	511	S I 23	床面	土	甕	22.8	33.1	9.8	ロクロナデ・タタキメ・手持ちケズリ	ロクロナデ・ナデ	75%	カマド左袖補強材
65図5		S I 23	床面	土	甕	34.8			ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ・黒色処理	15%	
66図1	512	S I 23	床面	土	甕			11.0	手持ちヘラケズリ	ナデ・ミガキ	40%	胴部・底部に同一の墨書
69図1	512	S I 24	床面	土	杯	16.6	6.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
69図2		S I 24	ℓ 1	須	蓋	10.1			ロクロナデ	ロクロナデ	5%	飛鳥・藤原宮分頼杯Gの蓋
69図3	513	S I 24	床面	土	甕	20.2			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	50%	
69図4		S I 24	床面	土	甕			8.7	ナデ	ナデ	50%	底部木葉痕
69図5		S I 24	床面	土	甕			8.3	ナデ・ハケメ	ナデ	30%	
71図1	513	S I 25	P I ℓ 2	須	高台杯			8.7	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	20%	底部静止糸切り後回転ヘラケズリ
71図2		S I 25	カマド	土	甕	21.8			ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	20%	カマドℓ2出土
71図3		S I 25	カマド	土	甕	19.9			ロクロナデ	ロクロナデ・ナデ	30%	
74図1		S I 26	ℓ 1	土	高杯	17.4			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ	40%	脚部割り揃え

表8 土器観察表(3)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
74図2		S I 26	ℓ 1	須	不明				指オサエ	指オサエ	小片	
74図3		S I 26	ℓ 2	須	短頸壺				ロクロナデ	ロクロナデ	小片	
74図4	513	S I 26	床面	土	甕	17.7			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	25%	器高残16.5cm
74図5	513	S I 26	床面	土	甕	21.4	24.6	8.8	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ミガキ・ケズリ	完形	
74図6	514	S I 26	床面	土	甕	15.0	14.7		ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	85%	多孔式, カマド脇床面
79図1		S I 27	床直	土	杯	18.9			ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
79図2		S I 27	床面	土	杯	17.2			ミガキ	ミガキ・黒色処理	25%	カマド左袖脇出土
79図3	514	S I 27	床直	土	杯	15.2	6.6		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
79図4		S I 27	堆積土	土	杯	14.6	4.7		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
79図5		S I 27	床面	土	杯	13.5	3.6		ヨコナデ・ケズリ	ナデ	25%	
79図6		S I 27	床直	土	杯	14.1			ミガキ	ミガキ・黒色処理	30%	
79図7	514	S I 27	床直	土	杯	15.8	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
79図8		S I 27	床直	土	杯	13.1	4.8		ミガキ	ミガキ・黒色処理	20%	
79図9		S I 27	床面	土	杯	14.4	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
79図10		S I 27	床面	土	杯	17.2			ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
79図11	515	S I 27	床面	土	高杯	15.2			ヨコナデ・ナデ	ミガキ・黒色処理	60%	
79図12		S I 27	床面	土	杯	14.2	4.5		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
79図13	514	S I 27	床面	土	杯	15.6	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
79図14		S I 27	床直	土	高杯			9.4	ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
79図15	515	S I 27	床面	土	杯	11.8	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	
79図16	515	S I 27	床面	土	杯	12.6	3.1		ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
79図17	516	S I 27	床面	土	杯	11.4	3.4		ナデ・ケズリ	ナデ	完形	カマド左袖脇出土, 一對の孔
79図18		S I 27	床面	土	高杯			8.4	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
79図19	515	S I 27	床直	土	手捏ね	5.3	2.8	3.9	指オサエ	指オサエ	50%	
79図20	515	S I 27	床面	土	手捏ね	2.8	3.1	2.6	指頭痕	ナデ	完形	
80図1	516	S I 27	床面	土	甕	16.5	37.3	7.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	完形	
80図2	516	S I 27	床面	土	甕	19.9			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	65%	器高残28.5cm
80図3		S I 27	床直	土	甕			7.4	ハケメ・ナデ	ナデ	20%	底部木葉痕
80図4		S I 27	床面	土	甕	19.8	9.3	9.3	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ミガキ・ナデ・ケズリ	20%	無底式
80図5	515	S I 27	床面	土	甕	14.7	7.0	7.6	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	煮炊痕跡明瞭
81図1	517	S I 28	床直	須	甕				ロクロナデ・沈線・波状文	ロクロナデ	小片	口唇部に波状文
85図1	517	S I 30	床面	土	杯	18.0	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
85図2	517	S I 30	床面	土	杯	14.2	6.7		ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
85図3	517	S I 30	検出面	土	杯	15.0	5.1		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	
85図4	517	S I 30	床面	土	高杯	15.1	7.3	8.2	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	
85図5	519	S I 30	床面	土	高杯	20.8	13.1	14.0	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	脚部4方透かし
85図6	517	S I 30	床面	土	甕	16.4	15.9	7.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	85%	底部ケズリ
85図7	518	S I 30	床面	土	甕	13.0	17.7	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部ケズリ
85図8	518	S I 30	床面	土	甕	10.8			ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	70%	器高残11.5cm
85図9	517	S I 30	床面	土	甕	14.6	13.4	7.7	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
86図1	518	S I 30	床面	土	甕	17.9	9.7		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	完形	単孔式
86図2	519	S I 30	床面	土	甕	21.0	23.8	8.6	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ハケメ・ナデ・ケズリ	85%	無底式
86図3	518	S I 30	床面	土	甕	20.3	15.5	7.3	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	85%	無底式
86図4		S I 30	検出面	土	甕	16.4			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	10%	器高残7.9cm
86図5		S I 30	床面	土	甕			6.5	ハケメ	ナデ	40%	器高残21.0cm
86図6	518	S I 30	床面	土	甕	20.8	24.7	8.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
87図1	519	S I 30	床面	土	甕	16.4			ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	50%	器高残22.2cm
87図2	519	S I 30	床面	土	甕	17.9	20.8	8.1	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	70%	底部木葉痕
87図3	519	S I 30	床面	土	甕	21.8			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	器高残18.9cm
90図1	520	S I 31	床面	土	杯	14.0	6.4		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	75%	
90図2	520	S I 31	カマド	土	杯	18.1	2.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	皿状, カマド燃焼部奥壁出土
90図3	520	S I 31	床面	土	甕	16.5	15.5	8.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部ケズリ
90図4	520	S I 31	床面	土	甕	17.0	14.8	7.9	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部木葉痕
90図5		S I 31	床面	土	甕	17.4			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残7.8cm
90図6	520	S I 31	床面	土	甕	17.8	27.9	6.3	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	70%	底部ケズリ
90図7	520	S I 31	カマド	土	甕	17.6	29.6	6.9	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部ケズリ, カマド燃焼部底面出土
91図1		S I 31	床面	土	甕	20.2			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	25%	器高残17.8cm
91図2		S I 31	床下	土	手捏ね	5.0	3.1		指オサエ	指オサエ	完形	
91図3	521	S I 31	堆積土	土	手捏ね	3.4	1.8		指オサエ	指オサエ	完形	片口
91図4		S I 31	カマド	土	甕			6.0	ナデ	ナデ	10%	底部ナデ
92図1	521	S I 32	床面	土	杯	15.0	9.0	8.4	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	底部ケズリ
96図1	521	S I 34	床面	土	杯	17.3	4.8		ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
96図2		S I 34	カマド	土	杯	17.0	4.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	カマド燃焼部底面出土
96図3	521	S I 34	カマド	土	杯	17.0	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	カマド燃焼部底面出土
96図4	521	S I 34	床面	土	高杯	17.4	9.9	13.4	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	
96図5	522	S I 34	床面	土	高杯	16.8	9.5	12.7	ヨコナデ・ケズリ・ハケメ	ミガキ・黒色処理	完形	

表9 土器観察表(4)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
96図6	521	S I 34	床面	土	高杯	17.7			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	脚部割り揃え
96図7	522	S I 34	床面	土	高杯	17.7			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	脚部割り揃え
96図8	522	S I 34	床面	土	甕	16.3	14.9	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	75%	底部ケズリ
96図9	522	S I 34	床面	土	甕	18.4	18.6	7.5	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	40%	底部ケズリ, 外面使用痕明瞭
97図1		S I 34	床面	土	甕			8.2	ハケメ	ナデ	30%	器高残18.6cm
97図2		S I 34	床面	土	甕			5.8	ハケメ	ナデ	30%	器高残10.8cm
101図1		S I 36	貼床土	土	杯	15.9	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
101図2		S I 36	カマド内	土	杯	13.9			ヨコナデ	ミガキ・黒色処理	30%	
101図3		S I 36	床面	土	杯	15.0			ヨコナデ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	70%	カマド左袖脇出土
101図4	522	S I 36	カマド内	土	杯	15.2			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	
101図5	522	S I 36	カマド内	土	杯	13.5			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
101図6		S I 36	床面	土	杯	13.4	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	
101図7	522	S I 36	床面	土	杯	14.5	5.6		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ	45%	内面摩滅
101図8	522	S I 36	床直	土	杯	14.0	6.6		ヨコナデ・ケズリ	黒色処理	完形	内面摩滅
101図9		S I 36	ℓ 1	土	杯	11.1			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	10%	
101図10		S I 36	床面	土	杯	19.2			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・ナデ・黒色処理	35%	
101図11	523	S I 36	床面	土	杯	19.5			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
101図12		S I 36	床直	土	高杯			8.0	ヨコナデ・ナデ・指ナデ	ヨコナデ	40%	
101図13	523	S I 36	堆積土	土	高杯	14.2			ヨコナデ・ナデ	ミガキ・黒色処理	60%	
101図14	523	S I 36	床面	土	杯	21.9	9.6		ヨコナデ・ハケメ	ミガキ・黒色処理	80%	カマド左袖脇出土
101図15		S I 36	ℓ 1	土	杯	16.4			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	30%	
101図16	523	S I 36	床直	土	杯	29.1	9.8		ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	50%	
101図17	523	S I 36	床直	土	手握ね	3.4	2.1		指オサエ	指ナデ	完形	
101図18	523	S I 36	床直	須	不明				沈線・列点刺突		小片	
102図1	523	S I 36	床面	土	甕	18.5	28.6	7.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	完形	
102図2	524	S I 36	床面	土	甕	18.3	28.0	8.7	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	80%	
102図3		S I 36	床面	土	甕	16.6			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	30%	器高残13.5cm
102図4		S I 36	床面	土	甕				ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	60%	器高残16.9cm
102図5	524	S I 36	床面	土	甕	13.7	14.8	7.6	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	60%	
102図6	524	S I 36	床面	土	甕	16.2			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	35%	器高残12.0cm
103図1	524	S I 36	床面	土	甕	21.4	28.7	7.8	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	48%	底部木葉痕, 胴部上半器面剥離
103図2		S I 36	床面	土	甕	20.2		8.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	30%	器高残28.5cm, 無底式
103図3	524	S I 36	床面	土	甕	13.7	20.6	7.4	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部木葉痕・ケズリ・ナデ
103図4	525	S I 36	床面	土	甕	22.6	22.9	8.7	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	完形	無底式
106図1	525	S I 37	床面	土	杯	16.9	4.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	
106図2		S I 37	床下	土	杯	9.9	2.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
108図1	525	S I 38	床面	土	杯	16.0	4.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
108図2	525	S I 38	床面	土	杯	15.7	3.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	
108図3	525	S I 38	床面	土	甕	13.4	12.9	5.8	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	50%	
108図4	525	S I 38	床面	土	甕	17.1	12.3	7.2	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	
109図1		S I 39	ℓ 1	土	甕			7.5	ハケメ	ナデ	5%	
111図1	526	S I 40	貼床土	土	杯	13.3			ヨコナデ・ケズリ・漆塗付	ヨコナデ・ナデ・漆塗付	20%	関東産輸入土器
111図2	526	S I 40	床面	土	杯	20.3	6.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
111図3	526	S I 40	床面	土	甕	17.3	12.8	6.8	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	50%	底部木葉痕
111図4		S I 40	床面	土	甕	16.8	10.9		ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	
111図5		S I 40	床面	土	甕			6.6	ハケメ・ケズリ	ナデ	20%	底部ハケメ, 器高残13.2cm
111図6	526	S I 40	貼床土	土	甕	18.6	21.3	6.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	45%	胴部外面脆い
111図7	526	S I 40	床面	土	甕	15.8			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	35%	器高残17.5cm
111図8	526	S I 40	貼床土	土	小壺				指オサエ	指ナデ	90%	器高残4.6cm, ミニチュア
111図9		S I 40	床面	土	甕			6.7	ナデ	ナデ	20%	底部ナデ
114図1		S I 41	床直	土	甕			7.0	ハケメ・ケズリ・ナデ	ナデ	20%	底部ナデ, 内面粗い
116図1		S I 42	ℓ 1	土	甕	17.1			ロクロナデ・ケズリ・ナデ	ミガキ・ナデ・黒色処理	20%	器高残14.0cm
116図2	527	S I 42	ℓ 2	土	小壺	4.0	4.4	3.2	ヨコナデ・指頭圧痕	ヨコナデ	完形	底部ケズリ, ミニチュア, 穿孔
116図3		S I 42	カマド内	須					ロクロナデ		小片	
119図1		S I 43	床面	土	杯	16.8	5.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	カマド前床面出土
119図2		S I 43	検出面	土	杯	15.0	4.2		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
119図3	527	S I 43	床面	土	杯	16.0	4.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	
119図4		S I 43	検出面	土	杯	15.0			ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	器高残4.7cm
119図5		S I 43	検出面	土	杯	15.3			ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
119図6	527	S I 43	床面	土	杯	14.6	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	器面粗い・カマド前出土
119図7	527	S I 43	床面	土	甕	14.0	12.3	5.4	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	80%	内面リング状煤付着, 使用痕跡
119図8	527	S I 43	床面	土	甕	14.2			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	70%	器高残14.8cm
119図9	528	S I 43	カマド	土	甕	19.0	28.2	7.2	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	90%	カマドの粘土付着, カマド燃焼部底面出土
119図10	527	S I 43	床面	土	甕			7.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	50%	器高残18.9cm
120図1		S I 43	カマド	土	甕			8.2	ナデ	ナデ	50%	器高残19.5cm, 内面煤付着, 器面粗い, 燃焼部出土
120図2	528	S I 43	ℓ 1	須	甕				沈線・波状文		小片	

表10 土器観察表(5)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
120図3	528	S I 43	カマド	土	甕				ハケメ	ケズリ・ナデ	80%	器高残32.4cm, カマド右袖構築材
123図1	529	S I 44	床面	土	杯	15.8	5.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
123図2	529	S I 44	床面	土	手捏ね	12.4	9.4	6.0	指オサエ・指ナデ	指オサエ・指ナデ	85%	全面黒色
123図3	529	S I 44	床面	土	甕	14.4	11.9	6.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	65%	底部木葉痕
123図4	529	S I 44	床面	土	甕	16.0			ヨコナデ・ハケメ・指ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	65%	器高残11.8cm, 底部破壊
123図5		S I 44	床面	土	杯			5.9	ナデ	ナデ	30%	内面黒い
123図6	529	S I 44	床面	土	甕	18.0	26.2	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	
123図7	530	S I 44	床面	土	片口	10.4	10.8	7.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	
124図1	530	S I 45	床面	土	杯	9.9	3.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
124図2	530	S I 45	床面	土	杯	9.6	2.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
127図1	530	S I 46	床面	土	杯	14.5	5.3		ミガキ	ミガキ・黒色処理	50%	
127図2	530	S I 46	床面	土	杯	16.9	4.6		ミガキ・黒色処理	ミガキ・黒色処理	25%	
127図3		S I 46	床面	土	甕			2.4	ミガキ・ケズリ	ナデ	10%	単孔式
127図4	530	S I 46	床面	土	甕	17.8	35.5	8.5	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	90%	
129図1	531	S I 47	ℓ 1	土	甕	17.2			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	30%	器高残11.6cm
129図2		S I 47	ℓ 1	土	甕	19.8			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	10%	器高残10.1cm
133図1	531	S I 48	床面	土	杯	14.5	8.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
133図2		S I 48	床面	土	杯	13.5	4.5		ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	40%	
133図3	531	S I 48	床面	土	杯	22.5	5.1		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
133図4	531	S I 48	P 2 ℓ 3	土	甕	15.6	10.4	8.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部ケズリ, 単孔式
133図5	531	S I 48	床面	土	甕	13.8	8.9	7.3	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	80%	底部ケズリ
133図6		S I 48	床面	土	甕	15.4			ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	20%	器高残9.7cm
133図7	531	S I 48	床面	土	甕	16.4	15.4	6.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	75%	底部ケズリ
133図8		S I 48	ℓ 1	土	甕	21.2			ヨコナデ・ハケメ・ミガキ	ミガキ	20%	器高残14.0cm, P 1 ℓ 2 出土
133図9		S I 48	床面	土	甕	16.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	5%	
133図11	532	S I 48	床面	土	手捏ね	7.8	4.9	5.1	指オサエ	指ナデ	完形	
137図1		S I 49	床面	土	杯	11.0	4.9		ミガキ	ミガキ・黒色処理	30%	底部外面焼成前線刻
137図2	533	S I 49	床面	土	高杯	14.1	8.1	9.6	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	
137図3	533	S I 49	床面	土	甕	14.6	9.0	6.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	75%	底木葉痕, 器面上半粗い
137図4	533	S I 49	床面	土	杯	15.2	4.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
137図5	533	S I 49	床面	土	甕	15.7	16.7	5.9	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ケズリ	55%	
137図6	534	S I 49	床面	土	杯	20.4	14.1	8.4	ヨコナデ・ハケメ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ・ナデ	40%	底部ケズリ
137図7	533	S I 49	床面	土	甕	18.2	19.5	7.2	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	50%	底部ナデ
137図8	534	S I 49	床面	土	甕	17.3	24.6	6.0	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	65%	底部ケズリ
137図11	536	S I 49	床面	土	手捏ね	4.9	2.7	3.8	指オサエ	指ナデ	90%	
138図1	534	S I 49	床面	土	甕	17.4			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残14.7cm
138図2	534	S I 49	床面	土	甕	16.8			ヨコナデ・ナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	30%	器高残21.8cm
138図3	535	S I 49	床面	土	甕	15.0	32.0	6.7	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	75%	
138図4	534	S I 49	床面	土	甕	20.9	25.7	7.7	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	60%	無底式
139図1	535	S I 49	ℓ 1	土	杯	13.4	3.9	6.2	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	底部回転糸切り, 墨書
139図2		S I 49	ℓ 1	須	蓋				ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	10%	器高残1.1cm
141図1	536	S I 50	床直	土	杯	16.1	5.2		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	底部外面焼成前線刻
141図2	536	S I 50	床面	土	甕	17.5	14.3	8.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	底部木葉痕
141図3		S I 50	カマド	土	甕			8.3	ハケメ	ナデ・ハケメ	70%	器高残25.0cm
145図1		S I 52	ℓ 1	土	甕	14.6	9.8	7.1	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	20%	底部木葉痕
145図2	536	S I 52	ℓ 2	土	杯	15.2	3.6		ヨコナデ・ハケメ	ミガキ・黒色処理	20%	
145図3	536	S I 52	ℓ 1	土	杯	15.1	4.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	
151図1		S I 56	カマド	土	甕			10.0	ハケメ	ナデ	40%	器高残11.0cm, 底部木葉痕
154図1	537	S I 58	堆積土	土	杯	18.1	9.9		ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・指ナデ	75%	
154図2	537	S I 58	堆積土	土	甕	13.9	10.8	5.4	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
156図1	537	S I 59	床直	土	杯	16.4	5.1		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
156図2		S I 59	床面	土	杯	8.2	4.2		ヨコナデ・黒色処理	ヨコナデ・ナデ・黒色処理	40%	
156図3	537	S I 59	カマド	土	甕	16.8	28.6	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	胴部に粘土付着, カマド燃焼底面出土
156図4		S I 59	検出面	土	甕			8.9	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ミガキ・ナデ・ケズリ	55%	無底式, 器高残23.6cm
160図1		S I 60	ℓ 1	土	杯	15.0	5.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	40%	
160図2	538	S I 60	床面	土	杯	14.9	5.0		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	75%	
160図3	538	S I 60	床面	土	杯	16.2	5.1		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	
160図4	538	S I 60	P 5底面	土	杯	16.6	5.0		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	85%	
160図5	538	S I 60	P 5底面	土	杯	16.1	4.6		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
160図6	538	S I 60	P 5底面	土	杯	15.8	5.2		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	
160図7	538	S I 60	床面	土	甕	15.3	11.8	6.2	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	45%	底部木葉痕
160図8		S I 60	床面	土	杯	22.8			ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・指ナデ	20%	器高残13.5cm
160図9	538	S I 60	床面	土	甕	18.1	28.4	7.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	
160図10	539	S I 60	床面	土	甕	26.6	25.1	8.3	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・指ナデ・ケズリ	45%	無底式
161図1	538	S I 60	床面	土	甕	17.6	36.1	7.0	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・指ナデ	90%	
161図2	539	S I 60	床面	土	甕	18.9	37.4	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	85%	底部ケズリ

表11 土器観察表(6)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
161図3	539	S I 60	床面	土	甌	26.4	25.8	9.6	ヨコナデ・ハケメ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	90%	無底式
161図4		S I 60	床面	土	甌	19.4			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	30%	
162図1	539	S I 60	床面	土	甌	17.2	26.5	7.6	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部木葉痕
162図2	540	S I 60	床面	土	甌	20.0	25.0	9.0	ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	完形	無底式
162図3	540	S I 60	ℓ 1	須	杯身	12.8			ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	25%	器高残3.2cm
164図1		S I 61	検出面	須	蓋				ロクロナデ	ロクロナデ	10%	器高残1.4cm
166図1		S I 62	貼床下	土	杯	13.5	3.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
166図2		S I 62	堆積土	須	蓋				ロクロナデ	ロクロナデ	小片	
166図3	540	S I 62	カマド	須	杯蓋	18.1	3.4		ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	完形	胎土に径1mm白砂粒多く含む
168図1		S I 63	ℓ 1	須	杯蓋				ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	5%	器高残2.9cm
168図2	540	S I 63	ℓ 1	須	杯身				ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	10%	器高残3.0cm
171図1	541	S I 64	P 1 ℓ 1	土	甌	21.6	26.7	8.7	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ミガキ	完形	無底式
172図1		S I 64	ℓ 1	土	杯	15.6	4.4		ミガキ	ミガキ	30%	
172図2	540	S I 64	P 1 ℓ 1	土	杯	15.4	6.0		ミガキ	ミガキ・黒色処理	65%	
172図3	540	S I 64	ℓ 1	土	甌	8.9	8.9	4.6	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	45%	ミニチュア
172図4	541	S I 64	P 1 ℓ 1	土	甌	13.3	15.8	7.5	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ミガキ	完形	底部ケズリ
172図5	541	S I 64	床面	土	甌	16.3			ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	90%	器高残39.8cm
172図6	542	S I 64	P 1 ℓ 1	土	甌	15.6	35.3	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
174図1	541	S I 65	堆積土	土	甌			7.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	50%	器高残18.2cm
174図2	542	S I 65	堆積土	土	甌	13.3	9.8	6.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	60%	底部木葉痕
174図3		S I 65	堆積土	土	甌			8.0	ハケメ・ナデ	ナデ	40%	器高残16.2cm
174図4		S I 65	堆積土	土	甌			6.5	ハケメ	ナデ	25%	器高残13.9cm
174図5	542	S I 65	堆積土	土	甌	20.8	23.9	7.1	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	85%	底部ナデ
174図6	542	S I 65	堆積土	土	甌	18.4			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・指ナデ	55%	器高残29.3cm
174図7		S I 65	堆積土	須	甌				平行タタキメ	アテメ	小片	
177図1	542	S I 66	床面	土	杯	17.2	4.0	11.4	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
177図2		S I 66	床面	土	杯	12.2	4.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	65%	
177図3		S I 66	床面	土	杯	17.8	6.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
177図4	542	S I 66	床面	土	杯	14.7	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
177図5	543	S I 66	床面	土	甌	14.0	13.4	8.4	ヨコナデ・ケズリ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・指ナデ	90%	
177図6	543	S I 66	P 1 ℓ 1	土	甌	11.6	11.0	6.7	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
177図7	543	S I 66	床面	土	甌	16.7	13.2	6.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部木葉痕
177図8	543	S I 66	P 1 ℓ 1	土	甌	16.6	16.8	6.0	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ	90%	
177図9	544	S I 66	P 1 ℓ 1	土	甌	23.3	13.3	4.0	ヨコナデ・ハケメ・ミガキ	ヨコナデ・ナデ	90%	内外面剥離, 単孔式
177図10	544	S I 66	床面	土	甌	15.0	19.5	6.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	65%	
179図1		S I 68	堆積土	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	器高残3.5cm
179図2		S I 68	床面	土	甌			6.0	ナデ	ナデ	5%	底部ケズリ
181図1	544	S I 70	ℓ 1	須	杯身				ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	5%	器高残3.3cm
183図1	544	S I 71	床面	土	杯	14.3	4.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
183図2	544	S I 71	床面	土	杯	24.4	7.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
183図3	544	S I 71	床面	土	杯	24.3	11.1		ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	ミガキ	70%	
184図1		S I 72	カマド	土	甌	12.8			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残8.1cm, カマド燃焼部底面出土
186図1	544	S I 73	堆積土	土	杯	13.3	5.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
186図2	544	S I 73	堆積土	土	杯	17.0	4.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	70%	
186図3		S I 73	堆積土	須	甌				ロクロナデ・沈線・隆帯		小片	
191図1	545	S I 75	床面	土	杯	13.0	4.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・ナデ	70%	
191図2	545	S I 75	床面	土	杯	15.0	5.5		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
191図3	545	S I 75	床面	土	杯	14.9	5.6		ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	完形	
191図4	545	S I 75	床面	土	高杯	14.8	8.7	10.0	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
191図5		S I 75	ℓ 1	土	高杯			8.0	ハケメ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	50%	器高残5.4cm
191図6		S I 75	床面	土	高杯			10.1	ヨコナデ		30%	
191図7	545	S I 75	床面	土	杯	11.0	5.5	5.1	指ナデ	ヨコナデ・指ナデ	完形	粗製
191図8	545	S I 75	床面	土	杯	10.5	5.1	5.4	ヨコナデ・指オサエ	ナデ	完形	粗製
191図9	545	S I 75	床面	土	杯	12.2	7.4	6.8	ヨコナデ・指ナデ	ナデ・指ナデ	90%	粗製
191図10	545	S I 75	床面	土	杯	9.6	5.0	5.0	ヨコナデ・指ナデ	ナデ・指ナデ	完形	粗製
191図11	545	S I 75	床面	土	杯	12.4	7.6	4.8	ヨコナデ・指オサエ	ナデ・指ナデ	完形	粗製
191図12	546	S I 75	床面	土	杯	11.5	5.8	5.3	指ナデ	指ナデ	完形	粗製
191図13	546	S I 75	床面	土	杯	11.9	5.7	5.4	ヨコナデ・指ナデ	ナデ	75%	粗製
191図14	546	S I 75	床面	土	杯	11.4	5.7	5.3	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	粗製
191図15	546	S I 75	床面	土	杯	10.7	6.0	5.1	ナデ	ナデ	65%	粗製
191図16	546	S I 75	床面	土	杯	10.6	5.1	5.6	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・指ナデ	完形	粗製, 内面未付着
191図17	546	S I 75	床面	土	甌	15.6	15.4	7.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	50%	底部ヘラナデ
192図1	546	S I 75	床面	土	甌	18.4	29.3	7.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	60%	
192図2	547	S I 75	床面	土	甌	18.6	25.0	7.1	ナデ	ナデ	90%	底部ナデ, 内外面黒色
192図3	547	S I 75	床面	土	甌	17.2	22.5	6.8	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・指ナデ	85%	底部ナデ
192図4	547	S I 75	床面	土	甌	26.0	28.5	7.8	ヨコナデ・ハケメ・ミガキ	ミガキ・ハケメ	65%	無底式

表12 土器観察表(7)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
194図1		S I 76	床面	土	杯	16.5	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
194図2	547	S I 76	検出面	土	杯	10.3	3.8	4.2	ヨコナデ・指頭圧痕	ヨコナデ・ナデ	70%	
196図1	547	S I 77	床面	土	杯	12.0	5.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・ナデ	完形	
196図2	548	S I 77	床面	土	甕	14.2	9.2	6.1	ヨコナデ・指ナデ・ケズリ	ナデ	完形	底部ケズリ, 煮炊痕跡
196図3	548	S I 77	カマド	土	甕	17.4			ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	45%	器高残16.3cm, カマド右袖構築材
198図1		S I 78	床面	土	杯	15.2			ミガキ	ミガキ・黒色処理	10%	器高残4.8cm
198図2		S I 78	床面	土	甕			7.6	ナデ	ナデ	5%	底部木葉痕
198図3		S I 78	床面	須	甕						小片	
200図1	547	S I 79	検出面	土	杯	13.7	4.4	6.6	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	65%	底部回転糸切り
203図1	551	S I 80	床面	土	杯	14.5	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
203図2	549	S I 80	床面	土	杯	12.8	8.2		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	完形	
203図3	551	S I 80	床面	土	杯	14.7	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
203図4	549	S I 80	床面	土	杯	14.9	5.6		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
203図5	548	S I 80	床面	土	杯	15.7	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	底部静止糸切り
203図6	549	S I 80	床面	土	甕	15.8	14.0	7.3	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	90%	底部木葉痕
203図7	549	S I 80	床面	土	甕	18.1	13.4	7.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部ケズリ
203図8	550	S I 80	カマド	土	甕	18.5	29.6	7.3	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	完形	燃焼部底面出土
203図9	549	S I 80	カマド	土	甕	19.8	24.4	7.4	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕, カマド右袖構築材
204図1	551	S I 80	床面	土	甕	17.5	15.5	8.4	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ・ケズリ	85%	無底式
204図2	551	S I 80	床面	土	甕	21.1	22.8	7.4	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	85%	無底式
204図3	552	S I 80	カマド	土	甕	16.8	27.6	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	90%	底部木葉痕, カマド左袖構築材
204図4	552	S I 80	カマド	土	甕	19.8	24.8	7.1	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	完形	底部ケズリ, カマド右袖構築材
205図1	550	S I 80	カマド	土	甕	17.8	28.2	7.8	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	完形	底部木葉痕, カマド右袖構築材
205図2	550	S I 80	カマド	土	甕	20.0	25.4	7.2	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	80%	底部木葉痕, カマド燃焼部底面
205図3	550	S I 80	カマド	土	甕	18.2	27.2	7.1	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	完形	底部ケズリ, カマド左袖構築材
205図4	551	S I 80	カマド	土	甕	16.8	25.1	7.5	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	完形	底部ケズリ, カマド燃焼部底面
206図1	552	S I 80	カマド	土	甕	19.2	24.7	7.5	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ハケメ・ナデ	完形	底部ケズリ, カマド右袖構築材
209図1	552	S I 81	ℓ 1	土	杯	11.9	4.1		ミガキ	ミガキ・黒色処理	90%	
209図2	552	S I 81	ℓ 1	土	杯	9.4	2.4	5.2	ミガキ・黒色処理	ミガキ・黒色処理	90%	金属器模倣
209図3	552	S I 81	ℓ 1	土	杯	12.5	3.1		ミガキ	ミガキ・黒色処理	完形	
209図4		S I 81	カマド	土	杯	15.6	3.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	15%	
209図5		S I 81	ℓ 1	土	杯	14.0	3.5	6.0	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	25%	
209図6	553	S I 81	床面	土	甕	20.8	24.8	8.2	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
209図7	553	S I 81	カマド	土	甕	20.8			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残21.2cm
209図9	553	S I 81	ℓ 1	須	甕				ロクロナデ	ロクロナデ	小片	
209図10		S I 81	検出面	須	鉢				ロクロナデ	ロクロナデ	小片	平坦な口唇部
209図11	553	S I 81	ℓ 1	須	蓋	16.4			ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	25%	器高残1.9cm
209図12	554	S I 81	ℓ 1	須	甕				平行タタキメ	アテメ	小片	
212図1	554	S I 82	床面	土	杯	16.6	5.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	内外面粗い
212図2	554	S I 82	床面	土	杯	17.5	5.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	内面剥離
212図3	554	S I 82	床面	土	杯	15.7	5.5		ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
212図4	554	S I 82	床面	土	杯	17.5	5.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
212図5	554	S I 82	床面	土	杯	17.4	5.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	外面摩滅
212図6		S I 82	床面	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
212図7	554	S I 82	床面	土	杯	22.9	6.7		ヨコナデ・指ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
212図8	554	S I 82	床面	土	杯	17.0	4.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
212図9	555	S I 82	床面	土	甕			7.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	90%	
212図10	554	S I 82	床面	須	杯蓋	15.8	4.2		ロクロナデ	ロクロナデ	完形	回転ヘラ切り, 無調整, 焼成前穿孔
212図11	555	S I 82	床面	土	甕	19.1	16.4	8.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部ケズリ, 外面粗い
213図1	555	S I 82	床面	土	甕	19.2	29.0	8.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	60%	
213図2	555	S I 82	床面	土	甕	14.0	31.0	7.8	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	80%	
213図3		S I 82	床面	土	甕			8.8	ハケメ	ナデ	35%	器高残17.7cm, 底部ケズリ, 朱塗り
213図4		S I 82	ℓ 1	土	甕			8.0	ナデ	ナデ	30%	内外面調整不明瞭
213図5	556	S I 82	床面	土	甕	20.5	26.4	9.3	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	完形	無底式
214図1		S I 82	床面	土	甕			7.7	ハケメ・ナデ		40%	器高残14.9cm, 内面摩滅
214図2	556	S I 82	ℓ 1	須	甕				タタキメ	アテメ	小片	外面に焼台痕跡
214図3	556	S I 82	床面	須	甕				タタキメ	同心円文アテメ	小片	
216図1		S I 83	床面	土	甕			8.0	ハケメ・ナデ	ナデ	10%	
216図2	556	S I 83	ℓ 1	須	杯			7.0	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	25%	底部切り離し不明
219図1		S I 84	ℓ 1	土	杯	14.8	4.0	8.8	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
219図2	557	S I 84	カマド	土	杯	15.5	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	カマド燃焼部内出土
219図3	557	S I 84	カマド	土	杯	12.9	4.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	カマド燃焼部内出土
219図4	557	S I 84	カマド	土	甕	16.9	27.3	8.1	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	70%	カマド燃焼部内出土
219図5	557	S I 84	カマド	土	甕	20.8	21.6		ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	カマド燃焼部底面出土
219図6		S I 84	床面	土	甕			8.5	ハケメ	ケズリ	30%	器高残11.2cm, 無底式
221図1	557	S I 85	検出面	土	杯	17.5	3.5		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	底部外面焼成前線刻

表13 土器観察表(8)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
221図2	557	S I 85	カマド	土	杯	17.4	6.5		ヨコナデ・ケズリ・指圧痕	ミガキ・黒色処理	75%	カマド左袖補強材
221図3	557	S I 85	床面	土	杯	15.3	6.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	関東系土師器
221図4	557	S I 85	カマド	土	杯	14.2	5.4		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	完形	カマド右袖構築材、関東系土師器
221図5	558	S I 85	床面	土	杯	14.6	5.3		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ	55%	関東系土師器
221図6	558	S I 85	カマド	土	杯	11.1	7.8	6.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	カマド燃焼部出土
221図7	558	S I 85	床面	土	甕	12.4	12.5	6.4	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	85%	底部ケズリ
221図8	558	S I 85	P 2 l 1	土	甕	22.2	21.2	8.2	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	90%	無底式
225図1	559	S I 87	床直須	須	円面硯	7.2	3.0	8.8	ロクロナデ	ロクロナデ・ケズリ	完形	スリ面朱・墨付着
225図2	558	S I 87	床面	土	杯	10.5	3.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	
228図1	559	S I 88	床面	土	甕	14.3	15.3	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	完形	外面縦ハケ後横ハケ
228図2	558	S I 88	l 1	土	甕	12.8	14.7	5.9	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部木葉痕
228図3	559	S I 88	床面	土	甕	16.0	23.5	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	55%	
228図4	559	S I 88	床面	土	甕	16.5			ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	30%	器高残22.1cm
228図5	560	S I 88	床面	土	甕	15.9			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	50%	器高残15.0cm
228図6		S I 88	床面	土	甕			7.5	ケズリ	ヨコナデ・ナデ	15%	器高残9.2cm, 外面赤変
229図1	560	S I 88	床面	土	甕	18.3	30.5		ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	75%	
229図2		S I 88	床面	土	甕				ヨコナデ・ハケメ	ナデ	40%	器高残23.9cm
229図3	560	S I 88	床面	土	甕	20.0	24.7	8.4	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	75%	無底式
229図4	561	S I 88	床面	土	甕	17.6	31.2	7.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部ケズリ, 外面粘土付着
230図1	560	S I 88	床面	土	甕			9.1	ハケメ・ナデ	ナデ	50%	器高残23.8cm
230図6	561	S I 88	床面	土	杯			4.4	ナデ	ナデ	20%	底部ナデ, 柱状
231図1	561	S I 89	カマド	土	杯	16.9	3.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	85%	カマド右袖出土
233図1	562	S I 90	カマド	土	杯	14.8	4.4		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	85%	カマド前出土
233図2	562	S I 90	カマド	土	杯	13.8	5.4		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	カマド燃焼部底面出土
233図3	562	S I 90	カマド	土	杯	14.5	7.0		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	カマド前出土
233図4	562	S I 90	カマド	土	杯	15.4	5.0		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	カマド燃焼部底面出土
236図1	563	S I 91	床面	土	甕	19.2	13.4	5.6	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	90%	単孔式
236図2	563	S I 91	カマド	土	甕	18.1	19.5	6.8	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	85%	底部ナデ, カマド燃焼部底面出土
236図3	563	S I 91	カマド	土	甕	16.8	26.5	7.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部ナデ, カマド燃焼部底面出土
236図4		S I 91	カマド	土	甕			7.2	ナデ	ナデ	50%	器高残13.9cm, 内面煤付, 底部木葉痕
236図5	563	S I 91	床面	土	甕	17.0	25.0	7.7	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	外面カマド使用痕, 底部木葉痕
237図1	564	S I 91	カマド	土	甕	18.5	23.3	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	カマド左袖構築材
237図2	564	S I 91	カマド	土	甕	19.5	24.3	6.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	カマド右袖構築材
237図3	564	S I 91	カマド	土	甕	17.1	20.4	8.1	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	65%	底部木葉痕, カマド燃焼部底面出土
239図1	564	S I 92	カマド	土	杯	11.8	4.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	65%	崩落土出土
239図2	564	S I 92	カマド	土	杯	13.8	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	内面剥落, 崩落土出土
239図3	564	S I 92	カマド	土	杯	14.3	5.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	崩落土出土
239図4		S I 92	カマド	土	杯	17.0			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	15%	口径値誤差含, 崩落土出土
239図5	565	S I 92	カマド	土	甕	18.6	28.2	8.0	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ・ナデ	60%	底部木葉痕, 崩落土出土
241図1	564	S I 93	床面	土	杯	15.8	4.1		ミガキ	ミガキ・黒色処理	55%	
244図1		S I 94	床面	土	杯	16.0			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
244図2		S I 94	床面	土	杯	15.6			ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
244図3	565	S I 94	床面	土	杯	12.1	6.5	6.2	ヨコナデ・指ナデ	ナデ	70%	底部ケズリ
244図4		S I 94	床面	土	杯	15.7	5.5		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
244図5	564	S I 94	床面	土	杯	16.4	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
244図6	565	S I 94	床面	土	甕	13.2	11.7	6.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	底部木葉痕, 外面横ハケメ
244図7		S I 94	床面	土	甕			8.6	ハケメ		30%	底部木葉痕, 内面粗い
244図8	565	S I 94	床面	土	甕	16.0	16.5	5.8	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部ケズリ
244図9	566	S I 94	床面	土	甕	19.7	18.5	8.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	80%	底部ナデ, 内外面煮炊痕明瞭
244図10	568	S I 94	床面	土	甕	18.0	15.2	4.8	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	単孔式
245図1	566	S I 94	床面	土	甕	16.9	30.0	7.8	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ミガキ	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	60%	
245図2	567	S I 94	床面	土	甕	22.5	26.7	9.4	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	90%	無底式
245図3	566	S I 94	カマド	土	甕			7.6	ハケメ	ナデ	60%	器高残33.1cm, カマド燃焼部底面出土
245図4	567	S I 94	カマド	土	甕	21.6	31.1	9.6	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ケズリ	80%	無底式
246図1	568	S I 94	カマド底	土	甕			7.9	ナデ	ナデ	60%	外面粘土付着, 器高残27.6cm
248図1	567	S I 95	床面	土	杯	10.2	3.9	5.5	ヨコナデ, 指オサエ	ヨコナデ, 指オサエ	完形	ミニチュア
250図1		S I 96	l 2	土	杯	14.4	4.4		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
250図2		S I 96	l 1	土	杯	11.6			ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	10%	
252図1	568	S I 97	l 1	土	甕	17.7			ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	80%	器高残23.1cm
252図2		S I 97	床面	土	高杯			10.9	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	黒色処理	20%	
256図1	568	S I 98	l 1	土	杯	17.7	5.9		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	
256図2	569	S I 98	カマド	土	甕	15.5		6.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	器高残10.5cm, カマド燃焼部底面出土
256図3	568	S I 98	カマド	土	甕	15.2	15.4	8.2	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部ケズリ, カマド燃焼部底面出土
256図4	569	S I 98	床面	土	甕	16.0	13.6	7.4	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部ケズリ, 口縁強く外反, 煤付着
256図5	569	S I 98	カマド	土	甕	20.1	21.0	6.5	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	85%	外面粗い, カマド左袖構築材
256図6	569	S I 98	カマド底	土	甕	20.9	20.5	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕, カマド燃焼部底面出土

表14 土器観察表(9)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
256図7	569	S I 98	カマド	土	甕	18.9	21.1	8.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	底部ケズリ, カマド右袖構築材
257図1	570	S I 98	カマド	土	甕	19.0	21.7	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	80%	底部本葉痕, カマド燃焼部底面出土
257図2	570	S I 98	カマド	土	甕	19.2	23.8	8.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部ケズリ, カマド天井部構築材
257図3	570	S I 98	カマド	土	甕	18.4	28.4	6.6	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部ケズリ, カマド天井部構築材
257図4	571	S I 98	カマド	土	甕	19.2	25.9	7.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	75%	底部本葉痕, カマド天井部構築材
258図1	570	S I 98	床面	土	甕	23.8			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	45%	器高残13.5cm
258図2	569	S I 98	ℓ 1	須	不明				波状文		小片	
260図1		S I 99	ℓ 1	土	杯	12.1			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	35%	
260図2	571	S I 99	床面	土	杯	12.5	5.4	6.3	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	60%	底面ケズリ
260図3		S I 99	ℓ 1	土	杯	15.9			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
260図4		S I 99	ℓ 1	土	杯	16.2	4.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
260図5	571	S I 99	ℓ 1	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
260図6		S I 99	ℓ 1	須	杯				ロクロナデ・沈線	ロクロナデ	小片	
260図7		S I 99	ℓ 1	須	杯蓋	14.2			ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	10%	
263図1		S I 100	ℓ 1	土	杯	14.0	3.8		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	20%	
263図2		S I 100	ℓ 1	土	杯	13.5	3.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
263図3	571	S I 100	ℓ 1	土	杯	14.4	4.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	内面剥落
263図4	571	S I 100	床面	土	杯	15.2	4.3		ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	45%	
263図5		S I 100	ℓ 1	土	杯	14.0	4.5		ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	25%	
263図6	571	S I 100	ℓ 1	土	杯	15.2	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
263図7		S I 100	床面	土	杯	18.2	6.2		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	
263図8	572	S I 100	床面	土	甕			8.0	ナデ	ナデ	55%	
263図9		S I 100	ℓ 1	須	甕	19.3			ロクロナデ	ロクロナデ	10%	
263図10		S I 100	カマド	土	甕	22.4			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	35%	器高残23.9cm, カマドℓ 1出土
263図11	572	S I 100	床面	土	甕	21.2			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	80%	器高残30.4cm
264図1	573	S I 100	床面	須	甕				波状文・カキメ・タタキメ	同心円文アテメ	小片	
264図2	572	S I 100	ℓ 1	須	瓶				沈線文・列点刺突文	シボリメ	小片	横瓶か壺瓶
267図1		S I 101	床面	土	杯	16.6	4.1		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
267図2	573	S I 101	ℓ 4	土	杯	15.2	4.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	75%	
267図3	573	S I 101	ℓ 4	土	甕	22.6	11.8	7.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	35%	
267図4	573	S I 101	ℓ 4	土	甕	13.8	10.5	7.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部植物繊維圧痕
267図5	573	S I 101	ℓ 4	土	甕	17.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	器高残21.6cm
267図6	574	S I 101	ℓ 4	土	甕	17.6			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残18.9cm
267図7		S I 101	カマド	土	甕	20.4			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	20%	器高残17.8cm, カマド燃焼部底面出土
267図8	574	S I 101	ℓ 4	土	甕	21.3	26.8	8.4	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	完形	無底式
268図2	574	S I 101	ℓ 4	須	甕				波状文	ロクロナデ	小片	
268図3		S I 101	ℓ 1	須	杯身				ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	小片	
271図1		S I 102	ℓ 1	土	杯	16.2			ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
271図2		S I 102	床面	土	杯	14.6			ヨコナデ・ミガキ・ナデ	ミガキ・黒色処理	15%	
271図3		S I 102	床面	土	杯	14.3			ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
271図4	574	S I 102	床面	土	杯	16.4	5.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
271図5	575	S I 102	床面	土	甕	16.0	10.6	8.2	ケズリ	ケズリ	40%	底部ケズリ・底部内面支脚痕
271図7	575	S I 102	床面	土	甕	13.0	11.8	6.7	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部全面ケズリ
271図8		S I 102	床面	土	甕	16.2			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ・ナデ	90%	器高残19.6cm
275図1	576	S I 103	堆積土	土	杯	16.1	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	
275図2	576	S I 103	床直	土	杯	12.0	5.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
275図3		S I 103	カマド内	土	杯	17.8			ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケメ	20%	
275図4	576	S I 103	カマド	土	高杯	15.9	9.3	11.4	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	85%	カマド燃焼部底面出土
275図5	576	S I 103	カマド	土	杯	12.9	5.3		ヨコナデ・ハケメ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	カマド焚口前出土
275図6	576	S I 103	床直	土	杯	13.1	7.7		ミガキ・ケズリ	ミガキ	80%	
275図7	577	S I 103	床直	土	甕	16.0	14.1	8.2	ヨコナデ・ハケメ	ナデ	90%	
275図8	578	S I 103	床面	土	甕			6.9	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	90%	器高残19.1cm
275図9	576	S I 103	カマド	土	甕	15.8	11.0	6.2	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	カマド焚口前出土
275図10	578	S I 103	カマド	土	甕	19.3	22.7	5.5	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	70%	底部全面ケズリ・ナデ, カマド焚口前出土
275図11	577	S I 103	カマド	土	甕	17.1	21.6	6.7	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	65%	底部ナデ, カマド右袖構築材
276図1	577	S I 103	カマド	土	甕	15.6	33.0	6.0	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	90%	カマド焚口前出土
276図2	578	S I 103	カマド	土	甕	16.0	30.5	6.6	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部ケズリ, カマド左袖構築材
278図1		S I 104	堆積土	土	高杯			12.4	ヨコナデ・ハケメ・指ナデ	ミガキ・黒色処理	50%	
278図2		S I 104	床直	土	甕			6.3	ヨコナデ・ハケメ	ナデ	60%	器高残18.7cm
278図3	578	S I 104	床直	土	甕	20.0			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	65%	器高残27.9cm
280図1	579	S I 105	床直	土	杯	14.3	4.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
280図2	579	S I 105	床直	土	杯	14.5	3.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
280図3	579	S I 105	床直	土	杯	16.4	5.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
280図4	579	S I 105	床直	土	杯	15.7	3.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
280図5	579	S I 105	床面	土	杯	14.8	9.7		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	85%	銅鏡模倣
280図6	579	S I 105	床直	土	杯	10.0	3.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	

表15 土器観察表 (10)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
280図7		S I 105	検出面	須	杯				ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	15%	
283図1	580	S I 106	ℓ 1	土	杯	16.5	4.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
283図2	580	S I 106	床面	土	甕	14.2	9.7	7.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	
283図3	580	S I 106	床面	土	甕	12.6	13.8	8.9	ヨコナデ・ケズリ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	55%	内面リング状煮炊痕
283図4	580	S I 106	床面	土	甕	11.6			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ミガキ	40%	器高残11.4cm
283図5	580	S I 106	カマド	土	甕	16.0	16.5	6.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部木炭痕, カマド燃焼部底面出土
285図1		S I 107	ℓ 1	土	杯	16.9	4.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
285図2		S I 107	ℓ 1	土	杯	15.2	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	40%	
285図3	581	S I 107	ℓ 2	土	杯	13.7	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	45%	
285図4	582	S I 107	ℓ 1	土	甕	22.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	器高残27.8cm
285図5	581	S I 107	床面	土	甕	20.2	22.4	7.2	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	90%	無底式
285図6		S I 107	ℓ 2	須	壺?						小片	叩き出しによる丸味
288図1	582	S I 108	ℓ 1	土	杯	15.2	4.4		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
288図2	581	S I 108	カマド	土	杯	11.4	4.6		ミガキ・ケズリ・黒色処理	ミガキ・黒色処理	完形	カマド構築土出土
288図3	584	S I 108	カマド	土	甕	17.6			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	カマド右袖構築材, 器高残18.9cm
288図4	582	S I 108	カマド	土	甕	18.0	20.0	8.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	85%	底部木炭痕, カマド燃焼部底面出土
288図5	582	S I 108	カマド	土	甕	18.4	22.2	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部ナデ, カマド左袖構築材, 焼成後穿孔
288図6		S I 108	ℓ 1	土	甕			6.8	ハケメ	ナデ	40%	底部木炭痕
288図7		S I 108	床面	土	甕			6.4	ハケメ	ナデ	50%	器高残17.2cm
289図1	583	S I 108	カマド	土	甕	17.2	21.5	7.1	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	75%	底部木炭痕, カマド左袖構築材
289図2	584	S I 108	カマド	土	甕	20.9	24.4	6.8	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	80%	内面リング状煤付着, 底部木炭痕, カマド右袖材
289図3	583	S I 108	カマド	土	甕	17.7	27.0	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	完形	底部木炭痕, カマド燃焼部底面出土
289図4	583	S I 108	カマド	土	甕	17.0			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	80%	器高残25.8cm, カマド燃焼部底面出土
290図1	583	S I 108	カマド	土	甕	17.2	22.5	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部木炭痕, カマド燃焼部底面出土
290図2	584	S I 108	カマド	土	甕	19.0			ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	80%	カマド左袖構築材
290図3		S I 108	カマド	土	甕			7.2	ハケメ	ナデ	40%	器高残13.6cm, カマド燃焼部底面出土
290図4		S I 108	床面	須	甕				平行タタキメ	同心円文アテメ	小片	
293図1	584	S I 109	床面	土	杯	18.4	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
293図2	585	S I 109	床面	土	甕	14.7	12.6	6.9	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	55%	
293図3	584	S I 109	床面	土	甕	17.0	20.5	7.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	底部木炭痕
293図4		S I 109	カマド	土	甕	18.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残21.0cm, カマド燃焼部底面出土
293図5	585	S I 109	カマド	土	甕	18.6	22.7	7.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	底部木炭痕, カマド燃焼部底面出土
293図6	585	S I 109	床面	土	甕	21.9	23.0	7.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	80%	無底式
296図1		S I 110	ℓ 1	土	杯	15.8			ミガキ	ミガキ・黒色処理	25%	
296図2	585	S I 110	床面	土	杯	14.1	8.7		ケズリ	黒色処理	50%	内外面摩滅
296図3	586	S I 110	床面	土	甕	14.4	13.2	6.5	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	内面リング状に煤付着
296図4	586	S I 110	カマド	土	甕	16.8	32.0	7.4	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	60%	カマドℓ 1出土
296図5	586	S I 110	床面	土	甕			7.2	ハケメ	ナデ	60%	底部木炭痕, 器高残23.7cm
296図6	587	S I 110	床面	土	甕	18.4			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	60%	器高残24.7cm
296図7	585	S I 110	ℓ 1	土	手捏ね	4.8	2.2		指オサエ	指オサエ	完形	
298図1		S I 111	床面	土	杯	12.4			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
298図2	586	S I 111	ℓ 1	土	杯	14.9	4.3		ミガキ	ミガキ・黒色処理	40%	
298図3	587	S I 111	ℓ 1	須	杯	10.2			ロクロナデ・2本沈線	ロクロナデ	20%	高杯か?
298図4	587	S I 111	床面	土	甕	17.4			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	55%	器高残23.5cm
301図1	587	S I 112	床面	土	杯	14.3	3.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
301図2	587	S I 112	床面	土	杯	14.4	4.5		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ	75%	内面粗い
301図3	587	S I 112	床面	土	高杯	20.8			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
301図4	588	S I 112	床面	土	甕	16.4	14.0	6.5	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	75%	
301図5	588	S I 112	床面	土	甕	17.0	10.2	6.0	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	
301図6	587	S I 112	床面	土	甕	16.2			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	75%	器高残21.9cm
301図7	588	S I 112	床面	土	甕	21.6	23.4	7.7	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	60%	無底式
303図1		S I 113	ℓ 1	土	杯	16.6			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	5%	
303図2		S I 113	ℓ 1	土	甕	22.5			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	5%	
305図1		S I 114	ℓ 1	土	杯	18.0			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
305図2	588	S I 114	ℓ 2	土	甕	5.7	5.0	5.5	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	ミニチュア
305図3		S I 114	ℓ 1	土	甕			8.0	ハケメ	ナデ	5%	
305図4		S I 114	ℓ 1	須	甕				ロクロナデ・波状文	ロクロナデ	小片	
308図1	588	S I 118	床面	土	杯	17.1	5.8		ミガキ	ミガキ・黒色処理	完形	
308図2	588	S I 118	ℓ 1	土	杯	17.6			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
308図3	588	S I 118	ℓ 1	土	杯	14.9			ヨコナデ・ナデ	ミガキ・黒色処理	45%	
308図4	589	S I 118	床面	土	杯	18.0	6.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
308図5	589	S I 118	床面	土	杯	15.8	4.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	内面粗い
308図6	589	S I 118	床面	土	杯	16.1	6.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
308図7	589	S I 118	床面	土	杯	18.4			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	底部外側から穿孔
308図8	589	S I 118	床面	土	高杯	20.0	13.4	12.0	ヨコナデ・ナデ・ケズリ・ハケメ	ミガキ・黒色処理	90%	3方透かし
308図9	589	S I 118	カマド	土	高杯	16.0	7.6	9.5	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ミガキ・黒色処理	完形	カマド燃焼部底面出土

表16 土器観察表 (11)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
308図10	589	S I 118	カマド	土	甕	17.9	28.7	7.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	カマド燃焼部底面出土
309図1	590	S I 118	床面	土	甕	25.8	30.2	10.8	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ミガキ	70%	無底式
309図2	590	S I 118	カマド	土	甕	19.2	24.7	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	完形	底部木葉痕, カマド燃焼部底面出土
309図3	590	S I 118	床面	土	甕	22.0	34.3	6.0	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	90%	底部ケズリ
309図4		S I 118	ℓ 1	須	甕				タタキメ	アテメ		小片
310図1		S I 119	堆積土	土	杯	19.4			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	15%	
312図1	590	S I 120	ℓ 1	土	杯	13.8	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	
312図2	590	S I 120	ℓ 1	土	杯	19.5			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
312図3	590	S I 120	ℓ 1	土	杯	13.6	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	
312図4	591	S I 120	床面	土	甕	13.7	10.7	6.4	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	70%	内面リング状煮炊痕
312図5	591	S I 120	床面	土	甕	15.3	17.0	7.8	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	75%	
312図6	591	S I 120	床面	土	甕	18.2	18.4	7.0	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	60%	底部木葉痕
312図7	591	S I 120	床面	土	甕	23.6	26.0	8.7	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ・ケズリ	完形	無底式
314図1	592	S I 121	ℓ 1	土	杯	14.5	3.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
314図2	592	S I 121	床面	土	甕	17.6			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	50%	器高残25.3cm
314図3	593	S I 121	床面	土	甕			7.0	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	60%	器高残31.1cm
314図4	592	S I 121	カマド	土	甕	23.4	26.1	9.5	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	完形	無底式, カマド左袖構築材
316図1		S I 122	P1ℓ1	土	杯	13.0			ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	15%	
316図2	592	S I 122	P1ℓ1	土	甕	11.9	9.3	6.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	50%	
316図3	594	S I 122	P1ℓ1	土	甕			8.0	ナデ	ナデ	40%	器高残8.9cm
316図5	593	S I 122	P1ℓ3	土	甕	16.6	26.9	7.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	80%	
316図6	593	S I 122	P1ℓ1	土	甕	20.0	22.3	7.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	
316図7	592	S I 122	ℓ 1	土	杯	6.5	3.0		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	ミニチュア
316図8		S I 122	ℓ 1	土	小壺	3.4			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	20%	ミニチュア
318図1		S I 123	床面	土	高杯			11.0	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
318図2		S I 123	P1ℓ1	土	高杯			7.8	ヨコナデ・指ナデ	ミガキ・黒色処理	70%	底部内面器壁剥離
318図3	594	S I 123	P1ℓ1	土	甕			8.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部ナデ, 器高残17.7cm
318図4	594	S I 123	P1ℓ1	土	甕	19.6			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	30%	器高残14.1cm
318図5		S I 123	床面	土	甕			7.0	ケズリ	ナデ	15%	
318図6	594	S I 123	P1ℓ1	土	甕	13.8	16.3	7.4	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	完形	胴部穿孔, 煤付着, 底部木葉痕
318図7	595	S I 123	P1ℓ1	土	甕	17.9			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残21.7cm
318図8		S I 123	ℓ 1	土	杯	16.6			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	15%	
320図1		S I 124	ℓ 2	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	5%	
320図2		S I 124	ℓ 2	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	15%	
322図1		S I 125	ℓ 1	土	杯	16.8	5.9		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
322図2		S I 125	ℓ 1	須	杯				ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	小片	
324図1		S I 126	床面	土	杯	16.4	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
325図1		S I 127	床面	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	15%	
325図2		S I 127	ℓ 1	土	甕			9.0			10%	底部木葉痕
325図3	595	S I 127	検出面	土	杯	12.0	2.0		ケズリ	ミガキ	25%	
328図1	595	S I 129	ℓ 2	土	杯	14.7	6.3		ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	完形	内面粗い
328図2		S I 129	ℓ 5	土	杯	16.7	4.6		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	35%	
328図3		S I 129	堆積土	土	高杯	14.1			ヨコナデ	ミガキ・黒色処理	10%	
328図4		S I 129	ℓ 2	土	手握ね	9.2	3.4	7.0	指ナデ	指ナデ	完形	底部ナデ・丸い窪み
328図5		S I 129	ℓ 2	土	高杯			10.5	ヨコナデ・ケズリ・ナデ	ミガキ・黒色処理	40%	
328図6	596	S I 129	ℓ 2	土	甕	15.0	36.7	8.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部木葉痕
328図7	596	S I 129	ℓ 2	土	甕	11.7	9.3	6.0	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部ケズリ
328図8		S I 129	ℓ 2	土	甕				ナデ	ナデ	70%	器高残20.0cm
330図1		S I 130	堆積土	土	甕			7.8		ナデ	5%	底部木葉痕
333図1	597	S I 134	検出面	土	甕	22.2	25.3	8.2	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ・ケズリ	完形	無底式
336図1	597	S I 136	ℓ 1	土	杯	16.0	3.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	底部外面焼成前線刻
336図2		S I 136	床面	土	杯	16.8			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
336図3	597	S I 136	床面	土	杯	17.2	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
336図4		S I 136	床直	土	杯	13.9	5.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	器面粗い
336図5		S I 136	貼床	土	杯	13.2			ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
336図6	597	S I 136	床面	土	杯	14.2	2.5		ヨコナデ・指ナサエ	ミガキ・黒色処理	60%	底部ケズリ・柱状
336図7	597	S I 136	床面	土	杯	13.0	5.1		ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	70%	
336図8		S I 136	床直	土	杯	13.6			ヨコナデ・ナデ	ミガキ・黒色処理	10%	
336図9	598	S I 136	床直	土	高杯	16.7	9.9	11.5	ヨコナデ・ケズリ・ハケメ	ミガキ・黒色処理	完形	内面摩滅
336図10	598	S I 136	床直	土	甕	18.7	15.3	8.6	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	70%	底部木葉痕
336図11	598	S I 136	床直	土	甕	15.0			ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	50%	器高残12.7cm
336図12	599	S I 136	床直	土	甕	16.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	40%	
336図13	599	S I 136	床直	土	甕	18.1	20.0	5.8	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	90%	
337図1	599	S I 136	床直	土	甕	20.9			ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	50%	器高残24.8cm
337図2	599	S I 136	ℓ 3	土	甕	22.0	23.5	8.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	60%	
337図3	598	S I 136	床面	土	甕	17.4	26.6	7.5	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部ケズリ

表17 土器観察表 (12)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
337図4	596	S I 136	床直	土	甕	19.2	27.4	8.5	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
338図1	598	S I 136	床下	須	蓋	13.0	3.2	9.2	ロクロナデ	ロクロナデ	45%	底部回転ヘラ切り
338図2		S I 136	床下	須	盤				ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	小片	
338図3	599	S I 136	床面	土	小壺	3.3	5.0	4.1	ヨコナデ・指ナデ	ヨコナデ・指ナデ	完形	一對の孔, 底部ケズリ
340図1	600	S I 137	床面	土	杯	23.2	7.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	カマド左袖脇床面出土
340図2		S I 137	床面	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	カマド右袖脇床面出土
340図3	600	S I 137	床面	須	蓋	16.0	3.6		ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	完形	
343図1	601	S I 138	床面	土	杯	14.6	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	完形	内外面粗い
343図2	600	S I 138	ℓ 2	土	高杯			12.8	ヨコナデ・ケズリ・ナデ	ミガキ・黒色処理	40%	
343図3		S I 138	カマド	土	甕	19.1			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	35%	器高残11.8cm, カマド右袖構築材
343図4	601	S I 138	カマド	土	甕	20.2			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	器高残17.7cm, カマド左袖構築材
343図5	601	S I 138	掘形	土	手捏ね	7.6	2.3	4.6	指ナデ	ナデ	60%	
343図6		S I 138	ℓ 1	土	杯			4.0	ナデ		20%	底部柱状
343図7		S I 138	カマド	須	杯蓋				ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	10%	カマド左袖構築土出土
345図1		S I 139	ℓ 1	土	杯	13.9	4.6		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
345図2		S I 139	ℓ 1	土	杯	13.8			ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
345図3		S I 139	ℓ 2	土	杯	14.0			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
345図4	602	S I 139	ℓ 1	須	高杯				ロクロナデ	ロクロナデ	20%	長脚二段無蓋高杯
347図1		S I 140	堆積土	土	杯	18.2			ヨコナデ・ナデ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	25%	
352図1	602	S I 142	ℓ 2	土	杯	16.2	4.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	底部外面焼成前線刻
352図2	602	S I 142	床面	土	杯	15.1	4.7		ヨコナデ・ミガキ・ナデ	ミガキ・黒色処理	60%	
352図3	602	S I 142	床面	土	杯	17.0	5.8		ヨコナデ・ケズリ・ナデ	ミガキ	90%	
352図4		S I 142	床面	土	杯	15.0	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
352図5	602	S I 142	床面	土	杯	14.7	4.9		ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	完形	
352図6	602	S I 142	ℓ 2	土	杯	16.9	5.6		ミガキ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	底部外面焼成前線刻
352図7		S I 142	カマド	土	杯	16.0			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	15%	カマド構築土出土
352図8	603	S I 142	床面	土	杯	16.0	5.0		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	内外面粗い
352図9	602	S I 142	床面	土	杯	15.1	4.9		ミガキ	ミガキ・黒色処理	45%	
352図10	602	S I 142	床面	土	杯	14.6	6.2		ミガキ	ミガキ・黒色処理	40%	
352図11		S I 142	ℓ 2	土	高杯				ヨコナデ・ナデ	黒色処理	20%	
352図12		S I 142	床面	土	高杯			8.2	ヨコナデ・ナデ	黒色処理	30%	内面粗い
352図13	603	S I 142	床面	土	高杯	15.0	9.1	8.9	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	内面使用痕凹凸著しい
352図14	604	S I 142	ℓ 1	土	甕	15.0	16.1	7.1	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・指ナデ	60%	
352図15	604	S I 142	床面	土	甕	14.2	15.0	7.9	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	内面煮炊痕明瞭, 底部ヘラケズリ
352図16	604	S I 142	床面	土	甕	14.6	13.8	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	75%	
353図1	603	S I 142	カマド	土	甕	17.1			ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	80%	器高残28.1cm, カマド天井部構築材
353図2	604	S I 142	床面	土	甕	18.1			ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	20%	器高残14.8cm
353図3	605	S I 142	カマド	土	甕	16.5			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	85%	器高残36.2cm, カマド天井部構築材
353図4	606	S I 142	床面	土	甕	16.2	42.8	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	
354図5		S I 142	床面	土	小壺				ナデ・ケズリ	ナデ	40%	器高残8.0cm, ミニチュア
355図1	606	S I 142	床面	土	甕	16.8	18.2	7.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	70%	外面ボロボロ剥離
355図2	605	S I 142	床面	土	甕	22.5	23.0	10.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	80%	無底式
355図3		S I 142	床面	須	杯蓋				ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	5%	
355図4		S I 142	ℓ 1	須	杯身				ロクロナデ	ロクロナデ	小片	
359図1		S I 143	床面	土	杯	13.4	4.5		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
359図2		S I 143	ℓ 1	土	杯	9.4	1.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
359図3		S I 143	ℓ 1	土	杯	14.9	3.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
359図4		S I 143	床面	土	杯	14.2	5.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
359図5		S I 143	ℓ 1	土	杯	10.1	3.8		ミガキ・ハケメ・ケズリ	ミガキ	25%	内面再酸化
359図6	606	S I 143	ℓ 2	土	杯	15.6	3.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	
359図7		S I 143	ℓ 1	土	杯	14.9	4.5		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	25%	
359図8		S I 143	床面	土	杯	13.2			ヨコナデ・ナデ・ケズリ		10%	口径値誤差含む
359図9	606	S I 143	ℓ 1	土	杯	15.5	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	70%	
359図10	606	S I 143	床面	土	杯	15.4			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
359図11	606	S I 143	ℓ 2	土	杯	14.2	5.4		ヨコナデ・ケズリ	ナデ・ミガキ	60%	
359図12	607	S I 143	ℓ 1	土	杯	15.3	5.5		ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
359図13		S I 143	ℓ 2	土	杯	15.3			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
359図14	607	S I 143	ℓ 2	土	杯	13.8	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	
359図15	607	S I 143	ℓ 1	土	杯	16.1			ミガキ	ミガキ	30%	
359図16		S I 143	床面	土	杯	15.6			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
359図17	607	S I 143	ℓ 2	土	杯	17.8	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	
359図18		S I 143	ℓ 1	土	杯	17.8			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
359図19	607	S I 143	床面	土	杯	17.8	5.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	
359図20	607	S I 143	ℓ 1	土	杯	19.7			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
359図21	607	S I 143	床面	土	甕	14.2	8.9	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
359図22	607	S I 143	床面	土	甕	10.8	8.5	8.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	

表18 土器観察表 (13)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
360図1	608	S I 143	床面	土	甕	13.0	12.0	6.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
360図2	608	S I 143	ℓ 1	土	甕	15.5	13.0	5.5	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	40%	底部ケズリ
360図3	608	S I 143	床面	土	甕	14.1	18.3	6.6	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部ケズリ
360図4	609	S I 143	床面	土	甕	17.7			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	40%	器高残16.2cm
360図5	608	S I 143	床面	土	甕	16.8	14.8	7.9	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	完形	無底式
360図6	609	S I 143	床面	土	甕	15.4	20.3	7.5	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
360図7		S I 143	床面	土	甕	16.6			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	15%	内外面摩滅、器高残7.5cm
360図8	610	S I 143	床面	土	甕	17.7			ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	40%	器高残15.5cm
361図1	609	S I 143	床面	土	甕	16.8	27.5	6.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	
361図2	610	S I 143	床面	土	甕	15.1	27.1	6.6	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	80%	
361図3	610	S I 143	床面	土	甕	19.1	31.5	6.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部ナデ
361図4	612	S I 143	床面	土	甕	21.0	27.4	7.5	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	完形	底部ナデ
362図1	612	S I 143	床面	土	甕	16.4	24.3	8.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	
362図2	611	S I 143	床面	土	甕	16.9	26.7	6.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	55%	
362図3	611	S I 143	床面	土	甕	17.9	33.5	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	完形	底部木葉痕
362図4	611	S I 143	床面	土	甕	18.7	28.8	8.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
363図1	611	S I 143	床面	土	甕	14.8	26.0	8.0	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ケズリ・ナデ	65%	底部ケズリ
363図2	610	S I 143	床面	土	甕	28.3	28.0	8.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	完形	無底式
363図3	612	S I 143	床面	土	甕			7.9	ヨコナデ・ハケメ	ナデ	60%	底部木葉痕、器高残28.3cm
363図4	612	S I 143	床面	須	甕				タタキメ	アテメ・ナデ	75%	器高残24.0cm
363図5	609	S I 143	ℓ 2	須	甕?				櫛歯状文	ロクロナデ	小片	
369図1	613	S I 144	床面	土	杯	13.3	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
369図2	613	S I 144	床面	土	杯	13.6	4.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
369図3	613	S I 144	床面	土	杯	13.6	4.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
369図4	613	S I 144	床面	土	杯	16.0	4.5		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	
369図5	613	S I 144	床面	土	杯	16.2	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
369図6	613	S I 144	カマド	土	杯	16.5	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	カマド燃焼部底面出土
369図7	613	S I 144	床面	土	杯	16.7	5.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
369図8		S I 144	掘形	土	杯	16.1			ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	
369図9	613	S I 144	床面	土	杯	17.6	6.0		ヨコナデ・ケズリ・ハケメ	ミガキ・黒色処理	完形	
369図10	613	S I 144	床面	土	杯	16.7	4.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
369図11	614	S I 144	床面	土	杯	16.4	6.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
369図12	614	S I 144	床面	土	杯	16.2	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
369図13	614	S I 144	ℓ 3	土	杯	15.0	4.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	75%	
369図14	614	S I 144	ℓ 3	土	杯	14.9			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
369図15		S I 144	ℓ 3	土	杯	14.1	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	25%	
369図16	615	S I 144	床面	土	杯	20.7	9.3	7.5	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
369図17		S I 144	ℓ 3	土	杯	18.0			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
369図18	614	S I 144	ℓ 3	土	杯	16.0	5.0		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
369図19		S I 144	ℓ 3	土	杯	18.0	5.6		ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
369図20	614	S I 144	床面	土	高杯	16.2	9.1	11.0	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
370図1	614	S I 144	ℓ 3	土	杯	20.0			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	底部外面焼成前線刻
370図2	614	S I 144	ℓ 3	土	高杯	14.6			ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ミガキ・黒色処理	50%	
370図3		S I 144	ℓ 3	土	杯			6.6	ナデ	ナデ・ミガキ	60%	底部木葉痕、柱状
370図4	614	S I 144	ℓ 1	土	杯	15.3	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	
370図5	615	S I 144	ℓ 3	土	杯	21.0	12.1	7.8	ヨコナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	30%	底部ミガキ
370図6		S I 144	ℓ 1	土	杯	15.5	4.0		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ミガキ	25%	再酸化?
370図7		S I 144	ℓ 1	土	高杯			10.4	ヨコナデ・ハケメ	ミガキ・黒色処理	40%	
370図8		S I 144	床面	土	甕	15.1			ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ミガキ	40%	器高残7.4cm
370図9	615	S I 144	ℓ 3	土	甕	12.7	7.8	6.0	ハケメ	ナデ	55%	底部木葉痕
370図10	616	S I 144	ℓ 3	土	甕	13.6	10.7	9.0	ハケメ	指オサエ・ナデ	完形	
370図11	616	S I 144	ℓ 3	土	甕	13.7	15.6	8.3	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	85%	底部木葉痕
370図12	618	S I 144	ℓ 3	土	甕	14.4	17.3	6.7	ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	
371図1	617	S I 144	床面	土	甕	17.6	14.4	6.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	完形	無底式
371図2	616	S I 144	床面	土	甕	16.9	13.6	6.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	内面リング状煤付着
371図3	615	S I 144	床面	土	甕	14.5	11.2	6.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	
371図4	615	S I 144	床面	土	甕	16.5	19.5	6.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	完形	内面リング状煤付着
371図5	617	S I 144	床面	土	甕	16.0	19.7	7.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	90%	
371図6	617	S I 144	ℓ 3	土	甕	20.0	13.9	6.0	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	90%	無底式
371図7	618	S I 144	ℓ 3	土	甕	19.1			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	30%	器高残19.1cm
372図1	616	S I 144	床面	土	甕	21.5	24.3	8.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	完形	無底式
372図2	617	S I 144	カマド	土	甕	19.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	75%	器高残25.1cm、カマド燃焼部底面出土
372図3	618	S I 144	床面	土	甕	18.9	34.5	6.4	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	80%	
372図4	619	S I 144	カマド	土	甕	18.2	28.7	7.9	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	85%	カマド燃焼部底面出土
373図1	618	S I 144	ℓ 3	土	甕	22.1	25.0	7.7	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	35%	
373図2	619	S I 144	床面	土	甕	17.6	26.1	8.3	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	70%	

表19 土器観察表 (14)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
373図3	619	S I 144	床面	土	甕			8.5	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	45%	器高残29.2cm
374図1	619	S I 144	床面	土	甕	22.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残35.3cm
374図2	620	S I 144	床面	須	小壺	3.9	7.1		ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	完形	片口
374図3	619	S I 144	ℓ 3	須	甕				平行タタキメ	同心円文アテメ	小片	
374図4		S I 144	ℓ 1	須	杯蓋				ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	10%	
374図5	618	S I 144	掘形	須	杯蓋	16.5			ロクロナデ	ロクロナデ	10%	
374図6		S I 144	ℓ 3	須	杯蓋				ロクロナデ	ロクロナデ	5%	
374図8	620	S I 144	ℓ 3	土	手握ね	5.6	3.9	4.3	ナデ		85%	
374図9	620	S I 144	床面	土	手握ね	5.8	2.7	4.0	指オサエ	指ナデ	完形	
374図10	620	S I 144	ℓ 3	土	手握ね	4.3	4.0	3.7			70%	
374図11	620	S I 144	床面	土	不明			6.0	ナデ	ナデ	85%	底部ナデ
374図12	620	S I 144	床面	土	手握ね	8.6	1.9	5.8	指ナデ	ナデ	60%	底部ナデ
374図13		S I 144	ℓ 1	土	手握ね	3.4	2.7	2.8			60%	
375図1		S I 145	ℓ 1	須	壺?				ロクロナデ	ロクロナデ	5%	
379図1	621	S I 147	ℓ 3	土	杯	16.2	5.2		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
379図2	621	S I 147	ℓ 5	土	杯	25.4	13.9		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	
379図3	621	S I 147	ℓ 5	土	甕	21.2	25.2	7.7	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	90%	無底式
379図4	622	S I 147	ℓ 5	土	甕	15.5	22.6	9.1	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	完形	底部木葉痕
379図5	621	S I 147	ℓ 6	土	甕	11.4	13.2	8.9	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	
379図6	621	S I 147	ℓ 2	土	杯	5.5	2.3		ナデ	ナデ	完形	ミニチュア
381図1	622	S I 148	ℓ 2	土	杯	16.2	3.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
381図2	622	S I 148	ℓ 2	土	甕	18.0	24.8	7.4	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	完形	
381図3		S I 148	ℓ 1	須	短頸壺				ロクロナデ・沈線	ロクロナデ	小片	瓶か?
384図1		S I 151	ℓ 1	土	甕	19.1			ナデ・ケズリ	ナデ	5%	
387図1		S I 153	床面	土	甕			6.5	ナデ	ナデ	10%	底部木葉痕
389図1	623	S I 154	床面	土	杯	15.0	4.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	底部外面焼成前線刻
390図1		S I 155	ℓ 1	土	杯	15.0			ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	15%	
390図2		S I 155	ℓ 1	土	甕	10.4	5.7	5.2	ヨコナデ・ナデ	ナデ	60%	底部ナデ
392図1	623	S I 156	ℓ 1	土	杯	16.4	6.4		ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ミガキ	30%	底部ハケメ
392図2	622	S I 156	ℓ 1	土	杯	16.6	3.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	
395図1	623	S I 157	ℓ 1	土	杯	13.8			ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	40%	
395図2	623	S I 157	床面	土	杯	9.8	2.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
395図3		S I 157	ℓ 1	土	杯	14.0	4.4		ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	35%	
395図4		S I 157	ℓ 1	土	杯	16.8	5.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
395図5	623	S I 157	床面	土	杯	20.4	10.2	7.2	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
395図6	624	S I 157	床面	土	甕	17.6	14.0	6.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	55%	
395図7	624	S I 157	カマド	土	甕	19.9	26.3	8.1	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	90%	カマド燃焼部底面出土
395図8	624	S I 157	カマド	土	甕	19.7	25.0	7.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	80%	底部木葉痕, カマド燃焼部底面出土
396図1	624	S I 157	床面	土	甕	18.0			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	40%	器高残27.7cm
396図2		S I 157	ℓ 1	須	鉢				ロクロナデ	ロクロナデ	小片	
396図3		S I 157	ℓ 1	須	甕?				ロクロナデ	ロクロナデ	小片	
396図4	623	S I 157	ℓ 1	須	甕				沈線・波状文	ロクロナデ	小片	
397図1		S I 158	ℓ 1	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	10%	非黒色
400図1		S I 159	ℓ 1	土	杯	16.3			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
400図2	625	S I 159	カマド	土	杯	11.8	3.6		ヨコナデ	ミガキ・黒色処理	完形	器壁脆く、内面豆粒状に剥離, 燃焼部底面出土
400図3	625	S I 159	ℓ 1	土	杯	17.8	6.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	65%	
400図4	625	S I 159	カマド	土	高杯	11.7			ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	脚部割り揃え, カマド燃焼部底面出土
400図5	626	S I 159	カマド	土	甕	15.8	15.5	7.1	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部植物繊維圧痕, カマド燃焼部底面出土
400図6	625	S I 159	床面	土	甕	20.6	18.2	8.0	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ヘラナデ・ケズリ	完形	無底式
400図7	626	S I 159	カマド	土	甕	17.7	22.0	6.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	
400図8	626	S I 159	カマド	土	甕	17.1	24.2	6.0	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕, カマド燃焼部底面出土
402図1	626	S I 160	床面	土	杯	16.2	8.4		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	カマド燃焼部底面出土
402図2	626	S I 160	床面	土	杯	15.5	5.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	
402図3	626	S I 160	床面	土	杯	17.2	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
402図4		S I 160	ℓ 1	土	杯	16.4			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
402図5		S I 160	ℓ 1	須	堤瓶						小片	
405図1		S I 161	ℓ 1	土	杯	14.1	4.7	6.2	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	25%	内面調整不明瞭
405図2	627	S I 161	ℓ 1	土	杯	9.7	3.1	7.8	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・黒色処理	85%	ミニチュア
405図3	627	S I 161	床面	土	甕	21.0			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残22.1cm
405図4	627	S I 161	床面	土	甕	19.6			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	60%	器高残18.0cm
407図1		S I 162	堆積土	土	杯	14.5			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
409図1	627	S I 164	ℓ 4	土	杯	14.9	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	
409図2	628	S I 164	検出面	須	甕	11.8			沈線・列点刺突文	ロクロナデ	15%	
409図3	627	S I 164	検出面	土	杯	14.0	5.0	6.3	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	口縁部器壁剥離, 底部回転ヘラケズリ
411図1	628	S I 165	ℓ 1	土	杯	16.8	6.0		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	75%	
411図2	628	S I 165	床面	土	甕	11.8	10.4	6.8	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部ケズリ

表20 土器観察表 (15)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
411図3	628	S I 165	床面	土	甕	18.2			ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	40%	
411図4	628	S I 165	床面	土	甕	18.9	33.5	7.9	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ハケメ・ナデ	完形	底部ケズリ
412図1	629	S I 165	床面	土	甕	22.5	34.4	8.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	完形	
414図1		S I 166	カマド内	土	甕	21.1			ヨコナデ・ハケメ	ナデ	20%	器高残12.7cm
415図1		S I 167	ℓ 1	土	杯	14.6			ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
418図1	629	S I 169	ℓ 7	土	杯	10.7	4.6		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	底部外面焼成前線刻
418図2		S I 169	ℓ 11	土	杯	17.2			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	10%	
418図3		S I 169	ℓ 9	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	10%	
418図4	629	S I 169	ℓ 9	須	甕				波状文	ロクロナデ	小片	
418図5	629	S I 169	ℓ 9	須	甕				平行タタキメ・カキメ	同心円文アテメ	小片	
420図1		S I 170	P I ℓ 1	土	杯				ヨコナデ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	10%	
420図2		S I 170	P I ℓ 1	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ	5%	
421図1		S I 173	ℓ 1	土	杯	14.4	4.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
421図2		S I 173	床面	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	10%	
421図3		S I 173	床面	土	甕			7.3	ナデ	ナデ	15%	
423図1	630	S I 174	床面	土	杯	16.7	5.2	7.0	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部ケズリ, 焼成後穿孔
423図2	631	S I 174	床面	土	甕	17.4	21.8	6.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	75%	内面リング状煤付着
423図3	630	S I 174	床面	土	甕	14.5	16.8	6.5	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
423図4	630	S I 174	床面	土	甕	17.9	31.4	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	完形	底部木葉痕
423図5		S I 174	床面	土	甕			6.1	ハケメ	ナデ	35%	
424図1		S I 174	床面	土	甕			7.2	ハケメ	ナデ	40%	底部木葉痕, 器高残16.9cm
424図2		S I 174	床面	土	甕			7.6	ハケメ	ナデ	40%	
424図3	630	S I 174	床面	土	甕	23.8	28.0	9.2	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	完形	無底式
427図1		S I 180	ℓ 1	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	10%	
427図2		S I 180	ℓ 2	土	杯	17.6			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	15%	
427図3		S I 180	ℓ 1	土	高杯			11.2	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
427図4		S I 180	カマド	土	甕			6.3	ハケメ	ナデ	10%	カマド煙道内出土
427図5		S I 180	カマド	土	甕			7.6	ケズリ	ナデ	15%	カマド煙道内出土
432図1		S I 191	ℓ 1	土	杯				ヨコナデ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	10%	
432図2		S I 191	堆積土	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	10%	
432図3		S I 191	ℓ 1	土	高杯				ハケメ	ミガキ・黒色処理	20%	
435図1	631	S I 193	堆積土	土	杯	12.9			ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
435図2		S I 193	堆積土	土	甕			8.0	ハケメ	ナデ	10%	底部木葉痕
435図3	631	S I 193	堆積土	須	蓋	9.9		9.2	ロクロナデ	ロクロナデ	20%	つまみ欠損
435図4		S I 193	堆積土	須	甕				平行タタキメ	同心円文アテメ	小片	
435図5		S I 193	堆積土	須	甕				平行タタキメ	同心円文アテメ	小片	
437図1	632	S I 194	堆積土	土	杯	16.2	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
439図1	632	S I 195	ℓ 7	土	杯	15.2	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	80%	
439図2	632	S I 195	ℓ 2	土	杯	18.4	5.1		ヨコナデ・ケズリ	黒色処理	完形	
439図3		S I 195	ℓ 5	土	杯	15.5	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	75%	
439図4	632	S I 195	ℓ 5	土	高杯	16.3	9.2	11.4	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	85%	
439図5	634	S I 195	ℓ 2	土	甕	12.4	14.8	7.6	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	60%	底部内面に炭化物, 底部木葉痕
439図6	632	S I 195	ℓ 2	土	甕	13.0	14.7	8.4	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
439図7	632	S I 195	ℓ 2	土	甕	17.3	14.4	5.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	完形	
439図8	633	S I 195	ℓ 5	土	甕	16.5			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	85%	器高残25.2cm
439図9	633	S I 195	ℓ 7	土	甕	16.4	31.5	7.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	85%	
440図1	633	S I 195	ℓ 5	土	甕			7.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	75%	底部木葉痕, 器高残29.0cm
442図1	633	S I 196	床面	土	高杯	18.9			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	3方透かし, 脚部割り揃え
442図2	634	S I 196	床面	土	甕	14.0			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ナデ	80%	器高残8.1cm
444図1	634	S I 199	床面	土	杯	14.4	7.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	
444図2		S I 199	床面	土	杯	15.0			ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ミガキ	30%	
444図3	634	S I 199	床面	土	杯	14.6	5.7	6.3	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部柱状
444図4	635	S I 199	床面	土	杯	13.4	3.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
444図5	635	S I 199	床面	土	杯	9.1	5.6	5.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・黒色処理	完形	底部ナデ
444図6		S I 199	ℓ 2	土	杯	16.1	5.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
444図7	634	S I 199	ℓ 2	土	杯	13.2	5.1		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
444図8	634	S I 199	ℓ 1	土	杯	15.8			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	
444図9	635	S I 199	ℓ 1	土	杯	15.3	5.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	底部外面焼成前線刻
444図10		S I 199	床面	土	杯	14.3			ナデ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	15%	
444図11		S I 199	ℓ 1	土	杯	14.1			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	底部外面焼成前線刻
444図12	636	S I 199	床面	土	甕	23.0	22.6	8.0	ヨコナデ・ハケメ	ミガキ・ケズリ	60%	無底式
444図13	635	S I 199	ℓ 1	土	甕	15.3			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	75%	器高残26.3cm
445図1	635	S I 199	床面	土	甕	19.8			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残24.0cm
446図1		S I 200	床面	土	杯			4.9	ナデ	ナデ・黒色処理	10%	底部ケズリ
448図1		S I 214	堆積土	土	杯	15.0			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
448図2		S I 214	堆積土	土	杯	16.0			ヨコナデ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	20%	

表21 土器観察表 (16)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
448図3	636	S I 214	堆積土	土	杯	15.4	5.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	50%	底部ケズリ, 内面使用痕
452図1		S K02	ℓ 1	土	杯	16.2	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
452図2		S K05	ℓ 1	土	甕			7.6	ナデ		5%	底部木葉痕
452図3		S K08	ℓ 1	土	甕			5.9	ナデ	ナデ	5%	底部ケズリ
452図4	636	S K12	検出面	土	甕	9.8	8.7	6.7	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	30%	底部木葉痕
452図5		S K14	ℓ 2	須	長頸瓶			7.0	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	10%	大戸窯製品
452図6	636	S K14	ℓ 1	土	杯	13.1	4.3	6.7	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ・ミガキ・黒色処理	完形	底部回転糸切り
452図7		S K17	ℓ 1	土	高杯	17.2			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
452図8	636	S K17	ℓ 1	土	高杯	17.2	10.2	10.8	ヨコナデ・ケズリ・ハケメ	ヨコナデ・ミガキ・黒色処理	90%	脚部3方透かし
452図9		S K17	ℓ 1	土	高杯			10.8	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	黒色処理	20%	
452図10	637	S K17	ℓ 1	土	高杯				ケズリ・ハケメ	ミガキ・黒色処理	80%	内面器面剥落
452図12		S K17	ℓ 1	土	甕			8.0	ハケメ	ナデ	30%	底部ケズリ
452図13	637	S K17	ℓ 1	土	甕	19.6	32.3	7.3	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	85%	底部木葉痕
456図1		S K18	ℓ 1	土	高杯			9.5	ヨコナデ・ケズリ	黒色処理	30%	
456図2	638	S K18	ℓ 1	土	甕	14.0	11.3		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	60%	
456図3	637	S K18	ℓ 1	土	甕	11.4	13.9	6.3	ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	ミガキ	75%	
456図4	637	S K18	ℓ 1	土	甕	18.3			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	70%	器高残26.5cm
456図5	638	S K18	ℓ 1	土	甕	17.3			ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	50%	器高残19.5cm
456図7	638	S K22	堆積土	土	甕	18.1	18.8	6.9	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	70%	底部木葉痕
456図8	638	S K35	ℓ 1	土	杯	15.9	4.6		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
456図9		S K43	ℓ 1	土	甕			7.3	ハケメ	ナデ	15%	底部木葉痕
456図10		S K57	ℓ 1	土	甕	15.0			ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	15%	
465図1		S D01	底面	土	杯	16.4	5.4		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	
465図2		S D01	底面	土	杯	12.8			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	15%	
465図3		S D01	底面	土	杯	15.2			ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
465図4		S D01	底面	土	杯	17.8			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	15%	中層破片と接合
465図5		S D01	底面	土	杯	12.7			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	20%	非ミガキ・内黒, 関東系土師器?
465図6	641	S D01	ℓ 8	土	杯	11.8	4.7		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	有段口縁杯類似
465図7		S D01	底面	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
465図8		S D01	底面	土	粗製杯	10	5.7	7.2	ハケメ	ナデ	90%	
465図9		S D01	ℓ 8	土	粗製杯	10.9	8.4	5.4	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部ナデ
465図10	640	S D01	底面	土	粗製杯	10.6	12.5	11.9	ヨコナデ・ケズリ	指頭圧痕	90%	
465図11		S D01	底面	土	高杯			10.6	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
465図12	641	S D01	底面	土	甕	7.7	10.2	5.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	口縁・底部部分破壊?
465図13	640	S D01	ℓ 8	土	甕	11.6	10.1	5.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	内面上半煤付着, 底部木葉痕
465図14	640	S D01	底面	土	甕	14.1	12.5	6.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	45%	
465図15	640	S D01	底面	土	甕	12.4	14.3	6.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
465図16	640	S D01	底面	土	甕	10.5	12.5	6.8	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	75%	口縁部分破壊? 底部ケズリ
465図17	641	S D01	底面	土	杯	8.3	8.9		ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	90%	
466図1	641	S D01	底面	土	甕	16.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	器高残25.2cm
466図2		S D01	底面	土	甕	17.6		11.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残28.7cm
466図3		S D01	底面	土	甕	20.3		8.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	
466図4	641	S D01	ℓ 2	土	甕	17.4	25.2	7.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	90%	胴部下方破壊
467図1	642	S D01	底面	土	甕	21.6	31.7	6.4	ヨコナデ・ハケメ・ミガキ	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	65%	底部木葉痕
467図2	642	S D01	底面	土	甕	19.0	18.6	7.4	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	85%	無底式
467図3	642	S D01	底面	土	甕	14.4	25.6	7.6	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部ケズリ
467図4	642	S D01	底面	土	甕	22.9	30.5	8.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	75%	底部木葉痕
468図1	643	S D01	底面	土	甕	18.8			ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	65%	器高残33.0cm
468図2	643	S D01	底面	土	甕	26.3	32.3	6.9	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	60%	底部ケズリ
469図1	643	S D01	ℓ 2	土	杯	14.6	4.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	
469図2	643	S D01	ℓ 2	土	杯	13.7	3.3		ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	70%	
469図3		S D01	ℓ 2	土	杯	15.8			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
469図4	643	S D01	ℓ 2	土	杯	15.9	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	65%	
469図5	643	S D01	中層	土	杯	19.1	3.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	
469図6		S D01	ℓ 2	土	杯	14.4	5.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
469図7		S D01	ℓ 2	土	杯	17.5			ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
469図8		S D01	中層	土	杯	17.6	5.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
469図9	644	S D01	ℓ 2	土	杯	18.0			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
469図10		S D01	中層	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
469図11		S D01	ℓ 2	土	高杯	15.0	9.2	8.4	ヨコナデ・ハケメ	ミガキ・黒色処理	50%	
469図12	643	S D01	中層	土	杯	23.1	10.2		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
469図13	643	S D01	ℓ 2	土	高杯	11.4	7.1	7.4	ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
469図14		S D01	ℓ 2	土	高杯			9.8	ヨコナデ・ケズリ	黒色処理	50%	
469図15	644	S D01	ℓ 2	土	甕	10.1			ミガキ	ミガキ・黒色処理	35%	須臾器短頸壺写し
469図16	644	S D01	ℓ 2	土	甕	14.6	10.8	7.3	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	50%	
469図17	644	S D01	ℓ 2	土	甕	13.2	15.4	6.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	55%	

表22 土器観察表 (17)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
469図18	644	S D01	ℓ 2	土	甕	14.4	8.6	6.6	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	70%	
470図1		S D01	上層	土	杯	16.5			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
470図2		S D01	上層	土	杯	11.2	3.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
470図3		S D01	上層	土	杯	16.5	5.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
470図4	644	S D01	上層	土	杯	13.7	4.5		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	75%	
470図5		S D01	上層	土	杯	12.1			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
470図6	644	S D01	上層	土	杯	17.1	6.2		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	内面粗い
470図7	644	S D01	上層	土	杯	17.0	3.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
470図8		S D01	上層	土	杯	11.6			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	内外面器面曝せていて多孔状態
470図9		S D01	上層	土	杯	15.4			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
470図10	644	S D01	上層	土	杯	18.4	5.1		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	
470図11	645	S D01	上層	土	杯	14.7	4.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	
470図12	645	S D01	上層	土	杯	15.8	3.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	
470図13	645	S D01	上層	土	杯	17.2	6.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
470図14	645	S D01	上層	土	杯	14.4	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	
470図15	645	S D01	上層	土	杯	14.0	4.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	85%	
470図16	645	S D01	上層	土	杯	16.7	6.1		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	
470図17		S D01	上層	土	杯	16.1	3.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
470図18	645	S D01	上層	土	杯	14.8	4.2		ヨコナデ	ミガキ・黒色処理	60%	
470図19	645	S D01	上層	土	杯	17.2	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	
470図20	645	S D01	上層	土	杯	12.9	3.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
470図21	645	S D01	上層	土	杯	17.9	6.3		ミガキ・黒色処理	ミガキ・黒色処理	30%	
470図22	645	S D01	上層	土	杯	15.6	6.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	外面器面粗い
470図23		S D01	上層	土	杯	13.1			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
470図24	645	S D01	上層	土	杯	18.4	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
470図25		S D01	上層	土	杯	16.0	3.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
471図1		S D01	上層	土	高杯	21.8			ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	脚部3方透かし、検出面片接合
471図2	646	S D01	上層	土	高杯	21.1			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	脚部3方透かし
471図3		S D01	上層	土	高杯			12.2	ヨコナデ	ミガキ・黒色処理	50%	脚部3方透かし
471図4	646	S D01	ℓ 2	土	甕	16.8	15.3	6.0	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	50%	底部ケズリ
471図5		S D01	ℓ 2	土	甕?	22.6			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ミガキ	15%	外面胴上部横ハケメ、器高残17.9cm
471図6	646	S D01	検出面	土	甕	13.0	11.9	6.9	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部ケズリ
471図7	646	S D01	検出面	土	粗製杯	10.5	5.1	6.5	ヨコナデ・指オサエ・ナデ	ヨコナデ・ナデ		底部木葉痕
471図8	646	S D01	検出面	土	杯	8.5	3.6	5.9	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	ミガキ・ナデ・黒色処理	50%	ミニチュア
471図9	646	S D01	ℓ 2	土	手捏ね	6.8	2.5	2.4	指オサエ	指オサエ	40%	
471図10		S D01	検出面	土	杯	9.1	4.3	5.4	ハケメ	ハケメ	40%	ミニチュア
472図1		S D01	検出面	須	蓋				ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	5%	回転ヘラ切り痕
472図2	648	S D01	検出面	須	杯蓋	11.0	3.3		ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ・ナデ	50%	天井部内面ナデ不定方向
472図3	648	S D01	上層	須	杯蓋	11.4	3.0		ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	30%	
472図4	648	S D01	検出面	須	杯身	9.6	3.2		ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ・指ナデ	25%	
472図5	647	S D01	ℓ 1	須	提瓶	17.4			カキメ・平行沈線	ロクロナデ	40%	角張った口づくり、器高残25.9cm
478図1	650	S D02	底近く	土	杯	11.5	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
478図2	650	S D02	ℓ 3	土	甕	10.3	10.3	4.7	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ		内外面煤付着
478図3	650	S D02	ℓ 3	土	甕	19.2	27.7	7.6	ヨコナデ・ハケメ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	45%	
478図4	650	S D02	ℓ 2	土	杯	12.2			ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ナデ	30%	非ミガキ・内黒、厚い
478図5	650	S D02	ℓ 2	土	杯	13.2	3.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
478図6	650	S D02	ℓ 2	土	杯	17.5	3.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	口縁部以外、被熱して変色?
478図7		S D02	ℓ 2	土	杯	23.2			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	15%	
478図8		S D02	ℓ 2	土	杯	14.6	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
478図9	650	S D02	ℓ 2	土	杯	10.8	3.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
478図10	651	S D02	ℓ 2	土	杯	14.9	5.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	
478図11		S D02	ℓ 2	土	杯	16.5	4.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	
478図12	651	S D02	ℓ 2	土	杯	14.1			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	40%	2次被熱で内面黒色とぶ
478図13		S D02	ℓ 2	土	杯	14.8			ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	20%	
478図14	651	S D02	ℓ 2	土	杯	16.2			ヨコナデ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	40%	
478図15		S D02	ℓ 2	土	杯	13.9			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
478図16		S D02	ℓ 2	土	杯	15.8			ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	20%	
479図1		S D02	ℓ 2	土	杯	16.2			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
479図2		S D02	ℓ 2	土	杯	14.0			ヨコナデ・ナデ	ミガキ・黒色処理	15%	
479図3		S D02	ℓ 2	土	杯	16.4	4.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
479図4		S D02	ℓ 2	土	杯	17.3	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
479図5	651	S D02	ℓ 2	土	杯	14.2	4.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
479図6	651	S D02	ℓ 2	土	杯	15.1			ヨコナデ・ケズリ	ナデ	40%	
479図7		S D02	ℓ 2	土	杯	18.1			ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
479図8	651	S D02	ℓ 2	土	杯	14.5	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
479図9	651	S D02	ℓ 2	土	杯	17.9			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	

表23 土器観察表 (18)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
479図10	651	S D02	ℓ 2	土	杯	17.8	5.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	被熱し、器面粗く変色
479図11		S D02	ℓ 2	土	杯	17.4			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
479図12	651	S D02	ℓ 2	土	杯	13.9	5.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
479図13	652	S D02	ℓ 2	土	杯	13.1	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
479図14		S D02	ℓ 2	土	杯	15.3	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
479図15		S D02	ℓ 2	土	杯	12.8			ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・ナデ	35%	
479図16	652	S D02	ℓ 2	土	杯	22.8			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
479図17		S D02	ℓ 2	土	杯	19.5			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	15%	
479図18	652	S D02	ℓ 2	土	杯	11.7	6.8		ミガキ・黒色処理	ミガキ・黒色処理	35%	
479図19	652	S D02	ℓ 2	土	杯	13.5	7.1		ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	90%	非ミガキ・内黒、内面黒斑
480図1		S D02	ℓ 2	土	杯	22.9			ヨコナデ・ケズリ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	20%	
480図2		S D02	ℓ 2	土	杯	20.7			ケズリ・ミガキ	ナデ・ミガキ	20%	
480図3	652	S D02	ℓ 2	土	高杯	18.0	8.8	11.4	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
480図4		S D02	ℓ 2	土	高杯	13.3	7.3	7.7	ヨコナデ・ミガキ・ナデ	ミガキ・黒色処理	20%	
480図5	652	S D02	ℓ 2	土	高杯	20.3	9.8	11.5	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ・ナデ	ミガキ・黒色処理	75%	
480図6		S D02	ℓ 2	土	高杯	17.5	8.0	10.8	ヨコナデ・ナデ・ケズリ・ハケメ	ミガキ・黒色処理	85%	
480図7	652	S D02	ℓ 2	土	高杯	14.2	8.1	10.4	ヨコナデ・ケズリ・ナデ	ミガキ・黒色処理	45%	
480図8		S D02	ℓ 2	土	高杯			11.9	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
480図9		S D02	ℓ 2	土	高杯			11.0	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
480図10		S D02	ℓ 2	土	高杯			11.3	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
480図11		S D02	ℓ 2	土	高杯			9.0		ミガキ・黒色処理	20%	
480図12		S D02	ℓ 2	土	高杯			9.7	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
480図13		S D02	ℓ 2	土	高杯			13.6	ミガキ	ナデ	30%	
480図14	652	S D02	ℓ 2	土	甕	12.0			ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残6.6cm
480図15	653	S D02	ℓ 2	土	甕	11.6	11.4	4.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	
481図1	653	S D02	ℓ 2	土	甕	14.6	8.9	5.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	底部破壊
481図2	653	S D02	ℓ 2	土	甕	10.3	8.5	5.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	口縁つまみ整形、煤付着、底部ケズリ
481図3	653	S D02	ℓ 2	土	甕	16.0			ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	70%	器高残12.2cm
481図4	653	S D02	ℓ 2	土	甕	14.3	13.2	5.0	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	45%	胴部外面剥、内面煤付着、底部ケズリ
481図5		S D02	ℓ 2	土	甕			7.0	ハケメ	ナデ	30%	底部壊、器高残9.0cm
481図6		S D02	ℓ 2	土	甕	17.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	20%	器高残9.6cm
481図7	654	S D02	ℓ 2	土	甕	14.0	13.7	6.8	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	30%	底部ケズリ
481図8	653	S D02	ℓ 2	土	甕			6.5	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ナデ	60%	底部ケズリ、器高残7.8cm
481図9	654	S D02	ℓ 2	土	甕	14.6	13.4	6.8	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	60%	底部ケズリ
481図10	654	S D02	ℓ 2	土	甕	17.8	15.8	6.5	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	75%	底部ケズリ
481図11	654	S D02	ℓ 2	土	甕	16.9	16.5	6.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	75%	底部ケズリ
482図1	655	S D02	ℓ 2	土	甕	17.0	13.5	7.4	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	60%	底部木炭痕、単孔式
482図2	656	S D02	ℓ 2	土	甕	9.4	15.9	6.6	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部ケズリ
482図3	654	S D02	ℓ 2	土	甕	17.4	13.0	7.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	80%	多孔式 (10個)
482図4	656	S D02	ℓ 2	土	甕	11.8	16.3	6.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	外面粗い、底部ケズリ
482図5		S D02	ℓ 2	土	甕				ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	20%	器高残7.8cm
482図6		S D02	ℓ 2	土	甕	15.2			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	30%	器高残12.7cm
482図7		S D02	ℓ 2	土	甕	10.9	21.7	6.8	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	40%	胴部部分剥離、底部ケズリ
482図8	656	S D02	ℓ 2	土	甕	16.7			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	60%	外面胴部部分に煤付着？器高残21.7cm
483図1	656	S D02	ℓ 2	土	甕	16.4			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	40%	外面胴下部横ハケメ、器高残16.9cm
483図2	655	S D02	ℓ 2	土	甕	18.2			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	45%	器高残22.0cm
483図3	655	S D02	ℓ 2	土	甕	14.8	21.8	6.1	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	75%	底部ケズリ
483図4	655	S D02	ℓ 2	土	甕	20.2			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	20%	器高残14.6cm
483図5	656	S D02	ℓ 2	土	甕	11.0			ミガキ	ヨコナデ	？	底部除き内外面朱塗り
483図6		S D02	ℓ 2	土	甕			6.0	ハケメ	ナデ	30%	底部ケズリ、器高残18.2cm
484図1	657	S D02	ℓ 2	土	甕	14.8	26.6	5.8	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	85%	
484図2	657	S D02	ℓ 2	土	甕	17.9	29.3	5.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	65%	底部ケズリ
484図3		S D02	ℓ 2	土	甕	24.4		7.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	底部木炭痕
484図4	657	S D02	ℓ 2	土	甕	20.8			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	60%	器高残24.2cm
485図1	658	S D02	ℓ 2	土	甕	22.7	24.2	9.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	無底式
485図2	659	S D02	ℓ 2	土	甕	20.4	21.1	8.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	50%	無底式
485図3	657	S D02	ℓ 2	土	甕	21.7	23.6	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	65%	内面摩滅著しい
485図4	660	S D02	ℓ 2	土	甕	19.4	21.5	7.2	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	65%	使用痕、無底式
485図5	655	S D02	ℓ 2	土	甕	19.7			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	30%	
485図6		S D02	ℓ 2	土	甕	16.6			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	10%	
486図1	658	S D02	ℓ 2	土	甕	18.3	35.0	6.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	80%	底部木炭痕
486図2	659	S D02	ℓ 2	土	甕	17.3	30.1	7.3	ヨコナデ・ハケメ・ミガキ	ヨコナデ・ナデ	70%	底部ケズリ
486図3	658	S D02	ℓ 2	土	甕	20.5			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	60%	器高残20.5cm
486図4	658	S D02	ℓ 2	土	甕	17.0			ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	ヨコナデ・ナデ	65%	線刻、器高残30.9cm
487図1	660	S D02	ℓ 2	土	甕	19.3			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	60%	器高残31.0cm
487図2		S D02	ℓ 2	土	甕				ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	器高残26.1cm

表24 土器観察表 (19)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
487図3		S D02	ℓ2	土	甕			7.4	ハケメ	ナデ	40%	底木葉痕後ケズリ, 器高残20.0cm
487図4		S D02	ℓ2	土	甕			6.0	ハケメ	ナデ	70%	胴穿孔, 底木葉痕, 器高残22.5cm
488図1	659	S D02	ℓ2	土	甕	24.1	30.0	7.0	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ハケメ・ナデ	85%	底部ケズリ
488図2	659	S D02	ℓ2	土	甕	15.4	31.7	7.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	65%	底部ケズリ
488図3		S D02	ℓ2	土	甕			6.4	ケズリ	ハケメ・ケズリ	35%	器高残13.0cm
489図1	660	S D02	ℓ1	土	杯	15.0	5.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	
489図2	660	S D02	堆積土	土	杯	15.6			ミガキ	ミガキ・黒色処理	40%	
489図3		S D02	堆積土	土	杯	16.6			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
489図4	660	S D02	検出面	土	杯	13.5	4.0	6.8	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	外面底部墨書
489図5		S D02	ℓ1	土	杯	15.9	4.5		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
489図6		S D02	ℓ1	土	高杯			10.2	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
489図7		S D02	ℓ1	土	高杯			11.4	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ミガキ・黒色処理	20%	
489図8		S D02	ℓ1	土	甕	16.8			ヨコナデ・ケズリ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	30%	器高残11.0cm
489図9	661	S D02	堆積土	土	甕	17.4			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	25%	器高残16.0cm
489図10		S D02	ℓ1	土	甕	17.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	20%	
489図11		S D02	ℓ1	土	甕			6.6	ハケメ	ナデ	25%	
489図12		S D02	ℓ1	土	甕			7.3	ハケメ	ナデ	50%	底部壊? 器高残23.2cm
490図1	661	S D02	ℓ2	土	甕			6.1	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	40%	器壁外面剥離, 器高残25.4cm
490図2	661	S D02	ℓ2	土	手捏ね	10.3	7.6	4.9	指ナデ	ナデ	70%	
490図3	661	S D02	ℓ2	土	手捏ね	6.2	3.4	3.5	指ナデ	指ナデ	70%	
490図4	661	S D02	ℓ2	土	手捏ね	4.1	3.0	3.4	指ナデ	指オサエ	完形	口唇は指でつまみ出し
490図5	661	S D02	ℓ2	土	手捏ね	5.7	2.4	5.0	指ナデ	指ナデ	50%	底部植物繊維圧痕
490図6	661	S D02	ℓ2	土	粗製杯	6.2	2.8	4.2	ヨコナデ	ナデ・黒色処理	80%	底部破壊, ミニチュア
490図7	661	S D02	ℓ2	土	手捏ね	3.9	3.5	4.3	指オサエ	指オサエ	完形	
490図8	662	S D02	ℓ2	土	粗製杯	11.3	4.0	5.9	ナデ	ナデ・黒色処理	40%	底部木葉痕
490図9	661	S D02	ℓ2	土	壺			3.6	ハケメ・指ナデ	ナデ	80%	体部外面黒斑, ミニチュア
490図10		S D02	ℓ2	土	手捏ね	6.4	5.1	4.3	指ナデ	指ナデ	50%	
490図11	661	S D02	ℓ2	土	提瓶?			4.1	指ナデ	指ナデ	40%	体部2カ所に把手痕?, 底部ケズリ
491図1	663	S D02	ℓ2	須	杯蓋	13.6			ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	30%	
491図2	663	S D02	ℓ2	須	杯身	13.4	4.0		ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	90%	
491図3		S D02	ℓ1	須	杯蓋	10.8			ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	10%	
491図4		S D02	底近く	須	杯				ロクロナデ・沈線	ロクロナデ	15%	歪みあり
492図1	663	S D02	A群底	土	鉢	13.9	10.2	6.3	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	85%	2次被熱で変色, 体部下~底部壊
492図2	664	S D02	A群	土	甕	15.0		6.2	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	75%	外面剥離, 2次被熱, 器高残29.3cm
492図3	663	S D02	B群	土	壺			4.4	ヨコナデ・指ナデ	ヨコナデ・指ナデ	90%	底部ナデ, ミニチュア
492図4	664	S D02	B群	土	甕	9.0	10.1	6.0	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	60%	底部ケズリ
492図5	664	S D02	B群	土	甕	15.6			ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残22.1cm
492図6	664	S D02	B群	土	甕	19.0			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	30%	
492図7	665	S D02	B群	土	甕	15.4			ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残18.0cm
493図1	665	S D02	D群	土	甕	15.8	8.6	6.3	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	80%	底部木葉痕
493図2	665	S D02	D群	土	甕	13.0	9.7	5.9	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	60%	底部ケズリ
493図3	665	S D02	D群	土	甕	10.2	13.9	6.4	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・指オサエ・指ナデ	90%	底部破壊
493図4	665	S D02	D群	土	甕	16.1	13.4	5.5	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	2次被熱により変色
493図5	666	S D02	D群	土	甕	13.6	15.4	6.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	底部破壊? 底部木葉痕
493図6	666	S D02	D群	土	甕	15.0	14.3	7.0	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	80%	底部ケズリ
493図7	667	S D02	D群	土	甕	11.4	12.8	6.5	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	底部ケズリ
493図8		S D02	D群	土	甕			8.4	ハケメ	ナデ・ケズリ	30%	単孔式, 木葉痕後ケズリ, 高残12cm
493図9	666	S D02	D群	土	甕	19.6	15.1	6.0	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	75%	無底式
494図1	667	S D02	D群	土	甕	16.4			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	外面2次被熱? 器高残19.6cm
494図2	667	S D02	D群	土	甕	19.7	24.2	6.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	75%	底部ケズリ
494図3		S D02	D群	土	甕	19.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	20%	器高残14.7cm
494図4		S D02	D群	土	甕	13.2			ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	20%	器高残17.3cm
494図5	666	S D02	D群	土	甕	20.2	30.9	6.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	55%	
495図1	667	S D02	D群	土	甕	21.3	31.0	7.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	60%	
495図2	667	S D02	E群	土	粗製杯	14.7	6.5	5.9	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ナデ	45%	底部木葉痕
495図3	668	S D02	E群	土	甕	16.3			ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	85%	体部・底部部分破壊, 高残18.8cm
495図4	667	S D02	E群	土	杯	9.6	4.5	4.5	ヨコナデ・指ナデ	ヨコナデ・ナデ・黒色処理	90%	ミニチュア
495図5	668	S D02	E群	土	甕	16.0	13.5	6.9	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	外面胴部摩滅, 無底式
495図6	667	S D02	E群	土	杯	20.3	6.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	外面被熱
495図7	668	S D02	E群	土	鉢	17.4	12.9	7.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	80%	2次被熱? 底部木葉痕
496図1		S D02	F群	土	杯	15.7	4.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
496図2	668	S D02	F群	土	杯	15.6	4.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	
496図3	669	S D02	F群	土	高杯	16.8	10.2	10.8	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	2次被熱で外面変色・表面剥離
496図4	669	S D02	F群	土	杯	14.7			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
496図5		S D02	F群	土	杯	16.1			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
496図6	669	S D02	F群	土	杯	14.4	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	

表25 土器観察表 (20)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
496図7	669	S D02	F群	須	壺			12.9	ロクロナデ	ロクロナデ	70%	体部穿孔, 器高残15.5cm
496図8		S D02	F群	土	高杯			9.5	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
496図9	669	S D02	F群	土	甕	19.4	22.7	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	外面2次被熱, 底部木葉痕
496図10	669	S D02	G群	土	甕	16.0	32.5	6.6	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	75%	
497図1	670	S D02	G群	土	甕	16.7			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ナデ	40%	器高残20.6cm
497図2	670	S D02	G群	土	甕	16.8	28.0	6.8	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ハケメ	70%	底部ケズリ
497図3	670	S D02	H群	土	甕	16.4			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	底部壊? 器高残27.4cm
497図4	669	S D02	H群	土	甕	17.7	13.4	7.1	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	75%	底部木葉痕
497図5		S D02	H群	土	手捏ね	5.4	2.5	4.2		ナデ	完形	2次被熱?, 外面煤ける
498図1	671	S D02	H群	須	提瓶	9.6	25.8		カキメ・沈線	ロクロナデ	80%	肩部ボタン状突起
498図2	671	S D02	I群	土	杯	17.1	6.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	
498図3	671	S D02	I群	土	杯	17.0	5.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	65%	
498図4		S D02	I群	土	高杯			9.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ケズリ・ミガキ・黒色処理	30%	杯部破壊?
498図5	670	S D02	I群	土	杯	10.0	3.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
498図6	672	S D02	I群	土	甕	16.5	12.5	6.9	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	75%	
498図7	672	S D02	I群	土	甕	18.4	13.1	6.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	40%	無底式
498図8	672	S D02	I群	土	壺			7.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	75%	器高残10.8cm
499図1	672	S D02	I群	土	甕	16.8			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	90%	底部破壊? 器高残28.2cm
499図2		S D02	I群	土	甕			6.5	ハケメ	ナデ	40%	底部ケズリ, 器高残22.4cm
502図1	673	S D05	ℓ1	土	杯	13.1	4.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
502図2	673	S D05	ℓ1	土	甕	13.4	15.0	7.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	60%	
502図3	673	S D05	ℓ1	須	杯身	10.8	6.0		ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	50%	底部手持ちヘラケズリ
502図4		S D05	底面	須	甕				平行タタキメ		小片	
458図1		S G01	底面	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
458図2	639	S G01	底面	土	甕	17.5			ヨコナデ・ナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残16.7cm
458図3	639	S G01	底面	土	甕	16.9	29.4	7.5	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	
458図4		S G01	底面	土	甕			8.2	ハケメ・ナデ・ケズリ	ナデ	40%	底部ケズリ, 器高残19.2cm
460図1		S G03	堆積土	土	蓋?	12.2			ロクロナデ	ミガキ・黒色処理	15%	
460図2		S G03	堆積土	土	杯	12.4	4.5	6.7	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	15%	底部回転ヘラケズリ
460図3	639	S G03	堆積土	土	甕	23.2			ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	30%	器高残22.7cm
505図1	639	S X02	P1ℓ1	土	杯	13.4	4.1	7.2	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	75%	底部回転糸切り後回転ヘラケズリ
505図2		S X02	焼土面	土	杯	12.6	4.9	5.7	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ・ミガキ	25%	内面再酸化, 底部回転ヘラケズリ
473図1	649	S X06	検出面	土	杯	9.7	3.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
473図2	649	S X06	ℓ1	土	甕	20.5	28.5	9.0	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	完形	底部木葉痕
473図3	649	S X06	ℓ1	土	甕			9.9	ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	内外面器壁曇る, 器高残29.0cm
474図1	649	S X06	ℓ1	土	甕				ハケメ	ナデ	70%	器高残22.1cm
508図1	639	S X07	ℓ1	須	台付盤?			15.1	ロクロナデ・縦位ヘラキザミ	ロクロナデ	30%	酸化炎焼成状態, 器高残5.2cm
511図1	674	S H01	L II 3	土	杯	17.2	4.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
511図2	674	S H01	L II 3	土	杯	18.3	3.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	
511図3	674	S H01	L II 3	土	杯	16.4	4.7		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
511図4	674	S H01	L II 3	土	杯	17.3	4.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	外面口縁近く使用痕?
511図5		S H01	L II 3	土	杯	12.0			ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	30%	
511図6	674	S H01	L II 3	土	杯	15.4	4.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
511図7		S H01	L II 3	土	杯	16.8	5.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
511図8		S H01	L II 3	土	杯				ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
511図9	674	S H01	L II 3	土	杯	13.9	5.0		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
511図10	674	S H01	L II 3	土	高杯	15.5	8.5	9.3	ヨコナデ・ケズリ・ミガキ・ハケメ	ミガキ・黒色処理	60%	底部のみ内面ミガキ
511図11	674	S H01	L II 3	土	杯	9.6	6.1	5.5	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ミガキ・黒色処理	75%	
511図12	674	S H01	L II 3	土	杯	14.5			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・指ナデ	30%	器高残5.4cm
511図13	675	S H01	L II 3	土	甕	13.9	11.3	7.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	85%	
511図14	675	S H01	L II 3	土	甕	13.4	9.4	5.6	ヨコナデ・ハケメ・指ナデ	ヨコナデ・ナデ	完形	煮炊痕ないが, 変色?
511図15	675	S H01	L II 3	土	甕	14.7	13.3	6.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部ケズリ
511図16	675	S H01	L II 3	土	甕	14.7	10.9	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	
512図1	675	S H01	L II 3	土	甕	16.8	15.6	7.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部木葉痕
512図2	675	S H01	L II 3	土	甕	14.7	13.0	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	30%	底部木葉痕
512図3	676	S H01	L II 3	土	甕	14.7	14.2	7.5	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	60%	底部木葉痕
512図4	676	S H01	L II 3	土	甕	16.1	11.3	5.8	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・指オサエ	ナデ・ナデ	完形	
512図5		S H01	L II 3	土	甕			6.6	ハケメ	ナデ	20%	底部木葉痕
512図6	676	S H01	L II 3	土	甕	17.4	13.6	7.1	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	完形	底部木葉痕
512図7		S H01	L II 3	土	甕			8.0		ナデ	30%	外面粗い, 底部木葉痕
512図8	677	S H01	L II 3	土	甕	14.2	11.8	8.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	65%	底部部分的に破壊
512図9	676	S H01	L II 3	土	甕	18.5			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	器高残17.1cm
513図1	676	S H01	L II 3	土	甕	15.6			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	底部・胴部部分壊, 器高残16.4cm
513図2	677	S H01	L II 3	土	甕	20.1	14.2	7.4	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	60%	胴部部分的破壊, 無底式
513図3	677	S H01	L II 3	土	甕	19.8	25.8	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	胴部下方・底部破壊
513図4	677	S H01	L II 3	土	甕	15.1	26.5	8.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	胴部壊・1か所穿孔, 底部ケズリ

表26 土器観察表 (21)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
514図1	678	S H01	L II 3	土	甕	18.5	32.0	7.1	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	85%	底部ケズリ、胴部下方部分的に破壊
514図2	678	S H01	L II 3	土	甕	18.9	27.1	7.1	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	底部ナデ
514図3	678	S H01	L II 3	土	甕	17.4	31.8	6.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	胴部下方部分的に剥離・小穿孔
514図4	679	S H01	L II 3	土	甕	17.8	7.2	7.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	底部部分的に破壊
515図1	679	S H01	L II 3	土	甕	21.4			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	80%	無底式、器高残23.6cm
515図2		S H01	L II 3	土	甕			7.6	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ・ケズリ	45%	無底式、器高残24.6cm
515図3		S H01	L II 3	土	甕			6.6	ハケメ	ナデ	40%	底部木葉痕、器高残11.1cm
515図4	679	S H01	L II 3	土	甕			7.0	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ナデ	55%	底部ケズリ、器高残23.6cm
515図5		S H01	L II 3	土	甕			6.5	ハケメ	ナデ	50%	器高残18.2cm
515図6		S H01	L II 3	土	甕			8.2	ヨコナデ・ナデ	ナデ	70%	底部ナデ、器高残13.3cm
516図1	681	S H01	L II 3	土	甕			31.7	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ミガキ	45%	底部ケズリ、器高残31.7cm
516図2	678	S H01	L II 3	土	甕	15.3	17.7	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	75%	
516図3	681	S H01	L II 3	土	甕	21.8	30.7	8.3	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ・ケズリ	40%	2次被熱で外面下部部分的に剥離
516図4	680	S H01	L II 3	土	甕	15.2			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	器高残22.5cm、底部全面破壊
517図1		S H01	L II 3	土	甕	22.0		7.2	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ・ナデ	45%	底部ケズリ、推定器高27.4cm
517図2	680	S H01	L II 3	土	甕	20.0		6.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ・ナデ	40%	底部ケズリ・ナデ、推定器高27.4cm
517図3	679	S H01	L II 3	土	甕	16.0	27.4	8.0	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	ヨコナデ・ナデ	65%	
518図1	680	S H01	L II 3	土	甕	18.6	28.8	7.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	60%	底部ケズリ、2次被熱で外面胴部剥?
518図2		S H01	L II 3	土	甕	16.2			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	30%	
518図3	680	S H01	L II 3	土	甕			8.7	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	ナデ	50%	底部ナデ、器高残28.1cm
519図1		S H01	L II 3	土	甕	18.9			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	15%	
519図2		S H01	L II 3	土	甕	20.0			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	40%	器高残16.0cm
519図3		S H01	L II 3	土	甕	23.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	10%	
519図4		S H01	L II 3	土	甕			8.6	ハケメ	ナデ	30%	底部ヘラナデ
520図1		S H01	L II 3	須	杯	13.0			ロクロナデ	ロクロナデ	20%	
520図2	682	S H01	L II 3	須	高杯			9.0	波状文	ロクロナデ	10%	互い違いの長脚二段四方透かし
520図3	680	S H01	L II 3	須	壺か瓶	6.6			ロクロナデ	ロクロナデ	15%	
520図4	681	S H01	L II 3	須	壺				列点刺突文	ロクロナデ	小片	
520図5	682	S H01	L II 3	須	横瓶	12.5	21.5		カキメ	ロクロナデ	完形	
520図6		S H01	L II 3	須	鉢				ロクロナデ	ロクロナデ	5%	
520図7	681	S H01	L II 3	須	甕				波状文	ロクロナデ	小片	
520図8		S H01	L II 3	須	甕				ロクロナデ	ロクロナデ	10%	
520図9	681	S H01	L II 3	須	甕				波状文	波状文	小片	
521図1	682	S H01	L II 3	須	甕	19.5	38.0	11.8	ナデ・タタキメ	アテメ・ナデ・ナデ	60%	底部ナデ
521図2		S H01	L II 3	須	広口壺	18.5	29.1		ロクロナデ・カキメ	ロクロナデ・アテメ	25%	
522図1	682	S H01	L II 3	土	杯	10.5	3.6		指ナデ	ハケメ	30%	ミニチュア
522図2		S H01	L II 3	土	手捏ね	4.8	2.7	4.2			完形	底部指ナデ
522図3	682	S H01	L II 3	土	手捏ね	7.3	4.1	5.2		指ナデ	完形	底部ナデ
522図4	683	S H01	L II 3	土	手捏ね	6.0	3.6	4.0		指ナデ	90%	底部ナデ、2次被熱?
522図5	683	S H01	L II 3	土	手捏ね	6.5	4.2	4.2	指オサエ	指オサエ	55%	ミニチュア
522図6	683	S H01	L II 3	土	手捏ね	7.2	4.8	4.4		指ナデ	45%	底部ナデ
522図7	683	S H01	L II 3	土	手捏ね	4.5	3.1	4.3	指オサエ	指ナデ	70%	
522図8	683	S H01	L II 3	土	手捏ね	7.5	4.0	4.7	指オサエ	指ナデ	完形	ミニチュア
522図9	683	S H01	L II 3	土	手捏ね	3.7	4.2	4.6	指オサエ	指ナデ	40%	ミニチュア、外面2次被熱
522図10	683	S H01	L II 3	土	手捏ね	7.4	4.2	4.7		ナデ	完形	底部ナデ
522図11		S H01	L II 3	土	手捏ね	7.2	3.7	7.3	指オサエ	指オサエ	完形	底部ケズリ
522図12	683	S H01	L II 3	土	手捏ね	6.9	3.3	4.8		指ナデ	75%	底部ナデ
522図13	683	S H01	L II 3	土	手捏ね	8.8	4.3	4.8		指ナデ	完形	底部ナデ
522図14	683	S H01	L II 3	土	手捏ね	5.9	2.9	4.6		指ナデ	完形	底部指ナデ
522図15	684	S H01	L II 3	土	粗製鉢	9.3	5.2	6.5	ヨコナデ・指ナデ	ヨコナデ・ナデ	65%	底部ナデ、ミニチュア
522図16	684	S H01	L II 3	土	手捏ね	11.3	5.1	6.1	指オサエ	指オサエ	完形	口唇部つまみ出し整形
522図17	684	S H01	L II 3	土	手捏ね	8.6	6.0	5.6		指ナデ	70%	底部木葉痕
522図19	684	S H01	L II 3	土	壺		4.8	4.3	ヨコナデ・指ナデ	指ナデ	70%	底部ナデ、ミニチュア、2次被熱?
524図1	686	N20-71	L II	土	杯	15.2	5.9	7.2	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	底部回転ヘラケズリ、碗形、体部破壊?
524図2	686	N21-10	L II	土	杯	13.0	4.9	6.5	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	コテ状工具のミガキ、底部回転ヘラケズリ
524図3	686	O20	L II 1	土	杯	14.4	5.6	6.7	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	底部手持ちヘラケズリ
524図4		O18-78	L II	土	杯	14.2	4.3	9.6	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	底部糸切り後回転ヘラケズリ
524図5	686	N21-10	L II	土	杯	12.7	3.8	6.6	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	75%	底部回転ヘラケズリ
524図6	686	N21-7	L II	土	杯	13.0	4.4	5.6	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	碗形杯、底部黒斑・回転ヘラケズリ
524図7	686	N21-27	L II	土	杯	15.3	3.9	7.9	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	静止糸切り後緑回転ヘラケズリ
524図8	686	O19-41	L II	土	杯	13.5	3.8	6.5	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	65%	体部外面に墨書あり
524図9		N21-29	L II	土	高台杯			8.5	ロクロナデ	ロクロナデ	20%	底部外面に墨書あり・回転ヘラケズリ
524図10			L II 1	土	杯	14.3			ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	5%	体部外面に墨書あり
524図11		O20	L II 1	土	杯			6.6	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理・指ナデ	20%	回転糸切り後回転ヘラケズリ
524図12	687	O21-2	L II	土	杯	15.3	5.7	7.1	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	底部墨書・回転ヘラケズリ
524図13	687	N20-50	L I	土	杯			6.6	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	底部焼成前線刻・墨書、回転糸切

表27 土器観察表 (22)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
524図14		N21-87	攪乱	土	杯			6.5	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	底部回転糸切り
524図15		N20	L II	土	杯	12.3	3.6	5.6	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	底部手持ちヘラケズリ
524図16		O20	L II 1	土	杯			5.4	ロクロナデ	ミガキ	20%	底部回転糸切り、内面再酸化?
524図17	687	O21-55	L II	土	杯	13.2	4.5	6.0	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	底部焼成後?穿孔・回転ヘラケズリ
525図1	687		L I	土	杯	16.0	6.5	8.4	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	底部回転糸切り
525図2		N20-81	L I	土	杯	16.0	6.7	9.0	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	底部回転ヘラケズリ
525図3	687	O21-1	L II	土	高台杯	14.9		7.5	ロクロナデ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	55%	底部回転糸切り、爆ぜる、高台剥離
525図4	688	N20-81	L I	土	杯	15.8	6.5	8.4	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	底部回転糸切り、外面黒斑、内面摩耗
525図5	688	O21-1	L II	土	杯	10.6	2.9	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	60%	内面コテ当て調整、底部回転糸切り
525図6	688	N20-81	L I	土	杯	14.4	4.2	7.0	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	底部回転ヘラケズリ
525図7	688	O21-1	L II	土	杯	10.9	3.0	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	80%	内面コテ当て調整、底部回転糸切り
525図8	688		L II	土	杯	15.2	4.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	85%	
525図9		O21-1	L II	土	杯	14.6			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
525図10	688	O20-83	L II 2	土	杯	15.0	4.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	75%	
525図11	688		L I・II	土	杯	16.6			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
525図12			L I	土	杯	15.4			ミガキ	ミガキ・黒色処理	45%	
525図13	688		L II	土	杯	14.5	4.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
525図14			L I	土	杯	17.5	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
525図15	688	O21-61	L II	土	杯	14.2	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	
525図16	688		L I	土	杯	15.7	4.5		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	85%	
526図1	689	N22	L III	土	杯	14.9	5.3		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	
526図2	689	N21-37	L II	土	杯	14.6	5.5		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	65%	
526図3	689	N22-67	L II	土	杯	14.4	6.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	60%	
526図4	689	N22-63	L II	土	杯	16.3	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	体部外面黒斑
526図5		N21-49	L II	土	杯	18.0	3.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
526図6		O19-20	L II	土	杯	16.0	4.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
526図7		N21-43	L II	土	杯	16.0	4.5		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	底部黒斑
526図8	689	N22	攪乱溝	土	杯	17.6			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
526図9		N21-28	L II	土	杯	16.1	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
526図10		O20-14	L II	土	杯	16.0	5.1		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
526図11	689	N21-38	L II	土	杯	18.8	5.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	55%	
526図12	689	N21-28	L II	土	杯	14.8	4.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
526図13		O19-20	L II	土	杯	14.2	4.5		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
526図14	689	N21-25	L II	土	杯	16.8			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
526図15	689		L II	土	杯	15.6	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
526図16		N21-28	L II	土	杯	13.0	3.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	10%	
526図17		N22-63	L I	土	杯	13.4	3.5		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	
526図18	689	O20-3	L II	土	杯	16.6	4.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
526図19		N21-34	L II	土	杯	12.9			ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	15%	
527図1	690	N22-63	L I 下	土	杯	14.1	5.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	
527図2	690	O19-83	L II	土	杯	16.6	5.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
527図3	690	N23-83	L I	土	杯	15.0	4.7		ミガキ	ミガキ・黒色処理	70%	
527図4	690	N21-87	L II	土	杯	14.6			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
527図5	690	N22-17	L II	土	杯	17.1			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	15%	
527図6	690	N22-43	L I	土	杯	15.3			ヨコナデ・ミガキ・ケズリ?	ミガキ・黒色処理	20%	
527図7		N21-28	L II	土	杯	15.0			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
527図8	690	N21-77	攪乱	土	杯	17.2	4.9		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	50%	
527図9	690	N23-3	L II	土	杯	15.8	4.1		ヨコナデ・ケズリ・ハケメ	ミガキ・黒色処理	55%	底部ハケメ
527図10	690	N23-21	L II	土	杯	16.4	6.3		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ミガキ	完形	
527図11			攪乱	土	杯	18.0	3.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
527図12	691	N21-49	L II	土	杯	15.3	7.5		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	40%	
527図13	691	N23-1	L II	土	杯	14.5	5.3	6.1	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ミガキ	完形	内面粗い、底部ケズリ
527図14		O20-14	L II	土	杯	14.6			ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
527図15		M23-64	L I 下	土	杯	23.8			ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	15%	
527図16		N19-67	L I	土	杯	16.9	7.8		ヨコナデ・ケズリ・ナデ	ミガキ・黒色処理	25%	
528図1	691	N21-27	L II	土	杯	12.0	3.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	
528図2	691	N21-27	L II	土	杯	12.4	3.2		ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
528図3	691	N22-63	L I	土	杯	12.4			ミガキ・黒色処理	ミガキ・黒色処理	25%	
528図4		N22-61	L I	土	杯	17.4	7.9		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ	15%	銅鏡模倣、内面再酸化?
528図5	691	N21-29	L II	土	杯	17.4	4.0		ヨコナデ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	65%	
528図6	691	O19-83	L II	土	杯	18.3	7.9		ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	底部外面焼成前線刻
528図7		O19-74	L II	土	杯	20.5			ケズリ・ミガキ	ミガキ・黒色処理	20%	
528図8	692	N21-22	L II	土	杯	18.0	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
528図9		N21-66	L II	土	杯	15.1			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
528図10	692	N21-29	L II	土	杯	14.0	4.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	
528図11	692	N21-3	L II	土	杯	15.2	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	

表28 土器観察表 (23)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
528図12	692	N23-21	L II	土	杯	16.2			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
528図13	692	O19-81	L II	土	杯	13.3	5.1		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ミガキ	完形	
528図14	692	N21-25	L II	土	杯	17.8	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	底部外面焼成前線刻
528図15	692		表採	土	杯	16.2	4.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	内面底部に使用痕あり
529図1	692		L I	土	杯	15.2	5.5		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	内面に焼成後?の傷
529図2	692	N20	L II	土	杯	16.8	4.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
529図3	693	N17	L II	土	杯	16.0	4.8		ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	65%	口縁・底部外面に黒斑
529図4	693	N19	L II	土	杯	16.0	4.9		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
529図5	693	N20	L I	土	杯	16.8			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
529図6		M24-26	L II	土	杯	16.0	4.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
529図7	693	N19-99	L II	土	杯	15.2	4.3		ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・黒色処理	60%	
529図8	693	O21-61	L II	土	杯	18.5	5.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
529図9		N20-58	攪乱溝	土	杯	16.5	3.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
529図10		O21-28	L II	土	杯	15.9	3.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
529図11	693		L II	土	杯	17.0	4.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	底部外面焼成前線刻
529図12		M23-9	L II	土	杯	14.4			ミガキ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
529図13	693	L24-9	L I下	土	杯	15.3	3.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ	70%	
529図14			L II	土	杯	15.4	4.3		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
529図15	694	M23-7	L II	土	杯	16.8	4.9		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	底部外面焼成前線刻
529図16	693		L II	土	杯	12.0	5.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	60%	
529図17	693	O20-35	L II	土	杯	16.8	3.7		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	75%	
530図1	694	O21-11	L II	土	杯	18.6	5.5		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	
530図2		N20-58	攪乱溝	土	杯	15.0			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
530図3	694	O19-81	L II	土	杯	15.6	4.9		ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	
530図4	694		L II	土	杯	16.8	5.4		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
530図5	694	N21-28	L II	土	杯	10.4	3.6		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	45%	
530図6	694	O19-81	L III	土	杯	16.4	5.0		ミガキ	ミガキ・黒色処理	完形	
530図7	694		L I	土	杯	14.0	5.2		ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	65%	
530図8	694	N21-38	L II	土	杯	12.1	4.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
530図9	694	N22-15	L I下	土	杯	12.1	4.1		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	70%	
530図10		N20-53-63	L II	土	杯	14.0	3.8		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
530図11	695	N20	L II	土	杯	14.4	4.2		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	完形	
530図12	695	N20-80	L II	土	杯	13.2	5.2		ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ナデ・ミガキ	85%	
530図13	695	N21-34	L II	土	杯	13.7			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	25%	
530図14	695	M22	攪乱溝	土	杯	14.6	5.0		ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	50%	
530図15	695	N21-53	L II	土	杯	14.3	4.6		ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	90%	
530図16		N21-7	L II	土	杯	19.4	5.3		ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
530図17	695		L I	土	杯	17.8	8.3	8.5	ミガキ・黒色処理	ミガキ・黒色処理	55%	底部ミガキ
530図18		O22-2	L II	土	杯				ヨコナデ・ミガキ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	20%	
531図1	695	O20-2	L II 2	土	高杯	14.8	8.0	9.6	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	40%	
531図2		M23-7	L II	土	高杯	15.8			ヨコナデ・ハケメ	ミガキ・黒色処理	15%	
531図3	695	O20-12	L II	土	高杯	18.5	10.6	12.6	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	80%	
531図4	695	N22	L III	土	高杯	14.0	8.4	9.4	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	黒色処理	50%	
531図5			L I	土	高杯			10.9	ヨコナデ・ケズリ	黒色処理?	20%	
531図6	696	N21-47	L II	土	高杯	17.6			ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	30%	
531図7		表採	土	高杯				10.0	ヨコナデ・ケズリ	ミガキ・黒色処理	35%	
531図8	696	O20-3	L II	土	甕	8.0	7.6	6.6	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	75%	底部木葉痕
531図9	696	N20-53	L II	土	甕	10.6	10.9	5.4	ヨコナデ・ケズリ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	45%	
531図10	696	N20	L I	土	甕	16.2	13.4	6.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	50%	
531図11	696	N21-44	L I	土	甕	16.2	14.5	6.6	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	50%	底部ケズリ
531図12			L II	土	甕	15.3			ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	40%	器高残7.8cm
531図13	696	N20	L II	土	甕	14.8	10.6	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	底部木葉痕
532図1	697	O19-73	L II	土	甕	17.2	12.2	6.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・指ナデ	70%	
532図2	697	N21-35	L I	土	甕	16.2	17.2	7.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	55%	外面煤付着, 底部ケズリ
532図3	697	N20-95	L II	土	甕	19.3	13.1	8.2	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	70%	胴部外面摩滅, 底部ナデ
532図4	697	N22-43	L II	土	甕	19.7	21.1	6.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	75%	
532図5	698	N23-3	L II	土	甕	17.6	23.4	7.9	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ・ケズリ	完形	底部木葉痕
532図6		N21-3	L II	土	甕	16.4			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	40%	
533図1	697	N21-43	L I	土	甕	17.5	14.3	6.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	50%	底部ケズリ, 単孔式
533図2		O19	L II	土	甕			4.6	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	40%	無底式, 器高残13.5cm
533図3	698	N19-99	L II	土	甕	20.0	18.3	8.4	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ・ナデ・ケズリ	完形	無底式
533図4	698		L II	土	甕	16.4	13.7	6.0	ヨコナデ	ヨコナデ・ケズリ	60%	胴部外面粗い, 無底式
533図5	699	層ベルト	土	甕	21.7	25.7	7.7	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	55%	無底式	
533図6			L II	土	甕	25.2	26.6	9.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ミガキ・ナデ	30%	内面粗い, 無底式
534図1			L II	土	甕?	22.2			ヨコナデ・ナデ・ミガキ	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	15%	器高残13.4cm
534図2	698	N20-96	L II	土	甕	18.8			ヨコナデ・ハケメ・ミガキ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ミガキ	60%	器高残17.7cm

表29 土器観察表 (24)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
534図3	700	O19-54		土	甌	25.2	25.5	10.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ナデ・ケズリ	40%	無底式
534図4	699	N20-96	L II	土	甌	21.6	21.4	7.1	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・ナデ	50%	無底式
534図5		N21-28	L II	土	甌			6.0	ハケメ・ケズリ	ナデ	30%	内面粗い、単孔式、器高残13.0cm
534図6		N23-1	L II	土	甌?	16.2			ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	35%	
535図1	700	O20-3	L II	土	甌	17.2	30.0	7.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	底部ヘラナデ
535図2	700	N20	L II	土	甌	17.0	29.9		ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	65%	
535図3	700	N20-19		土	甌			6.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	80%	器高残30.6cm
535図4		N21-3	L II	土	甌			7.7	ハケメ・ナデ	ナデ・ハケメ・ナデ	50%	底部木葉痕・ナデ、器高残22.8cm
536図1	701	N20-19		土	甌	21.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	65%	内面胴部煤付着、器高残26.7cm
536図2	701	N21-3	L II	土	甌	17.6			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ナデ	60%	器高残22.9cm
536図3	699	N20	L II	土	甌	21.6			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	30%	
536図4	701	N22-11	L II	土	甌	14.0	15.9	6.3	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	65%	煮炊痕明瞭、内面煤付着
536図5	699	N20-63	L II	土	甌	11.2	8.0	5.5	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	90%	
536図6		N21-87	攪乱	土	甌	11.0	9.0	4.4	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	20%	底部ケズリ
537図1	702	N20-62	L II	土	甌	18.2	26.2	8.0	ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	40%	
537図2	702	M23-95	L II	土	甌	19.6			ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	80%	器高残19.2cm
537図3	701	O19-81	L II	土	甌	13.1	16.7	6.1	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	45%	
537図4	701	N22-67	L I 下	土	甌	11.6			ミガキ・ハケメ・ヨコナデ	ミガキ・ナデ	15%	北方系? 壺形、口径平坦
537図5	702		L I	土	甌	20.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	40%	外面上部被熱、器高残28.3cm
538図1	702	N19-99	L II	土	甌	22.0	24.6	9.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	70%	底部木葉痕
538図2		O19-81	L III	土	甌			7.6	ハケメ・ナデ	ナデ	30%	底部ケズリ
538図3			表採	土	甌	21.0			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	20%	器高残15.8cm
539図1		N21-27	L II	須	蓋	15.2			ロクロナデ	ロクロナデ	5%	
539図2			L II	須	蓋				ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	10%	つまみ径6.0cm
539図3	703	O19-25	L II	須	蓋	17.5			ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	40%	
539図4	702	N21-87	攪乱	須	高台杯	13.8			ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	35%	高台剥離
539図5	703	N21-43	L I	須	高台杯			8.8			10%	
539図6	703	M23-7	L II	須	高台杯	16.3	6.3	9.1	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	50%	高台内に静止糸切り痕
539図7	702	O20-67	L II 2	須	高台杯				回転ヘラケズリ・ロクロナデ	ロクロナデ	10%	底部回転ヘラケズリ
539図8	703	N21-16	L II	須	杯	14.8	3.6	8.5	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	35%	底部外面焼成前線刻・回転糸切り
539図9		O20	L II 2	須	杯	14.8	4.2	8.7	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	65%	底部静止糸切り後手持ちヘラケズリ
539図10		N19-99	L II	須	杯			8.2	ロクロナデ	ロクロナデ	10%	底部回転ヘラケズリ
539図11		O19-47	L II	須	蓋				ロクロナデ	ロクロナデ	5%	
539図12		O20	L II	須	高台杯							小片
539図13		O18-96	L I	須	杯			8.6	ロクロナデ	ロクロナデ	10%	底部ヘラ切り無調整
539図14		M24-4	L I 下	須	杯蓋				ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	5%	
539図15			L II	須	杯身				ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	15%	杯蓋の可能性もあり
539図16	703	N22-83	L II	須	杯	10.0	3.6		ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	70%	奈文研分類G、底部回転ヘラケズリ
539図17		N22-63	L I	須	杯	11.6			ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	10%	
539図18		N20-49・50	L II	須	杯				ロクロナデ	ロクロナデ	5%	口径部内傾し平坦
539図19		N20-95	L II	須	杯身				ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	15%	
539図20		O20	L II	須	高杯				ロクロナデ	ロクロナデ	30%	長脚二段三方透かし、両面自然釉
539図21		O19-64	L II	須	高杯	15.2			ロクロナデ	ロクロナデ	15%	無蓋高杯
539図22		N22-63	L I	須	高杯				カキメ	ロクロナデ	5%	
539図23		N22-65	L II	須	高杯				沈線・波状文			小片
539図24		M21-48	L II 1・2	須	高杯				ロクロナデ	ロクロナデ	5%	透かしが見られる
540図1		N22-63	L I 下	須	杯				ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ		
540図2		O20	L II	須	杯				ロクロナデ	ロクロナデ		
540図3	704	N21-54	L II	須	盤	28.8	4.1		ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ・ナデ	30%	
540図4	704	N21-8・34	L II	須	盤	23.2	2.8		回転ヘラケズリ	ロクロナデ	25%	
540図5		N21-54	L II	須	盤				ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	5%	
540図6		N21-28	L II	須	臈	15.2			ロクロナデ	ロクロナデ	10%	器高残4.1cm
540図7		O20-21	L II	須	臈	10.6			ロクロナデ	ロクロナデ	10%	器高残1.5cm
540図8		O20	L II	須	臈	12.0			ロクロナデ	ロクロナデ	5%	器高残3.3cm
540図9	704	O19-72	L II	須	臈				波状文・カキメ・列点刺突文		70%	胴上半部穿孔、器高残12.7cm
540図10		N21-19	L II	須	壺か瓶	13.6			ロクロナデ	ロクロナデ	5%	器高残2.9cm
540図11		O20	L II 2	須	壺か瓶	11.8			ロクロナデ	ロクロナデ	5%	器高残2.2cm
540図12		N20-95	L II	須	甌	18.3			ロクロナデ	ロクロナデ	5%	器高残4.1cm
540図13			L I	須	壺か瓶				ロクロナデ・沈線	ロクロナデ	5%	器高残4.8cm
540図14		N23-14	L II	須	壺				ロクロナデ	ロクロナデ	10%	器高残3.8cm
540図15		N21-29	L II	須	壺				ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	5%	
540図16		N22-35・36	L I	須	不明				平行タタキメ	同心円文アテメ		小片
540図17		O18-78	L II	須	短頸壺				ナデ	ナデ		把手
541図1	704	O20-83	L II 2	須	甌	16.5	31.8	11.2	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ・指オサエ	40%	土師質、底部ケズリ後ナデ
541図2		O19	L II	須	短頸壺	15.7			ロクロナデ	ロクロナデ	5%	
541図3	705	N20-72	攪乱	須	長頸瓶	9.7			ロクロナデ	ロクロナデ	30%	大戸窯製品、器高残9.6cm

表30 土器観察表 (25)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		遺存	備考
						口径	器高	底径	外面	内面		
541図4		N21-87	L II	須	甕			20.0	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	30%	大戸窯製品、器高残7.5cm
541図5	705	N20-6	L IV上面	須	こね鉢	16.5			ロクロナデ	ロクロナデ	40%	
541図6		O20-13・23	L II	須	甕						5%	
541図7		N19-69	L II	須	甕				ロクロナデ	ロクロナデ	5%	自然釉?
541図8		N23-3	L II	須	甕			8.2	ロクロナデ・ケズリ	ロクロナデ・ナデ	5%	自然釉?底部ケズリ、器高残3.7cm
541図9		O19-45	L II	須	こね鉢			9.0	ナデ・ケズリ	ロクロナデ	5%	底部ナデ、器高残6.2cm
542図1		O19	L II	須	壺?	15.6			ロクロナデ	ロクロナデ	5%	
542図2	705			須	甕				波状文	波状文	小片	
542図3		N21-25	L II	須	甕				沈線・波状文		小片	
542図4	705	L24-20	L I	須	甕				沈線・波状文		小片	
542図5	705			須	甕				波状文	波状文	小片	
542図6	705	N22-30	L I	須	甕				沈線・波状文		小片	
542図7	705	O18-78	L II	須	甕				波状文		小片	
542図8		N21-27	L II	須	壺か瓶						5%	
542図9		N21-29	L II	須	?				沈線・波状文		小片	
542図10		O20	L II	須	甕				沈線・波状文		小片	
542図11		O19-74	L II	須	甕				沈線・波状文		小片	
542図12		N23-21	L II	須	甕				沈線・波状文		小片	
542図13				須	壺か瓶				沈線・波状文		小片	
542図14		N21-55	L II	須	高杯?				沈線・波状文		小片	
542図15		L24-19	L II	須	壺か瓶				沈線・列点刺突文		5%	自然釉?
542図16		N21-3	L II	須	不明				ロクロナデ	ロクロナデ	5%	
542図17		O20	L II上	須	壺か瓶				沈線・列点刺突文		小片	
542図18		O20	L II	須	甕				平行タタキメ		小片	
542図19		O19-47	L II	須	壺か瓶				沈線		小片	
542図20		N18-96	L I	須	甕				平行タタキメ		小片	
542図21		N22-30	L I	須	甕				平行タタキメ・カキメ		小片	
542図22		N18-96	L I	須	甕				タタキメ	アテメ	小片	
543図1		N18-96	L I	須	甕				タタキメ	アテメ	小片	
543図2		N18-96	L I	須	甕				タタキメ	アテメ	小片	
543図3		O20	L II	須	甕				タタキメ	アテメ	小片	
543図4	706	N18-96	L I	須	甕				タタキメ	アテメ	小片	
543図5		N18-96	L I	須	甕				タタキメ	アテメ	小片	
543図6		N18-96	L I	須	甕				タタキメ	アテメ	小片	
543図7		O18-100	L II	須	甕				タタキメ	アテメ	小片	
543図8		O18-97	L I	須	不明				タタキメ		小片	
543図9		O20	L II	須	甕				タタキメ		小片	
543図10		N21-65	L II	須	甕				タタキメ・カキメ	アテメ	小片	
543図11		O20	L II	須	甕				タタキメ		小片	
543図12		N22-35・36	L I	須	?				タタキメ	アテメ	小片	
543図13	706	N21-28	L II	土	火鉢	15.6	7.6	10.0	ロクロナデ	ロクロナデ	80%	脚付き鉢、底部墨書・回転ヘラケズリ
544図1		N22-16	L I	須	甕				平行タタキメ	同心円文アテメ	小片	
544図2		M22-97	L I	須	甕				平行タタキメ・カキメ	同心円文アテメ	小片	
544図3	706	N21-27	L II	須	甕				平行タタキメ	同心円文アテメ	小片	
545図1	706		L II	土	手捏ね	5.7	3.8	4.7	指ナデ	指ナデ	完形	ミニチュア、底部破壊?
545図2	706	N20	L II	土	手捏ね	6.6	4.3	4.4		ナデ・指ナデ	完形	底部ナデ
545図3	706		群・L II	土	手捏ね	8.0	4.4	5.0		指ナデ	完形	底部ナデ
545図4		O20	L II 2	土	手捏ね	7.2	3.7	5.0	指ナデ	指ナデ	65%	底部ナデ
545図5		N20	L II	土	粗製杯	7.6	2.7	4.0	ヨコナデ	ヨコナデ・指ナデ	70%	口縁部・底部部分欠損、ミニチュア
545図6		O21-25	L II 2	土	手捏ね	7.3	3.4	4.0	指オサエ	指ナデ	完形	
545図7	707	N21-29	L II	土	粗製杯	10.6	6.2	7.7	ヨコナデ・指ナデ	ヨコナデ・指ナデ	完形	底部木葉痕
545図8		N21-27	L II	土	粗製杯	10.8	4.6	5.2	ヨコナデ・指ナデ	ヨコナデ	45%	底部木葉痕
545図9			L II	土	手捏ね	5.4	2.9	5.2	指オサエ	指ナデ	80%	
545図10	707	N20-61・62	L II	土	壺	2.0	3.6		ナデ		完形	ミニチュア
545図11		N21-43	L II	土	壺			6.0	ハケメ・指ナデ	指ナデ	60%	2次被熱?接合部に絞りめ、ミニチュア
545図12	707	N22-41	L II	土	杯	9.2	4.8	4.6	ケズリ	ナデ	完形	両面とも粗い、底部ケズリ、ミニチュア
545図13	707	N21-27	L II	土	壺			5.6	ハケメ	ナデ	50%	器面粗い、底部ナデ、ミニチュア
545図14	706		L II	土	壺	4.1	4.6	4.8	ヨコナデ・指ナデ	ヨコナデ・指ナデ	90%	頸部穿孔、底部ナデ、ミニチュア
545図16	707	N20	L V	土	杯	9.6	3.4		ナデ	ナデ	60%	体部穿孔2カ所、ミニチュア

表31 土・石・金属製品の遺物観察表(1)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種 別	法量cm [残存地]			重量 (g)	器 面 調 整		遺存	備 考
					長さ	幅	厚さ		外 面	内 面		
12図1	496	S I 01	ℓ 1	板状土製品		8.8	2.7		ナデ	ナデ		被熱痕, 粘土継3本芯材
14図4	497	S I 02	ℓ 2	砥石	9.0	6.4	4.3	426.0			完形	流紋岩
24図6	500	S I 06	床面	砥石	13.7	4.6	3.3	454.0			完形	流紋岩
26図4	500	S I 07	ℓ 2	凹石	10.9	11.6	3.4	240.0				一部欠損
28図2	500	S I 08	床直	鉄刀鞘尻		4.0						破片 漆?付着
36図4		S I 11	焼土	土製支脚	9.2	7.2	4.0		指オサエ	指オサエ	完形	
38図6	504	S I 12	床直	鉄鎌	19.2	3.1	0.6	80.1			完形	
54図9	510	S I 17A	床面	銀環	2.5	2.5	0.7	60.0				遺存状態良好
58図6	510	S I 18	ℓ 1	刀子	[5.3]	1.1	0.4	4.7			70%	
58図7	510	S I 18	床直	土製丸玉	1.1	1.0	1.0	1.3	ミガキ・黒色処理		完形	
58図8	511	S I 18	床直	土製丸玉	0.9		0.6	0.4	ミガキ・黒色処理		60%	
58図9	511	S I 18	床直	土製管玉	[2.5]			1.6	ミガキ・黒色処理		80%	小口径0.8cm
61図1	511	S I 20	床直	土製勾玉	[3.7]	1.1	1.0		ナデ	ナデ	60%	
65図4	512	S I 23	カマド	土製支脚	20.3	6.8	5.9		ナデ		完形	原位置で出土
66図2	512	S I 23	ℓ 1	石製紡錘車	10.8	9.6	2.0	275.0	穿孔			未製品, 緑色千枚岩
71図4	513	S I 25	床面	刀子	[10.0]	1.0	0.5	19.3			70%	
74図7	513	S I 26	ℓ 2	土製勾玉	3.2	0.6	0.6	1.3	ナデ		80%	
74図8	514	S I 26	P3ℓ1	土製丸玉	1.3		1.2	1.7	ミガキ・黒色処理		完形	
75図1	514	S I 26	ℓ 2	砥石	6.0	5.2	1.7	74.0			完形	砂岩
75図2	514	S I 26	ℓ 2	磨石	6.0	3.4	3.5	83.0			完形	輝石安山岩
75図3	514	S I 26	床面	砥石	17.2	15.8	6.6	3.4			完形	輝石安山岩
80図6	516	S I 27	カマド	土製支脚	10.8	6.1	5.5		ナデ		完形	
80図7	517	S I 27	堆積土	円筒状土製品	[8.2]				ハケメ			
91図5	521	S I 31	床下	刀子	[5.8]	1.6	0.4	7.2				
91図6	521	S I 31	床面	土製丸玉	1.1	1.1	0.8	1.1	ミガキ・黒色処理		完形	
96図10		S I 34	床面	有孔石製品	7.9	6.8	3.2	194.0			完形	表面煤付着, 凝灰岩
102図7	523	S I 36	検出面	土製支脚	[7.6]	5.2	5.0		ナデ		45%	上部欠損
112図1	526	S I 40	貼床	石製紡錘車			2.6	56.0	穿孔			未製品, 緑色千枚岩
112図2		S I 40	貼床	石製紡錘車	4.1		1.4	40.0	穿孔			未製品, 緑色千枚岩
112図3	526	S I 40	貼床	石製紡錘車	4.3		2.1	70.0				未製品, 緑色千枚岩
116図4	527	S I 42	東壁際	土製管玉	2.0	1.0	1.0	2.7	ミガキ・黒色処理		完形	小口径1.0cm
120図4	528	S I 43	床面	鉄鎌	11.8	1.7	0.3	55.6			完形	
120図5	528	S I 43	床面	石製紡錘車	14.6	10.9	2.1	400.0				未製品, 緑色片岩
120図6	528	S I 43	床面	石製紡錘車	7.0	5.9	1.7	100.0				未製品, 緑色片岩
120図7	528	S I 43	床面	石製紡錘車	9.1	8.5	1.4	113.0				未製品, 緑色片岩
123図8	529	S I 44	床面	土製丸玉	0.7	0.7	0.7	0.4	ミガキ・黒色処理		完形	
127図5	530	S I 46	ℓ 1	鉄鎌	[3.1]	2.0	0.2	4.7				一部欠損
133図10	532	S I 48	床面	土製模造鏡	5.4	2.6			ナデ・沈線・穿孔			一部欠損
133図12	532	S I 48	床面	土製丸玉	0.9	0.9	0.8	0.7	ミガキ・黒色処理		完形	
134図1	532	S I 48	床面	円筒状土製品	[41.0]	8.6			ハケメ	ナデ		
134図2	532	S I 48	床面	円筒状土製品	[17.0]	9.2			ハケメ	ナデ		
134図3	533	S I 48	床面	円筒状土製品	[25.1]				ハケメ	ヘラナデ・ケズリ		
137図9	536	S I 49	ℓ 1	刀子	[4.3]	1.5	0.2	3.7				一部欠損
137図10	536	S I 49	ℓ 1	刀子	[4.1]	1.4	0.2	3.9				一部欠損
139図3	535	S I 49	ℓ 1	石製紡錘車	4.5		2.7	80.0	穿孔		完形	緑色片岩
139図4	535	S I 49	床面	石製紡錘車	4.5		2.6	80.0	穿孔		完形	緑色片岩
139図5	535	S I 49	床面	石製紡錘車			0.5	12.0	穿孔			破片, 緑色片岩
139図6	535	S I 49	ℓ 1	石製紡錘車	4.7		2.5	90.0	穿孔		完形	千枚岩
139図7		S I 49	ℓ 1	石製紡錘車	2.1		0.5	4.8	穿孔			緑色千枚岩
142図1	536	S I 51	堆積土	土製丸玉	0.9	0.9	0.7	0.6	ミガキ・黒色処理		完形	
145図4	536	S I 52	床面	土製丸玉	0.7	0.7	0.6	0.3	ミガキ・黒色処理		完形	
148図1	537	S I 54	床面	土製丸玉	0.9	0.8	0.8	0.6	ミガキ・黒色処理		完形	
150図1	537	S I 55	床面	石製紡錘車			2.8	66.0				未製品, 緑色千枚岩
154図3	537	S I 58	カマド	土製支脚	18.9	3.8	3.8		ナデ		完形	被熱痕, 穿孔
164図2	540	S I 61	床面	鉄鎌	12.2	1.7	0.3	35.1			完形	
168図3	540	S I 63	ℓ 1	鉄鎌	[3.7]	3.2	0.3	11.3				
186図4	544	S I 73	堆積土	砥石	5.9	6.1	4.7	170.0				流紋岩
186図5	545	S I 73	堆積土	土製丸玉	0.7	0.6	0.7	0.3	ミガキ・黒色処理		完形	孔が未貫通
209図8	553	S I 81	カマド	土製支脚	[23.1]	6.5	6.2		ナデ			下部欠損, カマドℓ2出土
230図2	561	S I 88	床面	円筒状土製品	[18.9]				ナデ	指オサエ		内外面粘土付着
230図3	562	S I 88	床面	羽口	[8.7]	7.6	7.7		ナデ			上部欠損, 被熱痕
230図4	561	S I 88	床面	土製支脚	12.3	4.3	4.0		ナデ		完形	被熱痕
230図5	562	S I 88	床面	土製支脚	17.0	5.3	5.9		ナデ		完形	被熱痕
230図7	562	S I 88	床面	石製紡錘車	4.3		1.5	44.0	穿孔			上部欠損?千枚岩

表32 土・石・金属製品の遺物観察表(2)

挿図 No	写 No	遺構	層位	種別	法量cm [残存地]			重量 (g)	器面調整		遺存	備考
					長さ	幅	厚さ		外面	内面		
248図2	567	S I 95	床面	鉄鎌	[12.6]	0.5	0.5	13.9				
258図3	570	S I 98	ℓ 1	刀子	[5.0]	1.5	1.0	4.7				一部欠損
260図8	571	S I 99	ℓ 1	土製勾玉	3.0	1.9	1.0	3.7	ミガキ・黒色処理		完形	
263図12	572	S I 100	ℓ 1	羽口	[7.8]	6.8	6.0		ナデ			下部欠損, 被熱痕
264図3	572	S I 100	ℓ 1	石製紡錘車	5.2		1.1	40.0	穿孔			破片泥質頁岩
268図1	574	S I 101	ℓ 4	羽口	[8.7]	9.3	1.0		ナデ			被熱痕, 溶着滓付着
271図6	575	S I 102	床面	円筒状土製品	19.9				ケズリ	ハラナデ	60%	
271図9	575	S I 102	床面	円筒状土製品	19.9				ケズリ	ハラナデ・指オサエ	60%	
271図10	576	S I 102	床面	円筒状土製品	[30.1]				ケズリ	ハラナデ		外面粗い
275図12	577	S I 103	カマド	土製支脚	17.3	4.3	3.8		指ナデ・指オサエ			一部欠損, 被熱痕
280図8	579	S I 105	床面	土製支脚	17.2	4.4	4.2		ナデ		完形	穿孔
283図6	579	S I 106	ℓ 1	土製支脚	12.8	7.9	7.2		ナデ		完形	
285図7	581	S I 107	ℓ 2	石製紡錘車	7.7	8.0	2.0	164.0				未製品, 緑色千枚岩
290図5	582	S I 108	カマド	土製勾玉	5.2	3.1	1.7	17.5	ナデ・黒色処理		完形	カマド燃焼部底面出土
298図5	586	S I 111	ℓ 1	土製丸玉	0.8	0.7	0.8	0.4	ミガキ・黒色処理		完形	
312図8	592	S I 120	ℓ 1	土製丸玉	0.8	0.7	0.8	0.5	ミガキ・黒色処理		完形	
312図9	592	S I 120	ℓ 1	土製丸玉	0.9	0.9	0.9	0.8	ミガキ・黒色処理		完形	
316図4		S I 122	P 1 ℓ 1	円筒状土製品	[10.4]				ハケメ	ナデ		
316図9	593	S I 122	ℓ 1	土製紡錘車	4.0		1.7	31.0	穿孔			一部欠損
316図10	594	S I 122	P 1 ℓ 1	砥石	8.5	5.6	5.2	229.0				一部欠損, 流紋岩
324図2	595	S I 126	床面	円筒状土製品					ハケメ		70%	推定復元長54.8cm
324図3	595	S I 126	床面	石製紡錘車			1.9	21.0	穿孔			欠損品滑石
328図9	596	S I 129	ℓ 4	刀子	4.1	1.6	0.3	5.3				一部欠損
331図1	596	S I 131	攪乱	石製紡錘車	4.1		1.7	49.0	穿孔		完形	緑色千枚岩
338図4	600	S I 136	床面	石製紡錘車	4.3		2.0	64.0	穿孔		完形	緑色千枚岩
338図5	600	S I 136	床直	土製丸玉	1.3	1.3	1.0	1.6	ミガキ・黒色処理		完形	
338図6	600	S I 136	床直	石製平玉	1.2	1.2	0.3	0.5	ミガキ・黒色処理		完形	千枚岩
338図7	600	S I 136	床直	水晶	1.2	0.8	0.7	1.0				
340図4	601	S I 137	カマド	土製支脚	18.1	3.7	4.2				完形	被熱痕, カマド燃焼部底面出土
340図5	601	S I 137	床面	土製支脚	21.8	5.1	4.0				90%	被熱痕, カマド右袖脇出土
343図8	602	S I 138	ℓ 2	鉄釘	12.5	0.5	0.5	14.6				
343図9	601	S I 138	床面	土製丸玉	0.8	0.8	0.6	0.5	ミガキ・黒色処理		完形	カマド左脇床面出土
354図1	603	S I 142	ℓ 1	円筒状土製品	[22.6]				ナデ	指ナデ・指オサエ		
354図2	605	S I 142	床面	円筒状土製品	[29.2]				ナデ	ナデ		
354図3	605	S I 142	ℓ 1	円筒状土製品	[23.5]				ナデ	ナデ		
354図4	607	S I 142	ℓ 1	円筒状土製品	[23.2]				ナデ	ナデ・指オサエ		
364図1	609	S I 143	ℓ 2	砥石	6.6	4.6	3.4	76.0				流紋岩
364図2	609	S I 143	ℓ 1	鉄刀の鍔	7.5	6.8	0.9				完形	
364図3		S I 143	床面	土製支脚	[8.3]	4.8	4.1		ナデ			上部欠損
364図4		S I 143	床面	土製支脚	15.3	4.0	4.2		ナデ		完形	
374図7	621	S I 144	ℓ 1	土製支脚	7.3	4.4	4.2		ナデ			上部欠損
374図14	618	S I 144	ℓ 1	鉄鎌	11.7	1.0	0.5	12.2			完形	
379図7	622	S I 147	ℓ 7	鉄刀身	24.5	2.1	0.5				完形	
392図3	623	S I 156	床面	土製丸玉	0.9	0.8	0.7	0.4	ミガキ・黒色処理		完形	
397図2	625	S I 158	ℓ 1	不明鉄製品	[4.7]	0.7	0.7	5.2				
402図6	626	S I 160	カマド内	石製平玉	1.0	1.1	0.4	0.4			完形	頁岩
407図2	627	S I 162	検出面	刀子	[11.3]	1.1	0.5	16.9				
407図3	627	S I 162	床面	土製丸玉	1.2	1.2	0.9	1.5	ミガキ・黒色処理		完形	
409図4	628	S I 164	堆積土	砥石	9.8	3.2	1.0	55.0				一部欠損, 流紋岩
409図5	627	S I 164	床直	鉄鎌	[8.8]	0.5	0.5	5.6				
409図6	627	S I 164	ℓ 4	土製丸玉	0.7	0.7	0.7	0.3	ミガキ・黒色処理		完形	一部欠損
409図7	627	S I 164	ℓ 4	土製丸玉	0.8	0.7	0.5	0.3	ミガキ・黒色処理		完形	
420図3	629	S I 170	検出面	土製丸玉	1.0	1.0	0.8	0.8	ミガキ・黒色処理		完形	
421図4	629	S I 173	ℓ 1	石製紡錘車	4.5		2.4	68.0				未製品, 緑色千枚岩
423図6	631	S I 174	床面	土製支脚	11.9	4.5	3.5		ナデ		完形	
432図4	631	S I 191	ℓ 1	鉄鎌?	[5.5]	0.6	0.5	6.6				一部欠損
437図2	631	S I 194	床面	土製丸玉	1.5	1.5	1.3	2.9	ミガキ・黒色処理		完形	
437図3	631	S I 194	堆積土	土製丸玉	1.9	1.6	1.0	2.8			完形	
445図2	636	S I 199	ℓ 1	鉄鎌	8.3	2.8	0.3	41.3				
445図3	635	S I 199	不明	土製丸玉	0.8	0.8	0.8	0.5	ミガキ・黒色処理		完形	
445図4	636	S I 199	ℓ 1	刀子	[4.8]	0.9	0.5	7.0				
452図11	637	S K 17	ℓ 1	土製支脚	[4.2]	3.8	3.8		ナデ・ミガキ			
456図6	638	S K 18	ℓ 1	土製支脚	6.6	6.0	2.7				完形	
472図10	647	S D 01	ℓ 8	石製平玉	1.5	1.6	0.7	1.8			完形	底面溝出土, 頁岩

表33 土・石・金属製品の遺物観察表(3)

挿図 No.	写 No.	遺構	層位	種別	法量cm [残存地]			重量 (g)	器面調整		遺存	備考
					長さ	幅	厚さ		外面	内面		
472図11	647	S D01	ℓ 8	石製平玉	1.4	1.5	0.7	1.6			完形	底面溝出土, 頁岩
472図12	647	S D01	検出面	土製丸玉	0.8	0.8	0.7	0.4			完形	
472図6	646	S D01	上層	片刃の長首鎌	12.2	0.5	0.3	11.5			完形?	
472図7	647	S D01	中層	鉄刀	30.7	2.2	0.7				完形	刀身のみ
472図8	648	S D01	底面	不明鉄製品	2.8	2.8	0.4	4.0				部分的に欠損
472図9	647	S D01	ℓ 8	石製平玉	1.6	1.6	0.5	1.4			完形	底面溝出土, 頁岩
473図4	648	S X06	検出面	銅鋼	19.1	0.3	0.4	7.0			完形	径6.1cm
490図12	662	S D02	ℓ 1	土製勾玉	3.3	1.3	1.3	7.6			完形	
490図13	662	S D02	ℓ 2	土製勾玉	2.7	0.8	0.7	2.2			完形	
490図14	662	S D02	ℓ 2	土製紡錘車	5.6		3.5	130.0			完形	
490図15	662	S D02	ℓ 2	土製模造鏡	7.5	6.8	1.3				完形	五鈴鏡
491図5	663	S D02	ℓ 2	刀子	[8.1]	1.5	0.3	12.0				
491図6	663	S D02	ℓ 2	土製支脚	[8.4]	3.7	3.4		指ナデ			
491図7	663	S D02	ℓ 2	土製支脚	[6.0]	4.0	3.8		指ナデ			
491図8	662	S D02	ℓ 2	砥石	[5.9]	5.2	1.4	80.0				流紋岩
501図1	673	S D04	P1上面	鉄釘	11.3	2.3	1.4	77.1			完形	
502図5	673	S D05	ℓ 5	土製?	3.3	3.2	1.1					
502図6	673	S D05	底面	刀子	[3.6]	1.1	0.4	3.9				
505図3		S X02	堆積土	土製羽口	[6.5]				ナデ		25%	
505図4	639	S X02	周辺	土製羽口	[10.5]	5.8	5.4		ナデ		80%	
522図18	684	S H01	L II 3	土製模造鏡	9.3	2.8			指ナデ		完形	故意に破壊部分あり
522図20	684	S H01	L II 3	土製勾玉	3.0	2.1	1.1	5.5	ミガキ・黒色処理		完形	
522図21	685	S H01	L II 3	土製勾玉	3.5	1.2	1.1	6.7			完形	
522図22	685	S H01	L II 3	土製勾玉	5.2	1.7	1.3	13.5			完形?	
522図23	685	S H01	L II 3	土製勾玉	4.4	1.7	1.4	12.8			完形	
522図24	685	S H01	L II 3	土製勾玉	5.2	3.3	1.5	14.1			完形	
522図25		S H01	L II 3	土製勾玉	4.2	1.3	1.2	8.9			完形	
522図26	685	S H01	L II 3	土製丸玉	1.7	1.4	1.5	3.3			完形	非黒色
523図1	685	S H01	L II 3	砥石?	[14.6]	[15.8]	[2.1]					ガラス質安山岩
523図2	686	S H01	L II 3	土製支脚	12.5	6.3	6.0		指ナデ		完形	上部被熱している
523図3	685	S H01	L II 3	土製紡錘車	4.3		2.2	45.0			完形	
523図4	685	S H01	L II 3	鉄鎌?	[5.3]	[0.7]	[0.7]	4.1				
545図15	707	O20-58・68	L II 1	土製模造鏡		8.3	2.7					欠損
545図17	708	N21	L II	土製模造鋼	[3.5]	[1.0]	[0.9]					
545図18	708	O20-24	L II	土製勾玉	3.9	2.5	1.4	10.9			完形	
545図19	708	O19-43	L II	土製勾玉	[1.7]	[1.3]	[0.9]	1.3				
545図20	708	O19-43	L II	土製勾玉	2.0	1.1	0.7	1.1			完形	
545図21	708	N22-21	L II	土製丸玉	0.9	1.0	0.8	0.8			完形	
545図22	708	N21-29	L II	土製管玉	[3.3]			3.1	ミガキ?			一部欠?小口直径0.9cm
545図23			L I	不明土製品	4.0	3.0				布目痕		欠損
546図1	708	O19-25	L II	土製支脚	19.5	7.0	6.7		指ナデ		90%	
546図2		O20-53	L II 2	土製羽口	[13.3]	[9.9]	[9.9]		ケズリ			
546図3		O20-29	L II	土製支脚	[8.2]	[3.3]	[3.3]		ミガキ・指ナデ		50%	
546図4			L I	土製羽口	[6.9]	[4.2]	[4.0]		ナデ		30%	溶着滓付着
546図5			L I	土製支脚	[5.6]	[3.1]	[3.1]		指ナデ		30%	
546図6			L I	土製紡錘車	4.5		3.0	90.0			?	剥離部分あり
546図7		N22-63	L II	石製紡錘車	5.0		2.4	85.0				未製品, 緑色千枚岩
546図8		O21-28	L II	石製紡錘車	7.8		3.5	265.0				未製品, 千枚岩
546図9			L I	土製紡錘車	4.4		1.7	42.0			完形	
546図10		N22-5		有孔石製品	2.1	2.0	0.5	4.0			?	緑色千枚岩
546図11		M22	攪乱	磨石	6.8	3.4	3.1	102.0			?	緑色岩
546図12		M22	攪乱	不明石製品	6.5	6.4	3.5	150.0			完形?	流紋岩
547図1		N21-29	L II	磨石	8.1	6.1	5.3	368.0			完形	砂岩
547図2		M23-9	L II	砥石	17.0	3.3	2.2	198.0			完形?	流紋岩
547図3		N21-9	L II	砥石	17.7	4.2	2.8	310.0			完形	流紋岩
547図4		O20	L II	砥石	12.9	5.8	3.8	274.0			完形?	流紋岩
547図5		N23-11	L II	砥石	10.5	2.1	1.0	36.0			完形	穿孔あり, 流紋岩
547図6		N22-63	L I	砥石	14.1	9.2	3.0	442.0				未製品?, 流紋岩
548図1		O20	L II 1	刀子	6.4	1.8	0.8	17.7				未製品?
548図2		O20	L II 1	鉄鎌	[6.2]	[2.5]	[0.3]	47.6				
548図3		O20	L II 1	鉄鎌	[6.4]	[1.1]	[0.7]	9.9				
548図4		O20	L II 1	刀子	[4.5]	[1.5]	[0.4]	5.8				

福島県文化財調査報告第401集

阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告 2

高木・北ノ脇遺跡

平成14年11月28日発行

編集 財団法人 福島県文化振興事業団（遺跡調査部）
発行 福島県教育委員会（〒960-8688）福島市杉妻町2-16
財団法人 福島県文化振興事業団（〒960-8116）福島市春日町5-54
TEL 024-534-2733 FAX 024-536-3781
国土交通省東北地方整備局福島工事事務所
（〒960-8584）福島市黒岩榎平36
印刷 株式会社 山川印刷所（〒960-2153）福島市庄野字清水尻1-10

本報告書は中性紙を使用しています。

